新潟県埋蔵文化財調査報告書　第206集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXIII

西　部　遺　跡　II

（本　文　編）

２　０　１　０

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXIII

西部（せいぶ）遺跡 II

（本　文　編）

２０１０

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟空港インターチェンジから日本海に沿って北上し、青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成22年に村上市の神林岩船港インターチェンジまでが完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海沿岸東北自動車道の中条―朝日間は旧日本道路公団が有料道路として建設することとなりました。その後、公団の民営化により、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国土開発幹線自動車道建設会議において、荒川―朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。

日本海沿岸東北自動車道は、地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等の「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査した村上市西部遺跡の調査報告書です。西部遺跡は平成16～20年にわたり発掘調査しました。一部は既に報告書として刊行しています。造営が８世紀代に上る条里型水田の検出など、この地域は早い段階から最新技術を導入し、開発されていたことが明らかになりました。本書に係る調査地点は古代から中世にかけて多数の遺構や遺物が出土し、西部遺跡の中でも中核的な地点と考えられます。特に古代の鍛冶工房と見られる複数の大型建物の検出や、「頸城宮」の文字が見える請暇解様文書を第１次文書とし、その裏に倭名類聚鈔に収録される古代磐船郡内の郷名（佐伯郷、坂井郷）が記された歴名からなる漆紙文書が出土するなど、これまで実体が不明であった「磐舟柵」及び古代磐船郡の様相を知る上で重要な資料を提示することができました。

今回の発掘調査成果が、考古学・歴史学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っています。

最後に、地元の方々や区長並びに村上市教育委員会には多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所並びに東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成 22 年 12 月

新潟県教育委員会

教育長　武　藤　克　己

例　　言

1　本書は、新潟県村上市牛屋字西部1192ほかに所在する西部遺跡の発掘調査記録であり、本文編と図版編の2分冊からなる。

2　調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）が国土交通省から受託したものである。

3　発掘調査は、県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）に委託し、埋文事業団の指導・監督のもとで、有限会社山武考古学研究所（以下、「山武考古学研究所」とする）が平成17年から平成18年にかけて行った。発掘調査面積は延べ23,511㎡である。

4　整理及び報告書作成に係る作業は、埋文事業団の指導・監督のもとに、平成17年度から平成20年12月までは山武考古学研究所、平成21年1月から同年3月までは株式会社ノガミ（以下、「ノガミ」とする）が実施した。

5　出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

6　平成17年度以前に刊行した報告書には、法定路線名「日本海沿岸東北自動車道」と東日本高速道路株式会社の営業路線名である「日本海東北自動車道」が、事業者の意向により使用され、両路線名称が一冊の報告書に混在していた。しかし、平成17年度末に高速自動車国道法第６条により荒川胎内インターチェンジの北側については、新直轄方式を導入し国土交通省の建設区間となったため、この区間の路線名称は日本海沿岸東北自動車道に統一することとした。

7　遺物の注記は西部遺跡の略称に地区記号を付し「西ブⅡ」（平成17年度は「05西ブⅡ」、平成18年度は「06西ブⅡ」と表記）とし、出土地点・遺構名・層位・遺物№等を併記した。

8　引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に［ ］で示し、巻末に掲載した。なお、「第Ⅵ章 自然科学分析」と「附編」の引用文献については各節末に掲載した。また、「附編」として掲載した玉稿については、各執筆者の意向を尊重して編集を行った。

9　本書に掲載した遺物の番号は、すべて通し番号とした。本文・観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

10　本書の方位はすべて座標北を示す（平面直角座標Ⅷ系、原点方位の北）。

11　作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれに出典を記した。

12　第Ⅵ章の自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社九州テクノリサーチ、漆器文化財科学研究所、東京大学総合研究博物館にそれぞれ委託した。

13　本書の執筆は、鈴木俊成（埋文事業団）、湯原勝美、折原洋一、秋山真好、戸根与八郎（以上、ノガミ）、前川昭彦、武部喜充（以上、元山武考古学研究所）、田中一穂（元埋文事業団）、千葉博俊、斎藤崇人、伊藤良永、馬場健二、松元美由紀、斎藤紀行、高橋　敦、石岡智武（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）、大澤正己、鈴木瑞穂（以上、九州テクノリサーチ）、四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）があたり、編集は湯原が担当した。

第Ⅰ章1…鈴木　第Ⅰ章2…湯原　第Ⅱ章…戸根　第Ⅲ章1・２…湯原　第Ⅲ章3…鈴木　第Ⅳ章1、2A1）・2）…湯原　第Ⅳ章2A3）…武部・湯原　第Ⅳ章2A4）・5）、2B…湯原・前川・秋山　第Ⅴ章…折原　第Ⅵ章1A…千葉　第Ⅵ章1B…斎藤（崇）　第Ⅵ章1C…斎藤（崇）・伊藤・馬場・松元・斎藤（紀）　第Ⅵ章1D…高橋　第Ⅵ章1E…石岡　第Ⅵ章2…大澤・鈴木　第Ⅵ章3…四柳　第Ⅵ章4…吉田　第Ⅶ章1A、1D7…湯原　第Ⅶ章1B、1D1）・2）・5）・6）、2A…折原　第Ⅶ章1D4）…折原・秋山・田中　第Ⅶ章1C1）・2）・4）、1D3）…秋山　第Ⅶ章1C3）…田中・秋山

14　本遺跡の調査に関連して、小林昌二（帝京大学）、田中一穂（元埋文事業団）、平川　南（国立歴史民俗博物館）、三ツ井朋子（埋文事業団）の各氏からいただいた原稿は、巻末に「附編」として掲載した。

15　漆紙文書については平川　南（国立歴史民俗博物館）・小林昌二（帝京大学）、Ⅷ・XI層の建物については宮本長二郎（国立文化財機構奈良文化財研究所）、Ⅷ層出土の白磁については山本信夫（早稲田大学）の各氏から指導を得た。

16　鍛冶炉については穴澤義功（製鉄遺跡研究会）、能登谷宣康（福島県文化財センター白河館）の両氏から現地指導を得、さらに整理段階において穴澤氏からは「鉄関連遺物観察表」の作成や整理指導を得た。

17　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示･ご協力をいただいた。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

伊藤　秀和　　大島　秀俊　　岡田　康弘　　金子　拓男　　坂井　秀弥　　関　　雅之　　高島　英之
高濱　信行　　高橋　　敏　　田辺　早苗　　継　　実　　鶴巻　康志　　手塚　　孝　　中島　栄一
野尻　　侃　　藤田富士夫　　前川　雅夫　　水澤　幸一　　村田　道博　　百瀬　正恒　　矢田　俊文
横山　勝栄　　吉井　雅勇　　渡辺　　誠　　荒川沿岸土地改良区　　大成エンジニアリング株式会社
文化庁記念物課　村上市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯と本発掘調査の概要 …… 1

2　調査の経過と整理作業 …… 4

A　調査の経過 …… 4
B　整理作業 …… 6
C　調査・整理体制 …… 8

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 11

1　地理的環境 …… 11

2　歴史的環境 …… 12

第Ⅲ章　調査の概要 …… 15

1　グリッドの設定 …… 15

2　層序 …… 15

A　基本層序 …… 15
B　堆積状況 …… 17

3　西部遺跡周辺の層序 …… 18

第Ⅳ章　遺　　構 …… 23

1　基本方針 …… 23

A　記述の方法 …… 23
B　掘立柱建物の分類と呼称 …… 23

2　遺構各説 …… 25

A　古　　代 …… 25
1）概　　要 …… 25
2）Ⅷａ層の遺構 …… 25
3）Ⅻ層の遺構 …… 26
4）Ⅺ層の遺構 …… 27
5）Ⅷ層の遺構 …… 37
B　中　　世 …… 83
1）概　　要 …… 83
2）Ⅳ層の遺構 …… 83

第Ⅴ章　遺　　物 …… 92

1　概要と基本方針 …… 92

2　遺物各説 …… 92

A　古　　代 …… 92
1）分類と記述方法 …… 92
2）Ⅷａ層の出土遺物 …… 100
3）Ⅺ層の出土遺物 …… 101
4）Ⅷ層の出土遺物 …… 106
B　中　　世 …… 137
1）分類と記述方法 …… 137
2）Ⅳ層の出土遺物 …… 137

第Ⅵ章　自然科学分析 ……141

1　西部遺跡の自然科学分析 ……141

A　はじめに ……141
B　堆積物及び遺構の年代 ……141
1）試　　料 ……141
2）分析方法 ……141
3）結果及び考察 ……143
C　古環境及び植物資源利用 ……144
1）試　　料 ……144
2）分析方法 ……144
3）結　　果 ……147
4）考　　察 ……164
D　木製品の樹種 ……167
1）試　　料 ……167
2）分析方法 ……167
3）結　　果 ……168
4）考　　察 ……170
E　石材利用 ……172
1）試　　料 ……172
2）分析方法 ……173
3）結　　果 ……173
4）考　　察 ……175

2　西部遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 ……182

A　はじめに ……182
B　調査方法 ……182
1）供試材 ……182
2）調査項目 ……182
C　調査結果 ……183
D　まとめ ……196

3　西部遺跡出土漆器等の科学分析 ……203

A　分析の方法 ……203
1）赤色漆 ……203
2）黒色漆と黒色系漆 ……203
3）下地の分類 ……203
B　分析結果 ……204
1）塗膜分析 ……204
2）赤外分光分析 ……206
3）赤外線吸収スペクトル ……207
4）蛍光Ｘ線分析 ……211
C　小　　結 ……212
1）古代漆器の塗装技術 ……212
2）９世紀中葉の烏帽子または圭冠 ……213
3）10 世紀前半の漆紙 ……213
4）10 世紀前半の内面漆塗り土師器と内面スス付着土師器の識別と用途 ……213
5）中世漆器 ……214

4　西部遺跡から出土した漆紙資料の年代 ……217

A　はじめに ……217
B　漆資料 ……217
C　年代測定試料の調製 ……217
1）パラロイド B72 塗膜の除去 ……217
2）漆紙から、漆と紙を分離できるか ……218
3）埋蔵中、発掘後に受けた汚染の除去 ……218
4）測定試料の調製 ……218
D　年代測定 ……218
E　暦年較正 ……219
F　いくつかの問題 ……221
1）８世紀前半の文書が使われた可能性 ……221
2）暦年代較正曲線が寝ている原因 ……221

第Ⅶ章　ま　と　め……225
1　古　　代……225
A　Ⅻa　層……225
1）概　　要……225
2）遺構の性格について……225
B　Ⅻ　　層……227
1）水田について……227
C　Ⅺ　　層……229
1）遺構の変遷……229
2）鍛冶工房……231
3）墨書土器……233
4）烏帽子または圭冠……235
D　Ⅷ　　層……236
1）Ⅷ層の土器編年について……236
2）遺構の変遷……249
3）鍛冶関連の遺構と遺物について……251
4）遺物から見た地域間交流……255
5）工房で生産された製品について……268
6）工房群の生産体制について……270
7）Ⅷ層の遺構について……285
2　中　　世……286
A　Ⅳ　　層……286
1）西部遺跡の中世遺構概観……286
《要　　約》……289
《引用・参考文献》……291
《別　　表》……295
別表１　遺構観察表……295
別表２　遺物観察表……309
別表３　主要遺構出土土器器種構成比率……366
別表４　鉄関連遺物観察表……376
別表５　鉄関連遺物分析資料一覧表……399
別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表……400
別表７　鉄関連遺構・遺物の主要要素一覧表……411
《別　　図》……413
別図１　鉄関連遺物構成図……413
《遺構索引》……418

挿図目次（本文）

第１図　西部遺跡　年度別本発掘調査範囲…… 2
第２図　西部遺跡I ～Ⅴ位置図 …… 3
第３図　調査区位置図…… 10
第４図　瀬波郡絵図概念図（一部）…… 12
第５図　周辺の古代遺跡…… 14
第６図　グリッド設定図…… 15
第７図　基本層序…… 16
第８図　遺跡周辺の層序…… 21
第９図　基本層序と遺構の概念図…… 23
第10図　掘立柱建物の分類 …… 24
第11図　回転糸切り類型 …… 93
第12図　黒色土器無台椀A類
　器高／口径、底径／口径グラフ …… 95
第13図　土師器・黒色土器 器種分類図 …… 96
第14図　須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁
　器種分類図 …… 97
第15図　主要珪藻化石群集の層位分布 ……147
第16図　主要花粉化石群集の層位分布 ……150
第17図　植物珪酸体含量の層位的変化 ……153
第18図　石材組成（自然礫）……173
第19図　珪藻化石 ……180
第20図　花粉化石 ……180
第21図　植物珪酸体 ……180
第22図　種実遺体 ……180
第23図　木材（1）……181
第24図　木材（2）……181
第25図　木材（3）……181
第26図　木材（4）……181
第27図　鍛造剝片3層分離型模式図……189
第28図　Fe-O系平衡状態図 ……189
第29図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（1）……199
第30図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（2）……199
第31図　再結合滓の顕微鏡組織 ……199
第32図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（3）……199
第33図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（4）……200
第34図　粒状滓の顕微鏡組織 ……200
第35図　粒状滓・鍛造剝片の顕微鏡組織 ……200
第36図　鍛造剝片の顕微鏡組織 ……200
第37図　羽口・鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……201
第38図　鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……201
第39図　椀形鍛冶滓（含鉄）の顕微鏡組織 ……201
第40図　鉄製品（鍛造品）の顕微鏡組織 ……201
第41図　鉄塊系遺物・鉄製品（鍛造品）の
　顕微鏡組織 ……202
第42図　鉄製品（鍛造品）の顕微鏡組織 ……202
第43図　鉄製品（鍛造品）・金床石・炉壁の
　顕微鏡組織 ……202
第44図　赤外線吸収スペクトル（1）……208
第45図　赤外線吸収スペクトル（2）……208
第46図　赤外線吸収スペクトル（3）……208
第47図　赤外線吸収スペクトル（4）……209
第48図　赤外線吸収スペクトル（5）……209
第49図　赤外線吸収スペクトル（6）……209
第50図　蛍光X線スペクトル（S） ……210
第51図　蛍光X線スペクトル（No.8）……210
第52図　蛍光X線スペクトル（No.7）……211
第53図　漆製品の断面写真（1）……216
第54図　漆製品の断面写真（2）……216
第55図　漆製品表面の実体顕微鏡写真（×6）……216
第56図　漆製品内・外面の実体顕微鏡写真 ……216
第57図　E漆紙文書（851）の破片……217
第58図　SD1377-台465（E漆紙文書（851））の
　暦年代較正図 ……220
第59図　各資料の暦年代較正図 ……222
第60図　各資料の暦年代較正図と較正曲線 ……222
第61図　IntCal04Δ^{14}Cデータ（^{14}C濃度変化）と小氷期‥224
第62図　IntCal04Δ^{14}Cデータ（^{14}C濃度変化）……224
第63図　Ⅻa層の遺構配置……226
第64図　Ⅻa層の遺物出土分布……226
第65図　条里型水田と周辺の地形 ……228
第66図　Ⅺ層の遺構変遷 ……230
第67図　Ⅺ層遺構外出土土器分布 ……231
第68図　鍛冶工房SB3030の鍛冶関連遺物出土
　分布 ……232
第69図　Ⅺ層墨書土器出土分布 ……234
第70図　Ⅺ層出土の墨書土器 ……234
第71図　土師器無台椀A ～E群……236
第72図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径
　グラフ（1）……237
第73図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径
　グラフ（2）……238
第74図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径
　グラフ（3）……239
第75図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径
　グラフ（4）……240
第76図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径
　グラフ（5）……241
第77図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径
　グラフ（6）……242
第78図　Ⅷ層の土器編年 ……245
第79図　西部遺跡と新保遺跡、門新遺跡に共通する
　特徴的な口縁部を持つ土師器無台椀 ‥‥248

第80図　Ⅷ層の遺構変遷 ……250
第81図　鉄滓出土分布（Ⅷ層遺構外出土）……252
第82図　鍛造剥片・粒状滓出土分布
（Ⅷ層遺構外出土）……252
第83図　鉄滓出土分布（Ⅷ層遺構内、調査区南側）253
第84図　鍛造剥片・粒状滓出土分布
（Ⅷ層遺構内、調査区南側）……253
第85図　鉄滓出土分布（Ⅷ層遺構内、調査区北側）254
第86図　鍛造剥片・粒状滓出土分布
（Ⅷ層遺構内、調査区北側）……254
第87図　西部遺跡と阿賀北地域、頸城地域、
村山・置賜地域の両面黒色土器 ……256
第88図　土師器小型羽釜の類例と三彩・
緑釉陶器・鉄製の小型羽釜 ……257
第89図　各遺跡出土の台付鉢（1）……259
第90図　各遺跡出土の台付鉢（2）……260
第91図　各遺跡出土の台付鉢（3）……261
第92図　筵底を持つ土師器の類例 ……262
第93図　北陸から東北南部にかけての
香炉の出土例 ……262
第94図　字書類にみる「天」の〝古文〟史料 ……263
第95図　古体漢字「天」の典型字体……263
第96図　Ⅷ層墨書土器の分布……264
第97図　Ⅷ層出土の墨書土器（1） ……265
第98図　Ⅷ層出土の墨書土器（2） ……266
第99図　則天文字「天」の分布……267
第100図　鉄製品の分布……269
第101図　椀形鍛冶滓の分布……269
第102図　羽口の分布……269
第103図　SB1500（工房）の間取り構造模式 ……271
第104図　灯明皿の分布……272
第105図　灰釉陶器の分布……272
第106図　緑釉陶器・白磁の分布……273
第107図　香炉蓋・耳皿・丸鞆・丸玉の分布……273
第108図　漆紙・漆パレット・漆容器の分布……273
第109図　大型掘立柱建物工房（1）……278
第110図　大型掘立柱建物工房（2）……279
第111図　大型工房の可能性のある建物（1）……280
第112図　大型工房の可能性のある建物（2）……281
第113図　土坑群を伴う大型掘立柱建物……283
第114図　中世Ⅳ層の遺構変遷（1）……287
第115図　中世Ⅳ層の遺構変遷（2）……288

表 目 次（本文）

第１表　放射性炭素年代測定結果……142
第２表　暦年較正結果……142
第３表　珪藻分析結果（1） ……148
第４表　珪藻分析結果（2） ……149
第５表　花粉分析結果……151
第６表　植物珪酸体含量……153
第７表　灰像分析結果……154
第８表　種実遺体同定・微細植物片分析結果
（土壌試料）……156
第９表　種実遺体同定結果（単体試料）……157
第10表　土壌理化学分析結果 ……163
第11表　樹種同定結果……169
第12表　掘立柱建物の部材別樹種構成 ……171
第13表　石製品の石材組成 ……172
第14表　遺構別・遺物包含層別石材組成
（自然礫）……174
第15表　供試材の履歴と調査項目 ……198
第16表　供試材の化学組成 ……198
第17表　出土遺物の調査結果のまとめ ……198
第18表　分析・試料・遺物No.一覧表……204
第19表　漆関係資料 ……217
第20表　資料の質量、化学処理 ……218
第21表　年代測定結果、暦年較正範囲 ……220
第22表　Ⅻa層のピット及び相関関係……225

附　編

1　西部遺跡の歴史的背景 …… 1

2　西部遺跡出土の墨書土器考察 …… 20

3　新潟県村上市西部遺跡出土の漆紙文書…… 28

4　西部遺跡出土漆紙の調査・保存処理方法について …… 42

挿 図 目 次（附編）

第１図　村上市西部遺跡…… 6

第２図　長岡市門新遺跡…… 8

第３図　山形県米沢市古志田東遺跡…… 9

第４図　富山県富山市向野池遺跡…… 10

第５図　秋田城跡発掘調査位置図…… 12

第６図　秋田城跡第88次・89次調査地位置関係図…… 12

第７図　秋田城跡第88次調査地全体図 …… 13

第８図　徳丹城跡－第65次発掘調査の概要－ …… 14

第９図　徳丹城跡第65次発掘調査区遺構全体図 …… 15

第10図　徳丹城跡1号工房施設実測図…… 16

第11図　徳丹城跡2号工房施設実測図…… 16

第12図　名草郡郡許院関係略図 …… 21

第13図　漆紙文書の赤外線写真（表裏面）…… 29

第14図　漆紙文書の略測図（表裏面）…… 30

第15図　新羅飯麻呂請暇解（国立歴史民俗博物館所蔵）…… 32

第16図　7世紀後半の「ア」の字形…… 36

第17図　同一遺跡における「ア」から「マ」の変化 …… 36

第18図　新潟県内出土木簡にみえる「マ」の用例 …… 36

第19図-①「止」の書体7世紀…… 37

第19図-②「止」の書体8世紀…… 37

第20図　長岡市下ノ西遺跡出土1号木簡…… 38

第21図　古代越後国、国レベル施設と考えられる遺跡分布図 …… 39

第22図　藤原宮と郡山遺跡Ⅱ期官衙地割 …… 40

第23図　Ｅ漆紙（851）の出土状況 …… 42

第24図　Ｅ漆紙（851）の取り上げ状況 …… 42

第25図　Ｅ漆紙（851）の赤外線撮影 …… 42

第26図　漆紙の仕分け・収納 …… 43

第27図　クリーニング終了後の漆紙（851）…… 43

第28図　発砲硬質ウレタンによる梱包 …… 43

第29図　赤外線撮影使用機器 …… 44

第30図　851の赤外線写真 …… 44

第31図　バインダー塗布 …… 44

第32図　反転に使用したプレート …… 44

第33図　土からの取り外し・洗浄・反転作業 …… 45

第34図　851裏面の赤外線写真（1/4ブロック）…… 45

第35図　プリント接合 …… 45

第36図　漆紙断片の接合 …… 46

第37図　接合終了後 …… 46

第38図　保存処理終了後の赤外線写真 …… 46

表 目 次（附編）

第１表　郡庁造営時期…… 2

第２表　国衙遺跡の存続期間…… 2

第３表　漆液を入れた容器（曲げ物）の推定径…… 28

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯と本発掘調査の概要

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道」（以下、「日沿道」とする）は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」とする）を起点に北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」とする）- 秋田県河辺 JCT 間は営業路線名「日本海東北自動車道」とも呼称される。

新潟県側は新潟空港 - 神林岩船港 IC 間が平成 22 年に完成している。新潟 - 朝日 IC 間は平成元年及び平成 3 年に基本計画が決定され、本書で報告する西部遺跡が所在する中条 - 朝日 IC 間は、平成 10 年 4 月に施行命令が出された。これを受けて、日本道路公団（以下、「道路公団」とする）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

分布調査：中条 - 朝日 IC 間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）が平成 11 年度に実施し、西部遺跡が所在する旧神林村以北には道路法線上に 5 か所の周知遺跡（新発見も含む）と 15 か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要であることを県教委に報告した。西部遺跡は平成 2 年度に県教委が実施した遺跡詳細分布調査で発見されたもので、後述する確認調査により遺跡範囲が拡大した。

確認調査：西部遺跡に係る確認調査は平成 13・14 年度に実施した。調査対象面積は 93,920㎡で 91 か所の調査坑を設定し、合計 3,211㎡を調査した。調査によって、対象地には古代・中世の遺跡である西部遺跡のほかに縄文時代から弥生時代の遺跡が存在することが分かり、小字名をとり中部北遺跡として新規登録した。

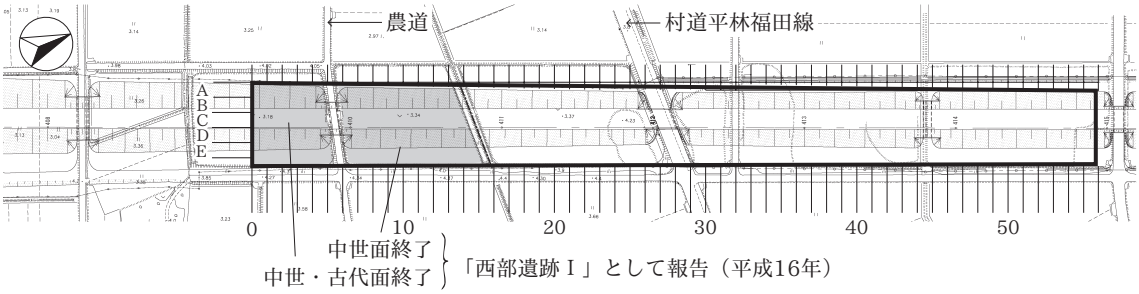
西部遺跡の本発掘調査面積はこの時点で延べ 47,060㎡（中世 14,500㎡＋古代 32,560㎡）であったが、平成 14 年 12 月 18 日の道路公団、県教委及び埋文事業団の協議（以下、「三者協議」とする）で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線部分に調査を限定することを決定し（以下、「限定協議」とする）、西部遺跡の本発掘調査面積は延べ 30,800㎡（中世 10,000㎡＋古代 20,800㎡）に修正された。

平成 16 年度本発掘調査：平成 15 年 10 月 1 日の三者協議で道路公団が示した平成 16 年度の調査要望は膨大で、工事工程から平成 17 年度以降もこの調査量が継続すると想定された。県教委と埋文事業団はこの要望に対応できるだけの調査体制を持ち合わせていないことから、平成 16 年度以降の日沿道建設に限り埋文事業団の直轄指導・監督のもと、民間調査機関に発掘調査を全部委託することとした。平成 16 年度の本発掘調査か所は平成 16 年 2 月 20 日の三者協議で決定した。調査は旧中条町、旧荒川町、旧神林村内の 9 遺跡で、調査対象面積は延べ約 66,000㎡である。西部遺跡の調査は工事工程に合せ遺跡南側の 10,800㎡（中世 5,400㎡＋古代 5,400㎡）とし、残りは次年度以降とした。

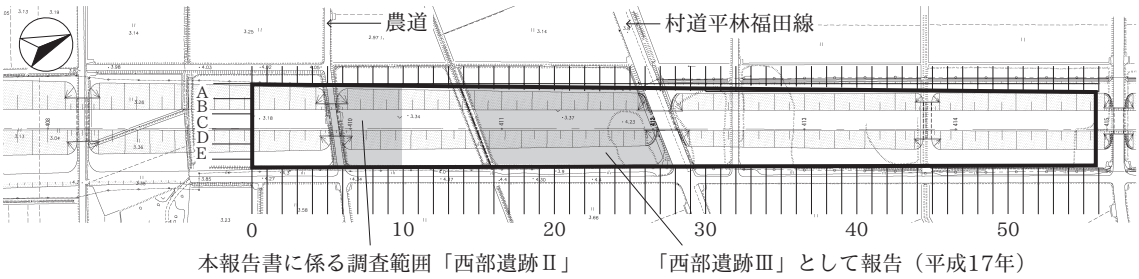
本発掘調査は 4 月 7 日～ 12 月 22 日に実施した。中世面が終了したのは 8 月で、その後、古代の遺跡内容把握のためのトレンチ調査を行った。その結果、古代の文化層が新たに複数枚検出され、当初計画した調査を終了させることができなくなった。

このトレンチ調査の結果を受けて、遺跡の取り扱いについて三者協議が開かれ、平成 16 年度は調査対

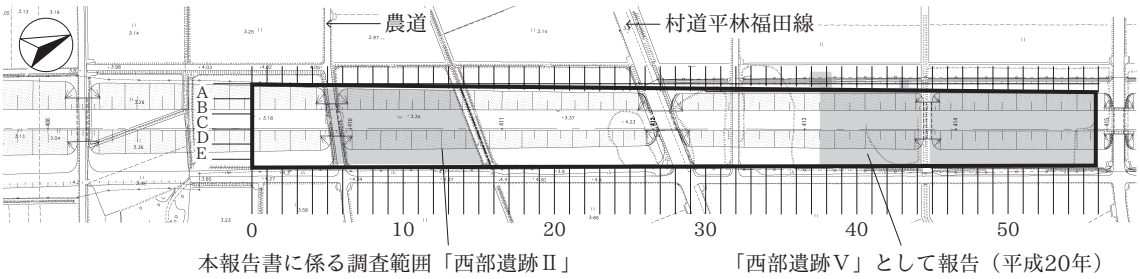
平成16年度　本発掘調査



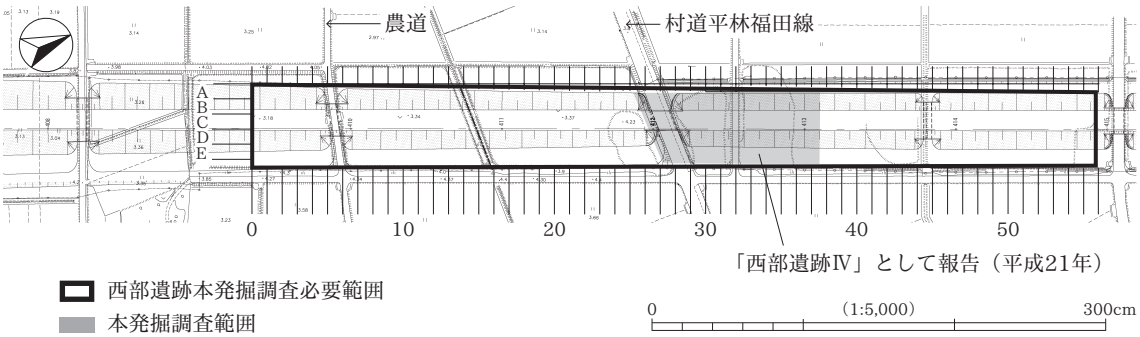
平成17年度　本発掘調査



平成18年度　本発掘調査



平成19・20年度　本発掘調査

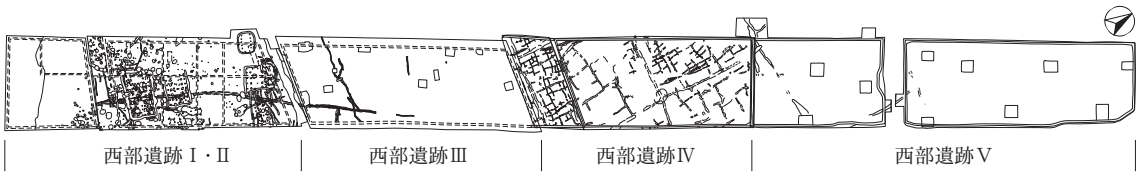


第 1 図　西部遺跡　年度別本発掘調査範囲

象全域の中世面と農道の南側の古代面（2 面）を調査することとし、農道以北の古代面は次年度以降の調査とした［折原ほか 2005］。また、今回の調査範囲から北側の地区についても、古代の文化層の枚数や内容の詳細を把握するため、平成 16 年 10 月 5 日～ 10 月 15 日に確認調査を追加した。

平成 17 年度本発掘調査：平成 17 年度の調査か所は、平成 17 年 2 月 17 日の三者協議で決定した。調査は旧中条町・旧荒川町・旧神林村内の 9 遺跡、対象面積は延べ約 76,000㎡である。

西部遺跡の調査は、①平成 16 年度調査で終了できなかった農道下の中世面と農道以北の古代面、そして②村道平林福田線の南側が対象となった。調査面積は複数枚の文化層があることから延べ約 33,000㎡である。



第２図　西部遺跡Ⅰ～Ⅴ位置図

調査面積が大きいことから、①と②の範囲でそれぞれに調査体制を組織することとした。本書に係る調査は①の範囲で、②の調査報告書は既に刊行している［吉田ほか2006］。

①の調査は４月１日～ 12 月 27 日にかけて実施した。農道下は中世面から、農道以外の地区は古代面（Ⅷ層）から調査を開始した。調査区からは多量の遺物（10 世紀初頭前後）が出土し、内部に鍛冶炉を持つ大型掘立柱建物を複数棟検出した。遺構の遺存状態は良好で、出土遺物には希少品や脆弱品が含まれることから、遺構の記録や遺物の取り上げに時間がかかり、対象範囲のすべてを調査終了することができなかった。

②の範囲は平成 17 年４月 13 日～ 10 月 31 日にかけて調査した。調査によって５枚の文化層を検出したが、各層とも①の範囲と様相が異なり、遺構・遺物の検出は少なかった。ただし、最下層のⅫ層面から検出した杭群（SX4001・4002）のうち、SX4001 としたものは６本の打ち込み杭（柱）が亀甲状の平面配置を呈し、杭の放射性年代測定では７世紀中葉から８世紀後葉の測定値が得られ、注目された［吉田ほか2006］。10 月 19 日には最下層の調査が終了し、10 月 27 日に県教委から調査終了の確認を得、同日、東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」[1]とする）へ現地を引渡した。

平成 18 年度本発掘調査：平成 18 年２月７日の国土開発幹線自動車道会議（以下、「国幹会議」とする）において、荒川胎内 IC の北側については新直轄道路として国土交通省（以下、「国交省」とする）が建設することになった。平成 18 年度の本発掘調査か所は、平成 18 年３月３日の三者協議（東日本高速道路は国交省に交代）で決定した。調査は当初計画では旧荒川町・旧神林村・旧村上市内の７遺跡であったが、その後、２遺跡（中曽根遺跡・桜林遺跡）が追加され、対象面積は延べ約 61,000㎡となった。西部遺跡に係る調査は、①平成 17 年度調査で終了できなかった５～ 15 グリッドのⅧ層下に存在する古代の文化層と、②西部遺跡の調査区内で最も北に位置する 37 ～ 56 グリッドである。平成 17 年度同様、①・②の範囲にそれぞれ別の調査組織を配置し調査した。本書に係る調査は①で、②の調査報告書は既に刊行している［土本ほか2008］。

①の調査は平成 18 年４月３日～ 12 月 15 日にかけて実施した。平成 17 年度調査でほぼ終了したⅧ層遺構の検出面（Ⅸ層）の掘削から開始した。Ⅸ層からは古代の遺物が少量出土したが、その多くが上層（Ⅷ層）の時期のもので、遺構も検出されなかったことから、Ⅷ層段階でⅨ層を撹拌した部分を調査で認識できなかったためと考えられる。その後、Ⅺ層（９世紀中葉）の調査で掘立柱建物群を検出し、一部の建物には鍛冶炉が伴っていることを確認し、Ⅷ層を含め鍛冶作業は長期にわたることが想定された。Ⅻ層からは東西・南北に伸びる畦畔を検出し、西部遺跡Ⅴで検出した条里型水田の伸びが想定された。次のⅫａ層では打ち込み杭を多数検出し、建物を想定できる配置のものもあったが、遺物は少量であった。また杭の放射性年代測定では８世紀代の値が得られ、平成 17 年度調査の②の範囲で検出した杭群を含め、その分布は広範囲に及ぶことが分かった。

1）　日本道路公団の分割民営化により平成 17 年に設立された。

すべての調査が終了し、平成 18 年 12 月 5 日に県教委から調査終了の確認を得、12 月 15 日に国交省へ現地を引き渡した。

②の調査は平成 18 年 4 月 3 日～ 12 月 15 日にかけて実施した。確認調査で古代遺物が多量に出土したことから、①の範囲同様、掘立柱建物を中心とする居住域と想定されたが、これに関連する遺構は検出できなかった。調査も中盤の 8 月、遺物の分布が帯状となっていることに気づき、急遽、遺物が分布する付近の土層断面の精査を行ったところ、幅 70cm、高さ 30cm ほどの土層の高まりを複数か所で確認できた。その後、土壌の自然科学分析を行いイネの珪酸体を検出したことから、土層の高まりは水田の畦畔で、出土した遺物の多くは大畦畔上に分布することが分かった。水田は部分的な検出であったが、大畦畔が東西・南北を基軸とし、1 辺約 55 m（半町）の方形区画をなすことから、「条里型地割」による古代水田と推定できた。

すべての作業が終了し、平成 18 年 12 月 13 日に県教委から調査終了の確認を得、12 月 18 日に国土交通省へ現地を引き渡した。

平成 19 年度本発掘調査：平成 19 年度調査か所は平成 19 年 2 月 6 日の三者協議で決定した。調査は旧荒川町・旧神林村・旧村上市内の 11 遺跡、対象面積は延べ約 74,000㎡である。西部遺跡に係る調査は 26 ～ 38 グリッドである。調査は平成 19 年 4 月 10 日～ 11 月 30 日にかけて実施した。18 年度調査の②の範囲で部分的に検出した古代水田の広がりと構造の把握を目的に調査を実施した。調査によって東西・南北を基軸とする水田を 2 面検出した。地割は 55 m（半町）を基にした「条里型」で、造営も 8 世紀代にまで上るものと推測される［村田ほか 2009］。なお、調査対象範囲南側の市道平林福田線下の調査は、埋設管移設の遅れから次年度以降となった。すべての作業が終了し平成 19 年 11 月 21 日に県教委から調査終了の確認を得、11 月 29 日に国交省へ現地を引き渡した。

平成 20 年度本発掘調査：平成 20 年度調査か所は平成 20 年 2 月 14・15 日の三者協議で決定した。調査は旧神林村・旧村上市内の 8 遺跡、対象面積は延べ約 36,000㎡である。西部遺跡現地調査の最終年度である。埋設管移設の遅れから平成 19 年度に調査できなかった市道平林福田線下の調査で、平成 20 年 4 月 1 日～ 5 月 30 日にかけて実施した。平成 19 年度調査で検出した水田の広がりを調査したが、東西方向へ伸びる大畦畔の南側からは中・小の畦畔が検出できないことから、調査区は水田域の南端と推測された［村田ほか 2009］。すべての作業が終了し、平成 20 年 5 月 21 日に県教委から調査終了の確認を得、5 月 28 日に国交省へ現地を引き渡した。

2　調査の経過と整理作業

A　調査の経過

平成 17 年度本発掘調査

4 月 1 日から調査現地の環境整備や施設建設を開始した。5 月 10 日には、重機を使用して農道部分と調査区西側の拡張部分の表土除去を開始し、13 日に終了した。西側の拡張については、調査深度が当初想定していた以上に深く、下層に至っては法面掘削の法範囲が調査できていないことから、調査範囲を拡張し未調査部分がないようするためである。調査区は表土直下が中世Ⅳ層遺構の検出面（Ⅴ層上面）となるため、引き続きⅣ層遺構の調査を行った。6 月 1 日、平成 16 年度に調査した範囲についてⅤ層の掘り

下げを開始し、10 日にはラジコンヘリを用い、Ⅳ層遺構の調査が終了した農道部分及び西側拡張部分の空中撮影を行った。14 日、Ⅴ層に引き続き、Ⅵ・Ⅶ層の掘り下げを開始する。24 日、Ⅷ層上面で検出した中世遺構の空中撮影を行う。当初、これらの遺構についてはⅥ・Ⅶ層段階のものである可能性を検討したが、両層から遺物が出土しないことや遺構の位置・配置などからⅣ層遺構の取りこぼしであると判断した。中世遺構の調査が終了した段階で、調査区北側から古代の遺物包含層であるⅧ層の掘り下げを開始した。同層からは土師器無台椀を中心とする多量の土器が出土した。7 月 14 日、Ⅷ層の掘り下げが先行している調査区北側からⅧ層遺構（9 世紀末から 10 世紀中葉）の検出作業を開始した。9・10D グリッド付近から鍛冶炉または地床炉と見られる被熱痕を検出した。20 日、調査区北側からⅧ層遺構の調査を開始する。また、これと並行して、鍛造剝片や粒状滓など鍛冶作業に関連した微細遺物を抽出するため土壌洗浄を行った。25 日、調査区北側で検出した鍛冶炉や地床炉を囲むように「コ」の字状の区画溝（SD1077）を検出した。区画内には掘立柱建物の存在が想定されることから、柱穴の検出に努めたが、柱穴の覆土は地山とほとんど同じで、検出に難渋した。8 月 4 日から鍛冶に関連した微細遺物の磁着・分類作業を調査現地で始め、16 日からは現地調査と並行して、群馬県前橋市の山武考古学研究所群馬支店において出土遺物の水洗いと注記作業を開始した。鍛冶関連の微細遺物が抽出されたことや、鍛冶炉と考えられる遺構を検出したことから、8 月 18・19 日、9 月 13 日に製鉄遺跡研究会穴澤義功氏、9 月 26 日に福島県文化財センター白河館能登屋宣康氏に、鍛冶に関連した遺構の調査と遺物の取り扱いについて現地指導を得た。Ⅷ層遺構の検出作業によって、鍛冶炉や地床炉を伴う大型の掘立柱建物（SB1400・1500）を中心として、井戸や土坑、溝、製塩関連遺構、性格不明遺構など多数の遺構を検出した。また、漆紙や水晶製丸玉、墨書土器など希少品や脆弱品の出土もあり、調査は検出遺構や出土遺物の状況を考慮しながら慎重に行った。9 月 9 日、県教委主催の埋蔵文化財講座の一般受講生 43 名が遺跡見学に訪れる。28 日には 10 月 1 日の現地説明会に先立って報道公開した。現地説明会はⅧ層の大型掘立柱建物（SB1400）と出土品を中心に一般に公開し、187 名の参加者を得た。また、11 月 2 日には関東甲信越静ブロックの埋蔵文化財担当者 45 名が遺跡見学した。3 日、Ⅷ層遺構の空中撮影を行う。その後、12 日には複数の大型掘立柱建物の上屋構造について東北芸術工科大学宮本長二郎氏に指導を得た。それに前後して、Ⅷ層遺構の調査が終了した調査区の西側と南側について、Ⅸ層の掘り下げを開始した。

漆紙の赤外線解析は 10 月中旬から現地調査と並行して県埋蔵文化財センターで行っていた。その結果、幾つかの漆紙に墨書が確認され、その一つに「郷」・「戸主」・「正丁」などの文字が判読できたことから、新潟大学小林昌二氏に文書の指導を得、11 月 18 日には、判読の中間報告として、このほかに「佐伯」（「和名抄」による古代磐船郡の郷名）が見られ、歴名形式の古代行政文書との教示を得た。鍛冶炉を持つ複数の大型建物の存在と漆紙文書の内容は、西部遺跡Ⅷ層段階が古代の官営工房であった可能性を高めるもので、その重要性から、今後の取扱いについて文化庁記念物課岡田康博調査官の現地指導を 12 月 8 日に得た。国立歴史民俗博物館平川南氏からは 12 月 20 日に漆紙の保存処理を中心とする指導を得た。

Ⅷ層の遺構数及び同層の遺物量は当初の予測を大きく超えたことから、調査区内の全調査を終了することができず、Ⅸ層以下の調査の多くは次年度以降に行うこととなった。12 月 20 ～ 27 日に、次年度の調査に備え、調査途中の遺構と下層の保護のため調査区表面を山砂で被覆し、今年度の現地調査を終了した。室内作業である微細遺物の磁着・分類作業は、平成 18 年 1 月 27 日まで現地事務所で行い、その後、3 月 31 日まで群馬支店において遺構図面等の基礎整理と並行して行った。

平成 18 年度本発掘調査

4 月 3 日、調査区を被覆した山砂を取り除き、調査を再開する。また、17 年度同様、調査区の北西側と北側を 6 日から拡張することとした。それと並行し調査区南側は大型掘立柱建物を除く部分のⅨ層の掘り下げ、北側はⅤ層の掘り下げを実施した。5 月 26 日には、今年度一回目の空中撮影を行った。新たに拡張した範囲も含むことから撮影対象は地区で異なるが、拡張範囲はⅤ層上面（Ⅳ層遺構）、調査区南側はⅨ・Ⅹ層を除去したⅪ層上面、北側はⅤ・Ⅵ・Ⅶ層を除去したⅧ層上面を撮影した。調査区南側と北側で検出したわずかな遺構は、除去した各層から遺物の出土がないことや遺構の位置・配置などから、調査区南側は上層遺構であるⅧ層遺構、北側はⅣ層遺構の取りこぼしであると判断された。31 日、調査区北側のⅧ層の掘り下げを開始し、6 月 7 日にⅧ層遺構の調査を開始する。15 日、文化庁記念物課の坂井秀弥主任文化財調査官が調査現地を視察。26 日、鍛冶に関連した微細遺物を抽出するため土壌洗浄を再開する。並行して磁着・分類作業を行う。7 月 27 日、現地説明会に先立ち報道公開を行い、29・30 日の現地説明会には 316 名の参加を得、調査区南側にあるⅧ層遺構の大型掘立柱建物（SB1400・1500）を中心に一般公開した。8 月 1 日、神林村立神納中学校生徒約 70 名が見学に訪れる。また 12 日には、出土遺物の説明を中心に現地見学会を開催した。26 日、調査区北側で検出したⅧ層遺構の空中撮影を行い、その後、北側からⅨ・Ⅹ層の掘り下げを開始する。また、これを追いかけるかたちで遺物包含層であるⅪ層の掘り下げを行った。9 月 22 日、Ⅺ層の掘り下げを終了し、Ⅺ層遺構の調査を開始する。10 月 21 日、Ⅺ層遺構の空中撮影を実施し、23 日には北側から重機で無遺物層であるⅫ層の掘り下げを開始した。30 日、調査区南側からⅫ層を除去したⅫａ層上面で東西・南北に伸びる水田畦畔を検出したことから、調査区北側にかけて再精査したが水田は南側以外では検出できなかった。また、調査区北側から遺物包含層であるⅫａ層の掘り下げを開始した。11 月 2 日、重機によるⅫ層の掘り下げが終了し、9 日、Ⅻ層遺構の水田の調査と並行して、北側からⅫａ層遺構の調査を開始した。13 日、Ⅷ層遺構の SB2100 の完掘のため西側（12・13A 区）を一部拡張し、この部分のⅣ層遺構とⅧ層遺構を追加調査した。25 日には 55 名の参加を得て最後の現地説明会を開催し、Ⅻ層遺構の水田とⅪ～Ⅻａ層の出土品を公開した。26 日、Ⅻａ層遺構とⅫ層遺構、Ⅷ層遺構（SB2100）について空中撮影を実施し、11 月 29 日～ 12 月 8 日にかけてⅫｂ層以下の遺構・遺物の有無を確認するため、Ⅻａ層遺構の調査が終了したところから重機による掘り下げを実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。また、11 日には調査区東端（11E8 区付近）において重機で深掘りを行い、基本層序を記録した。12 月 5 日、県教委の現地調査終了の確認を得、15 日には国交省に調査現地を引き渡した。27 日、現地事務所を撤収し、12 月 18 日から平成 19 年 3 月 30 日まで群馬支店において遺構図面等の基礎整理を行った。

B　整 理 作 業

遺構図面等の基礎整理は、本発掘調査を行った年度の 1 月から 3 月にかけて群馬県前橋市にある山武考古学研究所群馬支店で行った。また、出土遺物の洗浄・注記・接合・復元作業については、現地調査と並行して群馬支店で行った。報告書作成に係る遺物実測・トレース・写真撮影、原稿執筆、遺構・遺物図版編集などは平成 19 年 4 月 2 日から平成 21 年 3 月 31 日にかけて群馬支店（平成 21 年 1 月から株式会社ノガミ所属の西部遺跡調査事務所に名称変更）で実施した。整理期間中の作業工程は以下のとおりである。

整理期間後半の平成 20 年 6 月 7 日には研究者を対象に新潟県生涯学習推進センターで「西部遺跡整理

整理作業工程

	平成19年度												平成20年度											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺構トレース	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■												
遺物分類･集計	■	■	■	■	■	■	■																	
遺物写真撮影			■	■	■	■																		
遺物実測･拓本				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■							
遺物トレース								■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■					
図面図版作成													■	■	■	■	■	■	■	■	■			
写真図版作成														■	■	■	■	■	■	■	■			
原稿執筆								■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
編　　集																					■	■	■	■

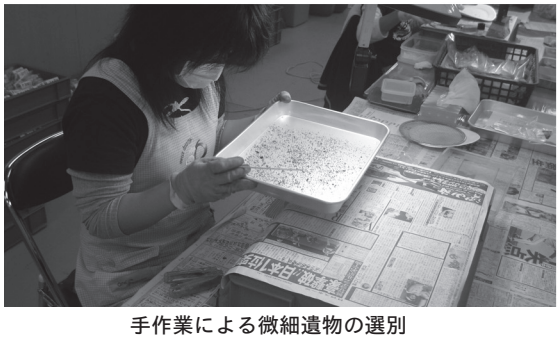
報告会」を開催し、整理の中間報告と合わせ、出土漆紙文書の解釈や古代磐船郡や磐舟柵研究の現状について、平川南（国立歴史民俗博物館）、小林昌二（帝京大学）、関雅之（日本考古学協会会員）、田中一穂（元埋文事業団）、湯原勝美（調査担当者）、鈴木俊成（埋文事業団）が報告し、出土品の説明も行った。

また、本遺跡からは鍛冶を行った工房が複数棟検出されている（古代Ⅷ層・Ⅺ層）。鍛造剝片や粒状滓など鍛冶作業の際に発生する肉眼では確認しづらい微細な遺物の分布状況を把握するため、遺物包含層（小グリッド単位）や遺構覆土を土ごと採取してその中に含まれる微細遺物の抽出を行った。採取した土量は1点当たり土嚢袋の半分程度、重量にしておよそ5kgで、採取した土嚢袋の総数は7,032袋である。

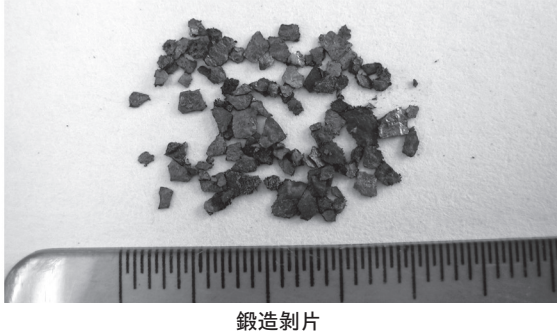
微細遺物の抽出と分類は次のような手順で行った。採取した土は粘性が高く水に溶けづらいことから、微細遺物の破損を避けるため、網目0.5mmのフルイの中に採取土を入れて流水で時間をかけて洗浄し、土中に含まれる微細遺物を抽出した。抽出した微細遺物は、まず、磁石（株式会社タジマツール製ピックアップM／PUP－M型）を使用して、これに付くものを分離し、鍛造剝片、粒状滓、鉄滓破片、鉄器表面破片など種類ごとに分類した。また、磁石に付かないものは手作業で残滓と分離し、鉄滓破片、粒状の滓、ガラス質滓、炭化米、炭化種子などに分類した。なお、微細遺物の数量表記については、出土量が僅少で重量表記できないものが多数存在することから基本的に種類ごとに点数で表記した。

採取土の洗浄

磁石を使用した微細遺物の選別



手作業による微細遺物の選別



鍛造剝片

C　調査・整理体制

本発掘調査及び整理作業は、以下のような期間と体制で行った。

【平成 17 年度】

調 査 期 間　平成 17 年 4 月 1 日～平成 17 年 12 月 27 日

整 理 期 間　平成 17 年 12 月 28 日～平成 18 年 3 月 31 日

調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　波多　俊二　（㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）

長谷川二三夫（　同　総務課課長）

藤巻　正信　（　同　調査課課長）

庶　　務　長谷川　靖　（　同　総務課班長）

監　　督　鈴木　俊成　（　同　調査課課長代理）

辻　　範朗　（　同　調査課主任調査員）

調 査 組 織　有限会社山武考古学研究所

現場代理人　小林　　正　（㈲山武考古学研究所　事業部）

調 査 担 当　湯原　勝美　（　同　調査研究室係長）

調　査　員　近江屋成陽　（　同　調査研究室調査研究員）

大越　直樹　（　同　調査研究室調査研究員）

秋山　真好　（　同　調査研究室調査研究員）

前川　昭彦　（　同　調査研究室調査研究員）

【平成 18 年度】

調 査 期 間　平成 18 年 4 月 3 日～平成 18 年 12 月 15 日

整 理 期 間　平成 18 年 12 月 18 日～平成 19 年 3 月 30 日

調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　　理　波多　俊二　（㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）

斎藤　　栄　（　同　総務課課長）

藤巻　正信　（　同　調査課課長）

庶　　務　長谷川　靖　（　同　総務課班長）

監　　督　鈴木　俊成　（　同　調査課課長代理）

木村　雄司　（　同　調査課主任調査員）

調 査 組 織　有限会社山武考古学研究所

現場代理人　小林　　正　（㈲山武考古学研究所　事業部）

調 査 担 当　湯原　勝美　（　同　調査研究室係長）

調　査　員　武部　喜充　（　同　事業部部長補佐）

長谷川一郎　（　同　調査研究室調査研究員）

山崎　　悟　（　同　調査研究室調査研究員）

秋山　真好　（　同　調査研究室調査研究員）
前川　昭彦　（　同　調査研究室調査研究員）

【平成 19 年度】

整 理 期 間　平成 19 年 4 月 2 日～平成 20 年 3 月 31 日
調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
管　　理　木村　正昭　（㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
斎藤　　栄　（　同　総務課課長）
藤巻　正信　（　同　調査課課長）
庶　　務　長谷川　靖　（　同　総務課班長）
監　　督　鈴木　俊成　（　同　調査課課長代理）
木村　雄司　（　同　調査課主任調査員）
調 査 組 織　有限会社山武考古学研究所
調 査 担 当　湯原　勝美　（㈲山武考古学研究所　調査研究室係長）
調　査　員　折原　洋一　（　同　調査研究室係長　11 月～ 3 月）
長谷川一郎　（　同　調査研究室調査研究員　4 月～ 9 月）
秋山　真好　（　同　調査研究室調査研究員）
前川　昭彦　（　同　調査研究室調査研究員）

【平成 20 年度】

整 理 期 間　平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日
調 査 主 体　新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
管　　理　木村　正昭　（㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団　専務理事・事務局長）
斎藤　　栄　（　同　総務課課長）
藤巻　正信　（　同　調査課課長）
庶　　務　長谷川　靖　（　同　総務課班長）
監　　督　鈴木　俊成　（　同　調査課課長代理）
木村　雄司　（　同　調査課主任調査員）
調 査 組 織　有限会社山武考古学研究所（平成 20 年 4 月 1 日～ 12 月 19 日）
株式会社ノガミ（平成 21 年 1 月 1 日～ 3 月 31 日）
調 査 担 当　湯原　勝美　（㈲山武考古学研究所　調査研究室係長、㈱ノガミ　埋蔵文化財調査部調査員）
調　査　員　秋山　真好　（　同　調査研究室調査研究員、　同　埋蔵文化財調査部調査員）
前川　昭彦　（　同　調査研究室調査研究員　5 月～ 8 月）
調査補助員　折原　洋一　（　同　調査研究室係長、　同　埋蔵文化財調査部調査員）

整理補助員（平成 19・20 年度）　青木千賀子　　梅山　　淳　　木下　雅文　　佐藤　京子
須藤　恭子　　萩原真理子　　堀越友希恵　　馬渕恵美子
吉田三枝子

第３図　調査区位置図（神林村発行『神林村平面図２』（平成 13 年）に加筆）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

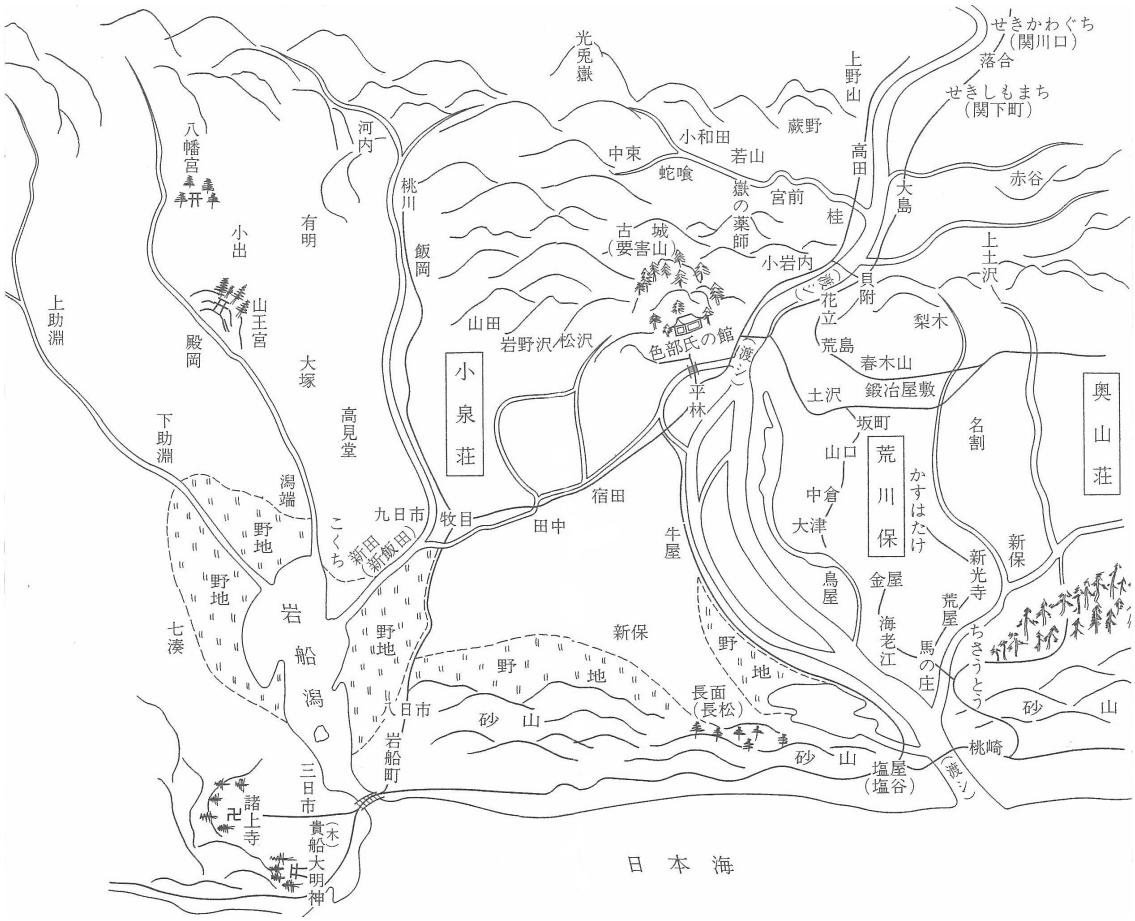
本遺跡の所在する旧神林村は、新潟県の最北端にある岩船郡に属し、新潟平野の北端にあたる。旧神林村は平成 20 年に旧荒川町・旧朝日村・旧山北町・旧村上市と合併し、村上市となった。遺跡は新潟県村上市牛屋字西部に所在し、JR 羽越本線平林駅から西方へ約２km の地点に位置している。遺跡は旧神林村の南西端、山形県境から西流して日本海に注ぐ荒川が幾度となく氾濫をくり返し、その流れに沿って形成された自然堤防上に立地している。自然堤防の東方で扇状地の先端部に連なり、荒川沿いに発達するが、その先端は福田地内まで伸びている。遺跡周辺は北側から西側にかけては低地が広がり、南側は荒川及びその河道跡が存在する。標高は 2.5m 前後、調査前の現況は水田である。

旧村内の地形を大別すると５つに分けられる。①東側は標高 200 ～ 300m の低位山地。②それに連なる標高 100m 前後のやや起状に富んだ丘陵性の山地。③瀬波温泉の後背地を形成する標高 100m 以下の平坦な浦田山丘陵。④海岸沿いに発達する砂丘。越後平野に発達する３列の新潟砂丘は岩船町付近で収斂し、浦田山丘陵で断絶するものの、三面川河口まで達している。⑤旧岩船潟を含む沖積地。旧岩船潟は海岸線の発達と前進に伴って次第に埋積されていった浅海の跡である潟湖の名残である。

沖積地は、現在平坦な水田地帯になっているが、江戸時代の文政４（1821）年と慶応４（1863）年の潟干拓絵図を見ると、天明期ごろから干拓されていたことが分かる。明治 10 年ごろまでには、潟の中央部を残してほぼ干拓されたが、完全に干拓されたのは明治 33（1900）年になってからである。即、美田になったわけではなく、水害・塩害の連続で、その都度旧岩船潟の再現というべき状態であった［新潟県立村上高等学校地理歴史部 1975］。現行の姿になったのは、明治 30 年代後半から昭和 20 年代後半にかけて行われた旧岩船潟の区画整理事業や昭和 63 年度以前のほ場整備事業、そして平成元（1989）年から７年にかけてのほ場整備事業を経てからである。

慶長２（1597）年の「越後国郡絵図」（米沢市所蔵）は瀬波郡と頸城郡の二幅あり、合せて 630 余りの集落が描かれている。これらの集落名は、瀬波郡で 90％、頸城郡で 82％までが現在の大字名と一致する。一致しないものでも、絵図の集落名が現在も何らかの地名として残っており、絵図の集落名の 97％が現地比定できる。この絵図では描き方によって集落を「村」と「町」に区別している。「町」は道を挟んで両側に妻入りの家が並び、「村」は屋敷林に囲まれた２～３軒の家がまとまりとしてそれぞれ描き分けている。町は街道沿いや河口などに立地した港、城下に分布し、近現代まで町場が維持されてきた中心集落が多い。

越後国郡絵図（「瀬波郡絵図」）や遺跡の分布などを見ると、荒川は平林付近で分流し、沖積地の中央を岩船潟に向って流れる中規模河川が確認される。また、第４図は同絵図の一部を概念図的にしたものであるが、荒川の右岸、岩船潟の周辺、砂丘の後背湿地は「野地」・「ヤチ」と記され、今よりも起状のあった地形と考えられる。岩船潟周辺の野地を含めて考えると、慶長以前の岩船潟はもっと広域にわたり、人々の生活ができる空間は水辺や山際といった場所に限られていたと言えよう。



第４図　瀬波郡絵図概念図（一部）［中野 1988 から転載］

2　歴史的環境

古代初期では、『日本書紀』に記載される大化４（648）年の磐舟柵造営、さらに『続日本紀』には文武元（698）年に初めて「越後」の名が登場し、文武２年と４年には越後の国に「磐舟柵」を修理させた記事が記載されている。磐舟柵の所在地は不明で、旧神林村の北部、七湊・下助淵・潟端・岩船町に囲まれた旧岩船潟周辺に存在したとする説など諸説がある［村上市史編纂室 1999］。現在のところ、周辺において磐舟柵造営期に相当する遺跡は見つかっていないが、本遺跡の調査で８世紀代に遡る条里型水田が検出され、比較的早い段階で条里制が施行されている点から磐舟柵の存在が大きく関わっていたためとも考えられる。

奈良～平安時代前期の磐船郡は、大宝２（703）年の越中国四郡を越後国に分属、和銅元（708）年の出羽郡成立、和銅５（712）年の出羽国設置などの記事から奈良時代初期に成立していたと推測され、所属する郷は『和名抄』から佐伯・山家・利波・坂井・余戸が知られるが、郷名の比定地については、確定に至っていない。また、北陸道に関しては初期において出羽国まで存在し、８世紀中ごろ前後に格下げされ、９世紀代のいずれかの時期まで北陸道延長路ないし東山道・北陸道連絡路として併用されたとする説［中村 2003、高橋 2007］もあり、本遺跡周辺に北陸道が存在した可能性もある。

平安時代の後半は本地域に小泉荘が成立する。小泉庄は 11 世紀後半に中御門家藤原俊家が領有した 30 町ほどの免田の荘園として始まり、12 世紀中ごろには鳥羽院発願の寺院である金剛心院造営に伴って

院御願寺の経費を負担するための荘園のひとつとして金剛心院領小泉荘へと変貌、荘域も拡大し、中御門家宗能は小泉庄を預かる預所職を獲得する。立荘当初は国衙勢力と利害が対立しており、立荘以前から直属する「本荘」と荘園領主と国衙の両方に属する「加納」に分かれ、本遺跡のある牛屋は「加納」に属していた。11 ～ 12 世紀代中ごろまでの考古学的資料はほとんどなく、空白となる。12 世紀初めに登場する城永基の孫に当たる助永は 12 世紀後半の小泉荘の現地支配に関わっていたと考えられ、当時の城氏の軍事力は大きく、在庁官人が簡単に捕縛できるような相手ではなかった。京都の荘園領主も、このような城氏に現地支配を委ねることで、国衙側の妨害から荘園を守り、年貢を確保したと思われる。この城氏は治承５（1181）年に横田河原の戦いで源義仲に敗北した後、勢力を失った。源頼朝は壇ノ浦の戦いで平氏が滅んだ文治元（1185）年に越後を知行国の１国に加え、御家人である秩父季長が小泉荘の地頭になった。鎌倉時代初期の建永元（1206）年ごろに季長は嫡子行長に本荘を、庶子為長に小泉荘加納・色部・牛屋、粟島の地頭職を譲渡している。以後行長の系譜は「本荘」を名乗り、為長の系譜は色部の条へ居を構え「色部」を名乗るようになる。為長は建長六（1254）年に子公長に小泉荘加納・色部・牛屋、粟島の地頭職を譲渡しており、その公長は荒河保地頭である河村（荒川）景勝と牛屋条と荒川保の境界争いを演じた。その後も境界は荒川の氾濫により変化し、境界争いが絶えなかったようである。公長は文永７（1270）年に牛屋地頭職を子の長茂と氏長に対して牛屋と宿田に二分して譲渡しており、この史料から牛屋条の範囲を知ることができる。この後も色部氏については慶長３（1598）年に上杉景勝に従い会津に国替えするまで足跡を追うことができる。

この地域の古代については、近年のほ場整備事業や日本海沿岸東北自動車道建設に伴って発掘調査が行われ、具体的様相が徐々に明らかにされてきている。古代の遺跡は中世の遺跡（集落）と重複しているものが多い。ここでは、古代遺跡を中心に要点を説明することとする。

西部遺跡（1）は今回の調査対象となった遺跡である。特に、9 世紀末から 10 世紀代の溝で囲まれた大型工房跡や漆紙文書が出土し官衙的様相をおびた遺跡として注目される。はげ遺跡（2）［村上市教委 1993］・三十刈遺跡（3）［村上市教委 1994］は 8 世紀後半から 9 世紀前半の遺跡である。発掘面積は狭小ではあるが、墨書土器がまとまって出土している。六百地遺跡（4）［神林村教委 2002］では、川と多数の掘立柱建物が、樋渡遺跡（5）［神林村教委 2002］では掘立柱建物のほかに円面硯・緑釉陶器・「寺」の墨書土器など注目される遺物が出土している。石川遺跡（6）［新潟県教委 1998］では 11 世紀初頭前後の自然流路から一括廃棄の可能性がある土師器の食膳具が多量に出土している。砂山Ⅳ遺跡（7）では 8 世紀後半から 9 世紀初頭の竪穴住居が 10 軒以上検出され、竪穴内から和同開珎が 1 枚出土している。田島遺跡（8）［荒川町教委 2001］では 10 世紀前半の竪穴住居から土師器の食膳具とともに猿投 K-90 の施釉陶器が、宮ノ腰 D 遺跡（9）［荒川町教委 2000］では 8 世紀前半から後半にかけての竪穴住居が検出されている。鴨侍遺跡（10）［荒川町教委 2002］では溝で区画された掘立柱建物群が整然と配置され、その中心をなすのが 3 × 7 間の片面廂付の大型建物である。遺物は 9 世紀を中心とし、円面硯や風字硯も出土し、注目される。元山窯跡群（11）［荒川町教委 1999］は現在岩船郡内で確認されているただ一つの窯跡群である。8 世紀後半から 9 世紀前半の須恵器窯で 7 基から構成されている。乙宝寺塔心礎（12）［平野 1963、中条町史編纂委員会 1982］は境内の六角堂床下にある直径約 2m の花崗岩製二重孔式塔心礎である。7 世紀末から奈良時代初頭の白鳳期様式と考えられている。『乙宝寺縁起絵巻』によると安元 2 年（1176）に地下から掘り出したと伝えられている。

第 5 図　周辺の古代遺跡

［国土地理院発行「村上」（平成 10 年）・「中条」（平成 15 年）1：50,000 原図］

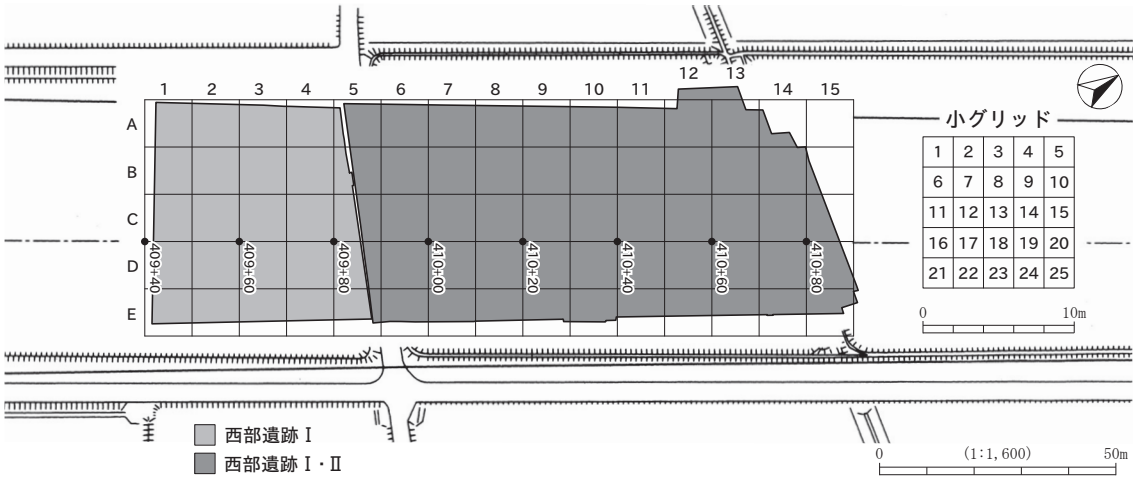
第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドの設定

グリッドは調査区の現況に合わせ設定した。設定にあたっては、高速道路法線杭 STA410+00（X＝238695.820、Y=82110.428）と STA410+60（X=238661.70、Y=82110.428）をもとに座標計算を行い、グリッド主軸の 2 点 P1、P2 を定めた。本書で示す北方位は国家座標第Ⅷ系の X 軸方向を指し、グリッドの主軸は座標北から約 31 度 27 分 50 秒東偏する。

10m 方眼を大グリッドとし、南北方向は南から算用数字を付し、東西方向は西からアルファベットを付して、「1A」のように組み合わせて大グリッド名とした。大グリッドは南西隅に角杭を打設した。なお、グリッド主軸の P1、P2 は、それぞれ 7D 杭、13D 杭に対応する。

さらに、大グリッドを 2 m方眼に 25 分割したものを小グリッドとし、1 ～ 25 の算用数字を付して、大グリッドに続けて「1A1」のように表記した。



第 6 図　グリッド設定図

2　層　　序

A　基　本　層　序

西部遺跡Ⅱの調査区は、グリッド南北列の 5 ～ 15 区の範囲である。この地区の土層は比較的安定しており、北へ向かってわずかに傾斜するが、ほぼ水平に近い状況で堆積している。本調査区は荒川の氾濫による堆積物を主体とし、その土質はシルトを基本とする。

基本層序は、調査区北東側の 11E8 区で記録した。重機を使用して地表面から約 4.5 m（標高－ 1.5 m）掘削して土層の観察と記録を行った。なお、確認調査で示されたⅡ～Ⅳ層については、本発掘調査区では確認できなかった。

基本層序

Ⅰ層　　褐灰色土（10YR5/1）　現水田耕作土。

Ⅴａ層　黄灰色砂質シルト（2.5Y5/1）　砂粒を多量に含む。粘性は弱く、よく締まる。上面が中世Ⅳ層遺構の検出面。

Ⅴｂ層　黄灰色シルト(2.5Y5/1)　炭化粒子φ 1 ～ 5mm を少量含む。粘性は弱く、締まる。

Ⅵ層　　暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）　炭化粒子φ 1mm を少量含む。粘性は弱く、締まる。

Ⅶ層　　暗灰黄色シルト（2.5Y5/2）　灰黄色シルト（2.5Y6/2）ブロックφ 4 ～ 8mm を少量含む。粘性は弱く、締まる。

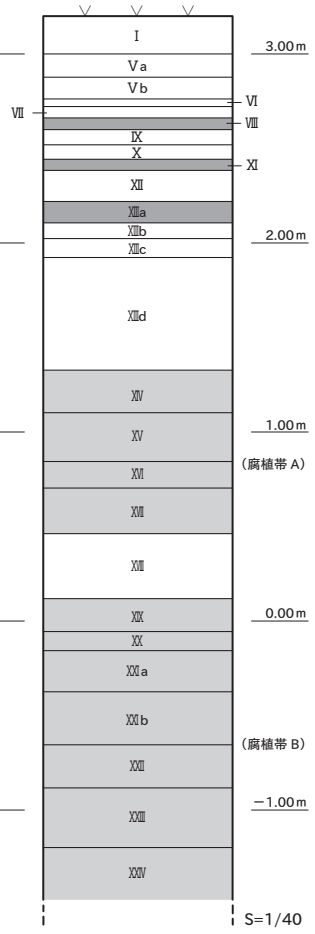
Ⅷ層　　灰色シルト（N4/）　炭化粒子φ 1 ～ 3mm を多量に含む。粘性は弱く、締まる。土師器無台椀を中心に多量の遺物が出土した。遺物包含層（9 世紀末～ 10 世紀中葉)。

Ⅸ層　　暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）　炭化粒子φ 1 ～ 3mm を微量に含む。粘性は弱く、締まる。上面が古代Ⅷ層遺構の検出面。

Ⅹ層　　暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）　やや粘性強く、締まる。

Ⅺ層　　オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　炭化粒子φ 1 ～ 4mm を多量に含む。やや粘性が強く、締まる。遺物包含層（9 世紀中葉)。

Ⅻ層　　暗オリーブ灰色砂質シルト（2.5GY4/1）　砂粒を多量に含む。粘性は弱く、よく締まる。上面が古代Ⅺ層遺構の検出面。



第 7 図　基本層序

Ⅻａ層　オリーブ灰色シルト（2.5GY5/1）　粘性は弱く、締まる。上面が古代Ⅻ層遺構（水田）の検出面。遺物包含層（8 世紀前半)。

Ⅻｂ層　暗オリーブ灰色砂質シルト（2.5GY4/1）　砂粒を多量に含む。粘性は弱く、よく締まる。上面が古代Ⅻａ層遺構の検出面。

Ⅻｃ層　暗オリーブ灰色シルト（2.5GY4/1）　粘性は弱く、締まる。炭化粒子φ 1mm をわずかに含む。

Ⅻｄ層　灰色シルト（7.5Y5/1）　炭化粒子φ 1mm をわずかに含む。粘性は弱く、締まる。

ⅩⅣ層　黒褐色腐植土(10YR3/2)　腐植土と灰色シルト(5Y5/1)が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。

ⅩⅤ層　黒色腐植土（2.5Y2/1）　腐植土と灰色シルト（5Y5/1）が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。

ⅩⅥ層　黄灰色腐植土(2.5Y6/1)　腐植土と灰色シルト(5Y5/1)が互層をなす。腐植質の割合は少ない。粘性は弱く、やや締まる。

ⅩⅦ層　黒褐色腐植土（10YR3/2）　腐植土と灰色シルト（5Y5/1）が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。ⅩⅦ層からⅩⅧ層にかけて木根が遺存する。

ⅩⅧ層　灰色シルト（5Y5/1）　粘性が強く、締まる。

ⅩⅨ層　黒色腐植土（2.5Y2/1）　腐植土と黄灰色シルト（2.5Y6/1）が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。本層から放射性炭素年代測定用の試料を採取した（「第Ⅵ章 1」参照)。

ⅩⅩ層　黄灰色シルト（2.5Y6/1）　やや粘性が強く、締まる。

XXⅠa層　黒色腐植土（2.5Y2/1）　腐植土と黄灰色シルト（2.5Y6/1）が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。

XXⅠb層　黒色腐植土（2.5Y2/1）　腐植土と黄灰色シルト（2.5Y6/1）が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。

XXⅡ層　暗灰黄色腐植土（2.5Y4/2）　腐植土と黄灰色シルト（2.5Y6/1）が互層をなす。腐植質の割合は少ない。粘性は弱く、やや締まる。木根が遺存する。

XXⅢ層　黒色腐植土（2.5Y2/2）　黄灰色シルト（2.5Y6/1）と腐植土が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。

XXⅣ層　黒褐色腐植土（10YR3/2）　黄灰色シルト（2.5Y6/1）と腐植土が互層をなす。粘性は弱く、やや締まる。

B　堆積状況

西部遺跡Ⅱの調査区ではⅠ層からXXⅣ層までの層序を確認している。このうち、XⅣ層以下については深掘りを行った調査区北東側の 11E8 区でのみ確認している。

Ⅰ層は表土である。南側の農道部分を除き、ほ場整備された水田耕作土である。

Ⅱ～Ⅳ層は確認調査で示されたものであるが、本発掘調査区内では確認できなかった。今回の調査で表土除去から行った農道部分でも、平成 16 年度にⅣ層遺構（Ⅴ層上面）の調査を行った西部遺跡Ⅰの調査でもⅡ～Ⅳ層は確認されていない。いずれも表土層直下からはⅤ層が検出されており、ほ場整備などを要因として既に削平されて遺存しないものと考えられる。

Ⅴ層は黄灰色を呈するシルト層で、上位には砂粒の混入が見られる。砂粒を多く含むⅤａ層と砂粒をほとんど含まないⅤｂ層とに分層した。10 ～ 25cm ほどの層厚で、調査区北東側でやや厚く堆積する。

Ⅵ層とⅦ層はほとんど同質の暗灰黄色を呈するシルト層であるが、Ⅶ層中には灰黄色シルトブロックが含まれている点で識別される。それぞれ 5cm ほどの層厚で堆積する。

Ⅷ層は灰色を呈するシルト層で、多量の土器片や炭化粒子などの混入が見られる。9 世紀末から 10 世紀中葉の遺物包含層である。層厚は 10cm 前後である。Ⅷ層の段階では、調査区北東側が地形的にやや低かったものと推測される。

Ⅸ層とＸ層は同じく暗オリーブ灰色を呈するシルト層であるが、Ｘ層はやや粘性が強い。それぞれ 5cm ほどの層厚で堆積する。

Ⅺ層はオリーブ灰色を呈するシルト層で、9 世紀中葉の遺物包含層である。層厚は 10cm 前後である。

ⅫⅫ層は暗オリーブ灰色を呈する砂質シルト層である。砂粒を多く含み、10 ～ 15cm ほどの層厚で堆積する。西部遺跡Ⅰ～Ⅴにかけて広範囲に安定して堆積が見られる。

ⅫⅢ層は、特徴的な層であるⅫⅡ層とⅫⅣ層の間に挟まれた層である。8 世紀前半の遺物包含層であるオリーブ灰色シルトのⅫⅢａ層、砂粒を多く含む暗オリーブ灰色砂質シルトのⅫⅢｂ層、ⅫⅢｂ層と同質であるが砂粒を含まないⅫⅢｃ層、灰色シルトのⅫⅢｄ層の４層に分層した。深掘りを行った調査区北東側のⅫⅢａ～ｄ層の層厚は 90cm ほどあり、西部遺跡Ⅰや西部遺跡Ⅲ～Ⅴと比べて非常に厚い堆積を示しているが、直下のⅫⅣ層以下の段階で調査区北東側が地形的に低かったことが要因と思われる。

ⅫⅣ層以下では堆積状況が大きく異なり、基本的にシルトと腐植土が互層をなして堆積している。このうちⅫⅣ～ⅫⅦ層とⅫⅨ～XXⅣ層の間には腐植質を含まない灰色シルトのⅫⅧ層が35cmほどの厚さで堆積しており、

このⅫ層を境に、上層のⅫ～Ⅻ層を腐植帯Ａ、下層のⅩⅨ～ⅩⅩⅣ層を腐植帯Ｂと呼称した。同様の腐植帯は、これより北側の西部遺跡Ⅲ～Ⅴ、中部北遺跡でも確認されている。

3　西部遺跡周辺の層序

西部遺跡として登録された範囲は広く、日沿道関連では東西約 40 ｍ、南北約 560 ｍを調査し、複数の文化層の存在から調査面積は延べ約 79,000㎡にのぼる。地表近くの土壌は珪藻分析から河川等の氾濫堆積物の累重と推測され（第Ⅳ章参照）、シルトを基本とするが、一部の層（Ⅳ・Ⅷ層）を除き多くの層は土壌化が進んでいないため分層は容易でない。しかし、出土遺物や特徴的な層（鍵層）の存在から広範囲にわたる堆積土の累重関係が明らかになってきた。層序の把握は、平成 16 年度の西部遺跡Ⅰで基本層序の確認から始まり、その後の調査（西部遺跡Ⅱ～Ⅴ）で、この基本土層を各調査区で確認し、可能な限り現地で繋いだ。

分層するに当たり鍵層としたものや、遺物が出土した層の時期・特徴についてここで整理し、西部遺跡の更に北に位置する中部北遺跡・窪田遺跡・田屋道遺跡・宮の越遺跡の状況も参考に、古代以前も含め、荒川の北に位置する西部遺跡周辺の基本層序確立に向けて、その見通しを述べる。

中世の遺物包含層

Ⅳ～Ⅵ層を中世の遺物包含層とする。西部遺跡ⅢでⅣ層から 14 世紀末、Ⅴ・Ⅵ層から 12 世紀後半から 14 世紀初頭の遺物が出土し、時期差が指摘されている。ただし、遺物はⅣ層出土が大半でⅤ・Ⅵ層からはごく少量である。唯一中世集落（居住域）を検出した西部遺跡Ⅰ・Ⅱでは、Ⅳ層は近現代の削平や耕作による撹拌でほとんど確認できず、Ⅴ・Ⅵ層からは中世遺物の出土はない。Ⅴ層の明黄褐色シルトは黄色砂粒を含む鍵層で、その層界は比較的明瞭である。Ⅴ層の存在からその上下の層を誤認する恐れは少なく、今回の一連の調査では明らかにすることができなかったが、西部遺跡Ⅲの例から中世の時期に複数の遺物包含層と遺構検出面が存在する可能性がある。

Ⅴ層中の砂粒の量や層厚はまちまちである。西部遺跡Ⅰ・Ⅱでは標高３ｍ前後に堆積し、西部遺跡Ⅲ以北では徐々に低くなる（2.6 ｍ前後）が、西部遺跡Ⅴ南端で局所的に高い所がある。中世の居住域である西部遺跡Ⅰ・Ⅱは、遺物包含層の一部（Ⅳ層）がそれ以降の時代に撹拌や削平を受けていることから、本来の地盤はより高かったと推測される。西部遺跡Ⅲ以北（11A ～ 14D 区以北）では建物等が見つからず、溝や水田区画等が検出された。両地区は時期もほぼ重なることから同時期と考えれば、荒川沿いの集落とその南側（周辺）の低地に水田を中心とする生産域が広がる景観となろう。

古代の遺物包含層

おおむね９世紀末から 10 世紀中葉の遺物包含層にⅧ層がある。西部遺跡Ⅰ・Ⅱでは、工房と考えられる大型建物を中心とする範囲から多量の遺物が出土した。須恵器は極めて少なく、ほとんどが土師器椀である。標高は建物群の中心地区（９区付近）が３ｍ弱と最も高く、南北方向は徐々に低くなっていく。その中でも西部遺跡Ⅴ南端は中世同様（Ⅴ層の状況）、局所的に高い。西部遺跡Ⅲの調査区北側では、Ⅷ層が炭化物を含まない間層を挟み上下２分され、合計３層に分かれることを確認している。この分層状況は西部遺跡Ⅴまで続き、西部遺跡Ⅳでは腐植物や炭化した腐植物の混入が目立ち層厚も増してくる。

Ⅸ層から遺物が出土した地区は西部遺跡Ⅰ･ⅡとⅣである。西部遺跡Ⅰ･Ⅱでは出土点数が極めて少なく、遺構も検出していない。土器の時期は上層（Ⅷ層）と同じであることから、Ⅷ層段階でのⅨ層中に及ぶ撹

拌痕跡を認識できずに遺物を取り上げたものと考え、遺物包含層として認識していない。西部遺跡Ⅳでは古代水田（第２面）直上の土層が相当し、カヤツリグサ科の果実を多量に含む腐植物に富む特徴的な土壌で、この層から身が深く直線的な体部を持つ土師器椀が出土している。西部遺跡Ⅰ・Ⅱの㎦層遺物より層位的に下と推測されるが、時期的には近いものであろう。古代水田を検出した西部遺跡Ⅳでは、このⅨ層が水田耕作土を直接覆っており、水田廃棄に関わる要因や廃棄直後の様子を示す土壌であると同時に、出土した遺物は水田の終焉時期を示すものとして重要である。標高は中世（Ⅴ層）、古代（㎦層）同様、西部遺跡Ⅲ以北は徐々に低くなり、西部遺跡Ⅴ南端で局所的に高くなる。

Ⅹ層は西部遺跡Ⅰ・Ⅱでは遺物が出土しないが、同層が古代水田（第２面）の耕作土となっている西部遺跡Ⅳ・Ⅴでは９世紀中葉から 10 世紀前葉とされる須恵器・土師器などが出土している。須恵器杯が定量出土することと、器高も比較的低い土師器椀の存在や土師器黒色土器有台椀が伴わないことなどから、西部遺跡Ⅰ・Ⅱの㎦層出土遺物より古い傾向にあると考えられる。

次のⅪ層は９世紀中葉の遺物包含層で、その下の砂層であるⅫ層は鍵層となり得る特徴的な層である。標高の推移は後続時期の土層とおおむね同じであるが、起伏（西部遺跡Ⅰ・ⅡとⅤの南側の高所）は小さくなっている。西部遺跡Ⅰ・ⅡではⅪ層から９世紀中葉の遺物と㎦層遺構の前身とも考えられる鍛冶工房を含む建物群が検出され、西部遺跡Ⅲ･Ⅳでは器高の低い土師器椀が少量出土している。また、西部遺跡Ⅰ・ⅡのⅫ層では遺物が出土していないが、西部遺跡ⅣではⅪ層下を砂の含有が少ないⅫａ層と砂が多いⅫｂ層に２分し、後者はⅩⅢ層との層界が大きく乱れることから、ⅩⅢ層をも一部耕作土として撹拌する８世紀から９世紀中ごろの水田（第１面）を検出した。土質からⅪ層下部とⅫ層上部とが混合した水田撹拌土と考えることができる。また、西部遺跡Ⅱで検出した条里型水田はⅩⅢａ層上面での検出で、Ⅻ層土が直接覆うが、西部遺跡Ⅳの水田（第１面）がⅩⅢ層をも撹拌することから初期段階では併存した可能性があり、西部遺跡Ⅱの水田はⅫ層堆積後、廃棄したとも考えられる。なお、純層としてのⅫ層の分布は西部遺跡Ⅲにも及び、そこから出土した数少ない遺物は西部遺跡Ⅱの水田時期の下限を示すものとして、また、純層としてのⅫ層と撹拌されたⅫ層の分布は水田範囲の拡大・後退を示すものとして重要と考えられる。

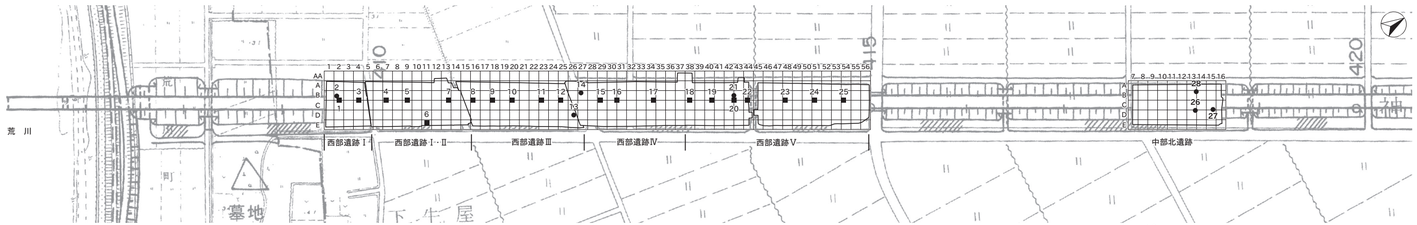
ⅩⅢ層は西部遺跡で遺物が出土した最下層となる。西部遺跡ⅡではⅩⅢ層の上部を分層したⅩⅢａ層から遺構･遺物を検出した。時期は遺物が少なく時期幅を広くとって７世紀後半から８世紀前半と推測し、打ち込みを基本とする杭群（一部建物を想定）を検出した。また、西部遺跡Ⅲでも杭群（SX4001・4002）を検出している。放射性炭素年代測定では西部遺跡Ⅱが cal AD654 ～ 761（SB3230-P5）、cal AD 664 ～ 766（SB3230-P6）、西部遺跡Ⅲは cal AD 660 ～ 780（SX4001）、cal AD 630 ～ 770（SX4002）で磐舟柵造営時期に近い年代である。ちなみに西部遺跡Ⅳで検出したⅫ層堆積後に打ち込んだ杭列は cal AD663 ～ 765（SA1001-②）、cal AD660 ～ 765（SA1002-⑦）、cal AD666 ～ 766（SA1003-⑨）で大きな時期差はなく、Ⅻ層が短時間に堆積したことを示している。標高の推移は後続時期の堆積土とおおむね同じで、起伏も目立つ。

弥生時代から縄文時代の土層

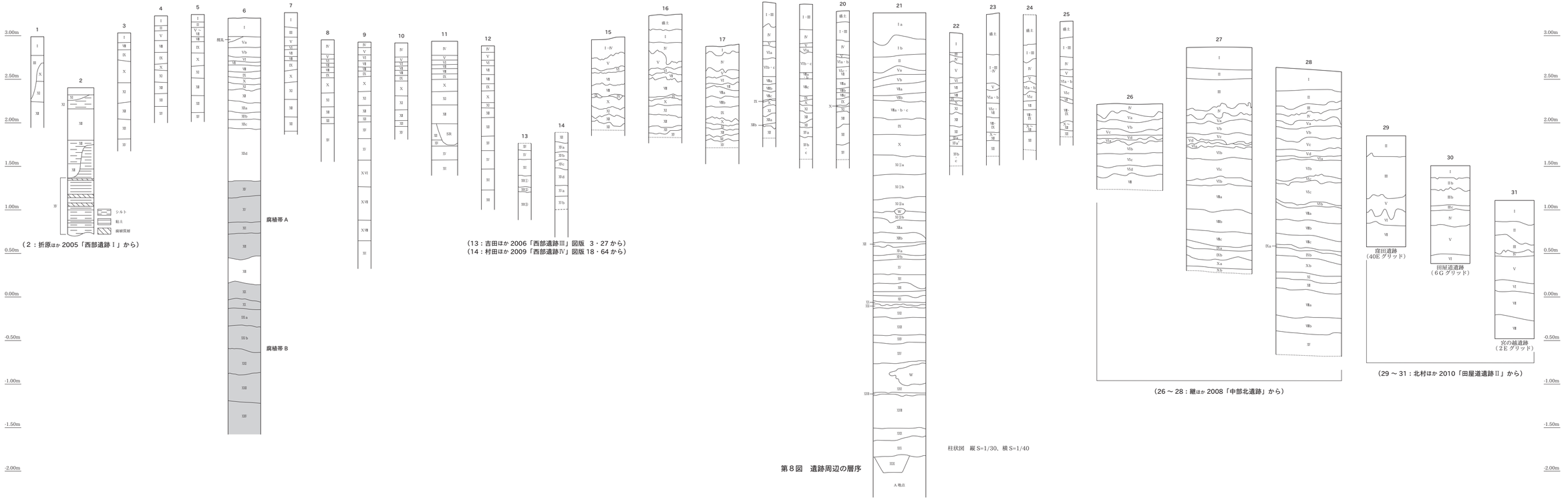
ⅩⅢ層の下位及び下層については、遺物が出土しないことから本遺跡の地山と判断され、各調査年度で共通した分層は行っていない。したがって土層観察及び層名に統一性がないが、青灰色を基本とする粘質シルトであるⅩⅢ層の下には、西部遺跡全体をとおしほぼ共通する特徴と層順を持つ腐植層（帯）が堆積している。腐植帯は灰色粘質土を挟みその上下（腐植帯Ａ、Ｂと仮称）に存在する。その特徴を西部遺跡Ⅱの深掘坑（柱状図６）で説明すると、腐植帯ＡはⅩⅢｄ層下からⅩⅣ層（黒褐色腐植土）、ⅩⅤ層（黒色腐植土）、ⅩⅥ層

（黄灰色シルト）、XⅦ層（黒褐色腐植土）と続き、XⅣ・XV層は腐植物と灰色粘質土のラミナ堆積であるがXV層は黒色に発色し、XⅣ層は褐色である。また、XⅦ層は未分解の腐植個体を多く含み褐色である。次のXⅦ層（灰色シルト）を挟み、下に腐植帯Bとしたものがある。XIX層（黒色腐植土）、XX層（黄灰色シルト）、XXⅠa層（黒色腐植土）と続き、その下（XXⅠb～XXV層）は植物の分解が進み黒色粘土化した土壌と灰色粘質土のラミナ状の互層となる。ここではXV～XⅦ層を腐植帯A、XIX～XXVを腐植帯Bとする。この腐植帯A及びBの特徴やそれぞれの層順は西部遺跡の北側（柱状図21）でも確認され、柱状図21のXI①a層、XI①b層、XI②aとXI②b層がそれぞれ柱状図6のXVI層、XV層、XⅦ層に対応する。中間地点の26・27区でも腐植帯A上半部の層順が確認され、柱状図13のXⅦ①層とXⅦ②層、XⅦ③層がそれぞれ柱状図6のXⅣ層、XV層に対応する。腐植帯Bは柱状図21のXⅡb層、XⅢ～XⅣb層がそれぞれ柱状図6のXIX層、XXIa層に対応し、その下は植物の分解が進み黒色粘土化した土壌と灰色粘質土のラミナ状の互層となり、腐植帯A・B間の間層としたXⅡa層も対応する可能性が高い。

年代を知るための放射性炭素年代測定では、腐植帯Aは柱状図6のXⅦ層相当層の腐植個体でcal BC1,260～1,125（1地点試料№23）［パリノ・サーヴェイ2005］、柱状図21のXI①b層でcal BC159～AD125（42・43B区 腐植帯A上部）、腐植帯Bは柱状図6のXIX層でcal BC2,617～2,488（11E8区 腐植帯B上部）、柱状図21のXⅢ層でcal BC2,462～2,065（42・43B区 腐植帯B上部）の値が得られ、腐植帯A・Bは弥生時代から縄文時代後期ごろに堆積した土壌の可能性がでてきた。このことから西部遺跡周辺は標高2m～－0.5mにかけてこの時期の堆積土が広がり、この地層は確認した標高から荒川（調査区の南側）に向かって傾斜しているものと推測される。さらに西部遺跡の外側に目を向けると、北方270mに縄文時代中期前葉から後期中葉の中部北遺跡［継ほか2008］（柱状図26～28）が存在する。縄文時代遺物包含層の下層は腐植帯Bの下層で特徴視される土壌（植物の分解が進み黒色粘土化した土壌と灰色粘質土のラミナ状の互層）が見られ、縄文時代遺物包含層の一部（Ⅵa層）を取り込むかたちで、その上位（Ⅴb～Ⅵa層）には腐植物層が堆積し、更に上のⅢ層からは9世紀後半から10世紀代の土器が出土した。縄文時代と古代の遺物が出土した層の位置や上下の層順から、中部北遺跡の腐植帯は西部遺跡の腐植帯A・Bが収束したかたちと見ることもできる。腐植帯の標高は更に高まり1.7～2mを測る。また、更に2～3km北に位置する窪田遺跡［前川ほか2007、北村2009］、田屋道遺跡［大島ほか2008、北村2010］、宮の越遺跡［大島ほか2008、北村2010］（柱状図29～31）では、地表下1.8m前後、標高にして1～0mに特徴的な黒色土層を確認している。これらの層の放射性炭素年代測定は窪田遺跡Ⅵ層がcal BC2,118～1,961、田屋道遺跡Ⅴ層がcal BC1,607～1,500、宮の越遺跡Ⅵ層がcal BC1,607～1,498で、いずれも縄文時代後期ごろに堆積した土壌の可能性が高い［パリノ・サーヴェイ2010］。中部遺跡の縄文時代遺物包含層の一部とその上の腐植帯に時期的には相当する。



平面図　S=1/4,000



（2：折原ほか 2005「西部遺跡Ⅰ」から）

（13：吉田ほか 2006「西部遺跡Ⅲ」図版　3・27から）
（14：村田ほか 2009「西部遺跡Ⅳ」図版 18・64から）

（26 ～ 28：継ほか 2008「中部北遺跡」から）

窟田遺跡
（40Eグリッド）

田屋道遺跡
（6Gグリッド）

（29 ～ 31：北村ほか 2010「田屋道遺跡Ⅱ」から）

柱状図　縦 S=1/30、横 S=1/40

第８図　遺跡周辺の層序

第Ⅳ章　遺　　構

1　基本方針

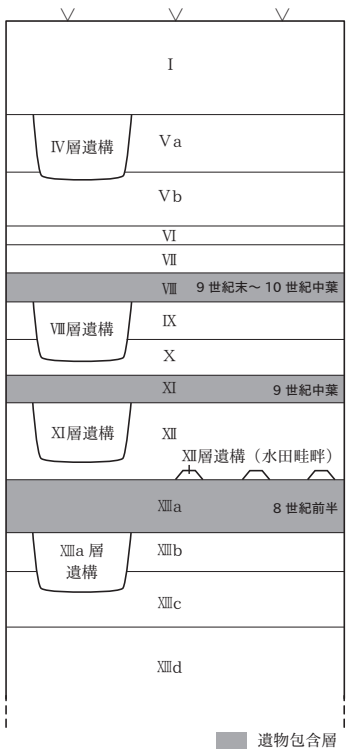
A　記述の方法

平成 17・18 年度に実施した西部遺跡の調査では、中世１面（Ⅴ層上面）、古代４面（Ⅸ・Ⅻ・ⅩⅢa・ⅩⅢb 層上面）から遺構を検出した。遺構検出面の直上にはそれぞれ当該期の遺物包含層を伴っており[1)]、各面から検出した遺構は、それぞれ直上の遺物包含層の層名を冠して「Ⅷ層遺構」、あるいは「Ⅷ層の遺構」、「Ⅷ層から検出した遺構」のように表記した。出土した遺物の取り扱いについても同様である。基本層序と検出した遺構との関係については第９図に示したとおりである。

中世では、Ⅴ層上面を遺構検出面とする時期（以下、「Ⅳ層」）の１時期、古代では、Ⅸ層上面を遺構検出面とし、その上のⅧ層を遺物包含層とする時期（以下、「Ⅷ層」）、Ⅻ層上面を遺構検出面とし、その上のⅪ層を遺物包含層とする時期（以下、「Ⅺ層」）、ⅩⅢａ層上面を遺構検出面とする時期（以下、「Ⅻ層」）、ⅩⅢｂ層上面を遺構検出面とし、その上のⅩⅢａ層を遺物包含層とする時期（以下、「ⅩⅢａ層」）の４時期が存在する。

発掘調査では上層から下層へ順次調査を行ったが、本書では遺構・遺物共に下層（古）から上層（新）の順で記述する。

遺構番号は、すべて通し番号とし、遺構種別の後に番号を付した。遺構種別は略称を用い、掘立柱建物を「SB」、鍛冶炉・地床炉を「SW」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝を「SD」、道路状遺構を「SF」、性格不明遺構を「SX」、ピットを「P」とした。水田と畦畔、水口は略称とせずそのまま用いた。



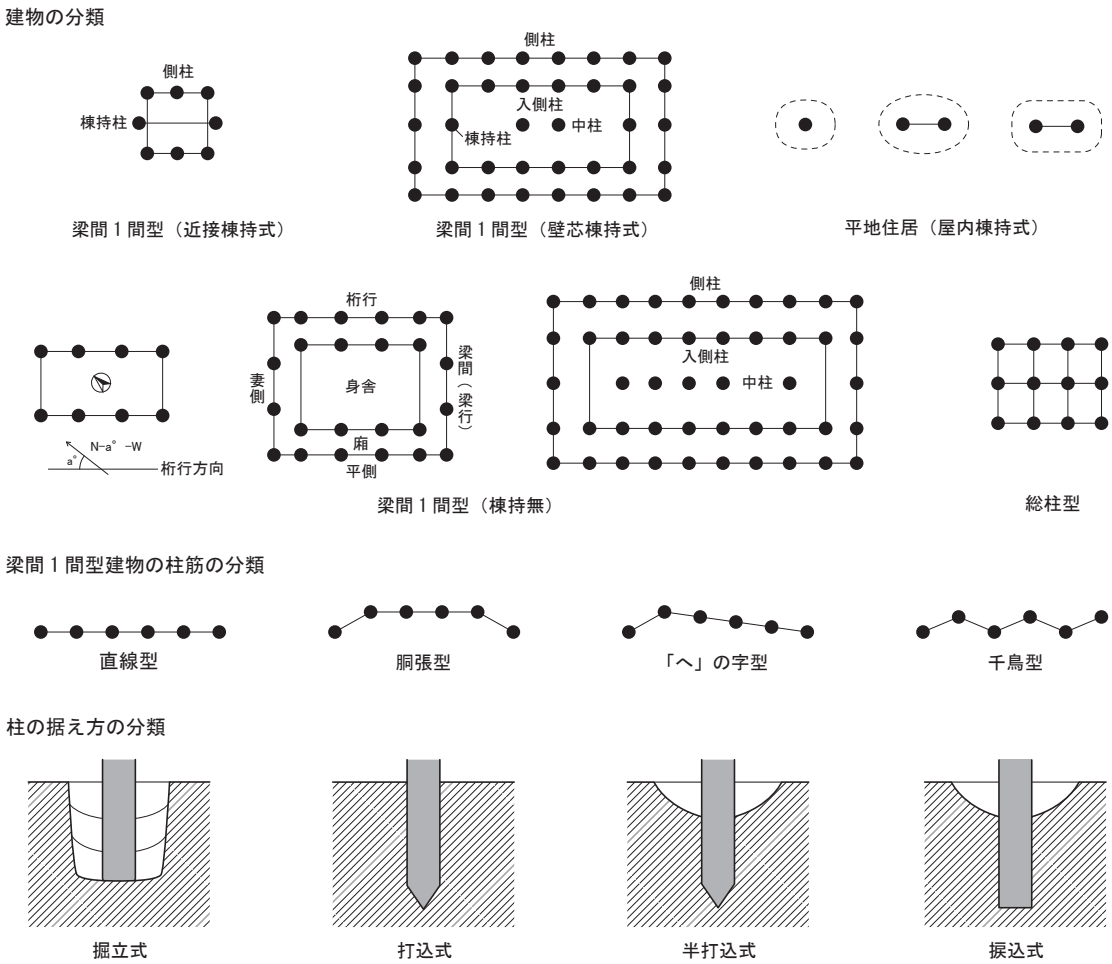
第９図　基本層序と遺構の概念図

また、西部遺跡は、いくつかの地点で既に調査が実施されており、「西部遺跡Ⅰ」［折原ほか 2005］、「西部遺跡Ⅲ」［吉田ほか 2006］、「西部遺跡Ⅳ」［村田ほか 2009］、「西部遺跡Ⅴ」［土本ほか 2008］として既に報告書が刊行されている。

B　掘立柱建物の分類と呼称

本遺跡から検出した掘立柱建物については、［宮本 2002、2003］の研究成果にしたがって第 10 図のように分類した。

1)　本地区ではⅣ層は検出されていないが（「第Ⅲ章 2B」参照）、ほかの層に倣い「Ⅳ層遺構」として取り扱った。
　また、ⅩⅢａ層上面から検出した水田については、直上のⅫ層は河川氾濫などを要因として堆積した水田被覆土であり遺物包含層ではないが、ここではほかの層に倣い「Ⅻ層遺構」として取り扱った。



第 10 図　掘立柱建物の分類

建物の分類

梁間１間型：在来型の建物で、梁間の広さとは無関係に建物本体（身舎）の梁間を１間とする形式である。棟持柱が有るものと無いものがある。建物の妻側中央に棟持柱が有る場合は、柱の立ち位置の違いから、柱筋の外側に接するように立つ柱を「近接棟持式」、柱筋の中央に立つ柱を「壁芯棟持式」とする。また、棟持柱が無いものは「棟持無」とする。

総　柱　型：側柱を直線で結んだすべての交点に中柱がある建物である。

平 地 住 居：屋内棟持式の簡素な建物である。

梁間１間型建物の柱筋の分類

梁間１間型の柱筋は直線的でないものが多い。ここでは、直線型、胴張型、「へ」の字型、千鳥型の４つに細分する。

柱の据え方の分類

柱の据え方には、１本ずつ柱穴を掘って柱を埋めて立てる「掘立式」、下端を尖らせた柱を直接地面に打ち込む「打込式」、地面をある程度掘り下げてから柱を打ち込む方法の「半打込式」と「捩込式」がある［宮本 2003］。打込式や半打込式、捩込式の柱は、主として柱の側面と地盤との間に働く周面摩擦力によって荷重を支えるいわゆる摩擦杭であり、主に低湿地など軟弱地盤で多用される工法である。

本書では、建物の総称として「掘立柱建物」の名称を用いるが、表記上の煩雑さを避けるため、柱の据

え方の違いにより、掘立式の建物を「掘立柱建物」、打込式の建物を「打込柱建物」、半打込式の建物を「半打込柱建物」、捩込式の建物を「捩込柱建物」と呼称する。

なお、大型の掘立柱建物であるSB1500（Ⅷ層遺構）からは、下端に「メド穴」が穿たれた柱が検出されている。メド穴とは、木材を運搬するためのロープを通す穴のことで、遠隔地から運ばれてきた一つの証となるものである。山から切り出した木材を曳いて運んだり、河川を使った運搬ではメド穴同士をロープで結んで筏にして流したりもするようである。

2　遺構各説

A　古　　代

1）概　　要

古代ではⅩⅢａ・ⅩⅡ・ⅩⅠ・Ⅷ層の４層から遺構を検出した。遺跡の性格は層ごとに異なり、ⅩⅢａ層は集落、ⅩⅡ層は水田、ⅩⅠ層は鍛冶工房を伴う集落、Ⅷ層は大型の複合工房群からなる生産の場である。各層の時期は、大まかにⅩⅢａ層が８世紀前半、ⅩⅡ層が８世紀後半から９世紀前半、ⅩⅠ層が９世紀中葉、Ⅷ層が９世紀末から10世紀中葉と想定している。

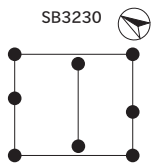
以下、本遺跡で最も古いⅩⅢａ層の遺構から順に説明を行う。

2）ⅩⅢａ層の遺構

ⅩⅢａ層では、掘立柱建物１棟、打込式の杭[1]を26基検出した。遺構は、調査区北東側を中心に分布しており、更に調査区外東側（山側）へ広がりを見せるものと推測される。検出した遺構は打込式の柱を持つ建物や杭だけで、土坑や溝などの遺構は検出されていない。

掘立柱建物

SB3230（図版２・４、207・208）



調査区東端の10D・E区に位置する。梁間１間型（近接棟持式）の打込柱建物で、平面形は梁間方向に長い長方形を呈する[2]。検出した８本の柱のうち、東西方向に相対するP4・８だけが根入れが浅く柱筋の内側に接するように立つことから、この２本を近接棟持柱と考え、同面を妻側と判断した。通常、近接棟持柱とされるものは妻側柱筋の外側に立つものが多いが、その理由は妻側面に架かる梁を避けることにある［宮本2002］。棟持柱が柱筋の内側に立つ本建物の場合も建築意図としては同じであると考えられることから、ここでは近接棟持式の一形態として理解しておきたい。平側柱筋は直線型である。建物の規模は、桁行２間(4.05m)、梁間１間(4.65m)で、建物面積は約18.83㎡、桁行方向はＮ－59°－Ｅを示す。柱には直径0.08m前後の細い芯持丸木材を用いており、いずれも下端を尖らせて直接地面に打ち込んでいる。ただし、P4だけは同じ太さの割

1）検出した杭は穴（掘形）を伴わないが、ここでは遺構名をピット（Ｐ）とした。
2）本文中に示した掘立柱建物の模式図は縮尺約1/300である。●印は柱穴、○印は柱穴があったと推定される位置、★印は鍛冶炉、網点は地床炉を示す。

材を用いている。根入れの深さはP4が0.33m、P8が0.12m、ほかは0.30～0.60mである。

建物に付属する施設は検出されていない。

遺物は、柱根だけで帰属時期を示すような遺物の出土はないが、建物直上の遺物包含層（Ⅻａ層）からは非ロクロ系の土師器甕・長甕などが出土している（図版101）。これらの遺物から見て、本建物は8世紀前半代を中心とする時期に機能していたものと考えられる。

なお、柱根の樹種同定を行ったところ、棟持柱としたP4がエゴノキ属、P8がコナラ属コナラ亜属コナラ節で、ほかはすべてニレ属であった。また、P5・6を試料として放射性炭素年代測定を行った結果、7世紀中葉から8世紀中葉という年代観が示されている（「第Ⅵ章1」参照）。

ピ　ッ　ト（図版2・3・6、207～210）

調査区北東側を中心に打込式の杭を26基検出した。いずれも下端を尖らせた芯持丸木材の杭を直接地面に打ち込んだものである。杭の直径は0.10m前後、根入れの深さは0.05～0.60mである。基本的に垂直を意図して打ち込んだものと思われるが、一部、斜めになって検出されたものがある。これらについては、間層であるⅫ層を重機で除去する際に杭の上端を引っ掛けてしまった可能性がある。

各ピットの規模などについては第22表（「第Ⅶ章1A」）に示したとおりである。

3）Ⅻ層の遺構

Ⅻ層からは、水田とこれに関連する溝1条を検出した。水田は、調査区南西側の約570㎡の範囲で検出したが、これ以外の場所では遺存状況が不良であったためか水田の痕跡は確認できなかった。

水　　田（図版7・8、212～214）

水田は、南北方向に伸びる大畦畔（畦畔3210）とその東側を区画する畦畔（畦畔3204～3206・3208・3209・3251・3252）からなる。

大畦畔は調査区南西側の5A・B、6・7A区に位置する。やや蛇行気味に南北方向へ伸びるもので、断面形は上面が崩れた台形状を呈する。規模は、下面幅0.80～1.70m、上面幅0.40～1.30m、高さ0.20～0.38mで、軸方向はN－1°－W前後を示す。

大畦畔を境に、その東側から東西・南北方向に伸びる小規模な畦畔を検出した。畦畔の規模は、下面幅が0.24～0.84m、上面幅が0.20～0.30m、高さ0.04～0.12mで、断面形は台形状を呈する。

水田は、畦畔によって区画された南北に細長い長方形のものを12枚検出した。水田はオリーブ灰色シルト層（Ⅻａ層）を造田したものであるが、作土と心土の境に一般的に見られる鉄分などの沈着・凝集がないことから、作土の層厚については明確に把握できなかった。

水口は、2号水田と6号水田の北東隅部からそれぞれ1か所検出した。2号水田では、水口の西側に溝（SD3207）が1条あり、平面的にも2号水田内にきれいに収まることから、水口と関連した何らかの遺構と考えられる。6号水田では、水口の西側から直径0.80m、深さ0.15mほどの不整形な浅いくぼみを検出した。東側に隣接する8号水田から水を引き入れた際に、水流によって田面が抉られたものと考えられる。なお、成因については不明であるが、深さ0.10mほどの同様の不整形な浅いくぼみは6号水田の中央と11号水田にも見られる。

稲作の検証のため、作土（Ⅻａ層）と被覆土（Ⅻ層）について植物珪酸体分析を行った。一般的に稲作の

判断基準となるイネ属機動細胞珪酸体含量は約 5,000 個 /g 以上とされているが、両層ともこの基準よりもかなり低い含量であった（「第Ⅵ章 1」参照）。畦畔の状況からも水田であることは明らかであるが、水田として耕作された期間は短かったものと推測される。

出土遺物がないことから耕作の時期は不明であるが、水田面の上下に位置するⅫａ層とⅪ層の時期から判断して、大まかに 8 世紀後半から 9 世紀前半の間に短期間営まれたものと推定される。

なお、本遺跡の北側に近接する西部遺跡Ⅳ・Ⅴからは、ほぼ同時期の水田が広範囲に検出されており、条理型地割に基づく方格地割が採用されていることが確認されている［土本ほか 2008、村田ほか 2009］。本遺跡から検出した大畦畔は、西部遺跡Ⅳで検出された大区画（一町四方）の地割りとおおむね合致するが、厳密には東側（山側）へ 5 m ほどずれが生じている。本遺跡の水田には、西部遺跡Ⅳとは異なる基準軸が適用されている可能性もある。

溝

SD3207（図版 7・8、213）

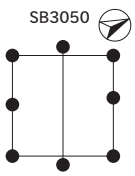
2 号水田北側の 6・7A 区に位置する。東西方向（N － 71° － W）に直線的に伸びる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 7.20m、上幅 1.20 ～ 1.60m、深さ 0.17 ～ 0.28m である。一部を SD3212・3123（Ⅺ層遺構）に切られる。溝内には砂混じりの灰色シルトと水田被覆土（Ⅻ層）が堆積する。水口との位置関係から水田に関連した遺構と考えられる。遺物は出土していない。

4）Ⅺ層の遺構

Ⅺ層では、掘立柱建物 5 棟、鍛冶炉 1 基、地床炉 6 基、井戸 1 基、土坑 25 基、性格不明遺構 1 基、溝 25 条、道路状遺構[1] 1 条、ピット 58 基を検出した。遺構は、調査区南側を中心に分布している。建物は南側にまとまって 4 棟あり、桁行方向が一致する SB3100 と SB3200、SB3050 と SB3201 がそれぞれ同時期の建物としてセット関係になっている可能性がある。柱の据え方は、前者の SB3200 が掘込式、後者の SB3050 が掘立式であることが確認されており、立地する地盤環境の変化に伴って、低湿な軟弱地盤で多用される掘込式の柱から通常の掘立式の柱へと工法が変化している可能性が考えられる。また、これらの一群から北東側に少し離れて鍛冶工房である SB3030 が位置している。

掘立柱建物

SB3050（図版 11・13、216・217）



調査区南側の 8B・C 区に位置する。梁間 1 間型（近接棟持式）の掘立柱建物で、平面形はほぼ方形を呈する。東・西側柱筋の外側に接するようにして立つ P2・6 の 2 本を近接棟持柱と考え、同面を妻側と判断した。平側柱筋は胴張り型若しくは「へ」の字型である。建物の規模は、桁行 2 間（4.00m）、梁間 1 間（3.75m）で、建物面積は約 15.00㎡、桁行方向は N － 70° － W を示す。柱穴の掘形は、平面形が円形で断面形は逆台形状あるいは「U」字状を呈する。規模は、直径 0.30 ～ 0.66m、深さ 0.27 ～ 0.51m で、柱痕跡の直径は 0.10m である。遺物は、P1 から土師器小甕の破片 2 点、鉄滓の破片数点が出土している。

1）SF3202 とした道跡と考えられる帯状の硬化面を検出したが、道路に限定できないことからこの用語とした。

本建物に付属する遺構としてSD3052がある。SD3052は建物の北側に平行して伸びる溝である。片側だけの検出であるが、建物の平側を区画する溝と考えられる。北側の柱筋と溝の中心線との間隔は0.90～1.10mである。

ほかに建物内にはSK3085、P3054が位置するが、いずれも遺構の切り合いはなく、建物との関係については不明である。

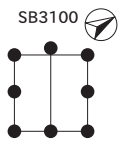
【SB3050関連遺構】

SD3052（図版11・13、217）　8B・C区に位置する。SB3050の北側に併走する区画溝である。直線的に伸びるもので、断面形は弧状を呈する。規模は、長さ6.00m、上幅0.42～0.56m、深さ0.30mで、軸方向はN－70°－Wを示す。覆土は2層に分層した。遺物は、1層から須恵器有台杯・杯蓋の破片が少量出土している。このうち杯蓋のつまみ部には判読不明の墨書が確認されている（図版102）。

SK3085（図版11・18）　8B22・23区に位置する。SB3050内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径1.61m、短径1.14m、深さ0.16mである。覆土は2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕の破片数点が出土している。

SB3100（図版11・13、216～218）

調査区南側の7C区に位置する。梁間1間型（近接棟持式）の掘込あるいは半打込柱建物で、平面形はほぼ方形を呈する。西側柱筋の外側に接するようにして立つP6と東側の相対する位置にあるP2の2本を棟持柱と考え、同面を妻側と判断した。平側柱筋は直線型である。建物の規模は、桁行2間（3.00m）、梁間1間（2.95m）で、建物面積は約8.85㎡、桁行方向はN－60°－Wを示す。柱穴の掘形は、平面形が円形で、断面形は「V」字状あるいは漏斗状である。柱根は遺存しないが、掘形の形状や柱痕跡から見て掘込式あるいは半打込式の柱であったと考えられる。規模は、直径0.25～0.52m、深さ0.31～0.53mで、柱痕跡の直径は0.10m前後である。SD3045と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。



本建物に付属する遺構としてSD3088がある。SD3088は建物の西側から北側にかけて「L」字状に伸びる溝である。浅く輪郭が不鮮明な遺構であるが、建物を区画する溝と考えられる。西・北側の柱筋と溝の中心線との間隔は1.05～1.35mである。

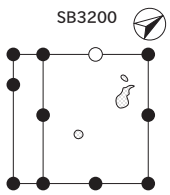
ほかに建物内にはSK3044、P3095・3078が位置するが、いずれも遺構の切り合いはなく、建物との関係については不明である。

【SB3100関連遺構】

SD3088（図版11・13、218）　7C区に位置する。SB3100の西・北側に併走する区画溝である。「L」字状に伸びるもので、断面形は浅い弧状である。規模は、長さ6.00m、上幅0.25～0.61m、深さ0.10mである。覆土は灰色シルトの単層である。SK3046と重複してこれに切られる。遺物は、覆土中から須恵器瓶の破片1点が出土している。

SK3044（図版11・17、218）　7C8区に位置する。SB3100内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は「V」字状である。規模は、長径0.74m、短径0.51m、深さ0.15mである。覆土は3層に分層した。P3095と重複して本土坑がこれを切るが、SD3045との切り合い関係は不明である。遺物は出土していない。

SB3200（図版 10・14、219・220）



調査区南側の 6B・C 区に位置する。廂が 1 面付く梁間 1 間型（壁芯棟持式）の掘込柱建物である。東・西側柱筋の中央に立つ P2・（P6）の 2 本を壁芯棟持柱と考え、同面を妻側と判断した。建物の規模は、身舎が桁行 2 間（5.15m）、梁間 1 間（4.15m）で、南側に廂が 1 間（1.28m）付く。建物面積は約 27.96㎡、桁行方向は N － 60° － W を示す。身舎の平側柱筋は胴張り型若しくは「へ」の字型である。柱の掘形は、平面形が円形で、断面形は漏斗状あるいは「U」字状である。規模は、直径 0.23 ～ 0.55m、深さ 0.21 ～ 0.96m で、柱根・柱痕跡の直径は 0.11m 前後である。唯一、柱根が遺存していたのは P4 で、根入れの深さは 0.96m と深い。ほかの柱穴には柱根は遺存しないが、建物の廃絶・解体時に柱が抜き取られたものと考えられる。現状では柱の抜き取り痕はほとんど見えないが、柱が抜き取られた後、周囲の土圧によって穴が塞がっている可能性がある。なお、P4 の柱根（41）は、腐蝕して細部は不明であるが下側は平坦に加工している。漏斗状を呈する各柱穴の断面形状から、ある程度掘り下げてから下端を尖らせた柱を打ち込む半打込式の柱据え方を想定したが、P4 の柱根を見る限り下端は平坦なままであることから掘込式の方法をとったものと考えられる。また、建物の床面には、範囲は不明瞭ながら 0.10m ほどの層厚でシルトブロック混じりの暗灰黄色シルトからなる貼り床状の盛土が確認されている。SD3093 を切るが、SK3086 との新旧関係は不明である。

遺物は、P3 から須恵器無台杯・折縁杯の破片が数点出土している（図版 102）。

なお、柱根の樹種同定を行ったところ、P4 はクリであった。

本建物に付属する遺構として SD3072・3102、SW3094・3196 がある。SD3072 と SD3102 は建物を挟んで南北に平行して位置しており、建物の平側を区画する溝と考えられる。南側の柱筋と SD3072 の中心線との間隔は 1.20 ～ 1.40m、北側の柱筋と SD3102 の中心線との間隔は 1.20 ～ 1.30m である。SW3094・3196 は地床炉である。

ほかに建物内には SK3091・3163・3193・3195、SD3185、P3107・3137・3186・3187・3188・3189・3215 が位置するが、いずれも遺構の切り合いはなく、建物との関係については不明である。

【SB3200 関連遺構】

SD3072（図版 7・10・14、220・227）　6B・C 区に位置する。SB3200 の南側に併走する区画溝である。直線的に伸びるもので、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 5.40m 以上、上幅 0.66 ～ 0.83m、深さ 0.30m で、軸方向は N－60°－W を示す。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器無台杯・有台杯、灰釉陶器の破片が少量出土している（図版 102）。

SD3102（図版 7・10・11・14、220）　6B・C 区に位置する。SB3200 の北側に併走する区画溝である。直線的に伸びるもので、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 5.16m、上幅 0.65 ～ 0.95m、深さ 0.29m で、軸方向は N － 60° － W を示す。SD3093 と重複してこれを切る。覆土は 4 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、須恵器無台杯の破片が数点出土したほか、烏帽子または圭冠と見られる漆製品（44）が 1 点出土している（図版 329・334）。

SW3094（図版 10・14、220）　6B23・24 区に位置する。SB3200 内にある地床炉である。床面に被熱痕を確認したもので掘り込みはない。平面形は不整形で、大きく 2 か所に分かれる。全体の規模は、長径 3.00m、短径 2.30m である。P3215 と重複してこれに切られる。遺物は出土していない。

SW3196（図版 10・14、220）　6C3 区に位置する。SB3200 内にある地床炉である。床面に被熱痕を確

認したもので掘り込みはない。平面形は円形である。規模は、長径 0.38m、短径 0.38m である。遺物は出土していない。

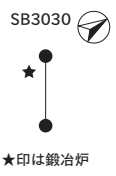
SK3091（図版 10・14、220）　6B22・23、6C2・3 区に位置する。SB3200 内にある土坑である。調査のための暗渠排水溝によって切られており全貌は不明である。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.90m 以上、深さ 0.05 ～ 0.20m ほどで、比較的大型の浅い土坑である。底面には凹凸が目立つ。覆土は、主にシルトブロックや焼土などの混入物の違いから 8 層に分層した。人為的な埋土と思われる。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕、須恵器杯蓋の破片が少量出土している（図版 102）。

SK3163（図版 10・19、221）　6C2・3・7・8 区に位置する。SB3200 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.55m、短径 0.55m、深さ 0.08m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕、須恵器無台杯・蓋の破片が少量出土している（図版 104）。

SK3193（図版 10・20）　6C7 区に位置する。SB3200 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.47m、短径 0.45m、深さ 0.07m である。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は、覆土中から鉄滓の破片が 1 点出土している。

SK3195（図版 10・20）　6C3 区に位置する。SB3200 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.40m、短径 0.31m、深さ 0.07m である。覆土は焼土ブロックや灰を含む灰色シルトの単層である。遺物は、覆土中から土師器小甕の破片が 1 点出土している。

SB3030 [1]（図版 12・15、222）



調査区東側の 11D 区に位置する。平地式の鍛冶工房である。周囲を SD3029 と SD3042 によって区画されている。建物の柱穴として、P3132 と P3135 の 2 基を検出した。両柱穴は区画内の中央やや東寄りの位置に 2.70m の柱間を持って配される。掘立式である。柱の掘形は、平面形が円形で、断面形は「U」字状である。規模は、P3132 が直径 0.46m、深さ 0.35m、P3135 が直径 0.42m、深さ 0.27m である。共に直径 0.20m ほどの柱痕跡が確認されている。両柱穴を通した軸方向は N － 55° － W を示す。本工房の建物は、この 2 本の柱に横材（棟木）を架け渡して造る伏屋式の平地建物（屋内棟持式）であったと考えられる。両柱穴の周囲には平面長方形を呈する貼り床状の硬化面が広がっており、その規模は長径 4.95m、短径 3.80m である。

西側に鍛冶炉 1 基（SW3126）、その東隣に鉄滓が充填された土坑 1 基（SK3128）を検出した。また、その北隣には地床炉 1 基（SW3113）があるが、床面に被熱痕が確認されただけで、その用途や成因については不明である。層厚が薄く記録には残せなかったが、床面上には炭化粒と灰からなる薄い層が間層を挟んで 2 層堆積していたことから、本工房は焼失し廃絶したか、あるいは、解体後の廃材をその場で焼却しているものと考えられる。

遺物は、床面付近から土師器甕・小甕、須恵器無台杯、墨書土器など約 260 点出土している。大半が破片での出土であるが、このうち完形に近い須恵器無台杯 2 点（55・56）については床面上に正位で重ねて置いたような状態で出土している（図版 103）。ほかに微細遺物として鍛造剝片 5 点、粒状滓 3 点、鉄滓破片 37 点、鉄器表面破片 30 点などが出土している。

1）掘立柱建物（SB）として取り扱った。現地調査の段階では、一般的な方形配列の柱穴を持たない鍛冶工房であることから SX3030 と呼称した。調査資料は SX3030 の名称で記録している。

ほかに工房内には、SK3127・3129・3134、P3117 ～ 3119・3155 ～ 3157・3160 ～ 3162・3166・3167 が位置するが、いずれも本工房との関係については不明である。

【SB3030 関連遺構】

SD3029（図版 12・15、222） 11D・E 区に位置する。SB3030 の北側に併走する区画溝である。直線的に伸びるもので、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 11.21m、上幅 0.64 ～ 1.54m、深さ 0.36m で、軸方向は N － 57° － W を示す。覆土は 3 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕、須恵器無台杯・甕・瓶、砥石などの破片を中心に約 120 点出土したほか、微細遺物として鉄滓 2 点、鉄滓破片 29 点、鉄器表面破片 2 点が出土している（図版 103）。

SD3042（図版 12・15） 10・11D 区に位置する。SB3030 の南側を併走する区画溝である。「コ」の字状に伸びるもので、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 12.69m、上幅 0.48 ～ 1.46m、深さ 0.29m である。覆土は 2 層に分層した。なお、南東隅部（10D25 区）の底面からは多量の炭化粒とともに須恵器無台杯 2 点（65・66）が投棄された状態で出土している。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕、須恵器無台杯・有台杯・甕、墨書土器、磨石などの破片を中心に約 50 点出土したほか、微細遺物として鉄滓破片 13 点、鉄器表面破片 2 点が出土している（図版 103・104）。

SW3126（図版 12・15、222） 11D6 区に位置する。SB3030 内にある鍛冶炉である。炉の上部は遺存しない。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.45m、短径 0.33m、深さ 0.05m である。炉の北側に羽口の装着痕を 1 か所検出したが、羽口そのものは出土していない。工房である SB3030 を廃絶する前に、意図的に鍛冶炉上部を壊して羽口を抜き取っている可能性が考えられる。覆土は炭化物と鉄滓を多量に含む黒色土の単層である。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓の破片 2 点（71・72）のほか、微細遺物として鍛造剝片 590 点、粒状滓 68 点、粒状の滓 41 点、鉄滓・鉄滓破片 2,720 点、鉄器表面破片 295 点が出土している（図版 104）。

SW3113（図版 12・15、223） 11D8・9・13・14 区に位置する。SB3030 内にある地床炉である。床面に被熱痕を検出したもので掘り込みはない。平面形は楕円形である。規模は、長径 0.36m、短径 0.21m である。鍛冶炉である SW3126 の北東隣に位置することから、鍛冶作業に伴って被熱した可能性もあるが、位置的に鞴座に近いこともあり、その成因については判然としない。遺物は出土していない。

SK3127（図版 12・15・19、223） 11D11 区に位置する。SB3030 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.78m、短径 0.59m、深さ 0.14m である。覆土は灰色シルト質土の単層である。長軸方向が SB3030 の桁行方向と一致しないこと、覆土の汚れがなくきれいであることなどから、SB3030 とは時期が異なるものと思われる。遺物は、覆土中から微細遺物として炭化米が 2 点出土している。

SK3128（図版 12・15、222） 11D6 区に位置する。SB3030 内にある土坑である。鍛冶炉 SW3126 の東隣に位置するもので、土坑内に鉄滓が充填されたような状況で検出された。鍛冶炉に伴って設置された廃滓入れ用の穴と考えられる。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.42m、短径 0.40 m、深さ 0.10m である。覆土はおびただしい量の鉄滓を含むオリーブ褐色土の単層である。遺物は、鉄滓のほか椀形鍛冶滓の破片 1 点（73）、微細遺物として鍛造剝片約 7,000 点、粒状滓 18 点、粒状の滓 14 点、鉄滓・鉄滓破片約 7,000 点、鉄器表面破片 1,193 点、炭化米 17 点が覆土から出土している（図版 104）。

SK3129（図版 12・15・19、223） 11D12 区に位置する。SB3030 内にある土坑である。平面形は不整形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.10m、短径 0.45m、深さ 0.15m である。軸方向はお

おむねSB3030の主軸方向と一致する。覆土は灰色シルト質土の単層である。遺物は、覆土中から微細遺物として鉄滓破片、鉄器表面破片が数点出土している。

SK3134（図版12･15･19､223）　11D12区に位置する。SB3030内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径0.84m、短径0.39m、深さ0.15mである。長軸方向はSB3030の桁行方向と一致しない。覆土は炭化物を多量に含む灰色砂質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器小甕、須恵器無台杯の破片数点のほか、微細遺物として鍛造剝片、鉄滓破片、鉄器表面破片が数点出土している。

SB3201 [1]（図版10・16、219）

調査区南西側の5・6B区に位置する。SD3090とSD3121に挟まれた一辺5.20mほどの範囲である。東隣にあるSB3200と区画溝や地床炉などの状況が近似することから、同様の建物である可能性を踏まえて調査を行ったが、同地区はⅧ層遺構やⅣ層遺構が密集して切り合っており、残念ながら建物の柱穴は検出できなかった。断片的な検出で記録には残せなかったが、本遺構には、砂粒とシルトブロックが混ざった灰色シルトからなる貼り床状の薄い盛土が確認されている。床面には地床炉が2基あり、区画溝と考えられるSD3090とSD3121からも一定量の遺物の出土が見られることから、本来、本遺構には建物が存在したものと推測される。なお、本遺構内で検出されたP3149・3150の2基のピットについては、規模が小さく位置的にも中途半端であることから建物を構成する柱穴とはしなかった。

本遺構に付属する遺構としてSD3090・3121、SW1633・1634がある。SD3090とSD3121は本遺構を挟んで南北に平行して位置しており、建物を区画する溝と考えられる。SW1633・1634は地床炉である。

ほかに本遺構内にはSK1638・1664、P3149・3150が位置するが、いずれも遺構の切り合いはなく、本遺構との関係については不明である。

【SB3201 関連遺構】

SD3090（図版10・16、221・227）　6A・B区に位置する。SB3201の北側に併走する区画溝である。直線的に伸びるもので、断面形は逆台形状である。規模は、長さ6.69m、上幅1.13m、深さ0.29mで、軸方向はN－67°－Wを示す。西側でSD3203と重複するが新旧関係は不明である。覆土は3層に分層した。遺物は、最下層の3層を中心に溝の中央と東端付近に偏在している。土師器無台椀･鍋･甕･小甕、須恵器無台杯、墨書土器、漆器椀などの破片が約100点出土している（図版102、334）。

SD3121（図版10・16、221・227）　5A・B区に位置する。SB3201の南側に併走する区画溝である。直線的に伸びるもので､断面形は逆台形状である。規模は､長さ6.10m､上幅0.36～1.10m､深さ0.33mで、軸方向はN－67°－Wを示す。覆土は3層に分層した。遺物は、主に2層から土師器無台椀・甕、須恵器無台杯・甕、墨書土器などの破片が約30点出土している（図版102）。

SW1633（図版10・16、221）　6B6区に位置する。SB3201内にある地床炉である。床面に被熱痕を検出したもので掘り込みはない。平面形は円形である。規模は、長径0.59m、短径0.48mである。遺物は出土していない。

SW1634（図版10・16、221）　5B10区に位置する。SB3201内にある地床炉である。床面に被熱痕を

1）掘立柱建物（SB）として取り扱った。現地調査の段階では、建物の柱穴が検出できなかったことからSX3201と呼称した。調査資料はSX3201の名称で記録している。

検出したもので掘り込みはない。平面形は円形である。規模は、長径 0.65m、短径 0.53m である。遺物は出土していない。

SK1638（図版 10・16・17、221）　5B10、6B6 区に位置に位置する。SB3201 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.02m、短径 0.93m、深さ 0.37m である。覆土は 2 層に分層した。SW1633・1634 に両脇から挟まれる位置にあるが、覆土中には焼土や炭化粒の混入がないことから、両地床炉とは時期差があるものと思われる。遺物は出土していない。

SK1664（図版 10･16･17）　6B1･2･6･7 区に位置する。SB3201 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.38m、短径 0.31m、深さ 0.10m である。覆土は黄灰色土の単層である。遺物は出土していない。

地　床　炉

SW3070（図版 10・17、223）

6B12・17 区に位置する。底面から壁面にかけて被熱痕が残る。覆土は 2 層に分層した。2 層上面が火床面と思われ、2 層は被熱により硬く焼けてしまっている。北側を調査のための暗渠排水溝に切られ全貌は不明であるが、断面形は浅い弧状である。規模は、長径 0.42m、短径 0.21m 以上、深さ 0.15m である。SB3200 と SB3201 の間に位置するが、両建物との関係は不明である。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕、須恵器瓶の破片が少量出土している（図版 104）。

井　　戸

SE3220（図版 11・17、223）

7C17・18・22・23 区に位置する。平面形は円形で、断面形は不整な袋状である。内部施設は検出されていない。規模は、長径 1.25m、短径 1.20m、深さ 0.70m である。底面はⅫ層に達している。覆土は 16 層に分層した。このうち、中央に厚く堆積する 1・9 層はしまりがやや弱く、本来、井戸側などの内部施設が設置されていた可能性がある。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器無台杯・折縁杯などの破片が 7 点出土している。

土　　坑

SK1639（図版 10・17、223・224）

6B11 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅い逆台形状である。規模は、長径 1.25m、短径 1.09m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SK1665（図版 10・17）

6B7・12 区に位置する。北側を調査のための暗渠排水溝に切られ全貌は不明である。断面形は弧状である。規模は、長径 1.00m、短径 0.65m 以上、深さ 0.15m である。SD3090 と重複してこれを切る。覆土は暗灰黄色土の単層である。遺物は、覆土中から土師器小甕の破片が数点出土している。

SK3040（図版 17、224）

14D8 区に位置する。東側を SD2127（Ⅷ層遺構）に切られ全貌は不明であるが、平面形はやや不整な楕円形と推定され、断面形は弧状である。規模は、長径 0.80m 以上、短径 0.90m、深さ 0.25m である。覆土は 4 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕の破片が 1 点出土している。

SK3046（図版 11・13・18、224）

7C4 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.24m、短径 0.95m、深さ 0.37m である。SD3088 と重複してこれを切る。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台杯･小甕の破片数点のほか､用途不明の石製品 1 点が出土している（図版 104)。石製品（75）は底部付近からの出土である。

SK3049（図版 10・18）

6D2 区に位置する。北東側を SE1388（Ⅷ層遺構）に切られ全貌は不明である。平面形は楕円形で、断面形は浅い弧状である。規模は、長径 1.20m、短径 0.92m、深さ 0.11m である。覆土は 2 層に分層でき、1 層には焼土ブロックや炭化粒の混入が見られる。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、砥石の破片が数点出土している（図版 104)。

SK3065（図版 11・18、224）

7C19・24、7D4 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 2.68m、短径 2.02m、深さ 0.56m である。覆土は 3 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕の破片が 1 点出土している。

SK3086（図版 10・18、224）

6B18・19 区に位置する。平面形は長楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 2.54m、短径 0.41m、深さ 0.10m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SK3104（図版 10・19、224・225）

6C6・7・11・12 区に位置する。平面形は楕円形で、南側が一部張り出す。断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.01m、短径 0.74m、深さ 0.36m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕の破片が 1 点出土している。

SK3124（図版 10・19、225）

6A7 区に位置する。平面形は長楕円形で、断面形は半円状である。規模は、長径 1.51m、短径 0.49m、深さ 0.18m である。覆土は 3 層に分層でき、このうち、2 層には焼土ブロックと炭化粒の混入が見られる。遺物は、覆土中から土師器甕の破片が 2 点出土している。

SK3153（図版 11・19、225）

7C15、8C11 区に位置する。平面形は円形で、断面形は不整な半円状である。規模は、長径 1.13m、短径 1.04m、深さ 0.40m である。覆土は 3 層に分層した。遺物は出土していない。

SK3154（図版 11・19、225）

7D10、8D6 区に位置する。SD2127（Ⅷ層遺構）に切られ、全貌は不明である。平面形は円形で、断面形は「U」字状である。規模は、長径 0.67m 以上、短径 0.60m 以上、深さ 0.46m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SK3177（図版 10・19）

6C6 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.53m、短径 0.34m、深さ 0.06m である。SD3072 と重複するが新旧関係は不明である。覆土は 3 層に分層したが、小ピット状を呈する 3 層は別遺構の可能性もある。1・2 層には焼土や灰の混入が見られる。遺物は、覆土中から鉄滓破片が少量出土している。

SK3180（図版 11・20）

8D7 区に位置する。西側を SD2127（Ⅷ層遺構）に切られ全貌は不明である。平面形は長方形と推定され、断面形は浅く不整な弧状である。規模は、長径 1.00m 以上、短径 0.83m、深さ 0.11m である。覆土は暗オリーブ灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

性格不明遺構

SX3199（図版 11・20、225）

8C 区に位置する。不整形な硬化範囲を検出した。規模は、長径 1.92m、短径 1.53m である。硬化範囲には炭化粒などの汚れが表面に散っており、踏みしめたかのような様相を呈している。建物の床面である可能性を考慮して精査したが、柱穴などは検出されなかった。本遺構の北隣には区画するように伸びる SD3053 が位置するが、本遺構との関連については不明である。遺物は出土していない。

溝

SD3045（図版 11・20、226）

7C 区に位置する。北西 - 南東方向（N - 69° - W）に伸びる短い溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ 1.84m 以上、上幅 0.29 ～ 0.83m、深さ 0.13m で、SB3100、SK3044 と重複するが新旧関係は不明である。覆土は 2 層に分けた。遺物は、覆土中から須恵器有台杯の破片が 1 点出土している。

SD3051（図版 10 ～ 12・20、226）

5D、6C・D、7B・C、8・9A・B、10A 区に位置する。南北方向（N - 5° - W）に伸びる大規模な溝で、断面形は弧状である。調査区南側を斜めに横断するかたちで検出されている。おおむね直線的に伸びるが、SB3100 付近で、これを迂回するように緩やかなカーブを描いている。規模は、長さ 66.5m 以上、上幅 0.85 ～ 1.65m、深さ 0.35m である。底部の標高は 2.25m 前後でほぼ一定しており、特定方向への傾斜は認められないが、SB3100 と SB3200 に挟まれたか所（7C 区付近）だけはほかよりも 0.10m ほど深くなっている。覆土は 4 層に分けた。1 ～ 3 層は混入物の少ない灰色シルトを基調とするが、最下層に堆積する 4 層だけは砂質土である。また、南端の延長上には、西部遺跡 I で土坑として調査された SK1065・1066・1071 があるが、平面的な位置及び底部の標高や覆土などの状況から、本溝の一部である可能性が考えられる。遺物は、南側（6C・D 区）を中心に覆土中から土師器甕・小甕、須恵器無台杯・甕・瓶、砥石、磨石などの破片を中心に約 35 点出土している（図版 104）。

SD3053（図版 11・20、226）

8C・D 区に位置する。北西 - 南東方向（N - 58° - W）へ直線的に伸びる溝で、南東側は SD2127（Ⅷ層遺構）に切られて失われている。断面形は弧状を呈する。規模は、長さ 7.98m 以上、上幅 0.62 ～ 0.94m、深さ 0.29m である。本溝の南側には隣接して SX3199 が位置するが、両遺構の関係については不明である。覆土は 3 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕の破片が数点出土したほか、微細遺物として鉄器表面破片 3 点、炭化米 17 点が出土している。

SD3071（図版 10・21、227）

5B・C 区に位置する。北西 - 南東方向（N - 44° - W）に直線的に伸びる溝で、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 8.60m 以上、上幅 0.28 ～ 0.50m、深さ 0.23m である。底部の標高は 2.50m 前後でほぼ一定しており、特定方向への傾斜は認められない。SD3192 と重複してこれを切る。南東側の延長上に

は、西部遺跡Ⅰで土坑として調査されたSK1059があるが、本溝と同一の遺構である可能性も考えられる。覆土は3層に分層した。1･2層にはシルトブロックが混入する。遺物は、覆土中から土師器甕･小甕、須恵器杯蓋の破片が数点出土している。

なお、本溝とSD3115・3116・3120・3212は、ほぼ平行して構築されている。覆土中にシルトブロックを混入するものも多く、これらの溝は、畑作溝である可能性も考えられる。

SD3092（図版10・11・14・21、227）

6B・C区に位置する。北西 - 南東方向（N - 60° - W）に伸びる溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ6.16m、上幅0.31 ～ 0.48m、深さ0.10mである。覆土は2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕の破片が各1点出土している。

SD3093（図版10・11・14・21、220・227）

6C区に位置する。北東 - 南西方向（N - 40° - E）に伸びる溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ3.50m以上、上幅0.41 ～ 0.64m、深さ0.09mである。覆土は2層に分層した。遺構の新旧関係は、SD3103を切り、SB3200やSD3102に切られる。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕の破片が各1点出土している。

SD3103（図版10・21）

6C区に位置する。南北方向(N - 15° - E)に伸びる溝で､断面形は弧状である。規模は､長さ1.40m以上、上幅0.11 ～ 0.16m､深さ0.06mである。SD3093と重複して切られる。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD3115（図版10・21、227）

5B・C区に位置する。北西 - 南東方向（N - 50° - W）に伸びる溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ3.77m、上幅0.17 ～ 0.42m、深さ0.08mである。覆土は2層に分層し、2層にはシルトブロックが混入する。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器無台杯・瓶の破片が少量出土している。

SD3116（図版10・21、227）

5B･C区に位置する。北西 - 南東方向（N - 50° - W）に伸びる溝で、断面形は半円状である。規模は、長さ4.54m、上幅0.30 ～ 0.49m、深さ0.19mである。覆土は2層に分層した。1・2層にシルトブロックが混入する。遺物は出土していない。

SD3120（図版10・21、227・228）

5B・C区に位置する。北西 - 南東方向（N - 45° - W）に伸びる溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ6.86m以上、上幅0.30 ～ 0.46m、深さ0.12mである。北西端はSD3121に切られる。南東の延長上には西部遺跡Ⅰで調査したSD1054があり、同一の遺構である可能性も考えられる。覆土は2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器甕・小甕の破片が8点出土している。

SD3123（図版10・21、228）

6A区に位置する。北西 - 南東方向（N - 56° - W）に伸びる溝で、断面形は逆台形状である。規模は、長さ8.71m以上、上幅0.54 ～ 0.68m、深さ0.28mである。覆土は3層に分層した。遺物は、2層から須恵器無台杯の破片が1点（81）出土している（図版104)。

SD3181（図版11・21、228）

9C区に位置する。北西 - 南東方向（N - 60° - W）に伸びる溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ1.15m、上幅0.31 ～ 0.35m、深さ0.10mである。覆土は砂粒を含む灰色シルトの単層である。遺物

は出土していない。

SD3182（図版 10・11・21）

7C 区に位置する。南北方向（N － 0° － W）に伸びる溝で、断面形は弧状である。規模は、長さ 1.49m、上幅 0.35 ～ 0.44m、深さ 0.19m である。覆土は 3 層に分層した。遺物は出土していない。

SD3185（図版 10・14、220）

6B 区に位置する。北西 － 南東方向（N － 60° － W）に伸びる溝で、断面形は「V」字状である。規模は、長さ 1.06m 以上、上幅 0.09 ～ 0.14m、深さ 0.12m である。覆土は褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD3192（図版 10・21）

5C 区に位置する。北西 － 南東方向（N － 50° － W）に伸びる溝で、断面形は半円状である。規模は、長さ 1.31m 以上、上幅 0.25 ～ 0.28m、深さ 0.14m である。西側を SD3071 に切られる。覆土は 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SD3203（図版 10・16、228）

5･6A 区に位置する。北東 － 南西方向（N － 23° － E）に伸びる溝で、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 4.08m 以上、上幅 0.26 ～ 0.47m、深さ 0.16m である。SD3090 と重複するが新旧関係は不明である。覆土は灰オリーブ色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD3212（図版 7・8・10・11・21、213・228）

6A･B 区に位置する。北西 － 南東方向（N － 46° － W）に伸びる溝で、断面形は逆台形状である。規模は、長さ 4.76m、上幅 0.15 ～ 0.32m、深さ 0.17m である。覆土は 2 層に分層した。砂の混入が目立つ。遺物は出土していない。

道 路 状 遺 構

SF3202（図版 10・21、228）

5A・B、6A 区に位置する。遺構検出面（Ⅻ層上面）上において帯状に伸びる硬化面を検出した。北西・南東方向に伸びるもので、道跡である可能性が考えられる。検出された硬化面の規模は、長さ 12.45m 以上、幅 0.63 ～ 1.47m で、長軸方向は N － 45° － W を示す。SB3201、SW1634、SD3203 と重複するが、新旧関係については不明である。遺物は出土していない。

なお、本遺構は、SD3071・3115・3116・3120・3212、西部遺跡 I で調査した SD1052・1054・1055 と平行する位置関係にあり、前述した建物群とは軸方向がずれることから、これらの遺構群は建物群とは時期が異なるものと考えられる。

5）Ⅷ層の遺構

Ⅷ層では、掘立柱建物 7 棟、井戸 11 基、土坑 164 基、溝 62 条、鍛冶炉 9 基、地床炉 23 基、性格不明遺構 7 基、ピット 386 基を検出した。

検出した掘立柱建物 7 棟のうち、SB1400・1500・2020・2200・2258 の 5 棟は桁行 10m を超える大型の建物である。柱の据え方には掘立式と半打込式の 2 種類が見られるが、いずれも在来型の梁間 1 間型の建物である。建物内部には鍛冶炉や地床炉などがあり、建物内外からは漆容器や漆パレット、漆紙などが出土していることから、これら 5 棟の建物は鍛冶や漆塗布などの複合的な作業を行っていた工房

であると考えられる。また、作業との関係は不明であるが、調査区の南西側からは製塩関連の地床炉がいくつか見つかっている。

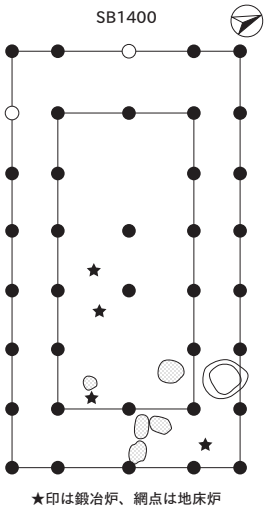
本遺跡の南側には西部遺跡Ⅰが、北側には西部遺跡Ⅲがあるが、両遺跡ともに当該期の遺構は皆無に等しい。これらの大型工房を中心とする遺構群は南北 100m ほどの範囲から密集して検出されており、更に東側（山側）へ広がっているものと推測される。

また、調査区を南北に縦断して西部遺跡Ⅲにまで伸びている SD2127 は、上記の遺構群と同じ面から検出しているが、重複する遺構の新旧関係からどの遺構よりも古いものであることが判明している。遺構の性格は不明であるが、早い段階で構築され、上記の遺構群が構築される前には既に埋まっていたものと考えられる。

掘立柱建物

SB1400（図版 24・28・31・32、203・204・231 ～ 234）

9B ～ D、10C・D 区に位置する。4 面廂が付く梁間 1 間型（壁芯棟持式）の掘立柱建物である。桁行 5 間（11.40m）、梁間 1 間（5.40m）の身舎に、1 間幅の廂が巡る。建物全体の規模は、桁行 7 間（16.50m）、梁間 3 間（8.84m）で、桁行方向は N － 70° － W を示す。建物面積は約 145.86㎡である。平側及び妻側柱筋は千鳥型である。身舎の中央には中柱が 2 基並ぶ。建物を構成する柱穴の掘形は、平面形が円形で、断面形は階段状や漏斗状が多い。柱痕跡は掘形底部よりも下がっている。直径は、入側柱が 0.75 ～ 1.23m、側柱が 0.12 ～ 0.70m、棟持柱が 0.39 ～ 0.61 m、中柱が 0.43 ～ 0.46 mである。根入れの深さは、入側柱が 0.60 ～ 0.94m、側柱が 0.40 ～ 0.72m、棟持柱が 0.42 ～ 0.95 m、中柱が 0.50 ～ 0.68 mである。柱根は、入側柱 P6･9 で検出した。P6（174）は芯持丸木の柱で下端は平らに加工されているが、P9 は腐蝕が著しく詳細は不明である。P6 の柱根は垂直ではなく北側へやや傾いだ状態で検出された。P6 の柱根の直径は 0.21m で、側柱･中柱の柱痕跡はこれよりも一回り小さい。柱穴の覆土は、基本的に柱痕跡部分が炭化粒を多量に含むしまりのない灰色粘質土で、掘形部分がシルトブロックを主体とする灰色シルトである。掘形の覆土は、混入物の少ないきれいな SB1500 のものとは異なり、中層を中心に比較的炭化粒が多く、汚れている状況が見られる。また、建物の床面には、範囲は不明瞭ながら東側を中心に 0.10m ほどの層厚で貼り床状の盛土（整地層）が検出されている。西側では検出されなかったが、地形的に東に向かってわずかに傾斜していることから、より水平な床面を得るために東側だけ盛っている可能性もある。本建物は、屋内から鍛冶炉や地床炉、漆紙、漆パレットなどを検出していることから、複合的な作業を行っていた工房と考えられる。



遺物は、主に柱穴から土師器の無台椀・小甕、黒色土器無台椀、須恵器甕・広口壺、墨書土器、鉸具、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、砥石の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 49 点、粒状の滓 7 点、鉄滓･鉄滓破片 881 点、鉄器表面破片 11 点、炭化米 136 点が出土している（図版 110・111）。

なお、柱根の樹種同定を行ったところ、入側柱 P6・9 はクリであった。

本建物に付属する遺構として SD1077、SW1073・1075・1145・1232・1076・1228・1230・1231・1233、SK1141・1227 がある。SD1077 は建物を「コ」の字状に囲む区画溝である。SW1073・1075・

1145・1232 は鍛冶炉、SW1076・1228・1230・1231・1233 は地床炉、SK1227 は鍛冶炉に伴う廃滓用の穴と考えられる。SK1141 は大量の土器が廃棄されていた土坑である。いずれも建物の東側に偏在している。

ほかに建物内には SK1140・2249 が位置している。

【SB1400 関連遺構】

SD1077（図版 24・28・31・32、204・234・235） 8B・C、9C、D、10B ～ D 区に位置する。SB1400 の周囲を「コ」の字状に併走する区画溝で西側に開口する。断面形は逆台形状を呈する。溝の内側（建物側）の立ち上がりは、外側に比べて急斜度な印象を受ける。規模は、長さ 45.50 m、上幅 0.50 ～ 2.00 m、下幅 0.13 ～ 1.12 m、深さ 0.18 ～ 0.47 mである。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を多量に含む灰色シルトである。細かな土器片のほか、相当量の鍛冶関連遺物が出土している。2 層はオリーブ灰色シルトである。1 層に比べて炭化粒や鍛冶関連遺物の出土が少なく、汚れの少ない比較的きれいな覆土で地山（Ⅸ・Ⅹ層）との区別がつきにくい土層である。北辺の西側を除く底面付近からは、完形やほぼ完形の土師器無台椀が、正位あるいは逆位で多数出土している。意図的に底面へ並べ置いたようにも見えるが、個々の間隔や出土密度は必ずしも一定しておらず、何らかの理由で溝内へ完形の土師器無台椀を投棄したものと考えられる。また、鍛冶炉である SW1145 の北側（10D7 区、北辺東端）では、SD1077 の 2 層の上面に鉄滓などの鍛冶関連遺物を大量に投棄している状況が確認されている。南辺の中央（9C21 区）からは、漆パレット（305）と漆紙（322）がセットになった状態で出土している（図版 234）。SX1122、SK1156 と重複して本溝が切られる。

出土した遺物の総点数は 7,000 点以上である。大半は土師器無台椀の破片であるが、下層ほど完形率が高い傾向が見られる。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台椀・皿、黒色土器無台椀・有台椀、須恵器広口壺･甕、灰釉陶器椀、緑釉陶器耳皿、製塩土器、墨書土器、漆パレット、漆紙、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、半溶解石、炉壁、羽口、鉄床石、砥石の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 496 点、粒状滓 28 点、鉄滓・鉄滓破片 3,465 点、粒状の滓 41 点、鉄器表面破片 154 点、炭化米 516 点、種類不明の炭化種子 385 点が出土している（図版 111 ～ 116）。

SW1073（図版 28･31･33､235） 9C18 区に位置する。SB1400 内にある鍛冶炉である。掘り込みはなく、床面が被熱して黒褐色に変色した範囲を検出したものである。規模は、長径 0.45m、短径 0.31m である。地床炉とは異なる還元化した特徴的な被熱痕から鍛冶炉と判断した。遺物の出土はない。

SW1075（図版 28・31・33、235） 9C18・23 区に位置する。SB1400 内にある鍛冶炉である。大半が削平されて遺存しないが､底部の一部を検出した。規模は､長径 0.39m､短径 0.32m､深さ 0.04 mである。覆土は焼土粒と炭化粒が混じる黄灰色土の単層である。底面は被熱により黒褐色に変色している。地床炉とは異なる還元化した特徴的な被熱痕から鍛冶炉と判断した。遺物は出土していない。

SW1145（図版 28・31・33、235） 10D6 区に位置する。SB1400 内にある鍛冶炉である。大半が削平されて遺存しないが、底部の一部を検出した。規模は、長径 0.43m、短径 0.30m、深さ 0.07 mである。覆土は 2 層に分層した。底面は被熱により黒褐色に変色して硬化している。遺物は､覆土中から椀形鍛冶滓、鍛冶滓が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 46 点、粒状滓 14 点、鉄滓・鉄滓破片 481 点、粒状の滓 20 点が出土している（図版 116）。

SW1232（図版 28・31・33、235・236） 9D3・4 区に位置する。SB1400 内にある鍛冶炉である。大半が削平されて遺存しないが、底部の一部を検出した。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長

径 0.57m、短径 0.47m、深さ 0.11 mである。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を多量に含む黒色土、2 層は焼土を含む黒褐色土である。底面は被熱により黒褐色に変色して硬化している。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓、炉壁、羽口の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 8 点、粒状滓 13 点、鉄滓・鉄滓破片 980 点、粒状の滓 19 点、鉄器表面破片 1 点が出土している（図版 116）。

SW1076（図版 28・31・32、235・236） 9C25、9D5 区に位置する。SB1400 内にある地床炉である。平面形は円形で、浅い掘り込みが確認できる。規模は、長径 1.05 m、短径 0.90m である。覆土は 3 層に分層した。1 層は多量の灰が混じる灰黄褐色土、2 層は焼土ブロック、3 層は赤褐色土で、3 層上面が火床面となる。SB1400 内にある地床炉 5 基のうち、掘り込みが残っているものは本遺構のみである。本遺構の北側には、大量の土器が廃棄された SK1141 が位置しており、SB1500 内における SW1343 と SK1419 の関係に酷似している。遺物は出土していない。

SW1228（図版 28・31・33、236） 9D3・4 区に位置する。SB1400 内にある地床炉である。鍛冶炉である SW1232 の西隣に位置している。床面に赤化した被熱痕を検出したもので掘り込みはない。規模は、長径 0.56m、短径 0.52m である。遺物は出土していない。

SW1230（図版 28・31・33） 9D5 区に位置する。SB1400 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので、上面には焼土粒と炭化粒を含む暗オリーブ灰色土が薄くのる。規模は、長径 0.95m、短径 0.56m である。遺物は出土していない。

SW1231（図版 28・31・33、236） 9D5・10 区に位置する。SB1400 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので、上面には焼土混じりの赤褐色土が薄くのる。規模は、長径 0.88m、短径 0.58m である。遺物は出土していない。

SW1233（図版 28・31・33） 9D10 区に位置する。SB1400 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので、上面には炭化粒を含む黄灰色土が薄くのる。規模は、長径 0.96m、短径 0.69m である。遺物は出土していない。

SK1140（図版 28･32･33） 10C16 区に位置する。SB1400 内にある浅い土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.10m、短径 0.92m、深さ 0.05m である。遺物は、底部から完形率の高い土師器無台椀が数点出土している（図版 118）。

SK1141（図版 28・31・32、204・236） 10C21、10D1 区に位置する。SB1400 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.79m、短径 1.50m、深さ 0.18m である。土坑内には、土師器無台椀を中心に多量の土器が廃棄されていた。覆土は 2 層に分けたが、上層は土器片を含む黒褐色シルト、下層は完形率の高い土師器無台椀を主体とする土器によってほぼ埋め尽くされている状況であった。出土した遺物の総点数は約 1,370 点である。遺物は、土師器無台椀・鍋、黒色土器無台椀・有台椀、墨書土器などのほか、微細遺物として鍛造剝片 27 点、鉄滓・鉄滓破片 393 点、鉄器表面破片 8 点、炭化米 10 点、種類不明の炭化種子 5 点などが出土している（図版 116・117）。

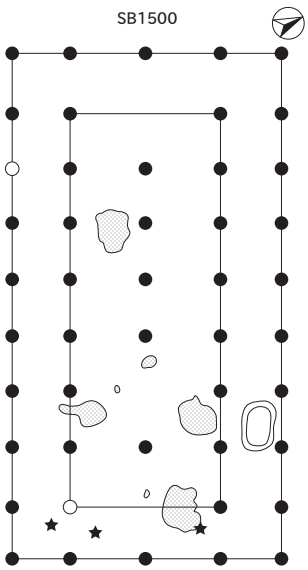
SK1227（図版 28・31・33、236） 9D9 区に位置する。SB1400 内にある土坑である。鍛冶炉である SW1232 の東隣に位置しており、土坑内は鉄滓が充填されたような状況であった。鍛冶炉に伴って設置された廃滓入れ用の穴と考えられる。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.67m、短径 0.54m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は多量の鉄滓などを含む黒色土、2 層は同じく多量の鉄滓などを含む黄灰色土である。遺物は、覆土中から羽口の破片 1 点（346）のほか、微細遺物として鍛造剝片数千点、粒状滓 53 点、鉄滓・鉄滓破片 400 点以上、粒状の滓 15 点、鉄器表面破片

36 点、炭化米 1,755 点、種類不明の炭化種子数千点が出土している（図版 116）。

SK2249（図版 28・33、236）　9D3 区に位置する。SB1400 内にある土坑である。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.16m、短径 0.88m、深さ 0.15m である。遺物は出土していない。

SX1224（図版 28・31・33）　9D3・4・8・9 区に位置する。SB1400 内で見つかった鉄滓など鍛冶関連遺物の廃棄跡である。規模は、長径 1.63 m、短径 0.24 mである。鍛冶炉（SW1232）に併設された廃滓入れ用の穴である SK1227 を覆うようにして床面上に不整形に広がっている。本遺構の成因は SK1227 が埋まり切った後も鍛冶炉から出る鉄滓などを廃棄し続けた結果、SK1227 から溢れ出たものと考えられる。遺物は、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、炉壁の破片などのほか、微細遺物として鍛造剝片数千点、粒状滓 88 点、鉄滓・鉄滓破片数千点、粒状の滓数千点、鉄器表面破片 16 点、炭化米 1 点が出土している（図版 117）。

SB1500（図版 23・27・34・35・54・62・65・68・70、203・204・230・237 ～ 244）



7C・D、8C・D 区を中心に位置する。4 面廂が付く梁間 1 間型（棟持無）の掘立柱建物である。桁行 7 間（15.50m）、梁間 1 間（6.00m）の身舎に、1 間幅の廂が巡る。建物全体の規模は、桁行 9 間（23.20m）、梁間 3 間（10.8m）で、桁行方向は N － 70° － W を示す。建物面積は約 250.56㎡である。平側柱筋は千鳥型、妻側柱筋は胴張型である。身舎の中央には中柱が 5 基並ぶ。建物を構成する柱穴の掘形は、平面が円形で、入側柱の断面形は逆台形状、側柱の断面形は漏斗状や「U」字状である。直径は、入側柱が 0.62 ～ 1.10m、側柱が 0.26 ～ 1.08m、中柱が 0.48 ～ 1.00 mである。根入れの深さは、入側柱が 0.62 ～ 0.90m、側柱が 0.42 ～ 0.77m、中柱が 0.61 ～ 0.93 mである。柱根は、腐蝕の度合いは異なるが、ほとんどの柱穴で検出されている。用材は、割材を用いている中柱を除き、すべて芯持丸木材で、下端は平らに加工している。入側柱の柱根の直径は 0.30m 前後あり、側柱・中柱の柱根・柱痕跡はこれよりも一回り小さい。入側柱の柱根の下部には、ほぼ例外なくメド穴が穿たれている。柱穴の覆土は、基本的に掘形部分がシルトブロックを主体とする灰色シルトで、汚れの少ないきれいな土である。また、建物の床面には、範囲は不明瞭ながら東側を中心に 0.10m ほどの層厚で貼り床状の盛土が検出されている。地形的に東に向かってわずかに傾斜していることから、より水平な床面を得るために東側を中心に盛っている可能性もある。本建物は、屋内から鍛冶炉や地床炉、漆紙、漆パレットなどを検出していることから、複合的な作業を行っていた工房と考えられる。

遺物は、主に柱穴から土師器無台椀・有台椀・有台皿・小甕、黒色土器無台椀・有台椀・有台皿、須恵器無台杯・有台杯・甕、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、製塩土器、墨書土器、椀形鍛冶滓、羽口、鉄製品、鍛冶滓、砥石の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 129 点、粒状滓 89 点、鉄滓・鉄滓破片 2,540 点、粒状の滓 17 点、鉄器表面破片 175 点、炭化米 39 点、種類不明の炭化種子 98 点が出土している（図版 118 ～ 121）。

なお、遺存した柱根の樹種同定を行ったところ、入側柱・側柱・中柱のすべてがクリであった。

本建物に付属する遺構として SD1377、SW1352・1353・2229・1302・1343・1610・1611・1612・1617 ～ 1619、SK1355・1419・1601 がある。SD1377 は建物の周囲を巡る区画溝である。SW1352・1353・2229 は鍛冶炉、SW1302・1343・1610・1611・1612・1617 ～ 1619 は地床炉、SK1355・

1601 は鍛冶炉に伴う廃滓用の穴と考えられる。SK1419 は大量の土器が廃棄されていた土坑である。いずれも建物の東側に偏在している。

ほかに建物内には SK1351・1360・1384・1408・1444・1469・1472・1473・1479・1488・1505・1511・1512・1515・1536・1537・1546・1547・1548・1558・1560・1570・1571・1577・1585・1588・1596・1601・1602・2192・2203・2235・2255、SX1545 が位置する。

【SB1500 関連遺構】

SD1377（図版 23・27・34 ～ 36、204・243・244） 6B・C、7B ～ E、8B ～ E 区に位置する。SB1500 の周囲を全周する区画溝である。断面形は逆台形状である。溝の内側（建物側）の立ち上がりは外側に比べて急斜度な印象を受ける。規模は、長さ 71.80 m、上幅 0.80 ～ 2.32 m、下幅 0.16 ～ 1.80 m、深さ 0.14 ～ 0.58 mである。覆土は 4 層に分層した。1 層は灰色シルトである。炭化粒の少ない明るい色調のもので、地山（Ⅸ層）との識別が困難である。2 層は炭化粒を多く含むオリーブ黒色シルトで、おおむねレンズ状に堆積して黒ずんだ層をなす。土師器無台椀を中心とした土器類や鍛冶関連遺物が多量に含まれる。3 層は炭化粒の少ない暗オリーブ灰色シルトで、地山（Ⅸ・Ⅹ層）との識別が困難である。遺物の出土量は 2 層よりも少ないが、完形率の高い土師器無台椀が出土する傾向が見られる。4 層は炭化粒を多く含む灰色粘質土である。遺物の分布には偏りが見られ、北辺の東寄り、SK1419 の北側に当たるか所から最も多く出土している。また、本溝の東辺中央からは漆紙文書（851）の大破片が 1 点出土（3 層）している（図版 244）。折り畳まれずに平の一枚ものとして出土したもので非常に脆弱な状態であった。同文書は、記載されている内容や字体から 8 世紀後半ごろに書かれたものである可能性が指摘されているが（「附編 3」参照）、本溝の直下には古い時期の遺構（Ⅺ・ⅫⅠa 層遺構）はなく、掘削深度もⅫⅠa 層に達していないことから、本溝の掘削によって、本来、下層にあったはずの遺物が覆土中に混入する可能性は極めて低いと考えられる。重複した遺構との新旧関係については、本溝自体の検出が困難を極めたこともあり不明なものが多いが、SE1226、SK1118・1531・2226、SD1491・1492・1552 は本溝より古く、SK1144・1252・1533、SD1164・1222 は本溝よりも新しいものと思われる。

出土した遺物の総点数は 20,000 点以上であるが、その大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台椀・有台皿・甕・小甕・鍋・台付鉢・羽釜、黒色土器無台椀・有台椀・有台皿、須恵器無台杯・有台杯・甕・広口壺・瓶・横瓶、製塩土器、緑釉陶器、灰釉陶器椀、墨書土器、石製品、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、炉壁、ガラス質滓、羽口、漆パレット、漆紙、管状土錘、砥石、鉄床石、凹石の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 414 点、粒状滓 44 点、鉄滓・鉄滓破片 4,000 点以上、粒状の滓 23 点、鉄器表面破片 230 点、炭化米 376 点、種類不明の炭化種子 76 点が出土している（図版 121 ～ 136）。

SD3142（図版 27・34） 8C 区に位置する。SD1377 の北辺内側にある溝で、SD1377 の北辺と同じく北東 - 南西方向（N - 67° - E）に伸びる。断面形は弧状を呈する。規模は、長さ 5.60 m、上幅 0.60 ～ 1.00 m、深さ 0.40 mである。反対側の SD1377 の南辺内側からも同じような細い溝状の落ち込みを検出している。出土遺物は SD1377 として掘り下げたことから特定できていないが、SD1377 の同か所から出土した遺物を再検討しても時期差のある遺物は見つからなかった。SD1377 の溝浚いなどに伴って掘り下がったものである可能性も考えられる。

SW1352（図版 27・34・37、204・244） 7D23・24 区に位置する。SB1500 内にある鍛冶炉である。北西側を中世の井戸（SE062）に切られ、全貌は不明である。被熱範囲は長径 1.12m ほどである。被熱範

囲のほぼ中央に鍛冶炉の底部と考えられる浅い円形のくぼみがあり、断面形は弧状となる。規模は、長径0.20m、深さ 0.11m である。鍛冶炉直下の地山は被熱が著しく、黒褐色を呈して硬化している。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓、再結合滓が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 254 点、粒状滓 562 点、鉄滓・鉄滓破片 5,500 点以上、粒状の滓 151 点が出土している（図版 136、357）。

SW1353（図版 27・34・37、245） 7D24 区に位置に位置する。SB1500 内にある鍛冶炉である。遺構の大半を中世の井戸（SE062）や SK1596 に切られ、被熱により還元化した壁面の一部だけが遺存している。現状で確認できる遺構の規模は、径 0.16m ほどである。遺物は出土していない。

SW2229（図版 27・34・37、245） 8D21 区に位置する。SB1500 内にある鍛冶炉である。炉の上部は失われており、炉底付近だけが遺存する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、径 0.27m、深さ 0.11m である。炉の西側に羽口の装着痕のような樋状のくぼみを 1 か所確認したが、部分的な検出であるため明瞭な判断は下せなかった。当初、床面上には見えなかったもので、床面となっている貼り床状の盛土を数 cm 剝がした所で検出できた。鍛冶炉が使われなくなって計画的に解体された後、床面を貼り戻しているものと考えられる。SW1619 と重複してこれに切られる。遺物は、覆土中から管状土錘が２点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 114 点、粒状滓 15 点、鉄滓・鉄滓破片 192 点、粒状の滓 4 点、鉄器表面破片 34 点が出土している（図版 136）。

SW1302（図版 27・34・37、245） 7C19 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したものである。掘り込みはないに等しいが、焼土ブロックや灰を含む覆土が中央のくぼんだか所に部分的に薄くのっている。平面形は楕円形である。規模は、長径 0.76 m、短径 0.46m である。被熱の痕跡は遺構外まで及んでおり、確認した範囲は、炉を中心に直径 1.24 mである。西側には SW1612 が隣接しており、被熱範囲は重複している。遺物は、覆土中から微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 63 点、鉄器表面破片 1 点、炭化米 1 点が出土している。

SW1343（図版 27・34・36、204・245） 8D6・11 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.06 m、短径 0.80 m、深さ 0.10 mである。遺構内には焼土粒が多量に含まれ、被熱による赤化は遺構外まで及んでいる。確認した被熱痕の範囲は、炉を中心に、長径 1.70m、短径 1.20m、深さ 0.20m である。かなりの火力で長期間にわたって使用された可能性が高い。覆土は 6 層に分層した。最上層には灰層(2 層)が遺存する。5･6 層の上面が火床面となる。底部には小さな浅い穴が 3 か所あり、灰層上面からは被熱した径 20 ～ 30cm の礫が疎らに数点出土していることから、石囲炉のようなかたちで使用されていた可能性もある。本地床炉は SB1500 内から見つかっている 8 基の地床炉の中で、唯一、しっかりとした掘り込みを持つものである。また、本地床炉の北側には、多量の土器が廃棄されていた土坑 SK1419 が位置している。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台椀、砥石の破片が少量出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 313 点、鉄器表面破片 56 点が出土している（図版 136）。

SW1610（図版 27・34・37、245） 7D9・13・14 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したものである。掘り込みはないに等しいが、焼土ブロックを含む赤褐色土の覆土が中央のくぼんだか所に部分的に薄くのっている。平面形は不整形である。規模は、長径 1.92 m、短径 1.06m である。遺物は出土していない。

SW1611（図版 27・34・37、245・246） 7D9 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので掘り込みはない。平面形は楕円形である。規模は、長径 0.28 m、短径

0.20m である。遺物は出土していない。

SW1612（図版 27・34・37、245）　7C18・19 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したものである。掘り込みはないに等しいが、焼土ブロックを含む赤褐色土の覆土が中央のくぼんだか所に部分的に薄くのっている。平面形は楕円形である。規模は、長径 0.50 m、短径 0.31m である。被熱痕は遺構外まで及んでおり、確認した被熱痕の範囲は、炉を中心に直径 1.20 mである。東側には前述した SW1302 が隣接しており、被熱範囲は重複する。両地床炉の新旧関係については不明である。床面下にある SK2235 の上に位置している。遺物は出土していない。

SW1617（図版 27・34・37）　7D20 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので掘り込みはない。平面形は楕円形である。規模は、長径 0.32 m、短径 0.20m である。遺物は出土していない。

SW1618（図版 27・34・38、246）　7D5 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので、掘り込みはないに等しい。覆土は焼土ブロックを含む赤褐色土の薄い単層で、被熱範囲上に断片的に薄くのっているような状況であった。平面形は楕円形である。規模は、長径 0.63 m、短径 0.45m である。遺物は出土していない。

SW1619（図版 27・34・37・38、246）　8D16・21 区に位置する。SB1500 内にある地床炉である。床面に赤化した被熱痕を検出したもので、掘り込みはないに等しい。わずかにくぼんだ所に焼土ブロックを含む赤褐色土の薄い覆土が部分的にのっている。平面形は不整形である。規模は、長径 2.00 m、短径 1.14m である。覆土の上面には床と同じ土（1 層）が薄くのっており、地床炉の使用を停止した後、床を貼り戻しているものと考えられる。SW2229 と重複してこれを切っている。覆土中から微細遺物として鍛造剝片 31 点、鉄滓・鉄滓破片 130 点、粒状の滓 1 点、鉄器表面破片 19 点が出土している。

SK1355（図版 27・34・38、204・246）　7D23 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。鍛冶炉である SW1352 の南隣に位置しており、土坑内は鉄滓が充填されたような状況であった。鍛冶炉に伴って設置された廃滓入れ用の穴と考えられる。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.52m、短径 0.48m、深さ 0.07m である。覆土は多量の鉄滓や小礫などを含む黒色土の単層である。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓、再結合滓、羽口、炉壁の破片が少量出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 13,700 点以上が出土している（図版 136・137）。

SK1601（図版 27・34・37、247）　7D24・25 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。鍛冶炉である SW1353 の北隣に位置しており、土坑内からは多量の鉄滓と鉄床石の破片が少量出土している。鍛冶炉に伴って設置された廃滓入れ用の穴と考えられる。平面形は不整形で、断面形は弧状である。南西側を中世の井戸（SE062）に切られており全貌は不明であるが、現状で確認できる規模は、長径 0.52m 以上、深さ 0.07m である。覆土は径 20 ～ 50mm の鉄滓を多量に含む橙色土の単層である。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓、鉄床石の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片数百点、粒状滓、鉄滓・鉄滓破片数千点、粒状の滓数百点が出土している（図版 147）。

SK1351（図版 27・38、247）　7D18 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.07m、短径 0.72m、深さ 0.24m である。覆土は 3 層に分層した。重複する SK1570 を壊して構築している。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、黒色土器の破片が約 400 点出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 91 点が出土している（図版 147）。

SK1360（図版 27・38、247・248）　8D17・18・22・23 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。

平面形は円形で、断面形は弧状であるが、断面観察から、使用段階ではフラスコ状であった可能性がある。規模は、長径 2.18m、短径 1.78m、深さ 0.49m である。覆土は 4 層に分層した。3 層は崩落したフラスコ形のくびれ部分（地山）と考えられる。遺構底部から中層（2 層）にかけて多量の土器片及び鉄滓、径 0.10m 前後の被熱した礫が 20 点ほど出土している。使用時の上端が現状よりも小さいとすれば、SB1500 の北東隅に穿たれた特殊な施設と考えることも可能である。出土した遺物の総点数は約 4,500 点を数えるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、主に 2・4 層中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器無台杯、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄製品、砥石の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片数百点、粒状滓 1 点、鉄滓・鉄滓破片 371 点、粒状の滓 1 点、鉄器表面破片 120 点、炭化米 20 点が出土している（図版 147）。

SK1384（図版 27・38、248）　8D2 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.67m、短径 0.65m、深さ 0.45m である。小規模な土坑であるが、多量の遺物や礫が折り重なる状態で検出された。覆土は炭化粒や砂礫を多量に含む黒褐色土の単層である。出土した遺物の総点数は約 600 点を数えるが、大半は土師器無台椀の破片である。土坑の大きさから考えると遺物量は際立って多い。遺物は、1 層中から土師器無台椀・有台椀、黒色土器無台椀・有台椀、椀形鍛冶滓、羽口の破片が出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 58 点、鉄器表面破片 54 点が出土している（図版 147・148）。

SK1408（図版 27・39、248）　7C17・18・22・23 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.18m、短径 1.11m、深さ 0.43m である。覆土は 4 層に分層した。P1443 に切られる。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器椀、須恵器甕、灰釉陶器椀の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 157 点が出土している（図版 148）。

SK1419（図版 27・34・36、204・246・247）　8D7・12 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.95m、短径 1.22m、深さ 0.34m である。長軸方向は SB1500 の桁行方向と一致する。土坑内には、完形率の高い土師器無台椀を主体とする夥しい量の遺物が堆積している。土坑を遺物で埋め尽くした後も投棄され続けたようで、土坑から遺物が溢れ出ているような状況であった。覆土は炭化物などを含む黒色土であるが、膨大な量の遺物が含まれており、詳細な分層はできていない。本土坑の北側に隣接する SD1377 の幅広になった部分からも多量の遺物が出土している。両者は位置的に近接していることから、本土坑から出土したものと、この SD1377 から出土したものとの接合を試みたが、両者間で接合できたものは皆無に等しい状況であった。双方の位置関係や出土遺物から判断して本土坑と SD1377 が時期の異なる遺構であるとは考えがたいことから、両者間で接合関係が確認できないという事実は、本土坑と SD1377 との間に壁が存在したことを示唆しているものと考えられる。出土した遺物の総点数は 7,000 点を超えるが、その大半は土師器無台椀である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台椀・有台皿・小甕・台付鉢、黒色土器無台椀・有台椀・有台皿、須恵器長頸瓶・広口壺、緑釉陶器、灰釉陶器椀、製塩土器、墨書土器、漆パレット、漆器盤ないし椀、鉄床石の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 13 点、鉄滓・鉄滓破片 225 点、鉄器表面破片 38 点、炭化米 4 点が出土している（図版 137 ～ 147）。鍛冶が行われていた建物の中で長期間にわたって開口していたと想定されるにもかかわらず、鍛冶関連遺物の出土量がほかの遺構と比べて少ない印象がある。出土している遺物の内容は雑多であるが、鍛造剝片や鉄滓など作業に関連したごみの類が少ないこ

とは、投棄されるものがある程度選択的であったことを意味しているものと考えられる。

SK1444（図版 27･39、248）　7C17･22 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.24m、短径 1.02m、深さ 0.26m である。覆土は 5 層に分層した。遺物は、主に 4 層中から土師器無台椀、須恵器甕・四耳壺の破片が、底部直上から拳大の礫 3 点が出土している（図版 148・149）。また、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 55 点、炭化米 3 点が出土している。

SK1469（図版 23・27・39、248・249）　7C7 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.79m、短径 0.63m、深さ 0.09m である。覆土は黄褐色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 100 点出土している（図版 149）。

SK1472（図版 27・39、249）　7C7 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.53m、短径 0.49m、深さ 0.20m である。覆土は 3 層に分層した。遺物は、主に 2 層中から土師器無台椀の破片が約 100 点出土している（図版 149）。

SK1473（図版 27･39、249）　7C6・7 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.91m、短径 0.63m、深さ 0.13m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 50 点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 3 点、鉄滓・鉄滓破片 13 点が出土している（図版 149）。

SK1479（図版 27・39、249）　7D7・8・12・13 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は建物の桁行方位と向きを同じくする長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.45m、短径 1.15m、深さ 0.35m である。覆土は炭化粒の量によって 3 層に分層した。3 層中には完形率の高い土師器無台椀を含む多量の土器片が混入している。遺物は、主に 3 層中から土師器無台椀、黒色土器有台椀、須恵器甕、椀形鍛冶滓の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 4 点、粒状滓 1 点、鉄滓・鉄滓破片 20 点、粒状の滓 2 点、鉄器表面破片 1 点が出土している（図版 149）。

SK1488（図版 27・39・41、249）　7D9 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.74m、短径 0.64m、深さ 0.16m である。覆土は 3 層に分層した。SK2255 と重複するが、本遺構の方が新しい。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が 3 点出土している。

SK1505（図版 27･40、249･250）　7C12 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.45m、短径 0.44m、深さ 0.13m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SK1511（図版 27･40、250）　7C10･15 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.42m、短径 1.54m、深さ 0.35m である。覆土は 5 層に分層した。底部付近の 5 層は炭化物主体層である。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀・有台椀、須恵器甕の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 2 点、粒状滓 1 点、鉄滓･鉄滓破片 15 点、炭化米 8 点、種類不明の炭化種子 7 点が出土している（図版 150）。

SK1512（図版 27・40、250）　8D17 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.70m、短径 0.62m、深さ 0.11m である。覆土は 3 層に分層した。2 層には被熱した粘土ブロックが混入している。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 3 点、鉄滓・鉄滓破片 98 点が出土している。

SK1515（図版 27・40、250） 7C13 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.40m、短径 0.36m、深さ 0.06m である。覆土は暗灰黄色土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が 1 点出土している。

SK1536（図版 27・40・62、250） 7C25 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.58m、短径 0.41m、深さ 0.16m である。覆土は灰黄褐色粘質土の単層である。SK1499 と重複して切っている。遺物は、1 層中から土師器無台椀、緑釉陶器輪花椀の破片が少量出土している（図版 150）。

SK1537（図版 27・40・62） 7C25 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.50m、短径 0.31m、深さ 0.14m である。覆土は暗灰黄色粘質土の単層である。SK1499 と重複して切っている。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 11 点、鉄器表面破片 2 点が出土している（図版 150）。

SK1546（図版 27・40、250・251） 7C13・14・18・19 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.44m、短径 0.43m、深さ 0.06m である。覆土はオリーブ褐色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1547（図版 27・40、251） 7C14 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.39m、短径 0.37m、深さ 0.07m である。覆土は灰黄褐色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1548（図版 27・40、251） 7C20 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.40m、短径 0.39m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、用途不明の鉄製品が 1 点出土している（図版 150）。

SK1558（図版 27・34・37、251） 7D24 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.20m、短径 0.90m、深さ 0.26m である。覆土は 3 層に分層した。SK1596 よりも新しい。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が 300 点ほど出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 5 点、鉄滓・鉄滓破片 37 点、炭化米 3 点、種類不明の炭化種子 1 点が出土している。

SK1560（図版 27・40、251） 7D23、7E3 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.91m、短径 0.81m、深さ 0.16m である。覆土は褐灰色土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、椀形鍛冶滓の破片など約 70 点が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 3 点、鉄滓・鉄滓破片 20 点が出土している（図版 150）。

SK1570（図版 27・38、247） 7D18 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。SE062、SK1351 に壊され全貌は不明であるが、東西軸の最大径は 1.48m を測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは 0.07m と浅い。覆土は 2 層に分層でき、それぞれに灰を含む。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が 140 点ほど出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 6 点、鉄滓・鉄滓破片 23 点、炭化米 16 点が出土している。

SK1571（図版 27・41、247・252） 7D18 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.88m、短径 0.75m、深さ 0.15m である。重複する P2212 より古い。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が 110 点ほど出土したほか、微細遺物

として鍛造剥片 1 点、粒状滓 1 点、鉄滓・鉄滓破片 17 点、炭化米 8 点が出土している。

SK1577（図版 27・41、252）　8D11 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.80m、短径 0.76m、深さ 0.21m である。覆土は 3 層に分層した。2 層は炭化粒の混入が顕著である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土したほか、微細遺物として鍛造剥片 2 点、鉄器表面破片 1 点、炭化米 16 点が出土している。

SK1585（図版 23・27・41、252）　7B23・7C3 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は不明だが、南北軸で 0.78m を測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは 0.28m を測る。P1586 が重複するが、本土坑を壊して穿たれている。覆土は 3 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1588（図版 27・41）　8D12・17 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は東西に長い不整形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.05m、短径 0.60m、深さ 0.13m である。覆土は炭化粒を少量含む褐灰色シルトの単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕の破片が 50 点ほど出土している（図版 150）。

SK1596（図版 27・34・37、251）　7D24 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。SE062、SK1558 に壊され全貌は不明だが、南北軸で 0.96m を測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは 0.10m を測る。鍛冶炉と見られる SW1353 を壊して構築されている。覆土は灰オリーブ色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK1602（図版 27･41）　7C20･25、8C21 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.56m、短径 0.49m、深さ 0.13m である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土している（図版 150）。

SK2192（図版 27・41、252）　7C24、7D4・5 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は長方形で、長軸方向は SB1500 の梁行方向にほぼ合っている。断面形は弧状である。規模は、長径 1.84m、短径 1.07m、深さ 0.30m である。覆土は 2 層に分層した。底部付近の 2 層は炭化物主体層で、層厚 0.02 ～ 0.03m、炭化物が底部全体を覆う。2 層中からは炭化米が約 600 点（1 層からは 55 点）出土し、自然科学分析の結果、イネの穎が多量に見つかったほか、アワ、ヒエ、キビ、マメ類が確認されるなど、主要な内容物は炭化した穀物類であることが判明した（「第Ⅵ章 1」参照）。遺構底面に被熱痕は検出されていない。単発的に遺構内で燃やされたものか、他所から持ち込まれたものかは判然としないが、汚れの少ないきれいな土（1 層）で埋め戻されている。土器などの遺物は出土していない。

SK2203（図版 27･41、253）　7D14･19 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.82m、短径 0.78m、深さ 0.18m である。覆土は黒褐色土の単層で焼土ブロックを多量に含む。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕の破片が各 1 点出土している。

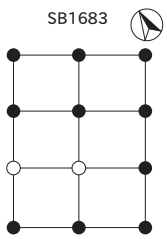
SK2235（図版 27・41、253）　7C13・14・18・19 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は長方形で、長軸方向は SB1500 の梁行方向にほぼ合っている。断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.05m、短径 1.26m、深さ 0.42m である。覆土は 2 層に分層でき、1 層は汚れの少ない灰色シルトだが、底部付近の 2 層は炭化物主体層で、層厚 0.02 ～ 0.03m、炭化物が底部全体を覆う。2 層からは炭化米が約 25 点（1 層からは 24 点）出土した。自然科学分析の結果、イネの穎のほか、ヒエ、キビが確認された（「第Ⅵ章 1」参照）。遺構底面に被熱痕は検出されていない。単発的に遺構内で燃やされたものか、他所から持ち込まれたものかは判然としないが、汚れの少ないきれいな土（1 層）で埋め戻されている。

土坑の特徴は前途の SK2192 と酷似している。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片などが 70 点ほど出土している。

SK2255（図版 27・41、253） 7D3・4・8・9 区に位置する。SB1500 内にある土坑である。平面形は長方形で、長軸方向は SB1500 の梁行方向にほぼ合っている。断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.27m、短径 0.98m、深さ 0.42m である。検出時の深さは 0.09m と浅いが、SB1500 床面からの深さは 0.30m ほどである。重複する SK1488 は、本遺構埋没後に構築されている。最下層の黒色土のみ記録できたが、その中から炭化米が約 500 点（覆土全体では約 1,300 点）出土している。自然科学分析の結果、多量のイネの穎や胚乳が検出されたほか、アワ、ヒエ、キビが確認されるなど、主要な内容物は炭化した穀物類であることが判明した（「第Ⅵ章 1」参照）。遺構底面に被熱痕は検出されていない。単発的に遺構内で燃やされたものか、他所から持ち込まれたものかは判然としないが、汚れの少ないきれいな土で埋め戻されている。土坑の特徴は前途の SK2129・2235 と酷似している。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SX1545（図版 27・34、253） 7D4 区に位置する。SB1500 内にある性格不明の遺構である。P5 と P47 の間に位置する。平面形は円形で、掘り込みはない。規模は、長径 0.40 m、短径 0.32m である。床面上に細かな小礫が薄い層をなして円形にまとまっており、突き固めたかのように硬くしまっていた。遺構の機能や用途については不明である。同様の遺構として、SB1683 内から検出した SX1684 がある。遺物は出土していない。

SB1683（図版 23・26・27・42、254 ～ 256）



調査区南西側の 6A・B 区に位置する。総柱型の掘立柱建物である。Ⅷ層建物の中で唯一の南北棟建物である。規模は、桁行 3 間（6.90m）、梁間 2 間（5.40m）で、桁行方向は N － 28° － E を示す。建物面積は約 37.26㎡である。平面形はややひしゃげた長方形を呈する。柱根は P2・3・8・10 で検出したが、いずれも腐蝕が著しい。建物を構成する柱穴の掘形は、平面形が円形または楕円形で、断面形は逆台形状や「U」字状を呈する。規模は、直径 0.41 ～ 0.77m、深さ 0.40 ～ 0.80m で、柱痕跡の直径は約 0.20m である。また、建物の内部に位置する P11 の規模は、直径 0.33m、深さ 0.40m で、外側の柱列の柱穴と比べて一回り規模が小さいことから、束柱であった可能性が考えられる。また、北西隅部の P9 からは、多量の礫とともに、鉄床石、砥石、須恵器甕の破片などが出土しており、理由は不明ながら柱を抜き取った後に投げ入れたものと思われる。本建物は、P9 の検出状況から廃絶時に計画的に解体されていると考えられる。柱は P9 のように抜き取られたもの、床面柱根が遺存する P2・3・8・10 などは抜き取らずに床面上で切り取られた可能性が考えられる。

遺物は、柱穴から土師器無台椀・台付鉢、須恵器甕、管状土錘、鉄床石、椀形鍛冶滓、砥石の破片などが出土している（図版 151）。また、遺構からの出土ではないが、建物直上の遺物包含層（Ⅷ層、6B8 区、P2 と P11 の間付近）からは腰帯石銙丸鞆（2229）が 1 点出土している。

なお、柱根の樹種同定を行ったところ、P2・3・8・10 はクリであった。

建物内には SX1684 が位置するが、建物との関連については不明である。

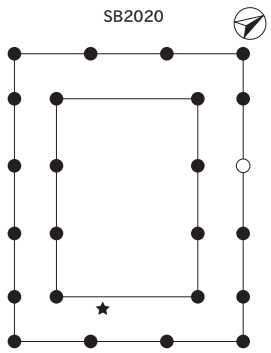
【SB1683 関連遺構】

SX1684（図版 23・27・42、256） 6B9 区に位置する。SB1683 内にある性格不明の遺構である。P11

の北隣から検出した。平面形は不整形で、断面形は浅い箱状である。規模は、長径 0.40 m、短径 0.32m、深さ 0.08m である。覆土は暗灰黄色シルトの単層である。覆土中にはφ 3 ～ 10mm の小礫が多量に混入しており、突き固めたかのように硬くしまっている。遺構の機能や用途については不明であるが、同様の遺構は SB1500 内からも 1 基（SX1545）検出している。遺物は出土していない。

SB2020（図版 25・29・30・43・68、256 ～ 261）

調査区北側の 13B・C 区に位置する。4 面廂が付く梁間 1 間型（棟持無）の半打込柱建物である。桁行 3 間（8.10m）、梁間 1 間（5.55m）の身舎に、1 間幅の廂が巡る。建物全体の規模は、桁行 5 間（11.00m）、梁間 3 間（8.90m）で、桁行方向は N － 60° － W を示す。建物面積は約 97.90㎡である。平側柱筋は千鳥型である。入側柱・側柱ともに半打込式の柱で、入側柱の P1 ～ 4・6・8、側柱の P10 ～ 15・23 の合計 13 本の柱根を検出した。柱根は下端がすべて尖頭状に加工されている。このうち、側柱の P23 の柱根だけが、尖頭部を上にして出土している。これについては、抜き取った柱の不要な部分（尖った下端部）を切断してその場で廃棄、柱を抜き取った後の柱穴に、切断された尖頭部が上下逆さまになって転げ落ちた、あるいは投げ入れられたものと考えられる。同様の事例は、SB2200（入側柱 P3）や、XI層の建物である SB3200（入側柱 P4）でも確認されている。建物を構成する柱穴の掘形は、平面形が円形で、断面形は弧状や半円状である。直径は、入側柱が 0.62 ～ 0.90m、側柱が 0.25 ～ 0.65m である。根入れの深さは、入側柱が 0.92 ～ 1.44m、側柱が 0.50 ～ 0.97m である。柱根の規模は、比較的遺存状態のよい入側柱 P2 で直径 0.21m、側柱 P14 で直径 0.15m である。また、建物の床面には、範囲は不明瞭ながら 0.08m ほどの層厚でシルトブロック混じりの暗オリーブ灰色土からなる貼り床状の盛土が検出されている。SK2090、SD2008・2055・2116・2131 と重複してこれに切られる。本建物は、屋内から鍛冶炉や漆紙を検出しており、複合的な作業を行っていた工房と考えられる。



遺物は、P16 から羽口の破片（1354）が 1 点出土している（図版 151・152）。

なお、柱根の樹種同定を行ったところ、入側柱である P1 ～ 4・6・8、側柱である P10 ～ 15・23 のすべてがクリであった。

本建物に付属する遺構として SD2150、SW2010、SK2119・2120 がある。SD2150 は建物の西・南側にある「L」字状の区画溝である。SW2010 は鍛冶炉、SK2119 は鍛冶炉に伴う廃滓用の穴、SK2120 は土坑と考えられる。いずれも東側の廂部分に位置している。

ほかに建物内には SE2158 が位置するが、遺構の切り合いがなく建物との関係については不明である。

【SB2020 関連遺構】

SD2150（図版 25・29・43、261・262） 12B・C、13B 区に位置する。SB2020 の西・南側に併走する区画溝である。「L」字状に伸びるもので、断面形は弧状を呈する。規模は、長さ 19.00m、上幅 0.76 ～ 1.22m、深さ 0.21m である。覆土は暗オリーブ灰色シルトの単層である。遺物は、土師器無台椀の破片を中心に約 270 点出土している。南辺を中心に、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕・鍋、須恵器無台杯、磨石、砥石、椀形鍛冶滓の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 36 点、炭化米 1 点が出土している（図版 152・153）。

SW2010（図版 29・43・44、262） 13C18 区に位置する。SB2020 内にある鍛冶炉である。炉の上部は

遺存せず、東側はSD2008に切られる。被熱範囲の平面形は楕円形を呈し、規模は、長径0.70 m以上、短径0.50 mである。被熱範囲のほぼ中央に鍛冶炉の底部と考えられる浅い円形のくぼみがあり、断面形は逆台形状となる。規模は、長径0.22 m、短径0.20 m、深さ0.05mである。覆土は2層に分層でき、1層はにぶい黄褐色土の灰層、2層は焼土ブロックを多量に含む赤褐色土である。鍛冶炉直下の地山は被熱が著しく、黒褐色を呈して硬化している。遺物は、覆土中から微細遺物として鍛造剝片7点、鉄滓・鉄滓破片200点以上、粒状の滓1点、炭化米2点が出土している。

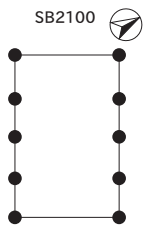
SK2119（図版29・30・43・44、262）　13C18区に位置する。SB2020内にある土坑である。東側の一部をSD2008に切られる。鍛冶炉であるSW2010の北隣に位置しており、土坑内は鉄滓が充填されたような状況であった。鍛冶炉に伴って設置された廃滓入れ用の穴と考えられる。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径0.33m、短径0.24m、深さ0.06mである。覆土は炭化粒を少量含む褐灰色シルトの単層である。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓、炉壁の破片が数点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片1,000点以上、鉄滓・鉄滓破片3,000点以上、粒状の滓1点が出土している（図版153）。

SK2120（図版29・44、262）　13C18区に位置する。SB2020内にある土坑である。鍛冶炉であるSW2010被熱範囲の南側に接して位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径0.43 m、短径0.39 m、深さ0.07 mである。覆土は炭化粒を微量に含む暗灰黄色土の単層で、上位から漆紙の破片（1363）が1点出土している。そのほかの遺物として、1層中から土師器無台椀・甕の破片などが数点出土している（図版153）。

SE2158（図版25･29･30･44、262）　13B22･23、13C2･3区に位置する。SB2020内にある井戸である。平面形は円形で、断面形は漏斗状である。規模は、上面直径2.06 ～ 2.19 m、底面直径0.59 ～ 0.37 m、深さ1.28 mである。底面はⅩⅤ層に達している。覆土は10層に分層した。SB2020とは直接の切り合いがなく、新旧関係については不明である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、黒色土器無台椀の破片が少量出土している。

SB2100（図版25・45、263 ～ 265）

調査区北西側の12・13Ａ区に位置する。梁間1間型（棟持無）の掘立柱建物である。平側柱筋は胴張り型となる。東西棟の建物で、規模は桁行4間(6.50m)、梁間1間(5.00m)で、桁行方向はＮ－65°－Ｗを示す。建物面積は約32.50㎡である。柱穴の掘形は、平面形が円形で、断面形は「U」字状である。規模は、直径0.10 ～ 0.42m、深さ0.47 ～ 0.85mで、柱痕跡の直径は0.11 ～ 0.16mである。遺物は出土していない。

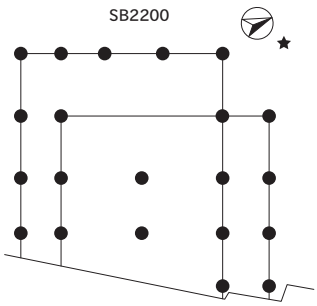


本建物に付属する遺構としてSD2029がある。SD2029は建物の周囲を全周する区画溝である。建物は区画溝内の中央からやや西側に偏って配置されており、東側にはわずかに空間を有する。

【SB2100関連遺構】

SD2029（図版25・45、265）　12・13A区に位置する。SB2100の周囲を隅丸長方形状に巡る区画溝である。断面形は弧状である。規模は、長さ32.00m、上幅0.42 ～ 0.85m、深さ0.20mである。覆土はオリーブ灰色シルトで、炭化物の混入が比較的多い上層と少ない下層の2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約400点出土している（図版153）。

SB2200（図版 28・46、266 ～ 269）



調査区東側の 9E、10D・E 区に位置するもので、東側は調査区外へ伸びる。廂が付く梁間１間型(棟持無)の半打込柱建物である。桁行３間(7.00m)以上、梁間１間（6.60m）の身舎に、１間幅の廂が西・南・北側の３面に付く。建物全体の規模は、桁行４間（10.00m）以上、梁間３間（10.00m）で、桁行方向はＮ－ 70°－ Ｗを示す。建物面積は 95.40㎡以上である。身舎の中央に中柱を持つもので、平側並びに妻側柱筋は千鳥型である。また、西側の廂は、ほかと比べて幅が広いこと、柱穴の規模が小さいこと、柱の据え方がここだけ掘立式であること、北端が１間欠けることなど、南･北側の廂とは異なる点が多い。本来、南北２面廂付きであったものに、何らかの理由で西側に廂を付け足している可能性も考えられる。また、西廂の P16 の底部からは、水平に置かれた状態で皿木地と思われる板状木製品(1379)が１点出土している。西側以外の柱はすべて半打込式の柱で、入側柱の P3・5、側柱の P19・20・22 の合計５基の柱穴から柱根を検出した。柱根はすべて下端が尖頭状に加工されている。この内、入側柱の P3 の柱根だけが尖頭部を上にして出土した。これについては、抜き取った柱の不要な部分（尖った下端部）を切断してその場で廃棄、柱を抜き取った後の柱穴に、切断された尖頭部が上下逆さまになって転げ落ちた、あるいは投げ入れられたものと考えられる。同様の事例は、SB2020（側柱 P23）や、XI層の建物である SB3200（入側柱 P4）でも確認されている。建物を構成する柱穴の掘形は、平面形が円形で、断面形は半円状である。直径は、入側柱が 0.52 ～ 1.86m、側柱が 0.20 ～ 0.76m で、根入れの深さは、北側の入側柱が 1.16 ～ 1.36m、北側の側柱が 0.84 ～ 1.20m である。柱根の規模は、比較的遺存状態のよい入側柱 P5 で直径 0.21m、側柱 P20 で直径 0.16m である。北側の一部を除き、柱根は見つかっておらず、あらかた抜き取られているものと考えられる。南側は北側に比べて根入れが浅いが、柱根の遺存していない柱穴では、柱の抜き取り痕跡がとらえきれていない可能性がある。本建物は、東側が調査区外となるため全貌は不明であるが、柱穴から少ないながらも鍛冶関連遺物や漆紙などが出土していることから、SB1400 や SB1500、SB2020 などと同様、屋内で複合的な作業を行っていた工房である可能性が考えられる。なお、P3 からは折り畳まれた漆紙の破片（1375）が１点出土している。重複する遺構の新旧関係は判然としないものもあるが、遺構の切り合いから本建物は SK1436 より新しく、SX1104、SD1103 より古いものと思われる。

遺物は、柱穴から土師器無台椀･有台椀、漆紙、炉壁、砥石、皿木地のほか、微細遺物として鍛造剝片２点、粒状滓１点、鉄滓・鉄滓破片 73 点、粒状の滓１点、炭化米 23 点、種類不明の炭化種子 14 点が出土している（図版 153・154）。

なお、柱根の樹種同定を行ったところ、P3・5・19・20・22 はすべてクリであった。また、P2 から出土したものは柱根ではなく何らかの部材片と考えられるものでマツ属複維管束亜属であった。

本建物に付属する可能性のある遺構として、建物の北西隅に位置する鍛冶炉 SW2065 がある。

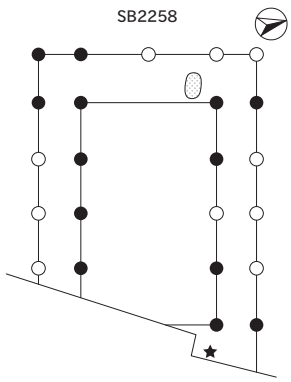
【SB2200 関連遺構】

SW2065（図版 28・46、269）　10D19・20 区に位置する。鍛冶炉である。本来であれば、SB2200 の北西隅の柱穴があるべき場所近くに位置している。SB2200 の鍛冶炉として設置するには場所的に違和感があり、別の建物が重複している可能性を念頭において周囲の精査を行ったが、該当するような遺構は検出されなかった。屋根を持たずに露天で鍛冶炉を構えることは考えにくいことから、SB2200 の軒を伸ばすなど何らかの方策を施して操業したものと思われる。平面形は円形で、断面形は弧状である。炉

の上部は遺存しない。規模は、長径 0.27m、短径 0.25m、深さ 0.06m である。覆土は 3 層に分層した。遺物は、覆土中から微細遺物として鍛造剝片 13 点、粒状滓 1 点、鉄滓・鉄滓破片 600 点、粒状の滓 10 点が出土している。

SB2258（図版 26・47、269・270）

建物の大半が、既に調査を終えている西部遺跡Ⅰの範囲にあったため、今回の発掘調査の段階では建物の存在を認識できなかった。このため、柱穴も土坑やピットとして個々に記録しており、残念ながら北側の平側柱筋については検出できなかった柱穴もある。同様に西部遺跡Ⅰの調査でも、各柱穴は土坑として報告されている。以下、整理調査の段階で得られた成果を基に 1 棟の建物として報告する。



調査区南東端の 5D・E 区を中心に位置するもので、建物の東側は調査区外へ伸びる。4 面廂が付く梁間 1 間型（棟持無）の掘立柱建物である。欠落している柱穴があるため全貌は不明であるが、平側柱筋は直線型と思われる。東西棟の建物で、桁行 4 間（8.85m）、梁間 1 間（5.40m）の身舎に、1 間幅の廂が 4 面付くものと想定される。建物全体の規模は、桁行 6 間（12.60m 以上）、梁間 3 間（8.70m）で、桁行方向は N －80°－ W を示す。建物面積は 109.62㎡以上である。柱根は遺存しないが、P1411 と SK1009 で不鮮明ながら柱痕跡が確認されている。なお、身舎の妻側面にある SK1002 については、位置的に壁芯棟持柱の柱穴である可能性もあるが、遺構の形状や覆土の堆積状況などから見て柱穴とは判断できなかった。また、建物の中央にある SK1033 と SK1036 についても、位置的に中柱の柱穴である可能性もあるが、同様の理由で柱穴とは判断できなかった。ここでは、棟持柱も中柱も持たない梁間 1 間型の建物として理解しておきたい。本建物は、東・西側の廂部分から鍛冶炉や地床炉を検出しており、複合的な作業を行っていた工房と考えられる。

遺物は、鍛冶炉（SW2259）の西隣に位置する柱穴 SK1460 から、土師器無台椀の破片が数点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 14 点、粒状の滓 1 点、鉄滓・鉄滓破片 79 点が出土している。

本建物に付属する遺構として SW2259、SK1587・1008 がある。SW2259 は鍛冶炉、SK1587 は鍛冶炉に伴う廃滓用の穴と考えられる。共に東側の廂部分に位置する。また、西側の廂部分には SK1008 があり、西部遺跡Ⅰでは焼土土坑（地床炉）として報告されている。

ほかに建物内には SK1459 が位置する。SK1459 は鍛冶炉である SW2259 を切っており、明らかに本建物より新しい土坑と考えられる。

【SB2258 関連遺構】

SW2259（図版 26・47、270）　5E20 区に位置する。SB2258 内にある鍛冶炉である。遺構の大半を SK1459 に切られ、被熱により還元化した壁面の一部だけが遺存している。現状で確認できる遺構の規模は径 0.20m ほどである。本遺構からの遺物の出土はないが、本遺構を切って構築した SK1459 の覆土中からは、炉壁や椀形鍛冶滓の破片のほか、微細遺物として鍛造剝片 183 点、粒状滓 1 点、鉄滓・鉄滓破片 567 点、粒状の滓 5 点などが出土しており、この地点で鍛冶作業が行われていた状況をよく示している。

SK1587（図版 26・47、270）　5E20 区に位置する。SB2258 内にある土坑で、東側は調査区外となる。鍛冶炉である SW2259 の北隣に位置しており、土坑内は鉄滓が充填されたような状況であった。鍛冶炉

に伴って設置された廃滓入れ用の穴と考えられる。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.70m 以上、短径 0.55m、深さ 0.17m である。覆土は多量の鉄滓などを含む灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 317 点、鉄滓・鉄滓破片 649 点、鉄器表面破片 6 点が出土している。

地　床　炉

SW1109（図版 23・48、270）

7A20・25、8A21 区に位置する。製塩関連の地床炉である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.79 m、短径 0.38m、深さ 0.04m である。覆土は赤褐色土の単層で、製塩土器の細片を多量に含む。

SW1119（図版 23・24・27・48、270）

8B17・18・23 区に位置する。製塩関連の地床炉である。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.00 m、短径 1.80m、深さ 0.20m である。覆土は 4 層に分層でき、火床面は 4 層上面にある。2 層中からは製塩土器の破片が 4,800 点以上出土している。3 層は焼土ブロックや灰からなる。4 層は明青灰色粘質土で火床を形成するための埋戻し土と思われる。この上面が火床面となり、著しく被熱して中心付近は赤色硬化している。遺物は、製塩土器に混じり土師器無台椀・有台椀・小甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯・瓶が少量出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 78 点、鉄器表面破片 4 点、炭化米 5 点、種類不明の炭化種子 1 点が出土している（図版 155）。

SW1219（図版 23・48、271）

6A24 区に位置する。地床炉である。平面形は不整形で、断面形は階段状である。規模は、長径 0.97 m、短径 0.56m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層でき、1 層は焼土ブロック主体の赤褐色土、2 層は赤灰色土となる。遺構底部の被熱は認められない。遺物は、覆土中から土師器無台椀が数点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 10 点が出土している（図版 155）。

SW1221（図版 23・27・48・65、271）

6B24 区に位置する。製塩関連の地床炉である。平面形は楕円形で、断面形は階段状、底部にピット状の深い部分があり、最深で 0.22m を測る。規模は、長径 0.94 m、短径 0.78m である。SK1589 と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は 4 層に分層でき、4 層上面が火床面となっている。遺物は、1 ～ 3 層を中心に製塩土器の破片や拳大の礫が数点出土している。

SW1250（図版 23・26・48、271）

5B10・15 区に位置する。地床炉である。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.40 m、短径 1.15m、深さ 0.18m である。重複する P1211・1249 より古い。覆土は 2 層に分層した。ほぼ中央で P1211 と重複してこれに切られる。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、須恵器長頸瓶・広口壺が数点出土している（図版 155）。

SW1268（図版 23・27・48、271・272）

6C2・3 区に位置する。地床炉である。平面形は円形で、掘形の断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.80 m、短径 0.74m、深さ 0.09m である。覆土は 3 層に分層した。1 層は明赤褐色土、2・3 層は灰混じりの土層となる。火床面は 1 層上面と見られる。遺物は、覆土中から土師器甕、須恵器無台杯の破片が各 1 点出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 30 点が出土している。

SW1462（図版 26・27・48、 2 72）

6C7 区に位置する。地床炉である。平面形は円形で、掘形の断面形は弧状である。規模は、長径 0.64 m、短径 0.56m、深さ 0.07m である。覆土は 2 層に分層した。火床面は 1 層上面と見られる。遺物は、覆土中から微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 17 点が出土している。

SW2025（図版 24・29・48、272）

11B19 区に位置する。地床炉である。掘り込みのない平らな被熱範囲を検出した。平面形は円形で、掘形の断面形は弧状である。規模は、長径 0.48 m、短径 0.45m、地山の被熱深度は 0.05m ほどである。本地床炉の周囲からは、小ピットがやや不規則な配置で 20 基ほど検出されている。小ピットの規模は径 0.02 ～ 0.04m、深さ 0.10 ～ 0.15m で、地面に細い棒状のものを斜めに突き刺したような形状を呈している。いずれも炉の中心部に向かって傾斜していることから本地床炉に関連した遺構であると考えられる。また、南側に隣接する SK2045 は付属施設と見られ、検出段階では焼けた礫が本地床炉の直上から SK2045 内にかけて多数分布していた。

SW2058（図版 30・48、272）

14E6 区に位置する。地床炉である。掘り込みのない平らな被熱範囲を検出した。被熱範囲の平面形は楕円形である。規模は、長径 0.32 m、短径 0.25m である。本遺構は SD2040 によって囲まれた区域に所在し、調査時は建物内の地床炉を想定したが、建物自体は検出されなかった。

井　　戸

SE1193（図版 23・49、272）

5A23 区に位置する。平面形は径 0.75m ほどの円形、底面形は径 0.65m の円形を呈する。断面形は箱状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 0.85m を測る。底面標高は 2.20m であり、底面はⅫ層に達している。覆土は 8 層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。灰色粘質土を基調とし、4 層から上位では黄灰色ブロックを含んでいる。中位の 5 層は炭化粒を多量に含む黒色土である。遺物は、覆土中から微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 18 点が出土している。

SE1194（図版 23・49、273）

5A15 区に位置する。ほぼ同位置に中世の井戸（SE598）が穿たれているため、西壁部分のみの遺存である。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形状と推定される。深さは現状は 1.12m を測る。底面標高は 1.87m であり、底面はⅫ層に達している。覆土は 4 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器小甕（1405）が 1 点出土している（図版 156）。

SE1226（図版 23・27・34・49、273）

7B19･20･24･25 区に位置する。平面形は長径 2.47 m、短径 2.23m の円形で、底面形は長径 3.00 m、短径 2.80m の円形である。断面形は漏斗状を呈し、壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位で屈曲し外傾する。深さは 1.00m を測る。底面標高は 1.78m であり、底面はⅫ層に達している。覆土は 4 層に分層した。1 ～ 3 層はレンズ状に堆積し 2 層を挟んで炭化物の流入が多い。4 層は炭化粒を少量含む青灰色粘質土である。SD1377 と重複するが、本遺構の方が古い。出土した遺物の総点数は 1,300 点以上で、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀・有台椀・甕・小甕、黒色土器椀、須恵器甕・瓶・広口壺の破片などが出土している。

SE1338（図版 27・50・65、273）

6D2・3 区に位置する。平面形は長径 1.02m、短径 1.03m の円形で、底面形は長径 0.45 m、短径 0.36m の楕円形である。断面形は逆台形状を呈し、壁面は急な角度で外傾する。深さは 1.02m を測る。底面標高は 1.74m であり、底面はⅩⅣ層に達している。覆土は 5 層に分層した。1・2 層は青灰色粘質土ブロックを含む黒褐色土で、1 層には炭化物が多量に含まれる。3 ～ 5 層は炭化物を少量含む青灰色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、須恵器甕の破片が 15 点ほど出土している。

SE1451（図版 27・50、273）

6D24、6E4 区に位置する。調査のための暗渠排水溝により遺構北側が失われ、平面形は不明である。断面形は漏斗状を呈し、壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位で屈曲し外傾する。深さは 0.60m を測る。底面標高は 2.20m であり、底面はⅫ層に達している。覆土は 5 層に分層した。青灰色粘土ブロックや炭化物を含む灰色を基調とした粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器甕の破片が少量出土している。

SE1502（図版 27・50、273）

6E9・14 区に位置する。調査のための暗渠排水溝により遺構北側が失われ、平面形は不明である。断面形は逆台形状を呈し、壁面は底面から外傾する。深さは 0.87m を測る。底面標高は 1.90m であり、底面はⅫ層に達する。覆土は 5 層に分層した。1 ～ 4 層は粘性のある黒色土を含む青灰色粘質土が漸移的に変化するが、5 層は腐植質の強い黒色粘質土である。新旧関係については、重複する SK1447 よりも新しい。SK1453 との新旧関係は不明である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、礫などが少量出土している。

SX2001-SE1（図版 29・51、274）

12D23・24、12E3・4 区に位置する。不整形な楕円形状の遺構である SX2001 の南端に穿たれた井戸である。検出面から一段低い平場を形成する SX2001 内には SX2001-SE1 ～ 3 の 3 基の井戸があり、覆土の堆積状況から判断して、これらは一連の遺構として機能していたものと考えられる。平面形は長径 1.72 m、短径 1.31m の楕円形で、底面形は長径 0.39m、短径 0.39m の円形である。断面形は漏斗状を呈し、壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、中位で屈曲し外傾する。深さは SX2001 の検出面から 1.44m、SX2001 底面から 1.12m を測る。底面標高は 1.18m で、ⅩⅣ層に達している。覆土は 5 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器有台杯、墨書土器、砥石の破片が少量出土している（図版 156）。

SX2001-SE2（図版 29・51、274）

12D19・24 区に位置する。不整形な楕円形状の遺構である SX2001 の中央やや南寄りに穿たれた井戸である。平面形は長径 1.18m、短径 1.18m の円形、底面形は長径 0.50m、短径 0.45m の円形である。断面形は漏斗状で、Ⅻ層中に埋没していた自然木を除去できなかったためか、底部は階段状になっている。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がるが、すぐ外傾する。深さは SX2001 の検出面から 0.88m、SX2001 底面から 0.56m を測り、底面標高は 1.74m で、Ⅻ層に達している。SX2001 内の 3 つの井戸の中では最も浅いが、調査中に湧水を確認している。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SX2001-SE3（図版 29・51、274）

12D15、13D11 区に位置する。不整形な楕円形状の遺構である SX2001 の北端に穿たれた井戸である。平面形は長径 1.61m、短径 1.35m の円形で、底面形は長径 0.45m、短径 0.45m の円形である。断

面形は漏斗状で、底面から垂直に立ち上がり、中位で崩落のためやや広がるが、上半は外傾する。深さはSX2001の検出面から2.13m、SX2001底面から1.80mを測り、底面標高は0.50mで、XV層に達している。SX2001内の井戸では最も深い。覆土は7層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀･小甕、須恵器甕、曲物、炉壁の破片が少量出土している（図版156）。

SE2007（図版24・51、274・275）

10A14・19区に位置する。平面形は長径0.93m、短径0.83mの円形、底面形は長径0.40m、短径0.40mの円形である。断面形は箱状で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは1.08mを測り、底面標高は約1.60mである。底面はXV層に達している。覆土は4層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。炭化粒や砂粒を含む灰色を基調としたシルトである。遺物は、底部付近から土師器無台椀、須恵器甕の破片などが数点出土している（図版157）。

土　　坑

SK1078（図版28・52、275）

8D5・10、9D1・6区に位置する。平面形は長方形を意識し、断面形は逆台形状である。規模は、長径2.92m、短径2.35m、深さ0.25mである。覆土は3層に分層した。覆土下層（2層）に炭化物層が0.08mほど堆積しているが、この堆積状況は本遺構に切られているSK1159も同じであるため、SK1159の埋没後、本遺構が同じ目的で、ほぼ同じ位置に構築された可能性が高い。出土した遺物の総点数は1,000点以上を数えるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器甕、椀形鍛冶滓、羽口の破片のほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片163点、粒状の滓1点、鉄器表面破片4点、炭化米千点以上、種類不明の炭化種子34点が出土している（図版157）。

SK1085（図版24・28・52、275）

9B11・12・16・17区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.42m、短径0.41m、深さ0.17mである。重複するSK1087に一部を切られている。覆土は2層に分層した。1層は炭化粒を多量含む暗灰色粘質土、2層は炭化粒を微量に含む灰色シルトである。遺物は出土していない。

SK1087（図版24・28・52、275）

9B12区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径1.63m、短径1.30m、深さ0.51mである。重複するSK1085より新しい。覆土は3層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。1層は炭化粒や黄灰色砂質土ブロックを多量に含む暗灰色粘質土、2層は炭化粒を多量に含む青灰色粘質土、3層は暗灰色砂質土ブロックや炭化粒を少量含む青灰色シルト質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約130点出土している。

SK1088（図版24・28・53、275）

9B8・9・13区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径2.42m、短径1.53m、深さ0.18mである。覆土は4層に分層した。いずれも炭化粒を含み、1層は黄灰色砂質土を多量に含む暗灰黄色粘質土、2層は黄灰色砂質土を少量と炭化粒を多量に含む黒色土、3層は灰色粘質土、4層は灰白色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約50点出土している。

SK1105（図版23・24・52、276）

8A7・12区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.72m、短径

0.65m、深さ 0.17m である。覆土は、炭化粒が多く砂質土ブロックが多量に混入する 1 層と、炭化粒の少ない 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 20 点出土している。

SK1106（図版 23・52、276）

8A2・7 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.67m、短径 0.61m、深さ 0.17m である。覆土は砂質土ブロックを多量に混入する暗灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK1107（図版 23・53、276）

8A11・12 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.83m、短径 0.80m、深さ 0.16m である。覆土は粘土ブロックが少量混入する暗灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器杯蓋、用途不明の鉄製品の破片などが約 70 点出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 7 点、炭化米 57 点、種類不明の炭化種子 9 点が出土している（図版 157）。

SK1108（図版 23・53、276）

8A24 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.77m、短径 1.08m、深さ 0.10m である。長径 1.77m、短径 1.08m の規模を測る。平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さは 0.10m を測る。覆土は暗灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器無台椀の破片が約 35 点出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 34 点が出土している。

SK1110（図版 23・53・64、276・277）

8A21 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.84m、短径 0.95m、深さ 0.15m である。重複する SK1551 より新しい。覆土は暗灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕の破片が少量出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 11 点が出土している（図版 157）。

SK1111（図版 23・24・53、277）

8A12・13・17・18 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.45m、短径 1.30m、深さ 0.27m である。覆土は暗灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 12 点、粒状滓 1 点、鉄滓破片 85 点が出土している。

SK1112（図版 24・53、277）

8A19 区に位置する。長径 1.04m、短径 0.82m の規模を測る。平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形状を呈し、深さは 0.12m を測る。覆土は暗灰色粘質土の単層で、砂質土ブロックが多量に混入している。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1113（図版 24・54、277）

8A19・20 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.20m、短径 1.10m、深さ 0.14m である。覆土は暗灰色粘質土の単層で、砂質土ブロックが多量に混入している。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片数点が出土している。

SK1114（図版 24・27・28・54、277）

8B9・10・14 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.25m、短径 0.60m、深さ 0.26m である。覆土は暗灰色粘質土で、炭化粒や砂質土ブロックを多量に混入する 1 層

と炭化粒の少ない 2 層とに分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕の破片が数点出土している。

SK1115（図版 23・24・27・54、278）

8B8 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.67m、短径 1.20m、深さ 0.32m である。覆土は暗灰色粘質土の単層で、砂質土ブロックが多量に混入している。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕、鉄製品の破片が数点出土している（図版 157）。

SK1118（図版 23・27・34・54、278）

8B21 区に位置する。平面形は円形で、断面形は「U」字状である。規模は、長径 0.70m、短径 0.65m、深さ 0.50m である。SB1500 の P34 と重複してこれに切られる。覆土は青灰色粘質土で、炭化粒が少量の 1 層と多量の 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀、黒色土器無台椀の破片が 4 点出土している（図版 157・158）。

SK1120（図版 24・27・28・55、278）

8B19・20・24・25 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 3.16m、短径 2.65m、深さ 0.42m である。覆土は 4 層に分層した。いずれも炭化粒を含むが特に 2 層では混入比率が高い。1 層は青灰色粘質土、2・3 層は暗灰色粘質土、4 層は灰色粘質土である。遺物の大半は底面付近の 4 層から出土している。出土した遺物の総点数は約 600 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。土師器無台椀には完形率の高いものが目立つ。また、4 層からは折り畳まれた漆紙の破片（1486）が 1 点出土している。遺物は、土師器無台椀・有台椀、黒色土器無台椀・有台椀、須恵器甕、製塩土器、墨書土器、漆紙の破片などのほか、微細遺物として鍛造剝片 10 点、鉄滓･鉄滓破片 76 点、炭化米 3 点、種類不明の炭化種子 1 点が出土している（図版 158・159）。

SK1121（図版 23・24・27・54、278）

8B22、8C2 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.02m、短径 0.72m､深さ 0.18m である。覆土は灰色粘質土の単層である。重複する SD1377 より新しいとしたが、SD1377 覆土の一部を誤認した可能性も残る。遺物は、1 層中から土師器無台椀、鉄製品などの破片が約 50 点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 21 点が出土している（図版 159）。

SK1144（図版 23・27・34・35・54、279）

8B16・21 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.76m、短径 1.35m、深さ 0.35m である。SD1377 の埋没後に構築されているため、SB1500 廃絶後の遺構である。覆土は 3 層に分層した。1 層は炭化粒を少量含む暗灰黄色粘質土で、埋め戻された可能性が高い。2 層を中心に炭化粒の流入が見られる。遺物は出土していない。

SK1153（図版 23・27・55、279）

7B11・12・16・17 区に位置する。平面形は不整形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.56m､短径 1.68m､深さ 0.22m である。SK1154 との新旧関係は不明である。覆土は 2 層に分層した。炭化粒を含む灰白色粘質土を基調とし、2 層は黄灰色砂ブロックを多量に含んでいる。遺物は、2 層中から土師器無台椀・甕・小甕・鍋、黒色土器の破片が約 40 点出土している（図版 159）。

SK1154（図版 23・27・55、279）

7B6・7・11・12 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.58m、短径 1.20m、深さ 0.26m である。SK1153 との新旧関係は不明である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀、黒色土器、須恵器無台杯の破片が少量出土している（図版 159）。

SK1156（図版 28・31・56、279）

10C22・23、10D2・3 区に位置する。平面形は長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.56m、短径 2.07m、深さ 0.22m である。SD1077 の埋没後に構築されているため、SB1400 廃絶後の遺構である。覆土は 2 層に分層でき、1 層はオリーブ灰色シルト、2 層は炭化粒を微量に含む灰色シルトである。出土した遺物の総点数は約 200 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、椀形鍛冶滓の破片などのほか、微細遺物として鍛造剝片 2 点、鉄滓・鉄滓破片数百点、炭化米 3 点、種類不明の炭化種子 12 点が出土している（図版 159）。

SK1157（図版 23・55、279）

7A25 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.86m、短径 0.85m、深さ 0.10m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1158（図版 23・27・56、279・280）

7B7・8・12・13 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.78m、短径 1.52m、深さ 0.24m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を多量に含む灰色粘質土、2 層は粘土ブロックが少量混入する灰白色粘質土である。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀の破片など約 100 点が出土している（図版 159）。

SK1159（図版 28・52、275・280）

8D10・15、9D6・11 区に位置する。平面形は長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.75m、短径 2.15m、深さ 0.32m である。覆土は 4 層に分層した。覆土下層（3・4 層）は炭化粒層で層厚 0.10m ほどであるが、この堆積状況は本遺構を切る SK1078 も同じであるため、本遺構の埋没後、SK1078 が同じ目的で、ほぼ同じ位置に穿たれたことになる。遺物の大半は 4 層から出土している。遺物は、土師器無台椀・有台椀・小甕、黒色土器有台椀の破片などが少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 24 点、鉄滓・鉄滓破片 497 点、鉄器表面破片 24 点、炭化米数百点が出土している（図版 159）。

SK1160（図版 23・56、280）

7A21 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.08m、短径 0.83m、深さ 0.27m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK1191（図版 23・56、280）

5A17・18・22・23 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.70m、短径 0.62m、深さ 0.56m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は粘土ブロックを多量に混入する黒色粘質土、2 層も粘土ブロックを多量に混入する黄灰色粘質土である。遺物は出土していない。

SK1192（図版 23・56、280）

5A25 区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.69m、短径 0.58m、深さ 0.20m である。覆土は 3 層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。炭化粒を含む灰色粘質土を基調とするが、1 層には炭化物が多い。3 層は黄灰色砂を少量含むため、やや明るい色調（灰白色）となっている。遺物は、1 層中から土師器無台椀（1510）の完形個体 1 点が出土している（図版 159）。

SK1208（図版 23・56、281）

5B5 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.54m、短径 0.48m、深さ 0.15m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕の破片が数

点出土している。

SK1218（図版 23・26・57、281）

5B4・9 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.28m、短径 1.00m、深さ 0.15m である。重複する SK1301 より新しい。覆土は灰色粘質土の単層で、砂が多量に混入する。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1229（図版 23・27・57、281）

7A22、7B2 区に位置する。平面形は不整形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.65m、短径 1.82m、深さ 0.47m である。覆土は 4 層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。青灰色粘質土を基調とするが、1 層は多量の炭化粒を含むため暗灰色となり、3 層は黄灰色砂を多量に含むため明青灰色となっている。遺物は、覆土中から土師器無台椀・鉄鉢などの破片が約 200 点出土している（図版 159）。

SK1240（図版 23・57、281）

5B4 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.88m、短径 0.72m、深さ 0.15m である。覆土は灰色粘質土の単層で、粘土ブロックの混入が目立つ。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が 1 点出土している。

SK1244（図版 23・26・57、281・282）

5B19・20 区に位置する。規模は不明であるが、残存部の径は 1.00m、深さは 0.20m である。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形状である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・小甕の破片が数点出土している。

SK1246（図版 23・27・57、282）

7B6 区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.47m、短径 0.40m、深さ 0.14m である。覆土は灰色粘質土の単層だが、粘土ブロックが多量に混入するほか、焼土ブロックを少量含む。遺物は、1 層中から土師器無台椀、黒色土器の破片が数点出土している。

SK1251（図版 23・58、282）

6A17・18・22・23 区に位置する。中世遺構の SE048・102 に壊され平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、残存部で径 2.60m、深さは 0.40m である。覆土は 4 層に分層した。いずれも炭化粒を含み、1 ～ 3 層は灰色粘質土を基調とし、3 層は炭化粒の混入比率が高い。4 層は灰色砂質土である。出土した遺物の総点数は約 140 点である。大半は土師器無台椀の破片であるが、遺構の中央付近からはほぼ完形の土師器無台椀 8 点（1514 ～ 1521）が正位で重なった状態で出土している。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器有台椀、須恵器無台杯などが出土している（図版 159・160）。

SK1252（図版 23・27・34・57、282）

6B24・25 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.33m、短径 1.15m、深さ 0.32m である。SD1377 を壊して構築される。覆土は 2 層に分層した。出土した遺物の総点数は約 100 点で、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯・甕、製塩土器などが出土している（図版 160）。

SK1255（図版 23・26・27・58、282）

6B16 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は半円状である。規模は、残存部で径 0.53m、深さ 0.20m である。覆土は 4 層に分層でき、特に 4 層に炭化粒が目立つ。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している（図版 160）。

SK1286（図版 28・58、283）

9E14・15・19 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は弧状である。規模は、残存部で径 1.28m、深さ 0.35m である。P1344・1621 よりも新しい。覆土は 5 層に分層した。灰色シルト質土を基調とし、炭化粒の多い層と少ない層が互層となっている。特に 2 層は炭化粒を主体とした層で黒色となっている。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片などが約 120 点出土したほか、微細遺物としては鍛造剝片 5 点、鉄滓・鉄滓破片 157 点、鉄器表面破片 3 点、炭化米 53 点、種類不明の炭化種子 8 点が出土している。

SK1301（図版 23・26・57、283）

5B4・9 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.08m、短径 0.72m、深さ 0.13m である。SK1218 に一部を壊される。覆土は粘土ブロックを多く含む灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している（図版 160）。

SK1345（図版 28・58、283）

9E14 区に位置する。北側を SK1286 に壊され、平面形は不明であるが、断面形は逆台形状である。規模は、短径 0.73m、深さ 0.20m である。遺物は出土していない。

SK1354（図版 26・27・58、283）

6D21 ～ 23、6E1 ～ 3 区に位置する。平面形は長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 3.18m、短径 2.60m、深さ 0.51m である。覆土は 6 層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。青灰色粘質土を基調とし、各層は炭化粒の混入比率によって色調が異なるが、特に 2 層では混入比率が高く黒色となっている。出土した遺物の総点数は約 770 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物の出土は炭化粒が多い 2 層に集中するが、漆紙の破片（1535）は 1 層から出土している。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台椀・甕・小甕、黒色土器、須恵器無台杯・甕・瓶、漆紙の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 7 点、鉄滓・鉄滓破片 40 点、鉄器表面破片 1 点、炭化米 77 点、種類不明の炭化種子 3 点が出土している（図版 160）。

SK1356（図版 27・28・59、283）

8D24・25、8E4・5・9・10 区に位置する。平面形は溝状の楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 3.66m、短径 0.80m、深さ 0.30m である。覆土は 4 層に分層した。3 層には焼土が全面にわたって見られるが、ブロック状であるため、この土坑に廃棄したものと考えられる。出土した遺物の総点数は約 120 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、黒色土器無台椀の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 9 点、鉄滓・鉄滓破片 41 点、鉄器表面破片 1 点、、種類不明の炭化種子 1 点が出土している（図版 160）。

SK1357（図版 27・28・59、284）

8E3・4・8・9 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.90m、短径 1.70m、深さ 0.26m である。土層は 4 層に分層した。出土した遺物の総点数は約 1,630 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器甕・瓶・広口壺、緑釉陶器、墨書土器、椀形鍛冶滓の破片などが出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 4 点、鉄滓・鉄滓破片 184 点、鉄器表面破片 7 点、炭化米 93 点が出土している（図版 160・161）。

SK1358（図版 27・59、284）

8E2・3・7・8 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.01m、短径 0.93m、深さ 0.33m である。覆土は 2 層に分層した。いずれも灰・炭化粒・焼土粒を含み、1 層は

黒色粘質土、2 層は礫を含む黒色シルトである。出土した遺物の総点数は約 410 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台鉢、灰釉陶器椀の破片が出土している（図版 161）。

SK1361（図版 26・59、284）

5D20・25、6D16・21 区に位置する。平面形は長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.60m、短径 2.10m、深さ 0.59m である。覆土は 3 層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。炭化粒を含む青灰色粘質土を基調とするが、1 層には礫が混入している。出土した遺物の総点数は約 400 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、椀形鍛冶滓の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剥片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 15 点、炭化米 1 点が出土している（図版 161）。

SK1363（図版 27・28・60）

8C19 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.94m、短径 0.60m、深さ 0.11m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は焼土粒・灰・炭化粒を含むしまりの強いオリーブ褐色土、2 層は炭化粒を微量に含む暗緑灰色土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1364（図版 27・28・60、284）

8C13・14 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.41m、短径 0.89m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 150 点出土している（図版 161）。

SK1365（図版 27・28・60、284）

8C8・9・14 区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 2.09m、短径 1.80m、深さ 0.18m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は灰色土で炭化層がラミナ状に形成されている。2 層は灰・炭化粒を含むオリーブ灰色土である。出土した遺物の総点数は約 500 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、灰釉陶器椀の破片が出土している（図版 161）。

SK1369（図版 27・60、285）

8C13 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.63m、短径 0.48m、深さ 0.23m である。覆土はオリーブ黒色土の単層で、炭化粒が少量混入する。遺物は、1 層中から土師器無台椀、黒色土器椀などの破片が約 40 点出土している。

SK1387（図版 26・27・60、285）

6C17 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.00m、短径 0.94m、深さ 0.16m である。覆土は青灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から羽口の破片（1564）が 1 点出土したほか、微細遺物として鉄滓破片 288 点、鉄器表面破片 1 点が出土している（図版 161）。

SK1406（図版 27・60、285）

6D13 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.04m、短径 0.78m、深さ 0.13m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を多量に含む黒色土、2 層は炭化粒を少量含む灰色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器無台杯の破片が数点出土している。

SK1407（図版 27・60、285）

6D7・8 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.18m、短径 0.88m、深さ 0.42m である。覆土は色調の違いから 2 層に分層した。いずれも炭化粒を少量含み、1 層は灰色粘質土、

2層は青灰色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・器台などの破片が数点出土している（図版161）。

SK1421（図版27・61、285・286）

6D5・10、7D1・6区に位置する。平面形は長方形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径1.28m、短径1.18m、深さ0.28mである。重複するSK2226との新旧関係は不明である。覆土は2層に分層した。いずれも炭化粒を少量含み、1層は黄灰色粘土ブロックを多量に含む暗灰色粘質土、2層は黄灰色ブロックを少量含む灰白色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕の破片が少量出土している（図版161）。

SK1436（図版28・61、286）

10E1・2・6・7・11・12区に位置する。平面形は不明だが、断面形が弧状の大型の土坑である。規模は、短径3.57m、深さ0.46mである。SB2200と重複するが、本遺構の方が古い。覆土は5層に分層した。2・3層には焼土ブロックが多量に混入する。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、黒色土器有台皿、管状土錘の破片などが少量出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片52点、炭化米154点、種類不明の炭化種子23点が出土している（図版161）。

SK1447（図版27・50、286）

6E9・14区に位置する。平面形は不明だが、断面形が弧状の大型の土坑である。規模は、東西軸の径3.00m、深さ0.42mである。重複関係にあるSK1453、SE1502より本遺構の方が古い。覆土は3層に分層した。1層は炭化粒を多量に含む黒色粘質土、2層は青灰色粘質土、3層は青灰色粘質土ブロックを多量に含む暗灰色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、須恵器無台杯・甕の破片が少量出土している。

SK1449（図版27・61、286）

6C18区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、東西軸で径0.39m、深さ0.17mである。覆土は灰色粘質土の単層で、粘土ブロックが主体となる。遺物は、1層中から土師器無台椀・甕の破片が数点出土している。

SK1450（図版27・61、286）

6D8区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径0.95m、短径0.55m、深さ0.12mである。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1層中から土師器無台椀・小甕の破片が数点出土している。

SK1452（図版27・61、286）

6D24区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、東西軸の径0.47m、深さ0.20mである。覆土は炭化粒の量で2層に分層した。1層は炭化粒を少量含む灰色粘質土、2層は炭化粒を微量に含む灰白色粘質土である。遺物は出土していない。

SK1453（図版27・50、286）

6E14・15区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、東西軸の径0.83m、深さ0.48mである。重複関係にあるSK1447、SE1502より本遺構の方が新しい。覆土は3層に分層でき、1層が黒褐色粘質土、2・3層は青灰色粘質土で、覆土の様相がⅣ層遺構と似ており、中世の遺構である可能性も考えられる。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が2点出土している。

SK1459（図版 26・47・61、270・287）

5E20 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸の径 0.77m 、深さ 0.30m である。重複する SW2259 を切って構築する。覆土は 2 層に分層でき、いずれも粘土ブロックが多量に混入している。遺物は、覆土中から椀形鍛冶滓（1574）、炉壁（1575）の破片が各 1 点出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 183 点、粒状滓 1 点、粒状の滓 5 点、鉄滓・鉄滓破片 567 点などが出土している（図版 161）。出土遺物の大半は SW2259 に関連した遺物と考えられる。

SK1466（図版 27・62、287）

6E13・14 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.63m、短径 0.57m、深さ 0.20m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK1474（図版 27・28・62、287）

8E14・15・19・20 区に位置する。遺構の一部は調査区外にあり、平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸の径 2.20m、深さ 0.19m である。覆土は 3 層に分層した。炭化粒を含む灰色土を基調としているが、2 層は炭化粒を多量に含むオリーブ黒色土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片数十点、鉄滓･鉄滓破片 214 点、炭化米 2 点、種類不明の炭化種子 76 点が出土している。

SK1489（図版 23・27・62、288）

7B1・6 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.90m、短径 1.70m、深さ 0.16m である。覆土は灰色粘質土の単層である。重複する P1174 に切られている。遺物は、1 層中から土師器無台椀、黒色土器椀などの破片が約 100 点出土している。

SK1499（図版 27・41・62、288）

7C19･20･24･25、7D4･5 区に位置する。SB1500 内にあって建物の柱穴と重複する浅い土坑である。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 2.45m、短径 1.82m、深さは最深部で 0.14m である。覆土は 2 層に分層した。SB1500-P46 や SK1536・1537 と重複するが、切り合い部分が小さく、新旧関係は判別しがたい。ただし、検出段階では本遺構がはっきり識別でき、SB1500-P46 が識別できなかったことから、本遺構は SB1500 より新しいものと考えられる。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器甕・瓶の破片が少量出土している（図版 162）。

SK1513（図版 27・62、288）

8D18 区に位置する。SB1500 内にあって建物の柱穴と重複する土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.84m、短径 0.62m、深さ 0.20m である。覆土は暗灰黄色土の単層である。SB1500-P42 と重複する。切り合い部分が小さく新旧関係は判別しがたいが、遺物の出土状況から見て、SB1500-P42 よりも新しいと思われる。土坑内には、完形率の高い土師器椀を含め、多量の土器片、拳大の礫などが投棄されたような状態であった。遺物は、覆土中から土師器無台椀･小甕、黒色土器有台椀、椀形鍛冶滓の破片などが出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 50 点、炭化米 1 点などが出土している。

SK1526（図版 27・62・288）

7E13 区に位置する。遺構東側が調査のための暗渠排水溝にかかるため平面形は不明だが、断面形は弧状である。規模は、南北軸で径 0.60m、深さ 0.21m である。覆土は炭化粒の量で 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1527（図版 26・62、288）

5D10・15 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.55m、短径 0.51m、深さ 0.30m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1529（図版 23・27・63、288・289）

7B7 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.06m、短径 1.05m、深さ 0.23m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK1531（図版 27・34・64、289）

6C25、6D5、7C21、7D1 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.00m、短径 1.70m、深さ 0.65m である。覆土は焼土粒や炭化粒を多く含む青灰色粘質土の単層である。SE107（中世の井戸）、SD1377 と重複してこれに切られる。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕の破片などが少量出土している。礫、炭化材などが出土している（図版 162）。

SK1533（図版 27・28・34・63、289）

8C18 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は弧状である。規模は、遺存部の最大径 1.22m、深さ 0.11m である。覆土は灰色シルトの単層である。新旧関係では SD1377 を壊して構築しているため、本遺構の構築時期が SB1500 廃絶後と考えることが可能である。遺物は、1 層から土師器無台椀、須恵器甕、灰釉陶器椀、砥石の破片が少量出土しているほか、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 42 点、鉄器表面破片 16 点、炭化米 5 点、種類不明の炭化種子 2 点が出土している（図版 162）。

SK1535（図版 27・28・63、289）

8C4・5・9・10 区に位置する。SE057、SD1077、SK1365・1573 など新しい遺構によって壊され、平面形は不明であるが、深さは 0.15m である。周囲の遺構と比較して最も古い遺構である。遺物は、覆土中から土師器無台椀（1604）の破片が少量出土している（図版 163）。

SK1539（図版 27・63、289）

6D9 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、遺存部の最大径 0.70m、深さ 0.13m である。覆土は灰色粘質土の単層で、砂が混入する。遺物は、1 層中から土師器無台椀の完形個体（1604）1 点と破片数点が出土している（図版 163）。

SK1540（図版 27・64、289）

7E12・13 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸で径 2.20m、深さ 0.12m である。覆土は灰色粘質土の単層である。中央部を中世遺構である SK610 に切られる。SD1491 と重複するが、本遺構の方が新しい。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が約 30 点出土している。

SK1544（図版 27・64、290）

6D14･15･19･20、7D11･16 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は中央付近が深い弧状である。規模は、南北軸の遺存部で 3.75m、深さ 0.34m である。覆土は 2 層に分層した。灰白色粘質土を基調とし、炭化粒は 1 層に多く 2 層には少ない。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 300 点出土したほか、灰釉陶器椀の破片が 1 点出土している。

SK1551（図版 23・64、290）

8A21、8B1 区に位置する。平面形は方形で、断面形は弧状である。規模は、1.39m 四方、深さ

0.20m である。重複する SK1110 より古い。覆土は 2 層に分層した。2 層は炭化粒を多量に含み、土師器片や礫が混入する。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕の破片が少量出土している。

SK1557（図版 23・64、290）

5A20、6A16 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.97m、短径 0.85m、深さ 0.15m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK1569（図版 23・64、290）

6A21区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.79m、短径 0.64m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層でき、1 層は粘土ブロックが多量に混入している。遺物は出土していない。

SK1573（図版 27・28・65、291）

8C9・10・14・15 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.69m、短径 1.02m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層した。1 層の方が炭化粒・焼土粒を多く含む。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片などが約 140 点出土している。

SK1589（図版 23・27・65、291）

6B24、6C4 区に位置する。平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸で 0.60m、深さ 0.18m である。SW1221 と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は 2 層に分層した。共に黄灰色粘土ブロックを多量に含む灰色粘質土であるが、1 層は炭化粒を少量含む。遺物は、覆土中から土師器甕の破片が数点出土している。

SK1590（図版 24・27・65、291）

8C3・4・8 区に位置する。遺存状態が悪く平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸で 1.60m、深さ 0.24m である。SD1377 と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を多量に含むシルト質土、2 層は灰色シルトブロックを多量に含み炭化粒を主体とした黒色土である。2 層からは完形率の高い土師器無台椀が複数出土している。遺物は、主に 2 層中から土師器無台椀、黒色土器無台椀、椀形鍛冶滓の破片が出土したほか、微細遺物として鉄滓･鉄滓破片 47 点、粒状の滓 2 点、炭化米 22 点が出土している（図版 163）。

SK1591（図版 24・65、291）

8A24 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.36m、短径 1.05m、深さ 0.11m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片などが数点出土している。

SK1615（図版 27・65）

8D6 区に位置する。SB1500 内にあって建物の柱穴と重複する土坑である。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、径 0.58m、深さ 0.13m である。覆土は炭化粒を少量含む暗オリーブ褐色シルトの単層である。SB1500-P15 と重複するが、切り合い部分が小さく、新旧関係は判別しがたい。遺物は、覆土中から微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 13 点が出土している。

SK1630（図版 65、291・292）

6D2・3 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.34m、短径 1.07m、深さ 0.20m である。灰白色粘質土を基調とし、炭化粒の混入量による色調の違いで 6 層に分層

した。特に1層は炭化粒の混入量が多く黒色を呈する。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕、須恵器無台杯の破片などが約25点出土している。

SK1631（図版65、292）

6C12・13区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.72m、短径0.50m、深さ0.12mである。覆土は2層に分層した。1層は炭化粒を多量に含む黒色粘質土、2層は炭化物を少量含む灰色粘質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が9点出土している。

SK1660（図版65、292）

6D12区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.84m、短径0.74m、深さ0.16mである。覆土は2層に分層した。遺物は、覆土中から須恵器無台杯の破片が1点出土している。

SK1686（図版66、292）

5C8区に位置する。平面形は円形で、断面形は半円状である。規模は、径0.50m、深さ0.26mである。覆土は3層に分層した。1層は炭化粒を微量に含む暗灰色シルト、2層は炭化粒を中量含む灰オリーブシルト、3層は炭化粒を少量含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

SK2005（図版29・66、292・293）

13C22・23区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.86m、短径0.82m、深さ0.28mである。覆土は5層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積する。中層（2・3層）は炭化粒を多量に含み、3層には焼土ブロックが含まれる。4・5層はオリーブ灰色シルト質土ブロックを多量に含むオリーブ灰色を基調としたシルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SK2006（図版24・66、293）

10A4･5区に位置する。遺構西側が調査区外のため平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸で1.59m、深さ0.69mである。覆土は5層に分層した。遺物は、覆土中から径0.10～0.20mほどの円礫が7点出土している。

SK2011（図版29・30・66、293）

13C23・24区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径0.74m、短径0.70m、深さ0.18mである。覆土は2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2015（図版25・29・66、293）

12B18区に位置する。平面形はやや不整な円形で、断面形は半円状である。規模は、長径0.70m、短径0.61m、深さ0.19mである。覆土は2層に分層した。遺物は出土していない。

SK2031（図版29・66、293）

12C24・25、12D4・5区に位置する。平面形はやや不整な楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径3.52m、短径2.50m、深さ0.24mである。覆土は5層に分層した。オリーブ灰色シルトを基調とするが、2層に砂粒を含み、3層には炭化粒が主体的に含まれるのが特徴である。本遺構とほぼ同規模であり、類似した炭化粒主体層を持つSK2046が南に接している。また、SB2020の区画溝であるSD2150に隣接し、覆土3層の炭化粒は建物側に偏りを見せていることから、SB2020との関係が指摘される。出土した遺物の総点数は約200点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器瓶、管状土錘の破片が出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓

破片 235 点、鉄器表面破片 24 点、炭化米 128 点が出土している（図版 163）。

SK2045（図版 24・29・67、294）

11B18・23 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.12m、短径 0.82m、深さ 0.13m である。覆土は褐灰色シルトで、炭化粒の少ない上層と多い下層で 2 層に分層した。本遺構からは被熱して割れた礫が 96 点出土しているが、遺構周囲で取り上げられた礫を含めて考えると、隣接する SW2025 の方向から礫が遺構内に流れ込んだものと理解され、SW2025 との関係が指摘される。遺物は、覆土中から礫が 96 点、土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2046（図版 29・67、294）

12D3・4・5・9 区に位置する。平面形はやや不整な楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 3.05m、短径 2.20m、深さ 0.42m である。覆土は 7 層に分層した。炭化粒を少量含む暗オリーブシルトを基調とした層と、炭化粒を多量に含み黒色を基調とした層とが互層堆積する。本遺構と同規模であり、類似した炭化物主体層を持つ SK2031 が北に接している。また、SB2020 の区画溝である SD2150 に隣接し、炭化物・炭化粒が建物側に偏りを見せることから、SB2020 との関係が指摘される。出土した遺物の総点数は約 400 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕、須恵器甕の破片が出土したほか、微細遺物として 3・4 層を中心に鉄滓・鉄滓破片 171 点、鉄器表面破片 59 点、炭化米 47 点が出土している（図版 163）。

SK2056（図版 30・67、294）

14D21 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.51m、短径 1.33m、深さ 0.37m である。覆土は 4 層に分層した。1・2 層は炭化粒を含む暗緑灰色粘質土、3・4 層は炭化粒を微量に含むオリーブ灰色シルト質土である。P2124 と重複するが、本遺構の方が新しい。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 50 点出土している（図版 163）。

SK2057（図版 30・67、294）

14E1・2・6 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.79m、短径 1.53m、深さ 0.16m である。重複する P3016 より古い。覆土はオリーブ灰色シルトであるが、焼土ブロックの量で 2 層に分層した。1 層には多量の焼土ブロックが混入している。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 30 点出土している。

SK2061（図版 30・67、294）

14C3・8・9 区に位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.30m、短径 1.25m、深さ 0.19m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を少量含む褐色シルト、2 層は炭化粒を微量に含む暗褐色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片など約 90 点が出土している。

SK2062（図版 25・30・68、295）

14B18・23 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.09m、短径 0.59m、深さ 0.42m である。SD2060 と重複するが、本遺構の方が新しい。覆土は 4 層に分層した。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀、黒色土器無台椀の破片など約 150 点が出土している（図版 163）。

SK2088（図版 25・30・68、295）

14C1 区に位置する。調査のトレンチに切られ詳細は不明だが、断面形は弧状である。規模は、南北軸で 0.82m、深さ 0.09m である。覆土は炭化粒を少量含む灰色シルトの単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片など約 40 点が出土している。

SK2090（図版 25・30・68、295）

13C5･10、14C1･6 区に位置する。平面形は東西に長い不整形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.28m、短径 0.90m、深さ 0.20m である。SB2020 内にあり、P23 を切っていることから、本遺構は建物の廃絶後に構築されている。覆土はシルトで、炭化粒を多量含む 1 層と少量の 2 層に分層した。出土した遺物の総点数は約 300 点であるが、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・鉢の破片が出土している（図版 163）。

SK2092（図版 30・68、295）

13D9 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.78m、短径 0.54m、深さ 0.08m である。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2111（図版 30・68、296）

14C19・20 区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.78m、短径 0.66m、深さ 0.11m である。覆土は 2 層に分層した。1 層はシルトブロックが主体となる。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片と礫が少量出土している。

SK2112（図版 28・68）

10E10 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。西側に段を持つ。規模は、長径 1.16m、短径 0.65m、深さ 0.27m である。覆土は 3 層に分層した。1 層は炭化粒を含むオリーブ黒色シルト、2 層は砂粒を含む灰色シルト、3 層は炭化粒を少量含む灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2122（図版 30・68、296）

14D6・7 区に位置する。平面形は不整な円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.45m、短径 1.25m、深さ 0.22m である。SD2008・2054・2055・2127 と重複してすべてを切っている。覆土は 4 層に分層した。このうち 2 層は炭化粒を多量に含む黒褐色土で、比較的完形率の高い土師器無台椀が多数出土している。ほかに覆土中から須恵器壺・甕の破片などが少量出土している（図版 164）。

SK2129（図版 29・30・68、296）

13D13・18 区に位置する。平面形は円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.60m、短径 0.52m、深さ 0.14m である。覆土は灰色シルトで、炭化粒が多い 1 層と少ない 2 層とで分層した。遺物は出土していない。

SK2172（図版 27・68、296）

8D1・2 区に位置する。SB1500 内にあって建物の柱穴と重複する土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.19m、短径 0.95m、深さ 0.34m である。覆土は 2 層に分層した。SB1500-P14 の一部を切っている。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 50 点出土している。

SK2175（図版 25・30・69、297）

14B13・18 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.66m、短径 0.32m、深さ 0.11m である。覆土は 3 層に分層した。1 層は炭化粒を含むオリーブ黒色シルト、2 層は砂粒を含む灰色シルト、3 層は炭化粒を少量含む灰色シルトである。遺物は出土していない。

SK2179（図版 29・69、297）

13C21、13D1 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.11m、短径

0.75m、深さ 0.19m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を少量含む灰色シルト、2 層は炭化粒を微量に含むオリーブ灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2180（図版 30・69、309）

14C6・11 区に位置する。平面形は長方形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.41m、短径 0.80m、深さ 0.16m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を少量含む灰色シルト、2 層は炭化粒を微量に含む灰色砂質土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 30 点出土している。

SK2191（図版 25・30・69、297）

14B2 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.05m、短径 0.95m、深さ 0.12m である。覆土は 2 層に分層した。いずれも炭化粒を微量に含み、1 層は褐灰色シルト、2 層は灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 30 点出土している。

SK2196（図版 29・69、297）

12E8・13 区に位置する。遺構東側が調査のための暗渠排水溝にかかるため平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸で 0.72m、深さ 0.21m である。覆土は 2 層に分層した。1 層はシルトブロックが混入する。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2202（図版 30・69、298）

14C2・3・7・8 区に位置する。調査のための暗渠排水溝にかかるため平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、東西軸で 0.72m、深さ 0.22m である。重複関係は、SD2030、P2190 よりも新しく、SD2064、P2214 よりも古い。覆土は褐灰色シルトで、炭化粒の量が多い 1 層と少ない 2 層で分層した。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が約 30 点出土している。

SK2205（図版 29・69、298）

13E12 区に位置する。調査のための暗渠排水溝にかかるため平面形は不明だが、断面形は逆台形状である。規模は、南北軸で 0.50m、深さ 0.08m である。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SK2210（図版 30・69、298）

13D15 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径 0.62m、短径 0.48m、深さ 0.10m である。覆土は炭化粒を微量に含む灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK2226（図版 27・69、298）

7D6 区に位置する。平面形は長方形で、断面形は弧状である。規模は、長径 1.70m、短径 1.13m、深さ 0.20m である。重複する SD1377、SK1421 よりも古い。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片約 20 点が出土したほか、管状土錘（1649）が 1 点出土している（図版 164）。

SK2227（図版 27・70、298）

8C22・23、8D2 区に位置する。SB1500 内にあって建物の柱穴と重複する土坑である。平面形は不整形で、断面形はおおむね弧状である。規模は、長径 1.87m、短径 1.32m、深さ 0.16m である。重複する SB1500-P39、SD1377、P1541・1542 よりも古い。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器有台鉢の破片が 90 点ほど出土している（図版 164）。

SK2256（図版 27・70、298・299）

6C13・14・18・19 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 1.63m、短径 1.20m、深さ 0.21m である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化粒を微量に含む灰オリー

ブ色シルト、2層は炭化粒を多量に含むオリーブ黒色土である。遺物は、2層中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鉄滓破片176点が出土している（図版164）。

SK3022（図版29・70、299）

13E3区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径1.29m、短径0.70m、深さ0.07mである。覆土は炭化粒を微量に含むオリーブ灰色土の単層である。重複するSD2108との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK3023（図版29・70、299）

12E5・10区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.70m、短径0.63m、深さ0.18mである。覆土は炭化粒を少量含むオリーブ灰色土の単層である。遺物は出土していない。

SK3027（図版29・70、299）

11C7・8・12・13区に位置する単独の土坑である。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径1.12m、短径0.84m、深さ0.13mである。覆土は褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK3037（図版29・70、299）

12D18区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。規模は、長径0.97m、短径0.62m、深さ0.09mである。覆土はオリーブ灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SK3039（図版30・70）

15D12区に位置する。遺構の北側大半を撹乱で壊され、平面形は不明であるが、断面形は弧状である。規模は、遺存部分の最大径1.49m、深さ0.11mである。覆土は灰色シルトの単層である。重複するSD2127より新しい。遺物は出土していない。

性格不明遺構

SX1084（図版24・28・72、299・300）

10B14・15・19・20区に位置する。当初、平面方形の落ち込みとしてとらえたが、明確な掘り込みは長径1.18 m、短径0.25mの不整形な部分だけであった。断面形は弧状で、深さは最深で0.05m程度である。浅い土坑の底部付近が遺存したものとも考えられる。覆土は炭化粒と粘土ブロックを多量に含む暗灰色粘質土の単層である。遺物は、1層中から土師器無台椀、黒色土器無台椀、製塩土器の破片が少量出土したほか、拳大の礫が2点出土している。

SX1104（図版28・71、300）

9・10D区に位置する。不整形の大きな窪地状の遺構で、断面形は弧状に近い。規模は、長径10.06 m、短径3.68m、深さは最深で0.34mである。SD1103と重複してこれを切る。覆土は5層に分層でき、1・2・4層が炭化粒主体層となるが、2層の炭化粒は明確に西側への偏りを見せており、西側に隣接するSB1400との関係を示唆している。出土した4,000点近い多量の遺物もそのほとんどが2層からの出土である。SB2200と重複するが、本遺構はSB2200の柱穴を切っている。遺物は、覆土中から土師器無台椀・有台椀・台付鉢・小甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯・有台杯・甕、緑釉陶器、墨書土器、砥石、椀形鍛冶滓、鉄製品の破片が出土したほか、微細遺物として鍛造剝片22点、粒状滓2点、鉄滓・鉄滓破片1,224点、粒状の滓1点、鉄器表面破片74点、炭化米692点、種類不明の炭化種子649点が出土している（図版164～166）。

SX1122（図版 28・72、300）

9D13・14・18・19 区に位置する。不整形な鍛冶関連遺物の廃棄跡である。規模は、長径 1.25 m、短径 0.95m である。SD1077・1189 がある程度埋没した後に投棄されているが、SB1400 の鍛冶炉との関係から、SD1077･1189 と同時期である可能性もある。廃棄されていたのは、多量の炭化木片のほか、微細遺物として鍛造剝片 1 点、鉄滓・鉄滓破片 231 点、炭化米 1 点である。

SX2001（図版 29・51、300）

12D･E、13D 区に位置する。平面形は不整な楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 7.98 m、短径 3.96m、深さは最大で 0.40m である。底面はほぼ平坦で、検出面から一段低い平場を形成している。遺構内には、長径線上の南・北端及び中央やや南寄りに 3 基の井戸（SX2001-SE1・2・3）がある。これらの井戸は、覆土の堆積状況や位置関係から見て、本遺構と一連のものとして機能していたと考えられる。SE1 ～ 3 のうち SE2 だけが位置的に中途半端であり、SE1・3 の後から掘られたものである可能性がある。遺構の性格については不明であるが、一つの可能性として井戸に関連した水場的なものであった可能性も想定できる。本遺構の上に屋根が架かっていた可能性も考慮して調査を行ったが、周囲に柱穴などは見つからなかった。遺構内の覆土は 2 層に分層した。遺物は土師器無台椀の破片を中心に 1,200 点ほど出土しているが、その多くは底部付近（2 層）からの出土である。遺物は、覆土中から土師器無台椀･小甕、黒色土器無台椀、漆容器、椀形鍛冶滓の破片が出土している（図版 166・167）。

なお、漆容器（1736）は北側の底部直上に置かれたような状態で出土した。円形曲物に漆を入れて漆容器として使用していたものと考えられるが、木質部は既に腐蝕して遺存しておらず、その内側にこびりついた漆だけがそのままの形で残ったものである。

溝

SD1090（図版 24・72、300）

9A 区に位置する。南東 - 北西方向（N － 33° － W）に伸びるように見えるが、北西側は調査区外となり詳細は不明である。断面形は逆台形状で両脇に段を持つ。規模は、長さ 5.35m 以上、上幅は 0.50 ～ 2.00m、深さ 0.18 ～ 0.47m である。覆土は暗青灰色粘質土の単層で、粘質土ブロックと炭化粒を多量に含む。人為的な堆積の可能性がある。遺物は、 1 層中から土師器無台椀、黒色土器無台椀、須恵器甕の破片が少量出土したほか、砥石が 1 点出土している（図版 167）。

SD1103（図版 27・28・71・72、301）

8 ～ 10D 区にかけて南西 － 北東方向（N － 40° － E）に伸びる溝である。8D19 区にある短い溝も本遺構の一部と見られる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 12.70m、、上幅 0.20 ～ 2.00m、深さは 0.05 ～ 0.31m であり、北東に行くほど広く深い。北東側は SX1104 と重複し、その先は不明である。覆土は 3 層に分層でき、1・3 層には炭化粒を多量に含む。新旧関係は、SB2200 より新しく、SX1104・SD1189 より古い。出土した遺物の総点数は約 1,000 点で、大半が土師器無台椀の破片である。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀・小椀、黒色土器皿、椀形鍛冶滓の破片のほか、復元してほぼ完形になる土師器鍋（1750）1 点が出土している（図版 167･168）。ほかに微細遺物として鍛造剝片 8 点、鉄滓･鉄滓破片数百点、粒状の滓 3 点、鉄器表面破片 15 点、炭化米 54 点、種類不明の炭化種子 8 点が出土している。

SD1146（図版 23・72、301）

7A 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 67° － W）に伸びる。断面形は「U」字状である。規模は、長

さ 4.36m 以上、上幅 0.20 ～ 0.28m、深さ 0.12m ほどである。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、 l 層中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SD1147（図版 23・26・27・72、301）

5 ～ 7B 区にかけて北東 - 南西方向（N - 23° - E）に伸び、5B 区でやや西寄りに屈曲（N - 54° - E）して調査区外に向かう。断面形は逆台形状である。長さは 21.40m 以上、幅は北東側で 0.28m、南西側で 1.50m、深さは北東端部近くで 0.10m、南西端部で 0.24m を測り、底面は南西に向けて下がっている。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、l 層中から土師器無台椀･甕、黒色土器無台椀、須恵器無台杯･甕･瓶、墨書土器、漆紙の破片などが出土しているが、土師器無台椀は比較的完形率の高いものが目立つ（図版 168）。

SD1152（図版 23・72、301・302）

7A 区に位置し、南北方向（N - 20° - W）に伸びる。北側は調査区外に向かう。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 7.00m 以上、上幅 0.69 ～ 1.05m、深さ 0.11m ほどである。底面は全体にわたってほぼ水平である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、 l 層中から土師器無台椀・甕の破片が少量出土している（図版 168）。

SD1161（図版 23・72、302）

7A 区に位置する。北西 - 南東方向（N - 35° - W）に伸びると考えられるが定かでない。北西側は調査区外に向かう。断面形は弧状である。規模は、長さ 2.10m 以上、上幅は 0.50 ～ 1.00m、深さは最深で 0.18m である。覆土は 2 層に分層でき、1 層には炭化粒の混入が目立つ。遺物は、覆土中から土師器甕の破片が数点出土している（図版 168）。

SD1164（図版 23・27・34・72、302）

7A･B 区に位置し、北西 - 南東方向（N - 36° - W）にほぼ直線に伸びる。断面形は半円状である。規模は、長さ 8.97m、上幅 0.22 ～ 0.42m、深さは最深で 0.21m である。底面標高は全体にほぼ同じである。覆土は灰色粘質土の単層である。重複する SD1165・1377 よりも新しい。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕の破片が少量出土している。

SD1165（図版 23・27・72、302）

7B 区に位置し、北東 - 南西方向（N - 28° - E）に伸びる。北東側は SD1164 と重複し、南西側は SK1153 と重複するが、新旧関係は不明である。断面形は弧状である。規模は、長さ 4.34m 以上、上幅 0.19 ～ 0.28m、深さ 0.11m である。底面は平坦である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が 3 点出土している。

SD1189（図版 27・28・72・73、301）

8・9D 区に位置し、北東 - 南西方向（N - 38° - E）に伸びる。断面形は「U」字状である。規模は、長さ 9.86m、上幅 0.20 ～ 0.52m、深さ 0.22m である。底面標高は、北西に行くほど下がる。覆土は暗緑灰色シルト質土の単層である。SD1103 とは平行関係にあり、かつ一部で重複する。新旧関係では本遺構が新しいことから、本遺構は SD1103 の掘り直しである可能性がある。なお、SX1122 は本遺構の埋没後に成立している。遺物は、1 層中から土師器無台椀・鍋、黒色土器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 8 点、鉄滓・鉄滓破片 244 点、鉄器表面破片 2 点、炭化米 18 点、種類不明の炭化種子 1 点が出土している。

SD1222（図版 23・27・34・73、302）

6B、7B・C 区に位置し、東西方向（N - 73° - W）に伸びるが、西側はやや南に屈曲する。断面形は弧状である。規模は、長さ 5.63m 以上、上幅 0.21 ～ 0.42m、深さ 0.12m である。底面はほぼ平坦である。

SD1147・1377 と重複するが、本遺構の方が新しい。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀、須恵器無台杯の破片が数点出土している（図版 168）。

SD1311（図版 26・73、302・303）

5C・D 区に位置し、東西方向（N － 70° － W）に伸びる。SD1314 及び SB1400・1500 とほぼ平行関係にある。断面形は弧状である。規模は、長さ 8.66m、上幅 0.28 ～ 0.38m、深さは最深で 0.13m である。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SD1313（図版 23・26・73、303）

5B・C 区に位置し、東西方向（N － 70° － W）に伸びる。SD1311・1314 と平行する短い溝で、東側はやや南に屈曲する。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 4.08m、上幅 0.33 ～ 0.46m、深さ 0.10m である。底面標高は東へ行くほど低い。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器瓶の破片が少量出土している。

SD1314（図版 26・27・73、303）

5B、6B ～ D 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 67° － W）に伸びる。SD1311 及び SB1400・1500 とほぼ平行関係にある。断面形は弧状である。規模は、長さ 18.00m 以上、上幅 0.27 ～ 0.43m、深さは最深で 0.12m である。底面標高は、北西から南東へ向かって緩やかに下がる傾向にある。重複する遺構の新旧関係は、SD1315・1455・1490 よりも新しく、SD1147 よりも古いと思われるが、判然としない。覆土は炭化粒を多量に含む灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器無台椀、椀形鍛冶滓、羽口の破片が少量出土している（図版 168）。

本溝と前述した SD1311 は 4.90 ～ 5.50m の距離を隔ててほぼ平行しており、両溝の間は遺構密度が著しく疎になる。軸方向は大型の掘立柱建物である SB1400･1500 とほぼ一致する。本溝と SD1311 は、両建物に沿って作られた道路の側溝である可能性も否定できないが、東西の延長上には重複する遺構が皆無というわけではなく、特に硬化面なども確認されていないことから道路の側溝とは断言できない。

SD1315（図版 23・26・73）

6C 区に位置し、東西方向（N － 70° － W）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 1.85m 以上、上幅 0.18 ～ 0.24m、深さ 0.08m ほどである。東端は SD1314 に切られる。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SD1318（図版 23・27・73、303）

6B 区に位置する。北西 － 南東方向（N － 67° － W）に伸び、南東側で北に屈曲する。断面形は「U」字状である。規模は、長さ 1.41m 以上、上幅 0.21 ～ 0.25m、深さ 0.12m である。北西側で SD1147 と重複するが、新旧関係は不明である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SD1359（図版 27・73、303）

8E 区に位置し、SB1500 の区画溝である SD1377 の東辺外側に平行して南北方向（N － 18° － E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 4.70m、上幅 0.40 ～ 0.58m、深さ 0.16m である。覆土は炭化粒を少量含む灰色粘質土の単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鍛造剝片 6 点、鉄滓・鉄滓破片 39 点、鉄器表面破片 1 点が出土している。

SD1448（図版 27・65・73、303）

6C 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 67° － W）に伸びる。南東側は北に屈曲している。断面形は弧状である。規模は、長さ 1.92m、上幅 0.22 ～ 0.34m、深さ 0.10m である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、微細遺物として鉄滓・鉄滓破片 17 点が出土している。

SD1455（図版 26・27・73、304）

5・6D 区にかけ、南北方向（N － 11° － E）に伸びる。北側は SD1314 に接して終わっている。南側は西部遺跡 I に伸びるが検出していない。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 6.56m 以上、上幅 0.23 ～ 0.32m、深さ 0.11m である。底面は北に向かって下がっている。覆土は灰色粘質土の単層である。SD1314 との新旧関係については不明である。また、近接する SB2258 とは軸方向を同じくするが、両遺構の関係については不明である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕の破片が各 1 点出土している。

SD1463（図版 27・65・73、304）

6C･D 区に位置し、東西方向（N － 70° － W）に伸びる。SD1314 と平行関係にある。両端を中世遺構（SE753･754）に壊されている。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 1.86m 以上、上幅 0.28 ～ 0.36m、深さ 0.08m である。底面はほぼ水平である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀･甕・小甕の破片が少量出土している。

SD1490（図版 27・73、304）

6D、7D・E 区に位置し、東西方向（N － 80° － E）に伸びる。西側は SD1314 に、東側は SD1492 に接する所で途切れている。断面形は弧状である。規模は、長さ 13.00m 以上、上幅 0.20 ～ 0.35m、深さは最深で 0.15m である。底面標高は西ほど低い傾向にある。覆土は灰色粘質土の単層である。重複する SD1314･1492 との新旧関係は不明である。P1522 は本遺構埋没後に穿たれたピットである。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が少量出土している。

SD1491（図版 27・73、304）

7E 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 44° － W）に伸びる。北西側は SD1377 に、中央付近は SK1540 に切られている。南東側は調査区外に向かう。断面形は弧状である。規模は、長さ 5.30m 以上、上幅 0.30 ～ 0.75m、深さは最深で 0.19m である。底面標高は南東側ほど低い。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が少量出土している（図版 168）。

SD1492（図版 27・73、304・305）

6・7E 区に位置し、南北方向（N － 10° － W）に伸びる。北側は SD1377 に切られている。南側は調査のための暗渠排水溝の位置で途切れると推測される。断面形は弧状である。規模は、長さ 5.93m 以上、上幅 0.32 ～ 0.49m、深さは最深で 0.15m である。底面標高は南側がやや低い。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・小甕、須恵器無台杯の破片が少量出土している。

SD1552（図版 27・73、305）

7E 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 65° － W）に伸びる。北西側はやや北寄りに屈曲し、SD1377 に切られる。南西側は調査区外に向かう。断面形は弧状である。規模は、長さ 4.90m 以上、上幅 0.66 ～ 0.90m、深さは最深で 0.24m である。底面標高はほぼ水平である。覆土は灰色粘質土であるが、炭化粒の量で 2 層に分層した。2 層は比較的炭化粒の多い層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕の破片が少量出土している。

SD1563（図版 27・73、305）

6D 区に位置し、北東 - 南西方向（N - 24° - E）に伸びる短い溝である。北東側は SK1421 に切られ、南西側は調査のための暗渠排水溝付近で途切れている。断面形は弧状である。規模は、長さ 2.24m 以上、上幅 0.19 ～ 0.27m、深さ 0.09m である。底面標高はほぼ水平である。覆土は灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀の破片が少量出土したほか、管状土錘（1773）が 1 点出土している（図版 168）。

SD1564（図版 27・73、305）

6C・D 区に位置する。北西 - 南東方向（N - 60° - W）に伸び、北西側は北に屈曲し、中世遺構 SE077 に切られ、南東側は 6D4 区付近で途切れると考えられる。断面形は弧状である。規模は、長さ 5.90m 以上、上幅 0.40 ～ 0.90m、深さ 0.11m である。底面標高はほぼ水平である。SD1565 と重複するが、本遺構の方が古い。覆土は炭化粒を多量に含む灰色粘質土の単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・有台椀・甕・小甕・鍋の破片が少量出土している。

SD1565（図版 27・73、305）

6C 区に位置し、南北方向（N - 10° - E）に伸びる。北側は中世遺構 SE064 に切られ、南側は中世遺構 SE753 に切られるため、詳細は不明である。断面形は弧状である。規模は、長さ 2.05m 以上、上幅は 0.25 ～ 0.32m、深さ 0.07m である。底面標高は南側がやや低い。SD1564 と重複するが、本遺構の方が新しい。覆土は 2 層に分層でき、2 層には粘土ブロックの混入が目立つ。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SD2008（図版 29・30・43・44・74・75、305・306）

13C ～ E、14C･D 区にかけて位置し、平面形は東に開いた「コ」の字状を呈する。断面形は弧状である。長さは、13E2 ～ 13C22 区にかけては南東 - 北西方向（N - 65° - W）に 13.50m、13C22 ～ 14C16 区にかけては南西 - 北東方向（N - 25° - E）に 9.50m、14C16 ～ 14D17 区にかけては北西 - 南東方向（N - 65° - W）に 9.00m である。規模は、長さ約 32.00m、上幅 0.33 ～ 1.00m、深さ 0.25m である。重複遺構との新旧関係については、SB2020、SD2055・3024 よりも新しく、SK2122 よりも古い。P2189・2215、SD2054 との新旧関係は不明である。本遺構は建物に付随する区画溝に酷似し、軸方向も SB1400・1500 の桁行方向に近いため、調査当初は溝が囲む範囲内に建物を想定していた。しかし、結果として柱穴となるピットが検出されず、本遺構が区画した意図は不明である。覆土は 3 層に分層した。1 層には焼土ブロック、2 層にはシルトブロックの混入が見られる。出土した遺物の総点数は約 2,000 点で、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、主に 2 層中から土師器無台椀･甕･小甕、黒色土器有台椀、須恵器瓶・広口壺、灰釉陶器、砥石の破片が出土したほか、1 層から権状錘（1789）が 1 点出土している（図版 168・169）。

SD2030（図版 25・30・74、306・308）

14B ～ D 区にかけて位置し、東西方向（N - 85° - W）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ約 16.00m、幅 1.28 ～ 1.66m、深さ 0.40m ほどである。新旧関係は SD2061・2146・2173 より新しく、SK2202、SD2064 より古い。覆土は炭化粒を少量含む褐灰色シルトの単層である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器、製塩土器の破片が少量出土している（図版 169）。

SD2039（図版 30・74、306）

15E 区に位置し、北西 - 南東方向（N - 50° - W）に伸びる。南東側は調査区外に向かう。断面形は

弧状である。規模は、長さ 2.04m 以上、上幅 0.40m、深さ 0.10m ほどである。底面標高は北西側がやや低い。覆土は灰色シルトの単層である。SD2041・2198 とは平行関係にある。遺物は、1 層中から土師器小甕の破片が数点出土している。

SD2040（図版 29・30・74・75、306・307）

13・14D・E 区に位置する。平面形は鉤状を呈し、14E13 ～ 14D22 区にかけて東西方向に伸びるが、14D22 ～ 13E3 区にかけては南方向へ弧を描く。断面形は弧状である。規模は、長さ 8.35m 以上、上幅 0.18 ～ 0.85m、深さ 0.30m ほどである。底面標高は 2.40m 前後でほぼ水平である。北辺の溝内には径 0.10m 前後の小ピットが不規則に並んで複数検出されているが本遺構との関係は不明である。本遺構は、建物に付随する区画溝に似ているが、その内側からは建物は検出されなかった。覆土は 3 層に分層した。1・2 層には焼土ブロック、3 層にはシルトブロックが混入する。遺物は北辺の 14E2 区付近に偏在する傾向が見られる。出土した遺物の総点数は約 900 点で、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀・有台椀・皿・小甕、黒色土器無台椀・有台椀・有台皿、製塩土器、砥石の破片が出土している（図版 169・170）。

SD2041（図版 30・74、306）

15E 区に位置し、北西 - 南東方向（N - 50° - W）に伸びる。南東側は調査区外に向かう。断面形は「U」字状である。規模は、長さ 3.06m 以上、上幅 0.21 ～ 0.34m、深さ 0.18m である。底面標高は 2.40m 前後で、ほぼ水平である。覆土は 3 層に分層した。いずれも炭化粒を含む灰色シルトであるが、1 層はやや砂質で炭化粒の混入比率が高い。遺物は、覆土中から土師器無台椀、製塩土器の破片が数点出土している。

SD2047（図版 28・29・74、307）

11E 区に位置し、東西方向（N - 70° - W）に伸びる。断面形は弧状である。長さ 2.65m、上幅 0.15 ～ 0.24m、深さ 0.05m である。底面標高は 2.57m 前後で、傾きは見られない。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は、1 層中から土師器小甕の破片が 1 点出土している。

SD2054（図版 30・74、307）

13C、14C・D 区に位置し、東西方向（N - 90° - W）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 13.50m、上幅 0.27 ～ 0.70m、深さ 0.10m である。底面標高は 2.50m 前後で、顕著な傾斜は見られない。重複する遺構との新旧関係は、SK2122 より古く、SD2008・2055 とは関係は切り合い部分が少ないため不明である。覆土は灰色シルトで、炭化粒の量が多い 1 層と少ない 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が約 70 点出土したほか、土師器小甕、須恵器甕の破片が数点出土している（図版 170）。

SD2055（図版 30・74、307）

13C・D、14D 区に位置し、13C14 ～ 13D10 区にかけては北西 - 南東方向（N - 65° - W）に 6.70m 伸び、13D10 区で北に 100° 屈曲し、13D10 ～ 14D5 区にかけては南北方向（N - 14° - E）に 11.70m 伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 18.40m 以上、上幅 0.14 ～ 0.32m、深さ 0.13m ほどである。底面標高は 2.50m ほどで、底面に高低差は見られない。重複する遺構との新旧関係は、SB2020-P10、SD2096、3024 より新しく、SK2122、SD2008 より古い。覆土はオリーブ灰色シルトの単層である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕の破片が数点出土している。

SD2060（図版 25・30・74、307・308）

14B・C 区に位置し、北西 - 南東方向に伸びる。14B18 ～ 14B23 区にかけては N - 70° - W を指

し、14B23 区で屈曲して 14C3 ～ 14C8 区にかけては N－50°－W を示す。断面形は「U」字状である。規模は、長さ 5.89m、上幅 0.39 ～ 0.55m、深さ 0.34m である。底面標高は 2.30m 前後であり、底面に高低差は見られない。本溝の南東側には SD2146 が南北方向に伸びる。SD2030 に分断されているため判然としないが、「L」字状に伸びた本溝の延長である可能が考えられる。重複する遺構との新旧関係は、SK2062、SD2030 よりも古い。覆土は 3 層に分層でき、このうち 1 層は炭化粒を多量に含む。遺物は、主に 1 層中から土師器無台椀・有台椀・甕・小甕、黒色土器無台椀、須恵器甕、製塩土器の破片が出土しており、このうち土師器無台椀は比較的完形率の高いものが目立つ（図版 170）。

SD2064（図版 25・30・69・74、308）

13B、14B・C 区に位置する。平面形は南に開いた半円状であり、断面形は弧状である。規模は、直径にして 8.80m、長さ 14.00m 以上、上幅 0.32 ～ 0.58m、深さ 0.32m である。底面標高は 2.30m で、底面はほぼ水平である。本遺構の平面形態から、当初は建物に付随する区画溝である可能性を考慮し、慎重に調査したが、内側から柱穴と考えられるピットの検出はなかった。重複する遺構との新旧関係は、SK2202、SD2030 より新しく、SD2116 より古い。覆土は褐色土の単層である。遺物の出土は 14C1 区及び 14B18 区に集中する。出土した遺物の総点数は約 200 点で、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、1 層中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器、須恵器甕・瓶の破片が出土している（図版 170・171）。

SD2096（図版 29・30・74、307 ～ 309）

13C・D、14D・E 区に位置し、東西方向（N － 85° － E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 19.34m 以上、上幅 0.18 ～ 0.50m、深さ 0.14m である。重複する遺構との新旧関係は、SD3024 より新しく、SD2055、P2157 より古い。覆土は暗緑灰色シルトで、炭化粒の多い 1 層と少ない 2 層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、黒色土器、須恵器甕の破片が少量出土している。

SD2098（図版 30・75、308）

13D・E 区に位置し、東西方向（N － 85° － W）に伸びる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 4.36m 以上、上幅 0.24 ～ 0.38m、深さ 0.17m である。底面標高は約 2.50m で、底面はほぼ水平である。重複する P2086 との新旧関係は不明である。覆土は 2 層に分層した。いずれも焼土ブロックや炭化粒を含むオリーブ灰色シルトで、1 層は焼土ブロックや炭化粒をより多く含む。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が数点出土している。

SD2099（図版 29・30・75、307・308）

13D・E 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 65° － W）に伸びる。南東側は調査区外に向かう。断面形は弧状である。規模は、長さ 7.00m 以上、上幅 0.25 ～ 0.64m、深さ 0.21m である。底面標高は 2.35m 前後で、底面はほぼ水平である。西側で SD2040 と重複してこれを切っている。SD2108 とは平行関係にある。覆土は 2 層に分層でき、1 層が炭化粒を多量に含むオリーブ灰色シルト、2 層が炭化粒を少量含む灰色シルトである。出土した遺物の総点数は約 200 点で、大半は土師器無台椀の破片である。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器、須恵器無台杯の破片が出土している。

SD2108（図版 29・75、308）

13D・E 区に位置し、北西 － 南東方向（N － 65° － W）に伸びる。南東側は調査区外に向かう。断面形は弧状である。規模は、長さ 6.60m 以上、上幅 0.41 ～ 0.67m、深さ 0.19m である。底面標高は 2.40m 前後で、底面はほぼ水平である。重複する遺構との新旧関係は SK3022 より新しい。SD2099 とは平行

関係にある。覆土は2層に分層した。いずれも炭化粒を微量に含み、1層はオリーブ灰色シルト、2層は灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、黒色土器の破片が約55点出土している。

SD2116（図版25・30・43・75、308）

13・14B区に位置する。平面形は「L」字形を呈し、13B25～13B10区にかけては南東－北西方向（N－60°－W）に伸び、屈曲して13B5～14B7区にかけては南西－北東方向（N－40°－E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ11.00m、上幅0.10～1.12m、深さ0.30mである。底面標高は2.30m前後で、底面はほぼ水平である。SB2020-P6、SD2117・2118と重複するが、本遺構が最も新しい。覆土は灰色シルトで、炭化粒の目立つ1層とシルトブロックの目立つ2層に分層した。出土した遺物の総点数は約550点で、大半が土師器無台椀の破片である。遺物は、主に1層中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器甕、砥石の破片が出土している（図版171）。

SD2117（図版25・30・75、308）

13・14B区に位置し、南北方向（N－20°－E）に伸びる。断面形は「U」字状である。規模は、長さ3.80m以上、上幅0.12～0.40m、深さ0.12mである。底面標高は2.35m前後で、底面はほぼ水平である。重複する遺構との新旧関係はSD2116より古い。覆土は2層に分層した。いずれも炭化粒を微量に含み、1層が褐灰色シルト、2層が灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀の破片が1点出土している。

SD2118（図版25・30・75、308・309）

13･14B区に位置する。南北方向（N－20°－E）に伸び、北側は東に屈曲する。断面形は逆台形状である。規模は、長さ6.54m、上幅0.28～0.43m、深さ0.16mである。底面標高は2.35m前後で、底面はほぼ水平である。重複する遺構との新旧関係はSD2116より古い。覆土は2層に分層した。いずれも炭化粒を含む灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀・小甕、須恵器無台杯の破片が29点出土している。

SD2121（図版30・75、309）

14C・D区に位置する。東西方向（N－85°－W）に伸びる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ3.66m、上幅0.20～0.55m、深さ0.20mである。底面標高は2.37m前後で、底面はほぼ水平である。覆土は2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、須恵器無台杯、製塩土器の破片が73点出土している（図版171）。

SD2127（図版10～12・17・19・20・26～30・75・76、224・310）

9～12C、5～10･12～15D区に位置する。調査区を南北方向（N－25°－E）に縦断する長い溝である。東側（山側）を内としてわずかに弧状となる。長さは102.50m以上を測り、南・北端いずれも調査区外へと伸びている。南側の西部遺跡Ⅰでは検出されていないが、北側の延長上には同一遺構と見られる西部遺跡Ⅲで調査されたSD2003があり、これを含めた長さは155.00mにもなる。断面形は漏斗状を呈し、広く湾曲して立ち上がる上部、わずかに膨らむ中部と、直線的に急傾斜となる下部とに分けられる。上幅は1.15～2.35m、深さは最深で0.85mを測る。底面標高は南側で1.73～1.95ｍ、北側の11C区付近で2.00ｍと高くなり、それ以北ではなだらかな下り傾斜となっている。北端部での標高は1.86ｍである。調査区内での傾斜はおおむね1.84～2.00ｍの範囲にあり、その差は小さく、同一方向に向かっての勾配としてはとらえにくい。一方、西部遺跡Ⅲでは同じ溝の延長部が明確に北に向かって標高を下げている。

覆土の堆積状況については、基本は９層に分層でき、レンズ状に堆積し自然堆積と見られる。上層はⅨ層の崩落土が主体で、しまりのある灰色シルトが堆積する。北寄りの一部の土層観察では最上層にⅧ層の垂れ込みが確認されている。中位から下位にかけてはⅪ層やⅫ層の側壁からの崩落土が堆積し、覆土には砂粒が混入する。下層は炭化粒の流入も少なく、色調も側壁であるⅫ層と同じため、わずかな砂粒を含む覆土を掘り上げることでのみ底部が確認できる状況であった。本溝は、基本的に汚れのないきれいな覆土であることを特徴とする。

Ⅷ層から検出した遺構は、すべて本溝よりも新しいものである。ほかの遺構との切り合い関係では、すべて本溝が切られている。Ⅷ層の遺構が本格的に構築される前に、先行して本溝が単独で存在した可能性が高い。西部遺跡Ⅲで検出されている本溝の北端は、途中で止まることが確認されている。大規模な区画溝のようにも見えるが、その場合、内側になるであろう東側（山側）からは該当するような遺構は検出されていない。本溝の機能や用途については不明である。

出土遺物は概して少なく、土師器無台椀を中心に須恵器など土器の破片が 69 点出土しているに過ぎない。図示し得た遺物は、11C 区から出土した須恵器杯蓋・甕、7D 区から出土した須恵器瓶、6D 区から出土した須恵器折縁杯がある（図版 171）。いずれも中・上層からの出土で、このうち須恵器折縁杯はⅪ層からの混入と考えられる。土壌洗浄によって検出された鍛冶関連の微細遺物は、9D3 区の１層から鉄滓破片３点、12C24 区の１層から鉄滓破片８点、12D5 区の２層から鉄滓破片２点、13D3 区４層から鉄滓破片１点、14D1・6 区の１層から鉄滓破片１点、14D3 区の３層から鉄滓破片２点である。鍛冶関連の微細遺物は、すべて 9D 区以北の上層付近からの出土である。

SD2131（図版 29・30・75、309）

13C・D 区に位置する。東西方向（N － 70° － W）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 9.78m、上幅 0.40 ～ 0.84m、深さ 0.15m である。底面標高は西端が 2.52m、東端が 2.38m で、東に向かって緩やかに下がっている。重複する遺構との新旧関係は、SD3024 よりも新しく、SB2020、SK2005 とは不明である。覆土は灰色シルトで、炭化粒の多い１層と少ない２層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、黒色土器無台椀、製塩土器、砥石の破片が少量出土している（図版 171）。

SD2138（図版 29・30・76、309）

13C・D 区に位置する。東西方向（N － 75° － W）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 2.77m、上幅 0.23 ～ 0.36m、深さ 0.09m である。底面標高は 2.50m 前後で、底面はほぼ水平である。重複する遺構との新旧関係は P2104 よりも古い。覆土は２層に分層した。いずれも灰色シルトで、１層は炭化粒を少量含み、２層は含まない。遺物は、覆土中から土師器小甕の破片が４点出土している。

SD2146（図版 30・69・76、309）

14C 区に位置する。北東 － 南西方向（N － 30° － E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 3.46m 以上、上幅 0.35 ～ 0.52m、深さ 0.10m である。底面標高は 2.50m 前後で、底面はほぼ水平である。重複する遺構との新旧関係は、P2162 よりも新しく、SD2030 よりも古い。覆土は褐灰色シルトの単層である。遺物は、１層中から土師器無台椀・小甕の破片が約 40 点出土している。

SD2173（図版 30・76、309・311）

14C 区に位置する。南北方向（N － 10° － E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ 5.00m 以上、上幅 0.50 ～ 0.79m、深さ 0.14m である。底面標高は南端が 2.50m、北側の SD2030 と接している地点で 2.40m を測り、北に向かって標高を下げている。重複する遺構との新旧関係は、SD2008・2030

よりも古い。覆土は2層に分層した。1層は炭化粒と焼土粒を含み色調の暗い黒褐色土、2層は炭化粒を微量に含む灰色シルトである。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕、敲石の破片が約90点出土している（図版172）。

SD2178（図版30・76、309・311）

14C区に位置する。南北方向（N－20°－E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ1.69m、上幅0.30～0.40m、深さ0.09mである。底面標高は2.45m前後で、底面に目立った傾斜は見られない。覆土は褐灰色シルトで、炭化粒の多い1層と少ない2層に分層した。遺物は、覆土中から土師器無台椀・甕・小甕の破片が約30点出土している。

SD2198（図版30・76）

15E区に位置する。 北西 － 南東方向（N － 50° － W）に伸びる。南東側は調査区外へ向かう。北西側は調査のための暗渠排水溝内で途切れていると考えられる。断面形は弧状である。規模は、長さ1.17m以上、上幅0.31～0.40m、深さ0.12mで、SD2039･2041とは平行関係にある。覆土は2層に分層した。1層は炭化粒を少量含む灰色シルト、2層は炭化粒を微量に含むオリーブ灰色シルトである。遺物は出土していない。

SD2213（図版25・76、311）

13B区に位置する。北東 － 南西方向（N － 40° － E）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さ2.22m、上幅約0.30m、深さ約0.10mである。底面標高は南西端が2.41m、北東端が2.37mで北東側がやや下がっている。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は、1層中から土師器無台椀の破片が1点出土している。

SD3006（図版24・76、311）

12A区に位置する。東西方向（N － 70° － W）に伸びる。断面形は弧状である。規模は、長さは1.87m、上幅は0.12～0.26m、深さ0.06mとごく浅い。覆土は炭化粒を微量に含む褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。なお、SD3007は本遺構の延長部分に位置する。

SD3007（図版24・76、311）

12B区に位置する。東西方向（N － 70° － W）に伸びる。長さは0.49mと短く、これだけでは溝とは呼べないが、検出位置から東に隣接するSD3006と同一遺構と考えられる。断面形は逆台形状を呈し、上幅は0.18～0.21m、深さは0.05mほどである。覆土は炭化粒を微量に含む褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD3009（図版24・25・76）

12A区に位置する。東西方向に（N － 70° － W）伸びる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ0.77m、上幅0.14～0.24m、深さ0.05mほどである。覆土は炭化粒を少量含む灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD3024（図版29・30・76、311）

12・13D区に位置する。南北方向（N － 0° － E）に伸び、南側はやや南東方向に屈曲する。断面形は弧状である。規模は、長さ11.52m、上幅0.32～0.70m、深さ0.12mである。検出面が低いため、Ⅸ層上面からの深さは0.20m以上あると考えられる。底面標高は2.25m前後で、目立った傾斜は見られない。重複する遺構にSX2001、SD2008・2055・2096・2131があるが、すべての遺構より古い。覆土は暗オリーブ灰色シルトの単層である。炭化粒を多量に含む。遺物は出土していない。

SD3110（図版 24・28・76）

10C 区に位置する。東西方向（N － 70° － W）に伸びる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ 1.14m 以上、上幅 0.27 ～ 0.42m、深さ 0.15m である。検出面が低いため、Ⅸ層上面からの深さは 0.30m ほどあると考えられる。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

B 中　　世

1）概　　要

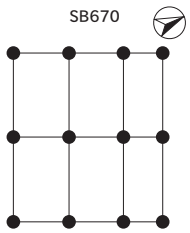
中世の遺跡は、平成 16 年度に調査し、「西部遺跡Ⅰ」［折原ほか 2005］として報告している。時期は 12 世紀後半から 15 世紀代で、性格は集落である。今回の調査は平成 16 年度に調査できなかった調査区南側の農道部分と最下層の調査深度を考慮し、掘削手法（法面工法）から上層文化層に対し拡張調査が必要となった範囲について行った。また、下層（Ⅷ層）を調査した際に、明らかにⅣ層遺構（掘り残し遺構）と判断されたものについても調査した。

2）Ⅳ層の遺構

Ⅳ層では、掘立柱建物 6 棟、井戸 21 基（うち 5 基は再調査）、土坑 21 基（うち 2 基は再調査）、溝 4 条、ピット 352 基を検出した。

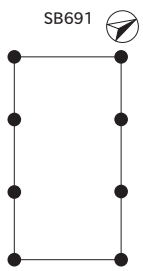
掘立柱建物

SB670（図版 78・81・85、313・314）



調査区南側の 5・6B・C 区に位置する。東西棟となる総柱型の掘立柱建物である。桁行 2 間（6.60m）、梁間 2 間（4.35m）の身舎に、北廂が 1 間（1.50m）付く。建物全体の規模は、桁行 2 間（6.60m）、梁間 3 間（5.85m）で、桁行方向は N － 70° － W を示す。建物面積は約 38.61㎡である。建物を構成する柱穴は、平面形が円形を呈する。身舎の柱穴断面を見ると大半が階段状で、柱痕跡が掘形底部よりも少し下がっている。屋根の重さで柱が沈み込んだものと思われる。規模は、直径 0.39 ～ 0.59m、深さ 0.45 ～ 0.65m で、確認された柱痕跡の直径は 0.14 ～ 0.29m とばらつきがある。廂の柱穴断面は「U」字状を呈し、規模は、直径 0.18 ～ 0.20m、深さは 0.28 ～ 0.48m である。柱痕跡は検出されなかった。P751 と重複してこれに P4 が切られるが、SB691・789 とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。遺物は、P8 から珠洲焼壺・甕の破片が少量出土している。

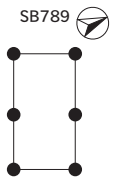
SB691（図版 81・86、313・315）



調査区南側の 5・6C・D 区に位置する。東西棟となる梁間 1 間型（棟柱無）の掘立柱建物である。規模は、桁行 3 間（8.10m）、梁間 1 間（4.20m）で、桁行方向は N － 60° － W を示す。建物面積は約 34.02㎡である。平側柱筋は直線型である。柱穴の平面形は円形で、断面形は逆台形状となる。規模は、直径 0.27 ～ 0.38m、深さ 0.29 ～ 0.36m である。柱痕跡は確認できなかった。重複する SB670・789 とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

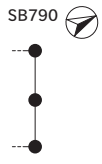
SB789（図版 81・87、313・315）

調査区南側の 5C、6C・D 区に位置する。東西棟となる梁間 1 間型（棟柱無）の掘立柱建物である。規模は、桁行 2 間（4.80m）、梁間 1 間（2.40m）で、桁行方向は N － 70° － W を示す。建物面積は約 11.52㎡である。平面形はわずかにゆがんで台形状を呈する。平側柱筋は胴張型である。柱穴の平面形は円形で、断面形は逆台形状となる。規模は、直径 0.22 ～ 0.41m、深さ 0.25 ～ 0.49m である。P2 ～ 5 で確認された柱痕径は 0.13 ～ 0.19m である。重複する SB670・691 とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。遺物は出土していない。



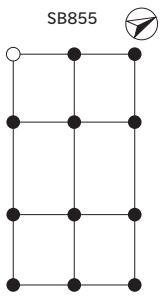
SB790（図版 81・87、313・315）

調査区南端の 5C・D 区に位置する。3 基の柱穴からなる 2 間（3.90m）の柱列を検出した。軸方向は N － 70° － W を示す。北側に隣接する SB789 と平行関係にあること、P2 で柱痕跡が確認されていることなどから、更に調査区外南側へ伸びて建物となる可能性を想定したが、西部遺跡 I の調査区からは、これに該当するような遺構は報告されていない。建物ではなく柵である可能性もある。柱穴の平面形は円形で、断面形は「U」字状となる。規模は、直径 0.20 ～ 0.34m、深さ 0.28 ～ 0.32m である。P2 で確認された柱痕跡は径 0.13m である。遺物は出土していない。



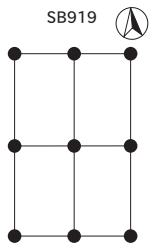
SB855（図版 81・82・88、316）

調査区南東側の 7C・D 区に位置する。東西棟となる総柱型の掘立柱建物である。規模は、桁行 3 間（9.15m）、梁間 2 間（4.80m）で、桁行方向は N － 67° － W を示す。建物面積は約 43.92㎡である。柱穴の平面形は円形で、断面形は「U」字状となる。規模は、直径 0.22 ～ 0.30m、深さ 0.18 ～ 0.36m である。柱痕跡は確認できなかった。南西隅の柱穴は、西部遺跡 I で調査された SK107 と重複して失われているが新旧関係については不明である。本建物の北側には西部遺跡 I で調査された SD027 が並走する。遺物は出土していない。



SB919（図版 79・82・89、317・318）

調査区中央の 9B・C 区に位置する。南北棟となる総柱型の掘立柱建物である。規模は、桁行 2 間（7.20m）、梁間 2 間（4.65m）で、桁行方向は N － 3° － E を示す。建物面積は約 33.48㎡である。柱穴は平面形が円形を呈するもので、断面形は逆台形状となる。規模は、直径 0.14 ～ 0.29m、深さ 0.05 ～ 0.16m である。なお、本建物はⅧ層遺構の調査時に見つかったもので、本来、Ⅳ層遺構として調査されていた場合、柱穴の深さは更に 0.20m ほど深く計測されていたはずである。柱痕跡は確認できなかった。本建物の東側には西部遺跡 I で調査された SD041 が並走する。遺物は出土していない。



井　　戸

SE040（図版 83・90、318・319）

西部遺跡 I で報告済みの遺構である。今回、底部付近を中心に再調査を行い、土層断面や遺構下端などの修正を行った。12E2・3・7・8 区に位置する。平面形は長径 1.45m、短径 1.20m を測る楕円形で、底面は長径 0.80m、短径 0.55m を測る楕円形である。断面形は「U」字状を呈し、深さは 1.42m を測る。覆土は 10 層に分層した。このうち 8 層は抜き取られた内部施設の痕跡、9・10 層はその裏込土と思われ

る。遺物は、8 層から青磁椀（2385）の破片、鍛冶滓（2386）、木杓の未製品（2387）が新たに各 1 点出土している（図版 194）。

SE048（図版 78・90、319）

西部遺跡Ⅰで報告済みの遺構である。今回、底部付近を中心に再調査を行い、土層断面や遺構下端などの修正を行った。6A18・23 区に位置する。平面形は長径 1.75m、短径 1.50m を測る不整形で、底面は長径 1.13m、短径 0.90m を測る楕円形である。断面形は逆台形状を呈し、深さは 1.13m を測る。覆土は 6 層に分層した。上層で混入物が多く、1・2 層は灰黄褐色ブロックを多量に含み、1・3 層は炭化粒を多量に含む。遺物は、1 層から珠洲焼甕の破片数点が新たに出土している（図版 194）。

SE059（図版 78・90、319）

西部遺跡Ⅰで報告済みの遺構である。今回、底部付近を中心に再調査を行い、土層断面や遺構下端などの修正を行った。7B2 区に位置する。平面形は長径 1.30m、短径 1.25m を測る不整形で、底面は長径 0.88m、短径 0.71m を測る楕円形である。断面形は南側が階段状になるものの、下半はほぼ箱状を呈しており、深さは 1.18m を測る。7 層に分層した。中層（3 ～ 5 層）で灰白色土ブロックの混入が顕著であり、人為的な埋め土と思われる。遺物は出土していない。

SE262（図版 83・91、319）

西部遺跡Ⅰで報告済みの遺構である。今回、底部付近を中心に再調査を行い、土層断面や遺構下端などの修正を行った。10E13・18 区に位置し、東側は調査区外となる。平面形は長径 2.11m を測る楕円形と思われる。断面形は「U」字状を呈する。長軸方向の壁面は緩やかに外傾し、短軸方向の壁面は比較的急角度で立ち上がる。深さは 1.24m を測り、底面はⅩⅢ層に達している。覆土は 14 層に分層した。7 層で白色土ブロックの混入が顕著である。遺物は、覆土中から珠洲焼壺・甕、白磁皿の破片数点のほか、砥石 2 点が新たに出土している（図版 194）。

SE565（図版 78・91、319）

5A19・24 区に位置する。平面形は長径 1.91m、短径 1.42m を測る楕円形で、底面は長径 0.84m、短径 0.72m を測る略円形である。断面形は階段状となる。深さは 1.00m を測り、底面はⅩⅢ層に達している。覆土は 14 層に分層した。全体に粘土ブロックの混入が顕著であり、人為的な埋め土と考えられる。遺物は、1 層から珠洲焼壺・甕、4 層から青磁椀（2393）の破片が各 1 点出土している（図版 194）。

SE598（図版 78・91、319・320）

5A15 区に位置する。平面形は径 1.68m を測る円形で、底面は径 1.00m の円形である。断面形は逆台形状を呈し、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。深さは 1.63m を測り、底面はⅩⅢ層に達している。覆土は 11 層に分層した。1 ～ 7 層は褐灰色粘質土で、8 ～ 11 層は有機物を含む黒色粘質土である。1 ～ 8 層にかけては粘土ブロックの混入が顕著であり、人為的な埋め土と思われる。遺物は、2・6 層から珠洲焼壺・甕、7 層から漆器椀の破片が少量出土している（図版 194）。ほかに全層にわたって径 5 ～ 30cm ほどの礫が 47 点出土している。

SE600（図版 78・87・92、320）

5B13・14・18・19 区に位置する。平面形は長径 2.40m、短径 1.87m を測る楕円形で、底面は長径 1.23m、短径 0.83m を測る楕円形である。断面形は逆台形状を呈し、壁面はやや外傾しながら立ち上がり、上面付近で外反する。深さは 1.62m を測り、底面はⅩⅢ層に達している。覆土は 12 層に分層した。下層（7 ～ 11 層）を中心に粘土ブロックが多量に混入しており、人為的な埋め土と考えられる。遺物は、5 層か

ら珠洲焼壺・甕の破片が数点出土している（図版 194）。

SE667（図版 78・92、320）

5B5・10 区に位置する。平面形は長径 1.71m、短径 1.33m を測る楕円形で、底面は長径 1.34m、短径 1.05m を測る楕円形である。断面形は箱状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 1.57m を測り、底面はⅫ層に達している。覆土は 6 層に分層した。5 層は緑灰色土ブロックの混入が顕著である。遺物は、覆土中から珠洲焼片口鉢・壺・甕などの破片が少量出土している（図版 194・195）。ほかに 4 層の南側から径 5 ～ 20cm ほどの礫が 50 点以上出土している。

SE674（図版 78・81・93、320）

5B20、6B16・21 区に位置する。平面形は長径 2.18m、短径 1.88m を測る楕円形で、底面は径 1.05m を測る円形である。断面形は逆台形状を呈し、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。深さは 1.70m を測り、底面はⅫ層に達する。覆土は 10 層に分層した。このうち 8 層は抜き取られた井戸側の痕跡、9 層はその裏込土である可能性がある。覆土中から、井戸側の部材と見られるものを含め木製品が 15 点ほど出土している。いずれも井戸側として遺存していたものはなく、投棄されたような状況で出土している。木製品のほかに、覆土中からは白磁椀、珠洲焼壺・甕、常滑焼甕、椀形鍛冶滓の破片が少量出土している（図版 195・196）。

SE704（図版 26・27・65・81・92、320・321）

6C22 区に位置する。平面形は径 0.84m を測る円形で、底面は径 0.50m を測る円形である。断面形は箱状を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 1.40m を測り、底面はⅫ層に達する。内部施設として、刳舟を転用した井戸側を検出した。切断された刳舟は 2 個体あり、両舷を合わせて筒状の井戸側としている。覆土は 5 層に分層した。上層（1 ～ 3 層）には灰白色シルトブロックが含まれる。4 層は灰色粘質土と黒色粘質土が互層堆積する。最下層の 5 層は黒色粘質土で、底部には径 5cm ほどの礫が 30 点ほど敷き詰められている。遺物は、井戸側（刳舟）のほかに、1 ～ 4 層にかけて珠洲焼壺・甕の破片が少量出土している（図版 196 ～ 198）。

SE753（図版 27・65・81・93、321）

6C23 区に位置する。平面形は長径 1.87m、短径 1.36m を測る楕円形で、底面は径 1.10 ～ 1.30m を測る円形である。断面形は一部階段状を呈し南西側にテラスを持つが、ほかはやや外反しつつ急斜度で立ち上がる。深さは 1.00m を測り、底面はⅫ層上面に達している。覆土は 7 層に分層した。上～中層（1 ～ 5 層）にかけて灰色や青灰色シルトの混入が比較的多い。5 層は炭化物を多量に含む黒色土である。遺物は、覆土中から珠洲焼片口鉢、壺・甕の破片が少量出土している（図版 199）。

SE754（図版 27・81・93、321）

6D3・4・8・9 区に位置する。平面形は径 1.40m を測る円形で、底面は長径 0.86m、短径 0.75m を測る円形である。断面形は漏斗状を呈し、壁面は一旦内傾してから大きく外反して立ち上がる。深さは 0.96m を測り、底面はⅫ層に達している。覆土は 6 層に分層でき、1 ～ 3 層はシルトブロックが主体となる。人為的な埋め土と考えられる。遺物は、覆土中から珠洲焼壺の破片が数点出土している（図版 201）。

SE765（図版 23・26・78・81・94、321）

5B8・13 区に位置する。平面形は径 1.16m を測る円形で、底面は長径 0.48m、短径 0.36m を測る楕円形である。断面形は階段状を呈し、底部は狭いが、下半寄りにテラスがあり、そこからほぼ垂直に立ち上がる。深さは 1.62m を測り、底面はⅫ層に達する。覆土は 7 層に分層した。全体に褐灰色粘質土を基

調としているが、最下層の 7 層は暗灰緑色粘質土で、植物繊維を含む有機質土である。また、4・5 層からは合わせて 130 点ほどの礫（径 2 ～ 15cm）が出土している。遺物は、覆土中から白磁皿、珠洲焼片口鉢・壺・甕、漆器椀の破片が出土したほか、砥石が 1 点出土している（図版 199・200）。

SE841（図版 28・31・82・94、321・322）

9D13・14 区に位置する。平面形は長径 1.45 m、短径 1.35m を測る楕円形であり、底面は長径 0.56m、短径 0.40m を測る楕円形である。断面形は「U」字状を呈し、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。深さは 1.02m を測り、底面はⅫ層に達する。覆土は 6 層に分層した。1 層に白灰色ブロックの混入が顕著に見られるものの、2 層以下では見られない。最下層の 6 層は黒褐色土で、粘性の強い有機質土である。また、5 層上面からは拳大の礫が数点投げ入れられたような状態で出土している。遺物は、1 層から珠洲焼片口鉢の破片（2440）が 1 点出土している（図版 200）。

SE843（図版 23・78・94、322）

5A7・8・12・13 区に位置する。平面形は径 2.00m ほどを測る円形で、底面は長径 0.87m、短径 0.65m を測る楕円形である。断面形は階段状を呈し、壁面は下半寄りにテラスを持つ。深さは 1.60m を測り、底面はⅫ層に達する。覆土は 14 層に分層した。灰白色シルトブロックの混入が比較的顕著で、人為堆積と考えられる。5 層は炭化粒を多量に含み色調の暗い黒色土、最下層の 14 層は黒褐色粘質土で植物繊維を含む有機質土である。堆積状況からは南側と北側の 2 方向から交互に埋め戻されているような状況が看取される。2・5・6・8 層が北側から、3・4・7・9・10・11 層が南側からの投げ込みと思われる。遺物は、覆土中から白磁皿・小皿、珠洲焼壺・甕、古瀬戸鉢・大皿の破片のほか、砥石（2445）1 点が出土している（図版 200）。

SE844（図版 78・95、322）

5A23、5B3 区に位置する。平面形は径 0.90m ほどを測る円形で、底面は長径 0.74m、短径 0.60m を測る楕円形である。断面形は「U」字状を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。深さは 0.98m を測り、最深部はⅫ層に達している。覆土は 5 層に分層した。全体にシルトブロックの混入が顕著で、人為的な埋め土と考えられる。遺物は、1 層から青磁椀（2446）の破片が 1 点出土している（図版 200）。

SE860（図版 26・27・81・95、322）

6E12・13・17・18 区に位置する。平面形は長径 2.48m、短径 2.06m を測る楕円形で、底面は径 0.60m ほどを測る円形である。断面形は階段状を呈し、底部には水溜に転用された径 0.58m ほどの底板の抜けた円形曲物（2448）が 1 点設置されている。底部施設の上端にテラスを設け、壁面はやや外傾しながら立ち上がる。テラス部には木杭が 2 本直立して打ち込まれている。深さは 1.67m を測り、底面はⅫ層に達する。覆土は 8 層に分層した。8 層は水溜の裏込土である。覆土は全体的に粘土ブロックの混入が顕著であり、人為的な埋め土と考えられる。遺物は、2 層から青磁椀の破片（2447）1 点、底部から円形曲物 1 点、木杭（2449・2450）2 点などが出土している（図版 201）。

SE4001（図版 83・96、322・323）

12E7・12 区に位置する。平面形は不明であるが、南北軸で 1.17m を測る。断面形は漏斗状を呈し、深さは 0.77m を測る。底面はⅫ層に達している。覆土は 3 層に分層した。1・2 層は灰白色土ブロックの混入が顕著である。3 層は砂を多量に含む灰色粘質土である。遺物は出土していない。

SE4002（図版 84・96、323）

13D20・25 区に位置する。平面形は径 1.60m を測る円形で、底面は長径 1.34m、短径 1.10m を測

る楕円形である。西部遺跡Ⅰにおいて調査されたSK370と重複するもので、同一の遺構である可能性が高い。断面形は逆台形状を呈し、壁面は若干外傾しながら立ち上がる。深さは0.90mである。覆土は4層に分層した。1層は灰色や暗灰色のシルトブロックの混入が顕著である。2層は砂を多量に含む暗オリーブ灰色シルト、3層は炭化粒を多量に含む灰色シルト、4層は明黄褐色の砂層である。遺物は、覆土中から珠洲焼壺・甕、砥石の破片数点が出土している（図版201）。

SE4003（図版84・96、323）

14D11･16区に位置する。平面形は径1.80mを測る円形で、底面は径0.63～0.71mを測る円形である。断面形は漏斗状を呈し、壁面は上半で外傾の角度を強める。西部遺跡Ⅰにおいて調査されたSK370と重複しており、同一の遺構である可能性が高い。深さは検出面から1.34mを測り、底面はⅫ層に達している。覆土は5層に分層した。褐灰色粘質土を基調とし、5層を除き炭化粒を含む。特に4層は混入比率が高く、色調の暗い黒色土である。5層は灰色や暗灰色のシルトブロックを多量に含む灰色シルトである。遺物は、覆土中から珠洲焼壺・甕の破片1点が出土している。

土　　坑

SK005（図版84・97、323）

西部遺跡Ⅰで報告済みの遺構である。14D13・14・18・19区に位置する。平面形は不整形で、断面形は階段状である。規模は、長径2.12m、短径1.64m、深さ0.80mである。覆土は3層に分層した。青灰色シルトを基調とするが、3層は炭化粒の混入比率が高く色調の暗い暗青灰色土である。今回、底部付近を中心に再調査を行い、土層断面や遺構下端などの修正を行った。遺物は出土していない。

SK014（図版84・97、324）

西部遺跡Ⅰで報告済みの遺構である。13C14区に位置する。平面形は円形で、断面形は「U」字状である。規模は、長径1.21m、短径1.13m、深さ0.74mである。覆土は5層に分層した。1層は炭化粒を含まない褐灰色シルト、2～5層は炭化粒を含む灰色シルトである。今回、底部付近を中心に再調査を行い、土層断面や遺構下端などの修正を行った。遺物は出土していない。

SK539（図版79・97、324）

7A5区に位置する。平面形は円形で、断面形は「U」字状である。規模は、長径0.60m、短径0.56m、深さ0.38mである。覆土は3層に分層でき、2・3層には粘土ブロックが混入する。検出面付近は撹乱を受けている。遺物は出土していない。

SK548（図版78・97）

6A2区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径0.74m、短径0.70m、深さ0.24mである。覆土は3層に分層したが、このうち1層は柱痕の可能性がある。遺物は出土していない。

SK559（図版78・97、324）

5A4・5・9・10区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径1.45m、短径0.91m、深さ0.52mである。P588・589と重複してこれに切られる。遺物は、覆土中から珠洲焼甕の破片1点が出土している。

SK561（図版78・97、324）

5A2区に位置する。平面形は円形で、断面形は「U」字状である。規模は、長径0.64m、短径0.55m、

深さ 0.42m である。覆土は 3 層に分層した。粘土ブロック主体の覆土で、人為的な埋め土と考えられる。SK570 と重複してこれを切る。遺物は出土していない。

SK562（図版 78・98、324）

5A4 区に位置する。平面形は円形で、断面形は「U」字状である。規模は、長径 0.45m、短径 0.42m、深さ 0.23m である。覆土は 3 層に分層した。1・2 層には粘土ブロックが混入する。P620 と重複してこれを切る。遺物は出土していない。

SK567（図版 78・98、324）

5A24 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.87m、短径 0.71m、深さ 0.34m である。覆土は 2 層に分層したが、1 層は柱痕の可能性がある。遺物は出土していない。

SK570（図版 78・97、325）

5A2 区に位置する。南西側を SK561 に切られ詳細は不明であるが、平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、短径 0.63m、深さ 0.61m である。覆土は粘土ブロックを主体とする褐灰色粘質土で 3 層に分層した。人為的な埋め土と考えられる。遺物は出土していない。

SK571（図版 78・98、325）

5A2・7 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.86m、短径 0.43m、深さ 0.22m である。覆土は粘土ブロックが多い 1 層と少ない 2 層に分層した。遺物は出土していない。

SK575（図版 78・98）

5A3・4 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.49m、短径 0.47m、深さ 0.27m である。覆土は 3 層に分層した。炭化粒を含む褐灰色粘質土を基調とし、2 層は黄灰色粘土ブロックを多量に含む。P574 と重複してこれを切る。遺物は出土していない。

SK578（図版 78・98、325）

5A8 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.53m、短径 0.46m、深さ 0.27m である。覆土は褐灰色粘質土の単層である。遺物は出土していない。

SK579（図版 78・98、325）

5A4 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形はを「U」字状である。規模は、長径 0.67m、短径 0.55m、深さ 0.50m である。覆土は 2 層に分層した。いずれも黄灰色粘質土を少量含む褐灰色粘質土で、1 層は炭化粒を少量含み 2 層は微量に含む。P585 と重複するが新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK580（図版 78・98、325）

5A3・4 区に位置する。平面形は不整形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 2.03m、短径 1.45m、深さ 0.42m である。覆土は 4 層に分層した。炭化粒を含む褐灰色粘質土を基調としいるが、1 層は炭化粒の混入は見られず黄灰色粘質土ブロックを多量に含む。4 層は炭化粒を微量に含む灰黄褐色土である。遺物は、覆土中から土師器小皿・甕の破片、礫など数点が出土している（図版 201）。

SK581（図版 78・98、325）

5A2・3 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.84m、短径 0.38m、深さ 0.28m である。覆土は粘質土ブロックの混入が多い 1 層と少ない 2 層に分層した。覆土中から礫が数点（径 4 ～ 10cm）出土している。

SK583（図版 78・98、325）

5A7 区に位置する。平面形は円形で、断面形は逆台形状である。規模は、長径 0.78m、短径 0.70m、深さ 0.35m である。覆土は 2 層に分層した。いずれも炭化粒を含む褐灰色粘質土で、2 層は灰黄褐色粘質土ブロックを少量含む。P850 と重複してこれに切られる。遺物は出土していない。

SK610（図版 64・81・82・99、326）

7E12 区に位置する。調査のための暗渠排水溝により遺構東側を失い、平面形は明らかでないが、断面形は「U」字状である。規模は、南北軸で 1.04m、深さ 0.67m である。覆土は 7 層に分層した。灰色や褐灰色シルトと灰色や灰黄色砂質土が互層堆積する。6 層を除き炭化粒の混入が見られる。遺物は出土していない。

SK784（図版 78・99）

5A24・25 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は階段状である。規模は、長径 0.99m、短径 0.76m、深さ 0.49m である。覆土は粘土ブロックの混入量の違いで 3 層に分層した。P794 と重複するが新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

SK788（図版 81・99、326）

5E20、6E16 区に位置する。遺構東側の大半が調査区外のため、規模の詳細は不明であるが、南北軸で 1.85m、深さは最深で 0.24m である。覆土は褐灰色粘質土を基調としているが、検出時に平面プランを誤認し、詳細な土層観察は行えなかった。断面形は不明である。遺物は出土していない。

SK913（図版 78・81・99）

5B18 区に位置する。調査のための暗渠排水溝により遺構南側を失い、規模の詳細は不明であるが、東西長 0.58m、深さ 0.63m である。覆土は褐灰色粘質土を基調としているが、検出時に平面プランを誤認し、詳細な土層観察は行えなかった。断面形は「U」字状である。遺物は出土していない。

SK1666（図版 78・99、326）

5A10、6A6 区に位置する。平面形は楕円形で、断面形は底部の小さな「V」字状である。規模は、長径 1.49m、短径 1.17m、深さ 0.75m である。撹乱下での検出のため、本来の深さは 1.00m 前後だったと考えられる。覆土は 7 層に分層した。遺物は、覆土中から珠洲焼片口鉢の破片 1 点が出土している。

溝

SD025（図版 79・80・82・99）

11A 区に位置する。西部遺跡 I の調査では、8B ～ 11A 区にかけて南北方向（N － 1° － W）に伸びているのが確認されたが、今回は調査区西側を拡張し、遺構北側の延長部分 5.00m を追加調査した。上幅は 1.60m ほどで、断面形は逆台形状を呈し、深さは 0.40m である。覆土は西部遺跡 I の調査では 3 層に分層している。炭化物を含む褐灰色粘質土を基調としているが、1 層は色調の明るい灰色粘質土である。遺物は、覆土中から白磁椀（2457）、砥石（2458）の破片が各 1 点出土している（図版 201）。

SD027（図版 79・82・99、326）

9・10A 区に位置する。西部遺跡 I の調査では、7B ～ 9A 区にかけて南北方向（N － 3° － E）に伸びているのが確認されたが、今回は調査区西側を拡張し、遺構北側の延長部分 3.00m を追加調査した。溝は南側で二股に分かれ、上幅 0.30m ほどを測る東側の溝と、上幅 0.40m ほどを測る西側の溝の 2 条となる。中程で合流し、上幅 0.50m 前後の 1 条となって北側は調査区外に伸びる。深さは 0.22m を測る。覆土

は3層に分層した。1・2層は褐色土で1層は炭化粒を微量に含み2層は少量含む。3層は炭化粒を少量含む灰白色粘質土である。遺物は、覆土中から珠洲焼甕の破片、礫などが数点出土している。

SD041（図版79・82・83・99、326）

9A区に位置する。西部遺跡Ⅰの調査では、9・10A～10C区にかけてN－90°－W方向に伸びているのが確認されたが、今回は調査区西側を拡張し、遺構西側の延長部分3.00mを追加調査した。上幅1.08～1.58mを測り、断面形は逆台形状を呈し、深さは0.20mを測る。覆土は2層に分層した。いずれも黒色土や灰白色土のブロックを含む灰黄褐色粘質土で、1層は炭化粒を多量に含み2層は少量含む。遺物は、覆土中から珠洲焼甕の破片数点、砥石（2460）1点が出土している（図版201）。

SD4020（図版79・80・99）

11A区に位置し、調査区西側の拡張区で検出した。N－66°－W方向に伸びる。断面形は逆台形状である。規模は、長さ1.48m以上、上幅0.75～0.83m、深さ0.20mである。西側は調査区外へ伸び、東側は西部遺跡Ⅰの調査では未検出であるが、SD109が延長上にあり、同一の遺構である可能性が考えられる。覆土は2層に分層した。1層は灰色シルトブロックや炭化粒を含むオリーブ灰色シルト、2層は灰色シルトブロックを含む明緑灰色シルトである。遺物は出土していない。

第V章　遺　　物

1　概要と基本方針

平成 17・18 年度の発掘調査では、古代から中世にかけての遺物が平箱（54 × 34 × 10cm）にして約 657 箱出土している。内訳は古代の土器 462 箱、陶磁器 4 箱、土製品 4 箱、鉄製品 3 箱、鉄滓 12 箱、石器・石製品 3 箱、漆器・漆関連遺物 8 箱、木製品 61 箱、搬入礫 70 箱、中世の土器・陶磁器類 5 箱、石器・石製品 1 箱、木製品 15 箱、搬入礫 9 箱である。

古代では、XIIIa・XII・XI・VIII層の 4 層から遺構と遺物を検出した。XIIIa 層は、資料数が少ないため詳細な時期は不明であるが、非ロクロ系の土師器甕などが出土しており、おおむね 8 世紀前半に収まるものと思われる。XI層からは 9 世紀中葉を中心とする時期の須恵器を主体とした遺物群が、VIII層からは 9 世紀末～ 10 世紀中葉の土師器を主体とした遺物群が出土している。なお、水田が検出されたXII層からは遺物の出土はない。

中世では、IV層から遺構と遺物を検出した。遺構検出面は 1 面（V層上面）であるが、出土遺物の時期を見ると、13 世紀後半から 14 世紀前半の空白期を挟んで、12 世紀後半から 13 世紀前半と 14 世紀後半から 15 世紀後半の 2 時期が認められる。

遺物の説明は、古代、中世の順に記すが、古代の 3 時期（XIIIa・XI・VIII層）については本遺跡で最も古いXIIIa 層の遺物から順に説明する。

2　遺 物 各 説

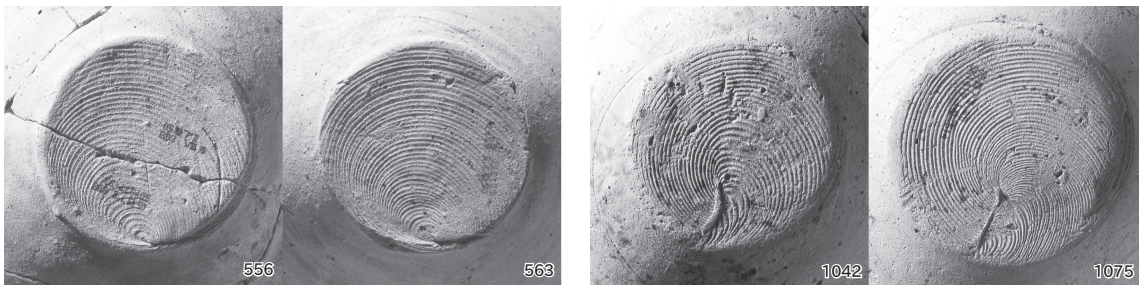
A　古　　代

1）分類と記述方法

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、製塩土器、転用硯、木製品、柱根、杭、漆紙、漆器、石器・石製品、鉄製品、鉄滓、土製品、炉壁が出土している。各層ごとに掘立柱建物・掘立柱建物関連遺構・地床炉・井戸・土坑・性格不明遺構・溝・ピット・遺構外出土遺物の順番で記載した。鉄関連遺物については「別表４」、漆器については「第VI章３」、漆紙については「附編 3」に詳しいので参照されたい。土師器無台椀は器高 / 口径：器高指数と底径 / 口径：底径指数が編年基準となるため、４点以上出土した遺構について両指数の分布と口径・器高・底径の法量値の分布を記した。

土　師　器

土師器は、ロクロ系と非ロクロ系に大きく分かれ、ロクロ系土師器が主体となる。非ロクロ系は微量である。記述に当たり、煩雑さを避けるため、非ロクロ系のみ土師器非ロクロ系～と記した。器種について下記の類型を設定した。回転糸切りは土師器無台椀においてＡ・Ｂの２類を設定して記述したが、そのほ



A　類　　B　類

第 11 図　回転糸切り類型

かの器種ではＡ類だけのため類型名は省いた。

器　　種

器種には小皿、無台椀、無台杯、有台椀、皿、盤、耳皿、香炉蓋、鉄鉢、鉢、台付鉢、甕、小甕、鍋、小型羽釜が存在する。

小　　皿　皿よりも口径が小さく器高が高い。形状的には土師器無台椀と同じだが､口径 10cm 以下、器高 3cm 以下と特に小さいものを中世土師質土器小皿との関係から、また、一之口遺跡東地区の報告例［鈴木ほか 1994］を考慮して小皿とした。底部の切り離しは回転糸切りである。

無 台 椀　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、口径は 10.1 ～ 17.0cm と小皿よりも大きく、高台を持たないもの。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。法量値により下記のように細分した。

Ⅰ　類　口径 10.1 ～ 14.0cm、器高 3.6 ～ 5.5cm のもの。形状は口縁部が内湾気味に立ち上がり、全体として口径に対して器高が低く浅いボウル状をなすもの、口縁部は内湾気味にならず、器高が高く、底部は絞り込まれるものに大きく分けられ、Ⅺ層からは前者だけが、Ⅷ層では後者が主体となる。

Ⅱ　類　口径 14.1cm 以上×器高 4.8cm 以上の大型のもの。形状は底部が大きく、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの、底部は小さく、体部～口縁部が直線的から外反しながら立ち上がるものに分かれ、Ⅺ層からは前者が、Ⅷ層からは後者が出土している。

無台椀の回転糸切りは、それ自体の痕跡からＡ類とＢ類の２種に分けることができる。回転糸切りだがＡ類かＢ類か判断できないものは不明とした。本文中では、基本的にＡ類、Ｂ類、不明、それぞれの出土点数を遺構ごとに記載するが、出土点数がＡ類とＢ類を合わせて３点以下になるものはその限りではない。観察表を参照されたい。

Ａ　類　回転糸切り痕の条線群は弧状を呈し、その中心が底部端に位置するもの。

Ｂ　類　回転糸切り痕の条線群は弧状を呈し、その中心が底部端から 5mm 以上内側に位置し、それから底部端に向い条線群に直交する小溝が存在するもの。

無 台 杯　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、器形は須恵器無台杯に類似するが、焼成は酸化焔、底部の切り離しは回転糸切りで土師器無台椀と同じもの。Ⅷ層から１点出土しただけである。

有 台 椀　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持つもの。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。Ⅷ層から出土しているだけである。

皿　椀よりも浅く、小皿よりも口径が大きいのに対して器高が低く、底部は無台で盤よりも小さく、体部は大きく開き、口縁部で内屈するもの。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転糸

切りである。XI・Ⅷ層ともに出土している。

盤　椀よりも浅く、小皿・皿よりも底部は大きく、口縁部が直立気味となるもの。ロクロ調整であるが、小破片のため底部の切り離しは不明である。Ⅷ層から出土しているだけである。

鉄　鉢　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、内湾する口縁部を持ち、いずれも破片のため確認できないが底部が丸い鉄鉢状を呈すと推測されるもの。ロクロ調整である。Ⅷ層から出土しているだけである。

耳　皿　土師器小皿の口縁部を耳状にゆがませた箸受けである。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。Ⅷ層から出土しているだけである。

香炉蓋　鈕を持ち、天井部は半球形で、器高が高く、天井部に孔を有す蓋である。細片のため孔部が確認できないものは類例から香炉蓋と判断した。ロクロ調整である。Ⅷ層から出土しているだけである。

鉢　椀よりも深く、無台の平底で、胴部は開き気味に立ち上がり、口縁部は強く外反するもの。ロクロ調整で、その後に胴部外面にケズリが施されるものもある。Ⅷ層から出土しているだけである。

台付鉢　有台椀よりも深く、接地面が平坦な高台が付き、鉢部は体部～口縁部が大きく開き外反するもの。ロクロ調整で、底部は回転糸切りのまま、指頭による放射状の凹線を施したものなどがある。Ⅷ層から出土しているだけである。

非ロクロ甕　ロクロを用いない甕を一括する。底部は平底と思われ、胴部は張りが弱く、口縁部は外反するもの。口縁部は横ナデ若しくはハケメ、胴部は内・外面にハケメを施している。すべて小破片で、全体の形状が把握できるものはない。Ⅻa層から出土しているだけである。

甕　ロクロ整形の甕で、口径17cm以上の大型のもの。口縁部は外反し、受け口状になるものが多い。底部は丸底のものが多いが、平底となるものも存在する。ロクロ調整で、胴下部は外面がタタキ、内面にはあて具痕が見られる。XI・Ⅷ層ともに出土している。

小　甕　ロクロ整形の甕で、口径17cm未満の小型のもの。口縁部は外反し、受け口状になるものが多い。底部は平底となる。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転糸切りで、そのままのものとケズリが施されるものがある。口径からⅠ～Ⅲ類に細分する。

Ⅰ　類　口径が9cm未満で、器高が口径よりも低いもの。Ⅷ層から出土しているだけである。

Ⅱ　類　口径が9cm以上～11cm未満のもの。XI・Ⅷ層ともに出土している。

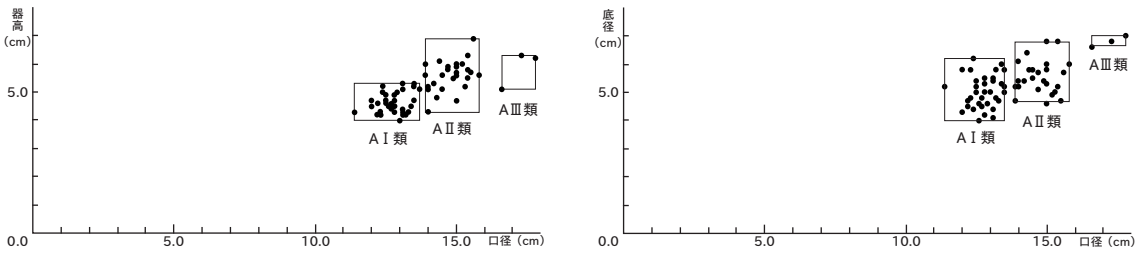
Ⅲ　類　口径が11cm以上～17cm未満のもの。XI・Ⅷ層ともに出土している。

鍋　口径が大きく、器高が浅い中華鍋状を呈する煮炊具である。ロクロ調整で、体部は外面にタタキ、内面にはあて具痕が見られる。XI・Ⅷ層ともに出土している。

小型羽釜　小型甕の口縁部下に鍔が付く煮炊具で、関東地方で見られる日常的に使用される大型煮炊具と大きさが異なるもの。ロクロ調整で、胴部上端を外方に折り曲げて鍔とし、その上に口縁部を貼り付けている。Ⅷ層から出土しているだけである。

黒色土器

器種には、無台椀、有台椀、有台皿、有台鉢、蓋があり、器種不明のものもある。Ⅷ層から出土しているだけである。



第 12 図　黒色土器無台椀Ａ類　器高／口径、底径／口径グラフ

黒色処理が内面だけのものをＡ類、内・外面に見られるものをＢ類とした。

無 台 椀　黒色処理された土器類の中で、皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持たないもの。資料点数の多いＡ類は口径・器高・底径の法量値から下記のように細分した。

ＡⅠ類　内面にのみミガキを施し、黒色処理され、口径 11.4 ～ 13.7cm、器高 4.0 ～ 5.3cm、底径 4.0 ～ 6.2cm のもの。

ＡⅡ類　内面にのみミガキを施し、黒色処理され、口径 13.9 ～ 15.8cm、器高 4.3 ～ 6.9cm、底径 4.6 ～ 6.8cm のもの。

ＡⅢ類　内面にのみミガキを施し、黒色処理され、口径 16.0 ～ 17.8cm、器高 5.1 ～ 6.3cm、底径 6.6 ～ 7.0cm のもの。

Ｂ　類　内・外面にミガキを施し、黒色処理されるもの。出土点数は少ない。

有 台 椀　黒色処理された土器類の中で、皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持つもの。黒色処理される範囲から下記のように細分した。

Ａ　類　内面のみにミガキを施し、黒色処理されるもの。

Ｂ　類　内・外面にミガキを施し、黒色処理されるもの。

有 台 皿　黒色処理された土器類の中で、椀よりも浅く、小皿よりも口径に対して器高が低く、底部は有台で盤よりも小さく、体部～口縁部が大きく開いているもの。黒色処理される範囲から下記のように細分した。

Ａ　類　皿部内面のみにミガキを施し、黒色処理されるもの。

Ｂ　類　内・外面の全面にミガキを施し、黒色処理されるもの。

有 台 鉢　黒色処理された土器類の中で、椀よりも深く、体部～口縁部が大きく開き、底部に極めて低い高台が付くもの。鉢部内面にミガキを施し、黒色処理されるもの。

蓋　瓶類や合子などの蓋と推測されるものである。口縁部は直立し、天井が水平となり、内・外面の全面にミガキを施し、黒色処理されるもの。

器種不明　合子や瓶類の底部片と推定されるものだが、細片のため器種不明とした。平底で、内・外面の全面にミガキを施し、黒色処理される。

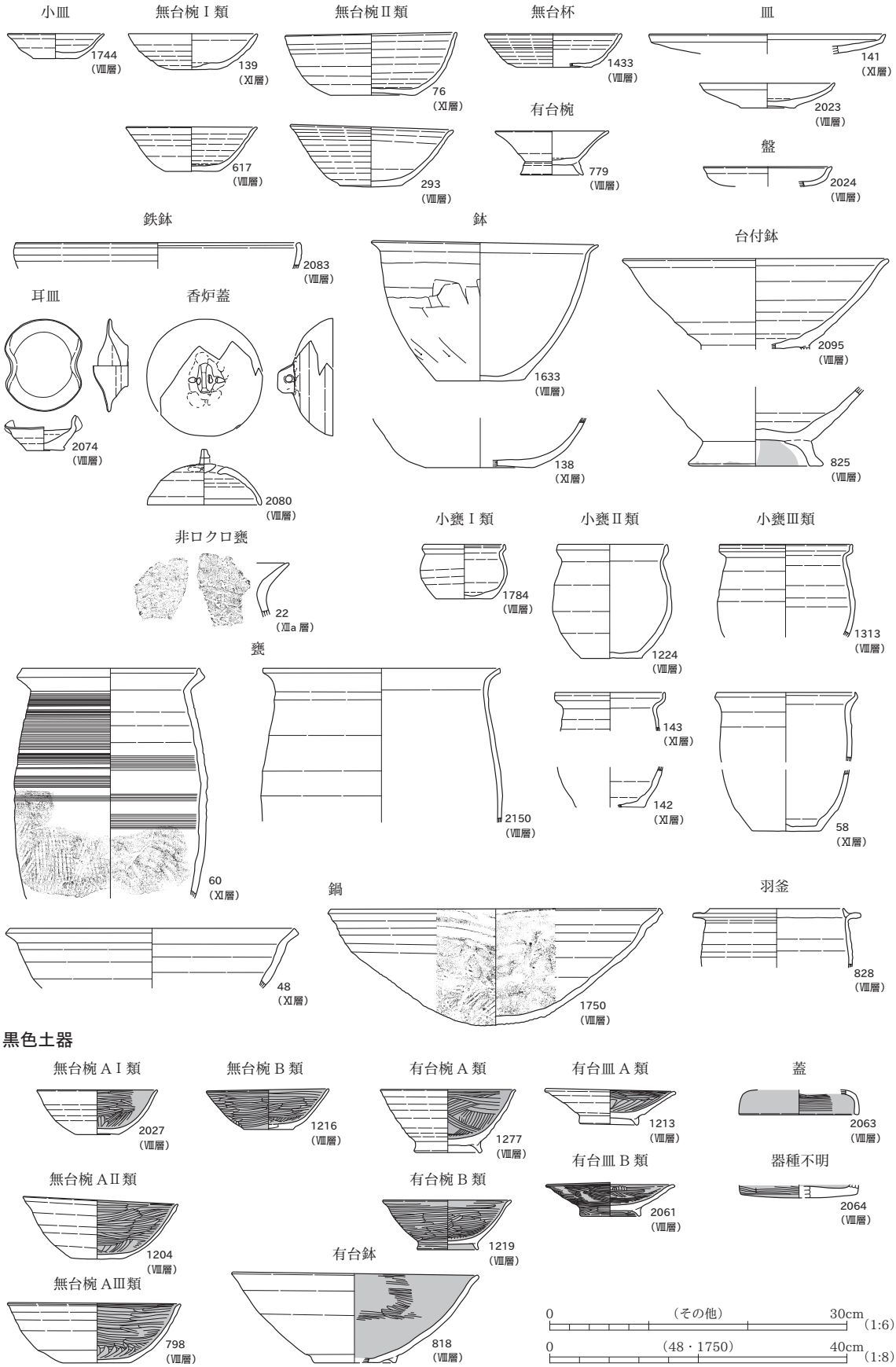
須　恵　器

須恵器は胎土の類型と器種類型を設定し、その類型名をもって記述した。

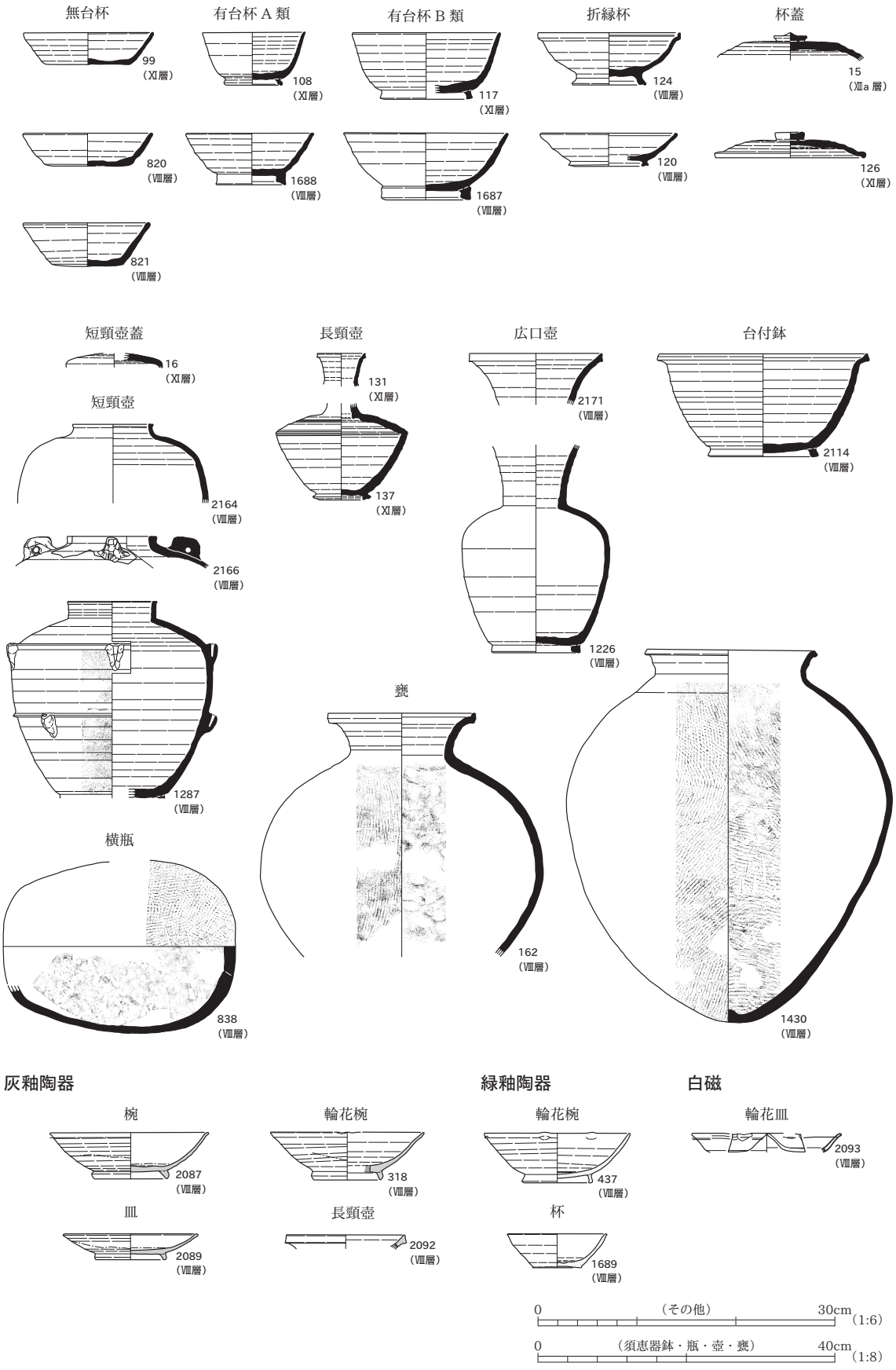
胎　　土

須恵器の胎土は『山三賀Ⅱ遺跡』［坂井ほか 1989］を参考に、Ａ・Ｂ・Ｃの各群に分けて表記する。

Ａ　　群　胎土が粗く、比較的大きめの礫を含み、器面がざらつくもので、古代の磐舟郡から沼垂郡



第 13 図　土師器・黒色土器 器種分類図



第 14 図　須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・白磁 器種分類図

にかけての窯跡群で生産された須恵器に見られる。

B　群　胎土は精良で、白色微粒子を多く含む。無台杯と小型有台杯は器面が滑らかであるが、そのほかの器種はややざらつく器面である。佐渡小泊窯跡群で生産された須恵器と考えられる。

C　群　A・B群以外のものを一括する。

器　種

器種には、無台杯、有台杯、折縁杯、杯蓋、皿、短頸壺、長頸壺、広口壺、台付鉢、横瓶、甕がある。

無台杯　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持たないもの。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。XI層は口径に対して器高の比較的低いものだけであるが、Ⅷ層は口径に対して器高の比較的高いものも存在する。

有台杯　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持ち、口縁部は折縁にならないもの。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。器高によりA・B類に分ける。

A　類　器高6.0cm以下の中・小型のもの。形状は出土層位により多少異なり、Ⅷ層のものは体部～口縁部の傾きがXI層のものよりも開いている。

B　類　器高6.1cm以上の大型のもの。形状は出土層位により多少異なり、Ⅷ層のものは体部～口縁部の傾きがXI層のものよりも開いている。

折縁杯　皿よりも深く、鉢よりも浅い有台の器で、口縁部は外反した後に端部が内屈する。ロクロ調整で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。退化して端部が内屈するだけのものも含めた。XI層から主に出土している。

杯　蓋　須恵器有台杯に伴うと推測され、鈕が付き、天井部は口径と比較して器高が低く、口縁端部を折り曲げているもの。ロクロ調整で、天井部外面にケズリ、天井部内面に指頭によるナデが見られるものもある。XI層から主に出土している。なお、異なる器種の蓋は前にその器種名を付している。

短頸壺　短く直立する口縁部を持ち、肩部が張る壺。耳の付くものとないものがある。ロクロ調整である。Ⅷ層から主に出土しているが、XIIIa層から短頸壺の蓋と考えられるものも出土している。

長頸壺　底部には高台を持ち、胴部上位が張り、口縁部～頸部は細長く外反して伸び、頸部下端が広口壺よりも細く絞り込まれるもの。ロクロ調整である。XI層から主に出土している。

広口壺　底部には高台を持ち、胴部上位が張り、口縁部～頸部は長く外反して伸び、頸部下端が長頸壺よりも太いもの。ロクロ調整である。Ⅷ層から出土しているだけである。

台付鉢　椀よりも深く、底部には高台を持ち、鉢部は底部から開きながら立ち上がり、口縁部が最大径となるもの。ロクロ調整である。Ⅷ層から出土しているだけである。

横　瓶　瓶類で、俵状の胴部を有するもの。胴部は外面がタタキ、内面にはあて具痕が見られる。Ⅷ層から出土しているだけである。

甕　広口の甕で、口縁部が外反し、球形の体部を持つもの。胴部は外面がタタキ、内面にはあて具痕が見られる。XI・Ⅷ層ともに出土している。

灰　釉　陶　器

器種には、椀、輪花椀、皿、長頸壺がある。Ⅷ層から出土しているだけである。

椀　　皿よりも深く、高台を持ち、口縁部に加飾がないなもの。ロクロ調整である。底部の切り離しが回転糸切りで、その後にケズリやナデを施すものがある。釉は浸け掛けのもののみ出土している。

輪花椀　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持ち、口縁部は加飾され輪花状となるもの。ロクロ調整である。底部の切り離しは回転糸切りである。釉は浸け掛けである。

皿　　椀より深く、高台を持ち、口縁部に加飾がないもの。ロクロ調整である。底部の切り離しが回転糸切りで、その後にケズリやナデが施されるものがある。釉は浸け掛けである。

長頸壺　瓶類で、細長く伸びる頸部を持つもの。口縁部の内・外面に釉が見られる。ロクロ調整である。口縁部の破片がⅧ層から１点出土しただけである。

緑　釉　陶　器

器種には、輪花椀、杯・耳皿がある。Ⅷ層から出土しているだけである。

輪花椀　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台を持ち、口縁部は加飾され輪花状となるもの。ロクロ調整で、底部は切り離し後に調整され回転糸切り痕が残るものは少ない。緑釉が全面に見られる。京都産と近江産のものが存在する。

杯　　皿よりも深く、鉢よりも浅い器で、高台のない平底を持ち、体部から口縁部は開きながら立ち上がるもの。ロクロ調整で、底部は回転糸切りのままである。京都産である。１点だけである。

耳　皿　口縁部を耳状にゆがませた箸受けである。小破片が１点出土しているだけである。

白　　磁

中国輸入陶磁器は、Ⅷ層から白磁輪花皿が１点出土しているだけである。型式名は［横田・森田1978］を参考にして記述した。

輪花皿　体部は開き、口縁部は外反する皿で、外反口縁部は加飾され輪花状となるもの。

製　塩　土　器

底部が大きく、胴部～口縁部は直線的に立ち上がり、輪積痕が残る粗い調整のもの。

器　　台

円筒形で、胴部に孔を有し、上・下両端部は平坦になり、輪積痕が残る粗い調整のもの。

転　用　硯

須恵器を再利用した硯で、墨痕と摩滅痕のあるものとするが、墨痕がなくとも須恵器の内面が平滑に摩滅しているものも含めた。なお、墨痕だけのものは墨留の可能性があるため不明とした。

木製品・柱根・杭

木製品類は腐蝕が著しく、調整痕が不明で記述できないものが多い。柱根の端部にある孔は木材運搬するためと推測し、メド穴と表記した。

漆　　器

木胎腐蝕が著しく実測不可能なものは写真掲載のみにとどめた。漆器は「第Ⅳ章３」に詳しいので参照されたい。

漆　　紙

漆紙には遺物番号とは別に基礎整理段階で破片ごとに付した漆紙整理番号（E-1、E-2 など）を併記した。実測図の断面図は、破損の恐れがあるため精度の低いものである。なお、851（E 漆紙）は接合した脆弱な資料ゆえに断面図の作成は差し控えた。表・裏面に判読可能な文字が確認された 851 の漆紙文書の釈文については附編３に詳しいので参照されたい。

石器・石製品

石器・石製品の中で、鉄関連遺物とした砥石・鉄床石・凹石については別表４に詳細が記されており、本章ではそれを基に簡略に記述する。

鉄関連遺物

鉄器･鉄滓･炉壁などの鉄関連遺物は､別表４に詳細を記した｡本章ではそれを基に簡略に記述する｡なお､本章における「鉄が多い」は、別表では「含鉄」と表記した。

土　製　品

土製品の中で、羽口は別表４に詳細を記した。本章ではそれを基に簡略に記述する。

2）Ⅻa層の出土遺物

遺物の多くは調査区東部中央に位置する SB3230 周辺の遺物包含層からの出土で、遺構では SB3230、P3218・3231・3241・3245・3246・3247・3249・3250 から杭・柱根が出土したにすぎない。遺物には須恵器、土師器と杭・柱根があり、いずれも数は少ない。

遺構出土遺物（図版100、333）

SB3230

P1・３～７から打込式の柱根が出土している。１は P1、２は P3、３は P4、４は P5、５は P6、６は P7 からの出土である。１～６はいずれも先端部を尖らせており、１・２・４～６が芯持丸木材、３が割材を用いている。

単独ピットの杭・柱根

本層では、単独で 26 基の杭を検出したが、第Ⅶ章で記したように 2 基一組で構成される構築物の柱である可能性があり、現状では杭とも柱根とも判断できない。出土したもののうち、P3218（7）、P3231（8）、P3241（9）、P3245（10）、P3246（11）、P3247（12）、P3249（13）、P3250（14）を代表として掲載する。7・10 ～ 14 は芯持丸木材を用いており、先端部を尖らせている。8 は割材を用いており、先端部は平坦となる。9 は芯持丸木材を用いており、先端部は不明である。すべて樹皮の付着はなく、腐蝕したか人為的に剝がされたのかは不明である。

遺構外出土遺物（図版 101、335）

15 は須恵器杯蓋である。胎土は A 群である。端部が欠損し大きさは不明だが、口径が 16cm 以上のかなり大きなもので、天井部外面の 1/2 に右回転ヘラケズリが、同内面中央部に指ナデが施されている。口縁端部は意図的に打ち欠いているものと思われる。内面に墨痕が見られるが、摩滅しておらず、転用硯かは不明である。16 は須恵器短頸壺の蓋である。胎土は A 群で、焼成不良のためか酸化している。17 は須恵器甕の胴部片である。胎土は A 群である。外面は平行タタキの後カキメが、内面には同心円のあて具痕が見られる。18 は土師器非ロクロ系甕の口縁部片である。小型で、口縁部は外反し、外面はナデの後ハケメを施している。19 は土師器非ロクロ系甕の頸部片である。胴部は球形を呈していたと思われ、胴部の外面に縦位のハケメ、内面に横位のハケメを施している。20 ～ 24 は土師器非ロクロ系甕の口縁部を中心とする破片である。口縁部は「く」の字状に外反する。調整は 20・21 が口縁部横ナデ、22 ～ 24 は口縁部～胴部の内･外面にハケメを施している。25 は土師器非ロクロ系甕の頸部～胴上部片である。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は張りがない。調整は頸部～胴部の内･外面にハケメを施している。26 ～ 34 は土師器非ロクロ系甕の胴部片である。調整は外面に縦位、内面に横位のハケメを施し、26 ～ 31 は細いハケメ、32 ～ 34 は太いハケメである。35 は土師器非ロクロ系甕の底部に近い胴部下端片である。調整は胴部の外面に縦位のハケメ、内面に木口状工具によるナデを施している。36・37 は土師器非ロクロ系甕の底部片である。中央部が上げ底気味となる。調整は 36 が内・外面ナデ、37 には木葉痕が見られる。38 は頁岩製の砥石または磨石と思われ、扁平な自然礫を用いている。

3）XI層の出土遺物

遺物の分布は、平地式建物である SB3030・3201、掘立柱建物である SB3050・3100・3200 の 5 棟の建物周辺に集中する。建物周辺といっても、その東側に分布が多く（SB3050 を除く）、それに繋がるように、遺構が検出されていない調査区南東部に遺物の集中が認められることから、東方の未調査区に遺構の存在を予想させる。遺構の検出されていない調査区北西部では遺物出土量が少ない。遺物は須恵器、土師器、転用硯、土錘、烏帽子または圭冠、柱根、杭、石器・石製品、鉄器、鉄滓が出土している。

遺構出土遺物（図版102～105、329・334・335）

掘立柱建物出土遺物（図版 102 ～ 104、329・334・335）

SB3050

本遺構の遺物は建物自体からの出土はなく、関連遺構である SD3052 から出土している。

【SB3050 関連遺構】

SD3052（図版 102、334）

39 は須恵器有台杯 A 類で、胎土は A 群である。高台は外端面が接地する。底部は回転ヘラ切りである。底部内面には光沢のある摩耗痕が見られ、転用硯かもしれない。40 は須恵器杯蓋で、胎土は B 群である。扁平鈕で、口縁端部を折り曲げている。天井部外面の中央部に左回転のヘラケズリが施されている。鈕部外面には判読不明の墨書がある。

SB3200（図版 102、334）

遺物は建物の柱穴である P3・4、関連遺構である SD3072・3102、SK3091 から出土している。

【SB3200 本体】

41 は P4 出土の芯持丸木材で、下端が平坦となっていることから打込式の柱据え方でなく、捩込式の方法をとったと考えられる。42 は P3 から出土した須恵器折縁杯である。胎土は A 群である。高台は内端面が接地し、体部と底部の境目に付き、体部は急角度で立ち上がる。口縁部の外反は弱く、端部は「く」の字状に内屈する。底部は右回転のヘラ切りである。

【SB3200 関連遺構】

SD3072（図版 102、334）

43 は須恵器無台杯である。胎土は B 群である。底部は上げ底状で、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的となる。底部は左回転のヘラ切りである。

SD3102（図版 329・334）

44 は烏帽子または圭冠の破片と思われるが、脆弱で実測不可能のため写真のみ掲載する。目の粗い布に漆を塗布している。詳細については第Ⅵ章を参照されたい。

SK3091（図版 102、334）

45 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁端部は「く」の字状に内屈し、内・外面にはカキメを施している。

SB3201（図版 102、334）

本遺構は区画溝である SD3090・3121 に囲まれた空間内に地床炉と土坑を検出した遺構である。遺物は関連遺構である SD3090・3121 から出土している。

【SB3201 関連遺構】

SD3090（図版 102、334）

46 は須恵器無台杯である。胎土は B 群である。体部は直線的に立ち上がる。底部は左回転のヘラ切りである。47 は土師器無台椀Ⅰ類である。平底で、体部～口縁部は丸みを持って立ち上がる。底部は右回転の糸切りである。底部外面に判読不明の墨書がある。48 は土師器鍋である。口縁部は外傾し、内面端部は上方へと少しつまみ上げている。49 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となり、胴部の張りは弱い。50 は土師器甕である。口縁部は退化した受け口状となり、胴部の張りは弱い。51 は脆弱な漆器椀で、実測不可能のため写真のみ掲載する（図版 334）。口縁部片で、上塗りは総黒色である。

SD3121（図版 102、334）

52 は須恵器無台杯である。胎土は A 群である。底部は上げ底状で、体部は下位で丸みを持ち、口縁部

にかけて直線的に立ち上がる。底部は左回転のヘラ切りである。底部外面に判読不明の墨書がある。53は須恵器甕で、胎土はＢ群である。外面に木目を有する平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。

SB3030（図版 103、334・335）

本遺構は区画溝に囲まれた中から柱穴と床状の硬化面、鍛冶炉、土坑を検出した。平地式の鍛冶工房と推測される。遺物は床面と柱穴である P3132、関連遺構である SD3029・3042、SW3126、SK3128から出土している。

【SB3200 本体】

SB3030 床面（図版 103、334）

54 ～ 57 は須恵器無台杯である。胎土は 54 ～ 56 がＢ群、57 がＡ群である。いずれも口径が12.6cm 以下で、底部は上げ底状である。体部～口縁部にかけては 54 が丸みを持って、55 ～ 57 は直線的に立ち上がる。54 ～ 56 の底部は左回転のヘラ切り、57 は回転ヘラ切りで、ロクロ回転方向は不明である。54 は底部外面に判読不明の墨書、55 は底部外面に「木」と判読不明の一文字からなる二重書きの墨書がある。58 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となり、胴部の張りは弱い。59 は土師器甕である。口縁部は内端が角張り、受け口状にならない。60 は土師器甕である。口縁部は受け口状となり、胴部の張りは弱い。胴部外面の上部はカキメ、下半部は木目のある平行タタキ、内面の上部はカキメ、下部はカキメとあて具痕をナデ消している。

P3132（図版 103、335）

61 は須恵器無台杯である。胎土はＢ群である。底部は上げ底状で、体部～口縁部は直線的に立ち上がる。底部は左回転のヘラ切りである。

【SB3030 関連遺構】

SD3029（図版 103、335）

62 は須恵器無台杯である。胎土はＢ群である。口径が大きく、底部は上げ底状で、体部～口縁部は直線的に立ち上がる。底部は左回転のヘラ切りである。63 は土師器小甕の底部片である。底部の切り離しは風化が著しく不明瞭だが、回転糸切りらしき痕跡が確認できる。64 は磨石または砥石と思われる。流紋岩質凝灰岩の自然礫の一部が摩耗しているが、その度合いは弱い。

SD3042（図版 103・104、335）

65 ～ 67 は須恵器無台杯である。胎土はＢ群である。底部は上げ底状で、左回転のヘラ切りである。65・66 の口縁部～体部は内湾気味にやや丸みを持って立ち上がる。66・67 は底部外面に「木」の墨書がある。68 は須恵器有台杯Ａ類である。胎土はＢ群である。口縁部～体部は直線的に立ち上がり、高台は外端面が接地し、体部と底部との境目に付いている。底部は回転ヘラ切りである。69 は土師器甕である。口縁部は受け口が退化しており、内面端部のつまみ上げは弱い。内面にはカキメが施されている。70 は磨石である。砂岩の棒状の自然礫を利用しており、側面の２か所に光沢を有す摩耗面が、上・下端部に打痕が認められる。

SW3126（図版 104、335）

71・72 は椀形鍛冶滓破片である。底面に炉床土が付着する。

SK3128（図版 104、335）

73 は椀形鍛冶滓破片である。底面に炉床土が付着する。

地床炉出土遺物（図版 104、335）

SW3070

74 は土師器甕の底部片である。平底で、外面胴部～底部までタタキ調整が施され、内面はナデである。陸奥型甕の変異形態かもしれない。

土坑出土遺物（図版 104、335）

SK3046

75 は用途不明の石製品である。板状で、馬形状を呈し、全面が磨られている。片面にうっすらと模様のようなものが見えるが、現状では墨書きとも汚れとも判断しがたい。頁岩製。

SK3049

76 は土師器無台椀Ⅱ類である。体部下半は丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的となる。底部は右回転の糸切りである。77 は砥石である。頁岩の自然礫を利用しており、片面に砥面と細溝状の刃研ぎ痕が見られる。

SK3163

78 は須恵器杯蓋である。胎土はＡ群である。天井部は比較的高く、口縁部は端部を折り曲げている。天井部外面中央には右回転のヘラケズリが見られる。

溝出土遺物（図版 104、335）

SD3051

79 は須恵器甕の口縁部片である。口縁部は外反する。80 は磨石である。流紋岩の自然礫で、平滑な摩耗面が 3 か所に見られる。

SD3123

81 は須恵器無台杯である。胎土はＢ群である。底部は上げ底状で、体部～口縁部は直線的に立ち上がる。底部は左回転のヘラ切りである。

ピット出土遺物（図版 105、335）

P3216

82 は単独で検出されており、杭と思われる。割材を用い、先端部を尖らせている。

遺構外出土遺物（図版105～109、329・335～338）

83 ～ 106 は須恵器無台杯である。胎土は 83 ～ 89・91・103 ～ 105 がＡ群、90・92 ～ 102・106 がＢ群である。83・84・86・87・89・91・92・97・103 ～ 105 の底部は右回転のヘラ切り、85・88・100 は回転方向不明の回転ヘラ切り、90・93 ～ 96・98・99・101・102・106 は左回転のヘラ切りである。88・91・96 ～ 98・103・105 の底部外面には「上」、89 の底部外面には「王ヵ」、101 の底部外面に「木ヵ」、104 の底部外面に「上ヵ」、106 の底部外面に「三ヵ」の墨書がある。

107 ～ 111・113 は須恵器有台杯Ａ類で、112・114・115 は須恵器有台杯Ａ類の底部片と思われる。胎土は 107 ～ 110･112 ～ 114 がＡ群、111･115 がＢ群である。体部～口縁部は直線的に立ち上がり、高台は 107・108・115 が外端面の接地、111・114 が内端面の接地、109・110・113 が両端面の接地である。107 ～ 109・113・114 の底部は右回転のヘラ切り、110 ～ 112 は左回転のヘラ切り、115 の切り離し方向は不明である。107 の底部外面には「×」のヘラ記号がある。111 の底部外面には「上」の墨書がある。

116･117 は須恵器有台杯Ｂ類である。胎土は 116 がＢ群、117 がＣ群で猿投窯のものにやや類似する。体部は直線的に立ち上がり、高台は 116 が外端面の接地、117 が内端面の接地となる。

118 ～ 124 は須恵器折縁杯である。118 の胎土はＡ群である。体部～口縁部は「S」字状に立ち上がり、口縁端部で内屈し、高台は内端面が接地し、体部と底部の境界よりも内側に付いている。底部は右回転のヘラ切りである。119 は口縁部片で、胎土はＡ群である。口縁端部は内湾する。120 ～ 124 の胎土はＡ群である。底部は回転ヘラ切りである。体部～口縁部は 120・122 が直線的となり、口縁端部が短く内屈する。121・123・124 の体部は「S」字状に立ち上がり、口縁端部が内屈する。高台は体部と底部との境目に付き、120・122・123 が内端面の接地、121 は両端面の接地で、124 が外端面の接地である。122・123 の底部外面に「上」の墨書がある。

125 ～ 130 は須恵器杯蓋である。胎土は 125･128 がＣ群、126･129･130 がＡ群、127 がＢ群である。いずれも口縁端部が屈折し、125・126・128 は扁平鈕、127 は環状鈕である。127・128 は転用硯で、墨痕はないが天井部内面が平滑に摩滅している。

131 は須恵器長頸壺の口縁部片で、胎土はＡ群である。

132 ～ 136 は須恵器甕の胴部片である。胎土は 132 ～ 134 がＢ群、135・136 がＡ群である。132・134 は外面に木目を有する平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。133 は外面に木目を有する平行タタキ、内面には同心円とその後の平行のあて具痕が見られる。135 の外面には平行タタキの後カキメ、内面には同心円とその後の平行のあて具痕上にカキメを施している。136 は外面に平行タタキ、内面には上部に同心円のあて具痕が、下部には平行のあて具痕が見られる。

137 は須恵器長頸壺である。胎土はＣ群で、猿投窯の胎土に類似する。肩部に２条、胴部境の屈折部に１条の沈線がある。

138 は土師器鉢である。体部は内湾しながら立ち上がる。内面はナデられ、底部外面は剝落のため不明瞭であるが、回転糸切りらしき痕跡が確認できる。

139・140 は土師器無台椀Ⅰ類である。体部～口縁部は内湾して立ち上がる。底部は右回転の糸切りである。

141 は土師器皿の口縁部片である。口縁部は上方へと屈折する。

142 は土師器小甕底部片である。平底で、底部外面の表面が剝落している。143 ～ 146 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となる。

147 は土師器甕である。口縁部は受け口状となる。胴部外面はカキメ、内面はハケメとなる。

148 は権状錘と思われる。流紋岩製。上部に孔が穿たれ、そこから上端部にかけて溝が彫られている。149 は石製紡錘車と思われる。流紋岩質凝灰岩製。中央部に孔を有する円盤状で、側面には等間隔で刻目が入れられている。150 は流紋岩質凝灰岩製の砥石片である。上・下端部を欠損するが、それ以外は砥面である。151 は凝灰岩製の砥石片である。４面に砥面が認められ、裏面の破損部分にも細溝状の刃研ぎ痕と粗い摩耗痕が付いている。152 は黒雲母粘板岩製の磨石である。自然礫の正面と右側縁に平滑な摩耗面がある。

153 は用途不明の鉄製品で、棒状を呈する鍛造品である。154 は鉄釘片で、円形の頭部を有している。

155 ～ 161 は巻き付け成形の管状土錘である。155 ～ 157 は径に対して長さが短く、重さは 2.9 ～ 3.4 ｇ前後を量る。158 ～ 160 はやや細長い形状で、重さは 3.6 ～ 5.6g を量る。161 は細長い形状で、重さは 8.9g を量る。

４）Ⅷ層の出土遺物

遺物は、SB1400・1500が位置する調査区中央の５～９Ａ～Ｅ区、SB2020とSD2008が位置する調査区北部の12・13B～Ｅ区から多量に出土し、その間にある10・11A～Ｄ区は出土量が少ない。遺物は須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、製塩土器、転用硯、鉄製品、石器･石製品、土製品、木製品、漆器、漆紙、柱根、杭、鉄滓、炉壁と多種多様で、土師器無台椀が極めて多量に出土している。

Ⅷ層の回転糸切り類型は、Ａ類404点、Ｂ類301点、不明658点となる。

遺構出土遺物（図版110～172、327～332・339～383）

掘立柱建物出土遺物（図版110～155、327～331・339～371）

SB1400（図版110～118、329・331・339～345）

本遺構は、掘立柱建物で、床面に整地層が見られ、関連する遺構として区画溝・土坑・鍛冶炉・ピットがある。遺物を掲載した遺構は建物の柱であるP1～3・6・8～12・16・17・20・24、整地層、関連遺構は区画溝であるSD1077、鍛冶炉であるSW1145・1232、鍛冶関連遺物廃棄場であるSX1224、土坑であるSK1140・1141・1227、ピットはP1238・1399・2240・2245となる。

【SB1400本体】

SB1400-P1（図版110、339）

162は須恵器甕で、胎土はＣ群である。口縁部は強く外反し、胴部外面には不明瞭な格子目タタキ、内面は無文のあて具痕を粗くナデ消している。163は鍛冶滓破片､164は椀形鍛冶滓が二段重層している。

SB1400-P2（図版110、339）

165は黒色土器椀Ａ類の口縁部片である。口縁部はやや外反気味で、内面にはミガキが施され、黒色処理されている。166は鍛冶滓又は椀形鍛冶滓破片、167は椀形鍛冶滓が二段重層している。

SB1400-P3（図版110、339）

168は土師器無台椀のⅠ類である。口縁部は直線的に立ち上がる。169は椀形鍛冶滓である。170は鉄製鉸具である。鉸具頭はほぼ方形で、刺金との連結部でややすぼまる。刺金はＴ字形を呈し、軸部は鉸具頭の基部にある未貫通の孔に嵌め込まれている。帯の装着部分は欠損している。

SB1400-P6（図版110、339）

171は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となる。172は須恵器広口壺の口縁部片で、口縁端部が上下方向に伸びる。胎土はＢ群である。173は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する同心円のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。174は芯持丸木材の柱根で、先端部は平坦に加工されている。

SB1400-P8（図版110、339）

175は須恵器甕の胴部片である。外面には格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SB1400-P9（図版110、339）

176は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部はわずかに外反する。

SB1400-P10（図版 110、339）

177 は土師器椀の口縁部片である。口縁部はわずかに外反する。口縁部外面に判読不明の墨書がある。178 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部直下で垂直方向に立ち上がり、口縁端部で外反する。179 は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。胎土はＡ群である。

SB1400-P11（図版 110、339）

180 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は外反傾向が見られ、底部は絞り込まれている。

SB1400-P12（図版 110、339）

181 は鍛冶滓である。

SB1400-P16（図版 110、339）

182 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は外反傾向が見られ、底部は絞り込まれている。

SB1400-P17（図版 111、339）

183 は砥石で、硬質な頁岩製である。自然礫の 3 面に砥面がある。

SB1400-P20（図版 111、339）

184 は黒色土器無台椀Ａ Ⅰ類である。口縁部は外反し、内面はミガキを施し、黒色処理される。

SB1400-P24（図版 111、339）

185 は黒色土器無台椀Ａ Ⅱ類である。口縁部は直線的に開き、内面はミガキを施し、黒色処理される。

SB1400 整地層（図版 111、339）

186・187 は椀形鍛冶滓である。186 は側部 3 面が破面となり、下面には木炭痕が点在する。187 は下面に炉床土が点在する。

【SB1400 関連遺構】

SD1077（図版 111 ～ 116、329・331・339 ～ 343）

188 ～ 228･230 ～ 280･282 ～ 289･294 ～ 296･298･299･305･306 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部を絞り込んだものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 37 点、Ｂ類 31 点、不明 39 点である。器高指数は 29 ～ 43、底径指数が 31 ～ 50 となる。法量の主体は口径が 11.7 ～ 13.0cm、器高が 4.0 ～ 5.0cm、底径が 4.2 ～ 5.5cm となるが、口径 11.6cm 以下や器高 4.0cm 未満あるいは 5.0cm 以上となるものも少数存在する。189・191・193・197・201・263 は口径が 11.3cm 以上、器高が 3.8cm 以下の比較的身の浅いタイプで、口縁部は直線的から外反が主体となるが、263 の口縁部は短く「く」の字状に強く外反する。188・190・192・194 ～ 196・198 ～ 200・202 ～ 228・230 ～ 262・264 ～ 280・282・283・294 ～ 296・298・299 は口径が 11.5cm 以上、器高が 3.9 ～ 5.0cm の比較的身の深いタイプを含み、口縁部は直線的から外反が主体となるが、248 ～ 256 は体部中位から大きく外反、257 ～ 262・264 ～ 280 の口縁部は短く「く」の字状に強く外反し、282 の口縁部内面には鈍い稜を持ち、283 は口縁部直下で内屈後外反する。284 ～ 287 は口径が 11.2cm 以下、器高 4cm 以上の小型で身が深いタイプで、口縁部は 284・286 が直線的から外反傾向、285・287 は外反する。288・289 は口径が 13.2cm 以上、器高は 5.2cm 以上の身の深いタイプで、口縁部は外反する。281 は土師器椀類の口縁部片である。229・290 ～ 293 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 1 点、Ｂ類 1 点、不明 3 点である。口縁部は 288・289・292 がやや外反し、229・290・291 は直線的、293 は短くやや強く

外反する。213は灯明皿として使用されている。

294～304は墨書土器で、295・298・301は則天文字の「天」、294・296・297・299・304は則天文字の「天ヵ」、300・302・303が判読不明である。305・306は漆パレットに用いられており、共に内面に褐色の漆が点在し、全面に付着していたと推測される。

307は土師器有台椀の底部片である。高台はやや高めである。

308～315は黒色土器である。308は黒色土器無台椀ＡⅠ類である。口縁部はやや外反し、内面はミガキを施し、黒色処理される。309は黒色土器無台椀Ｂ類である。口縁部は外反し、内・外面はミガキを施し、黒色処理される。310は黒色土器無台椀ＡⅡ類である。口縁部は直線的に開いている。311は黒色土器無台椀Ａ類の底部破片である。310・311は内面がミガキを施し、黒色処理される。312・315は黒色土器有台椀Ａ類である。312の高台は欠損する。内面はミガキを施し、黒色処理される。313・314は黒色土器椀Ａ類の破片で、内面はミガキを施し、黒色処理される。

316は器種不明の須恵器の口縁部片で、皿の可能性がある。体部～口縁部は「く」の字状に屈折し、大きく開いている。胎土はＣ群である。317は灰釉陶器椀である。三日月高台を有し、釉は浸け掛けである。318は灰釉陶器輪花椀である。口縁部はわずかに残存するだけだが輪花状の部分が見られる。三日月高台を有し、釉は浸け掛けである。319は須恵器広口壺の頸部片である。胎土はＣ群である。320は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕の後、木目を有する扇状のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。321は製塩土器の底部片で、内・外面に粘土紐接合痕を残し、外面の指頭痕は明瞭である。322は漆紙である。折り畳まれていたものを解体し、赤外線撮影したが、文字等の墨書は確認されていない。323は緑釉陶器耳皿の耳部片である。胎土は軟質で、底部は欠損しているため形状は不明である。324は砥石で、硬質な頁岩製である。325は鉄床石の破片と思われる。326・327は羽口で、共に先端部の破片である。328は鍛冶炉の炉壁表面破片である。329は半溶解石で、黒色ガラス質に覆われた石英質石片である。330は鍛冶滓である。331～338は椀形鍛冶滓で、337は椀形鍛冶滓が二段重層している。

SW1145（図版116、343）

339は鍛冶滓である。上・下面には木炭痕が確認される。340は椀形鍛冶滓である。下面には炉床土が固着している。

SW1232（図版116、343）

341は鍛冶炉の炉壁内面の破片である。内面はガラス化している。342～345は椀形鍛冶滓である。342～344は極小で、345は小型のものである。

SK1227（図版116、344）

346は羽口の体部片である。通風孔部は径が小さく、細身である。

SK1141（図版116・117、344・345）

347～391は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類12点、Ｂ類8点、不明25点である。法量値の主体は口径が11.7～13.9cm、器高が3.9～5.0cm、底径が4.2～5.9cm、器高指数が32～40、底径指数が31～45となり、この分布から外れるものは少数である。347～350は口径が11.4cm以上、器高が3.8cm以下の身の浅いタイプで、体部がかなり開き、口縁部は外反する。351～391は口径が11.5cm以上、器高が3.9cm以上の比較的身の深いタイプを含み、口縁部は351～365・390・391が直線的か

らやや外反傾向にあり、366 ～ 372 はわずかに外反、373 ～ 376 は体部中位から大きく外反する。また、377 ～ 387 の口縁部は短く「く」の字状に強く外反、388 は口縁部直下に凹線を有し、389 は口縁端部をつまみ出し折り曲げている。366 は灯明皿として使用されている。392 ～ 395 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、口縁部はやや外反し、確認できる底部の切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類１点、Ｂ類１点、不明２点である。

396 は黒色土器無台椀Ａ Ⅰ類である。内面はミガキを施し、黒色処理される。体部は直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反する。397 は黒色土器有台椀Ａ類である。内面はミガキを施し、黒色処理される。口縁部は外反する。398 は黒色土器椀Ａ類である。内面はミガキを施し、黒色処理される。口縁部は外反する。399 は土師器鍋である。体部から口縁部は直線的に立ち上がり口縁端部で面をなし、胴部内・外面にカキメを施している。400・401 は墨書された土師器椀類の破片で、墨書は体部外面にあって、判読不可能である。

SX1224（図版 117、345）

本遺構の遺物は SK1227 廃棄土坑のあふれたものである。402・403 は鍛冶滓である。404 ～ 406 は椀形鍛冶滓である。すべて極小で、406 には木炭痕が見られる。407 は鍛冶炉の炉壁片である。外面は還元化し、剝落している。

SK1140（図版 118、345）

408 ～ 412 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれたものが多く、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類４点、不明１点である。法量値の分布は口径が 11.8 ～ 13.0cm、器高が 4.1 ～ 4.6cm、底径が 4.0 ～ 5.0cm、器高指数が 33 ～ 37、底径指数が 32 ～ 41 となるが、底径指数は１点を除き４点が 40 付近に集中する。408・409 は口縁部が直線的からやや外反傾向にある。410 は口縁端部直下が沈線状となる。411･412 の口縁部はわずかに外反する。409 は灯明皿として使用されている。

P1238（図版 118、345）

413 は土師器無台椀Ⅰ類である。口径に対して器高が高く、体部～口縁部は直線的に立ち上がる。

P1399（図版 118、345）

414 は鉄製手斧である。片刃の無肩有袋式で、横断面形は袋部が楕円形、刃部が長方形を呈している。

P2240（図版 118、345）

415 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。口縁部は直線的に開いている。灯明皿として使用されている。

P2245（図版 118、345）

416・417 は土師器無台椀Ⅰ類である。416 は底部が絞り込まれ、体部は直線的に、口縁部はやや外反気味となる。417 は体部が丸みを持って立ち上がり、口縁端部は強く外反する。灯明皿として使用されている。

SB1500（図版 118 ～ 151、327 ～ 331・345 ～ 368）

本遺構は、掘立柱建物で、床面に整地層が見られ、関連する遺構として区画溝・土坑・鍛冶炉・ピットがある。遺物を掲載した遺構は建物の柱である P1・5・7・9 ～ 16・18・19・24・26・27・32・34・36・38・40 ～ 42・44 ～ 47・49、整地層、関連遺構は区画溝である SD1377、鍛冶炉である SW1343・1352・2229、土坑である SK1355・1351・1360・1384・1408・1419・1444・1469・1472・1473・

1479・1511・1536・1537・1548・1560・1588・1601・1602、ピットはP1484・1503・1542・1562・1604・1620・2160・2193となる。

【SB1500本体】

SB1500-P1（図版118、345）

418は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は上部と橋状となる部分が腐蝕しているが、直交する2方向から長方形の孔を穿いて貫通させていたと推測される。419は椀形鍛冶滓である。

SB1500-P5（図版118、345）

420は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は外反気味となり、灯明皿として使用されている。

SB1500-P7（図版118、345）

421は柱痕である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は上部と橋状となる部分が腐蝕しているが、直交する2方向から長方形の孔を穿いて貫通させていたと推測される。

SB1500-P9（図版118、346）

422は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は上部と橋状となる部分が腐蝕しているが、直交する2方向から長方形の孔を穿いて貫通させていたと推測される。423は羽口の先端部片である。

SB1500-P10（図版118、346）

424は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、先端部は平坦となる。図の裏側になる部分は特に腐蝕が著しいが、横断面が柱材の中心に向かってくぼむことからメド穴が存在した可能性がある。

SB1500-P11（図版119、346）

425は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は橋状となる部分が腐蝕しているが、直交する2方向から長方形の孔を穿いて貫通させていたと推測される。

SB1500-P12（図版119、346）

426は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は橋状となる部分が腐蝕しているが、直交する2方向から長方形の孔を穿いて貫通させていたと推測される。427は用途不明の鉄製品で、板状の鋳造品である。

SB1500-P13（図版119、330・346）

428は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は腐蝕し、底面が残るだけだが、直交する2方向から貫通させていたと推測される。

429～436は土師器無台椀Ⅰ類である。底部が絞り込まれたものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はA類2点、B類1点、不明5点である。法量値は口径が11.7～13.0cm、器高が3.8～5.4cm、底径が4.1～5.0cm、器高指数が31～44、底径指数が33～41となるが、435を除いたほかすべては38以下に分布している。口縁部は429がやや内湾気味、431～433がわずかに外反、434が玉縁状、435が直線的、436は体部中位から大きく外反する。

437 は緑釉陶器輪花椀である。胎土は硬質で、還元焔である。438 は須恵器無台杯である。底径指数が 59 と大きく、器高指数が 41 と高い。胎土はＡ群である。

SB1500-P14（図版 119、346）

439 は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は左側の上部及び橋状となる部分と右側の穴が腐蝕しているが、直交する 2 方向から長方形の孔を穿って貫通させていたと推測される。

SB1500-P15（図版 120、346）

440 は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、先端部は平坦となる。

SB1500-P16（図版 120、346）

441 は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は上部と橋状となる部分が腐蝕しているが、直交する 2 方向から長方形の孔を穿いて貫通させていたと推測される。

SB1500-P18（図版 120、346）

442・443 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は 442 が直線的、443 が体部中位から大きく外反する。

SB1500-P19（図版 120、346）

444 は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、先端部は平坦となる。

SB1500-P24（図版 120、346）

445 は土師器甕である。口縁部は受け口状となる。

SB1500-P26（図版 120、346）

446 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は短く「く」の字状に強く外反する。

SB1500-P27（図版 120、346）

447 は黒色土器有台皿Ａ類である。皿部内面はミガキの後、黒色処理される。448 は土師器有台椀の底部片である。

SB1500-P32（図版 120、346）

449 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は大きく外反する。450 は須恵器有台杯Ａ類である。高台は太く、外端面で接地する。胎土はＢ群である。

SB1500-P34（図版 120、346）

451 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部はわずかに外反する。

SB1500-P36（図版 120、346）

452 は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕の後、木目を有する扇状のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SB1500-P38（図版 120、346）

453 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部はわずかに外反する。

SB1500-P40（図版 120、346）

454・455 は土師器無台椀Ⅰ類である。454 は体部～口縁部が直線的に開いている。455 は口縁部が短く「く」の字状に強く外反する。456 は黒色土器椀Ｂ類である。内・外面にミガキが施され、黒色処理される。底部はナデ調整される。

SB1500-P41（図版 120、346・347）

457 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となる。458 は黒色土器有台椀Ａ類の底部片である。内面にミガキが施され、黒色処理される。

SB1500-P42（図版 120、347）

459 は黒色土器有台皿Ａ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。

SB1500-P44（図版 120、347）

460 は柱根である。腐蝕が著しく、加工痕等は不明である。芯持丸木材で、柱の下端にメド穴が存在し、先端部は平坦となる。メド穴は直交する 2 方向から長方形の孔を穿って貫通させている。

SB1500-P45（図版 120、347）

461 は土師器無台椀Ⅰ類である。口縁部は体部中位から大きく外反する。体部外面に則天文字の「天」が墨書されている。

SB1500-P46（図版 121、347）

462 ～ 466 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＢ類 1 点、不明 4 点である。法量値は口径が 11.7 ～ 12.6cm、器高が 3.7 ～ 4.8cm、底径が 4.4 ～ 5.0cm、器高指数が 30 ～ 38、底径指数が 34 ～ 43 となる。口縁部は 462 がやや外反、463 は体部中位から大きく外反、464 が外反、465・466 は短く「く」の字状に強く外反する。

467 は須恵器甕である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する同心円のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SB1500-P47（図版 121、347）

468 は黒色土器有台椀Ｂ類の底部片である。内・外面はミガキを施し、黒色処理される。469 は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土はＡ群である。

SB1500-P49（図版 121、347）

470 は柱根である。芯持丸木材と考えられるが、腐蝕が著しい。

SB1500 整地面（図版 121、330・347）

471 ～ 474 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＢ類 1 点、不明 3 点である。法量値は口径が 12.4 ～ 13.4cm、器高が 3.8 ～ 4.8cm、底径が 4.6 ～ 6.2cm、器高指数が 31 ～ 37、底径指数が 37 ～ 48 となる。口縁部は 471・472 がやや外反、473 が外反、474 は短く「く」の字状に強く外反する。

475 は灰釉陶器椀である。釉は浸け掛けされ、三日月高台となる。476 は土師器有台椀である。477 は製塩土器の底部片で、平底である。478 は鉄釘の破片で、平坦な頭部を持つ。479 は鉄製留金具である。鉄棒に 2 枚の菱形の鉄板が貫通している。鉄板は内方に向かい湾曲し、本来は可動性があったものと推測される。棒状部分は片端が欠損しているため不明だが、両端部に頭を有していたと思われる。480 は鍛冶滓片である。481 は椀形鍛冶滓破片である。極小で、上面に木炭痕が見られ、下面に炉床土が付着する。482 は砥石である。黒雲母トーナル岩の大型礫を用いており、砥面は上面と側面の 2 面に存在する。

【SB1500 関連遺構】

SD1377（図版 121 ～ 136、327 ～ 331・347 ～ 357）

483 ～ 747・758 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り

離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 95 点、Ｂ類 55 点、不明 116 点である。法量値の主体は口径が 11.4 ～ 13.8cm、器高が 3.5 ～ 5.0cm、底径が 4.0 ～ 5.9cm、器高指数が 27 ～ 40、底径指数が 29 ～ 48 となり、このほかは少数である。484・488 ～ 497・499 ～ 503・506・508・509・513・514・516・517・519・520・522・585・591・596・604・687・709・740 は器高 3.8cm 以下と低く、体部が開き気味となるものである。口縁部は直線的からやや外反するものが主体となるが、503 は口縁部下の外面に細い沈線を有し、513・514・709・740 は体部中位から大きく外反、516・517 は短く「く」の字状に強く外反、519 は口縁端部をつまみ出し外反させている。483・485 ～ 487・498・504・505・507・510 ～ 512・515・518・521・523 ～ 584・586 ～ 590・592 ～ 595・597 ～ 603・605 ～ 686・688 ～ 708・710 ～ 739・741 ～ 747・758 は器高 3.9cm 以上のものである。口縁部は直線的から外反するものが主体となるが、695 ～ 708・710 ～ 712 は体部中位から大きく外反、713 ～ 726 は短く「く」の字状に強く外反、626・727・731・738・739 は口縁端部をつまみ出し外反させている。748 ～ 756 は土師器無台椀Ⅱ類である。確認できる底部の切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 3 点、Ｂ類 3 点、不明 3 点である。口縁部は 744 ～ 752 が直線的からやや外反、753 ～ 756 が外反となる。554・592・595・620・669・729・735 は灯明皿として使用されており、535・547 は還元化している。758 は、漆パレットとして使用された土師器無台椀Ⅰ類で、内面に褐色の漆が付着している。

757・759 ～ 778 は墨書された土師器である。757・759 ～ 768 は土師器無台椀Ⅰ類である。確認できる底部の切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 3 点、Ｂ類 6 点、不明 2 点である。口縁部は 757・759 ～ 763 が直線的から外反傾向、764 ～ 768 は外反する。769 ～ 778 は土師器椀類の破片である。墨書された文字は 759・760・764・765・769・773 が則天文字の「天」、757・761 ～ 763・767・768・770 ～ 772・775・776 は則天文字の「天ヵ」、766・774・777・778 が判読不明である。文字数はすべて 1 文字である。文字の方向は 760･769･773 が正位、759･764･765 が逆位、762･763･767･768･770･771･775 が正位の可能性があり、757･761･772 が逆位の可能性がある。766・774・776 ～ 778 は不明である。なお、777 は内面にも墨痕が見られる。

779 は土師器有台椀である。高台はやや高めで、体部～口縁部は外反しながら立ち上がる。780 は土師器皿で、口縁部端部が屈折して直立する。

781 ～ 818 は黒色土器である。781 ～ 790 は黒色土器無台椀ＡⅠ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は 781 ～ 785 が直線的からやや外反、786 ～ 790 は短く「く」の字状に強く外反する。791 ～ 795 は黒色土器無台椀ＡⅠ類の底部片である。796・797 は黒色土器無台椀ＡⅡ類である。796 は口縁部が「く」の字状に外反し、797 は直線的に開いている。798 は黒色土器無台椀ＡⅢ類である。内面の口縁端部は外反し、体部下位と底部は手持ちヘラケズリされる。799・800 は黒色土器無台椀Ａ類の底部片である。801 ～ 804 は黒色土器有台椀Ａ類である。内面にはミガキを施し、黒色処理される。口縁部は 802 が直線的に開き、803・804 は外反する。805 ～ 814 は黒色土器椀類の口縁部片で、いずれも内面にはミガキを施し、黒色処理される。815 ～ 817 は黒色土器有台皿Ａ類である。皿部内面にはミガキを施し、黒色処理される。818 は黒色土器有台鉢である。内面にはミガキを施し、黒色処理される。高台は体部の下部にあり、高さは低く底部と同じとなる。

819 は須恵器有台杯Ｂ類である。高台は太く、外端面が接地する。高台よりも内側には墨痕が付き、墨溜めの可能性がある。胎土はＡ群である。820 は須恵器無台杯である。酸化焔焼成となるが回転ヘラ切りなど調整技法の特徴から須恵器と判断される。底部外面に墨書があるが、判読はできない。胎土はＣ群

である。821 は須恵器無台杯である。器高が高く、口縁部は直線的に開いている。胎土は B 群である。822・823 は灰釉陶器椀である。釉は浸け掛けで、三日月高台となる。824 ～ 826 は土師器台付鉢である。824・825 は底部～台部片で、台部は高く、端面が平坦で、台部の内・外面にススが付着する。826 は台付鉢の口縁部片と思われ、口縁端面は面をなしている。827 は土師器鍋の口縁部片である。口縁部は内屈する。828 は土師器小型羽釜である。鍔は成形時に胴部の粘土紐を外方へと折り曲げて製作し、折り曲げた粘土紐の屈曲部分に粘土紐を積み上げて口縁部としている。829 ～ 831 は土師器甕である。口縁部は 829 が内湾、830 が受け口状、831 は外傾し外端部が面をなしている。832 は土師器甕である。平底で、胴部外面をヘラケズリしている。833 ～ 836 は須恵器広口壺である。胎土は B 群である。833 は頸部～胴部上位の破片である。834・835 は口縁部片で、口縁端部が上下につまみ出されている。836 は胴部中位～底部片で、太目の高台は外端面が接地する。837 は須恵器瓶類の底部片である。胎土は A 群である。838 は須恵器横瓶の胴部である。胎土は B 群である。839 ～ 847 は須恵器甕である。胎土は 839・840・842・845・847 が B 群、841・843・844・846 が A 群である。839 は口縁部破片である。840 は胴部外面が格子目タタキ、内面には下位 1 / 3 に平行のあて具痕が、上位には、その後の木目を有する同心円のあて具痕が見られる。841 は胴部外面が格子目タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。842 は外面が格子目タタキ、内面は平行のあて具痕をナデ消している。843 は胴部外面が平行タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。844 は胴部外面が格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具の後、木目を有する放射状のあて具痕が付く。845 は胴部外面が格子目タタキ、内面には木目を有する同心円のあて具痕が見られる。846 は胴部外面が格子目タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。847 は胴部外面が格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が付き、平滑な摩耗痕と墨痕があり、転用硯に再利用されている。848 は製塩土器で、平底となる。849・850 は小型の管状土錘である。

851・852 は漆紙文書である。851（E 漆紙）には大破片と未接合の小破片があり、いずれも同一文書と思われる。表・裏両面に文章が認められ、図の左側が漆の付着面（ウラ面）、右側がオモテ面である。852（D 漆紙）は同じ SD1377 から出土したものであるが出土地点が異なる。

853・854 は凹石で、853 が変質安山岩製で、側面に砥面があり、854 が流紋岩質凝灰岩製である。855 ～ 858 は砥石で、855 が流紋岩、856 がホルンフェルスの自然礫、857・858 は頁岩の自然礫を利用している。859・860 は鉄床石である。859 は斑岩製で、正・裏面は打撃により表面が剝落している。860 は SD1077 出土の鉄床石（325）と同一個体と思われ、打撃による表面の剝落が見られる。花崗岩製。861・862 は羽口で、862 は基部寄りの孔がラッパ状に開いている。

863 はガラス質滓である。864 は鍛冶炉の炉壁内面の破片である。865・866 は鍛冶滓である。867 ～ 880 は椀形鍛冶滓である。877 ～ 880 は椀形鍛冶滓が二段重層している。

SW1352（図版 136、357）

881 は椀形鍛冶滓である。882 ～ 887 は粒状滓で、写真のみ掲載する（図版 357）。888 ～ 893 は鍛造剝片で、写真のみ掲載する（図版 357）。894 は再結合滓である。

SW2229（図版 136、357）

895・896 は巻き付け成形の管状土錘である。小型で、紡錘形を呈している。

SW1343（図版 136、357）

897・898 は砥石で、897 は砂岩の自然礫を、898 は花崗岩の自然礫を利用している。899 は土師器有台椀である。やや低い高台を有している。900 ～ 903 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ

ているものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類２点、不明２点である。法量値は口径が 11.8 ～ 12.5cm、器高が 4.0 ～ 4.5cm、底径が 5.0 ～ 5.4cm、器高指数が 33 ～ 38、底径指数が 42 ～ 47 となる。口縁部は 900 ～ 902 が直線的、903 は外反する。

SK1355（図版 136・137、357）

904 は土製羽口で、先端部片である。905 は椀形鍛冶滓である。906 ～ 908 は再結合滓である。

SK1419（図版 137 ～ 147、330・331・358 ～ 365）

909 ～ 1106・1109 ～ 1155 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 63 点、Ｂ類 84 点、不明 100 点である。法量値の主体は口径が 11.5 ～ 13.5cm、器高が 3.4 ～ 5.0cm、底径が 4.0 ～ 5.8cm、器高指数が 26 ～ 43、底径指数が 28 ～ 45 となり、このほかは少数である。910 ～ 913・915・917 ～ 923・952・1011・1021・1067・1077・1080・1099 は口径が 11.4cm 以上、器高が 3.8cm 以下の身の浅いタイプである。口縁部は直線的から外反するものが主体となるが、919・920・1077・1080 が体部中位から大きく外反、921 ～ 923 は短く「く」の字状に強く外反する。909・914・916・924 ～ 951・953 ～ 1010・1012 ～ 1020・1022 ～ 1066・1068 ～ 1076・1078・1079・1081 ～ 1106・1109 ～ 1149・1153 ～ 1155 は口径が 11.4cm 以上、器高が 3.9cm 以上の比較的身の深いタイプを含む。口縁部は直線的から外反するものが主体となるが、1068 ～ 1076・1078・1079・1081 ～ 1102 は体部中位から大きく外反、1104・1106・1109 ～ 1133 は短く「く」の字状に強く外反、1134・1135・1141 は口縁内端部が上方に面をとり、1136 ～ 1140 は口縁部外面が面状となり、1142 ～ 1149 は口縁端部をつまみ出し外に折り曲げている。1150 ～ 1152 は口径 11.3cm 以下で、口縁部は 1150 が端部のみ外反、1151 は大きく外反、1152 は内湾気味となる。970・975・1027・1029・1131・1142 は灯明皿として使用されている。923 は底部外面に焼成前の沈線が見られ、「－」のヘラ記号かもしれない。意図的なのかは不明である。1107・1108・1156 ～ 1163 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部の切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類７点、Ｂ類２点、不明１点である。口縁部は 1157・1158 が直線的、1159・1160・1162・1163 が外反、1107･1108･1161 が短く「く」の字状に外反する。1108 は灯明皿として使用されている。

1164 ～ 1188 は墨書された土師器である。1167 ～ 1179 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部の切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類７点、Ｂ類９点である。すべて口径は 12.2cm 以上、器高 3.9cm 以上である。口縁部は 1164 が口縁部端部をつまみ出し外に折り曲げており、1165 ～ 1176 は直線的から外反傾向、1177 ～ 1179 は外反する。1180 ～ 1188 は土師器椀類の破片である。文字は 1164・1167 ～ 1169・1173・1178 が則天文字の「天」１文字、1165 は則天文字の「天」が正位２文字と逆位１文字、1174 ～ 1177・1179・1182 は則天文字の「天ヵ」、1166・1170 ～ 1172・1180・1181・1183 ～ 1188 は判読不明である。墨書された部位は 1164・1166 が底部外面、ほかは体部外面である。文字の方向は 1168 が正位、1174・1176・1177 は正位の可能性があり、1167・1169・1173・1178・1179 が逆位、1170 ～ 1172・1180・1181・1183 ～ 1188 は不明である。

1189 は土師器無台椀Ⅰ類を使用した漆パレットで、内面に漆が付着する。1190 は底部に孔のある土師器無台椀Ⅰ類である。孔は突き抜けていない。1191 は土師器有台椀で、底部片である。1192・1193 は土師器有台椀である。1193 は高台の内・外面と口縁部の内・外面にススが付着している。

1194 ～ 1221 は黒色土器である。1194 ～ 1199 は黒色土器無台椀ＡⅠ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は 1194･1195 が直線的、1196･1197 は外反、1198･1199 は短く「く」

の字状に外反する。1200 ～ 1206 は黒色土器無台椀ＡⅡ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は 1200･1203 が直線的、1204 は端部をつまみ出し外反、1205 は外反、1206 は短く「く」の字状に外反する。1207 ～ 1209 は黒色土器椀類の口縁部片で、内面にはミガキが施され、黒色処理される。1210・1211 は黒色土器無台椀底部片で、内面にはミガキを施し、黒色処理される。1212 は黒色土器有台椀Ａ類である。内面にはミガキを施し、黒色処理される。1213 ～ 1215 は黒色土器有台皿Ａ類である。内面にはミガキを施し、黒色処理される。1213・1214 は低い高台が付き、1215 は高台が欠損する。1216 は黒色土器無台椀Ｂ類である。内・外面にミガキを施し、黒色処理され、口縁部は直線的に開いている。1217 ～ 1221 は黒色土器有台椀Ｂ類である。内・外面にミガキと黒色処理され、低い高台が付いている。口縁部は 1217 がやや外反、1218・1219 が短く「く」の字状に外反する。1220・1221 は底部片である。

1222 は緑釉陶器椀の底部片である。蛇目高台となる。1223 は灰釉陶器椀である。釉は浸け掛けされ、三日月高台である。1224 は土師器小甕Ⅱ類である。口縁部は「く」の字状に内屈気味となる。1225 は土師器小甕Ⅲ類で、口縁部は受け口状となる。1226 は須恵器広口壺で、高台は幅広で外端面が接地する。胎土はＡ群である。1227 は土師器台付鉢と思われる口縁部片で、端部は面をなしている。1228 は製塩土器の口縁部片である。1229 は輝石安山岩製の鉄床石である。正・裏面が打たれ、両面ともに鍛造剝片が付着している。1230 は漆器盤ないし椀の口縁部片で、写真のみ掲載する（図版 365）。形状は土圧でゆがんでいるため詳細不明である。横木取りで、上塗りは総黒色である。

SK1601（図版 147、366）

1231 は椀形鍛冶滓である。極小のものである。1232 は鉄床石で、打撃による剝落が見られる。

SK1351（図版 147、366）

1233 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。口縁部はやや外反する。

SK1360（図版 147、366）

1234 ～ 1241 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 4 点、Ｂ類 2 点、不明 2 点である。法量値は口径が 10.9 ～ 13.0cm、器高が 4.0 ～ 4.7cm、底径が 4.0 ～ 5.6cm、器高指数が 32 ～ 40、底径指数が 31 ～ 56 となる。口縁部は 1234 が直線的、1235・1236・1239 ～ 1241 はやや外反、1237・1238 は端部をつまみ出し外に折り曲げている。1242 ～ 1244 は土師器無台椀Ⅱ類である。確認できる底部の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1242 がやや外反、1243・1244 は直線的に開いている。

1245 は土師器小甕の底部片で、右回転の糸切り後、外周端部をヘラケズリしている。1246 は須恵器無台杯である。底部指数が 32 と大きく、器高指数が 56 と高い。胎土はＣ群である。1247 は砥石で、砂岩の自然礫を利用している。1248 は器種不明の鉄器で、断面方形を呈し、鉄釘の可能性がある。1249 は鍛冶滓である。1250 は椀形鍛冶滓である。極小のものである。

SK1384（図版 147・148、366・367）

1251 ～ 1270 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 5 点、Ｂ類 4 点、不明 11 点である。法量値は口径が 11.5 ～ 12.7cm、器高が 3.9 ～ 4.7cm、底径が 4.4 ～ 5.6cm、器高指数が 32 ～ 40、底径指数が 35 ～ 45 となる。口縁部は 1251 ～ 1262 が直線的からやや外反、1263 はやや内湾、1264 ～ 1270 は外反する。1269 は灯明皿として使用されている。1271 は土師器無台椀Ⅱ類である。口縁部は外反する。1272・1273 は

土師器有台椀である。共に口縁部は外反し、1272 は高台を欠損する。1274 ～ 1276 は黒色土器無台椀ＡⅠ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1274・1275 は口縁部が直線的からやや外反傾向となる。1276 は口縁端部を強く外反させる。1277 は黒色土器有台椀Ａ類で、内面にはミガキが施され、黒色処理される。1278 は椀形鍛冶滓である。極小のもので、正・裏面に木炭痕が見られる。

SK1408（図版 148、367）

1279 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。1280 は須恵器甕である。外面が格子目タタキ、内面には木目を有する扇状のあて具痕が見られる。胎土はＡ群である。

SK1444（図版 148・149、367）

1281 ～ 1286 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＢ類３点、不明３点である。法量値の分布は口径が 11.4 ～ 13.0cm、器高が 4.0 ～ 4.7cm、底径が 4.0 ～ 5.6cm、器高指数が 32 ～ 39、底径指数が 32 ～ 43 となる。口縁部は 1281 ～ 1283 が直線的からやや外反、1284･1285 が外反、1286 は体部中位から大きく外反する。1287 は耳のつく須恵器短頸壺である。肩部と胴部中位に突帯を巡らし、上・下の突帯の下位に接して耳が付けられている。耳は一帯に４個付けられ、上･下二段で計８個と推測され、各耳の上面には小孔がある。胎土はＢ群である。1288 は須恵器甕である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する放射状のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SK1469（図版 149、367）

1289・1290 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

SK1472（図版 149、367）

1291・1292 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1291 が直線的、1292 は外反する。

SK1473（図版 149、367）

1293 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的に開いている。

SK1479（図版 149、367）

1294 ～ 1302 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類５点、Ｂ類１点、不明３点である。法量値の分布は口径が 11.4 ～ 13.5cm、器高が 4.1 ～ 4.6cm、底径が 4.5 ～ 5.8cm、器高指数が 32 ～ 40、底径指数が 38 ～ 47 となる。口縁部は 1294 ～ 1298・1302 が直線的からやや外反傾向、1299 は体部中位から大きく外反、1300・1301 は外反する。1303 は黒色土器有台椀Ａ類である。口縁部と高台を欠損する。1304 は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には木目のある平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1305 は椀形鍛冶滓である。極小のものである。

SK1511（図版 150、367）

1306 は土師器有台椀の底部片である。やや高い高台が付いている。1307 は須恵器甕である。外面は木目のある平行タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SK1536（図版 150、331・367）

1308 は緑釉陶器輪花椀の口縁部片である。胎土は軟質で、酸化している。内・外面に擦痕が少し見ら

れる。

SK1537（図版 150、367）

1309 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的に開いている。

SK1548（図版 150、368）

1310 は鍛造品で、釘もしくは鎹と考えられる鉄製品である。

SK1560（図版 150、368）

1311・1312 は椀形鍛冶滓である。1311 は二段重層している。

SK1588（図版 150、368）

1313 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となる。

SK1602（図版 150、368）

1314･1315 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1314 の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1314 が直線的、1315 は体部中位から大きく外反する。

P1484（図版 150、368）

1316 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は体部中位から大きく外反する。

P1503（図版 150、368）

1317 ～ 1319 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1317 が直線的からやや外反、1318 は体部中位から大きく外反、1319 は端部をつまみ出し外に折り曲げている。1320 は黒色土器無台椀Ａ Ⅱ類である。内面はミガキが施され、黒色処理される。

P1542（図版 150、368）

1321 ～ 1324 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。法量値の分布は口径が 12.0 ～ 12.6cm、器高が 3.8 ～ 4.6cm、底径が 5.0 ～ 5.8cm、器高指数が 32 ～ 36、底径指数が 39 ～ 46 となる。口縁部は 1321・1323・1324 が体部中位から大きく外反、1322 は外反する。

P1562（図版 150、331・368）

1325 は緑釉陶器輪花椀の口縁部片である。胎土は軟質で、灰色の還元焔である。

P1604（図版 150、368）

1326 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

P1620（図版 150、368）

1327 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は体部中位から大きく外反する。

P2160（図版 150、368）

1328 は須恵器甕である。肩部片と胴部下半片が出土したが接合できなかった。外面は格子目タタキ、内面には平行及び扇状のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1329（K 漆紙）は漆紙である。文字・墨痕は確認できない。

P2193（図版 151、368）

1330 は小型の管状土錘である。巻き付け成形で、俵状を呈する。

SB1683（図版 151、368・369）

本遺構は、掘立柱建物で、遺物は柱穴である P1・3・5・8・9 から出土している。

【SB1683 本体】

SB1683-P1（図版 151、368）

1331･1332 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1331 の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1331 がやや外反、1332 は短く「く」の字状に強く外反する。1331・1332 は灯明皿として使用されている。1333 は土師器台付鉢の口縁部片である。口縁端部は面をなしている。

SB1683-P3（図版 151、368）

1334 は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1335 は柱根である。腐蝕が著しいが芯持丸木材と思われる。1336 は椀形鍛冶滓で、二段重層している。

SB1683-P5（図版 151、368）

1337 は小型の土錘である。巻き付け成形で、紡錘形を呈する。

SB1683-P8（図版 151、368）

1338 は腐蝕が著しいが割材と推測される。

SB1683-P9（図版 151、368・369）

1339 は須恵器甕である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する扇状のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1340 は須恵器甕である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する扇状のあて具痕が見られ、頸部に焼成前の穿孔がある。胎土はＣ群である。1341 は鉄床石である。ドレライト製で、片面に打撃によるハネが見られる。1342 は流紋岩製の砥石である。

SB2020（図版 151 ～ 153、369・370）

本遺構は、半打込式の掘立柱建物で、関連する遺構として区画溝・鍛冶炉・土坑・井戸がある。遺物を掲載した遺構は建物の柱である P2 ～ 6・8・10・11・13 ～ 16・23、関連遺構は区画溝である SD2150、土坑である SK2119・2120 である。

【SB2020 本体】（図版 151・152、369）

1343 ～ 1353・1355 は柱根である。1343 は P1、1344 は P2、1345 は P3、1346 は P4、1347 は P6、1348 は P8、1349 は P10、1350 は P11、1351 は P13、1352 は P14、1353 は P15、1355 は P23 の出土で、すべて柱根は先端部を尖らせており、樹皮は見られないが、人為的に剝がされているのか否かは不明である。1343 ～ 1348・1350・1352・1353 は芯持丸木材、1349・1351・1355 は割材である。1354 は P16 から出土した羽口の先端部片である。

【SB2020 関連遺構】

SD2150（図版 152・153、370）

1356・1357 は土師器鍋で、1356 の口縁端部はつまみ上げられ、外反する。1357 は口縁部が直線的に立ち上がる。1358 は砥石で、輝石安山岩の自然礫を用いている。正・裏面と両側面の計 4 面に砥面が

ある。1359は砥石で、頁岩の自然礫を用いている。砥面は4面である。1360は極小の椀形鍛冶滓である。

SK2119（図版153、370）

1361は鍛冶炉の炉壁片である。表面が発泡気味となる。1362は極小の椀形鍛冶滓である。

SK2120（図版153、370）

1363（L漆紙）は漆紙の小破片である。折り畳みはなく、文字・墨痕はない。

SB2100（図版22）

本遺構は、掘立柱建物で、関連する遺構として区画溝のSD2029がある。遺物はSD2029から出土しただけである。

【SB2100関連遺構】

SD2029（図版153、370）

1364～1371は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はB類2点、不明6点である。法量値は口径が11.2～12.8cm、器高が3.9～4.9cm、底径が4.4～5.4cm、器高指数が31～39、底径指数が35～42となる。口縁部は1364・1365がやや外反気味、1366～1371は外反する。

SB2200（図版153～155、370・371）

本遺構は、半打込柱建物で、関連する遺構として鍛冶炉・ピットがある。遺物を掲載した遺構は建物の柱であるP2・3・5・11・16・19～22、関連遺構はピットのP3089となる。

【SB2200本体】

SB2200-P2（図版153、370）

1372は鍛冶炉の炉壁片である。胎土に細かい木炭を含む。1373は砥石で、流紋岩の自然礫を用いている。砥面は正・裏2面が見られる。

SB2200-P3（図版153、370）

1374は柱根である。割材で、先端部は平坦に加工している。1375（J-1漆紙）は漆紙である。切開が不可能な二つ折りの破片で、実測図の上側平面図に「料」あるいは「村」の文字が見られる。1376は土師器有台椀である。

SB2200-P5（図版153、370）

1377は柱根である。割材で、先端にかけて細く加工するが、端部は平坦にしている。

SB2200-P11（図版154、370）

1378は砥石である。砂岩の自然礫を用いており、複数面を砥面として使用している。

SB2200-P16（図版154、371）

1379は木皿の木地に似た木製品である。横木取りで、側面は削られ、円形を呈し、断面形が台形となる。

SB2200-P19（図版154、371）

1380は柱根である。割材で、先端にかけて細く加工するが、端部は平坦にしている。

SB2200-P20（図版154、371）

1381は柱根である。割材で、先端にかけて細く加工するが、端部は平坦にしている。

SB2200-P21（図版 154、371）

1382 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

SB2200-P22（図版 154、371）

1383 は砥石である。流紋岩の自然礫を用いている。

【SB2200 関連遺構】

P3089（図版 155、371）

1384 は黒色土器無台椀Ａ Ⅰ類である。内面はミガキが施され、黒色処理される。底部は切り離しの後ケズリが施されている。

地床炉出土遺物（図版 155、371・372）

SW1119（図版 155、371）

1385 ～ 1388 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 2 点、不明 2 点である。法量値は口径が 12.0 ～ 13.0cm、器高が 4.0 ～ 4.5cm、底径が 4.5 ～ 5.6cm、器高指数が 32 ～ 37、底径指数が 38 ～ 43 となる。口縁部は 1385 が端部をつまみ出して折り曲げており、1386 が直線的、1387 が外反、1388 が「く」の字状に外反する。1389 は須恵器瓶類である。口縁部が欠損する。胴部下端に手持ちヘラケズリが施されている。胎土はＢ群である。

1390 ～ 1399 は製塩土器である。平底の大型土器と思われる。1390 が口縁部片、1391 ～ 1394 は胴部片、1395 ～ 1399 は底部片である。

SW1219（図版 155、371）

1400 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的に開いている。

SW1250（図版 155、371）

1401 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的に開いている。1402・1403 は土師器小甕Ⅲ類である。1402 は底部を含む破片で、底部は回転糸切りである。1403 は口縁部を含む破片で、口縁部は受け口状となる。1404 は須恵器広口壺の口縁部片である。胎土はＡ群である。

井戸出土遺物（図版 156・157、372）

SE1194（図版 156、372）

1405 は土師器小甕の胴部片である。外面はケズリ、内面はナデとなり、非ロクロ系の可能性がある。

SE1226（図版 156、372）

1406 ～ 1420 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 2 点、Ｂ類 2 点、不明 11 点である。法量値は口径が 11.9 ～ 13.0cm、器高が 3.9 ～ 4.5cm、底径が 4.4 ～ 5.6cm、器高指数が 30 ～ 36、底径指数が 35 ～ 43 となる。口縁部は 1406 ～ 1408 が外反、1409 ～ 1413・1419・1420 が直線的からやや外反、1414 ～ 1416 がやや外反、1417・1418 が短く「く」の字状に強く外反する。1421 は土師器甕の口縁部片である。1422 は須恵器広口壺の口縁部片である。胎土はＢ群である。1423 は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SX2001-SE1（図版 156、372）

1424・1425 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。1426 は須恵器有台杯Ａ類の底部片と思われる。高台は内端面が接地する。底部外面に「上」の墨書がある。胎土はＡ群である。1427 は凝灰岩製の砥石である。

SX2001-SE3（図版 156、372）

1428 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。1429 は土師器非ロクロ系小甕である。胴部外面はケズリ、内面は指頭によるナデ、底部はケズリである。1430 は須恵器甕である。胴部外面は格子目タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1431 は曲物の側板である。最下段の側板と思われ、下端には底板に固定するため木釘結合孔があり、内面にはケビキ線が見られ、側板同士の結合部には樺皮が残っている。1432 は鍛冶炉の炉壁片である。内面は発泡している。

SE2007（図版 157、372）

1433 は土師器無台杯である。焼成は酸化焔、底部の切り離しは右回転の糸切りと土師器の特徴を持つが、器形は須恵器無台杯に類似する。1434・1435 は土師器無台椀Ⅰ類である。1434 は楕円形を呈す底部片で、耳皿の可能性がある。1435 は口縁部が直線的に開いている。1436 は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。胎土はＣ群である。

土坑出土遺物（図版 157 ～ 164、331・372 ～ 378）

SK1078（図版 157、372）

1437 ～ 1439 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1437 がやや外反、1438・1439 が外反となる。1440 は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には木目を有する放射状のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1441 は羽口で、先端部寄りの破片である。1442 は小型の椀形鍛冶滓である。

SK1107（図版 157、373）

1443 は土師器小甕Ⅰ類である。器厚が薄く、口縁部は受け口状となる。1444 は土師器甕である。口縁部は外反する。1445 は土師器甕である。平底で、胴部～底部外面はタタキ、内面はナデである。1446 は土師器甕である。胴部外面にケズリを施している。1447 は鉄釘と思われる。

SK1110（図版 157、373）

1448 ～ 1451 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。法量値は口径が 12.2 ～ 12.7cm、器高が 3.9 ～ 4.5cm、底径が 4.4 ～ 6.0cm、器高指数が 32 ～ 35、底径指数が 35 ～ 48 となる。口縁部はやや外反する。1452 は土師器無台椀であるが、ほかと異なる形状を呈している。体部から口縁部が内湾して立ち上がり鉄鉢状となるが、底部は平底である。1453 は土師器甕である。口縁部は受け口状となる。

SK1115（図版 157、373）

1454 は用途不明の鉄製品である。断面は方形で、板状の細長いものである。

SK1118（図版 157・158、373）

1455 ～ 1457 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1455 がやや外反、1456 が外反、1457 が短く「く」の字状に強く外反する。1458 は黒色土器椀Ａ類の底部片で、内面はミガキが施され、黒色処理される。

SK1120（図版 158・159、331・373・374）

1459 ～ 1474 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 7 点、Ｂ類 3 点、不明 6 点である。法量値は口径が 12.0 ～ 13.6cm、器高が 4.0 ～ 4.9cm、底径が 4.5 ～ 5.6cm、器高指数が 32 ～ 40、底径指数が 37 ～ 46 となる。口縁部は 1459 がやや内反、1460 ～ 1474 が直線的からやや外反となる。1475 は土師器無台椀Ⅱ類である。口縁部がやや外反する。1476 は墨書のある土師器無台椀Ⅰ類である。墨書は則天文字の「天」が底部外面にある。1477 は黒色土師器無台椀Ａ類の口縁部片である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1478 は黒色土器有台椀Ａ類の口縁部片である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1479 は土師器有台椀の底部片である。1480・1481 は須恵器甕の胴部片である。胎土はＣ群である。1480 は外面が格子目タタキ、内面にはスダレ状のあて具痕、1481 の外面は木目を有する平行タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。1482 ～ 1485 は製塩土器である。1482 ～ 1484 は底部片、1485 は胴部片である。1486（Ｈ漆紙）は漆紙である。八つに折り畳まれた破片で、文字・墨痕は確認できない。1487 は用途不明の漆塗り板状品である。薄板に塗った漆は重層している。

SK1121（図版 159、374）

1488・1489 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは 1488 が回転糸切り後ナデを施し、1489 が回転糸切りである。口縁部は 1488 が外反、1489 は短く「く」の字状に強く外反する。1490 は用途不明の鉄製品である。断面は方形を呈する。

SK1153（図版 159、374）

1491 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。1492 は土師器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面にはナデが施される。

SK1154（図版 159、374）

1493 は須恵器無台杯である。底部は左回転のヘラ切りである。胎土はＡ群である。1494 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は体部中位から大きく外反する。

SK1156（図版 159、374）

1495 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。口縁部は直線的に開いている。1496 は椀形鍛冶滓である。1497 は鍛冶滓である。

SK1158（図版 159、374）

1498･1499 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1499 の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1497 が外反、1499 がやや外反となる。

SK1159（図版 159、374）

1500 ～ 1506 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 3 点、不明 4 点である。法量値は口径が 12.0 ～ 12.4cm、器高が 3.8 ～ 4.6cm、底径が 3.8 ～ 6.0cm、器高指数が 31 ～ 37、底径指数が 32 ～ 49 となる。口縁部は 1500 ～ 1503 がやや外反、1504・1505 が短く強く外反、1506 は内湾気味となる。1507 は土師器有台椀である。やや低めの高台が付いている。1508 は黒色土器有台椀Ａ類である。1509 は土師器小甕の底部片である。底部の切り離しは右回転の糸切りである。

SK1192（図版 159、374）

1510 は土師器無台椀Ⅱ類である。やや大振りで、底部は絞り込まれている。

SK1229（図版 159、374）

1511 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。1512 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。1513 は土師器鉄鉢と思われる。口縁部は内湾する。

SK1251（図版 159・160、374）

1514 ～ 1521 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 2 点、Ｂ類 1 点、不明 5 点である。法量値は口径が 11.8 ～ 13.6cm、器高が 3.8 ～ 4.6cm、底径が 4.4 ～ 5.6cm、器高指数が 28 ～ 36、底径指数が 35 ～ 46 となる。口縁部は 1514 が内湾気味、1515 は直線的、1516･1517 は外反、1518 は体部中位から大きく外反、1519 ～ 1521 は短く「く」の字状に強く外反する。1522 は須恵器無台杯である。口径に対して底径がやや大きく、器高が高い。胎土はＣ群である。1523 は黒色土器有台椀Ａ類である。やや低めの高台が付いている。

SK1252（図版 160、374）

1524 は須恵器無台杯である。底径が大きく、底部はケズリ調整されている。胎土はＡ群である。1525 は黒色土器無台椀Ａⅲ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理されるが、口縁部の外面にもミガキが認められる。1526 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となる。1527 は土師器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。

SK1255（図版 160、375）

1528 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。口縁部は直線的に開いている。

SK1301（図版 160、375）

1529 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。

SK1354（図版 160、375）

1530 ～ 1532 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1530・1531 の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1530 が直線的、1531 は外反、1532 は内湾気味となる。1533・1534 は須恵器甕の胴部片である。胎土は 1533 がＡ群、1534 がＣ群である。1533 は外面が平行タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。1534 は外面が格子目タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。1535（Ⅰ漆紙）は漆紙である。折り畳みはなく、文字・墨痕は確認できない。

SK1356（図版 160、375）

1536 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

SK1357（図版 160・161、331・375）

1537 ～ 1540 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 2 点、Ｂ類 1 点、不明 l 点である。法量値は口径が 11.5 ～ 12.2cm、器高が 3.8 ～ 4.7cm、底径が 4.6 ～ 5.6cm、器高指数が 32 ～ 39、底径指数が 38 ～ 47 となる。口縁部はやや外反する。1541 は土師器無台椀の底部片で、底部はケズリが施されている。1542 は墨書された土師器無台椀の口縁部片で、墨書は体部外面にあり、判読不可能である。1543 は須恵器甕の口縁部片である。胎土はＡ群

である。1544 は緑釉陶器椀である。胎土は軟質で、高台畳み付は段を持っている。1545 は須恵器広口壺の口縁部片である。胎土はＣ群である。1546 は椀形鍛冶滓で、二段重層している。

SK1358（図版 161、375）

1547 は土師器台付鉢である。台部はやや高く、端部は平坦である。

SK1361（図版 161、375）

1548 ～ 1554 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 2 点、Ｂ類 2 点、不明 3 点である。法量値は口径が 11.6 ～ 13.6cm、器高が 4.0 ～ 5.0cm、底径が 3.8 ～ 5.6cm、器高指数が 31 ～ 39、底径指数が 29 ～ 45 となる。口縁部は 1548 が直線的、1549 ～ 1551 はやや外反、1552・1553 は体部中位から大きく外反、1554 は強く外反する。1555・1556 は椀形鍛冶滓である。1556 は二段重層している。

SK1364（図版 161、375）

1557・1558 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1557 が外反、1558 は直線的となる。

SK1365（図版 161、375・376）

1559 ～ 1562 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類である。法量値は口径が 12.0 ～ 12.6cm、器高が 4.2 ～ 4.4cm、底径が 5.3 ～ 6.0cm、器高指数が 34 ～ 36、底径指数が 43 ～ 50 となる。口縁部は 1559・1560 が直線的、1561・1562 はやや外反する。1563 は灰釉陶器椀である。三日月高台を有し、釉は浸け掛けである。胎土は還元化した灰色地である。

SK1387（図版 161、376）

1564 は土製羽口である。器壁がやや厚めで、孔部径がやや小さい。

SK1407（図版 161、376）

1565 は体部に円孔を有する器台である。内面は粗い指ナデ、外面は粘土紐の接合痕を顕著に残す。二次焼成痕はない。

SK1421（図版 161、376）

1566 は土師器椀の口縁部片である。灯明皿として使用されている。1567 は土師器甕である。口縁端部は上方に大きくつまみ上げている。

SK1436（図版 161、376）

1568 ～ 1572 は巻き付け成形の土錘である。長さが 2.4 ～ 3.1cm、孔径が 0.4 ～ 0.5cm、重量が 2.5 ～ 3.4g と小型である。1573 は黒色土器有台皿Ａ類の底部片と思われる。皿部内面にはミガキが施され、黒色処理される。

SK1459（図版 161、376）

1574 は椀形鍛冶滓である。下面と側面の一部に炉床土が付いている。1575 は鍛冶炉の炉壁片である。

SK1499（図版 162、376）

1576 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は体部中位から大きく外反する。1577 は須恵器広口壺の口縁部片である。胎土はＢ群である。

SK1513（図版 162、376）

1578 ～ 1587 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれているものが多く、確認できる切り離し

は右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類６点、不明４点である。法量値の分布は口径が 12.0 ～ 13.5cm、器高が 3.9 ～ 4.8cm、底径が 4.4 ～ 5.3cm、器高指数が 30 ～ 37、底径指数が 34 ～ 42 となる。口縁部は 1578 ～ 1580 が直線的からやや外反、1581 ～ 1587 は外反する。1588 は黒色土器椀Ａ類の破片である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1589 は黒色土器有台椀Ａ類の底部片である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1590 は黒色土器有台椀Ｂ類の底部片である。内・外面ともミガキが施され、黒色処理される。1591・1592 は土師器小甕である。底部の切り離しは 1591 が右回転の糸切りである。1593 は椀形鍛冶滓で、炉床土が付着している。

SK1531（図版 162、376）

1594 ～ 1599 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類４点、不明２点である。法量値は口径が 11.4 ～ 13.7cm、器高が 4.0 ～ 4.7cm、底径が 4.2 ～ 5.5cm、器高指数が 31 ～ 35、底径指数が 35 ～ 45 となる。口縁部は 1594 が直線的、1595 ～ 1598 がやや外反する。1599 は口縁部直下が沈線状にくぼむ。1596 は灯明皿として使用されている。1600 は土師器小甕である。口縁部は受け口状となる。

SK1533（図版 162、376）

1601 は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1602 は安山岩製の砥石である。

SK1535（図版 163、376）

1603 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的となる。

SK1539（図版 163、377）

1604 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。口縁部直下が沈線状にくぼむ。

SK1590（図版 163、377）

1605 ～ 1613 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類１点、Ｂ類１点、不明７点である。法量値は口径が 11.4 ～ 13.5cm、器高が 4.2 ～ 5.2cm、底径が 4.6 ～ 5.6cm、器高指数が 34 ～ 40、底径指数が 39 ～ 43 となる。口縁部は 1605 ～ 1608 が直線的、1609 ～ 1611 はやや外反、1612 は短く「く」の字状に強く外反する。1608 は口縁部直下に沈線状のくぼみを有し、1613 は口縁端部近くの内面が面をなしている。

1614 は黒色土器無台椀Ａ Ⅰ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1615・1616 は黒色土器椀Ａ類の口縁部片である。1617 は黒色土器無台椀Ａ類の底部片である。

1618・1619 は椀形鍛冶滓である。共に小型である。

SK2031（図版 163、377）

1620・1621 は巻き付け成形の管状土錘である。1620 は極小で、1621 はそれよりもやや大きい。

SK2046（図版 163、377）

1622 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁端部近くの内面は面をなしている。1623 は土師器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。1624 は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には平行あて具の後同心円のあて具痕が見られる。胎土はＣ群である。1625 は巻き付け成形の管状土錘である。

SK2056（図版 163、377）

1626･1627 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1627 の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1626 が「く」の字状に内屈、1627 は口縁部が面をなしている。

SK2062（図版 163、377）

1628 ～ 1630・1632 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1628・1630・1632 の切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 1 点、不明 3 点である。法量値は口径が 11.9 ～ 13.0cm、器高が 3.9 ～ 4.6cm、底径が 5.2 ～ 5.9cm、器高指数が 30 ～ 39、底径指数が 39 ～ 50 となる。口縁部は 1628・1629 がやや外反、1630 は体部中位から大きく外反、1632 は短く「く」の字状に強く外反する。1631 は黒色土器無台椀Ａ Ⅰ類である。口縁端部はつまみ出し外反させ、内面にはミガキが施され、黒色処理される。

SK2090（図版 163、377）

1633 は土師器鉢である。口縁部は「く」の字状に外反し、底部は平底である。体部外面中位以下にヘラケズリを施している。

SK2122（図版 164、377・378）

1634 ～ 1645 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 6 点、Ｂ類 4 点、不明 2 点である。法量値は口径が 11.6 ～ 13.9cm、器高が 4.2 ～ 5.2cm、底径が 4.0 ～ 5.7cm、器高指数が 34 ～ 43、底径指数が 32 ～ 47 となる。口縁部は 1634 ～ 1641・1643 が直線から外反気味、1642・1644・1645 はやや外反する。1646 は土師器無台椀Ⅱ類である。口縁部はやや外反する。1647 は土師器無台椀の底部片と思われる。

1648 は須恵器壺である。外面は平行タタキの後カキメ、その後下部にケズリが施される。内面には同心円のあて具痕の後カキメが施され、底部外面は平行タタキの後ケズリが施されている。破片の内面には摩滅痕が認められ、転用硯の可能性がある。胎土はＡ群である。

SK2226（図版 164、378）

1649 は巻き付け成形の管状土錘である。

SK2227（図版 164、378）

1650 は須恵器台付鉢の底部片である。底部内面に墨痕がある。胎土はＢ群である。1651 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は端部をつまみ出し外反させている。

SK2256（図版 164、378）

1652 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

性格不明遺構出土遺物（図版 164 ～ 167、331・332・378 ～ 380）

SX1104（図版 164 ～ 166、331・378・379）

1653 ～ 1677 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 10 点、Ｂ類 1 点、不明 14 点である。法量値は口径が 11.2 ～ 13.1cm、器高が 3.6 ～ 4.9cm、底径が 4.2 ～ 5.5cm、器高指数が 29 ～ 40、底径指数が 34 ～ 45 となる。口縁部は 1653 ～ 1657・1660 ～ 1673 は直線的からやや外反気味、1658・1659・1674 は外反、1675 ～ 1677 は口縁端部がわずかに外反する。1678・1679 は土師器無台椀Ⅱ類である。口縁部は 1678 がやや外反、1679 は

体部中位から大きく外反する。1680 は土師器椀の口縁部片である。口縁部は短く「く」の字状に強く外反する。1678 は灯明皿として利用されている。

1681 は黒色土器 A Ⅰ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部はやや外反する。1682 は黒色土器無台椀 A Ⅱ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は端部内面に段がある。1683 は黒色土器無台椀 A 類の底部片である。

1684・1685 は須恵器無台杯である。胎土は A 群である。1685 は口径 / 底径の指数が 69 となり、口径に対する底径の比率はやや大きい。底部の切り離しはヘラ切り、1685 は左回転のヘラ切りである。1684 の底部中央には「木ヵ」の墨書がある。1686・1688 は須恵器有台杯 A 類、1687 は須恵器有台杯 B 類である。いずれの高台も太く、外端部が接地する。胎土は A 群である。1687 の底部の切り離しは左回転のヘラ切りである。胎土は A 群である。

1689 は緑釉陶器杯である。胎土はやや硬質で、底部の切り離しは右回転の糸切りである。

1690 は土師器台付鉢の台部片である。台部の接地面は平坦である。1691 は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部を含む破片で、口縁部は受け口状となる。1692 は土師器小甕の底部片で、回転糸切り痕が見られる。

1693 は須恵器甕である。外面は格子目タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。胎土はＣ群である。

1694 ～ 1696 は用途不明の鉄製品である。いずれも断面が長方形の棒状を呈する破片である。1697 は流紋岩製の砥石である。1698 は軽石製の砥石である。1699 ～ 1702 は椀形鍛冶滓である。1699・1700 には炉床土が付着している。

SX2001（図版 166・167、332・379・380）

1703 ～ 1731 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型は A 類 14 点、B 類 3 点、不明 12 点である。法量値は口径が 11.9 ～ 13.6cm、器高が 3.8 ～ 5.6cm、底径が 4.3 ～ 5.8cm、器高指数が 29 ～ 43、底径指数が 33 ～ 47 となる。口縁部は 1703・1704・1706 ～ 1713 が直線からやや外反気味、1705・1714 ～ 1724・1731 がやや外反、1725 は体部中位から大きく外反、1726 ～ 1730 は短く「く」の字状に強く外反する。

1732 は黒色土器無台椀 A Ⅱ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1733 は土師器非ロクロ甕である。胴部外面はヘラケズリである。1734 は土師器非ロクロ甕である。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ、底部に筵痕が見られる。

1735 は椀形鍛冶滓である。炉床土が付いている。1736 は曲物である。漆容器として使用された曲物は腐蝕しており、漆のみ形状をとどめている。漆は容器内面に薄く付着していたと思われ、漆外面には曲物内面のケビキ線と結合のための樺皮の痕跡が見られる。

溝出土遺物（図版 167 ～ 172、331・380 ～ 383）

SD1090（図版 167、380）

1737 ～ 1739 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、1738・1739 の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的に開く。1740 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部の切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は内湾気味である。1741 は黒色土器無台椀 A Ⅱ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1742 は須恵器甕の胴部片である。外面は格子目タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土は A 群である。1743 は砂岩の自然石を用いた砥石である。

SD1103（図版 167・168、380）

1744 は土師器小皿である。底部の切り離しは右回転の糸切りである。

1745 ～ 1747 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1745・1747 がやや外反気味、1746 は外反する。1748 は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は直線的に開いている。

1749 は黒色土器皿である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1750 は土師器鍋である。体部外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。1751 は椀形鍛冶滓である。正面には木炭痕が残る。

SD1147（図版 168、380・381）

1752 は須恵器無台杯である。口縁部がやや内湾気味となる。胎土はＢ群である。

1753 ～ 1759 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 1 点、Ｂ類 2 点、不明 4 点である。法量値は口径が 12.2 ～ 13.8cm、器高が 4.0 ～ 4.5cm、底径が 4.6 ～ 5.2cm、器高指数が 30 ～ 37、底径指数が 34 ～ 39 となる。口縁部は 1753 ～ 1756 がやや外反気味、1757 ～ 1759 は外反する。1757 は体部外面に則天文字「天」が正位に墨書されている。1760 は黒色土器無台椀ＡⅡ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は直線的に開いている。

1761 は須恵器有台杯の底部片である。高台は外端面が接地する。胎土はＣ群である。1762 は須恵器甕である。外面は格子目タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。1763（Ⅰ漆紙）は漆紙である。表・裏面に墨痕が認められるが、判読できない。

SD1152（図版 168、381）

1764 は土師器甕である。底部は平底で、外面の胴部～底部にかけては平行タタキ、内面はナデとなる。

SD1161（図版 168、381）

1765 は土師器甕である。口縁部は受け口状となる。

SD1222（図版 168、381）

1766 は須恵器無台杯である。体部～口縁部は直線的に開いている。胎土はＢ群である。

SD1314（図版 168、381）

1767 は土師器無台椀の口縁部片である。1768 は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に内屈する。1769 は椀形鍛冶滓である。炉床土が付着している。1770 は土製羽口の先端部破片である。

SD1491（図版 168、381）

1771・1772 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1771 がやや外反気味、1772 は短く「く」の字状に強く外反する。

SD1563（図版 168、381）

1773 は巻き付け成形の管状土錘である。

SD2008（図版 168・169、331・381）

1774 ～ 1781 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はＡ類 2 点、不明 6 点である。法量値は口径が 11.4 ～ 13.6cm、器高が 4.0 ～ 4.9cm、底径が 4.6 ～ 5.8cm、器高指数が 31 ～ 36、底径指数が 37 ～ 45 となる。口縁部は 1774 ～ 1776 が直線的、1777・1778 はやや外反気味、1779・1780 は外反、1781 は口縁端部をつまみ出し外

反させている。1782は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁端部はわずかに外反する。

1783は灰釉陶器椀である。胎土は還元化しており、釉は浸け掛けである。1784は土師器小甕Ⅰ類である。口径よりも器高が小さく、口縁部は受け口状となる。1785は黒色土器有台椀A類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1786は須恵器広口壺の頸部片である。胎土はB群である。1787は土師器甕片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。1788は流紋岩製の大型の砥石である。1789は頁岩製の権状錘である。鐸状を呈し、上部に小孔が穿たれている。

SD2030（図版169、381）

1790は土師器小甕である。胴部は球形である。

SD2040（図版169・170、381・382）

1791～1794・1796～1798は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はB類1点、不明6点である。法量値は口径が11.5～13.0cm、器高が3.8～4.6cm、底径が3.8～5.1cm、器高指数が32～37、底径指数が31～39となる。口縁部は1791・1792がやや外反気味、1793・1794・1796・1797は外反、1798は「く」の字状に強く外反する。1793は体部に焼成後の穿孔がある。1795･1799･1800は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。1800は灯明皿として使用されている。

1801は黒色土器有台椀A類、1802は黒色土器無台椀AⅡ類、1803は黒色土器有台皿A類である。いずれも内面にはミガキが施され、黒色処理される。1804は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は内湾気味である。1805は凹石である。1806は頁岩製の砥石である。石質は軟質である。

SD2054（図版170、382）

1807は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部の外面端部は面をなしている。1808は須恵器甕である。外面は木目を有する平行タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。胎土はB群である。

SD2060（図版170、382）

1809～1824は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はA類6点、B類2点、不明8点である。法量値は口径が11.8～13.2cm、器高が3.9～4.8cm、底径が3.8～5.2cm、器高指数が31～38、底径指数が31～42となる。口縁部は1810・1813～1821・1824が直線的、1809・1811・1812・1822が外反、1823が「く」の字状に外反する。

1825は黒色土器無台椀A類の底部片である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。1826は土師器小甕Ⅲ類である。口縁部は受け口状となる。1827は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土はB群である。

SD2064（図版170・171、382）

1828～1836は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りである。回転糸切り類型はA類1点、B類1点、不明7点である。法量値は口径が11.6～12.8cm、器高が3.5～5.0cm、底径が4.0～5.4cm、器高指数が30～39、底径指数が32～46となる。口縁部は1828～1830が直線的、1831～1833がやや外反、1834が外反、1835・1836はやや内湾気味となる。

1837は須恵器甕である。外面は平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土はA群である。

SD2116（図版 171、382・383）

1838 ～ 1840 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は 1838・1839 が直線的、1840 が外反する。

1841 は土師器小甕Ⅰ類である。頸部外面にヘラナデを施し、口縁部は「く」の字状に外反する。1842 は土師器甕である。口縁部は受け口状となる。1843 は須恵器甕である。胴部外面は平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土はＡ群である。1844 は流紋岩製の砥石である。

SD2121（図版 171、383）

1845 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

SD2127（図版 171、383）

本遺構はⅨ層上面で検出したが、遺物はⅧ層相当よりも古いⅪ層相当の遺物群が出土しており、混入したかⅪ層の遺構を掘り抜いた可能性がある。1846 は須恵器折縁杯である。折縁の口縁部は退化し、わずかに内屈する。胎土はＡ群である。1847 は須恵器杯蓋である。扁平鈕を有している。胎土はＡ群である。1848 は須恵器瓶類の口縁部片である。口縁端部は「く」の字状に内屈する。胎土はＢ群である。1849 は須恵器甕である。外面は木目を有する平行タタキとカキメ、内面には同心円のあて具痕が見られる。胎土はＢ群である。

SD2131（図版 171、383）

1850 は黒色土器無台椀ＡⅡ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。

SD2173（図版 172、383）

1851 は砂岩製の磨石である。正・裏面の広い範囲に磨面が見られる。

ピット出土遺物（図版 172、383）

P1149

1852 は椀形鍛冶滓である。正面に木炭痕が付いている。

P1211

1853 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。

P1279

1854 は須恵器広口壺の口縁部片である。胎土はＢ群である。

P1347

1855 は須恵器甕の口縁部片である。外面に櫛目の波状文が施される。胎土はＡ群である。

P1378

1856 は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部は外反する。

P2114

1857 は巻き付け成形の管状土錘である。

P2123

1858 は土師器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。

P2152

1859 は黒色土器無台椀ＡⅠ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。底部は丸みを持っ

ている。

P2164

1860は頁岩製の砥石である。きめの細かい軟質の自然礫を用いている。

P2171

1861は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。灯明皿として使用されている。

P2177

1862は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

P2242

1863は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれ、切り離しは右回転の糸切りである。口縁部はやや外反する。

遺構外出土遺物（図版172～193、329～332・383～396）

土師器無台椀は、確認できる底部の切り離しが右回転の糸切りで、回転糸切り類型はA類47点、B類33点、不明93点である。

1864～2008は土師器無台椀Ⅰ類である。底部は絞り込まれている。口縁部は1864～1914が直線的、1915～1932･2005･2006はやや外反、1933～1975は外反、1976～1982は体部から大きく外反、1986～1997は短く「く」の字状に外反、1998～2004は端部をつまみ出して外反、2007・2008は内湾気味となる。また、1983～1985の口縁部外面は面をなしている。底部の切り離しはほとんどが右回転の糸切りであるが、1911・1914・2004は切り離し後にケズリ、1912・1913は切り離し後にナデが施され、2005・2006は体部下端と底部にケズリが施されている。1879・1914は灯明皿として使用され、1925・1943はその可能性がある。2009・2010は土師器無台椀類の底部片である。2009は内・外両面に右回転の糸切り痕が残り、円柱技法による痕跡と考えられる。2010はケズリが施されている。

2011～2014は土師器無台椀Ⅱ類である。底部は絞り込まれ、確認できる切り離しは右回転の糸切りであるが、2013・2014はその後一部にケズリが施され、2014の一部には板状痕が付いている。口縁部は2011・2012が外反、2013・2014は端部がやや外反気味となる。

2015～2022は墨書のある土師器無台椀である。2015は体部外面に正位で則天文字の「天」が、2017・2021は体部外面に正位で則天文字「天ヵ」が、2016・2018～2020・2022は判読不明の墨痕が体部外面にある。

2023は土師器皿である。体部は大きく開き、口縁部で屈折し、やや外反気味となる。2024は盤である。底部が大きく、口縁部は直立気味となり、内端が面をなしている。2025は土師器皿の口縁部片と思われ、口縁部は玉縁状となる。

2026～2029・2031～2033は黒色土器無台椀AⅠ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は2026が直線的、2027～2029・2031～2033はわずかに外反する。2030・2034～2041は黒色土器無台椀AⅡ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部はわずかに外反するものが多いが、2034・2042は直線的に開き、2036は「く」の字状に強く外反する。2042は黒色土器無台椀AⅢ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。口縁部は直線的に開く。

2043 は大型の黒色土器有台椀Ａ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理され、口縁部は強く外反する。2044 ～ 2052 は黒色土器有台椀Ａ類の底部片である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。高台は形状・高さともに多様で、2044 は内面に段を有す低い高台、2045・2047 は断面三角形のやや低い高台、2046 は断面台形の低くて小さな高台、2048 は接地面が平坦になるやや高い高台、2049・2050 は太くやや高い高台、2051 は細めでやや高い高台、2052 は内端面が接地するやや高い高台である。

2053 ～ 2055 は黒色土器有台皿Ａ類である。内面にはミガキが施され、黒色処理される。2053 は体部～口縁部が外反気味に開き、2054・2055 は直線的に開く。

2056 ～ 2060 は黒色土器有台椀Ｂ類の底部片である。内・外面にミガキが施され、黒色処理される。高台は多様で、2056 は断面三角形、2057･2058 は接地面が平坦、2059･2060 は内面に段を持っている。

2061 は黒色土器有台皿Ｂ類である。内・外面にミガキが施され、黒色処理される。高台は断面三角形となり、口縁部は外反する。

2062・2063 は黒色土器蓋である。内・外面にミガキが施され、黒色処理される。口縁部は体部から急な角度で曲げられて直立し、端部は面をなしている。対応する身の器種は不明であるが、2064 の底部片が法量的に一致し、セットになる可能性がある。2064 は黒色土器の器種不明の底部片である。内・外面にミガキが施され、黒色処理されるが、底部のミガキは粗い。底部はやや丸みを持つ平底で、体部は直立するようである。

2065 ～ 2071 は土師器有台椀の底部片である。2065 は太くて低い高台で、内端面が接地する。2066 は太く低い高台で、外端面が接地する。2067 は細く低い高台で、端部が面をなしている。2068 ～ 2070 は断面三角形の高台を有している。2071 は細くやや高い高台である。

2072･2073 は柱状高台を持つ土師器皿の底部片と思われる。2072 は底部が厚く、2073 はやや薄い。

2074 は土師器耳皿である。口縁部をゆがませ耳状としている。底部の切り離しは回転糸切りである。

2075 ～ 2077 は漆パレットとして使用された椀である。2075 は黒色土器有台椀Ａ類である。高台が欠損しており、内面の全面に漆が点々と付着している。2076・2077 は土師器無台椀で、内面に漆が付着している。

2078・2079 は穿孔された土師器無台椀である。2078 の底部には焼成後に開けた 3 か所の孔が見られる。破片上位に図化した孔は外面から内面に貫通しているが、図上下位の 2 孔は貫通せず、孔先端が器壁内で連結している。2079 は底部中央に内・外面に貫通するやや大きめの穿孔がある。

2080 ～ 2082 は土師器香炉蓋である。2080・2081 は半球形を呈し、天井部には台形の粘土板に円孔を穿った鈕を付け、その両端に器壁を斜めに貫通する 2 孔が穿たれている。2082 は土師器香炉の蓋と思われる。天井部は階段状に段を有している。

2083 は土師器鉄鉢の口縁部片である。口縁部は内湾する。

2084・2085 は須恵器有台杯Ａ類である。2084 の高台は両端接地で底部の内側寄りに貼り付けられ、体部から口縁部は直線的に立ち上がる。胎土はＢ群である。2085 の高台は外端接地で体部下端に貼り付けられ、口縁部～体部は直線的に立ち上がる。胎土はＢ群である。

2086 は須恵器杯蓋である。口縁端部を折り曲げている。胎土はＢ群である。

2087･2088 は灰釉陶器椀である。共に重ね焼で、釉は浸け掛けである。2087 の高台は三日月高台で、口縁部はやや外反する。2088 は口縁部破片で、口縁部は外反する。

2089 ～ 2091 は灰釉陶器皿である。釉は浸け掛けで、高台は三日月高台である。

2092 は灰釉陶器長頸壺の口縁部片である。内・外面の全面に釉が掛かる。

2093 は白磁皿Ⅰ類の口縁部片である。輪花皿で、口縁部と体部の境が「く」の字状に屈折する。

2094 ～ 2110 は土師器台付鉢である。2094 は口縁部片と底部片が出土しているが接合できなかった。口縁部は嘴状に屈折し、台部は大きく開き、接地面は平坦である。底部外面は指頭による放射状の凹線が施される。2095 は口縁部が外反し、高台は欠損している。2096 は口縁部が玉縁状となり外反する。2097 は口縁部が嘴状に屈折し、体部内面にハケメが施されている。2098 は口縁部が内屈する。2099 は口縁部が直線的に開き、口縁端部は面をなしている。2100 ～ 2110 は台部片である。2100 は台部が大きく開いている。2101 は底部外面に指頭による放射状の凹線が施されている。2102・2106・2108・2109 は台部外端面が接地し、2103・2104・2110 は台部の内外の両端が接地、2105・2107 は台部内端面が接地する。

2111・2112 は土師器鉢の口縁部片である。口縁部は「く」の字状に外反する。

2114・2115 は須恵器台付鉢で、2113・2116・2117 は須恵器台付鉢の口縁と思われる。胎土はＡ群である。2113 は受け口状の口縁部となる。2114 は口縁部が受け口状となり、平底の底部に断面方形の台を貼り付けている。2115 は口縁部片と底部片が出土しているが接合しなかった。口縁部は端部が面をなしており、底部は丸底で鉢巻状に高台を貼り付けている。2116 は底部外面が剥落している。口縁端部は面をなしている。2117 は体部～口縁部の破片である。口縁部は受け口状となる。

2118 ～ 2128 は土師器鍋である。口縁部を中心として形状に多様性が認められる。2118 は口縁部が外反し、端部が面をなしている。2119 は体部上位で括れた後、口縁部は直線的に開いている。2120 は口縁部が受け口状となる。2121・2122 は受け口状の口縁部が直立し、「く」の字状に内屈する形状となっている。2123・2124 は口縁部が内湾気味となり、端部が面をなしている。2125・2126 は口縁部が体部から直線的に伸び、端部は面をなしている。2127 は口縁部が嘴状となっている。2128 は口縁部の端部が尖り、わずかに外反する。

2129 は土師器甕の口縁部片である。口縁部は「く」の字状に大きく外反する。

2131・2136 は土師器小甕Ⅱ類である。2131 の口縁部は受け口状となる。2136 の口縁部は「く」の字状に外反する。2130・2132 ～ 2135 は小甕Ⅲ類である。2130 の口縁部は受け口状となる。2132 ～ 2135 は口縁外端部が面をなしている。2137 ～ 2142 は土師器小甕の胴部～底部の破片である。2137 の底部は回転糸切り後ケズリ、胴部下端はケズリが施される。2138 は右回転の糸切り底である。2139 の底部の調整は不明である。2140 は底部・胴部ともにケズリが施されている。2141 は胴部にケズリが施され、底部の調整は不明である。2142 は胴部の張りが強く、頸部は窄まる。

2143 ～ 2157 は土師器甕である。口縁部の形状は多様である。2143 ～ 2147 は受け口状の口縁部となる。2148 ～ 2154 は口縁外端部が面をなしている。2155 の口縁部は内湾して立ち上がり、端部は面をなして水平となる。2156･2157 は胴部片で、外面に平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。

2158 ～ 2161 は土師器小型羽釜である。口縁部が低く内傾化する小型品である。2158 ～ 2160 は胴部上端を外方へ折り曲げて鍔を取り付けた後、口縁部を貼り付けている。2161 の短い鍔は胴部上端まで成形した後、口縁部下端を胴部上端の内面に重ねて三角形断面の短い鍔を造りだしている。

2162・2163 は角状を呈する土師器の把手である。ケズリ整形で、器種は不明である。

2164 ～ 2166 は須恵器短頸壺である。口縁部は短く直立し、肩が張る。胎土は 2164・2165 がＢ群、2166 がＣ群である。2166 は四耳壺で、肩部に円孔を穿った板状の把手が貼り付けられている。

2167･2168は須恵器横瓶の胴部片である。胎土はＢ群である。2167の外面は格子目タタキの後カキメ、内面には同心円のあて具痕の上にカキメが見られる。2168の外面は格子目タタキの後カキメ、内面には同心円のあて具痕が見られる。

2169 ～ 2182は須恵器広口壺である。口縁端部の形状は多様である。胎土はＢ群である。2169 ～ 2172は口径が18cm以下の小型品である。口縁端部は2169が嘴状、2170は受け口状、2171・2172は外端部が面をなしている。2173 ～ 2177は口径が20cm以上となる大型の広口壺である。口縁端部は2173が上・下に伸び、2174・2176は下方に伸びている。2175・2177は受け口状となる。2178は大型の広口壺の胴部～口縁部片である。2179は大型の広口壺の胴部～底部片である。高台は内面に段を有し、外傾する。2180は小型の広口壺の底部片である。高台は内面に段を持ち、直立する。2181・2182は大型の広口壺の底部片である。2181の高台は直立し、接地部は平坦である。2182の高台は外傾し、接地部は平坦である。

2183 ～ 2198は須恵器甕である。胎土は2183・2194がＡ群、2184 ～ 2187・2189 ～ 2193・2195 ～ 2198がＢ群、2188がＣ群である。2183 ～ 2185は口縁部を含む破片である。2183・2185は口縁端部が嘴状となり、2184は端部両端が上・下方向にわずかに伸びている。2186 ～ 2188は胴部上位の破片である。2186は外面が格子目タタキ、内面には木目を有する同心円のあて具痕が見られる。2187・2188は外面が格子目タタキ、内面には放射状のあて具痕が見られる。2189 ～ 2192・2194は胴部中位の破片である。2190は外面が格子目タタキ、内面には放射状のあて具痕が見られる。2191は外面が格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕とその後の扇状のあて具痕が見られる。2192は外面が格子目タタキ、内面には平行のあて具痕とその後の木目を有する同心円のあて具痕が見られる。2193は外面が格子目タタキ、内面には平行のあて具痕が見られる。2194は外面が平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が見られる。2195・2197は外面が平行タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。2196・2198は外面が格子目タタキ、内面には木目を有する平行のあて具痕が見られる。

2199・2200は酸化焔焼成の器台である。2199は上部の破片で、天井はなく、口縁状となる。2200は胴部～底部の破片である。胴部中位に円孔がある。

2201 ～ 2205は製塩土器である。平底で、バケツ状を呈し、輪積痕を残す粗い調整である。2201 ～ 2204は底部片、2205は胴部下端の破片である。

2206は須恵器甕の破片を再利用したもので、破断面が摩耗している。用途は不明である。胎土はＡ群である。

2207 ～ 2226は巻き付け成形の管状土錘である。2207 ～ 2222は長さ2.4 ～ 3.2cm ×径1.0 ～ 1.5cm、孔径が0.3 ～ 0.5cmの紡錘形を呈し、重さは1.4 ～ 4.7gの小型品である。2223は長さ2.9cm ×径2.3cmの俵形を呈し、孔径が0.7cm、重さは13.7gを量る。2224・2225は長さ4.6 ～ 5.4cm ×径1.2 ～ 1.4cmの紡錘形を呈し、孔径が0.6cm、重さが13.4 ～ 21.1gの大型品である。2226は本遺跡から出土した管状土錘の中で最大のもので長さ6.7cm ×径2.3cmの紡錘形を呈し、孔径が0.6cm、重さは27.3gを量る。

2227は漆片である。片面に付着痕がある。付着痕は中心が円筒状となり、その外側から放射状に筋状の盛り上がりが存在することから、付着していたものは花弁状を呈していたと思われるが、その器種・用途は不明である。

2228は水晶製の丸玉である。大きさは直径9mmほどで、中央に紐通し用の細い管状の孔がある。二

次的に高温の熱を受け、全体にひび割れている[1)]。単独での出土である。

2229 は腰帯石銙丸鞆である。黒色系の頁岩製で、潜り孔は 3 か所三角形に配置されるが、右端のものは位置がずれている。裏面を除き、平滑に磨かれている。

2230 ～ 2256 は砥石である。2230・2231 は頁岩の自然礫を用いた砥石である。2232 は樋状の砥面を持つ流紋岩製の砥石である。2233・2234・2242・2243・2245・2246・2253 は流紋岩製の砥石で、仕上げ砥である。2235・2237・2240 は凝灰岩製の砥石で、仕上げ砥である。2236・2249・2252 は砂岩製の砥石で、中砥である。2238・2251 は凝灰岩製の砥石で、被熱痕がある。2239・2247 は流紋岩製の砥石で、中砥である。2241 は砂岩製の砥石で、被熱痕がある。2244 は凝灰岩製の砥石で、吸炭している。2248･2256 は砂岩製の砥石で､仕上げ砥である。2250 は花崗岩製の砥石で､中砥と思われる。2254 はドレライト製の砥石で、中～荒砥である。2255 は流紋岩製の砥石で、中～仕上げ砥である。

2257 ～ 2259 は鉄床石及び鉄床石の可能性のあるものである。2257・2258 は被熱痕のある石材で、鉄床石あるいは鍛冶炉の周りに置かれた石材と思われる。2259 は黒雲母角閃石斑状花崗岩製の鉄床石で、正・裏両面に打痕がある。

2260 ～ 2273 は鉄製刀子である。いずれも欠損した破片である。2260 ～ 2265 は関を含む破片である。2260・2262・2263 は両関で、背・刃ともに角関である。2261・2264・2265 は背関が角関、刃関が撫関である。2266 は切先と茎部に分かれるが､同一個体と思われる。2267 ～ 2270 は刃部片である。2271・2273 は茎部片である。2272 は酸化土砂に覆われた刀子刃部片であるが、形状等の詳細は不明である。

2274 ～ 2277 は棒状の鉄製品である。2274 は断面長方形である。2275・2276 は断面方形で、「L」字状に曲がり、鉄釘と思われる。2277 は鉄釘の可能性がある。2278・2279 は鉄釘の頭部片で、頭部は円盤状を呈している。2280 は断面方形の細い棒状を呈する器種不明の鉄製品で、あるいは 2286 の紡錘車の芯棒の可能性も考えられる。2281 は鉄鏃の頸部～茎部片で、角関となる。2282 は半管状を呈する器種不明の鉄製品である。2283 は鉄製留め金具片で、菱形の板と棒状の部分からなり、板部分はわずかに湾曲しており、棒状部分の板側の端部には頭部が存在する。2284 は器種不明の鉄製品で、細長い鉄板が折り曲げられており、一部に木質の付着物が見られる。2285 は鉄製鉸具である。T 字状刺金で、刺金の軸部は鉸具頭の基部の孔に装着されている。2286 は鉄製紡錘車の円盤部分の破片である。2287・2292 ～ 2295 は鋳造された鉄板片である。2288 ～ 2291 は鍛造された鉄板片である。2296・2297 は鉄塊系の遺物である。

2298 ～ 2302 は土製羽口である。2299 ～ 2301 は小孔径で、2302 は孔径がやや大きめである。

2303 ～ 2353・2355・2357 は椀形鍛冶滓である。2303 は大型で、二段重層している。2304 ～ 2310 は中型の椀形鍛冶滓である。2308 は二段重層し､鉄を多く含む。2309 は半溶解の石が付着している。2310 は二段重層し、半溶解の石が付着している。2311 ～ 2325 は小型の椀形鍛冶滓である。2319 は二段重層し、鉄を多く含む。2320・2321 は二段重層している。2322 ～ 2325 は鉄を多く含む。2326 ～ 2353・2355・2357 は極小の椀形鍛冶滓である。2326・2330・2331・2344・2345 は鉄を多く含む。2327・2328 は片面に炉床土が付着している。

1)　掘立柱建物 SB1500 の直上に当たる 8D6 区の包含層から出土した。自然科学分析によれば、同様の高温クラック（ひび割れ）が生じる温度はおよそ 1,100℃以上とされており、この丸玉が二次的に高温にさらされたことを示唆している。関連は不明であるが、出土地点の直下には地床炉 SW1343 が位置する。

2354・2356・2358 ～ 2376 は鍛冶滓、2359 ～ 2363・2365 ～ 2376 は鉄を多く含む。2376 は板状の鉄製品を挟み込んでいる。

2377 ～ 2382 は鍛冶炉の炉壁である。2377・2378 には籾殻が含まれる。2379 はスサが含まれる。2381・2382 は内壁がガラス質となっている。

2383 は漆器椀で、実測不可能のため写真のみ掲載する（図版 396）。総黒色で、木胎は腐蝕している。

B　中　　世

1）分類と記述方法

中世では珠洲焼、常滑焼、中国輸入陶磁器、中世土師器、漆器、木製品、石器・石製品、銭貨、鉄関連遺物が出土している。これらの遺物は多くの先学により蓄積された研究成果があり、本報告においてもこれらを用いて記述する。利用する研究及び留意点について以下に記す。

珠 洲 焼　　編年及び器種の分類や用語については、［吉岡 1994］を参考として記述する。珠洲焼系統の在地産を珠洲焼系と呼称する。

中国輸入陶磁器　中国輸入陶磁器全般については、［横田・森田 1978］及び［山本 1995］、14 世紀以降の白磁については［森田 1982］、14 世紀以降の青磁については［上田 1982］、10 ～ 11 世紀代の白磁については［山本 1983］を参考として記述する。

常 滑 焼　　編年については、［中野 1995］を参考として記述する。

2）Ⅳ層の出土遺物

本層は、既に西部遺跡Ⅰとして調査が行われているが、今回の調査は西部遺跡Ⅰで調査していない調査区南側の農道部分を中心に実施している。西部遺跡Ⅰの成果を合わせて遺物の分布を見ると、調査区の中央から南側にかけて集中する。今回の調査で出土した遺物は珠洲焼、常滑焼、輸入中国陶磁器、中世土師器、漆器、木製品、杭、石器・石製品、銭貨である。

遺構出土遺物（図版194～201、332・397～402）

掘立柱建物出土遺物（図版 194、397）

SB532-P5

2384 は珠洲焼壺・甕類の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。

井戸出土遺物（図版 194 ～ 201、332・397 ～ 402）

SE040（図版 194、332・397）

2385 は龍泉窯系青磁椀 I-2b 類である。内面底部に片切り彫りの劃華文があり、底部外面高台内側は露胎となる。2386 は鉄を多く含む鍛冶滓である。2387 は木製杓子の未製品と思われる。一木造りで、杓部は粗削りの段階で柄は折損している。柄部の折損面には方形の小孔が穿たれており、この孔に臍をさして杓部と再結合を試みようとしているが、杓部に孔がないことから途中で製作を放棄したものと考えられる。

SE048（図版 194、397）

2388 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ消しである。

SE262（図版 194、332・397）

2389 は珠洲焼壺・甕類の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ消しである。2390 は白磁皿の口縁部片である。口縁部内面に軽い段を有し、黄味の強い釉が掛けられる。2391･2392 は砥石である。2391 は砂岩製で、2392 は流紋岩質凝灰岩製である。

SE565（図版 194、332・397）

2393 は雷文系青磁椀の底部片である。釉は高台外面まで認められ、畳付から内側は露胎となる。2394 は珠洲焼壺・甕類の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。

SE598（図版 194、332・397）

2395 は珠洲焼Ⅰ期のＲ種壺である。頸部は「コ」の字状に外反し、端部は嘴頭状となる。2396 は珠洲焼壺･甕類の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。2397 は漆器椀である。内･外面とも炭粉渋下地で、内面は赤色、外面は黒色に赤色で楓などが描かれている。

SE600（図版 194、397）

2398 は珠洲焼壺・甕類の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。

SE667（図版 194・195、397）

2399 は珠洲焼Ⅶ期の片口鉢である。口縁部の端面はほぼ水平となり、卸目は粗い。2400 は珠洲焼Ⅶ期の片口鉢である。口縁部の端面は内傾し、内面には５目の粗い櫛目波状文を施す。2401 は瓦器の片口鉢である。酸化焔焼成であるが、比較的硬質である。口縁部の端面はほぼ水平で、卸目は粗い。2402 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ消しである。

SE674（図版 195・196、332・397・398）

2403 は白磁椀Ⅷ類と思われる。口縁部は「く」の字状に屈折し、端部は水平となる。2404 は常滑焼３型式甕の肩部片である。緑色の釉が厚く掛かり、スダレ状の押印が施されている。2405・2406 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は指頭によるナデ消しである。2407 は珠洲焼Ⅰ期の甕の口縁部位を含む破片である。口縁部は大きく外反し、端部は嘴状となる。胴部外面は平行タタキ、内面はあて具痕をナデ消している。2408 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキの後、分離成形時の接合部に乱雑なヘラナデが施されている。内面はナデ消しである。2409・2410 は珠洲焼甕の底部片である。底部に砂が付着している。2411 は珠洲焼壺の胴部片と思われる。外面は多面をなす平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。2412 は特大の椀形鍛冶滓である。2413 は用途不明の木製品である。芯持材で、上端が削られ楔状を呈する。2414・2415 は井戸側の部材である。2414 は芯持材の隅柱で、２面を平坦に削り、断面は小判形を呈する。両側面に１孔ずつ未貫通の孔が穿たれている。2415 は井戸の側板で、柾目の板材である。

SE704（図版 196 ～ 198、398 ～ 400）

2416 は珠洲焼系のＲ種壺で、時期は珠洲焼Ⅰ期と思われる。外面に弧状の櫛目文と１条の沈線が加飾されている。胎土には多量の礫が含まれ、在地産と考えられる。2417 ～ 2420 は珠洲焼甕の胴部片である。2417 ～ 2419 は外面が平行タタキ、内面はナデ消しである。2420 は外面が平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。2421 ～ 2428 は刳舟を切断して井戸枠に利用したものである。2421 ～ 2424 と 2425 ～ 2428 の２個体に分かれ、両舷を合わせて井戸枠としている。2421 ～ 2424 は底部が

平坦であることから舟の中央部断片、2425 ～ 2428 は底部が丸いことから舟先に近い部分と思われる。

SE753（図版 199、400）

2429 は珠洲焼Ⅱ期の片口鉢である。口縁部の端部は外側に面をなし、卸目は細かく 13 目以上となる。2430 は珠洲焼甕の胴部片である。張りのある肩部で、外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。2431 は珠洲焼 R 種壺の底部を含む破片である。底部にはケズリが施されている。

SE754（図版 199、400）

2432 は珠洲焼壺の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はロクロ調整である。

SE765（図版 199・200、332・400・401）

2433 は白磁 D 群の皿である。乳白色の釉が厚く施され、外面体部下半から底部は露胎である。高台の畳付は使用により摩耗しており、底部外面に判読不明の墨書がある。2434 は珠洲焼甕の肩部～胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。内面下部は摩滅して平滑で、ススの付着が認められる。2435 ～ 2437 は珠洲焼Ⅵ期の片口鉢である。2435 は口縁部が円頭状を呈し、内面には 1 単位 7 目の太い櫛目波状文が施される。卸目は太く、直線的である。2436 は内面に面をとる幅広の口縁部を持ち、卸目は 1 単位 6 目で粗く施されるが、内面下半は使用により摩滅している。割れ口には漆が付着し、補修した痕跡と思われる。2437 は胴部片で、卸目は幅 4cm で 22 目、卸目下半は使用により摩滅している。2438 は漆器椀である。炭粉渋下地で、内面が赤色、外面が黒色に赤色漆絵が描かれているが、漆絵の意匠は不明である。2439 は砥石である。頁岩の自然礫を利用している。

SE841（図版 200、401）

2440 は珠洲焼Ⅰ期の片口鉢である。片口部を有する破片で、口縁部は水平に面を取る。

SE843（図版 200、332・401）

2441 は白磁 D 群の皿である。外面体部下半以下が露胎である。内面中央部は摩滅している。2442 は古瀬戸後期様式Ⅱ期の直縁大皿である。口縁端部はわずかに厚くなり、内・外面に緑色の釉が掛かり、外面体部下端から底部が露胎となる。2443 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ消しである。2444 は珠洲焼系の T 種壺で、時期は珠洲焼Ⅱ期に相当する。外面は綾杉状の平行タタキ、内面にはナデと棒状工具痕が見られる。胎土は礫を含み、焼きが甘いことから在地製品と考えられる。2445 は流紋岩製の砥石である。

SE844（図版 200、332・401）

2446 は龍泉窯系青磁椀 I-2b 類の口縁部片である。内面に劃華文と横位の沈線が施文され、口縁端部は使用により釉が剝げている。

SE860（図版 200・201、332・401）

2447 は龍泉窯青磁椀 I-5b 類である。鎬蓮弁文を有し、畳付から内側は露胎となる。内面には擦痕状の使用痕が見られる。2448 は円形曲物の側板である。側板は上部を欠損しており、内面にはケビキ線が多数見られる。綴じは樺皮綴じで、側板下部にはたがが嵌められ、その下端にはたがと側板そして底板を結合するための木釘用の小孔が並んでいる。2449・2450 は杭である。芯持丸木材の先端部を尖らせている。2450 は上部に孔が貫通している。

SE4002（図版 201、402）

2451 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面には無文のあて具痕が見られる。2452 は流紋岩製の砥石である。

土坑出土遺物（図版 201、402）

SK580

2453 ～ 2455 はロクロ整形の中世土師器皿である。2453 はやや突出した底部から内湾気味に立ち上がり口縁部となり、色調は灰白色である。2454 はやや突出した底部から内湾気味に立ち上がり口縁部となる。色調はにぶい橙色である。2455 は底部がやや突出、体部は中位で「く」の字状に屈折し、口縁部は内湾気味となる。色調は灰白色である。2456 は土師器の甕で、時期は不明である。ロクロ整形で、底部の切り離しは回転糸切りである。

溝出土遺物（図版 201、332・402）

SD025（図版 201、332・402）

2457 は白磁椀ⅥあるいはⅧ類と思われる。口縁部は「く」の字状に外反し、端部を水平に取る。2458 は流紋岩製の砥石である。

SD041（図版 201、402）

2459 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ消しである。2460 は砂岩製の砥石である。自然石を用いている。

ピット出土遺物（図版 201、402）

P821

2461 は珠洲焼系の R 種の四耳壺で、時期は珠洲焼 I 期に相当する。肩部に櫛歯波状文を施し、その上位に橋状把手を横位に貼り付けている。胎土には礫が含まれ、在地産と思われる。

P830

2462 は常滑焼 3 型式甕の胴部片である。スダレ状の押印が施される。

P853

2463 は聖宋元寶（北宋、1101 年）である。内・外面ともに摩滅が著しい。

P865

2464 は珠洲焼甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はナデ消しである。

遺構外出土遺物（図版 201、332・402）

2465 は龍泉窯系青磁椀 I-5b 類である。鎬蓮弁文を有し、畳付から内側は露胎となるが、釉の掛かった高台欠損部が存在し、焼成前の欠損と考えられる。内面には多くの擦痕が見られる。2466 は龍泉窯系青磁椀 I-4b 類である。内面に雲気文が施される。内・外面に擦痕が認められ、内面は横位、外面は縦位の方向が主となる。2467 は珠洲焼系の R 種の四耳壺で、時期は珠洲焼 I 期に相当する。肩部にわずかに弧を描く櫛歯文を施し、その上位に橋状把手を横位に貼り付けている。胎土には礫が含まれ、在地産と思われる。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　西部遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
斎藤崇人・伊藤良永・馬場健二・松元美由紀・斎藤紀行・高橋　敦・石岡智武・千葉博俊

A　はじめに

本報告は、西部遺跡で検出した遺構の年代や古環境変遷、さらに、植物資源利用（栽培植物、木材）、石材利用などの検討を目的として行った自然科学分析調査結果である。

B　堆積物及び遺構の年代

1）試　　料

試料は、西部遺跡のⅧ～ⅩⅢａ層から出土した掘立柱建物に伴う柱材や、地床炉から検出した炭化物、さらに、西部遺跡Ⅱ・Ⅴや中部北遺跡の深掘坑で確認した腐植質な堆積物及びガツボ層と称される植物遺体層から採取した土壌である。なお、西部遺跡及び中部北遺跡で確認した腐植質な堆積物及び植物遺体層は、その累重状況から腐植帯Ａ・Ｂに分類されている［新潟県教育委員会 2008a］。本分析では、各遺構の年代や堆積層の形成年代の検討を目的として放射性炭素年代測定を行う。

2）分 析 方 法

AMS（加速器質量分析）法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じ切り、500℃で 30 分と 850℃で 2 時間加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

試　料　名			性状	種類	補正年代（yrBP）	補正年代（暦年較正用）（yrBP）	δ13C（‰）	測定機関code
西部遺跡Ⅱ	SB1400	P6	木材	クリ	1,170± 40	1,169± 39	-25.45±0.64	IAAA-51947
	SB1500	P12	木材	クリ	1,160± 40	1,161± 41	-31.29±0.87	IAAA-51948
	SB1500	P44	木材	クリ	1,060± 40	1,057± 38	-25.52±0.91	IAAA-51949
	SB1400	SW1145	炭化材	クリ	1,130± 40	1,131± 38	-20.99±0.92	IAAA-51950
	SB1500	SW1352 1層	炭化材	コナラ節	1,160± 40	1,164± 40	-29.07±0.84	IAAA-51951
	SB3230	P5	木材	ニレ属	1,330± 30	1,331± 31	-30.20±0.60	IAAA-62819
	SB3230	P6	木材	ニレ属	1,310± 30	1,306± 31	-29.33±0.62	IAAA-62820
	11E8区	Ⅻ層（腐植帯B上部）	土壌	－	4,030± 40	4,035± 37	-27.28±0.54	IAAA-62909
西部遺跡Ⅴ	42･43B区	腐植帯A上部	土壌	－	1,990±110	1,994±108	-29.0	IAA-1135
		腐植帯B上部	土壌	－	3,810±120	3,814±118	-29.6	IAA-1136
中部北遺跡	13D5区	Ⅸb層（腐植帯B上部）	土壌	－	4,700±200	4,706±202	-21.2	IAA-1137
		Ⅻ層（腐植帯B下部）	土壌	－	5,470±110	5,471±109	-24.9	IAA-1138

第１表　放射性炭素年代測定結果

試　料　名		補正年代（暦年較正用）（yrBP）		暦年較正年代（cal）											相対比	測定機関code
西部遺跡Ⅱ	SB1400-P6	1,169± 39	σ	cal	AD	780	-	cal	AD	792	cal	BP	1,170	-	1,158	0.098	IAAA-51947
				cal	AD	804	-	cal	AD	895	cal	BP	1,146	-	1,055	0.813	
				cal	AD	925	-	cal	AD	936	cal	BP	1,025	-	1,014	0.089	
			2σ	cal	AD	730	-	cal	AD	735	cal	BP	1,220	-	1,215	0.007	
				cal	AD	772	-	cal	AD	975	cal	BP	1,178	-	975	0.993	
	SB1500-P12	1,161± 41	σ	cal	AD	781	-	cal	AD	790	cal	BP	1,169	-	1,160	0.074	IAAA-51948
				cal	AD	808	-	cal	AD	898	cal	BP	1,142	-	1,052	0.733	
				cal	AD	920	-	cal	AD	945	cal	BP	1,030	-	1,005	0.193	
			2σ	cal	AD	773	-	cal	AD	982	cal	BP	1,177	-	968	1.000	
	SB1500-P44	1,057± 38	σ	cal	AD	903	-	cal	AD	914	cal	BP	1,047	-	1,036	0.125	IAAA-51949
				cal	AD	969	-	cal	AD	1,020	cal	BP	981	-	930	0.875	
			2σ	cal	AD	894	-	cal	AD	929	cal	BP	1,056	-	1,021	0.190	
				cal	AD	932	-	cal	AD	1,027	cal	BP	1,018	-	923	0.810	
	SB1400-SW1145	1,131± 38	σ	cal	AD	883	-	cal	AD	975	cal	BP	1,067	-	975	1.000	IAAA-51950
			2σ	cal	AD	780	-	cal	AD	791	cal	BP	1,170	-	1,159	0.025	
				cal	AD	806	-	cal	AD	990	cal	BP	1,144	-	960	0.975	
	SB1500-SW1352 1層	1,164± 40	σ	cal	AD	780	-	cal	AD	791	cal	BP	1,170	-	1,159	0.085	IAAA-51951
				cal	AD	806	-	cal	AD	897	cal	BP	1,144	-	1,053	0.760	
				cal	AD	922	-	cal	AD	942	cal	BP	1,028	-	1,008	0.156	
			2σ	cal	AD	772	-	cal	AD	980	cal	BP	1,178	-	970	1.000	
	SB3230-P5	1,331± 31	σ	cal	AD	654	-	cal	AD	689	cal	BP	1,296	-	1,261	0.881	IAAA-62819
				cal	AD	752	-	cal	AD	761	cal	BP	1,198	-	1,189	0.119	
			2σ	cal	AD	647	-	cal	AD	721	cal	BP	1,303	-	1,229	0.813	
				cal	AD	740	-	cal	AD	770	cal	BP	1,210	-	1,180	0.187	
	SB3230-P6	1,306± 31	σ	cal	AD	664	-	cal	AD	709	cal	BP	1,286	-	1,241	0.697	IAAA-62820
				cal	AD	747	-	cal	AD	766	cal	BP	1,203	-	1,184	0.303	
			2σ	cal	AD	658	-	cal	AD	730	cal	BP	1,292	-	1,220	0.683	
				cal	AD	735	-	cal	AD	772	cal	BP	1,215	-	1,178	0.317	
	11E08区 Ⅻ層（腐植帯B上部）	4,035± 37	σ	cal	BC	2,617	-	cal	BC	2,610	cal	BP	4,567	-	4,560	0.059	IAAA-62909
				cal	BC	2,581	-	cal	BC	2,543	cal	BP	4,531	-	4,493	0.363	
				cal	BC	2,541	-	cal	BC	2,488	cal	BP	4,491	-	4,438	0.578	
			2σ	cal	BC	2,834	-	cal	BC	2,817	cal	BP	4,784	-	4,767	0.033	
				cal	BC	2,664	-	cal	BC	2,646	cal	BP	4,614	-	4,596	0.024	
				cal	BC	2,637	-	cal	BC	2,470	cal	BP	4,587	-	4,420	0.943	
西部遺跡Ⅴ	42･43B区 腐植帯A上部	1,994±108	σ	cal	BC	159	-	cal	BC	134	cal	BP	2,109	-	2,084	0.073	IAA-1135
				cal	BC	116	-	cal	AD	125	cal	BP	2,066	-	1,825	0.927	
			2σ	cal	BC	356	-	cal	BC	287	cal	BP	2,306	-	2,237	0.042	
				cal	BC	233	-	cal	AD	250	cal	BP	2,183	-	1,700	0.958	
	42･43B区 層腐植帯B上部	3,814±118	σ	cal	BC	2,462	-	cal	BC	2,135	cal	BP	4,412	-	4,085	0.986	IAA-1136
				cal	BC	2,076	-	cal	BC	2,075	cal	BP	4,026	-	4,025	0.005	
				cal	BC	2,069	-	cal	BC	2,065	cal	BP	4,019	-	4,015	0.010	
			2σ	cal	BC	2,574	-	cal	BC	1,935	cal	BP	4,524	-	3,885	1.000	
中部北遺跡	13D5区 IXb層（腐植帯B上部）	4,706±202	σ	cal	BC	3,698	-	cal	BC	3,317	cal	BP	5,648	-	5,267	0.806	IAA-1137
				cal	BC	3,292	-	cal	BC	3,290	cal	BP	5,242	-	5,240	0.004	
				cal	BC	3,273	-	cal	BC	3,266	cal	BP	5,223	-	5,216	0.010	
				cal	BC	3,237	-	cal	BC	3,169	cal	BP	5,187	-	5,119	0.100	
				cal	BC	3,164	-	cal	BC	3,110	cal	BP	5,114	-	5,060	0.080	
			2σ	cal	BC	3,940	-	cal	BC	3,858	cal	BP	5,890	-	5,808	0.033	
				cal	BC	3,815	-	cal	BC	2,917	cal	BP	5,765	-	4,867	0.967	
	13D5区Ⅻ層（腐植帯B下部）	5,471±109	σ	cal	BC	4,453	-	cal	BC	4,230	cal	BP	6,403	-	6,180	0.945	IAA-1138
				cal	BC	4,195	-	cal	BC	4,175	cal	BP	6,145	-	6,125	0.055	
			2σ	cal	BC	4,530	-	cal	BC	4,043	cal	BP	6,480	-	5,993	1.000	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用。
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3）暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第２表　暦年較正結果

β線計数法

塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。試料中に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて、二酸化炭素からアセチレンを合成する。β線計数装置の気体比例計数管で、^{14}C の崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を作製し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中の $\delta^{13}C$ を測定する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568（5,570）年を使用する。測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02［Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer］を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正の際に用いる補正年代は、本来 10 年単位での表記が通例とされるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表記している。暦年較正結果は、σ・2 σ（σは統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲、2 σは真の値が 95%の確率で存在する範囲）の値を示す。なお、表中の相対比（確率分布）とは、σ、2 σの範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

3）結果及び考察

結果を第 1 表に示す。各遺構の柱材や炭化物を対象とした測定結果（補正年代）は、SB1400-P6（柱根）が 1,170 ± 40yrBP、SB1400-SW1145（炭化材）が 1,130 ± 40yrBP、SB1500-P12（柱根）が 1,160 ± 40yrBP、SB1500-P44（柱根）が 1,060 ± 40yrBP、SB1500-SW1352（炭化材）が 1,160 ± 40yrBP、SB3230-P5（柱根）が 1,330 ± 40yrBP、SB3230-P6（柱根）が 1,310 ± 30yrBP である。

これらの補正年代に基づく暦年較正結果（σ）は、SB1400-P6 が calAD780-calAD936、SB1400-SW1145 が calAD883-calAD975、SB1500-P12 が calAD781-calAD945、SB1500-P44 が calAD903-calAD1,020、SB1500-SW1352 が calAD780-calAD942、SB3230-P5 が calAD654-calAD761、SB3230-P6 が calAD664-calAD766 である。

また、西部遺跡及び中部北遺跡の腐植帯を対象とした測定結果（補正年代）は、西部遺跡Ⅱ 11E8 区深堀坑XIX層（腐植帯 B 上部）が 4,030 ± 40yrBP、西部遺跡Ⅴの 42･43B 区 深堀坑（腐植帯 A 上部）が 1,990 ± 110yrBP、同深掘坑（腐植帯 B 上部）が 3,810 ± 120yrBP、中部北遺跡の 13D5 区深掘坑Ⅸ b 層（腐植帯 B 上部）が 4,700 ± 200yrBP、同深掘坑XIII層（腐植帯 B 下部）が 5,470 ± 110yrBP である。

これらの試料の暦年較正結果は、西部遺跡Ⅱの 11E8 区深掘坑XIX層（腐植帯 B 上部）が calBC2,617-calBC2,488、西部遺跡Ⅴの 42･43B 区深掘坑XI① b 層（腐植帯 A 上部）が calBC159-calAD125、同深掘坑XII c 層（腐植帯 B 上部）が calBC2,462-calBC2,065、中部北遺跡の 13D5 区深掘坑Ⅸ b 層（腐植帯 B 上部）が calBC3,698-calBC3,110、同深掘坑XIII層（腐植帯 B 下部）が calBC4,453-calBC4,175 である。

なお、西部遺跡Ⅰでは、腐植帯 A に相当する堆積物から出土した大型植物化石を対象に放射性炭素年代測定を行い、2,960 ± 40yrBP（2A 区XIV層 木片；ハンノキ亜属 calBC1,260-calBC1,094）という値が得られている［パリノ・サーヴェイ 2005a］。

各遺跡の発掘調査成果や既存の縄文時代の年代に関する研究［小林 2008］等から、西部遺跡の腐植帯 B は縄文時代中期後半から後期ごろ、中部北遺跡の腐植帯 B は縄文時代前期ごろの暦年代に対比されることから、これらの堆積層は異なる時期に形成されたと推定される。また、西部遺跡の腐植帯 B の形成時期には、中部北遺跡では自然流路際の微高地に土坑や炭化物集中などの遺構が確認されている［新潟県教育委員会 2008b］ことから、異なる堆積環境であったことも推定される。一方、西部遺跡の腐植帯 A は縄文時代晩期～弥生時代ごろの堆積層と推定される。また、植物遺体層を挟在する堆積物の累重状況や後述する珪藻分析結果などから、本遺跡周辺は弥生時代ごろまでは後背湿地的な環境であったと考えられ、古代集落が立地する微高地の発達はそれ以降であった可能性がある。

C　古環境及び植物資源利用

1）試　　料

試料は、6B8 区、8D20 区、10C3 区、10A19 区で確認した堆積物や古代の掘立柱建物に伴う地床炉や土坑、溝、そして古代及び中世の井戸などから採取した土壌及び水洗選別等によって回収された種実等である。試料の詳細は、各分析結果に示す。

2）分 析 方 法

珪藻分析

試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（珪藻の少ない試料はこの限りではないが、1 プレパラート当たり 50 個体以上の試料については 2 枚検鏡する）。種の同定は、［原口ほか 1998］、［Krammer 1992］、［Krammer & Lange-Bertalot 1986、1988、1991a、1991b］、［渡辺 2005］、［小林ほか 2006］などを参照し、分類体系は［Round *et al.* 1990］に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms；広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の塩分濃度に対する区分は［Lowe 1974］に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に分け、貧塩性種については、更に細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻群集の層位分布図を作成する。また、産出珪藻が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、真塩性種～中塩性種については［小杉 1988］、貧塩性種については［安藤 1990］、陸生珪藻については［伊藤・堀内 1991］、汚濁耐性については、［Asai & Watanabe 1995］、［渡辺 2005］の環境指標種を参考

とする。

花粉分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（花粉の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は 20 μ m 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉群集の散布図として表示する。微粒炭量は、堆積物 1cc 当たりに含まれる個数を一覧表・図として示す。この際、有効数字を考慮し、100 単位として表示する。図中の木本花粉は、木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は、総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、［近藤 2004］の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g 当たりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g 当たりの個数に換算）を求める。結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位的変化を図示する。

灰像分析

植物珪酸体分析と同様の処理を行った後、400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体、さらに、これらを含む珪化組織片を［近藤 2004］の分類に基づき同定、計数する。結果は、検出された灰像とその産状の一覧表で示す。

種実遺体同定・微細物分析

微細植物片分析は、試料 200cc（SW1343 2 層は 190cc、SK2255 は 100cc）を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材などを抽出する。なお、SK2192･SK2255 は、水洗後試料に炭化したイネの穎の破片が多量に確認されたため、径 2mm 以上の状態良好な 100 個程度を抽出にとどめ、種実抽出後の残試料をイネの穎を含む炭化物として容量を求める。SK2235 は､水洗後試料の大半が炭化材のため､

種実、残渣（砂礫・土粒）のみを抽出し、抽出後の炭化材と残渣を 70℃で 48 時間乾燥後、重量を求める。

種実遺体同定は、試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実を抽出する。SX2001-SE3 の 7 層（最下層）は、草本のヒユ科の種子が多量に確認されたため、粒径 1mm の篩を通し、栽培植物や木本種実の回収が見込める篩内（1mm 以上）の試料をすべて抽出する。1mm 未満の試料は、ヒユ科以外の種実をすべて抽出し、抽出後はヒユ科の容量を求める。

種実を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本及び［石川 1994］、［中山ほか 2000］等の図鑑との対照から種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、「－」で結んで表示する。分析後は、種実等を種類ごとに容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

土壌理化学分析

本分析では、本遺跡における土地利用の検証が目的とされたことから、土壌有機物量の指標となる炭素・窒素の測定、さらに、生産力評価に関する養分豊否の指標となる可給態リン酸量・可給態窒素量の測定を行う。全炭素・全窒素は CN コーダー法、可給態リン酸はブレイ第二法、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出－水蒸気蒸留法でそれぞれ行う［土壌環境分析法編集委員会 1997、小川ほか 1989］。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

全炭素・全窒素量

粉砕土試料 500-1,000mg を正確に量り、サンプルボードに充填した後、CN コーダー（ヤナコ分析工業製）に挿入する。試料をキャリアガス（He）気流中で 950℃に加熱燃焼し、発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2 及び N_2 の組成にする。TCD 検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土当たりの全炭素量（T-C%）及び全窒素量（T-N%）を求める。また、全炭素量を全窒素量で除し、C/N（炭素率）を算出する。

可給態リン酸（ブレイ第二法）

風乾細土試料 1.00g を 50ml 遠沈管に秤りとり、抽出液 20ml を加え、室温で 1 分間振とうし、ろ過する。ろ液一定量を試験管に採り、ホウ酸液及び混合発色試薬を加えて分光光度計によりリン酸濃度を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土当たりの可給態リン酸量（P_2O_5mg ／乾土 100g）を求める。

可給態窒素

風乾細土試料 10.00g を 100ml 三角フラスコに量り、pH7.0 リン酸緩衝液 50ml を加え、室温で 1 時間振とうし、ろ過する。ろ液をケルダール分解し、水蒸気蒸留法によって窒素を測定する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土当たりの可給態窒素量（Nmg/ 乾土 100g）を求める。

3）結　　果

珪藻分析

結果を第 3 表、第 15 図に示す。10C3 区のⅩ～ⅪⅠ層、ⅫⅠ層（試料番号 6、8）と 11C23 区ⅫⅠb 層は珪藻化石の産出が少なかったが、それ以外の 5 試料は堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。化石が産出した試料の完形殻の出現率は約 40%程度で、化石の保存状態は不良である。産出分類群数は、合計で 42 属 115 分類群である。以下、地点別に産状を述べる。

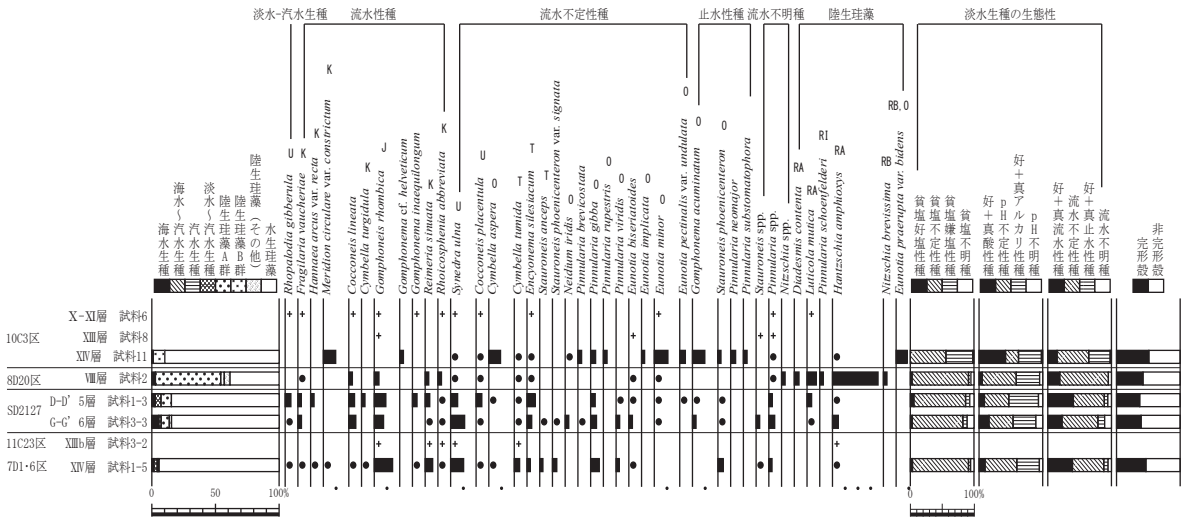
10C3 区

珪藻化石が産出したⅪⅤ層（試料番号 11）は、淡水域に生育する水生珪藻（以下、「水生珪藻」とする）が約 90%と優占する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種と貧塩嫌塩性種、好＋真酸性種、流水不定性種と好＋真止水性種が多産する。主要種は、流水性で中～下流性河川指標種の *Meridion circulae* var. *constrictum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Cymbella aspera*、*Eunotia minor* var. *minor*、止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema acuminatum*、陸生珪藻 B 群で沼沢湿地付着生種の *Eunotia praerupta* var. *bidens* が約 10%産出する。

珪藻化石の少なかったⅫⅠ、Ⅹ～ⅪⅠ層（試料番号 6、8）は、化石の保存が悪く、前試料で産出したような流水性種、流水不定性種、それに海水生種の破片などが産出する。

8D20 区

Ⅷ層上部（試料番号 2）は、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約 60%と高い割合で産出し、水生珪藻は約 40%認められる。主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* が約 35%産出し、同じく陸生珪藻Ａ群の *Luticola mutica*、*Diadesmis contenta* 等を伴う。水生珪藻は特に多産するものはなく、流水性で上流性河川指標種の *Gomphonema rhombica*、中～下流性河川指標種の *Reimeria sinuata*、*Rhoicosphenia abbreviata* 等が認められる。



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

＜環境指標種＞

J:上流性河川指標種, K:中～下流性河川指標種, O:沼沢湿地付着生種, U:広域適応性種, T:好清水性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻

第15図　主要珪藻化石群集の層位分布

分類群	生態性 塩分	pH	流水	環境指標種	10C3区 X-XI層 試料6	XIII層 試料8	XIV層 試料11	8D20区 VIII層 試料2	SD2127 D-D' 5層 試料1-3	G-G' 6層 試料3-3	7D1･6区 XIIIb層 試料3-2	11C23区 XIV層 試料1-5
Centric Diatoms（中心型珪藻類）												
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh				-	-	-	1	1	1	-	-
Coscinodiscus spp.	Euh				1	1	1	1	1	2	-	-
Paralia sulcata (Ehr.)Cleve	Euh			B	1	-	-	-	-	-	-	-
Actinoptychus senarius (Ehr.)Ehrenberg	Euh			A	-	-	-	-	-	2	-	-
Aulacoseira sp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-
Rhizosolenia barboi (Brun)Temp. & Perag.	Euh				-	-	-	-	-	1	-	-
Araphid Pennate Diatoms（無縦溝羽状珪藻類）												
Diatoma hyemalis (Roth)Heiberg	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	1	-
Diatoma mesodon (Ehren.)Kuetzing	Ogh-ind	al-bi	r-bi	K,T	-	-	-	1	1	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	2
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	1	-	-	1	3	3	-	1
Hannaea arcus var. recta (Cleve)M.Idei	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	-	-	-	-	3	-	-	1
Hannaea arcus var. amphioxys (Rhabenhorst)Patrick	Ogh-hob	ind	r-bi	K,T	5	-	1	1	-	-	-	-
Hannaea arcus var. hattoriana (F.Meister)Ohtsuka	Ogh-ind	ind	r-bi	T,J	-	-	-	-	-	-	-	2
Meridion circulae Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	1	-	-	-	-	-
Meridion circulare var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	20	-	-	-	-	1
Synedra inaequalis H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J,K,T	-	-	-	-	2	-	-	1
Synedra ramesi Heribaud	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	-	1	-	-
Synedra ulna (Nitzsch)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	2	2	6	12	10	12
Synedra spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	-	-	-	-	-
Tabellaria fenestrata (Lyngbye)Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	-	2
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	-	2	-	-	2	-	-
Thalassionema hirosakiensis (Kanaya)Schrader	Euh				-	-	-	-	-	-	1	-
Thalassionema nitzschioides (Grun.)Grunow	Euh			A,B	-	-	-	1	-	-	-	2
Monoraphid Pennate Diatoms（単縦溝羽状珪藻類）												
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	3	-	2	-	2	-	1
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	1	-	1	-	-	1
Achnanthidium lapidosum (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-
Achnanthidium minutissimum (Kuetz.)Czarn.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	1
Achnanthidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	1
Cocconeis euglypta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	1	-	-	-	-	-
Cocconeis lineata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	3	5	6	-	2
Cocconeis placentula Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	4	2	5	1	-	1
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	2	1	1	1
Biraphid Pennate Diatoms（双縦溝羽状珪藻類）												
Amphora fontinalis Hustedt	Ogh-Meh	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	1	1	1	-	-
Cymbella affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	-	-	19	-	2	-	-	1
Cymbella japonica Reichelt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	1
Cymbella lanceolata (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	1	-	1	-	-	-
Cymbella tumida (Breb.)Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	2	1	2	1	1	5
Cymbella tumida var. *gracilis* Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	3	-	-	2
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	-	2	-	-	2
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	4	-	-	-	-	-	-
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	-	1	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	1	2	7	4	-	3
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	2	-	-	-	-
Placoneis elginensis var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-
Gomphoneis heterominuta Mayama & Kawashima	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphoneis rhombica (Fricke)Merino et al.	Ogh-ind	ind	r-bi	J	2	1	-	4	10	8	6	17
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	20	-	2	3	-	-
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolek	Ogh-unk	unk	r-ph	T	-	-	-	-	1	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	-	-	1	2	-	2
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	2	-	-
Gomphonema cf. *helveticum* Brun	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	6	-	-	-	-	-
Gomphonema inaequilongum (H.Kobayasi)H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph		1	-	-	-	4	-	-	2
Gomphonema olivaceum var. *minutissimum* Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	3	1	1	2	-	1
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	2
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	2	-	-	1	-	-
Reimeria sinuata (W.Greg.)Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	3	4	1	1	7
Rhoicosphenia abbreviata (C.Agardh)Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	2	-	-	3	1	1	1	1
Diploneis elliptica (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	1	-	-	-	-
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	1
Navicula ariiensis Okuno	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	1	-	-
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	-	-	-	-	-
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	2	-	3
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	1	-	-
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	-	-	5	-	1	2	-	5
Stauroneis phoenicenteron fo. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	-	-	-	-	2	-	4
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	4	-	-	-	3	-	1
Diadesmis contenta (Grun.ex Van Heurck)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	4	-	-	-	-
Diadesmis contenta var. *biceps* (Arnott ex Grunow)Hamilton	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	2	-	-	-	-
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	1	-	-	8	4	1	-	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-ind	ac-il	ind	RA	-	-	-	2	1	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	-	-	1	-	-	-
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-	-
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	-	-	1	-	-	3	-	-
Neidium tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	2	-	-	-	-	-

第3表　珪藻分析結果（1）

分類群	生態性			環境指標種	10C3 区			8D20 区	SD2127		7D1･6 区	11C23 区
									D-D'	G-G'		
					X-XI層	XIII層	XIV層	VIII層	5 層	6 層	XIII b 層	XIV層
	塩分	pH	流水		試料 6	試料 8	試料 11	試料 2	試料 1-3	試料 3-3	試料 3-2	試料 1-5
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	-	-	-	-	-	-	1	-
Diatomella balfouriana (W.Smith)Greville	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia anglica Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	T	-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	1	-	-	-	1	1	-	-
Pinnularia brauniana (Grun.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	-	6	-	-	2	-	-
Pinnularia brevicostata var. *sumatrana* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens var. *elliptica* (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	-	8	-	4	5	-	8
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		-	-	8	-	-	-	-	-
Pinnularia nobilis Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-	-	-	-	1
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	6	-	-	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	3	-	-	-	-
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1	-	-	1	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia subgibba Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	6	-	-	-	-	-
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	2	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	-	-	-	-	2	3	-	3
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	3	1	1	3	5	-	3
管縦溝類												
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	-	-	1	39	2	5	1	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	-	3	-	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	3	-	-	-	-
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	1	-	-	-
Tryblionella plana (W.Sm.)Pelletan	Meh				-	-	-	-	1	-	-	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	-	-	-	5	2	-	2
双管縦溝類												
Surirella minuta Brebisson	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	1	-	-	-	-
短縦溝類												
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	-	-	-	-	-	2	-	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-bi	ind	U	-	-	-	1	1	-	-	1
Eunotia biseriatoides H.Kobayasi,K.Ando & T.Nagumo	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2	-	1	1	3	-	1
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	5	-	-	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	1	-	-
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-hob	ind	ind	O,T	1	-	22	2	2	1	-	-
Eunotia pectinalis var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	9	-	1	-	-	-
Eunotia pectinalis var. *ventralis* (Ehr.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	-	1	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta var. *bidens* Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	-	-	18	-	-	-	-	-
Eunotia pseudotridentula H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	2	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	1	1	1	1	-	-	-
海水生種					2	1	1	3	2	6	1	2
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	1	0	0	0
淡水～汽水生種					1	0	0	0	5	2	0	3
淡水生種					29	20	205	106	102	101	23	113
珪藻化石総数					32	21	206	109	110	109	24	118

＜凡例＞

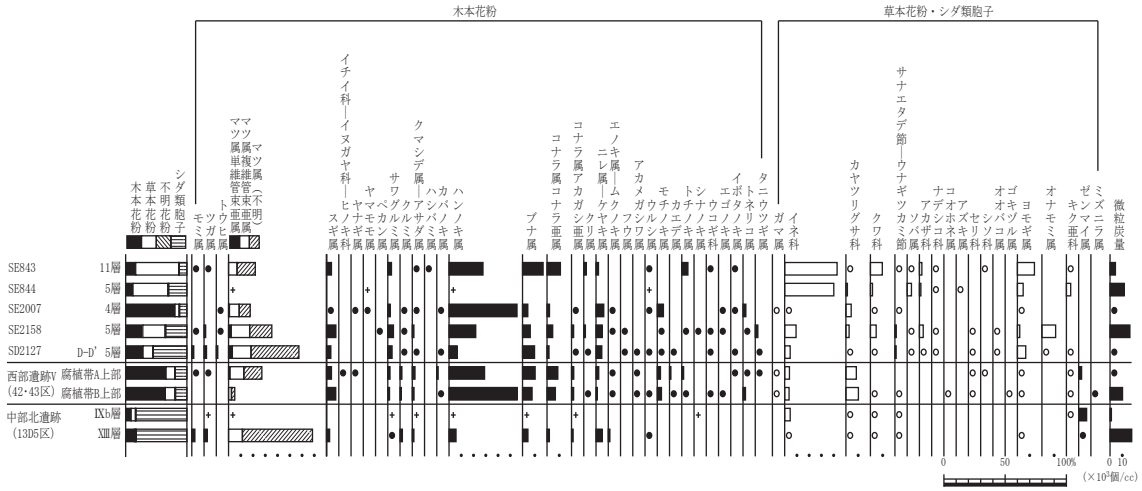
H.R.: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Euh　:　海水生種	al-bi　:　真アルカリ性種	l-bi　:　真止水性種
Meh　:　汽水生種	al-il　:　好アルカリ性種	l-ph　:　好止水性種
Ogh-Meh　:　淡水－汽水生種	ind　:　pH 不定性種	ind　:　流水不定性種
Ogh-hil　:　貧塩好塩性種	ac-il　:　好酸性種	r-ph　:　好流水性種
Ogh-ind　:　貧塩不定性種	ac-bi　:　真酸性種	r-bi　:　真流水性種
Ogh-hob　:　貧塩嫌塩性種	unk　:　pH 不明種	unk　:　流水不明種
Ogh-unk　:　貧塩不明種		

＜環境指標種群＞
A: 外洋指標種，B: 内湾指標種［小杉 1988］、J: 上流性河川指標種，K: 中～下流性河川指標種，O: 沼沢湿地付着生種，P: 高層湿原指標種［安藤 1990］、S: 好汚濁性種，U: 広域適応性種，T: 好清水性種（以上は［Asai & Watanabe 1995］）、R: 陸生珪藻（RA:A 群，RB:B 群，RI: 未区分、［伊藤・堀内 1991］）

第 4 表　珪藻分析結果（2）

SD2127

SD2127 覆土下部に相当する D-D' セクション 5 層（試料番号 3）は、淡水域に生育する水生珪藻が全体の約 80%を占める。これに付随して、淡水～汽水生種や陸生珪藻が少量産出する。淡水性種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、pH 不定性種と好＋真アルカリ性種、流水不定性種と好＋真流水性種が優占ある



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。●○は1%未満、＋は基数が100個体未満の試料について検出した種類を示す。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数で示し、●は1000個以下を示す。

第16図　主要花粉化石群集の層位分布

いは多産する。主要種は、流水性で上流性河川指標種の *Gomphoneis rhombica* が約 10%と多産し、これに次いで中～下流性河川指標種の *Fragilaria vaucheriae*、*Hannaea arcus* var. *recta*、*Cymbella turgidula*、*Reimeria sinuata*、好流水性で付着性の *Cocconeis lineata*、*Gomphonema inaequilongum* 等を伴う。流水不定性種では、付着性の *Synedra ulna*、*Cocconeis placentula*、*Encyonema silesiacum* 等が産出する。

同様に覆土下部に相当する G-G' セクション 6 層（試料番号 3）は、水生珪藻が全体の約 80%を占め、これに付随して海水生種や陸生珪藻が少量産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、pH 不定性種と好＋真アルカリ性種、流水不定性種と好＋真流水性種が優占あるいは多産する。主要種は、流水不定性で付着性の *Synedra ulna* が約 10%産出し、これに次いで流水性で上流性河川指標種の *Gomphoneis rhombica*、流水性で中～下流性河川指標種の *Fragilaria vaucheriae*、好流水性で付着性の *Cocconeis lineata*、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis* 等を伴う。

7D1･6 区・11C23 区

SD2127 覆土下部の壁面を構成するⅫb～ⅩⅤ層のうち、ⅩⅤ層（7D1･6 区）は、水生珪藻が全体の約 95%を占める。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、pH 不定性種と好＋真アルカリ性種、流水不定性種と好＋真流水性種が優占あるいは多産する。主要種は、流水性で上流性河川指標種の *Gomphoneis rhombica* が約 15%産出し、これに次いで中～下流性河川指標種の *Reimeria sinuata*、流水不定性で付着性の *Synedra ulna*、*Cymbella tumida*、沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba*、止水性で沼沢湿地付着生種の *Stauroneis phoenicenteron* 等を伴う。なお、化石の産出の少なかったⅫb 層（11C23 区）は、ⅩⅤ層で産出したような流水指標種や流水不定性種が少量産出する程度である。

花粉分析

結果を第 5 表、第 16 図に示す。図表中で複数の種類を「－」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。基数が 100 個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を＋で表示する。全体的に花粉の産出状況は比較的良好であるが、保存状態はやや不良である。

SE843 11 層・SE844 5 層

いずれも草本花粉の割合が高く、イネ科が多産する。そのほかでは、クワ科、ヨモギ属などを伴う。また、栽培種のソバ属が検出され、SE844 5 層からは栽培種であるアズキ属も認められる。木本花粉は、

分類群	SE843 11層	SE884 5層	SE2007 4層	SE2158 5層	SD2127 D-D' 5層 試料1-3	西部遺跡Ⅴ（42･43B区） 腐植帯A上部	腐植帯B上部	中部北遺跡（13D5区） Ⅸb層	Ⅻ層
木本花粉									
モミ属	1	-	-	1	4	1	-	-	4
ツガ属	1	-	-	3	5	1	-	2	4
トウヒ属	-	-	1	2	3	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	-	1	2	5	8	3	-	-	-
マツ属複維管束亜属	7	5	24	36	39	31	7	-	18
マツ属（不明）	15	10	27	43	100	40	8	4	91
スギ属	4	-	1	18	9	11	22	-	4
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ヤナギ属	-	-	1	-	-	1	-	-	-
ヤマモモ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-
ペカン属	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属	3	-	6	11	9	5	4	1	1
クルミ属	-	-	2	2	2	4	3	-	3
クマシデ属－アサダ属	1	-	1	3	1	6	4	1	2
ハシバミ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	1	-	1	3	1	-	-
ハンノキ属	28	3	167	52	17	79	163	1	9
ブナ属	17	-	13	15	25	28	23	3	7
コナラ属コナラ亜属	11	-	6	11	4	24	20	-	3
コナラ属アカガシ亜属	-	-	1	4	1	5	5	1	2
クリ属	2	-	-	3	1	-	1	-	-
ニレ属－ケヤキ属	2	-	19	12	12	6	3	-	8
エノキ属－ムクノキ属	-	-	3	1	-	2	2	-	2
ヤドリギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
フウ属	-	-	-	1	1	-	-	-	-
キハダ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	-	-	-	-	1	1	1	-	-
ウルシ属	1	1	1	-	2	-	2	-	1
モチノキ属	-	-	15	2	1	7	10	-	-
カエデ属	-	-	-	-	2	3	1	-	-
トチノキ属	5	-	-	1	-	4	1	-	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	3	-	-
シナノキ属	-	-	-	1	-	-	-	1	-
ウコギ科	1	-	-	1	1	-	1	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	4	-	-	-	-
エゴノキ属	-	-	1	1	-	-	1	-	-
イボタノキ属	1	-	1	-	1	1	-	-	-
トネリコ属	-	-	7	2	-	2	6	-	-
タニウツギ属	-	-	-	5	2	1	-	-	-
草本花粉									
ガマ属	-	-	1	-	-	3	1	-	-
イネ科	261	69	3	79	40	16	16	7	10
カヤツリグサ科	4	2	16	22	8	35	46	1	4
クワ科	59	3	2	40	4	-	1	1	2
ギシギシ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イブキトラノオ節	-	-	-	10	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	2	-	1	9	9	-	1	1	5
ソバ属	1	6	-	2	1	-	-	-	-
アカザ科	12	2	-	26	2	-	-	-	-
ナデシコ科	3	1	-	2	5	-	-	-	-
コオホネ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カラマツソウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アズキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミソハギ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
セリ科	-	-	-	4	2	1	1	-	-
シソ科	1	-	-	-	-	1	-	-	-
オオバコ属	-	-	-	4	1	-	-	-	-
ゴキヅル属	-	-	-	-	-	-	2	-	-
ツリガネニンジン属	1	-	-	-	1	-	-	-	-
ヨモギ属	85	8	2	16	61	2	1	-	1
オナモミ属	-	-	-	95	7	-	-	-	-
キク亜科	1	6	-	-	1	1	1	1	-
タンポポ亜科	-	-	-	1	1	-	-	-	-
不明花粉	3	2	2	8	8	2	4	1	4
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ゼンマイ属	-	-	-	-	-	10	-	10	2
ミズニラ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
他のシダ類胞子	79	52	45	295	493	69	83	119	916
合　計									
木本花粉	101	21	301	238	256	272	293	14	159
草本花粉	430	99	25	312	145	59	72	11	22
不明花粉	3	2	2	8	8	2	4	1	4
シダ類胞子	79	52	45	295	494	79	84	129	918
総計（不明を除く）	610	172	371	845	895	410	449	154	1099
微粒炭量［個/1cc］	4400	11500	100	16200	1000	1100	17700	1000	10200

第5表　花粉分析結果

SE843 11 層ではハンノキ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属などが多く産出し、スギ属、サワグルミ属、トチノキ属等を伴う。SE844 5 層では木本花粉の産出状況が悪いものの、マツ属、ハンノキ属等が検出される。微粒炭量は、SE843 11 層が約 4,400 個 /cc、SE844 5 層が約 11,500 個 /cc である。

SE2007 4 層

木本花粉が優占する。木本花粉ではハンノキ属が最も多く産出し、次いでマツ属を伴う。そのほかでは、ニレ属－ケヤキ属、モチノキ属、ブナ属等が認められる。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科、クワ科、ヨモギ属等が産出する。微粒炭量は約 100 個 /cc である。

SE2158 5 層

木本花粉、草本花粉、シダ類胞子が同程度の割合で産出する。木本花粉ではマツ属、ハンノキ属が多く産出し、スギ属、サワグルミ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科、オナモミ属が多く産出し、カヤツリグサ科、クワ科、アカザ科、ヨモギ属、ソバ属等が認められる。微粒炭量は約 16,200 個 /cc である。

SD2127G-G´5 層（試料番号 3）

木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉ではマツ属が優占し、ブナ属、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、スギ属、サワグルミ属等を伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属等が認められ、栽培種であるソバ属もわずかに検出される。微粒炭量は約 1,000 個 /cc である。

西部遺跡Ⅴ（42･43B 区 深掘坑）

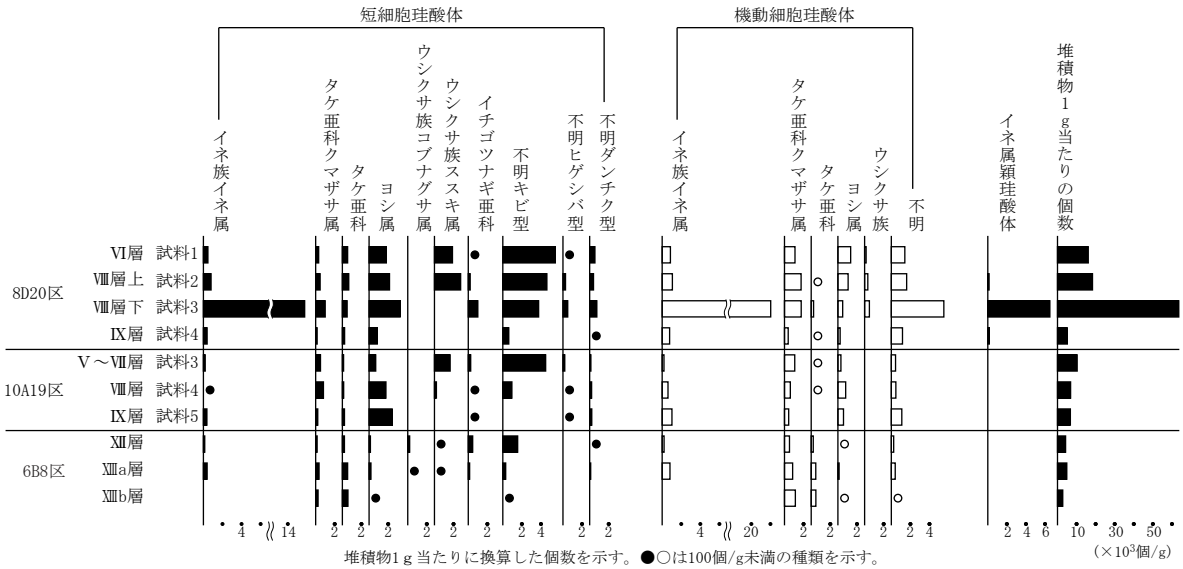
腐植帯 A 上部・腐植帯 B 上部の 2 試料は、いずれも花粉化石の産出状況、保存状態が良好である。腐植帯 B 上部では木本花粉が多産し、ハンノキ属が優占する。このほかにマツ属、スギ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、モチノキ属等を伴う。腐植帯 A 上部も同様に木本花粉が優占し、ハンノキ属やマツ属が多産する。このほかに、スギ属やブナ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、モチノキ属等を伴う。草本花粉は 2 試料とも類似し、カヤツリグサ科が最も多く産出し、イネ科、ガマ属、ゴキヅル属、ヨモギ属等が認められる。微粒炭量は、腐植帯 B 上部が約 17,700 個 /cc、同 A 上部が約 1,100 個 /cc である。

中部北遺跡（13D5 区）

腐植帯 B 下部に相当するⅫ層と上部に相当するⅨ b 層は、いずれも花粉化石の保存状態は不良であり、産出状況も良好とは言えない。Ⅻ層は、かろうじて解析に有効な個体数が得られたが、シダ類胞子が多産する。花粉化石では木本花粉が優占し、マツ属が多産する。このほかに、モミ属やツガ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。草本花粉は少なく、イネ科やカヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属が 1 ～ 10 個程度認められるのみである。一方、Ⅸ b 層は、花粉化石の産出状況が悪く、木本花粉ではツガ属やマツ属、ハンノキ属、ブナ属が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節等が 1 ～ 7 個体検出されるのみである。微粒炭量は、Ⅻ層が約 10,200 個 /cc、Ⅸ b 層が約 1,000 個 /cc である。

植物珪酸体分析

結果を第 6 表、第 17 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点の産状を述べる。



第17図　植物珪酸体含量の層位的変化

（個/g）

	8D20区				10A19区			6B8区		
	Ⅵ層	Ⅷ層上	Ⅷ層下	Ⅸ層	Ⅴ～Ⅶ層	Ⅷ層	Ⅸ層	Ⅻ層	ⅫIIIa層	ⅫIIIb層
分類群	試料1	試料2	試料3	試料4	試料3	試料4	試料5			
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	500	800	15,800	400	200	<100	400	100	400	-
タケ亜科クマザサ属	300	500	1,000	200	500	800	200	200	400	300
タケ亜科	600	700	500	200	100	100	200	200	600	600
ヨシ属	1,800	2,100	3,300	900	700	1,800	2,400	100	200	<100
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	200	<100	-
ウシクサ族ススキ属	1,900	2,700	-	-	1,600	200	-	<100	<100	-
イチゴツナギ亜科	<100	200	1,000	-	300	<100	<100	500	100	-
不明キビ型	5,500	4,600	3,800	600	4,500	1,000	-	1,600	300	<100
不明ヒゲシバ型	<100	300	500	-	200	<100	<100	-	-	-
不明ダンチク型	600	400	800	<100	100	200	200	<100	100	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	900	1,100	22,000	800	200	600	1,000	200	800	-
タケ亜科クマザサ属	1,100	1,700	1,800	400	1,100	600	400	500	900	1,100
タケ亜科	-	<100	300	<100	<100	<100	-	200	500	500
ヨシ属	1,300	1,100	500	200	300	800	600	<100	100	<100
ウシクサ族	200	300	500	-	-	-	-	-	-	-
不明	1,400	1,600	5,500	1,200	400	500	1,100	200	400	<100
珪化組織片										
イネ属穎珪酸体	-	100	6,500	200	-	-	-	-	-	-
合　計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	11,200	12,300	26,500	2,300	8,200	4,300	3,600	3,000	2,200	900
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,900	5,900	30,500	2,700	2,100	2,600	3,200	1,200	2,700	1,800
珪化組織片	0	100	6,500	200	0	0	0	0	0	0
総　計	16,100	18,300	63,600	5,200	10,300	6,900	6,700	4,200	4,900	2,800

第6表　植物珪酸体含量

8D20 区

Ⅵ層～Ⅸ層（試料番号 1 ～ 4）の珪化組織片を含む植物珪酸体含量は約 5,200 ～ 63,600 個 /g であり、Ⅷ層下部で最も含量が高い。これらの試料からは、栽培植物のイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。イネ属を除く分類群では、クマザサ属やヨシ属及びススキ属を含むウシクサ族の含量が高い。

栽培植物のイネ属は、各試料から検出される。植物珪酸体含量は、Ⅷ層下部（試料番号 3）で極めて高く、短細胞珪酸体が約 15,800 個 /g、機動細胞珪酸体が約 22,000 個 /g、籾殻に形成される穎珪酸体が約 6,500 個 /g である。なお、これらの植物珪酸体中には、短細胞列や機動細胞列などの珪化組織片として認められるものも多い。このほかの試料の植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体が約 400 ～ 1,000 個 /g、

機動細胞珪酸体が約 800 ～ 1,100 個 /g と、Ⅷ層下部と比べ極めて含量が低い。

10A19 区

Ⅴ～Ⅸ層（試料番号 3 ～ 5）の植物珪酸体含量は、約 6,700 ～ 10,300 個 /g であり、Ⅴ～Ⅶ層（試料番号 3）で最も高い。これらの試料からは、栽培植物のイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。イネ属を除く分類群では、ヨシ属の含量がやや高いが上位に向かって含量が減少する。また、Ⅴ～Ⅶ層（試料番号 3）では、ススキ属の短細胞珪酸体含量が増加する。

栽培植物のイネ属は、各試料から検出される。植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体が 100 個 /g 未満～約 400 個 /g、機動細胞珪酸体が約 200 ～ 1,000 個 /g である。

6B8 区

Ⅻ～ⅩⅢｂ層の植物珪酸体含量は、約 2,800 ～ 4,900 個 /g であり、前述の 2 地点（8D20 区、10A19 区）と比較しても全体的に含量が低い。これらの試料からは、栽培植物のイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナクサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが検出される。イネ属を除く分類群は、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立つほかは概して含量が低い。

イネ属は、Ⅻ層及びⅩⅢａ層から検出される。植物珪酸体含量は、短細胞珪酸体が約 100 ～ 400 個 /g、機動細胞珪酸体が約 200 ～ 800 個 /g であり、ⅩⅢａ層でやや含量が高くなる傾向にある。

灰像分析

結果を第 7 表に示す。Ⅷ層遺構の SB1500 内に存在する土坑 3 基（SK2192、SK2235、SK2255）の炭化物層からは、いずれも栽培植物のイネ属に由来する灰像が検出されている。検出状況は、各土坑とも籾殻に形成される穎珪酸体が多く確認される。また、葉部の形成される短細胞列も各土坑から検出され、SK2255 では機動細胞列も検出される。

分類群	SB1500		
	SK2192	SK2235	SK2255
	2 層	2 層	2 層
イネ属穎珪酸体	＋＋＋	＋＋	＋＋
イネ属短細胞列	＋	＋	＋
イネ属機動細胞列	－	－	＋
想定される種類	稲籾殻	稲籾殻	稲籾殻
	稲藁	稲藁	稲藁

＜産出状況＞＋＋＋：非常に多い，＋＋：多い，＋：検出，－：非検出

第 7 表　灰像分析結果

種実分析・微細物分析

結果を第 8･9 表に示す。木本 16 分類群、草本 42 分類群の種実が検出され、栽培植物ではモモ、イネ、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）、キビ（近似種）、コムギ、アサ、マメ類、エゴマを含むシソ属と、栽培種の可能性が高いナス科が確認された。以下に、試料別の検出状況を記す。

土壌試料の検出状況

・SB1400-SW1076 1 層

同定可能な種実は検出されず、炭化材や動物遺存体、高師小僧（褐鉄鉱）などが確認された。

・SB1500

SW1343 の 2 層からは、栽培植物のイネの炭化した穎破片が 53 個と、後代からの混入の可能性が高いイネ科とキク科の果実が各 1 個検出された。4 層からは、同定可能な種実は検出されず、炭化材や動物遺存体、高師小僧（褐鉄鉱）などが確認された。

SK2192･SK2235･SK2255 は、炭化物を主体とし、多量のイネの穎や胚乳、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）、

キビ（近似種）、マメ類などの栽培植物の炭化種実が確認された。栽培植物以外は草本のみの種類構成であり、ヘラオモダカ、オモダカ科、ホタルイ属などの水生植物や、カヤツリグサ科、タデ属などの炭化種実が確認された。SK2192 はカヤツリグサ科が特に多い。種実以外では、SK2235 から多量の炭化材が検出された。

・SE843 11 層

栽培植物は、イネの穎 21 個（3 個炭化）、アサ 2 個、マメ類の炭化種子 1 個、シソ属 8 個が検出された。そのほかに、落葉高木のブナ、落葉低木のタラノキ、落葉または常緑のツツジ科各 1 個、落葉低木のタニウツギ属 12 個と、草本 20 分類群（オモダカ属、オモダカ科、スブタ、エノコログサ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ツユクサ、イボクサ、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、ヒユ科、ナデシコ科、カタバミ属、エノキグサ、ウド、トウバナ属、ナス科、タカサブロウ）187 個が検出され、オモダカ属、オモダカ科、スブタ、ホタルイ属、イボクサなどの水生植物や、タカサブロウなどの湿った場所に生育する分類群が確認された。

・SE844 5 層

栽培植物は、イネ、アワ近似種、アワ－ヒエ、コムギの炭化胚乳各 1 個、イネの炭化穎 19 個、アサ 1 個、マメ類の炭化種子 1 個が検出された。そのほかに、落葉低木のタニウツギ属 3 個、ニワトコ 1 個、人里植物に属する草本 5 分類群（ウキヤガラ近似種、カヤツリグサ科、アカザ科、スベリヒユ科、ナス科）32 個が検出された。

・SE2007 4 層

落葉低木のニワトコ 1 個が検出された。

・SE2158 5 層

栽培植物は、イネの穎 30 個（8 個炭化）が検出された。このほかに、落葉低木のタニウツギ属、ニワトコ各 1 個と、人里植物に属する草本 10 分類群（エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ属、ナス科）68 個が検出され、エノコログサ属 1 個には炭化が認められる。

単体試料の検出状況

・SX2001-SE1

栽培植物のモモの核破片 1 個と、落葉高木のオニグルミの核破片 1 個、トチノキの種子 248 個（完形 62 個、破片 184 個、種子内部の胚の破片 2 個）の計 250 個が検出された。

・SX2001-SE3

栽培植物は、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）、アサ、マメ類、エゴマ、ナス科が確認された。栽培植物以外では、木本種実が検出され、伐採地や崩壊地や林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する中・低木類（クワ属、アカメガシワ、イヌザンショウ属、クサギ、ニワトコ）や籐本類（サルナシ近似種、ブドウ属、ブドウ科）が確認された。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が多く、水生植物のオモダカ科、ウキヤガラ近似種、ホタルイ属、そのほかのカヤツリグサ科、カナムグラ、イシミカワ（近似種）、サナエタデ（近似種）、イヌタデ（近似種）、タデ属、アカザ科、ヒユ科、ナデシコ科、スミレ属、イヌコウジュ属が確認された。このうち、7 層ではヒユ科（約 5cc）、サナエタデ（近似種）、イヌタデ（近似種）、イシミカワ（近似種）を含むタデ属（287 個）が多量に検出された。

・SE2158

落葉高木のエゴノキ属の種子 3 個が検出された。

				SB1400	SB1500								
				SW1076	SW1343		SK2192	SK2235	SK2255	SE843	SE844	SE2007	SE2158
分類群	部位	状態		1層	2層	4層	2層	2層	2層	11層	5層	4層	5層
栽培植物													
モモ	核	半分		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ	胚乳	完形	炭化	-	-	-	54	6	22	-	1	-	-
		破片	炭化	-	-	-	44	6	23	-	-	-	-
	胚乳・穎	完形	炭化	-	-	-	27	-	49	-	-	-	-
		破片	炭化	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
	穎	破片		-	-	-	-	-	-	18	-	-	22
		破片	炭化	-	53	-	多量	85	多量	3	19	-	8
		塊状	炭化	-	-	-	多量	-	多量	-	-	-	-
							1cc		1.5cc				
アワ近似種	胚乳・穎	完形	炭化	-	-	-	-	-	11	-	1	-	-
アワ－ヒエ	胚乳	完形	炭化	-	-	-	2	-	5	-	1	-	-
ヒエ近似種	胚乳・穎	完形	炭化	-	-	-	85	1	26	-	-	-	-
ヒエ－キビ	胚乳・穎	完形	炭化	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
キビ近似種	胚乳・穎	完形	炭化	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-
コムギ	胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アサ	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	2	1	-	-
マメ類	種子	破片	炭化	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-
シソ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	8	-	-	-
エゴマ	果実	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他：木本													
オニグルミ	核	半分		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブナ	殻斗	破片		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
クワ属	種子	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サルナシ近似種	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	種子	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イヌザンショウ属	核	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胚	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ科	種子	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タラノキ	核	破片		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ツツジ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
エゴノキ属	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クサギ	核	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニワトコ	核	完形		-	-	-	-	-	-	-	1	1	1
タニウツギ属	種子	完形		-	-	-	-	-	-	12	3	-	1
その他：草本													
オモダカ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ヘラオモダカ	果実	完形	炭化	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
オモダカ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
			炭化	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
スブタ	種子	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
エノコログサ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	7	-	-	-
エノコログサ属?	果実	破片	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ科	果実	完形		-	1	-	-	-	-	44	-	-	4
ウキヤガラ近似種	果実	完形		-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
ホタルイ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
			炭化	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
カヤツリグサ科	果実	完形		-	-	-	-	-	5	34	2	-	3
ツユクサ	種子	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イボクサ	種子	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カナムグラ	種子	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イシミカワ近似種	果実	破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ近似種	果実	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ近似種?	果実	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イヌタデ近似種	果実	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	果実	完形		-	-	-	-	-	3	13	-	-	6
		破片		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	8	19	-	10
ヒユ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	22	-	-	36
スベリヒユ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	6	-	-
ナデシコ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	38	-	-	2
アブラナ科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カタバミ属	種子	完形		-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
エノキグサ	種子	完形		-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
スミレ属	種子	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウド	核	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
チドメグサ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
イヌコウジュ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウバナ属	果実	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ナス科	種子	完形		-	-	-	-	-	-	1	3	-	1
タカサブロウ	果実	完形		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
オナモミ属	総苞	完形		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク科	果実	完形		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
炭化物（イネ穎含む）			径2mm以上	-	-	-	4.5cc	-	2cc	-	-	-	-
			径2-1mm	-	-	-	10cc	-	8cc	-	-	-	-
			径1-0.5mm	-	-	-	15cc	-	13cc	-	-	-	-
炭化材			径2mm以上	-	-	-	3cc	50.78g	1cc	-	-	-	-
			径2-0.5mm	-	-	-		3.03g		-	-	-	-
			-	<0.01g	0.02g	<0.01g	-	-	-	-	-	-	-
動物遺存体				0.04g	0.25g	0.05g	-	-	-	-	-	-	-
昆虫				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
土器				-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
分析残渣（砂礫など）				-	-	-	-	0.31g	-	-	-	-	-
分析量（cc）				200cc	190cc	200cc	200cc	200cc	100cc	200cc	200cc	200cc	200cc

第8表　種実遺体同定・微細植物片分析結果（土壌試料）

			SX2001												
			SE1				SE3				SE2158	SE3220			
分類群	部位	状態	10層	11層	12層	-	5層	6層	7層 ≧1mm	7層 <1mm		2-7/10 -12層	8･9･ 14層	15層	16層
栽培植物															
モモ	核	半分	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ	胚乳	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胚乳･穎	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	穎	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		塊状 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アワ近似種	胚乳･穎	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
アワ－ヒエ	胚乳	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ヒエ近似種	胚乳･穎	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヒエ－キビ	胚乳･穎	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ近似種	胚乳･穎	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コムギ	胚乳	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アサ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	-	-
		破片	-	-	-	-	-	1	1	-	-	4	5	-	-
マメ類	種子	破片 炭化	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-
シソ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴマ	果実	完形	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ナス科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
その他：木本															
オニグルミ	核	半分	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブナ	殻斗	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ属	種子	破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サルナシ近似種	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イヌザンショウ属	核	完形	-	-	-	-	2	2	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	3	3	6	-	-	-	-	-	-
トチノキ	種子	完形	20	2	1	39	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	37	6	14	127	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胚	破片	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属	種子	完形	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
ブドウ科	種子	破片	-	-	-	-	2	-	7	-	-	-	-	-	-
タラノキ	核	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エゴノキ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クサギ	核	完形	-	-	-	-	2	1	-	-	-	1	2	8	1
		破片	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-
ニワトコ	核	完形	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
タニウツギ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他：草本												-	-	-	-
オモダカ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヘラオモダカ	果実	完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
		完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スブタ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノコログサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノコログサ属?	果実	破片 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウキヤガラ近似種	果実	完形	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	1	1	-
ホタルイ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
		完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	果実	完形	-	-	-	-	1	-	20	11	-	-	-	-	-
		完形 炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツユクサ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボクサ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カナムグラ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
イシミカワ近似種	果実	破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	2
サナエタデ近似種	果実	完形	-	-	-	-	3	1	89	-	-	-	-	2	-
サナエタデ近似種?	果実	完形	-	-	-	-	5	1	3	-	-	-	-	2	-
		破片	-	-	-	-	42	7	97	-	-	-	-	18	-
イヌタデ近似種	果実	完形	-	-	-	-	3	-	9	-	-	-	-	9	-
		破片	-	-	-	-	1	1	2	-	-	-	-	1	-
タデ属	果実	完形	-	-	-	-	8	-	57	20	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	4	-	9	-	-	-	-	-	-
アカザ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	3	43	-	-	-	268	-
		完形												0.2cc	
ヒユ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	25	多量	-	-	-	-	-
		完形								5cc					
スベリヒユ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-
アブラナ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カタバミ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキグサ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スミレ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	4	81	-				
ウド	核	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
チドメグサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イヌコウジュ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	-				
トウバナ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タカサブロウ	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オナモミ属	総苞	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
キク科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
			-	-	-	-	-	-	1cc	5.2cc	-	-	-	-	-

第9表　種実遺体同定結果（単体試料）

・SE3220

栽培植物は、アサが 17 個確認された。栽培植物以外は、木本はエゴノキ属とクサギが確認された。草本は、イシミカワ（近似種）、サナエタデ（近似種）、イヌタデ（近似種）、アカザ科、オナモミ属、水生植物のウキヤガラ近似種などが確認された。このうち、15 層ではアカザ科（268 個；約 0.2cc）が多量に検出された。

種実の記載

種実の状態は比較的良好で、栽培植物のイネの胚乳･一部の穎、アワ（近似種）、ヒエ（近似種）、キビ（近似種）、コムギ、マメ類と、一部の草本種実（ヘラオモダカ、オモダカ科、エノコログサ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科）には炭化が認められる。以下に、主要な分類群の形態的特徴等を記す。

＜栽培植物＞

・モモ（*Prunus persica Batsch*）　バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰褐色、長さ 2.7cm、幅 2.1cm 程度のやや偏平な広楕円体。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1 本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。破片は縫合線に沿って半分に割れている。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い凹みがあり、全体として粗いしわ状に見える。内面はやや平滑で、1 個の種子（仁）が入る長さ 1.9cm、幅 1.2cm 程度のやや偏平で頂部が尖る広卵体の凹みがある。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳と胚乳を包む穎（果）が検出された。多量の穎の破片が密着した塊状炭化物も確認された。穎の一部は淡灰褐色、そのほかは炭化しており黒色、やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ 4 ～ 5.5mm、幅 2.5 ～ 3.5mm、厚さ 1.5mm 程度で、基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2 ～ 3 本の隆条が縦列し、穎が付着する個体が多く確認される。

穎（果）は、長さ 6 ～ 7.5mm、幅 3 ～ 4mm、厚さ 2mm 程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈を持ち、共に舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲籾を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・アワ近似種（*Setaria* cf. *italica*（L.）P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

穎（果）が付着した胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ 1.5mm、幅 1.5mm、厚さ 1mm 程度の半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。胚乳は基部正中線上に胚の凹みがあり、表面はやや平滑。

・ヒエ近似種（*Echinochloa* cf. *utilis* Ohwi et Yabuno）　イネ科ヒエ属

穎（果）が付着した胚乳が確認された。炭化しており黒色、長さ 2.5 ～ 3mm、幅 1.5 ～ 2mm、厚さ 1 ～ 1.7mm 程度の狭卵～半偏球体で背面は丸みがあり腹面はやや平ら。果皮は薄く、表面は平滑で微細な網目模様が縦列する。表面に光沢がある個体も見られる。胚乳は基部正中線上に胚の凹みがあり、表面はやや平滑。

・キビ近似種（*Panicum* cf. *miliaceum* L.）　イネ科キビ属

穎（果）が付着した胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ 2.3mm、幅 2mm、厚さ 1.5mm 程度のやや偏平な広卵体で、背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。表面はやや平滑。

果皮は薄く、表面は平滑で微細な網目模様が縦列する。

アワ、ヒエ、キビの同定は、走査型電子顕微鏡下による内外穎の観察で判別可能とされる［松谷1980、2000 など］が、実体顕微鏡下での観察による厳密な判別は難しく、周辺域に生育していた可能性があるほかのイネ科野生種との厳密な区別も困難である。今回の調査では、まとまった検出量が確認された点や、いずれも炭化した状態であったことから、栽培種に由来する可能性が高いと判断し、果皮（穎）が確認される個体をアワ近似種、ヒエ近似種、径 2mm 以上の大型胚乳をキビ近似種としている。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ 3.5mm、径 2.2mm 程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く凹む。表面は焼き膨れて発泡し、両側面を欠損する。

・アサ（*Cannabis sativa* L.）　クワ科アサ属

種子が検出された。暗灰褐色、長さ 3 ～ 4.5mm、幅 3 ～ 3.5mm、厚さ 2.5mm 程度のいびつな広倒卵体。縦方向に一周する稜に沿って半分に割れた破片も見られる。両端は切形で、頂部に淡灰褐色、径 1mm 程度の楕円形の臍点がある。種皮表面は葉脈状網目模様があり、断面は柵状。

・マメ類（*Leguminosae*）　マメ科

種子の破片が検出された。炭化しており黒色、長さ 4mm、幅 3.5mm、厚さ 2mm 程度のやや偏平な長楕円体。破片は子葉の合わせ目に沿って半分に割れている。種皮は薄く表面はやや平滑。子葉内面の幼痕や初生葉は不明瞭。子葉の合わせ目上にある細長い長楕円形の臍は確認されない。

・シソ属（*Perilla*）　シソ科

果実が検出された。灰褐色、炭化個体は黒色。倒広卵体。径 1.8 ～ 2.1mm 程度と、エゴマ（P. frutescens（L.）Britt. var. *japonica* Hara）と思われる大型個体を含む。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。なお、径 1.6mm 未満の果実を野生種のイヌコウジュ属（*Mosla*）としている。

・ナス科（*Solanaceae*）

種子が検出された。灰褐色、いびつな腎臓形で偏平。長さ 2.8mm、幅 3mm 程度と大型であることから、ナス（*Solanum melongena* L.）などの栽培種に由来する可能性が高いことから、野生種に由来する可能性が高い径 2mm 以下の小型種子と区別している。種子は基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍を中心として同心円状に発達する。

＜その他：木本＞

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。灰褐色、長さ 3cm、径 2.6cm 程度の広卵体。頂部は尖る。破片は 1 本の明瞭な縦の縫合線に沿って半分に割れている。核は木質、硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内面は平滑で、縫合線に沿って半分に割れた面の正中線両側には子葉が入る 2 つの大きな凹みがある。

・ブナ（*Fagus crenata* Blume）　ブナ科ブナ属

殻斗の破片が検出された。灰褐色、完形ならば卵状楕円体。破片は縦に 4 裂した 1 片で、長さ 1cm、幅 9mm、厚さ 2 ～ 3mm 程度のやや偏平な卵状楕円体。外面は刺状突起が密布するが、柔らかいため突起頂部を欠損する。内面はやや平滑で微細な縦筋がある。

・クワ属（*Morus*）クワ科

種子が検出された。灰褐色、長さ 2mm、径 1.5mm 程度の三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。一辺が鋭利で、基部に爪状突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。本地域に分布するクワ属は、ヤマグワ（*M. australis* Poiret）と栽培種のマグワ（*M. alba* L.）があるが、種子の実体顕微鏡下観察による両種の判別は困難であることからクワ属にとどめている。

・サルナシ近似種（*Actinidia* cf. *arguta*（Sieb. et Zucc.）Planchon ex Miquel）マタタビ科マタタビ属

種子が検出された。黒褐色、長さ 2.5mm、幅 1.3mm 程度の両凸レンズ状楕円体。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には円～楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

・アカメガシワ（*Mallotus japonicus*（Thunb.）Mueller- Arg.）トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。灰～黒褐色、完形ならば径 4mm 程度のいびつな球体で基部にＹ字形の稜がある。破片は径 2mm 程度。種皮は硬く、表面は瘤状突起が密布する。

・イヌザンショウ属（*Fagara*）ミカン科

核（内果皮）が検出された。黒褐色、長さ 4mm、幅 3mm、厚さ 1.5mm 程度のやや偏平な非対称広倒卵体。腹面正中線上に広線形の臍がある。内果皮は硬く、表面にやや深く大きな網目模様がある。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　トチノキ科トチノキ属

種子の完形、破片と種子内部の胚の破片が検出された。径 2.5 ～ 3.2cm 程度の偏球体で、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、割れ方は不規則。種子内に残存する胚は木質で、基部に臍がある。表面はやや平滑。

・ブドウ属（*Vitis*）　ブドウ科

種子が検出された。灰～黒褐色、長さ 4mm、径 3.5mm 程度の広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く凹んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は柵状。なお、種の同定根拠となる背面が欠損した破片を、ブドウ科（Vitaceae）とした。

・タラノキ（*Aralia elata*（Miq.）Seemann）　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）の破片が検出された。灰褐色、長さ 1.5mm、幅 1mm 程度の半月形でやや偏平。腹面はほぼ直線状で、片端の突起を欠損する。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

・ツツジ科（Ericaceae）

種子が検出された。赤褐色。長さ 1.2mm、幅 0.8mm 程度のいびつな長楕円形で偏平。種子本体は狭楕円形で偏平。縁には膜状の翼がある。翼表面には縦長の網目模様が配列する。

・エゴノキ属（*Styrax*）　エゴノキ科

種子が検出された。灰褐色、長さ 1.1cm、径 6.5 ～ 7mm 程度の卵体。頂部から基部にかけて 3 本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で、径 3mm 程度の灰褐色で粗面の着点がある。種皮は硬く断面は柵状。表面には微細な粒状網目模様がある。

・クサギ（*Clerodendron trichotomum* Thunb.）　クマツズラ科クサギ属

核（内果皮）が検出された。灰褐色、長さ 5 ～ 7mm、幅 4 ～ 5mm、厚さ 3mm 程度の広卵体で側面観は三日月形。背面は丸みがあり、腹面は平らで腹面方向にやや湾曲する。腹面の一端には裂け目状の発芽口がある。内果皮は厚く硬い。背面には大きな網目模様があり、腹面表面はやや平滑。

・タニウツギ属（*Weigela*）　スイカズラ科

種子が検出された。淡 - 赤褐色、長さ 1.3mm、幅 0.7mm 程度のやや偏平な両凸レンズ状長楕円体。頂部に 2 稜角があり、縁の翼を欠損する。種皮表面には円～楕円形の凹みによる微細な網目模様がある。

・ニワトコ（*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana*（Miq.）Hara）スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡灰褐色、長さ 2.5mm、幅 1.3mm 程度のやや偏平な広倒卵体。背面は丸みがあり、腹面の正中線上は鈍稜をなす。基部はやや尖り、腹面正中線上に小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

＜その他 : 草本＞

・オモダカ属（*Sagittaria*）　オモダカ科

果実が検出された。灰黄褐色、長さ 2.4mm、幅 2mm 程度のいびつな倒卵形で偏平。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けて見られる。種子は径 1mm 程度の倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・オモダカ科（Alismataceae）

種子が検出された。淡～黒褐色、長さ 1.5 ～ 2mm、幅 1mm 程度の倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。種皮表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・スブタ（*Blyxa echinosperma*（Clarke）Hooker）　トチカガミ科スブタ属

種子が検出された。淡灰褐色、長さ 1.2mm、径 0.8mm 程度の線状長楕円体。両端から伸びる尾状突起を欠損する。種皮表面には数本の低い突起群が縦列する。

・エノコログサ属（*Setaria*）　イネ科

果実が検出された。淡～黄褐色、炭化個体は黒色。長さ 2.3mm、径 1 ～ 1.4mm 程度の狭卵～半偏球体で、背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

SE2158 5 層から検出された炭化果実 1 個は、栽培種のアワの可能性があるが、幅が細いため（1mm 程度）、本報告ではエノコログサ属にとどめている。

・イネ科（Gramineae）

果実が確認された。栽培種やエノコログサ属以外の形態上差異のある複数種を一括している。果実は淡 - 茶褐色、長さ 2 ～ 3mm、径 1 ～ 1.5mm 程度の狭卵 - 半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。

・ウキヤガラ近似種（*Bolboschoenus* cf. *fluviatilis*（Torr.）T.Koyama subsp. *yagara*（Ohwi）T.Koyama）
カヤツリグサ科ウキヤガラ属

果実が検出された。黒褐色、長さ 2.5 ～ 3.1mm、径 1.5 ～ 2mm 程度の三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分はわずかに伸び、基部は切形。両端の断面は 3 角形。果皮はやや厚く表面は粗面。

・ホタルイ属（*Scirpus*）カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、長さ 2.1mm、径 1.7 ～ 1.8mm 程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で、刺針状の花被片が伸びる個体が見られる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。ウキヤガラ近似種、ホタルイ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。淡～黒

褐色、炭化個体は黒色。径 1 ～ 3.5mm 程度のレンズ状または三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は平滑～微細な網目模様がある。長さ 1.2 ～ 1.5mm、径 0.7mm 程度の三稜状狭倒卵体で表面には微小な疣状突起が密布する、カヤツリグサ属（*Cyperus*）に似る個体などが見られる。

・ツユクサ（*Commelina communis* L.）　ツユクサ科ツユクサ属

種子が検出された。灰褐色、径 2.5mm 程度のいびつな半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平らで正中線上に線形の臍がある。胚は一側面の浅い円形の凹みにある。背面と側面の表面には、大きなすり鉢状の孔が散在する。種皮表面には円形の小孔が散在する。

・イボクサ（*Aneilema keisak* Hassk.）ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、長さ 1.5mm、径 2mm 程度の半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平らで正中線上に線形の臍がある。胚は一側面の浅い円形の凹みにある。種皮表面には円形の小孔が散在する。

・イシミカワ近似種（*Polygonum* cf. *perfoliatum* L.）　タデ科タデ属

果実の破片が検出された。黒褐色、完形ならば径 3.5 ～ 4mm 程度の広楕円～球体。頂部はわずかに尖る。破片は頂部から基部に走る 3 本の筋に沿って割れた 1/3 片で、長さ 3.5mm 程度。基部には黄褐色、径 1.5mm 程度の萼片が大きく残る。果皮は硬く表面はやや平滑で光沢がある。

・サナエタデ近似種（*Polygonum* cf. *lapathifolium* L.）　タデ科タデ属

果実が検出された。黒褐色、径 1.7 ～ 2.5mm 程度の偏平な円状二面体。頂部はやや尖り、2 花柱が残存する個体も見られる。基部には灰褐色の萼があり、先が 2 つに分かれ反り返る花被の脈が伸びる。両面中央はやや凹む。果皮表面は平滑で光沢がある。

・イヌタデ近似種（*Polygonum* cf. *longisetum* De Bruyn）　タデ科タデ属

果実が検出された。黒褐色、長さ 2mm、径 1.5mm 程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面はやや平滑で光沢がある。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。イシミカワ近似種、サナエタデ近似種、イヌタデ近似種以外の形態上差異のある複数の種を一括した。長さ 2 ～ 3mm、径 1.5 ～ 2mm 程度の三稜または背面正中線上に鈍稜のある広卵体で、表面は平滑または網目模様がある、ヤナギタデ（*P. hydropiper* L.）に似る個体などが見られる。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子が検出された。黒色、径 1 ～ 1.3mm 程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ヒユ科（Amaranthaceae）

種子が検出された。黒色、径 1mm 程度の偏平な円盤状。縁は稜状で、基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

・スベリヒユ科（Portulacaceae）

種子が検出された。黒色、径 0.8mm 程度の腎臓状円形でやや偏平。基部は凹み、臍がある。臍には淡褐色の種柄の一部が残る。種皮表面には鈍円錐状突起が臍から同心円状に配列する。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。淡～茶褐色、径 1.1mm 程度の腎状円形でやや偏平。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には瘤 - 針状突起が臍から同心円状に配列する。

・アブラナ科（Cruciferae）

種子が検出された。赤褐色、長さ 1.2mm、幅 0.7mm 程度の偏平な楕円形。基部は切形で、両面の同一側には臍点から頂部へ伸びる 1 個の浅い溝がある。種子表面には微細な網目模様がある。

・カタバミ属（*Oxalis*）カタバミ科

種子が検出された。黒褐色、倒卵形で偏平。長さ 1.5mm、幅 1.2mm 程度。基部はやや尖る。種皮は薄く柔らかく、縦方向に裂けやすい。表面には 4 ～ 7 列の肋骨状横隆条が配列する。

・エノキグサ（*Acalypha australis* L.）　トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ 1.7mm、径 1.3mm 程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y 字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密集して分布するためにざらつく。

・スミレ属（*Viola*）スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、長さ 1.3 ～ 1.6mm、径 1mm 程度の広倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る 1 本の縫合線がある。種皮は薄く、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・ウド（*Aralia cordata* Thunb.）　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。淡灰褐色、長さ 1.8mm、幅 1mm 程度の半広卵形で偏平。腹面はほぼ直線状で、片端は突起状に伸びる。表面はスポンジ状で短軸方向の繊維の筋が密に配列する。

・チドメグサ属（*Hydrocotyle*）　セリ科

果実が検出された。淡～灰褐色、径 1.2mm 程度の半月形でやや偏平。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面は粗面で 1 本の明瞭な円弧状の稜がある。

・トウバナ属（*Clinopodium*）　シソ科

果実が検出された。灰褐色、倒広卵体で径 0.9mm 程度。背面は丸みがあり、下端は舌状にわずかに突出する。腹面の正中線は鈍稜をなす。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・ナス科（Solanaceae）

種子の破片が検出された。淡～灰褐色、径 2mm 程度の歪な腎臓形で偏平。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・タカサブロウ（*Eclipta prostrata*（L.）L.）　キク科タカサブロウ属

果実が検出された。灰～茶褐色、倒三角形でやや偏平。長さ 2.7mm、径 1.5mm 程度。両端は切形、表面はスポンジ状で、背腹両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

土壌理化学分析

結果を第 10 表に示す。いずれも全炭素量、全窒素量が低く、8D20 区 Ⅷ層上部（試料番号 2）の全炭

グリッド	層名	試料番号	土性	土色	全炭素 (%)	全窒素 (%)	C/N	可給態リン酸 (mg/100g)	可給態窒素 (mg/100g)
8D20	Ⅵ層	1	SiC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.69	0.06	12	12.0	2.4
	Ⅷ層上部	2	SiC	2.5Y4/2 暗灰黄	1.08	0.08	14	16.7	2.4
	Ⅸ層	4	SiC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.46	0.06	8	15.4	2.8
10A19	Ⅴ - Ⅶ層	3	HC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.61	0.07	9	12.9	2.8
	Ⅷ層	4	HC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.54	0.07	8	12.5	2.4
	Ⅸ層	5	HC	2.5Y4/2 暗灰黄	0.51	0.06	9	9.7	2.0

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖［農林省農林水産技術会議監修 1967］による。
土性：土壌調査ハンドブック［ペドロジスト懇談会編 1984］の野外土性による。
SiC･･･ シルト質埴土（粘土 25-45%、シルト 45-75%、砂 0-30%）,HC･･･ 重埴土（粘土 45-100%、シルト 0-55%、砂 0-55%）

第 10 表　土壌理化学分析結果

素量 1.08%、全窒素量 0.08%が最も高い値であり、このほかの 8D20 区Ⅵ層、Ⅸ層（試料番号 1、4）や 10A19 区Ⅴ～Ⅸ層（試料番号 3 ～ 5）では全炭素量は 0.46 ～ 0.69％、全窒素量は 0.06 ～ 0.07％と土壌有機物の集積が少ない。また、可給態リン酸量は 9.7 ～ 16.7mg/100g、可給態窒素量は 2.0 ～ 2.8mg/100g である。

土壌有機物は作物の生育基盤となる土壌の物理性、化学性、生物性を改善し、生育や収量を高める効果を担い、一般的には腐植に換算して 2%以下の土壌では有機物を施与するなどの改良が必要とされる。この観点からすれば、各試料の腐植含量は炭素量からの換算で約 0.9 ～ 1.8%程度と作物が生育する基盤として若干有機物が不足した状態と判断される。また、生産力評価に関して、養分豊否の指標である可給態リン酸量及び可給態窒素の調査結果では、可給態リン酸量は 9.7 ～ 16.7mg/100g 程度であり、地力増進の基本的技術対策における土壌理化学性の改善目標値である 10mg/100g 以上を満たすものの、可給態窒素量は 2.0 ～ 2.8mg/100g と不足した状態が指摘される。なお、可給態窒素の改善目標値は水田土壌で 8 ～ 20mg/100g、普通畑土壌で 5mg/100g 以上とされている［鬼鞍 1985］。本分析結果における養分豊否の状況は全体的に有機物量が少なく、可給態窒素が欠乏していることが指摘され、作物の生育に必要な養分は不足状態にあると判断される。

4）考　　察

堆積環境

Ⅻ～Ⅷ層を対象とした珪藻分析の結果、Ⅻ層及びⅧ層上部では、有意な量の珪藻化石が産出したが、Ⅻ層及びⅪ－Ⅹ層に相当する堆積物では化石の産出が少なく、珪藻群集による堆積環境の検討には至らない。

Ⅻ層は、10C3 区、7D1･6 区の珪藻群集は、いずれの試料も水生珪藻が約 90%以上と優占した。なお、主要種においては、10C3 区では、中～下流性河川指標種、流水不定性種や止水性の沼沢湿地付着生種、沼沢湿地付着生種の陸生珪藻 B 群等が産出し、7D1･6 区では上流性河川指標種が最も多く産出し、次いで中～下流性河川指標種、流水不定性種、沼沢湿地付着生種、止水性種等を伴うという異なる特徴が認められた。したがって、10C3 区のⅫ層は、流水の流れ込みのある沼沢～湿地のような湿潤な環境、7D1･6 区のⅫ層は、より流水の影響を強く受けるような環境が推定される。同じ堆積層において異なる特徴が認められた点については、Ⅻ層の形成過程や空間的位置の差を反映している可能性があるが、Ⅻ層堆積時は河川の流水の影響を受けるような環境であったことが推定される。

Ⅻ層及びⅪ－Ⅹ層は、発掘調査では古代の遺物包含層であることが確認されている。これらの堆積層の観察では、Ⅻ層は塊状をなす泥、Ⅻ層は極細粒砂～細粒砂、Ⅺ－Ⅹ層は砂からシルトへの級化構造が確認されたことから、河川等の氾濫堆積物の累重が推定される。そのため、これらの堆積物で珪藻化石の産出が少なかった要因としては、堆積速度や堆積後の経年変化による分解・消失の影響を受けていると考えられる。

Ⅷ層上部の珪藻群集は、陸生珪藻と水生珪藻とが高い割合で混在し、水生珪藻の中には上流性河川指標種群や中～下流性河川指標種群を含む流水性種が産出することで特徴付けられた。生育環境を異にする複数の珪藻化石が混在する群集は混合群集とされており、河川の氾濫堆積物のような一過性の堆積物中に認められる場合が多く、今回のように陸生珪藻が多産する場合は、洪水後に周囲が乾燥化したことを示すとされている［堀内ほか 1996］。このことから、Ⅷ層上部は氾濫堆積物を母材としているものの、その後の

土壌化や好気的環境への変化を反映していると考えられる。

なお、これらの堆積層を掘削して構築されたSD2127覆土下部（G-G´試料番号3 D-D´試料番号3）の珪藻群集は、水生珪藻が約80％と優占し、上流性河川指標種群や中～下流性河川指標種群を含む流水性種が多産し、対照試料としたⅩⅣ層と類似する組成を示した。SD2127を埋積する堆積物は、溝底面がⅩⅣ層に及ぶことや、覆土中にⅩⅣ層及び上位に相当する堆積物に由来すると見られる偽礫の混入が確認されていることから、遺構底～壁面の堆積層の混入が推定される。これを踏まえ、ⅩⅣ層の珪藻群集組成と比較すると、陸生珪藻の割合や非完形殻の占める割合がやや高くなるといった差が指摘される。これらを有意差として評価すれば、溝内はしばしば乾燥するような好気的環境であった、あるいは、周辺の乾いた土壌が埋積するような環境であったことが推定される。

古　植　生

縄文時代前期ごろの堆積物と推定される中部北遺跡のⅫ層及びⅨｂ層の花粉群集は、いずれもシダ類胞子が多産するなど花粉産出状況が悪かったことから、堆積後の経年変化などにより腐蝕に強い花粉が選択的に残存したと考えられる。一方、西部遺跡Ⅴでは、縄文時代中期後半ごろの年代を示した腐植帯B上部及び弥生時代中～後期ごろの暦年代を示した腐植帯A上部はいずれも花粉の産出・保存状況が良好であった。

西部遺跡Ⅴの腐植帯Bと腐植帯Aの花粉群集は、いずれも木本類の割合が高く、ハンノキ属が多産するという特徴を示した。これらの堆積層で確認された花粉群集組成から、後背や集水域の丘陵・山地部にはブナ属やコナラ属コナラ亜属等を主要構成種とする冷温帯落葉広葉樹林が認められ、林縁等にはマツ属、スギ属等の針葉樹、アカメガシワ属、カエデ属、ノブドウ属、ウコギ科、エゴノキ属等の広葉樹が生育したと考えられる。また、周辺の河川沿いや低湿地等には、ヤナギ属やサワグルミ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、モチノキ属、トチノキ属、トネリコ属等から構成される河畔・湿地林が分布し、低地部の乾いた部分ではアカガシ亜属等の常緑広葉樹も生育していた可能性がある。中部北遺跡のⅫ層についても検出された分類群の産状から、おおむね同様の植生であったことが推定される。

なお、西部遺跡Ⅰでは、ⅩⅣ層から出土した木材（試料番号23）、西部遺跡Ⅲの流路跡（SR4003試料名流木）（西部遺跡Ⅲ試料名流木）やⅫ層で検出された立木・倒木にハンノキ亜属やトネリコ属が多く確認されていることから、弥生時代～古代ごろには、近傍にハンノキやトネリコ等からなる湿地林が成立していたと考えられる［パリノ・サーヴェイ2005、2006、2008］。また、草本類では人里植物や水湿地に生育する種を含む分類群であるイネ科やカヤツリグサ科が多産したほか、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科等が認められた。したがって、遺跡周辺では人里植物が草地を形成し、水湿地などにはガマ属やコウホネ属、ゴキヅル属、ミズニラ属といった水湿地生植物が生育したと考えられる。

古代～中世の遺構埋積物から得られた花粉群集は、各試料で花粉の産出状況や保存状況が異なったが、木本・草本花粉の割合や、イネ科の産出状況において区分される。古代の遺構（SE2007、SE2158、SD2127）の花粉群集は、木本花粉の割合が草本花粉と同程度～上回る傾向にあり、イネ科の産出が少ないことを特徴とする。また、優占する種類は各試料で異なるが、群集組成は類似し、木本類ではマツ属（複維管束亜属を含む）、ハンノキ属が多く産出し、スギ属、サワグルミ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、モチノキ属、トネリコ属等が検出された。このことから、後背の山地・丘陵、河川沿いや低湿地部の植生に大きな変化はなかったと推定される。なお、SE2158やSD2127では二次林や海岸林として

生育する種類であるマツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）が多産したが、花粉群集ではシダ類胞子が多産していることから経年変化の影響を受けている可能性がある。また、中世の井戸（SE843、SE844）の花粉群集は、木本類では産出する分類群が減少するものの、検出される種類に大きな変化が認められなかったことから、おおむね古代と同様の植生であったと推定される。

古代～中世の西部遺跡周辺では、近傍の河畔林や二次林及びその林縁等にはクワ属やエゴノキ属等の高木、アカメガシワ、イヌザンショウ属、クサギ、タラノキ、ツツジ科、タニウツギ属、ニワトコ等の中・低木類、サルナシ近似種、ブドウ属、ブドウ科等の籐本類が認められ、明るく開けた場所にはイネ科やカヤツリグサ科、タデ属、クワ科、アカザ科、ヨモギ属等の人里植物、水湿地及びその周囲にはイネ科（ヨシ属など）やオモダカ属、オモダカ科、スブタ、ホタルイ属、ウキヤガラ（近似種）等を含むカヤツリグサ科、イボクサ、タカサブロウ等が生育していたと考えられる。

ところで、中世の遺構の花粉群集では草本花粉の割合が高率となり、特にイネ科の多産が顕著となる。このことから、古代から中世にかけて周辺域で、草本類を主体とする開けた空間が増加したと推定される。草本花粉の割合の増加やイネ科の優占は、西部遺跡Ⅴ（48 区）における花粉分析調査結果のⅫ－Ⅺ層においても確認されており［パリノ・サーヴェイ 2009a、2009b］、これらの変化は古代～中世における西部遺跡及び周辺域の人為的な植生干渉を反映している可能性がある。

植物資源利用

Ⅻｂ～Ⅴ層における稲作の可能性及びイネ科植物相の検討を目的として行った植物珪酸体分析では、Ⅻｂ層を除く各試料からイネ属の葉部に形成される植物珪酸体が検出された。植物珪酸体含量は、極めて高い含量を示した 8D20 区 Ⅷ層下部を除く試料では、短細胞珪酸体が 100 個 /g 未満～約 800 個 /g、機動細胞珪酸体が約 200 ～ 1,100 個 /g であり、畦畔が検出された 6B8 区は、Ⅻａ層では短細胞珪酸体が約 100 個 /g、機動細胞珪酸体が約 800 個 /g、Ⅻ層では短細胞珪酸体が約 400 個 /g、機動細胞珪酸体が約 800 個 /g であった。稲作の検証等を行う場合の判断基準はイネ属機動細胞珪酸体含量は約 5,000 個 /g とされている［杉山 2000］が、いずれもこの基準より低い含量を示す。また、西部遺跡Ⅳ・Ⅴの水田耕作土とされるⅩ層やⅫ層と比較しても含量が低い傾向にあることから、今回の分析結果から稲作の可能性を示唆するに至らない。

一方、8D20 区Ⅷ層下部は、短細胞珪酸体が約 15,800 個 /g、機動細胞珪酸体が約 22,000 個 /g と上記した試料と比較して極めて高い含量を示し、さらに、穎珪酸体（約 6,500 個 /g）や、短細胞列や機動細胞列などの珪化組織片も多く確認された。なお、堆積層の観察では、Ⅷ層下部は下位のⅨ層と不整合に堆積し、土器片のほか多量の炭化物や焼土が混じる状況が確認されている。また、大型の掘立柱建物（SB1400）に近接する地点であることなどを考慮すると、Ⅷ層下部から検出された植物珪酸体は燃料材等を含む資材に利用されたイネの植物体に由来する可能性がある。イネの植物体の利用は、近接する SB1500 床面から検出された土坑や地床炉にイネの葉部や穎（籾殻）に由来する珪化組織片や炭化したイネの穎が検出されていることからも支持される。

イネ属を除く栽培植物では、古代の井戸・溝埋積物からソバ属花粉、モモ、アワ近似種、アワ - ヒエ、ヒエ近似種、アサ、エゴマ、ナス科などの種実、中世の井戸埋積物からソバ属及び栽培種を含む分類群のアズキ属の花粉、アワ近似種、アワ - ヒエ、コムギ、アサ、マメ類、シソ属、ナス科などの種実が検出された。これらの栽培植物のうち、モモは観賞用のほか、果実が食用や薬用等に利用され、イネやアワ、ヒ

エ、キビ、ソバ属は、胚乳が食用される。アサは、種子が食用や油料に、繊維が衣料や縄用等に利用され、マメ類（アズキ属を含む）は種子が食用される。さらに、シソ属（エゴマを含む）は、果実が食用や油料に利用される。これらの検出状況から、古代～中世ごろのこれらの栽培植物の利用や栽培が推定される。今回の分析調査では、イネ（胚乳と一部の穎）やアワ近似種、ヒエ近似種、キビ近似種、コムギ、マメ類に炭化した個体が確認されており、火熱の影響を受けた個体が遺構内に投・廃棄された状況がうかがわれる。

また、SB1500 の床下面で検出された土坑（SK2192、SK2235、SK2255）からは、炭化したイネの胚乳や穎が多量に検出されたほか、イネ属の葉部に形成される機動細胞列や短細胞列、穎珪酸体が検出された。このほかに、アワ（近似種）、アワ - ヒエ、ヒエ（近似種）、キビ（近似種）、マメ類などの栽培植物の炭化種実のほか、ヘラオモダカ、オモダカ科、ホタルイ属などの水生植物の炭化種実も確認された。また、SK2235 では多量検出された炭化材にサクラ属とカエデ属、同様に炭化材の調査を行った掘立柱建物に伴う地床炉からはクリやコナラ節などが確認された。これらの検出状況から、栽培植物の植物体や、河畔林や渓谷林、二次林等に生育する樹木等の燃料材としての利用がうかがわれる。

また、古代の井戸（SX2001-SE1）からは、オニグルミ、トチノキの堅果が検出された。これらは、食用・長期保存可能な有用植物であり、花粉分析結果などから周辺の河畔林等に自生していたと考えられる。トチノキは、成熟した種子の完形個体が比較的多く検出されたのに対し、果実や幼果が確認されなかったことから、成熟した種子が保存・保管されていた可能性がある。

D　木製品の樹種

1）試　　料

試料は、古代の掘立柱建物の柱材や礎板、さらに、帰属不明の柱材、杭材、中世の井戸の部材や木製品、鍛冶炉（SW1145・1352）及び土坑（SK2235）から検出された炭化材である。試料の詳細は、結果とともに表に示す。

2）分 析 方 法

樹種同定

各遺物の木取りを観察した後、破損部等の目立たない場所から木片を採取する。木片は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作成する。作成したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察する。

炭化材は、自然乾燥させた後、双眼実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察する。各試料で観察された木材組織の特徴を、現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴は、[島地・伊東 1982]、[Wheeler ほか 1998]、[Richter ほか 2006] を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、[林 1991]、[伊東 1995、1996、1997、1998、1999] や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3）結　　果

結果を第 11 表に示す。古代～中世の建築材・施設材及び木製品は、針葉樹 2 分類群（マツ属複維管束亜属・スギ）と広葉樹 10 分類群（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・ニレ属・クスノキ科・カツラ・シラキ・エゴノキ属・トネリコ属）に同定された。また、炭化材は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、サクラ属、カエデ属に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は柔細胞、仮道管、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1 ～ 15 細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2 ～ 4 個。放射組織は単列、1 ～ 15 細胞高。

・ヤナギ属（*Salix*）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または 2 ～ 3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1 ～ 15 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 2 列、孔圏外で急激に管径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3 ～ 4 列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 2 列、孔圏外で急激に管径を減じた後、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 5 細胞幅、1 ～ 50 細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・ニレ属（*Ulmus*）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 2 列、孔圏外で急激に管径を減じた後、多数が塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1 ～ 6 細胞幅、1 ～ 40 細胞高。

・クスノキ科（Lauraceae）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または 2 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1 ～ 2 細胞幅、1 ～ 20 細胞高。柔組織は周囲状及び散在状。柔細胞には油細胞が認められるが顕著ではない。

層位	グリット	遺構名	遺物№	器種	木取	樹種	備考
Ⅳ層	12E2･3	SE040	2387	木杓	(縦柄)	シラキ	
	6B16	SE674	2415	井戸側部材（板材）	割板	スギ	
	6B16		2414	井戸側部材（隅柱）	芯持材	スギ	
	6B16		2413	不明部材	芯持材	マツ属複維管束亜属	
	6C22	SE704	2421	井戸側部材	-	マツ属複維管束亜属	切断した刳舟を転用
	6E12･13･17･18	SE860	2448	円形曲物	板目	スギ	井戸の水溜に転用
	6E12･13･17･18		2449	杭	芯持丸木	マツ属複維管束亜属	
	6E12･13･17･18		2450	杭	芯持丸木	マツ属複維管束亜属	
Ⅷ層	9C7	SB1400-P6	174	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	＊
	9C15	SB1400-P9	-	不明部材（板材）	割材	クリ	
	10D6	SW1145	-	(覆土出土炭化材)	-	クリ	＊
	8D17	SB1500-P1	418	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	7D8	SB1500-P4	-	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	7D3	SB1500-P5	-	柱根（入側柱）	不明	クリ	
	7C23	SB1500-P6	-	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	7C18	SB1500-P7	421	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	7C12･13	SB1500-P8	-	柱根（入側柱）	割材	クリ	
	7C7	SB1500-P9	422	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	7C5	SB1500-P10	424	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	7C10･15,8C6･11	SB1500-P11	425	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	8C11	SB1500-P12	426	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	＊
	8C16･21	SB1500-P13	428	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	8C21,8D1	SB1500-P14	439	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	8D6	SB1500-P15	440	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	8D11･12	SB1500-P16	441	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	8D23	SB1500-P17	-	柱根（側柱）	割材	クリ	
	8D21	SB1500-P19	444	柱根（側柱）	芯持丸木	クリ	
	7D24,7E4	SB1500-P20	-	柱根（側柱）	割材	クリ	
	7D17	SB1500-P23	-	柱根（側柱）	割材	クリ	
	7B22,7C2	SB1500-P31	-	柱根（側柱）	不明	クリ	
	8C1	SB1500-P35	-	柱根（側柱）	不明	クリ	
	8D8･13	SB1500-P41	-	柱根（側柱）	芯持丸木	クリ	
	7C14	SB1500-P44	460	柱根（中柱）	芯持丸木	クリ	＊
	7D15	SB1500-P49	470	柱根（中柱）	芯持丸木	クリ	
	7D23	SW1352	-	(覆土出土炭化材)	-	コナラ属コナラ亜属コナラ節	＊
	7C13･14･18･19	SK2235	-	-	-	サクラ属（5）,カエデ属（5）	微細物分析検出試料
	6B13	SB1683-P2	-	柱根（側柱）	不明	クリ	
	6B12	SB1683-P3	1335	柱根（側柱）	割材ヵ	クリ	
	6B3	SB1683-P8	1338	柱根（側柱）	割材ヵ	クリ	
	6B9･14	SB1683-P10	-	柱根（側柱）	不明	クリ	
	13C15･20	SB2020-P1	1343	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	13C17	SB2020-P2	1344	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	13C7	SB2020-P3	1345	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	13B2	SB2020-P4	1346	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	13B25	SB2020-P6	1347	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	13C10･15	SB2020-P8	1348	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	13C19	SB2020-P10	1349	柱根（側柱）	割材	クリ	
	13C23	SB2020-P11	1350	柱根（側柱）	芯持丸木	クリ	
	13C21	SB2020-P12	-	柱根（側柱）	不明	クリ	
	13C16	SB2020-P13	1351	柱根（側柱）	割材	クリ	
	13C6･11	SB2020-P14	1352	柱根（側柱）	芯持丸木	クリ	
	13C1	SB2020-P15	1353	柱根（側柱）	芯持丸木	クリ	
	14C6	SB2020-P23	1355	柱根（側柱）	割材	クリ	
	10E11	SB2200-P2	-	柱根（入側柱）	割材	マツ属複維管束亜属	
	10E6	SB2200-P3	1374	柱根（入側柱）	割材	クリ	
	10D24	SB2200-P5	1377	柱根（入側柱）	割材	クリ	
	10D17	SB2200-P16	1379	礎盤（板）ヵ	横木取り	ケヤキ	刳物未製品ヵ
	10D25	SB2200-P19	1380	柱根（側柱）	割材	クリ	
	10E5	SB2200-P20	1381	柱根（側柱）	割材	クリ	
	10E15	SB2200-P22	-	柱根（側柱）	不明	クリ	
Ⅺ層	6B22	SB3200-P4	41	柱根（入側柱）	芯持丸木	クリ	
	9E20	P3143	-	杭	割材	トネリコ属	
	10E8	P3216	82	杭	割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
Ⅻa層	10E9	SB3230-P1	1	柱根（側柱）	芯持丸木	ニレ属	
	10E8	SB3230-P2	-	柱根（側柱）	芯持丸木	ニレ属	
	10E8	SB3230-P3	2	柱根（側柱）	芯持丸木	ニレ属	
	10E3	SB3230-P4	3	柱根（側柱）	割材	エゴノキ属	
	10D24	SB3230-P5	4	柱根（側柱）	芯持丸木	ニレ属	＊
	10D25	SB3230-P6	5	柱根（側柱）	芯持丸木	ニレ属	＊
	10D25	SB3230-P7	6	柱根（側柱）	芯持丸木	ニレ属	
	10E5	SB3230-P8	-	柱根（側柱）	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	10E8	P3218	7	杭	芯持丸木	カツラ	
	12C24	P3229	-	杭	不明	クスノキ科	
	11D11	P3231	8	杭	割材	クリ	
	12C19	P3233	-	杭	芯持丸木	エゴノキ属	
	12E9	P3241	9	杭	芯持丸木	トネリコ属	
	13C6	P3244	-	杭	芯持丸木	ヤナギ属	
	13C1	P3245	10	杭	芯持丸木	ニレ属	
	12B24	P3246	11	杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	12B20	P3247	12	杭	芯持丸木	クリ	
	13B21	P3248	-	杭	不明	トネリコ属	
	13C1	P3250	14	杭	芯持丸木	クリ	

＊放射性炭素年代測定試料

第11表　樹種同定結果

・カツラ（*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1 ～ 2 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または 2 ～ 6 個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1 ～ 3 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。

・シラキ（*Sapium japonicum*（Sieb. et Zucc.）Pax et Hoffm）　トウダイグサ科

散孔材で、道管はやや厚壁で、単独または 2 ～ 5 個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1 ～ 30 細胞高。

・カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独及び 2 ～ 3 個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1 ～ 4 細胞幅、1 ～ 30 細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・エゴノキ属（*Styrax*）　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または 2 ～ 4 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1 ～ 3 細胞幅、1 ～ 20 細胞高。

・トネリコ属（*Fraxinus*）　モクセイ科

環孔材で、孔圏部は 1 ～ 2 列、孔圏外で急激に管径を減じた後、単独または 2 個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1 ～ 2 細胞幅、1 ～ 20 細胞高。

4）考　　察

Ⅳ層の木材利用

Ⅳ層の試料は、木杭や井戸の部材などからなる。SE040 から出土した木杭は、一木の縦柄杭子であり、落葉広葉樹のシラキであった。シラキは、岩手県南部・山形県以南の本州、四国、九州、琉球の温帯下部から暖帯にかけて分布し、山地の日当りのよい斜面地等に生育する。木材は一般にやや重硬な部類に入り、切削等の加工は容易である。新潟県内における杭子の調査事例では、下割遺跡（上越市）でニシキギ属とモクレン属［パリノ・サーヴェイ 2004a］、仲田遺跡（上越市）でヤナギ属［三村・植田 2003］、東原町遺跡（柏崎市）でスギ［パリノ・サーヴェイ 2005b］、大武遺跡（旧和島村）で複維管束亜属［松葉 2000］、六百地遺跡及び山屋遺跡群（旧神林村）でスギ［パリノ・サーヴェイ 2002a、2002b］が確認されている。これまでの杭子の調査事例では、シラキが確認された事例はなく、新潟県内の出土木製品にもシラキが確認されていない。また、北陸地方の他県の調査事例においても、福井県の埋没樹などに事例があるほかは、木製品にシラキが認められた事例はなく、利用頻度の少ない樹木であったことが推定される。現在のシラキは、山中に点在し、大きな個体がほとんどなく、また、まとまって出材されることのない種類であるため、民俗事例でもシラキが特定の用途に用いられることはなく、小細工物や小器具材等に利用される程度である［平井 1996］。

分類群	Ⅷ層											Ⅷa層	合計
	SB1400		SB1500			SB1683	SB2020		SB2200			SB3230	
	柱根	不明	柱根			柱根	柱根		柱根		礎盤カ	柱根	
	入側柱	-	側柱	入側柱	中柱	側柱	側柱	入側柱	側柱	入側柱	転用	側柱	
針葉樹													
マツ属複維管束亜属										1			1
広葉樹													
コナラ節												1	1
クリ	1	1	7	14	2	4	7	6	3	2			47
ケヤキ											1		1
ニレ属												6	6
エゴノキ属												1	1
合　計	1	1	7	14	2	4	7	6	3	3	1	8	57

第 12 表　掘立柱建物の部材別樹種構成

井戸跡から出土した木材は、井戸側、水溜（曲物）、木杭がある。これらの部材は、すべて針葉樹材であり、SE674 の井戸側の板材・隅柱と SE860 の円形曲物を転用した水溜がスギ、SE674 の不明部材、SE704 の刳舟転用の井戸側、SE860 の木杭 2 点がマツ属複維管束亜属であった。スギは、扇状地の扇端部等の水分が多い土地に生育し、材質は木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。マツ属複維管束亜属は、海岸砂丘上や岩地など、比較的適応範囲が広く、ほかの植物が生育しないような環境でも生育し、その材質は針葉樹としては比較的重硬な部類に入り、強度・保存性が高いが、加工は容易である。西部遺跡Ⅰの中世の井戸の部材や木製品にもスギやマツ属複維管束亜属が多く確認されている［パリノ・サーヴェイ 2005a］ことから、調和する結果と言える。

中世の舟については、下前川原遺跡（旧豊栄市）で井戸側に転用された丸木舟 2 点が出土しており、いずれもスギに同定されている［パリノ・サーヴェイ 2004b］。住吉遺跡（旧紫雲寺町）では、井戸側に転用された準構造船の底板 4 点が出土しており、すべてスギに同定されている［植田 2006］。これらの調査事例から、当該期の舟にはスギ材が利用されたことが確認できるが、今回の分析結果からマツ属複維管束亜属も丸木舟（刳船）に利用されていたことが推定される。

Ⅷ層の木材利用

Ⅷ層の試料は、すべて掘立柱建物に伴う柱材や礎盤（板）等の建築部材である。掘立柱建物は、入側柱と側柱を持つ建物(SB1400･1500･2020･2200)と入側柱を持たない建物(SB1683)に分けられる。このうち、SB1500 の柱材は、配置や規格に関わらずすべて落葉広葉樹のクリであった。SB1500 以外の建物の柱材も、SB2200 で針葉樹のマツ属複維管束亜属の柱材（SB2200-P4）が認められた以外はすべてクリであった。建物の構造が異なる SB1683 もすべてクリが利用されており、柱材としてクリ材が選択的に利用されていたことが推定される（第 12 表）。本遺跡の花粉分析結果では、河畔林を構成するハンノキ属等の花粉が多く認められたが、クリ属花粉は少なく、周囲にクリが生育していた可能性は低い。SB1400 や SB1500 の柱材には、柱を運搬した際の筏孔が確認できることから、クリ材を離れた場所から運び込んだ可能性がある。クリは、重硬で強度・耐朽性に優れており、水湿の多い土地で柱材として利用した場合にも腐りにくいことから、使用環境や材質を考慮した木材利用が推定される。

また、SB2200 P16 から出土した礎盤（板）は、円形で断面逆台形状を呈しており、容器の未成品を転用した可能性がある。当試料に確認されたケヤキは、古代～中世の挽物あるいは刳物容器に利用される樹種であり、本遺跡周辺でも蔵ノ坪遺跡（旧中条町）、六百地遺跡及び桃川遺跡群（旧神林村）で確認されている［パリノ・サーヴェイ 2002a、2002c、2003］。礎盤（板）に未成品が利用されている状況を考慮すると、周辺で容器の製作が行われていた可能性もある。

XI層の木材利用

XI層の試料は、SB3200 P4 から出土した柱材 1 点と、帰属不明の柱穴から出土した柱材 2 点（P3143・P3216）である。SB3200 の柱材はクリ、帰属不明の P3143 はトネリコ属、P3216 はコナラ節であった。コナラ節は二次林構成種、トネリコ属は河畔林構成種であり、周囲に生育した入手可能な樹木を利用した可能性がある。これらの木材の材質は、コナラ節とトネリコ属が重硬で強度が高い材質を有するのに対し、ヤナギ属は軽軟で強度・保存性が低い。XI層は試料数が少なく、詳細な検討には至らないが、クリ材の利用はVIII層の掘立柱建物の柱材における木材利用と類似しており、コナラ節やトネリコ属の木材の利用は後述するXIIIa層の木材利用と類似するという特徴がうかがわれる。

XIIIa層の木材利用

XIIIa層の試料は、SB3230 に伴う柱材 8 点と、帰属不明の柱材 11 点である。SB3230 は、梁間 1 間型の建物であり、柱材は芯持丸木が多い。このうち、このほかの柱と比較して打ち込みが浅い柱材 2 点（P4、P8）にエゴノキ属とコナラ節が認められたほかは、すべて落葉広葉樹のニレ属であった。柱材の位置及び打込の状況などで樹種が異なる傾向があるが、いずれも重硬で強度の高い木材の利用が示唆される。また、帰属不明の柱材には、ヤナギ属、コナラ節、クリ、ニレ属、カツラ、クスノキ科、エゴノキ属、トネリコ属の 8 分類群が認められた。重硬で強度の高い材質の木材が多いが、軽軟で強度・保存性の低い種類（ヤナギ属）も含まれ材質的な統一性は認められない。これらの分類群には河畔林を構成する種類が多いことから、周辺に生育した樹木が利用されたと考えられる。

西部遺跡IIIのXIII層から検出された杭列（SX4001・4002）や西部遺跡IVのXII層中及びXIII層上面から検出された杭列（SA1001 ～ 1003）の調査結果では、オニグルミ、ハンノキ亜属、コナラ節、ニレ属、モクレン属、サクラ属、カエデ属、トネリコ属、エゴノキ属が確認されている。発掘調査成果から杭の打込みや配列状況の違いや時期差があることが指摘されているが、樹種構成が雑多であるという特徴は、今回の分析結果と共通する。一方、田屋道遺跡（旧神林村）の上記した SX4001 と構造が類似する SB1 や窪田遺跡（旧神林村）の古代以前の建物及び杭列の樹種構成は、それぞれ単一の樹種から構成される傾向にあり、利用される樹種は 5 分類群（クリ、ハンノキ節（ハンノキ亜属）、トネリコ属、コナラ節、ケヤキ）と少なくクリの利用が多い［パリノ・サーヴェイ 2007、2008、吉川 2007］という特徴が確認されている。

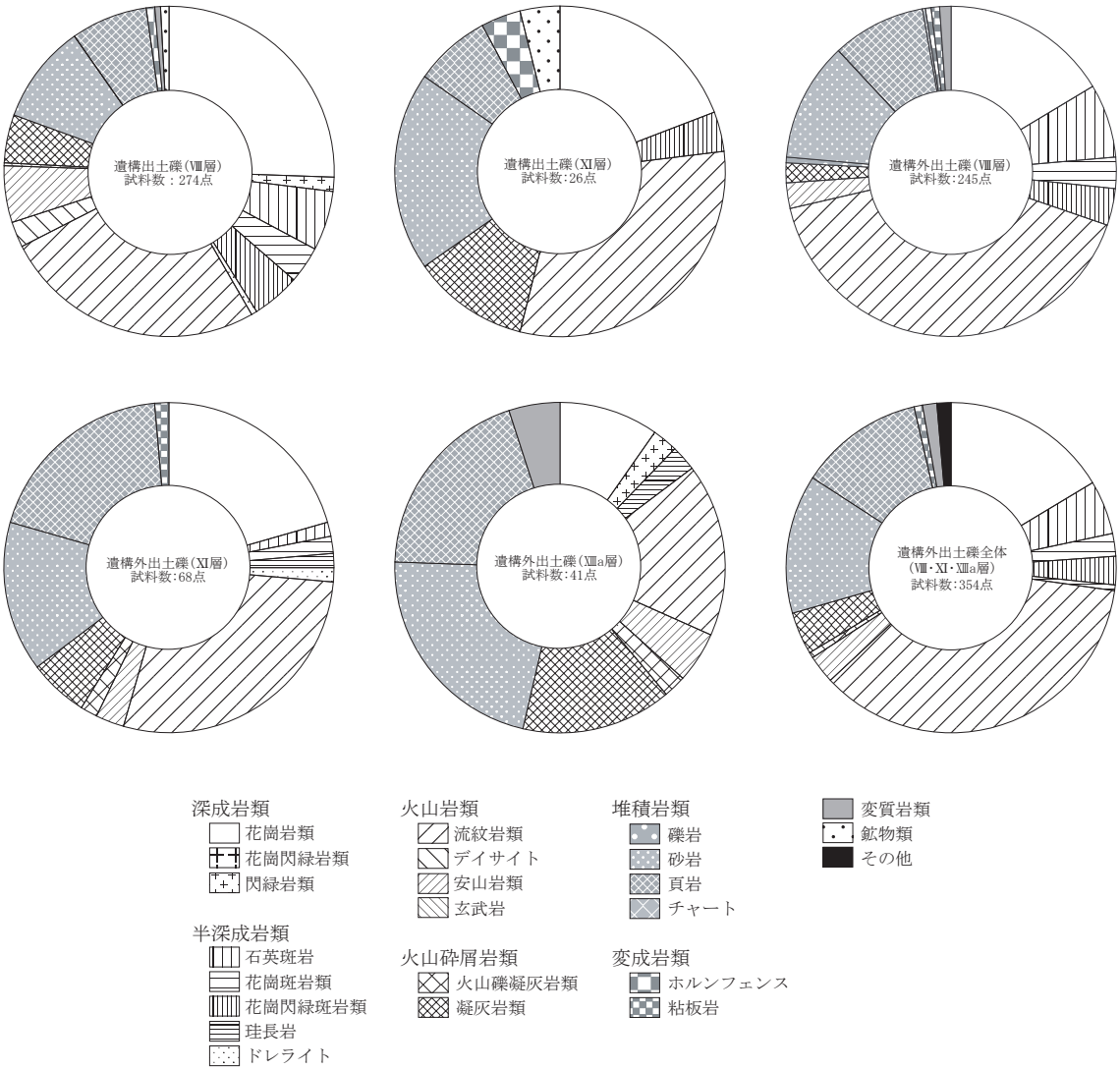
岩石名	数量
深成岩類	
斑状黒雲母角閃石花崗岩	1
半深成岩類	
ドレライト	1
火山岩類	
流紋岩	27
ガラス質流紋岩	1
多孔質輝石安山岩	1
緻密質安山岩	2
輝石安山岩	4
火山砕屑岩類	
流紋岩質凝灰岩	14
堆積岩類	
砂岩	10
砂岩（古期）	2
頁岩	11
頁岩（古期）	2
頁岩（新第三紀）	5
変成岩類	
黒雲母粘板岩	1
菫青石ホルンフェルス	2
変質岩類	
珪化流紋岩	1
変質安山岩	1
蛇紋岩	1
鉱物	
石英	2
玉髄	1
メノウ	1
合計	91

第 13 表　石製品の石材組成

E　石材利用

1）試　　料

試料は、石製品 91 点、VIII～XIIIa 層から出土した自然礫 654 点（遺構出土自然礫 300 点、遺構外出土自然礫 354 点）の計 745 点と、水晶玉 1 点（報告書掲載番号 2228）である。このうち、調査対象とする自然礫 654 点は、調査担当者との協議・検討の結果、自然礫につ



第18図　石材組成（自然礫）

いては径 4cm 以上の試料を抽出した。

2）分 析 方 法

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。なお、個々の石材の正確な岩石名は、薄片作製観察、X 線回折試験、全岩化学組成分析等を併用することにより調べることができるが、今回は肉眼鑑定のみにとどめているため、概査的な岩石名であることを留意されたい。

3）結　　果

石　製　品

結果を第 13 表に示す。石製品の主要石材は、流紋岩、流紋岩質凝灰岩、頁岩、砂岩である。このほかに、各種の安山岩類、ホルンフェルス、変質岩類、鉱物なども認められる。

	遺構																									遺物包含層				
	Ⅷ層															Ⅺ層										層位				
	SX1104	SB1400	SD1077	SB1500	SD1377	SB1683-P9	SX2001-SE3	SX2001	SE2007	SD2150	SD2029	SB2200-P2	SK3040	計	SB3030	SD3029	SD3042	SK3046	SD3051	SD3093	SD3102	P3139	SE3220	計	Ⅷ	Ⅺ	Ⅻa	計	合計
深成岩類																													
黒雲母トーナル岩	-	-	-	2	-	2	-	2	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	6
白雲母角閃石トーナル岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
花崗岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	2	-	2	2
黒雲母花崗岩	1	-	1	-	4	7	-	1	-	1	-	-	-	15	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	5	3	1	9	26
黒雲母角閃石花崗岩	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	4	2	-	6	9
角閃石花崗岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	5	1	-	6	6
角閃石黒雲母花崗岩	8	1	3	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	4	-	-	4	18
細粒黒雲母花崗岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	-	-	2	3
細粒角閃石花崗岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
ザクロ石角閃石花崗岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	1	-	1	1
斑状黒雲母花崗岩	-	1	1	-	-	3	-	1	-	-	1	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	-	-	3	10
黒雲母花崗岩（ペグマタイト質）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
黒雲母斑状花崗岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
片状花崗岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	1	-	1	1
片状黒雲母花崗岩	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	1	-	3	4
黒雲母花崗閃緑岩	-	1	-	-	6	-	-	-	-	2	-	-	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	-	1	3	12
角閃石花崗閃緑岩	-	1	-	4	1	1	-	-	-	1	-	-	-	8	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	5	2	2	9	18
角閃石黒雲母花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	2
黒雲母角閃石花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	-	-	-	-	-	1	2	3	1	-	4	6
片状角黒雲母花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
片状角閃石花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
細粒花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
黒雲母角閃石閃緑岩	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
角閃石黒雲母閃緑岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
ザクロ石角閃石花崗閃緑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	1	1	1
微閃緑岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
半深成岩類																													
石英斑岩	2	-	-	1	-	11	-	-	1	-	1	-	-	16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	18	1	-	19	35
花崗斑岩	-	2	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	1	-	4	9
黒雲母花崗斑岩	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	-	-	3	6
角閃石花崗斑岩	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	3
花崗閃緑斑岩	-	-	-	-	1	1	1	-	-	2	-	-	-	5	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	6	-	-	6	12
黒雲母角閃石花崗閃緑斑岩	3	-	-	-	2	-	-	-	2	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	-	-	3	10
角閃石黒雲母花崗閃緑斑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
珪長岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	1	1	2	2
ドレライト	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	1		1	2
火山岩類																													
流紋岩	2	1	2	1	18	16	1	4	-	11	1	-	-	57	-	3	1	1	1	-	1	-	-	7	58	15	5	78	142
流紋岩（溶結凝灰岩）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
輝石流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
角閃石流紋岩	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	4
黒雲母角閃石流紋岩	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
無斑晶質流紋岩	-	-	-	1	3	-	-	-	-	2	-	-	-	6	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	42	4	2	48	55
デイサイト	-	-	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	4
角閃石デイサイト	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
輝石デイサイト	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
安山岩	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	2	2	7
角閃石安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
輝石安山岩	-	-	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	1	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	2	-	4	9
無斑晶質安山岩	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	-	-	3	4
緻密質安山岩	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
多孔質安山岩	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
多孔質輝石安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
玄武岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
火山砕屑岩類																													
火山礫凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	1	1	2	2
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	2	4	6
軽石質凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	1
流紋岩質凝灰岩	-	-	2	1	2	-	-	-	-	1	-	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	2	4	9	15
流紋岩質溶結凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	1	6
安山岩質凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
スコリア質凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
堆積岩類																													
礫岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
砂岩（古期）	-	-	2	-	7	6		1		8	-	-	-	24	1	1	1		2	-	-	-	-	5	17	9	4	30	59
砂岩（新第三紀）	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	11	1	5	17	19
珪化砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
頁岩	-	1	2	-	7	-	-	1	-	2	-	-	-	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	13
頁岩（古期）	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	17	12	7	36	39
頁岩（新第三紀）	1	-	2	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	4	1	1	6	13
珪質頁岩（古期）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	1
変成岩類																													
菫青石ホルンフェルス	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	4
粘版岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	-	-	2	2
黒雲母粘板岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	1	-	1	1
変質岩類																													
珪化岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	1	1	2
変質流紋岩	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	-	-	1	2
変質安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	-	1	3	3
鉱物																													
脈石英	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	0	2
玉髄	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	0	1
合計	24	12	23	12	80	54	3	15	4	36	4	6	1	274	5	9	3	1	3	1	1	1	2	26	245	68	41	354	654

第14表　遺構別･遺物包含層別石材組成（自然礫）

自　然　礫

結果を第 14 表、第 18 図に示す。鑑定対象とした遺構出土自然礫及び遺構外出土自然礫の主要石材は、いずれも花崗岩類や流紋岩類、砂岩、頁岩である。また、Ⅷ層から検出された遺構や同層から出土した自然礫、Ⅻａ層から出土した自然礫では、石英斑岩などの各種の斑岩類が含まれる。なお、Ⅺ層遺構から出土した自然礫、Ⅺ層・Ⅻａ層から出土した自然礫については、対象試料数が 100 個未満であることから定性的な組成としてとらえておく必要がある。

4）考　　察

荒川水系の地質

荒川水系の地質は、［土谷ほか 1999］の 20 万分の 1 地質図幅「村上」、及び［角ほか 1985］の 20 万分の 1 地質図幅「新潟」により明らかにされている。これらに基づいて水系の地質について概説する。

荒川水系には、足尾帯の堆積岩類、白亜紀 - 古第三紀酸性火成岩類、新第三系及び第四系が分布する。足尾帯は、ジュラ紀の堆積岩コンプレックスで、この地域では頁岩及び砂岩頁岩互層から主に構成されている。他地域の足尾帯では、チャート、緑色岩、石灰岩などをわずかに伴うが、この地域ではほとんど含まれないという特徴がある。荒川支流の藤沢川流域に広く分布するほか、荒川中･上流域にも小規模に分布している。

白亜紀 - 古第三紀の酸性火成岩類は、花崗岩類を主体とする深成岩類である。荒川下流から上流域にかけては、粗粒塊状の黒雲母花崗岩を主とする大小の岩船花崗岩類が広く分布している。そのほか、荒川最上流部には祝瓶山を中心とした角楢アダメロ岩体や、大朝日岳を中心とした古期朝日深成岩類が分布し、荒川支流の玉川上流部においては、飯豊山を中心として飯豊花崗岩が分布する。角楢アダメロ岩体は、淡紅色を呈する角閃石含有黒雲母アダメロ岩を主とし、まれに弱片麻状組織を示す［朝日団体研究グループ 1987］。古期朝日深成岩類は、角閃石はんれい岩、閃緑岩、石英閃緑岩などを主とする西朝日複合塩基性岩体と、片麻状角閃石黒雲母花崗閃緑岩～花崗岩などを主とする大朝日花崗閃緑岩体、大玉花崗閃緑岩体、中岳花崗閃緑岩体及び相模アダメロ岩体からなる。飯豊花崗岩は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩～石英閃緑岩を主とする飯豊山花崗閃緑岩と、角閃石黒雲母花崗閃緑岩～花崗岩を主とする扒差岳花崗閃緑岩に分けられており、両岩体の境界付近にはマイロナイトが形成されている［高橋ほか 1996］。

新第三系は、荒川下流域から上流の山形県小国町に広く分布する。下流域においては、下位から前期中新世の礫岩、砂岩、酸性凝灰岩などからなる釜杭層、流紋岩体、及び中期中新世の泥岩を主とする七谷層･寺泊層などが分布する。小国町周辺においては、下位から前期中新世の黒雲母流紋岩質凝灰岩を主とする北小国層、礫岩・砂岩・泥岩を主とする小国層、安山岩溶岩・同質火山角礫岩を主とする弁当沢橋層、及び中期中新世の凝灰質砂岩を主とする明沢橋層、泥岩を主とする沼沢層などが分布する。

第四系としては、火山岩類は分布せず、河川沿いに礫・砂・泥からなる段丘堆積物が分布するほか、河口域においては礫・砂・泥からなる扇状地堆積物や砂丘堆積物などが分布する。

石材の産地

石製品に認められた石材の大部分は、上記した荒川水系の地質と整合していることから、その入手先として同水系の河床礫、段丘礫、扇状地堆積物中の礫等が推定される。一方、蛇紋岩は入手が難しい石材と

考えられ、新潟県下では糸魚川市や八海山などにその分布が知られている。

自然礫では、各遺構から出土した自然礫は、いずれも 100 個未満に満たないことから、遺構間における石材組成の比較や石材組成による由来の検討は難しい。ただし、Ⅷ層から検出された遺構出土自然礫の全体数量は 274 点であることから、Ⅷ層出土の自然礫との比較が可能である。遺構出土自然礫、遺構外出土自然礫のそれぞれの石材組成（第 18 図）は、いずれも流紋岩類、花崗岩類、砂岩、頁岩、石英斑岩などを主要石材とし、その他の石材の種類も類似する。したがって、Ⅷ層の遺構から検出された自然礫は、同層遺構外から出土した自然礫と同様の由来が推定され、これらの石材に認められた種類は、荒川水系の地質と整合することが指摘される。

Ⅺ層の遺構出土自然礫、遺構外出土自然礫（第 18 図）は、試料数が少ないため、両者を単純に比較することは難しいが、流紋岩類、花崗岩類及び砂岩が主要石材となっておりⅧ層と同様の傾向が示唆される。一方、Ⅻａ層の遺構外出土自然礫は、これらとは異なる組成を示しており、流紋岩類及び花崗岩類が少なく、凝灰岩類が多かった。ただし、これらの石材の種類も、荒川水系の地質に含まれるものであり、Ⅷ層やⅪ層の自然礫と同様に荒川水系の地質と整合する特徴と言える。

遺構ごとの石材組成（第 14 表）は、SD1377、SX2001、SB2200-P2、SB3030 において自然礫の石材組成と異なる特徴を示した。SD1377 は、同層の遺構外出土自然礫に比較的多く認められた石英斑岩が含まれず、また、比較的多く含まれる無斑晶流紋岩がほとんど認められない。SX2001 は、同層の遺構外出土自然礫にほとんど認められない流紋岩質溶結凝灰岩が高率で含まれる。SB2200-P2 は、他の遺構や遺構外出土自然礫に認められないスコリア質凝灰岩や溶結凝灰岩様の流紋岩が高率で含まれ、SB3030 は、SX2001 と同様に流紋岩質溶結凝灰岩が高率で含まれる。

以上の結果から、調査対象とした遺構出土自然礫、遺構外出土自然礫は、その組成からいずれも荒川水系に認められる石材から構成されると考えられる。また、Ⅻａ層では、このほかの遺構や基本土層出土自然礫と異なる石材組成を示したが、人為的な影響の有無については石材組成のみから判断することは困難である。また、遺構出土自然礫の石材組成では、一部の遺構において遺構外出土自然礫との比較から特異な石材組成が確認されたが、いずれも荒川水系の地質に由来する種類であり、これらの特徴を示した背景については今後の課題である。

今回の自然礫の調査は石材鑑定を主目的としたことから、自然礫の形状（円磨度や破砕の有無）、自然礫表面に認められる変色や付着物（被熱等の人為的要因に由来するもの）等の観察は行っていない。そのため、Ⅻａ層や一部の遺構出土礫に確認された特異な石材組成については、本分析結果とともに自然礫の出土状況や所見と合せて評価・検討することが望まれる。

水　晶　玉

試料は、透明度の高い石英からなる水晶であり、内部には曲線的に伸びる不規則なクラックが多数発達している。当試料に見られるクラックの組織は、火山岩類に含まれる石英の斑晶にしばしば認められる高温クラックに酷似する。水晶には一般にこのようなクラックは発達することはないため、焼成による要因などを考える必要がある。

なお、土器胎土に含まれる石英に高温クラックが生じる温度は、およそ 1,100℃以上とされている。共生する物質の種類により焼成温度は一般に低温側にシフトするが、水晶中に生じたクラックの要因が焼成であるとした場合、おおむねこの程度の高温焼成を想定する必要がある。

【引用・参考文献】

朝日団体研究グループ　1987 「朝日山地南西部の地質－その 1. 岩石記載と貫入関係－」『地球科学』41-5　p253-280
安藤一男　1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42　p73-88
石川茂雄　1994 『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会　p328
伊東隆夫　1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 31』京都大学木質科学研究所　p81-181
伊東隆夫　1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料 32』京都大学木質科学研究所　p66-176
伊東隆夫　1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料 33』京都大学木質科学研究所　p83-201
伊東隆夫　1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料 34』京都大学木質科学研究所　p30-166
伊東隆夫　1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料 35』京都大学木質科学研究所　p47-216
伊藤良永・堀内誠示　1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』 p23-45
植田弥生　2006 「出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 157集 住吉遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　p75-82
小川吉雄・加藤弘道・石川　実　1989 「リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法」『土肥誌』60　p160-163
鬼鞍　豊　1985 『土壌・水質・農業資材の保全』博友社　p316
小杉正人　1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27　p1-20
小林謙一　2008 「縄文土器の年代（東日本）」『総覧 縄文土器』小林達雄編、総覧縄文土器刊行委員会　p896-903
小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田啓五　2006 『小林弘珪藻図鑑』第 1 巻 ㈱内田老鶴圃　p531
近藤錬三　1982 『Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究 . 昭和 56 年度科学研究費（一般研究 C）研究成果報告書』 p32
近藤錬三　2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48　p46-64
角　靖夫・笹田政克・広島俊男・駒澤正夫　1985 『20 万分の 1 地質図幅「新潟」』地質調査所
島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』地球社　p176
杉山真二　2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と自然科学 3 考古学と植物学』辻　誠一郎（編著）同成社　p189-213
杉山真二・藤原宏志　1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学 19』辻　誠一郎（編著）同成社　p69-84
高橋　浩・山元孝広・柳沢幸夫　1996 『飯豊山地域の地質 , 地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）』地質調査所　p52
土谷信之・高橋　浩・柳沢幸夫・山元孝広・久保和也・駒沢正夫・広島俊男・内藤一樹　1999 『20 万分の 1 地質図幅「村上」』地質調査所
土壌環境分析法編集委員会編　1997 『土壌環境分析法』博友社　p427
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会　p642
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2008a 『新潟県村上市西部遺跡整理報告会発表要旨』p42
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2008b 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 179 集 中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ』 p78
日刊工業新聞社　1968 『焼結鉱組織写真および識別法』
林　昭三　1991 「日本産木材」『顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
原口和夫・三友清史・小林　弘　1998 「埼玉の藻類 - 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会　p527-600
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002a 「六百地遺跡の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告 第 13 六百地遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所　p13-42
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002b 「山屋遺跡群の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告 第 15 山屋遺跡群 前坪遺跡・銅鉄遺跡・フケ田遺跡・天王前遺跡・水口沢遺跡』新潟県神林村教育委員会・山武考古学研究所　p17-38
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002c 「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 115 集 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　p45-59
パリノ・サーヴェイ株式会社　2003 「桃川遺跡群の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告 第 19 桃川遺跡群 石川

遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡』新潟県岩船郡神林村教育委員会・山武考古学研究所　p18-55

パリノ・サーヴェイ株式会社　2004a 「木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 134 集 下割遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p39-44

パリノ・サーヴェイ株式会社　2004b 「丸木舟転用井戸枠の樹種」『下前川原遺跡 新潟県豊栄市下前川原遺跡発掘調査報告書』新潟県豊栄市教育委員会　p60-61

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005a 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 148 集 西部遺跡 I』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p49-74

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005b 「木製品樹種同定及び鉄滓成分分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 140 集 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p47-54

パリノ・サーヴェイ株式会社　2006 「西部遺跡の珪藻・花粉・植物珪酸体、種実・樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 163 集 西部遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p36-46

パリノ・サーヴェイ株式会社　2007 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 176 集 窪田遺跡 I 』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p94-99

パリノ・サーヴェイ株式会社　2008b 「西部遺跡の自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 178 集 西部遺跡 V』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p37-46

パリノ・サーヴェイ株式会社　2008 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 181 集 田屋道遺跡 I・宮の越遺跡 I』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p56-73

パリノ・サーヴェイ株式会社　2009a 「西部遺跡の自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 194 集 西部遺跡Ⅳ・桜林遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p66-85

パリノ・サーヴェイ株式会社　2009b 「考察とまとめ -A 西部遺跡の古植生変遷および稲作の可能性について -」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 194 集 西部遺跡Ⅳ・桜林遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p86-88

平井信二　1996 『木の大百科 解説編』朝倉書店　p642

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫　1996 「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－」『日本文化財科学会 第 13 回大会 研究発表要旨集』日本文化財科学会　p62-63

松葉礼子　2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 97 集 大武遺跡 I（中世編）』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p42-47

三村昌史・植田弥生　2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 128 集 仲田遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p69-71

宮脇　昭　1985 『日本植生誌　中部』至文堂　p604

吉川純子　2007 「窪田遺跡より出土した木製品の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 176 集 窪田遺跡 I』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　p100-104

渡辺仁治　2005 『淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo,pH 耐性能』内田老鶴圃　p666

Asai,K.& Watanabe,T.　1995 『Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa.*Diatom*』10　p35-47

Krammer,K.　1992 『PINNULARIA.eine *Monographie der europaischen Taxa.*BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA *BAND26.* J.CRAMER,』 p353

Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.　1988 「*Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2.* 」『Gustav Fischer Verlag』p536

Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.　1991a 「*Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. In: Suesswasserflor von Mitteleuropa.Band2/3.* 」『Gustav Fischer Verlag』p230

Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.　1991b 「*Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula*（*Lineolatae*）*und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4.*」『Gustav Fischer Verlag』 p248

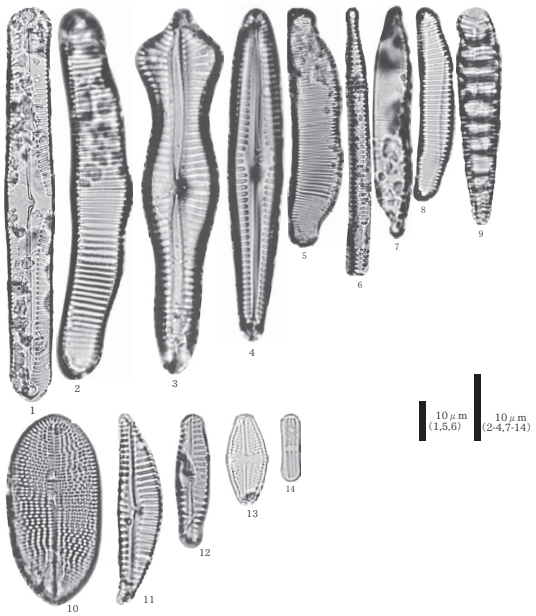
Krammer,K.& Lange-Bertalot,H.　1986 「*Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/1.* 」『Gustav Fischer Verlag』 p876

Lowe,R.L　1974 『*Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms*』 p334 In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat.Environmental Res.Center Office of Res. Develop.,U.S.Environ.Protect.Agency,Cincinati.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） 2006 「針葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修） 海青社 p70［Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］

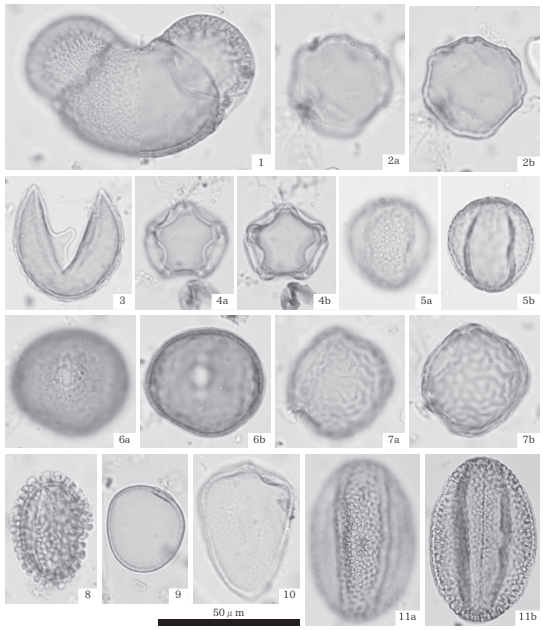
Round,F.E..,Crawford,R. M.& Mann,D.G　1990 『*The diatomSDiology & morphology of the genera*』Cambridge University Press, Cambridge　p747

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 「広葉樹材の識別」『IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修） 海青社　p122［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］



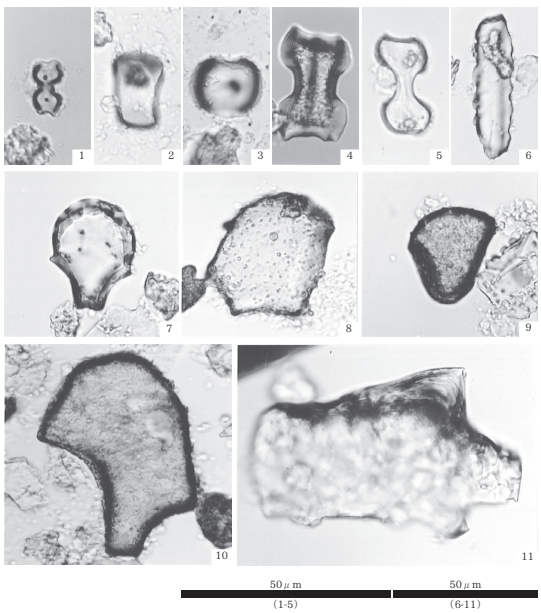
1.*Pinnularia gibba* Ehrenberg（10C3区;試料11下部）
2.*Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst（10C3区;試料11下部）
3.*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg（SD2127;試料3）
4.*Gomphoneis rhombica* (Fricke)Merino et al.（SD2127;試料3）
5.*Eunotia praerupta* var. *bidens* Grunow（10C3区;試料11下部）
6.*Synedra ulna* (Kuetz.)Ehrenberg（10C3区;試料6）
7.*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow（8D20区;試料2）
8.*Eunotia minor* (Kuetz.)Grunow var. *minor*（10C3区;試料11下部）
9.*Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck（10C3区;試料11下部）
10.*Cocconeis lineata* Ehrenberg（SD2127;D-D' 5層）
11.*Encyonema silesiacum* (Bleisch)D.G.Mann（8D20区;試料2）
12.*Reieria sinuata* (W.Greg.)Kociolek et Stoermer（SD2127;G-G' 5層）
13.*Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann（10C3区;試料6）
14.*Diadesmis contenta* var. *biceps* (Arnott ex Grunow in Van Heurck（8D20区;試料2）

第19図　珪藻化石



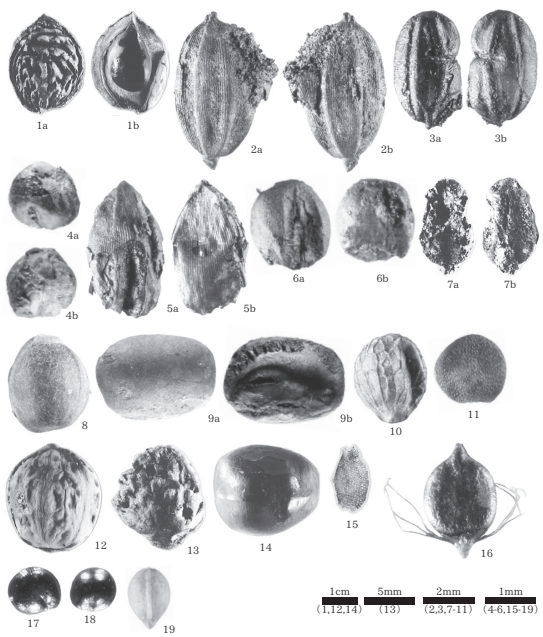
1.マツ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯A上部）
2.サワグルミ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯A上部）
3.スギ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯B上部）
4.ハンノキ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯B上部）
5.コナラ属コナラ亜属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯B上部）
6.ブナ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯B上部）
7.ニレ属ーケヤキ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯A上部）
8.モチノキ属（西部遺跡V 42･43区;腐植帯A上部）
9.イネ科（西部遺跡V 42･43区;腐植帯A上部）
10.カヤツリグサ科（西部遺跡V 42･43区;腐植帯A上部）
11.ソバ属（西部遺跡II;SE844;5層）

第20図　花粉化石



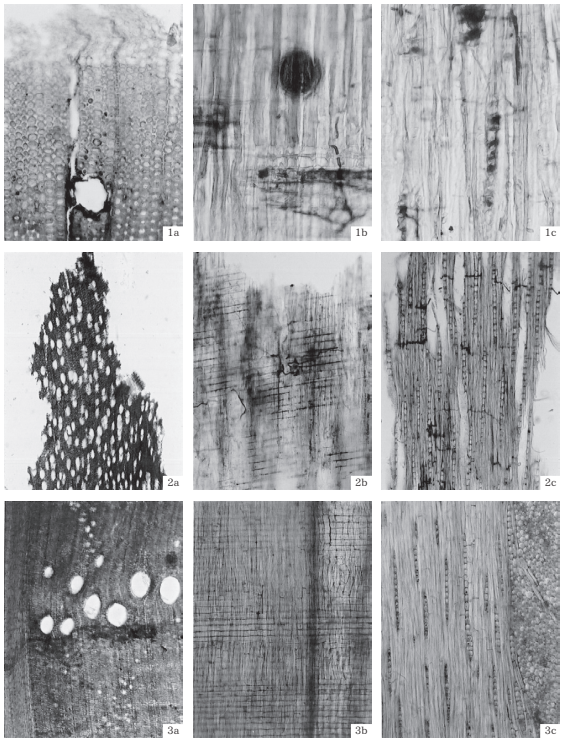
1.イネ属短細胞珪酸体（8D20区;試料3）
2.クマザサ属短細胞珪酸体（8D20区;試料2）
3.ヨシ属短細胞珪酸体（8D20区;試料2）
4.コブナグサ属短細胞珪酸体（Ⅻ層;試料2-2）
5.ススキ属短細胞珪酸体（8D20区;試料2）
6.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（8D20区;試料2）
7.イネ属機動細胞珪酸体（8D20区;試料3）
8.クマザサ属機動細胞珪酸体（8D20区;試料2）
9.ウシクサ族機動細胞珪酸体（8D20区;試料2）
10.ヨシ属機動細胞珪酸体（8D20区;試料2）
11.イネ属穎珪酸体（8D20区;試料3）

第21図　植物珪酸体



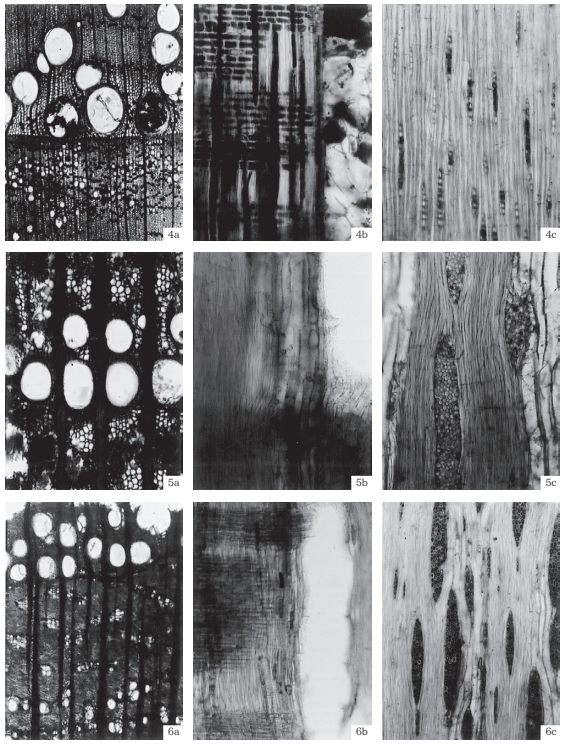
1.モモ 核（SX2001-SE1）
2.イネ 穎（SB1500-SK2255;2層）
3.イネ 胚乳（SB1500-SK2192;2層）
4.アワ近似種 果実（SB1500-SK2255;2層）
5.ヒエ近似種 果実（SB1500-SK2192;2層）
6.キビ近似種 果実（SK2235;2層）
7.コムギ 胚乳（SE844;5層）
8.アサ 種子（SE3220;8,9,14層）
9.マメ類 種子（SB1500-SK2192;2層）
10.エゴマ 果実（SX2001-SE3;7層）
11.ナス科 種子（SX2001-SE3;7層）
12.オニグルミ 核（SX2001-SE1;11層）
13.ブナ 殻斗（SE843;11層）
14.トチノキ 種子（SX2001-SE1）
15.タニウツギ属 種子（SE843;11層）
16.サナエタデ近似種 果実（SX2001-SE3;7層）
17.アカザ科 種子（SE3220;15層）
18.ヒユ科 種子（SX2001-SE3;7層）
19.スミレ属 種子（SX2001-SE3;7層）

第22図　種実遺体



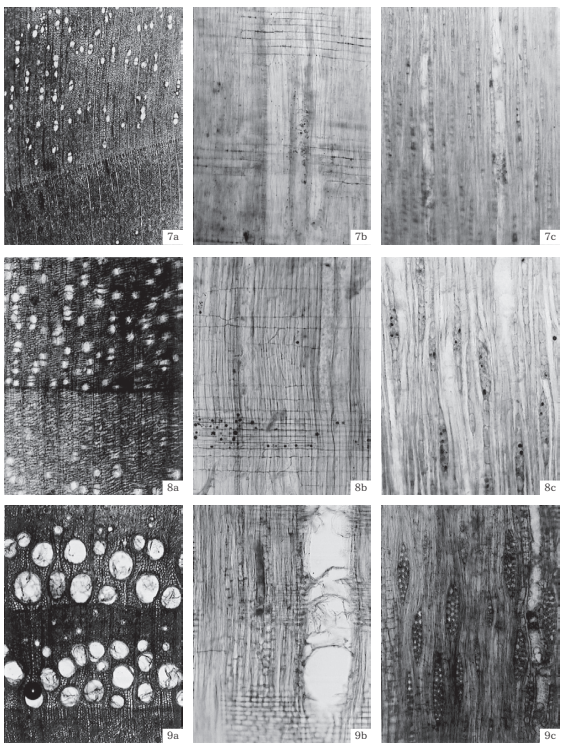
1.マツ属複維管束亜属（SB2200-P2）
2.ヤナギ属（P3244）
3.コナラ属コナラ亜属コナラ節（P3246）
a:木口,b:柾目,c:板目

第23図　木材（1）



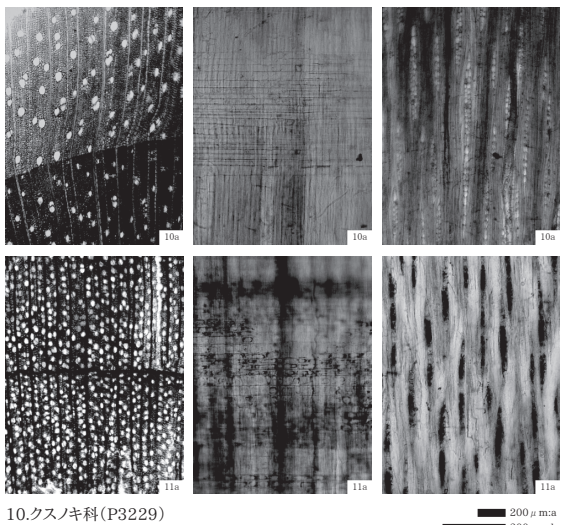
4.クリ（SB2020-P11）
5.ケヤキ（SB2200-P16）
6.ニレ属（SB3230-P7）
a:木口,b:柾目,c:板目

第24図　木材（2）



7.シラキ（SE040;No.25）
8.エゴノキ属（SB3230-P4）
9.トネリコ属（P3143）
a:木口,b:柾目,c:板目

第25図　木材（3）



10.クスノキ科（P3229）
11.カツラ（P3218）
a:木口,b:柾目,c:板目

第26図　木材（4）

2　西部遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

株式会社九州テクノリサーチ・TAC センター　大澤正己・鈴木瑞穂

A　はじめに

西部遺跡は新潟県村上市牛屋に所在する。調査地区内からは、複数の鍛冶炉を伴う大型の掘立柱建物が2棟検出された。また鍛冶滓、羽口、粒状滓、鍛造剝片などの鍛冶関連遺物も多数出土している。遺跡内での鉄器生産の実態を検討する目的から、金属学的調査を行う。

B　調査方法

1）供　試　材

第15表に示す。鋳造・鍛冶関連遺物計22点の調査を行った。

2）調査項目

肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴や、特殊金属探知機での反応の有無など、調査前の観察所見を記載した。

マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μと1 μで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して、50倍から400倍で写真撮影を行った。なお金属鉄の調査では3%ナイタル（硝酸アルコール液）を腐食（Etching）に用いた。

ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。また金属組織（合金相）の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角を持ったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた凹みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50 ～ 200gfで測

定した。

EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

鉱滓中の鉱物組成や、金属合金各相の組成の確認を目的とする。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。さらに標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される金属（合金）や鉱滓中の晶出物ほど明るく、軽い元素で構成される晶出物ほど暗い色調で示される。これを利用して組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、特性Ｘ線像の撮影も適宜行った。

化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

耐　火　度

主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。

胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、１分間当り 10℃の速度で温度上昇させ、1000℃以降は昇温速度を 4℃におとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

Ｃ　調 査 結 果

SEI-1（遺物 No.73）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：52g 弱のごく小型の椀形鍛冶滓の破片である。側面３面が破面。内部には中小の気孔が少量散在する。滓の色調は黒灰色。下面には灰白色で砂質の鍛冶炉床などが固着する（唯一、Ⅺ層出土（9世紀中葉））。

（2）顕微鏡組織：第 29 図１①～③に底部側断面を示す。①上側の明灰色部分は滓部で、②③はその拡大である。白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO{\cdot}SiO_2$）が晶出する。高温沸し鍛接時の鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の調査を行った。硬度値は 468Hv、490Hv であった（100gf）。ウスタイトの文献硬度値 450 ～ 500Hv の範

囲内であり、ウスタイトに同定される[1)]。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）は 59.94%と高値であった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は＜ 0.01%、酸化第 1 鉄（FeO）65.67%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）12.72%の割合である。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）17.29%とやや低めで、塩基性成分（CaO ＋ MgO）も 1.17%を含む。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の二酸化チタン（TiO_2）は 0.16%、バナジウム（V）が＜ 0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）も 0.09%、銅（Cu）＜ 0.01%と低めである。

当資料は砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響がほとんどなく、鉄酸化物主体の滓であった。この特徴から、当資料は鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた、鍛錬鍛冶滓と推定される。

SEI-2（遺物 No.338）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：重層し 480g 弱とやや大型で不定形の椀形鍛冶滓である。側面 3 面は破面。滓の色調は暗灰色である。上面には長さ 2cm 以下の木炭痕が散在する。また下面には、灰色の鍛冶炉床土が部分的に固着する。

（2）顕微鏡組織：第 29 図④～⑥に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の微細な淡茶褐色多角形結晶もウルボスピネルで、鉄チタン酸化物が確認される。砂鉄系精錬鍛冶滓の晶癖である。

また⑤⑥中央の微細な不定形明白色部は金属鉄である。3%ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite: α鉄）単相の組織が確認された。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 508Hv、516Hv、525Hv であった（100gf）。ウスタイトとしては高値傾向を示したが、粒内の微細なウルボスピネルの影響と推測される。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）51.79％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.11%、酸化第 1 鉄（FeO）51.73%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）16.40%の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 23.31%で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 1.85%と低値である。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 3.19%、バナジウム（V）が 0.13%であった。また酸化マンガン（MnO）0.20%、銅（Cu）は＜ 0.01%と低値である。

当資料中には、砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響が見られて、不純物除去の精錬鍛冶滓に分類される。

SEI-3（遺物 No.335）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：153g を測り平面が比較的きれいな円状の椀形鍛冶滓である。滓の色調は黒灰色で、表面には黄～茶褐色の土砂が薄く固着する。また側面には粒状滓が 3 点付着している。上面は中央がやや凹み、長さ 1cm 前後の木炭痕が散在する。下面は粉炭による細かい凹凸が著しい。

（2）顕微鏡組織：第 30 図①～③に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶

1）ウスタイトは 450 ～ 500Hv、マグネタイトは 500 ～ 600Hv、ファイヤライトは 600 ～ 700Hv の範囲が提示されている［日刊工業新聞社 1968］。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

出する。またウスタイト粒内に少量点在する、微細な暗褐色結晶はヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）と推測される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上圧痕の写真を割愛したが、白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 488Hv であった（100gf）。ウスタイトに同定される。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）56.26%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜ 0.01%、酸化第 1 鉄（FeO）58.23%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）15.72%の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）20.35%で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 1.38%と低値である。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.21%、バナジウム（V）＜ 0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.24%、銅（Cu）は＜ 0.01%と低い。

当資料は椀形鍛冶滓（SEI-1）と同様、砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響がほとんど見られない。以上の特徴から、高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。

SEI-4（遺物 No.331）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：68g 弱のごく小型の椀形鍛冶滓である。側面 2 面が破面。上面には細かい気孔の残るガラス質滓の付着は、羽口先端溶融物と推定される。滓の地の色調は黒灰色で、下面には若干灰色の鍛冶炉床土が固着する。破面の気孔は少なく、緻密な滓である。

（2）顕微鏡組織：第 30 図④～⑥に示す。微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、発達した淡灰色長柱状結晶ファイヤライトが晶出する。またウスタイト粒内の微細な淡褐色結晶は、ウルボスピネルとヘーシナイトを主な端成分とする固溶体[1)]と推測される。

⑤⑥中央の微細な不定形明白色部は金属鉄である。3%ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite: α鉄）単相の組織が確認された。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、淡灰色柱状結晶の調査を行った。硬度値は 620Hv であった（200gf）。ファイヤライトの文献硬度値 600 ～ 700Hv の範囲内であり、ファイヤライトに同定される。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）51.86%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第 1 鉄（FeO）60.53%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）6.82%の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）28.57%で、塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 1.95%と低値であった。また砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 1.24%、バナジウム（V）が 0.06%であった。酸化マンガン（MnO）は 0.10%、銅（Cu）＜ 0.01%と低値である。

当資料は砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響が若干残る。このため精錬鍛冶後半段階の反応副産物と推測される。また、9 世紀中葉に属する SEI-1 椀形滓との類似点が指摘されていたが随伴微量元素の酸化クロム（Cr_2O_3）0.03%とわずかに高めは原料鉄の差異を示すものであろう。

SEI-5（遺物 No.906）：再結合滓

（1）肉眼観察：280g を量るやや大型で不定形の再結合滓破片である。茶褐色の土砂中には、ごく微細

1）「第 5 章　鉱物各論　D . 尖晶石類・スピネル類（Spinel Group）」［黒田吉益・諏訪兼位 1983］の記載に加筆。
尖晶石類の化学組成の一般式は XY2O4 と表記できる。X は 2 価の金属イオン、Y は 3 価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある（略）。

な鉄滓破片や木炭片、粒状滓、鍛造剝片、鉄床石の破片などが多数混在する。

（2）マクロ組織：第 31 図に示す。内部の鉄滓破片は砂鉄製錬滓が主体であった。またごく微細な鍛造剝片が多数含まれている。さらに微細な銹化鉄粒や、木炭破片が確認された。

（3）顕微鏡組織：第 31 図②～⑤に示す。③は微細な鍛造剝片が、集中するか所である。

④は製錬滓の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO{\cdot}TiO_2$）が晶出する。火山岩起源の高チタン砂鉄（含チタン鉄鉱）を製錬した反応副産物である。

また⑤中央は微細な銹化鉄粒である。内部に過共析組織(C＞0.77%)痕跡が残る。この金属組織痕跡から、炭素含有量は 1.5%前後の高炭素鋼と推定される。

以上の調査の結果、遺跡内に搬入された鍛冶原料の性状、及び作業内容を示唆する遺物群が確認された。

滓中にはごく微細な砂鉄製錬滓が多数混在していた。このため鍛冶原料の鉄塊表層に固着した、砂鉄製錬滓を叩き落とすなど、精錬鍛冶作業前の事前処理を行っていたものと推測される。また熱間での鍛打作業で生じた鍛造剝片も、多数含まれている。

SEI-6（遺物 No.880）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：平面長楕円状で、重層して 793g と大型の椀形鍛冶滓である。ほぼ完形で、側面は一部二段状になっている。表面は風化気味で色調は灰褐色を呈する。また上面は平坦気味で、木炭痕が薄く散在する。下面は浅い皿状で、部分的に灰色の鍛冶炉床土が固着する。

（2）顕微鏡組織：第 32 図に示す。①②は上面側で、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰長柱状結晶ファイヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中に散在する微細な明白色粒は金属鉄である。

③④は下面である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰柱状結晶ファイヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、淡茶褐色多角形結晶の調査を行った。硬度値は 613Hv、652Hv であった（200gf）。ウルボスピネルに同定される。

また白色樹枝状結晶の硬度値は 475Hv、496Hv であった。ウスタイトに同定される。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。分析試料採取位置では、上・下段が一体化していたため、上・下段を区分せずに分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）49.04%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜ 0.01%、酸化第 1 鉄（FeO）47.35%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）17.49％の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は 25.47%で、塩基性成分（CaO + MgO）1.96%を含む。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 3.65%、バナジウム（V）0.17%であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.19%、銅（Cu）は 0.03%であった。

断面の鉱物組成から、当資料は下段が鍛冶原料（製錬系鉄塊）の不純物除去作業で生じた精錬鍛冶滓。上段は鉄素材を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。一連の鍛冶作業(精錬～鍛錬鍛冶)を、連続して行ったことを示す遺物と言える。

SEI-7（遺物 No.876）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：平面不整円状の二段椀形鍛冶滓で 355g を量る。上面端部には、ごく小型の椀形鍛冶滓が固着する。上・下段とも色調は黒灰色である。上面は平坦で木炭痕が散在する。下面は細かい木炭痕に

よる凹凸があり、灰色の鍛冶炉床土が点々と固着する。

（2）顕微鏡組織：第 32 図⑤～⑦に示す。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、淡茶褐色多角形結晶の調査を行った。硬度値は 636Hv、658Hv、683Hv、692Hv であった（200gf）。ウルボスピネルに同定される。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）46.76%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜ 0.01%、酸化第 1 鉄（FeO）51.52%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）9.60%の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 28.78%で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 3.27%であった。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の二酸化チタン（TiO_2）は 5.64%、バナジウム（V）0.25%とやや高めであった。また酸化マンガン（MnO）は 0.29%、銅（Cu）は＜ 0.01%と低値であった。

当資料の下段は砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響が顕著であり、精錬鍛冶滓に分類される。

SEI-8（遺物 No.872）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：96g と極小の平面不整楕円状で完形の椀形鍛冶滓である。滓の色調は黒灰色。全体に最大 1cm 前後の木炭痕による凹凸が著しく、木炭の噛み込みも見られる。

（2）顕微鏡組織：第 33 図①～③に示す。①左下の暗色部は滓中の木炭破片で、②はその拡大である。

また①右側の灰色部は滓部で、③はその拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル、白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、淡茶褐色多角形結晶の調査を行った。硬度値は 633Hv、660Hv、677Hv、695Hv であった（50gf）。ウルボスピネルに同定される。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）49.28%に対して、金属鉄（Metallic Fe）＜ 0.01%、酸化第 1 鉄（FeO）42.41%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）23.33%の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 15.55%と低めで、塩基性成分（CaO ＋ MgO）も 1.91%と低値である。

また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 8.85%、バナジウム（V）が 0.38%と高値であった。また酸化マンガン（MnO）も 0.42%と高めである。銅（Cu）は＜ 0.01%と低値であった。

当資料は砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響が著しく、精錬鍛冶滓に分類される。

SEI-9（遺物 No.869）：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：平面楕円状で 64g 強と小型の椀形鍛冶滓である。表面は茶褐色の土砂に覆われる。滓の地の色調は黒灰色で、表層部は広い範囲が薄く剝離している。また特殊金属探知機の H（○）で反応があり、内部に金属鉄が含まれる。

（2）顕微鏡組織：第 33 図④～⑥に示す。④の上側は滓部で、⑤はその拡大である。淡茶褐色六角形結晶ウルボスピネル、白色小粒状結晶ウスタイト、淡灰色長柱状結晶ファイヤライトが晶出する。精錬鍛冶滓の晶癖である。

また④下側の明白色部は金属鉄で、⑥はその拡大である。滓中に不定形のごく微細な金属鉄が多数散在

する。鍛冶原料となり得るまとまったものではなかった。3%ナイタルで腐食したところ、ほとんど炭素を含まないフェライト単相の組織が確認された。

（3）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、金属鉄部の硬度を測定した。硬度値は 102Hv、105Hv、109Hv であった（50gf）。フェライト単相の組織としてはやや硬質の値であった。燐（P）など、硬度を上昇させる元素が固溶している可能性が考えられる。

（4）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）45.58%に対して、金属鉄（Metallic Fe）1.38%、酸化第 1 鉄（FeO）30.68%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）29.10%の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 19.91%で、このうち塩基性成分（CaO ＋ MgO）は 1.74%と低値である。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 2.41%、バナジウム（V）は 0.16%であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.84%と高めで、銅（Cu）は 0.01%と低値である。

当資料は、砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響があるため、精錬鍛冶滓に分類される。また上述のように、金属鉄はごく微細なものが散在する状態で、鍛冶原料になり得るものではない。鍛冶原料（製錬系鉄塊）の不純物除去時に、ごく微細な金属鉄を含む滓が溶融・分離したものと推測される。

SEI-10（遺物 No.882 ～ 887）：粒状滓[1)]

SEI-10　イ－ 1　1.8mm 径（磁着：やや弱）

（1）肉眼観察：色調は黒灰色できれいな球状を呈する。表面は平滑で、やや浅い凹みが見られる。

（2）マクロ組織：第 34 図①に示す。白色鉱物相とともに内部には、最大 0.2mm 程の細かい気孔が多数散在する。

（3）顕微鏡組織：第 34 図②に示す。ごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。

SEI-10　イ－ 2　1.5mm 径（磁着：やや弱）

（1）肉眼観察：色調は暗灰色できれいな球状を呈する。表面には木炭痕と推測される凹みがある。

（2）マクロ組織：第 34 図③に示す。内部は白色鉱物相で構成され最大 0.4mm 程の細かい気孔が多数散在する。また中心の暗色部は、熱影響を受けて表層部が溶融した無色鉱物と推測される。

（3）顕微鏡組織：Photo 第 34 図④に示す。ごく微細な灰褐色樹枝状結晶が、暗黒色ガラス質滓中に晶出する。また写真右側は被熱鉱物部分の拡大である。

SEI-10　イ－ 3　1.0mm 径（磁着：やや弱）

（1）肉眼観察：色調は暗灰色で、いびつな球状を呈する。また表面には 1 か所大きな気孔がある。

（2）マクロ組織：第 34 図⑤に示す。写真左側の大きな凹部は、表面観察時の気孔部分である。ほかにも最大 0.3mm 程の気孔が散在する。

（3）顕微鏡組織：第 34 図⑥に示す。非常に微細な白色樹枝状結晶は、ウスタイトと推測される。

SEI-10　ロ－ 1　1.8mm 径（磁着：やや強）

（1）肉眼観察：色調は暗灰色で、いびつな球状を呈する。表面には細かい凹凸があり、薄板状の付着物が見られる。

（2）マクロ組織：第 34 図⑦に示す。白色鉱物相の面積比は低く不定形で大型の空洞が、中心からずれ

1）粒状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶炉の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である。

た状態で（写真右下）存在する。ほかにも最大 0.35mm 程の気孔が多数散在する。

（3）顕微鏡組織：第 34 図⑧に示す。大粒の白色樹枝状結晶ウスタイトが凝集気味に晶出する。

SEI-10　ロー 2　1.5mm 径（磁着 : やや強）

（1）肉眼観察：色調は暗灰色できれいな球状を呈する。表面は平滑で、1 か所茶褐色の錆が付着する。

（2）マクロ組織：第 35 図①に示す。白色鉱物相がリング状に晶出し、中心部に大型の空洞が存在する。

（3）顕微鏡組織：第 35 図②に示す。白色樹枝状結晶ウスタイトが凝集気味に晶出する。局部に金属鉄を残す。

SEI-10　ロー 3　1.0mm 径（磁着 : やや強）

（1）肉眼観察：色調は暗灰色できれいな球状を呈する。表面は平滑である。

（2）マクロ組織：第 35 図③に示す。表層から風化が進み、白色鉱物相は縦割状にわずかに遺存。内部には最大 0.1mm ほどの細かい気孔が散在する。

（3）顕微鏡組織：第 35 図④に示す。ごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、灰褐色多角形結晶マグネタイトが晶出する。

分析調査を実施した 6 点からは、すべて鉄酸化物の結晶（ウスタイト、マグネタイト）が確認された。鉄素材の熱間加工時に、鉄素材が酸化して生じた微細遺物と推測される。

SEI-11（遺物 No.888 ～ 893）：鍛造剝片[1)]

SEI-11　イー 1　3.6 × 2.6 × 0.3mm（磁着 : やや弱）

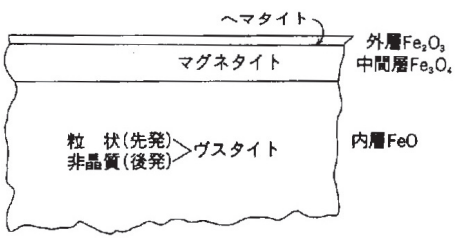
（1）肉眼観察：色調は表・裏面とも黒灰色で、一部茶褐色の錆が付着する。表・裏面とも緩やかな波状の凹凸が見られる。

（2）マクロ組織：第 35 図⑤に示す。断面は王水で腐食している。裏面の凹凸に伴う、厚みの変動が見

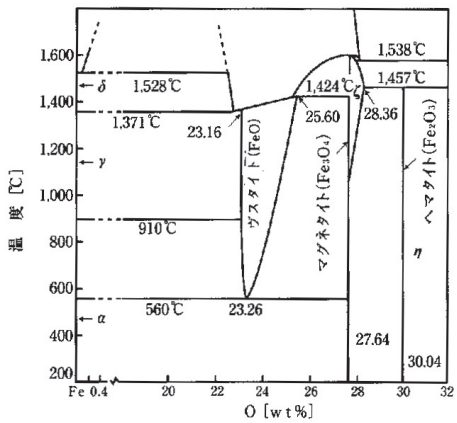
1）　鍛造剝片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剝離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる［大澤 1991、2002］。

鍛造剝片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite : Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4）、大部分は内層ウスタイト（Wustite : FeO）の 3 層から構成される。このうちのヘマタイト相は 1,450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は 570℃以上で生成されるのは Fe-O 系平衡状態図から説明される。

鍛造剝片を王水（塩酸 3 : 硝酸 1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite : Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4）は黄変する。内層のウスタイト（Wustite : FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ウスタイト（Wustite : FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する［森岡 1975］。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる［大澤 1992］。



第 27 図　鍛造剝片 3 層分離型模式図



第 28 図　Fe-O 系平衡状態図

られる。

（3）顕微鏡組織：第 35 図⑥に示す。表層（写真上側）には、白色針状の不連続状ヘマタイト（Hematite:Fe_2O_3）が確認される。またその内側の中間層の明灰色部はマグネタイト、内層暗灰色部は非晶質ウスタイトである。経時風化の内部劣化により腐食（etching）が不均一となる。

SEI-11　イ－２　4.0 × 1.7 × 0.15mm（磁着：やや弱）

（1）肉眼観察：地の色調は表・裏面とも黒灰色であるが、茶褐色の錆がかなり広い範囲に付着する。また表・裏面ともごく細かい凹凸があるが、比較的平坦な剝片である。

（2）マクロ組織：第 35 図⑦に示す。埋込み時の破砕により水平度が保たれていない。断面は王水で腐食している。薄手で平坦な剝片である。

（3）顕微鏡組織：第 35 図⑧に示す。表層に白色針状のヘマタイト、その内側の中間層に明灰色部のマグネタイト、内層は暗灰色の非晶質ウスタイトで構成される。

SEI-11　イ－３　2.3 × 1.7 × 0.1mm（磁着：やや弱）

（1）肉眼観察：色調は表・裏面とも青灰色で、微かな凹凸が見られる。

（2）マクロ組織：第 36 図①に示す。断面は王水で腐食している。薄手で比較的平坦な剝片である。

（3）顕微鏡組織：第 36 図②に示す。最表層に明白色のヘマタイト、中間層に明灰色部で肥大したマグネタイト、内層は暗灰色の非晶質ウスタイト層が確認される。3 層が明瞭な酸化膜である。

SEI-11　ロ－１　2.8 × 2.3 × 0.3mm（磁着：やや強）

（1）肉眼観察：地の色調は表・裏面とも黒灰色であるが、茶褐色の錆がかなり広い範囲に付着する。また表・裏面とも細かい凹凸が見られる。

（2）マクロ組織：第 36 図③に示す。断面は王水で腐食しているが、風化のため腐食効果が少なく、ほとんど変化が見られなかった。また剝片下側に細かい亀裂が発生し、酸化膜ではなくて錆化鉄片の様相を持つ。

（3）顕微鏡組織：第 36 図④に示す。鉄酸化膜の 3 層構造は確認されなかった。鉄酸化物ではあるが、鍛造鉄器の剝離片などの可能性が高いと考えられる。

SEI-11　ロ－２　3.2 × 2.0 × 0.15mm（磁着：やや強）

（1）肉眼観察：地の色調は表・裏面とも黒灰色で、茶褐色の錆がかなり広い範囲に付着する。また表・裏面とも比較的平滑である。

（2）マクロ組織：第 36 図⑤に示す。断面は王水で腐食している。薄手で比較的平坦な剝片である。

（3）顕微鏡組織：第 36 図⑥に示す。表層に白色針状のヘマタイト、その内側の中間層は明灰色部で肥大したマグネタイト、内層は暗灰色の非晶質ウスタイトが確認される。3 層分離の剝片である。

SEI-11　ロ－３　3.0 × 2.7 × 0.1mm（磁着：やや強）

（1）肉眼観察：地の色調は表・裏面とも黒灰色で、茶褐色の錆がかなり広い範囲に付着する。また表面は比較的平滑であるが、裏面には環状の突出部がある。

（2）マクロ組織：第 36 図⑦に示す。断面は王水で腐食している。薄手で比較的平坦な剝片ではあるが下側にわずかに突起 2 か所を持つ剝片である。

（3）顕微鏡組織：第 36 図⑧に示す。表層に白色針状のヘマタイトが若干確認される。その内側中間層の薄い明灰色部はマグネタイト、内層は暗灰色部ウスタイトで、粒状痕跡をとどめる。

分析調査を実施した 6 点のうち、5 点（イ－１～３、ロ－２、３）には、鉄酸化物の 3 層構造が確認された。

鉄素材を熱間で鍛打加工した時、表層の酸化膜が剥離・飛散したもの（鍛造剥片）と言える。鍛打作業も後半から終りの仕上時の派生物。残る 1 点（ロ－ 1）も鉄酸化物であるが、鍛造鉄器の剥離片などの可能性が高いと考えられる。

SEI-12（遺物 No.423）：羽口

（1）肉眼観察：熱影響を受けて外面表層がガラス質化した、羽口先端部破片である。内径（通風孔部）は約 2cm と推定される。胎土は緻密で微細な砂粒を含む。

（2）顕微鏡組織：第 37 図①②に示す。外面表層のガラス質滓部分である。ごく微細な灰褐色多角形結晶マグネタイトが晶出する。

（3）化学組成分析：第 16 表に示す。強熱減量（Ig loss）0.71%と低値であった。強い熱影響を受けて、ほとんど結晶構造水が飛散した状態での分析である。鉄分（Fe_2O_3）は 5.50%とやや高めで、酸化アルミニウム（Al_2O_3）は 15.56%と低めであった。耐火性には不利な成分と言える。

（4）耐火度：1062℃であった。鍛冶羽口としても、やや耐火性の低い範疇に入る。鍛冶作業に伴う先端の溶損は、比較的速かったものと推測される。

SEI-13（遺物 No.2365）：鉄塊系遺物

（1）肉眼観察：表面全体が茶褐色の土砂で覆われた、22g のごく小型の鉄塊系遺物である。また土砂中には、微細な木炭破片が複数含まれている。ごくわずかに暗茶褐色の鉄錆化物が観察されるが、特殊金属探知機での反応はなく、完全に錆化していると推測される。

（2）顕微鏡組織：第 37 図③～⑥に示す。③ごくわずかに滓部が確認されるが、まとまりのよい小鉄塊であった。④は滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。これは鉄塊の加熱に伴い生じたものと推測される。

また⑤⑥は錆化鉄部の拡大で、過共析組織痕跡が残存する。この金属組織痕跡から、炭素含有量は 1.3%前後の高炭素鋼と推定される。

（3）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）50.51%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.01%、酸化第 1 鉄（FeO）11.14%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）59.82%の割合であった。炭素（C）量は 1.25%を含む。また造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は 14.13%であるが、これは土砂の付着などの影響と考えられる。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.12%、バナジウム（V）＜ 0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）は 0.27%、銅（Cu）は 0.01%と低値である。

当資料は付着滓の鉱物組成から、鍛冶処理途中の鉄塊系遺物と推定される。また金属組織痕跡から、炭素含有量 1.3%前後の高炭素鋼であることが明らかとなった。

SEI-14（遺物 No.2366）：鉄塊系遺物

（1）肉眼観察：表面全体が茶褐色の土砂で覆われた、32g の小型の鉄塊系遺物である。特殊金属探知機の M（◎）で反応があり、内部には金属鉄が残存する。

（2）マクロ組織：第 38 図①に示す。表層にごく薄く製錬滓が付着するが、鉄主体の遺物であった。また芯部の明白色部は、金属鉄である。

（3）顕微鏡組織：第 38 図②～⑤に示す。②の上側は付着滓で、③はその拡大である。発達した淡茶褐

色多角形結晶ウルボスピネル、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。
②下側の明灰色部は金属鉄である。3%ナイタルで腐食した組織を示す。白色多角形状のフェライト（Ferrite：α鉄）及び黒色層状のパーライト（Pearlite）が析出する、亜共析組織であった。パーライトの面積率から、炭素含有量 0.4%程度の鋼と判断される。また⑤中央の粒状黄褐色部は、硫化鉄（FeS）と推定される。

（4）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、金属鉄部（亜共析組織）の調査を実施した。硬度値は 176Hv、176Hv、196Hv であった。組織に見合った値である。

（5）化学組成分析：第 16 表に示す。全鉄分（Total Fe）51.34%に対して、金属鉄（Metallic Fe）13.54%、酸化第 1 鉄（FeO）29.46%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）21.30%の割合であった。造滓成分（SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ K_2O ＋ Na_2O）は 6.19%であるが、これは付着土砂の影響も受けた値と考えられる。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の起源の二酸化チタン（TiO_2）は 1.62%、バナジウム（V）は 0.10%であった。酸化マンガン（MnO）は 1.42%と高値で、銅（Cu）は 0.02%であった。

付着滓の鉱物組成から、当資料は鍛冶作業前の原料鉄（製錬鉄塊系遺物）と推定される。製鉄原料は火山岩起源の高チタン砂鉄であり、周辺地域の製鉄遺跡で生成された鉄塊が、鍛冶原料として搬入された可能性が高い。

また金属鉄部は、炭素含有量 0.4%程度の鋼であった。

SEI-15（遺物 No.1362）：椀形鍛冶滓（含鉄）

（1）肉眼観察：表面が黄褐色の土砂で覆われた、68g 弱の小型の椀形鍛冶滓である。気孔の散在する黒灰色の滓が部分的に観察される。また特殊金属探知機の M（◎）で反応があり、内部に金属鉄が残存する。（また X 線透過写真から、U 字型に折り曲げられた鉄製品が、内部に含まれている可能性が指摘されている。）

（2）マクロ組織：第 39 図①に示す。切断面には金属鉄が 2 か所（白色部）確認された。その間に灰色の滓部が存在する。

（3）顕微鏡組織：第 39 図②③に示す。①の右側の金属鉄部の拡大である。3%ナイタルで腐食したところ、白色針状のフェライトと黒色層状のパーライトが析出する亜共析組織が確認された。炭素含有量は 0.2 ～ 0.3%程度と推測される。

金属鉄中に散在する暗色部は、非金属介在物である。いずれもやや展伸した形状であり、粗く鍛打が施された未成品ないし鉄器破片と推定される。

また③下側の非金属介在物には、白色針状結晶イルミナイト（Ilmenite：$FeO{\cdot}TiO_2$）が晶出する。非金属介在物の鉱物組成については、EPMA 調査の項で詳述する。

（4）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、金属鉄部（亜共析組織）の調査を実施した。硬度値は 104Hv、115Hv、125Hv であった。組織に見合った値である。

（5）EPMA 調査：第 39 図④に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。1 の白色針状結晶は、特性 X 線像を見るとチタン（Ti）に強い反応があり、定量分析値は 35.4% FeO － 57.6% TiO_2 であった。イルミナイト（Ilmenite：$FeO{\cdot}TiO_2$）に同定される。また 2 の素地部分の定量分析値は 57.7% SiO_2 － 12.8% Al_2O_3 － 9.4% CaO － 2.6% MgO － 3.1% K_2O － 1.6% Na_2O － 11.9% FeO － 2.1% TiO_2 であった。珪酸塩素地部分でも、鉄（FeO）、チタン（TiO_2）をかなり固溶する。砂鉄製錬滓と同様の鉱物組成である。

もう 1 か所、鉄中非金属介在物の調査を実施した。第 39 図⑤に反射電子像（COMP）を示す。3

の淡茶褐色多角形結晶は、特性X線像を見ると鉄（Fe）、チタン（Ti）に反応があり、定量分析値は59.7% FeO − 4.2% Al_2O_3 − 4.1% Cr_2O_3 − 5.6% V_2O_3 − 27.0% TiO_2 であった。アルミナ（Al_2O_3）、クロム（Cr_2O_3）、バナジウム（V_2O_3）を若干含む、ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO·TiO_2）に同定される。4の淡灰色結晶の定量分析値は62.6% FeO − 4.6% MgO − 32.2% SiO_2 であった。ファイヤライト（Fayalite：2FeO·SiO_2）に同定される。5のガラス素地部分の定量分析値は50.1% SiO_2 − 15.7% Al_2O_3 − 9.2% CaO − 4.8% K_2O − 2.6% Na_2O − 15.0% FeO − 1.3% TiO_2 であった。素地部分でも、鉄(FeO)、チタン（TiO_2）をかなり固溶する。これも砂鉄製錬滓と同様の鉱物組成である。

また第39図⑥に滓部の反射電子像（COMP）を示す。6の淡灰色柱状結晶定量分析値は67.9% FeO − 2.8% MgO − 32.5% SiO_2 であった。ファイヤライト（Fayalite：2FeO·SiO_2）に同定される。7の淡褐色微小結晶の定量分析値は49.7% FeO − 51.8% Al_2O_3 であった。ヘーシナイト（Hercynite：FeO·Al_2O_3）に同定される。また8の白色粒状結晶は98.8% FeOであった。ウスタイト（Wustite：FeO）である。さらに9のガラス素地部分の定量分析値は46.1% SiO_2 − 22.5% Al_2O_3 − 7.5% CaO − 8.1% K_2O − 4.2% Na_2O − 14.5% FeOであった。鉄（FeO）をかなり固溶するが、チタン（TiO_2）はほとんど含まない。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（6）化学組成分析：第16表に示す。全鉄分（Total Fe）46.77%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.55%、酸化第1鉄（FeO）24.50%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）38.86%の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）9.25%であるが、これは付着土砂の影響も受けた値と考えられる。また製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）の起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.18%、バナジウム（V）＜0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）は0.96%と高めで、銅（Cu）は0.01%と低値である。

当資料の金属鉄中の非金属介在物は、いずれも鍛打によりやや展伸した形状を呈する。粗く鍛打が施された未成品、ないしは鉄器の破片と推定される。また、砂鉄製錬滓と同じ鉱物組成の介在物が複数確認されたため、製鉄原料は火山岩起源の高チタン砂鉄であったと推定される。

これに対して、滓部は砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の影響がほとんどない鍛錬鍛冶滓であった。廃鉄器などの鉄素材をまとめる際に、取り残された可能性が考えられる。

SEI-16（遺物 No.1447）：鉄製品（鍛造品）

（1）肉眼観察：先端が曲がった棒状の鍛造鉄器破片である。両端は破面。表面は茶褐色の土砂に覆われる。また特殊金属探知機のM（◎）で反応があり、内部には金属鉄残存する。

（2）マクロ組織：第40図①に示す。横断面が4 × 3mm程の長方形を呈する、鍛造鉄器片である。明白色部が金属鉄である。

（3）顕微鏡組織：第40図②～④に示す。金属鉄部の拡大である。3%ナイタルで腐食したところ、フェライト単相～パーライト少量析出の亜共析組織が確認された。最大でも0.1%程度の炭素含有量の軟鉄と推定される。

（4）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、金属鉄部の調査を実施した。亜共析組織部分の硬度値は190Hv、199Hv、205Hvであった。またフェライト単相の部分の硬度値は193Hv、197Hv、197Hvであった。全体に金属組織から予想されるより、硬質の値を示す。燐（P）など硬度を上昇させる元素が、微量フェライト結晶内に固溶している可能性が考えられる。

（5）EPMA調査：第40図⑤に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。10の定量分析値は

58.5% SiO_2 − 13.3% Al_2O_3 − 4.8% CaO − 2.5% MgO − 2.8% K_2O − 1.6% Na_2O − 14.6% FeO − 5.4% TiO_2 であった。非晶質珪酸塩系の介在物で、鉄（FeO）、チタン（TiO_2）を固溶する。

もう 1 か所、鉄中非金属介在物の調査を実施した。第 40 図⑥に反射電子像（COMP）を示す。11 のガラス質部分の定量分析値は 39.8% SiO_2 − 9.1% Al_2O_3 − 8.8% CaO − 2.2% MgO − 4.0% P_2O_5 − 33.5% FeO − 2.8% TiO_2 であった。また 12 の淡茶褐色多角形結晶の定量分析値は 57.8% FeO − 4.9% Al_2O_3 − 2.3% Mg − 3.9% V_2O_3 − 29.9% TiO_2 であった。アルミナ（Al_2O_3）、マグネシア（MgO）、バナジウム（V_2O_3）を若干含む、ウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO{\cdot}TiO_2$）に同定される。

当資料は最大 0.1%程度の炭素含有量の軟鉄を、鍛打成形した鉄製品である。また非金属介在物中にウルボスピネルが確認されることから、当資料の始発原料は砂鉄と判断される。

SEI-17（遺物 No.2376）：鉄塊系遺物

（1）肉眼観察：全体が黄褐色の土砂に覆われた、不定形小型の鉄塊系遺物である。外観観察所見では 2mm 角、長さ 1.8cm の棒状鉄部の存在が指摘されていた。しかし、先端部を研磨したところ土砂であることが確認された。明瞭な滓部はなく、鉄主体の遺物と推測される。ただし完全に錆化しており、特殊金属探知機での反応は見られない。なお、この遺物は錆化が進んでいたため、顕微鏡試料採取時に細片化した。そこで遺物の形状の残る塊状部分の 2 片を接合して観察した。

（2）顕微鏡組織：第 41 図①～③に示す。①は試料表面部分である。滓の付着のほとんどない小鉄塊であることが確認された。②は表層にごく薄く固着する滓部の拡大である。淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvöspinel:$2FeO{\cdot}TiO_2$）、イルミナイト（Ilmenite:$FeO{\cdot}TiO_2$）が晶出する。砂鉄製錬滓の晶癖である。

また③は試料表層の錆化鉄部に残る、金属組織痕跡の拡大である。過共析組織の痕跡が残存する。

付着滓の鉱物組成から、当資料は砂鉄系の原料鉄（製錬鉄塊系遺物）と推定される。また金属組織痕跡から、炭素含有量 1.2%程度の高炭素鋼と推測される。

SEI-18（遺物 No.1454）：鉄製品（鍛造品）

（1）肉眼観察：薄板状の鍛造鉄器破片である。刀子の柄部の可能性が指摘されている。両端は破面。表面は茶褐色の土砂に覆われる。特殊金属探知機の H（○）で、反応が見られる。

（2）マクロ組織：第 41 図④に示す。観察面は完全に錆化して、金属鉄は残存しない。また錆化に伴い、内部の空洞化は著しい。

（3）顕微鏡組織：第 41 図⑤⑥に示す。表層角の錆化鉄部の拡大である。層状剝離が進行し、折り返し鍛錬が施された鍛造品と推定される。金属組織痕跡は不明瞭で、鉄中炭素含有量を推定する情報は得られなかった。

SEI-19（遺物 No.2280）：鉄製品（鍛造品）

（1）肉眼観察：細い棒状の鍛造鉄器の破片である。両端は破面。表面は茶褐色の鉄錆化物に覆われる。特殊金属探知機の M（◎）で反応があり、内部には金属鉄が残存する。

（2）マクロ組織：第 42 図①に示す。横断面は 1 辺 4mm 程の方形を呈する。芯部の灰白～明灰色部は金属鉄で、3%ナイタルで腐食した組織を示している。

（3）顕微鏡組織：第 42 図②③に金属鉄部を示す。白色針状部はフェライト、素地の灰色部はベイナイ

ト（Bainite: フェライト地のなかに分散した微細なセメンタイトで構成される）である。この金属組織痕跡から、最大でも 0.1 程度の炭素含有量の軟鉄と推定される。また熱間加工後、比較的速い速度で冷却したものと判断される。

（4）ビッカース断面硬度：紙面の構成上、硬度を測定した圧痕の写真を割愛したが、金属鉄部の調査を実施した。第 42 図②上側のベイナイト部分の硬度値は 189Hv、199Hv、199Hv であった。また第 42 図③の針状フェライトの割合が高い部分の硬度値は、125Hv、126Hv、126Hv であった。それぞれ組織に見合った値である。

（5）EPMA 調査：第 42 図④に非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。13 の淡褐色部の定量分析値は 89.0% TiO_2 － 6.2% Al_2O_3 － 5.5% MgO － 4.3% V_2O_3 － 3.5% FeO であった。ほかの元素を少量固溶するが、酸化チタン（TiO_2）主体でルチル（Rutile:TiO_2）に近い組成であった。

14 のガラス質部分の定量分析値は 75.7％ SiO_2 － 12.9％ Al_2O_3 － 2.5％ CaO － 1.8％ MgO － 3.4％ K_2O － 1.9％ FeO － 4.3％ TiO_2 であった。珪酸（SiO_2）分主体で、鉄（FeO）、チタン（TiO_2）を微量固溶する。また 15 の灰褐色結晶の定量分析値は 80.4% FeO であった。マグネタイト（Magnetite : $FeO{\cdot}Fe_2O_3$）と推測される。

もう 1 か所、鉄中非金属介在物の調査を実施した。第 42 図⑤に反射電子像（COMP）を示す。16 の淡茶褐色多角形結晶は、特性 X 線像を見ると、チタン（Ti）、酸素（O）に強い反応があり、定量分析値は 53.1% FeO － 5.2% Al_2O_3 － 2.3% MgO － 4.5% Cr_2O_3 － 4.9% V_2O_3 － 32.5% TiO_2 であった。アルミナ（Al_2O_3）、マグネシア（MgO）、クロム（Cr_2O_3）、バナジウム（V_2O_3）を若干含む、ウルボスピネル（Ulvöspinel: $2FeO{\cdot}TiO_2$）と推定される。

当資料は最大 0.1%程度の炭素含有量の軟鉄を、鍛打成形した鉄製品である。また非金属介在物中にルチル、ウルボスピネルなどの（鉄）チタン酸化物が確認されることから、当資料の始発原料は砂鉄と判断される。

SEI-20（遺物 No.2287）：鉄製品（鋳造品）

（1）肉眼観察：表面全体が茶褐色の土砂で覆われた、厚さ 3mm 程の薄板状の鋳造鉄器破片である。全体に錆化が進んでおり、特殊金属探知機での反応は見られない。

（2）顕微鏡組織：第 43 図①～③に示す。①は表層の錆化鉄部でわずかに弧を描く。内部には最大径 1mm ほどの気孔（鋳鬆）が複数散在する。②③は①の拡大である。蜂の巣状のレデブライト（Ledebulite）組織痕跡が残り、共晶組成白鋳鉄組織（C : 4.26%）を呈する。器種の同定は難しい。

SEI-21（遺物 No.2257）：鍛冶炉の壁を取り囲む石材破片

（1）肉眼観察：表面に黒色ガラス質滓がやや垂れ気味に固着する、石材破片である。鍛冶炉石の表層破片と推定される。ガラス質滓表面には薄く木炭痕が残り、内部には気孔が密に見られる。また石材は花崗岩類で、丸みを持ち転石を利用したものと推測される。

（2）顕微鏡組織：第 43 図④⑤に示す。④はガラス質滓表層部分である。内部にはごく微細な金属鉄や、マグネタイトが晶出する。⑤は微小金属鉄粒の拡大で、3%ナイタルで腐食した組織を示している。白色のフェライト素地に、白色針状のセメンタイトが析出する。

以上の調査結果から、当資料は鍛冶炉の壁を取り囲む石材破片と推定される。外観所見に金床石の可能

性も提示されたが酸化膜の検出はなかった。

SEI-22（遺物 No.2380）：炉壁

（1）肉眼観察：熱影響を受けて、内面表層がガラス質化した炉壁片で、滓化状態は前述 SEI-21 に近似と指摘あり。胎土は粘土質で、籾殻を少量混和している。

（2）顕微鏡組織：第 43 図⑥⑦に示す。内面のガラス質滓部分である。胎土中の石英・長石類は溶融せずに散在しているが、素地の粘土鉱物は完全にガラス質化している。

（3）耐火度：1,033℃であった。古代の鍛冶炉としても、若干低めの耐火性状である。

（ただし試料が小型のため、ガラス質滓部分の影響を受けた値となっている。本来はより耐火性の高い性状であった可能性も考えられる。）

D　ま　と　め

鍛冶関連遺物の分析調査結果から、西部遺跡には、高チタン砂鉄を製錬した生成鉄塊が鍛冶原料として搬入され、精錬～鍛錬鍛冶作業が行われたことが明らかとなった。詳細は以下のとおりである。

1）再結合滓中（SEI-5）には、微細な砂鉄製錬滓の破片が複数確認された。これは鍛冶原料（鉄塊系遺物）に固着した製錬滓を叩いて落とすなど、鍛冶処理前作業の痕跡と推測される。

また鉄塊系遺物（SEI-14、17）は付着滓の鉱物組成から、鍛冶処理前の原料鉄（製錬鉄塊系遺物）に分類される。

これらの製錬滓の鉱物組成から、当遺跡には火山岩起源の高チタン砂鉄を製錬して作られた鉄塊が、鍛冶原料として搬入されたと判断される。

新潟県下の古代の製鉄遺跡群では、チタン（TiO_2）含有率が 10%前後の砂鉄を製鉄原料としている。なお岩船郡内にある元山窯跡群の 9 世紀後半から 11 世紀前半と推定される製鉄関連遺物群は、分析調査の結果、高チタン砂鉄を原料として高温製錬が推定されている［大澤・鈴木 1999］。こうした地域周辺で生産された鉄塊が、当遺跡内に搬入された可能性は高いと考えられる。

2）分析調査を実施した鉄滓 9 点のうち、5 点（SEI-2、4、7、8、9）は精錬鍛冶滓、3 点（SEI-1、3、15）は鍛錬鍛冶滓に分類される。また残る 1 点（SEI-6）は精錬鍛冶～鍛錬鍛冶の連続作業で生じた、二段椀形鍛冶滓の可能性が高い。さらに粒状滓（SEI-10）、鍛造剝片（SEI-11）といった、熱素材の熱間加工に伴う微細遺物も確認された。

このため当遺跡では、鍛冶原料（製錬系鉄塊）に固着した滓を分離・除去する精錬鍛冶工程から、鉄素材を熱間で鍛打加工する鍛錬鍛冶工程まで行われたものと推定される。

また椀形鍛冶滓（SEI-15）中の金属鉄は、鍛打によって展伸した非金属介在物が確認されたため、粗い鍛打を受けた未製品ないし鉄器片と推測される。鉄器片の場合、当遺跡では新鉄（製錬鉄塊系遺物）ばかりでなく、古鉄（廃鉄器）も鍛冶原料としていたと推測される。

3）鉄製品のうち金属鉄の残るもの（SEI-16、19）は、非金属介在物の鉱物組成から、始発原料が高チタン砂鉄であることが明らかになった。当遺跡で製作されたと仮定しても、矛盾のない特徴を有する。

【引用・参考文献】

大澤正己　1991「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告第 13 集）福岡県教育委員会

大澤正己　1992「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報 15』（平成 3 年度）千葉県房総風土記の丘

大澤正己　2002「重留遺跡鍛冶工房跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『重留遺跡第 4 地点』～若園線住宅移転用地整備事業関係埋蔵文化財調査報告 4 ～（北九州市埋蔵文化財報告書第 303 集）（財）北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

大澤正己・鈴木瑞穂　1999「元山窯跡群出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『元山窯跡群』新潟県荒川町教育委員会

日刊工業新聞社編　1968『焼結鉱組織写真および識別法』日刊工業新聞社

森岡　進　1975「鉄鋼腐食化学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目							
				大きさ（mm）	重量（g）			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー
SEI-1	SK3128	椀形鍛冶滓	9C中葉	46×41×28	51.8	3	なし		○	○			○		
SEI-2	SD1077	椀形鍛冶滓	10C前葉	120×74×61	478.8	4	なし		○	○			○		
SEI-3	SD1077	椀形鍛冶滓		72×68×32	153.2	4	なし		○	○			○		
SEI-4	SD1077	椀形鍛冶滓		47×40×23	67.7	3	なし		○	○			○		
SEI-5	SK1355	再結合滓		102×67×48	280.0	4	なし	○	○						
SEI-6	SD1377	椀形鍛冶滓		121×90×59	793.2	4	なし		○	○			○		
SEI-7	SD1377	椀形鍛冶滓		107×90×39	354.9	3	なし		○	○			○		
SEI-8	SD1377	椀形鍛冶滓		67×57×27	95.8	3	なし		○	○			○		
SEI-9	SD1377	椀形鍛冶滓（含鉄）		59×40×28	64.4	4	H（○）		○	○			○		
SEI-10	SW1352（鍛冶炉）	粒状滓		-	-	-	なし	○	○						
SEI-11	SW1352（鍛冶炉）	鍛造剥片		-	-	-	なし	○	○						
SEI-12	SB1500-P9	羽口		55×35×18～21	34.4	5	なし		○				○	○	
SEI-13	10D6区 包含層	鉄塊系遺物		34×28×27	22.3	6	錆化（△）		○	○			○		
SEI-14	7E3区 包含層	鉄塊系遺物		35×27×33	32.1	5	M（◎）	○	○	○			○		
SEI-15	SK2119	椀形鍛冶滓(含鉄)		53×38×34	67.6	6	M（◎）	○	○	○		○	○		
SEI-16	SK1107	鉄製品（鍛造品）		25×3	1.1	3	M（◎）	○	○	○		○			
SEI-17	5D15区 包含層	鉄塊系遺物		25×22×14	7.5	4	錆化（△）		○						
SEI-18	SK1115	鉄製品（鍛造品）		45×13×5	8.8	6	H（○）	○	○						
SEI-19	8C23区 包含層	鉄製品（鍛造品）		40×2～5	1.8	5	M（◎）	○	○	○		○			
SEI-20	7B11区 包含層	鉄製品（鋳造品）		50×21×4	36.9	4	錆化（△）		○						
SEI-21	11E7区 包含層	鍛冶炉壁石材（ガラス質滓付着）		56×38×27	36.5	2	なし		○						
SEI-22	10D2区 包含層	炉壁		489×47×24	24.8	2	なし		○					○	

※ 符号SEIは西部遺跡Ⅰ

第15表　供試材の履歴と調査項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分(Total Fe)	金属鉄(Metallic)	酸化第1鉄(FeO)	酸化第2鉄(Fe_2O_3)	二酸化珪素(SiO_2)	酸化アルミニウム(Al_2O_3)	酸化カルシウム(CaO)	酸化マグネシウム(MgO)	酸化カリウム(K_2O)	酸化ナトリウム(Na_2O)	酸化マンガン(MnO)	二酸化チタン(TiO_2)	酸化クロム(Cr_2O_3)	硫黄(S)	五酸化燐(P_2O_5)	炭素(C)	バナジウム(V)	銅(Cu)	二酸化ジルコニウム(ZrO_2)	耐火度(℃)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe
SEI-1	SK3128	椀形鍛冶滓	9C中葉	59.94	<0.01	65.67	12.72	11.82	3.20	0.63	0.54	0.73	0.37	0.09	0.16	0.01	0.012	0.46	0.11	<0.01	<0.01	0.01	-	17.29	0.288	0.003
SEI-2	SD1077	椀形鍛冶滓	10C前葉	51.79	0.11	51.73	16.40	15.58	4.68	0.82	1.03	0.89	0.31	0.20	3.19	0.04	0.043	0.40	0.09	0.13	<0.01	0.05	-	23.31	0.450	0.062
SEI-3	SD1077	椀形鍛冶滓		56.26	<0.01	58.23	15.72	13.84	3.75	0.74	0.64	0.99	0.39	0.24	0.21	0.02	0.020	0.40	0.18	<0.01	<0.01	<0.01	-	20.35	0.362	0.004
SEI-4	SD1077	椀形鍛冶滓		51.86	0.04	60.53	6.82	19.94	4.93	1.02	0.93	1.22	0.53	0.10	1.24	0.03	0.029	0.54	0.02	0.06	<0.01	0.02	-	28.57	0.551	0.024
SEI-6	SD1377	椀形鍛冶滓		49.04	<0.01	47.35	17.49	17.03	4.94	0.88	1.08	1.05	0.49	0.19	3.65	0.04	0.025	0.72	0.12	0.17	0.03	0.04	-	25.47	0.519	0.074
SEI-7	SD1377	椀形鍛冶滓		46.76	<0.01	51.52	9.60	18.27	5.42	1.63	1.64	1.28	0.54	0.29	5.64	0.07	0.037	0.76	0.06	0.25	<0.01	0.09	-	28.78	0.615	0.121
SEI-8	SD1377	椀形鍛冶滓		49.28	<0.01	42.41	23.33	9.10	4.00	0.34	1.57	0.41	0.13	0.42	8.85	0.08	0.038	1.09	0.64	0.38	<0.01	0.10	-	15.55	0.316	0.180
SEI-9	SD1377	椀形鍛冶滓（含鉄）		45.58	1.38	30.68	29.10	13.36	3.69	0.90	0.84	0.77	0.35	0.84	2.41	0.05	0.27	0.76	0.30	0.16	0.01	0.03	-	19.91	0.437	0.053
SEI-12	SB1500-P9	羽口		4.19	0.06	0.36	5.50	66.59	15.56	1.28	1.86	3.24	2.20	0.09	0.55	0.03	0.003	0.39	Ig Loss 0.71	<0.01	<0.01	0.03	1062	90.73	21.654	0.131
SEI-13	10D6区包含層	鉄塊系遺物		50.51	0.01	11.14	59.82	10.20	2.47	0.24	0.25	0.65	0.32	0.27	0.12	0.01	0.085	0.68	1.25	<0.01	0.01	<0.01	-	14.13	0.280	0.002
SEI-14	7E3区包含層	鉄塊系遺物		51.34	13.54	29.46	21.30	3.70	1.26	0.55	0.26	0.32	0.10	1.42	1.62	0.03	0.39	0.70	1.05	0.10	0.02	0.02	-	6.19	0.121	0.032
SEI-15	SK2119	椀形鍛冶滓（含鉄）		46.77	0.55	24.50	38.86	5.96	1.67	0.84	0.19	0.42	0.17	0.96	0.18	0.02	0.57	0.70	1.46	<0.01	0.01	0.01	-	9.25	0.198	0.004
SEI-22	10D2区包含層	炉壁		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1033	-	-	-

※ 符号SEIは西部遺跡Ⅰ

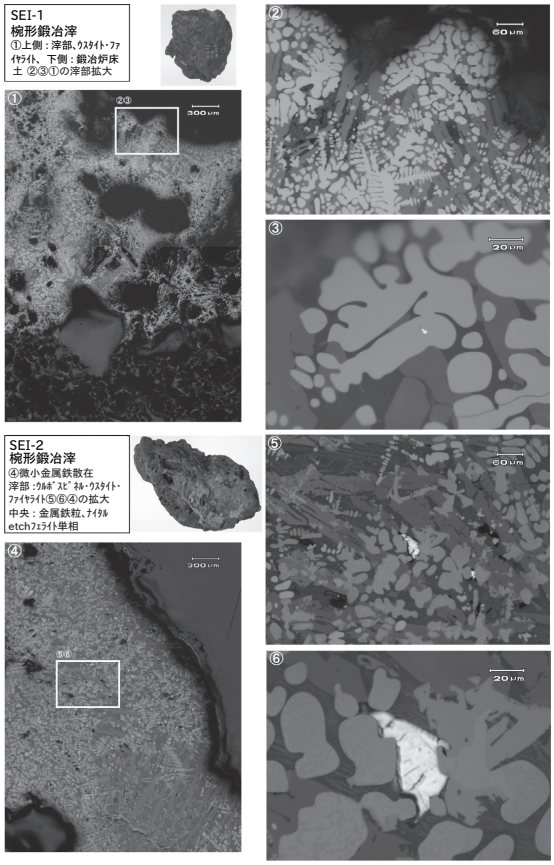
第16表　供試材の化学組成

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
					Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
SEI-1	SK3128	椀形鍛冶滓	9C中葉	滓部:W+F	59.94	12.72	1.17	0.16	<0.01	0.09	17.29	<0.01	高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓
SEI-2	SD1077	椀形鍛冶滓	10C前葉	滓部:W（粒内微細U）+U+F、微小金属鉄：フェライト単相	51.79	16.40	1.85	3.19	0.13	0.20	23.31	<0.01	脈石成分除去の精錬鍛冶滓（始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-3	SD1077	椀形鍛冶滓		滓部:W（粒内微細H）+F	56.26	15.72	1.38	0.21	<0.01	0.24	20.35	<0.01	高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓
SEI-4	SD1077	椀形鍛冶滓		滓部:W（粒内微細UとHの固溶体）+F、微小金属鉄:フェライト単相	51.86	6.82	1.95	1.24	0.06	0.10	28.57	<0.01	精錬鍛冶滓（後半段階の反応副生物か始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-5	SK1355	再結合滓		製錬滓:U+I、錆化鉄粒:過共析組織痕跡、鍛造剥片	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶作業の前処理（鉄塊に付着する製錬滓を叩き落とす）から一連の鍛冶作業で発生する微細遺物を含む
SEI-6	SD1377	椀形鍛冶滓		上段滓部:W+F、微小金属鉄下段滓部:W+U+F	49.04	17.49	1.96	3.65	0.17	0.19	25.47	0.03	精錬鍛冶～鍛錬鍛冶の連続作業で生じた二段椀形鍛冶滓
SEI-7	SD1377	椀形鍛冶滓		滓部:W+U+F、微小金属鉄	46.76	9.60	3.27	5.64	0.25	0.29	28.78	<0.01	下段は脈石成分除去の精錬鍛冶滓（始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-8	SD1377	椀形鍛冶滓		滓部:W+U+F、木炭破片	49.28	23.33	1.91	8.85	0.38	0.42	15.55	<0.01	脈石成分除去の精錬鍛冶滓（始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-9	SD1377	椀形鍛冶滓（含鉄）		滓部:W+U+F、金属鉄部：フェライト単相	45.58	29.10	1.74	2.41	0.16	0.84	19.91	0.01	精錬鍛冶滓（始発原料:高チタン砂鉄）、金属鉄部はごく微細で鍛冶原料になり得る品位ではない
SEI-10	SW1352（鍛冶炉）	粒状滓		イ-1・3、ロ-1・2:W、イ-2:M、ロ-3:M+W	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄素材の熱間加工に伴う先発微細遺物
SEI-11	SW1352（鍛冶炉）	鍛造剥片		イ-1～3、ロ-2・3:He+M+W、ロ-1:鉄錆化物か	-	-	-	-	-	-	-	-	熱間での鍛打加工に伴う後発微細遺物
SEI-12	SB1500-P9	羽口		外面表層:ガラス質滓、M晶出	4.19	5.50	3.14	0.55	<0.01	0.09	90.73	<0.01	耐火度:1062℃、古代の鍛冶羽口としてもやや耐火性の低い性状
SEI-13	10D6区包含層	鉄塊系遺物		滓部:W、錆化鉄部:過共析組織	50.51	59.82	0.49	0.12	<0.01	0.27	14.13	0.01	鍛冶処理途中の鉄塊系遺物（高炭素鋼、C:1.5%前後）
SEI-14	7E3区包含層	鉄塊系遺物		滓部:U+F、金属鉄部:亜共析組織（介在物:硫化鉄）	51.34	21.30	0.81	1.62	0.10	1.42	6.19	0.02	鍛冶処理前の原料鉄（製錬鉄塊系遺物、始発原料:高ﾁﾀﾝ砂鉄）
SEI-15	SK2119	椀形鍛冶滓（含鉄）		滓部:W+F、金属鉄:亜共析組織（介在物:I+U+F）	46.77	38.86	1.03	0.18	<0.01	0.96	9.25	0.01	滓部:鍛錬鍛冶滓、金属鉄部:粗い鍛打が施された未製品ないし鉄器片、C:0.4%程度の鋼、（始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-16	SK1107	鉄製品（鍛造品）		金属鉄部:フェライト単相（介在物:U）	-	-	-	-	-	-	-	-	最大でも0.1%程度の炭素量の軟鉄を鍛打成形した鉄製品、（始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-17	5D15区包含層	鉄塊系遺物		滓部:I+U、錆化鉄部:過共析組織痕跡	-	-	-	-	-	-	-	-	砂鉄系の原料鉄（製錬鉄塊系遺物、高炭素鋼、C:1.2%前後、始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-18	SK1115	鉄製品（鍛造品）		錆化鉄部:金属組織痕跡不明瞭	-	-	-	-	-	-	-	-	折り返し鍛錬が施された鍛造製品
SEI-19	8C23区包含層	鉄製品（鍛造品）		金属鉄部;針状フェライト・ベイナイト（介在物:R+U）	-	-	-	-	-	-	-	-	最大でも0.1%程度の炭素量の軟鉄を鍛打成形した鉄製品、（始発原料:高チタン砂鉄）
SEI-20	7B11区包含層	鉄製品（鋳造品）		錆化鉄部:共晶組成白鋳鉄組織痕跡	-	-	-	-	-	-	-	-	内部に鋳鬆の残る鋳造鉄器破片（C:4.26%）
SEI-21	11E7区包含層	鍛冶炉壁石材（ガラス質滓付）		表面付着ガラス質滓、M、微小金属鉄:針状セメンタイト・フェライト	-	-	-	-	-	-	-	-	鉄酸化膜は未検出でガラス溶融物は炉壁に近似
SEI-22	10D2区包含層	炉壁		内面表層:ガラス質滓	-	-	-	-	-	-	-	-	耐火度:1033℃、古代の鍛冶炉壁としてもやや耐火性の低い性状

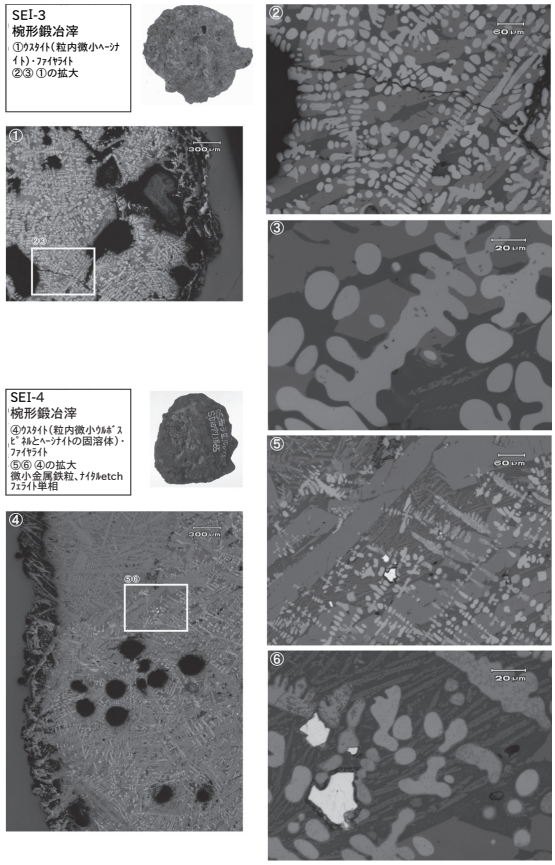
W:Wustite（FeO）、F:Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、U:Ulvöspinel（$2FeO \cdot TiO_2$）、H:Hercynite（$FeO \cdot Al_2O_3$）、I:Ilmenite（$FeO \cdot TiO_2$）、M：Magnetite（Fe_3O_4）、He:Hematite（Fe_2O_3）、R：Rutile（TiO_2）、

※ 符号SEIは西部遺跡Ⅰ

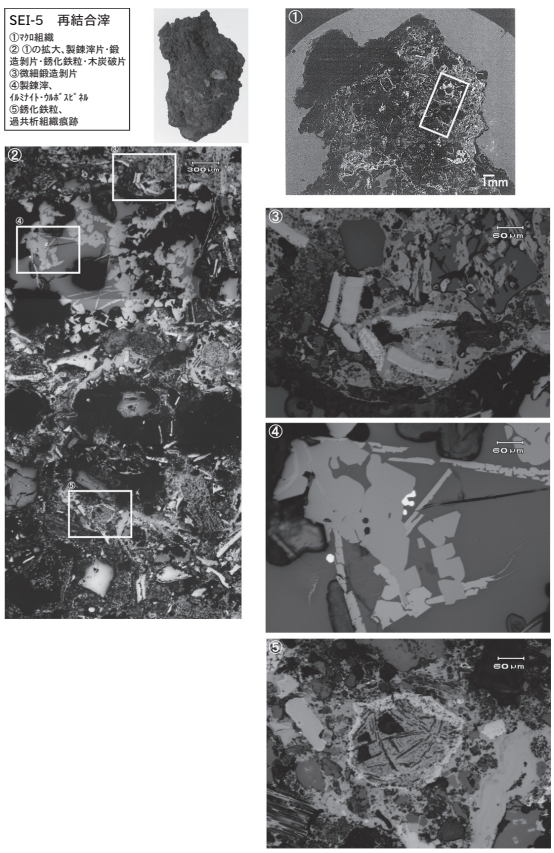
第17表　出土遺物の調査結果のまとめ



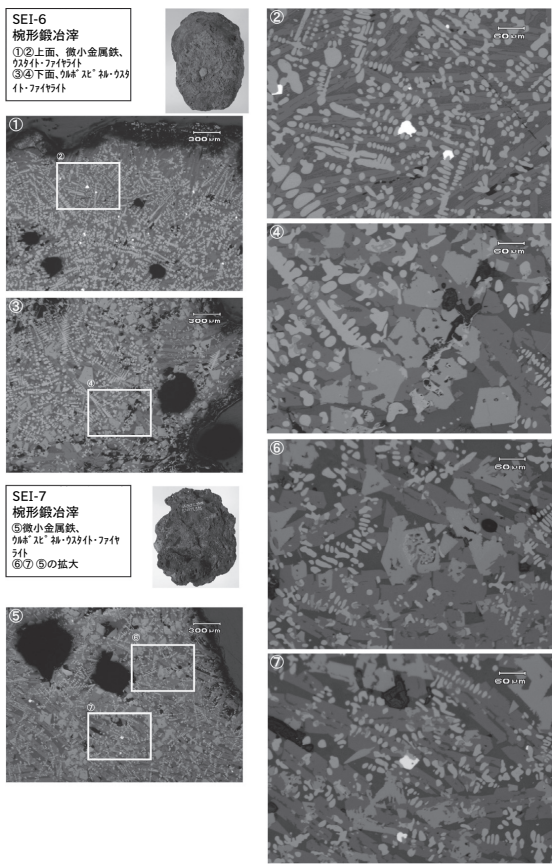
第29図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（1）



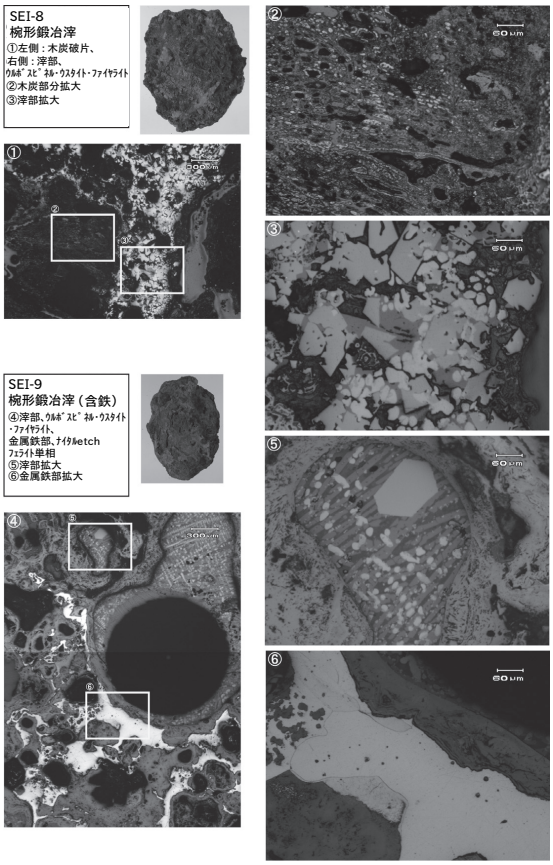
第30図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（2）



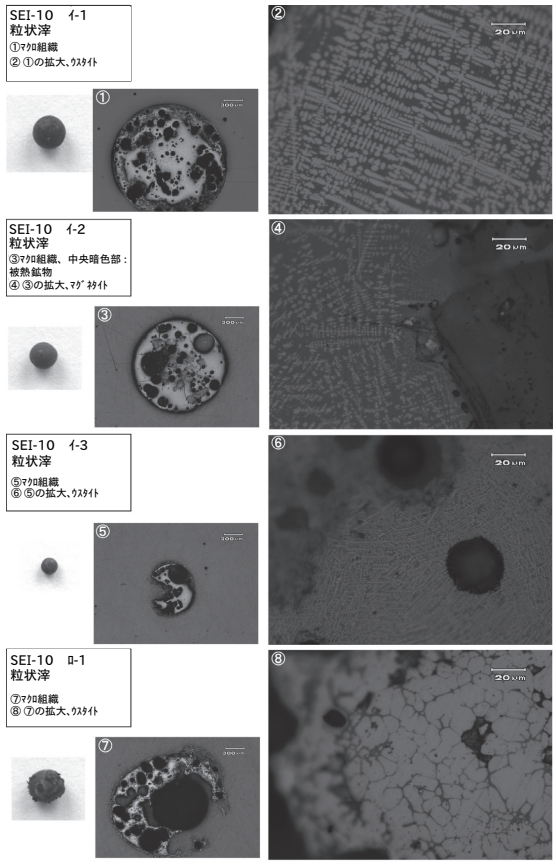
第31図　再結合滓の顕微鏡組織



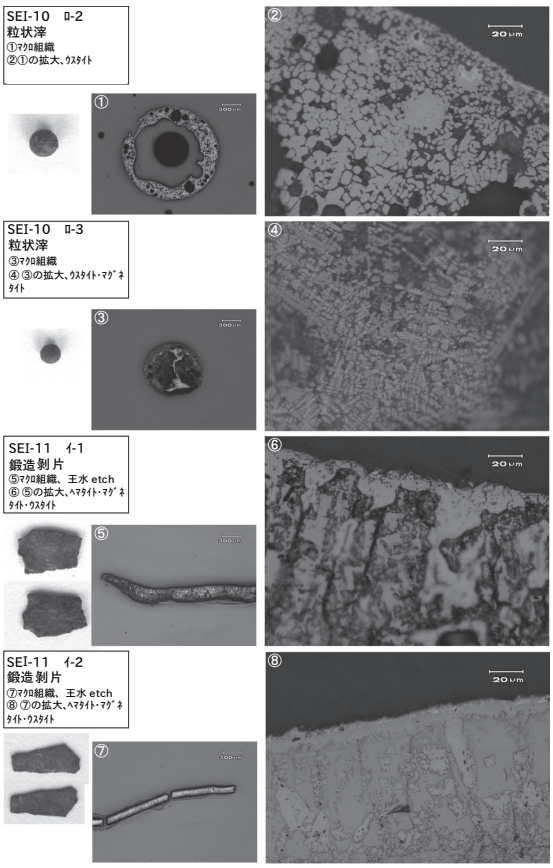
第32図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（3）



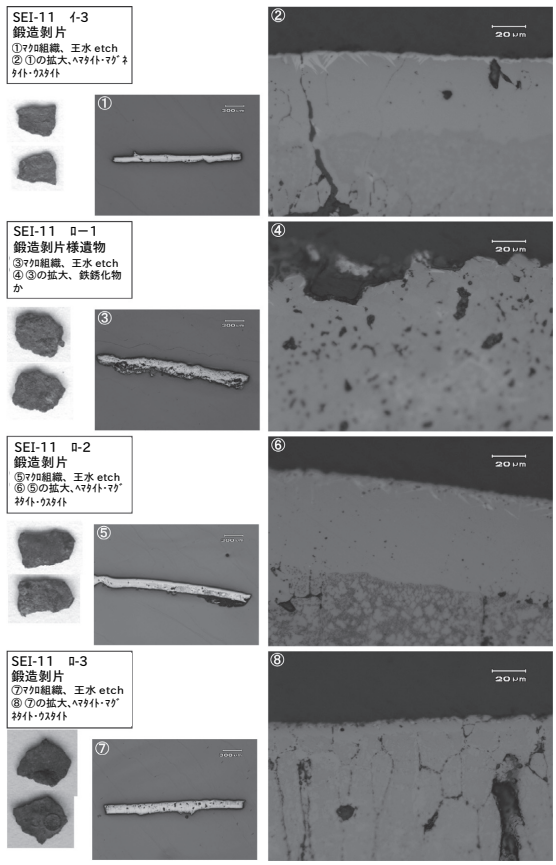
第33図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織（4）



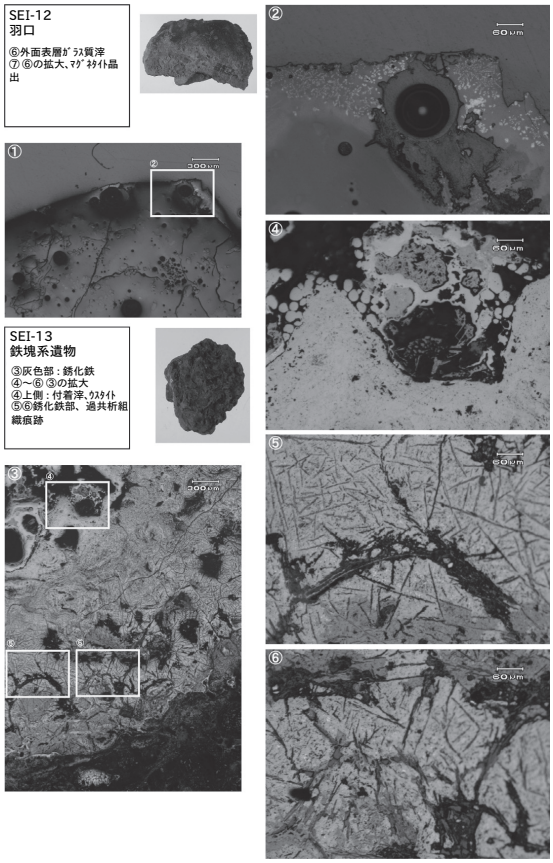
第34図　粒状滓の顕微鏡組織



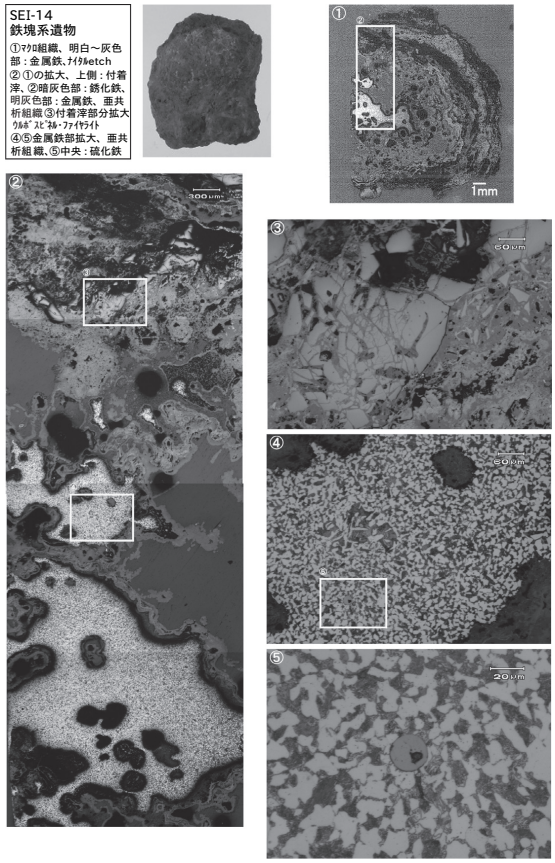
第35図　粒状滓・鍛造剥片の顕微鏡組織



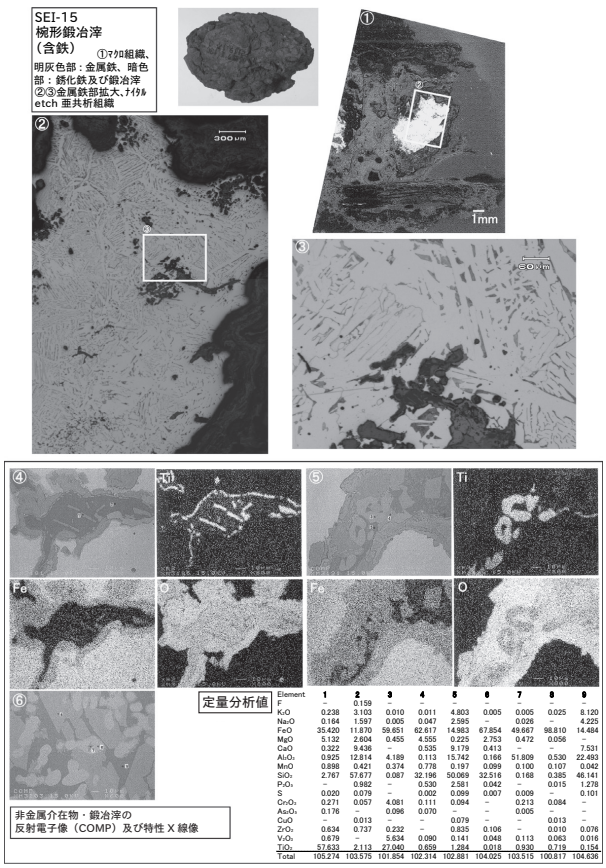
第36図　鍛造剥片の顕微鏡組織



第37図　羽口・鉄塊系遺物の顕微鏡組織

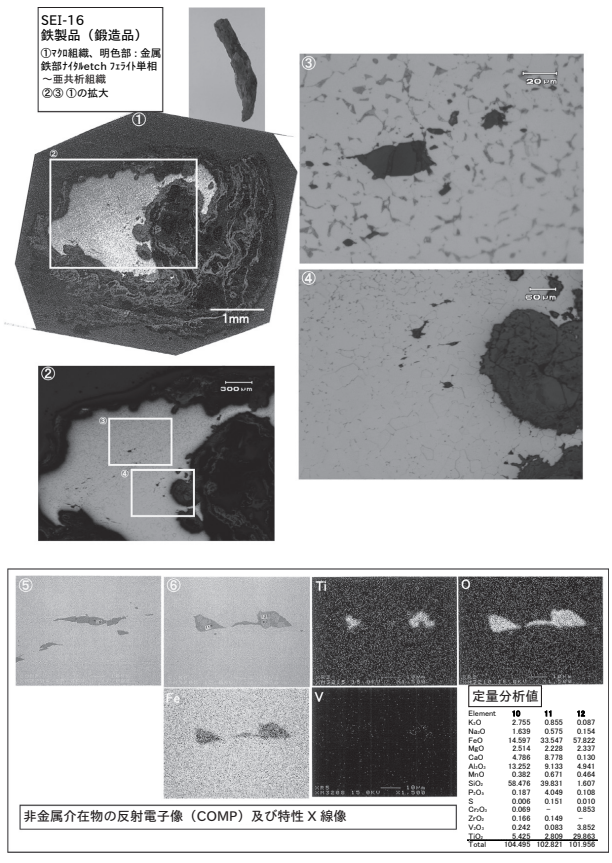


第38図　鉄塊系遺物の顕微鏡組織



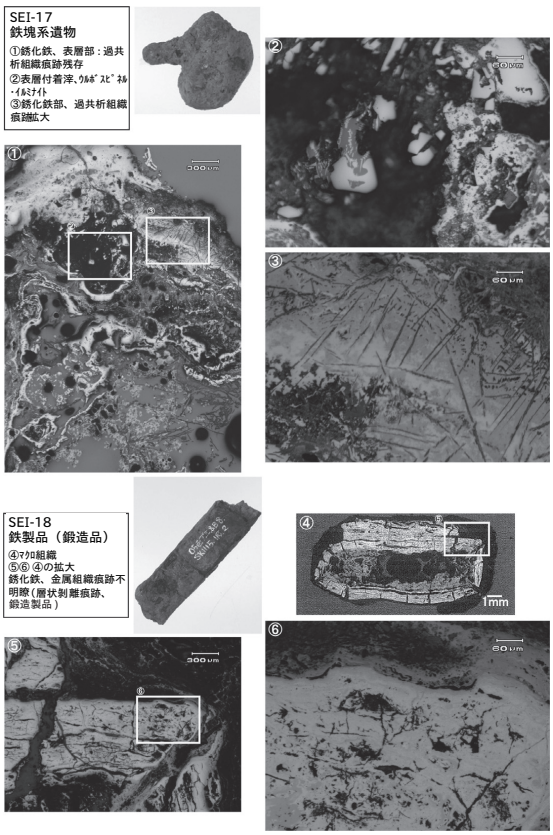
Element	1	2	3	4	5	6	7	8	9
F	–	0.159	–	–	–	–	–	–	–
K_2O	0.238	3.103	0.010	0.011	4.803	0.005	0.005	0.025	8.120
Na_2O	0.164	1.597	0.005	0.047	2.595	–	0.026	–	4.225
FeO	35.420	11.870	59.651	62.617	14.983	67.854	49.667	98.810	14.484
MgO	5.132	2.604	0.455	4.555	0.225	2.753	0.472	0.056	–
CaO	0.322	9.436	–	0.535	9.179	0.413	–	–	7.531
Al_2O_3	0.925	12.814	4.189	0.113	15.742	0.166	51.809	0.530	22.493
MnO	0.898	0.421	0.374	0.778	0.197	0.099	0.100	0.107	0.042
SiO_2	2.767	57.677	0.087	32.196	50.069	32.516	0.168	0.385	46.141
P_2O_5	–	0.982	–	0.530	2.581	0.042	–	0.015	1.278
S	0.020	0.079	–	0.002	0.099	0.007	0.009	–	0.101
Cr_2O_3	0.271	0.057	4.081	0.111	0.094	–	0.213	0.084	–
As_2O_5	0.176	–	0.096	0.070	–	–	0.005	–	–
CuO	–	0.013	–	–	0.079	–	–	0.013	–
ZrO_2	0.634	0.737	0.232	–	0.835	0.106	–	0.010	0.076
V_2O_5	0.679	–	5.634	0.090	0.141	0.048	0.113	0.063	0.016
TiO_2	57.633	2.113	27.040	0.659	1.284	0.018	0.930	0.719	0.154
Total	105.274	103.575	101.854	102.314	102.881	104.025	103.515	100.817	104.636

第39図　椀形鍛冶滓（含鉄）の顕微鏡組織

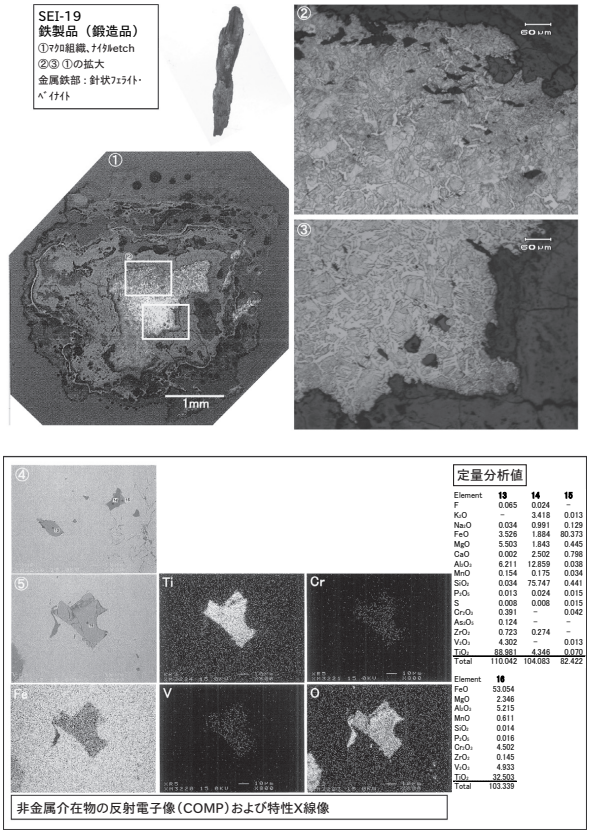


Element	10	11	12
K_2O	2.755	0.855	0.087
Na_2O	1.639	0.575	0.154
FeO	14.597	33.547	57.822
MgO	2.514	2.228	2.337
CaO	4.786	8.778	0.130
Al_2O_3	13.252	9.133	4.941
MnO	0.382	0.671	0.464
SiO_2	58.476	39.831	1.607
P_2O_5	0.187	4.049	0.108
S	0.006	0.151	0.010
Cr_2O_3	0.069	–	0.853
ZrO_2	0.166	0.149	–
V_2O_5	0.242	0.083	3.852
TiO_2	5.425	2.609	29.863
Total	104.495	102.821	101.956

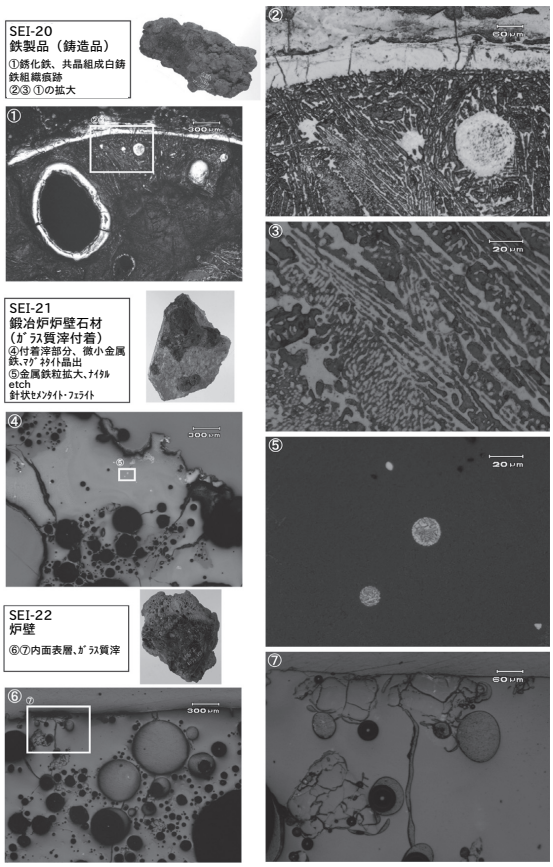
第40図　鉄製品（鍛造品）の顕微鏡組織



第41図　鉄塊系遺物・鉄製品（鍛造品）の顕微鏡組織



第42図　鉄製品（鍛造品）の顕微鏡組織



第43図　鉄製品（鋳造品）・金床石・炉壁の顕微鏡組織

3　西部遺跡出土漆器等の科学分析

漆器文化財科学研究所　四柳嘉章

A　分析の方法

漆器は階層や価格に応じた各種の製品が生産され、その品質が考古学的には所有階層復元の手がかりとなる。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察では使用や廃棄後の劣化を含めた表面の塗りと加飾部分でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性は塗装工程にあり、この塗膜の下に隠された情報から品質のほかに、時代性、流通、あるいは劣化の状況などから使用の場を推測する手がかりともなる。

漆器の分析は微小片の断面を光学顕微鏡で塗装工程を調査する塗膜（構造）分析、塗料・下地の直接的な分析は、赤外線を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射し、分子構造を解析する赤外分光分析（FT－IR）、赤色顔料の同定にはエネルギー分散型蛍光X線分析を実施した。本稿で用いる用語のうち、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

1）赤　色　漆

赤色の主な顔料である朱（HgS）やベンガラ（Fe_2O_3）が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定済みの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

2）黒色漆と黒色系漆

上塗漆が黒色の場合、黒色顔料の有無によって２種類に分けられる。炭素粒子（油煙）や鉄系化合物粒子などの黒色顔料を含むものを「黒色漆」、黒色顔料を含まないものを「黒色系漆」として区別する。黒色系漆においては、黒色顔料を含まずとも漆自体の表層が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見える。筆者の調査では古代以来こうした方法が一般的と考えられるので、品質の判別や、材料科学の上からも両者の区別が必要である。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」と断る。内・外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

3）下地の分類

一般の粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、珪藻土使用は「珪藻土漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ（錆）漆下地」、膠使用は「地の粉またはサビ（錆）膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。

B　分析結果

1）塗膜分析

塗膜分析は漆器の内・外面数か所から数 mm の塗膜片を採取し実体顕微鏡で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、更に研磨を加えて（＃ 100 ～ 3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法。サンプルである手板試料と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行うが、これによって表面観察では分からない時代的地域的な塗装工程の特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる。報告は木胎（木地）から順に番号（①～）を付して説明する。「表層変質」とあるものは、酸化劣化防止層の形成を意味する。下地の炭粉粒子は下記のように 3 分類する。

細　粒…破砕工程が中粒炭粉より細かく炭粉粒子は均一で、針葉樹などの木口組織を全くとどめないもの。

中　粒…炭粉粒子は 1 ～ 2 μ m × 5 ～ 10 μ m 程度の針状粒子と長径 5 μ m 前後の多角形粒子などからなり、針葉樹などの木口組織はごく一部にしか認められないもの。

粗　粒…破砕工程が粗く針葉樹などの木口組織を各所にとどめるもの。炭粉粒子は不均一で各種形状のものを含み、長径 30 μ m 前後の針状ないし棒状粒子を含むことが多い。

分析 No.	試料 No.	遺物 No.	分析 No.	試料 No.	遺物 No.
No.1	SD3090 －台 6	51	G	Ⅷ包－台 513	
No.2	SD3102 －台 7	44	H	Ⅷ包－台 514	
No.3	Ⅷ包－台 519	2383	I	Ⅷ包－台 515	2077
No.4	Ⅷ包－台 520		J	SD1077 －台 116	305
No.5	SK1419 －台 416	1230	K	SD1077 －台 167	
No.6	SK1120 －台 28	1487	L	SD1077 －台 169	
No.7	SE598 －台 3	2397	M	SD1377 －台 456	
No.8	SE765 －台 7	2438	N	SD1377 －台 457	
A	SD1077 －台 170	322	O	SD1377 －台 458	
B	SD1147 －台 12	1763	P	SD1377 －台 459	
C	SD1377 －台 462	852	Q	SD2008 －台 17	
D	SD1377 －台 463		R	Ⅷ包－台 512	
E	SD1377 －台 465	851	S	Ⅷ包－台 521	2227
F	SK1354 －台 6	1535			

※ 包は遺物包含層

第 18 表　分析・試料・遺物 No. 一覧表

◇ No.1（SD3090 －台 6、第 53 図）　　椀（総黒色系、9 世紀中葉）

器形・表面観察

口縁部のみの遺存で全体の形状は不明だが、緩やかに立ち上がる大ぶりの総黒色系椀。塗膜は茶色がかっているが光沢があり、やや厚手の上質品。木取り不明。

塗膜分析

口縁部内・外面（木胎には十分漆がしみこんでいる）①布着せ層。層厚 343 μ m前後。繊維束の長径 270 μ m、短径 220 μ m前後。1 本の繊維は 7 μ mほどの細いもので、断面は曲がった胡瓜形であることから苧麻と判断される。②漆層。層厚 171 μ m 前後。③漆層。層厚 85 μ m 前後。全体に変質している。

◇ No.2（SD3102 －台 7、第 54・55 図）　　烏帽子（9 世紀中葉）

器形・表面観察

Ａ面の目合（網目）の間隔は 1mm 前後で、1cm に対して 10 本前後の粗い繊維で、塗膜分析から苧麻と判断される。Ｂ面は和紙の繊維に漆塗りされている（図版２右上段は繊維部分で、この裏が漆塗りされている）。Ａ・Ｂ面の考察については「小結」参照。

塗膜分析

外側①繊維層。繊維束断面は長径 590 μｍ、長径 245 μｍ。漆層。曲がった胡瓜形の断面形状から苧麻と判断される。②漆層。層厚 20 ～ 86 μｍ。表層 10 μｍが変質。部分によって全体が変質している。③漆層。層厚 20 ～ 86 μｍ。表層 10 μｍ前後が変質。図版では下層に比してこの層が厚い。

◇ No.3（Ⅷ包一台 519、第 53 図）　　椀（総黒色系、10 世紀前半）

器形・表面観察

木胎はなく土ごと取り上げられたものだが、球形に近い立ち上がりの総黒色系椀。高台裏にヨコ木取りの柾目痕が確認できる。底径約 7cm。

塗膜分析

木胎はなく、分析部分では下地は確認できない。おそらく木胎の上は下地がなく、直ちに漆塗りであろう。

内外面①漆層。層厚 137 ～ 342 μｍ。層厚がかなり厚いので、下部に十分酸素が行き届かず、ゴム質が凝集した空隙が生じている。層厚の薄い部分ではこうした現象は起きていない。表層 5 μｍ前後が変質しているが、図版ではこの部分が剝離して、②漆層と一緒（下層）になっている。②漆層。層厚 29 μｍ前後。表層 7 μｍ前後が変質している。

◇ No.4（Ⅷ包一台 520、図なし）　　椀（総黒色系、10 世紀前半）

器形・表面観察

塗膜のみで、No.3 と同一個体の可能性が高い。

塗膜分析　なし

◇ No.5（SK1419 －台 416、第 53・54 図）　　盤ないし椀（総黒色系、10 世紀前半）

器形・表面観察

土とともに採取されたもので、やや端反ぎみの総黒色系盤（皿）ないし椀。木胎は遺存しないが、ヨコ木取りの柾目痕が認められる。塗りは硬く上質。

塗膜分析

外面（第 53 図）①炭粉漆下地層。層厚 294 μｍ。炭粉は中粒でも粗い方に属する。針葉樹の粗い粒子は長径 245 μｍを測る。②漆層。層厚 37 μｍ前後。③漆層。層厚 34 μｍ前後。④漆層。層厚 37 μｍ前後。

内面（第 54 図）①炭粉漆下地層。最大層厚 74 μｍ。炭粉は中粒でも粗い。②漆層。層厚 44 ～ 61 μｍ。

◇ No.6（SK1120 －台 28、第 54・56 図）　　漆塗り板状品（総黒色系、10 世紀前半）

器形・表面観察

大変薄い（0.2mm 前後）方形柾目板の表面に漆塗り（総黒色系）されたもの。裏面は露胎状態であるが、隅の塗りが下にも見られるので、剝離した可能性もある。

塗膜分析

外面、全体 480 μmほどの厚い塗りが見られるので、下層から 1 ～ 3 層に分けて記述する。

①漆層。層厚 196 μ m 前後。②漆層。層厚 157 μ m 前後。③漆層。層厚 127 μ m 前後。①～③漆層は細かく見ると各々 10 層前後に区分できる。③漆層では剝離部分を埋めるコクソ漆状の木粉（層厚 39 ～ 100 μm）が観察できる。

◇ No.7（SE598 －台 3、第 54 図）　　椀（内面赤色、中世）

器形・表面観察

やや高めに高台から、緩やかに立ち上がる内面赤色、外面黒色系椀。外面は楓、薄？、土坡ないし岩などからなる赤色漆絵意匠が見られる。意匠はどちらかといえば東北的。塗りは高台裏にまで及ぶ。内面赤色のマンセル値は 9R 3.5 ／ 8.5（赤錆色）、漆絵は 8R 3.5 ／ 7（ベンガラ色）。ヨコ木取り（柾目）。

塗膜分析

内面①炭粉渋下地層。層厚不明。炭粉は中粒でもやや粗い。表層 2 ～ 5 μmが分離。②漆層。層厚 24 ～ 42 μ m。③赤色（朱）漆層。最大層厚 17 μ m。朱は 1 ～ 1.5 μ m の均質な粒子。

外面①炭粉渋下地層。層厚不明。炭粉は中粒でもやや粗い。②漆層。層厚 24 ～ 36 μ m。表層 12 μ mが変質。

◇ No.8（SE765 －台 7、第 53 図）　　椀（内面赤色、中世）　　朱確認

器形・表面観察

やや厚手の高台から、緩やかに立ち上がる内面赤色、外面黒色系椀。外面には赤色漆絵痕が確認できるが、意匠は不明。塗りは高台裏にまで及ぶ。内面赤色のマンセル値は 8R 3.5 ／ 7（ベンガラ色）。ヨコ木取り（柾目）。

塗膜分析

内面①炭粉渋下地層。層厚不明。炭粉は中粒。表層 7 μmが分離。②赤色（朱）漆層。層厚 54 μ m 前後。朱は 1 ～ 1.5 μ m の均質な粒子。

外面①炭粉渋下地層。層厚 62 ～ 120 μ m。炭粉は中粒。②漆層。層厚 44 μ m 前後。表層 15 μ mが変質。

2）赤外分光分析

分光学（Spectroscopy）は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」であり、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線を照射していくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法（Infrared Absorption Spectroscopy）と言う。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法（Fourier Transform Infrared Spectroscopy FT － IR）を用いた。赤外光は近赤外（波数 14000 ～ 4000cm^{-1}、波長 700nm ～ 2.5 μ m）、普通赤外（波数 4000 ～ 400cm^{-1}、波長 2.5 ～ 25 μ m）、遠赤外（波数 400 ～ 10cm^{-1}、波長 25 μ m ～ 1mm）に分けられるが、ここでは普通赤外光を用いる。波数は 1cm 当たりの波の数で、振動数を光速度で割ったものであり、波長の逆数である。FT － IR は普通赤外の場合は波数 4000 ～ 400cm^{-1} の光を 2 つの光束に分割し、1 つは固定し（固定鏡、ミラーA）、他方の光路長は可動ミラー（可動鏡、ミラーB）を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2 つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって、強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変

換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の１つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーＢの位置を調節し、光束Ｂの光路を変化させる。この変化させた各点において、次々とフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる［SILVERSTEIN・WEBSTER ほか 1999］。このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較検討することによって、塗装液及び顔料の同定ができる。

分析用試料は１～ 2mg を採取し KBr（臭化カリウム）100mg とともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを用いた（錠剤法）。条件は分解能 4cm^{-1}、積算回数 16、アポダイゼーション関数 Cosine。図の縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（cm^{-1}）。測定機器は日本分光製 FT － IR420。分析は前記の塗膜分析漆器のほかに下記の遺物について実施し、この赤外分光分析だけの試料についてはアルファベットを付した。

（1）漆紙（A ～ F、10 世紀前半）

A（SD1077 －台 170）、B（SD1147 －台 12）、C（SD1377 －台 462）、D（SD1377 －台 463）、E（SD1377 －台 465、表・裏面に墨書）、F（SK1354 －台 6）

（2）漆パレット、内面漆塗り土師器、内面スス付着土師器（第 55・56 図）

G（Ⅷ包－台 513、漆塗り）、H（Ⅷ包－台 514、漆塗り）、I（Ⅷ包－台 515、スス付着）、J（SD1077 －台 116、漆パレット）、K（SD1077 －台 167、漆パレット）、L（SD1077 －台 169、漆パレット）、M（SD1377 －台 456、スス付着）、N（SD1377 －台 457、漆塗り）、O（SD1377 －台 458、漆塗り）、P（SD1377 －台 459、漆塗り）、Q（SD2008 －台 17、漆パレット）、R（Ⅷ包－台 512、漆パレットか）

（3）特殊製品　S（Ⅷ包－台 521、第 56 図）

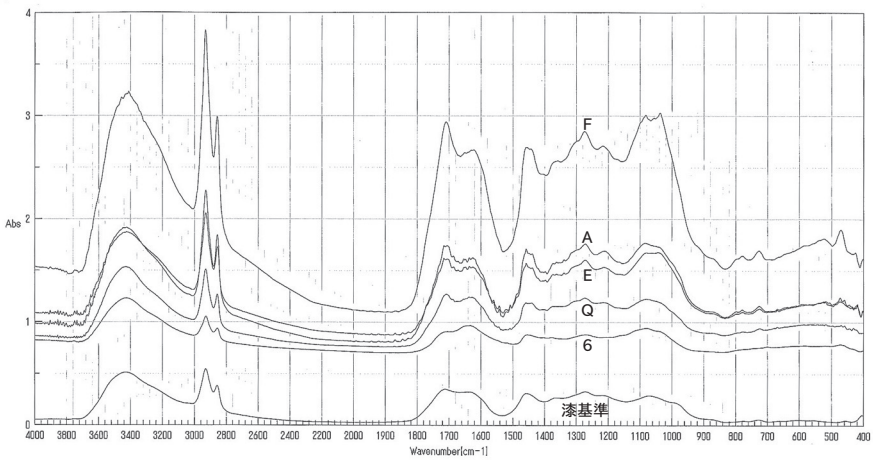
現存値で長径 3.5cm、短径 2.7cm の用途不明品で、全体に漆塗装されている。素地は腐食して遺存していないが漆塗膜のまきこみから見て、厚さは 3mm 前後である。菊花状花弁の中央部に径 1cm の円孔があり、その内部に二重の細い円管が差し込まれている。中心の円管は径 5mm、器壁は 0.1mm 前後で極めて薄い。エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析では金属の吸収は認められていない。その外囲に径 1cm の円孔があり、内側の実体顕微鏡写真では、縦に細い繊維痕が確認できる。竹や中空の茎を持つ植物の可能性がある。裏面は円孔部分が飛び出しており、全体に生漆で塗り固められている。縮み皺が著しい。こうしたものは金属であれば、武具の飾り金具の可能性もあるが、金属元素の検出はなく、花弁の擦痕から見て木胎の可能性が高い。現状では飾り具としておき、今後の検討を待つことにしたい。

3）赤外線吸収スペクトル

第 44 図は漆成分の劣化が少ないもので、漆塗膜の基準データは岩手県浄法寺産の精製漆塗膜（1992 年作製、以下同じ）。3422cm^{-1}（水酸基、OH 伸縮）、2925cm^{-1}（炭化水素の非対称伸縮振動）、2850cm^{-1}（炭化水素の対称伸縮振動）、1630 ～ 1620cm^{-1}（糖タンパク）、1465cm^{-1}（活性メチレン基）、1720 ～ 1710cm^{-1}（カルボニル基）、1280cm^{-1}（フェノール）、1030cm^{-1}前後（ゴム質）の漆同定要素が確認できる（第 44・46 図以外はノーマライズ）。

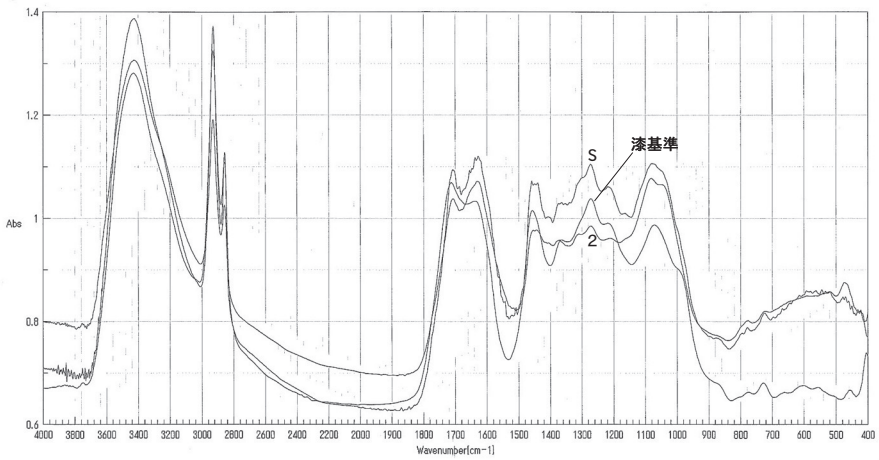
第 45 図は特殊製品とした飾り具（S）と烏帽子（2）の赤外線吸収スペクトル。これらも第 44 図同様に漆成分の劣化があまりなく、基準データの吸収とよく一致しているが、烏帽子はややゴム質の吸収が増大している。しかし野外で常時使用したような、極端な紫外線劣化ではないようだ。

第 46 図は漆紙（B・D）と内面漆塗り土師器（O）の赤外線吸収スペクトル。B の漆紙はややゴム質の



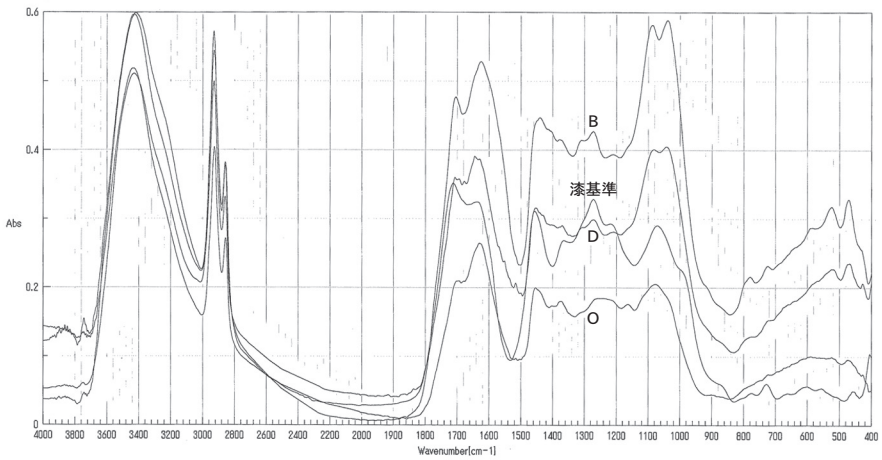
分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

第 44 図　赤外線吸収スペクトル（1）



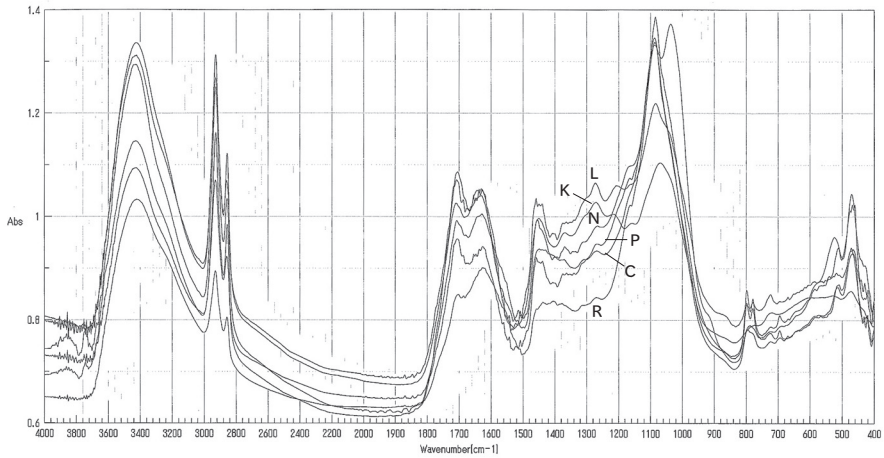
分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

第 45 図　赤外線吸収スペクトル（2）



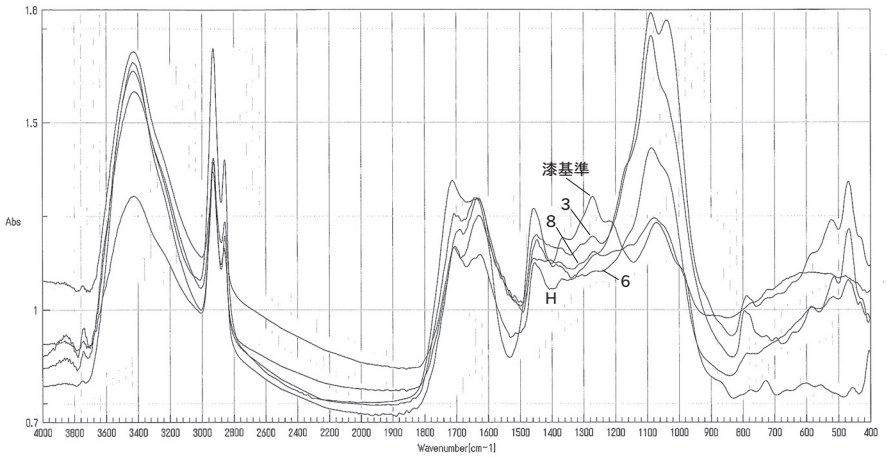
分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

第 46 図　赤外線吸収スペクトル（3）



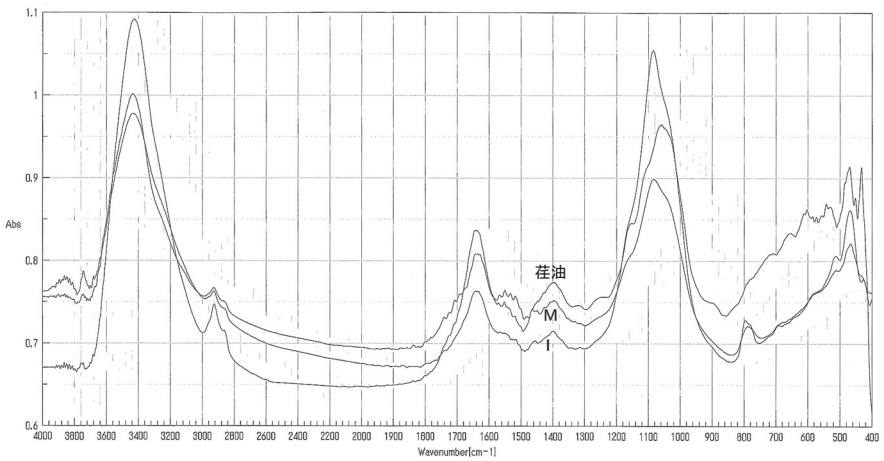
分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

第 47 図　赤外線吸収スペクトル（4）



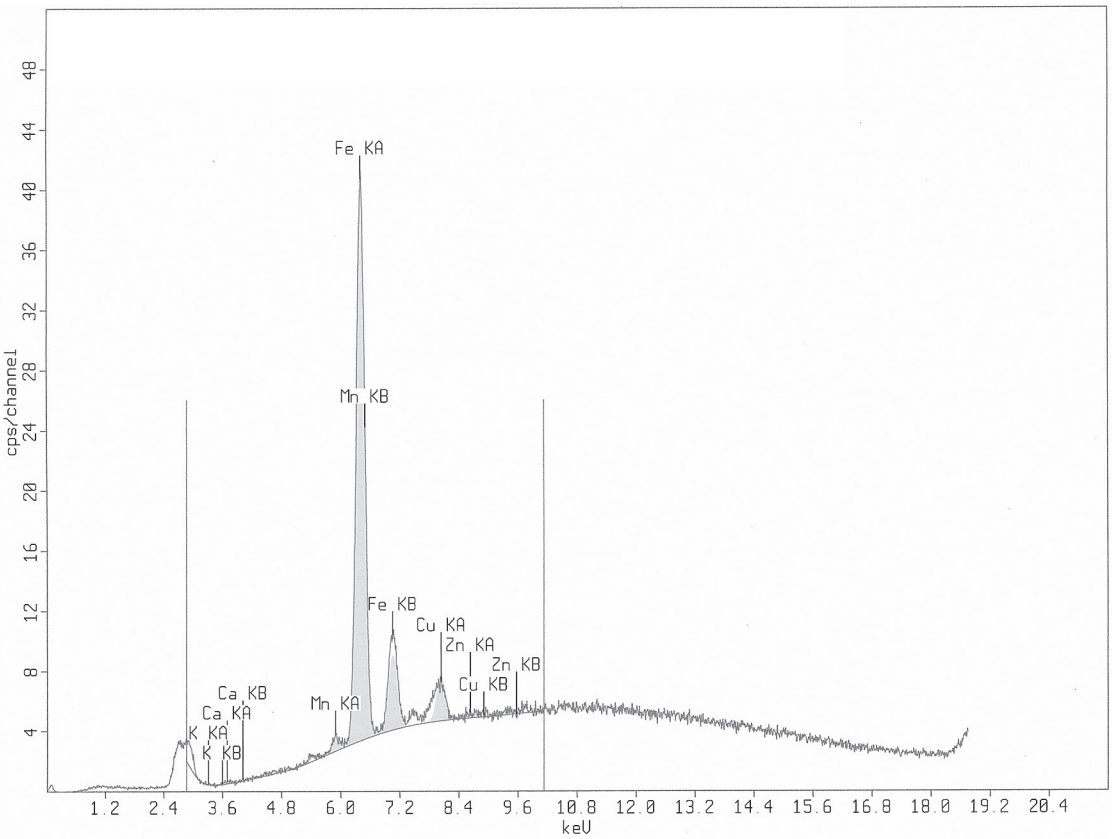
分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

第 48 図　赤外線吸収スペクトル（5）

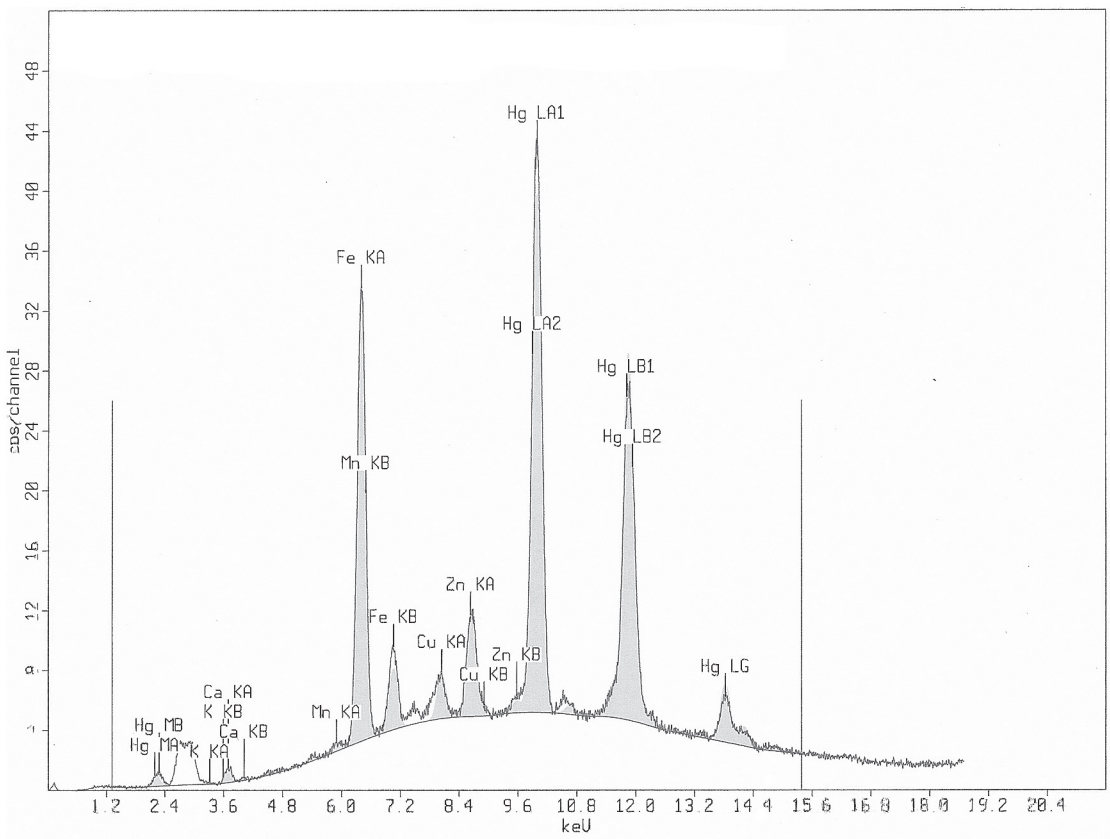


分解　4 cm-1
積算回数　16
アポダイゼーション　Cosine

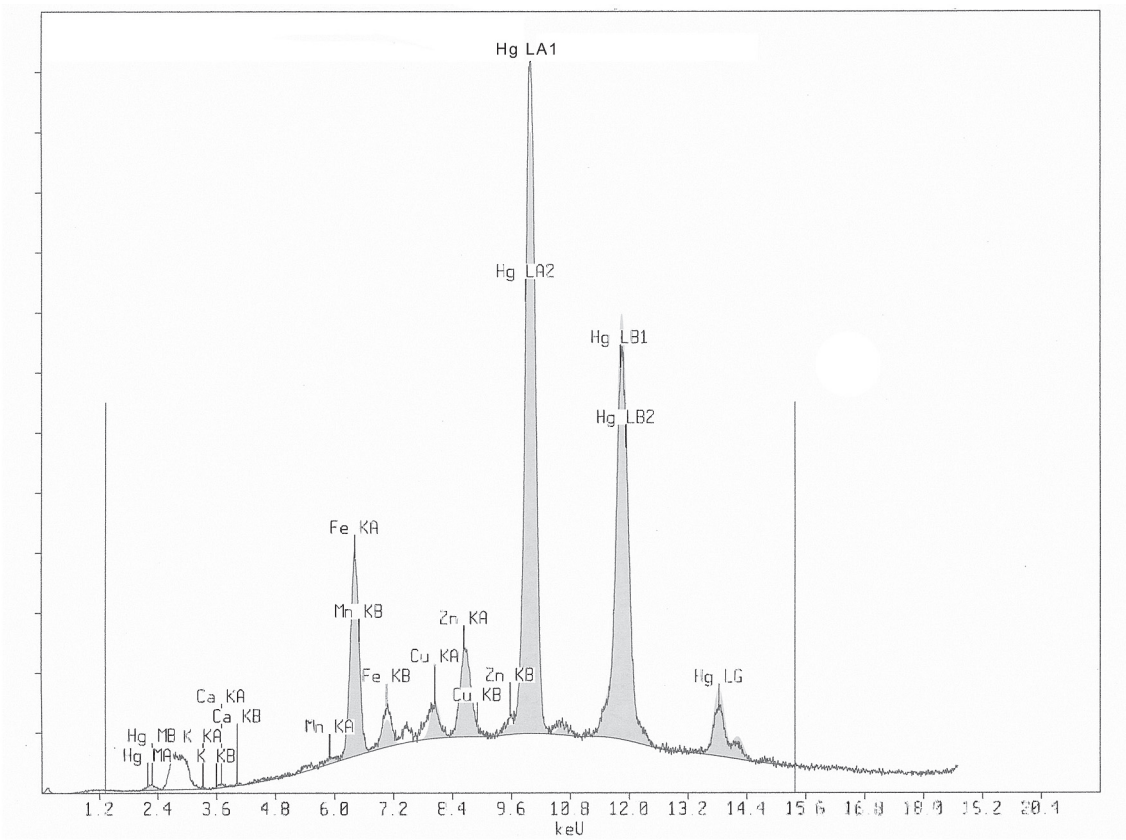
第 49 図　赤外線吸収スペクトル（6）



第 50 図　蛍光 X 線スペクトル（S）



第 51 図　蛍光 X 線スペクトル（No.8）



第 52 図　蛍光 X 線スペクトル（No.7）

増大が見られ、O はフェノールの吸収がややブロードとなっている。

第 47 図は漆パレット、内面漆塗り土師器の赤外線吸収スペクトル。K･L 以外はゴム質の吸収が著しく、劣化が相当進行していることが分かる。しかし野外に置かれて紫外線暴露にあったものではない。

第 48 図は漆器 3・6 と内面漆塗り土師器（H）、中世漆器（赤色漆、8）の赤外線吸収スペクトル。3・6・H は特にゴム質の吸収が著しく劣化が進行している。

第 49 図は土師器内面全体に付着した、漆に似た黒色物の赤外線吸収スペクトル。第 47 図で観察されるように、漆のような光沢や縮み皺は見られず、ススの状態であることが分かる。基準データとして荏胡麻油（荏油）のススの吸収を重ねたが、漆ではなくこうした油煙類の付着が考えられよう。古代の夜の灯火（燈明）はどのようであったかはよく分かっていないが、これまでの調査で加茂市馬越遺跡［四柳 2005］や加茂市中沢遺跡［四柳 2008］出土の土師器口縁部内・外面付着物の分析から、厚く付着したものは燈明痕であることを指摘してきた。

4）蛍光Ｘ線分析

蛍光Ｘ線分析は試料にＸ線を当てると、元素特有のＸ線（特性Ｘ線ないし固有Ｘ線）が発生（放出）する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う方法。赤外分光分析の項で紹介した特殊製品 S（Ⅷ包－台 521、第 47 図）及び内面赤色漆器 No.7（SE598 －台 3、第 45 図）・8（SE765 －台 7、第 44 図）の赤色顔料同定のためにエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析を行った（第 50 ～ 52 図）。

使用機器：PANalytical ／ PW4025、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置

使用管球：RH ターゲット 9W

検 出 器：高分解能電子冷却 Si 半導体検出器

測定条件：30 k V、20 μ A、フィルター　Kapton、100sec

測定室雰囲気：大気。測定部径 1mm

分析結果：特殊製品 S は中央部の極めて薄い管が、金属製品（銅管）か否かを確認するための分析だが、重元素である Fe のピークが強く出ている。これは漆塗膜からのものであり、銅管などの金属元素は検出されていない。中世漆器 No.7・8 の赤色顔料は顕微鏡観察では、ベンガラ粒子と見まごうほどの均一で細かな粒度であったが、強い Hg と Fe のピークが検出されており、朱（HgS）とベンガラ（Fe_2O_3）の併用と判断される。

C　小　　結

新潟県村上市西部遺跡は、越後平野を貫流する荒川の右岸に立地し、河口から約 2km の位置に当たる。こうした点から見ても河川と海上交通に重点をおいていたことは、容易に想像がつく。これまでの調査で工房を含む官衙関連遺跡として注目を集めてきたが［新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか 2006］、今回漆工関連遺物の調査から判明した点について、箇条書にまとめておきたい。

1）古代漆器の塗装技術

9 世紀中葉

No.1　　椀　口縁部　布着せ＋漆 2 層　（下地粉なし）

10 世紀前半

No.3　　椀　漆 2 層

No.5　　盤ないし椀　炭粉漆下地層＋漆 3 層

No.6　　漆塗り板状品　漆 30 層前後

（内・外面のうち漆塗り層の多いものを掲載）

以上の塗装工程がどのような品質に相当するのかについて、漆工関連遺物を出土した古代越後の官衙や富豪層クラスの遺跡例を二三紹介しておきたい。

長岡市八幡林遺跡［高橋ほか 1992 ～ 1994］［四柳 1997、2006］からは「沼垂城」「郡司符」木簡などとともに、壺・蓋など各種漆器のほか鏡箱と思われる漆塗円形容器（大型合子蓋）も発見されている。器形にはローカル色があり、在地生産を示す 25 号木簡の記載を裏付けるものと見ている。Ⅰ地区出土漆器（9 世紀）の塗装工程は下記のようになる。

漆塗円形容器（大型合子蓋）　地の粉漆下地＋漆＋黒色漆（油煙による黒色顔料が含まれた漆層、以下同じ）

小型蓋　地の粉漆下地＋漆

盤　炭粉漆下地＋炭粉漆下地＋漆

壺　布着せ＋地の粉漆下地＋黒色漆＋漆＋黒色漆

加茂市馬越遺跡では施釉陶器や帯金具類とともに、各種漆工遺物が出土している。Ⅱ区（9 世紀末から 10 世紀前半）出土の漆器は、報告 No.13（総黒色系椀）では地の粉漆下地＋漆 2 層、No.14（総黒色系椀）は下地がなく、木胎（木地）に直に漆 2 層が塗られていた。

胎内市船戸桜田遺跡［四柳 2002］では、川跡から木簡（「合籾五石五斗」「麻続マ宿奈麻呂」）、墨書土師器（「木」・

「王」)・須恵器(「村」・「廣」・「古」)とともに、多くの木製品が出土している。漆器では蓋や稜鉢も含まれている。2 次調査（9 世紀後半）と 4 次調査（10 世紀）出土漆器では、上質品であることを示す地の粉漆下地漆器は認められなかったが、炭粉漆下地で下地を含めて塗り 3 ～ 4 層の盤（報告書 4-1、599）と椀（699）がある。灰釉写し（694）と考えられる木地が薄くて均一な有台の小盤は、意外と漆 1 層の簡素なものであった。

胎内市船戸川崎遺跡［四柳 2002］出土の高杯の下地は、地の粉と炭粉が混合されていた。こうした漆下地例は極めて珍しく、長岡京左京四条二坊出土鉢（8 世紀末）［岡田 1995］や石川県かほく市指江Ｂ遺跡出土鉢（10 世紀）［四柳ほか 2002］数例と重文クラスの伝世品に認められる程度のものである。

古代の漆工技術は『延喜式』に材料が記載されており、前述した出土例の分析結果と照合しながら検討していく方法がとられる。西部遺跡の 9 世紀中葉 No.1 椀（口縁部、布着せ＋漆 2 層）は、布着せがある上質椀に採用される、地の粉（鉱物粒子）漆下地が省略され、八幡林遺跡例で見られた油煙による黒色顔料が含まれた漆層もない。つまり肉眼では上質品に見えるが、細部で簡略化されたものと言える。10 世紀前半の No.5 盤ないし椀（炭粉漆下地層＋漆 3 層）の下地は、地の粉ではないが炭粉粒子を使用した漆下地で、3 層の漆塗りである。中級品と言えよう。No.3 椀（漆 2 層）は下地がなく、直に漆が 2 層塗られた簡素なものである。No.6 漆塗り板状品（漆 30 層前後）は、薄い木地に多層塗りの製品で、用途は不詳ながら特別な上質品と見てよい。

2）9 世紀中葉の烏帽子または圭冠

天武 11（683）年の官制で漆紗冠と圭冠ができたが、略服時の被り物である筒状の後者が烏帽子の原型と言われている。奈良時代の「衣服令」によって服装が規定され、被り物も社会的身分の表示となった。烏帽子は形によって立烏帽子、折烏帽子（風折烏帽子・侍烏帽子）、菱烏帽子（引立烏帽子）などの種類があり、頭髪を束ねた髻と小結（紐）で結ばれている。烏帽子は通常外側と内側（芯）の二枚の布を重ねており、中世出土品では上質品は絹、庶民用の安価なものは苧麻（カラムシ）を用いており、なかには内側が苧麻で外面が絹の例もある［四柳 2006］。No.2 のＡ面は粗い苧麻の目合に漆塗りであるが、目合の間隔が粗いために漆は繊維部分だけとなって、空隙の多いものとなっている。Ｂ面は和紙に平滑に漆塗りされている。通常Ａ面は外側、Ｂ面は内側（芯）と考えがちだが、Ａ面の状況は前述したようであり、内面に和紙を用いている点は疑問が残る。つまり見た目の美しさや滑らかさと素材の貴重さから言ってＢ面が外側で、Ａ面が内側の可能性も残されている。No.2 の時期は 9 世紀中葉に比定されており、圭冠から烏帽子に移行段階のものかもしれない。10 世紀以前の地方出土例が少ないので、今後の検討課題としておきたい。

3）10 世紀前半の漆紙

赤外分光分析において、A（SD1077 －台 170）、B（SD1147 －台 12）、C（SD1377 －台 462）、D（SD1377 －台 463）、E（SD1377 －台 465、表・裏面に墨書）、F（SK1354 －台 6）の漆パレットの蓋紙を調査した。漆成分を良好に残す事例が多く、かつ紫外線劣化もないので、ほかの漆パレット同様屋内で使用されたことが明確な事例である。

4）10 世紀前半の内面漆塗り土師器と内面スス付着土師器の識別と用途

内面漆塗り土師器と内面スス付着土師器は、慣れないと肉眼では識別できないことがある。タール状に極端に光沢があるものや逆にそれがなく微粒子が集合したようなブツブツ状態のものは、漆ではないと見

てよいだろう。赤外分光分析の項でとりあげたⅠ（Ⅷ包－台 515）、M（SD1377 －台 456）は、荏胡麻油（荏油）など油煙類の付着が考えられる。古代の官衙や富豪層クラスの遺跡では、夜の宴がかなり行われたはずであるが、実態はよく分からなかった。加茂市中沢遺跡や馬越遺跡からは、土師器内面に荏胡麻油と考えられる厚手の付着物例がかなり出土しており、多くは燈明用と考えている。西部遺跡ではススの付着が厚いM（SD1377 －台 456）は、同様の事例と判断される。

5）中 世 漆 器

2 点の塗装工程は以下のようである。

No.7　内面　炭粉渋下地層＋漆層＋赤色（朱）漆層
　　外面　炭粉渋下地層＋漆層
No.8　内面　炭粉渋下地層＋赤色（朱）漆層
　　外面　炭粉渋下地層＋漆層

No.7 の内面は No.8 より漆層が 1 層多いが、共に下地は普及タイプの渋下地漆器で、内面に朱漆を用いることで高級感を出している。No.7 の赤色（朱）漆絵の楓、薄？、土坡ないし岩などからなる意匠構成と筆法は、東北地域に共通したものが感じ取れる［四柳 2006］。時期的には 14 世紀後半から 15 世紀代であろう。

以上要点を紹介してきたが、西部遺跡では古代漆器並びに漆パレット、漆紙などの漆工関係遺物がかなり出土している。古代では貴重な漆の採取や生産は限られた所でしか行われておらず、漆工関係遺物の出土は遺跡の性格を特定する上において重要な指標となっている。

律令国家の財政は、農民に課した租・庸・調・出挙などの税収入でまかなわれたが、京での労働の代納物である庸と特産物の調は中央政府の財源となった。庸の「漆塗韓櫃（からびつ）」製作は、伊勢・尾張・三河・遠江・近江・美濃・越前・越中・丹波・但馬・播磨国に課せられた。また諸国が正税で産物を購入して中央に貢進する「交易雑物」（大宝令の「朝集使貢献物」）の漆は、越前・加賀・越中・越後の諸国。大宰府は毎年一定量の品を中央に貢進する年料として、「朱漆酒海（しゅかい）・下食盤（おろしのさら）・中盤（ちゅうのさら）・飯椀（いいまり）・羹椀（あつもの）・盤（さら）・盞（さかづき）・黒漆提壺（ひさげつぼ）」などの品々 1,168 点を納めているが、漆器の器種の豊富さは抜きんでている。そして広範に漆の産地が分かるのは、17 ～ 20 歳以下の男子に地方の特産物を貢進させる「中男作物」である。上総・上野・越前・能登・越中・越後・丹波・丹後・但馬・因幡・備中・備後・筑前・筑後・豊後国が対象だが、東北を除いてほぼ列島をカバーしている。『正倉院文書』を見ると、陸奥国・上野国などの漆が寺院造営に際して調達されているので、これらを合わせると、東北・北陸・畿内・山陰・四国・九州の広範な地域から漆や製品が京に集められたことが分かる。

なお、天平 6（734）年 10 月の『出雲国計会帳』のなかに「桑漆帳」一巻がある。この「桑漆帳」は四度公文枝文で、四度公文とは大計帳・正税帳・調帳・朝集帳、枝文は付属帳簿である。これらは中央政府に地方政務の実情を進上する重要な帳簿だが、古代国家にとって貴重な漆と桑（養蚕）の入手は最優先事項だった。漆は上戸（青年男子 6 ～ 7 人）100 根以上、中戸（青年男子 4 ～ 5 人）は 70 根以上、下戸（青年男子 3 人以下）は 40 根以上を 5 年で植え終わるように定め、正丁（21 ～ 60 歳の男子）の調副物（調の付属税）として納めさせた。ところがこのウルシ（ウルシノキ）の植栽は全国的に実施された形跡はなく、植栽の督励も天平 20 年（748）と、大同 3（808）年に出されている。つまるところ畿内周辺、越国、丹波、

因幡、出雲、陸奥、上野国に限定されたようだ。越国の実態も北陸における今後の発掘と科学的調査によって次第に明らかにされるはずである。

【引用・参考文献】

岡田文男　1995 『古代出土漆器の研究』京都書院

高橋　保・桑原陽一・田中　靖ほか　1992～1994 『八幡林遺跡』新潟県和島村教育委員会

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・山武考古学研究所　2006 「西部遺跡（04北区）現地説明会資料」

四柳嘉章　2005 「新潟県加茂市馬越遺跡出土漆器の科学分析」『加茂市文化財調査報告（14）馬越遺跡』新潟県加茂市教育委員会

四柳嘉章　2008 「中沢遺跡土師器・須恵器付着物の科学分析」『平成17・18年度加茂市内遺跡確認調査報告書』新潟県加茂市教育委員会

四柳嘉章　1997 「北陸出土の古代～中世漆器の塗膜分析報告」『北陸の漆器考古学―中世とその前後』北陸中世土器研究会

四柳嘉章　2002 「新潟県中条町船戸桜田遺跡出土漆器の科学的分析」『船戸川崎遺跡4・5次、船戸川崎遺跡6次』新潟県中条町教育委員会

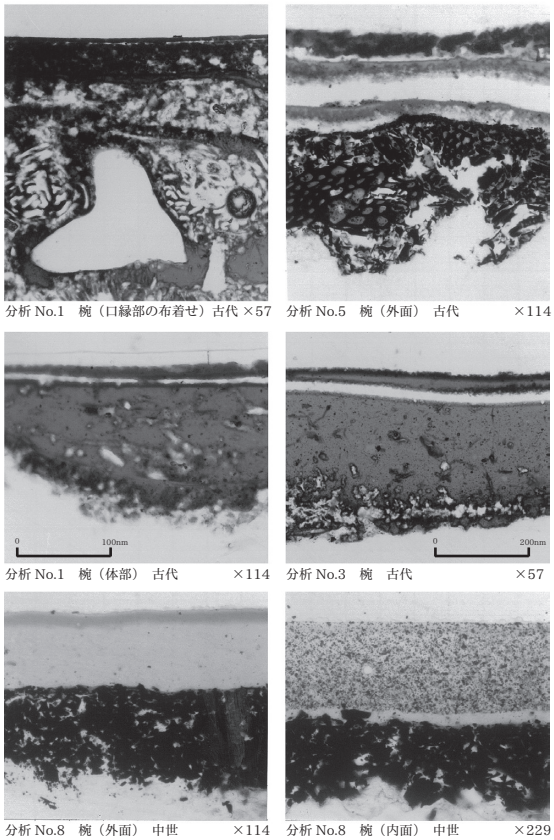
四柳嘉章　2002 「新潟県中条町船戸川崎遺跡出土漆器の科学的分析」『船戸川崎遺跡4次』新潟県中条町教育委員会

四柳嘉章　2006 『漆・Ⅰ』法政大学出版局

四柳嘉章　2006 『漆・Ⅱ』法政大学出版局

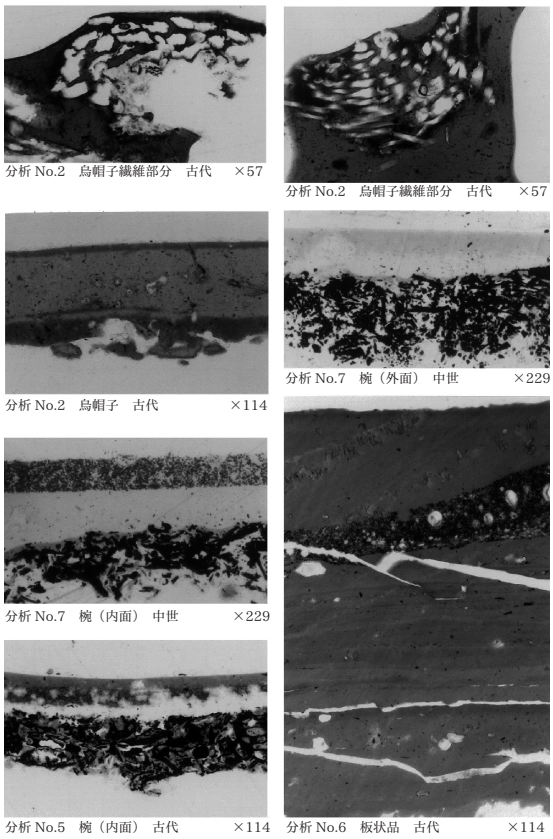
四柳嘉章･四柳嘉之　2002 「宇ノ気町指江Ｂ遺跡出土漆器の科学的分析」『指江遺跡･指江Ｂ遺跡』石川県教育委員会･石川県埋蔵文化財センター

SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳　1999 『有機化合物のスペクトルによる同定法―MS、IR、NMRの併用 第6版』東京化学同人



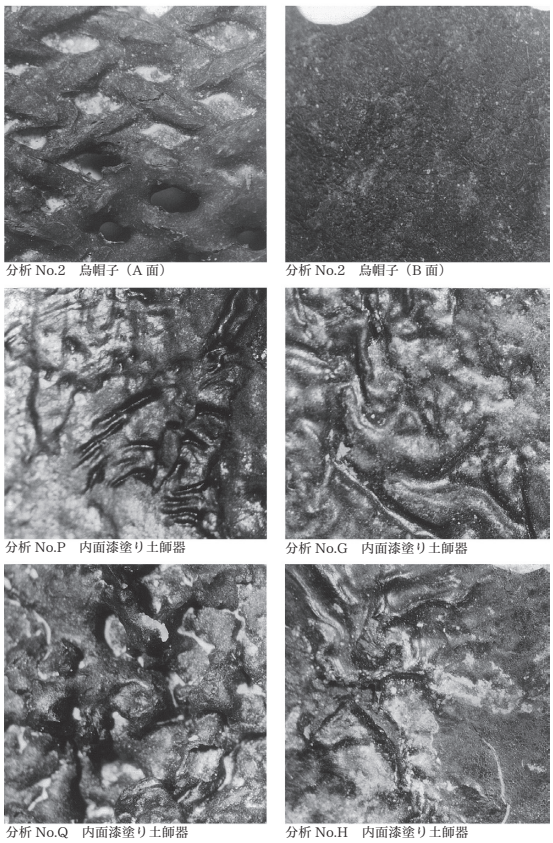
分析 No.1　椀（口縁部の布着せ）古代 ×57　分析 No.5　椀（外面）　古代　×114
分析 No.1　椀（体部）　古代　×114　分析 No.3　椀　古代　×57
分析 No.8　椀（外面）　中世　×114　分析 No.8　椀（内面）　中世　×229

第53図　漆製品の断面写真（1）



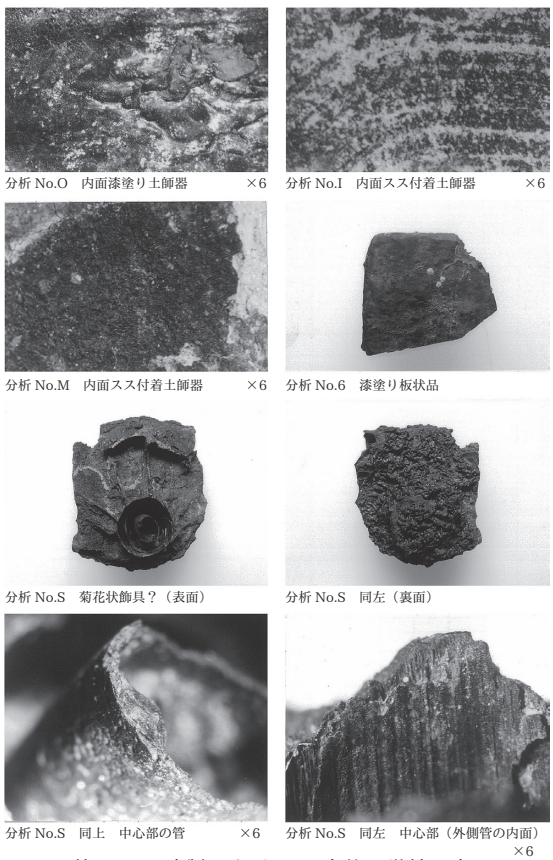
分析 No.2　烏帽子繊維部分　古代　×57　分析 No.2　烏帽子繊維部分　古代　×57
分析 No.2　烏帽子　古代　×114　分析 No.7　椀（外面）　中世　×229
分析 No.7　椀（内面）　中世　×229
分析 No.5　椀（内面）　古代　×114　分析 No.6　板状品　古代　×114

第54図　漆製品の断面写真（2）



分析 No.2　烏帽子（A 面）　分析 No.2　烏帽子（B 面）
分析 No.P　内面漆塗り土師器　分析 No.G　内面漆塗り土師器
分析 No.Q　内面漆塗り土師器　分析 No.H　内面漆塗り土師器

第55図　漆製品表面の実体顕微鏡写真（×6）



分析 No.O　内面漆塗り土師器　×6　分析 No.I　内面ス ス付着土師器　×6
分析 No.M　内面ス ス付着土師器　×6　分析 No.6　漆塗り板状品
分析 No.S　菊花状飾具？（表面）　分析 No.S　同左（裏面）
分析 No.S　同上　中心部の管　×6　分析 No.S　同左　中心部（外側管の内面）　×6

第56図　漆製品内･外面の実体顕微鏡写真

4　西部遺跡から出土した漆紙資料の年代

東京大学総合研究博物館　吉田邦夫

A　は　じ　め　に

ウルシから採取された漆液は、空気中で酸化重合して硬化する。正確に言うと、漆液に含まれるラッカーゼという酵素が、漆液の主成分であるウルシオールを酸化し、還元されたラッカーゼが空気中の酸素によって酸化され、再び活性のあるラッカーゼに戻ることを繰り返し、ウルシオールが酸化重合して硬化するのである。したがって、漆液を湿度の高い空気中に放置すると、硬化してしまう。保存するためには、容器に入れた漆液が空気に触れないようにするために、紙などを液面に密着させて蓋をする必要がある。セルロースによって構成される紙は、埋蔵中に微生物などによって分解されるなど腐食しやすいが、漆は強固な構造を持つために、漆液が浸潤した紙は土中で分解せずに残される。これが漆紙である。硬化した漆は紫外線によって分解することが知られている。

B　漆　資　料

2008 年 5 月 14 日に、漆紙資料 3 点、漆液資料 1 点を受領した（第 19 表、第 57 図：SD1377）。

漆容器の木質部が腐食して遺存していない漆液については、形状を保存、強度を持たせるために表面全体にパラロイド B72 溶液（約 10%、アセトン溶液）を 3 回塗布したとされている。その他の資料は、薬品処理をしていない未接合の破片の提供を受けた。

第 57 図　E 漆紙文書（851）の破片

資料番号	遺物№	遺物種別	出土遺構の年代観	薬品処理	備考
SD1077- 台 170（整理 No.B）	322	漆紙	10 世紀前半	なし	
SD1377- 台 465（整理 No.E）	851	漆紙文書	10 世紀前半	なし	文字が書かれたのは 8 世紀後半の可能性有り
SK2120- 台 1（整理 No.3）	1363	漆紙	10 世紀前半	なし	
SX2001- 台 35	1736	漆容器	10 世紀前半	パラロイド B72	木質部は遺存しない

第 19 表　漆関係資料

C　年代測定試料の調製

1）パラロイド B72 塗膜の除去

微細な穴や入り組んだ構造を持つ資料でなければ、パラロイド B72 塗膜は、有機溶媒を用いて比較的簡単に除去することができる。パラロイド B72 はアクリル樹脂で、通常アセトンに溶解して使用される。漆容器の保存処理も、アセトンを溶媒としているという報告を得ている。今回は、トルエンを用いて、室温で約 20 時間、超音波洗浄を行い、塗膜を除去した。パラロイド B72 は石油化学製品なので ^{14}C を含んでおらず、もし十分に除去できなかった場合は、試料中に炭素量として 1%残存すると、約 80 年古い年代を示すことになる。

2）漆紙から、漆と紙を分離できるか

整理 No.E の漆紙資料のように、8 世紀の文書を時代が下った後に使用して、漆を浸潤して漆紙文書が形成された可能性があるような場合、浸潤した漆液と和紙を分離することができれば、両者の年代を特定することが可能になる。しかし、前述したように漆は強固な塗膜を形成し、和紙の繊維中に浸潤している。セルロースが表面に出ている場合は、選択的にセルロース成分を溶解する薬液を用いれば、紙だけを除去することは可能かもしれない。また、逆に、漆塗膜は紫外線によって劣化・分解するので、セルロースが影響を受けない紫外線を照射すれば、漆塗膜だけ分解・除去することが可能となる。いずれにしろ、現状では漆紙の構造が分からないので、今後の検討課題としたい。

3）埋蔵中、発掘後に受けた汚染の除去

基本は AAA（酸 - アルカリ - 酸）処理によって、埋蔵中及び出土後に外から加わった炭素を除くことである。AAA 処理におけるアルカリ濃度は、資料がすべて溶解してしまわないようにすることが肝要であるが、硬化した漆は科学的に安定で、酸、アルカリ、有機溶媒に侵されないことが知られているので、通常使用する最高濃度である 1M 塩酸、1.2M 水酸化ナトリウム水溶液を用いて処理した。

漆紙資料は、まずミリポア水により超音波洗浄を行い、微細孔などに入った異物を除いた。白く濁ることが多く、白濁しなくなるまで 3 回洗浄した。その後、1M 塩酸で 1.5 時間、1.2M 水酸化ナトリウム水溶液で 1 時間、最後に 1M 塩酸で 2 時間処理をした。すべての処理は、スクリュー栓付きガラス遠沈管に入れ、ブロックバスで 80℃に加熱し、それぞれの処理後、ミリポア水で完全に洗浄して次の処理を行った。漆容器は、トルエンで処理した後、漆紙資料と同様に処理したが、やや長い時間をかけた。

削りだした資料の質量、化学処理の収率は、それぞれの資料ごとに、第 20 表に示した。

資料番号	遺物№	質量			回収率	酸化	CO_2	CO_2 収率	CO_2
		持ち込み（mg）	ピックアップ（mg）	AAA 処理後（mg）	（%）	使用量（mg）	生成量（C mg）	炭素含有量（%）	使用量（mg）
SD1077- 台 170（整理 No.B）	322	242.0	60.7	50.0	82.5	3.0	2.04	67.1	1.49
SD1377- 台 465（整理 No.E）	851	56.1	26.5	23.9	90.2	2.8	1.93	68.7	1.41
SK2120- 台 1（整理 No.3）	1363	460.7	81.0	71.5	88.3	3.0	2.00	67.1	1.46
SX2001- 台 35	1736	359.7	61.0	58.4	95.6	3.1	2.13	69.4	1.55

第 20 表　資料の質量、化学処理

4）測定試料の調製

試料は石英ガラス管に入れ、酸化銅（Ⅱ）1g を加え、真空にしてバーナーで封じ切った。またこの時、酸化により同時に発生する硫黄酸化物を除去するための銀箔を入れておく。このガラス管を、電気炉に入れ、500℃で 30 分、850℃で 2 時間加熱し、資料中に含まれる炭素をすべて酸化し二酸化炭素にした。このようにして得られた二酸化炭素を精製し、鉄触媒の存在下で水素によって還元してグラファイト－鉄混合試料を生成し、AMS 測定を行う。資料の酸化、二酸化炭素の精製、還元、測定試料の充填などの操作は、年代測定室の定法に従って行った［吉田 2004］。

D　年　代　測　定

測定は、東京大学工学系研究科原子力国際専攻のタンデム加速器研究設備に設置されている AMS 装置

を用いて行った。加速電圧 4.500 ＭＶで、高速逐次入射法（ジャンピング法）により、荷電変換後の C^{4+} を用いて ^{14}C ／ ^{12}C 比及び ^{14}C ／ ^{13}C 比を測定した（^{14}C の測定時間の合計は 600 秒）。この測定を 5 回行う。5 回の測定値のばらつきが統計誤差内にあるとき（χ^2 検定）は、^{14}C の総計数値に基づく測定値の統計誤差から求めた値を誤差としている。標準試料は、米国 NIST シュウ酸（SRM4990C;Oxalic Acid Ⅱ、HOx Ⅱ）と ANU スクロースを併用した。試料調製を含めた AMS システムのバックグラウンドは、国際原子力機関（IAEA）発行の標準試料 C1（marble;大理石）から作成した測定試料を用いて推定した。今回の測定では、^{14}C ／ $^{12}C = 1.4 \times 10^{-15}$ で、約 5.3 万年 BP に相当する。すべての測定試料の測定値から、このバックグラウンド値を差し引いて、年代値を算出した。

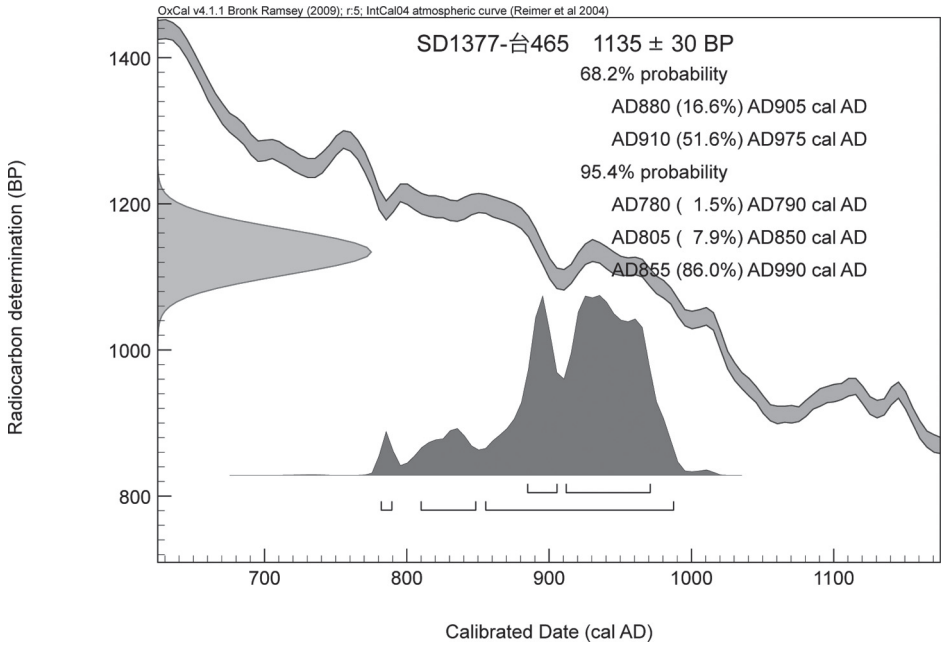
測定結果を、第 21 表に示す。半減期は Libby の値 5,568 年により年代を決定した。すべての年代値は、$\delta\ ^{13}C$ による同位体分別補正を行った放射性炭素年代値（Conventional Radiocarbon Age）である。補正は加速器で測定された $\delta\ ^{13}C$ 値を用いている。

E　暦　年　較　正

暦年代較正曲線 IntCal 04 に基づき、較正プログラム OxCal 4.1.1（Ramsey2009）を用いて暦年較正を行った。IntCal 04 は、12,410 cal BP までは、樹木の年輪を使って較正曲線を作成している。つまり、12,410 cal BP は、年輪年代に基づく 12,410 年前（AD1,950 年を基準として）を示している。この年輪資料を測定すると、放射性炭素年代値としては、10,521 BP が得られる。10 年または 20 年分の年輪について測定して、年輪年代と測定年代を求めてグラフにしたものが、暦年代較正曲線である（第 58 図のぎざぎざの線）。それより古い年代は、サンゴや有孔虫などの海洋試料を用いて、2 万 6 千年前まで較正曲線が作られている。

資料 SD1377 について、暦年代較正の方法を説明しておこう（第 58 図）。左の縦軸に乗っている山が、測定した ^{14}C 年代値とその前後の各年代値についての確率を表している。年代測定値は 1 σ（シグマ）の誤差を付けて報告をするように取り決められているが、実は、1,135 ± 30 という書き方は、このような確率分布を数式で表している。すなわち、中央値 1,135 BP ～± 30 BP の部分で山全体の面積の 68％を占め（1 σ＝信頼率 68％）、また 2 σ、つまり 2 倍の誤差、± 60 BP までの部分で 95％を占めるのである。数式だけを見ると誤差の範囲がすべて均等な意味を持っているように思ってしまうが、信頼率は中央ほど高いのである。ときに「確率論では、1 ～ 2 σではなく 6 σで考えるのが大原則だ」という声があるが、この表記法を元にいくらでも信頼率を上げた議論が出来るのである。要は、書かれている誤差がどういう意味を持っているかを万人が共通に理解できる書き方を決めているに過ぎないのである。

中央に左上から右下に走る二つの線が、誤差（± 1 σ）の範囲を示した較正曲線である。＋ 1 σと－ 1 σの線で示す。縦軸で ^{14}C 年代の中心値 1,135BP が確率分布の山の頂点にある。ここから右に水平に線を伸ばして、較正曲線と交差した点から垂直に線を下ろして較正年代とするときに、最も確率の高い点になる。このようにして、左側の山の高さに相当する確率の大小を較正曲線と交差した点で垂直に下ろして横軸上に転写しながら、順次、確率を足し合わせていくと、幅が広がった黒い山が得られる。もちろん、較正曲線にも分布の広がりがあるので、それらの確率の大小も加味されることになる。横軸に乗る黒い山が、較正年代値の確率分布曲線である。全体の山の面積（確率 1）に対して、山の高い所から順に集めて 68％の面積を占める範囲が 1 σ、つまり信頼率 68.3％の較正年代範囲となる（黒山の下の上段カッコ）。95％の部分をとれば、2 σの較正年代範囲となる（下段のカッコ）。較正年代の黒山はすべての測定年代値、



第 58 図　SD1377- 台 465（E 漆紙文書（851））の暦年代較正図

つまり、山の裾まですべてを拾っていることになるので、徹底的に信頼率を上げるつもりならば、心ゆくまで広い範囲を取ればよい。しかし、どれほど頑張ってもそれほど較正年代値が広がらないことが分かるであろう。なお、ここでは、較正年代は 5 の位までに丸めるように設定してある。信頼率 68％で考えると、AD885 ～ 970 の範囲に入る。測定誤差の± 30 年より大きく、100 年近い範囲になるのは、後述するようにこの年代範囲で暦年代較正曲線が寝ているためである。これらの較正暦年代を、第 21 表に示す。漆紙の 3 資料（遺物 No.851・1363・1736）を同じ時代の紙、漆液を用いたものと仮定して、測定値を結合（combine）した結果も示すが、年代範囲はほとんど変わらない。第 59 図で、4 資料（遺物 No.322・851・1363・1736）について較正暦年代範囲が比較できる。漆容器が最も新しく、SD1377 が、ほぼこれに重なっている。SD1077 と SK2120 がやや古い方に広がっているが、4 資料とも同じ年代であると考えると、10 世紀の前半から中ごろにかけてのものと考えるのが妥当であろう。

資料番号	遺物№	^{14}C 年代 BP ± 1 σ	δ ^{13}C ‰	較正暦年代　cal AD ± 1 σ範囲（信頼率）	較正暦年代　cal AD ± 2 σ範囲（信頼率）	測定番号 TKa-
SD1077- 台 170 （整理 No.B）	322	1145　±　45	-22.1	780　－　790（ 1.0%） 825　－　840（ 5.9%） 860　－　975（61.2%）	775　－　990（95.4%）	14569
SD1377- 台 465 （整理 No.E）	851	1135　±　30	-23.7	880　－　905（16.6%） 910　－　975（51.6%）	780　－　790（ 1.5%） 805　－　850（ 7.9%） 855　－　990（86.0%）	14570
SK2120- 台 1 （整理 No.3）	1363	1160　±　40	-29.0	780　－　790（ 4.3%） 805　－　900（49.7%） 920　－　950（14.2%）	770　－　980（95.4%）	14572
Combine（結合）		1144　±　22	－	880　－　900（20.2%） 915　－　965（48.0%）	780　－　790（ 1.6%） 810　－　850（ 8.4%） 855　－　975（85.4%）	_
SX2001- 台 35	1736	1100　±　35	-32.0	895　－　925（25.8%） 935　－　990（42.4%）	880　－ 1,020（95.4%）	14573

第 21 表　年代測定結果、暦年較正範囲

F　いくつかの問題

1）8 世紀前半の文書が使われた可能性

漆容器に残った漆液の年代が最も新しく、漆紙 3 資料（遺物 No.851・1363・1736）はすべて古い値を示し、中心値で 35 ～ 60 BP 古い結果が得られている。暦年較正をすると、第 59 図に見るように、漆液だけが新しいものと見ることが難しいことは一目瞭然であるが、その可能性を試算してみた。SD1377 の和紙を AD740 年のものと仮定すると、IntCal04 が示す ^{14}C 測定年代は、1,256 ± 14 BP となる。これに、SX2001（1,100 ± 40 BP）の漆液が浸潤して、SD1377 の年代 1,135 ± 30 BP の年代を示したと仮定すると、炭素の質量比で 20％以上の和紙が含まれることになる。より古い年代を示す SK2120 では、40％程度の和紙が必要になる。漆の炭素含有量が、和紙の 1.5 倍以上あることを考慮すると、この比率はあり得ないと思われる。計算では、誤差を無視して中心値のみを用いて算出した。

また、漆が浸潤した漆紙の構造を分析しているが、解明に至っていない。熱分解ガスクロマトグラフィー／質量分析計を用いた予備実験では、紙の成分（セルロース）を分析した場合の特徴である還元糖がほとんど検出されなかったという報告を受けている（明治大学工学部・宮腰哲雄教授、本多貴之助手）。

さらに、ストロンチウム同位体比を分析することによって、列島産の漆と中国産漆を識別できる手法をほぼ確立したので、本資料についても分析を進めている［中井・吉田ほか 2007-2009 投稿準備中］。

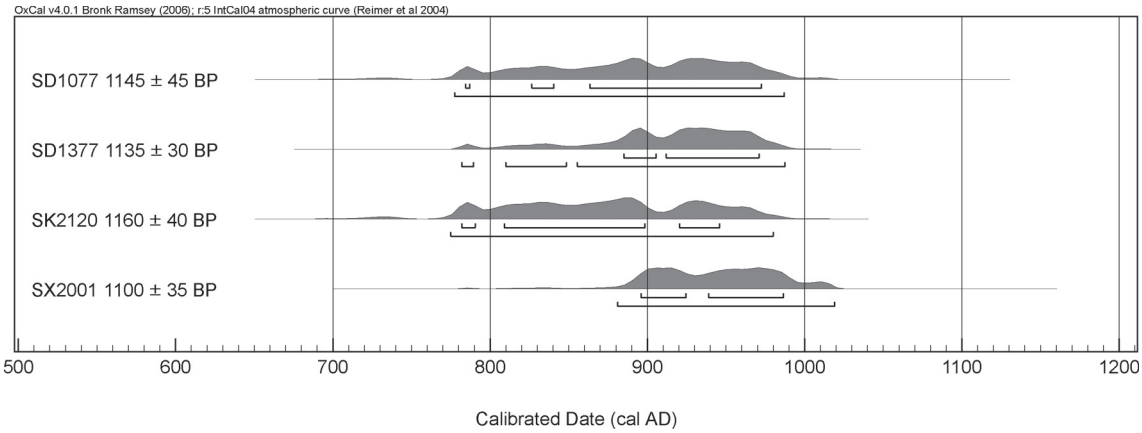
2）暦年代較正曲線が寝ている原因

この年代領域では暦年代較正を行うと、年代範囲が広がってしまうことを述べたが、暦年代較正曲線 IntCal 04 上で、これらの測定値が、どのような関係になるかを第 60 図に示した。

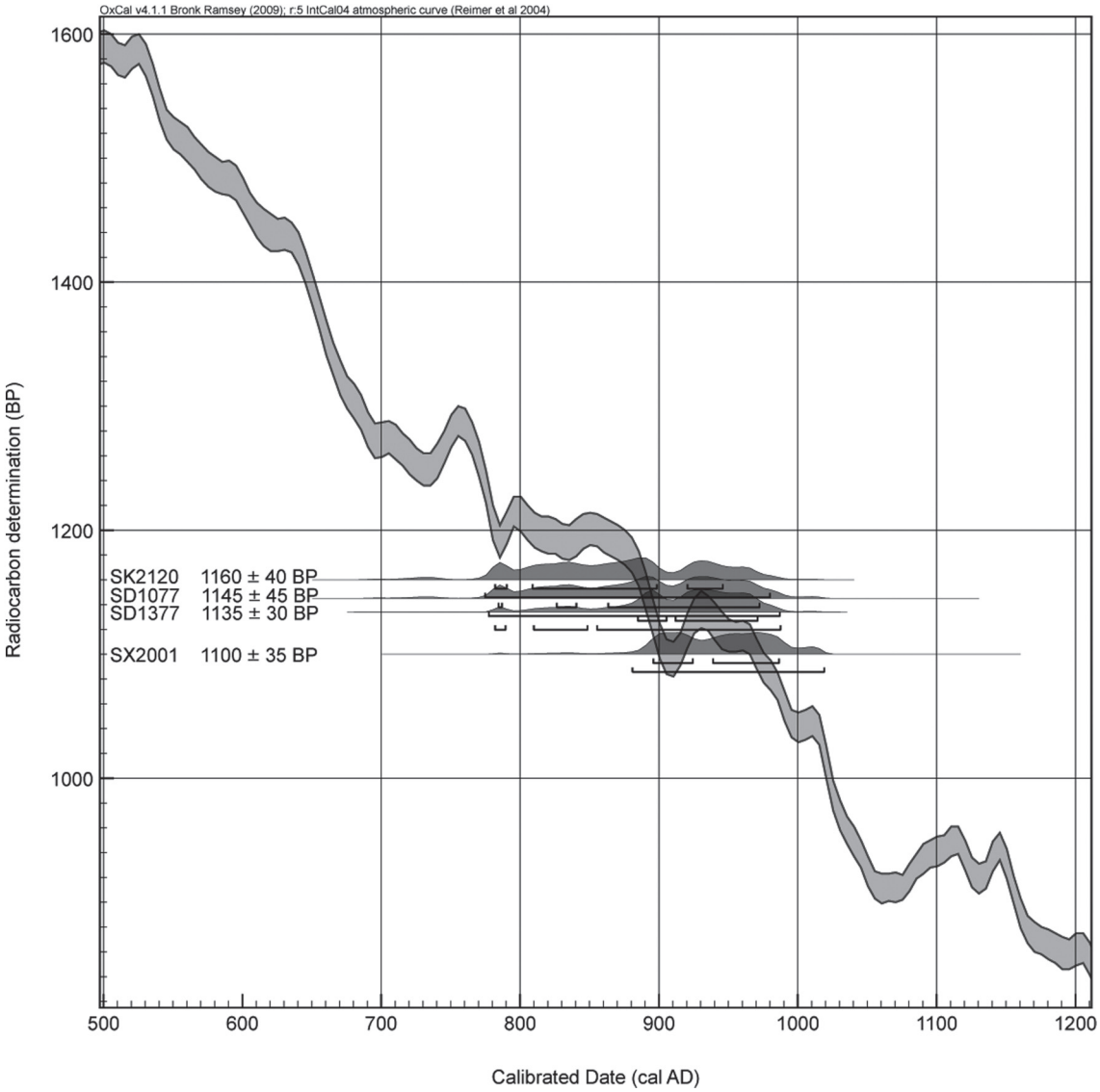
^{14}C 生成量を支配するもの

過去の ^{14}C 濃度は必ずしも一定ではなかったので、暦年較正が必要になる。^{14}C 生成量は大気上空の銀河宇宙線の強度に依存する。銀河宇宙線が高層大気と原子核反応を起して生成する中性子が、窒素原子と反応して ^{14}C 原子が生成しているからである。この宇宙線強度は、主として 2 つの要因、地磁気（地球磁場）と太陽活動によって変動する。地球の周りには地球磁場が存在しており、あたかも地球の中心に小さく強力な棒磁石が置かれているかのように見える。27 億年前に現れた地球磁場により地上への宇宙線入射が抑制され、深海底に押しとどめられていた生命体が、より浅い海へと進出することを可能にして、光合成植物の進化をもたらした。地磁気の強度は一定ではなく、最近 100 年間に約 6％減少し、このままでは 1,000 ～ 2,000 年で磁場が 0 になる可能性が指摘されている。地磁気の南北が逆転する事態も過去に何度も起きている。地磁気の強度が減少すると、宇宙線の入射量は増加し ^{14}C 生成量も増加する。

もう 1 つは、太陽活動による影響である。太陽磁場の強度や形状は変動しており、11 年（22 年）周期や、より長い周期での変化が報告されている。太陽活動が活発で太陽磁場が強いときには、銀河宇宙線が太陽圏に進入しにくくなり、地球上空の宇宙線強度が減少し、^{14}C 生成量も減少する。逆に太陽活動が弱いときには、^{14}C 生成量は増加する。



第 59 図　各資料の暦年代較正図



第 60 図　各資料の暦年代較正図と較正曲線

なぜ、この年代領域で較正曲線はギザギザしているのか？

第 61 図に、最近 1,000 年間の較正曲線を示す（黒丸：縦軸右目盛り）。大気中の ^{14}C 濃度がこの期間一定で変動がないとすると、横軸の AD 年代の資料を測定すると、波線（理論値）で示された直線との交点で示される測定値、たとえば、AD1,200 の資料ならば 750 BP（AD 1,950-1,200 ＝ 750 BP）となるはずである。ところが、AD 1,200 前後の較正曲線は理論値直線よりかなり上にあり、より古い測定値 860 BP が得られることになる。このグラフには、同時にその年の大気中 ^{14}C 濃度をプロットしてある（白丸・誤差棒つき）。目盛り軸は左縦軸で、現代炭素基準 ^{14}C 濃度値からの偏差を千分率（‰、パーミル）で表している。AD 1,100 ～ 1,200 ごろは、基準より 15 ～ 20‰、つまり 1.5 ～ 2.0％も生成量が少ないため、生命体に取り込まれた ^{14}C 濃度も小さくなり、見かけ上古い年代値を示しているのである。

逆に、グラフ中央の AD1,400 ～ 1,600 の領域では、^{14}C 生成量が大きくなる山が出現して、生命体に取り込まれた ^{14}C 濃度が高いため、この時期の資料は相対的に新しい測定年代が得られることになる。

すなわち最近の千年紀では、大気中の ^{14}C 濃度が大きく変動しているために、較正曲線がギザギザした複雑な形状をしているのである。

太陽活動が弱い小氷期の到来

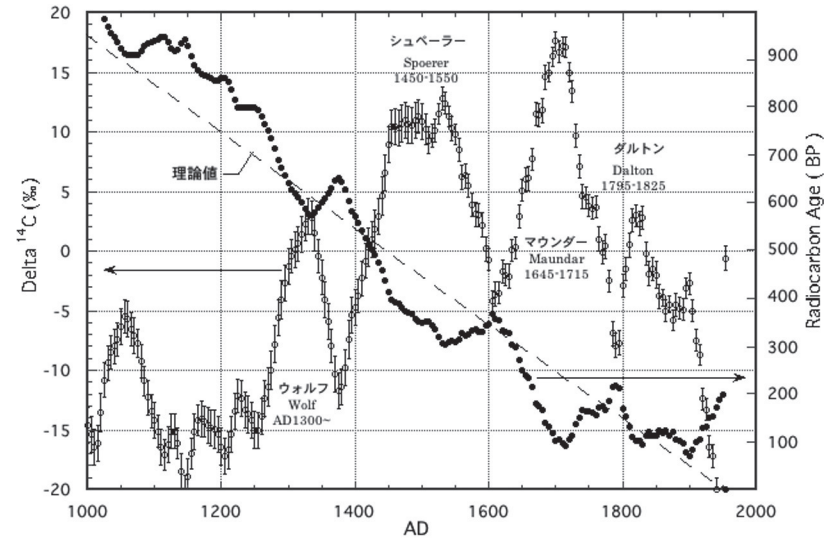
それではこの時期に、なぜ ^{14}C 濃度が増加する大きな山がいくつも現れるのだろうか？地磁気の変化は緩やかで急激な変化は少ない。この大きな山の出現は、太陽活動の結果である。中世の温暖期が終末を迎え、13 世紀中葉から 19 世紀にかけて太陽活動が不活発になり小氷期となったのである。[Eddy,J.A.1976]は、樹木年輪中の ^{14}C 濃度を測定して、太陽活動の極小期と極大期を明らかにした。シュペーラー極小期とマウンダー極小期である。後者は、19 世紀末に W. マウンダーが古記録の中から太陽の黒点についての記録を集め、17 世紀に黒点が発生しない時期があることを見いだしていた。太陽活動と太陽黒点数は相関しており、太陽活動が活発な時期は黒点が多いことが知られている。17 世紀中葉から 18 世紀初頭は「夏が来なかった時代」とも呼ばれ、氷河の成長、河川の凍結などが報告されている。

シュペーラー極小期は太陽活動は弱く、寒冷化が進んでいた。特に 15 世紀中葉は、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第 3 次評価報告書にある「地球の平均気温の変化（地球全体／過去 1,000 年）」の中でも、気温低下が著しい期間である。

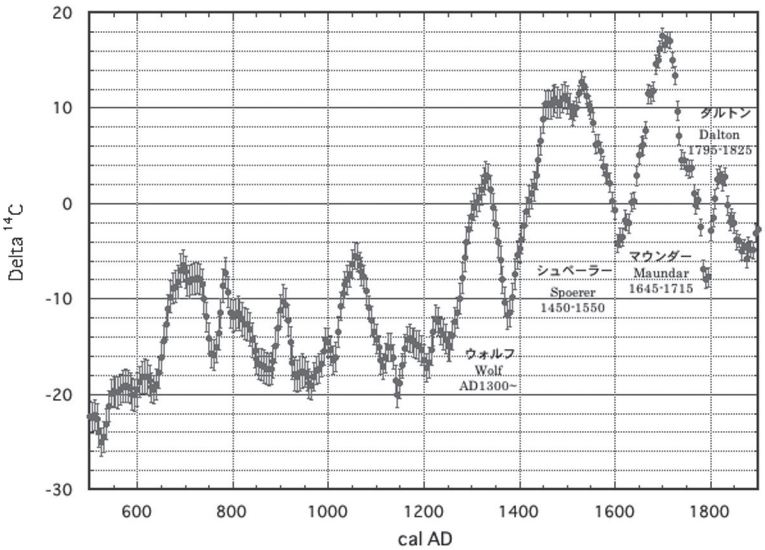
このような寒冷化は、農作物の不作を生み飢饉となり人々は飢えに苦しみ、栄養不足や日照不足によって健康が損なわれる結果となった。ウォルフ極小期では、14 世紀中葉に全ヨーロッパに黒死病（ペスト）が蔓延し、14 世紀末までにヨーロッパの人口の約 3 分の 1 が死亡したと言われる。ペストは、その後、17 世紀中葉にも流行しており、奇しくもマウンダー極小期に当たっている。

7 ～ 10 世紀前後の状況

13 世紀以降の小氷期ほど大きくはないが、7 ～ 12 世紀にも ^{14}C 濃度が増加する時期がある。AD700 前後と AD1,050 前後に大きな山があり、AD800 前後と AD900 に小さなピークが見える。この AD900 のピークのために、第 60 図で見たように較正曲線が大きくたるんで、較正年代の幅が広くなってしまうのである。13 世紀以降と異なり、この時期の寒暖に関しての検討は行われていないが、列島においても当然、影響を受けたものと想像できる。



第 61 図　IntCal 04 Δ ^{14}C データ（^{14}C 濃度変化）と小氷期



第 62 図　IntCal 04 Δ ^{14}C データ（^{14}C 濃度変化）

気候変動と生業や政治文化との関連

このように、^{14}C 年代測定は、生命遺存体の死亡年代を明らかにするだけでなく、その時代の気候変動について解明できるツールとしての役割を有していることは重要な点である。今後、当該時期における気候変動を指標として、人々の生活用具の変化、政治軍事状況、文化活動の変化などについて検討することができるかもしれない。

【引用・参考文献】

中井俊一・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・宮腰哲雄・神谷嘉美・本多貴之　2007-2009 「Sr同位体トレーサーによる漆の産地決定の可能性」日本地球化学会第54～56年会

吉田邦夫　2004 「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」『火炎土器の研究』新潟県立歴史博物館編 同成社 p17-36

Eddy, J.A.　1976 「“The Maunder Minimum.”」『Science』192　p1189-1202

Ramsey B.　2009 『OxCal』4.1.1

第Ⅶ章　ま　と　め

1　古　　代

A　Ⅻa　層

1）概　　要（第 63・64 図）

Ⅻａ層では集落を検出した。遺構は、梁間 1 間型の打込柱建物 1 棟、打込式の杭を伴うピット 26 基である。出土遺物に乏しく帰属時期の詳細は不明であるが、おおむね 8 世紀前半を中心とする時期を想定している。出土した遺物の大半は土師器非ロクロ甕・小甕であるが、遺跡の性格を示唆するような遺物として、硯として使用された痕跡が残る須恵器杯蓋 1 点が調査区北東側の包含層から出土している（13E9 区）。遺構や遺物の分布状況から、該期の集落は更に調査区外東側（山側）へ広がりを見せるものと推測される。

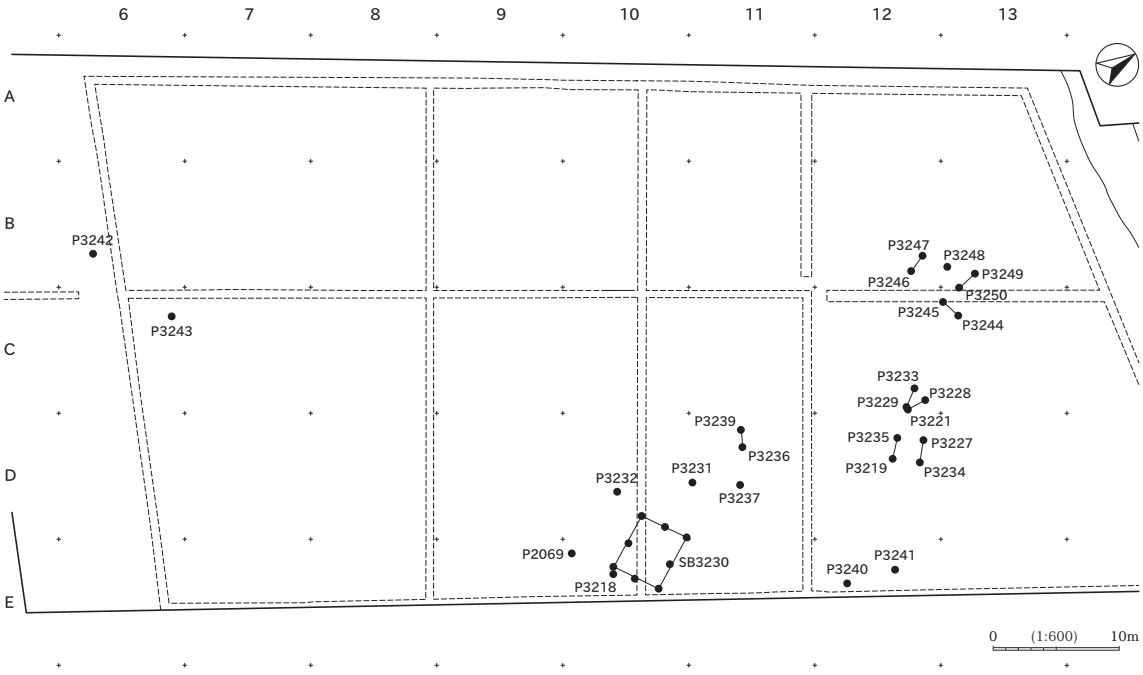
2）遺構の性格について（第 22 表）

打込柱建物 SB3230 は、検出状況及び出土遺物の分布から見て平地式の住居と考えられる。これに対して、散在して分布するピットの性格は明らかではないが、各ピット間の距離を計測したところ、芯々距離で 1.65m（5.5 尺）前後の間隔を持つ一群が確認された。P3219 と P3235、P3227 と P3234、P3228 と P3221、P3229 と P3233、P3236 と P3239、P3244 と P3245、P3246 と P3247、P3249 と P3250 の 8 組である。ピットの規模も組ごとにほぼ一致することから、これら 16 基のピットは、本来、2 基一組で構成された何らかの遺構であった可能性が考えられる。各組の配置及び軸方向については規則性がほとんど見られず、これらは必要に応じて随時構築されたものである可能性が高い。ピット内に遺存する杭は、いずれも細長く、直立しており、機能的には柱のように支持の用をなすものと考えられる。

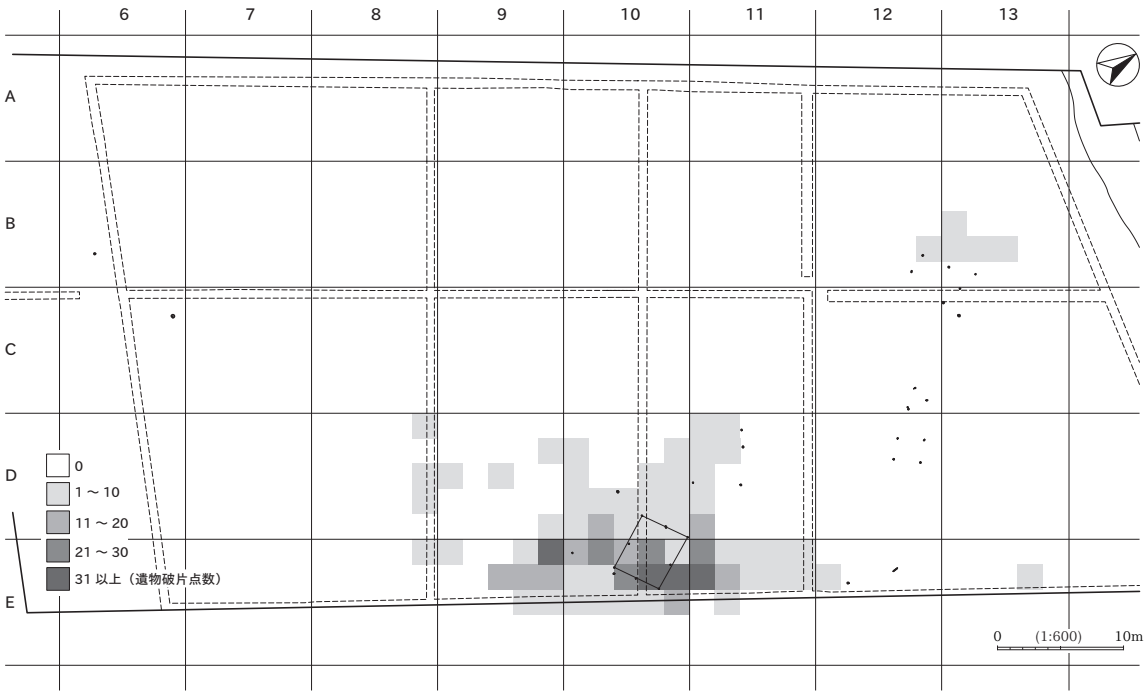
グリッド	遺構№	長径	深さ	杭の樹種	関係	遺構№	長径	深さ	杭の樹種	芯々距離	尺換算値	軸方位
12D	P3219	0.08	0.15	-	⇔	P3235	0.10	0.14	-	1.65	5.50	N-47° -W
12D	P3227	0.08	0.20	-	⇔	P3234	0.08	0.10	-	1.80	6.00	N-49° -W
12C	P3228	0.09	0.22	-	⇔	P3221	0.10	0.15	-	1.65	5.50	N- 7° -E
12C	P3229	0.08	0.44	クスノキ科	⇔	P3233	0.08	0.40	エゴノキ属	1.65	5.50	N-42° -W
11D	P3236	0.08	0.10	-	⇔	P3239	0.09	0.05	-	1.35	4.50	N-62° -W
13C	P3244	0.12	0.60	-	⇔	P3245	0.10	0.60	ニレ属	1.65	5.50	N-71° -E
12B	P3246	0.08	0.30	コナラ属	⇔	P3247	0.10	0.38	クリ	1.60	5.33	N-24° -W
13B	P3249	0.10	0.22	-	⇔	P3250	0.09	0.59	クリ	1.65	5.50	N-11° -W
10E	P2069	0.08	0.16	-	不明	-	-	-	-	-	-	-
10E	P3218	0.10	0.46	カツラ	不明	-	-	-	-	-	-	-
11D	P3231	0.06	0.18	クリ	不明	-	-	-	-	-	-	-
10D	P3232	0.14	0.09	-	不明	-	-	-	-	-	-	-
11D	P3237	0.10	0.18	-	不明	-	-	-	-	-	-	-
12E	P3240	0.14	0.06	-	不明	-	-	-	-	-	-	-
12E	P3241	0.06	0.34	トネリコ属	不明	-	-	-	-	-	-	-
6B	P3242	0.14	0.06	-	不明	-	-	-	-	-	-	-
6C	P3243	0.25	0.10	-	不明	-	-	-	-	-	-	-
13B	P3248	0.14	0.40	トネリコ属	不明	-	-	-	-	-	-	-

［単位：m、1 尺は 30cm 換算］

第 22 表　Ⅻａ層のピット及び相関関係



第 63 図　Ⅻa 層の遺構配置



第 64 図　Ⅻa 層の遺物出土分布

この 2 本の杭に横材（棟木）を架け渡すことにより、伏屋式の平地住居（屋内棟持式）のような構造物を想定することも可能である。明確な遺構としてはとらえ難いが、これらは散発的に独立した杭群ではなく、集落の縁辺部に構築された簡易な小屋のようなものであった可能性も考えられよう。

調査区の北側に隣接する西部遺跡Ⅲ［吉田ほか 2006］と西部遺跡Ⅳ［村田ほか 2009］からもⅫａ層に相当する層位から杭列が検出されている。杭列の用途・性格は不明であるが、西部遺跡Ⅲからは、先端を尖らせた 8 本の杭が六角形の平面を構成する SX4001（26C・D 区）や 5 本の杭が平行四辺形の平面を構成

する SX4002（24B 区）が、西部遺跡Ⅳからは、短く直線的に並ぶ杭列 SA1001 ～ 1003（26A 区）が見つかっている。

上記のように西部遺跡Ⅲ・Ⅳを含め、Ⅻａ層から検出した遺構は、いずれも打込式の柱あるいは杭で、主に軟弱地盤で多用される工法［宮本 2003］とされることから、この地域が当時低湿な環境下にあったことを示唆するものである。

B　Ⅻ　　層

1）水田について（第 65 図）

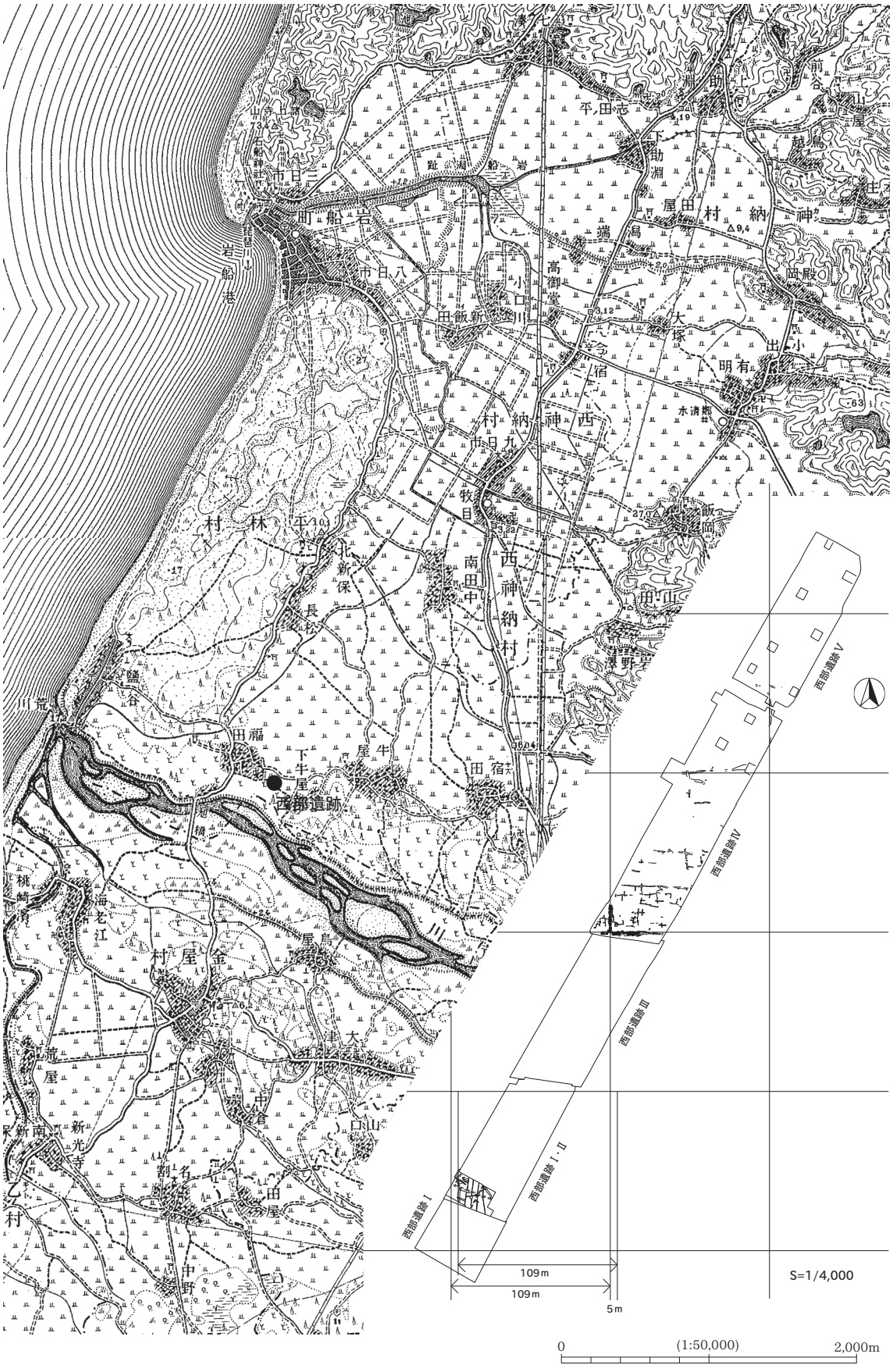
Ⅻ層からは、8 世紀後半から 9 世紀前半ごろと推定される水田を検出した。検出範囲は５～７Ａ～Ｄ区の調査区南西部で、それより北側と東側は既に消失しているが、西部遺跡Ⅱの北方約 100m を隔てた西部遺跡Ⅳ・Ⅴでは 8 世紀末から 9 世紀前半（第 1 面、Ⅻ層）と 10 世紀（第 2 面、Ⅹ層）の上下 2 面の条里型地割による水田が検出されている［村田ほか 2009、土本ほか 2008］。このうち、第 1 面とするものが本調査区で検出した水田に出土遺物の時期や検出層位の面から対応するものと考えられる。

西部遺跡Ⅱと西部遺跡Ⅳ・Ⅴとの間は、西部遺跡Ⅲ［吉田ほか 2006］として調査されているが、水田は検出されていない。西部遺跡Ⅳ・Ⅴでは水田が広範囲に検出されており、西部遺跡Ⅳで検出した波板状凹凸面を持つ畦畔 1013 と 1012 を東西軸と南北軸の基準とした場合、一町単位の方眼上に大畦畔が重なる。この方眼（第 1 面水田、109m 基準）を西部遺跡Ⅱまで広げて被せると、南北方位は一致するものの東側へ５m ほど誤差が生じる。この誤差がいかなる理由により生じるか考えてみたい。

西部遺跡Ⅳ・Ⅴの第 1 面では、調査区の南側で検出された東西方向の大畦畔 1013 とそれに直交する大畦畔 1012 に波板状凹凸面が見つかり、大畦畔 1013 から南側へ伸びる畦畔がないことと西部遺跡Ⅲで水田が検出されなかったことから水田域の南端と推測している[1)]。水田域は西部遺跡Ⅲで途切れるか、調査区外で繋がる一連の区画とも考えられる。仮に途切れていた場合は、東西の区画に対して異なる基準が適用されたことから、両地区を連続的に造成できない何らかの理由が存在したと考えられる。その理由として挙げられるものに地形がある。西部遺跡ⅡとⅣの間にある西部遺跡ⅢではⅫ層から自然流路が検出され、水田面に対応する層は両側の地区（西部遺跡Ⅱ・Ⅳ）に比べ標高が最大 0.80m ほど低く、両地区を地形的に分断していた可能性がある。西部遺跡Ⅳで推測された水田の利水条件などを満たすことができなかった地区がある場合、水田はその手前で一旦途切れ、その場所を越え、造成可能な地区で水廻りの便を考慮した新たな区画を造ることも考えられ、西部遺跡Ⅱの水田で見られた大畦畔の５mの誤差はそういった地形的要因から発生した可能性がある。

そのほかに考えられる要因としては、官道の構築・廃絶や幅の拡大・縮小に伴う余剰帯の発生や消失などがある。これに関しては、北陸道が現在の西蒲原郡弥彦村周辺で終点となっている点が問題となる。この点については、本来、北陸道が出羽国まで存在し、9 世紀のいずれかの時期において北陸道延長支路ないし東山道・北陸道連絡駅路に格下げとなったとする説［中村 2003］があり、同説を高橋美久二は出羽郡が越後に所属する時期があること、奥州三関の念珠関が山形県温海町にあること、山形県鶴岡市山田遺

1）　西部遺跡ⅢのⅧ層（西部遺跡Ⅳ・Ⅴの第 2 面に相当）の遺物分布を見ると、西部遺跡Ⅳの南北方向の大畦畔 0013（第 2 面）の延長上に帯状に分布している。西部遺跡Ⅳ・Ⅴでは大畦畔上に遺物が集中する傾向が見られることから、西部遺跡Ⅲに大畦畔 0013 の延長部分が存在していた可能性も考えられる。



第65図　条里型水田と周辺の地形

（大日本帝国陸地測量部作成『中条』（明治44年測図）・『村上』（大正2年測図）に加筆）

跡出土木簡に「□駅駅四皿駅子人□（食ヵ）」が墨書されていること［須賀井 2000］などから肯定的に考えており［高橋 2007］、北陸道が出羽国まで伸びていた可能性は充分に考えられることである。

周辺地域における道に関する史料を探すと、文永 7（1270）年色部行忍（公長）譲状案写「古案記録草案」所収文書の中に「作路」という言葉が出てくる。色部行忍（公長）譲状案には公長が牛屋地頭職を子の長茂と氏長に二分して譲るときの境界が記されており、「作路以西、四至東限作路、南限石堤荒河流、西限大山、北限色部条堺、但除上新保」「作路以東、除松沢新田等」「東限大山、南限石堤荒河流、西限作路、北限色部条ノ堺」とされ、牛屋と宿田に二分する中央の境界に「作路」があり、この「作路」は少なくとも 13 世紀には存在したことが理解できるが、この道は慶長 2（1597）年に描かれた越後国絵図の瀬波郡絵図には記されていない。同絵図は瀬波郡北部などの周辺部を小さく描き村上城を図の中心にもってくるなどの操作が認められ［池 1999］、当時の状況をそのまま描いているものではないことが推察されるが［伊藤 1995］、同絵図からは「作路」の存在を検証することはできなかった。新旧の道が重なり合っていることはよく見られる現象であり、北陸道が出羽国まで伸びていた可能性を考慮すれば、この「作路」が古代の官道であった可能性も考慮されるが、現状では史料に乏しく想像の域を出ない。

以上、西部遺跡Ⅱと西部遺跡Ⅳ・Ⅴの条里型地割の基準軸の誤差について、現段階での調査成果からは地形的制約が要因となり、両者（西部遺跡ⅡとⅣ・Ⅴ）の水田は別の基準軸を用いて構築されたと考えられるが、周辺地域の調査の進展を待って再考すべき課題と言えよう。

C　XI　　層

1）遺構の変遷（第 66・67 図）

XI層では、9 世紀中葉を中心とする時期の遺構を検出した。建物は SB3030・3050・3100・3200・3201 の 5 棟である。このうち SB3030 は屋内に鍛冶炉を持つ鍛冶工房、SB3201 は建物の柱は検出していないが区画溝や地床炉の存在から SB3200 と同様の建物と推定されるものである。建物以外の遺構には、井戸 1 基、土坑 25 基、溝 25 条、鍛冶炉 1 基、地床炉 6 基、道路状遺構 1 条、性格不明遺構 1 基がある。

出土遺物（第 67 図）は建物を中心に分布するが、調査区の南東隅部（6・7 E区）にも分布の濃い地区があり、遺構群は調査区外東側へ広がっていくものと推測される。

以下では、遺構群の変遷について検討するが、時期の目安となる土器の出土量は少なく、時期幅も狭いと考えられることから、ここでは主に遺構の軸方向の違いに着目し、作業を進めることとする。

Ⅰ　　期

軸方位がＮ－ 55 ～ 60°－Ｗを示す遺構群を本期とした。SB3030・3100・3200、SD3051・3053・3092・3123 が該当する。

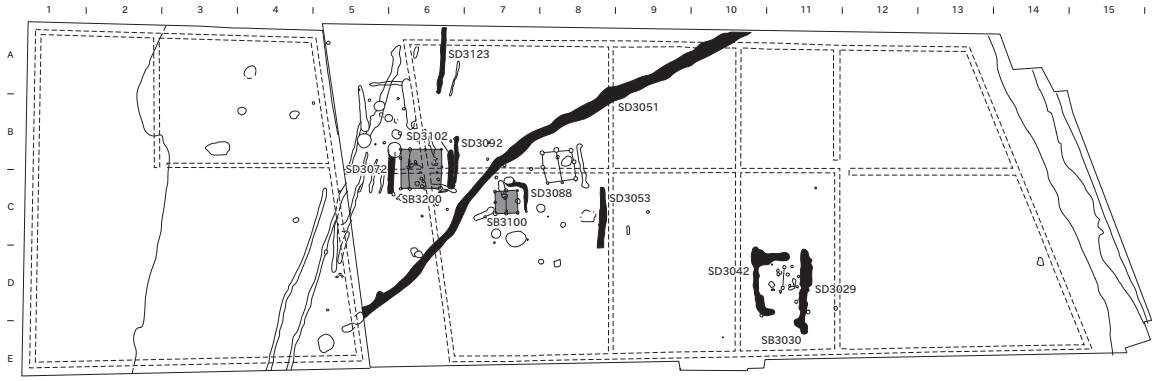
調査区南側からは SD3051 が調査区を斜めに横断するかたちで検出されている。SD3051 は、SB3100 と SB3200 の間で緩やかに屈曲しており、SB3100 の存在を意識してこれを避けるように構築されているように見える。このことから SB3100 は SD3051 よりも先に存在し、SD3051 が構築された後も並存していたものと考えられる。

Ⅱ　　期

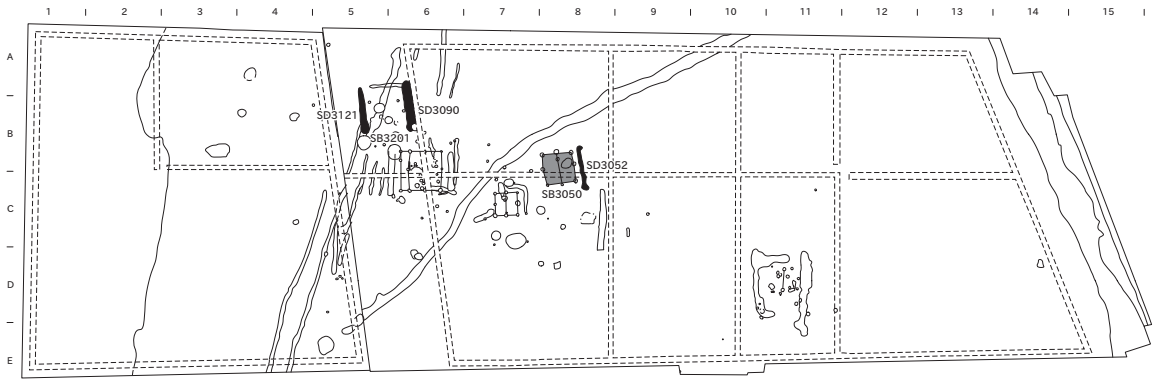
軸方位がＮ－ 67 ～ 70°－Ｗを示す遺構群を本期とした。SB3050・3201 が該当する。

Ⅰ期の遺構とは重複関係がなく、出土遺物からも明瞭な前後関係は確認できなかった。ここではⅠ期に

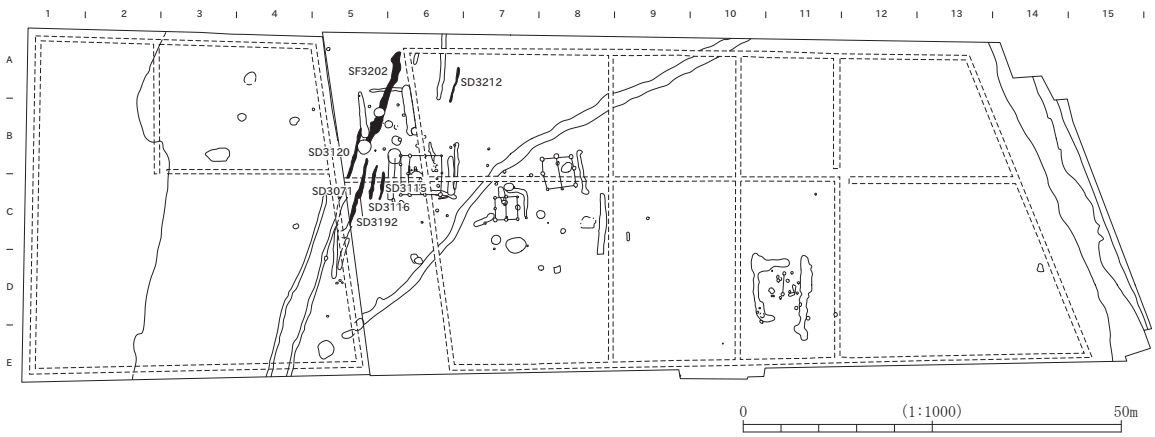
古代Ⅺ層 Ⅰ期



古代Ⅺ層 Ⅱ期



古代Ⅺ層 Ⅲ期



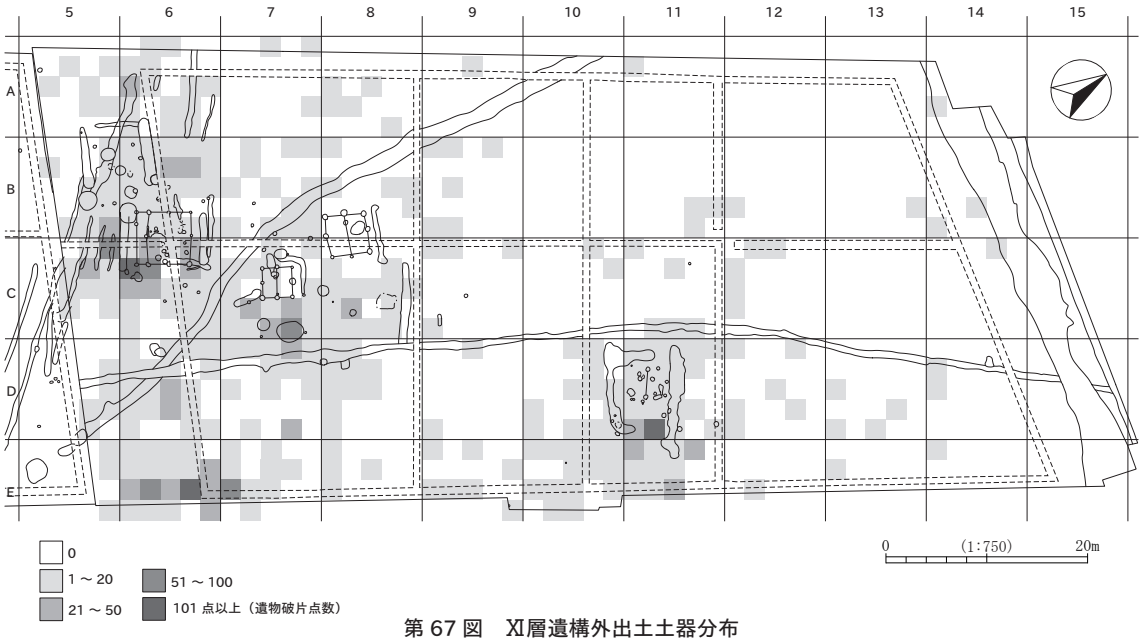
第 66 図　Ⅺ層の遺構変遷

後続する遺構群として取り扱ったが、当否の程は定かでない。

調査区南側に位置する 4 棟の建物は、軸方向の違いから SB3100 と SB3200、SB3050 と SB3201 の 2 期に分けたが、SD3051 を挟んで両側に位置する SB3200 と SB3201 は地床炉を持つ建物で、区画溝からは烏帽子または圭冠や漆器椀などの希少品が出土し、SB3050 と SB3100 は比較的小型の建物というそれぞれに共通した要素が見られることから、Ⅰ期とした SB3100 と SB3200、Ⅱ期とした SB3050 と SB3201 は、ほぼ同様のセット関係にある 2 棟一組の建物が時期差を持って構築されたものと考えられる。

Ⅲ　　期

軸方位が N － 44 ～ 50° － W を示す遺構群を本期とした。SD3071・3115・3116・3120・3192・



第 67 図　XI層遺構外出土土器分布

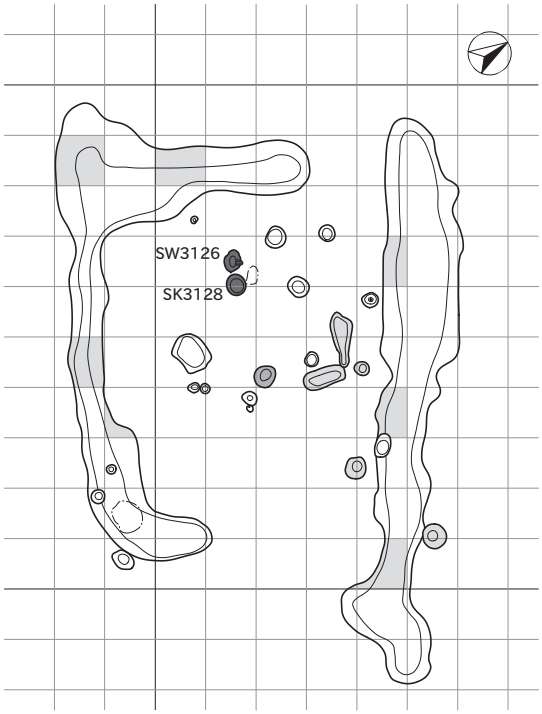
3212、SF3202 が該当する。

調査区南端から平行して伸びる溝群が検出されている。SD3071 と SD3116 の間、SD3115 と SD3116 の間は芯々距離で約 0.80m、SD3071 と SD3120 の間は約 1.60m で、後者の間隔は前者の倍数になっている。やや離れて位置するが SD3212 も軸方向がほぼ一致することから、これらの一部と考えられる。そして、これらの溝の覆土には撹拌に伴うブロック状の土壌が含まれることから、畑作溝である可能性がある。また、SD3071 と SD3120 の西側延長上には道路の硬化面と考えられる SF3202 が位置しており、調査初期段階には SD3071 と SD3120 を側溝とする道路を考えたが、上述のように覆土が他の溝と共通することと硬化面脇には溝が検出できないことから別の遺構と想定した。ただし、西部遺跡Ⅰで検出した SD1054・1055 の 2 本の平行する長い溝は、硬化面 SF3202 と組合わさり道路となる可能性を持っているが遺構の連続を検出することができなかった。

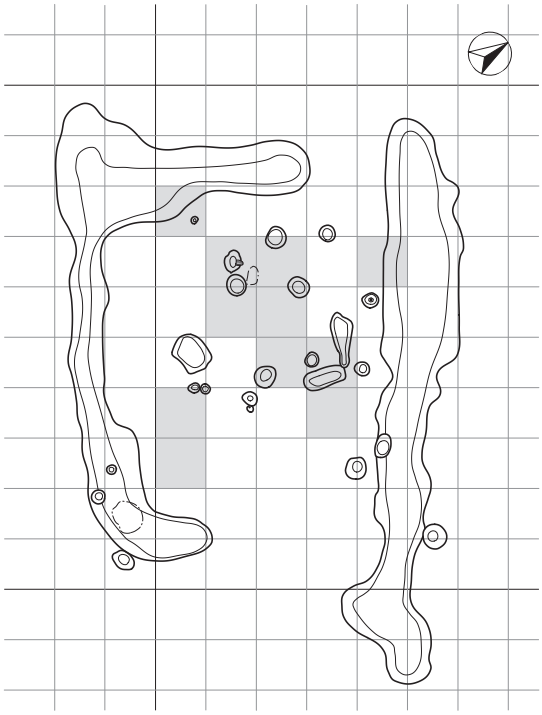
XI層で想定した各時期の前後関係はとらえられなかったが、軸方向で分けた遺構群からは調査区が居住域だけに限定されず、道や生産の場といった別の要素も含まれることが分かった。また、Ⅰ・Ⅱ期とした遺構群には重複関係がほとんどなく、2 棟一組の建物が想定されるなど遺構群は比較的整然と配置され、遺構の軸方向は次の時期であるⅧ層遺構のそれに近く、Ⅰ期としたものの中には規模は小さいが鍛冶工房 SB3030 を含むなどⅧ層遺構との関連性がうかがえる内容である。Ⅷ層との時期的連続性は調査区内で見ることができなかったが、遺物の分布状況からは、遺跡が調査区外の東側に広がり現状の規模にとどまらないことが推測され、この状況はⅧ層段階でも同様である。したがって調査区外東側の状況が分からない段階で、遺跡には両層を繋ぐ時期がなく、遺跡は一時期断絶すると安易に判断することはできない。むしろ、現状では上述した遺構の配置や軸方向の共通性、そして鍛冶工房の存在などⅧ層遺構群に近い要素を持っていると理解でき、XI層遺構群はⅧ層遺構群の前身と見ておく必要がある。

2）鍛 冶 工 房（第 68 図）

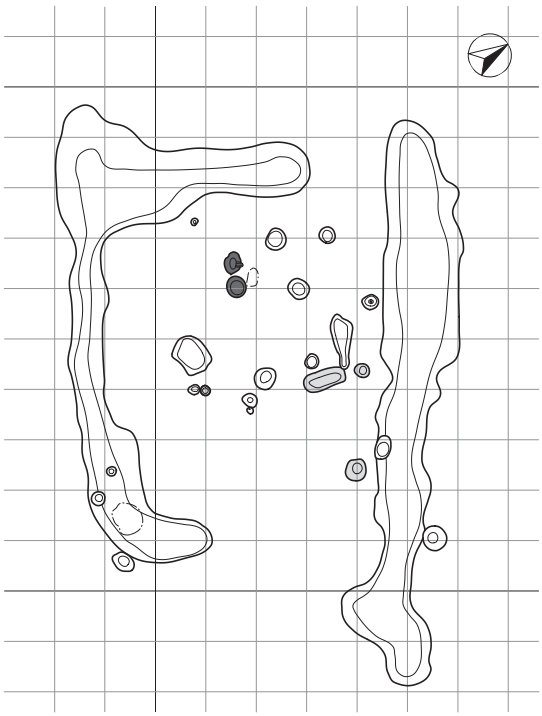
調査区北側から簡易な上屋構造を持つ鍛冶工房 SB3030 を検出した。屋内からは、鍛冶炉である SW3126、鍛冶炉に伴う廃滓用の穴と考えられる SK3128 が検出されている。この鍛冶炉と廃滓用の穴に



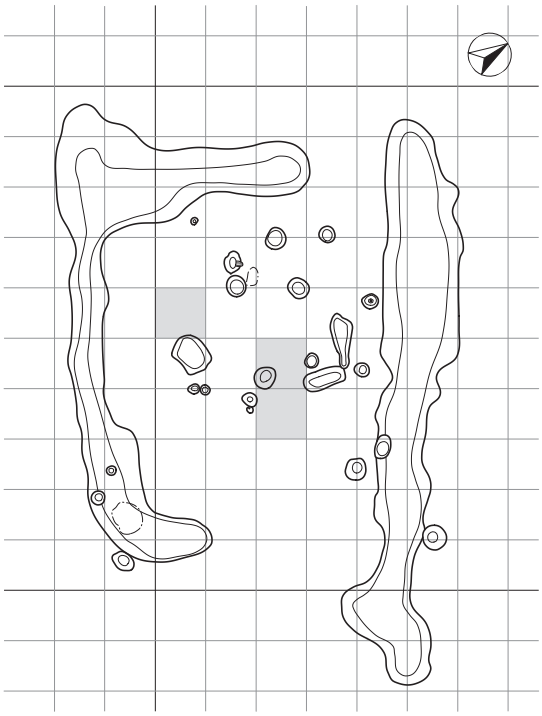
鉄滓（遺構内出土）



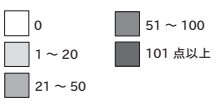
鉄滓（包含層出土）

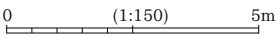


鍛造剥片・粒状滓（遺構内出土）



鍛造剥片・粒状滓（包含層出土）





第 68 図　鍛冶工房 SB3030 の鍛冶関連遺物出土分布

ついては、後続するⅧ層の工房でも同様のセット関係が認められる。また、鍛冶炉を建物の中央ではなく片隅に設置する点でもⅧ層の工房と共通する。

鍛冶炉の北側には羽口の装着痕と見られる樋状のくぼみが 1 か所検出されている。羽口自体は残っておらず、工房の廃絶時に意図的に抜き取られたと考えられる。検出した遺構から推定される鍛冶施設の位置関係は、羽口の位置から輸は鍛冶炉の北側、廃滓用の穴は鍛冶炉の東側に配置されていたと考えられる。

工房内に遺棄された鍛冶関連遺物の分布から作業空間を復元するため、遺構内及び直上遺物包含層から土壌を採取して水洗選別を行い、鍛造剝片や粒状滓、鉄滓などの微細遺物の抽出に努めた。その結果を第 68 図に示したが、全体的に鍛冶関連遺物の出土量は少ない。ただし、遺物は少ないながらも建物の西側にある SW3126、SK3128 周辺に集中が見られることから、この範囲で鍛冶作業を行なっていたと推測される。SB3030 は簡易な造りであることと、鍛冶関連遺物の量から、短期間の操業を行った工房であると考えられる。

3）墨 書 土 器（第 69・70 図）

Ⅺ層から出土した墨書土器は全部で 21 点である。このうち判読できた文字は「上」と「木」の 2 種類である。文字の内訳は、「上」が 10 点、「木」が 3 点で、ほかに「上ヵ」「木ヵ」を含む判読できない文字が 8 点ある。

「上」の墨書土器は、烏帽子または圭冠が出土している SB3200 と調査区南東隅部（6・7E 区）の 2 か所からまとまって出土している。調査区南東隅部から出土したものについては、調査区外となる東側にこれを廃棄した建物などが存在するものと推定される。

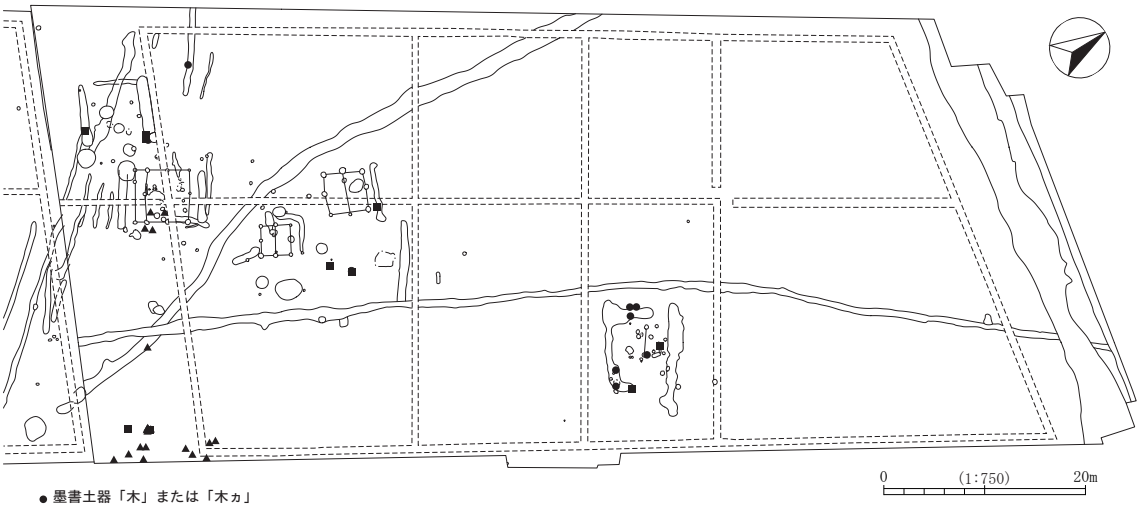
「木」の墨書土器は、SB3030 の区画溝である SD3042 から 2 点、SB3030 の床面から 1 点出土しており、鍛冶工房である SB3030 との関連がうかがえる。

Ⅷ層の墨書土器の大半が土師器であったのに対して、Ⅺ層出土墨書土器はすべて須恵器の墨書である。須恵器の産地としては阿賀野市笹神系と佐渡市小泊系に大別される。隣接する西部遺跡Ⅳ・Ⅴで検出された条里型地割りによる水田域からも、「木」の墨書土器が出土している［田中 2009］。

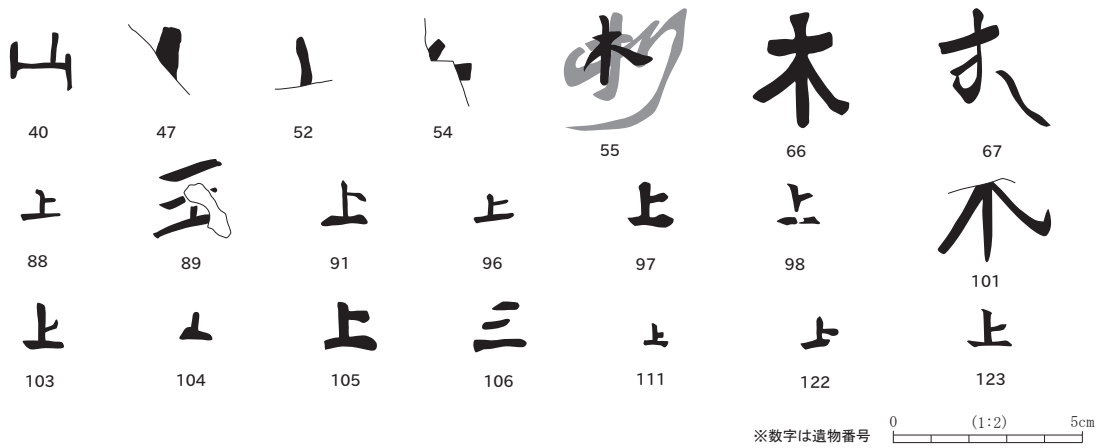
調査区内における出土地点は第 69 図のとおりだが、「上」と「木」の文字がそれぞれ集中して出土していることが特徴的である。すなわち、「上」の墨書土器は調査区南西隅付近の 6E 区に偏在し、「木」の墨書土器は 11D 区の SD3030 内に集中する。「上」の密集域のものは大半が包含層の遺物として取り上げられている。密集具合から考えると何らかの遺構内の可能性が高いが、遺構は確認できていない。

「木」の墨書土器は全部で 4 点出土した。66 は墨痕が最も明瞭で肉眼でも判読できる。筆順は常用漢字と同じ順序である。67 は墨痕が非常に薄く、赤外線写真（以下、「写真」とする）から判読したものである。最終画の左ハライが少し離れているが「木」と判読される。筆順も 66 と同じく常用漢字と同じ順序と思われる。101 も墨痕は非常に薄く肉眼では判読できないが、写真から明瞭な墨痕を確認できた。墨痕の一部は欠損しているが、残った墨痕とほかの墨書土器の文字種によって、「木」と推測される。

55 は異なる 2 つの文字が重ね書きされた墨書土器である。墨痕が明瞭な上書きは「木」である。この「木」に関してまず注目されるのが筆順である。上述のように、ほかの「木」が常用漢字と同じ筆順であるのに対して、この墨書土器は縦画を第 1 画目とし、第 2 画目の横画から右ハライへ連続する筆順である。これと同じ筆順の墨書土器は西部遺跡Ⅳで出土した須恵器 18 で、筆順や字体の共通性に注目すれば、西部遺跡Ⅳの報告でも指摘したとおり、水田域の生産活動等に関わった者が西部遺跡ⅡのⅪ層遺構の集団である



第 69 図　Ⅺ層墨書土器出土分布



遺物№	出土位置	グリッド	種別	器種	墨書部位	釈文	備考
40	SD3052	8C3	須恵器	蓋	鈕部	判読不明	小泊系
47	SD3090	6B	土師器	無台椀	底部外面	判読不明	
52	SD3121	5B	須恵器	無台杯	底部外面	判読不明	
54	SX3030	11D	須恵器	無台杯	底部外面	判読不明	底部板状圧痕、小泊系
55	SX3030	11D12	須恵器	無台杯	底部外面	「木」・「□」の二重書き	底部板状圧痕
66	SD3042	10D	須恵器	無台杯	底部外面	「木」	小泊系
67	SD3042	11D	須恵器	無台杯	底部外面	「木」	
88		6E20	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	笹神系
89		8C16	須恵器	無台杯	底部外面	「王ヵ」	笹神系
91		6E15	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	笹神系
96		6E12	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	小泊系
97		6E7	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	
98		6E7	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	
101		6A19	須恵器	無台杯	底部外面	「木ヵ」	小泊系
103		6E14	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	笹神系
104		6E7	須恵器	無台杯	底部外面	「上ヵ」	
105		6E12	須恵器	無台杯	底部外面	「上」	笹神系
106		6E6	須恵器	無台杯	底部外面	「三ヵ」	小泊系
111		5E20	須恵器	有台杯	底部外面	「上」	笹神系
122		6C7	須恵器	折縁杯	底部外面	「上」	笹神系
123		6D12	須恵器	折縁杯	底部外面	「上」	笹神系

第 70 図　Ⅺ層出土の墨書土器

可能性が高いと考えられる。

重ね書きされた下の文字（最初の文字）は、墨痕も既に薄れており文字の判読は困難な状況である。写真から墨痕を図化したものが 55 である。上文字の「木」と比べて文字は大きく書かれている。判読の候補としては「利」や「村」などが考えられるが、確定できない。

「上」の墨書土器は 11 点出土している。いずれも文字が小さいのが特徴である。一般的に小さな文字は 8 世紀代の墨書土器に見られ、 9 世紀代では文字が大きくなる傾向が指摘されているが［平川 2000］、土器編年上明らかに 9 世紀代に墨書されているのでそれとは異なる。もう一つの特徴が墨書された部位で、「上」の墨書土器はすべて須恵器の底部外面に書かれるという共通点がある。こうした共通性から筆の異同も検討したが、字画数が少なく特徴のない文字のため、一人の手によるか複数の手によるかは明らかにできなかった。墨痕はおおむね肉眼で判読できるが、96 と 103 は墨痕が非常に薄く、写真によってようやく判読できる状況である。

その他の墨書土器は各々 1 点ずつ出土している。106 は墨痕の残存状況が悪く肉眼では墨痕の有無を確認するにとどまるが、写真から「三」と判読した。なお「三ヵ」とした墨書土器が西部遺跡Ⅳでも出土している。89 の墨痕は比較的良好に残っているが、土器の欠損に伴い墨痕も部分的に欠失している。中横画と縦画が交わる中央部から下横画の終端にかけて大きく欠損しており、確定できなかったが「王」の可能性が高い。なお、「王」の墨書土器は胎内市中倉遺跡［中条町教育委員会 1966、1999］などでも出土している。

判読できなかった墨書土器に関しては、以下のとおりである。40 は、須恵器蓋の鈕部外面に墨書されている。墨痕が非常に薄く、図版 334 を見れば明らかなように、残っている墨痕では適当な文字を推測し難い。考え得る文字の一つとして「山」があるが、第 1 画目が真中からやや右寄りなのが不自然である。89 の「王」との関連性を考慮して、仮に「王」とした場合には中横画の墨痕が縦画の右側に見いだせず、中横画と下横画が近接して字体の不自然さが「山」と同様にある。54 は土器の割れ口にわずかに墨線が 2 か所確認できるもので、52 も墨線 1 条だけである。

4）烏帽子または圭冠

調査区南側に位置する掘立柱建物 SB3200 の区画溝 SD3102 から烏帽子または圭冠（44）が出土している。出土した烏帽子または圭冠の素材は苧麻と和紙で、苧麻の面は目合に漆塗りで、和紙の面は平滑な漆塗りである。見た目の美しさや滑らかさと素材の貴重さからいって、和紙の面が外側である可能性もある。

大宝元（701）年に制定された「衣服令」により圭冠は社会的身分を示すものであったが、圭冠は遅くとも 10 世紀ごろまでには烏帽子へと変化する。出土したⅪ層は 9 世紀中葉に比定できることから、圭冠から烏帽子への移行期のものかもしれない（「第Ⅵ章 3」参照）。烏帽子は、平安時代末期の 12 世紀には広く普及して成人男子の一般的な被り物になったとされるが［小田 1983］、 9 世紀中葉のこの段階ではある程度社会的身分の高い人物が着用していたと考えるべきであろう。

D　Ⅷ　　層

1）Ⅷ層の土器編年について（第 71 ～ 79 図）

Ⅷ層から出土した土器群は、須恵器がほとんど見られなくなるⅦ期［春日 2004］を中心とする時期と考えられる。しかし、遺構には重複関係にあるものが存在し、灰釉陶器や土師器無台椀にも時期差が見られることから、遺構のすべてが同時に存在したわけではなく、数時期にわたって変遷したことが推定される。ここではⅧ層土器群の編年ついて検討するが、作業手順としては、土師器無台椀から編年基軸を作成し、それを基にほかの器種を検討して、最後に年代観について触れる。なお、各器種の推定個体数は口縁部残存率測定法［宇野 1992］に従っているが、ごく少量の器種は個体数を表示しなかった。

土師器無台椀（第 71 ～ 77 図）には、ほぼ完形のものもあるが、大多数は破片で約 298,500 点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約 4,160 点、全器種の中で 90％以上を占めている。そこで、土師器無台椀を編年基準として遺構単位に器高／口径：器高指数と底径／口径：底径指数の法量値グラフを作成し、器高指数と底径指数の組み合わせと断面形状から A ～ E 群に分けた。

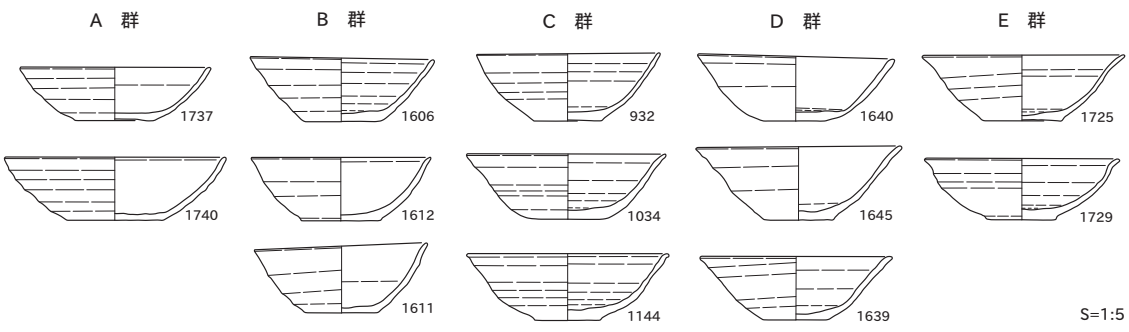
A 群：器高指数 33 以下、底径指数 38 以上が多く、形状は体部～口縁部が丸みを持って立ち上がる浅いボウル状に近いものが主体である。本群出土遺構には SD1090 がある。

B 群：器高指数 33 以上、底径指数 38 以上が多く、形状は逆台形状で、体部が丸みを持って立ち上がり口縁部で外反するものなど多様であるが、浅いボウル状のものがほとんどない。本群出土遺構には SK1120・1251・1361・1384・1479・1531・1590、SD2008・2064 がある。

C 群：器高指数 33 以上が多く、底径指数 38 を中心に分布し、形状は逆台形状で、体部が丸みを持って立ち上がり口縁部で外反するものなど多様であるが、浅いボウル状のものがほとんどない。本群出土遺構には SK1141・1360・2122、SD2029・2040・2060 がある。

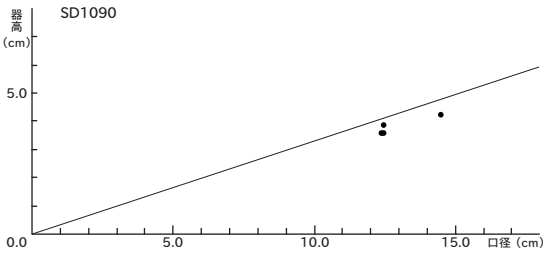
D 群：器高指数 33、底径指数 38 を分布の中心とし、形状は逆台形状で、体部が丸みを持って立ち上がり口縁部で外反するものなど多様であるが、浅いボウル状のものがほとんどない。本群出土遺構には SB1400・1500、SK1159・1419・1513、SX1104・2001、SD1077・1377 がある。

E 群：器高指数 33 以下、底径指数 38 以上が多く、形状は逆台形状で、体部が丸みを持って立ち上がり口縁部で外反するものなど多様であるが、浅いボウル状のものがほとんどない。土師器小皿を伴う。本群出土遺構には SD1103 がある。

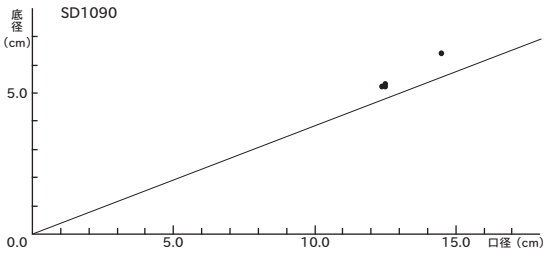


第 71 図　土師器無台椀 A ～ E 群

A 群

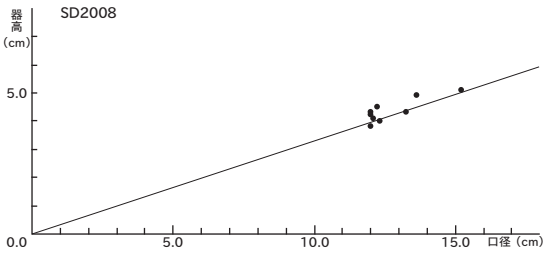


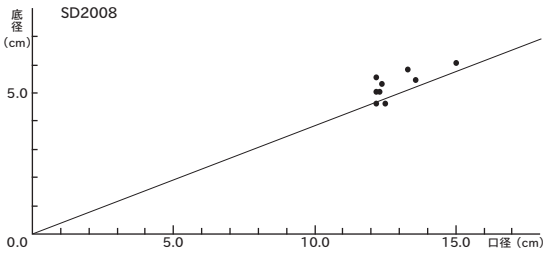
※斜めの補助線は器高指数 33 を示す

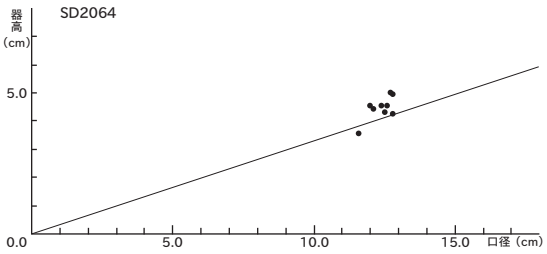


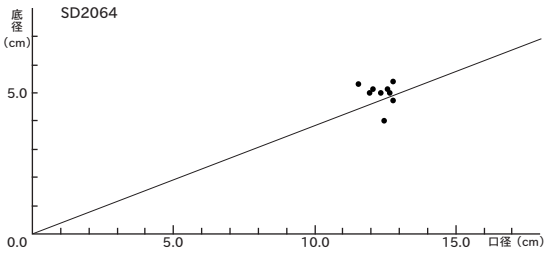
※斜めの補助線は底径指数 38 を示す

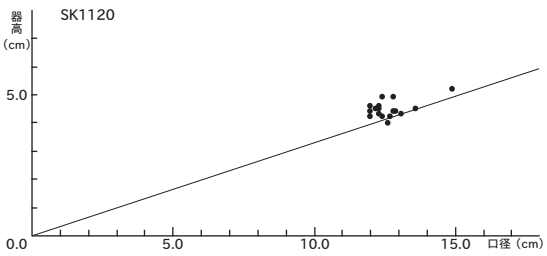
B 群

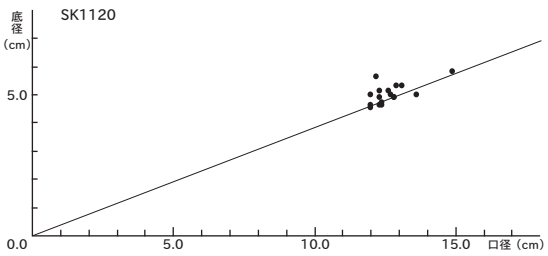


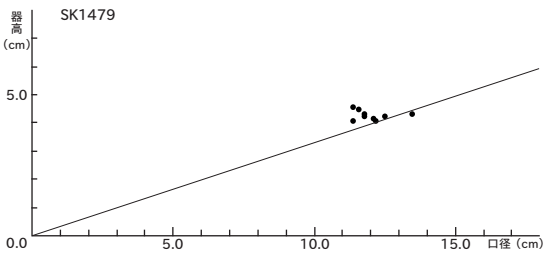


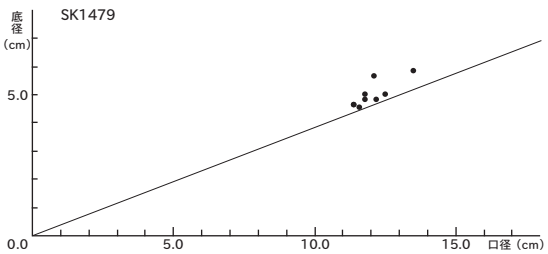






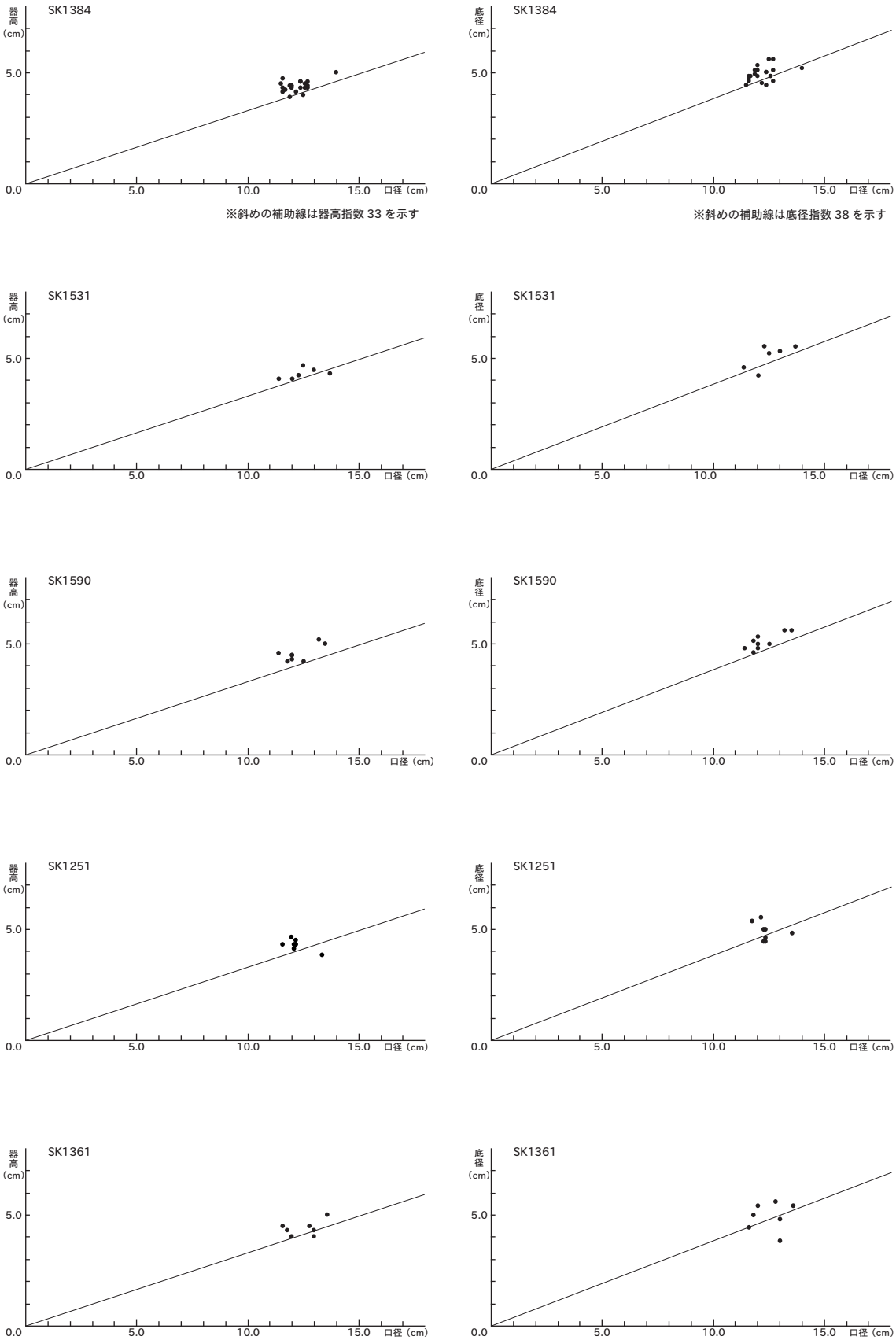






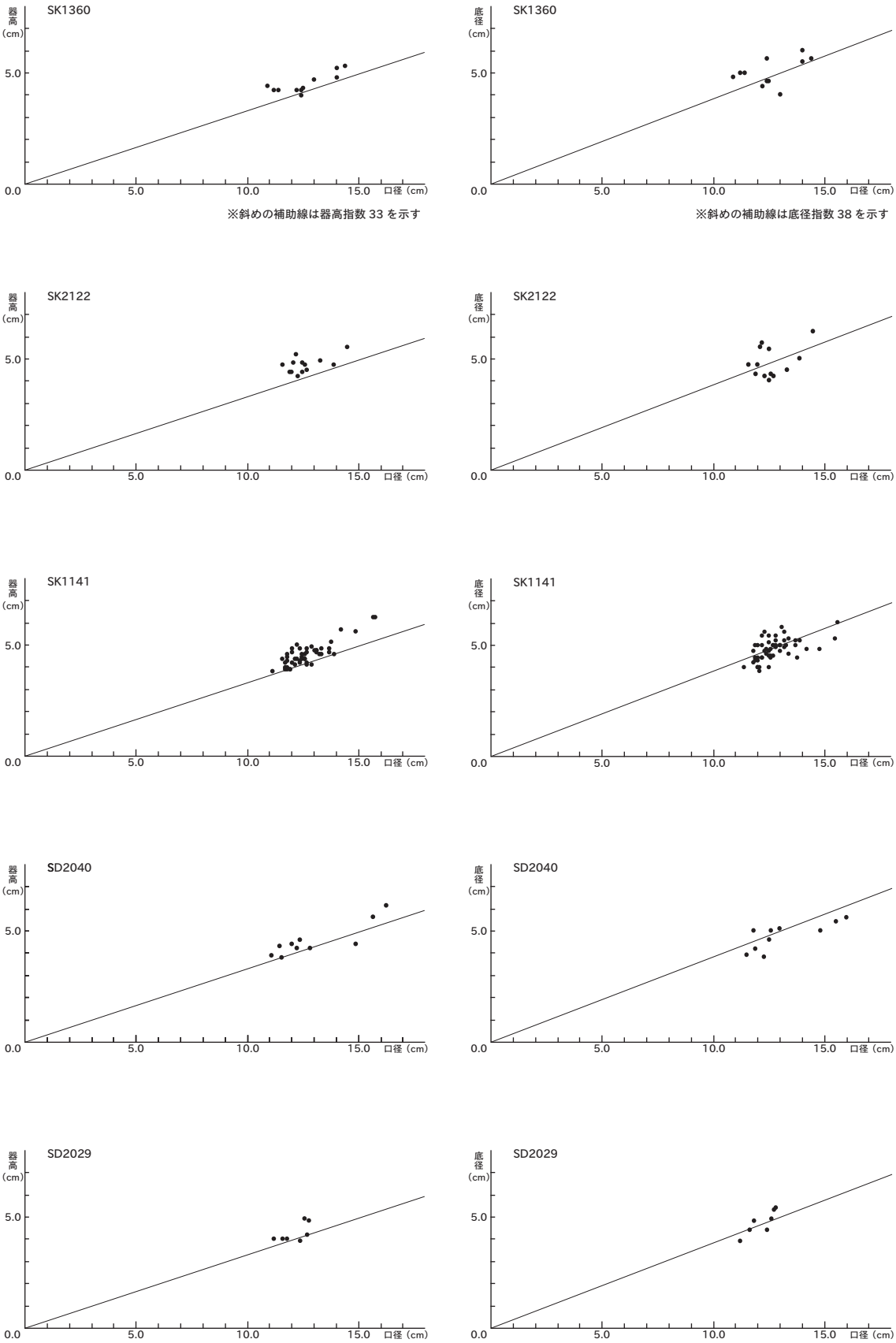
第 72 図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径グラフ（1）

B 群



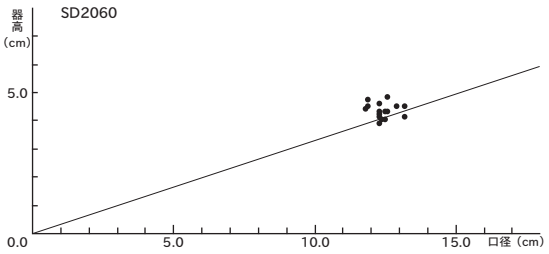
第 73 図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径グラフ（2）

C 群

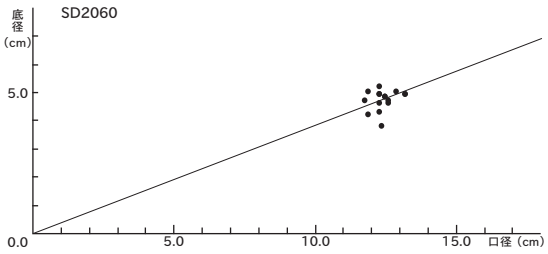


第 74 図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径グラフ（3）

C 群

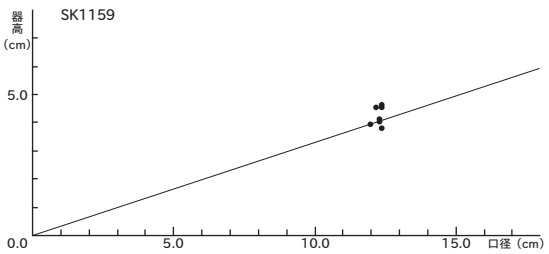


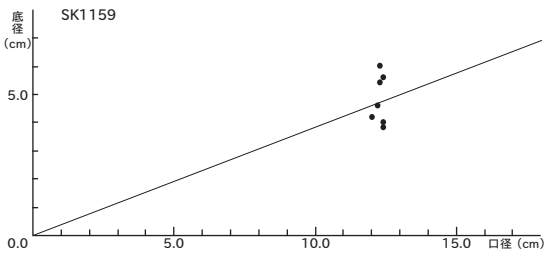
※斜めの補助線は器高指数 33 を示す

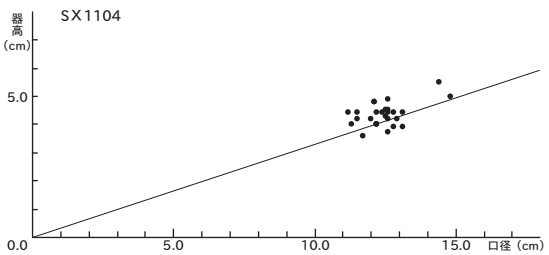


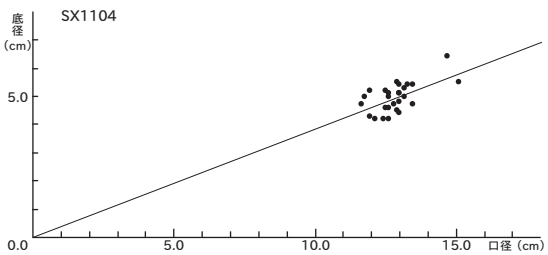
※斜めの補助線は底径指数 38 を示す

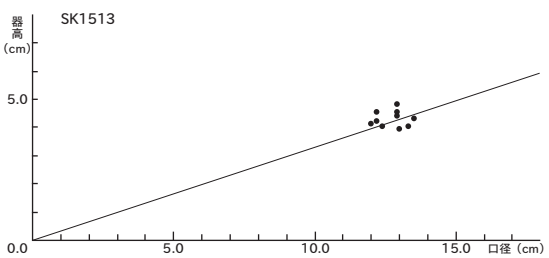
D 群

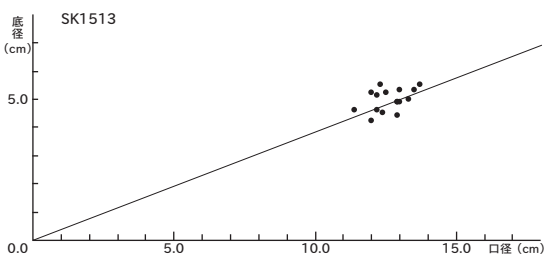


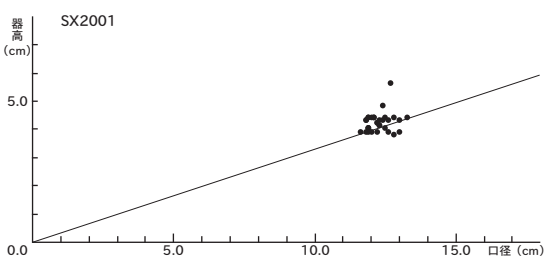


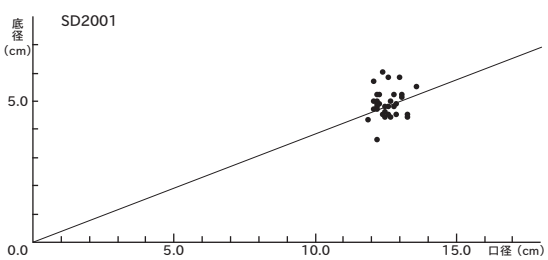






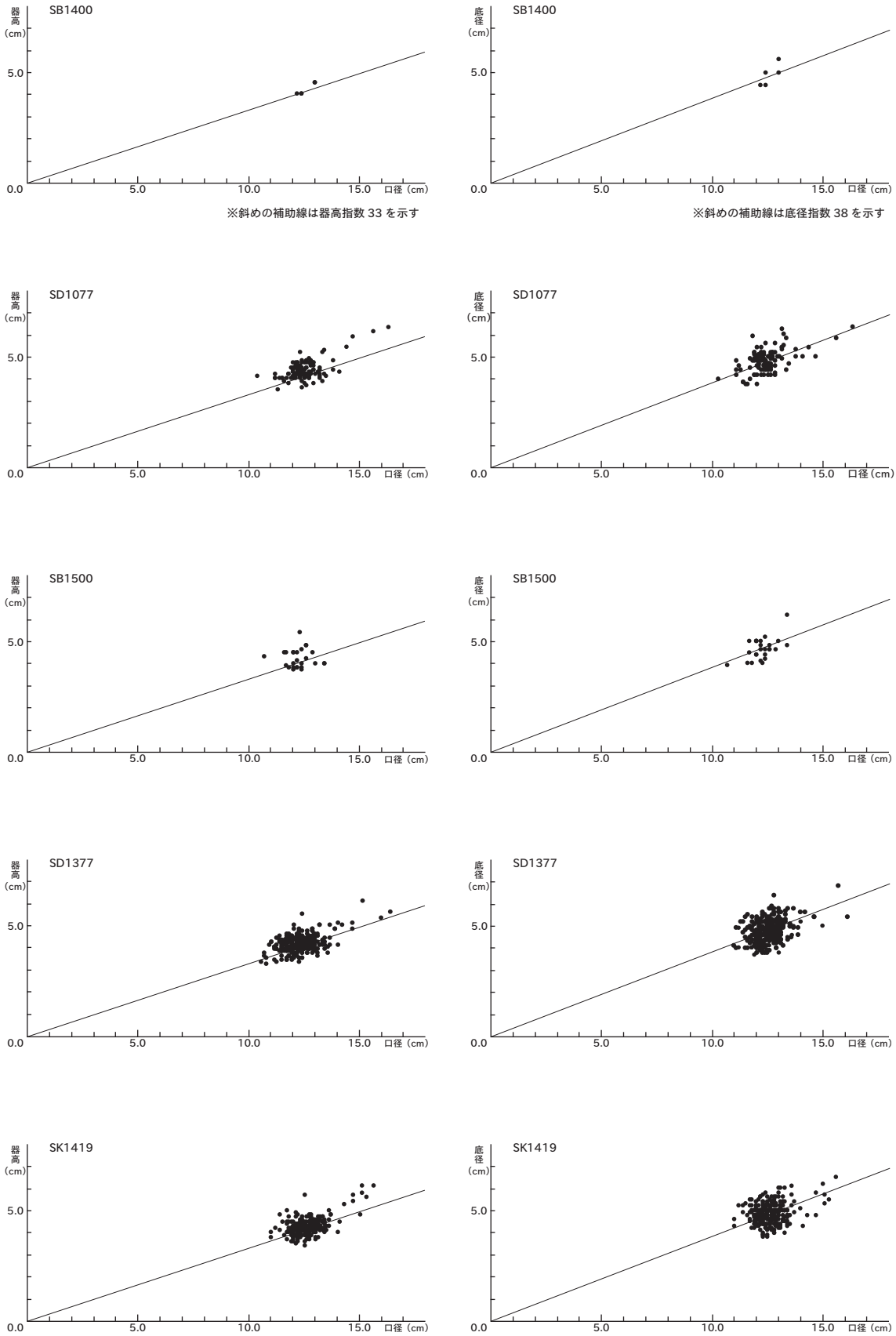






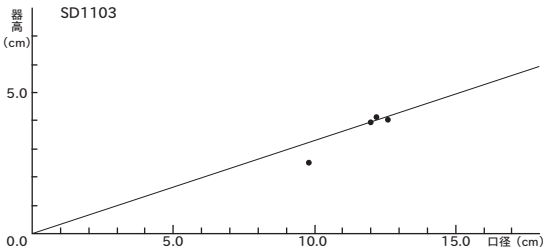
第 75 図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径グラフ（4）

D 群

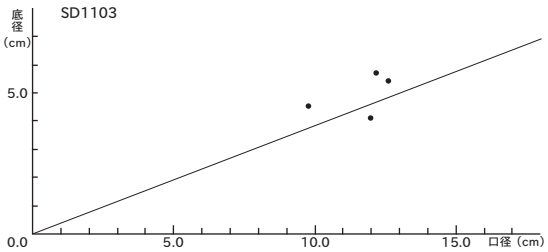


第 76 図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径グラフ（5）

E 群

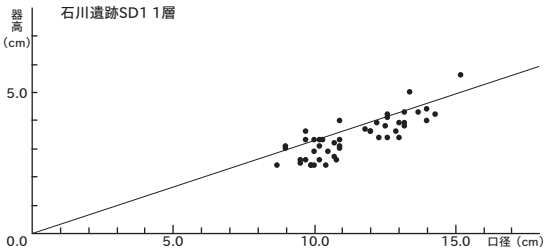


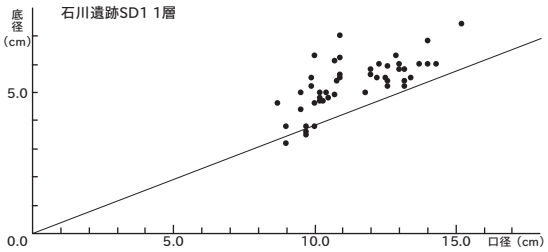
※斜めの補助線は器高指数 33 を示す

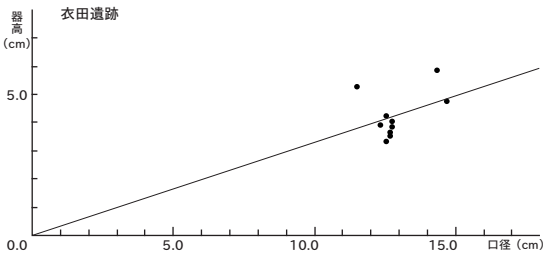


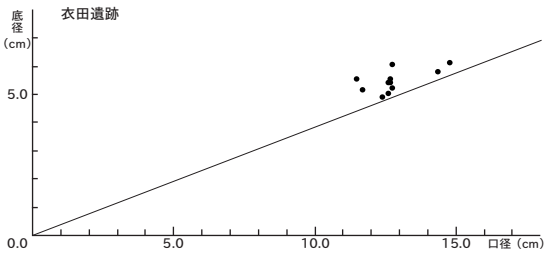
※斜めの補助線は底径指数 38 を示す

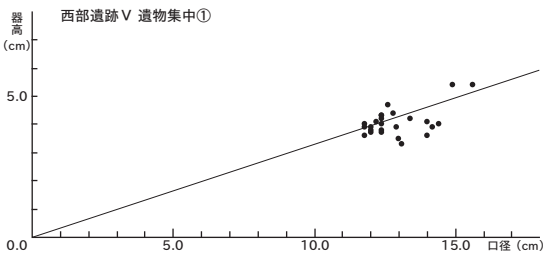
その他遺跡の法量値分布

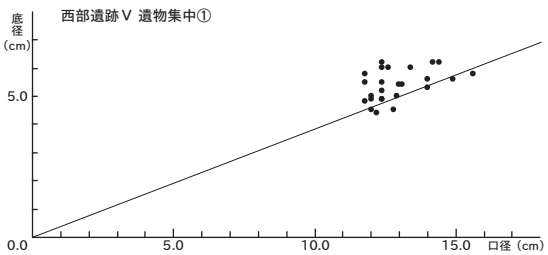


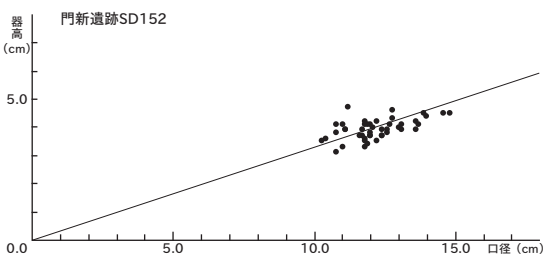


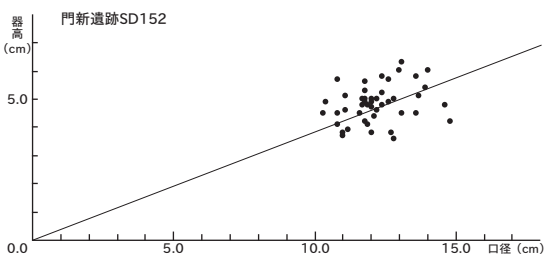












第 77 図　土師器無台椀　器高／口径、底径／口径グラフ（6）

A・E 両群は資料点数の少ない遺構が各 1 基のみのため、A 群では西部遺跡Ⅴの水田畦畔上の遺物集中①［土本ほか 2008］、E 群では村上市石川遺跡 SD1（1 層）［鈴木ほか 1998］で補足する。西部遺跡Ⅴ遺物集中①では土師器無台椀が須恵器無台杯よりも多く出土し、器高指数 33 以下･底径指数 38 以上（第 77 図）が主体となり、やや内湾気味の口縁部で浅いボウル状に近い形状が多いことから A 群に相当すると考えられる。石川遺跡 SD1（1 層）では小皿が出土し、土師器無台椀は器高指数 33 以下、底径指数 38 以上（第 77 図）となり、形状は台形状で、体部が丸みを持って立ち上がり口縁部で外反するものなど多様であるが、浅いボウル状のものがほとんどないことから E 群に相当すると考えられる。

次に各群の新旧関係について触れる。まず注目されるのが A 群と E 群で、A 群では土師器無台椀に伴う須恵器無台杯の量から、E 群では土師器無台椀に伴う土師器小皿の存在から編年的位置付けが可能と考えられる。A 群が出土した SD1090（図版 169）は資料点数が少ないため不明であるが、西部遺跡Ⅴ遺物集中①では、食膳具の中で土師器無台椀が最も多く、須恵器無台杯が少なからず存在することからⅥ期［春日 2004］に相当し、これに対して B ～ E 群は須恵器無台杯がごく少量となることからⅦ期［春日 2004］に属し、A 群が古く、B ～ E 群が新しいと考えられる。また、E 群とした SD1103 や石川遺跡 SD1（1 層）には、共に土師器小皿が伴い、土師器小皿の出現はⅦ期後半以降とされることから［春日 2004］、E 群は土師器小皿のない A ～ D 群よりも新しいと考えられる。以上のことから、Ⅷ層においては A 群が最も古く、E 群が最も新しい位置付けとなる。

B ～ D 群の新旧関係は遺構の重複関係等から考えてみたい。対象となる遺構は器高・底径両指数が測定可能な土師器無台椀が 5 点以上出土し、遺構の重複（新旧）関係が明確なものとする。これに該当するものは下記の 2 例だけである。

旧　SD2008（B 群）→ 新　SK2122（C 群）

旧　SK1531（B 群）→ 新　SD1377（D 群）

上記の重複関係から、B 群は C・D 両群よりも古い可能性が高いことが分かるが、C・D 群の関係については、遺構の重複関係からは見いだせなかった。

次に C 群と D 群の新旧関係を B ～ E 群の器高指数の変遷から考えてみる。B・C 両群は指数 33 以上が多いという点で共通し、E 群は指数 33 以下が多く、D 群は B・C・E 各群と部分的に重なり合う指数 33 を中心とした分布となることから C 群→D 群の変遷が想定され、前述の遺構の重複関係や土師器小皿を持つ E 群を合わせると B 群→ C 群→ D 群→ E 群という変遷が考えられよう。ただし、C 群と E 群はひとつの遺構に伴出すると、合成され D 群の器高指数・底径指数と同じ分布になることや、この分布は B 群の一部をも含んでしまうなどといった数値上の問題を考慮する必要がある。実際、D 群とした SD1377・1077 などは、多量の遺物から単一時期というよりも廃棄行為が長期間にわたり継続していた可能性があり、D 群は C 群と E 群が混在する群としてとらえておくことが無難であろう。このような問題点を考慮した上で土師器無台椀の変遷を示すと、A 群→ B 群を中心とし C・D 群の一部→ C 群を中心とし B・D 群の一部→ E 群を中心とし D 群の一部となり、これを基に時期設定を試みると下記のようになる（第 78 図）。

Ⅷ層Ⅰ期　：土師器無台椀 A 群の時期である。SD1090 が該当し、このほかに SE2007 が所属する可能性がある。

Ⅷ層Ⅱ期前葉：土師器無台椀 B 群の時期であるが、土師器無台椀 C・D 群の一部に本期とするものが含まれている可能性がある。代表例として SK1120・1251・1361・1384・1479・1531・1590、SD2008・2064 が挙げられ、SD1077・1377、SK1419 な

どの一部も本期に所属する可能性がある。

Ⅷ層Ⅱ期中葉：土師器無台椀Ｃ群の時期であるが、土師器無台椀Ｂ・Ｄ群の一部に本期とするものが含まれている可能性がある。代表例としてSK1141・1360・2122、SD2029・2040・2060が挙げられ、SD1077・1377・SK1419などの一部も本期に所属する可能性がある。

Ⅷ層Ⅱ期後葉：土師器無台椀Ｅ群の時期であるが、土師器無台椀Ｄ群の一部に本期とするものが含まれている可能性がある。代表例としてSD1103が挙げられ、SD1077・1377・SK1419などの一部も本期に所属する可能性がある。

次に土師器無台椀以外の主要な器種について触れるが、いずれも少量で詳細な変遷を追うことができないため概略を記すにとどめる。

須恵器無台杯（第78図）は、破片で373点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約9点である。形状は2種類に分かれ、ひとつはⅥ期［春日2004］から継続する通常のタイプ（820）で、Ⅷ層Ⅱ期中葉とⅧ層Ⅱ期前葉～後葉の所産と考えられる遺構群から計5点出土している。もうひとつは器高が高く、全体が箱型に近いタイプ（438・1246・1522）で、Ⅷ層Ⅱ期前葉とⅧ層Ⅱ期前葉～後葉の所産と考えられる遺構群から4点出土している。出土量が少量のため詳細な変遷は分からないが、Ⅵ期［春日2004］にはなく、Ⅷ層Ⅱ期前葉に出現すると考えられる。Ⅷ層Ⅱ期後葉以降に相当する石川遺跡SD1（1層）の遺物群の中に須恵器無台杯がないことから、前述の二つのタイプはⅧ層Ⅱ期中～後葉には存在していない可能性がある。

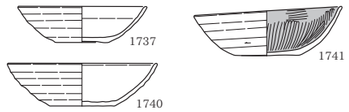
須恵器有台杯（第78図）は、破片で97点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約3点である。Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉の所産と考えられる遺構群から出土している。形状は外端面接地の高台が底部と体部との境界に付き、体部は開き、やや内湾気味に立ち上がる。類似するものは門新遺跡SD151にある。Ⅵ期［春日2004］の須恵器有台杯とは、高台の接着位置と体部の傾きが異なり、Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉の間のいずれかの時期で形状変化し、石川遺跡SD1（1層）出土遺物群の中には須恵器有台杯がないことからⅧ層Ⅱ期後葉には存在していないものと考えられる。

黒色土器無台椀（第78図）は、内面のみ黒色となるＡ類と内・外面が黒色となるＢ類がある。Ａ類は破片で約7,400点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約144点、Ｂ類は破片で624点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約10点である。Ａ類は、Ⅷ層の全時期に存在したと考えられる。Ｂ類はⅧ層Ⅱ期前葉～後葉の遺物群に伴って出土している。

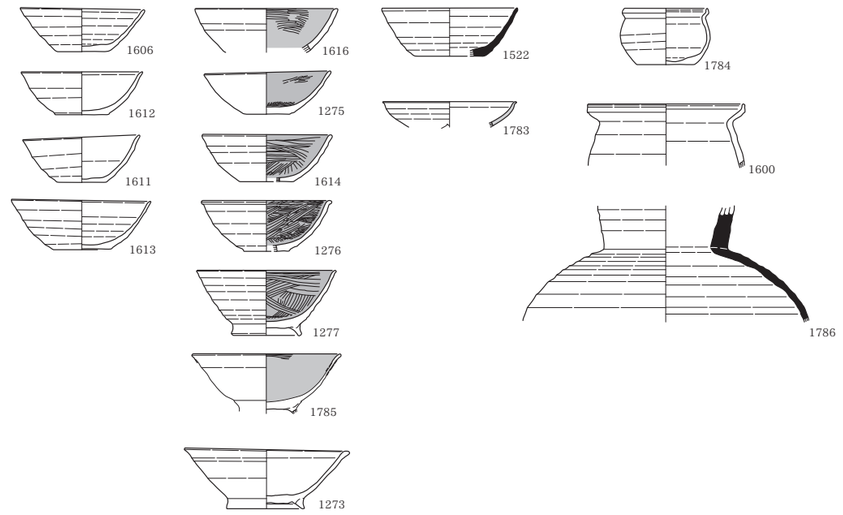
黒色土器有台椀（第78図）は、内面のみ黒色となるＡ類と内・外面が黒色となるＢ類がある。Ａ類は破片で93点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約4点、Ｂ類は破片で22点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約2点である。Ａ類は、Ⅷ層Ⅱ期前葉と土師器無台椀Ｄ群が出土するⅧ層Ⅱ期前葉～後葉に確認される。Ⅷ層Ⅱ期後葉以降に相当すると思われる石川遺跡SD1（1層）からも出土しており、Ⅵ期［春日2004］には見られないことからⅧ層Ⅱ期前後で出現し、その後継続して存在したと思われる。Ｂ類はⅧ層Ⅱ期前葉～後葉に確認され、阿賀北地域ではⅧ層Ⅱ期前葉～後葉に相当すると思われる村上市田島遺跡1号住居［吉井2001］から出土しており、Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉のいずれかの時期に出現したと考えられる。

黒色土器有台皿（第78図）は、内面のみ黒色となるＡ類と内・外面が黒色となるＢ類がある。Ａ類は破片で36点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約4点、Ｂ類は破片で7点出土してい

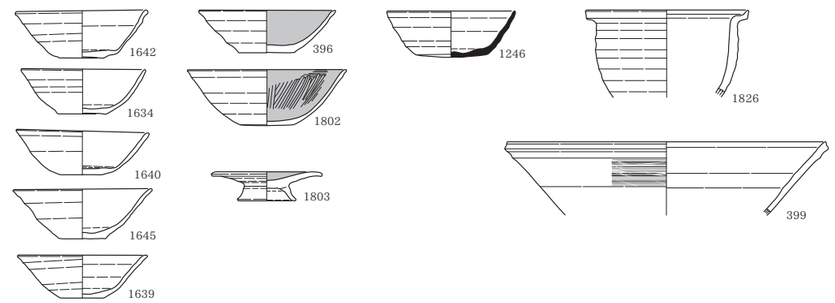
Ⅰ期



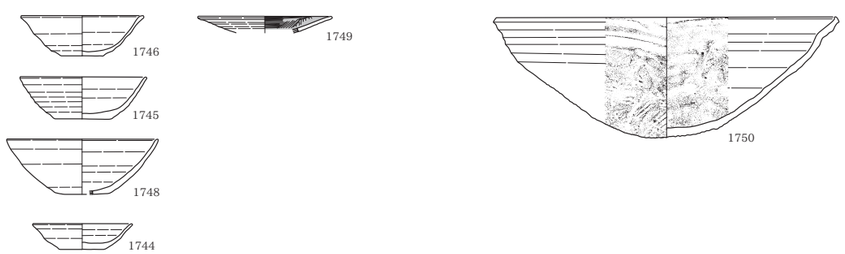
Ⅱ期前葉



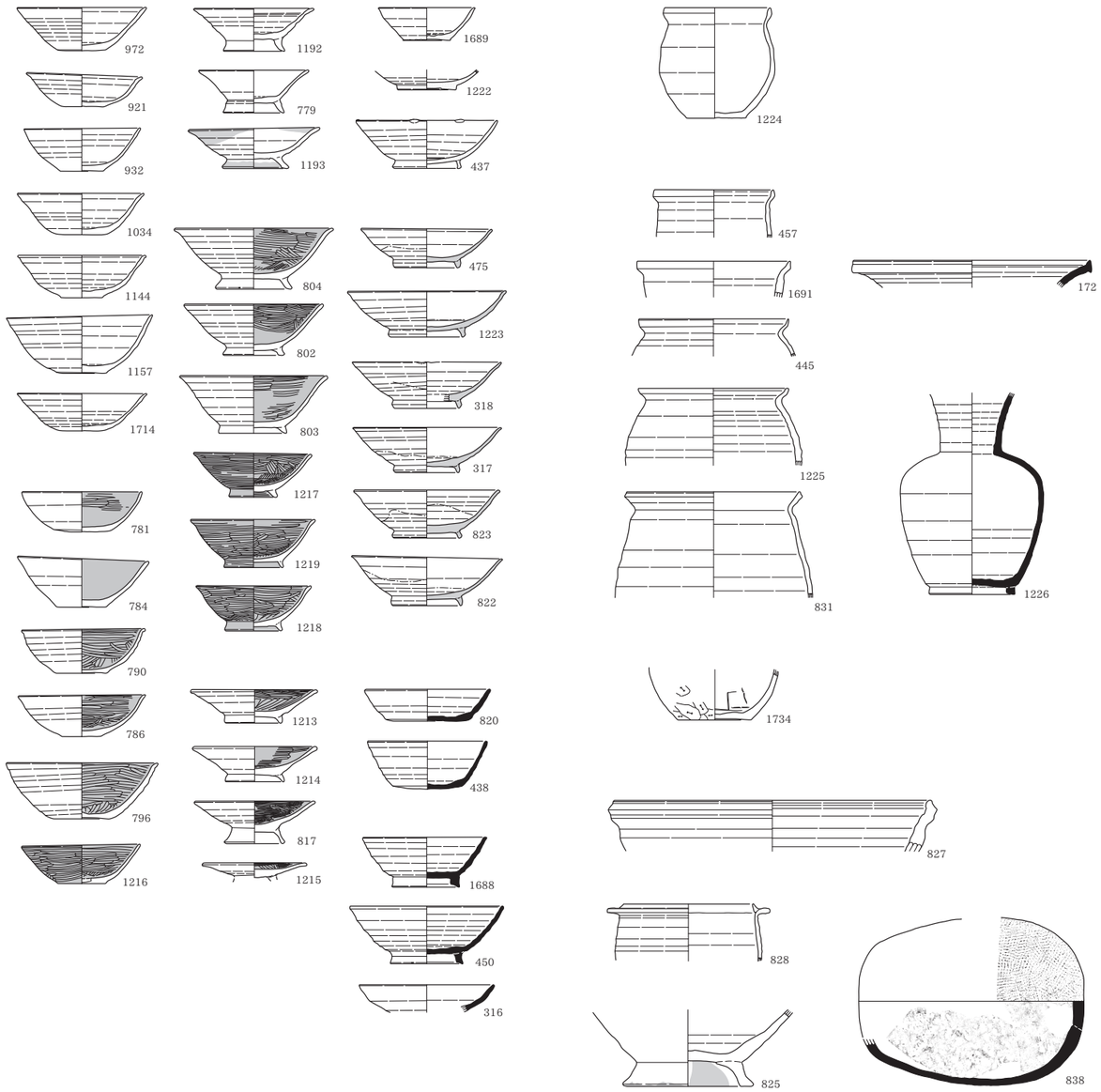
Ⅱ期中葉



Ⅱ期後葉



Ⅱ期前～後葉



第 78 図　Ⅷ層の土器編年

る。A類はⅧ層Ⅱ期前葉～後葉の遺物群に伴っており、B類の時期は不明である。

土師器有台椀（第78図）は、破片で549点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約４点である。Ⅷ層Ⅱ期前葉と土師器無台椀D群に伴うこと、阿賀北地域ではⅥ期［春日2004］に見られず、Ⅷ層Ⅱ期後葉以降と考えられる石川遺跡SD1（１層）の遺物群に確認できることからⅧ層Ⅱ期前葉以降に存在するようである。

灰釉陶器椀（第78図）は、破片で136点出土しており、口縁部残存率測定法による推定個体数は約５点である。Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉に確認される。いずれも猿投産で、折戸53窯式に相当し、古い要素を持つものと新しい要素を持つものが存在する。古い要素を持つものはSD2008とSB1500整地層から出土している。SD2008出土例（1783）は皿あるいは椀の口縁部片のため全容を知ることができないが、やや厚めの釉が浸け掛けされ、SB1500整地層出土の椀（475）は、浸け掛けであるが、見込み部分にも施釉されており、両者とも折戸53窯式の古手と考えられる。両者に伴う土師器無台椀からSD2008がⅧ層Ⅱ期前葉となり、SB1500整地層は伴出する土師器無台椀がほとんどないため直接時期を決められないが、整地層上面の床面とそれを覆う遺物包含層にⅧ層Ⅱ期前葉～後葉の土師器無台椀D群が出土していることからⅧ層Ⅱ期の古い段階と考えられる。新相と思われるものはSD1377・1077から出土している。SD1377の822・823は体部にケズリ調整がなく、底部は回転糸切り痕を残し、釉が白色系を呈している。SD1077の317・318は体部にケズリ調整がなく、白色系の釉が薄く浸け掛けされるもので、317の底部糸切り痕はナデ消される。このほかSK1419の1223は、底部がナデ消され、緑色釉を厚めに浸け掛けしており、古相の可能性がある。SD1077・1377・SK1419からは土師器無台椀D群が出土していることからⅧ層Ⅱ期前葉～後葉と考えられる。

緑釉陶器（第78図）は、椀が破片で38点（437・1222・1308・1325・1544）、杯が破片で３点（1689）、耳皿が破片で１点（323）出土している。1689が出土したSX1104からは土師器無台椀C群が、1222が出土したSK1419からは土師器無台椀D群が出土していることからⅧ層Ⅱ期中～後葉に存在していると考えられる。産地は323・1222・1689が山城系、1308・1544が近江系、437・1325は不明である。時期は1222が削りだしの蛇の目高台で9世紀中葉、437・1308・1325は輪花椀が増加する時期［高橋1995］ととらえ10世紀前半と考えられる。

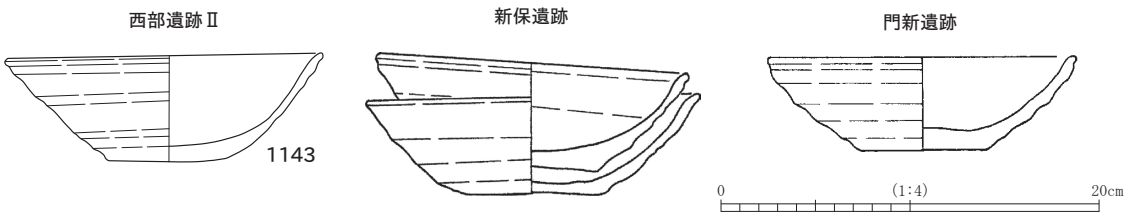
そのほか土師器煮炊具と須恵器貯蔵具（第78図）は、全容を知ることのできる資料が少なく、器形変遷などの詳細は不明である。土師器煮炊具は甕・小甕・鍋などが全時期をとおして存在すると思われ、小型羽釜・台付鉢はⅧ層Ⅱ期前葉～後葉に存在する。また、小甕の内、底部に筵（むしろ）痕が付くもの（1734）はⅧ層Ⅱ期前葉～後葉に見られる。須恵器貯蔵具は甕・広口壺が全時期をとおして存在するようで、横瓶などは少量のため全時期なのか特定の時期に出現しているのか不明である。

各時期の年代観について

実年代については、長岡市門新遺跡［田中1995］の延長6（928）年と記した漆紙文書が出土したSD152からの出土遺物や灰釉陶器の年代観から考えてみたい。

門新遺跡SD152は、大型掘立柱建物に伴う区画溝で、そこから延長6（928）年の漆紙文書とともに土師器無台椀を主体とする多量の遺物が出土している。次に土師器無台椀を比較し、門新遺跡SD152の遺物群が西部遺跡Ⅷ層のどの時期に対応するかを検討する。

最初に門新遺跡SD152の土師器無台椀の器高指数と底径指数を検討する（第77図）。器高指数は33、底



第 79 図　西部遺跡と新保遺跡、門新遺跡に共通する特徴的な口縁部を持つ土師器無台椀

径指数は38を中心に分布することから西部遺跡土師器無台椀D群に法量分布上は相当する。次に口縁部形状を見ると、口縁部がやや外反するものが半数以上を占めるが、この中に口縁端部をつまみ出してわずかに外反させ、その直下が沈線状となる特徴を持つものの存在に気が付く（第79図）。この特徴を持つ土師器無台椀を西部遺跡で探すと、SK1140（410）・1141（389）・1419（1143～1148）・SD1377（589・626・738・739）・SK1513（1588は黒色土器無台椀A類）に見つけることができ、このうちSK1141・1419・SD1377・SK1513では土師器無台椀D群が主体的に出土している。土師器無台椀D群は前述のように土師器無台椀Ｂ・C・E各群が混在したものと考えるならば、この形状の口縁部を持つ土師器無台椀はⅧ層Ⅱ期前葉～後葉に存在していることとなる。

以上から門新遺跡SD152の遺物群は西部遺跡Ⅷ層Ⅱ期中～後葉のいずれかの時期に対応し、Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉は門新遺跡SD152出土の漆紙文書から延長6（928）年以降を含む時期と考えられる。なお、同様の口縁部を持つものは上越市新保遺跡［石川ほか2001］からも出土している。

灰釉陶器は、前述したようにⅧ層Ⅱ期前葉のSD2008・SB1500整地層、Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉のSD1077・1377・SK1419から出土しており、いずれも折戸53窯式に相当する。折戸53窯式は①（古相）と②（新相）の前後2時期に分かれ、年代観は①が10世紀第１四半期前後、②は10世紀第２四半期前後であり［齋藤1994］、折戸53窯式全体を920～950年としている［尾野2003］。これに従うならば、西部遺跡Ⅷ層Ⅱ期前葉には古相の灰釉陶器が存在することから10世紀第１四半期に、新相の灰釉陶器は土師器無台椀Ｄ群を主体とする西部遺跡Ⅷ層Ⅱ期前葉～後葉と幅広いが、古相を西部遺跡Ⅷ層Ⅱ期前葉とした場合、新相はその次の段階、西部遺跡Ⅷ層Ⅱ期中葉以降と考えておきたい。

以上からⅧ層Ⅰ期をⅥ期末［春日2004］に対応させ9世紀末に、Ⅷ層Ⅱ期前葉を折戸53窯式①（古相）と推測される灰釉陶器から10世紀第1四半期に、Ⅷ層Ⅱ期中～後葉は折戸53窯式②（新相）の存在と門新遺跡出土漆紙文書から10世紀第２四半期以降と考えられ、土師器無台椀はＣ群からＥ群へと2段階で変遷することからⅧ層Ⅱ期中葉が10世紀第2四半期、Ⅷ層Ⅱ期後葉が10世紀第3四半期と推定しておきたい。ただし、西部遺跡のⅧ層Ⅱ期後葉は資料数が少ないことから短期間と思われ、遺跡自体の存続は土器型式の期間を別にして10世紀中葉前後までと考えられる。この年代観と放射性炭素年代測定との関係を見ると、暦年較正結果はSB1500-P2とP44が1σでAD781-945とAD903-1,020、SB1500-SW1352が1σでAD780-942、SB1400-P6が1σでAD780-936、SB1400-SW1145がAD833-975（「第Ⅵ章１」参照）、SB1400-SD1077出土の漆紙が1σでAD780-975、SB1500-SD1377出土の漆紙が1σでAD880-975、SX2001出土の漆紙が1σでAD895-990、SK2120出土の漆紙が1σでAD780-950（「第Ⅵ章４」参照）となり、すべての資料が重なり合う範囲がAD903-936と10世紀前葉を中心とする時期という点で一致している。

2）遺構の変遷（第80図）

遺構変遷は、土器編年を基にし、遺構の重複関係や軸方向などを考慮して検討した。なお、工房・倉庫などの建物機能と土台建ち建物[1)]については、後述する「本章 6）工房群の生産体制について」を参照されたい。

Ⅰ期

出土遺物から本時期とする遺構は、SD1090・SE2007だけであるが、Ⅱ期前葉に属するSD2008に切られるSB2020とその区画溝SD2150、そしてSD2054・2055・3024、さらにSD2054に並行しSD2055に切られるSD2096、SB2020と同じ半打込柱となるSB2200が本期に属すると考えられる。

工房２棟だけで構成され、配置は南北に分かれ、これがその後の建物配置の基礎となっている。また、両建物は半打込柱で、何か特殊な状況下に建てられたと推測される。

Ⅱ期前葉

出土遺物から本期とする遺構は、SK1120・1251・1361・1384・1479・1531・1590、SD2008・2064であり、このうちSK1384・1479はSB1500の内部施設と推測される。またSB1500・1400は桁行方向が同軸で並行することから同時設計と考えられ、両建物の区画溝からⅧ層Ⅱ期前～後葉の遺物が出土している。そして、両遺構から出土した資料の放射性炭素年代測定の暦年較正結果は、SB1400の区画溝であるSD1077出土の漆紙が1σでAD780-975、SB1500の区画溝であるSD1377出土の漆紙が1σでAD880-975、Ⅷ層Ⅱ期中葉のSX2001出土の漆紙が1σでAD895-990となり（「第Ⅵ章 4」参照）、建物自体（柱根）の放射性炭素年代測定の暦年較正結果は、SB1500のP2とP44が1σでAD781-945とAD903-1,020、SB1400のP6は1σでAD780-936（「第Ⅵ章１」参照）とSD1377などのものに比較してやや古い分析値が３例中２例に認められることからⅡ期でも初段階の前葉に創建されたと考えておきたい。このほかにSB1500と軸方向が一致し、同時設計と推測される遺構にはSB1683、SD1311・1313・1314がある。

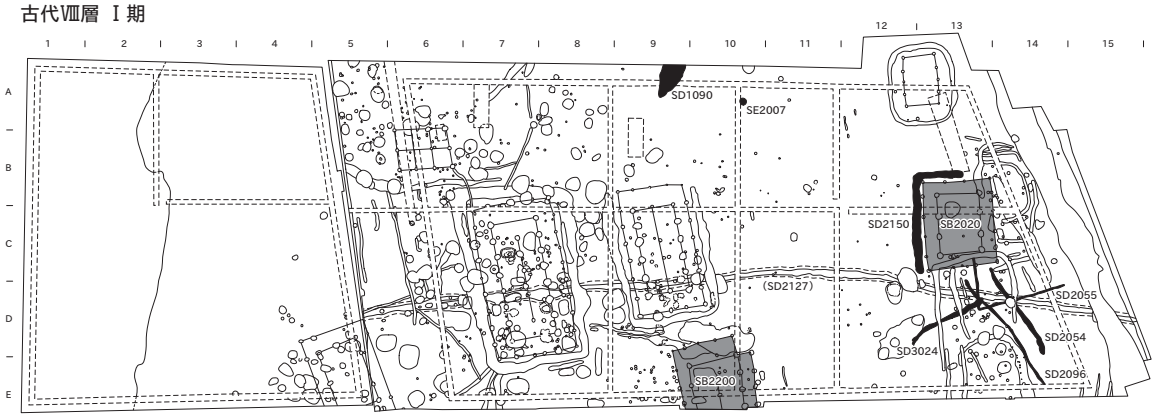
本期の建物には梁間１間型掘立柱建物SB1500・1400の２棟、総柱掘立柱建物SB1683の１棟、SD2008・2064に推測される土台建ち建物２棟の計５棟がある。建物は遺構のない地区（11A～E区）を挟み南北に分かれて存在し、南群は梁間１間型掘立柱建物２棟と総柱掘立柱建物１棟の計３棟、北群はともに土台建ち建物と推測される２棟で構成され、南群が建物の質・数ともに北群より優り、南北両群の間に格差が生じている。

Ⅱ期中葉

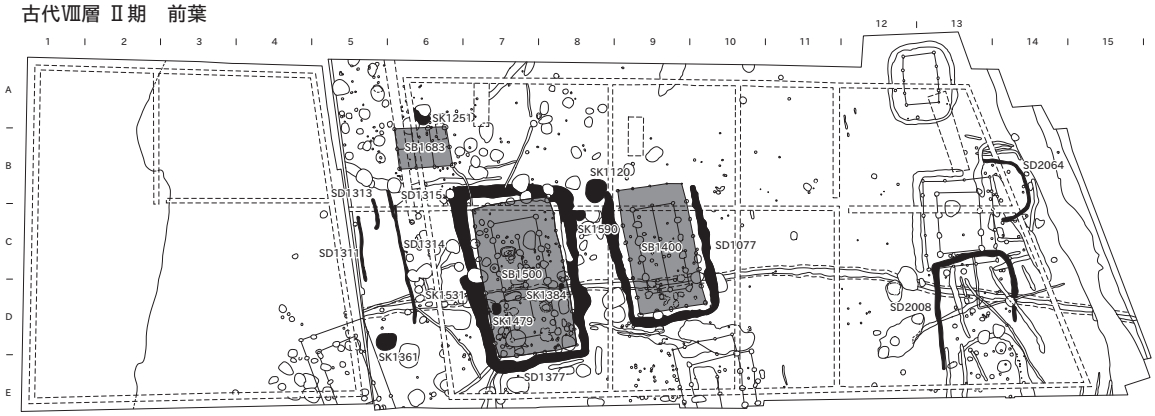
本期の遺物は、SD1377・1077・2029・2040・2060・2146、SK1141・1159・1360・1419・2122、SX1104・2001から出土している。このうちSD1377とSK1360・1419はSB1500に伴う区画溝及び内部施設、SD1077とSK1141はSB1400に伴う区画溝及び内部施設、SD2029はSB2100の区画溝と推測される。SB1500・1400の両建物はⅡ期前葉から継続しており、SB2100とSD2040・2060・2146は新たに出現したと考えられる。このほかに出土遺物からは明らかにできないが、SB2258が候補として挙げられる。南側に集中する建物群の軸方向がⅠ期とⅡ期前葉でN－70°－Wと同方向をとるのに対してSB2258はN－80°－Wと異なることからⅡ期前葉より後、そして柱が再利用のために抜き取られたこ

1）土台建ち建物は、地面若しくは礎石・基壇上に土台の横木を据え、その上に柱若しくは壁体を構築する工法である［中山 2003］。

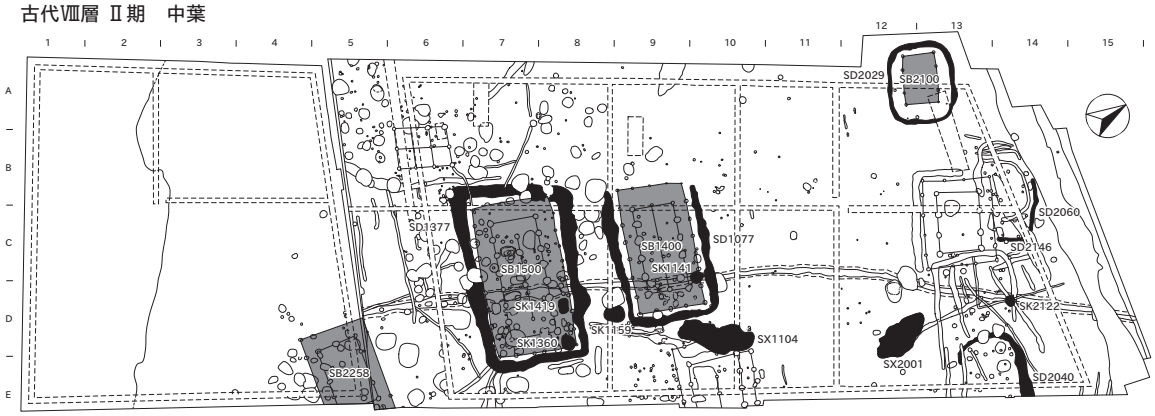
古代Ⅷ層 Ⅰ期



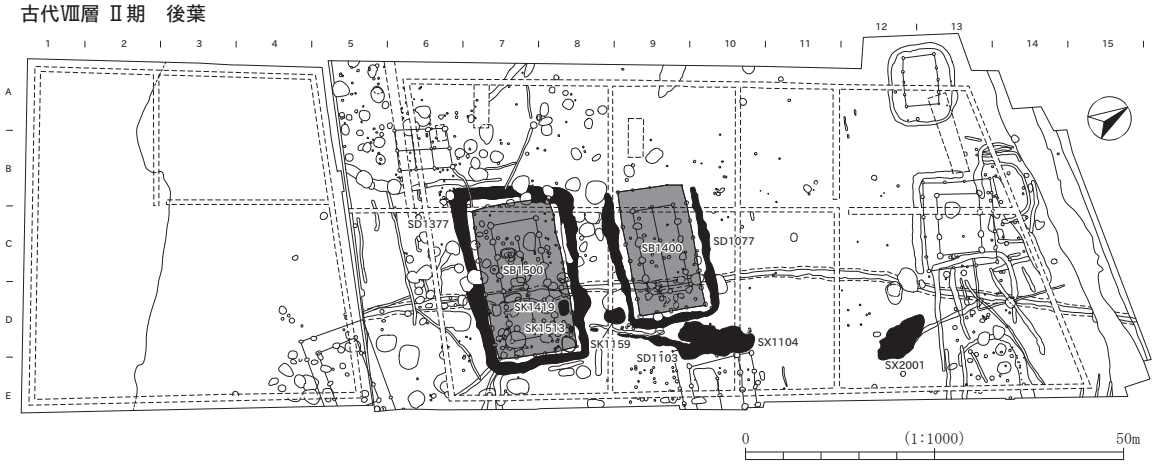
古代Ⅷ層 Ⅱ期　前葉



古代Ⅷ層 Ⅱ期　中葉



古代Ⅷ層 Ⅱ期　後葉



第 80 図　Ⅷ層の遺構変遷

とを考慮するならば最終段階のⅡ期後葉よりも前となり、本期に建てられたものと推測しておきたい。また、SD2040、SD2060（SD2146と同一の溝と思われる）は土台建ち建物の区画溝と推測される。

建物は掘立柱建物のSB1500・1400の2棟が継続し、SD2008に推測される建物は廃絶され、新たに掘立柱建物のSB2258・2100の2棟とSD2040とSD2060に推測される土台建ち建物が2棟建てられ、計６棟となり、南群に掘立柱建物３棟、北群に掘立柱建物1棟と土台建ち建物２棟の計３棟となる。遺構のない11Ａ～E区を挟んだ格差は建物数の上で消失するが、建物構造や規模の格差は継続する。

Ⅱ 期 後 葉

本期の遺物は、SD1103とⅡ期中葉から存在するSD1377・1077、SK1159・1419、SX1104から出土しており、このうちのSD1377とSK1419はSB1500に伴う区画溝及び内部施設、SD1077はSB1400に伴う区画溝で、SB1500・1400の両建物はⅡ期前葉から継続して本期まで存在したと考えられる。本期から出現した遺構にはSD1103がある。

南群の掘立柱建物であるSB1500・1400の２棟が継続するだけで、新たな建物の出現はなく、衰退は明らかで、本期をもって本工房群は廃絶される。

3）鍛冶関連の遺構と遺物について（第81～86・101図）

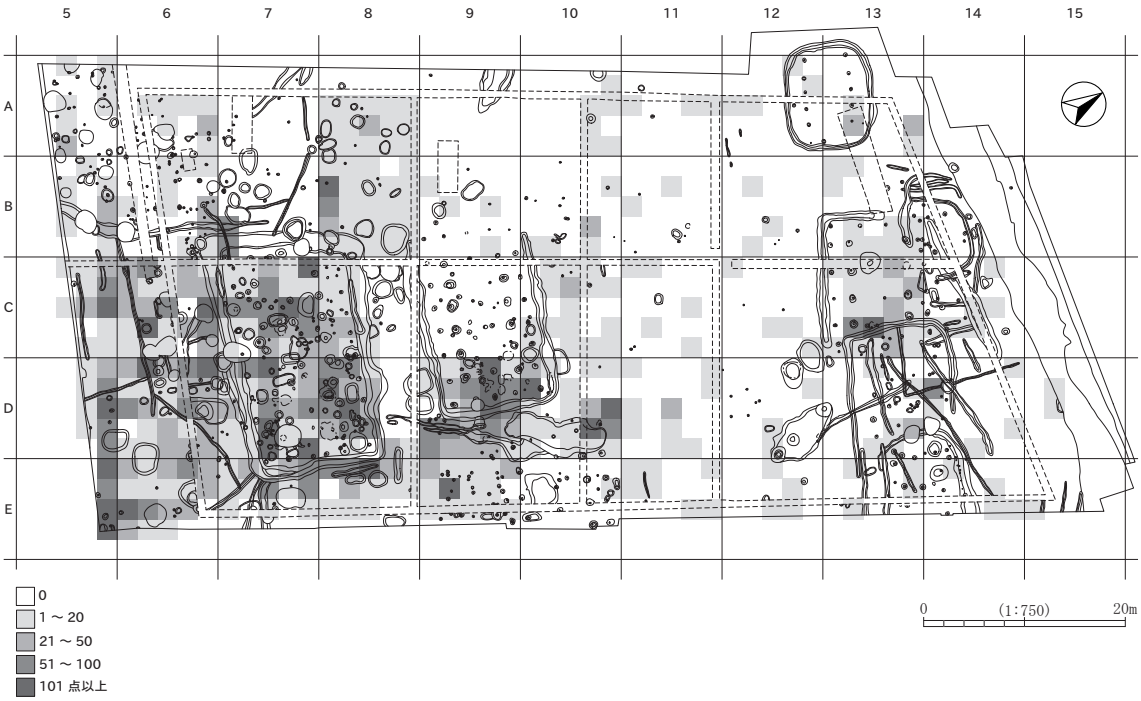
鍛冶作業を行っていたと想定される建物はSB1400・1500・2020・2200・2258の5棟であるが、このうちSB1400とSB1500からは鍛冶炉が複数検出されている。SB1400はSW1073・1075・1232・1145の4基、SB1500はSW1352・1353・2229の3基である。これらの鍛冶炉は、設置位置がまばらで廃滓などの出土状況も一様でないことから、複数の鍛冶炉が同時に操業していたとは考え難く、それぞれ時間差があるものと考えられる。ここでは第101図に示した椀形鍛冶滓の出土分布図から鍛冶炉の新旧関係について検討してみたい。椀形鍛冶滓の分布を見ると、SB1400のSW1232、SB1500のSW1352では、鍛冶炉周辺の床面上からその脇の区画溝（上層）にかけて椀形鍛冶滓が連続して出土している。操業当初は椀形鍛冶滓などのゴミ類はきちんと片付けて屋外へ廃棄していたが、工房が廃絶する直前段階では十分な片付けを行わずに近場に投棄したものと考えられる。椀形鍛冶滓の出土状況から鍛冶炉の新旧関係を想定すると、鍛冶炉周辺の床面上及び周囲の遺構から椀形鍛冶滓が出土していないものがもっとも古く、鍛冶炉周辺の床面上からは出土せず周囲の遺構などから若干出土するものが次に古く、鍛冶炉周辺の床面上及び周囲の遺構から椀形鍛冶滓が多量に出土するものがもっとも新しいと考えられる。想定されるSB1400とSB1500の鍛冶炉の新旧関係を示すと次のようになる。

SB1400　（古）SW1073・1075 → SW1145 → SW1232（新）

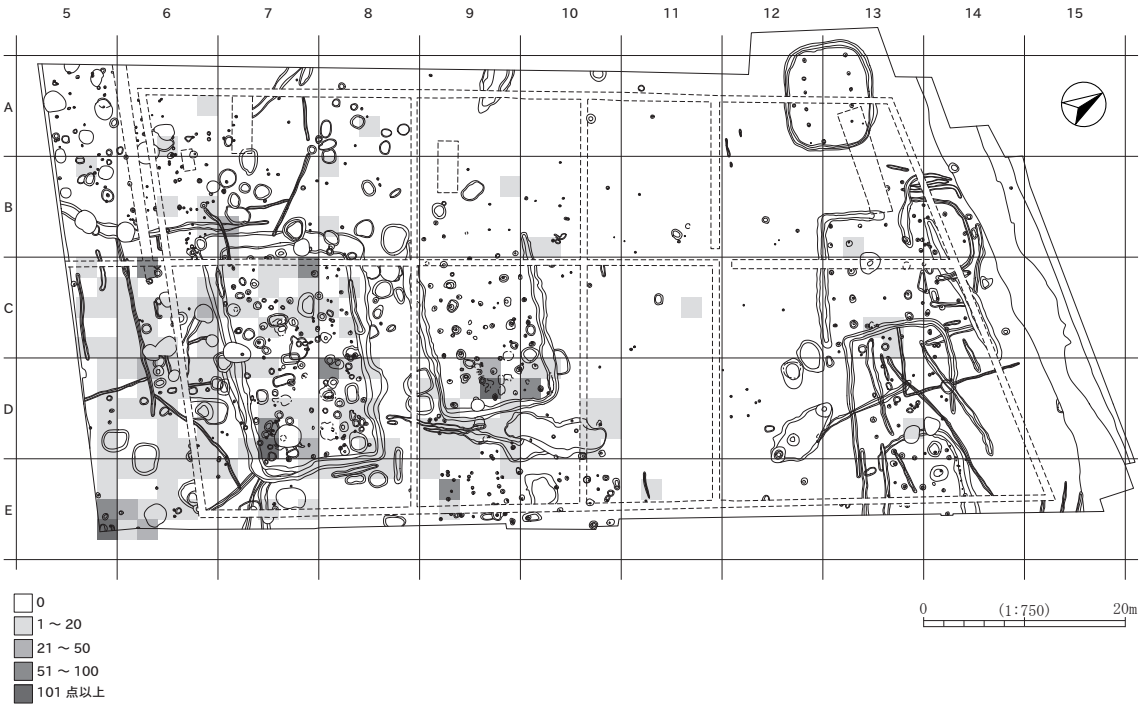
SB1500　（古）SW1353 → SW2229 → SW1352（新）

ほかに鍛冶作業に関連した遺構として、鍛冶炉の脇から廃滓入れ用の穴と考えられるものを検出した。浅く不整形な形状を呈するもので、多量の鉄滓や鉄床石の破片などが出土している。これらは鍛冶炉に伴って設置されたものと思われ、SB1400ではSW1232とSK1227、SB1500ではSW1352とSK1355、SW1353とSK1601、SB2020ではSW2010とSK2119、SB2258ではSW2259とSK1227が該当する。なお、同様のセット関係はⅪ層の鍛冶工房（SB3030のSW3126とSK3128）でも見られる。

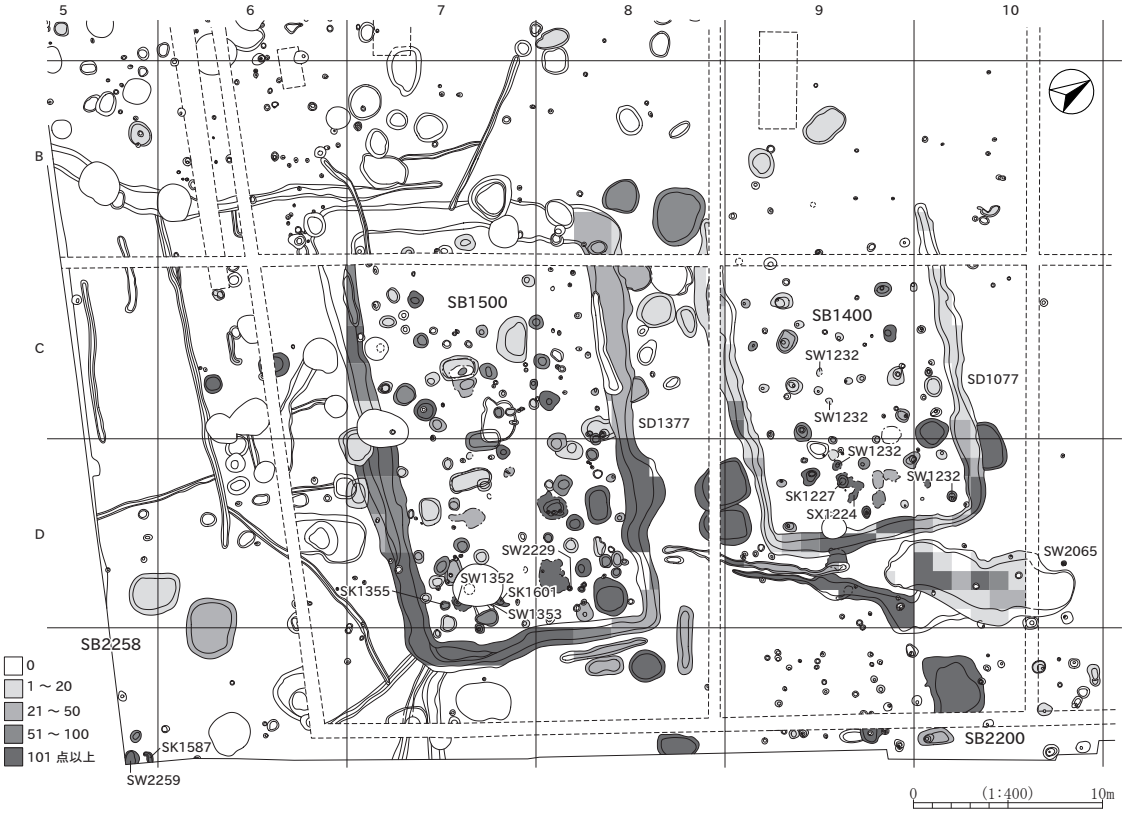
第81～86図には調査区内における鍛冶関連遺物の分布を示した。分布図を作成するにあたり、鉄素材を加熱する段階で生成される鉄滓（鍛冶滓、粒状の滓、ガラス質滓）と、加熱した鉄素材の鍛打に伴って生成される鍛造剝片・粒状滓に分けて図示した。第81・82図の遺構外出土分布図は、一辺2mのグリッド



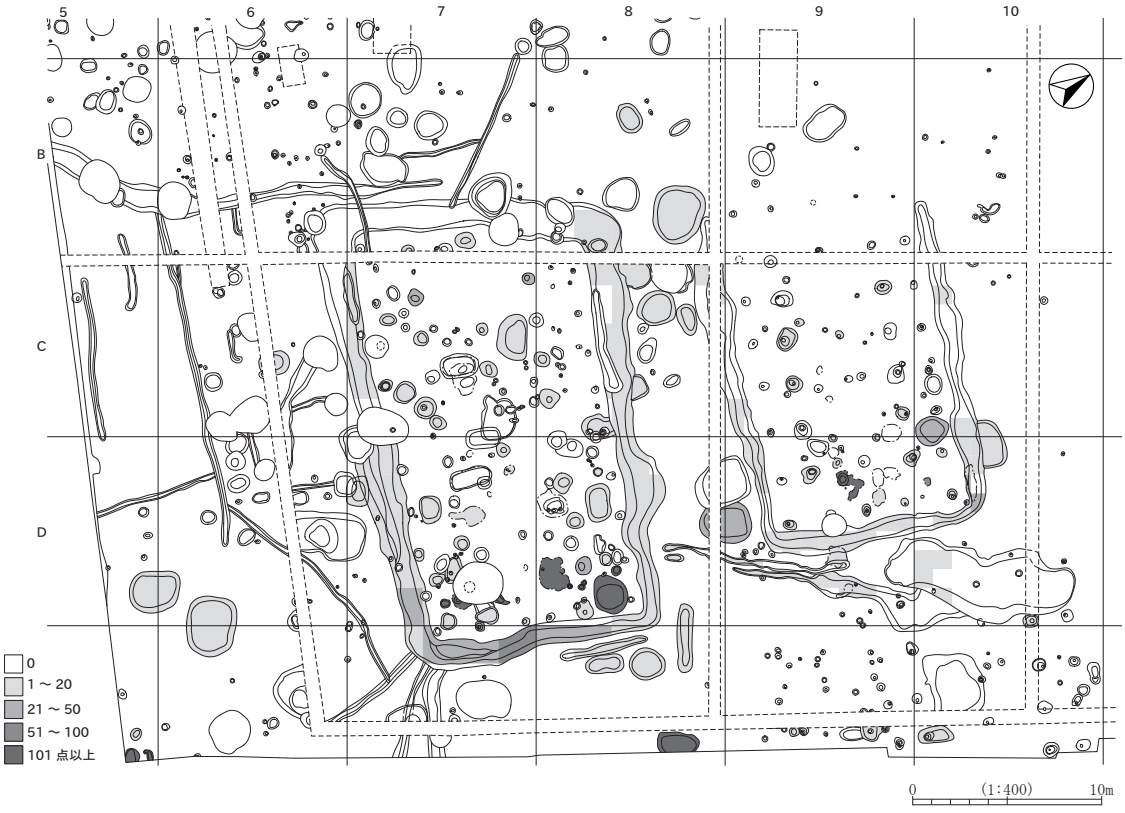
第81図　鉄滓出土分布（Ⅵ層遺構外出土）



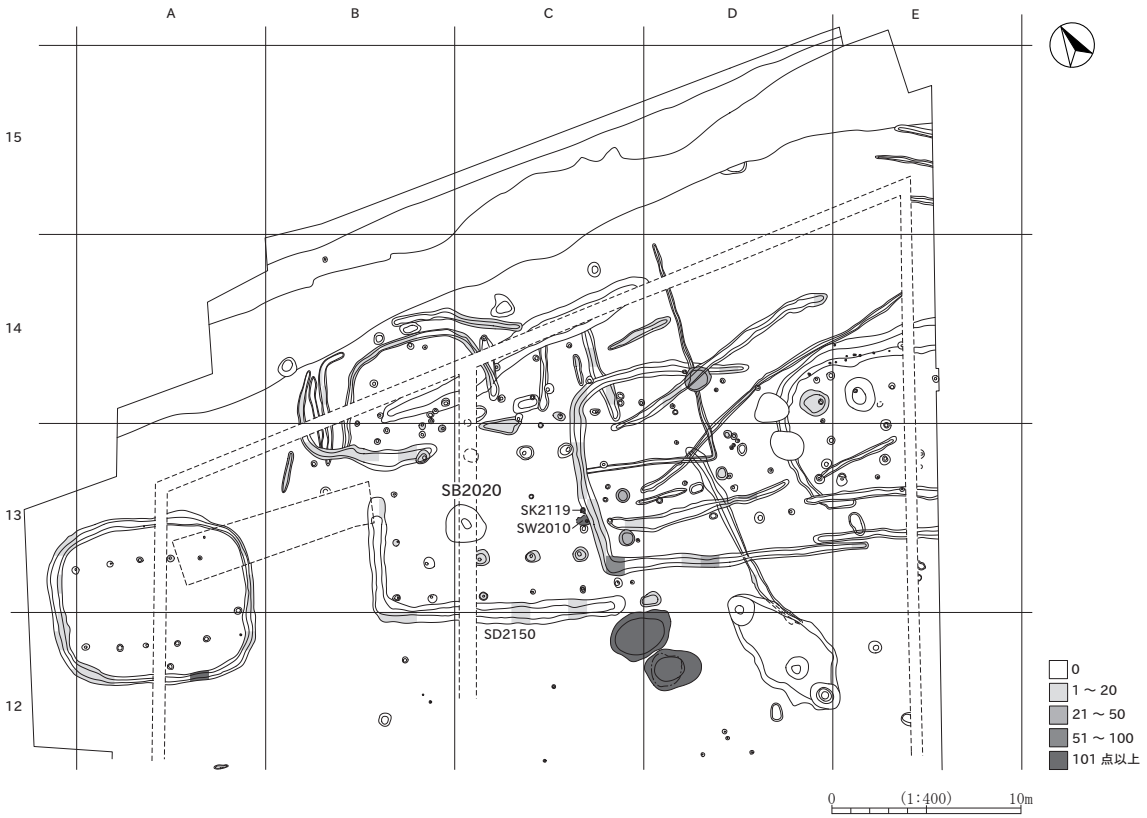
第82図　鍛造剝片・粒状滓出土分布（Ⅵ層遺構外出土）



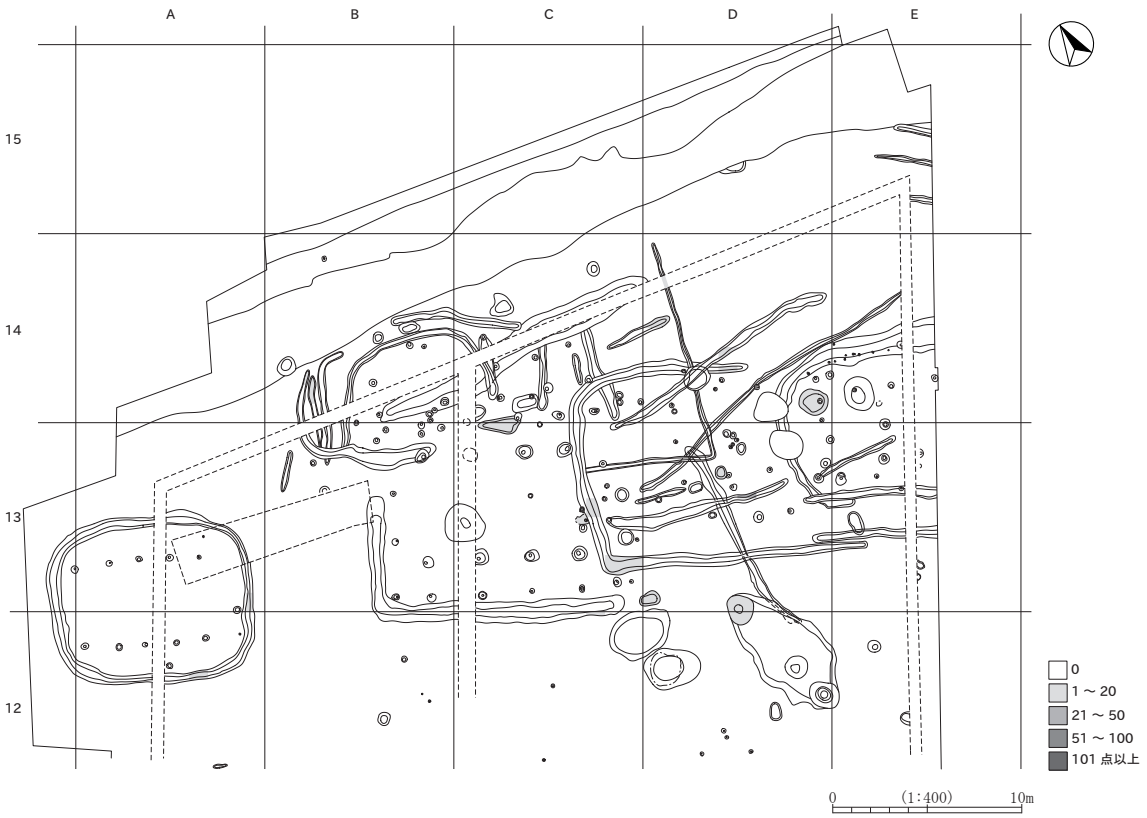
第83図　鉄滓出土分布（Ⅷ層遺構内、調査区南側）



第84図　鍛造剝片・粒状滓出土分布（Ⅷ層遺構内、調査区南側）



第85図　鉄滓出土分布（Ⅷ層遺構内、調査区北側）



第86図　鍛造剝片・粒状滓出土分布（Ⅷ層遺構内、調査区北側）

単位で数量を示したが、9C区と8C・D区北側は、ほかの地区よりも調査が進行していたため、土壌試料を採取することができなかった。第83～86図の遺構内出土分布図は、基本的に遺構単位で数量を示したが、溝や大型の遺構については遺構内を一辺1mのグリッドに細分して表示した。なお、SB1400の区画溝であるSD1077、SB1500の区画溝であるSD1377について層別に出土状況を見てみると、最上層を除き、おおむね下層から中・上層にかけて鍛冶関連遺物の出土が確認できる。このことは、工房の操業当初から廃絶に至るまでの間、鍛冶作業が継続して行われていたことを示しているものと思われる。

鍛冶関連遺物は、主に鍛冶炉とその周辺から出土している。前述した出土分布図を基に、鍛冶炉を中心とした作業場の空間的な復元を試みたが、微細な遺物であるためか思いのほか広範な分布を示し、残念ながら分布図に見える以上の有意な結論には至らなかった。

金属学的調査の結果、本遺跡には高チタン砂鉄を製錬した生成鉄塊が鍛冶原料として搬入され、鍛冶原料（製錬系鉄塊）に固着した滓を分離・除去する精錬鍛冶工程から、鉄素材を熱間で鍛打加工する鍛錬鍛冶工程まで行われていたことが判明している。旧岩船郡内には、高チタン砂鉄を原料として高温製錬を行っていたと推定される村上市元山窯跡群があり、同地域周辺で生産された鉄塊が本遺跡内に搬入された可能性が高いと考えられている（「第Ⅵ章2」参照）。本遺跡では、こうした製錬系鉄塊（新鉄）ばかりではなく、廃鉄器（故鉄）も鍛冶原料として利用していた可能性がある。Ⅷ層から出土した鉄製品として、研ぎ減りした刀子や折れ曲がった釘、鋳造品の破片などが出土しているが、これらはここで生産あるいは使用されたものではなく、故鉄として搬入された可能性がある。一例だけであるが、SD1077から出土した椀形鍛冶滓（332）の芯部に故鉄と思われる鉄製品が含まれている事例が確認されている。

Ⅷ層からは、椀形鍛冶滓が全部で116点出土しており、このうち重層した椀形鍛冶滓は19点である（椀形鍛冶滓のうち約16.4％）。重層した椀形鍛冶滓は、鍛冶を行った後、鍛冶炉内の灰や椀形鍛冶滓を掻き出すことなく、炭を継ぎ足しただけで再び鍛冶作業を行うことにより、古い椀形鍛冶滓の上に新しい椀形鍛冶滓が重層することによって生成されるものである。官営工房など、連続して操業している専業の鍛冶工房からはほとんど出土しない遺物である。

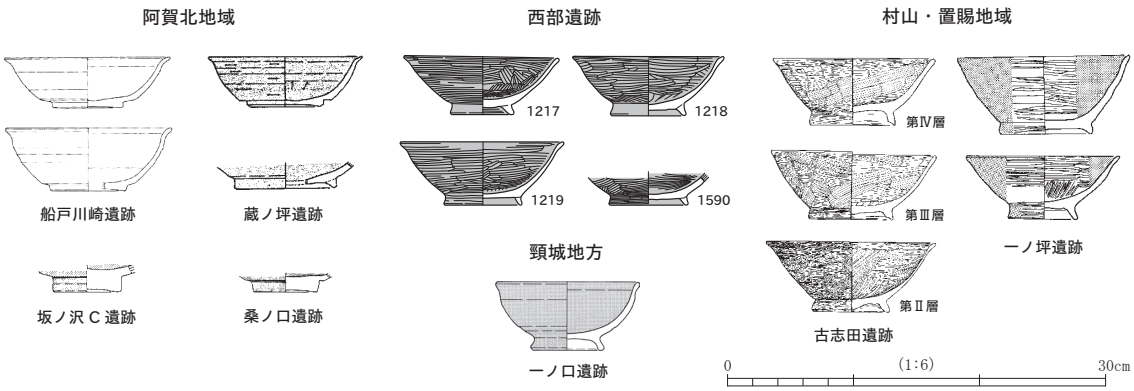
本遺跡では、全体として鉄滓などの鍛冶関連遺物の出土量が少ないこと、重層した椀形鍛冶滓の出土比率が高いことなどから、特定の鉄製品について大量生産を目的として連続操業していたのではなく、比較的短時間で済むような安易な鍛冶作業を必要に応じて断続的に繰り返し行っていたものと考えられる。

今回の調査では、生産品を特定できるような資料の出土がないため、具体的にどのような鉄製品を作っていたのかについては不明である。

4）遺物から見た地域間交流（第87～99図）

Ⅷ層出土遺物の中には、地域間交流の手がかりとなる資料が存在する。具体的には黒色土器有台椀Ｂ類、土師器小型羽釜、土師器台付鉢、筐底の土師器、則天文字「天」の墨書、菱形留め金具が挙げられる。これらについて個別に分布状況や性格について触れたい。

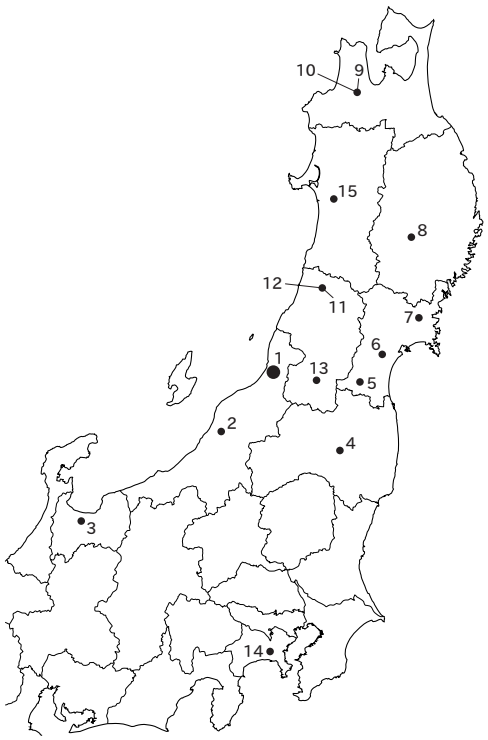
黒色土器有台椀Ｂ類は、破片で22点出土している。内・外面ともに黒色処理が施された有台椀で、この概念に当てはまる土器を阿賀北地域内で探すと、西部遺跡より時期は古いもので胎内市船戸川崎遺跡［水澤2002］・胎内市蔵ノ坪遺跡［飯坂ほか2002］・新発田市坂ノ沢C遺跡［田中・渡邊2001］・新発田市桑ノ口遺跡［鶴巻・若林ほか2003］などの出土品が該当する。これらは9世紀後半代の所産で総高台の金属器写しの形状とされる［水澤2005］。これに対して西部遺跡のものは高台が長三角形状を呈し、口縁部が



第 87 図　西部遺跡と阿賀北地域、頸城地域、村山･置賜地域の両面黒色土器

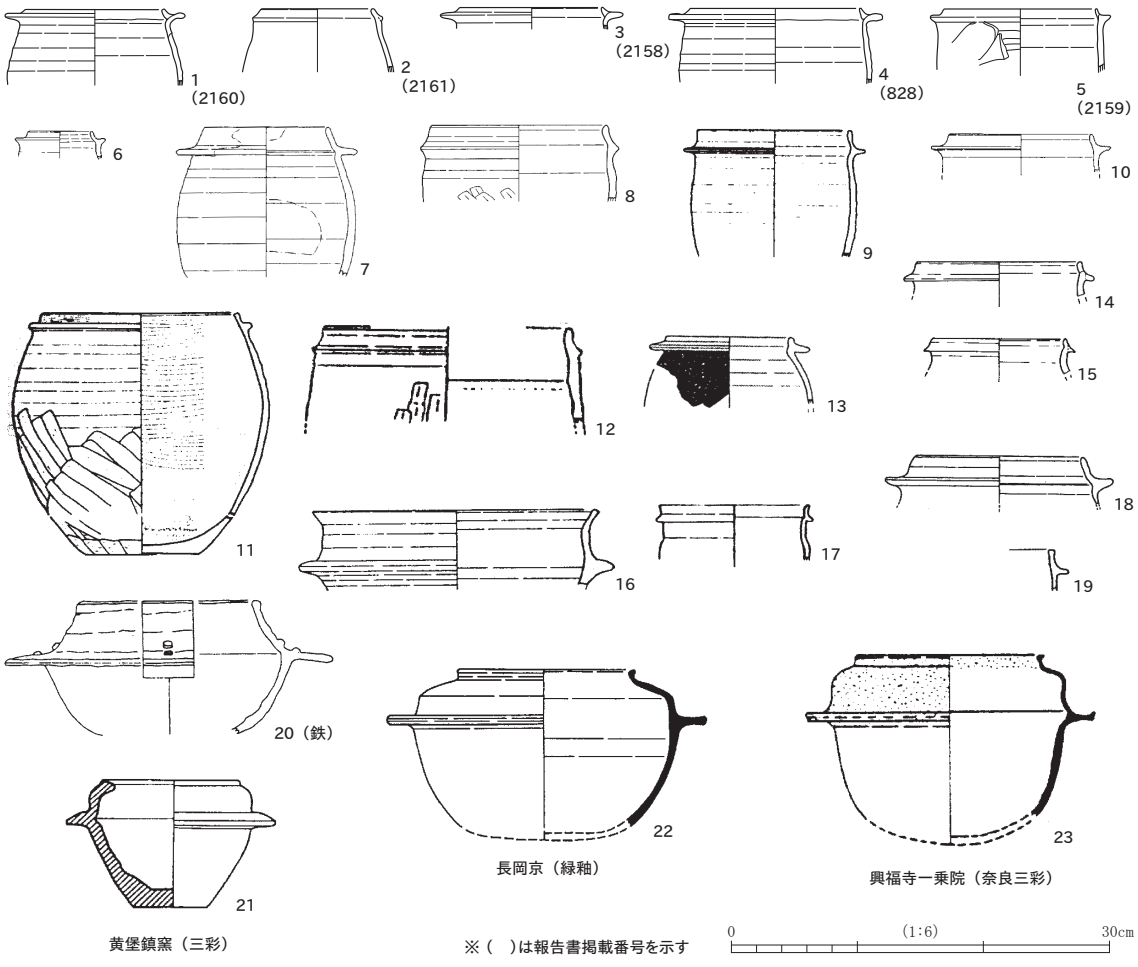
わずかに外反、見込みは曲面となるなど形状の上で前記資料との連続性が見いだせない。そこで、阿賀北地域外に類似した形状を求めると、県内では頸城地域にある一之口遺跡東地区［鈴木ほか1994］があり、県外では山形県の米沢市古志田東遺跡［手塚2001］・山形市一ノ坪遺跡［有山・土生ほか2001］・川西町道伝遺跡［藤田・月山ほか1984］などの出土例が挙げられる（第87図）。一之口遺跡東地区で報告されているSD1’2層（黒色土）出土の2点は、いずれも西部遺跡のものと比べ体部の丸みが強く、時期的にも丸石2号窯期の灰釉陶器椀や小皿が伴うことから西部遺跡のものよりも新しいと考えられる。また、時期が丸石2号窯期で、体部の丸みが強いものは長野県の善光寺平から松本平にかけて存在する［原1997］。伴出する灰釉陶器には一部虎渓山1号窯期のものもあるが、主に丸石2号窯～明和27号窯期のもので、時期的にもほぼ一致し、両地域の強い関係がうかがえる。以上のように西部遺跡と一之口遺跡のものは形状と時期が多少異なり、中間地域にある同時期の遺跡を見ても今のところ類例が見られず、現段階では、両遺跡出土の黒色土器有台椀についての関連性を見いだすことができない。一方、西部遺跡に地理的に近い東北地方南部には山形県古志田東遺跡・道伝遺跡のように内・外面に黒色処理を施す有台椀が出土する遺跡が多く認められ、時期は一ノ坪遺跡が不明であるが、古志田東遺跡は9世紀中葉から10世紀初頭の遺物に伴い、道伝遺跡は９世紀第３四半期とされるSD35F5層［阿部・水戸1999］から出土している。形状は多様であるが、体部の丸みは弱く、開き気味の体部～口縁部を持ち、高台畳付は内面に段を有すものや西部遺跡に類似する高台畳付が丸く仕上げられるものがある。これらの土器は山形県置賜地域や村山地域において少なくとも9世紀後半代から見られ、西部遺跡のものと形状的に類似するものがあることから、西部遺跡の黒色土器有台椀Aは東北地方南部からの影響で出現したものと考えられる。

土師器小型羽釜が５点出土しており、これらは上野や信濃の土師器羽釜と異なり、比較的丁寧な造りで非日常品と思われる。類似する土師器小型羽釜の分布は東北地方から北陸地方にかけて点在し（第88図）、特に東北地方に稀有な事例ながらも集中するようで、年代的には9世紀中葉から10世紀代に収まる。9世紀代の例は青森県山元（２）遺跡（13）［工藤1998］、宮城県多賀城跡第61次第10層（10）［柳澤1994］と同県小梁川遺跡（９）［村田1994］など宮城県と青森県に見られ、10世紀代になると東北地方から北陸地方にかけての広範囲から出土している。これらの羽釜の製作技法を見ると、広範囲で希薄な分布にも関わらず、少数を除き多くのものが胴部を折り曲げて鍔を成形した後、鍔の上に口縁部を接合させるという類似性が認められる。同様の製作技法の小型羽釜は黄堡鎮窯出土の唐三彩（21）・興福寺一乗院出土の奈良三彩の小型羽釜（23）［巽1994］に見られ、小型羽釜という点では長岡京出土の緑釉陶器小型羽釜（22）や秋田城出土の鉄製羽釜（20）［伊藤2006］などもあり、いずれも東北地方を中心に分布する土師器小型



小型羽釜

遺跡位置	遺跡名	所在地	遺物№	引用文献
1	西部遺跡	新潟県村上市	1～5	本書
2	馬越遺跡	新潟県加茂市	6	伊藤2005
3	任海宮田遺跡	富山県富山市	7	武田ほか2007
4	大江古屋敷遺跡	福島県河沼郡会津坂下町	8	古川・吉田ほか1990
5	小梁川遺跡	宮城県刈田郡七ヶ宿町	9	村田1994
6	多賀城跡	宮城県多賀城市	10	柳澤1994
7	柳津館山館跡	宮城県登米市	11	村田1994
8	膳性遺跡	岩手県奥州市	12	伊藤1998
9	山元（2）遺跡	青森県青森市	13	工藤1998
10	隠川（12）遺跡	青森県五所川原市	14 15	木村・三林1998
11	八森遺跡	山形県酒田市	16	伊藤・植松1999
12	堂ノ前遺跡	山形県酒田市	17	伊藤・植松1999
13	太夫小屋1遺跡	山形県東置賜郡川西町	18	高橋2001
14	西ノ谷遺跡	神奈川県横浜市	19	坂本・伊藤ほか1997
15	秋田城跡	秋田県秋田市	20	伊藤2006
	黄堡鎮窯	中華人民共和国	21	巽1994
	長岡京	京都府向日市	22	山中1994
	興福寺一乗院	奈良県奈良市	23	玉田1994



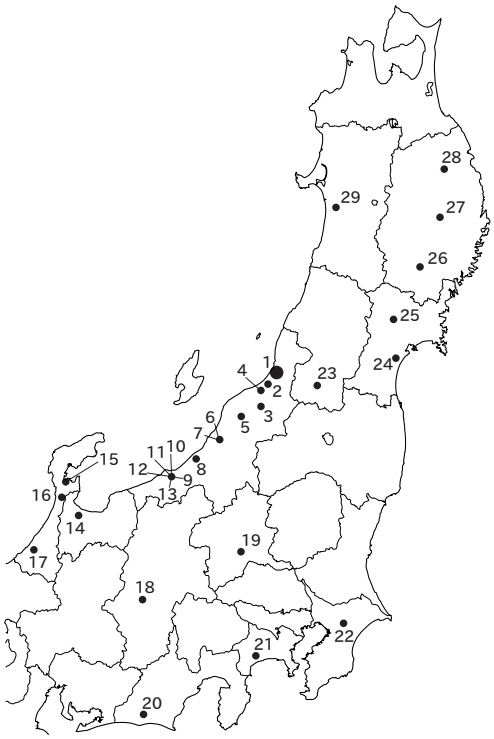
第 88 図　土師器小型羽釜の類例と三彩･緑釉陶器･鉄製の小型羽釜

羽釜よりも先行する時期に出現しており、いずれかが土師器小型羽釜のモデルになっているとも考えられる。

土師器台付鉢は、接地面が平坦な高台が付く大型の鉢で、実測図を掲載した比較的大型の破片が20点、このほかに小型の破片が30点出土している。器形的に類似するものを探すと西は石川県から東は岩手県まで広範囲に存在し（第89～91図）、時期的には8世紀から10世紀と比較的長期間認められる。もう少し詳細に見ると、分布においては北陸地方から東北地方にかけて集中し、時期的にも9世紀から10世紀、特に9世紀後半以降のものが多い。時期単位で分布を見ると、８世紀では千葉県高岡大山遺跡［阿部ほか1993］で香炉火舎として報告［森本2000］されているもの（35・36）と須恵器であるが器形的に類似する群馬県田端遺跡［神保・西田1988］のもの（32）がある。9世紀前半代では岩手県徳丹城で高盤と報告［西野2008］されているもの（45）が類似し、このほかに長野県下神遺跡（31）［石上･小口ほか1990］に見られる。9世紀後半代では岩手県胆沢城（42）［井上1997］、秋田県秋田城（47）［小松･石郷岡･日野ほか1981］、新潟県鴨侍遺跡（8～10）［吉井2002］・同県下ノ西遺跡（17）［田中1998］などで出土し、現段階では分布範囲がより狭くなる傾向が見いだせ、この傾向は10世紀代も続いている。

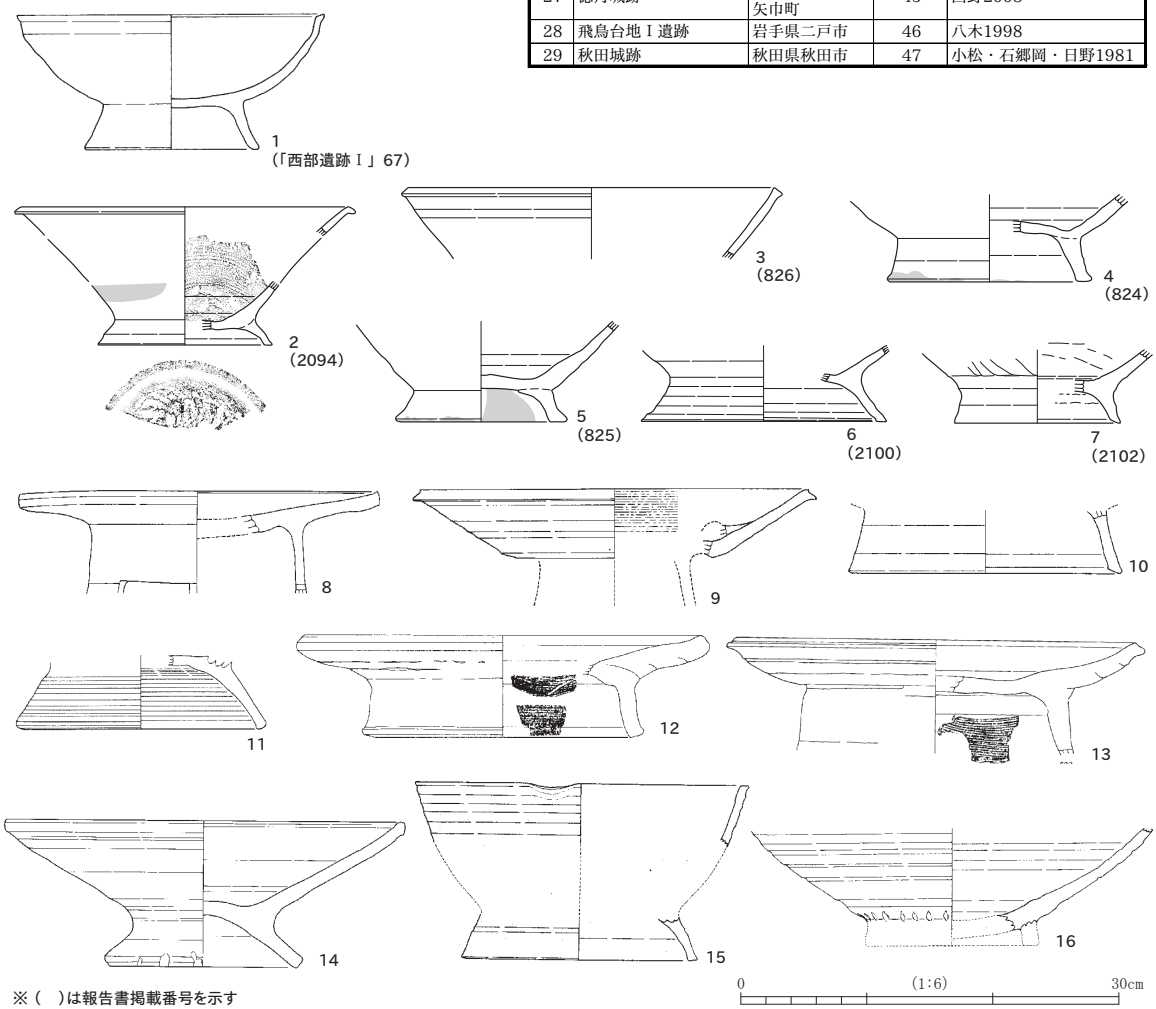
出土した遺跡の性格を見ると、8世紀代では高岡大山遺跡で「寺」の墨書土器が出土し、田端遺跡近隣には寺の存在が推測されることから寺院関連の遺跡を想起させる。9世紀代以降の遺跡は城柵、官衙、工房を伴う遺跡など多様である。城柵では多賀城［伊藤ほか1980］・胆沢城・秋田城・徳丹城などが挙げられる。官衙関連遺跡としては下ノ西遺跡が、官衙の可能性がある遺跡としては大型掘立柱建物が検出された上越市保坂遺跡［笹澤･小島ほか1997］や10世紀代の遠江国府域の可能性がある静岡県見附端城遺跡［山崎1993］などがある。工房を伴う遺跡としては西部遺跡・石川県千木ヤシキダ遺跡［出越1991］・下神遺跡があり、新発田市桑ノ口遺跡［鶴巻・若林ほか2003］・加茂市馬越遺跡［伊藤2005］では漆パレットが出土していることから漆工房の存在が推測され、このほかにも工房と推測可能な遺跡は多い。以上のように9世紀以降になると城柵、官衙、工房と目される遺跡からの出土が多い傾向が見て取れる。

次に土師器台付鉢の用途について検討してみる。出土量からは、多賀城・胆沢城・徳丹城・西部遺跡・下神遺跡で多量に出土し、ほかの遺跡では１～数点と少なく、遺跡間での差が大きい。遺跡の性格に大きく影響している可能性があるが、通常の生活で用いる日常品とは考えにくい状況である。使用痕については西部遺跡で本書に掲載した20点と未掲載破片30点の内、ススの付着したものが4点、被熱したと思われるものが4点存在し、付着や被熱の部位は台部の内・外面と接地面、若しくは台部内面と接地面にあり、上方には見られない。このような状況から通常の煮炊きで生じる痕跡とは考えにくく、スス付着や被熱痕を生じさせた炎は小さく弱いものであったと推測される。そして、鉢部内面が付着物の汚れもなくきれいな状態であることから推測すると、仮に内容物があったとしても混入物のない水などの液体が考えられる。また、田端遺跡のもの（32）については、鉢底部外面に被熱痕がありながら鉢底部に内・外面を貫通する小孔があることから、鉢部下で燃焼させ小孔を通して鉢部内の内容物を加熱したとも考えられる。一方、鴨侍遺跡のもの（９）は鉢部内面にススとタール状の付着物が、秋田城のもの（47）はススまたは油煙状の炭化物の付着が報告されており、付着部位の記述はないが写真を見ると鉢部内面と思われる。また、桑ノ口遺跡のもの（11）は内面と台部下半にススの付着が報告されている。このほかに使用痕ではないが、富山県美野下遺跡のもの（27）と徳丹城のもの（45）は全面あるいは一部が赤彩され、高岡大山遺跡のもの（35・36）には文様があるなど祭祀的な要素が見て取れる。以上を整理すると、下記のようになる。



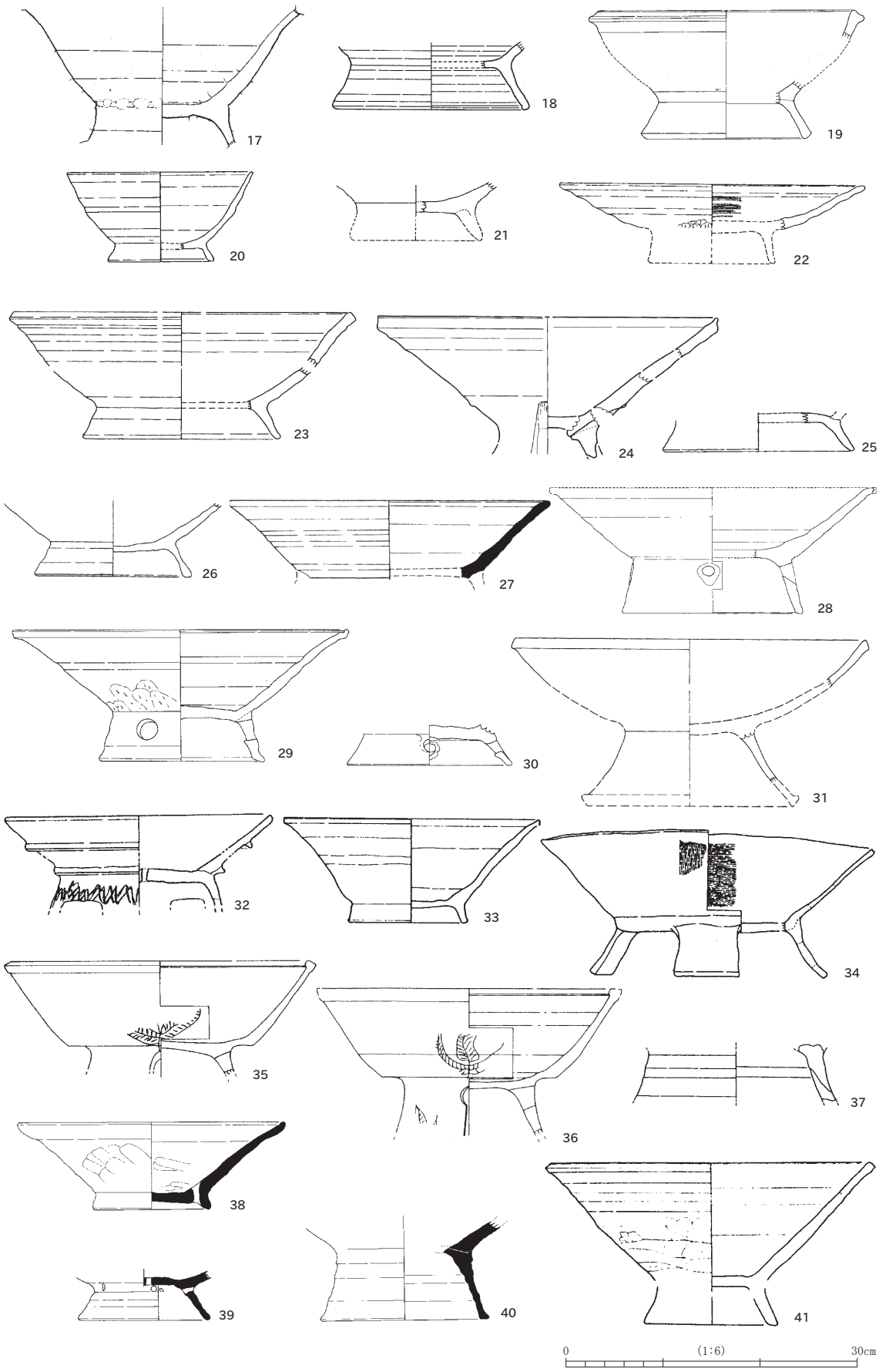
台付鉢

遺跡位置	遺跡名	所在地	遺物№	引用文献
1	西部遺跡	新潟県村上市	1～7	折原ほか、本書
2	鴨侍遺跡	新潟県村上市	8～10	吉井2002
3	桑ノ口遺跡	新潟県新発田市	11	鶴巻・若林ほか2003
4	舟戸川崎遺跡	新潟県胎内市	12・13	水澤2002
5	馬越遺跡	新潟県加茂市	14	伊藤2005
6	門新遺跡	新潟県長岡市	15・16	田中1995
7	下ノ西遺跡	新潟県長岡市	17	田中1999
8	新保遺跡	新潟県上越市	18	石川・高橋ほか2001
9	蛇谷遺跡	新潟県上越市	19	土橋2005
10	保坂遺跡	新潟県上越市	20～23	小島・中西ほか1997
11	五反田遺跡	新潟県上越市	24	渡邊・辻ほか1997
12	一之口遺跡東地区	新潟県上越市	25	鈴木ほか1997
13	下割遺跡	新潟県上越市	26	笹澤2003
14	美野下遺跡	富山県高岡市	27	酒井・山口1986
15	武部ショウブダ遺跡	石川県鹿島郡中能登町	28	岩瀬2002
16	宿向山遺跡	石川県羽咋郡宝達志水町	29	藤田・北野ほか1987
17	千木ヤシキダ遺跡Ⅰ・Ⅱ	石川県金沢市	30	出越1991
18	下神遺跡	長野県松本市	31	石上・小口ほか1990
19	田端遺跡	群馬県高崎市	32	神保・西田ほか1988
20	見付端城遺跡	静岡県磐田市	33	山崎ほか1993
21	高林寺遺跡	神奈川県平塚市	34	冨永2000
22	高岡大山遺跡	千葉県佐倉市	35・36	阿部ほか1993
23	太夫小屋1遺跡	山形県東置賜郡川西町	37	高橋2001
24	多賀城跡	宮城県多賀城市	38～40	伊藤ほか1980
25	中峯A遺跡	宮城県多賀城市	41	村田1994
26	胆沢城跡	岩手県奥州市	42～44	井上1997
27	徳丹城跡	岩手県紫波郡矢巾町	45	西野2008
28	飛鳥台地Ⅰ遺跡	岩手県二戸市	46	八木1998
29	秋田城跡	秋田県秋田市	47	小松・石郷岡・日野1981

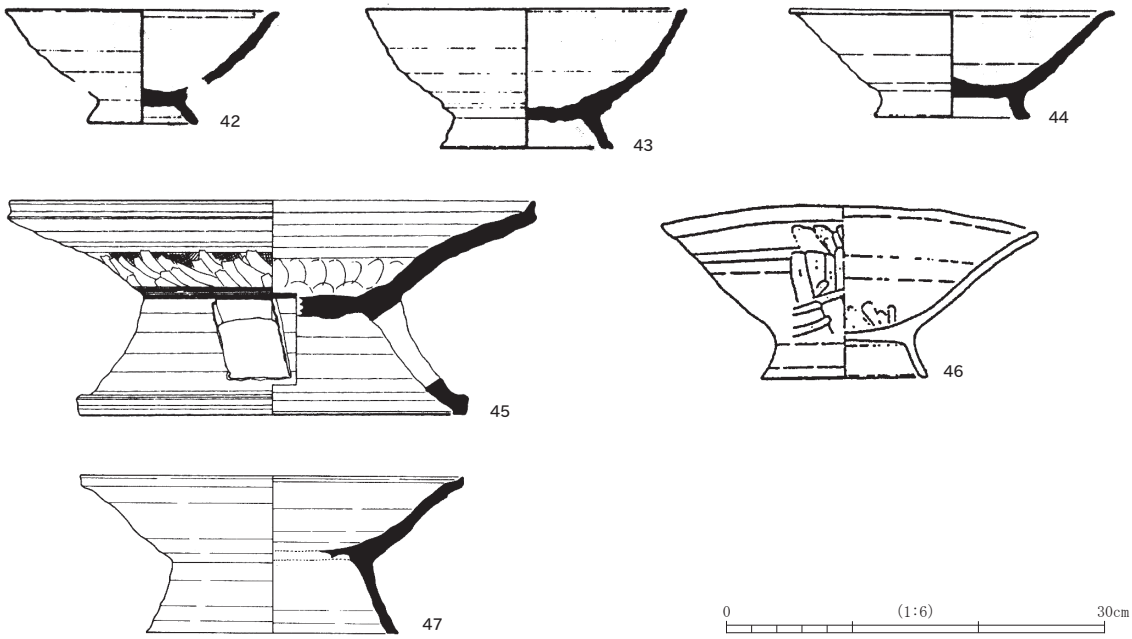


※(　)は報告書掲載番号を示す

第 89 図　各遺跡出土の台付鉢（1）



第 90 図　各遺跡出土の台付鉢（2）



第 91 図　各遺跡出土の台付鉢（3）

①鉢部で何かを直接燃焼させたものと器下半から加熱しているものがあり、両者を併用しているものもありそうである。

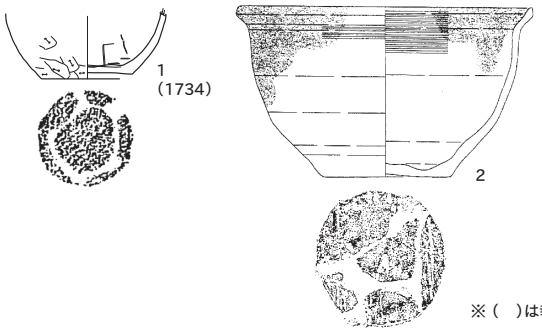
②器下半からの加熱は小さく弱いもので、中には鉢底部に内・外面を貫通する小孔が開くものがあり、一般的な煮炊きに用いたとは思えない。

③赤彩や文様を持つものがあり、祭祀などに用いたと推測されるものもある。

本器種がひとつの用途に限定されるならば、①～③を満たす用途でなければならず、そこで注目されるのが8世紀代の高岡大山遺跡（35・36）において香炉火舎として報告［森本2000］される点である。香は直接焚くだけの方法と間接的に加熱する方法があることから①が、間接的加熱法は加熱が強いと燃料材のにおいが優ってしまうので加熱を抑えなくてならないことから②が、香は日本において仏具として始まることから③が満たされる可能性がある。今後、各遺跡出土の台付鉢について使用痕を詳細に検討する必要があるが、土師器台付鉢の用途を推測する上で香道具も候補のひとつとして挙げられるのではないだろうか。

底部に筵痕を有する土師器小甕が１点（１）出土している（第92図）。新潟県内では新発田市坂ノ沢C遺跡［田中･渡邊2001］で底部に筵状の繊維痕を持つ土師器鍋形鉢（２）が報告されている以外にほとんどなく、県外に目を移すと山形県・秋田県・青森県で普通に出土する資料で、西部遺跡のものはこれらの地域からの搬入品あるいは影響により発生したものと考えられる。

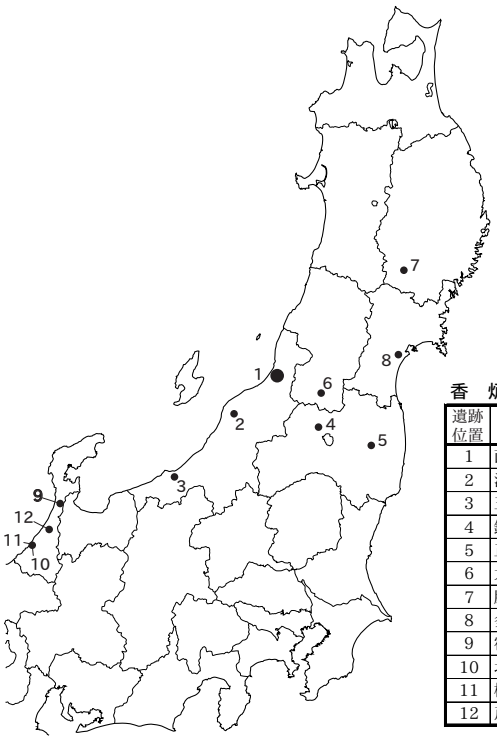
土師器香炉蓋としたものは３点出土している。北陸地方から東北地方南部にかけての範囲で香炉として報告されているものを見てみると、新潟県には上越市五反田遺跡［加藤・相羽ほか2005］、新潟市沖ノ羽遺跡［新潟市教育委員会2007］などで緑釉陶器香炉が、近県では山形・福島・宮城・石川の各県から出土している（第93図）。石川・新潟両県から出土した香炉は施釉陶器や須恵器といった製品が多く、土師器製香炉の報告はないようである。土師器若しくは黒色土器製香炉例を探すと、福島県の鏡ノ町遺跡B（４～７）［和田・植村ほか2001］・正直C遺跡（８）［鈴鹿ほか1995］、山形県の太夫小屋1遺跡（９～11）［高橋



筥　底

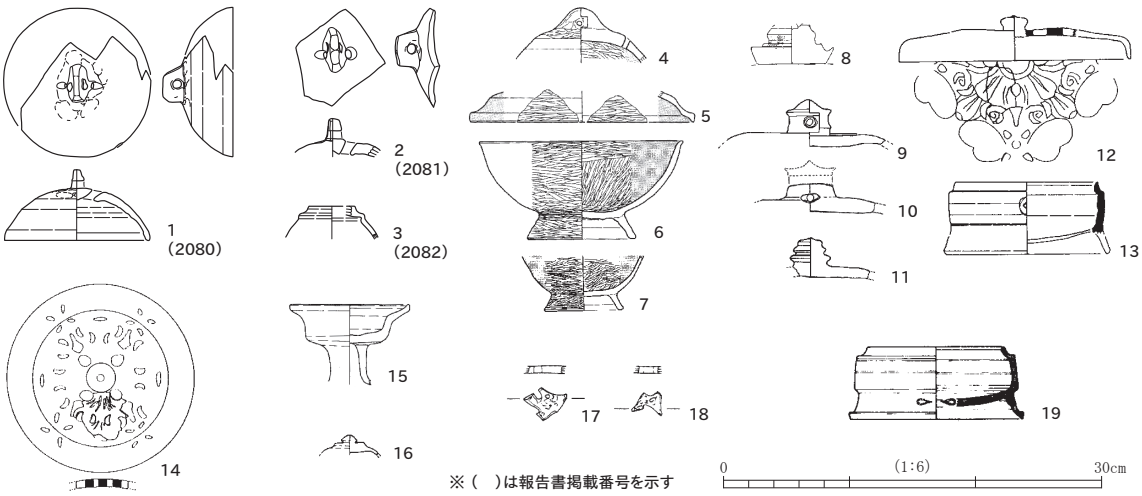
遺物№	遺跡名	所在地	引用文献
1	西部遺跡	新潟県村上市	本書
2	坂ノ沢C遺跡	新潟県新発田市	渡邊・田中2001

第 92 図　筥底を持つ土師器の類例



香　炉

遺跡位置	遺跡名	所在地	遺物№	引用文献
1	西部遺跡	新潟県村上市	1～3	本書
2	沖ノ羽遺跡	新潟県新潟市		新潟市埋蔵文化財センター2007
3	五反田遺跡	新潟県上越市		加藤・相羽2005
4	鏡ノ町遺跡B	福島県耶麻郡塩川町	4～7	和田・植村ほか2001
5	正直C遺跡	福島県郡山市	8	鈴鹿・山内ほか1995
6	太夫小屋１遺跡	山形県東置賜郡川西町	9～11	高橋2001
7	胆沢城跡	岩手県奥州市	12・13	伊藤ほか1983
8	多賀城跡	宮城県多賀城市	14	柳澤1994
9	宿向山遺跡	石川県羽咋郡宝達志水町	15	藤田・北野ほか1987
10	北安田北遺跡	石川県白山市	16	前田1990
11	横江庄遺跡	石川県白山市	17・18	出越1994
12	戸水C遺跡	石川県金沢市	19	戸澗ほか1986



第 93 図　北陸から東北南部にかけての香炉の出土例

2001］などがあり、やや離れるが千葉県にもある［森本2000］。鏡ノ町遺跡B出土例（４～７）は、内・外面黒色土器という土師器の系譜を引く焼き方であるが、形状では環状鈕を有する半球状で西部遺跡例に類似する蓋である。時期は出土した1号河川の年代から8世紀後半から10世紀前半のいずれかの時期である。正直C遺跡では2号住居から香炉蓋鈕片1点（８）が出土しており、形状的には異なるが土師器製で、時期は黒笹14号窯式の椀が伴うことから9世紀第2四半期以降となる。太夫小屋1遺跡ではSD749（11）・ST400（９）・SX250（10）からそれぞれ土師器製1点が、遺構外から土師器製１点と黒色土器製1点が出土しており、すべて香炉蓋鈕片である。時期はSD749が９世紀前半、SX250が9世紀後半と報告［高橋2001］され、ST400については詳細な時期に触れられていない。

以上、各地で香炉として取り扱われたものは、形態的に多様であるが、その中にあって福島県鏡ノ町遺跡B例は土師器と黒色土器という差があるものの形状的に西部遺跡のものに類似点が多い。

菱形留め金具は、SB1500整地層から１点（479）と遺物包含層から1点（2283）の計2点が出土しており、用途不明である。両端に頭部を持つ鉄棒に菱形平面の鉄板2枚を貫通させている金具で、形状から留め金具と考えられる。県内では新潟市的場遺跡［小池・藤塚1993］などから出土しているが、県外では富山県任海宮田遺跡［武田・細辻ほか2007］とその周辺の遺跡で多数出土している報告がある。出土遺跡の性格は的場遺跡が官衙関連、任海宮田遺跡は「城長」の墨書が出土しており、単純に一般集落とできない遺跡である。

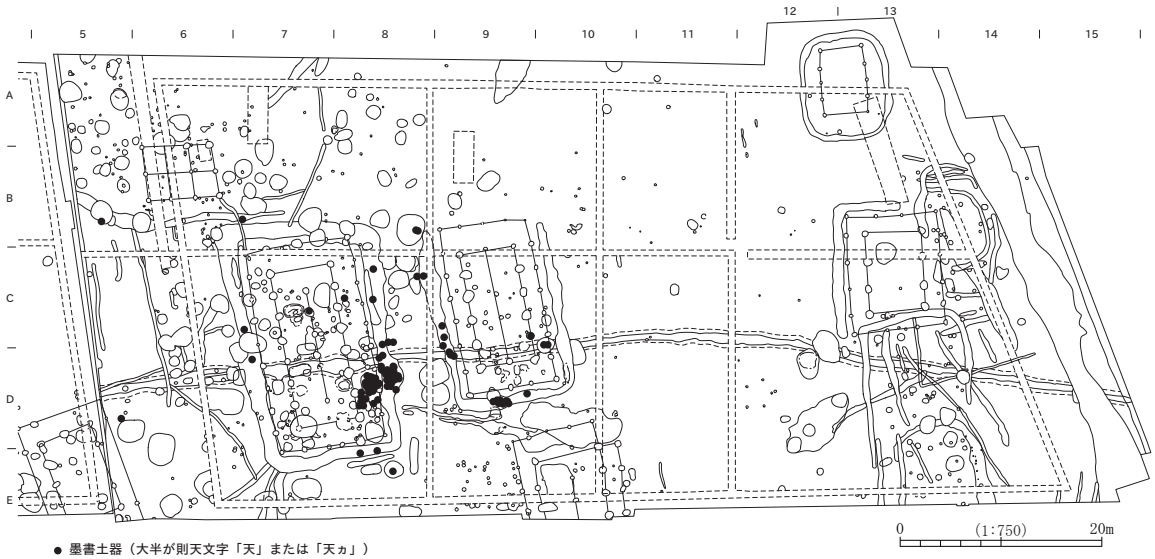
墨書土器は全部で75点出土した。判読できた文字のすべてが則天文字の「天」と考えられる文字を記している。墨書土器の大半は土師器無台椀で、須恵器に記されたものはわずか１点である。

出土地点は第96図に示したとおり、大型掘立柱建物SB1500の周辺を中心として出土しており、特にその区画溝であるSD1377の北東部分で密集している。

出土状況に関してもう一つ注目されるのが461である。この墨書土器は密集域からの出土ではなく、SB1500の柱穴の一つであるP45の掘形から出土している。P45については第Ⅳ章で詳述されているように、SB1500の中柱に相当すると思われる。通常こうした出土状況から考えられるのは、SB1500の建築以前に墨書土器が投入されたとする解釈である。これに立脚すれば、「天」の墨書土器はSB1500の建設に関わった集団が墨書・使用した可能性が推測され、この建物の建築に伴うか、それ以前の可能性が考えられる。しかしながら、P45が建物改築に伴って設けられた束柱の可能性があるとしたら、建築後に投入された可能性も残っている。更に詳細に出土状況を述べれば柱の掘形から出土しており、さながら地鎮的な投入状況をも推測させる。安易に地鎮祭祀などに伴う墨書土器とは想定していないが、特殊な出土状況と言える。

第 94 図　字書類にみる「天」の〝古文、史料〔『新撰字鏡』天部第一〕（［蔵中進1995a］から）

第 95 図　古体漢字「天」の典型字体（小川本「新訳花厳経音義私記」）



第96図　Ⅷ層墨書土器の分布

墨書にもいくつかの特徴が見いだせる。その一つが土器への墨書数である。基本的には土器一点に墨書一点であるが、同じ土器に２か所・３か所と「天」を墨書した資料もある。具体的には1165で３か所に同じ「天」が墨書されている。

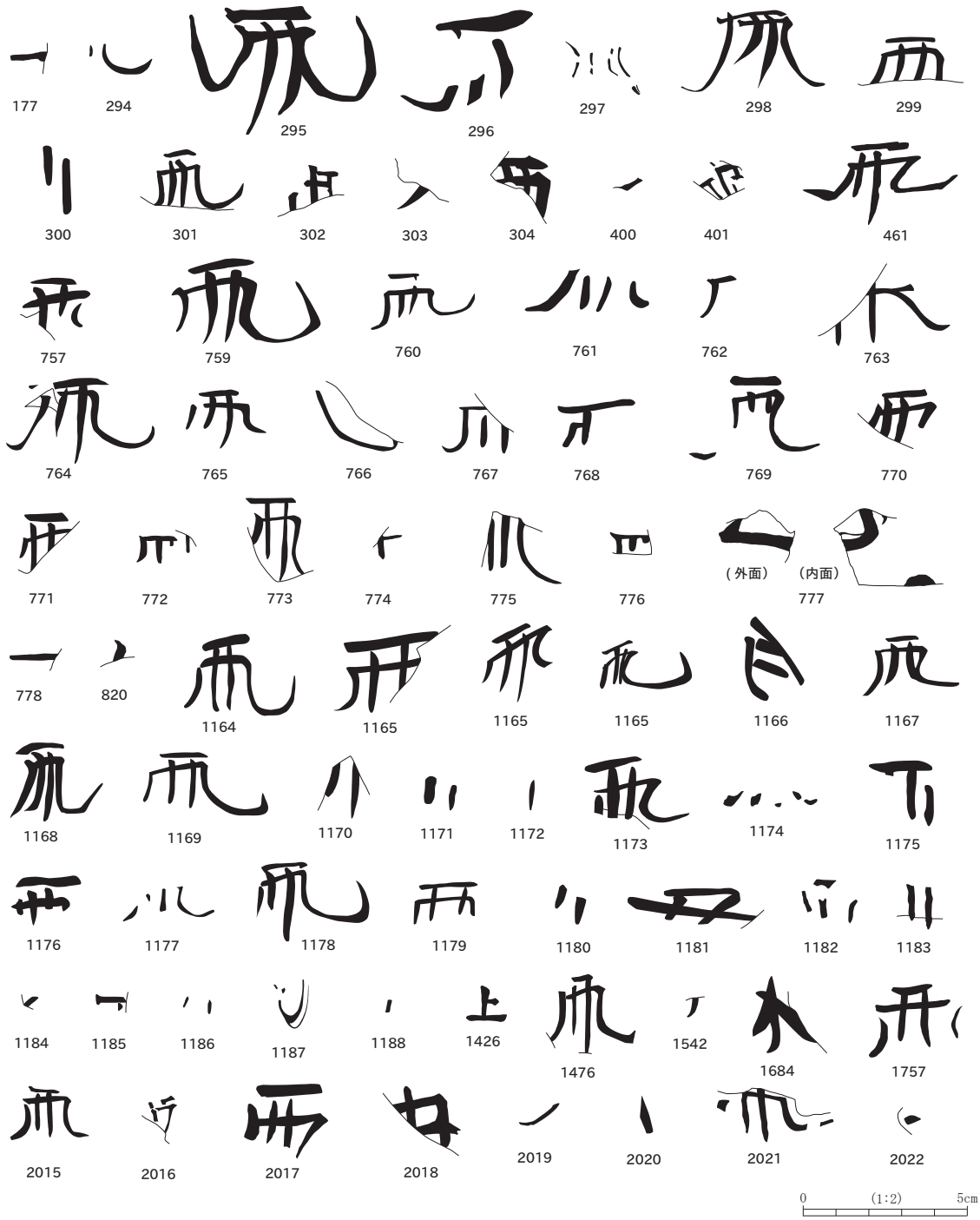
もう一つが体部外面に墨書された時の墨書方向である。461などは正位で墨書されているが、1178のように倒位（逆位）で墨書されたものもある。点数では正位の墨書が22点で倒位の墨書が14点である。

さらに豊富な点数から墨書を行った手（筆記者）の数が推測される。明らかに異なるものを見ても２～３人は確実に識別される。字体の相違等を踏まえると字形変化についても考えなければならないが、大きく字体が変化した様子は看取できない。

Ⅷ層から出土した墨書土器の字体は、これまで“則天文字「天」”と報告されてきたものと同じである。この字体による墨書土器の出土例は、山形県道伝遺跡・福島県御山千軒遺跡・山梨県宮之前第２遺跡の３つである[1)]。いうまでもなく、則天文字「天」と近似するため、これまでこうした報告がなされたと思われる。

しかしながら、Ⅷ層の時期である10世紀前半はもちろん、前述３遺跡の時期である９世紀代でも則天文字「天」の使用例を文献史料上には見いだし難い。こうした則天文字「天」とされる墨書土器の問題点とそれに対する私見は別稿［田中2009］に示しておいたので、詳しくはそちらを参照して頂きたい。この字体が史料上で見いだせるのは蔵中進氏が指摘するとおり、則天文字などの字体を解説した音義や字書などの中であり、則天文字の割注には「古文」と記されている［蔵中1995］（第94・95図参照）。「古文」とは孔子以前の古い書体であることを示し、例えば印章などで使用される篆書体などが該当する。そもそも則天文字「天」も篆書体に基づいて作成したとされており、古文体も則天文字も字体が近似するのは当然と言える［蔵中1995ｂ］。このように字体としては則天文字も古文体の「天」も全く同じなので区別し難いが、平安時代に則天文字「天」が使用された史料がなく、むしろこの文字は単に古い漢字体として認知されていたと考えられるので、墨書土器に見られるこの文字は則天文字ではなく、古文体の漢字として認識しておきたい。

1)　群馬県神人原Ⅱ遺跡の墨書土器も同じ字体の可能性があるが、この墨書土器では第２画目に当たる部分が１画分か２画分か明らかでないため類例として含めなかった。



遺物№	出土位置	グリッド	種別	器種	墨書部位	文字方向	釈文	備考
177	SB1400-P10	9C	土師器	椀	体部外面		判読不明	
294	SD1077	9D	土師器	無台椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
295	SD1077	9D1	土師器	無台椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
296	SD1077	9D1	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
297	SD1077	9D1	土師器	椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
298	SD1077	9D	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
299	SD1077	9D	土師器	無台椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
300	SD1077	9D13	土師器	椀	体部外面		判読不明	
301	SD1077	9C21	土師器	椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
302	SD1077	9C	土師器	椀	体部外面		判読不明	
303	SD1077	8C	土師器	椀	体部外面		判読不明	

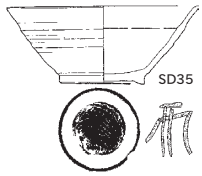
第 97 図　Ⅷ層出土の墨書土器（1）

遺物№	出土位置	グリッド	種別	器種	墨書部位	文字方向	釈文	備考
304	SD1077	9D14	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
400	SK1141	10C	土師器	椀	体部外面		判読不明	
401	SK1141	10C	土師器	椀	体部外面		判読不明	
461	SB1500-P45	7C	土師器	無台椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
757	SD1377	8D9	土師器	無台椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
759	SD1377	8D8	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
760	SD1377	8C23	土師器	無台椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
761	SD1377	7C21	土師器	無台椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
762	SD1377	8D8	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
763	SD1377	8D8	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
764	SD1377	8D8	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
765	SD1377	8E2	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
766	SD1377	8D3	土師器	無台椀	体部外面		判読不明	
767	SD1377	8D8	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
768	SD1377	8D8	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
769	SD1377	8D3	土師器	椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
770	SD1377	8E3	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
771	SD1377	8D8	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
772	SD1377	8D8	土師器	椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
773	SD1377	8D3	土師器	椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
774	SD1377	8D8	土師器	椀	体部外面		判読不明	
775	SD1377	8D8	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
776	SD1377	8D14	土師器	椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
777	SD1377	7D2	土師器	椀	体部内外面		判読不明	
778	SD1377	7D1	土師器	椀	体部外面		判読不明	
820	SD1377	8C12･13･17･18	須恵器	無台杯	底部外面		判読不明	
1164	SK1419	8D	土師器	無台椀	底部外面		則天文字「天」	
1165	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	正位2･逆位1	則天文字「天･天･天」	筆違いの３文字あり
1166	SK1419	8D	土師器	無台椀	底部外面		判読不明	
1167	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
1168	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
1169	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
1170	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面		判読不明	
1171	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面		判読不明	
1172	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面		判読不明	
1173	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
1174	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
1175	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
1176	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
1177	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
1178	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	逆位	則天文字「天」	
1179	SK1419	8D	土師器	無台椀	体部外面	逆位カ	則天文字「天カ」	
1180	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1181	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1182	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
1183	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1184	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1185	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1186	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1187	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1188	SK1419	8D	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1426	SX2001-SE1	12D23	須恵器	有台杯	底部外面		「上」	Ⅸ層遺物と思われる
1476	SK1120	8B25	土師器	無台椀	底部外面		則天文字「天」	
1542	SK1357	8E	土師器	椀	体部外面		判読不明	
1684	SX1104	9D	須恵器	無台杯	底部外面		「木カ」	Ⅸ層遺物と思われる
1757	SD1147	6B19	土師器	無台椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
2015		8D12	土師器	無台椀	体部外面	正位	則天文字「天」	
2016		8D12	土師器	椀	体部外面		判読不明	
2017		8D12	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
2018		8D13	土師器	椀	体部外面		判読不明	
2019		5D20	土師器	椀	体部外面		判読不明	
2020		8C23	土師器	椀	体部外面		判読不明	
2021		8C11	土師器	椀	体部外面	正位カ	則天文字「天カ」	
2022		8C23	土師器	椀	体部外面		判読不明	

第 98 図　Ⅷ層出土の墨書土器（2）

3　御山千軒遺跡

2　道伝遺跡



墨書土器（則天文字「天」）

遺跡位置	遺跡名	所在地	引用文献
1	西部遺跡	新潟県村上市	本書
2	道伝遺跡	山形県東置賜郡川西町	藤田・月山1984
3	御山千軒遺跡	福島県福島市	木本1983

第99図　則天文字「天」の分布

則天文字「天」と言われる文字には、多様な字体が存在するが、西部遺跡のものは構えの中央を貫通する2本の線が特徴となっている。同様の字形を探すと前述のとおり山形県道伝遺跡（2）［藤田・月山ほか1984］・福島県御山千軒遺跡（3）［木本1983］・山梨県宮ノ前第2遺跡［山下1991］に存在するが、構えを詳細に見ると道伝遺跡・御山千軒遺跡のものは左右非対称であるのに対して、宮ノ前第２遺跡のものは左右対称と明らかに異なる。西部遺跡のものは構えの全体が明らかな16点（295・298・301・461・759・760・764・765・769・1164・1165・1167・1163・1169・1178・2015）のうち、13点が左右非対称で295・298・269の３点が左右対称となる。なお、2015は、土師器無台椀の体部に墨書されているものを立面図として実測しているため左右対称に見えるが実際は左右非対称である。左右対称となるものを見るといずれも構えのハネが大きく開き、295・298では構えを貫通する２本の線が弧を描き、宮ノ前第2遺跡では構えが西部遺跡のものほど開かず、構えを貫通する２本の線も平行する直線となることから、西部遺跡と宮ノ前第２遺跡のものは直接的には関連しないと考えられる。それに対して、道伝遺跡・御山千軒遺跡のものは構えが左右非対称で、大きく開く点が西部遺跡と類似している。道伝遺跡は山形県南部の置賜地域に位置し、SD35のF6層から底面に墨書された須恵器有台杯１点が出土しており、F6層は９世紀第2四半期に当てられている［阿部・水戸1999］。御山千軒遺跡は福島県中通り地方北部に位置し、湿地性遺物包含層L-Ⅶ層から体部外面に墨書された内面黒色土器無台椀１点と遺構外から出土した体部外面に墨書された内面黒色土器有台椀１点があり、内面黒色土器無台椀の出土したL-Ⅶ層は９世紀後半と報告［木本1983］されているが、内面黒色土器有台椀の時期については触れられていない。西部遺跡と道伝遺跡・御山千軒遺跡は地理的に福島県中通りから阿賀北地域に抜けるルート上に近く、時期的には西部遺跡よりも古い9世紀代となる。これらから西部遺跡の則天文字「天」は福島県中通り・山形県置賜地域を経由して拡散してきたと推測したい。

以上、地域間の関係を示唆する遺物について検討した結果、黒色土器有台椀B類・則天文字「天」の墨書は山形県置賜・村山地域から福島県との、土師器台付鉢・土師器羽釜・土師器香炉蓋は山形県置賜・村山地域から宮城県仙台平野及び本遺跡から石川県に至る地域との、筵（むしろ）底の土師器は東北地方との、菱形留め金具は富山県方面との繋がりを示す可能性があり、直接間接は別にして広範囲の地域との関連がうかがえ、その中でも特に東北地方の山形県南部から宮城県仙台平野にかけての地域と比較的強い繋がりを持つ

ようである。地域的な繋がりが本遺跡の工房で生産された品々の供給先を示すとは限らないが、置賜・村山地域を経由し、多賀城へと供給されていたとも考えられ、その可能性は当時の東北地方での元慶の乱後の再建復興などに伴い多くの物資を生産する後方支援を必要としていた社会状況からも推測できる。

5）工房で生産された製品について

本遺跡では、検出遺構や出土遺物から鉄製品の製作及び漆の塗布作業が行われていたことが明らかである。

出土した鉄製品は47点で、内訳は刀子13点、刀子カ2点、釘3点、釘カ4点、釘または鎹1点、釘または未製品1点、鉸具2点、鉄斧1点、鏃1点、丸鑿1点、鎌カ1点、飾り金具1点、紡錘車（円盤部）1点、器種不明品15点である。ただし、椀形鍛冶滓には鉄製品を抱え込むものが存在し、製錬された鉄塊原料に加える故鉄利用が考えられることから上記の製品の中には故鉄として集められたものが含まれる可能性があり、本遺跡で製作されたと結論づけることができない（「第Ⅵ章２」参照）。また、上下に重層する二段椀形鍛冶滓の中には製錬鍛冶～鍛錬鍛冶の連続作業で生じたと考えられるものがあり（「第Ⅵ章２」参照）、大量生産ならば製錬と鍛錬の工程を分けた方が効率的なことから鉄製品の生産は少量であったと考えられる。

出土した漆製品は椀が２点、板状製品１点、漆塗布作業に関わる道具（以下、「漆関連遺物」とする）は漆紙が16点・漆パレットが24点・漆容器が１点で、それぞれ出土量は少なく、工房内での主体的な作業とは考えられない。また、漆を塗ったものについても、それを推定する資料の出土がなく特定することができない状況である。

以上のように生産した鉄製品や漆を塗布したものについては、それを想定させる資料が少なく特定に至っていないが、以下では遺構や遺物の状況から推測される生産の様子やそこから考えられる生産品について、可能性も含め若干触れることとする。

工房での作業は、鍛冶関連遺物、漆紙や漆パレット、そして製塩土器の出土から多様であったことが推測される。この生産の多様性が出現する要因として、以下の二つを想定した。

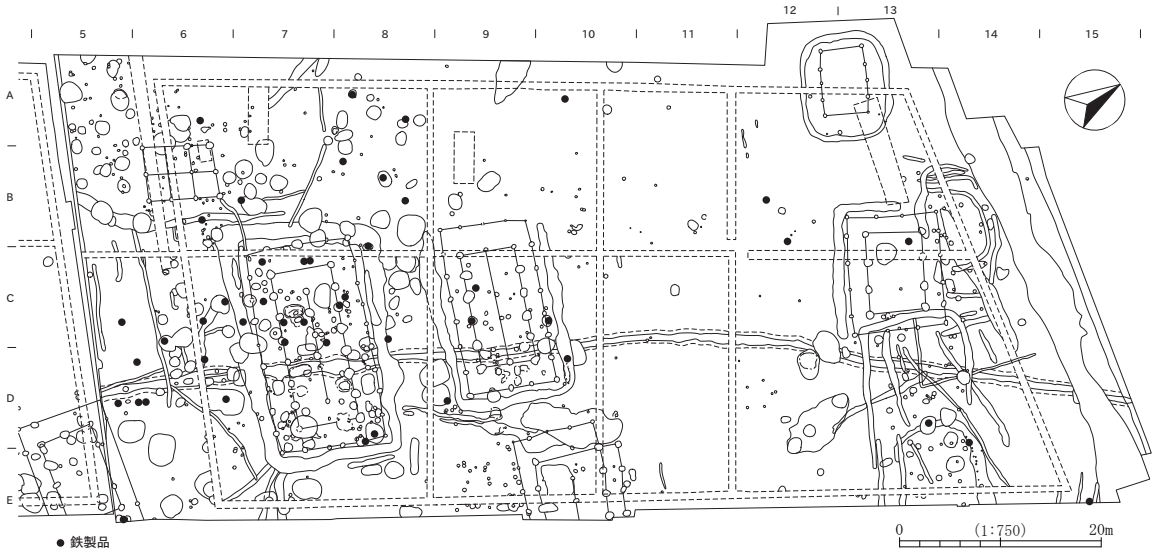
①需要に応じて各種生産を単独に行ったため。

②鉄を用い漆も用いる複合的な製品を生産したため。

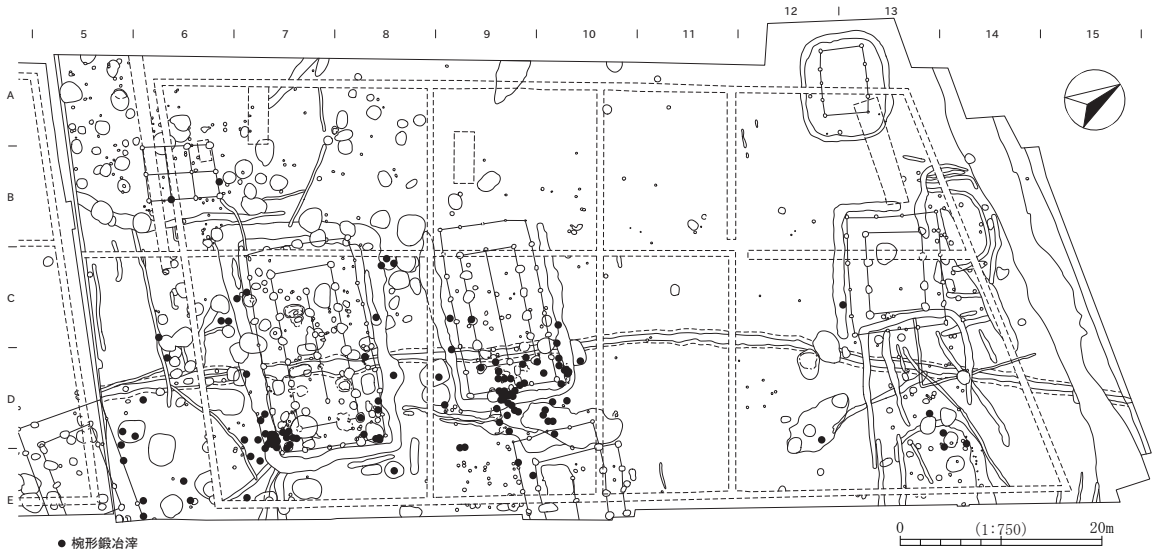
①に関しては、鍛冶は、鉄滓などの鍛冶関連遺物の出土量から鉄製品の生産は少量と考えられ、漆も漆紙16点・漆パレット24点・漆容器１点といったように漆関連遺物は少なく、製品の可能性がある椀2点と板状製品1点が出土しているが、塗装技術から見ると簡素品・中級品・上級品の各種が存在し（「第Ⅵ章３」参照）、特定の品を多量生産した状況は見られない。漆製品は鉄製品同様に生産量が少ないと考えられ、少量の製品を製作するためだけに複数の大型工房を稼動させていることに疑問が生じる。一方②の複合的な製品の製作を想定した場合は、製品の仕上げには複数の部品とそれに伴う多様な作業工程が存在し、各工程の作業は少量で済み、西部遺跡に見られる大型工房群の存在も成立する可能性が出てくる。

では複合的製品とはいったいどのようなものであっただろうか。想像逞しく以下に記してみる。

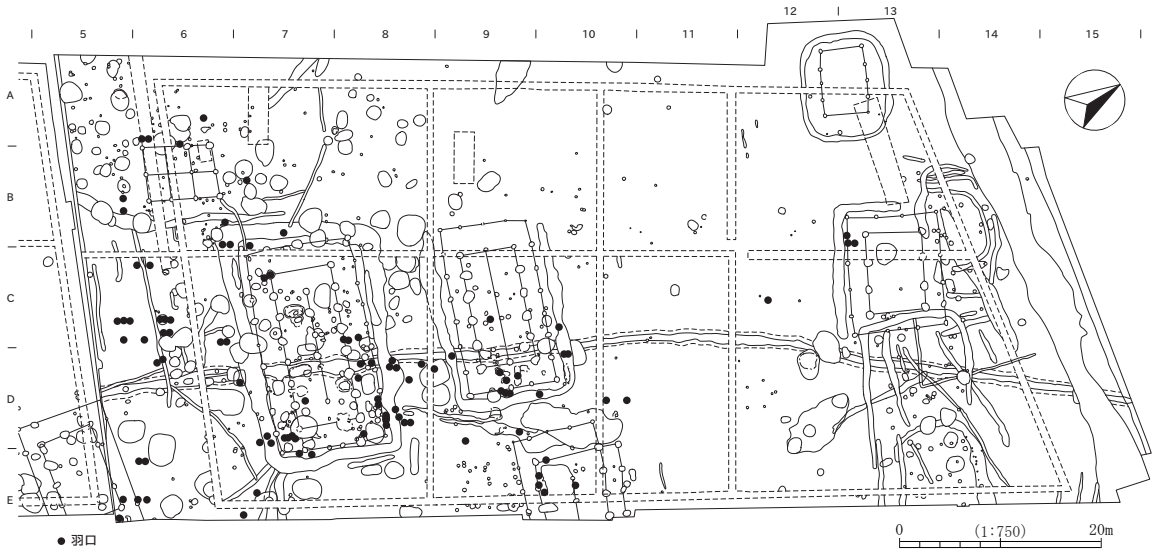
複合的な製品から鉄のみで完成する製品ではなく、木や皮などの有機質の部品が組合わさると仮定すれば、漆は鉄に防錆として塗られた可能性もあるが、有機質の部品も含め製品全体に漆が塗られとも考えられる。これらの前提から想定される製品には、農耕具などは該当せず、武器・武具や馬具といった製品の中に思い当たるものが存在する。さらに本遺跡で２点出土した鉸具を関連付ければ、鞍から吊り下げるた



第 100 図　鉄製品の分布



第 101 図　椀形鍛冶滓の分布



第 102 図　羽口の分布

めの鉄製鋲具が付く皮製の鐙靼（みずお）を持つ、本体が木製の壺鐙などが候補として浮かび上がる。

6）工房群の生産体制について

本遺跡の工房の生産体制について建物群のあり方と遺物の大量廃棄から推測してみたい。

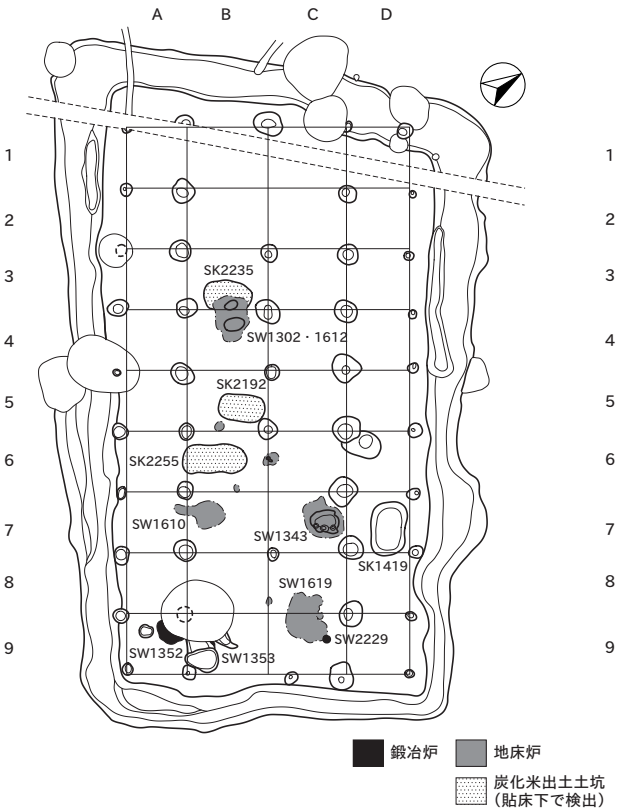
各建物の機能と工房の間取り（第103図）

Ⅷ層からは、掘立柱建物５棟・半打込柱建物２棟を検出した。このほかに建物の存在を推測できるものとしてSD2008・2040・2060・2146・2064がある。これらの溝を建物と推測した理由としては、①いずれの溝も「コ」の字状や「L」の字状に巡り、SB1400・2020の区画溝が全周せず「コ」の字状や「L」字状に巡ることと類似すること。②溝に区画された空間は、最小のSD2064が調査区で最小の建物であるSB2100とほぼ同規模の長軸長7.5m×短軸長3.8m以上で、空間が最大となるSD2008は、長軸長10m以上×短軸長７mと建物を伴う区画溝の空間に近い規模を有していること。③これらの溝は掘立柱建物であるSB2100・2020が並ぶ延長上に分布し、場所を移動しながら建て替えられたように見えること。④検出した建物７棟中４棟に区画溝が存在すること。⑤鍛冶・漆関連遺物は調査区南部において建物内とその周辺に集中し（第100～102・108図）、出土量は少ないがその傾向はSD2008・2040内とその周辺においても見られることが挙げられ、その内部の建物構造としては、遺構の検出状況から地面に角材を設置して土台とした、建物痕跡が残りにくい土台建ち建物［山中2003］が想定される。以上から調査区内には少なくとも掘立柱建物５棟・半打込柱建物２棟・土台建ち建物4棟の計11棟の建物が存在したと推測される。これらの建物は９世紀末から10世紀中葉にかけて西部遺跡Ⅷ層Ⅰ～Ⅱ期後葉にわたり変遷し、一部の建物は継続利用されながらI期に２棟、Ⅱ期前葉に５棟、Ⅱ期中葉に６棟、Ⅱ期後葉に２棟が存在したと考えられる。各期ともに複数の建物が存在し、同時並存する建物は規模や構造の上で相違点が認められ、その相違点に建物の性格が反映されていると考え、その点について検討してみたい。

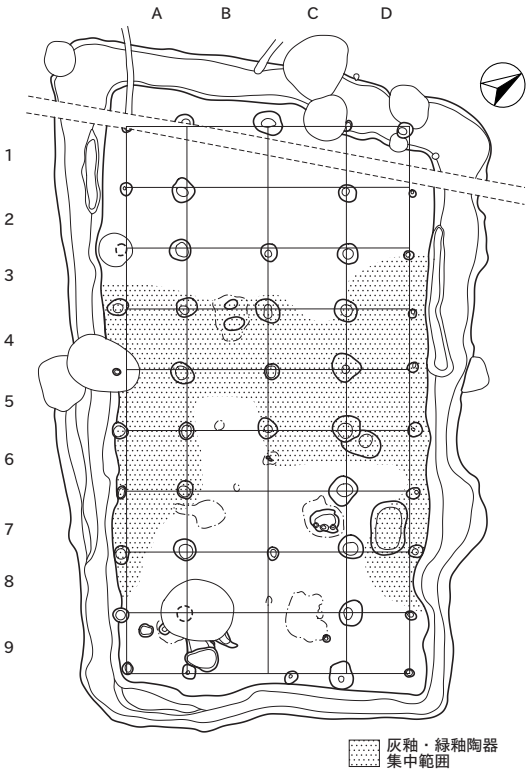
最初に、各建物が工房であるか否かについて検討する。工房とは考え難い建物は、周辺から須恵器の貯蔵具の破片が集中出土する点から倉庫と考えられる総柱建物のSB1683のみで、明らかに工房といえる建物は鍛冶炉を有すSB1400・1500・2020・2200・2258である。このほかの建物は出土遺物から工房の可能性を検討する。SD2008内に推測される建物は同溝内から漆パレットが、近接する周辺遺構から漆紙や漆容器が出土していることから漆作業が行われた可能性があり、これをもって工房と考えたい。SD2040内に推測される建物は、椀形鍛冶滓が少量ながらも集中出土（14D5区）することや内部の床面を覆う土層中に炭化物が多く含まれていることから鍛冶が行われた可能性があり、これをもって工房と考えたい。SB2100と内部に建物の存在が推測されるSD2060・2146、SD2064については工房を推測させる資料は皆無に近く、証明することはできないが非工房的な建物であったと推測しておきたい。

次に、工房が間取り構造から２種類に分けられることを示したい。間取り構造は内部施設及び出土遺物が充実しているSB1500を分析し、その間取りとの比較からほかの建物が同様の間取りを有したか否かを解析する。SB1500の分析に当たり、説明の都合上、柱穴列を基準とする方眼を被せ地区名称とし、各地区の呼称方法は南側の廂から北に向かいA・B…、西側の廂から東に向かい１・2…とし、南西の交点を代表名とする（第103図）。間取り構造は鍛冶炉の配置と鍛冶関連遺物の分布、地床炉の配置、食膳具の分布から把握する。

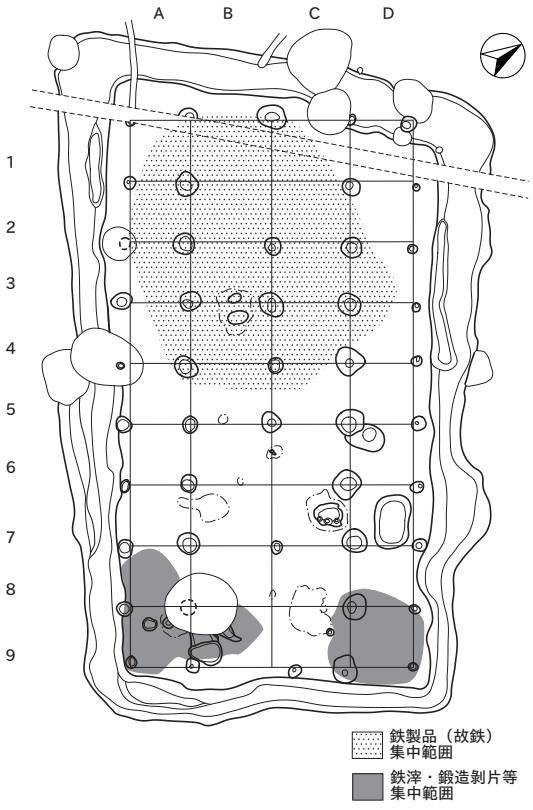
SB1500の鍛冶関連資料には、鍛冶炉本体と鍛冶関連遺物、鉄製品がある。鉄製品は建物内に位置する



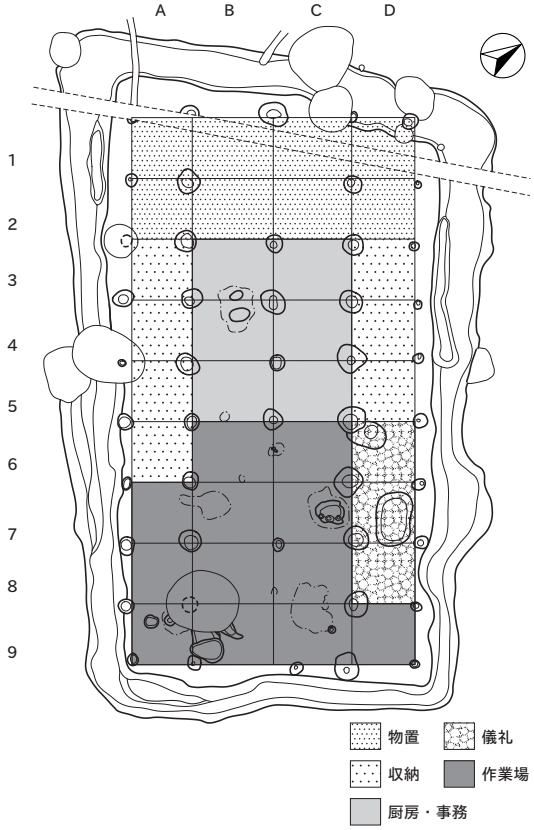
鍛冶炉、地床炉、炭化米出土土坑の位置



灰釉・緑釉陶器の分布



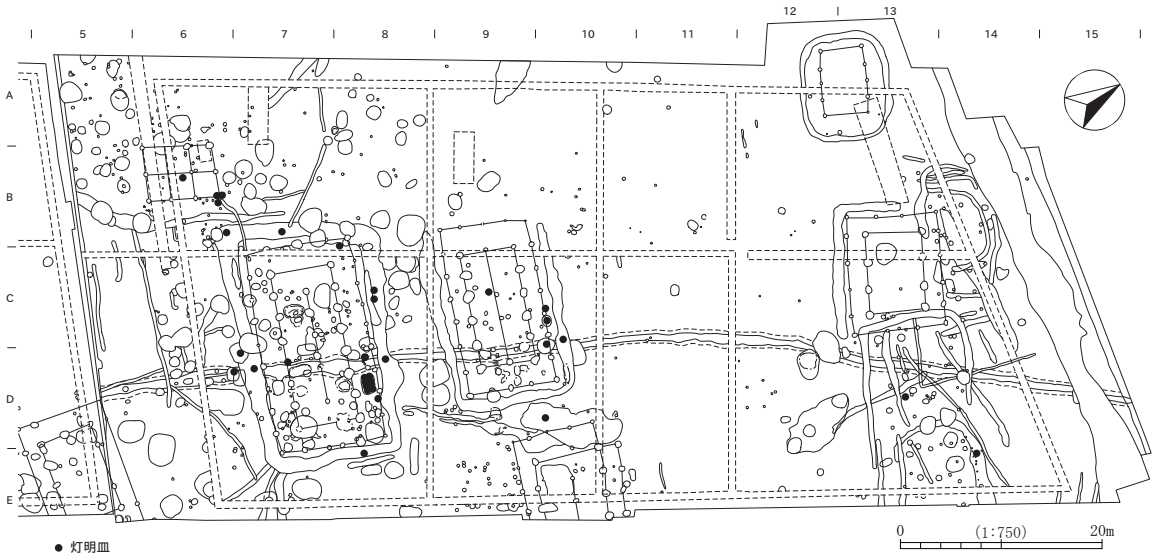
鉄製品（故鉄）、鍛冶関連遺物の分布



間取り構造（推定）

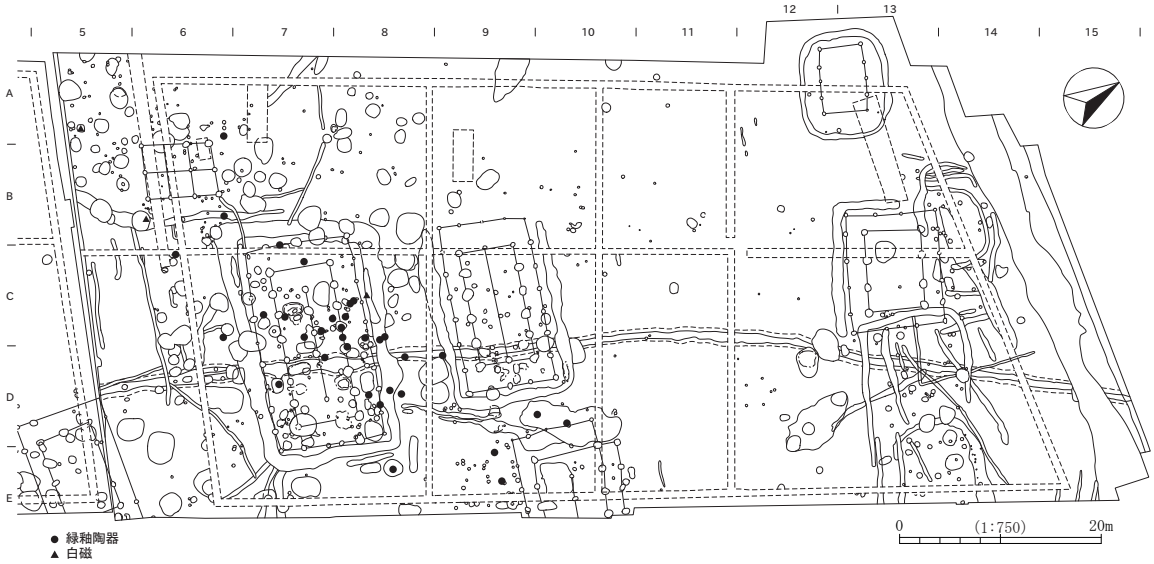
第 103 図　SB1500（工房）の間取り構造模式

P12、SK1360・1548、整地層、床面を覆う遺物包含層から鋳造鉄片3点、釘5点、刀子2点、鉄板1点、飾金具1点の計12点が出土している。これら鉄製品は製品、生産工具、故鉄の三通りの解釈ができる。製品とした場合、鋳造鉄片は鋳型が出土していないことから製品でないことが明らかで、鉄製品12点中３点とやや多く、鍛造の鉄製品はいずれも小破片であり、完成した製品は供給され、遺構内に残る確率が少ないことから考え難い。生産工具とした場合も鋳造鉄片・飾金具といった明らかに工具ではない鉄製品が12点中４点もあり、鍛冶炉や漆関連遺物が建物東側に集中し、鉄製品は西側に集中するなど分布が不一致であることから考え難い。では故鉄とした場合はどうであろうか。SK2119から出土した椀形鍛冶滓（1362）の科学分析の結果、鍛造を受けた未製品ないし鉄器片を抱え込んでいると推測され、新鉄とともに故鉄も原材料に使用された可能性が指摘（「第Ⅵ章２」参照）されている。故鉄は廃棄された鉄製品や生産時の失敗品など鉄ならば種類を問わずに利用されることから鋳造鉄製品が含まれても良く、原材料としての屑鉄ならば完成品のように持ち出されることなく建物内に残置されてもおかしくないことからSB1500内から出土した鉄製品に故鉄が多く含まれていると考えたい。

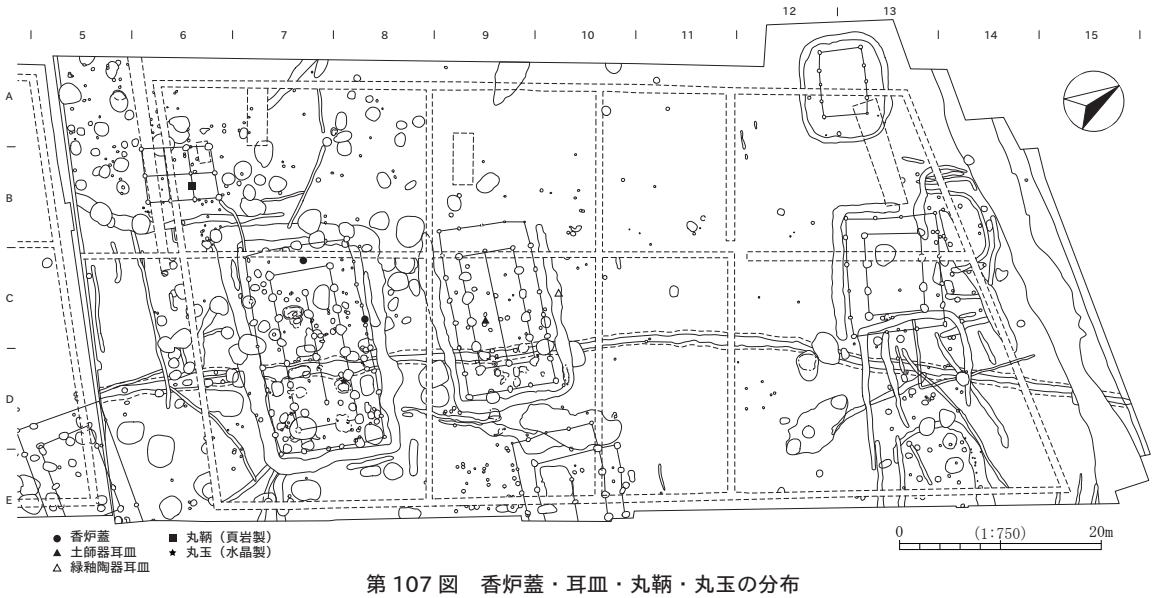


第 104 図　灯明皿の分布

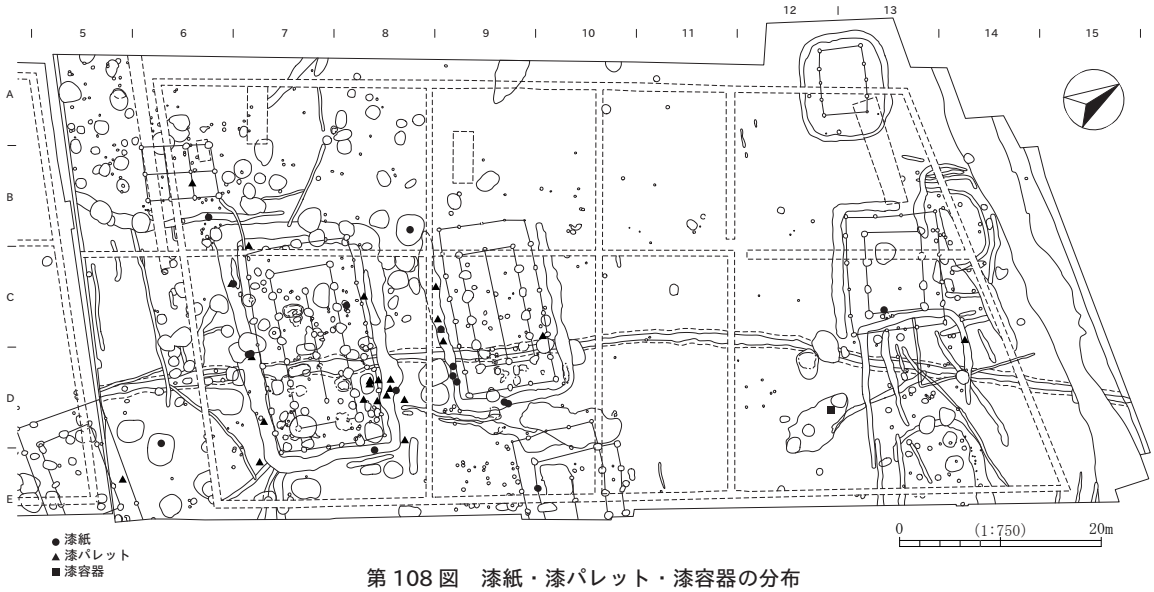
第 105 図　灰釉陶器の分布



第 106 図　緑釉陶器・白磁の分布



第 107 図　香炉蓋・耳皿・丸鞆・丸玉の分布



第 108 図　漆紙・漆パレット・漆容器の分布

鍛冶炉の配置状況はA・B・C9区に各1基の計3基が存在し、建物の東端に偏在する。椀形鍛冶滓は鍛冶炉SW1352があるA9区に、羽口はA9区及びD8・9区とD5・6区に集中する。A9区の椀形鍛冶滓と羽口の集中は鍛冶炉SW1352の操業に伴う投棄と判断され、D8・9区の羽口の集中はC9区に位置するSW2229に伴う可能性が考えられる。D5・6区の羽口の集中は周辺に鍛冶炉もなく、鍛冶に伴う廃棄物も少ないことから作業の場を示していないと考えられる。以上から鍛冶は建物東端のA～D9区周辺を作業場としていたと推測される。鉄製品の分布はA～D5区より西方、つまり建物内部の西半部に多く、微量出土した東半部とは対照的である。西半部への偏在的分布は故鉄として鉄製品が集められ、その置き場が建物の西半部のいずれかに存在したためで、東部は鍛冶という故鉄を消費する場であるために少ないと推測したい。以上、鍛冶関連資料から建物東端に作業場が、建物西半部のいずれかに鍛冶処理前の新鉄や故鉄などの原材料の置場が存在したと想定される。

地床炉は、身舎内のB・C3～9区に存在し、SW1302を除くと、すべて身舎東半部のB・C6～8区に集中する。SW1302は炭化米が多量に出土したSK2192・2235・2255に挟まれる位置関係から調理などに使用されたと推測されるが、ほかの地床炉は鍛冶関連資料から推測される作業場が身舎東部となることから、これらに関わる何らかの作業に伴う可能性がある。

食膳具は、灰釉陶器・緑釉陶器・白磁などの施釉陶器や土師器無台椀が建物内から多量に出土している。これらの遺物は遺構床面から覆土にかけて出土しており、その分布には量の粗密や器種の偏りが見られ、最終段階の遺棄や廃棄状況を反映している可能性が高いと考えられる。そこで食膳具が普段収納されていた空間を推測してみることとする。まず、灰釉陶器・緑釉陶器・白磁などの施釉陶器は、南側の入側柱と側柱の間（A3～7区）から入側柱に囲まれた空間のほぼ中央部（B・C3～5区）を経由し、北側の入側柱と側柱の間（D3～8区）に至る「コ」の字状の範囲に集中して分布している。特に密集する部分は北側の入側柱と側柱の間の中央やや北寄り（D3・4区）で、ここが主たる収納空間と想定され、次に集中する南側の入側柱と側柱の間が副次的な収納区間と推測される。土師器無台椀は施釉陶器の分布と類似した傾向が見られるが、特に密集している部分は北側の入側柱と側柱に挟まれた空間の南側（D7区）に位置するSK1419周辺で、ここからは則天文字「天」の墨書土器が多量に出土したことから儀礼に伴う廃棄土坑と想定され、ここを収納空間とは言えず、これを除いた分布状況から本来の収納空間は施釉陶器と同じであったと考えられる。これらから食膳具の主たる収納空間は北側の入側柱と側柱に挟まれた空間にあり、副次的に南側入り側柱と側柱に挟まれた空間を利用していると推測される。そして、入側柱に囲まれた空間内（B・C3～5区）は食膳具の収納空間に挟まれることから厨房的要素を含む空間が予想され、この点については同地区内のSK2192・2235及び同地区に接して位置するSK2255から多量のイネの胚乳・穎の種実遺体や穎珪酸体の灰像が検出されていること（「第Ⅵ章1」参照）、地床炉SW1302が存在することなどからも支持される。また、この空間は工房の長となる人間の居場所に向いていると思え、事務所的要素も含んでいると想像する。

鍛冶関連資料・地床炉・食膳具から見たSB1500の間取り構造は、建物東半部に作業空間、西半部中央寄りに厨房謙事務空間、西半部西側に物置場が存在したと推測される。

次にSB1500とほかの建物を比較し、間取りの差異を検討する。SB1400は鍛冶関連資料と地床炉が建物東半部に集中し作業場となり、西半部の中央寄りは土師器無台椀が集中する傾向が見られることから収納空間と厨房謙事務所的な場、西半部西側は遺物の出土が少ないことから物置場が推測され、SB1500と同じ間取りを持っていると考えられる。

SB2258は、建物の東西両側に鍛冶炉が存在し、建物全体を作業場として利用していると考えられ、同様にSB2200も建物全体を作業場とする可能性がある。SB2200は建物東部が調査区外となるため詳細不明だが、鍛冶炉を西側から検出している。本遺跡における鍛冶炉の位置は建物の東側に存在する例が多く、本建物もまた調査区外となる建物東部にSB2258同様、鍛冶炉が存在する可能性があり、このことから建物全体を作業場としていたSB2258と間取り構造は一致すると考えられる。なお、この建物全体を作業場とする間取りに厨房や事務的な空間がなかったのかという点に関しては、未分化あるいは矮小化した形態で存在したと推測しておく。

SB2020は、建物東部が鍛冶炉の存在から作業場に属していたことが明らかであるが、作業場の範囲を含めた間取り構造の詳細は不明である。同様に工房建物が存在したと推測されるSD2008・2040も間取り構造を示す資料がなく不明である。

以上、工房の間取り構造は、作業場＋厨房・事務＋物置場と明確に分化する間取り、作業場を主とし、そのほかの空間が未分化あるいは矮小化した間取りの２種類の存在が予想され、前者はSB1500・1400が、後者はSB2258・2200が該当する。そのほかの建物の間取りに関しては不明であるが、SB1500・1400よりも規模の小さな建物なので、間取り構造が未分化であった可能性が想像できる。

工房の階層性と工人組織

本遺跡の各工房は、建物構造と規模・間取り、そして伴出遺物の面から同一とは言えず、そこに階層性を見いだすことも可能である。規模・内容を異にする工房が複数同時に存在したと推測されることから、工房群を運営する工人組織もまた階層化していたと言えよう。

工房の建物構造は、掘立柱建物と半打込柱建物、推測される土台建ち柱建物の3種類の構造が見られ、各構造の規模を比較し、階層性を整理してみたい。規模の比較に当たって次の基準を用いる。掘立柱建物と半打込柱建物との間では建物規模を直接比較し、規模の基準としては桁行が調査区外に伸びるものがあるため建物梁行長とする。土台建ち建物としたものは建物の存在が推測されるだけで、建物自体の規模の比較ができないことから掘立柱・半打込建物との比較は溝で区画された内部の空間の規模で行う。掘立柱建物の梁行長は最大のSB1500で10.8m、最小のSB2258は8.7mで、半打込柱建物の梁行長は最大のSB2200で10m、最小のSB2020は8.9mを測り、両者の間に大きな差はなく、構造の差は工房の階層差ではなく別要因によるものと思われる。その要因を考える上で、珪藻分析の結果が注目される。Ⅷ層上部は陸生珪藻が60％、水生珪藻が40％で混在し、陸生珪藻が多く洪水後の乾燥化を示すとされ、Ⅷ層遺構で最も古いSD2127の覆土中には淡水域に生息する水生珪藻が全体の約80％を占め（「第Ⅵ章１」参照）、Ⅷ層I期は後続時期に比較して地盤は湿潤で緩い状態であったと推測される。その結果、掘立柱の建築を選択できず、半打込柱建物の建築になり、その後、地盤の乾燥化が進み、Ⅱ期前葉以降の掘立柱建物の建築へと移行したと考えられないだろうか。土台建ち建物は桁行方向となる長軸長が遺構の重複から推測が難しく、溝で区画された内部空間の短軸長（梁行方向）で比較するとSD2008・2040は７mを測り、建物の梁行はそれ以下となるため梁行8.7m以上となる掘立柱建物と半打込柱建物のほうが大きくなる。建物構造と規模の差は土台建ち建物が規模の面で掘立柱建物と半打込柱建物よりも小さく、建物が小さくなることから柱材の径も細いと推測され、径30cmの柱の打ち込みや柱穴を掘って建てる労力からすると角材を土台とし、掘立柱や半打込柱よりも細い柱を建てる方が簡易的に思え、掘立柱建物と半打込柱建物が上位に、土台建ち建物が下位になると考えておきたい。

工房の階層が上位に属す掘立柱建物・半打込柱建物は、間取りにより細分できる。間取りは前節で述べたように、作業場＋厨房・事務＋物置場が間取り分化するタイプと間取り未分化の作業場タイプの２類型が存在し、前者は間取りが複雑化し、規模が後者よりも相対的に大きいことから前者が優位とすることができる。

以上の観点から工房の階層をまとめると、上位の階層から、掘立柱建物＋間取り分化タイプ→掘立柱建物あるいは半打込柱建物＋間取り未分化タイプ→土台建ち建物という順序で並べることができる。さらに最終段階であるⅡ期後葉においては、遺物から作業場＋厨房・事務＋物置場タイプであるSB1400とSB1500を分けることができ、SB1500は白磁・緑釉陶器・灰釉陶器などの施釉陶磁器や特殊な遺物が多数出土しているのに対して、SB1400は緑釉陶器と灰釉陶器や特殊な遺物が少数であることから（第105・106図）、SB1500はSB1400に比較して優位であることが明らかで、建物規模が異なることから両者の関係は創建期のⅡ期前葉から継続していると思われる。

次に上記の工房建物に見られる階層から建物が最も充実するⅡ期中葉における構成を把握し、そこに反映された工人集団の組織構成を考えてみたい。Ⅱ期中葉の工房は掘立柱で間取り分化する建物、掘立柱で間取り未分化の建物、土台建ち建物の３種が存在する。掘立柱で間取り分化する建物はSB1500とSB1400があり、前述したように施釉陶器により前者が後者よりも優位で、その次に掘立柱で間取り未分化のSB2258、最下位にSD2040に推測される土台建ち建物となる。遺構別に見ると、上位からSB1500→SB1400→SB2258→SD2040の順で、計４棟で構成される。工人組織を考えると、４棟（以上）の工房群をまとめる責任者（別当に相当か）が最低1人、各工房の責任者（主預に相当か）が４人（以上）、そして人数は不明だが各工房の職人（雑工）といった組織が想定できる。各工房の責任者については、工房の階層性からSB2258がSB1500・1400よりも下位に位置付けられ、工房責任者も組織内において下位であった可能性があり、同様にSD2040の工房責任者はSB2258の責任者よりも下位と想像することもできる。今まで述べた組織は職人集団に限定されるが、大規模な工房群であるから経理事務を行う人間も必要と思われる。ところが、経理事務に必要となる硯は須恵器甕胴部片の転用硯が１点出土したのみで、とても調査区内に経理事務を行う人間がいたとは思えない。これは工房群と別に経理事務を行う建物が存在し、調査区東側の未調査区に存在することを示しているのかもしれない。

以上、本遺跡における工人組織は建物構成から推測すると、かなり組織的で、複雑な構成内容を持つものと判断される。

工房としての大型掘立柱建物の類例について（第109～113図）

大型掘立柱建物の工房は、平城京所用瓦を生産した上人ヶ原遺跡［石井・伊賀ほか1991］や平城京西方官衙付属鍛冶工房跡［花田1989］が知られるが、奈良県以東の工房と推測できる事例を探すと、９世紀後半から10世紀中ごろでは富山県向野池遺跡［折原ほか2006］の鍛冶炉を伴う掘立柱建物が、10世紀後半から12世紀代では神奈川県西ノ谷遺跡［坂本・伊藤ほか1997］の鍛冶炉を伴う掘立柱建物が存在する。さらに、既刊の報告書で豪族屋敷の主屋として取り扱われた掘立柱建物の中にも工房としてとらえることができるものがあり、ここでは上記の遺跡を含めて列挙し、これらの遺跡をとおして本遺跡Ⅷ層の工房について考えてみたい。

掘立柱建物工房の事例

上人ヶ原遺跡（京都府木津川市）は、平城宮所用の瓦を生産していた官営工房と考えられている（第109図）。

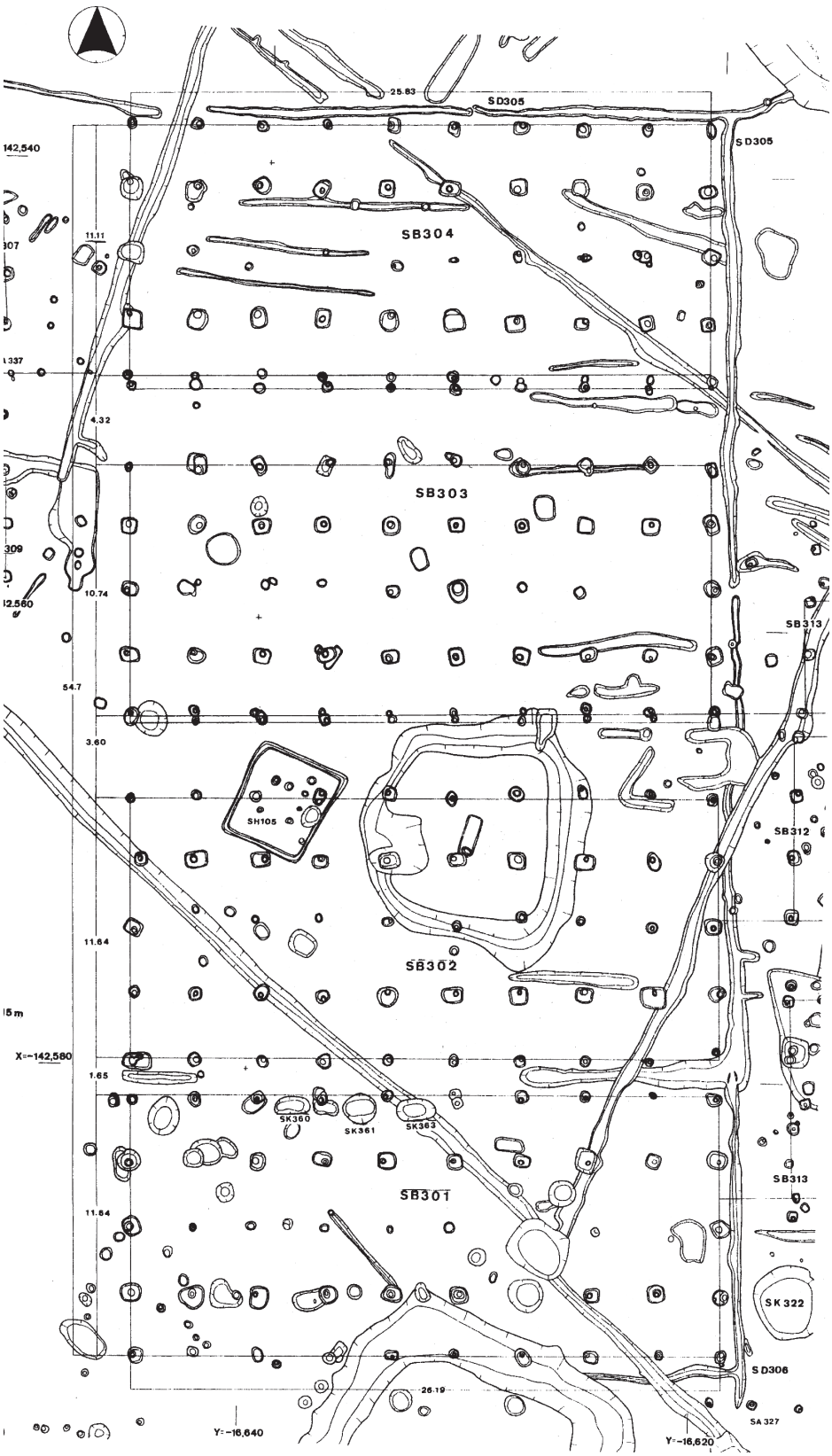
工房は瓦窯群が存在する谷の北方の丘陵頂部に立地する大型掘立柱建物を中心とした遺構群で、中心に大型掘立柱建物工房が軒を接し４棟平行に並び、その周囲に小型掘立柱建物の付属舎９棟が存在している。周辺には一般的な集落を示すような要素が認められない。大型掘立柱建物は南北に廂を持つ桁行９間、梁行４間であるが、建物中央には棟持ち柱状の柱穴が並び、内部には粘土貯めの土坑が存在する。報告者は瓦生産・生瓦の日陰干し・瓦の選別等に使用されたと考えている。

平城宮西方官衙（奈良県奈良市）は、平城宮西方官衙（馬寮）に当たり奈良時代の掘立柱建物（SB6360）工房が検出された（第110図）。工房は桁行長19.3m×梁行長5.2～5.6mの規模を有し、柱穴は桁行９間、梁行２間の配置となるが、梁行の棟持柱が建物中心からずれていることから梁間１間型の可能性がある。内部空間には数基の鍛冶炉と鉄滓が出土した不整形の土坑群が存在する。

向野池遺跡（富山県富山市）からは古代の掘立柱建物工房が検出されている（第110図）。遺構は９世紀末から10世紀中ごろの遺跡で、掘立柱建物を中心とし、そのほかに土坑・焼壁土坑などが存在するが、住居などの集落的要素は皆無である。工房を含む掘立柱建物は７棟存在し、９世紀末から10世紀代にかけて数時期にわたり数棟単位で存在していたと考えられる。工房と推測される建物は大型のSB06とSB03の2棟で、両建物は同時併存あるいは各1棟ずつ存在したと思われ、これに１～数棟の小型建物が付属すると考えられる。SB06は桁行４間（14.95m）、梁行２間（4.75m）で内部から鍛冶炉１基が検出されており、建物周辺の土坑からは鍛造剝片･球状滓･鍛冶滓･羽口などが出土し、建物の性格は工房と推測される。また、同建物に平行して存在する掘立柱建物SB03は、身舎の中央に棟持柱を持つ桁行6間（14.50m）、梁行2間（5.10m）で、南･東･北の3面に廂が付いている。全体としての規模は桁行15.16m、梁行9.00mで、西部遺跡SB1500・1400よりも一回り小さいが、構造的に類似する大型掘立柱建物である。本遺物では鍛冶関連遺物と土器類が出土している。鍛冶関連遺物には羽口・鍛冶滓・鍛造剝片・球状滓などが見られるが、製品・未製品・故鉄となる鉄器類は皆無である。土器類には土師器・須恵器があり、煮炊具が少ないというような傾向はなく、一般的な集落と組成的に変わらない。

西ノ谷遺跡（神奈川県横浜市）では、10世紀後半代から鍛冶生産が開始され、13世紀初頭までほぼ継続して工房が存在している（第110図）。10世紀後半代では竪穴建物の鍛冶工房で、11世紀代から掘立柱建物の工房へと移行、掘立柱建物工房は11世紀後半から大型化、12世紀前～中葉にかけて規模が最大化するとされている。なお、12世紀代の工房には鍛冶炉が検出されていないが、鍛冶工具と鎧の小札等の製品が出土しており、工房であったことは確実である。掘立柱建物の構造は同一場所に複数回の建て替えが行われているため柱穴が多すぎて把握しきれていないが、かなり長大な規模を有し、片面または両面に廂を持つ梁間１間型にも復元できそうである。

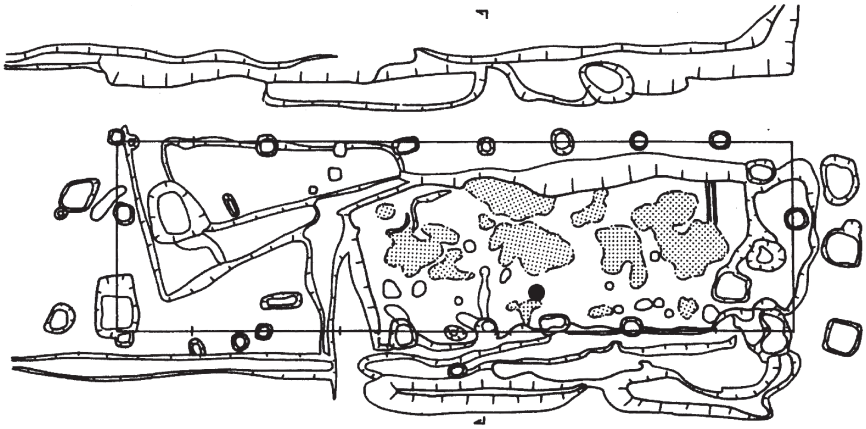
以上のように大型掘立柱建物の工房は類例が少ないが、次のような点から類例は増加すると考えられる。本遺跡の掘立柱建物工房は、仮に鍛冶炉が削平されていたとしたら大型掘立柱建物を人が居住する住居とし、決して多量とは言えない鍛冶関連遺物や、少量の漆塗布に伴う道具類については、遺跡のどこかに鍛冶や漆塗りが行われた小さな作業場があった痕跡と認識していたかもしれない。また、本遺跡同様、向野池遺跡のように工房を示す資料の出土が少ない遺跡があり、鍛冶炉などは地中への掘り込みが少なく、窯壁の一部は地上に造られるという構造上、消失しやすい傾向にあると言え、これまで調査されていたとしても工房として認識されない事例が少なからず存在するものと思われる。そこで、10世紀代の掘立柱建物には工房も存在するという視点で県内を中心に見直すと、上越市新保遺跡［石川ほか2001］・長岡市門新遺跡［田中1995］・上越市江向遺跡［北野2003］に該当しそうな大型掘立柱建物があり、近県



上人ヶ平遺跡 SB301 ～ 304（[石井・伊賀 1991] から）

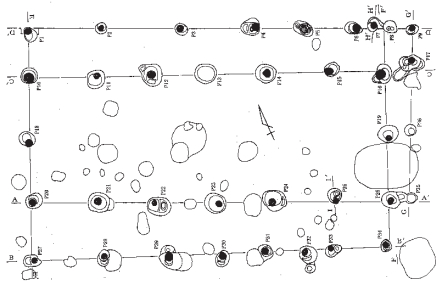
0　（掘立柱建物）　15m（1:300）

第 109 図　大型掘立柱建物工房（1）

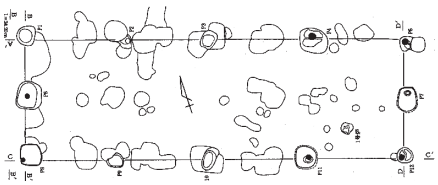


平城宮西方官衙 SB6360（[花田 1989] から）

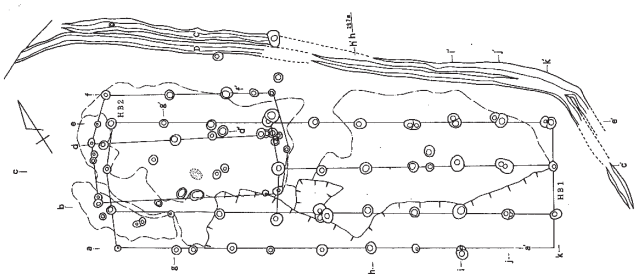
向野池遺跡遺構配置図（[折原ほか 2006] から）



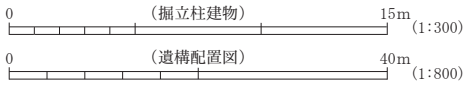
向野池遺跡 SB03（[折原ほか 2006] から）



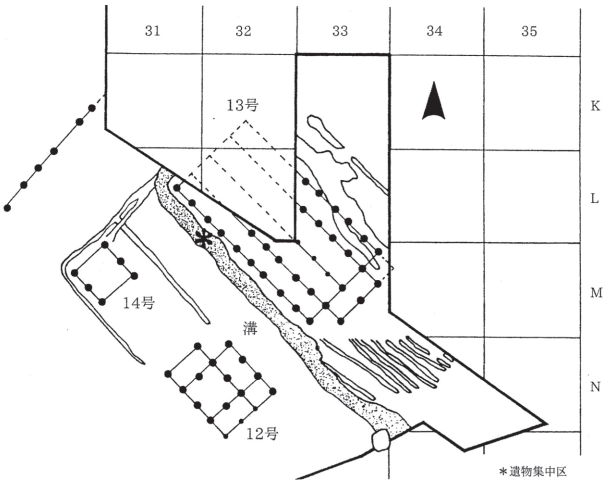
向野池遺跡 SB06（[折原ほか 2006] から）



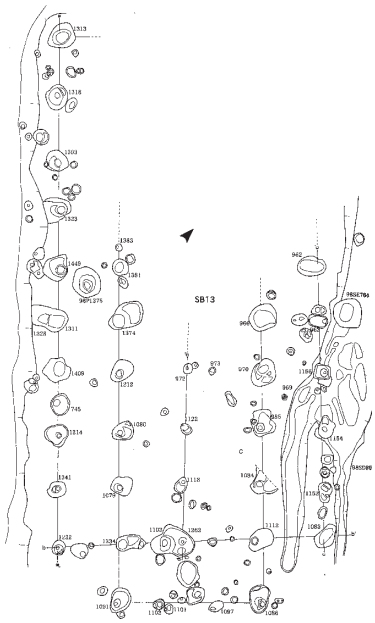
西ノ谷遺跡掘立柱建物址 1・2（[坂本・伊藤ほか 1997] から）



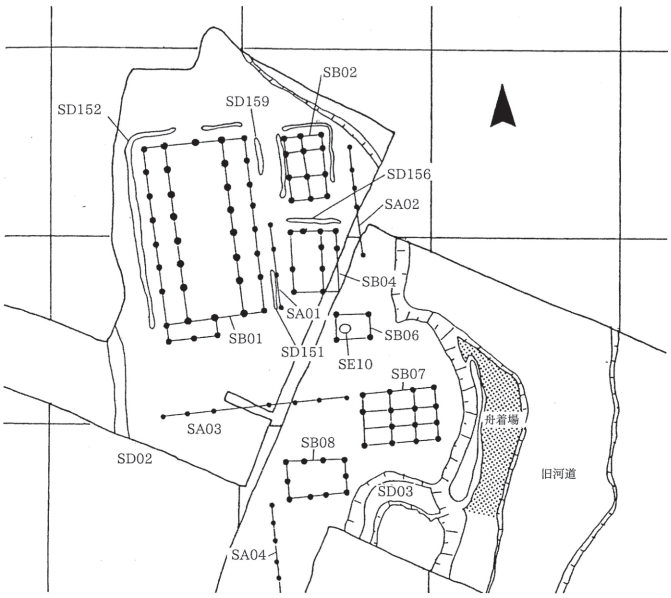
第 110 図　大型掘立柱建物工房（2）



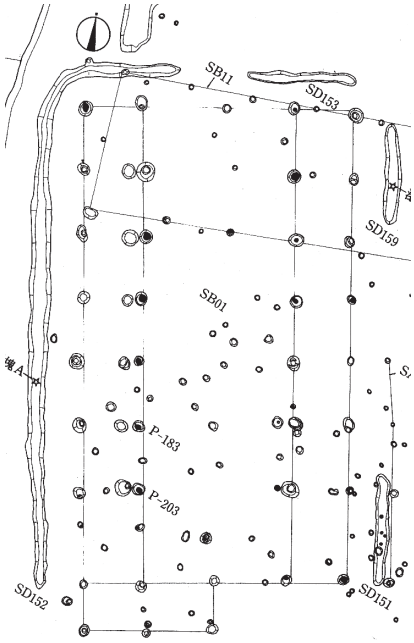
新保遺跡（Ⅱ期）遺構配置図（[石川ほか 2001] から）



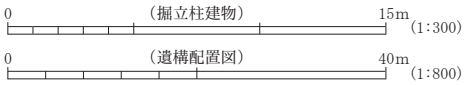
新保遺跡 SB13（[石川ほか 2001] から）



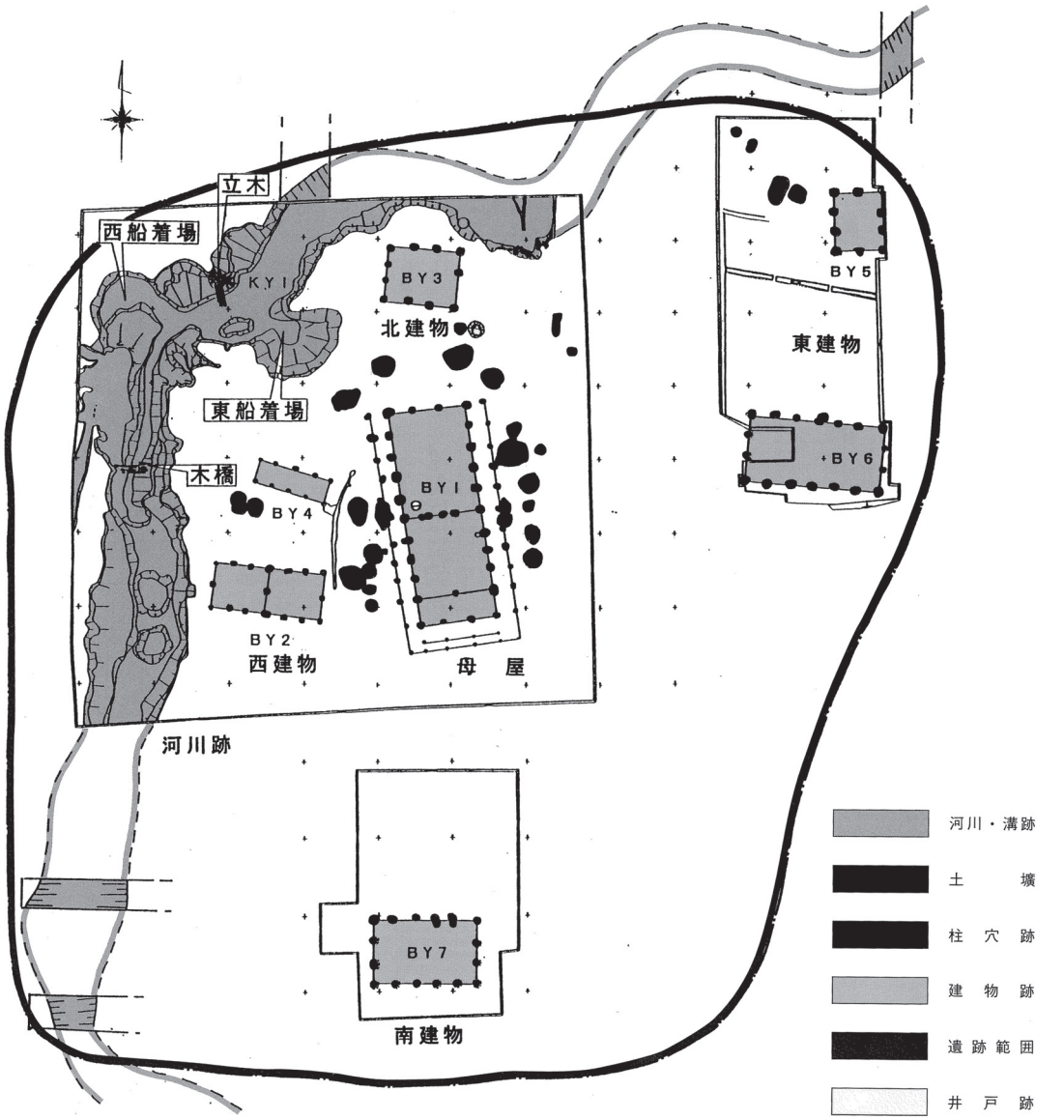
門新遺跡（B 期）遺構配置図（[石川ほか 2001] から）



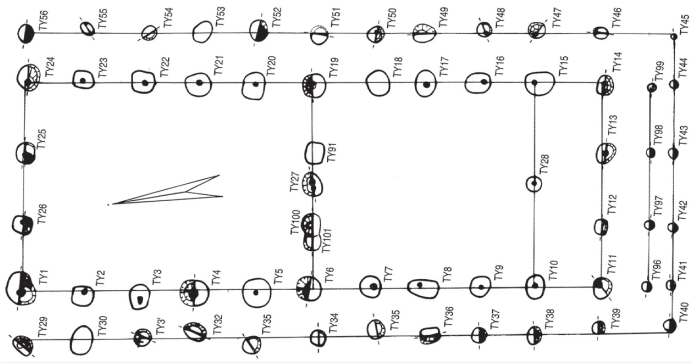
門新遺跡 SB01（[田中 1995] から）



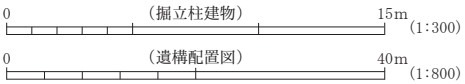
第 111 図　大型工房の可能性のある建物（1）



古志田東遺跡遺構配置図（[手塚 2001] から）



古志田東遺跡 BY1（[手塚 2001] から）



第 112 図　大型工房の可能性のある建物（2）

では山形県古志田東遺跡［手塚2001］に見いだすことができる。これらの遺跡の中には豪族屋敷として大型掘立柱建物を報告した例が多い。

工房の可能性のある大型掘立柱建物の事例

新保遺跡（新潟県上越市）では、古代の掘立柱建物を中心とした遺構群が検出されている（第111図）。時期は９世紀中ごろから後半のⅠ期と９世紀末から10世紀前半のⅡ期に分かれ、Ⅱ期には大型掘立柱建物SB13が存在し、このほかに５棟の掘立柱建物が検出されている。報告者は大型掘立柱建物SB13を門新遺跡の建物構成との類似から開発領主の居宅主屋としてとらえている。

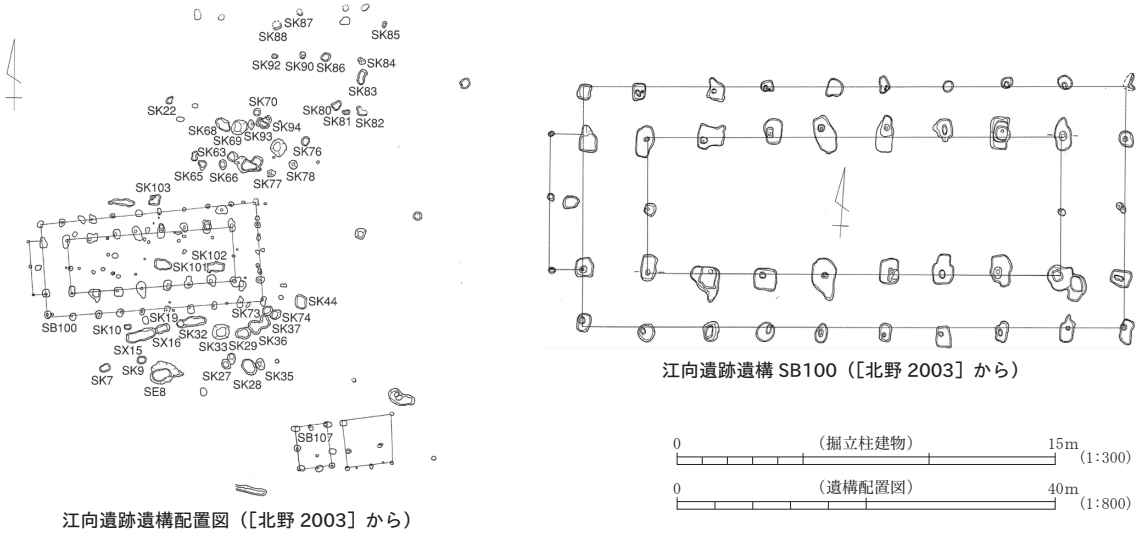
SB13は遺跡内で最大の建物で、身舎は桁行９間、梁行２間の北東･南東･南西の３面に１間の廂を持ち、全体は桁行10間（22.5m）、梁行４間（10.7m）と報告されているが、梁行の真中の柱を見ると両側の柱よりも浅いことから北東と南東に廂を持つ梁間１間型の可能性も考えられ、その場合は西部遺跡の大型建物の構造に類似することとなる。この建物内からは鍛冶炉などの工房を示す施設は検出されていないが、建物に接する南方の32・33N区（SB12が存在）を中心とした平安時代の包含層から総重量13.5kgもの鉄滓が、そしてSB13を囲む98SD1000・98SD899と接するSB12から椀形鍛冶滓が出土している。SB13を挟む形で鍛冶関連遺物が出土し、SB13に鍛冶炉が伴っていたとしてもおかしくない状況と考えられる。

門新遺跡（新潟県長岡市）では、10世紀代前半の大型掘立柱建物SB01を中心とし、掘立柱建物･区画溝･土坑・船着き場などの遺構群が検出されており（第111図）、報告者は遺跡を米・太刀の請求に関わる漆紙文書の出土から開発領主の居宅とし、SB01をその主屋ととらえている。

SB01は遺跡内で最大の建物で、身舎が桁行５間（19m）、梁行2間（６m）となり、東西２面に１間（2.5m）の廂を持つと報告されているが、建物北端の梁行中央の柱は建物の中心から東側に60cmほどずれており、建物南端の梁行中央の柱は建物のほぼ真中にあり、両者を結ぶと建物の平面に対して棟が斜め方向となり構造的におかしくなる。SB01の柱でない可能性もあることから東西両端の桁行1間の外側の柱を側柱、内側の柱を入側柱とする梁間１間型とすることもでき、その場合は本遺跡の大型建物に構造的に類似することになる。この建物内からは鍛冶炉などの工房を示す諸施設が検出されていないが、同建物を挟む形で存在する区画溝であるSD152・SD159から漆紙文書が出土しており、SB01から廃棄されたとも考えられる。漆紙文書は９点出土しており、その内の４点が径11～18cmの円形であることから漆容器は小さく、漆製品製作用と考えられ、漆工房の存在を推測させる。さらに報告書においてSB02はその内部に位置するSK242と同建物区画溝に鍛冶関連遺物が集中することから鍛冶工房としてとらえられているが、総柱建物という点から高床を想定した場合、鍛冶炉が伴わない可能性があり、近接するSB01からの廃棄も推測可能で、SB01で鍛冶も行われていた可能性を考慮すべきと考える。

古志田東遺跡（山形県米沢市）は、９世紀後半から10世紀初頭の遺跡で、船着場と掘立柱建物７棟、土坑が検出されており（第112図）、報告者は大型掘立柱建物であるBY1を豪族屋敷主屋としてとらえている。

BY1は遺跡内で中心となる建物で、身舎は桁行10間（23.8m）、梁行３間（8.6m）となり、３面に１間の廂を持ち、梁行が３間となることから在来型と律令形の折衷的な建物構造［宮本2003］と言える。BY1の北～西方10～20mには船着場が設けられた流路KY1があり、そこから挽物や木製鐙の未製品が出土し、木製品工房の存在が推測されているが、調査区内における工房の所在は明らかとなっていない。BY1の周囲には建物を避けるかたちで多量の焼土や炭化材を含む土坑が集中しており、西部遺跡や向野池遺跡の大型工房と土坑の関係にも近似することからBY1を工房ととらえることもできるのではなかろうか。



第 113 図　土坑群を伴う大型掘立柱建物

土坑群を伴う大型掘立柱建物の事例

大型掘立柱建物の存在する遺跡の中で、西部遺跡・向野池遺跡・古志田遺跡のように建物周辺に土坑が集中して存在する遺跡として江向遺跡が存在する。

江向遺跡（新潟県上越市）では、10世紀代前半から中ごろの大型掘立柱建物SB100を中心に掘立柱建物３棟と多数の土坑が検出されており（第113図）、報告者は門新遺跡と建物構成が類似することと「高有私印」の青銅印の出土から開発領主層の存在を指摘している。

SB100は遺跡内で中心となる建物で、桁行７間（17.4m）、梁行２間（5.7～6.0m）、４面に１間の廂を持つと報告されているが、身舎とされる部分の東西両端の梁行は、中央の柱がその両側の柱よりも細いことか棟持柱となり、建物両端の梁行は内部の梁行と柱間距離が一致することから桁行９間の梁間１間型とも推測され、その場合は西部遺跡の大型建物の構造に類似することとなる。この建物内からは鍛冶炉などの工房を示す施設や遺物は検出されていないが、建物周囲には多量の炭化物を含む土坑が多数ある。正式報告前なので土坑の詳細については明らかでないが、建物を避けるように建物周囲に分布することから建物と土坑は同時に存在したと見ることもできる。西部遺跡や向野池遺跡では大型工房建物の周囲に炭化物や鍛冶関連遺物を廃棄した土坑が集中する傾向が見られ、江向遺跡における大型建物と土坑との関係に近似し、多量の炭化物を工房の廃棄物とする考えも成立するのではないだろうか。また、SB100の東方９ｍから「高有私印」の青銅印が出土しており、この建物が私的所有物であったと考えられている。

上記の遺跡は開発領主や豪族屋敷の経営拠点と推測されているが、前述のように少ないながらも工房の可能性を示唆するような資料が抽出できる。平城宮に関わる2遺跡以外の前掲の遺跡を工房とした場合、共通する点は9世紀後半以降で、工房と付属施設で構成され、建物は梁間１間型の可能性が高いものが多く、土器類は食膳具の占める割合が多いことなどが挙げられる。

大型掘立柱建物工房は、畿内において8世紀では平城宮関連の瓦工房や鍛冶工房が認められ、官衙関連の単一作業が行われた専用工房として存在しているが、畿内以東においては10世紀代以降の事例が多く、作業は鍛冶・漆塗り・木製品加工など多様であったと考えられる。また、県内の前掲遺跡を工房とした場合、越後国の１郡に１～数か所に存在していた可能性があり、そうすると各工房は郡司クラス以下の豪族

が請け負っていたという見方も成り立つ。ところが、新保遺跡・門新遺跡・江向遺跡の３遺跡は、遺跡全体を調査したとは言えないが、各遺跡１棟の存在であるのに対して、西部遺跡では最大となる時期で同時併存する工房が４棟推測され、その差は歴然としている。前者３遺跡が郡司クラス以下の豪族ならば、西部遺跡は更に上位の階層の人が運営に携わっていたとも考えることができる。

大量遺物廃棄について

本遺跡では、SB1400の区画溝SD1077と内部施設SK1141、SB1500の区画溝SD1377と内部施設SK1419から土師器無台椀を主体とする大量の遺物が出土しており、この大量廃棄をとおして生産主体者を考えてみたい。

SD1077とSD1377の出土遺物は多量で多種類に及ぶが、出土状況には規則性は見られず、屋外への廃棄行為の結果と考えられる。また、SK1411・1419には多量の遺物が乱雑に詰め込まれ、遺物の一部が土坑から溢れるような状況であることから土坑は開口したまま放棄されていると考えられ、これらを埋納とは言い難く、屋内における廃棄行為と推測される。これらは出土状況から廃棄となるが、土師器無台椀を主とする組成とその量は、柳御所などのような中世の宴会に使用された中世土師質土器の多量出土を想起させる。食膳形態の大量廃棄＝宴会後の廃棄行為であったという考え［飯村2008］に従うと、西部遺跡では工房において宴会が行われていたことになり、宴会後は使用した器を建物内部の土坑や区画溝に廃棄するなど乱雑な後片付けが行われたこととなる。宴会が行われたと考えた場合、いつの宴会に使用された遺物群なのかという点が問題となるが、建物建設に伴う宴会であるならば建設当初から汚れたままで後片付けをしないとは思えず、各遺構の出土遺物には時期差が見られ遺構廃絶時の遺棄遺物だけでないことから建物が機能した期間で執り行われた何回かの廃棄行為の累積を示すものと考えられる。

次に西部遺跡Ⅷ層の工房群における宴会の主催者について宴会後の片付けをとおして考えてみたい。SB1500とSB1400に見られる宴会の後片付けは、宴会場内及びその周辺に使用したものを廃棄するという乱雑さで、後日、宴会に参加していない者が来訪したとしたら宴会の存在を容易に知ることができたと想像される。当時宴会は何かにつけて官民問わず盛んに行われていたらしく、過度の酒宴や群飲を禁止する貞観8（866）年・寛平5（893）年・昌泰3（900）年などの官符（類聚三代格）が幾度も重ねて発令されており［網野・阿部1994］、役人主催の役所内での宴会にあって、過度の酒宴でなくともその痕跡を残すことは官符違反として疑われかねない重大な問題である。逆に西部遺跡Ⅷ層の工房群のように宴会の痕跡が残せるということは、役人の目が行き届かない民間施設であった可能性を示唆する。この民間施設という点については、西部遺跡に類似する大型掘立柱建物が検出された江向遺跡で高有私印が出土したことからも頷ける。その一方、出土したE漆紙（851）文書は磐舟柵を示すと推測された「頸城宮」が記された公文書（第1次）と暦名簿（第2次）で、その内容から第1次･第2次文書ともに8世紀後半のものと判断（「附編３」参照）されているが、付着した漆紙の放射性炭素年代測定法による年代は10世紀代前半から中ごろと150年以上の差があること（「第Ⅵ章４」参照）から役所から払い下げられた廃棄文書を漆容器の蓋として利用したものと見られ、役所と本遺跡との強い関係をうかがわせる。そして大型工房が一時期に３棟以上並ぶという大規模な操業は官営的で、官符違反として疑われかねない宴会の痕跡を残せる点と矛盾が生じる。

この矛盾は、佐藤進一氏［佐藤1981］により提出され、網野善彦氏により広く紹介される見解に従うと解決することができる。この見解について網野善彦氏の記述から抜粋すると、『佐藤は、九世紀から十

世紀にかけて、個々の官庁の特定氏族による請負・独占世襲の動きが進行するとともに、「務」と切り離しがたく結びついた「職」の原型が成立してくるとし、いわば「勤務」と「営利」が表裏一体を成しているところに「職」の本質があり、それは礼家・薬家・法家・暦家などのような特定氏族の「家業」の形成を背景にしていると説くのである。』、さらに『同様の事態は国衙においても進行し、その諸機能を分担する役所―税所・田所・公文所などが請負・世襲される過程で、在庁官人・下級荘官の「職」が形成されるが、それが国衙に所属していた手工業者に及んだと考えることは、決して無理ではなかろう。』［網野2003］としている。このことを踏まえて考えると、西部遺跡Ⅷ層の工房経営は官人層の請負という官でありながら民という両者の性格を持ち合わせており、西部遺跡Ⅷ層はその性格が反映した考古学資料における現象としてとらえることができるのではなかろうか。

結論として、西部遺跡Ⅷ層の工房群は規模の大きさから官的要素が、宴会の後片付けの乱雑さから民的要素が認められ、官民両方の性格を有していることから官人層が個人的に請け負う体制の下に運営されていた可能性が推測される。

7）Ⅷ層の遺構について

Ⅷ層から検出した掘立柱建物7棟のうち、SB1400・1500・2020・2200・2258の５棟は大型の建物である。いずれも在来型の梁間１間型の建物で、屋内に鍛冶炉や地床炉があり、建物の内外から漆容器や漆パレット、漆紙などが出土していることから、これらの建物は鍛冶や漆塗布などの作業を行った工房であると考えられる。生産していた製品については不明であるが、鉄滓や羽口、漆パレットや漆紙などの出土量が比較的少ないことから、特定の単一製品を大量生産していたというよりは、むしろ、多岐にわたる作業を行って複合的な製品を作っていたのではないかと考えられる。これらの工房群の経営主体については、前述したとおり、官民両方の性格を有していることから、官人層が個人的に請け負う体制の下で運営していた可能性が推測される。また、工房で行われていた作業との関係は不明であるが、調査区の南西側（SB1500の西側）から製塩関連の地床炉が３基見つかっている。

本遺跡の南側には西部遺跡Ⅰが、北側には西部遺跡Ⅲがあるが、両遺跡ともに当該期の遺構は皆無に等しい。大型の工房群を中心としたこれらⅧ層の遺構群は、本遺跡のある南北100mほどの範囲に密集して存在しており、更に東側（山側）へ広がるものと推測される。調査区外となる東西方向については不明であるが、遺構の存在が確認されている南北方向を見る限り、これらの遺構群は、Ⅻ層の水田のところで示した条里型地割の一町四方の枠（第65図）の中にすっぽりと収まる位置にある。遺構群の全貌が把握できないため判然としないが、これら遺構群は、方格線によって区分された空間的な制約の中で構築されている可能性がある。

2 中　　世

A Ⅳ　　層

1）西部遺跡の中世遺構概観（第 114・115 図）

中世に関しては、西部遺跡Ⅰ［折原ほか2005］と今回の調査成果を合わせて遺構の変遷についてまとめてみたい。時期区分に関しては西部遺跡Iの基準を採用する。掘立柱建物については軸方向がほぼ同一の場合、遺物による時期設定ができなくとも同時期と判断した。西部遺跡Iでは下記のように時期区分を設定している。

中世①期：珠洲焼I期のみ遺構から出土する時期で、中国製輸入陶磁器は白磁･青磁ともに存在するが、白磁がいまだ優勢である。12世紀中ごろ～後半。

中世②期：珠洲焼I期とⅡ期が混在して遺構内から出土する時期で、中国製輸入陶磁器は白磁・青磁ともに存在するが、青磁の比率が上がる。また、常滑焼が廃棄される時期である。13世紀初頭前後。

珠洲焼Ⅱ期のみ遺構内から出土する例で、中国製輸入陶磁器は白磁がなくなり、青磁のみ存在する。13世紀初頭～前半。

中世③期：珠洲焼Ⅴ・Ⅵ期の時期で、［森田1982］の白磁D群や［上田1982］の青磁C2類若しくはB2類といった新しい中国輸入陶磁器群が出現する。15世紀前半。

上記の中で中世②期は、掘立柱建物同士に重複が見られ、軸方向は3群にまとめられることから、a～cの3小期に分かれると考えられる。a～c小期の新旧序列の関係は不明だが、中世①期の掘立柱建物の軸方向に近いものから遠いものへと変遷したと仮定する。

中世①期の集落

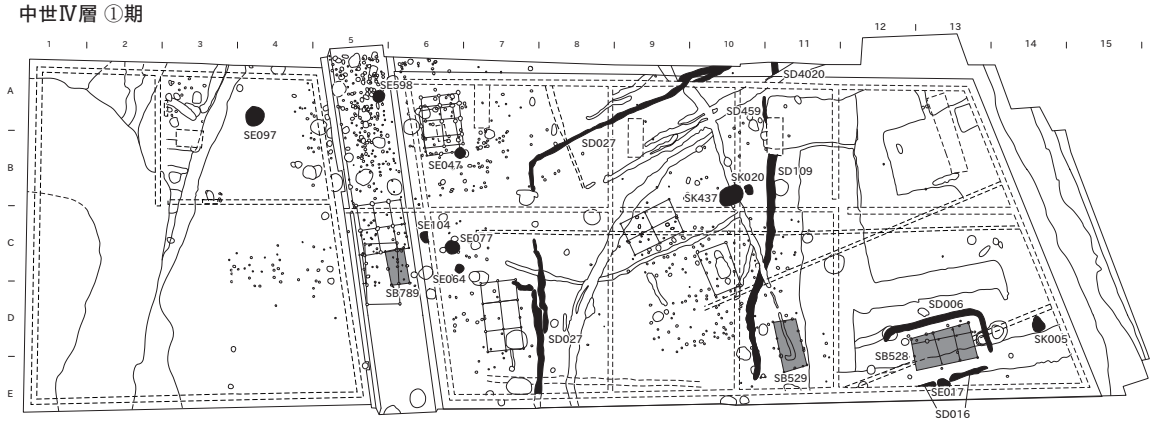
中世I期の掘立柱建物は調査区北部に2棟、南部に１棟存在する。井戸は調査区南部に集中し、北部は散在する。溝は調査区中央部に2条存在し、調査区を3分割している。調査区北部の建物はSB528・529がL字形に配置され、前者は区画溝を持ち、総柱建物の可能性が高く、規模もやや大きいことから主屋、後者は側柱建物で付属の家屋と考えておきたい。南部ではSB789の１棟が存在するだけであるが、建物に接する南側は近世以降に大きく削平を受けており、井戸が集中することから建物が存在していた可能性は大きいと思われる。

中世②期の集落

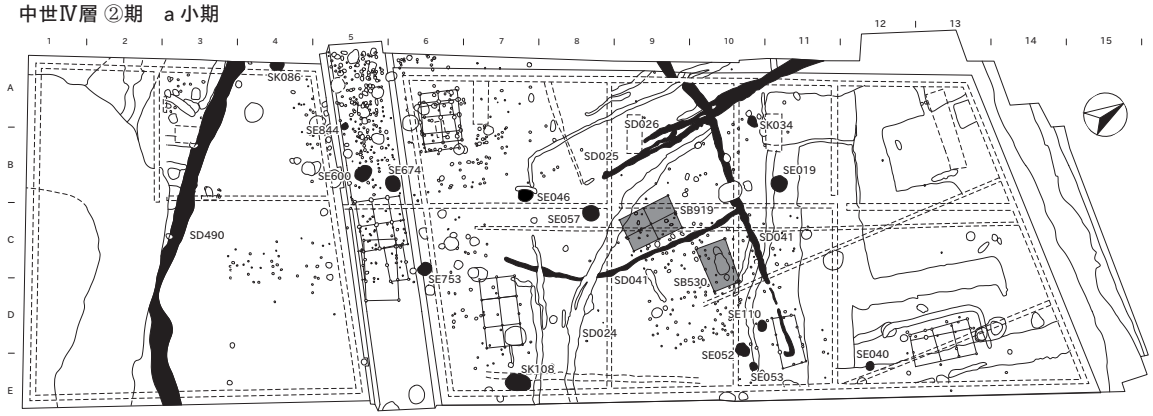
本期の建物は、前述したように軸方向と重複関係からa～cの3小期に設定可能と推測される。なお、井戸・溝等は一部を除き、小期に対応させるには資料不足である。

a小期：調査区中央部に掘立柱建物SB530・919の2棟がL字形に配置されている。SD041は両建物と並行して存在することから本期と推測される。調査区南部は近世以降の削平を受け、遺構は見つかっていないが、本来は分布していたと思われる。

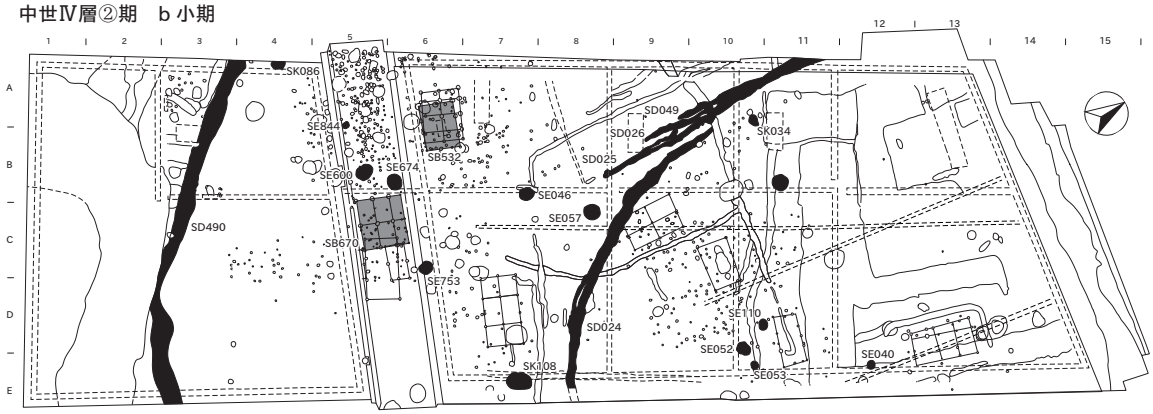
中世Ⅳ層 ①期



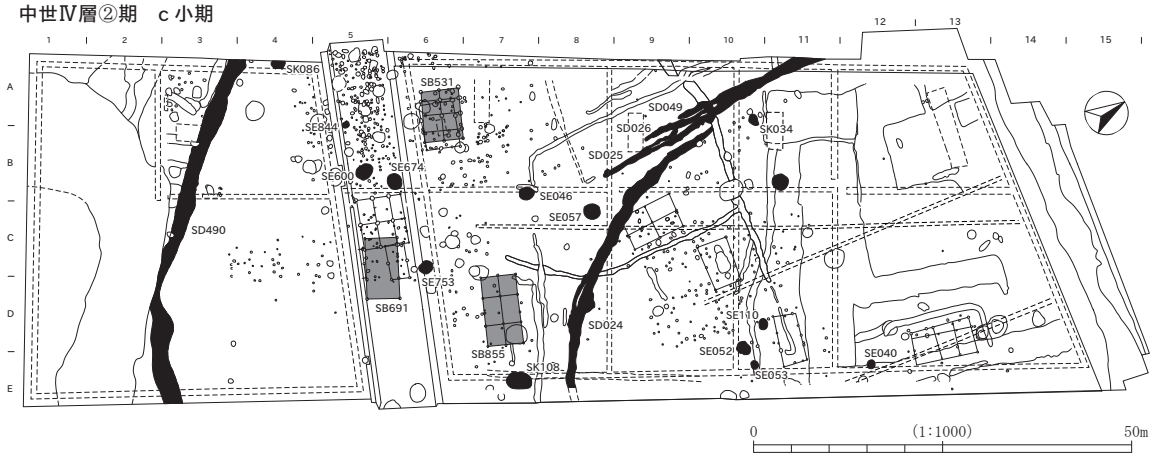
中世Ⅳ層 ②期　a 小期



中世Ⅳ層②期　b 小期



中世Ⅳ層②期　c 小期



第 114 図　中世Ⅳ層の遺構変遷（1）

第 115 図　中世Ⅳ層の遺構変遷（2）

b小期：遺構は、調査区の中央部から南側に偏在し、SD024・490が構築される時期と考えられる。両溝は距離的に離れて検出されているが、形状的に類似し、ほぼ並行することから何らかの関係があるものと思われる。掘立柱建物はSD024・490に囲まれた地区の中央部にSB532・670が存在し、後者は廂付総柱建物で主屋、前者は側柱建物で付属の家屋と考えておきたい。

c小期：遺構は、b小期同様に調査区の中央部から南側に偏在する。SD024・490は継続して存在し、掘立柱建物は両溝に挟まれた空間の中央部、前時期に建物が存在したほぼ同一位置にSB531・691・855の3棟が出現する。建物の配置は「品」字形となり、廂付総柱建物であるSB531が主屋、SB691・855を付属の家屋と考えておきたい。

中世③期の集落

本期は、井戸と溝が存在し、調査区南端にある大規模な自然流路は本期以降に形成されたと考えられる。遺構は調査区中央部南寄りに井戸が集中し、調査区南端の西側に溝が存在すること、本期の遺物が調査区南半部に集中することなどから調査区南部の近世以降に削平を受けた地区に遺構が集中していたと推測される。

要　約

1　西部遺跡は、新潟県村上市牛屋字西部1192ほかに所在する。遺跡は荒川右岸に形成された自然堤防上に立地している。現況は、水田と農道であった。

2　本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道路の建設に伴い、平成17・18年度に実施した。調査面積は延べ23,511㎡である。

3　調査の結果、中世１面（Ⅴ層上面）、古代４面（Ⅸ・Ⅻ・ⅫⅢa・ⅫⅢb層上面）から遺構を検出した。なお、各面から検出した遺構は、それぞれ直上の遺物包含層の層名を冠して「Ⅷ層遺構」（Ⅸ層上面検出遺構）のように表記した。

4　ⅫⅢa層では、８世紀前半を中心とする集落を検出した。遺構は、掘立柱建物1棟と打込式の杭26基である。遺物は、土師器非ロクロ甕のほか、転用硯である須恵器杯蓋の破片などがわずかに出土している。

5　Ⅻ層では、８世紀後半から９世紀前半ごろと推定される水田を検出した。本遺跡の北側には、水田が検出されなかった西部遺跡Ⅲを間に挟み、ほぼ同時期の水田が広範囲に検出された西部遺跡Ⅳ・Ⅴがあり、条里型地割に基づく方格地割が採用されていることが確認された。本遺跡から検出した大畦畔は、西部遺跡Ⅳ・Ⅴで検出された大区画（一町四方）の地割とおおむね合致するが、厳密には東側（山側）へ５ｍほどずれが生じている。その成因については不明であるが、本遺跡の水田には西部遺跡Ⅳ・Ⅴとは異なる基準軸が適用されている可能性もある。

6　Ⅺ層では、９世紀中葉を中心とする集落を検出した。掘立柱建物は５棟あり、うち１棟は鍛冶工房である。鉄滓など鍛冶関連遺物の出土が少ないことから、鍛冶工房は比較的短期間で操業を停止したものと考えられる。特徴的な遺物として、墨書土器（「木」「上」）、漆器椀、烏帽子または圭冠、権状錘などが出土している。

7　Ⅷ層では、９世紀末から10世紀中葉の工房群からなる生産の場を検出した。掘立柱建物は7棟あり、このうち5棟は大型の複合工房である。建物内部には鍛冶炉や地床炉があり、建物の内外からは漆容器や漆パレット、漆紙などが出土している。いずれも屋内で鍛冶や漆塗布などの作業を行っていたと考えられるが、鉄滓や羽口、漆パレットや漆紙などの出土量は比較的少ない。ここで生産していた製品については不明であるが、特定の単一製品を大量生産していたというよりは、むしろ、多岐にわたる作業を行って複合的な製品を作っていたのではないかと考えられる。

8　Ⅷ層の工房は、役所から払い下げられた廃棄文書が漆容器の蓋紙として利用されていることや大型の複合工房が一時期に複数棟並んで操業するという運営規模の大きさから官的要素が、SB1400・1500に見られるような宴会の後片付けの乱雑さから民的要素が認められる。これらの工房は官民両方の性格を有していることから、工房の経営は、官人層の請負という、官でありながら民という両者の性格をあわせ持った体制のもとで運営されていた可能性が考えられる。

9　Ⅷ層からは、土師器無台椀を主体とする多量の遺物が出土している。ほかに特徴的な遺物として、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁（皿Ⅰ類）、耳皿、土師器香炉蓋・小型羽釜・台付鉢、転用硯、腰帯石銙丸鞆、水晶製丸玉、権状錘、製塩土器、漆紙文書などが出土している。また、墨書土器は70点以上出土しているが、そのほとんどに則天文字「天」の字が記されている。

10　他地域との関係を示唆するⅧ層の遺物について検討した結果、黒色土器有台椀B類と則天文字「天」の墨書は山形県の置賜・村山地域から福島県にかけての地域、土師器香炉蓋・小型羽釜・台付鉢は置賜・村山地域から宮城県の仙台平野及び本遺跡から石川県にかけての地域、筵底を持つ土師器は東北地方、菱形留め金具は富山県方面との繋がりを示す可能性があり、直接・間接は別にして広範囲な地域との関連がうかがえ、その中でも、特に東北地方の山形県南部から宮城県の仙台平野にかけての地域と強い繋がりを持つようである。こうした地域的な繋がりがⅧ層の工房で生産された製品の供給先を示すとは限らないが、置賜・村山地域を経由して多賀城へと供給されていたとも考えられ、その可能性は東北地方で元慶の乱後の再建復興などに伴い多量の物資を生産する後方支援を必要としていた当時の社会情勢からも推測できる。

11　Ⅷ層から検出した掘立柱建物SB1500の区画溝であるSD1377の覆土中から、１次文書（オモテ面）に請暇解様文書、２次文書（漆の付着面）に歴名簿と見られるものが記された漆紙文書（E漆紙（851）文書）が出土した。この漆紙文書は、出土状況や紙に浸潤した漆の放射性炭素年代測定の結果（「第Ⅵ章４」参照）から10世紀前半ごろに漆容器の蓋紙として利用されたものと考えられるが、記載されている内容や字体などの特徴から文書自体は８世紀後半ごろに書かれたものである可能性が指摘されている（「附編3」参照）。

12　Ⅳ層は、平成16年度（西部遺跡Ⅰ）に調査できなかった調査区南側の農道部分、西側と北側に拡幅した部分について調査を実施した。12世紀後半から15世紀代の中世集落を検出した。

引用・参考文献

穴澤義功　2005 「鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究報告』（社）日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会

阿部明彦・水戸弘美　1999 「山形県の古代土器編年」『第25回 古代城柵官衙遺跡検討資料』 古代城柵官衙遺跡検討会

阿部寿彦ほか　1993 『佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅳ）高岡遺跡群Ⅳ』（財）印旛郡市文化財センター

網野善彦・阿部謹也　1994 『中世の発見－市・贈与・宴会－』平凡社ライブラリー66　平凡社

網野善彦　2003 『日本中世の百姓と職能民』平凡社ライブラリー468　平凡社

荒川町教育委員会　1999 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 元山窯跡群』

荒川町教育委員会　2000 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集 坂町宮ノ腰D遺跡』

荒川町教育委員会　2001 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集 田島遺跡』

荒川町教育委員会　2002 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集 鴨侍遺跡』

有山径世・土生朗治ほか　2001 『山形県山形市埋蔵文化財調査報告書 第12集 一ノ坪遺跡発掘調査報告書』 山形市教育委員会

池　　亨　1999 「第7章 中世に生きる民衆 第四節「瀬波郡絵図に見る村上」」『村上市史』通史編１ 原始・古代・中世　新潟県村上市

石井清司・伊賀高弘ほか　1991 『京都府遺跡調査報告書 第15冊 上人ヶ平遺跡』（財）京都埋蔵文化財調査研究センター

飯村　均　2008 「土器の系譜－中世土器様式を準備したもの－」『東北学』第16号 東北芸術工科大学東北文化研究センター　柏書房

飯坂盛泰ほか　2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第115集 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか　2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟埋蔵文化財調査事業団

伊藤邦弘・植松暁彦　1999 「山形県の官衙関連遺跡」『第25回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』 古代城柵官衙遺跡検討会

伊藤武士　2006 「秋田城跡の発掘調査成果」『秋田城跡』日本の遺跡12　同成社

伊藤信雄ほか　1980 『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所・宮城県教育委員会

伊藤博幸ほか　1983 『岩手県水沢市佐倉河 胆沢城 昭和58年発掘調査概報』 岩手県水沢市

伊藤博幸　1998 「北上盆地南部」『第24回 古代城柵官衙遺跡検討会 シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集』東北地方の古代集落 第3分冊　古代城柵官衙遺跡検討会

伊藤秀和　2005 『加茂市埋蔵文化財調査報告 14 馬越遺跡』 新潟県加茂市教育委員会

伊藤正義　1995 「越後国「郡絵図」資料論」『帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集 中世史料論の現在と課題 考古学と中世史研究』帝京大学山梨文化財研究所　名著出版

井上雅孝　1997 「胆沢城遺跡・陸奥における10・11世紀代の土器様相」『第83回北陸古代土器研究会 シンポジウム 北陸の10・11世紀代の土器様相』 北陸古代土器研究会

岩瀬由美　2002 『鹿島町 武部ショウブ谷遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター

上田秀夫　1982 「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易 陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会

石上周蔵・小口徹ほか　1990 『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 6 下神遺跡 』長野県教育委員会・（財）長野県埋蔵文化財センター

尾野善裕　2003 「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『第7回シンポジウム 古代の土器研究　平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心にして－』 古代の土器研究会

大島秀俊ほか　2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第181集 田屋道遺跡Ⅰ・宮の越遺跡I』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
小川正忠・竹原秀雄　2002 『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所
小田雄三　1983 「烏帽子小考」『近世風俗図譜』第12巻 小学館
折原洋一ほか　2006 『富山市埋蔵文化財調査報告 第18 富山市向野池遺跡発掘調査報告書』 富山市教育委員会
折原洋一ほか　2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第148集 西部遺跡I』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
春日真実　2004 「磐船郡の土器様相」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
加藤　孝・相羽重徳ほか　2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集 台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
神林村教育委員会　2002 『神林村埋蔵文化財発掘調査報告書 第18 樋渡遺跡・掘下遺跡』
神林村教育委員会　2002 『神林村埋蔵文化財発掘調査報告書 第13 六百地遺跡』
北野博司　2003 「第５章　古代　第２節 25 江向遺跡」『上越市史』資料編2 考古 上越市史編さん委員会
北村和穂　2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第192集 大館跡Ⅱ・東輿屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
北村和穂　2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第193集 谷地遺跡・八太郎遺跡・田屋道遺跡Ⅱ・宮の越遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
木本元治　1983 『福島県文化財調査報告書 第109集 御山千軒遺跡』福島県教育委員会・日本国有鉄道
木村　高・三林健一　1998 『青森県埋蔵文化財調査報告書 第244集 隠川（４）遺跡・隠川（12）遺跡I』青森県教育委員会・青森県埋蔵文化財調査センター
工藤清泰　1998 「津軽平野」『第24回 古代城柵官衙遺跡検討会 シンポジウム「城柵と地域社会の変容」資料集』東北地方の古代集落 第１分冊 古代城柵官衙遺跡検討会
蔵中　進　1995ａ 「平安時代古辞書の則天文字」『則天文字の研究』 翰林書房
蔵中　進　1995ｂ 「奈良・平安時代の則天文字」『則天文字の研究』 翰林書房
小池邦明・藤塚　明　1993 『的場遺跡』新潟市教育委員会
小松正夫・石郷岡誠一・日野　久ほか　1981 『秋田城跡 昭和55年度秋田城跡発掘調査概報』 秋田県秋田市教育委員会
齋藤孝正　1994 「東海地方の施釉陶器生産－遠投窯を中心に－」『第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3施釉陶器－』古代の土器研究会
酒井重洋・山口辰一　1986 『富山県高岡市 美野下遺跡調査概報』高岡市教育委員会
坂井秀弥ほか　1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第53集 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
坂本　彰・伊藤　薫ほか　1997 『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書 23 西ノ谷遺跡』（財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
笹澤正史・小島幸雄ほか　1997 『保坂遺跡発掘調査報告書』新潟県上越市教育委員会
笹澤正史・滝沢規明　2003 「第５章 古代 第２節 11 下割遺跡」『上越市史』資料編 2 考古　新潟県上越市史編さん委員会
佐藤進一　1981 「公家法の特質とその背景」『中世政治社会思想』 下 岩波書店
神保郁史・西田建彦　1988 『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告 第９集 田端遺跡』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
須賀井新人　2000 「山形・山田遺跡」『木簡研究』22　木簡学会
鈴鹿洋一ほか　1995 『福島県文化財調査報告書 第305集 正直C遺跡』 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター
鈴木俊成ほか　1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

鈴木俊成ほか　1998 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第89集 天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

高橋昭彦　1995 「Ⅲ土器・陶磁器 3 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社

高橋久美子　2007 「都と地方間の交通路政策」『律令国家転換期の王権と都市』国立歴史民俗博物館研究報告第134集 国立歴史民俗博物館

高橋　敏ほか　2001 『山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第81集 太夫小屋１・２・３遺跡』（財）山形県埋蔵文化財センター

武田健次郎・細辻真澄ほか　2007 『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

巽淳一郎　1994 「Ⅰ総論 施釉陶器研究の現状と課題」『第3回 シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』古代の土器研究会

田中一穂　2009 「則天文字「天」墨書土器の再検討－西部遺跡出土墨書土器の前提的考察－」『新潟考古』新潟県考古学会

田中耕作・渡邊美穂子　2001 『新発田市埋蔵文化財調査報告書 第23 － 2 坂ノ沢C遺跡 Ⅱ（平安時代編）』新潟県新発田市教育委員会

田中　靖　1995 『和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡』新潟県三島郡和島村教育委員会

田中　靖　1998 『下ノ西遺跡』新潟県三島郡和島村教育委員会

継　　実ほか　2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第179集 中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団

土本　医ほか　2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第178集 西部遺跡Ⅴ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団

鶴巻康志・若林知美ほか　2003 『新発田市埋蔵文化財発掘調査報告第27 桑ノ口遺跡発掘調査報告書』新潟県新発田市教育委員会

出越茂和　1991 『金沢市千木ヤシキダ遺跡Ⅱ平成元・二年度発掘調査報告書』金沢市文化財紀要68 金沢市教育委員会・金沢市疋田第二土地区画整理組合

出越茂和　1994 「Ⅱ.全国の消費地 4 北陸の施釉陶器－加賀を中心に－」『第3回 シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』古代の土器研究会

手塚　孝　2001 『米沢市埋蔵文化財調査報告書 第73集 古志田東遺跡』米沢市教育委員会

土橋由理子　2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第151集 蛇谷遺跡・炭山遺跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

戸潤幹夫　1986 『戸水C遺跡』石川県埋蔵文化財センター

中条町教育委員会　1966 『平成七年度町内遺跡確認調査調査報告書』

中条町教育委員会　1999 『中倉遺跡 3次』

中条町史編纂委員会　1982 『中条町史』資料編 第1巻 新潟県中条町史編さん委員会

中野晴久　1995 「常滑　渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社

中野豈任　1988 『祝儀・吉書・呪符』吉川弘文館

中村太一　2003 「陸奥・出羽地域における古代駅跡とその変遷」『国史学』179 國學院大學文学部国史学会

新潟県教育委員会　1998『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第89集 天王前遺跡・有明的場遺跡・石川遺跡』

新潟県立村上高等学校地理歴史部　1975 『岩船潟』新潟県立村上高校

新潟市教育委員会　2007 『沖の羽遺跡現地説明会資料』

西野　修　2008 「徳丹城跡」『志波城・徳丹城跡　古代陸奥国北端の二城柵』日本の遺跡31 （株）同成社

花田勝広　1989 「倭政権と鍛冶工房－畿内の鍛冶専業集落を中心に－」『考古学研究』143 考古学研究会

原　明芳　1997 「古代末期の信濃の土器様相－10～11世紀を中心として」『第83回 シンポジウム 北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005 「第Ⅵ章 自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第148集 西部遺跡Ⅰ』

新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社　2010 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告 第193集 谷地遺跡・八太郎遺跡・田屋道遺跡Ⅱ・宮の越遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
平川　南　2000 「墨書土器とその字形」『墨書土器の研究』吉川弘文館
平野団三　1963 「乙宝寺塔心礎と頸城地方心礎の問題」『越佐研究』第20集 新潟県人文研究会
藤田宥宣・月山隆弘ほか　1984 『川西町 埋蔵文化財調査報告書 第8集 道伝遺跡発掘調査報告書－置賜郡衙推定地－』川西町教育委員会
藤田邦夫・北野博司ほか　1987 『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
古川利意・吉田博行ほか　1990 『会津坂下町文化財調査報告 第16集 大江古屋敷遺跡』会津坂下町教育委員会
前田清彦　1990 『松任市北安田北遺跡Ⅱ』松任市教育委員会
前川雅雄ほか　2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告 第176集 窪田遺跡I』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財事業団
水澤幸一　2002 『中条町埋蔵文化財調査報告 第24集 船戸川崎遺跡4次』新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2005 「潟街道の遺跡群」『古代の越後と佐渡』環日本海歴史民俗学叢書12 高志書院
宮本長二郎　2002 「古代末から中世の住居建築」『研究紀要』第16号 秋田県埋蔵文化財センター
宮本長二郎　2003 「縄文・弥生時代の基礎工法」『基礎工』第31巻第１号 （株）総合土木研究所
村上市教育委員会　1993 『はげ遺跡』
村上市教育委員会　1994 『三十刈・堂の下遺跡』
村上市史編纂室　1999 『村上市史』通史編１ 新潟県村上市史編纂室
村田晃一　1994 「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『第3回東日本埋蔵文化財研究会 古代官衙の終末をめぐる諸問題－第1分冊 問題提起・各地の概要－』東日本埋蔵文化財研究会
村田道博ほか　2009 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第194集 西部遺跡Ⅳ・桜林遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
森田　勉　1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易 陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
森本　剛　2000 「千葉県」『古代仏教系遺跡集成・関東』考古学から古代を考える会
吉岡康暢　1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
柳澤和明　1994 「東北の施釉陶器－陸奥を中心に－」『第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の東西3－』古代の土器研究会
山崎克己ほか　1993 『見付端城発掘調査報告書』磐田市教育委員会
山下孝司　1991 『山梨県韮崎市宮ノ前第2遺跡・北堂地遺跡』韮崎市教育委員会
山中　彰　1994 「２ 長岡京の施釉陶器－緑釉陶器の成立－」『第3回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の東西3－』古代の土器研究会
山中敏史　2003 「Ⅱ 古代官衙建築の基本構造 Ⅱ- 1 建築基部構造の種類」『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所
山本信夫　1983 「附編 土器の分類」『大宰府市の文化財 第７集 太宰府条房跡 Ⅱ』大宰府市教育委員会
山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
横田賢次郎・森田勉　1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』第４号 九州歴史資料館
吉井雅勇　1999 『荒川町埋蔵文化財調査報告 第５集 元山窯跡群』 新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　2001 『荒川町埋蔵文化財調査報告 第７集 田島遺跡』 新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇　2002 『荒川町埋蔵文化財発掘調査報告 第8集 鴨侍遺跡』 新潟県荒川町教育委員会
吉田　寿ほか　2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第163集 西部遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
和田　聡・植村奏徳ほか　2001 『塩川文化財調査報告第8集 塩川西部地区遺跡発掘調査報告書5 鏡ノ町遺跡B』塩川町教育委員会

別表1　遺構観察表（1）

古代Ⅷa層　掘立柱建物

SB3230	梁間1間型（近接棟持式）						グリッド		桁行2間			梁間1間		面　積
桁行方向	N－59°－E						10D･E		4.05m			4.65m		18.83㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
P1	側柱	0.08		0.51	打込	ニレ属	P5	側柱	0.07		0.43	打込	ニレ属	
P2	側柱	0.09		0.30	打込	ニレ属	P6	側柱	0.10		0.39	打込	ニレ属	
P3	側柱	0.07		0.60	打込	ニレ属	P7	側柱	0.07		0.42	打込	ニレ属	
P4	棟持柱	0.08		0.33	打込	エゴノキ属	P8	棟持柱	0.05		0.12	打込	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

古代Ⅶ層　畦畔

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	幅	高さ			
畦畔3204	5C･D、6C	南北	台形状	19.42	0.30～0.46	0.08～0.12			
畦畔3205	5C、6B･C、7B	南北	台形状	19.40	0.34～0.48	0.07			
畦畔3206	5～7B	南北	台形状	17.80	0.28～0.56	0.08			
畦畔3208	6B･C	東西	台形状	9.86	0.24～0.84	0.08			
畦畔3209	5～7B	南北	台形状	18.40	0.28～0.64	0.04～0.08			
畦畔3210	5A･B、6･7A	N－1°－W	台形状	20.12	0.80～1.70	0.20～0.38			大畦畔
畦畔3251	7A	東西	台形状	1.71	0.32～0.40	0.08			
畦畔3252	7C	東西	台形状	1.16	0.55～0.62	0.08			

古代Ⅶ層　溝

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	上幅	深さ			
SD3207	6･7A	N－71°－W	逆台形状	7.20	1.20～1.60	0.17～0.28			2号水田内

古代Ⅺ層　掘立柱建物

SB3050	梁間1間型（近接棟持式）						グリッド		桁行2間			梁間1間		面　積
桁行方向	N－70°－W						8B･C		4.00m			3.75m		15.00㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
P1	側柱	0.57	0.49	0.42	掘立		P5	側柱	0.57	0.50	0.51	掘立		
P2	棟持柱	0.30	0.28	0.35	掘立		P6	棟持柱	0.66	0.63	0.49	掘立		
P3	側柱	0.32	0.32	0.27	掘立		P7	側柱	0.57	0.51	0.41	掘立		
P4	側柱	0.53	0.43	0.41	掘立		P8	側柱	0.50	0.46		掘立		

SB3100	梁間1間型（近接棟持式）						グリッド		桁行2間			梁間1間		面　積
桁行方向	N－60°－W						7C		3.00m			2.95m		8.85㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
P1	側柱	0.36	0.34	0.52	半打込		P5	側柱	0.38	0.34	0.34	半打込		
P2	棟持柱	0.45	0.42	0.53	半打込		P6	棟持柱	0.38	0.36	0.46	半打込		
P3	側柱	0.52	0.47	0.37	半打込		P7	側柱	0.25	0.22	0.31	半打込		
P4	側柱	0.30	0.29	0.44	半打込									

SB3200	1面廂が付く梁間1間型（壁芯棟持式）						グリッド		桁行2間			梁間2間		面　積
桁行方向	N－60°－W						6B･C		5.15m			5.43m		27.96㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
P1	側柱	0.55	0.48	0.36	半打込		P7	側柱	0.28	0.20	0.21	半打込		
P2	棟持柱	0.48		0.59	半打込		P8	側柱	0.23	0.21	0.40	半打込		
P3	側柱	0.50	0.35	0.46	半打込		P9	側柱	0.41	0.30	0.46	半打込		
P4	側柱	0.34	0.31	0.96	半打込	クリ	P10	側柱						
P5	側柱	0.46	0.38	0.32	半打込		P11	側柱	0.32	0.31	0.48	半打込		
P6	棟持柱						P12	側柱	0.31		0.33	半打込		

SB3030	伏屋式の平地建物（屋内棟持式）						グリッド		桁行1間			梁間0間		面　積
桁行方向	N－55°－W						11D		2.70m			0m		
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ			
P3132	棟持柱	0.46	0.46	0.35	掘立		P3135	棟持柱	0.42	0.42	0.27	掘立		

別表１　遺構観察表（2）

古代Ⅺ層　掘立柱建物

SB3201	梁間1間型（壁芯棟持式）ヵ	グリッド	桁　行	梁　間	面　積
	※SB3200類似の建物と推定。柱穴は検出していない。	5･6B	不　明	不　明	

古代Ⅺ層　鍛冶炉

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SW3126	11D6	楕円形	弧状	0.45	0.33	0.05	鉄関連微細遺物		SB3030内

古代Ⅺ層　地床炉

遺構名	グリッド	平面形	断面形	長径（m）	短径（m）	深さ（m）	出土遺物	遺構の新旧関係	備考
SW1633	6B6	円形		0.59	0.48				SB3201内
SW1634	5B10	円形		0.65	0.53				SB3201内
SW3070	6B12･17	不明	弧状	0.42	［0.21］	0.15	須恵器、土師器		
SW3094	6B23・24	不整形		3.00	2.30	0.05		P3215より古い	SB3200内
SW3113	11D8･9･13･14	楕円形		0.36	0.21				SB3030内
SW3196	6C3	円形		0.38	0.38				SB3200内

古代Ⅺ層　井戸

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SE3220	7C17･18･22･23	円形	袋状	1.25	1.20	0.70	須恵器、土師器		

古代Ⅺ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK1638	5B10、6B6	円形	弧状	1.02	0.93	0.37			SB3201内
SK1639	6B11	楕円形	逆台形状	1.25	1.09	0.12			
SK1664	6B1･2･6･7	円形	逆台形状	0.38	0.31	0.10			SB3201内
SK1665	6B7･12	円形	弧状	1.00	［0.65］	0.15	土師器	SD3090より新しい	
SK3040	14D8	楕円形	弧状	［0.80］	0.90	0.25	土師器		
SK3044	7C8	楕円形	V字状	0.74	0.51	0.20		P3095より新しい	SB3100内
SK3046	7C4	楕円形	逆台形状	1.24	0.95	0.37	土師器、用途不明石製品	SD3088より新しい	
SK3049	6D2	楕円形	弧状	1.20	0.92	0.11	土師器、砥石		
SK3065	7C19･24、7D4	楕円形	弧状	2.68	2.02	0.56	土師器		
SK3085	8B22･23	楕円形	弧状	1.61	1.14	0.16	土師器		SB3050内
SK3086	6B18･19	長楕円形	弧状	2.54	0.41	0.10			
SK3091	6B22･23、6C2･3	不整形	弧状	［1.90］		0.05～0.20	須恵器、土師器		SB3200内
SK3104	6C6･7･11･12	楕円形	逆台形状	1.01	0.74	0.36	土師器		
SK3124	6A7	長楕円形	半円状	1.51	0.49	0.18	土師器		
SK3127	11D11	楕円形	弧状	0.78	0.59	0.14	炭化米		SB3030内
SK3128	11D6	円形	弧状	0.42	0.40	0.10	鉄関連微細遺物、炭化米		SB3030内、廃滓用の穴
SK3129	11D12	不整形	逆台形状	2.10	0.45	0.15			SB3030内
SK3134	11D12	楕円形	弧状	0.84	0.39	0.15	土師器、須恵器、鉄関連微細遺物		SB3030内
SK3153	7C15、8C11	円形	半円状	1.13	1.04	0.40			
SK3154	7D10、8D6	円形	U字状	［0.67］	［0.60］	0.46			
SK3163	6C2･3･7･8	円形	弧状	0.55	0.55	0.08	須恵器、土師器		SB3200内
SK3177	6C6	楕円形	弧状	0.53	0.34	0.06	鉄滓		
SK3180	8D7	長方形	弧状	［1.00］	0.83	0.11			
SK3193	6C7	円形	弧状	0.47	0.45	0.07	鉄滓		SB3200内
SK3195	6C3	楕円形	弧状	0.40	0.31	0.07	土師器		SB3200内

古代Ⅺ層　道路状遺構

遺構名	グリッド	方　向	計測値（m）		出土遺物	遺構の新旧関係	備考
			長さ	幅			
SF3202	5A･B、6A	N－45°－W	12.45	0.63～1.47			帯状の硬化範囲

古代Ⅺ層　性格不明遺構

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SX3199	8C	不整形	弧形	1.92	1.53	0.10			不整形な硬化範囲

別表１　遺構観察表（3）
古代Ⅺ層　溝

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	上幅	深さ			
SD3029	11D･E	N－57°－W	逆台形状	11.21	0.64～1.54	0.36	須恵器、土師器、砥石、鉄関連微細遺物		SB3030の区画溝
SD3042	10･11D	北側開口の「コ」の字状	逆台形状	12.69	0.48～1.46	0.29	須恵器、土師器、墨書土器、磨石、鉄関連微細遺物		SB3030の区画溝
SD3045	7C	N－69°－W	弧状	1.84	0.29～0.83	0.13	須恵器		
SD3051	5D、6C･D、7B･C、8･9A･B、10A	N－5°－W	弧状	［66.5］	0.85～1.65	0.35	須恵器、土師器、砥石、磨石		直線的に伸びSB3100付近で緩やかにカーブする
SD3052	8B･C	N－70°－W	弧状	6.00	0.42～0.56	0.30	須恵器、土師器、墨書土器		SB3050の区画溝
SD3053	8C･D	N－58°－W	弧状	［7.98］	0.62～0.94	0.29	土師器、鉄関連微細遺物、炭化米		
SD3071	5B･C	N－44°－W	逆台形状	［8.60］	0.28～0.50	0.23	須恵器、土師器	SD3192より新しい	
SD3072	6B･C	N－60°－W	逆台形状	［5.40］	0.66～0.83	0.30	須恵器、土師器、灰釉陶器		SB3200の区画溝
SD3088	7C	「L」字状	弧状	6.00	0.25～0.61	0.10	須恵器	SK3046より古い	SB3100の区画溝
SD3090	6A･B	N－67°－W	逆台形状	6.69	1.13	0.29	土師器、須恵器、墨書土器、漆器		SB3201の区画溝
SD3092	6B･C	N－60°－W	弧状	［6.16］	0.31～0.48	0.10	土師器		
SD3093	6C	N－40°－E	弧状	［3.50］	0.41～0.64	0.09	土師器	SD3103より新しく、SB3200･SD3102より古い	
SD3102	6B･C	N－60°－W	逆台形状	5.16	0.65～0.95	0.29	須恵器、土師器、漆製品		SB3200の区画溝
SD3103	6C	N－15°－E	弧状	［1.40］	0.11～0.16	0.06		SD3093より古い	
SD3115	5B･C	N－50°－W	弧状	3.77	0.17～0.42	0.08	須恵器、土師器		
SD3116	5B･C	N－50°－W	半円状	4.54	0.30～0.49	0.19			
SD3120	5B･C	N－45°－W	弧状	［6.86］	0.30～0.46	0.12	土師器		
SD3121	5A･B	N－67°－W	逆台形状	6.10	0.36～1.10	0.33	須恵器、土師器、墨書土器		SB3201の区画溝
SD3123	6A	N－56°－W	逆台形状	［8.71］	0.54～0.68	0.28	須恵器		
SD3181	9C	N－60°－W	弧状	1.15	0.31～0.35	0.10			
SD3182	7C	N－0°－W	弧状	1.49	0.35～0.44	0.19			
SD3185	6B	N－60°－W	V字状	［1.06］	0.09～0.14	0.12			SB3200内にある
SD3192	5C	N－50°－W	半円状	［1.31］	0.25～0.28	0.14		SD3071より古い	
SD3203	5･6A	N－23°－E	逆台形状	［4.08］	0.26～0.47	0.16			
SD3212	6A･B	N－46°－W	逆台形状	4.76	0.15～0.32	0.17			

別表１　遺構観察表（4）

古代Ⅷ層　掘立柱建物

SB1400	4面廂が付く梁間1間型（壁芯棟持式）				グリッド		桁行7間		梁行3間		面　積
桁行方向	N－70°－W				9B～D、10C・D		16.50m		8.84m		145.86㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	入側柱	0.93	0.77	0.70	掘立		P21	側柱	0.51	0.38	0.58	掘立	
P2	入側柱	1.05	0.84	0.72	掘立		P22	側柱	0.43	0.34	0.66	掘立	
P3	入側柱	0.99	0.87	0.70	掘立		P23	側柱	0.52	0.41	0.53	掘立	
P4	入側柱	0.91	0.78	0.89	掘立		P24	側柱	0.55	0.41	0.72	掘立	
P5	入側柱	1.23	0.94	0.81	掘立		P25	側柱	0.47	0.44	0.65	掘立	
P6	入側柱	1.15	0.85	0.77	掘立	クリ	P26	側柱					
P7	入側柱	0.89	0.73	0.60	掘立		P27	側柱	0.68	0.62	0.72	掘立	
P8	入側柱	0.89	0.77	0.72	掘立		P28	棟持柱	0.39		0.42	掘立	
P9	入側柱	1.16	0.93	0.94	掘立	クリ	P29	側柱	0.48	0.40	0.54	掘立	
P10	入側柱	0.75	0.70	0.77	掘立		P30	側柱	0.51	0.45	0.60	掘立	
P11	側柱	0.43	0.36	0.56	掘立		P31	（欠番）					
P12	側柱	0.43	0.39	0.70	掘立		P32	中柱	0.46	0.38	0.50	掘立	
P13	側柱	0.46	0.36	0.53	掘立		P33	中柱	0.43	0.34	0.68	掘立	
P14	側柱	0.60	0.46	0.52	掘立		P34	（欠番）					
P15	側柱	0.58	0.48	0.56	掘立		P35	棟持柱	0.61	0.59	0.95	掘立	
P16	側柱	0.55	0.52	0.56	掘立		P36	側柱	0.39	0.32	0.32	掘立	
P17	側柱	0.41	0.38	0.58	掘立		P37	側柱	0.34	0.27	0.42	掘立	
P18	側柱	0.63	0.45	0.68	掘立		P38	側柱					
P19	側柱	0.50		0.40	掘立		P39	側柱	0.20	0.15	0.16	掘立	
P20	側柱	0.70	0.51	0.60	掘立		P40	側柱	0.12	0.12	0.20	掘立	

SB1500	4面廂が付く梁間1間型（棟持無）				グリッド		桁行9間		梁行3間		面　積
桁行方向	N－70°－W				7C・D、8C・D		23.20m		10.80m		250.56㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	入側柱	1.00	0.80	0.76	掘立	クリ	P26	側柱	0.29	0.23	0.66	掘立	
P2	入側柱						P27	側柱	0.80	0.32	0.64	掘立	
P3	入側柱	0.84	0.74	0.62	掘立		P28	側柱					
P4	入側柱	0.67	0.55	0.78	掘立	クリ	P29	側柱	0.47	0.42	0.74	掘立	
P5	入側柱	0.62	0.53	0.77	掘立	クリ	P30	側柱	0.34	0.34	0.42	掘立	
P6	入側柱	0.90	0.70	0.72	掘立	クリ	P31	側柱	0.68	0.68	0.67	掘立	クリ
P7	入側柱	0.78	0.65	0.70	掘立	クリ	P32	側柱	1.08	0.83	0.52	掘立	
P8	入側柱	0.78	0.77	0.82	掘立	クリ	P33	側柱	0.40	0.40	0.58	掘立	
P9	入側柱	0.90	0.76	0.76	掘立	クリ	P34	側柱	0.61	0.54	0.43	掘立	
P10	入側柱	0.67	0.60	0.67	掘立	クリ	P35	側柱	0.26	0.26	0.62	掘立	クリ
P11	入側柱	0.76	0.74	0.74	掘立	クリ	P36	側柱	0.35	0.30	0.51	掘立	
P12	入側柱	0.90	0.75	0.76	掘立	クリ	P37	側柱	0.34	0.28	0.62	掘立	
P13	入側柱	1.07	0.94	0.90	掘立	クリ	P38	側柱	0.38	0.32	0.57	掘立	
P14	入側柱	1.03	0.90	0.76	掘立	クリ	P39	側柱	0.56	0.48	0.59	掘立	
P15	入側柱	1.10	0.88	0.85	掘立	クリ	P40	側柱	0.50	0.39	0.58	掘立	
P16	入側柱	0.91	0.84	0.78	掘立	クリ	P41	側柱	0.53	0.43	0.49	掘立	クリ
P17	側柱	0.35	0.30	0.52	掘立	クリ	P42	側柱	0.42	0.31	0.52	掘立	
P18	側柱	1.03	0.83	0.74	掘立		P43	（欠番）					
P19	側柱	0.53	0.39	0.76	掘立		P44	中柱	0.65	0.59	0.93	掘立	クリ
P20	側柱	0.58	0.47	0.62	掘立	クリ	P45	中柱	1.00	0.76	0.66	掘立	
P21	側柱	0.44	0.38	0.45	掘立		P46	中柱	0.59	0.54	0.68	掘立	
P22	側柱	0.58	0.51	0.60	掘立		P47	中柱	0.74	0.67	0.62	掘立	
P23	側柱	0.67	0.52	0.67	掘立	クリ	P48	（欠番）					
P24	側柱	0.48	0.31	0.55	掘立		P49	中柱	0.48	0.39	0.61	掘立	クリ
P25	側柱	0.61	0.53	0.77	掘立								

SB1683	総柱型				グリッド		桁行3間		梁行2間		面　積
桁行方向	N－28°－E				6A・B		6.90m		5.40m		37.26㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.68	0.58	0.75	掘立		P7	側柱					
P2	側柱	0.49	0.38	0.40	掘立	クリ	P8	側柱	0.69	0.56	0.80	掘立	クリ
P3	側柱		0.41	0.70	掘立	クリ	P9	側柱	0.77	0.67	0.70	掘立	
P4	側柱	0.45	0.43	0.80	掘立		P10	側柱	0.46	0.43	0.73	掘立	クリ
P5	側柱	0.45	0.38	0.60	掘立		P11	中柱	0.33	0.29	0.40	掘立	
P6	側柱	0.41	0.41	0.62	掘立								

別表１　遺構観察表（5）

古代Ⅷ層　掘立柱建物

SB2020	4面廂が付く梁間1間型（棟持無）				グリッド		桁行5間		梁間3間		面　積
桁行方向	N－60°－W				13B･C		11.00m		8.90m		97.90㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	入側柱	0.89	0.70	1.03	半打込	クリ	P13	側柱	0.40	0.27	0.87	半打込	クリ
P2	入側柱	0.80	0.76	1.44	半打込	クリ	P14	側柱	0.25	0.24	0.81	半打込	クリ
P3	入側柱	0.76	0.60	0.92	半打込	クリ	P15	側柱	0.44	0.44	0.83	半打込	クリ
P4	入側柱		0.83	1.01	半打込	クリ	P16	側柱	0.46	0.42	0.59	半打込	
P5	入側柱	0.62	0.57	0.95	半打込		P17	側柱	0.40	0.30	0.62	半打込	
P6	入側柱	0.80	0.60	1.23	半打込	クリ	P18	側柱	0.36	0.33	0.50	半打込	
P7	入側柱						P19	側柱	0.29	0.24	0.59	半打込	
P8	入側柱	0.90	0.72	1.06	半打込	クリ	P20	側柱	0.31	0.29	0.74	半打込	
P9	側柱	0.40	0.34	0.71	半打込		P21	側柱	0.36	0.34	0.72	半打込	
P10	側柱	0.36	0.33	0.84	半打込	クリ	P22	側柱					
P11	側柱	0.30	0.25	0.97	半打込	クリ	P23	側柱	0.44	0.37	0.58	半打込	クリ
P12	側柱	0.51	0.40	0.78	半打込	クリ	P24	側柱	0.65	0.40	0.57	半打込	

SB2100	梁間1間型（棟持無）				グリッド		桁行4間		梁間1間		面　積
桁行方向	N－65°－W				12･13A		6.50m		5.00m		32.50㎡
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.10	0.10	0.48	掘立		P6	側柱	0.42	0.31	0.63	掘立	
P2	側柱	0.35	0.31	0.85	掘立		P7	側柱	0.39	0.37	0.48	掘立	
P3	側柱	0.32	0.28	0.68	掘立		P8	側柱	0.31	0.30	0.47	掘立	
P4	側柱	0.28	0.23	0.79	掘立		P9	側柱	0.36	0.29	0.59	掘立	
P5	側柱	0.39	0.33	0.74	掘立		P10	側柱	0.38	0.33	0.67	掘立	

SB2200	3面廂（以上）が付く梁間1間型（棟持無）				グリッド		桁行4間以上		梁間3間		面　積
桁行方向	N－70°－W				9E、10D･E		10.00m以上		10.00m		95.40㎡以上
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	（欠番）						P14	側柱	0.44	0.39	0.53	掘立	
P2	入側柱	1.86	0.87	0.83	半打込	マツ属複維管束亜属	P15	側柱	0.22	0.18	0.40	掘立	
P3	入側柱	0.52	0.51	0.64	半打込	クリ	P16	側柱	0.34	0.34	0.46	掘立	皿木地が底部から出土、ケヤキ
P4	入側柱	0.73	0.59	0.62	半打込		P17	側柱	0.39	0.35	0.53	掘立	
P5	入側柱	0.80	0.63	1.36	半打込	クリ	P18	（欠番）					
P6	入側柱	0.74	0.65	1.35	半打込		P19	側柱	0.64	0.64	1.12	半打込	クリ
P7	入側柱	0.77	0.66	1.25	半打込		P20	側柱	0.60	0.57	1.20	半打込	クリ
P8	入側柱	0.82	0.74	1.16	半打込		P21	側柱	0.67	0.42	0.84	半打込	
P9	（欠番）						P22	側柱	0.76	0.59	0.90	半打込	クリ
P10	側柱	0.54	0.40	0.65	半打込		P23	（欠番）					
P11	側柱	0.46	0.45	0.68	半打込		P24	中柱	0.40	0.34	0.39	半打込ヵ	
P12	側柱	0.28	0.25	0.40	半打込		P25	中柱	0.55	0.33	0.69	半打込ヵ	
P13	側柱	0.20	0.18	0.25	掘立								

SB2258	4面廂が付く梁間1間型（棟持無）				グリッド		桁行6間		梁間3間		面　積
桁行方向	N－80°－W				5D･E		12.60m以上		8.70m		109.60㎡以上
柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
SK1460	入側柱	0.65	0.55	0.30	掘立		P1019	入側柱		0.56	0.64	掘立	
P1476	入側柱	0.55	0.43	0.42	掘立		SK1461	側柱	0.41	0.37	0.27	掘立	
SK1009	入側柱	0.58	0.36	0.44	掘立		P1411	側柱	0.23	0.23	0.20	掘立	
SK1011	入側柱	0.74	0.48	0.66	掘立		SK1005	側柱	0.76	0.56	0.56	掘立	
SK1003	入側柱	1.41	0.90	0.60	掘立		SK1015	側柱	0.59	0.38	0.28	掘立	
SK1032	入側柱	0.82	0.46	0.77	掘立		SK1021	側柱	0.58	0.48	0.45	掘立	

古代Ⅷ層　鍛冶炉

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SW1073	9C18			0.45	0.31				SB1400内
SW1075	9C18･23			0.39	0.32	0.04			SB1400内
SW1145	10D6			0.43	0.30	0.07	椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄関連微細遺物		SB1400内
SW1232	9D3･4	円形	弧状	0.57	0.47	0.11	椀形鍛冶滓、炉壁、羽口、鉄関連微細遺物		SB1400内
SW1352	7D23･24	不明	弧状	1.12		0.11	椀形鍛冶滓、再結合滓、鉄関連微細遺物		SB1500内
SW1353	7D24	不明		0.16				SK1596より古い	SB1500内
SW2229	8D21	円形	弧状	0.27	0.27	0.11	土錘、鉄関連微細遺物	SW1619より古い	SB1500内
SW2065	10D19･20	円形	弧状	0.27	0.25	0.06	鉄関連微細遺物		SB2200関連の鍛冶炉ヵ
SW2010	13C18	楕円形	逆台形状	0.70	0.50	0.05	鉄関連微細遺物	SD2008より古い	SB2020内
SW2259	5E20	不明		0.20				SK1459より古い	SB2258内

別表１　遺構観察表（6）

古代Ⅷ層　地床炉

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SW1076	9C25、9D5	円形	弧状	1.05	0.90				SB1400内
SW1109	7A20･25、8A21	楕円形	弧状	0.79	0.38	0.04	製塩土器		製塩関連の地床炉
SW1119	8B17･18･23	円形	逆台形状	2.00	1.80	0.20	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、鉄関連微細遺物、炭化米、種子		製塩関連の地床炉
SW1219	6A24	不整形	階段状	0.97	0.56	0.16	土師器、鉄関連微細遺物		
SW1221	6B24	楕円形	階段状	0.94	0.78	0.22	製塩土器、礫		製塩関連の地床炉
SW1228	9D3･4			0.56	0.52		鉄関連微細遺物、炭化米		SB1400内
SW1230	9D5			0.95	0.56				SB1400内
SW1231	9D5･10			0.88	0.58				SB1400内
SW1233	9D10			0.96	0.69				SB1400内
SW1250	5B10･15	楕円形	逆台形状	1.40	1.15	0.18	土師器、須恵器	P1211・1249より古い	
SW1268	6C2･3	円形	逆台形状	0.80	0.74	0.09	土師器、須恵器、鉄関連微細遺物		
SW1302	7C19	楕円形		0.76	0.46		鉄関連微細遺物		SB1500内
SW1343	8D6･11	楕円形	弧状	1.06	0.80	0.10	土師器、砥石、鉄関連微細遺物		SB1500内
SW1462	6C7	円形	弧状	0.64	0.56	0.07	鉄関連微細遺物		
SW1610	7D9･13･14	不整形		1.92	1.06				SB1500内
SW1611	7D9	楕円形		0.28	0.20				SB1500内
SW1612	7C18･19	楕円形		0.50	0.31			SK2235より新しい	SB1500内
SW1617	7D20	楕円形		0.32	0.20				SB1500内
SW1618	7D5	楕円形		0.63	0.45				SB1500内
SW1619	8D16･21	不整形		2.00	1.14		鉄関連微細遺物	SW2229より新しい	SB1500内、廃絶後上面に床を張る
SW2025	11B19	円形		0.48	0.45				炉の中心部に向かって傾斜した小ピットが周囲を囲む
SW2058	14E6	楕円形		0.32	0.25				

古代Ⅷ層　井戸

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SE1193	5A23	円形	箱状	0.75	0.75	0.85	鉄関連微細遺物		
SE1194	5A15	不明	逆台形状			1.12	土師器		
SE1226	7B19･20･24･25	円形	漏斗状	2.47	2.23	1.00	土師器、須恵器、黒色土器	SD1377より古い	
SE1338	6D2･3	円形	逆台形状	1.03	1.02	1.02	土師器、須恵器		
SE1451	6D24、6E4	不明	漏斗状	1.13		0.60	土師器、須恵器		
SE1502	6E9･14	不明	逆台形状	1.66		0.87	土師器	SK1447より新しく、SK1453より古い	
SX2001-SE1	12D23･24、13E3･4	楕円形	漏斗状	1.72	1.31	1.44	土師器、須恵器、墨書土器、砥石		SX2001内
SX2001-SE2	12D19･24	円形	漏斗状	1.18	1.18	0.88	土師器		SX2001内
SX2001-SE3	12D15、13D11	円形	漏斗状	1.61	1.35	2.13	土師器、須恵器、曲物、炉壁		SX2001内
SE2007	10A14･19	円形	箱状	0.93	0.83	1.08	須恵器、土師器		
SE2158	13B22･23、13C2･3	円形	漏斗状	2.19	2.06	1.28	土師器、黒色土器		SB2020内

古代Ⅷ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK1078	8D5･10、9D1･6	長方形	逆台形状	2.92	2.35	0.25	土師器、須恵器、羽口、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SK1159より新しい	
SK1085	9B11･12･16･17	円形	逆台形状	0.42	0.41	0.17		SK1087より古い	
SK1087	9B12	楕円形	逆台形状	1.63	1.30	0.51	土師器	SK1085より新しい	
SK1088	9B8･9･13	楕円形	逆台形状	2.42	1.53	0.18	土師器		
SK1105	8A7･12	円形	逆台形状	0.72	0.65	0.17	土師器		
SK1106	8A2･7	円形	逆台形状	0.67	0.61	0.17			
SK1107	8A11･12	円形	逆台形状	0.83	0.80	0.16	土師器、須恵器、不明鉄製品、鉄関連微細遺物、炭化米、種子		
SK1108	8A24	楕円形	逆台形状	1.77	1.08	0.10	土師器、黒色土器、鉄関連微細遺物		
SK1110	8A21	楕円形	逆台形状	1.84	0.95	0.15	土師器、鉄関連微細遺物	SK1551より新しい	

別表１　遺構観察表（7）

古代Ⅷ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK1111	8A12･13･17･18	円形	逆台形状	1.45	1.30	0.27	土師器、黒色土器、鉄関連微細遺物		
SK1112	8A19	楕円形	逆台形状	1.04	0.82	0.12	土師器		
SK1113	8A19･20	円形	逆台形状	1.20	1.10	0.14	土師器		
SK1114	8B9･10･14	楕円形	逆台形状	1.25	0.60	0.26	土師器		
SK1115	8B8	楕円形	逆台形状	1.67	1.20	0.32	土師器		
SK1118	8B21	円形	U字状	0.70	0.65	0.50	土師器、黒色土器	SB1500-P34より古い	
SK1120	8B19･20･24･25	楕円形	逆台形状	3.16	2.65	0.42	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、墨書土器、漆紙、鉄関連微細遺物、炭化米、種子		
SK1121	8B22、8C2	楕円形	逆台形状	1.02	0.72	0.18	土師器、鉄製品、鉄関連微細遺物	SD1377より新しい	
SK1140	10C16	楕円形	弧状	1.10	0.92	0.05	土師器		SB1400内
SK1141	10C21、10D1	楕円形	逆台形状	1.79	1.50	0.18	土師器、黒色土器、墨書土器		SB1400内、土器廃棄土坑
SK1144	8B16･21	楕円形	弧状	1.76	1.35	0.35		SD1377より新しい	
SK1153	7B11･12･16･17	不整形	逆台形状	2.56	1.68	0.22	土師器、黒色土器		
SK1154	7B6･7･11･12	楕円形	弧状	1.58	1.20	0.26	土師器、須恵器、黒色土器		
SK1156	10C22･23、10D2･3	長方形	逆台形状	2.56	2.07	0.22	土師器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SD1077より新しい	
SK1157	7A25	円形	逆台形状	0.86	0.85	0.10	土師器		
SK1158	7B7･8･12･13	円形	逆台形状	1.78	1.52	0.24	土師器		
SK1159	8D10･15、9D6･11	隅丸長方形	逆台形状	2.75	2.15	0.32	土師器、黒色土器、鉄関連鍛冶滓、炭化米	SK1078より古い	
SK1160	7A21	楕円形	逆台形状	1.08	0.83	0.27			
SK1191	5A17･18･22･23	円形	逆台形状	0.70	0.62	0.56			
SK1192	5A25	円形	弧状	0.69	0.58	0.20	土師器		
SK1208	5B5	円形	逆台形状	0.54	0.48	0.15	土師器		
SK1218	5B4･9	楕円形	逆台形状	1.28	1.00	0.15	土師器	SK1301より新しい	
SK1227	9D9	円形	逆台形状	0.67	0.54	0.12	羽口、鉄滓、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SX1224より古い	SB1400内、廃滓用の穴
SK1229	7A22、7B2	不整形	逆台形状	2.65	1.82	0.47	土師器		
SK1240	5B4	楕円形	逆台形状	0.88	0.72	0.15	土師器		
SK1244	5B19･20	楕円形	逆台形状	1.00		0.20	土師器		
SK1246	7B6	円形	弧状	0.47	0.40	0.14	土師器、黒色土器		
SK1251	6A17･18･22･23	不明	逆台形状	2.60		0.40	土師器、須恵器、黒色土器、墨書土器		
SK1252	6B24･25	円形	逆台形状	1.33	1.15	0.32	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器	SD1377より新しい	
SK1255	6B16	不明	半円状	0.53		0.20	土師器		
SK1286	9E14･15･19	不明	弧状		1.28	0.35	土師器、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	P1344・1621より新しい	
SK1301	5B4･9	楕円形	逆台形状	1.08	0.72	0.13	土師器	SK1218より古い	
SK1345	9E14	不明	逆台形状		0.73	0.20		SK1286より古い	
SK1351	7D18	楕円形	弧状	1.07	0.72	0.24	土師器、黒色土器、鉄関連微細遺物	SK1570より新しい	SB1500内
SK1354	6D21～23、6E1～3	長方形	逆台形状	3.18	2.60	0.51	土師器、須恵器、黒色土器、漆紙、鉄関連微細遺物、炭化米、種子		
SK1355	7D23	楕円形	逆台形状	0.52	0.48	0.07	椀形鍛冶滓、再結合滓、羽口、鉄関連微細遺物		SB1500内、廃滓用の穴
SK1356	8D24･25、8E4･5･9･10	長円形	弧状	3.66	0.80	0.30	土師器、黒色土器、鉄関連微細遺物、種子		
SK1357	8E3･4･8･9	楕円形	逆台形状	1.90	1.70	0.26	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、墨書土器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米		
SK1358	8E2･3･7･8	楕円形	逆台形状	2.01	0.93	0.33	土師器、灰釉陶器		
SK1360	8D17･18･22･23	円形	弧状	2.18	1.78	0.49	土師器、須恵器、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄製品、砥石		SB1500内、断面フラスコ状カ
SK1361	5D20･25、6D16･21	長方形	逆台形状	2.60	2.10	0.59	土師器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米		
SK1363	8C19	楕円形	逆台形状	0.94	0.60	0.11	土師器		

別表１　遺構観察表（8）

古代Ⅷ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK1364	8C13･14	楕円形	逆台形状	1.41	0.89	0.16	土師器		
SK1365	8C8･9･14	円形	弧状	2.09	1.80	0.18	土師器、灰釉陶器		
SK1369	8C13	楕円形	弧状	0.63	0.48	0.23	土師器、黒色土器		
SK1384	8D2	円形	逆台形状	0.67	0.65	0.45	土師器、黒色土器、羽口、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物		SB1500内
SK1387	6C17	円形	逆台形状	1.00	0.94	0.16	羽口、鉄関連微細遺物		
SK1406	6D13	楕円形	逆台形状	1.04	0.78	0.13	土師器、須恵器		
SK1407	6D7･8	楕円形	弧状	1.18	0.88	0.42	土師器		
SK1408	7C17･18･22･23	円形	逆台形状	1.18	1.11	0.43	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、鉄関連微細遺物	P1443より古い	SB1500内
SK1419	8D7･12	長方形	逆台形状	1.95	1.22	0.34	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、緑釉陶器、灰釉陶器、墨書土器、漆パレット、漆器椀・皿、鉄床石、鉄関連微細遺物、炭化米		SB1500内、土器廃棄土坑
SK1421	6D5･10、7D1･6	長方形	逆台形状	1.28	1.18	0.28	土師器		
SK1436	10E1･2･6･7･11･12	不明	弧状		3.57	0.46	土師器、黒色土器、土錘、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SB2200より古い	
SK1444	7C17･22	円形	逆台形状	1.24	1.02	0.26	土師器、須恵器、礫、鉄関連微細遺物、炭化米		SB1500内
SK1447	6E9･14	不明	弧状	3.00		0.42	土師器、須恵器	SK1453、SE1502より古い	
SK1449	6C18	不明	逆台形状	0.39		0.17	土師器		
SK1450	6D8	楕円形	弧状	0.95	0.55	0.12	土師器		
SK1452	6D24	不明	逆台形状		0.47	0.20			
SK1453	6E14･15	不明	逆台形状	0.83		0.48	土師器	SK1447、SE1502より新しい	
SK1459	5E20	不明	逆台形状		0.77	0.30	炉壁、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物	SW2259より新しい	
SK1466	6E13･14	円形	逆台形状	0.63	0.57	0.20			
SK1469	7C7	楕円形	逆台形状	0.79	0.63	0.09	土師器		SB1500内
SK1472	7C7	円形	逆台形状	0.53	0.49	0.20	土師器		SB1500内
SK1473	7C6･7	楕円形	弧状	0.91	0.63	0.13	土師器、鉄関連微細遺物		SB1500内
SK1474	8E14･15･19･20	不明	逆台形状	2.20		0.19	土師器、鉄関連微細遺物		
SK1479	7D7･8･12･13	長方形	逆台形状	1.45	1.15	0.35	土師器、須恵器、黒色土器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物		SB1500内
SK1488	7D9	円形	逆台形状	0.74	0.64	0.16	土師器	SK2255より新しい	SB1500内
SK1489	7B1･6	円形	逆台形状	1.90	1.70	0.16	土師器、黒色土器	P1174より古い	
SK1499	7C19･20･24･25、7D4･5	不整形	弧状	2.45	1.82	0.14	土師器、須恵器	SB1500より新しく、SK1536・1537より古い	SB1500内
SK1505	7C12	円形	逆台形状	0.45	0.44	0.13	土師器		SB1500内
SK1511	7C10･15	楕円形	逆台形状	2.42	1.54	0.35	土師器、須恵器、鉄関連微細遺物、炭化米、種子		SB1500内
SK1512	8D17	円形	弧状	0.70	0.62	0.11	土師器、鉄関連微細遺物		SB1500内
SK1513	8D18	楕円形	弧状	0.84	0.62	0.20	土師器、黒色土器、椀形鍛冶滓、礫、鉄関連微細遺物、炭化米		SB1500内
SK1515	7C13	円形	逆台形状	0.40	0.36	0.06	土師器		SB1500内
SK1526	7E13	不明	弧状	0.60		0.21	土師器		
SK1527	5D10･15	円形	逆台形状	0.55	0.51	0.30	土師器		
SK1529	7B7	円形	逆台形状	1.06	1.05	0.23			
SK1531	6C25、6D5、7C21、7D1	円形	逆台形状	2.00	1.70	0.65	土師器、礫、炭化材	SD1377より新しい	
SK1533	8C18	不明	弧状	1.22		0.11	土師器、須恵器、灰釉陶器、砥石、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SD1377より新しい	
SK1535	8C4･5･9･10	不明	不明			0.15	土師器	SD1077、SK1365･1573より古い	
SK1536	7C25	楕円形	逆台形状	0.58	0.41	0.16	土師器、緑釉陶器	SK1499より新しい	SB1500内
SK1537	7C25	楕円形	逆台形状	0.50	0.31	0.14	土師器、鉄関連微細遺物	SK1499より新しい	SB1500内
SK1539	6D9	不明	逆台形状		0.70	0.13	土師器		
SK1540	7E12･13	不明	逆台形状	2.20		0.12	土師器	SD1491より新しい	

別表１　遺構観察表（9）

古代Ⅷ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK1544	6D14･15･19･20、7D11･16	不明	弧状	3.75		0.34	土師器、灰釉陶器		
SK1546	7C13･14･18･19	円形	弧状	0.44	0.43	0.06	土師器		SB1500内
SK1547	7C14	円形	弧状	0.39	0.37	0.07	土師器		SB1500内
SK1548	7C20	円形	逆台形状	0.40	0.39	0.16	土師器、鉄製品		SB1500内
SK1551	8A21、8B1	方形	弧状	1.39	1.39	0.20	土師器、礫	SK1110より古い	
SK1557	5A20、6A16	楕円形	逆台形状	0.97	0.85	0.15	土師器		
SK1558	7D24	楕円形	逆台形状	1.20	0.90	0.26	土師器、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SK1596より新しい	SB1500内
SK1560	7D23、7E3	不整形	弧状	0.91	0.81	0.16	土師器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物		SB1500内
SK1569	6A21	楕円形	逆台形状	0.79	0.64	0.16			
SK1570	7D18	不明	逆台形状	1.48		0.07	土師器、鉄関連微細遺物、炭化米	SK1351より古い	SB1500内
SK1571	7D18	不整形	弧状	0.88	0.75	0.15	土師器、鉄関連微細遺物、炭化米	P2212より古い	SB1500内
SK1573	8C9･10･14･15	楕円形	弧状	1.69	1.02	0.16	土師器		
SK1577	8D11	円形	逆台形状	0.80	0.76	0.21	土師器、鉄関連微細遺物、炭化米		SB1500内
SK1585	7B23、7C3	不明	逆台形状	0.78		0.28	土師器	P1586より古い	SB1500内
SK1587	5E20	不整形	弧状	[0.70]	0.55	0.17	土師器、鉄滓、鉄関連微細遺物		SB2258内、廃滓用の穴
SK1588	8D12･17	不整形	逆台形状	1.05	0.60	0.13	土師器		SB1500内
SK1589	6B24、6C4	不明	逆台形状		0.60	0.18	土師器		
SK1590	8C3･4･8	不明	逆台形状	1.60		0.24	土師器、黒色土器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米		
SK1591	8A24	楕円形	逆台形状	1.36	1.05	0.11	土師器		
SK1596	7D24	不明	逆台形状		0.96	0.10		SK1558より古く、SW1353より新しい	SB1500内
SK1601	7D24･25	不整形	弧状	[0.52]		0.07	椀形鍛冶滓、鉄床石、鉄関連微細遺物		SB1500内、廃滓用の穴
SK1602	7C20･25、8C21	円形	逆台形状	0.56	0.49	0.13	土師器		SB1500内
SK1615	8D6	円形	弧状	0.58	0.58	0.13	鉄関連微細遺物		SB1500内
SK1630	6D2･3	楕円形	逆台形状	1.34	1.07	0.20	土師器、須恵器		
SK1631	6C12･13	楕円形	逆台形状	0.72	0.50	0.12	土師器		
SK1660	6D12	円形	逆台形状	0.84	0.74	0.16	須恵器		
SK1686	5C8	円形	半円形	0.50	0.50	0.26			
SK2005	13C22･23	円形	逆台形状	0.86	0.82	0.28	土師器		
SK2006	10A4･5	不明	逆台形状	1.59		0.69	礫		
SK2011	13C23･24	円形	弧状	0.74	0.70	0.18	土師器		
SK2015	12B18	円形	半円形	0.70	0.61	0.19			
SK2031	12C24･25、12D4･5	楕円形	逆台形状	3.52	2.50	0.24	土師器、須恵器、土錘、鉄関連微細遺物、炭化米		
SK2045	11B18･23	楕円形	弧状	1.12	0.82	0.13	土師器、礫		SW2025関連の遺構
SK2046	12D3･4･5･9	楕円形	逆台形状	3.05	2.20	0.42	土師器、須恵器、土錘、鉄関連微細遺物、炭化米		
SK2056	14D21	円形	逆台形状	1.51	1.33	0.37	土師器	P2124より新しい	
SK2057	14E1･2･6	楕円形	弧状	1.79	1.53	0.16	土師器	P3016より古い	
SK2061	14C3･8･9	不整形	弧状	1.30	1.25	0.19	土師器		
SK2062	14B18･23	楕円形	逆台形状	1.09	0.59	0.42	土師器、黒色土器	SD2060より新しい	
SK2088	14C1	不明	弧状		0.82	0.09	土師器		
SK2090	13C5･10、14C1･6	不整形	逆台形状	2.28	0.90	0.20	土師器	SB2020-P23より新しい	
SK2092	13D9	楕円形	逆台形状	0.78	0.54	0.08	土師器		
SK2111	14C19･20	円形	弧状	0.78	0.66	0.11	土師器、礫		
SK2112	10E10	楕円形	逆台形状	1.16	0.65	0.27	土師器		
SK2119	13C18	不整形	弧状	0.33	0.24	0.06	椀形鍛冶滓、炉壁、鉄関連微細遺物	SD2008より古い	SB2020内、廃滓用の穴
SK2120	13C18	円形	弧状	0.43	0.39	0.07	土師器、漆紙		SB2020内
SK2122	14D6･7	円形	逆台形状	1.45	1.25	0.22	土師器、須恵器	SD2088・2054・2055・2127より新しい	
SK2129	13D13･18	円形	弧状	0.60	0.52	0.14			
SK2172	8D1･2	楕円形	弧状	1.19	0.95	0.34	土師器	SB1500-P14より新しい	SB1500内

別表１　遺構観察表（10）

古代Ⅷ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK2175	14B13･18	楕円形	逆台形状	0.66	0.32	0.11			
SK2179	13C21、13D1	楕円形	弧状	1.11	0.75	0.19	土師器		
SK2180	14C6･11	長方形	弧状	1.41	0.80	0.16	土師器		
SK2191	14B2	円形	逆台形状	1.05	0.95	0.12	土師器		
SK2192	7C24、7D4 ･5	長方形	弧状	1.84	1.07	0.30	炭化米、種子		SB1500内
SK2196	12E8･13	不明	逆台形状	0.72		0.21	土師器		
SK2202	14C2･3･7･8	不明	逆台形状	0.72		0.22	土師器	SD2030、P2190より新しく、SD2064、P2214より古い	
SK2203	7D14･19	円形	逆台形状	0.82	0.78	0.18	土師器		SB1500内
SK2205	13E12	不明	逆台形状	0.50		0.08	土師器		
SK2210	13D15	楕円形	弧状	0.62	0.48	0.10			
SK2226	7D6	長方形	弧状	1.70	1.13	0.20	土師器、土錘	SD1377、SK1421より古い	
SK2227	8C22･23、8D2	不整形	弧状	1.87	1.32	0.16	土師器、須恵器	SB1500-P39、SD1377、P1541・1542より古い	SB1500内
SK2235	7C13･14･18･19	長方形	逆台形状	2.05	1.26	0.42	土師器、炭化米、種子		SB1500内
SK2249	9D3	不整形	弧状	1.16	0.88	0.15			SB1400内
SK2255	7D3･4･8･9	長方形	逆台形状	2.27	0.98	0.09	土師器、炭化米、種子	SK1488より古い	SB1500内
SK2256	6C13･14･18･19	楕円形	逆台形状	1.63	1.20	0.21	土師器、鉄関連微細遺物		
SK3022	13E3	楕円形	逆台形状	1.29	0.70	0.07			
SK3023	12E5･10	円形	逆台形状	0.70	0.63	0.18			
SK3027	11C7･8･12･13	楕円形	弧状	1.12	0.84	0.13			
SK3037	12D18	楕円形	弧状	0.97	0.62	0.09			
SK3039	15D12	不明	弧状	1.49		0.11		SD2127より新しい	

古代Ⅷ層　性格不明遺構

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SX1084	10B14･15･19･20	不整形	弧状	1.18	0.25	0.05	土師器、黒色土器、製塩土器、礫		
SX1104	9･10D	不整形	弧状	10.06	3.68	0.34	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、墨書土器、鉄製品、砥石、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SB2200、SD1103より新しい	
SX1122	9D13･14･18･19	不整形		1.25	0.95		鉄滓、鉄関連微細遺物、炭化米		鉄滓など鍛冶関連遺物の廃棄跡、SD1077･1189がある程度埋まった後に投棄
SX1224	9D3･4･8･9	不整形		1.63	0.24		椀形鍛冶滓、鍛冶滓、炉壁、鉄関連微細遺物、炭化米		SB1400内、鉄滓など鍛冶関連遺物の廃棄跡、廃滓用の穴SK1227が溢れたものと思われる
SX1545	7D4	円形		0.40	0.32		礫		SB1500内、床面の一部が突き固めたかのように硬くしまる
SX1684	6B9	不整形	箱状	0.40	0.32	0.08	土師器		SB1683内、床面の一部が突き固めたかのように硬くしまる
SX2001	12D･E、13D	不整形	逆台形状	7.98	3.96	0.40	土師器、黒色土器、漆容器、椀形鍛冶滓		SX2001-SE1･2･3を遺構内に含む、井戸関連の遺構と思われる

別表１　遺構観察表（11）

古代Ⅷ層　溝

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	上幅	深さ			
SD1077	8B･C、9C･D、10B～D	西側開口の「コ」の字状	逆台形状	45.50	0.50～2.00	0.18～0.47	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、墨書土器、灰釉陶器、緑釉陶器、羽口、砥石、鉄床石、漆パレット、漆紙、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄滓、半溶解石、炉壁、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SX1122、SK1156より古い	SB1400の区画溝
SD1090	9A	N－33°－W	逆台形状	［5.35］	0.50～2.00	0.18～0.47	土師器、須恵器、黒色土器、砥石、礫		
SD1103	8～10D	N－40°－E	逆台形状	［12.70］	0.20～2.00	0.05～0.31	土師器、黒色土器、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SX1104、SD1189より古く、SB2200より新しい	
SD1146	7A	N－67°－W	U字状	［4.36］	0.20～0.28	0.12	土師器		
SD1147	5～7B	N－23°－E	逆台形状	［21.40］	0.28～1.50	0.10～0.24	土師器、須恵器、黒色土器、墨書土器、漆紙		
SD1152	7A	N－20°－W	逆台形状	［7.00］	0.69～1.05	0.11	土師器		
SD1161	7A	N－35°－W	弧状	［2.10］	0.50～1.00	0.18	土師器		
SD1164	7A･B	N－36°－W	半円状	8.97	0.22～0.42	0.21	土師器	SD1165･1377より新しい	
SD1165	7B	N－28°－E	弧状	［4.34］	0.19～0.28	0.11	土師器		
SD1189	8･9D	N－38°－E	U字状	9.86	0.20～0.52	0.22	土師器、黒色土器、鉄関連微細遺物、炭化米、種子		SD1103と平行
SD1222	6B、7B･C	N－73°－W	弧状	［5.63］	0.21～0.42	0.12	土師器、須恵器	SD1147･1377より新しい	
SD1311	5C･D	N－70°－W	弧状	8.66	0.28～0.38	0.13	土師器		SB1400･1500、SD1314と平行
SD1313	5B･C	N－70°－W	逆台形状	4.08	0.33～0.46	0.10	土師器、須恵器		
SD1314	5B、6B～D	N－67°－W	弧状	［18.00］	0.27～0.43	0.12	土師器、黒色土器、羽口、椀形鍛冶滓		SD1311と平行
SD1315	6C	N－70°－W	弧状	［1.85］	0.18～0.24	0.08		SD1314より古い	
SD1318	6B	N－67°－W	U字状	［1.41］	0.21～0.25	0.12	土師器		東側は北へ屈曲
SD1359	8E	N－18°－E	弧状	4.70	0.40～0.58	0.16	土師器、鉄関連微細遺物		SD1377の東辺と平行
SD1377	6B･C、7B～E、8B～E	長方形に全周	逆台形状	71.80	0.80～2.32	0.14～0.58	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、墨書土器、土製品、緑釉陶器、灰釉陶器、石製品、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、炉壁、ガラス質滓、羽口、漆パレット、漆紙、土錘、砥石、鉄床石、凹石、鉄関連微細遺物、炭化米、種子	SK1144･1252･1533、SD1164・1222より古く、SE1226･SK1118・1531・2226、SD1491・1492・1552より新しい	SB1500の区画溝
SD1448	6C	N－67°－W	弧状	1.92	0.22～0.34	0.10	土師器、鉄関連微細遺物		東側は北へ屈曲
SD1455	5･6D	N－11°－E	逆台形状	［6.56］	0.23～0.32	0.11	土師器		
SD1463	6C･D	N－70°－W	逆台形状	［1.86］	0.28～0.36	0.08	土師器		SD1314と平行
SD1490	6D、7D･E	N－80°－E	弧状	［13.00］	0.20～0.35	0.15	土師器	P1522より古い	
SD1491	7E	N－44°－W	弧状	［5.30］	0.30～0.75	0.19	土師器	SD1377･SK1540より古い	
SD1492	6･7E	N－10°－W	弧状	［5.93］	0.32～0.49	0.15	土師器、須恵器	SD1377より古い	
SD1552	7E	N－65°－W	弧状	［4.90］	0.66～0.90	0.24	土師器	SD1377より古い	西側は北へ屈曲
SD1563	6D	N－24°－E	弧状	［2.24］	0.19～0.27	0.09	土師器、土錘	SK1421より古い	
SD1564	6C･D	N－60°－W	弧状	［5.90］	0.40～0.90	0.11	土師器	SD1565より古い	西側は北へ屈曲
SD1565	6C	N－10°－E	弧状	［2.05］	0.25～0.32	0.07	土師器	SD1564より新しい	

別表１　遺構観察表（12）

古代Ⅷ層　溝

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	上幅	深さ			
SD2008	13C～E、14C･D	東側開口の「コ」の字状	弧状	32.00	0.33～1.00	0.25	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、石製権状錘、砥石	SK2122より古く、SB2020、SD2055・3024より新しい	
SD2029	12･13AA･A	隅丸長方形に全周	弧状	32.00	0.42～0.85	0.20	土師器		SB2100の区画溝
SD2030	14B～D	N－85°－W	弧状	16.00	1.28～1.66	0.40	土師器、黒色土器、製塩土器	SD2061・2146・2173より新しく、SK2202、SD2064より古い	
SD2039	15E	N－50°－W	弧状	［2.04］	0.40	0.10	土師器		
SD2040	13･14D･E	東側に開口する鉤状	弧状	［8.35］	0.18～0.85	0.30	土師器、黒色土器、製塩土器、砥石		
SD2041	15E	N－50°－W	U字状	［3.06］	0.21～0.34	0.18	土師器、製塩土器		
SD2047	11E	N－70°－W	弧状	2.65	0.15～0.24	0.05	土師器		
SD2054	13C、14C･D	N－90°－W	弧状	13.50	0.27～0.70	0.10	土師器、須恵器	SK2122より古い	
SD2055	13C･D、14D	「L」字状	弧状	［18.40］	0.14～0.32	0.13	土師器	SK2122、SD2008より古く、SB2020-P10、SD2096･3024より新しい	
SD2060	14B･C	N－50～70°－W	U字状	5.89	0.39～0.55	0.34	土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器	SK2062、SD2030より古い	
SD2064	13B、14B･C	南側開口の「コ」の字状	弧状	［14.00］	0.32～0.58	0.32	土師器、須恵器、黒色土器	SK2202、SD2030より新しく、SD2116より古い	
SD2096	13C･D、14D･E	N－85°－E	弧状	［19.34］	0.18～0.50	0.14	土師器、須恵器、黒色土器	SD2055、P2157より古く、SD3024より新しい	
SD2098	13D･E	N－85°－W	逆台形状	［4.36］	0.24～0.38	0.17	土師器		
SD2099	13D･E	N－65°－W	弧状	［7.00］	0.25～0.64	0.21	土師器、須恵器、黒色土器	SD2040より新しい	
SD2108	13D･E	N－65°－W	弧状	［6.60］	0.41～0.67	0.19	土師器、黒色土器	SK3022より新しい	SD2099と平行
SD2116	13･14B	「L」字状	弧状	11.00	0.10～1.12	0.30	土師器、須恵器、砥石	SB2020-P6、SD2117･2118より新しい	
SD2117	13･14B	N－20°－E	U字状	［3.80］	0.12～0.40	0.12	土師器	SD2116より古い	
SD2118	13･14B	N－20°－E北側で東へ屈曲	逆台形状	6.54	0.28～0.43	0.16	土師器、須恵器	SD2116より古い	
SD2121	14C･D	N－85°－W	逆台形状	3.66	0.20～0.55	0.20	土師器、須恵器、製塩土器		
SD2127	9～12C、5～10･12～5D	N－25°－E	漏斗状	［102.5］	1.15～2.35	0.85	土師器、須恵器、鉄関連微細遺物	Ⅷ層遺構は、すべて本溝より新しい	11C区から北は東側へ緩く屈曲
SD2131	13C･D	N－70°－W	弧状	9.78	0.40～0.84	0.15	土師器、黒色土器、製塩土器、砥石	SD3024より新しい	
SD2138	13C･D	N－75°－W	弧状	2.77	0.23～0.36	0.09	土師器	P2104より古い	
SD2146	14C	N－30°－E	弧状	［3.46］	0.35～0.52	0.10	土師器	SD2030、P2162より古い	
SD2150	12B･C、13B	「L」字状	弧状	19.00	0.76～1.22	0.21	土師器、須恵器、磨石、砥石、椀形鍛冶滓、鉄関連微細遺物、炭化米		SB2020の区画溝
SD2173	14C	N－10°－E	弧状	［5.00］	0.50～0.79	0.14	土師器、敲石	SD2008・2030より古い	
SD2178	14C	N－20°－E	弧状	1.69	0.30～0.40	0.09	土師器		
SD2198	15E	N－50°－W	弧状	［1.17］	0.31～0.40	0.12			SD2039･2041と平行
SD2213	13B	N－40°－E	弧状	2.22	0.30	0.10	土師器		
SD3006	12A	N－70°－W	弧状	1.87	0.12～0.26	0.06			
SD3007	12B	N－70°－W	逆台形状	0.49	0.18～0.21	0.05			

別表１　遺構観察表（13）

古代Ⅷ層　溝

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	上幅	深さ			
SD3009	12A	N－70°－W	逆台形状	0.77	0.14～0.24	0.05			
SD3024	12･13D	N－0°－E	弧状	［11.52］	0.32～0.70	0.12		SX2001、SD2008・2055・2096・2131より古い	
SD3110	10C	N－70°－W	逆台形状	［1.14］	0.27～0.42	0.15			
SD3142	8C	N－67°－W	弧状	5.60	0.60～1.00	0.40			SD1377の北辺内にある

中世Ⅳ層　掘立柱建物

SB670		総柱型（北廂付き）					グリッド		桁行2間		梁間3間		面　積
桁行方向		N－70°－W					5･6B･C		6.60m		5.85m		38.61㎡
柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.54	0.49	0.53	掘立		P7	側柱	0.58	0.47	0.51	掘立	
P2	側柱	0.43	0.42	0.60	掘立		P8	側柱	0.49	0.41	0.53	掘立	
P3	側柱	0.39	0.33	0.65	掘立		P9	中柱	0.58	0.47	0.58	掘立	
P4	側柱	0.51	0.40	0.45	掘立		P10	側柱	0.18	0.16	0.34	掘立	
P5	側柱	0.41	0.35	0.47	掘立		P11	側柱	0.25	0.21	0.48	掘立	
P6	側柱	0.59	0.52	0.56	掘立		P12	側柱	0.20	0.16	0.28	掘立	

SB691		梁間1間型（棟柱無）					グリッド		桁行3間		梁間1間		面　積
桁行方向		N－60°－W					5･6C･D		8.10m		4.20m		34.02㎡
柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.34	0.30	0.34	掘立		P5	側柱	0.30	0.27	0.35	掘立	
P2	側柱	0.35	0.34	0.36	掘立		P6	側柱	0.34	0.29	0.29	掘立	
P3	側柱	0.37	0.32	0.33	掘立		P7	側柱	0.27	0.27	0.35	掘立	
P4	側柱	0.38	0.33	0.30	掘立		P8	側柱	0.35	0.32	0.34	掘立	

SB789		梁間1間型（棟柱無）					グリッド		桁行2間		梁間3間		面　積
桁行方向		N－70°－W					5C、6C･D		4.80m		2.40m		11.52㎡
柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.32	0.26	0.32	掘立		P4	側柱	0.22	0.20	0.32	掘立	
P2	側柱	0.34	0.30	0.25	掘立		P5	側柱	0.29	0.21	0.49	掘立	
P3	側柱	0.41	0.36	0.28	掘立		P6	側柱	0.40	0.34	0.26	掘立	

SB790		建物又は柵列					グリッド		2間				
方　向		N－70°－W					5C･D		3.90m				
柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.34	0.22	0.28			P3	側柱	0.20	0.17	0.31		
P2	側柱	0.30	0.25	0.32									

SB855		総柱建物					グリッド		桁行3間		梁間2間		面　積
桁行方向		N－67°－W					7C･D		9.15m		4.80m		43.92㎡
柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.27	0.22	0.18	掘立		P7	側柱	0.30	0.23	0.25	掘立	
P2	側柱	0.25	0.23	0.18	掘立		P8	側柱	0.25	0.24	0.36	掘立	
P3	側柱	0.24	0.24	0.18	掘立		P9	側柱	0.27	0.26	0.24	掘立	
P4	側柱	0.30	0.27	0.27	掘立		P10	側柱	0.23	0.18	0.25	掘立	
P5	側柱	0.22	0.22	0.22	掘立		P11	中柱	0.24	0.20	0.33	掘立	
P6	側柱						P12	中柱	0.30	0.25	0.24	掘立	

SB919		総柱建物					グリッド		桁行2間		梁間2間		面　積
桁行方向		N－3°－E					9B･C		7.20m		4.65m		33.48㎡
柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種	柱穴№.	種別	計測値（m）			柱の据え方	柱根樹種
		長径	短径	深さ					長径	短径	深さ		
P1	側柱	0.29	0.24	0.08	掘立		P6	側柱	0.14	0.14	0.07	掘立	
P2	側柱	0.29	0.22	0.10	掘立		P7	側柱	0.23	0.21	0.05	掘立	
P3	側柱	0.22	0.21	0.09	掘立		P8	側柱	0.28	0.23	0.13	掘立	
P4	側柱	0.22	0.21	0.08	掘立		P9	中柱	0.22	0.17	0.16	掘立	
P5	側柱	0.17	0.14	0.08	掘立								

別表１　遺構観察表（14）

中世Ⅳ層　井戸

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SE040	12E2･3･7･8	楕円形	U字状	1.45	1.20	1.42	青磁、木杓、鉄滓、鍛冶滓		西部遺跡Iの追加調査
SE048	6A18･23	不整形	逆台形状	1.75	1.50	1.13	珠洲焼		西部遺跡Iの追加調査
SE059	7B2	不整形	箱状・階段状	1.30	1.25	1.18			西部遺跡Iの追加調査
SE262	10E13･18	楕円形	U字状	2.11		1.24	珠洲焼、白磁、砥石		西部遺跡Iの追加調査
SE565	5A19･24	楕円形	階段状	1.91	1.42	1.00	珠洲焼、青磁		
SE598	5A15	円形	逆台形状	1.68	1.68	1.63	珠洲焼、漆器、礫		
SE600	5B13･14･18･19	楕円形	逆台形状	2.40	1.87	1.62	珠洲焼		
SE667	5B5･10	楕円形	箱状	1.71	1.33	1.57	珠洲焼、礫		
SE674	5B20、6B16･21	楕円形	逆台形状	2.18	1.88	1.70	珠洲焼、常滑焼、白磁、椀形鍛冶滓、板材、井戸側部材		
SE704	6C22	円形	箱状	0.84	0.84	1.40	珠洲焼、井戸側部材		刳舟を切断して利用した井戸側、2個体あり両舷を合わせて筒状の井戸側とする
SE753	6C23	楕円形	階段状	1.87	1.36	1.00	珠洲焼		
SE754	6D3･4･8･9	円形	漏斗状	1.40	1.40	0.96	珠洲焼		
SE765	5B8･13	円形	階段状	1.16	1.16	1.62	珠洲焼、白磁、漆器、砥石		
SE841	9D13･14	楕円形	U字状	1.45	1.35	1.02	珠洲焼、鉄滓、礫		
SE843	5A7･8･12･13	円形	階段状	2.00	2.00	1.60	珠洲焼、白磁、古瀬戸、砥石		
SE844	5A23･5B3	円形	U字状	0.90	0.90	0.98	青磁		
SE860	6E12･13･17･18	楕円形	階段状	2.48	2.06	1.67	青磁、円形曲物、木杭		
SE4001	12E7･12	不明	漏斗状	1.17		0.77			
SE4002	13D20･25	円形	逆台形状	1.60	1.60	0.90	珠洲焼、砥石		
SE4003	14D11･16	円形	漏斗状	1.80	1.56	1.34	珠洲焼		

中世Ⅳ層　土坑

遺構名	グリッド	平面形	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長径	短径	深さ			
SK005	14D13･14･18･19	不整形	階段状	2.12	1.64	0.80			西部遺跡Iの追加調査
SK014	13C14	円形	U字状	1.21	1.13	0.74			西部遺跡Iの追加調査
SK539	7A5	円形	U字状	0.60	0.56	0.38			
SK548	6A2	円形	逆台形状	0.74	0.70	0.24			
SK559	5A4･5･9･10	楕円形	逆台形状	1.45	0.91	0.52	珠洲焼	P588・589より古い	
SK561	5A2	円形	U字状	0.64	0.55	0.42		SK570より新しい	
SK562	5A4	円形	U字状	0.45	0.42	0.23		P620より新しい	
SK567	5A24	楕円形	逆台形状	0.87	0.71	0.34			
SK570	5A2	楕円形	逆台形状		0.63	0.61			
SK571	5A2･7	楕円形	逆台形状	0.86	0.43	0.22			
SK575	5A3･4	円形	逆台形状	0.49	0.47	0.27		P574より新しい	
SK578	5A8	円形	逆台形状	0.53	0.46	0.27			
SK579	5A4	楕円形	U字状	0.67	0.55	0.50			
SK580	5A3･4	不整形	逆台形状	2.03	1.45	0.42	土師器・礫		
SK581	5A2･3	楕円形	逆台形状	0.84	0.38	0.28	礫		
SK583	5A7	円形	逆台形状	0.78	0.70	0.35		P850より古い	
SK610	7E12	不明	U字状	1.04		0.67			
SK784	5A24･25	楕円形	階段状	0.99	0.76	0.49			
SK788	5E20、6E16	不明	不明	1.85		0.24			
SK913	5B18	不明	U字状		0.58	0.63			
SK1666	5A10 、6A6	楕円形	V字状	1.49	1.17	0.75	珠洲焼		

中世Ⅳ層　溝

遺構名	グリッド	方　向	断面形	計測値（m）			出土遺物	遺構の新旧関係	備考
				長さ	上幅	深さ			
SD025	11A	N－1°－W	逆台形状	［5.00］	1.60	0.40	白磁、砥石	SD4020より新しい	西部遺跡Iの追加調査
SD027	9･10A	N－3°－E	逆台形状	［3.00］	0.30～0.50	0.22	珠洲焼、礫		西部遺跡Iの追加調査
SD041	9A	N－90°－W	逆台形状	［3.00］	1.08～1.58	0.20	珠洲焼、砥石		西部遺跡Iの追加調査
SD4020	11A	N－66°－W	逆台形状	［1.48］	0.75～0.83	0.20		SD025より古い	西部遺跡Iで検出したSD109の延長部分の可能性あり

別表2　遺物観察表（1）

【凡　例】
・「残存」は、口縁測定法［宇野1992］による計測数値で、口縁部の残存率をx/36で示したものである。
・Ⅷ層の「糸切類型」は、土師器・黒色土器無台椀についての観察項目である。第Ⅴ章２Ａ１）の分類により、A類・B類の2種に分けた。
・「色調」は、『新版　標準土色帖』［小川・竹原 2002］による。
・「胎土」の表記は次のとおりである。雲：雲母、針：海綿骨針、白：白色小粒子、黒：黒色斑点（吹出物）、黒粒：黒色小粒子、軽：軽石粒、礫：小礫、砂：砂粒。
※なお、鉄関連遺物（鉄製品・鉄滓・羽口・炉壁・鉄床石・砥石など）については「別表4　鉄関連遺物観察表」に記載している。

古代Ⅻa層　土器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	色調	胎土	備考
15	13E9		Ⅻa	須恵器	杯蓋			鈕3.2		ロクロ整形。天井部外面約1/2に右回転ケズリ。天井部内面指ナデ。口縁部欠損。	灰	礫	内面に墨痕が見られるが、明確な摩滅は伴わない。転用硯かは不明
16	11C25		Ⅻa	須恵器	短頸壺蓋					ロクロ整形。	褐灰	礫多	軟質
17	11D2		Ⅻa	須恵器	甕					外面平行タタキ後カキメ、内面同心円あて具痕。	灰	礫、砂	
18	11E8		Ⅻa	土師器	甕				2	非ロクロ系。口縁部外面ハケメ。	灰黄褐	砂	
19	10E9		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	灰黄褐	雲少、礫	
20	10E10		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。口縁部横ナデ。	にぶい黄橙	礫多	
21	9E4		Ⅻa	土師器	甕				2	非ロクロ系。口縁部横ナデ。	にぶい橙	礫	
22	9E5		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。口縁～胴部内・外面ハケメ。	にぶい黄橙	礫多	
23	9E9		Ⅻa	土師器	甕				2	非ロクロ系。口縁～胴部内・外面ハケメ。	灰黄褐	礫	
24	10E1		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。口縁～胴部内・外面ハケメ。	灰黄褐	礫	
25	9E9		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。頸～胴部内・外面ハケメ。	にぶい橙	礫	
26	10D22		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	灰白	礫、砂	
27	11E1		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	暗灰黄	礫	
28	10D22		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	灰黄	礫	
29	10E11		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	灰黄褐	礫	
30	10E1		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	にぶい黄橙	礫、砂	
31	9E4		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	にぶい黄橙	礫	
32	10D24		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	灰黄褐	礫	
33	10E8		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	にぶい黄橙	礫	
34	10E9		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面横位ハケメ。	にぶい黄橙	礫、雲少	
35	10E9		Ⅻa	土師器	甕					非ロクロ系。外面縦位ハケメ、内面木口状工具によるナデ。	黄褐	礫	
36	10E10		Ⅻa	土師器	甕			7.6		非ロクロ系。内・外面ナデ。底部上げ底気味。	にぶい黄橙	礫	
37	8D5		Ⅻa	土師器	甕			6.7		非ロクロ系。底部上げ底気味。木葉痕。	橙	礫多	

古代Ⅻa層　木製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	木取り	備考
1	10E9	SB3230-P1		柱根	64.6	8.0	7.0	ニレ属	芯持丸木	先端部は尖らせる。
2	10E8	SB3230-P3		柱根	67.2	6.8	6.0	ニレ属	芯持丸木	先端部は尖らせる。
3	10E3	SB3230-P4		柱根	34.0	7.6	7.2	エゴノキ属	割材	先端部は尖らせる。
4	10D23	SB3230-P5		柱根	57.0	7.0	6.6	ニレ属	芯持丸木	先端部は尖らせる。
5	10D25	SB3230-P6		柱根	52.8	10.4	8.4	ニレ属	芯持丸木	先端部は尖らせる。
6	10D25	SB3230-P7		柱根	35.4	6.5	5.1	ニレ属	芯持丸木	先端部は尖らせる。
7	10E7	P3218		杭	55.0	4.0	3.8	カツラ	芯持丸木	先端部は尖らせる。
8	11D11	P3231		杭	23.0	4.8	4.0	クリ	割材	下端部は平坦
9	12E9	P3241		杭	55.8	7.8	3.8	トネリコ属	芯持丸木	
10	13C1	P3245		杭	61.6	10.6	8.8	ニレ属	芯持丸木	先端部は尖らせる
11	12B24	P3246		杭	43.6	7.0	3.6	コナラ属コナラ亜属コナラ節	芯持丸木	先端部は尖らせる
12	12B20	P3247		杭	39.8	5.4	3.6	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
13	13B22	P3249		杭	48.4	7.6	7.0		芯持丸木	先端部は尖らせる
14	13C1	P3250		杭	62.0	7.6	7.0	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる

別表2　遺物観察表（2）

古代Ⅺ層　土器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	色調	胎土	備考
39	8C3	SD3052	1	須恵器	有台杯			7.7		ロクロ整形。回転ヘラ切り後高台貼り付け	灰	礫、砂	笹神系ヵ
40	8C3	SD3052	1	須恵器	杯蓋	14.5	2.6	鈕3.3	21	左ロクロ整形。外面天井部約1/2に左回転ケズリ	灰	白多	小泊系。鈕部に墨書「□」
42	6C7	SB3200-P3	1	須恵器	折縁杯	12.4	4.3	2.6	19	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け	灰	礫多	笹神系
43	6C1	SD3072	2	須恵器	無台杯	12.9	3.5	7.7	14	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り	灰	白多、黒多	
45	6B23	SK3091		土師器	小甕	13.0			7	内・外面カキメ	浅黄橙	礫	
46	6B	SD3090	3	須恵器	無台杯	12.5	3.6	7.7	21	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り	灰	白多、黒	小泊系
47	6B	SD3090	3	土師器	無台椀	13.4	3.8	4.1	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	橙	礫、雲少	底部に墨書「□」
48	6B	SD3090	3	土師器	鍋	38.0			5	右ロクロ整形。	浅黄橙	礫、雲少	
49	6B	SD3090	3	土師器	小甕	14.8			6	右ロクロ整形。	浅黄橙	砂粒、雲少	
50	6B	SD3090	3	土師器	甕	19.7			9	ロクロ整形。胴部外面カキメ。	浅黄橙	礫多	
52	5B	SD3121	2	須恵器	無台杯	13.0	2.9	7.5	14	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白多、軽	底部に墨書「□」
53	5B	SD3121	2	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面同心円あて具痕。	灰	白多	小泊系
54	11D	SB3030	床面	須恵器	無台杯	12.4	2.9	7.3	9	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白多、針少	小泊系。底部に墨書「□」
55	11D12	SB3030	床面	須恵器	無台杯	12.6	3.2	8.3	27	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白	底部に墨書「木」・「□」の二重書き
56	11D12	SB3030	床面	須恵器	無台杯	12.4	4.2	8.3	23	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白多	小泊系
57	11D12	SB3030	床面	須恵器	無台杯	11.8	3.0	8.1	6	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	灰	礫、砂多	笹神系
58	11D12	SB3030	床面	土師器	小甕	13.9		6.8	8	ロクロ整形。	にぶい黄橙	礫多、雲	
59	11D	SB3030	床面	土師器	甕	20.0			4	ロクロ整形。外面口縁部ヨコナデ、胴部カキメ。内面口縁部ハケメ、胴部カキメ。	浅黄橙	礫多、雲少	
60	11D12	SB3030	床面	土師器	甕	18.0			3	ロクロ整形。口縁部ナデ。外面胴上部カキメ、下部は木目を有する平行タタキ。内面胴上部カキメ、下部はカキメ、あて具痕をナデ消し。	にぶい黄橙	礫	
61	11D12	P3132	1	須恵器	無台杯	11.8	3.1	8.1	11	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白多	小泊系
62	11D8	SD3029	3	須恵器	無台杯	13.0	3.4	8.2	32	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白多、黒少	小泊系
63	11D	SD3029		土師器	小甕			6.0		ロクロ整形。回転糸切りヵ。	浅黄橙	礫、雲少	
65	10D	SD3042		須恵器	無台杯	12.5	3.2	8.0	20	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白多	小泊系
66	10D	SD3042		須恵器	無台杯	11.8	3.1	7.4	23	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白多	小泊系。底部に墨書「木」
67	11D	SD3042		須恵器	無台杯			9.2		左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白	底部に墨書「木」
68	11D1	SD3042	1	須恵器	有台杯	13.5	6.4	8.6	10	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰白	白多	小泊系
69	10D25	SD3042		土師器	甕	18.8			6	ロクロ整形。内面カキメ。	灰白	礫、砂	
74	6B	SW3070		土師器	甕			6.8		外面胴～底部タタキ、内面ナデ。	橙	礫	陸奥型
76	6D	SK3049		土師器	無台杯	17.0	7.3	8.2	14	右ロクロ整形。右回転糸切り後右回りの手持ちハケナデ。	灰白	礫、砂多	
78	6C2	SK3163	1	須恵器	杯蓋	14.7				右ロクロ整形。右回転ケズリ。	灰	礫多	笹神系
79	6C24	SD3051	1	須恵器	甕	24.0			7	左ロクロ整形。	灰	白	
81	6A4	SD3123	2	須恵器	無台杯	13.0	3.1	8.0	4	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白、礫少、黒少	小泊系
83	6C19		Ⅺ	須恵器	無台杯	14.0	3.6	9.4	16	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	灰白	礫、砂	笹神系
84	6E14		Ⅺ	須恵器	無台杯	13.8	3.1	8.1	33	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	灰白	礫、砂	
85	14D24		Ⅺ	須恵器	無台杯	13.4	4.1	8.0	5	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	灰	礫少	笹神系
86	6E14		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.8	2.9	8.2	10	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	灰白	礫、砂	笹神系
87	12D21		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.8	3.1	7.4	11	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	淡黄	砂粒、軽少	
88	6E20		Ⅺ	須恵器	無台杯			8.3		ロクロ整形。回転ヘラ切り。	灰白	軽、礫、砂	笹神系。底部に墨書「上」

別表2　遺物観察表（3）

古代Ⅺ層　土器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	色調	胎土	備考
89	8C16		Ⅺ	須恵器	無台杯			7.4		右ロクロ整形後内底面の一部にナデ。右回転ヘラ切り後ナデ。	灰	軽、礫	笹神系。底部に墨書「王カ」
90	6C7		Ⅺ	須恵器	無台杯	10.9	3.0	7.3	4	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白多	小泊系
91	6E15		Ⅺ	須恵器	無台杯	11.5	3.1	7.6	1	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	灰白	軽多、礫、砂	笹神系。底部に墨書「上」
92	11E12		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.3	3.4	8.4	11	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白多	小泊系
93	6E14		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.3	3.0	8.0		左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白多	小泊系
94	6C6		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.2	3.1	8.4	25	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白、黒少	
95	11D25		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.7	3.0	7.5	13	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	白多、軽少、黒少	
96	6E12		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.4	3.4	7.0	3	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後ナデ消し。	灰	白、軽、礫、砂、黒少	小泊系。底部に墨書「上」
97	6E7		Ⅺ	須恵器	無台杯	13.0	3.5	7.9	14	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	灰白	礫	底部に墨書「上」
98	6E7		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.3	3.0	7.6	19	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後ケズリ。	灰	白多	底部に墨書「上」
99	6E14		Ⅺ	須恵器	無台杯	12.9	3.2	8.2	29	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	青灰	白多、黒少	小泊系
100	6E14		Ⅺ	須恵器	無台杯	13.0	3.1	8.4	7	ロクロ整形。回転ヘラ切り。	灰	白多、軽少	小泊系
101	6A19		Ⅺ	須恵器	無台杯	13.3	2.9	9.0	2	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。	灰	黒、白多、針少	小泊系。底部に墨書「木カ」
102	6B4		Ⅺ	須恵器	無台杯	13.3	3.2	8.8	13	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白多	小泊系
103	6E14		Ⅺ	須恵器	無台杯			6.5		右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	灰	軽、礫、黒少	笹神系。底部に墨書「上」
104	6E7		Ⅺ	須恵器	無台杯			8.0		右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	淡橙	軽	底部に墨書「上カ」
105	6E12		Ⅺ	須恵器	無台杯			7.6		右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。	紫灰	軽	笹神系。底部に墨書「上」
106	6E6		Ⅺ	須恵器	無台杯			7.8		左ロクロ整形。左回転ヘラ切り。底部に板状圧痕。	灰	白、軽、黒少	小泊系。底部に墨書「三カ」
107	7D24		Ⅺ	須恵器	有台杯	10.1	4.3	6.0	26	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫	笹神系。底部に「×」のヘラ記号あり
108	6E12		Ⅺ	須恵器	有台杯	10.3	5.3	5.5	19	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多	笹神系
109	6E14		Ⅺ	須恵器	有台杯	10.3	5.1	6.3	23	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多	笹神系
110	5B25		Ⅺ	須恵器	有台杯	10.6	5.5	6.4	21	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多、針	笹神系カ
111	5E20		Ⅺ	須恵器	有台杯	10.6	5.8	6.0	22	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後高台貼り付け。底部に板状圧痕。	灰	白、軽多、礫多、黒	笹神系。底部に墨書「上」
112	12E2		Ⅺ	須恵器	有台杯			8.0		左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	白、礫、砂、黒	小泊系
113	6C7		Ⅺ	須恵器	有台杯	11.4	6.0	6.6	14	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多	笹神系
114	6E15		Ⅺ	須恵器	有台杯			6.0		右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫	笹神系
115	7E12		Ⅺ	須恵器	有台杯			6.7		左ロクロ整形。回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫、砂多	笹神系
116	10A21		Ⅺ	須恵器	有台杯	13.8	7.0	7.5	4	左ロクロ整形。左回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	白多、軽	
117	12C2		Ⅺ	須恵器	有台杯	14.7	6.7	9.1	4	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	黒多	
118	5A7		Ⅺ	須恵器	折縁杯	12.4	3.1	6.0	23	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多、黒少	笹神系
119	5C9		Ⅺ	須恵器	折縁杯	13.0			7	ロクロ整形。	灰白	黒多、砂少	笹神系
120	6C7		Ⅺ	須恵器	折縁杯	13.6	3.4	7.3	12	ロクロ整形。回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多	笹神系
121	7E11		Ⅺ	須恵器	折縁杯	12.9	3.7	7.9	9	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰白	礫	笹神系
122	6C7		Ⅺ	須恵器	折縁杯	13.0	3.7	7.6	23	右ロクロ整形後内面ナデ。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	明オリーブ灰	軽多、礫、黒少	笹神系。底部に墨書「上」
123	6D12		Ⅺ	須恵器	折縁杯	12.7	4.0	7.8	8	ロクロ整形後内底面不定方向のナデ。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	軽、礫、黒少	笹神系。底部に墨書「上」
124	5E15		Ⅺ	須恵器	折縁杯	14.3	5.2	7.2	9	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。	灰	礫多	笹神系
125	10D15		Ⅺ	須恵器	杯蓋	13.0	2.9	鈕2.6	2	ロクロ整形。内面天井部指ナデ。	灰白	礫少	

別表2　遺物観察表（4）

古代Ⅺ層　土器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	色調	胎土	備考
126	7E11		Ⅺ	須恵器	杯蓋	14.9	2.6	鈕3.0	6	右ロクロ整形。	灰白	礫多、黒	笹神系
127	12E4		Ⅺ	須恵器	杯蓋	14.9	2.7		5	右ロクロ整形。墨痕はないが内面天井部は摩耗している。	灰	礫多、白	小泊系。転用硯
128	7E11		Ⅺ	須恵器	杯蓋	15.2	3.5		11	右ロクロ整形。墨痕はないが内面天井部は摩耗している。	灰白	礫少、黒少	転用硯
129	6E20		Ⅺ	須恵器	杯蓋	14.5			20	左ロクロ整形。	灰白	礫	小泊系ヵ
130	6E20		Ⅺ	須恵器	杯蓋	15.5			16	外面天井部中央に左回転ケズリ。回転糸切り痕あるいはハケメが残る。	灰白	礫、黒少	笹神系ヵ
131	6E14		Ⅺ	須恵器	長頸壺	6.3			24	右ロクロ整形。	灰	礫、黒	
132	12D13		Ⅺ	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面同心円あて具痕。	灰	軽、黒	
133	6E14		Ⅺ	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面同心円あて具痕後平行あて具痕。	灰	礫少、白少	
134	10B19		Ⅺ	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面同心円あて具痕。	緑灰	白多	小泊系
135	6C7		Ⅺ	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面同心円あて具痕。	灰	白少	
136	7E		Ⅺ	須恵器	甕					外面平行タタキ後カキメ。内面同心円あて具痕後カキメ。内面下部平行タタキ。	灰	礫少、白少	
137	10D15		Ⅺ	須恵器	長頸壺			5.8		ロクロ整形。外面肩部に沈線2条、体部に沈線1条あり。	灰白	黒	猿投ヵ
138	6E13		Ⅺ	土師器	鉢			10.7		ロクロ整形。内面ナデ。回転糸切りヵ。	浅黄橙	礫、雲少	
139	6C7		Ⅺ	土師器	無台椀	12.9	3.6	5.0	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	橙	礫、砂少	
140	5C5		Ⅺ	土師器	無台椀	13.9	4.5	5.7	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	浅黄橙	礫、砂少	
141	6E14		Ⅺ	土師器	皿	23.6			4	ロクロ整形。	浅黄橙	礫、砂、雲少	
142	6C14		Ⅺ	土師器	小甕			6.8		ロクロ整形。	にぶい黄橙	礫多	
143	6B18		Ⅺ	土師器	小甕	11.0			4	ロクロ整形。口縁部ロクロナデ。	にぶい黄橙	礫、雲	
144	7E12		Ⅺ	土師器	小甕	14.7			6	ロクロ整形。口縁部ロクロナデ。外面体部カキメ。	にぶい黄橙	礫	
145	5C9		Ⅺ	土師器	小甕	12.5			4	ロクロ整形。	にぶい橙	礫	
146	6E10		Ⅺ	土師器	小甕	14.2			6	ロクロ整形。口縁部ロクロナデ。内・外面体部カキメ。	にぶい橙	礫	
147	6E17		Ⅺ	土師器	甕	20.7			5	口縁部ナデ。胴部外面カキメ、内面ハケメ。	橙	礫多	

別表２　遺物観察表（5）

古代Ⅺ層　木製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	木取り	備考
41	6B22	SB3200-P4		柱根	74.8	13.0	11.0		芯持丸木	先端部は平坦
82	10E7	P3216		杭または柱根	47.4	11.2	7.4	コナラ属コナラ亜属コナラ節	割材	先端部は尖らせる

古代Ⅺ層　漆製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	木取り	備考
44	6C5	SD3102	1	烏帽子または圭冠					写真図版の掲載のみ
51	6B	SD3090	3	漆器椀					総黒色系。木胎腐蝕。写真図版の掲載のみ

古代Ⅺ層　石製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
70	10D	SD3042		磨石	14.8	6.4	5.9	820.0	砂岩	
75	7C	SK3046	2	用途不明	10.0	3.1	1.0	56.5	頁岩	馬形に似た形状を呈するもので、ほぼ全面が磨られている。片面に判然としない墨痕あるいは汚れあり
77	6D2	SK3049		砥石	5.1	3.4	1.6	40.0	頁岩	
80	6D3	SD3051	2	磨石	11.2	7.7	4.2	410.0	流紋岩	
148	6B4		Ⅺ	権状錘	4.3	3.4	2.6	43.9	流紋岩	上部に小孔、小孔から上端へかけて縦溝
149	6C10		Ⅺ	紡錘車ヵ	9.3	9.0	2.3	65.0	流紋岩質凝灰岩	中心部に孔を有する円盤状の製品。側面にほぼ等間隔で刻目
152	12D9		Ⅺ	磨石	19.0	7.6	4.4	1030.0	黒雲母粘板岩	

古代Ⅺ層　土製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	調整・文様等	色調	胎土	備考
155	6B1		Ⅺ	管状土錘	2.1	1.4	0.4	3.0	粘土巻き付け。	灰白	砂	完形
156	6B6		Ⅺ	管状土錘	2.3	2.0	0.4	3.4	粘土巻き付け。	灰白	礫、砂	ほぼ完形
157	6B13		Ⅺ	管状土錘	2.0	1.5	0.3	2.9	粘土巻き付け。	灰白	砂	完形
158	6B1		Ⅺ	管状土錘	3.2	1.3	0.4	3.6	粘土巻き付け。	黄灰	砂	ほぼ完形
159	7D4		Ⅺ	管状土錘	4.0	1.3	0.4	5.4	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	礫、砂	完形
160	6C3		Ⅺ	管状土錘	3.8	1.3	0.4	5.6	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	雲、礫、砂	完形
161	6C24		Ⅺ	管状土錘	4.7	1.5	0.3	8.9	粘土巻き付け。	黄灰	礫、砂	完形

別表２　遺物観察表（6）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
162	9D	SB1400-P1	4	須恵器	甕	19.8			21	口縁部ナデ。外面不明瞭な格子目タタキ。内面無文あて具痕後粗くナデ。		灰	白、針	
165	9D3･8	SB1400-P2	3	黒色土器	椀	13.0			5	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂	
168	9C23	SB1400-P3		土師器	無台椀	12.4	4.0	5.0	18	右ロクロ整形。回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、針少、礫少	
171	9C	SB1400-P6		土師器	小甕	14.8			3	ロクロ整形。		にぶい橙	雲少、礫多	
172	9C	SB1400-P6		須恵器	広口壺	24.5			4	ロクロ整形。		灰	針少、礫少	
173	9C	SB1400-P6		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する同心円あて具痕、ナデ消し有り。		暗灰	白多、軽	
175	9C	SB1400-P8	2	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰	白少	
176	9C20	SB1400-P9	1	土師器	無台椀	12.2	4.0	4.4	4	ロクロ整形。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
177	9C	SB1400-P10	1	土師器	椀				1	ロクロ整形。		浅黄橙	砂少	体部に墨書「□」
178	9C	SB1400-P10		土師器	無台椀	13.0	4.5	5.0	3	ロクロ整形。回転糸切り後ケズリヵ。	不明	にぶい橙	雲少、礫多、針少、軽少	
179	9C	SB1400-P10	7	須恵器	甕					外面平行タタキ、内面木目を有する平行あて具痕。		外橙、内灰白	砂	
180	9C5、10C1	SB1400-P11		土師器	無台椀	12.4	4.0	4.4	17	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
182	10D6	SB1400-P16	1	土師器	無台椀	13.0	4.5	5.6	7	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少	
184	9D12	SB1400-P20	3	黒色土器	無台椀	13.1	5.1	5.5	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外灰黄	砂、針	
185	9C11	SB1400-P24	3	黒色土器	無台椀	15.0	5.9	5.3	8	ロクロ整形。底部手持ちケズリ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂、針、礫	
188	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	11.5	4.0	3.9	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄・灰	砂、針少	
189	10B21	SD1077	2	土師器	無台椀	11.3	3.5	4.6	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～灰黄	砂、雲少	
190	10D2	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.3	4.6	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄	礫、砂多	
191	8C10	SD1077	2	土師器	無台椀	12.9	3.8	4.2	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂多、針少、雲少	
192	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.1	4.5	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲少、礫少	
193	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	3.6	4.4	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	礫、砂多、針少	
194	9D15	SD1077	1	土師器	無台椀	13.2	4.2	4.9	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、針少、雲少	
195	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.0	4.1	4.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～にぶい黄橙	砂、軽少、針少、雲少	
196	9C21	SD1077		土師器	無台椀	12.6	4.8	5.0	9	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂少、雲少	
197	9C11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.5	3.8	4.7	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙・灰	砂多、軽、雲少	
198	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.2	4.8	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、軽、礫、雲少	
199	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.0	4.7	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、針少、軽	
200	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.9	4.4	4.6	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
201	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.6	3.7	4.4	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～褐灰	礫、砂	
202	10C	SD1077		土師器	無台椀	13.5	4.1	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂、軽、雲少	
203	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	11.7	4.0	3.8	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
204	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	11.4	4.0	4.4	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、軽少、雲少	
205	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.0	4.0	4.2	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙～にぶい黄橙	礫、砂多、針少	
206	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	11.8	4.2	4.5	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、針少、礫	
207	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.0	4.5	5.2	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	砂、軽	
208	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.0	4.3	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙～褐	砂多、軽	
209	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.7	5.0	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、軽少、針少	

別表２　遺物観察表（7）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
210	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.4	4.5	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少、針少	
211	9D6	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.6	4.7	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂、礫、雲少	
212	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.5	4.8	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針、砂	
213	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.0	4.7	4.9	23	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少	灯明皿。内・外面に油煙付着
214	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	5.0	5.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、雲、針	
215	9D6	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.5	4.7	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～褐灰	軽、砂、礫	
216	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.5	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂、雲少	
217	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.7	5.0	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少、針少	
218	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.6	4.5	4.2	27	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、砂	
219	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	12.6	4.2	4.5	7	右ロクロ整形。内面口縁～体部上半沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少、針少	
220	8C	SD1077	1	土師器	無台椀	12.6	4.5	4.7	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙～橙	軽少、砂少、雲少	
221	8C10	SD1077	2	土師器	無台椀	12.6	4.1	4.6	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲少	
222	9C6	SD1077	2	土師器	無台椀	12.9	4.4	5.2	28	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
223	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.9	4.6	4.8	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	砂、雲	
224	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	13.1	4.3	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰～浅黄橙	砂、雲少	
225	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	13.2	4.4	5.4	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙～にぶい黄橙	砂、軽少	
226	9C21	SD1077	1	土師器	無台椀	13.4	4.2	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰黄	砂、針少	
227	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	13.8	4.8	5.0	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、雲少	
228	10C	SD1077	1	土師器	無台椀	13.8	4.4	5.3	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、軽、雲少、針少	
229	9D7	SD1077	2	土師器	無台椀	13.6	4.3	5.0	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、礫、雲少、針少	
230	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	11.5	4.0	3.9	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	砂、針少	
231	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.0	4.4	4.8	24	右ロクロナデ。外面一部沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	にぶい橙・褐灰	砂、軽多、雲少	
232	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	11.9	4.5	4.8	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、針少、雲少	
233	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.2	4.8	19	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	砂多、軽少、針	
234	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.2	4.6	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～灰褐	礫、砂、軽、針少	
235	9D6	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.3	5.2	25	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、礫、黒、軽少	
236	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.4	5.0	35	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	橙	砂、軽、針	
237	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	12.5	4.0	4.5	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂、雲少	
238	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.5	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂少、針少、礫少、軽少、雲少	
239	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.6	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～にぶい橙	砂、礫、軽、雲少	
240	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.4	4.8	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、雲、針少	
241	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	12.4	4.2	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
242	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.5	4.7	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、針少、雲少	
243	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.7	4.4	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多、雲少	
244	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.7	5.1	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙～橙	砂、雲少	
245	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.2	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲少、軽	
246	9D6	SD1077	2	土師器	無台椀	12.8	4.7	4.9	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少、針少	
247	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.8	4.3	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい橙	砂、軽	
248	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	13.2	4.5	5.4	32	ロクロ整形。回転糸切り。	B	橙	礫、砂、軽	

別表２　遺物観察表（8）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
249	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	11.8	4.2	4.9	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂、針少、雲少	
250	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.2	4.2	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄	砂、雲少	
251	10C	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.2	5.0	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	淡黄～灰	砂、針少、雲少	
252	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.5	4.2	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽少、雲少、針少	
253	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.5	4.4	4.7	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙～にぶい黄橙	砂、軽、雲少	
254	9D6	SD1077	2	土師器	無台椀	13.2	4.1	6.2	31	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	橙・黄灰	雲少、軽、砂	
255	8C10	SD1077	2	土師器	無台椀	12.8	4.8	5.0	7	右ロクロ整形。内面口縁～体部上半沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、針少、雲少	
256	9C	SD1077	1	土師器	無台椀	13.2	4.0	5.3	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂、針少	
257	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	11.6	3.9	3.8	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	針少、礫、砂	
258	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	12.0	4.3	5.1	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	軽多、雲少	
259	9C	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.1	3.8	18	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
260	9D7	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.0	5.4	36	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄橙～橙	砂、軽多	
261	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、軽、針少	
262	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.3	4.2	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～浅黄橙	砂多、雲少	
263	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	11.8	3.8	4.0	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白～橙	針少、砂、礫、軽	
264	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.2	5.4	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰～浅黄橙	軽、礫、砂	
265	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	3.9	4.8	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、針少	
266	9D13	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.1	4.4	36	ロクロ整形。	不明	にぶい黄橙	砂、礫少	
267	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.2	4.8	29	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい黄橙	砂、軽、針少	
268	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.4	4.2	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～にぶい橙	礫、砂多、雲少、針少	
269	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.7	5.1	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
270	10D11	SD1077	1	土師器	無台椀	12.6	4.7	4.4	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、軽、礫	
271	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.0	5.2	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂、礫、雲少	
272	9D12	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.3	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰黄～橙	砂、針少	
273	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.9	4.2	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲少、礫、砂	
274	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	12.5	4.1	4.4	35	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、針少	
275	9D15	SD1077	2	土師器	無台椀	12.9	4.7	5.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～褐灰	砂、針少	
276	9C11	SD1077	1	土師器	無台椀	12.9	4.7	4.3	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、軽、雲少	
277	10B21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.8	4.2	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～浅黄橙	礫、砂、軽	
278	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	12.8	4.6	5.2	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～黄灰	砂、雲少	
279	8B25	SD1077	1	土師器	無台椀	13.3	3.9	5.5	9	右ロクロ整形。外面一部沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄	砂、雲	
280	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	13.0	4.2	5.0	4	ロクロ整形。	不明	灰白	礫、砂	
281	10D7	SD1077	1	土師器	無台椀	12.1			32	ロクロ整形。		浅黄橙～にぶい黄橙	礫、砂、軽	
282	10D11	SD1077	2	土師器	無台椀	12.5	4.2	5.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙・褐灰	砂、雲少、黒	
283	9C21	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.6	5.0	36	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	橙～にぶい橙	砂多、針少	
284	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	10.4	4.1	4.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
285	9C16	SD1077	2	土師器	無台椀	11.2	4.0	4.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
286	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	11.2	4.2	4.8	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～にぶい黄橙	砂多、礫、雲少	
287	8C10	SD1077	1	土師器	無台椀	11.2	4.0	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～灰	礫、砂、雲少	

別表２　遺物観察表（9）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
288	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	13.3	5.2	6.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、礫、針少、雲少	
289	9C21	SD1077		土師器	無台椀	13.4	5.3	5.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	褐灰～にぶい黄橙	砂、軽、針少、雲少	
290	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	14.4	5.4	5.4	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、針少	
291	8C15	SD1077	2	土師器	無台椀	14.7	5.9	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～褐灰	礫、砂、針少、雲少	
292	10C22	SD1077	2	土師器	無台椀	15.6	6.1	5.8	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、軽、雲少、針少	
293	9D1	SD1077	2	土師器	無台椀	16.3	6.3	6.3	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙～にぶい黄橙	砂、雲少、針少	
294	9D	SD1077	2	土師器	無台椀	12.1	4.0	4.6	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、雲少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
295	9D1	SD1077	2	土師器	無台椀	12.4	4.8	5.1	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄	砂少、針少	体部に墨書則天文字「天」
296	9D1	SD1077	2	土師器	無台椀	12.2	4.7	5.1	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂	体部に墨書則天文字「天ヵ」
297	9D1･8	SD1077	2	土師器	椀	12.8			3	ロクロ整形。		灰白	礫、砂	体部に墨書則天文字「天ヵ」
298	9D	SD1077	2	土師器	無台椀	12.7	4.1	4.9	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂多、雲少	体部に墨書則天文字「天」
299	9D	SD1077	1	土師器	無台椀	12.4	4.5	4.9	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂少、雲少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
300	9D13	SD1077	1	土師器	椀	12.9			9	ロクロ整形。		灰白	砂	体部に墨書「□」
301	9C21	SD1077	1	土師器	椀	12.8			4	ロクロ整形。		灰白	針少、砂	体部に墨書則天文字「天」
302	9C	SD1077	1	土師器	椀				1	ロクロ整形。		橙	砂	体部に墨書「□」
303	8C	SD1077	1	土師器	椀				1	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂	体部に墨書「□」
304	9D14	SD1077	2	土師器	椀					ロクロ整形。		にぶい黄橙	砂	体部に墨書則天文字「天ヵ」
305	9D14	SD1077	1	土師器	無台椀	11.9	4.2	5.9	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、針	漆パレット。漆紙322が椀内から出土
306	9C6	SD1077	2	土師器	無台椀	12.3	4.1	5.2	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、砂、軽	漆パレット
307	8C5	SD1077	1	土師器	有台椀			6.8		ロクロ整形。回転糸切り。		にぶい黄橙	砂	
308	9D	SD1077	2	黒色土器	無台椀	13.2	4.2	4.8	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外にぶい橙	砂、針少	
309	9C21	SD1077	2	黒色土器	無台椀	12.7	4.0	5.4	4	ロクロ整形。回転切り離し後ロクロナデ。内・外面黒色処理、内面ミガキ。	不明	内黒、外暗灰	砂多、針少	
310	10C	SD1077	2	黒色土器	無台椀	14.4	6.1	5.8	26	ロクロ整形。右回転糸切りナデ消し。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰白	礫、砂、雲	
311	9C	SD1077	2	黒色土器	無台椀			5.5		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外にぶい橙	雲	
312	8B	SD1077	2	黒色土器	有台椀	15.0	6.1	5.8	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	礫、砂、軽	
313	9C21	SD1077	2	黒色土器	椀	14.2			5	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	礫、砂	
314	9C21	SD1077	1	黒色土器	椀	12.0			8	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	砂、雲少、少	
315	9C11	SD1077	1	黒色土器	有台椀			5.2		ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	礫、砂	
316	9C	SD1077	1	須恵器	皿？	14.0			8	ロクロ整形。		灰	礫、砂	
317	10C22	SD1077	2	灰釉陶器	椀	15.3	4.7	6.5	12	右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け。三日月高台。 釉浸け掛け。		灰白	黒粒	
318	10C21	SD1077	1	灰釉陶器	輪花椀	15.4	4.8	6.7	1	右ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。三日月高台。 釉浸け掛け。		灰白	黒粒	
319	10D	SD1077	2	須恵器	広口壺					右ロクロ整形。		灰	砂、軽（大）少	
320	9C21	SD1077	1	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕後木目を有する扇状あて具痕。		灰	礫、砂、軽	
321	9D14	SD1077	1	製塩土器				19.5		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		浅黄橙	礫、砂、軽黄粒	
323	10C12	SD1077	1	緑釉陶器	耳皿					ロクロ整形。横ナデ。		灰白	砂	

別表２　遺物観察表（10）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
347	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	11.4	3.7	4.0	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、針、軽少	
348	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.0	3.8	4.3	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、雲少、針少	
349	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	11.9	3.8	4.3	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂	
350	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.1	3.8	3.8	36	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
351	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	11.8	4.3	4.2	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙～にぶい黄橙	礫、砂多、軽、雲少、針少	
352	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	11.9	4.1	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、砂、雲少、針少	
353	10C	SK1141		土師器	無台椀	12.0	4.4	5.0	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～褐灰	砂、軽少、雲少	
354	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.3	4.0	5.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい黄橙	礫、雲少	
355	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.3	4.3	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、軽	
356	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、軽多、雲少、針少	
357	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.5	4.8	5.4	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、軽少、雲少、針少	
358	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.6	4.4	4.5	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、砂多	
359	10C	SK1141		土師器	無台椀	12.7	4.3	4.5	23	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	淡黄	砂、軽少、雲少	
360	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.5	4.1	4.7	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、雲少	
361	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.8	4.6	5.4	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	礫、針少、雲少	
362	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.8	4.0	4.9	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～褐灰	軽、雲少、針少	
363	10C	SK1141		土師器	無台椀	13.0	4.9	4.7	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、礫、軽、雲少	
364	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.7	4.6	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	明褐～淡赤橙・褐灰	砂、雲少、針少	
365	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.7	4.8	5.2	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙～橙	礫、砂、軽、雲少	
366	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	11.9	3.9	4.4	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～灰黄褐	砂、雲少	灯明皿。内面に油煙付着
367	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.2	4.1	4.4	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫、砂多、針、雲少	
368	10C	SK1141		土師器	無台椀	13.0	4.0	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂、軽多、雲少	
369	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.2	4.7	5.6	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、針少、雲少	
370	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.0	4.5	4.4	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～褐灰	砂、軽少、雲少	
371	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.4	4.8	5.3	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい黄橙	砂、軽少、雲少	
372	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.9	4.5	5.2	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰黄	礫、砂多、雲少	
373	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.4	5.0	4.6	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～灰黄褐	礫、雲少	
374	10C	SK1141		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.4	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、雲少	
375	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.1	4.7	5.8	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～にぶい橙	砂、雲少、軽少	
376	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.3	4.5	5.0	5	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、砂、雲少、針少	
377	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.0	3.9	4.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡橙～橙	軽多、砂多、雲少	
378	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.2	4.8	5.4	19	右ロクロ整形。外面口縁部短いナデ。右回転糸切り。	A	灰白	礫、砂、雲少	
379	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.2	4.6	4.4	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	軽多、砂多、針少	
380	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.6	4.5	4.8	27	右ロクロ整形。外面口縁部ナデ。内面不定方向のナデ。右回転糸切り。	B	灰黄	砂、針少、雲少	
381	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.5	4.2	4.5	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙・褐灰	礫、軽少、雲少	
382	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.7	4.5	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少、針少	
383	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.7	4.3	5.0	22	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰黄	礫、砂少、軽少	
384	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.2	4.7	4.9	22	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙～にぶい橙	砂多、軽多、雲少	

別表２　遺物観察表（11）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
385	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.8	4.1	5.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙～灰白	砂、雲少	底部内面に黒色付着物
386	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.4	4.5	4.6	29	右ロクロ整形。外面口縁部強いナデ。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙～褐灰	礫、砂、雲、針少	
387	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.2	4.6	5.2	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、礫、雲少	
388	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.0	4.2	4.0	23	右ロクロ整形。外面強いナデ。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい黄橙	礫、砂、軽多、雲少	
389	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.1	3.9	4.0	27	ロクロ整形。外面強いナデ。回転糸切り。	不明	橙～にぶい黄橙	礫、砂多、雲少	
390	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	13.8	5.1	4.4	31	ロクロ整形。	不明	橙～にぶい黄橙	礫、砂	
391	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	12.8	4.8	5.2	36	右ロクロ整形。外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄橙～にぶい橙	礫（大）、雲少	
392	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	14.2	5.7	4.8	5	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙・灰黄	礫、砂、針少、雲少	
393	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	14.8	5.6	4.8	19	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、軽、針少、雲少	
394	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	15.6	6.3	6.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、礫、雲少、針少	
395	10C	SK1141	1	土師器	無台椀	15.5	6.3	5.3	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白～にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
396	10C·D	SK1141	1	黒色土器	無台椀	13.1	4.2	5.4	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	にぶい黄橙	軽、雲多、砂	
397	10C·D	SK1141	1	黒色土器	有台椀	15.1		6.1	20	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		にぶい黄橙	礫、砂、軽少	
398	10C·D	SK1141	1	黒色土器	椀	13.2			15	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		浅黄橙	礫、砂	
399	10C	SK1141		土師器	鍋	41.5			5	ロクロ整形。内・外面カキメ。		にぶい赤褐	礫、砂多、雲少	
400	10C	SK1141	1	土師器	椀					ロクロ整形。		にぶい黄橙	礫、砂	体部に墨書「□」
401	10C	SK1141	1	土師器	椀					ロクロ整形。		にぶい黄橙	砂少	体部に墨書「□」
408	10C	SK1140		土師器	無台椀	12.2	4.5	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
409	10C	SK1140		土師器	無台椀	13.0	4.3	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多	灯明皿。口縁部と底部内面に油煙付着
410	10C	SK1140		土師器	無台椀	12.5	4.4	5.1	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多	
411	10C	SK1140		土師器	無台椀	11.8	4.1	4.7	32	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多	
412	10C	SK1140		土師器	無台椀	12.5	4.6	4.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、礫多	
413	9C	P1238	1	土師器	無台椀	11.2	4.3	4.4	28	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
415	10C11	P2240	1	土師器	無台椀	13.0	4.9	5.0	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	灯明皿。口縁部に油煙付着
416	9C13	P2245		土師器	無台椀	12.4	4.3	4.4	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
417	9C13	P2245	1	土師器	無台椀	13.7	4.5	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	黄灰	礫、砂	灯明皿。口縁部に油煙付着
420	7D3	SB1500-P5	9	土師器	無台椀	12.0	4.5	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫少、針少	灯明皿。内・外面に油煙付着
429	8C	SB1500-P13		土師器	無台椀	11.7	3.9	4.5	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
430	8C	SB1500-P13		土師器	無台椀	12.0	3.8	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、礫少、針多、黒多	
431	8C	SB1500-P13		土師器	無台椀	12.3	5.4	4.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
432	8C	SB1500-P13		土師器	無台椀	12.2	3.8	4.1	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少、黒多	
433	8C	SB1500-P13	5	土師器	無台椀	13.0	4.0	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、針少、礫少、黒多	
434	8C	SB1500-P13		土師器	無台椀	12.2	3.8	4.6	6	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多、針少	
435	8C	SB1500-P13	5	土師器	無台椀	12.2	4.5	5.0	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、針多、礫多、黒多	
436	8C	SB1500-P13		土師器	無台椀	12.9	4.5	4.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
437	8C	SB1500-P13		緑釉陶器	輪花椀	14.6	5.1	6.6	27	ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。		灰白・オリーブ灰	やや硬質明灰、黒粒	
438	8C	SB1500-P13		須恵器	無台杯	12.3	5.0	7.3	12	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。		灰白	雲少、礫多、針少	

別表２　遺物観察表（12）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
442	8D	SB1500-P18	1	土師器	無台椀	10.7	4.3	3.9	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、礫少、針少	
443	8D	SB1500-P18		土師器	無台椀	12.0	4.5	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、針多、礫多	
445	7D	SB1500-P24	3	土師器	甕	15.4			5	右ロクロナデ。		にぶい黄橙	雲多、礫多	
446	7D	SB1500-P26		土師器	無台椀	12.0	4.0	5.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
447	7C	SB1500-P27		黒色土器	有台皿	12.0	4.7	5.4	10	右ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	砂、針、雲	
448	7C	SB1500-P27		土師器	有台椀			6.5		ロクロ整形。回転糸切り後高台貼り付け。		浅橙	雲少、礫少	
449	7B	SB1500-P32	1	土師器	無台椀	11.8	3.8	4.0	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、針多、礫多	
450	7B	SB1500-P32		須恵器	有台杯	17.0	6.0	7.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け。		灰	白多、礫多、針少	
451	8B21	SB1500-P34	1	土師器	無台椀	12.4	4.0	4.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
452	8C	SB1500-P36	1	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕後木目を有する扇状のあて具痕。		灰	白多、軽	
453	8C	SB1500-P38		土師器	無台椀	11.6	4.5	4.0	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
454	8D	SB1500-P40		土師器	無台椀	13.4	4.0	4.8	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
455	8D	SB1500-P40		土師器	無台椀	12.6	4.2	4.6	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多、針少	
456	8D	SB1500-P40		黒色土器	無台椀	12.7	4.6	4.5	9	ロクロ整形。底部ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。	不明	黒	砂、針	
457	8D	SB1500-P41	2	土師器	小甕	12.3			7	右ロクロ整形。		にぶい橙	針少、礫多、雲少	
458	8D	SB1500-P41		黒色土器	有台椀			5.7		右ロクロ整形。回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	礫、針	
459	8D	SB1500-P42		土師器	有台皿	11.7			31	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	礫、針	
461	7C	SB1500-P45		土師器	無台椀	13.2	4.2	4.6	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂多	体部に墨書則天文字「天」
462	7C	SB1500-P46	1	土師器	無台椀	12.2	4.1	4.8	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	針多、礫少	
463	7C	SB1500-P46		土師器	無台椀	12.0	3.7	5.0	11	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多	
464	7C	SB1500-P46		土師器	無台椀	12.4	3.7	4.4	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
465	7C	SB1500-P46		土師器	無台椀	11.7	4.5	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針多、黒多	
466	7C	SB1500-P46	1	土師器	無台椀	12.6	4.8	4.6	14	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
467	7C	SB1500-P46		須恵器	甕	30.6			3	外面木目を有する平行タタキ。内面木目を有する同心円あて具痕。		灰	白、軽	
468	7D	SB1500-P47		黒色土器	有台椀			6.8		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、砂	
469	7D	SB1500-P47		須恵器	甕					外面平行タタキ。内面同心円あて具痕。		灰	礫、砂	
471	8C22	SB1500整地層		土師器	無台椀	12.4	3.8	5.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	雲多、礫多、針多	
472	7D10	SB1500整地層		土師器	無台椀	13.4	4.0	6.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
473	8C22	SB1500整地層		土師器	無台椀	12.6	4.8	4.8	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫少、針多	
474	8C17	SB1500整地層		土師器	無台椀	12.4	4.6	4.6	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少	
475	7D	SB1500整地層		灰釉陶器	椀	13.4	4.1	6.4	13	ロクロ整形。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白・灰オリーブ	黒粒	
476	7C17	SB1500整地層		土師器	有台椀			6.6		右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け。		にぶい橙	雲多、礫多、針多	
477	7C14	SB1500整地層		製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
483	8C12	SD1377		土師器	無台椀	12.1	3.9	4.2	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲少	
484	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.0	3.4	4.1	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、軽、雲	
485	8C12	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.0	4.3	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂、雲少	
486	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	3.9	4.3	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、砂、軽、雲少	
487	7E4	SD1377	3	土師器	無台椀	12.0	4.0	3.8	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂、針	
488	7D	SD1377		土師器	無台椀	11.2	3.3	4.0	36	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	礫、雲少	

別表２　遺物観察表（13）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
489	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.4	3.8	5.5	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽、礫	
490	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.0	3.5	4.0	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、礫	
491	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.4	3.8	4.1	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、針、雲	
492	7D	SD1377		土師器	無台椀	12.6	3.6	4.6	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂多	
493	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.8	3.7	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、雲少	
494	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.6	3.6	3.9	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	砂多、雲	
495	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	3.6	4.6	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、雲少	
496	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.0	3.8	5.4	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	雲、礫	
497	8C3	SD1377		土師器	無台椀	12.3	3.7	5.5	6	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	灰白	砂、雲少	
498	7D17	SD1377		土師器	無台椀	13.5	4.0	5.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲	
499	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.4	3.7	4.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂、雲少	
500	7C6	SD1377		土師器	無台椀	13.2	3.7	5.2	19	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
501	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	11.2	3.6	4.9	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、軽、雲少	
502	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.2	3.5	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、砂	
503	8D13	SD1377		土師器	無台椀	11.6	3.4	4.3	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、軽	
504	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.1	3.9	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多、礫、雲	
505	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.0	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、砂	
506	7D2	SD1377		土師器	無台椀	11.5	3.5	4.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、砂多、雲少、針少	
507	8E3	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.0	4.8	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
508	8C13	SD1377		土師器	無台椀	12.1	3.7	4.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、軽、雲少	
509	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.2	3.6	3.9	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽、礫、雲少	
510	8C18	SD1377		土師器	無台椀	12.6	3.9	5.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、雲少、針少	
511	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.9	4.9	6	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
512	7D1	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.0	4.4	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽多、針	
513	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.5	3.6	4.6	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、軽	
514	7D12	SD1377		土師器	無台椀	12.5	3.4	5.3	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂多、雲少	
515	7D17･22	SD1377	1	土師器	無台椀	12.0	3.9	4.7	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂多	
516	8E1	SD1377		土師器	無台椀	12.1	3.7	4.5	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、軽、針少	
517	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	3.5	4.6	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多	
518	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.0	4.7	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、礫	
519	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.3	3.6	4.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂	
520	8D3	SD1377	3	土師器	無台椀	12.8	3.8	4.6	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲、針、軽	
521	8C13	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.3	5.2	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽多、礫、雲少、針少	
522	8D3	SD1377		土師器	無台椀	11.1	3.8	4.9	9	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	軽、砂、雲少	
523	8D8･9	SD1377	2	土師器	無台椀	11.8	4.4	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫	
524	8D12･13	SD1377		土師器	無台椀	11.7	4.6	4.9	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、礫	
525	8D9	SD1377		土師器	無台椀	11.7	4.4	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、軽	
526	7D12	SD1377	1	土師器	無台椀	12.3	5.1	5.6	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽	
527	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.6	4.5	5.5	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄～橙	砂、雲	
528	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	12.1	4.3	4.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂	
529	7D2	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.5	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、砂	

別表２　遺物観察表（14）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
530	8D14	SD1377	3	土師器	無台椀	12.2	4.2	4.7	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽	
531	7D	SD1377		土師器	無台椀	11.7	3.9	4.2	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少	
532	8D4	SD1377		土師器	無台椀	11.8	3.9	4.8	11	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
533	8D3	SD1377	3	土師器	無台椀	11.8	4.2	5.4	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽	
534	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.2	4.8	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	針	
535	8D3	SD1377		土師器	無台椀	11.5	4.1	4.5	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、針少	
536	7D17･18	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.2	4.1	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	褐灰	軽多	
537	7D17	SD1377	2	土師器	無台椀	12.0	4.4	4.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄	砂、礫	
538	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.7	4.4	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	軽少、雲少	
539	7C6	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.1	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	軽	
540	7D17	SD1377	2	土師器	無台椀	12.3	4.1	3.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、礫、雲、軽	
541	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.2	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、砂	
542	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.5	4.6	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	針	
543	8D23･24	SD1377	1	土師器	無台椀	12.6	4.4	4.8	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、雲	
544	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.4	4.3	5.2	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	軽、雲少	
545	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.1	4.3	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、針少	
546	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	11.4	4.3	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	黒多、礫、砂、軽、針少、雲少	
547	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.2	3.9	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲	
548	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.5	3.8	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰	礫、砂多、雲	
549	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.6	3.9	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂多、雲	
550	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.7	4.8	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽多	
551	7D22	SD1377	2	土師器	無台椀	12.7	4.2	5.0	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽	
552	8C18	SD1377		土師器	無台椀	11.6	4.0	4.9	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂、軽多	
553	8C3	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.5	4.8	5	ロクロ整形。回転糸切り。	A	灰白	砂、雲少	
554	8C12	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.6	5.2	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、軽、礫	灯明皿。口縁部に油煙付着
555	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.5	5.4	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、砂多、雲少	
556	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.6	5.2	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲、軽	
557	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.0	4.6	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、針少、雲少	
558	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.4	4.7	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
559	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.4	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂、針少、軽少	
560	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.9	3.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲	
561	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.2	4.2	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂	
562	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.1	4.9	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、軽	
563	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.0	5.2	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	砂、軽、針少	
564	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.1	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	黄橙	砂、礫、雲少	
565	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.4	4.1	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、軽	
566	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.5	4.2	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、雲	
567	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.4	4.7	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲	内・外面にスス付着
568	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.0	4.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、雲少	
569	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.1	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲少	
570	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.3	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	針、礫	
571	8E2･3	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.8	4.5	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、軽	

別表２　遺物観察表（15）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
572	7B23	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.2	4.8	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～橙	礫、軽	
573	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.9	4.3	5.1	21	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	橙	軽、針少	
574	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.7	4.3	5.0	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	軽	
575	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.1	4.3	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	砂、雲少	
576	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.4	4.1	14	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	B	にぶい橙	軽、針	
577	8D9	SD1377		土師器	無台椀	13.2	4.3	4.9	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽、針	
578	8D13	SD1377	2	土師器	無台椀	13.3	4.2	5.5	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多	
579	8D22	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.1	4.9	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	礫、砂、雲少、針少	
580	7D22	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.6	5.3	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂、軽、雲少	
581	8E1	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.3	4.0	18	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	礫、雲少	
582	7D2	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.2	5.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽	
583	7D22	SD1377	2	土師器	無台椀	13.1	4.2	5.2	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽多	
584	7D22	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.2	5.2	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、軽、雲少	
585	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.2	3.8	4.5	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、雲少	
586	7D1	SD1377		土師器	無台椀	12.6	3.9	4.3	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、雲少	
587	7D22	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.5	4.4	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、軽、礫	
588	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.6	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
589	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.1	5.0	9	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少	
590	8C18	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.1	5.4	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙～明褐	礫、砂、軽多、雲少	
591	7D22	SD1377		土師器	無台椀	12.3	3.8	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂、軽多、雲少	
592	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.2	4.3	36	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	灯明皿。口縁部に油煙付着
593	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.4	5.4	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲少	
594	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.1	4.7	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂、雲少	
595	6B25	SD1377	1	土師器	無台椀	13.5	4.3	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、礫	灯明皿。口縁部に油煙付着
596	8D22	SD1377		土師器	無台椀	12.6	3.8	5.8	4	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂	
597	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.5	36	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	B	橙・にぶい黄橙	砂、雲少	
598	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.6	4.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、雲少	
599	8D9	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.9	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	淡黄	礫、砂、雲少	
600	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.4	4.9	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、雲少	
601	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	12.8	4.3	5.2	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲少、針少、軽少	
602	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.0	5.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、雲少	
603	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.5	3.9	5.1	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、針少、雲少	
604	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.8	3.8	4.5	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	黄橙	砂、雲少	
605	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	12.6	4.1	4.1	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、砂多、針少、雲少	
606	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.3	6.4	7	ロクロ整形。	不明	橙	軽多、針少、雲少	
607	7D2	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.5	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄	礫、砂、軽少、雲少	
608	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.2	4.8	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂多、針少、雲少	
609	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.1	4.5	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、砂多、雲少	
610	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.1	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、軽	
611	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.5	5.5	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、針少	
612	7E4	SD1377	2	土師器	無台椀	12.8	4.3	4.4	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、砂少、雲少	

別表２　遺物観察表（16）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
613	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.3	4.5	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、雲少	
614	8D3	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.0	4.8	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、軽（大）	
615	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.7	4.7	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、雲少	
616	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.5	4.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、軽	
617	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.5	5.3	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、軽、雲少	
618	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.6	4.9	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、軽	
619	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.2	4.2	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	砂、軽、雲少	
620	7B23	SD1377	1	土師器	無台椀	13.1	4.2	5.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～灰黄褐	礫、砂、針少、雲少	灯明皿。口縁部に油煙付着
621	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.2	5.6	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽、雲少、針少	
622	8E2	SD1377		土師器	無台椀	13.2	4.0	5.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、雲少	
623	7D6	SD1377	4	土師器	無台椀	11.3	4.2	5.2	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、砂	
624	8C13	SD1377		土師器	無台椀	11.9	4.3	3.7	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂、軽、雲少	
625	8C8	SD1377		土師器	無台椀	11.6	4.2	4.4	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、針	内・外面にスス付着
626	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.6	4.0	4.0	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂、軽、雲少	
627	8E2･3	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.1	5.3	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂	
628	7D2	SD1377		土師器	無台椀	11.5	4.0	5.4	7	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
629	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.3	5.3	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂多、雲	
630	8C18	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.3	4.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、雲少、針少	
631	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.3	5.0	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、礫	
632	8D9	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.7	5.0	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、針	
633	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.1	4.8	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲、軽、砂	
634	7D	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.4	4.4	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂	
635	7B23	SD1377	2	土師器	無台椀	12.7	4.2	4.7	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、針	
636	7D2	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.2	4.4	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	淡橙	砂多、礫	
637	7D2	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.6	4.8	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、針	
638	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.7	5.1	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～橙	軽、雲、針	
639	8D8	SD1377		土師器	無台椀	11.7	3.9	4.5	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
640	8D23	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.5	4.8	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、軽多、雲少	
641	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	11.9	4.4	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	軽、雲少、針少	
642	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.0	4.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂	
643	8D3	SD1377	2	土師器	無台椀	12.8	4.8	4.6	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～灰白	礫、砂	
644	8D3	SD1377		土師器	無台椀	11.9	3.9	4.1	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
645	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.3	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、砂、軽	
646	7D2	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.4	5.2	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽、針	
647	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.5	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲少	
648	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.6	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
649	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.4	5.2	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲、針	
650	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.6	4.5	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲、砂	
651	8C18	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.1	4.8	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
652	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.5	4.8	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
653	7D17	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.3	4.6	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、軽、雲少	
654	8C3	SD1377	2	土師器	無台椀	12.4	4.0	4.9	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂多、軽、雲少	

別表２　遺物観察表（17）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
655	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.7	4.5	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、軽、雲少	
656	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.2	4.9	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～にぶい橙	礫、砂多、針少、雲少	
657	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.4	5.0	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、針少、雲少	
658	8D3	SD1377	2	土師器	無台椀	13.5	4.5	5.1	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲、砂	
659	8D23･24	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.3	4.2	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、針	
660	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.4	4.2	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、針少	
661	8C12	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.4	4.5	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂多、軽、雲少	
662	7D2	SD1377		土師器	無台椀	13.3	4.2	5.3	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂、雲	
663	8D23	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.4	4.8	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、軽、雲少	
664	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.5	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫、砂、針少	
665	7E4	SD1377	3	土師器	無台椀	13.6	4.1	4.5	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲、軽	
666	8C13	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.1	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙・浅黄橙	礫、軽、針少	
667	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.1	4.4	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、雲少	
668	7E2	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.2	4.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂多、雲少、針少	
669	8C12	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.0	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂多、雲少	灯明皿。口縁部に油煙付着
670	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.0	5.2	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂多、雲少	
671	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.5	5.3	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰～灰白	礫、砂多、雲少	
672	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.0	5.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫、砂、雲少	
673	7C1	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.2	4.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、針少	
674	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.1	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄	砂、雲少	
675	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.4	5.6	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい褐～橙	砂、雲少	
676	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.1	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、針少、雲少	
677	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.2	5.1	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、軽、針少	
678	8E1	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.1	4.8	36	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰黄～にぶい黄橙	砂多、雲少	
679	8E2	SD1377		土師器	無台椀	13.2	4.6	4.1	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、雲少	
680	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.0	5.8	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、雲少	
681	8E1	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.1	5.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、軽多、雲少	
682	7E5	SD1377	2	土師器	無台椀	13.4	4.4	4.5	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
683	6C5	SD1377		土師器	無台椀	13.7	4.5	4.9	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂、雲少	
684	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.6	4.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
685	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.4		4.3	12	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙～にぶい橙	礫、砂、雲少	
686	8D9	SD1377		土師器	無台椀	13.7	4.2	5.0	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、雲少	
687	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	12.6	3.8	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、雲少	
688	8E1	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.4	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰黄	礫、砂、針少、雲少	
689	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.5	4.6	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫、砂、雲少	
690	8C23	SD1377		土師器	無台椀	13.4	4.3	5.8	5	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	橙	砂、針少	
691	8D8	SD1377	2	土師器	無台椀	12.9	4.4	4.8	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、針少、雲少	
692	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.5	4.4	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽多、礫	
693	8C2	SD1377	2	土師器	無台椀	12.5	4.3	4.5	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、雲少	
694	7D	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.5	5.1	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡橙	砂、針	
695	8C	SD1377		土師器	無台椀	11.8	4.0	4.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白・灰	砂、雲少	

別表２　遺物観察表（18）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
696	8D23･24	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.2	4.6	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
697	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.5	4.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、軽、雲	
698	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.5	4.6	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫	
699	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.2	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
700	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.2	3.8	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～灰褐	礫、砂多、雲少	
701	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.2	4.6	4.6	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙～浅赤橙	砂多、雲少	
702	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.4	4.2	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂多、雲、礫	
703	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.2	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂、雲少	
704	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.6	5.6	5.3	18	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	橙	軽、雲少	
705	7E4	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.3	4.9	7	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰黄褐	礫、砂多、雲少	
706	8C23	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.3	4.4	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
707	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.2	5.2	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂多、雲少	
708	7D22	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.0	4.5	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
709	8C13	SD1377		土師器	無台椀	13.2	3.8	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙・にぶい黄橙	礫、砂、針	
710	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.8	4.8	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂多、軽	
711	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.5	5.8	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
712	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.9	5.4	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、砂、雲少	
713	7D1	SD1377		土師器	無台椀	11.5	4.1	4.8	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂多、礫、軽、雲少	
714	7B23	SD1377		土師器	無台椀	11.9	4.0	4.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～橙	礫、雲少	
715	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.1	4.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂多、雲少	
716	8D23	SD1377		土師器	無台椀	11.8	4.1	5.2	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、雲少	
717	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.0	4.4	5.2	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
718	7E4	SD1377	2	土師器	無台椀	13.1	3.9	4.4	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	礫、砂、軽、雲少	
719	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.5	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙～灰黄	砂多、雲少	
720	8D13	SD1377		土師器	無台椀	12.7	4.4	5.3	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～橙	砂、針少	
721	8E3	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.1	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、雲少	
722	7E4	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.7	4.4	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～灰黄	礫、砂、雲少、針少	
723	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.1	4.1	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂多、雲少	
724	7B23	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.5	5.2	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙・にぶい黄橙	礫、砂多	
725	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.5	4.2	5.1	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～橙	礫多、雲少	
726	8C3	SD1377		土師器	無台椀	13.2	4.0	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多、軽、雲少	被熱している
727	7E3	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.2	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	軽、針少、雲少	
728	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.5	4.5	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲少	
729	7D1	SD1377		土師器	無台椀	13.2	4.6	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、針、礫	灯明皿。口縁部に油煙付着
730	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.3	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、軽、雲少	
731	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.5	4.7	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、砂	
732	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.8	4.2	4.5	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、礫	
733	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.5	5.2	14	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲少	
734	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.4	5.1	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、針少	
735	8D3	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.1	4.0	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、雲少	灯明皿。口縁部に油煙付着
736	8E2	SD1377		土師器	無台椀	11.9	4.2	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、針少、雲少	
737	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.2	4.9	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂多、雲少	

別表２　遺物観察表（19）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
738	8D13	SD1377		土師器	無台椀	13.1	4.7	5.3	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、砂	
739	8D13	SD1377		土師器	無台椀	11.8	4.0	4.3	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、針少、雲少	
740	7C6	SD1377		土師器	無台椀	11.1	3.7	4.0	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、礫、軽、雲	
741	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.8	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、雲少	
742	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.8	5.1	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、針少、雲少	
743	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.9	5.2	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、軽、雲少	内面に黒色付着物
744	7D17	SD1377		土師器	無台椀	13.7	5.1	5.8	16	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	礫、軽、雲少	
745	8E1	SD1377		土師器	無台椀	13.3	5.1	5.2	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、雲少	
746	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.3	5.1	5.7	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、軽、雲少	
747	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.9	5.4	23	右ロクロ整形。外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、軽多、雲少	
748	8D8	SD1377		土師器	無台椀	14.6	5.2	5.4	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、砂	
749	8D3	SD1377		土師器	無台椀	14.0	5.2	5.6	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、軽、針少、雲少	
750	8D8	SD1377		土師器	無台椀	14.2	5.1	5.6	24	ロクロ整形。回転糸切り。	A	にぶい褐	砂、雲少	被熱している
751	7D2	SD1377		土師器	無台椀	15.7	5.4	6.8	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽、雲、針	被熱している
752	8D13	SD1377		土師器	無台椀	14.6	4.9	5.4	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、軽、雲少	
753	8D13	SD1377		土師器	無台椀	14.2	4.9	4.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙～灰白	礫、砂、雲少	
754	8E2	SD1377		土師器	無台椀	14.2	4.9	4.9	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、針少	
755	8D8	SD1377		土師器	無台椀	16.1	5.7	5.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂	
756	8D3	SD1377		土師器	無台椀	15.0	6.2	5.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	礫、砂、雲少	
757	8D9	SD1377		土師器	無台椀	13.2	4.7	5.0	21	右ロクロ整形、右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽（やや大）多、針	体部に墨書則天文字「天ヵ」
758	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.0	4.7	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多、雲	漆パレット
759	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.0	4.9	36	右ロクロ整形、右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲、礫少	体部に墨書則天文字「天」
760	8C23	SD1377		土師器	無台椀	13.0	4.2	4.3	8	右ロクロ整形、右回転糸切り。	B	灰白	軽多、針、雲	体部に墨書則天文字「天」
761	7C21	SD1377		土師器	無台椀	12.4	4.5	4.4	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂、軽（大）	体部に墨書則天文字「天ヵ」
762	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.5	4.4	5.1	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂多、雲少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
763	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.0	3.9	4.7	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、雲、	体部に墨書則天文字「天ヵ」
764	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.9	4.2	4.9	36	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽少、雲	体部に墨書則天文字「天」
765	8E2	SD1377		土師器	無台椀	12.1	4.5	4.3	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、黒	体部に墨書則天文字「天」
766	8D3	SD1377		土師器	無台椀	14.0	4.2	5.2	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂、雲	体部に墨書「□」
767	8D8	SD1377		土師器	無台椀	13.6	3.8	4.6	1	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰黄	礫、砂、針少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
768	8D8	SD1377		土師器	無台椀	12.3	4.2	5.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	礫、黒少、軽多、石英、長英	体部に墨書則天文字「天ヵ」
769	8D3	SD1377		土師器	椀	13.2			15	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、雲少	体部に墨書則天文字「天」
770	8E3	SD1377		土師器	椀	12.0			8	ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。		浅黄橙	砂、針少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
771	8D8	SD1377		土師器	椀	12.5			5	ロクロ整形。		灰黄	砂	体部に墨書則天文字「天ヵ」
772	8D8	SD1377		土師器	椀	13.0			5	ロクロ整形。		にぶい橙	礫、砂、針少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
773	8D3	SD1377		土師器	椀				3	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、雲少	体部に墨書則天文字「天」
774	8D8	SD1377		土師器	椀				3	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂、雲少	体部に墨書「□」
775	8D8	SD1377		土師器	椀					ロクロ整形。		浅黄橙	砂、針少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
776	8D14	SD1377	3	土師器	椀					ロクロ整形。		灰白	砂、針少	体部に墨書則天文字「天ヵ」
777	7D2	SD1377		土師器	椀					ロクロ整形。		灰白	砂	体部に墨書「□」
778	7D1	SD1377		土師器	椀					ロクロ整形。		浅黄橙	砂、針少	体部に墨書「□」
779	7D2	SD1377		土師器	有台椀	11.3	4.4	6.2	1	ロクロ整形。高台貼り付け。		浅黄橙	砂、雲多	
780	8C18	SD1377		土師器	皿	13.0			4	ロクロ整形。		橙～浅黄橙	砂、軽	

別表２　遺物観察表（20）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
781	8E2	SD1377		黒色土器	無台椀	12.3	4.2	5.8	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂、雲	
782	8C13	SD1377		黒色土器	無台椀	12.8	4.3	4.2	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外にぶい黄橙	砂多、雲、針	
783	8D14	SD1377		黒色土器	無台椀	12.0	4.7	5.8	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰白	砂多、針	
784	8C78	SD1377	2	黒色土器	無台椀	13.5	5.3	5.2	13	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰白～にぶい橙	砂多、礫、雲	
785	8D8	SD1377		黒色土器	無台椀	12.6	4.5	4.6	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外浅黄橙	雲、針	
786	8D8	SD1377		黒色土器	無台椀	13.1	4.3	4.4	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外浅黄	砂、針	
787	8C13	SD1377		黒色土器	無台椀	13.4	4.5	6.0	11	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙～黄灰	針、軽	
788	7D2	SD1377		黒色土器	無台椀	12.5	4.9	5.0	8	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙～にぶい橙	砂、雲	
789	8D8	SD1377		黒色土器	無台椀	12.6	4.5	4.0	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外灰黄褐	砂多、礫、針	
790	8C13	SD1377		黒色土器	無台椀	12.5	4.7	5.4	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外浅黄橙	砂	
791	7E3･4	SD1377		黒色土器	無台椀			4.7		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂多、雲、礫	
792	8C23	SD1377		黒色土器	無台椀			0.4		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	針、雲、砂	
793	8C3	SD1377		黒色土器	無台椀			6.2		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外にぶい黄橙	砂、針	
794	7D17	SD1377		黒色土器	無台椀			5.0		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	砂	
795	8D8	SD1377		黒色土器	無台椀			5.0		ロクロ整形。底部調整不明瞭。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外明黄褐～にぶい黄橙	砂、針	
796	8D8･9	SD1377		黒色土器	無台椀	15.6	6.9	5.7	18	ロクロ整形。右回転糸切り後ケズリ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	砂、礫、針	
797	8D8	SD1377		黒色土器	無台椀	14.7	5.9	5.7	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外にぶい黄橙	針多、砂	
798	8C13	SD1377		黒色土器	無台椀	17.8	6.2	7.0	20	ロクロ整形。体部下端～底部手持ちケズリ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂多、雲	
799	8D8	SD1377		黒色土器	無台椀			6.6		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰黄褐	針、砂	
800	8D13	SD1377		黒色土器	無台椀			5.0		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	砂、針、軽	
801	8D13	SD1377		黒色土器	有台椀			6.3		ロクロ整形。回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂、針	
802	8D13	SD1377		黒色土器	有台椀	14.2	5.4	6.1	11	右ロクロ整形。ナデ。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂多、雲	
803	8D3	SD1377		黒色土器	有台椀	15.2	6.0	7.0	10	ロクロ整形。回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂、雲	
804	8D13	SD1377		黒色土器	有台椀	16.2	6.0	7.6	6	右ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂、針多、礫	
805	8D9	SD1377	2	黒色土器	椀	12.0			7	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白～黒	砂、針	
806	8D3	SD1377		黒色土器	椀	12.6			16	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	針、砂、雲	
807	8B23	SD1377		黒色土器	椀	12.8			6	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙～黄灰	砂	

別表２　遺物観察表（21）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
808	8C13	SD1377		黒色土器	椀	12.0			7	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂、雲	
809	8D3	SD1377		黒色土器	椀	13.8			7	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	砂、雲	
810	8D8	SD1377		黒色土器	椀	12.8			13	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰黄褐	砂、針	
811	8D8	SD1377	2	黒色土器	椀	12.8			9	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	砂、雲、礫	
812	8D18	SD1377	3	黒色土器	椀	12.8			6	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰	針、砂	
813	8D13	SD1377		黒色土器	椀	12.6			17	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙～灰	砂、針	
814	8D8	SD1377		黒色土器	椀	18.0				ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	砂多、針	
815	8D3	SD1377		黒色土器	有台皿	12.4			13	右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	針、砂、礫	
816	8C13	SD1377		黒色土器	有台皿	11.6			8	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	砂、針	
817	8D9	SD1377		黒色土器	有台皿	12.2	4.4	5.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂、針	
818	8D3	SD1377		黒色土器	有台鉢	24.6	9.2	8.0	12	ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外橙	砂、礫、針多	
819	8D8	SD1377		須恵器	有台杯	16.8	6.6	8.2	34	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後ナデ。		灰白	軽少粒多、礫、砂、黒少	外面底部に墨痕
820	8C12·13·17·18	SD1377	2	須恵器	無台杯	13.0	3.3	8.7	13	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。		灰白	礫、砂	底部に墨書「□」。焼成不良、酸化焔
821	8D8	SD1377	2	須恵器	無台杯	12.6	4.4	7.3	33	右ロクロ整形。底部右回転ヘラ切り後ヘラナデ。底部に板状圧痕。		灰	黒多、白多	小泊系
822	8C17	SD1377		灰釉陶器	椀	15.6	5.2	7.0	24	右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け時ナデ。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白・オリーブ黄	黒	
823	7D12	SD1377		灰釉陶器	椀	14.8	5.0	6.7	29	右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け時ナデ。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白・灰黄	黒	
824	7C21	SD1377		土師器	台付鉢			15.8		右ロクロ整形。底面ケズリ。		浅黄橙	礫、砂、雲	高台部内・外面にスス付着
825	7B	SD1377	1	土師器	台付鉢			13.1		ロクロ整形。		浅黄橙	礫多、雲少	高台部内・外面にスス付着
826	8D8	SD1377		土師器	台付鉢	29.0			2	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂多、雲	口縁～体部にスス付着
827	7B24	SD1377	1	土師器	鍋				4	ロクロ整形。		橙	礫、砂多	
828	8C23	SD1377		土師器	小型羽釜	13.3			7	ロクロ整形。鍔を「L」字状に折り曲げて作った後、口縁部を貼り付ける。		にぶい黄橙	砂多、礫	
829	8C17	SD1377		土師器	甕	17.6			4	ロクロ整形。		浅黄橙	砂多、礫	
830	8D3	SD1377		土師器	甕	17.9			5	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂多	
831	8C13	SD1377		土師器	甕					ロクロ整形。		浅黄橙	礫、針	
832	7D6	SD1377		土師器	甕			11.0		胴部外面ケズリ。平底甕カ。底部剝離。		灰黄褐	砂、針	
833	8D3	SD1377		須恵器	広口壺					ロクロ整形。		灰	黒多、白多	小泊系
834	6D10	SD1377	1	須恵器	広口壺	23.0			13	ロクロ整形。		灰	黒多、白多	小泊系
835	7E4·9	SD1377		須恵器	広口壺				5	ロクロ整形。		灰	白	
836	7B17	SD1377	1	須恵器	広口壺			12.3		右ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。			白多	小泊系
837	7B23	SD1377	1	須恵器	瓶			15.9		外面平行タタキ。内面ハケメ。		灰	礫、砂	
838	8C2	SD1377		須恵器	横瓶		22.8			外面平行タタキ。内面放射状あて具痕、ナデ消し。		灰	白、針	

別表２　遺物観察表（22）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
839	8D8	SD1377		須恵器	甕	18.7			13	ロクロ整形。		灰	白	
840	8C3	SD1377		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕後木目を有する同心円あて具痕。		暗灰	白多、軽	
841	7E5	SD1377		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕。		灰白	礫	
842	7B18	SD1377	1	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕後ナデ消し。		灰	黒多	
843	8C3	SD1377		須恵器	甕					外面平行タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		にぶい橙	灰、礫	
844	8C17	SD1377		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕後木目を有する扇状あて具痕。		灰	白	
845	8D2･3	SD1377	3	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する同心円あて具痕。		オリーブ黒	白、軽	
846	8D8	SD1377		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕。		暗灰	礫	
847	7E2	SD1377		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰	白多	内面に墨痕と摩耗痕有り。転用硯
848	7D17	SD1377	4	製塩土器				19.8		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
899	8D	SW1343		土師器	有台椀			5.5		ロクロ整形。		にぶい橙	砂多	
900	8D	SW1343		土師器	無台椀	12.0	4.0	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲少、礫少、針少	
901	8D	SW1343		土師器	無台椀	11.8	4.2	5.0	16	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫少、針少	
902	8D	SW1343		土師器	無台椀	12.5	4.2	5.4	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
903	8D	SW1343		土師器	無台椀	11.9	4.5	5.0	7	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少、針多	
909	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	3.9	4.4	12	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、軽少	
910	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	3.8	5.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲多、礫多	
911	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	3.7	5.2	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
912	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	3.8	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、雲少	
913	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	3.7	6.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙・にぶい橙	礫	
914	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	3.9	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙～にぶい黄橙	砂、雲少	
915	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.1	3.8	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄	砂、針少	
916	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.0	3.9	4.8	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、雲少	
917	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.0	3.7	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄	礫、砂	
918	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	3.6	4.8	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄	礫、砂、雲少	
919	8D	SK1419	2	土師器	無台椀	12.2	3.7	4.9	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、雲少	
920	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.7	3.7	4.5	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、針少、雲少	
921	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.9	3.6	4.5	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂多、針少	
922	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	3.4	4.1	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂多、雲少	
923	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	3.5	4.6	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲やや少	底部にヘラ記号「一カ」
924	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.1	3.9	4.3	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～にぶい橙	礫、砂多、軽多、雲少	
925	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.1	4.2	5.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、針少	
926	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.5	4.5	5.3	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
927	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	4.8	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～淡橙	礫、砂、雲少	
928	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.2	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
929	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	4.1	4.9	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄	礫、砂多、雲少	
930	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	4.1	5.2	14	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙～にぶい黄橙	雲少、礫多	

別表２　遺物観察表（23）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
931	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.8	4.5	4.9	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～橙	礫、軽	
932	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.5	4.5	22	右ロクロ整形。内・外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	淡黄～にぶい橙	砂、雲少	
933	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	4.9	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、軽、雲少	
934	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.4	4.5	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～にぶい黄橙	雲少、礫多	
935	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	4.2	5.8	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	黄橙	雲少、礫多、針少	
936	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.1	5.1	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂多、雲少	
937	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.1	4.2	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい橙	礫、砂多、雲少	
938	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	4.0	4.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙～橙	礫、砂、雲少	
939	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.7	4.8	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂多、雲少	
940	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.4	4.4	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙～灰	礫、砂、軽	
941	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.1	4.4	5.2	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、雲少	
942	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.3	5.6	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、砂、雲	
943	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.3	4.7	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
944	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	11.8	4.7	5.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	針少、礫多	
945	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.9	4.5	4.8	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫多	
946	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.5	4.9	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、砂、雲少	
947	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.1	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多	
948	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.2	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	淡赤橙～灰白	砂、針少	
949	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.2	4.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	雲少、礫、針多	
950	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.3	5.0	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、雲少	
951	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.2	4.7	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	淡橙	雲多、礫多、針少	
952	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	3.7	5.2	2	ロクロ整形。切り離し法不明。	不明	にぶい黄橙	礫、軽、雲少	
953	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.3	5.8	10	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、針少、雲少	
954	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.3	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙～橙	礫、砂、針少、雲少	
955	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.5	5.2	27	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～橙	礫、砂、軽、針少、雲少	
956	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	4.7	4.2	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、針少、雲少	
957	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	14.0	4.0	5.1	9	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙・にぶい黄橙	礫、砂、針	
958	8D	SK1419	2	土師器	無台椀	11.9	4.1	4.8	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄	礫、砂、雲少	
959	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.4	4.6	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽、雲	
960	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.4	4.2	4.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多、針多	
961	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	4.2	4.4	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙～褐灰	礫、砂、雲少	
962	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.4	4.3	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～浅黄橙	雲多、礫多	
963	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.3	4.1	4.7	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～灰	雲多、軽少、針多、礫多	
964	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	3.9	4.9	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
965	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.2	4.2	4.8	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少	
966	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	3.9	4.1	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽少、雲少	
967	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.2	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂多、雲少	
968	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.4	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～赤橙	雲多、礫多	
969	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.5	5.2	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、雲少、針少	

別表２　遺物観察表（24）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
970	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.4	4.1	4.4	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰黄・浅黄	礫、砂多	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
971	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.2	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、雲少	
972	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.3	4.5	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙～にぶい橙	礫、砂、雲少	
973	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.3	4.5	8	ロクロ整形。回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
974	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.0	5.2	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、砂、雲	
975	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.6	5.3	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰黄褐	砂、雲少	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
976	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.3	4.2	5.4	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙・にぶい黄橙	礫、軽	
977	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.1	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
978	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	4.2	4.6	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、軽多	
979	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.3	4.8	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂多、雲少	
980	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.0	5.6	9	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙～にぶい褐	針多、礫多、軽少	
981	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.3	3.9	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、雲少	
982	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.2	4.1	5.4	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多、針少	
983	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.6	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂	
984	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.4	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
985	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.1	3.9	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、雲少	
986	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.4	4.3	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、砂多、雲少	
987	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.1	5.4	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫	
988	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.1	5.0	8	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽	
989	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.4	5.0	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄	軽、砂、針少	
990	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	4.2	5.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙～灰	砂、針少	
991	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.6	4.8	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫少、雲少	
992	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.9	3.9	4.2	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫多、雲少	
993	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	11.7	4.4	4.9	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、軽少	
994	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.3	5.2	6	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、針少	
995	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.9	4.2	5.0	19	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	礫、砂、雲少	
996	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.8	4.1	5.5	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～灰	砂、礫	
997	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.0	4.0	4.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙・橙	礫、雲少	
998	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.7	4.0	4.6	22	右ロクロ整形。外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	橙～浅黄橙	砂、針少、雲少	
999	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	4.2	5.4	34	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄橙～淡赤橙	軽、雲少	
1000	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	13.4	4.5	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲少、礫多、針少	
1001	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.3	5.3	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、針少	
1002	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.5	4.2	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、針少、雲少	
1003	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.3	5.0	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂、雲少	
1004	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.6	6.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	針少、礫多	
1005	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.3	4.7	6.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂、雲少	
1006	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.4	4.6	5.0	36	右ロクロ整形。外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	灰黄	礫、砂、軽、針少	
1007	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	4.1	5.0	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、針少	
1008	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	4.8	23	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少	
1009	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.3	4.5	5.0	30	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、砂、針少	
1010	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.8	4.4	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰黄	礫、砂多	
1011	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	3.8	5.2	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙～にぶい橙	礫、砂、雲少	

別表２　遺物観察表（25）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1012	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.8	4.0	5.2	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙～灰	礫、砂、針少	
1013	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.1	4.7	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1014	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	4.4	4.4	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	軽や多、砂、針少	
1015	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	4.3	5.2	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多、針少	
1016	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	4.3	4.6	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、砂多、雲	
1017	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.1	3.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～灰	軽多、礫、砂多、雲少	
1018	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.2	5.0	21	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	灰白	軽少、雲少	
1019	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.5	5.0	6	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	砂、針少	
1020	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.4	4.1	4.5	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲少	
1021	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	3.6	4.5	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、針少、雲少	
1022	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.4	5.0	26	右ロクロ整形。内・外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄橙～灰	砂、雲少、針少	
1023	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.1	4.3	5.2	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～灰	礫、砂多、針少、雲少	
1024	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.5	4.3	4.8	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙～灰白	礫、砂多、針少	
1025	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	3.9	4.1	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1026	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	4.0	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	軽、雲少	
1027	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.6	5.0	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
1028	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.3	5.1	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多、針少	
1029	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.3	4.0	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、雲少	灯明皿。口縁部と底部内面に油煙付着
1030	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	3.9	5.0	9	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	雲少、礫多	
1031	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.7	4.5	5.2	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、針少、雲少	
1032	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.1	5.2	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1033	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	3.9	4.3	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫多、針多、雲少	
1034	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.3	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、雲少	
1035	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.2	4.6	23	右ロクロ整形。内・外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、軽	
1036	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.2	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	軽少、雲少	
1037	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.3	4.0	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙～灰	砂、雲少、針少	
1038	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.0	4.1	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～黄灰	雲多、礫多、軽少	
1039	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.2	4.0	4.4	8	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	砂、雲、黒多	
1040	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.1	5.6	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙～赤褐	雲多、礫多、針少	
1041	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、針少	
1042	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.5	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、針少	
1043	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.2	4.6	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙～灰白	礫、砂、針少	
1044	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	4.3	5.2	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂、雲少	
1045	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.6	4.8	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、礫多、軽少	
1046	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.1	5.0	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、軽少	
1047	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.2	4.8	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄	雲少	
1048	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	4.7	4.8	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
1049	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.2	4.4	29	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、軽	
1050	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.7	4.8	5.4	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙～灰	砂、針少	

別表２　遺物観察表（26）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1051	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.4	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫、砂多、雲少、針少	
1052	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.2	5.0	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
1053	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.6	5.0	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	砂	
1054	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.3	4.7	4.5	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲少	
1055	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	4.1	4.5	17	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、雲少	
1056	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.0	4.4	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙～にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
1057	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.8	4.0	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白～灰	砂多、針少	
1058	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	4.1	4.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫多、針少	
1059	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.5	4.3	4.8	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、雲少	
1060	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.7	4.6	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰～橙	礫、砂、雲少	
1061	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.2	4.1	5.2	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～にぶい橙	砂、針少	
1062	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	4.1	5.6	6	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	灰白	礫	
1063	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.5	5.2	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰黄褐	礫、砂、雲少	
1064	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.0	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、針少、雲少	
1065	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.4	4.5	4.7	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
1066	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.6	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～浅黄橙	砂、雲少、針少	
1067	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	3.8	4.8	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～浅黄橙	礫、砂、雲少	
1068	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.3	4.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	軽、砂、針少	
1069	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.1	4.6	36	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	軽、雲少	
1070	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.5	5.4	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫、雲少	
1071	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.0	4.1	5.6	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂	
1072	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.2	4.2	5.6	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針	
1073	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.0	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙～浅黄橙	黒多、雲少、礫多	
1074	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.2	5.5	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	砂、針少	
1075	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.6	4.6	6.1	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰～灰白	砂多、雲	
1076	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	4.5	4.5	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、針少	
1077	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	3.6	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂多、雲少	
1078	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.6	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰黄	礫、砂多、雲少	内・外面にスス付着
1079	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.4	4.0	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄	礫、砂、雲少	
1080	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	3.8	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
1081	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.1	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙～灰褐	軽、針少	
1082	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.5	4.6	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1083	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.8	5.0	33	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白～にぶい黄橙	雲多、礫多、針多	
1084	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.0	3.8	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～暗灰	砂、雲少、針少	
1085	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	13.6	4.3	5.7	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	針多、黒多	
1086	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.4	3.9	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲少、礫多	
1087	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	3.9	4.2	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	礫、砂、針少、雲少	
1088	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.2	4.9	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、礫多	
1089	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.0	5.0	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白～灰	砂多、軽多、針少、雲少	
1090	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.3	4.5	4.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲少	

別表２　遺物観察表（27）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1091	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.0	4.0	4.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	黒多、礫多	
1092	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.7	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙～にぶい黄橙	礫、砂多、軽	
1093	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.4	4.4	4.3	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂、雲少	
1094	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	4.2	5.5	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい赤褐	礫、砂多、雲少、針少	
1095	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.0	4.5	4.8	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲少	
1096	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.2	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂、雲	
1097	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.4	4.3	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲多、礫多	
1098	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.3	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、雲少	
1099	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	3.8	4.4	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲少	
1100	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.2	4.2	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂、雲少	
1101	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	3.9	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、雲少	
1102	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.0	5.4	11	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	橙	砂、雲少、針少	
1103	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	3.9	4.2	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄	雲多、礫多、針少	
1104	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.1	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙～にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
1105	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	3.9	5.0	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂、雲少	
1106	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.5	3.9	5.0	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂、雲少	
1107	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	14.1	4.5	4.3	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄～灰	砂、針少、雲少	
1108	8D	SK1419		土師器	無台椀	14.3	4.4	5.0	31	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	B	灰白	砂	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
1109	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	4.7	5.4	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、雲少	
1110	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.3	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙～にぶい黄橙	砂、針少	
1111	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.1	5.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
1112	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	5.4	2	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	砂多、雲、軽	
1113	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.4	4.8	5.2	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂、針少	
1114	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.9	4.0	4.4	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1115	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.9	4.1	5.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多	
1116	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.0	5.4	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	針少、礫多	
1117	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.2	4.4	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	針多、礫少	
1118	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.3	5.4	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽多、針少	
1119	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.4	4.1	4.9	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂、針少、雲少	
1120	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.9	4.2	4.7	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、雲少	
1121	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.2	4.3	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡橙	礫、砂	
1122	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.0	4.2	4.4	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～にぶい黄橙	雲多、礫多、針多、軽少	
1123	8D	SK1419		土師器	無台椀	11.6	3.9	4.8	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
1124	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.3	5.0	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙・黄灰	砂多、礫	
1125	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.9	4.2	4.9	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少	
1126	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.3	4.8	12	ロクロ整形。切り離し法不明。	不明	浅黄橙～にぶい黄橙	砂多	
1127	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.7	3.9	5.6	11	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	淡黄～にぶい橙	砂、雲少	
1128	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	4.3	4.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、針少、礫多	
1129	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.0	4.5	4.9	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲多、礫多、針少	

別表２　遺物観察表（28）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1130	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.1	4.6	5.2	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙～にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
1131	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.6	5.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰黄褐～灰白	砂、雲少	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
1132	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.6	4.8	36	右ロクロ整形。内面沈線状のロクロ目。右回転糸切り。	B	灰白～灰	砂多、雲少、針少	
1133	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	3.9	4.4	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、針少	
1134	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	4.5	5.5	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫	
1135	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.8	4.2	4.2	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂、雲、針少	
1136	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.7	5.0	5.5	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	砂多	
1137	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.4	4.1	5.0	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲多、針多	
1138	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.2	4.4	4.1	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、針少、礫多	
1139	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.5	5.7	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白～にぶい橙	軽多	
1140	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	4.2	4.6	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙～灰黄褐	礫、砂多、雲少	
1141	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	12.1	4.1	4.7	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～にぶい黄橙	雲多、礫多、軽多	
1142	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.5	4.5	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、砂、雲少	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
1143	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.3	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、針少、礫多	
1144	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.4	4.3	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	砂多	
1145	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.6	4.7	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、礫多、針少	
1146	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.3	4.5	5.0	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、針少	
1147	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.2	4.3	4.8	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	礫、砂多	
1148	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.2	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲少	
1149	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.1	4.4	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、雲少、針少	
1150	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.0	4.0	4.6	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	軽、砂	
1151	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.0	3.8	4.3	5	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂、針少	
1152	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	11.2	4.2	5.2	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	砂、雲少	
1153	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.7	4.8	4.9	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、雲少	
1154	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.1	4.9	4.7	6	右ロクロ整形。内・外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	不明	淡橙	礫、砂、針少	
1155	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.6	5.0	5.2	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙～灰	砂、雲少	
1156	8D	SK1419		土師器	無台椀	14.3	5.3	4.8	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	砂、雲少	
1157	8D7･12	SK1419	1	土師器	無台椀	15.1	6.1	5.3	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1158	8D	SK1419		土師器	無台椀	14.7	5.7	4.8	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、軽、雲少、針少	
1159	8D	SK1419		土師器	無台椀	15.1	5.8	5.7	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、砂、針少	
1160	8D	SK1419		土師器	無台椀	14.7	5.4	5.8	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少	
1161	8D	SK1419		土師器	無台椀	15.0	4.8	6.2	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂	
1162	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	15.3	5.6	5.5	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	淡橙～淡赤橙	礫、軽	
1163	8D	SK1419		土師器	無台椀	15.6	6.1	6.5	23	右ロクロ整形。内・外面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	淡赤橙～にぶい黄橙	礫、砂多、雲少	
1164	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.8	4.3	4.7	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、黒、雲少	底部に墨書則天文字「天」
1165	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.2	4.2	4.7	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	黒多、軽	体部に墨書則天文字「天･天･天」。正位２点、逆位１点の3文字有り
1166	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.2	3.9	4.7	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針少、礫、砂、黒	底部に墨書「□」
1167	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.1	4.4	36	ロクロ整形。内面沈線状のロクロメ。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、針少	体部に墨書則天文字「天」

別表２　遺物観察表（29）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1168	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.5	4.1	4.4	16	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄	礫、砂、雲、針少	体部に墨書則天文字「天」
1169	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.1	5.1	23	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、雲少、黒	体部に墨書則天文字「天」
1170	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.3	4.6	5.0	2	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、砂、針少、雲少	体部に墨書「□」
1171	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.4	4.2	4.2	10	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、雲少	体部に墨書「□」
1172	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.6	4.7	4	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂多、雲少、針少	体部に墨書「□」
1173	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.0	4.2	5.0	2	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	砂、雲少、黒	体部に墨書則天文字「天」
1174	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.1	4.2	5.4	12	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂、雲少、針少、黒多	体部に墨書則天文字「天ヵ」
1175	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.9	4.4	4.5	24	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、軽、黒	体部に墨書則天文字「天ヵ」
1176	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.3	4.2	5.3	28	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	礫、砂多	体部に墨書則天文字「天ヵ」
1177	8D	SK1419		土師器	無台椀	13.0	4.4	4.4	31	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	黒、礫、砂、雲少、軽	体部に墨書則天文字「天ヵ」
1178	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.8	4.7	4.6	28	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、黒、針少、雲少	体部に墨書則天文字「天」
1179	8D	SK1419		土師器	無台椀	12.7	4.7	4.5	20	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、黒	体部に墨書則天文字「天ヵ」
1180	8D	SK1419	1	土師器	椀	13.0			11	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、雲少	体部に墨書「□」
1181	8D	SK1419	1	土師器	椀	12.3			7	ロクロ整形。		にぶい黄橙	砂、雲	体部に墨書「□」
1182	8D	SK1419		土師器	椀	12.0			13	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂、雲	体部に墨書則天文字「天ヵ」
1183	8D	SK1419		土師器	椀				1	ロクロ整形。		にぶい黄橙	砂少	体部に墨書「□」
1184	8D	SK1419		土師器	椀				2	ロクロ整形。		浅黄橙	砂	体部に墨書「□」
1185	8D	SK1419	1	土師器	椀				3	ロクロ整形。		にぶい橙	礫、砂多	体部に墨書「□」
1186	8D	SK1419		土師器	椀				2	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂	体部に墨書「□」
1187	8D	SK1419	1	土師器	椀					ロクロ整形。		淡橙	砂、針少	体部に墨書「□」
1188	8D	SK1419		土師器	椀					ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂	体部に墨書「□」
1189	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	13.4	4.2	4.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂多、黒多	漆パレット
1190	8D	SK1419	1	土師器	無台椀	12.6	4.0	5.1	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、軽	半截竹管状の工具？焼成前穿孔、未貫通
1191	8D	SK1419	1	土師器	有台椀			6.3		ロクロ整形。回転糸切り後高台貼り付け。		浅黄橙	砂、雲	
1192	8D	SK1419	1	土師器	有台椀	12.2	4.5	6.2	9	ロクロ整形。高台貼り付け。		浅黄橙	砂、雲	
1193	8D	SK1419	1	土師器	有台椀	13.8	4.2	6.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け。		浅黄橙	礫、砂、雲	高台内・外面に被熱痕、内・外面にスス付着
1194	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	12.3	4.3	4.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外浅黄橙	針多、砂	
1195	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	13.3	4.3	4.7	2	右ロクロ整形。ミガキ。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内暗灰、外浅黄橙	針、砂	
1196	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	12.8	4.5	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外浅黄橙	砂	
1197	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	13.1	4.4	4.1	4	ロクロ整形。ヘラナデ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂多、雲、針	
1198	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	12.8	4.9	5.5	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外にぶい橙	針、砂、礫	
1199	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	13.1	5.3	5.4	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外浅黄橙	針多	
1200	8D	SK1419		黒色土器	無台椀	14.9	5.5	5.4	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂、雲	
1201	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	14.7	5.8	5.1	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂多、雲	
1202	8D	SK1419		黒色土器	無台椀	15.2	6.0	4.9	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂多、雲多	
1203	8D7･12	SK1419	1	黒色土器	無台椀	15.5	5.7	4.7	3	ロクロ整形。ヘラナデ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	針、砂	
1204	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	15.4	6.3	5.2	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂多、雲多	
1205	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	15.0	4.7	5.8	29	ロクロ整形。ヘラナデ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂多、雲	
1206	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀	15.0	5.7	4.6	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	針、砂、礫	

別表２　遺物観察表（30）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1207	8D	SK1419	1	黒色土器	椀	13.2			9	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	砂、礫	
1208	8D	SK1419	1	黒色土器	椀	14.7				右ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂、針	
1209	8D	SK1419		黒色土器	椀	14.7				ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂多、針、雲	
1210	8D	SK1419	1	黒色土器	無台椀			4.5		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	雲、砂	
1211	7D7･12	SK1419	1	黒色土器	無台椀			5.2		ロクロ整形。ヘラナデ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙	針、砂	
1212	8D	SK1419	1	黒色土器	有台椀	15.6			32	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	雲多、砂	
1213	8D7･12	SK1419	1	黒色土器	有台皿	12.8	3.6	5.7	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	砂、礫	
1214	8D	SK1419	1	黒色土器	有台皿	12.4	3.7	6.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外淡橙	砂、礫	
1215	8D	SK1419	1	黒色土器	有台皿	10.6			9	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外橙	針、砂、礫	
1216	8D	SK1419		黒色土器	無台椀	12.2	4.1	5.0	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。内・外面黒色処理、ミガキ。	A	黒	針多、砂	
1217	8D	SK1419	1	黒色土器	有台椀	12.1	4.7	4.0	25	右ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、雲、砂	
1218	8D	SK1419	1	黒色土器	有台椀	11.8	4.7	5.7	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、砂	
1219	8D	SK1419	1	黒色土器	有台椀	12.9	5.0	6.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、砂	
1220	8D	SK1419	1	黒色土器	有台椀			5.4		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、砂	
1221	8D7･12	SK1419	1	黒色土器	有台椀			5.0		右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、雲、砂、軽	
1222	8D	SK1419	1	緑釉陶器	椀			6.0		ロクロ整形。回転ケズリ。蛇目高台。		灰白～オリーブ黄	やや硬質明灰、黒粒	
1223	8D	SK1419	1	灰釉陶器	椀	16.4	4.8	7.4	33	右ロクロ整形。ナデ。高台貼り付け時ナデ。三日月高台、釉浸け掛け。		灰白	黒粒	
1224	8D	SK1419	1	土師器	小甕	10.9	11.5	6.0	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。		褐灰～浅黄橙	礫、砂多	
1225	8D	SK1419	1	土師器	小甕	15.5			5	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂多、針少	
1226	8D	SK1419	1	須恵器	広口壺			11.7		右ロクロ整形。高台は外端面接地。		灰	黒多、白多	小泊系
1227	8D	SK1419	1	土師器	台付鉢ヵ				2	ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂	
1228	8D7	SK1419	1	製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1233	7D	SK1351	3	土師器	無台椀	11.3	4.3	4.7	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1234	8D	SK1360	3･4	土師器	無台椀	12.5	4.3	4.6	11	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫少	
1235	8D	SK1360	1･2	土師器	無台椀	12.4	4.2	5.6	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、礫多、針多	
1236	8D	SK1360		土師器	無台椀	12.4	4.0	4.6	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針多、礫多	
1237	8D	SK1360		土師器	無台椀	12.2	4.2	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫多、針多、黒多	
1238	8D	SK1360	3･4	土師器	無台椀	13.0	4.7	4.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1239	8D	SK1360	3･4	土師器	無台椀	11.2	4.2	5.0	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、礫少、針少	
1240	8D	SK1360		土師器	無台椀	11.4	4.2	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針多、礫多	
1241	8D	SK1360	3･4	土師器	無台椀	10.9	4.4	4.8	10	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1242	8D	SK1360		土師器	無台椀	14.0	4.8	6.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1243	8D	SK1360	3･4	土師器	無台椀	14.4	5.3	5.6	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、礫多	
1244	8D	SK1360	1	土師器	無台椀	14.0	5.2	5.5	5	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1245	8D	SK1360		土師器	小甕			6.4		ロクロ整形。右回転糸切り後外周端部ケズリ。		浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1246	8D	SK1360	3･4	須恵器	無台杯	12.4	4.0	7.0	12	ロクロ整形。回転ヘラ切り。		灰白	雲少、針少、礫少	
1251	8D	SK1384		土師器	無台椀	11.6	4.7	4.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲、礫	

別表２　遺物観察表（31）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1252	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	11.9	4.4	5.1	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫多	
1253	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.0	4.3	5.3	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙～灰褐	軽、針	
1254	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	11.9	3.9	4.9	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	軽多、針	
1255	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.0	4.4	4.8	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫多、針	
1256	8D	SK1384		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.6	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫多、雲	
1257	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.4	4.6	5.0	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫多、雲	
1258	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.4	4.6	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽	
1259	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.6	4.5	4.8	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽多	
1260	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.7	4.4	4.6	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、雲	
1261	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲	
1262	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.6	4.3	4.8	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、針	
1263	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.7	4.6	5.1	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲、軽	
1264	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.0	4.4	5.1	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、礫	
1265	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.5	4.0	5.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫多、雲	
1266	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	11.6	4.1	4.7	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針、軽	
1267	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	11.6	4.3	4.8	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲、軽、礫	
1268	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	11.5	4.5	4.4	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針、軽、雲	
1269	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	11.7	4.2	4.8	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫多、雲	灯明皿。口縁部に油煙付着
1270	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	12.2	4.1	4.5	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲	
1271	8D	SK1384	1	土師器	無台椀	14.0	5.0	5.2	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫	
1272	8D	SK1384	1	土師器	有台椀	13.8	5.1		11	右ロクロ整形。右回転糸切り。		浅黄橙	雲	
1273	8D	SK1384	1	土師器	有台椀	16.1	6.0	7.5	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け。		にぶい橙	軽、針少、雲少	
1274	8D	SK1384	1	黒色土器	無台椀	12.8	4.7	5.3		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰黄	礫、砂、針、雲	
1275	8D	SK1384	1	黒色土器	無台椀	12.2	4.2	4.5	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	礫、砂、雲、針少	
1276	8D	SK1384	1	黒色土器	無台椀	12.4	5.0	4.4	27	ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	礫、砂、雲、針	
1277	8D	SK1384	1	黒色土器	有台椀	13.4	6.4	6.4	10	ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	針多、雲少	
1279	7C	SK1408	1	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.6	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫多	
1280	7C	SK1408	1	須恵器	甕	16.2			3	右ロクロ整形。外面体部格子目タタキ。内面木目を有する扇状あて具痕。		灰	黒多、白	
1281	7C17	SK1444		土師器	無台椀	13.0	4.7	5.6	12	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多	
1282	7C17	SK1444		土師器	無台椀	12.4	4.0	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1283	7C17	SK1444		土師器	無台椀	12.6	4.0	4.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1284	7C17	SK1444		土師器	無台椀	11.4	4.5	4.8	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少、軽少	
1285	7C17	SK1444		土師器	無台椀	12.0	4.3	4.8	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1286	7C17	SK1444		土師器	無台椀	12.7	4.3	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多	
1287	7C17	SK1444		須恵器	短頸壺	12.0				ロクロ整形。外面胴下半部平行タタキ後ロクロナデ。底部ヘラナデ。肩部と胴部中位にそれぞれ凸帯と四耳が付く。高台部剝離。		灰白	白多、軽	
1288	7C17	SK1444		須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する放射状あて具痕。		灰白	白、黒多	
1289	7C	SK1469	1	土師器	無台椀	13.4	4.8	5.4	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1290	7C	SK1469	1	土師器	無台椀	13.7	4.0	4.8	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1291	7C	SK1472	1	土師器	無台椀	13.1	4.3	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	

別表２　遺物観察表（32）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1292	7C7	SK1472	1	土師器	無台椀	12.2	4.0	6.0	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、軽少	
1293	7C	SK1473		土師器	無台椀	11.8	4.2	3.8	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、軽少	
1294	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	11.4	4.0	4.6	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫少	
1295	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	12.1	4.1	5.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、針多、礫少	
1296	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	11.4	4.6	4.6	6	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
1297	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	13.5	4.3	5.8	35	ロクロ整形。	不明	灰白	雲多、礫少、針少	
1298	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	12.2	4.0	4.8	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1299	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	11.6	4.5	4.5	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1300	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	12.5	4.2	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少、針少	
1301	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	11.8	4.2	4.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲少、黒多、礫多、針多	
1302	7D	SK1479	3	土師器	無台椀	11.8	4.3	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針多、礫少、雲少	
1303	7D	SK1479	3	黒色土器	有台椀					ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内オリーブ黒、外にぶい橙	砂、礫	
1304	7D	SK1479	3	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面平行あて具痕。		灰	黒多	
1306	7C15	SK1511	1	土師器	有台椀			5.8		ロクロ整形。高台貼り付け。		浅黄橙	雲多、礫少	
1307	7C15	SK1511	1	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面平行あて具痕。		灰	白多、軽	
1308	7C	SK1536	1	緑釉陶器	輪花椀	19.0				ロクロ整形。		暗オリーブ	軟質酸化、黒粒	
1309	7C	SK1537		土師器	無台椀	12.0	4.2	4.8	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1313	8D	SK1588	1	土師器	小甕	13.3			9	ロクロ整形。		にぶい黄橙	雲多、礫多、針多	
1314	8C	SK1602	1	土師器	無台椀	12.0	4.1	4.8	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫多	
1315	8C	SK1602	1	土師器	無台椀	12.0	4.6	4.7	10	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	礫多、雲少、針少	
1316	7C	P1484	1	土師器	無台椀	12.0	4.4	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1317	8C	P1503	1	土師器	無台椀	11.9	4.3	4.8	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	針多、礫多、黒多、雲少	
1318	8C	P1503	1	土師器	無台椀	12.3	4.0	4.4	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多、針多	
1319	8C	P1503	1	土師器	無台椀	12.6	4.6	4.3	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄	雲多、礫少、針少	
1320	8D2	P1503	1	黒色土器	無台椀	14.5	5.1	5.8	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙	針、砂	
1321	8C･D	P1542	1	土師器	無台椀	12.2	4.4	5.0	7	ロクロ整形。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1322	8C･D	P1542	1	土師器	無台椀	12.0	3.8	5.0	8	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多、針多	
1323	8C･D	P1542	1	土師器	無台椀	12.6	4.5	5.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
1324	8C･D	P1542	1	土師器	無台椀	12.8	4.6	5.0	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多、針少	
1325	7C	P1562		緑釉陶器	輪花椀	18.0				ロクロ整形。		オリーブ灰	軟質、黒、白	
1326	8C	P1604		土師器	無台椀	12.0	4.0	4.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1327	7D	P1620	1	土師器	無台椀	10.8	4.2	4.3	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、軽少、針少	
1328	8C11	P2160		須恵器	甕					外面木目を有する格子目タタキ。内面胴上半部扇状あて具痕。内面胴下半部平行あて具痕。		灰	白多、軽多	
1331	6B	SB1683-P1	1	土師器	無台椀	12.4	3.8	4.5	33	右ロクロ整形。右回転糸切り後ケズリカ。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	灯明皿。口縁部に油煙付着。全体が被熱
1332	6B	SB1683-P1	1	土師器	無台椀	12.0	4.3	4.5	17	ロクロ整形。	不明	橙	雲多、礫少	灯明皿。口縁部に油煙付着。全体が被熱
1333	6B	SB1683-P1	1	土師器	台付鉢	28.0			15	ロクロ整形。		浅黄橙	礫多、軽少、針少	
1334	6B	SB1683-P3	1	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕。		灰	白少、軽	

別表２　遺物観察表（33）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1339	6A	SB1683-P9		須恵器	甕	31.8			7	外面格子目タタキ。内面扇状あて具痕。		灰	白多	
1340	6A	SB1683-P9		須恵器	甕	25.8			1	口縁部ロクロナデ。胴部外面格子目タタキ。内面木目を有する扇状あて具痕。		灰	針少、礫、砂少	頸部に穿孔有り
1356	12C	SD2150	1	土師器	鍋	42.0			3	ロクロ整形。		橙	礫多、雲、軽	北信濃型系
1357	12C	SD2150	1	土師器	鍋	39.3			2	ロクロ整形。		にぶい橙	砂多、軽	
1364	13A13	SD2029		土師器	無台椀	12.4	3.9	4.4	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	雲多、礫多、針多	
1365	13A	SD2029	1	土師器	無台椀	12.6	4.9	4.9	17	ロクロ整形。	不明	浅黄橙	雲多、針少、礫少	
1366	13A	SD2029		土師器	無台椀	11.2	4.0	3.9	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲少、礫少、針少	
1367	13A8	SD2029		土師器	無台椀	11.8	4.0	4.8	26	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、軽小	
1368	12A	SD2029		土師器	無台椀	12.7	4.2	5.3	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少、軽少	
1369	13A18	SD2029	2	土師器	無台椀	11.6	4.0	4.4	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多	
1370	12A	SD2029		土師器	無台椀	12.0	4.2	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	被熱している
1371	13A18	SD2029		土師器	無台椀	12.8	4.8	5.4	17	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多	
1376	10E16	SB2200-P3		土師器	有台椀			8.8		ロクロ整形。回転糸切り後高台貼り付け。		浅黄橙	雲多、礫少	
1382	10E	SB2200-P21	1	土師器	無台椀	13.5	4.0	6.2	4	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫少、軽少	
1384	5D	P3089		黒色土器	無台椀	13.5	4.1	4.2	5	ロクロ整形。底部切り離し後ケズリ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	砂、針	
1385	8B	SW1119		土師器	無台椀	12.3	4.5	5.0	18	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1386	8B	SW1119		土師器	無台椀	12.0	4.0	4.5	16	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多、針多	
1387	8B	SW1119		土師器	無台椀	13.0	4.5	5.2	13	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1388	8B	SW1119		土師器	無台椀	13.0	4.1	5.6	9	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多	
1389	8B	SW1119		須恵器	瓶			14.6		ロクロ整形。底部外面手持ちケズリ。		灰	黒多	
1390	8B	SW1119		製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1391	8B	SW1119		製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1392	8B	SW1119		製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1393	8B	SW1119		製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1394	8B	SW1119		製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1395	8B	SW1119		製塩土器				20.0		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。底部に板状圧痕。		橙	礫、砂多	
1396	8B	SW1119		製塩土器				21.0		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1397	8B	SW1119		製塩土器				20.0		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1398	8B	SW1119		製塩土器				20.0		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。底部に板状圧痕。		橙	礫、砂多	
1399	8B	SW1119		製塩土器				19.5		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。底部に板状圧痕。		橙	礫、砂多	
1400	6A	SW1219		土師器	無台椀	12.0	4.0	5.6	11	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多	
1401	5B	SW1250		土師器	無台椀	14.0	5.0	5.6	10	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少、針多	
1402	5B	SW1250		土師器	小甕			7.3		ロクロ整形。右回転糸切り。		淡橙	礫、砂、雲	
1403	5B	SW1250		土師器	小甕	13.5			8	ロクロ整形。口縁部ナデ。		にぶい橙	礫、雲	
1404	5B	SW1250		須恵器	広口壺	28.0			20	ロクロ整形。		灰	黒多、白多	
1405	5A	SE1194		土師器	小甕					外面ケズリ。内面ナデ。		にぶい橙	砂	
1406	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	11.9	3.9	5.0	13	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽多、礫	
1407	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.2	4.2	4.6	8	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、軽	
1408	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.1	4.0	4.6	1	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	礫	
1409	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	13.0	4.0	5.6	10	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽、礫	

別表２　遺物観察表（34）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1410	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.6	4.2	4.4	2	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、礫	
1411	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.9	4.3	4.6	33	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲、軽	
1412	7B	SE1226	2	土師器	無台椀	12.7	4.1	5.0	11	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽、砂	
1413	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.1	4.1	4.8	14	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲、砂	
1414	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.1	4.3	5.0	8	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲	
1415	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.1	4.2	5.0	17	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲、軽	
1416	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.5	4.3	5.2	10	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲、針	
1417	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.5	4.3	5.4	13	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽	
1418	7B19･20	SE1226	1	土師器	無台椀	12.5	4.5	4.9	13	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙～橙	雲、軽	
1419	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.5	4.4	5.0	4	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫	
1420	7B	SE1226	1	土師器	無台椀	12.8	3.9	4.9	17	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫、砂、針	
1421	7B	SE1226	1	土師器	甕	19.0			5	ロクロ整形。ヨコナデ。		浅黄橙	礫、砂、雲少	
1422	7B	SE1226	1	須恵器	広口壺	26.0	7.0		12	ロクロ整形。		灰	黒、軽、砂	
1423	7B	SE1226	2	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰	黒、軽	
1424	12D23	SX2001-SE1		土師器	無台椀	12.4	4.4	6.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂	
1425	12D23	SX2001-SE1		土師器	無台椀	12.2	4.4	4.9	10	右ロクロ整形。ミガキ。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、砂多	
1426	12D23	SX2001-SE1	5	須恵器	有台杯			7.0		右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。		灰	軽	底部に墨書「上」。XI層遺物と思われる
1428	13D11	SX2001-SE3	1	土師器	無台椀	12.2	3.9	3.6	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多	
1429	13D11	SX2001-SE3		土師器	小甕			5.9		ロクロ整形。外面ケズリ。内面指ナデ。底部ケズリ。		淡橙	礫、砂、軽、雲少	
1430	13D11	SX2001-SE3	1	須恵器	甕	22.5	50.3		5	外面格子目タタキ。内面平行あて具痕。		黄	白、軽	
1433	10A	SE2007	4	土師器	無台杯	13.6	3.3	7.4	15	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
1434	10A	SE2007	4	土師器	無台椀			6.5×5.5		ロクロ整形。右回転糸切り。底部やや楕円形状。	A	灰黄	針	耳皿の可能性あり
1435	10A	SE2007	4	土師器	無台椀	14.0	4.3	5.7	12	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂	
1436	10A	SE2007	4	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面平行あて具痕。		灰	砂、軽	
1437	8･9D	SK1078		土師器	無台椀	12.0	4.6	4.6	14	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、軽少、針少、礫少	口縁部内・外面にスス付着
1438	8･9D	SK1078		土師器	無台椀	12.0	4.0	5.5	20	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1439	8･9D	SK1078		土師器	無台椀	12.6	4.1	5.0	13	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1440	8･9D	SK1078		須恵器	甕					外面平行タタキ。内面木目を有する扇状あて具痕。		灰	白多、礫	
1443	8A	SK1107	1	土師器	小甕	8.8			3	ロクロ整形。		浅黄橙	礫多	
1444	8A	SK1107	1	土師器	甕	21.0			8	ロクロ整形。		にぶい橙	雲多、礫多、針多	
1445	8A	SK1107	1	土師器	甕			6.2		外面平行タタキ。内面ナデ消し。		浅黄橙	砂多	平底
1446	8A	SK1107	1	土師器	甕			9.5		ロクロ整形。外面ケズリ。内面上部ナデ。		浅黄橙	礫、雲	
1448	8A	SK1110	1	土師器	無台椀	12.2	3.9	5.4	2	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	針多、礫少、軽少	
1449	8A	SK1110	1	土師器	無台椀	12.7	4.1	5.4	29	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針少、礫少	
1450	8A	SK1110	1	土師器	無台椀	12.5	4.5	6.0	4	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、礫少	
1451	8A	SK1110	1	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.4	30	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、軽少、黒多、針多、礫少	
1452	8A	SK1110	1	土師器	無台椀	13.4	5.7	7.3	19	ロクロ整形。切り離し法不明。	不明	浅黄橙	針多、礫少、軽少	口縁内湾
1453	8A	SK1110	1	土師器	甕				4	ロクロナデ。		浅黄橙	雲多、礫多	
1455	8B	SK1118		土師器	無台椀	11.9	4.0	4.5	8	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1456	8B	SK1118	1	土師器	無台椀	13.1	4.0	4.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1457	8B	SK1118	2	土師器	無台椀	12.3	5.0	5.5	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫多、針少、雲少	
1458	8B	SK1118	1	黒色土器	無台椀			5.3		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	雲、礫、砂	
1459	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.0	4.6	4.6	16	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白～橙	砂多、礫、雲	
1460	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.4	4.9	4.6	21	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽多	
1461	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.3	4.6	4.6	36	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽、砂	
1462	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.0	4.2	4.5	26	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、針	
1463	8B19	SK1120	4	土師器	無台椀	13.6	4.5	5.0	34	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫多、雲、針	
1464	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.3	4.5	4.9	21	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫多、雲	
1465	8B19	SK1120	4	土師器	無台椀	12.8	4.4	4.9	10	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、雲	
1466	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.8	4.9	4.9	16	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、礫、雲、針	
1467	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.0	4.4	5.0	35	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、礫	
1468	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.4	4.2	4.7	19	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、針	
1469	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.3	4.3	5.1	7	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫多、雲、針	
1470	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.6	4.0	5.1	17	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、雲	
1471	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.9	4.4	5.3	34	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、雲、針	
1472	8B19	SK1120	4	土師器	無台椀	12.7	4.2	5.0	36	ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	礫、針	
1473	8B19	SK1120	4	土師器	無台椀	13.1	4.3	5.3	34	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	礫、砂、	
1474	8B24	SK1120	4	土師器	無台椀	12.2	4.5	5.6	16	ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多	
1475	8B19	SK1120	3	土師器	無台椀	14.9	5.2	5.8	19	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	軽、礫	
1476	8B25	SK1120	4	土師器	無台椀			4.8		ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、雲少	底部に墨書則天文字「天」
1477	8B19	SK1120	4	黒色土器	無台椀	11.8			6	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外明黄褐	砂、軽	
1478	8B	SK1120	4	黒色土器	有台椀			6.0		ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。		にぶい黄橙	砂	
1479	8B24	SK1120	3	土師器	有台椀			7.6		ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け。		浅黄橙	砂、雲、軽、針少	
1480	8B20	SK1120	4	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面簾状あて具痕。		灰	砂、軽少	
1481	8B24	SK1120	4	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面平行あて具痕。		灰白	砂	
1482	8B24	SK1120	4	製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1483	8B24	SK1120	4	製塩土器				15.5		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1484	8B	SK1120	1	製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1485	8B24	SK1120	4	製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		橙	礫、砂多	
1488	8B22	SK1121	1	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.3	24	ロクロ整形。回転糸切り後ナデ	不明	浅黄橙	礫多、雲少、軽少	底部に4条の凹線有り
1489	8B	SK1121	1	土師器	無台椀	13.0	4.5	5.0	5	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、礫少、雲少	
1491	7B	SK1153	2	土師器	無台椀	12.8	4.5	4.7	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1492	7B	SK1153	2	土師器	甕					外面平行タタキ。内面ナデ。		内にぶい橙、外褐灰	砂、軽	
1493	7B11	SK1154	1	須恵器	無台杯	13.2	3.1	8.0	14	右ロクロ整形。左回転ヘラ切り。		灰	白多、礫多	酸化焔
1494	7B	SK1154	1	土師器	無台椀	12.0	3.8	4.2	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針多	
1495	10C·D	SK1156		土師器	無台椀	12.0	4.5	4.3	25	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫多、雲少	
1498	7B8	SK1158	1	土師器	無台椀	11.4	4.2	4.4	9	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1499	7B13	SK1158	1	土師器	無台椀	12.7	4.5	4.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多、軽少	
1500	8·9D	SK1159	4	土師器	無台椀	12.3	4.1	6.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、針少	
1501	8·9D	SK1159	4	土師器	無台椀	12.4	3.8	5.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多、針少	内・外面にスス付着

別表２　遺物観察表（36）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1502	8･9D	SK1159	4	土師器	無台椀	12.0	3.9	4.2	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多	
1503	8･9D	SK1159	4	土師器	無台椀	12.4	4.5	3.8	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多	
1504	8D15	SK1159		土師器	無台椀	12.3	4.0	5.4	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1505	8D15	SK1159		土師器	無台椀	12.2	4.5	4.6	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲少、礫多、針少	
1506	8･9D	SK1159	4	土師器	無台椀	12.4	4.6	4.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針多	
1507	8･9D	SK1159	4	土師器	有台椀			7.0		ロクロ整形。回転切り離し後高台貼り付け。		橙	雲多、礫多、針多	
1508	8･9D	SK1159	4	黒色土器	有台椀			6.0		右ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内灰、外浅黄橙	軽、砂	
1509	8･9D	SK1159	4	土師器	小甕			4.8		右ロクロ整形。右回転糸切り。		浅黄橙	砂多、雲	
1510	5A25	SK1192	1	土師器	無台椀	14.2	5.1	5.4	36	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針多	
1511	7A･B	SK1229	1	土師器	無台椀	12.2	4.0	5.6	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1512	7A･B	SK1229	2	土師器	無台椀	14.0	4.8	6.3	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多	
1513	7A･B	SK1229	1	土師器	鉄鉢	20.6			3	内・外面ナデ。		灰白	礫、砂	
1514	6A	SK1251	1	土師器	無台椀	11.8	4.3	5.4	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多	
1515	6A	SK1251	1	土師器	無台椀	12.2	4.6	5.6	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多	
1516	6A	SK1251	1	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.0	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1517	6A	SK1251	1	土師器	無台椀	12.3	4.3	5.0	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少、軽粒少	
1518	6A	SK1251	1	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.6	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1519	6A	SK1251	2	土師器	無台椀	13.6	3.8	4.8	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫多、雲少	
1520	6A	SK1251	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	4.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1521	6A	SK1251	2	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.4	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1522	6A	SK1251	1	須恵器	無台杯	13.1	4.7	6.6	1	右ロクロ整形。回転ヘラ切り。		灰白	礫多	
1523	6A	SK1251	2	黒色土器	有台椀			6.5		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂、雲、礫	
1524	6B	SK1252	1	須恵器	無台杯			7.6		右ロクロ整形。回転ケズリ。		灰白	礫多	
1525	6B	SK1252	1	黒色土器	無台椀	16.6	5.1	6.6	5	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰黄褐	砂、軽	
1526	6B	SK1252	1	土師器	小甕	13.0			8	ロクロ整形。		にぶい黄橙	雲多、礫多	
1527	6B	SK1252	1	土師器	甕					外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		浅黄橙	砂、針	
1528	6B	SK1255	1	土師器	無台椀	13.8	5.1	5.4	11	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、軽少、針少、礫多	
1529	5B	SK1301	1	土師器	無台椀	12.0	4.4	5.6	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1530	6D	SK1354	1	土師器	無台椀	12.4	4.2	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1531	6D	SK1354	1	土師器	無台椀	12.0	4.0	4.6	5	右ロクロ整形。右回転糸切り後一部ケズリ。	不明	にぶい橙	雲少、礫多、軽少	
1532	6D	SK1354	2	土師器	無台椀	11.8	4.3	4.3	9	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲少、礫多、針多	
1533	6D	SK1354	2	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰白	礫	
1534	6D	SK1354	2	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面同心円あて具痕。		灰	砂	
1536	8D	SK1356	1	土師器	無台椀	12.4	4.7	4.8	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
1537	8E	SK1357	3	土師器	無台椀	12.1	3.9	4.6	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1538	8E	SK1357	3	土師器	無台椀	12.2	4.0	5.6	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多	
1539	8E	SK1357	3	土師器	無台椀	11.5	3.8	5.3	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1540	8E	SK1357	4	土師器	無台椀	12.0	4.7	5.6	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。底部厚く高台状。	B	浅黄橙	雲多、礫多	
1541	8E	SK1357	3	土師器	無台椀			4.5		右ロクロ整形。ケズリ。	不明	橙	砂、軽	
1542	8E	SK1357	1	土師器	無台椀				6	右ロクロ整形。		橙	軽	体部に墨書「□」
1543	8E	SK1357	1	須恵器	甕	20.2			3	右ロクロ整形。		灰	礫多	

別表２　遺物観察表（37）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1544	8E	SK1357	3	緑釉陶器	椀			8.2		右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け時ナデ。		浅黄橙・灰オリーブ	軟質、黒粒	
1545	8E	SK1357	3	須恵器	広口壺	29.6			6	右ロクロ整形。		灰	雲少、針少、礫少	
1547	8E	SK1358	2	土師器	台付鉢			16.0		右ロクロ整形。高台貼り付け。		浅黄橙	砂、礫	
1548	6D	SK1361	2	土師器	無台椀	12.0	4.0	5.4	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫多、軽少	
1549	5D	SK1361	3	土師器	無台椀	11.6	4.5	4.4	7	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	針多、礫少、雲少	
1550	5D	SK1361	1	土師器	無台椀	13.6	5.0	5.4	11	右ロクロ整形。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1551	6D	SK1361	1	土師器	無台椀	11.8	4.3	5.0	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1552	5D	SK1361	1	土師器	無台椀	12.8	4.5	5.6	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多	
1553	6D	SK1361	1	土師器	無台椀	13.0	4.3	4.8	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1554	6D	SK1361	2	土師器	無台椀	13.0	4.0	3.8	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、針少、礫少	
1557	8C	SK1364	1	土師器	無台椀	12.6	4.3	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1558	8C	SK1364	1	土師器	無台椀	12.0	4.5	5.5	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少、針多	
1559	8C	SK1365	1	土師器	無台椀	12.6	4.3	5.4	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂、軽、針少	
1560	8C	SK1365	1	土師器	無台椀	12.1	4.4	5.3	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽多、砂	
1561	8C	SK1365	1	土師器	無台椀	12.1	4.2	6.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲	
1562	8C	SK1365	1	土師器	無台椀	12.0	4.2	5.3	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲少、針少	
1563	8C	SK1365	2	灰釉陶器	椀	15.4	5.5	6.9	15	右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け時ナデ。釉浸け掛け。		灰白～灰オリーブ	黒粒	
1565	6D	SK1407	1	土師器	器台					外面に輪積み痕と指ナデ痕を顕著に残す。体部に孔有り。		橙	礫	
1566	6･7D	SK1421	2	土師器	椀	16.4			7	右ロクロ整形。		浅黄橙	針少、礫少	灯明皿。口縁部に油煙付着
1567	6･7D	SK1421	2	土師器	甕	20.4			7	右ロクロ整形。		にぶい橙	針多、礫少、雲少	
1573	10E	SK1436		黒色土器	有台皿					ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外橙	針、砂	
1576	7C24	SK1499		土師器	無台椀	12.6	4.3	4.4	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1577	7C	SK1499	1	須恵器	広口壺				7	右ロクロ整形。		灰	黒多、礫少	
1578	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	13.3	4.0	5.0	19	ロクロ整形。	不明	浅黄橙	雲多、礫少	
1579	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	12.4	4.0	4.5	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1580	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	12.9	4.4	4.9	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫少	
1581	8D	SK1513		土師器	無台椀	12.9	4.8	4.4	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、黒多、雲少、礫少	
1582	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	12.2	4.5	5.1	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫少	
1583	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	12.9	4.5	4.9	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1584	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	13.5	4.3	5.3	24	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	礫多、雲少、針少	
1585	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	13.0	3.9	4.9	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多	
1586	8D	SK1513		土師器	無台椀	12.2	4.2	4.6	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、黒多、雲少、礫少	
1587	8D	SK1513	1	土師器	無台椀	12.0	4.1	5.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫多	
1588	8D	SK1513		黒色土器	椀	15.8			17	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	針多、礫	
1589	8D	SK1513	1	黒色土器	有台椀			6.8		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内暗灰、外にぶい橙	雲多、砂多	
1590	8D	SK1513	1	黒色土器	有台椀			6.1		右ロクロ整形。右回転切り。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、砂	還元焔
1591	8D	SK1513	1	土師器	小甕			6.4		右ロクロナデ。右回転糸切り。		浅黄橙	雲多、礫多、軽少	

別表２　遺物観察表（38）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1592	8D	SK1513	1	土師器	小甕			8.0		ロクロ整形。		渇灰	礫多、雲少、針少	
1594	7D	SK1531		土師器	無台椀	13.0	4.5	5.3	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫少	
1595	7D	SK1531		土師器	無台椀	12.0	4.0	4.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	雲多、礫多、針多、軽少	
1596	7D	SK1531		土師器	無台椀	12.5	4.7	5.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、針多、礫少	灯明皿。口縁部に油煙付着
1597	7D	SK1531	1	土師器	無台椀	12.3	4.2	5.5	7	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲少、礫少	
1598	6C	SK1531	1	土師器	無台椀	11.4	4.0	4.6	36	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1599	7C	SK1531	1	土師器	無台椀	13.7	4.3	5.5	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、黒多、礫少、針少	
1600	7C	SK1531		土師器	小甕	15.2			7	右ロクロ整形。		灰白	針多、礫多	
1601	8C	SK1533	1	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰白	白多、軽	
1603	8C	SK1535	1	土師器	無台椀	12.2	4.5	4.4	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多	
1604	6D	SK1539	1	土師器	無台椀	12.2	4.1	4.3	36	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、軽少、礫多	
1605	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	11.8	4.2	4.6	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	淡橙	雲多、礫多	
1606	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	12.0	4.3	5.3	35	右ロクロ整形。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多	
1607	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	12.5	4.2	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1608	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	13.2	5.2	5.6	7	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1609	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	12.0	4.5	4.8	34	右ロクロ整形。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多、針少	
1610	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	12.0	4.5	5.0	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1611	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	11.4	4.6	4.8	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫少、針少	
1612	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	11.8	4.2	5.1	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	雲多、礫多、針多	
1613	8C	SK1590	2	土師器	無台椀	13.5	5.0	5.6	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲少、礫多、針少	
1614	8C	SK1590	2	黒色土器	無台椀	12.5	4.6	5.2	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	砂、針	
1615	8C	SK1590	1	黒色土器	椀	12.0			6	右ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	針多、雲	
1616	8C	SK1590		黒色土器	椀	13.8			8	右ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	針、雲	
1617	8C	SK1590	2	黒色土器	無台椀			6.0		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂、針	
1622	12D4	SK2046	4	土師器	無台椀	14.0	4.5	6.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多	
1623	12D4	SK2046	1･2･3	土師器	甕					外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		橙	砂	
1624	12D4	SK2046	4	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕後同心円あて具痕。		灰	砂	
1626	14D	SK2056	1	土師器	無台椀	13.0	4.5	5.3	24	右ロクロ整形。	不明	橙	雲多、礫少	
1627	14D21	SK2056	1	土師器	無台椀	13.0	4.3	5.6	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫少	
1628	14B	SK2062	1	土師器	無台椀	12.4	4.4	5.2	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多	
1629	14B	SK2062	1	土師器	無台椀	13.0	3.9	5.2	26	右ロクロ整形。	不明	橙	雲少、礫少、針少	
1630	14B	SK2062	1	土師器	無台椀	12.4	3.9	5.6	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫少、雲少	
1631	14B18	SK2062	1	黒色土器	無台椀	12.7	4.4	4.8	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	針多、礫多、雲少	
1632	14B	SK2062	2	土師器	無台椀	11.9	4.6	5.9	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。底部厚く高台状。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1633	13･14C	SK2090		土師器	鉢	22.6	14.1	8.8	14	ロクロ整形。体部下半ケズリ。		浅黄橙	砂、軽	
1634	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.0	4.4	4.7	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽、礫	
1635	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.5	4.4	4.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂、雲	
1636	14D	SK2122	1	土師器	無台椀	12.5	4.8	5.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂、針	

別表２　遺物観察表（39）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1637	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	11.9	4.4	4.3	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲、礫	
1638	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	11.6	4.7	4.7	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲、礫	
1639	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.3	4.2	4.2	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	砂多、礫	
1640	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.7	4.5	4.2	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	砂多、雲	
1641	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.1	4.8	5.5	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多、雲	
1642	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.6	4.7	4.3	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白～明褐	砂、雲	
1643	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	13.9	4.7	5.0	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂、礫、雲	
1644	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	12.2	5.2	5.7	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、砂	
1645	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	13.3	4.9	4.5	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	砂多、雲	
1646	14D	SK2122	2	土師器	無台椀	14.5	5.5	6.2	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂多	
1647	14D	SK2122	2	土師器	無台椀			4.6		右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂多	
1648	14D	SK2122	2	須恵器	壺			19.0		外面平行タタキ、カキメ、下部ケズリ。内面同心円あて具痕、カキメ。		灰	黒少、礫、軽	内面に摩滅痕
1650	8C	SK2227	1	須恵器	台付鉢			15.0		ロクロ整形。内面指ナデ。		灰黄	白	内面底部に墨痕有り。転用硯ヵ
1651	8C	SK2227	1	土師器	無台椀	12.4	4.7	4.7	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多	
1652	6C14･19	SK2256	2	土師器	無台椀	13.1	4.0	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫少、軽少	
1653	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.6	3.7	5.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針、雲少、軽	
1654	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.2	4.0	4.2	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲、針、礫	
1655	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.8	3.9	5.3	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	淡橙	雲、礫、軽	
1656	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.2	4.0	5.0	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽多、雲多	
1657	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.2	4.0	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	礫、軽、雲、針	
1658	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	11.7	3.6	4.2	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	礫	
1659	10D17	SX1104		土師器	無台椀	13.1	3.9	5.4	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽、針	
1660	10D19･20	SX1104		土師器	無台椀	12.8	4.4	5.0	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫多、雲	
1661	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.5	4.5	5.5	1	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲、軽	
1662	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.6	4.9	5.1	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽多	
1663	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.4	4.4	4.7	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針、雲、軽	
1664	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.6	4.2	4.4	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。底部周辺手持ちケズリ。	不明	にぶい橙	雲、軽	
1665	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.6	4.4	5.1	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽	
1666	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.2	4.4	5.1	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽多、雲多	
1667	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.1	4.8	4.6	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	軽多	
1668	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.9	4.2	5.4	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽	
1669	9D20	SX1104	5	土師器	無台椀	12.0	4.2	4.2	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	砂、軽	
1670	10D	SX1104		土師器	無台椀	11.2	4.4	4.7	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲	
1671	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	11.3	4.0	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲、針、軽	
1672	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	11.5	4.4	5.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、雲	
1673	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	11.5	4.2	4.3	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫多、雲、針	
1674	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	13.1	4.4	4.7	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲、礫	
1675	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.1	4.8	5.2	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲、軽	
1676	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.5	4.3	4.5	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、砂	
1677	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	12.6	4.5	4.8	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽、針、礫	
1678	10D	SX1104	2	土師器	無台椀	14.8	5.0	5.5	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲	灯明皿。口縁部に油煙付着
1679	10D19	SX1104		土師器	無台椀	14.4	5.5	6.4	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽、雲	

別表２　遺物観察表（40）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1680	10D18	SX1104		土師器	椀	12.4			4	右ロクロ整形。		橙	礫、砂	
1681	10D	SX1104	2	黒色土器	無台椀	12.4	5.2	6.2	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。口縁端部内面沈線状。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂、針	
1682	10D	SX1104	2	黒色土器	無台椀	14.5	5.6	5.5	16	右ロクロ整形。底部切り離し後ナデ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙	雲少、針少、砂	
1683	10D	SX1104	2	黒色土器	無台椀			5.4		右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙	砂、針多	
1684	9D	SX1104	5	須恵器	無台杯			7.8		右ロクロ整形。ヘラ切り。		灰	白少、黒	底部に墨書「木カ」。IX層遺物と思われる
1685	9D20	SX1104		須恵器	無台杯	11.4	3.0	7.9	11	右ロクロ整形。左回転ヘラ切り。		灰	礫、砂、黒	小泊系
1686	10D16	SX1104		須恵器	有台杯	13.8	4.9	7.3	13	右ロクロ整形。		灰	軽多、針少	
1687	10D	SX1104	2	須恵器	有台杯	16.4	6.9	9.0	18	右ロクロ整形。左回転ヘラ切り後高台貼り付け。外端面接地。		灰	軽、砂、黒、針	
1688	10D17	SX1104		須恵器	有台杯	12.7	5.2	7.0	20	右ロクロ整形。切り離し方法不明。高台貼り付け。外端面接地。		灰	砂	
1689	10D	SX1104	2	緑釉陶器	杯	9.9	3.4	4.8	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。		灰白～オリーブ灰	やや硬質明灰、黒粒	
1690	10D	SX1104	2	土師器	台付鉢			10.8		右ロクロ整形。		灰白	礫、砂多	
1691	10D17	SX1104		土師器	小甕	15.9			3	右ロクロ整形。		浅黄橙	礫、砂多	
1692	10D	SX1104		土師器	小甕			5.5		右ロクロ整形。右回転糸切り。		にぶい黄橙	礫、砂、雲少	
1693	10D	SX1104	2	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕。		灰	軽多、砂	
1703	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.9	3.9	4.5	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂、礫	
1704	12D	SX2001		土師器	無台椀	13.1	3.8	5.1	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	軽、礫	
1705	12D	SX2001		土師器	無台椀	11.9	3.9	4.3	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂、針	
1706	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.3	3.9	4.9	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂多	
1707	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.1	4.3	5.7	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽	
1708	12D19	SX2001		土師器	無台椀	12.1	4.3	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	砂多	
1709	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.7	4.8	5.0	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、軽	
1710	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.7	4.3	4.4	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂、針	
1711	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.8	4.4	5.2	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	軽	
1712	12D	SX2001		土師器	無台椀	13.6	4.4	5.5	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針	
1713	12D	SX2001		土師器	無台椀	13.3	4.3	4.4	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	淡黄	砂	
1714	12D	SX2001	2	土師器	無台椀	13.3	3.9	4.5	24	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂多	
1715	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.9	4.3	4.9	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽、針	
1716	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.2	4.0	4.7	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫多、砂	
1717	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.1	3.9	4.7	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	軽、砂	
1718	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.5	3.9	4.8	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、雲	
1719	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.6	4.3	5.8	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽	
1720	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.3	4.4	5.2	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂、雲	
1721	12D	SX2001		土師器	無台椀	13.0	5.6	5.8	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、砂多	
1722	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.2	4.0	5.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	礫、砂	
1723	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.2	4.4	4.8	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫	
1724	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.2	4.0	5.2	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂多	
1725	12D	SX2001		土師器	無台椀	13.1	4.4	5.2	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	軽	
1726	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.5	4.2	4.4	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	
1727	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.8	4.0	4.8	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	砂	
1728	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.4	4.4	4.5	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	砂多、雲	
1729	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.6	4.1	4.5	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	軽	

別表２　遺物観察表（41）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1730	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.6	4.1	4.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	砂	
1731	12D	SX2001		土師器	無台椀	12.5	4.2	4.6	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	砂	
1732	12D	SX2001		黒色土器	無台椀	15.3	5.2	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙	針、礫	
1733	12D	SX2001		土師器	小甕			8.0		非ロクロ整形。外面ケズリ。		灰白～褐灰	礫、砂多	
1734	12D20	SX2001		土師器	小甕			7.6		外面ケズリ。内面ヘラナデ。底面筵痕。底部上げ底。		にぶい橙	礫、砂多	底部に筵痕
1737	9A9	SD1090	1	土師器	無台椀	12.4	3.5	5.2	17	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針少、礫少	
1738	9A10	SD1090	1	土師器	無台椀	12.5	3.5	5.2	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂多	
1739	9A9	SD1090	1	土師器	無台椀	12.5	3.8	5.3	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫、砂少	
1740	9A9	SD1090	1	土師器	無台椀	14.5	4.2	6.4	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、砂少	
1741	9A14	SD1090	1	黒色土器	無台椀	14.3	4.8	6.4	10	右ロクロ整形。右回転ケズリ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	針、砂	
1742	9A9	SD1090	1	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面同心円あて具痕。		灰	礫	
1744	9D	SD1103	1	土師器	小皿	9.8	2.5	4.5	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多	
1745	9D18	SD1103	1	土師器	無台椀	12.2	4.1	5.7	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1746	9D19	SD1103	1	土師器	無台椀	12.0	3.9	4.1	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1747	10D22	SD1103		土師器	無台椀	12.6	4.0	5.4	9	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多	
1748	9D25	SD1103	1	土師器	無台椀	14.8	5.5	5.2	3	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、軽少	被熱している
1749	9D25	SD1103	3	黒色土器	皿	13.0			6	右ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	針、砂	
1750	9D18	SD1103		土師器	鍋	44.4	15.8		36	右ロクロ整形。外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		灰黄褐	軽多、礫	
1752	7B16	SD1147	1	須恵器	無台杯	12.2	3.2	7.2	2	右ロクロ整形。回転ヘラ切り。		灰	黒少、針少、礫、砂少	小泊系
1753	6B19	SD1147	1	土師器	無台椀	12.5	4.0	4.9	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1754	6B16	SD1147	1	土師器	無台椀	12.5	4.3	4.8	18	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1755	6B20	SD1147	1	土師器	無台椀	12.2	4.5	4.8	6	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、雲少、礫少	
1756	6B20	SD1147	1	土師器	無台椀	13.2	4.3	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫多、針少、雲少	
1757	6B19	SD1147	1	土師器	無台椀	12.8	4.1	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、黒少、軽少	体部に墨書則天文字「天」
1758	6B20	SD1147	1	土師器	無台椀	13.8	4.2	5.2	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫多、軽少	
1759	6B20	SD1147	1	土師器	無台椀	13.7	4.2	4.6	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多	
1760	7B16	SD1147	1	黒色土器	無台椀	13.9	5.6	4.7	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄	雲、針、砂	
1761	5B20	SD1147	1	須恵器	有台杯			6.2		右ロクロ整形。回転ヘラ切り後高台貼り付け。		灰	礫、砂少	
1762	5B20	SD1147	1	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面同心円あて具痕。		灰	白	
1764	7A4	SD1152	1	土師器	甕			4.3		外面平行タタキ。内面ナデ。		浅黄橙	礫、砂多	
1765	7A10	SD1161	2	土師器	甕	24.0			3	右ロクロ整形。		浅黄橙	針多、礫少	
1766	6B20	SD1222	1	須恵器	無台杯	13.0	3.3	0	5	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り。		灰	黒多、礫、砂少	小泊系
1767	6C16	SD1314	1	土師器	無台椀	1.2			7	ロクロ整形。		浅黄橙	針少、礫、砂少	被熱している
1768	6C22	SD1314	1	土師器	甕	19.0			10	ロクロ整形。		浅黄橙	雲少、礫多	
1771	7E8	SD1491	1	土師器	無台椀	12.2	3.7	4.3	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1772	7E3	SD1491	1	土師器	無台椀	12.8	4.8	5.2	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1774	14C16	SD2008	1	土師器	無台椀	11.4～13.2	4.1	5.0	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1775	14C	SD2008	2	土師器	無台椀	13.6	4.9	5.4	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多	
1776	14D	SD2008	2	土師器	無台椀	12.2	4.3	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、礫多、針多	体部外面にスス付着
1777	13C	SD2008	2	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.3	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針少、雲少、礫多	
1778	13C	SD2008	2	土師器	無台椀	12.5	4.0	4.6	17	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1779	14D	SD2008	2	土師器	無台椀	12.2	3.8	5.5	7	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲少、礫多、軽多	

別表２　遺物観察表（42）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1780	13D	SD2008	2	土師器	無台椀	13.3	4.3	5.8	8	左ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫多	
1781	14C	SD2008	2	土師器	無台椀	12.2	4.2	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針少、礫多	
1782	13C22	SD2008		土師器	無台椀	15.0	0.1	6.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多	
1783	14C17	SD2008		灰釉陶器	椀	13.0			7	ロクロ整形。釉浸け掛け。		灰白～灰オリーブ	黒粒、白	
1784	13C22	SD2008	1	土師器	小甕	8.0	5.5	5.6	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。		灰白	礫、砂	
1785	14C	SD2008	2	黒色土器	有台椀	14.4			6	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	軽、砂	
1786	14C	SD2008	2	須恵器	広口壺					ロクロ整形。		灰	黒多、礫少	
1787	13C17	SD2008	1	土師器	甕					外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		にぶい橙	砂	
1790	14B21	SD2030		土師器	小甕			5.6		ロクロ整形。回転糸切り。		浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1791	14E	SD2040	3	土師器	無台椀	11.9	3.8	4.2	16	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1792	14D	SD2040	1	土師器	無台椀	11.8	4.3	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
1793	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	11.5	3.9	3.9	21	ロクロ整形。	不明	淡橙	雲多、礫多	体部に穿孔有り
1794	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	13.0	4.2	5.1	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1795	14E3	SD2040		土師器	無台椀	14.8	4.4	5.0	28	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、針少、軽少	
1796	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	12.3	4.4	3.8	13	ロクロ整形。回転糸切り後ヘラナデ。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1797	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	12.5	4.2	4.6	28	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲少、礫多、針少	
1798	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	12.6	4.6	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫少	
1799	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	15.5	5.6	5.4	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1800	14E	SD2040	1	土師器	無台椀	16.0	6.1	5.6	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	灯明皿。口縁部に油煙付着
1801	14E	SD2040	1	黒色土器	有台椀	14.0			21	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂	
1802	14E3	SD2040		黒色土器	無台椀	15.4	5.5	5.2	1	ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外淡黄	針多、砂	
1803	14E	SD2040	1	黒色土器	有台皿	10.8	2.8	5.5	14	ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	針、砂	
1804	14E	SD2040	1	土師器	小甕	11.8			5	ロクロ整形。		にぶい橙	礫多	
1807	14D7	SD2054		土師器	小甕	12.5			7	ロクロ整形。		橙	雲少、礫多、針少	
1808	14D7	SD2054		須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ。内面平行あて具痕。		灰黄褐	白少	
1809	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	12.4	4.0	3.8	31	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲、礫	
1810	14B18	SD2060	2	土師器	無台椀	12.5	4.0	4.8	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、針	
1811	14B18	SD2060	2	土師器	無台椀	12.3	3.9	4.9	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、雲	
1812	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	12.3	4.1	4.3	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲、軽、砂	
1813	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	11.8	4.4	4.7	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫多、雲	
1814	14C8	SD2060	2	土師器	無台椀	12.3	4.2	4.6	36	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲	
1815	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	11.9	4.7	5.0	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫	
1816	14C3	SD2060	2	土師器	無台椀	12.3	4.6	5.2	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、軽、雲	
1817	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	13.2	4.5	4.9	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫	
1818	14B23	SD2060	1	土師器	無台椀	12.3	4.3	4.9	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	礫、雲	
1819	14C3	SD2060	2	土師器	無台椀	11.9	4.5	4.2	35	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、軽	
1820	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	12.9	4.5	5.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲、砂	
1821	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	12.6	4.8	4.7	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	礫、針、雲	
1822	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	12.5	4.3	4.8	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、雲	
1823	14B18	SD2060	2	土師器	無台椀	12.6	4.3	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫、雲	
1824	14B18	SD2060	1	土師器	無台椀	13.2	4.1	4.9	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲、砂	
1825	14B18	SD2060	1	黒色土器	無台椀			5.0		回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	針、砂	

別表２　遺物観察表（43）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1826	14C8	SD2060	1	土師器	小甕	15.8			4	ロクロ整形。		赤橙	礫、砂、軽	
1827	14B18	SD2060	1	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面同心円あて具痕。		灰白	礫、黒	
1828	14B	SD2064	1	土師器	無台椀	12.8	4.2	5.4	27	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	礫少	
1829	14B18	SD2064	1	土師器	無台椀	12.0	4.5	5.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲少、礫多	
1830	14C	SD2064	1	土師器	無台椀	12.7	5.0	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
1831	14B	SD2064	1	土師器	無台椀	12.6	4.5	5.1	16	ロクロ整形。回転糸切り後ヘラナデ。	不明	橙	雲多、礫多、軽少、針少	
1832	14C	SD2064	1	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.0	10	右ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針少、礫少	
1833	14C	SD2064	1	土師器	無台椀	12.8	4.9	4.7	25	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多	
1834	14B	SD2064	1	土師器	無台椀	12.1	4.4	5.1	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫少	
1835	14B18	SD2064		土師器	無台椀	11.6	3.5	5.3	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1836	14C	SD2064	1	土師器	無台椀	12.5	4.3	4.0	21	ロクロ整形。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1837	14C2	SD2064	1	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面同心円あて具痕。		灰	礫	酸化焔
1838	13B	SD2116	1	土師器	無台椀	12.8	4.2	4.8	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1839	13B	SD2116		土師器	無台椀	12.8	4.3	5.5	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰黄橙	雲多、礫多、針少	
1840	13B	SD2116	1	土師器	無台椀	13.4	5.5	6.0	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針少、雲少、礫少	
1841	13B	SD2116	1	土師器	小甕	8.6			10	ロクロ整形。口縁部ナデ。頸部工具によるナデ。		にぶい橙	礫	
1842	13B25	SD2116		土師器	甕	19.2			6	ロクロ整形。		にぶい橙	軽	
1843	13B	SD2116	1	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面同心円あて具痕。		灰白	礫、黒	
1845	14C23	SD2121		土師器	無台椀	13.3	4.2	4.9	11	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少	
1846	6D	SD2127	2	須恵器	折縁杯	12.8	4.0	7.8	22	右ロクロ整形。右回転ヘラ切り後高台貼り付け。		灰白	礫多、軽	
1847	11C	SD2127	2	須恵器	杯蓋			鈕3.4		ロクロ整形。		褐灰	礫、砂、白少	内面に自然釉
1848	7D9	SD2127	2	須恵器	瓶	6.8			4	ロクロ整形。		灰	白多、礫	
1849	11C	SD2127	3	須恵器	甕					外面木目を有する平行タタキ後カキメ。内面同心円あて具痕。		灰	白多	
1850	13D9	SD2131	1	黒色土器	無台椀	15.0	5.6	6.8	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	B	内黒、外浅黄	針、雲、砂	
1853	5B	P1211	1	土師器	無台椀	11.4	4.2	4.8	7	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1854	6A	P1279	1	須恵器	広口壺	21.9			4	右ロクロ整形。		黄灰	黒多、白多	
1855	9E	P1347	1	須恵器	甕					ロクロ整形。頸部外面に櫛目波状文。		灰	礫	
1856	6B	P1378		土師器	無台椀	13.6	3.9	5.3	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰	雲少、砂	
1858	14D22	P2123	1	土師器	甕					外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		橙	軽	
1859	14B	P2152	1	黒色土器	無台椀	12.2	4.6	4.7	35	ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外明褐灰	針、雲、砂	
1861	13D	P2171	2	土師器	無台椀	12.0	4.2	5.0	34	ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	灯明皿。口縁部に油煙付着
1862	14C	P2177	1	土師器	無台椀	11.4	3.9	5.0	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	黄橙	雲多、礫少	
1863	9B16	P2242		土師器	無台椀	12.3	4.1	4.0	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1864	6B16		Ⅷ	土師器	無台椀	11.9	4.5	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少、軽少	
1865	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	3.9	5.4	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針少、礫少、黒多	
1866	8D3		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	3.9	6.0	6	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫少	
1867	6D17		Ⅷ	土師器	無台椀	11.7	4.5	5.0	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	針少、礫少	
1868	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.5	5.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	針多、礫多、雲少	
1869	8C23		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	3.9	5.4	10	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、礫少、雲少	
1870	6A21		Ⅷ	土師器	無台椀	13.3	3.9	6.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多	

別表２　遺物観察表（44）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1871	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	3.9	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	針多、礫少	
1872	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.6	3.5	4.5	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲少、礫多、針多	
1873	6B3		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.0	5.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、軽多、針少、礫多	
1874	8D23		Ⅷ	土師器	無台椀	12.9	4.0	5.5	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針多、礫多、雲少	
1875	8C7		Ⅷ	土師器	無台椀	11.5	3.9	4.2	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1876	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.5	4.0	5.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多、針多、黒多	
1877	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	11.0	3.9	4.7	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	針少、礫少、雲少	
1878	6B11		Ⅷ	土師器	無台椀	11.2	3.9	4.5	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1879	6B8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.5	4.0	4.0	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多、針少	灯明皿。口縁部に油煙付着
1880	7D21･22		Ⅷ	土師器	無台椀	11.4	3.9	5.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1881	13D14		Ⅷ	土師器	無台椀	11.5	4.4	5.0	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫少、雲少、針少	
1882	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	10.7	4.0	4.2	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫多、雲少	
1883	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	3.8	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫少、針少	
1884	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	3.8	4.8	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
1885	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.7	3.8	5.2	11	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少	
1886	7B6		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.1	5.5	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲少、礫多、針少	
1887	8C2		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.5	5.2	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少	
1888	8D7		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	4.5	5.0	11	ロクロ整形。回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、針少、黒多	
1889	6B15		Ⅷ	土師器	無台椀	11.8	4.1	5.4	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、針多、礫少	
1890	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	4.5	5.7	10	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	灰白	雲少、礫少、針多	
1891	8C12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.0	5.5	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、軽多、針少	
1892	9D20		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.4	5.0	33	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、針少、礫少	
1893	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	13.5	4.6	6.2	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、礫多、黒多	
1894	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.6	4.2	5.4	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫多、針少	
1895	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.2	5.6	9	ロクロ整形。回転糸切り後ナデ。	不明	浅黄橙	雲少、礫少	
1896	6A21		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.4	5.2	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、雲少、軽少	
1897	8D3･8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.6	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲少、礫少、針少	
1898	8C23		Ⅷ	土師器	無台椀	13.1	4.2	4.5	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多	
1899	8D3･8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.3	4.8	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少	
1900	6A23		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	4.8	5.6	30	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、針少、礫多	
1901	8D17		Ⅷ	土師器	無台椀	12.1	4.3	4.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲多、礫多、針多	
1902	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.4	5.2		右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	雲多、礫少、針少	
1903	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.1	4.6	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	雲多、礫多、針多、黒多	
1904	7B16		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.2	5.5	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	針多、礫多	
1905	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	3.9	5.0	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	針少、雲少、礫少	
1906	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	13.8	4.9	6.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、針少、軽少	
1907	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.1	5.0	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲少、礫多、針多	

別表２　遺物観察表（45）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1908	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	13.3	4.1	5.7	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多、軽少、黒多	
1909	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.9	4.2	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫少	
1910	7B12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.1	5.0	11	ロクロ整形。回転糸切り。	B	浅黄橙	針多、礫多	
1911	7B23		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.1	5.0	9	ロクロ整形。回転糸切り後手持ちケズリ。	不明	橙	雲多、礫少、針多少	
1912	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.3	4.9	12	右ロクロ整形。右回転糸切り後ナデ。	不明	橙	針多、礫少、雲少	
1913	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	13.5	4.4	6.2	7	右ロクロ整形。右回転糸切り後ナデ。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1914	6B15		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.2	4.6	8	右ロクロ整形。右回転糸切り後ケズリ。	不明	灰白	針少、礫多	灯明皿。口縁部に油煙付着
1915	8C7		Ⅷ	土師器	無台椀	13.2	4.4	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
1916	6B5		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.0	4.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1917	8D23		Ⅷ	土師器	無台椀	11.3	4.2	5.1	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	雲多、礫多、針少	
1918	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.0	4.4	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1919	7B23		Ⅷ	土師器	無台椀	11.6	3.7	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、軽少、礫多	
1920	8C7		Ⅷ	土師器	無台椀	12.9	4.6	5.0	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲多、礫多、針少	
1921	13B17		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.0	4.8	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針多、礫多	
1922	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.4	4.0	4.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多、針多、黒多	
1923	8C12		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	3.9	5.0	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1924	10D1		Ⅷ	土師器	無台椀	12.1	4.1	4.6	7	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1925	8B21		Ⅷ	土師器	無台椀	11.8	3.8	4.6	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少、針少	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
1926	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	4.1	5.4	14	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少	
1927	8D2		Ⅷ	土師器	無台椀	12.6	4.5	4.4	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1928	6B20		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	4.1	5.0	32	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲少、針少、礫多	
1929	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.2	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	雲多、礫少	
1930	8D7		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.0	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫少、針多、黒多	
1931	8C23		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	3.9	5.5	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針多、黒多、礫多	
1932	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	3.9	5.0	12	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針少、雲少、礫少	
1933	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	11.6	4.3	5.0	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫少、針少	
1934	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.0	4.2	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲少、針少、礫少	
1935	6A23		Ⅷ	土師器	無台椀	11.6	3.8	5.3	18	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、針少、礫多	
1936	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	3.7	0.5	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1937	8D7		Ⅷ	土師器	無台椀	11.3	3.4	4.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1938	7C1		Ⅷ	土師器	無台椀	11.6	4.4	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫少、針少	
1939	8E3		Ⅷ	土師器	無台椀	13.7	4.4	5.5	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	橙	雲少、礫少	
1940	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.2	5.7	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少、軽少	
1941	7B11		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	4.4	5.6	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1942	8C16		Ⅷ	土師器	無台椀	13.7	4.5	5.6	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1943	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	14.0	4.9	5.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫少	灯明皿。口縁～体部に油煙付着
1944	8D7		Ⅷ	土師器	無台椀	11.8	3.8	4.7	27	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	橙	雲多、礫多、針少	
1945	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	4.2	4.1	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多、礫少	
1946	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.1	4.5	5.0	17	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	針多、黒多、雲少、礫少	

別表２　遺物観察表（46）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1947	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	13.8	4.3	4.8	7	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫多	
1948	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	13.6	4.4	6.0	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫少、針多	
1949	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.6	5.5	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	雲多、軽少、針少、礫少	
1950	8C11		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.4	5.0	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい黄橙	雲多、礫少、針少	
1951	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.6	4.1	5.0	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1952	7B11		Ⅷ	土師器	無台椀	12.1	3.8	5.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	針少、礫多	
1953	6B15		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.3	5.5	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫少、針多	
1954	13D9		Ⅷ	土師器	無台椀	13.1	4.4	5.3	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	礫多、雲少、針少	
1955	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	4.1	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲少、軽少、針少、礫多	
1956	7C12		Ⅷ	土師器	無台椀	14.0	4.1	5.3	22	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	針少、礫少	体部外面に黒色物付着。還元焔
1957	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	11.8	4.1	4.2	26	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲少、礫多	
1958	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.6	4.5	5.5	34	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	黒多、礫、砂少	
1959	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.0	5.4	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1960	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.1	6.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1961	8B21		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	3.7	5.0	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1962	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	3.8	5.3	12	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、針少、礫少	
1963	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.0	5.0	19	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多	
1964	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.0	4.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
1965	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	3.9	4.6	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫少、針少	
1966	6D1		Ⅷ	土師器	無台椀	12.5	3.9	5.0	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	淡黄	雲少、礫多、針少	
1967	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.6	4.2	4.0	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
1968	8D7		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	3.7	3.9	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲少、礫多、針少	
1969	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	3.9	4.8		右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1970	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.5	5.0	33	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針多、黒多	
1971	8C22		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.1	4.5	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1972	14B18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.3	4.6	27	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい黄橙	雲多、礫多、針多	
1973	7B22		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	3.5	5.0	21	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
1974	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.0	4.0	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	雲多、礫少、針少	
1975	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	13.2	4.0	4.5	13	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多	
1976	8D2		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.2	5.0	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1977	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.0	6.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1978	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.3	4.5	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1979	8C17		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.0	4.2	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多	
1980	6D3		Ⅷ	土師器	無台椀	11.6	4.1	5.4	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1981	9D4		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.1	4.6	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	灰白	雲多、礫少、針少	
1982	8E1		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.3	4.7	20	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1983	7D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.5	4.8	25	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	にぶい橙	雲多、礫少、針多	
1984	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.5	5.5	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、針少、礫	
1985	7B16		Ⅷ	土師器	無台椀	13.1	4.2	4.6	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲多、礫多	
1986	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.9	5.0	5.5	9	ロクロ整形。	不明	浅黄橙	雲少、針少	

別表２　遺物観察表（47）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
1987	8D3･8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.7	3.5	4.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	雲少、礫多、軽少	
1988	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.1	5.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	橙	雲多、礫多、針多	
1989	8D2		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	4.4	5.0	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
1990	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀	11.8	4.1	4.5	21	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1991	6B9		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	4.0	5.3	24	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
1992	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.9	4.0	5.0	12	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	にぶい黄橙	針多、雲少、礫少	
1993	7C3		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	4.4	5.0	18	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多、針多	
1994	7C5		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.1	4.4	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫多、針少	
1995	7D22		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	3.8	5.4	16	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	針多、礫少	
1996	8D18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.9	4.5	4.5	29	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲少、礫少、針少	
1997	8D3		Ⅷ	土師器	無台椀	12.8	4.8	5.0	17	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
1998	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	4.4	5.3	10	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲少、礫少、針多	
1999	13B23		Ⅷ	土師器	無台椀	12.4	4.3	4.5	15	ロクロ整形。回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫多、雲少、針少	
2000	9A12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.3	3.7	4.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	淡橙	礫少、雲少、針少	
2001	6B15		Ⅷ	土師器	無台椀	11.8	4.5	4.5	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針多	
2002	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀	12.2	4.7	5.0	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	橙	針少、礫少	
2003	8D3		Ⅷ	土師器	無台椀	13.1	4.6	5.6	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
2004	8D2		Ⅷ	土師器	無台椀	13.0	4.1	5.0	7	ロクロ整形。回転糸切り後ケズリ。	不明	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
2005	6B9		Ⅷ	土師器	無台椀	12.1	5.0	4.6	9	ロクロ整形。回転糸切り後底部全面と体部下端手持ちケズリ。	不明	橙	雲多、礫多、針少	
2006	14B18		Ⅷ	土師器	無台椀	12.7	5.1	4.7	12	ロクロ整形。回転糸切り後底部全面と体部下端手持ちケズリ。	不明	橙	雲多、礫少	
2007	7C7		Ⅷ	土師器	無台椀	11.9	4.5	4.0	9	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	雲多、礫少、針少	
2008	7E8		Ⅷ	土師器	無台椀	11.4	3.7	5.2	9	ロクロ整形。切り離し不明	不明	浅黄橙	雲多、礫多	
2009	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀			6.6		右ロクロ整形。右回転糸切り。	A	灰白	砂多、礫	円柱技法
2010	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀			5.6		ロクロ整形。外面底部ケズリ。	不明	橙	砂	
2011	14B21		Ⅷ	土師器	無台椀	14.2	4.9	5.2	15	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
2012	7B6		Ⅷ	土師器	無台椀	14.6	4.9	5.5	11	右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	にぶい橙	雲多、礫多、針少	
2013	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	15.1	5.5	5.6	3	ロクロ整形。回転糸切り後部分的にケズリ。	A	浅黄橙	雲多、礫多、針少	
2014	13C11		Ⅷ	土師器	無台椀	15.1	5.2	7.2	6	右ロクロ整形。右回転糸切り後部分的にケズリ。	不明	にぶい橙	砂、礫	
2015	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀	12.0	4.8	4.5	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。	B	灰白	礫、砂多、雲、針少	体部に墨書則天文字「天」
2016	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀				2	ロクロ整形。		灰黄褐	礫、砂多、雲、針少	体部に墨書「□」
2017	8D12		Ⅷ	土師器	無台椀				4	ロクロ整形。		浅黄橙	針	体部に墨書則天文字「天カ」
2018	8D13		Ⅷ	土師器	無台椀				5	ロクロ整形。		にぶい橙	礫、砂多、雲、針少	体部に墨書「□」
2019	5D20		Ⅷ	土師器	無台椀				3	ロクロ整形。		浅黄橙	砂少、雲少、赤粒	体部に墨書「□」
2020	8C23		Ⅷ	土師器	無台椀					ロクロ整形。		浅黄橙	砂少	体部に墨書「□」
2021	8C11		Ⅷ	土師器	無台椀					ロクロ整形。		にぶい橙	礫、砂、針少	体部に墨書則天文字「天カ」
2022	8C23		Ⅷ	土師器	無台椀					ロクロ整形。		浅黄橙	砂少	体部に墨書「□」
2023	6B20		Ⅷ	土師器	Ⅲ	13.5	2.5	5.5	13.5	ロクロ整形。		浅黄橙	砂	
2024	8C10		Ⅷ	土師器	盤	13.0			4	ロクロ整形。		灰白	砂、礫、雲	
2025	9D17		Ⅷ	土師器	Ⅲカ	18.2			6	ロクロ整形。		橙	砂	
2026	5A25		Ⅷ	黒色土器	無台椀	11.4	4.3	5.2	18	ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	針多、砂多	
2027	8D7		Ⅷ	黒色土器	無台椀	12.0	4.5	4.3	4	ロクロ整形。回転糸切り後ヘラナデ。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙		
2028	8B23		Ⅷ	黒色土器	無台椀	13.0	4.0	5.0	23	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙～黄灰	針多、砂	

別表２　遺物観察表（48）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
2029	8D12		Ⅷ	黒色土器	無台椀	13.2	4.2	5.8	8	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外浅黄橙～灰白	砂、軽、雲、針	
2030	8D12		Ⅷ	黒色土器	無台椀	14.0	4.3	6.1	5	ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙～暗灰	砂、針、雲	
2031	8D8		Ⅷ	黒色土器	無台椀	13.5	5.2	5.0	6	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外にぶい黄橙	砂、針、雲	
2032	13A18		Ⅷ	黒色土器	無台椀	12.9	5.0	4.6	11	ロクロ整形。回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂、針	
2033	8D13		Ⅷ	黒色土器	無台椀	13.5	4.7	5.8	12	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外にぶい黄橙	針、砂	
2034	7B13		Ⅷ	黒色土器	無台椀	14.0	5.2	5.2	2	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	砂、礫、雲	
2035	8D13		Ⅷ	黒色土器	無台椀	13.7	5.1	5.3	16	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外橙～灰	砂、軽、針	
2036	8D8		Ⅷ	黒色土器	無台椀	14.0	5.1	5.4	2	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	A	内黒、外浅黄橙～灰白	軽、礫、針	
2037	8C23		Ⅷ	黒色土器	無台椀	14.2	5.3	5.4	4	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	礫、砂多、針、雲	
2038	13A18		Ⅷ	黒色土器	無台椀	13.9	6.0	5.2	5	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰白	針、砂多	
2039	8D13		Ⅷ	黒色土器	無台椀	15.4	5.8	6.8	5	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰白	針、砂	
2040	8C12		Ⅷ	黒色土器	無台椀	15.8	5.6	6.0	5	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい黄橙	針、砂	
2041	8D13		Ⅷ	黒色土器	無台椀	15.0	6.0	6.0	8	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外にぶい橙	砂、軽多、雲	
2042	12C16		Ⅷ	黒色土器	無台椀	17.3	6.3	6.8	10	ロクロ整形。内面黒色処理、ミガキ。	不明	内黒、外灰白	砂多、雲、針	
2043	13A17		Ⅷ	黒色土器	有台椀	15.4			2	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい橙	砂、針、礫	
2044	6C3		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.8		ロクロ整形。回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	針、砂	
2045	8C17		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.4		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂、軽	
2046	14B15		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.8		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外橙	砂、礫	
2047	7D6		Ⅷ	黒色土器	有台椀			4.7		右ロクロ整形。右回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外橙	針、砂	
2048	6B17		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.5		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外橙	砂、雲、針	
2049	8D7		Ⅷ	黒色土器	有台椀			7.3		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂、針	
2050	8D12･17		Ⅷ	黒色土器	有台椀			7.6		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	砂、針	内面底部の剝離面に回転糸切り痕。円柱技法
2051	13D12		Ⅷ	黒色土器	有台椀			6.8		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	針、砂	
2052	8D12		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.3		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	砂、雲	
2053	8D2		Ⅷ	黒色土器	有台皿	10.1	2.9	4.8	8	ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白～淡橙	砂多	
2054	8C17		Ⅷ	黒色土器	有台皿	11.5				ロクロ整形。内面ミガキ。底部調整不明瞭。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外浅黄橙	砂多	

別表２　遺物観察表（49）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
2055	5A25		Ⅷ	黒色土器	有台皿	11.8				ロクロ整形。内面ミガキ。底部調整不明瞭。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外灰白	針、砂	
2056	8D12		Ⅷ	黒色土器	有台椀			4.8		ロクロ整形。回転糸切り。高台貼り付け時ナデ。内外・面黒色処理、ミガキ。		黒	砂多、針	
2057	5D20		Ⅷ	黒色土器	有台椀			4.7		ロクロ整形。回転糸切り後ナデ。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、砂	
2058	8A12		Ⅷ	黒色土器	有台椀			7.3		ロクロ整形。回転ヘラナデ。高台貼り付け時ナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、砂	
2059	7D22		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.8		ロクロ整形。底部回転ミガキ。高台貼り付け時回転ミガキ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、砂、礫	
2060	8B4		Ⅷ	黒色土器	有台椀			5.8		ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ後ミガキ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	砂、針	
2061	10C16		Ⅷ	黒色土器	有台皿	12.6	3.4	5.8	11	ロクロ整形。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針多、砂	
2062	7B24		Ⅷ	黒色土器	蓋	12.0				ロクロ整形。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、砂	
2063	6D4		Ⅷ	黒色土器	蓋	12.0				ロクロ整形。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、砂	
2064	7C4		Ⅷ	黒色土器	不明					ロクロ整形。ヘラナデ。内・外面黒色処理、ミガキ。		黒	針、砂	
2065	8E3		Ⅷ	土師器	有台椀			6.4		右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け。		橙	砂	
2066	8D22		Ⅷ	土師器	有台椀			7.3		ロクロ整形。高台貼り付け。		浅黄橙	砂、雲、針	
2067	8D23		Ⅷ	土師器	有台椀			6.7		ロクロ整形。高台貼付け時ナデ。		にぶい黄橙	砂、軽	
2068	13C5		Ⅷ	土師器	有台椀			6.0		右ロクロ整形。右回転糸切り後高台貼り付け。		にぶい黄橙	雲	
2069	5E14		Ⅷ	土師器	有台椀			6.7		右ロクロ整形。右回転糸切り。		橙	砂、軽、礫	
2070	6E1		Ⅷ	土師器	有台椀			7.2		ロクロ整形。高台貼付けナデ。		淡橙	砂、軽	
2071	9D24		Ⅷ	土師器	有台椀			7.4		ロクロ整形。		にぶい橙	砂、礫	
2072	9A5		Ⅷ	土師器	皿ヵ			5.0		ロクロ整形。右回転糸切り。柱状高台。		橙	針	
2073	9C16		Ⅷ	土師器	皿ヵ			5.0		ロクロ整形。柱状高台。		にぶい橙	砂、針	
2074	9C18		Ⅷ	土師器	耳皿	長さ9.3	器高3.5	幅7.8		ロクロナデ。右回転糸切り。		灰白	雲、礫、砂	
2075	10C21		Ⅷ	黒色土器	有台椀	17.0			19	右ロクロ整形。右回転糸切り。内面黒色処理、ミガキ。		内黒、外にぶい黄橙	砂、針少	漆パレット
2076	5E10		Ⅷ	土師器	無台椀			5.4		右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	礫、砂、雲	漆パレット
2077	8D8		Ⅷ	土師器	無台椀			5.0		右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	漆パレット
2078	8D7		Ⅷ	土師器	無台椀			5.0		右ロクロ整形。右回転糸切り。	不明	浅黄橙	砂	焼成後の穿孔2か所有り。未貫通
2079	6B5		Ⅷ	土師器	無台椀			5.1		右回転糸切り。	不明	橙	砂、軽	底部中央に貫通する焼成後の穿孔1か所有り
2080	7C3		Ⅷ	土師器	香炉蓋	11.5	5.6			ロクロ整形。鈕部貼り付け。指オサエ、ナデ。口縁部内面は肥厚する。鈕部に穿孔1か所。天井部の鈕部直下には斜めに貫通する穿孔が2か所あり。		灰白	砂多、礫、雲	
2081	8C17		Ⅷ	土師器	香炉蓋					ロクロ整形。鈕部貼り付け。指オサエ、ナデ。鈕部に穿孔1か所。天井部の鈕部直下には斜めに貫通する穿孔が2か所あり。		にぶい黄橙	礫、砂多、針、雲	
2082	8D8		Ⅷ	土師器	香炉蓋			天井3.6		ロクロ整形。		灰白	砂	
2083	8D11		Ⅷ	土師器	鉄鉢	28.6			1	ロクロ整形。		灰白	砂多	

別表２　遺物観察表（50）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
2084	13C23		Ⅷ	須恵器	有台杯	9.0	4.1	5.6	9	ロクロ整形。ヘラナデ後高台貼り付け。		灰	黒、白	
2085	8D7		Ⅷ	須恵器	有台杯					ロクロ整形。回転糸切り高台貼り付け。外端面接地。		灰	白多、礫	小泊系
2086	6C3		Ⅷ	須恵器	蓋	15.9			7	ロクロ整形。		灰白	黒多、白	
2087	6C19		Ⅷ	灰釉陶器	椀	15.8	4.7	7.2	5	ロクロ整形。回転ケズリ。高台貼り付け時ナデ。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白～灰黄	黒粒	
2088	7D17		Ⅷ	灰釉陶器	椀	14.0			5	ロクロ整形。		灰白・灰オリーブ	黒粒	
2089	7C10		Ⅷ	灰釉陶器	Ⅲ	13.3	2.6	7.0	3	右ロクロ整形。ナデ。高台貼り付け時ナデ。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白・灰黄	黒粒	
2090	8D12		Ⅷ	灰釉陶器	Ⅲ	14.0	3.2	6.2	6	ロクロ整形。高台貼り付け時ナデ。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白・灰黄	黒粒	
2091	13C24		Ⅷ	灰釉陶器	Ⅲ			7.2		ロクロ整形。回転ケズリ。高台貼り付け時ナデ。三日月高台。釉浸け掛け。		灰白・浅黄	気泡多、砂少	
2092	7B21		Ⅷ	灰釉陶器	長頸壺	11.9			4	ロクロ整形。		灰白・灰黄	黒粒	
2093	8C12		Ⅷ	白磁	輪花Ⅲ	15.0			3	口縁部と体部の境が「く」の字状に屈折する。		灰白（白磁釉）	黒粒	白磁Ⅲ1類
2094	5C9		Ⅷ	土師器	台付鉢	26.0		13.7	3	ロクロ整形。内面ハケメ。底部外面指頭による放射状凹線後高台貼り付け。		淡橙	礫多	
2095	8D19		Ⅷ	土師器	台付鉢	26.6	8.8	10.7	13	ロクロ整形。回転糸切り後高台貼り付け。		橙	砂少	
2096	9C12		Ⅷ	土師器	台付鉢	25.6			7	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、雲	
2097	7B16		Ⅷ	土師器	台付鉢	27.0			6	ロクロ整形。内面ハケメ。		灰白	砂多、礫	
2098	8E4		Ⅷ	土師器	台付鉢	29.5			4	ロクロ整形。		にぶい橙	礫、雲少	
2099	7C25		Ⅷ	土師器	台付鉢	35.4			3	ロクロ整形。		灰白	礫多	
2100	7C5		Ⅷ	土師器	台付鉢			19.3		ロクロ整形後ナデ。		灰白	礫	高台内側にスス付着
2101	5C4		Ⅷ	土師器	台付鉢			11		右ロクロ整形。体部外面手持ちケズリ。底部指頭による放射状の凹線。高台部剝落。		灰～にぶい橙	礫多	
2102	9E1		Ⅷ	土師器	台付鉢			14.6		ロクロ整形。外面手持ちケズリ。内面ヘラナデ。		淡橙	砂多、礫	
2103	9E20		Ⅷ	土師器	台付鉢			12.3		ロクロ整形。		灰白	砂多、礫	
2104	6E3		Ⅷ	土師器	台付鉢			12.8		ロクロ整形。		にぶい橙	礫多	
2105	6B16		Ⅷ	土師器	台付鉢			14.6	14	ロクロ整形。		淡黄	砂、礫	高台端部にスス付着
2106	6B7		Ⅷ	土師器	台付鉢			13.6		ロクロ整形。		浅黄橙	礫、雲少	
2107	10E11		Ⅷ	土師器	台付鉢			13.9		ロクロ整形。		浅黄橙	砂多、礫	
2108	9D23		Ⅷ	土師器	台付鉢			16.4		ロクロ整形。		にぶい黄橙	砂多、礫	
2109	9D17		Ⅷ	土師器	台付鉢			16.5		ロクロ整形。		灰黄	砂多、礫	
2110	8D16		Ⅷ	土師器	台付鉢			16.4		ロクロ整形。		浅黄橙	砂多、礫	
2111	8C19		Ⅷ	土師器	鉢	20.8			7	ロクロ整形。外面カキメ。		浅黄橙	軽、礫	
2112	8E10		Ⅷ	土師器	鉢	20.8			3	ロクロ整形。外面カキメ。		浅黄橙	白	
2113	9D14		Ⅷ	須恵器	台付鉢ヵ	22.6			3	ロクロ整形。		灰白	砂、礫	
2114	8C12		Ⅷ	須恵器	台付鉢	28.0	13.8	14.9	21	ロクロ整形。外底面ナデ。内端接地。		灰白	白多、軽	
2115	6C24		Ⅷ	須恵器	台付鉢	27.6		13.7	3	ロクロ整形。		灰白	白、礫	
2116	8B19		Ⅷ	須恵器	台付鉢ヵ	37.0			12	ロクロ整形。底部回転ケズリ。		灰	白多、礫	
2117	5B14		Ⅷ	須恵器	台付鉢ヵ	37.7			3	ロクロ整形。		灰	白多、白	
2118	6B1		Ⅷ	土師器	鍋	40.8			3	ロクロ整形。		にぶい橙	砂多、礫、雲	
2119	13C13		Ⅷ	土師器	鍋	42.8			2	ロクロ整形。		にぶい橙	砂多、雲	
2120	7A19		Ⅷ	土師器	鍋	34.9			1	ロクロ整形。		黒褐	礫多	被熱している

別表２　遺物観察表（51）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
2121	9E7		Ⅷ	土師器	鍋	35.2			1	ロクロ整形。口縁部外面カキメ。下半部外面タタキ。		灰白	砂多	
2122	9A8		Ⅷ	土師器	鍋	38.2			3	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、礫多	
2123	13C12		Ⅷ	土師器	鍋	41.5			2	ロクロ整形。		にぶい橙	砂、礫、軽	
2124	8C22		Ⅷ	土師器	鍋	37.4			3	ロクロ整形。		にぶい橙	砂、礫	還元焔
2125	6B1		Ⅷ	土師器	鍋	34.9			4	ロクロ整形。		浅黄橙	礫多	
2126	10D1		Ⅷ	土師器	鍋	40.2			2	ロクロ整形。		にぶい橙	砂多、礫、軽	
2127	7E12		Ⅷ	土師器	鍋	30.7			4	ロクロ整形。		にぶい橙	砂多、礫	還元焔
2128	8C23		Ⅷ	土師器	鍋	33.0			2	ロクロ整形。内面ハケメ。		灰白	砂	内面全面にスス付着
2129	6A8		Ⅷ	土師器	甕	23.0			6	ロクロ整形。		浅黄橙	礫	
2130	14D6		Ⅷ	土師器	小甕	13.0			3	ロクロ整形。		橙	砂、雲	
2131	13B9		Ⅷ	土師器	小甕	10.0			7	ロクロ整形。		にぶい橙	砂	
2132	13A14		Ⅷ	土師器	小甕	13.1			7	ロクロ整形。		浅黄橙	礫多	
2133	8D18		Ⅷ	土師器	小甕	12.3			18	ロクロ整形。		灰	砂多	還元焔
2134	14C13		Ⅷ	土師器	小甕	14.3			5	ロクロ整形。		浅黄橙	礫多	
2135	8C12		Ⅷ	土師器	小甕	15.6			5	ロクロ整形。		灰黄	砂多、礫	
2136	13B15		Ⅷ	土師器	小甕	10.5			8	ロクロ整形。内面ハケメ。		にぶい橙	砂	
2137	14C2		Ⅷ	土師器	小甕			4.8		ロクロ整形。右回転糸切り後ケズリ。		黄灰～にぶい黄橙	砂、礫	
2138	7B16		Ⅷ	土師器	小甕			5.6		右ロクロ整形。右回転糸切り。		灰白	礫多	
2139	14C3		Ⅷ	土師器	小甕			8.4		ロクロ整形。		浅黄橙	礫多	
2140	14C15		Ⅷ	土師器	小甕			11.0		ロクロ整形。胴部・底部ケズリ。		にぶい橙	礫多	
2141	9D16		Ⅷ	土師器	小甕			9.2		ロクロ整形。胴部ケズリ。		にぶい橙	砂多、礫	
2142	13E9		Ⅷ	土師器	小甕			8.7		ロクロ整形。		にぶい黄橙	砂	
2143	9A8		Ⅷ	土師器	甕	19.5			4	ロクロ整形。体部外面カキメ。		浅黄橙	礫多	
2144	10C16		Ⅷ	土師器	甕	21.2			5	ロクロ整形。内面ハケメ。		にぶい橙	礫	
2145	14C8		Ⅷ	土師器	甕	17.8			5	ロクロ整形。内面ハケメ。		浅黄橙	礫、雲	
2146	10C21		Ⅷ	土師器	甕	29.5			3	ロクロ整形。		浅黄橙	砂多、礫多	
2147	8A11		Ⅷ	土師器	甕	18.3			5	ロクロ整形。		にぶい橙	礫	
2148	7B18		Ⅷ	土師器	甕	24.7			2	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、礫	
2149	13E9		Ⅷ	土師器	甕	19.9			3	ロクロ整形。		浅黄橙	砂多	
2150	7B9		Ⅷ	土師器	甕	23.9			6	ロクロ整形。		灰白	砂、礫多	
2151	6C23		Ⅷ	土師器	甕	24.4			5	ロクロ整形。体部内面カキメ。		にぶい橙	砂、礫	
2152	13C23		Ⅷ	土師器	甕	22.3			4	ロクロ整形。		橙	軽、砂	
2153	13C21		Ⅷ	土師器	甕	18.0			8	ロクロ整形。		にぶい黄橙	軽多	
2154	5B5		Ⅷ	土師器	甕	18.0			4	ロクロ整形。		浅黄橙	砂、礫多	
2155	7B23		Ⅷ	土師器	甕	24.0			7	ロクロ整形。		灰白	礫多	
2156	5C9		Ⅷ	土師器	甕	16.0			3	外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		にぶい橙	礫多	
2157	13C16		Ⅷ	土師器	甕					外面平行タタキ。内面無文あて具痕。		にぶい橙	砂	
2158	8D5		Ⅷ	土師器	小型羽釜	11.0			4	ロクロ整形。鍔を「L」字状に折り曲げた後、口縁部を貼り付ける。		浅黄橙	砂	
2159	6C6		Ⅷ	土師器	小型羽釜	11.8			5	ロクロ整形。鍔を「L」字状に折り曲げた後、口縁部を貼り付ける。		浅黄橙	砂、雲	
2160	8C23		Ⅷ	土師器	小型羽釜	11.0			6	ロクロ整形。鍔を「L」字状に折り曲げた後、口縁部を貼り付ける。		にぶい黄橙	砂、礫	
2161	9E1		Ⅷ	土師器	小型羽釜	8.8			11	ロクロナデ。		褐灰	砂多	
2162	8B2		Ⅷ	土師器	不明					ロクロ整形。把手部は貼り付け後ケズリ。先端指オサエ。		にぶい橙	砂、針	
2163	8B1		Ⅷ	土師器	不明					ロクロ整形。把手部は貼り付け後ケズリ。		浅黄橙	砂	
2164	5A25		Ⅷ	須恵器	短頸壺	10.7			7	ロクロ整形。		灰	黒多、白	

別表２　遺物観察表（52）

古代Ⅷ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	糸切類型	色調	胎土	備考
2165	10D8		Ⅷ	須恵器	短頸壺	10.0			8	ロクロ整形。口縁部ロクロナデ。		灰、灰（自然釉）	白多、黒粒多	
2166	6C15		Ⅷ	須恵器	短頸壺	12.0			6	外面平行タタキ。内面放射状あて具痕。		灰	針、砂、礫	
2167	8C18		Ⅷ	須恵器	横瓶					外面格子目タタキ後カキメ。内面同心円あて具痕、カキメ。		灰白	黒、礫	
2168	8D2		Ⅷ	須恵器	横瓶			8.0		外面格子目タタキ後カキメ。内面同心円あて具痕、カキメ。		灰	白、礫	
2169	13B17		Ⅷ	須恵器	広口壺	14.3			5	ロクロ整形。		灰～黄灰	白、礫、軽	
2170	7D12		Ⅷ	須恵器	広口壺	17.8			7	ロクロ整形。		紫灰	白多、礫	
2171	5B20		Ⅷ	須恵器	広口壺	17.8			18	ロクロ整形。		灰	白多、砂	
2172	5A25		Ⅷ	須恵器	広口壺	18.0			3	ロクロ整形。		灰	白多	
2173	7B21		Ⅷ	須恵器	広口壺	23.9			6	ロクロ整形。		灰	白、黒	
2174	10E20		Ⅷ	須恵器	広口壺	25.0			5	ロクロ整形。		灰	黒多、白多	
2175	10C21		Ⅷ	須恵器	広口壺	26.9			5	ロクロ整形。		暗青灰	白多、礫	
2176	6C3		Ⅷ	須恵器	広口壺	28.7			3	ロクロ整形。		灰	白、礫	
2177	5B5		Ⅷ	須恵器	広口壺	27.0			11	ロクロ整形。		灰	白多、砂	
2178	5C10		Ⅷ	須恵器	広口壺					ロクロ整形。		灰	白多、礫	
2179	5A25		Ⅷ	須恵器	広口壺			14.1		ロクロ整形。		灰	白多	
2180	10E9		Ⅷ	須恵器	広口壺			8.1		ロクロ整形。高台貼り付け。		灰	白多	小泊系
2181	6D10		Ⅷ	須恵器	広口壺			16.4		ロクロ整形。高台貼り付け。		灰	白多、礫	
2182	5C20		Ⅷ	須恵器	広口壺			15.9		ロクロ整形。高台貼り付け。外端面接地。		灰	白、礫	
2183	7C1		Ⅷ	須恵器	甕	27.0			4	ロクロ整形。		灰	砂、礫	
2184	6B20		Ⅷ	須恵器	甕	28.3			6	外面格子目タタキ。内面木目を有する放射状あて具痕。		灰	白多	
2185	6B20		Ⅷ	須恵器	甕	37.0			3	外面格子目タタキ。内面放射状あて具痕。		灰	白、白	
2186	6B20		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する同心円あて具痕。		灰	白	
2187	6A15		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面放射状あて具痕。		灰	白、白	
2188	6B9		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面放射状あて具痕。		灰	軽	
2189	6B19		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面放射状あて具痕。		灰	白多、針	
2190	5B20		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面放射状あて具痕。		灰	白多	
2191	7B17		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行タタキ後扇状あて具痕。		灰	白多、礫	
2192	7C23		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する同心円あて具痕、木目を有する平行あて具痕。		青灰	白多	小泊系
2193	5B15		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面平行あて具痕。		灰	白多、白多	
2194	8D2		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面同心円あて具痕。		灰	礫	
2195	7B16		Ⅷ	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰	白多、針	
2196	6B15		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰	白多	
2197	6B15		Ⅷ	須恵器	甕					外面平行タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰白	白多	
2198	5D19		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕。		灰	白、礫	
2199	8A23		Ⅷ	土師器	器台	9.0				非ロクロ整形。外面に輪積み痕と指ナデ痕を顕著に残す。		にぶい黄橙	礫	
2200	10A25		Ⅷ	土師器	器台			13.0		非ロクロ整形。内・外面指ナデ。体部に孔有り。		にぶい橙	雲、礫	
2201	6B24		Ⅷ	製塩土器				12.8		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		灰	礫多	
2202	6C24		Ⅷ	製塩土器				18.6		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		浅黄橙	礫多	
2203	6D5		Ⅷ	製塩土器				18.2		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		浅黄橙	礫多	
2204	8D2		Ⅷ	製塩土器				21.0		非ロクロ整形。指頭による押圧痕。底部に板状圧痕。		橙	礫多	
2205	8C22		Ⅷ	製塩土器						非ロクロ整形。指頭による押圧痕。		浅黄橙	礫多	
2206	7D23		Ⅷ	須恵器	甕					外面格子目タタキ。内面木目を有する平行あて具痕、同心円あて具痕。胴部破片の周縁を磨って楕円形状に成形している。用途不明品。		灰	白	手持ち砥石ヵ

別表2　遺物観察表（53）

古代Ⅷ層　木製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	木取り	備考
174	9C	SB1400-P6		柱根	56.0	22.8	17.0	クリ	芯持丸木	
418	8D	SB1500-P1		柱根	32.2	28.0	27.3	クリ	芯持丸木	メド穴
421	7C	SB1500-P7		柱根	32.5	26.4	16.0	クリ	芯持丸木	メド穴
422	7C	SB1500-P9		柱根	36.3	28.0	27.4	クリ	芯持丸木	メド穴
424	7C	SB1500-P10		柱根	35.4	29.5	20.0	クリ	芯持丸木	
425	7･8C	SB1500-P11		柱根	45.0	26.2	22.4	クリ	芯持丸木	メド穴
426	8C	SB1500-P12		柱根	48.3	25.5	25.8	クリ	芯持丸木	メド穴
428	8C	SB1500-P13		柱根	42.3	27.5	24.0	クリ	芯持丸木	メド穴
439	8C･D	SB1500-P14		柱根	37.5	28.7	26.5	クリ	芯持丸木	メド穴
440	8D	SB1500-P15		柱根	33.0	32.8	26.6	クリ	芯持丸木	
441	8D	SB1500-P16		柱根	35.0	23.0	26.0	クリ	芯持丸木	メド穴
444	8D	SB1500-P19		柱根	36.4	23.0	26.0	クリ	芯持丸木	
460	7C	SB1500-P44		柱根	44.0	23.4	14.8	クリ	芯持丸木	メド穴
470	7D	SB1500-P49		柱根	22.4	9.0	22.4	クリ	芯持丸木	
1335	6B	SB1683-P3	1	柱根	20.0	15.4	12.0	クリ	割材ヵ	
1338	6A	SB1683-P8	1	柱根	33.0	14.8	11.2	クリ	割材ヵ	先端部は平坦
1343	13C	SB2020-P1		柱根	73.6	19.4	17.6	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1344	13C	SB2020-P2		柱根	114.4	20.0	19.0	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1345	13C	SB2020-P3		柱根	45.2	12.4	10.0	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1346	13C	SB2020-P4		柱根	80.0	18.4	14.5	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1347	13B	SB2020-P6		柱根	96.6	20.0	17.2	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1348	13C	SB2020-P8		柱根	77.2	16.4	14.6	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1349	13C	SB2020-P10		柱根	34.4	9.8	9.8	クリ	割材	先端部は尖らせる
1350	13C	SB2020-P11		柱根	64.2	10.2	8.8	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1351	13C	SB2020-P13		柱根	52.6	10.0	10.4	クリ	割材	先端部は尖らせる
1352	13C	SB2020-P14		柱根	68.8	15.2	11.2	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1353	13C	SB2020-P15		柱根	46.6	8.8	12.0	クリ	芯持丸木	先端部は尖らせる
1355	14C	SB2020-P23		柱根	16.4	4.0	3.1	クリ	割材	先端部は尖らせる
1374	10E	SB2200-P3		柱根	49.6	15.6	14.6	クリ	割材	先端部は平坦
1377	10D	SB2200-P5		柱根	98.2	20.4	14.2	クリ	割材	先端部は尖らせる
1379	10D17	SB2200-P16		皿木地ヵ	15.5	15.9	4.6	ケヤキ	横木取り	建物の柱穴底部から出土
1380	10D	SB2200-P19		柱根	71.6	12.4	10.2	クリ	割材	先端部は尖らせる
1381	10E	SB2200-P20		柱根	96.0	16.0	12.4	クリ	割材	先端部は尖らせる
1431	13D11	SX2001-SE3	6	曲物側板	11.8	2.2	0.5	不明	割材	内面ケビキ

古代Ⅷ層　漆製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	木取り	備考
1230	8D	SK1419	1	漆器盤または椀				柾目	総黒色系。木胎腐蝕。写真図版の掲載のみ
1487	8B	SK1120	4	用途不明	1.9	1.8	0.1	柾目	漆塗り板状品。漆30層前後重ね塗り
1736	12D	SX2001	2	漆容器（曲物）	13.8	5.3	12.0	柾目	漆容器として使用された円形曲物で、その内側にこびり付いた漆がそのままの形で凝固したもの。曲物本体の木質部は腐蝕して遺存しない
2227	11C19		Ⅷ	用途不明	3.1	2.7	1.1		ボタン状突起
2383	13C11		Ⅷ	漆器椀				不明	総黒色系。木胎腐蝕。写真図版の掲載のみ

古代Ⅷ層　漆紙

遺物No.	漆紙整理No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	出土状況	備考
322	B-1漆紙	9C21	SD1077	2	漆紙	5.0	5.1	折り畳み破片（八つ折り）	漆パレット305に共伴して出土。未接合の小片の一部に墨痕有り
851	E-1漆紙	8E2	SD1377	3	漆紙	16.0	10.7	大破片（折り無し）	表・裏面に判読可能な文字列有り 釈文は「附編3」を参照のこと
	E-3漆紙					2.0	1.8		
	E-5漆紙					4.3	2.7		
	E-9漆紙					2.4	1.4		
	E-14漆紙					1.6	1.0		
	E-15漆紙					1.0	1.0		
	E-16漆紙					1.2	0.5		
	E-18漆紙					0.8	0.5		
	E-19漆紙					0.6	0.5		
	E-20漆紙					0.7	0.5		
	E-22漆紙					0.5	0.5		
	E-23漆紙					0.6	0.4		
852	D-2漆紙	7C6	SD1377	2	漆紙	1.1	1.2	破片（折り無し）	片面に判読不明の文字列有り
	D-8漆紙					0.4	0.5		片面に「山ヵ」
1329	K-1漆紙	8C11	P2160		漆紙	5.1	2.9	破片（折り無し）	文字・墨痕無し
1363	L-1漆紙	13C18	SK2120		漆紙	3.0	2.3	破片（折り無し）	文字・墨痕無し
1375	J-1漆紙	10E6	SB2200-P3		漆紙	3.5	3.6	折り畳み破片（二つ折り）	片面に判読不明の文字列有り

別表2　遺物観察表（54）

古代Ⅷ層　漆紙

遺物No.	漆紙整理No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	出土状況	備考
1486	H-1漆紙	8B19･20･24･25	SK1120	4	漆紙	3.5	5.0	折り畳み破片（八つ折り）	文字・墨痕無し
1535	I-1漆紙	6D22	SK1354	1	漆紙	1.4	0.9	破片（折り無し）	文字・墨痕無し
1763	C-1漆紙	6B19	SD1147	1	漆紙	1.2	0.6	破片（折り無し）	片面に墨痕有り

古代Ⅷ層　石製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1789	13C	SD2008	1	権状錘	6.8	4.8	35	87.1	頁岩	上部に小孔１か所
1851	14C21	SD2173		磨石	19.0	4.7	4.0	505.0	砂岩	
2228	8D6		Ⅷ	丸玉	直径0.9	孔径0.15		1.04	水晶	球状を呈するもので中心に細い貫通孔有り。被熱している
2229	6B8		Ⅷ	腰帯石銙丸鞆	2.7	4.3	0.7	17.6	頁岩	黒色。正面と側面は平滑に仕上げ光沢を持つ。稜部は面取る。裏面潜り孔3か所

古代Ⅷ層　土製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	調整・文様等	色調	胎土	備考
849	7D7	SD1377		管状土錘	2.6	1.3	0.5	3.4	粘土巻き付け。	灰白	砂	ほぼ完形
850	7D8	SD1377		管状土錘	2.9	1.5	0.3	4.4	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂多、礫	ほぼ完形
895	8D16	SW2229		管状土錘	3.3	1.2	0.3	3.4	粘土巻き付け。	灰白	砂	完形
896	8D16	SW2229		管状土錘	2.8	1.5	0.4	3.8	粘土巻き付け。	黄灰	礫、砂多	完形
1330	8D17	P2193	1	管状土錘	2.1	1.5	0.5	3.2	粘土巻き付け。	灰黄	砂	ほぼ完形
1337	6B6	SB1683-P5	2	管状土錘	2.8	1.4	0.5	4.2	粘土巻き付け。	浅黄橙	礫多	ほぼ完形
1568	10E	SK1436	1	管状土錘	2.6	1.4	0.5	3.3	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂	完形
1569	10E	SK1436	1	管状土錘	2.6	1.3	0.5	3.4	粘土巻き付け。	にぶい橙	砂	完形
1570	10E	SK1436	1	管状土錘	3.1	1.2	0.4	2.5	粘土巻き付け。	灰黄	砂	完形
1571	10E	SK1436	1	管状土錘	2.5	1.3	0.4	3.1	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂	完形
1572	10E7	SK1436		管状土錘	2.4	1.4	0.5	2.9	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂	完形
1620	12C25	SK2031	1	管状土錘	2.8	1.4	0.4	3.3	粘土巻き付け。	黄灰	砂	完形
1621	12C25	SK2031	3	管状土錘	3.5	1.5	0.5	5.3	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂多、礫	完形
1625	12D4	SK2046	7	管状土錘	2.8	1.3	0.3	3.3	粘土巻き付け。	にぶい橙	砂多	完形
1649	7D6	SK2226	1	管状土錘	2.2	1.0	0.3	1.6	粘土巻き付け。	灰白	礫多	完形
1773	6D10	SD1563	1	管状土錘	3.1	1.0	0.4	2.9	粘土巻き付け。	浅黄橙	砂	完形。体部に焼成後の穿孔あり
1857	13E10	P2114	1	管状土錘	2.6	1.1	0.3	2.4	粘土巻き付け。	灰黄褐	砂多	完形
2207	13E10		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.3	0.5	2.2	粘土巻き付け。	灰黄	砂多、礫	ほぼ完形
2208	14D12		Ⅷ	管状土錘	2.4	1.2	0.4	2.3	粘土巻き付け。	浅黄橙	砂多	完形
2209	13D19		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.3	0.4	2.5	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂、礫	ほぼ完形
2210	13D14		Ⅷ	管状土錘	2.6	1.5	0.4	4.7	粘土巻き付け。	灰白	砂	完形
2211	13C21		Ⅷ	管状土錘	2.7	1.5	0.4	4.2	粘土巻き付け。孔部片端面取り状。	灰黄	砂	完形
2212	13C17		Ⅷ	管状土錘	2.6	1.5	0.4	4.3	粘土巻き付け。孔部片端面取り状。	灰黄	砂	完形
2213	10E5		Ⅷ	管状土錘	3.0	1.0	0.4	4.5	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂多、礫	完形
2214	13E9		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.2	0.3	2.2	粘土巻き付け。	暗灰黄	砂多、礫	完形
2215	13B24		Ⅷ	管状土錘	2.4	1.0	0.3	1.7	粘土巻き付け。	灰白	砂、礫	完形
2216	13D19		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.0	0.3	1.5	粘土巻き付け。	橙	砂	ほぼ完形
2217	5D19		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.1	0.4	2.4	粘土巻き付け。体部にヘラ圧痕。	にぶい黄橙	砂	完形
2218	15E12		Ⅷ	管状土錘	3.1	1.3	0.4	3.9	粘土巻き付け。	灰黄	砂多、礫	完形
2219	13D24		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.2	0.3	2.4	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂多	完形
2220	13C4		Ⅷ	管状土錘	2.5	1.4	0.3	1.4	粘土巻き付け。	灰白	砂、礫	ほぼ完形
2221	6C20		Ⅷ	管状土錘	3.2	1.2	0.3	3.0	粘土巻き付け。	灰白	砂多、礫	完形
2222	14D11		Ⅷ	管状土錘	2.8	1.2	0.4	2.1	粘土巻き付け。	灰黄	砂多	完形
2223	13C14		Ⅷ	管状土錘	2.9	2.3	0.7	13.7	粘土巻き付け。孔部両端面取り状。	にぶい黄橙	砂	完形
2224	6C13		Ⅷ	管状土錘	5.4	2.2	0.6	21.1	粘土巻き付け。	灰白	砂多、礫	完形
2225	7C1		Ⅷ	管状土錘	4.6	1.4	0.6	13.4	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂多	ほぼ完形
2226	7D12		Ⅷ	管状土錘	6.7	2.3	0.6	27.3	粘土巻き付け。	にぶい黄橙	砂多	完形

別表2　遺物観察表（55）

中世Ⅳ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	色調	胎土	備考
2384	6A	SB532-P5	1	珠洲焼	壺または甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	灰白	砂	
2385	12E	SE040	8	青磁	椀			6.0		底部内面に劃画文。畳付から内側は露胎。	灰オリーブ	黒粒	龍泉窯系青磁椀I-2b類
2388	6A	SE048	1	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ。	灰	砂少	
2389	10E18	SE262		珠洲焼	壺または甕					外面平行タタキ、内面ナデ。	灰	礫	
2390	10E	SE262		白磁	皿	12.6			4	ロクロ整形。	淡黄緑釉	黒粒	
2393	5A	SE565	4	青磁	椀			4.0		雷文系。畳付から内側は露胎。	明緑灰	黒粒	
2394	5A	SE565	1	珠洲焼	壺または甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	灰	砂	
2395	5A	SE598	2	珠洲焼	R種壺	15.0				ロクロ整形。	灰	砂	珠洲I期
2396	5A	SE598	6	珠洲焼	壺または甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	灰	砂	内面に黒色付着物有り
2398	5B	SE600	5	珠洲焼	壺または甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	赤灰	砂	
2399	5B	SE667	3	珠洲焼	片口鉢				2	ロクロ整形。内面に粗い卸目。	灰	砂	珠洲Ⅶ期
2400	5B	SE667	1	珠洲焼	片口鉢				2	ロクロ整形。内面に櫛目波状文。	灰白	礫、砂	珠洲Ⅶ期
2401	5B	SE667	1	瓦器	片口鉢	42.0			2	ロクロ整形。内面に粗い卸目。	橙	礫、針	
2402	5B	SE667	4	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕後ナデ。	灰	礫、針	
2403	6B	SE674	7	白磁	椀				1	ロクロ整形。	灰白	黒粒	白磁椀Ⅷ類
2404	6B	SE674	4	常滑焼	甕					簾状押印。	灰オリーブ～暗灰黄	礫	
2405	6B	SE674	10	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕後ナデ。	灰	礫、砂少	
2406	6B	SE674	7	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕後ナデ。	黄灰	針、黒少	
2407	6B	SE674	4	珠洲焼	甕	48.8			7	外面平行タタキ、内面ナデ消し。	灰	針少	珠洲Ⅰ期
2408	6B	SE674	3	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ。	灰	針少、黒少	
2409	6B	SE674	5	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ。	灰	黒少、礫少	
2410	6B	SE674	1	珠洲焼	甕			16.4		ロクロ整形。	灰	砂	
2411	6B	SE674	4	珠洲焼	壺					外面平行タタキ、内面無文あて具痕後ナデ消し。	灰	針、礫少	
2416	6C	SE704	1	珠洲焼系	R種壺					外面櫛波文、内面棒状工具痕。	灰	針	珠洲Ⅰ期
2417	6C	SE704	4	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ。	黄灰	砂	
2418	6C	SE704		珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕後ナデ消し。	灰	黒多	
2419	6C	SE704	1	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ。	灰	礫、砂	
2420	6C	SE704	2	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	灰	黒多	
2429	6C	SE753		珠洲焼	片口鉢	28.1			3	ロクロ整形、内面卸目。	灰	針多、礫	珠洲Ⅱ期
2430	6C	SE753		珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	灰	黒少、礫	
2431	6C	SE753		珠洲焼	R種壺			10.8		ロクロ整形。底部ケズリ。	灰	針多	
2432	6D	SE754		珠洲焼	T種壺					外面平行タタキ。	灰	砂	
2433	5B	SE765	6	白磁	皿			4.1		ケズリ出し高台。	灰白	灰白	白磁D群。高台内に墨書「□」
2434	5B	SE765	4	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無あて具痕。	灰	礫	内・外面にスス付着
2435	5B	SE765	5	珠洲焼	片口鉢	29.4			3	ロクロ整形。内面口縁部内端面に波状文。	浅黄	砂	珠洲Ⅵ期。内・外面にスス付着
2436	5B	SE765	3	珠洲焼	片口鉢	34.5			6	ロクロ整形。内面卸目。	灰	砂多	珠洲Ⅵ期。割れ目に漆付着。漆継ぎ
2437	5B	SE765	3	珠洲焼	片口鉢					ロクロ整形。内面卸目。	灰	砂多	珠洲Ⅵ期
2440	9D	SE841	1	珠洲焼	片口鉢				3	ロクロ整形。	灰白	砂、針	珠洲Ⅰ期
2441	5A	SE843	7	白磁	皿	9.1	2.3	3.2	7	ロクロ整形。ケズリ出し高台。	灰白	灰白	白磁D群
2442	5A	SE843	2	古瀬戸	大皿	29.4			1	ロクロ整形。体部外面下部露胎。	オリーブ黄	礫少、黒	古瀬戸後Ⅱ期
2443	5A	SE843	3	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具後ナデ。	灰	黒多、礫	

別表2　遺物観察表（56）

中世Ⅳ層　土器・陶磁器

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(/36)	調整・文様等	色調	胎土	備考
2444	5A	SE843	1	珠洲焼系	T種壺					外面綾杉状のタタキ、内面無文あて具痕後太い沈線。	灰	礫、針多	珠洲II期
2446	5A･B	SE844	1	青磁	椀				1	ロクロ整形。内面沈線文、劃華文。	灰オリーブ	灰	龍泉窯系青磁椀I-2b類
2447	6E	SE860	2	青磁	椀			5.0		ロクロ整形。ケズリ出し高台。内底面と体部との境に段。 外面蓮弁文。	オリーブ灰	灰	龍泉窯系青磁椀I-5b類
2451	13D	SE4002		珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面無文あて具痕。	灰	砂、黒	
2453	5A	SK580	1	土師器	皿	7.9	1.9	3.5	4	ロクロ整形。	灰白	砂多	
2454	5A	SK580	3	土師器	皿	9.3	2.1	5.2	4	ロクロ整形。回転糸切り後ヘラ整形。	にぶい橙	砂	
2455	5A	SK580	1	土師器	皿	9.7	2.2	5.2	11	ロクロ整形。回転糸切り。	灰白	砂多	
2456	5A	SK580	1	土師器	甕			7.5		ロクロ整形。回転糸切り。	褐灰	砂多	
2457	11A3	SD025		白磁	椀				1	ロクロ整形。	淡緑釉	黒粒	透過性のある釉。白磁椀Ⅵ類又はⅧ類
2459	9A	SD041	1	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ消し。	灰	礫、黒	
2461	9C7	P821	1	珠洲焼	四耳壺					横位橋状把手。櫛目波状文。	灰	礫多	珠洲Ⅰ期
2462	9C9	P830	1	常滑焼	甕					簾状押印。	黄灰	礫	常滑3型式
2464	7B15	P865	1	珠洲焼	甕					外面平行タタキ、内面ナデ消し。	灰	砂	
2465	6B18	遺構外		青磁	椀			6.1		畳付から内側は露胎。鎬蓮弁。	灰オリーブ	灰	龍泉窯系青磁椀I-5b類
2466	10B9	遺構外		青磁	椀					内面沈線の雲気文。	オリーブ灰	灰	龍泉窯系青磁椀I-4b類
2467	13D13	遺構外		珠洲焼系	四耳壺					横位橋状把手。櫛目波状文。	灰	礫、針	珠洲Ⅰ期

別表2　遺物観察表（57）

中世Ⅳ層　木製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	樹種	木取り	備考
2387	12E	SE040		木杓	28.0	9.9	2.5	シラキ		未成品。柄部欠損。柄部に継ぎ穴痕あり
2413	6B	SE674		用途不明	23.2	10.5	8.6		芯持材	大型の楔状を呈する
2414	6B	SE674		井戸側部材	52.8	10.8	8.6		芯持材	隅柱カ。未貫通の枘穴あり
2415	6B	SE674		井戸側部材	76.3	6.5	5.2		割板、柾目	
2421	6C	SE704		井戸側部材	61.0	40.5	3.4	マツ属複維管束亜属		2421～2424は同一個体。刳舟を切断して井戸側に転用
2422	6C	SE704		井戸側部材	54.7	5.5	3.0	マツ属複維管束亜属		
2423	6C	SE704		井戸側部材	58.0	18.0	3.0	マツ属複維管束亜属		
2424	6C	SE704		井戸側部材	62.0	32.0	3.4	マツ属複維管束亜属		
2425	6C	SE704		井戸側部材	60.0	32.0	3.2	マツ属複維管束亜属		2425～2428は同一個体。刳舟を切断して井戸側に転用。上記2421～2424と組み合う
2426	6C	SE704		井戸側部材	33.8	8.4	2.3	マツ属複維管束亜属		
2427	6C	SE704		井戸側部材	41.6	20.8	4.0	マツ属複維管束亜属		
2428	6C	SE704		井戸側部材	76.0	44.3	4.7	マツ属複維管束亜属		
2448	6E	SE860		円形曲物	58.0		0.2	スギ		井戸の水溜に転用
2449	6E	SE860		木杭	12.8	6.0	7.0	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	先端部は尖らせる
2450	6E	SE860		木杭	134.6	8.8	6.6	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	先端部は尖らせる。上部に枘穴あり

中世Ⅳ層　漆製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	木取り	備考
2397	5A	SE598	7	漆器椀				横木取り	内面赤色、外面黒色系。外面は赤色漆絵で楓
2438	5B	SE765	7	漆器椀				横木取り	内面赤色、外面黒色系。外面には赤色漆絵痕が確認できるが意匠は不明

中世Ⅳ層　石製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
2391	10E18	SE262		砥石	10.9	5.8	4.3	468.1	砂岩	
2392	10E18	SE262		砥石	7.8	6.7	1.7	77.2	流紋岩質凝灰岩	
2439	5B	SE765	4	砥石	12.7	4.8	2.5	196.8	頁岩	
2445	5A	SE843		砥石	10.7	4.4	2.6	105.8	流紋岩	
2452	13D	SE4002		砥石	4.0	2.5	1.9	29.7	流紋岩	
2458	11A3	SD025		砥石	12.6	5.0	4.3	444.5	流紋岩	
2460	9A	SD041	2	砥石	14.8	4.8	2.2	354.8	砂岩	

中世Ⅳ層　金属製品

遺物No.	グリッド	遺構名	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
2463	5A13	P853	1	古銭	2.5	2.3	0.1	2.5	聖宋元寶。北宋銭、初鋳1,101年

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（1）

【凡　例】

1　Ⅻａ層、Ⅺ層、Ⅷ層の主な遺構及び包含層から出土した土器の器種構成比率を示した表である。
2　土器の計測法は出土した土器全点（ただし、明確に時期が異なる土器は除く）を、口縁部残存率測定法と破片測定法により計測した。
3　口縁計測値は、口縁測定法［宇野 1992］によって得られた数値であり、x/36 を示す。
4　破片数は、口縁部を持たない破片も含む。
5　比率は、口縁部計測値による器種構成比率であり、（　）内は破片数による器種構成比率である。
6　＊は、存在するが数値として表れないもの。
7　その他は、器種不明の土器であるが、中には器種が確認できるものも含まれる。一例として、緑釉陶器のその他の中には耳皿の破片１点も含まれる。

Ⅻa層 出土遺物（Ⅻa層包含層）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	7（11）	33.3%（2.0%）
	杯蓋	0（2）	0.0%（0.4%）
	小計	7（13）	33.3%（2.3%）
貯蔵具			
須恵器	甕	0（2）	0.0%（0.4%）
	小計	0（2）	0.0%（0.4%）
煮炊具			
土師器	甕	6（200）	28.6%（36.0%）
	小甕	8（341）	38.1%（61.3%）
	小計	14（541）	66.7%（97.3%）
食器総計		21（556）	

Ⅺ層 出土遺物（Ⅺ層包含層＋Ⅺ層遺構）

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	362（920）	17.4%（21.1%）
	その他	5（20）	0.2%（0.5%）
黒色土器A	椀	1（10）	0.3%（0.2%）
黒色土器B	椀	0（7）	0.0%（0.2%）
須恵器	無台杯	860（793）	41.4%（18.2%）
	有台杯	241（183）	11.6%（4.2%）
	杯蓋	122（61）	5.9%（1.4%）
	折縁杯	25（8）	1.2%（0.2%）
	その他	156（119）	7.5%（2.7%）
	小計	1,779（2,119）	85.6%（48.7%）
貯蔵具			
須恵器	甕	26（73）	1.3%（1.7%）
	瓶	25（69）	1.2%（1.6%）
	小計	51（142）	2.5%（3.3%）
煮炊具			
土師器	甕	110（902）	5.3%（20.7%）
	小甕	131（1,163）	6.3%（26.7%）
	鍋	7（8）	0.3%（0.2%）
	その他	0（18）	0.0%（0.4%）
	小計	248（2,091）	11.9%（48.0%）
食器総計		2,078（4,352）	

Ⅺ層 SB3050（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀		
	その他		
黒色土器A	椀		
黒色土器B	椀		
須恵器	無台杯		
	有台杯	0（1）	0.0%（6.3%）
	杯蓋	21（2）	67.7%（12.5%）
	折縁杯		
	その他		
	小計	21（3）	67.7%（18.8%）
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶		
	小計		
煮炊具			
土師器	甕	4（3）	12.9%（18.8%）
	小甕	6（10）	19.4%（62.5%）
	鍋		
	その他		
	小計	10（13）	32.3%（81.3%）
食器総計		31（16）	

Ⅺ層 SB3100（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	18（14）	36.0%（10.7%）
	その他		
黒色土器A	椀		
黒色土器B	椀		
須恵器	無台杯	2（5）	4.0%（3.8%）
	有台杯	5（3）	10.0%（2.3%）
	杯蓋	9（4）	18.0%（3.1%）
	折縁杯		
	その他	2（1）	4.0%（0.8%）
	小計	36（27）	72.0%（20.6%）
貯蔵具			
須恵器	甕	0（1）	0.0%（0.8%）
	瓶	0（1）	0.0%（0.8%）
	小計	0（2）	0.0%（1.5%）
煮炊具			
土師器	甕	6（50）	12.0%（38.2%）
	小甕	8（50）	16.0%（38.2%）
	鍋		
	その他	0（2）	0.0%（1.5%）
	小計	14（102）	28.0%（77.9%）
食器総計		50（131）	

Ⅺ層 SB3200（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	89（161）	28.4%（29.2%）
	その他		
黒色土器A	椀	0（1）	0.0%（0.2%）
黒色土器B	椀	1（2）	0.3%（0.4%）
須恵器	無台杯	89（85）	28.4%（15.4%）
	有台杯	33（19）	10.5%（3.4%）
	杯蓋	5（3）	1.6%（0.5%）
	折縁杯	22（7）	7.0%（1.3%）
	その他	40（16）	12.8%（2.9%）
	小計	279（294）	89.1%（53.4%）
貯蔵具			
須恵器	甕	2（6）	0.6%（1.1%）
	瓶	0（1）	0.0%（0.2%）
	小計	2（7）	0.6%（1.3%）
煮炊具			
土師器	甕	11（102）	3.5%（18.5%）
	小甕	21（143）	6.7%（26.0%）
	鍋		
	その他	0（5）	0.0%（0.9%）
	小計	32（250）	10.2%（45.4%）
食器総計		313（551）	

Ⅺ層 SX3030（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	23（65）	5.7%（8.2%）
	その他		
黒色土器A	椀		
黒色土器B	椀		
須恵器	無台杯	264（156）	65.0%（19.6%）
	有台杯	13（15）	3.2%（1.9%）
	杯蓋	2（4）	0.5%（0.5%）
	折縁杯		
	その他		
	小計	302（240）	74.4%（30.2%）
貯蔵具			
須恵器	甕	0（6）	0.0%（0.8%）
	瓶	0（29）	0.0%（3.6%）
	小計	0（35）	0.0%（4.4%）
煮炊具			
土師器	甕	68（258）	16.7%（32.4%）
	小甕	36（262）	8.9%（32.9%）
	鍋		
	その他	0（1）	0.0%（0.1%）
	小計	104（521）	25.6%（65.5%）
食器総計		406（796）	

Ⅺ層 SX3201（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	76（67）	43.9%（33.8%）
	その他		
黒色土器A	椀		
黒色土器B	椀	0（8）	0.0%（2.0%）
須恵器	無台杯	54（31）	31.2%（15.7%）
	有台杯		
	杯蓋	2（1）	1.2%（0.5%）
	折縁杯		
	その他	2（1）	1.2%（0.5%）
	小計	134（104）	77.5%（52.5%）
貯蔵具			
須恵器	甕	0（2）	0.0%（1.0%）
	瓶		
	小計	0（2）	0.0%（1.0%）
煮炊具			
土師器	甕	18（59）	10.4%（29.8%）
	小甕	14（30）	8.1%（15.2%）
	鍋	7（3）	4.0%（1.5%）
	その他		
	小計	39（92）	22.5%（46.5%）
食器総計		173（198）	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（2）

Ⅷ層出土遺物（Ⅷ層包含層＋Ⅷ層遺構）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	149,783 （ 298,419）	94.1％ （ 91.0％）
	有台椀	161 （ 549）	0.1％ （ 0.2％）
	その他	61 （ 79）	＊ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	5,333 （ 7,462）	3.3％ （ 2.3％）
	皿	150 （ 36）	0.1％ （ ＊ ）
	その他	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
黒色土器Ｂ	椀	410 （ 626）	0.3％ （ 0.2％）
	皿	12 （ 7）	＊ （ ＊ ）
	その他	8 （ 3）	＊ （ ＊ ）
須恵器	無台杯	340 （ 373）	0.2％ （ 0.1％）
	有台杯	99 （ 97）	0.1％ （ ＊ ）
	杯蓋	34 （ 29）	＊ （ ＊ ）
	その他	81 （ 103）	0.1％ （ ＊ ）
灰釉陶器	椀	187 （ 136）	0.1％ （ ＊ ）
	皿	9 （ 6）	＊ （ ＊ ）
	その他	14 （ 18）	＊ （ ＊ ）
緑釉陶器	椀	50 （ 38）	＊ （ ＊ ）
	杯	9 （ 3）	＊ （ ＊ ）
	その他	0 （ 1）	＊ （ ＊ ）
白磁	皿	1 （ 1）	＊ （ ＊ ）
	小計	156,717 （ 307,990）	98.4％ （ 94％）
貯蔵具			
須恵器	甕	185 （ 2,133）	0.1％ （ 0.7％）
	瓶	258 （ 497）	0.2％ （ 0.2％）
	横瓶	0 （ 40）	0.0％ （ ＊ ）
	その他	67 （ 96）	＊ （ ＊ ）
灰釉陶器	瓶	1 （ 2）	＊ （ ＊ ）
	小計	511 （ 2,768）	0.3％ （ 0.8％）
煮炊具			
土師器	甕	799 （ 5,012）	0.5％ （ 1.5％）
	小甕	897 （ 5,922）	0.6％ （ 1.8％）
	鍋	209 （ 651）	0.1％ （ 0.2％）
	製塩土器	2 （ 5,302）	＊ （ 1.6％）
	その他	60 （ 200）	＊ （ 0.1％）
	小計	1,967 （ 17,087）	1.2％ （ 5.2％）
食器総計		159,195 （ 327,845）	

Ⅷ層 調査区南側（Ⅷ層包含層＋Ⅷ層遺構、10A ～ 10E 以南）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	134,873 （ 253,077）	94.5％ （ 91.7％）
	有台椀	159 （ 486）	0.1％ （ 0.2％）
	その他	50 （ 73）	＊ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	4,673 （ 6,249）	3.3％ （ 2.3％）
	皿	150 （ 36）	0.1％ （ ＊ ）
	その他	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
黒色土器Ｂ	椀	364 （ 558）	0.3％ （ 0.2％）
	皿	12 （ 7）	＊ （ ＊ ）
	その他	8 （ 3）	＊ （ ＊ ）
須恵器	無台杯	293 （ 331）	0.2％ （ 0.1％）
	有台杯	83 （ 85）	0.1％ （ ＊ ）
	杯蓋	34 （ 25）	＊ （ ＊ ）
	その他	64 （ 54）	＊ （ ＊ ）
灰釉陶器	椀	149 （ 110）	0.1％ （ ＊ ）
	皿	9 （ 4）	＊ （ ＊ ）
	その他	8 （ 14）	＊ （ ＊ ）
緑釉陶器	椀	50 （ 38）	＊ （ ＊ ）
	杯	9 （ 3）	＊ （ ＊ ）
	その他	0 （ 1）	＊ （ ＊ ）
白磁	皿	1 （ 1）	＊ （ ＊ ）
	小計	140,953 （ 261,147）	98.8％ （ 94.6％）
貯蔵具			
須恵器	甕	179 （ 1,727）	0.1％ （ 0.6％）
	瓶	228 （ 423）	0.2％ （ 0.2％）
	横瓶	0 （ 40）	0.0％ （ ＊ ）
	その他	67 （ 96）	＊ （ ＊ ）
灰釉陶器	瓶	1 （ 2）	＊ （ ＊ ）
	小計	475 （ 2,288）	0.3％ （ 0.8％）
煮炊具			
土師器	甕	497 （ 3,020）	0.3％ （ 1.1％）
	小甕	537 （ 3,751）	0.4％ （ 1.4％）
	鍋	150 （ 359）	0.1％ （ 0.1％）
	製塩土器	2 （ 5,298）	＊ （ 1.9％）
	その他	60 （ 185）	＊ （ 0.1％）
	小計	1,246 （ 12,613）	0.9％ （ 4.6％）
食器総計		142,674 （ 276,048）	

Ⅷ層 調査区北側（Ⅷ層包含層＋Ⅷ層遺構、11A ～ 11E 以北）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	14,910 （ 45,342）	92.0％ （ 87.5％）
	有台椀	2 （ 63）	＊ （ 0.1％）
	その他	11 （ 6）	0.1％ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	390 （ 1,213）	2.4％ （ 2.3％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	46 （ 68）	0.3％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	47 （ 42）	0.3％ （ 0.1％）
	有台杯	16 （ 12）	0.1％ （ ＊ ）
	杯蓋	0 （ 4）	0.0％ （ ＊ ）
	その他	17 （ 49）	0.1％ （ 0.1％）
灰釉陶器	椀	7 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
	皿	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	15,446 （ 46,802）	95.3％ （ 90.3％）
貯蔵具			
須恵器	甕	6 （ 406）	0.0％ （ 0.8％）
	瓶	30 （ 74）	0.2％ （ 0.1％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	36 （ 480）	0.2％ （ 0.9％）
煮炊具			
土師器	甕	302 （ 2,082）	1.9％ （ 4.0％）
	小甕	360 （ 2,171）	2.2％ （ 4.2％）
	鍋	59 （ 292）	0.4％ （ 0.6％）
	製塩土器	0 （ 4）	0.0％ （ ＊ ）
	その他	0 （ 15）	0.0％ （ ＊ ）
	小計	721 （ 4,564）	4.4％ （ 8.8％）
食器総計		16,203 （ 51,846）	

Ⅷ層 SB1400（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	12,663 （ 20,556）	95.7％ （ 93.6％）
	有台椀	20 （ 36）	0.2％ （ 0.2％）
	その他	16 （ 9）	0.1％ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	333 （ 495）	2.5％ （ 2.3％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	38 （ 42）	0.3％ （ 0.2％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	20 （ 18）	0.2％ （ 0.1％）
	有台杯	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
	杯蓋	2 （ 1）	＊％ （ ＊ ）
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
灰釉陶器	椀	16 （ 19）	0.1％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
白磁	皿		
	小計	13,108 （ 21,165）	99.1％ （ 96.4％）
貯蔵具			
須恵器	甕	9 （ 61）	0.1％ （ 0.3％）
	瓶	15 （ 30）	0.1％ （ 0.1％）
	横瓶		
	その他	12 （ 13）	0.1％ （ 0.1％）
灰釉陶器	瓶		
	小計	36 （ 104）	0.3％ （ 0.5％）
煮炊具			
土師器	甕	26 （ 139）	0.2％ （ 0.6％）
	小甕	41 （ 497）	0.3％ （ 2.3％）
	鍋	16 （ 32）	0.1％ （ 0.1％）
	製塩土器	0 （ 15）	0.0％ （ 0.1％）
	その他	2 （ 8）	＊ （ ＊ ）
	小計	85 （ 691）	0.6％ （ 3.1％）
食器総計		13,229 （ 21,960）	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（3）

Ⅷ層 SD1077（SB1400 区画溝）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比	率
食膳具				
土師器	無台椀	5,248 （ 6,693）	96.1％ （ 94.8％）	
	有台椀	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）	
	その他			
黒色土器Ａ	椀	153 （ 239）	2.8％ （ 3.4％）	
	皿			
	その他			
黒色土器Ｂ	椀	19 （ 21）	0.3％ （ 0.3％）	
	皿			
	その他			
須恵器	無台杯	8 （ 5）	0.1％ （ 0.1％）	
	有台杯	0 （ 1）	0.0％ （ 0.0％）	
	杯蓋			
	その他			
灰釉陶器	椀	13 （ 17）	0.2％ （ 0.2％）	
	皿			
	その他			
緑釉陶器	椀			
	杯			
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）	
白磁	皿			
	小計	5,441 （ 6,979）	99.7％ （ 98.8％）	
貯蔵具				
須恵器	甕	0 （ 20）	0.0％ （ 0.3％）	
	瓶	2 （ 3）	＊ （ ＊ ）	
	横瓶			
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）	
灰釉陶器	瓶			
	小計	2 （ 24）	0.0％ （ 0.3％）	
煮炊具				
土師器	甕	0 （ 24）	0.0％ （ 0.3％）	
	小甕	17 （ 32）	0.3％ （ 0.5％）	
	鍋			
	製塩土器	0 （ 3）	0.0％ （ ＊ ）	
	その他			
	小計	17 （ 59）	0.3％ （ 0.8％）	
食器総計		5,460 （ 7,062）		

Ⅷ層 SK1141（SB1400 内土器廃棄土坑）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比	率
食膳具				
土師器	無台椀	1664 （ 1253）	95.5％ （ 91.8％）	
	有台椀	0 （ 2）	0.0％ （ 0.1％）	
	その他			
黒色土器Ａ	椀	45 （ 38）	2.6％ （ 2.8％）	
	皿			
	その他			
黒色土器Ｂ	椀			
	皿			
	その他			
須恵器	無台杯	5 （ 5）	0.3％ （ 0.4％）	
	有台杯			
	杯蓋			
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）	
灰釉陶器	椀	2 （ 1）	0.1％ （ 0.1％）	
	皿			
	その他			
緑釉陶器	椀			
	杯			
	その他			
白磁	皿			
	小計	1,716 （ 1,300）	98.5％ （ 95.2％）	
貯蔵具				
須恵器	甕			
	瓶			
	横瓶			
	その他			
灰釉陶器	瓶			
	小計			
煮炊具				
土師器	甕	8 （ 25）	0.5％ （ 1.8％）	
	小甕	7 （ 23）	0.4％ （ 1.7％）	
	鍋	11 （ 17）	0.6％ （ 1.2％）	
	製塩土器			
	その他			
	小計	26 （ 65）	1.5％ （ 4.8％）	
食器総計		1,742 （ 1,365）		

Ⅷ層 SB1500（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比	率
食膳具				
土師器	無台椀	76,356 （ 116,134）	94.5％ （ 91.2％）	
	有台椀	119 （ 274）	0.1％ （ 0.2％）	
	その他	9 （ 16）	＊ （ ＊ ）	
黒色土器Ａ	椀	2,923 （ 3,211）	3.6％ （ 2.5％）	
	皿	131 3,180	0.2％ （ 2.5％）	
	その他			
黒色土器Ｂ	椀	253 （ 363）	0.3％ （ 0.3％）	
	皿	4 （ 1）	＊ （ ＊ ）	
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）	
須恵器	無台杯	110 （ 115）	0.1％ （ 0.1％）	
	有台杯	16 （ 28）	＊ （ ＊ ）	
	杯蓋	19 （ 15）	＊ （ ＊ ）	
	その他	26 （ 18）	＊ （ ＊ ）	
灰釉陶器	椀	125 （ 75）	0.2％ （ 0.1％）	
	皿	9 （ 4）	＊ （ ＊ ）	
	その他	8 （ 14）	＊ （ ＊ ）	
緑釉陶器	椀	16 （ 20）	＊ （ ＊ ）	
	杯	3 （ 6）	＊ （ ＊ ）	
	その他	1 （ 2）	＊ （ ＊ ）	
白磁	皿	1 （ 1）	＊ （ ＊ ）	
	小計	80,129 （ 123,478）	99.2％ （ 97.0％）	
貯蔵具				
須恵器	甕	106 （ 878）	0.1％ （ 0.7％）	
	瓶	75 （ 185）	0.1％ （ 0.1％）	
	横瓶	0 （ 40）	＊ （ ＊ ）	
	その他	32 （ 38）	＊ （ ＊ ）	
灰釉陶器	瓶	1 （ 2）	＊ （ ＊ ）	
	小計	214 （ 1,143）	0.3％ （ 0.9％）	
煮炊具				
土師器	甕	147 （ 964）	0.2％ （ 0.8％）	
	小甕	208 （ 1,300）	0.3％ （ 1.0％）	
	鍋	44 （ 137）	0.1％ （ 0.1％）	
	製塩土器	1 （ 212）	＊ （ 0.2％）	
	その他	33 （ 96）	＊ （ 0.1％）	
	小計	433 （ 2,709）	0.5％ （ 2.1％）	
食器総計		80,776 （ 127,330）		

Ⅷ層 SD1377（SB1500 区画溝）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比	率
食膳具				
土師器	無台椀	15,073 （ 19,416）	93.8％ （ 93.4％）	
	有台椀	59 （ 33）	0.4％ （ 0.2％）	
	その他	2 （ 1）	＊ （ ＊ ）	
黒色土器Ａ	椀	666 （ 617）	4.1％ （ 3.0％）	
	皿	29 （ 9）	0.2％ （ ＊ ）	
	その他			
黒色土器Ｂ	椀	13 （ 4）	0.1％ （ ＊ ）	
	皿	4 （ 1）	＊ （ ＊ ）	
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）	
須恵器	無台杯	34 （ 38）	0.2％ （ 0.2％）	
	有台杯	1 （ 4）	＊ （ ＊ ）	
	杯蓋	13 （ 11）	0.1％ （ 0.1％）	
	その他	1 （ 1）	＊ （ ＊ ）	
灰釉陶器	椀	53 （ 37）	0.3％ （ 0.2％）	
	皿			
	その他	1 （ 3）	＊ （ ＊ ）	
緑釉陶器	椀			
	杯			
	その他	1 （ 1）	＊ （ ＊ ）	
白磁	皿			
	小計	15,950 （ 20,177）	99.2％ （ 97.0％）	
貯蔵具				
須恵器	甕	17 （ 156）	0.1％ （ 0.8％）	
	瓶	5 （ 64）	＊ （ 0.3％）	
	横瓶	0 （ 35）	0.0％ （ 0.2％）	
	その他			
灰釉陶器	瓶			
	小計	22 （ 255）	0.1％ （ 1.2％）	
煮炊具				
土師器	甕	18 （ 94）	0.1％ （ 0.5％）	
	小甕	57 （ 213）	0.4％ （ 1.0％）	
	鍋	5 （ 21）	＊ （ 0.1％）	
	製塩土器	0 （ 9）	0.0％ （ ＊ ）	
	その他	20 （ 25）	0.1％ （ 0.1％）	
	小計	100 （ 362）	0.6％ （ 1.7％）	
食器総計		16,072 （ 20,794）		

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（4）

Ⅷ層 SK1419(SB1500 内土器廃棄土坑)

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	10,896 （ 6,657）	94.1％ （ 93.5％）
	有台椀	7 （ 11）	0.1％ （ 0.2％）
	その他		
黒色土器Ａ	椀	453 （ 231）	3.9％ （ 3.2％）
	皿	50 （ 10）	0.4％ （ 0.1％）
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	108 （ 120）	0.9％ （ 1.7％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀	33 （ 4）	0.3％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	11,547 （ 7,035）	99.7％ （ 98.8％）
貯蔵具			
須恵器	甕	2 （ 2）	＊ （ ＊ ）
	瓶	0 （ 26）	0.0％ （ 0.4％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	2 （ 28）	0.0％ （ 0.4％）
煮炊具			
土師器	甕	7 （ 8）	0.1％ （ 0.1％）
	小甕	19 （ 45）	0.2％ （ 0.6％）
	鍋	0 （ 4）	0.0％ （ 0.1％）
	製塩土器	1 （ 1）	＊ （ ＊ ）
	その他	2 （ 2）	＊ （ ＊ ）
	小計	29 （ 60）	0.3％ （ 0.8％）
食器総計		11,578 （ 7,123）	

Ⅷ層 SB1683(SB1683 内遺構、直上包含層)

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	1,848 （ 2,384）	92.6％ （ 78.1％）
	有台椀	0 （ 7）	0.0％ （ 0.2％）
	その他		
黒色土器Ａ	椀	44 （ 84）	2.2％ （ 2.8％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	12 （ 7）	0.6％ （ 0.2％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	3 （ 8）	0.2％ （ 0.3％）
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	1,907 （ 2,490）	95.5％ （ 81.6％）
貯蔵具			
須恵器	甕	22 （ 313）	1.1％ （ 10.3％）
	瓶	0 （ 4）	0.0％ （ 0.1％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	22 （ 317）	1.1％ （ 10.4％）
煮炊具			
土師器	甕	44 （ 97）	2.2％ （ 3.2％）
	小甕	10 （ 126）	0.5％ （ 4.1％）
	鍋	9 （ 16）	0.5％ （ 0.5％）
	製塩土器		
	その他	4 （ 7）	0.2％ （ 0.2％）
	小計	67 （ 246）	3.4％ （ 8.1％）
食器総計		1,996 （ 3,053）	

Ⅷ層 SB2020(区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む)

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	3,332 （ 13,059）	90.7％ （ 88.8％）
	有台椀	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
	その他	3 （ 2）	0.1％ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	57 （ 202）	1.6％ （ 1.4％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	4 （ 19）	0.1％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	38 （ 24）	1.0％ （ 0.2％）
	有台杯	7 （ 3）	0.2％ （ ＊ ）
	杯蓋		
	その他	30 （ 91）	0.8％ （ 0.6％）
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	3,471 （ 13,402）	94.4％ （ 91.2％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 65）	0.0％ （ 0.4％）
	瓶	10 （ 24）	0.3％ （ 0.2％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	10 （ 89）	0.3％ （ 0.6％）
煮炊具			
土師器	甕	82 （ 552）	2.2％ （ 3.8％）
	小甕	87 （ 504）	2.4％ （ 3.4％）
	鍋	25 （ 148）	0.7％ （ 1.0％）
	製塩土器	0 （ 3）	0.0％ （ ＊ ）
	その他	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
	小計	194 （ 1,209）	5.3％ （ 8.2％）
食器総計		3,675 （ 14,700）	

Ⅷ層 SD2150(SB2020 区画溝)

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	23 （ 255）	53.5％ （ 88.5％）
	有台椀		
	その他		
黒色土器Ａ	椀		
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	10 （ 6）	23.3％ （ 2.1％）
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	33 （ 261）	76.7％ （ 90.6％）
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計		
煮炊具			
土師器	甕	4 （ 14）	9.3％ （ 4.9％）
	小甕	3 （ 7）	7.0％ （ 2.4％）
	鍋	3 （ 6）	7.0％ （ 2.1％）
	製塩土器		
	その他		
	小計	10 （ 27）	23.3％ （ 9.4％）
食器総計		43 （ 288）	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（5）

Ⅷ層 SB2100（区画溝、区画溝内の遺構、直上包含層を含む）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	375 （ 932）	83.9％ （ 81.8％）
	有台椀		
	その他		
黒色土器Ａ	椀	62 （ 79）	13.9％ （ 6.9％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	1 （ 1）	0.2％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	438 （ 1,013）	98.0％ （ 88.9％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 5）	0.0％ （ 0.4％）
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 （ 5）	0.0％ （ 0.4％）
煮炊具			
土師器	甕	0 （ 21）	0.0％ （ 1.8％）
	小甕	9 （ 95）	2.0％ （ 8.3％）
	鍋	0 （ 2）	0.0％ （ 0.2％）
	製塩土器		
	その他	0 （ 3）	0.0％ （ 0.3％）
	小計	9 （ 121）	2.0％ （ 10.6％）
食器総計		447 （ 1,139）	

Ⅷ層 SD2029（SB2100 区画溝）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	197 （ 320）	91.2％ （ 81.6％）
	有台椀		
	その他		
黒色土器Ａ	椀	19 （ 28）	8.8％ （ 7.1％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	216 （ 348）	100.0％ （ 88.8％）
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計		
煮炊具			
土師器	甕		
	小甕	0 （ 44）	0.0％ （ 11.2％）
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	0 （ 44）	0.0％ （ 11.2％）
食器総計		216 （ 392）	

Ⅷ層 SB2200（SB2200 内遺構、直上包含層）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	1,598 （ 6,127）	91.9％ （ 94.2％）
	有台椀	0 （ 8）	0.0％ （ 0.1％）
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	80 （ 144）	4.6％ （ 2.2％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	5 （ 11）	0.3％ （ 0.2％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	1 （ 7）	0.1％ （ 0.1％）
	有台杯	5 （ 3）	0.3％ （ ＊ ）
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀	7 （ 4）	0.4％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	1,697 （ 6,306）	97.6％ （ 96.9％）
貯蔵具			
須恵器	甕	8 （ 16）	0.5％ （ 0.2％）
	瓶	12 （ 12）	0.7％ （ 0.2％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	20 （ 28）	1.2％ （ 0.4％）
煮炊具			
土師器	甕	13 （ 39）	0.7％ （ 0.6％）
	小甕	5 （ 121）	0.3％ （ 1.9％）
	鍋	4 （ 8）	0.2％ （ 0.1％）
	製塩土器		
	その他	0 （ 4）	0.0％ （ 0.1％）
	小計	22 （ 172）	1.3％ （ 2.6％）
食器総計		1,739 （ 6,506）	

Ⅷ層 SD2040（SD2040 内遺構、直上包含層）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	1,629 （ 4,785）	85.7％ （ 84.3％）
	有台椀	0 （ 9）	0.0％ （ 0.2％）
	その他	8 （ 1）	0.4％ （ ＊ ）
黒色土器Ａ	椀	148 （ 225）	7.8％ （ 4.0％）
	皿		
	その他		
黒色土器Ｂ	椀	5 （ 8）	0.3％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	3 （ 6）	0.2％ （ 0.1％）
	有台杯		
	杯蓋	0 （ 3）	0.0％ （ 0.1％）
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	1,793 （ 5,037）	94.4％ （ 88.8％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 15）	0.0％ （ 0.3％）
	瓶	2 （ 2）	0.1％ （ 0.0％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	2 （ 17）	0.1％ （ 0.3％）
煮炊具			
土師器	甕	45 （ 293）	2.4％ （ 5.2％）
	小甕	49 （ 293）	2.6％ （ 5.2％）
	鍋	11 （ 35）	0.6％ （ 0.6％）
	製塩土器		
	その他		
	小計	105 （ 621）	5.5％ （ 10.9％）
食器総計		1,900 （ 5,675）	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（6）

Ⅷ層 SD2064（SD2064内遺構、直上包含層）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	1,654 （ 3,767）	88.3％ （ 83.6％）
	有台椀	0 （ 7）	0.0％ （ 0.2％）
	その他	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
黒色土器A	椀	99 （ 104）	5.3％ （ 2.3％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	18 （ 14）	1.0％ （ 0.3％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	21 （ 15）	1.1％ （ 0.3％）
	有台杯	6 （ 6）	0.3％ （ 0.1％）
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	1,798 （ 3,915）	95.9％ （ 86.9％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 59）	0.0％ （ 1.3％）
	瓶	0 （ 14）	0.0％ （ 0.3％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 （ 73）	0.0％ （ 1.6％）
煮炊具			
土師器	甕	41 （ 297）	2.2％ （ 6.6％）
	小甕	35 （ 221）	1.9％ （ 4.9％）
	鍋		
	製塩土器		
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ ＊ ）
	小計	76 （ 519）	4.1％ （ 11.5％）
食器総計		1,874 （ 4,507）	

Ⅷ層 SD2008（SD2008内遺構、直上包含層）

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	3,002 （ 11,128）	89.8％ （ 88.4％）
	有台椀	2 （ 23）	0.1％ （ 0.2％）
	その他		
黒色土器A	椀	107 （ 257）	3.2％ （ 2.0％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	5 （ 11）	0.1％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	3 （ 1）	0.1％ （ ＊ ）
	有台杯	7 （ 3）	0.2％ （ ＊ ）
	杯蓋	0 （ 2）	0.0％ （ ＊ ）
	その他		
灰釉陶器	椀	7 （ 1）	0.2％ （ ＊ ）
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	3,133 （ 11,426）	93.7％ （ 90.8％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 43）	0.0％ （ 0.3％）
	瓶	0 （ 16）	0.0％ （ 0.1％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 （ 59）	0.0％ （ 0.5％）
煮炊具			
土師器	甕	74 （ 536）	2.2％ （ 4.3％）
	小甕	105 （ 409）	3.1％ （ 3.2％）
	鍋	30 （ 153）	0.9％ （ 1.2％）
	製塩土器		
	その他	0 （ 5）	0.0％ （ ＊ ）
	小計	209 （ 1,103）	6.3％ （ 8.8％）
食器総計		3,342 （ 12,588）	

Ⅷ層 SD1103

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	524 （ 1,212）	89.3％ （ 88.7％）
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	0 （ 2）	0.0％ （ 0.1％）
	皿	6 （ 1）	1.0％ （ 0.1％）
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	13 （ 9）	2.2％ （ 0.7％）
	有台杯	4 （ 5）	0.7％ （ 0.4％）
	杯蓋		
	その他	2 （ 3）	0.3％ （ 0.2％）
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	549 （ 1,232）	93.5％ （ 90.2％）
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計		
煮炊具			
土師器	甕		
	小甕	3 （ 14）	0.5％ （ 1.0％）
	鍋	35 （ 52）	6.0％ （ 3.8％）
	製塩土器	0 （ 68）	0.0％ （ 5.0％）
	その他		
	小計	38 （ 134）	6.5％ （ 9.8％）
食器総計		587 （ 1,366）	

Ⅷ層 SD1147

器	種	口縁部計測値（破片数）	比率
食膳具			
土師器	無台椀	359 （ 329）	88.4％ （ 90.1％）
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	35 （ 13）	8.6％ （ 3.6％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	0 （ 2）	0.0％ （ 0.5％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	10 （ 7）	2.5％ （ 1.9％）
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	404 （ 351）	99.5％ （ 96.2％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 2）	0.0％ （ 0.5％）
	瓶	0 （ 2）	0.0％ （ 0.5％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 （ 4）	0.0％ （ 1.1％）
煮炊具			
土師器	甕	2 （ 6）	0.5％ （ 1.6％）
	小甕	0 （ 4）	0.0％ （ 1.1％）
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	2 （ 10）	0.5％ （ 2.7％）
食器総計		406 （ 365）	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（7）

Ⅷ層 SD1147

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	124 (446)	89.9% (84.2%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	6 (11)	4.3% (2.1%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	0 (1)	0.0% (0.2%)
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	130 (458)	94.2% (86.4%)
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計		
煮炊具			
土師器	甕	4 (32)	2.9% (6.0%)
	小甕	4 (40)	2.9% (7.5%)
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	8 (72)	5.8% (13.6%)
食器総計		138 (530)	

Ⅷ層 SD2060

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	526 (319)	91.2% (79.0%)
	有台椀	0 (2)	0.0% (0.5%)
	その他		
黒色土器A	椀	40 (45)	6.9% (11.1%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	566 (366)	98.1% (90.6%)
貯蔵具			
須恵器	甕	0 (4)	0.0% (1.0%)
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 (4)	0.0% (1.0%)
煮炊具			
土師器	甕	0 (15)	0.0% (3.7%)
	小甕	11 (18)	1.9% (4.5%)
	鍋		
	製塩土器	0 (1)	0.0% (0.2%)
	その他		
	小計	11 (34)	1.9% (8.4%)
食器総計		577 (404)	

Ⅷ層 SD2116

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	259 (433)	91.5% (79.0%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	2 (14)	0.7% (2.6%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	2 (3)	0.7% (0.5%)
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	0 (1)	0.0% (0.2%)
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	263 (451)	92.9% (82.3%)
貯蔵具			
須恵器	甕	0 (34)	0.0% (6.2%)
	瓶	0 (5)	0.0% (0.9%)
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 (39)	0.0% (7.1%)
煮炊具			
土師器	甕	0 (15)	0.0% (2.7%)
	小甕	20 (43)	7.1% (7.8%)
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	20 (58)	7.1% (10.6%)
食器総計		283 (548)	

Ⅷ層 SW1119

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	235 (304)	98.7% (5.9%)
	有台椀	0 (3)	0.0% (0.1%)
	その他		
黒色土器A	椀	0 (3)	0.0% (0.1%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	2 (1)	0.8% (*)
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	237 (311)	99.6% (6.1%)
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶	0 (8)	0.0% (0.2%)
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 (8)	0.0% (0.2%)
煮炊具			
土師器	甕		
	小甕	0 (5)	0.0% (0.1%)
	鍋		
	製塩土器	1 (4,803)	0.4% (93.7%)
	その他	0 (1)	0.0% (*)
	小計	1 (4,809)	0.4% (93.8%)
食器総計		238 (5,128)	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（8）

Ⅷ層 SE1226

器	種	口縁部計測値(破片数)	比　率
食膳具			
土師器	無台椀	847 （ 1,256）	95.0％ （ 94.4％）
	有台椀	0 （ 4）	0.0％ （ 0.3％）
	その他		
黒色土器A	椀	13 （ 34）	1.5％ （ 2.6％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他	2 （ 3）	0.2％ （ 0.2％）
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	862 （ 1,297）	96.6％ （ 97.5％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
	瓶	11 （ 6）	1.2％ （ 0.5％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	11 （ 7）	1.2％ （ 0.5％）
煮炊具			
土師器	甕	16 （ 18）	1.8％ （ 1.4％）
	小甕	3 （ 7）	0.3％ （ 0.5％）
	鍋		
	製塩土器		
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
	小計	19 （ 26）	2.1％ （ 2.0％）
食器総計		892 （ 1,330）	

Ⅷ層 SK1120

器	種	口縁部計測値(破片数)	比　率
食膳具			
土師器	無台椀	561 （ 530）	98.2％ （ 88.5％）
	有台椀	0 （ 3）	0.0％ （ 0.5％）
	その他		
黒色土器A	椀	10 （ 6）	1.8％ （ 1.0％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	571 （ 539）	100.0％ （ 90.0％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 2）	0.0％ （ 0.3％）
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 （ 2）	0.0％ （ 0.3％）
煮炊具			
土師器	甕		
	小甕	0 （ 1）	0.0％ （ 0.2％）
	鍋		
	製塩土器	0 （ 57）	0.0％ （ 9.5％）
	その他		
	小計	0 （ 58）	0.0％ （ 9.7％）
食器総計		571 （ 599）	

Ⅷ層 SK1159

器	種	口縁部計測値(破片数)	比　率
食膳具			
土師器	無台椀	1,011 （ 1,953）	98.1％ （ 97.8％）
	有台椀	0 （ 3）	0.0％ （ 0.2％）
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
黒色土器A	椀	10 （ 26）	1.0％ （ 1.3％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	6 （ 3）	0.6％ （ 0.2％）
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	1,027 （ 1,988）	99.6％ （ 99.5％）
貯蔵具			
須恵器	甕	2 （ 1）	0.2％ （ 0.1％）
	瓶	1 （ 2）	0.1％ （ 0.1％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	3 （ 3）	0.3％ （ 0.2％）
煮炊具			
土師器	甕	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
	小甕	0 （ 2）	0.0％ （ 0.1％）
	鍋	1 （ 3）	0.1％ （ 0.2％）
	製塩土器		
	その他		
	小計	1 （ 6）	0.1％ （ 0.3％）
食器総計		1,031 （ 1,997）	

Ⅷ層 SK1354

器	種	口縁部計測値(破片数)	比　率
食膳具			
土師器	無台椀	447 （ 741）	97.4％ （ 96.1％）
	有台椀	3 （ 1）	0.7％ （ 0.1％）
	その他		
黒色土器A	椀	7 （ 15）	1.5％ （ 1.9％）
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	1 （ 1）	0.2％ （ 0.1％）
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	458 （ 758）	99.8％ （ 98.3％）
貯蔵具			
須恵器	甕	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
	瓶	0 （ 1）	0.0％ （ 0.1％）
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 （ 2）	0.0％ （ 0.3％）
煮炊具			
土師器	甕	0 （ 6）	0.0％ （ 0.8％）
	小甕	1 （ 5）	0.2％ （ 0.6％）
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	1 （ 11）	0.2％ （ 1.4％）
食器総計		459 （ 771）	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（9）

Ⅷ層 SK1357

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	744 (1,583)	96.6% (97.6%)
	有台椀	0 (1)	0.0% (0.1%)
	その他		
黒色土器A	椀	10 (12)	1.3% (0.7%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	3 (2)	0.4% (0.1%)
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀	0 (5)	0.0% (0.3%)
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	757 (1,603)	98.3% (98.8%)
貯蔵具			
須恵器	甕	5 (3)	0.6% (0.2%)
	瓶	6 (1)	0.8% (0.1%)
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	11 (4)	1.4% (0.2%)
煮炊具			
土師器	甕	0 (6)	0.0% (0.4%)
	小甕	2 (8)	0.3% (0.5%)
	鍋		
	製塩土器		
	その他	0 (1)	0.0% (0.1%)
	小計	2 (15)	0.3% (0.9%)
食器総計		770 (1,622)	

Ⅷ層 SK1531

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	483 (762)	97.2% (94.4%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	6 (15)	1.2% (1.9%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	489 (777)	98.4% (96.3%)
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶	0 (2)	0.0% (0.2%)
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 (2)	0.0% (0.2%)
煮炊具			
土師器	甕	2 (11)	0.4% (1.4%)
	小甕	6 (17)	1.2% (2.1%)
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	8 (28)	1.6% (3.5%)
食器総計		497 (807)	

Ⅷ層 SK1590

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	458 (467)	92.0% (78.5%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	34 (21)	6.8% (3.5%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	2 (2)	0.4% (0.3%)
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	494 (490)	99.2% (82.4%)
貯蔵具			
須恵器	甕	4 (22)	0.8% (3.7%)
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	4 (22)	0.8% (3.7%)
煮炊具			
土師器	甕	0 (2)	0.0% (0.3%)
	小甕	0 (6)	0.0% (1.0%)
	鍋		
	製塩土器	0 (75)	0.0% (12.6%)
	その他		
	小計	0 (83)	0.0% (13.9%)
食器総計		498 (595)	

Ⅷ層 SK2046

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	68 (289)	81.0% (80.7%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀		
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	68 (289)	81.0% (80.7%)
貯蔵具			
須恵器	甕	0 (14)	0.0% (3.9%)
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	0 (14)	0.0% (3.9%)
煮炊具			
土師器	甕	16 (48)	19.0% (13.4%)
	小甕	0 (7)	0.0% (2.0%)
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	16 (55)	19.0% (15.4%)
食器総計		84 (358)	

別表３　主要遺構出土土器器種構成比率（10）

Ⅷ層 SX1104

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	1,739 (3,491)	89.6% (91.8%)
	有台椀	0 (2)	0.0% (0.1%)
	その他		
黒色土器A	椀	104 (160)	5.4% (4.2%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀	1 (2)	0.1% (0.1%)
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯	27 (26)	1.4% (0.7%)
	有台杯	51 (41)	2.6% (1.1%)
	杯蓋	0 (1)	0.0% (0.0%)
	その他		
灰釉陶器	椀	2 (2)	0.1% (0.1%)
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他	9 (4)	0.5% (0.1%)
白磁	皿		
	小計	1,933 (3,729)	99.6% (98.1%)
貯蔵具			
須恵器	甕	2 (9)	0.1% (0.2%)
	瓶	0 (1)	0.0% (0.0%)
	横瓶		
	その他	0 (16)	0.0% (0.4%)
灰釉陶器	瓶		
	小計	2 (26)	0.1% (0.7%)
煮炊具			
土師器	甕	0 (7)	0.0% (0.2%)
	小甕	4 (38)	0.2% (1.0%)
	鍋	2 (3)	0.1% (0.1%)
	製塩土器		
	その他		
	小計	6 (48)	0.3% (1.3%)
食器総計		1,941 (3,803)	

Ⅷ層 SX2001

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	922 (1,094)	97.6% (89.2%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	19 (40)	2.0% (3.3%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	941 (1,134)	99.6% (92.5%)
貯蔵具			
須恵器	甕		
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計		
煮炊具			
土師器	甕		
	小甕	4 (92)	0.4% (7.5%)
	鍋		
	製塩土器		
	その他		
	小計	4 (92)	0.4% (7.5%)
食器総計		945 (1,226)	

Ⅷ層 SX2001-SE3

器	種	口縁部計測値(破片数)	比率
食膳具			
土師器	無台椀	47 (66)	75.8% (28.3%)
	有台椀		
	その他		
黒色土器A	椀	0 (1)	0.0% (0.4%)
	皿		
	その他		
黒色土器B	椀		
	皿		
	その他		
須恵器	無台杯		
	有台杯		
	杯蓋		
	その他		
灰釉陶器	椀		
	皿		
	その他		
緑釉陶器	椀		
	杯		
	その他		
白磁	皿		
	小計	47 (67)	75.8% (28.8%)
貯蔵具			
須恵器	甕	6 (147)	9.7% (63.1%)
	瓶		
	横瓶		
	その他		
灰釉陶器	瓶		
	小計	6 (147)	9.7% (63.1%)
煮炊具			
土師器	甕	0 (3)	0.0% (1.3%)
	小甕	5 (13)	8.1% (5.6%)
	鍋	4 (3)	6.5% (1.3%)
	製塩土器		
	その他		
	小計	9 (19)	14.5% (8.2%)
食器総計		62 (233)	

別表4　鉄関連遺物観察表（1）

【凡　例】
・鉄関連遺物は、整理段階で鉄関連遺物に付した構成№.（1～313）と報告書掲載遺物番号（遺物№.）を併記した。観察表は構成№.の順である。
・鉄関連遺物の用語及び分類の基準は穴澤義功氏の指導に基づいた。
・椀形鍛冶滓の大きさは、重量分類でするが、破損しているものは完形に復元した際の推定重量とした。極小は125g以下、小は250g以下、中は500g以下、大は1,000g以下、特大は1,000gよりも重いものとした。
・磁着度は鉄関連遺物整理用の「標準磁石」を高さ35㎝から木綿糸で吊り下げた状態で、資料を順次接近させることにより標準磁石が動き始める距離単位（6㎜を1単位とする）を評価台紙上で読み取り数値を表示した。
・メタル度は埋蔵文化財用特殊金属探知機（MR-50B　L型）により計測した。小さな鉄から大きな鉄の順に、H（○）、M（◎）、L（●）、特L（☆）で表示した。なお、かつて金属鉄が内包されていた資料でも、既に錆化してしまったものは、「錆化（△）」と表示した。元から金属鉄が内包されていないものは「なし」と表示した。
・備考内に記載されている上面・下面は実測図の正面・裏面とした。
・上・下面から見て、上側を上手側、下側を下手側、左側を左側部、右側と右側部とした。また、肩部は上面端部とした。

構成図№.	構成№.	遺物№.	遺物種類	出土位置	計測値（㎝）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
1	1	38	砥石または磨石	Ⅻa層 12B20区	7.5	5.0	1.0	56.7	1	な　し	厚さ7㎜程の薄手の転石を用いた砥石又は磨石。上・下面ともに砥面となっており、側部も磨かれている。特に右側部は砥面状に平坦化する。頁岩。
1	2	64	砥石	SD3029	13.0	6.5	3.7	220.0	1	な　し	軟質の石材を用いた砥石破片。下手側の端部は破面となり、残る各面にもハネのような小破面あり。横断面形は不整三角形で、3面が平坦気味となる。砥面は3面で部分的に残る。流紋岩質凝灰岩。
1	3	71	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SW3126	3.2	4.3	1.8	37.0	4	な　し	下面に灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土を残す極小の椀形鍛冶滓破片。側部3面が破面となり、右側部はもとの椀形滓の肩部を残す。上面は平坦気味で左寄りにくぼみを持つ。構成№.4と極めて類似する。
1	4	72	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SW3126	4.5	5.1	2.5	51.6	3	な　し	構成№.3と似た極小の椀形鍛冶滓の中核部から側部にかけての破片。側部4面が破面で右側の肩部は生きている。上面は左寄りが一段高く、浅い椀形の下面には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が残る。滓質はやや密度が低い。
1	5	73	椀形鍛冶滓（極小）	SK3128	4.6	4.1	2.8	51.8	3	な　し	分析資料№.1　詳細観察表参照。
1	6	153	鉄製品（鍛造品・棒状不明）	Ⅺ層 6C24区	2.6	0.7	0.3	1.1	3	錆化（△）	扁平な棒状の鉄製品破片。2片に割れており接合する。鍛造品で芯部まで錆化している。両端部は破面の可能性大。
1	7	154	鉄製品（鍛造品・釘）	Ⅺ層 7C21区	2.4	1.2	0.6	1.9	3	錆化（△）	扁平な頭部を持つ釘の頭部破片。頭部は円形で、体部は半ばで欠落して足部はなし。頭部は薄板状の平頭か。
1	8	150	砥石	Ⅺ層 6C4区	7.7	3.5	2.2	91.8	1	な　し	横断面形が不整台形をした砥石破片。側部4面が砥面で、上手側は破面となっている。下手側の側部には傾斜したもとの石材表面を残す。破面のうち上面側は自然面で、残る3面はよく使用されている。石質から見て仕上砥か。流紋岩質凝灰岩。
1	9	151	砥石	Ⅺ層 14B21区	12.2	5.8	4.0	380.0	1	な　し	下手側が欠落した幅５㎝程の砥石。上手側の端部は小さな破面となっている。左右の側部が主たる砥面で、残る上・下面も砥面として使用されているが、使用の程度はあまい。右側部の砥面には刃物傷あり。仕上砥と見られる。凝灰岩。
1	10	164	椀形鍛冶滓（中・二段・含鉄）	SB1400 -P1	11.2	7.8	5.5	386.5	4	錆化（△）	小型の椀形鍛冶滓が上下に重層した二段椀形鍛冶滓。ほぼ完形品。下段の滓は底面が2か所突出し、別単位の滓の可能性あり。上面の滓は形態が整っており、扁平となる。上下の滓とも左側部が直線状に途切れる。
1	11	163	鍛冶滓（含鉄）	SB1400 -P1	3.1	3.0	2.5	19.8	6	錆化（△）	放射割れや錆膨れの見られる鍛冶滓破片。左側部上半が乱雑な破面となっており、右側部から下面は強い椀形に突出する。含鉄部は芯部にやや広い。
1	12	167	椀形鍛冶滓（小・二段・含鉄）	SB1400 -P2	8.7	6.6	3.3	227.5	4	錆化（△）	平面、不整楕円形をした極小の椀形鍛冶滓が2枚重層する資料。下半の滓は一回り大きく、肩部3か所が小破片となる。下面は短軸方向に向かい突出気味。上面の滓は扁平で磁着が強い。
1	13	166	鍛冶滓（含鉄）	SB1400 -P2	4.5	2.7	2.0	21.7	4	錆化（△）	左側部がやや不規則な形状を持つ鍛冶滓又は極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面と右側部は生きている。含鉄部は下面寄りの中核部。

別表4　鉄関連遺物観察表（2）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
1	14	169	椀形鍛冶滓（小）	SB1400-P4	5.1	4.9	3.2	110.2	3	な　し	左側部から下手側が破面となった小型の椀形鍛冶滓。厚みは3㎝前後で側部は立ち上がりが急。滓の密度は高く、表面は風化がやや進む。下面にはわずかに炉床土あり。
1	15	170	鉄製品（鍛造品・鉸具）	SB1400-P4	4.6	5.3	0.4×0.2	18.0	3	錆化（△）	最大幅5.3㎝前後の鉸具。各部の横断面形は長方形で、左側の軸部中央には棒状の可動部が突出する。外周部はやや厚い酸化土砂に覆われている。
1	16	181	鍛冶滓（含鉄）	SB1400-P12	2.2	1.4	1.2	3.5	3	錆化（△）	指頭大で小塊状の鍛冶滓。上面は扁平で側部から下面はコマ状に突出する。
1	17	183	砥石	SB1400-P17	8.7	10.1	6.2	800.0	1	な　し	厚さ6㎝程の被熱石を利用した自然石砥石。砥面は上・下面と右側部の3面で右側部には幅2㎝程の砥面が見られよく利用されている。残る側部3面は破面。頁岩。
1	18	186	椀形鍛冶滓（極小）	SB1400整地層	5.5	4.1	2.1	57.6	3	な　し	側部3面が破面となった扁平な椀形鍛冶滓破片。上面は浅い皿状にくぼみ、右側の肩部はやや丸みを持っている。下面は皿状で7㎜大以下の木炭痕が点在する。滓の密度は高く、中層に気孔が連続する。
1	19	187	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SB1400整地層	5.2	3.2	2.7	29.8	4	錆化（△）	左側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面左寄りは羽口先由来の粘土質溶解物で、皿状の下面には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が点在する。肩部には凹凸が残り、滓量の少なさをうかがわせる。含鉄部は左上手寄りの上面寄り。
1	20	334	椀形鍛冶滓（中）	SD1077	7.1	6.0	4.4	223.0	4	な　し	左側部から下手側の側部が破面となった中型の椀形鍛冶滓破片。上面は全体が粘土質の溶解物に覆われており、右側部中段にはきれいな弧状の肩部が露出する。右側部から下面は椀形で、全体が鍛冶炉の炉床土の剝離痕に覆われている。上手にはわずかに炉床土が残る。滓質は緻密。
1	21	338	椀形鍛冶滓（中・二段）	SD1077	12.0	7.4	6.1	478.8	4	な　し	分析資料№2　詳細観察表参照。
1	22	337	椀形鍛冶滓（中・二段）	SD1077	8.5	11.6	5.0	435.7	4	な　し	やや異形の二段椀形鍛冶滓。上手側の肩部が小破面となる以外はほぼ完形品。下面中央部には6.7×5.5㎝ほどの極小の椀形鍛冶滓が残り、上面にはほぼ似た椀形鍛冶滓が重層しながらも、肩部が右方向に向かい大きく広がっている。上面左端部は羽口先由来の粘土質溶解物となる。右側には放射割れが生じているが、含鉄部ほどではない。
1	23	335	椀形鍛冶滓（小）	SD1077	7.2	6.8	3.2	153.2	4	な　し	分析資料№3　詳細観察表参照。
1	24	336	椀形鍛冶滓（小）	SD1077	8.9	8.5	3.0	208.9	2	な　し	扁平で小型の椀形鍛冶滓の完形品。上面の中央部が浅くくぼみ、下面もそれに応じて突出する。肩部はきれいな弧状で、2か所が突出部となる。上面左端部には粘土質溶解物が小塊状に残る。
1	25	331	椀形鍛冶滓（極小）	SD1077	4.7	4.0	2.3	67.7	3	な　し	分析資料№4　詳細観察表参照。
1	26	333	椀形鍛冶滓（極小）	SD1077	6.2	6.6	3.2	111.1	3	な　し	左側部寄りがこじ上げられたような形態を持つ扁平で極小の椀形鍛冶滓。ほぼ完形品で、下面下手側には小塊状の鍛冶滓が重層する。左側の変形は羽口の通風孔部を通じた工具によるものか。
1	27	332	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SD1077	5.0	4.5	4.7	58.9	4	錆化（△）	上・下面の中央部が突出した、不整コマ状の形態を持つ極小の椀形鍛冶滓。下手側の肩部は小破面となる。突出部は磁着が強く、外観は滓と見られるが芯部に何らかの鉄製品を含む可能性あり。未製品又は故鉄であろうか。滓部は密度の低い鍛冶滓。
1	28	330	鍛冶滓	SD1077	3.4	3.0	2.0	20.3	2	な　し	平面、不整三角形をした小塊状の鍛冶滓。完形品で上面には木炭が貼り付いている。滓質は半流動状。

別表4　鉄関連遺物観察表（3）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
1	29	329	半溶解石	SD1077	2.6	3.0	2.2	9.1	2	な　し	表面が黒色ガラス質滓に覆われた半溶解石。芯部は石英質の石片で表面が発泡気味。鍛冶滓を急速に冷やすために意図的に投入された可能性大。構成№164の上面に乗る半溶解石と同種。官営工房などで多出するが、本遺跡では極めて稀。
1	30	328	炉壁（鍛冶炉）	SD1077	4.0	2.4	1.7	5.9	1	な　し	内面が黒色から暗褐色にガラス化した鍛冶炉の炉壁表面破片。上面の一部を除き、側部は小破面が連続する。外面も破面の可能性大。胎土は練りのあまい粘土質。
1	31	326	羽口（鍛冶・先端部）	SD1077	2.7	（外径）5.8（内径）2.2	1.6	23.5	2	な　し	鍛冶羽口の先端部破片。通風孔部の径は2.1㎝を測り、身厚は1.5㎝前後となる細身の鍛冶羽口である。構成№32と同類。胎土には石英質の石粒を含む。
1	32	327	羽口（鍛冶・先端部）	SD1077	4.1	（外径）5.3	-	25.6	2	な　し	構成№31と似た鍛冶羽口の先端部破片。先端部外面は斜め上方に溶損し、表面は発泡気味。通風孔部は欠落して不明。身厚は1.5㎝以上。胎土は前者よりきめが細かい。
1	33	324	砥石	SD1077	19.8	14.0	11.0	3360.0	1	な　し	厚さ10㎝程の厚い板状をした砥石破片。上面の平坦面が破面となっており、浅い筋状の砥痕が残されている。上手側側部は丸みを持った転石の側部で、残る側部3面がシャープな破面となっている。硬質な石質で仕上砥に使われたものか。頁岩。
1	34	325	鉄床石	SD1077	13.9	11.5	13.1	1710.0	1	な　し	構成№82と同一個体と見られる鉄床石破片。下面と左側部に加えて下手側の側部左側が生きており、残る側部2面が破面となっている。上面は細くなった頂部のみが生きており、やはり被熱する。なお、下面の上手側端部が黒っぽくなっているのは埋土条件によるものか。鉄床石の母体としては構成№109が想定される。斑状黒雲母花崗岩。
1	35	340	椀形鍛冶滓（極小）	SW1145	4.2	4.2	2.5	39.3	3	な　し	ほぼ完形品で重層気味の極小の椀形鍛冶滓。一見、鍛冶滓様で、上面左側には別の滓が重層する。下面の滓は肩部が丸みを持ち、右側部には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が固着する。
1	36	339	鍛冶滓	SW1145	3.7	2.8	1.8	12.4	3	な　し	右側部上半が小破面となった密度の低い鍛冶滓。左側部から上手側は二段気味で､小さな段を持つ。上･下面には点々と木炭痕が確認される。
1	37	345	椀形鍛冶滓（小）	SW1232	7.0	5.1	3.1	142.7	3	な　し	左側部が破面となった小型の椀形鍛冶滓破片。上面は左側がややくぼみ肩部は発達している。下面はやや乱れた椀形で、全体が粉炭痕に覆われる。滓質は緻密で結晶が発達する。
1	38	344	椀形鍛冶滓（極小）	SW1232	4.1	4.0	1.6	29.7	3	な　し	側部3面が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は緩やかな波状で、下面は粉炭痕主体。滓質はやや緻密。
1	39	342	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SW1232	3.3	3.5	1.8	15.3	6	錆化（△）	下手側の側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。全体観は鍛冶滓様で磁着は比較的強い。もとの含鉄部の広さをうかがわせる。外面には厚い層状の酸化土砂が固着する。
1	40	343	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SW1232	4.1	4.0	1.6	24.5	5	錆化（△）	左側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面はやや盛り上がっており、表皮が部分的に剝落する。肩部はきれいな丸みを持ち、側部は緩やかな椀形となる。左側部上手側は二次的な固着土砂。
1	41	341	炉壁（鍛冶炉）	SW1232	3.3	3.2	1.5	4.8	2	な　し	内面が灰黒色のガラス化した鍛冶炉の炉壁内面破片。側部は不規則な破面となり、外面全体が剝離面と見られる。内面は発泡気味で表皮にはかすかに木炭痕あり。胎土は錬りの悪い粘土質。
1	42	346	羽口（鍛冶・体部）	SK1227	6.2	（外径）5.6（内径）2.2	1.4～2.2	53.1	1	な　し	鍛冶羽口の体部破片。通風孔部の径は1.5㎝前後の細身で、身厚は部位により極端に差を持つ。体部は基部側に向い開き気味か。胎土は土器と類似する砂粒と雲母入り。

別表4　鉄関連遺物観察表（4）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
1	43	405	椀形鍛冶滓（極小）	SX1224	5.2	4.2	2.2	46.1	3	な　し	極小の椀形鍛冶滓の中核部から右側部破片。残る側部3面が破面となる。上面は平坦で下面は皿状、右側部はほぼ真上に立ち上がる。
1	44	406	椀形鍛冶滓（極小）	SX1224	5.1	5.6	2.2	52.3	3	な　し	扁平な極小の椀形鍛冶滓。左下手肩部に小破面を残すが、ほぼ完形品。左側がやや肥厚して上面には粘土質溶解物が乗る。
1	45	404	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SX1224	4.4	4.2	1.8	31.3	5	錆化（△）	側部3面が破面となった、扁平で極小の椀形鍛冶滓破片。下面は浅い皿状で上面はざらつく。含鉄部は下面左寄り。
1	46	403	鍛冶滓（含鉄）	SX1224	3.1	2.7	2.3	12.6	5	錆化（△）	表面が酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。全体形状は小さなコマ状で、下手側の肩部は風化して白色滓化する。含鉄部は上手側の芯部。
1	47	402	鍛冶滓（含鉄）	SX1224	2.3	2.2	1.8	7.3	5	錆化（△）	やや構成No.46と似た小塊状の鍛冶滓。下手側部が破面で、他の面は生きている。表面は滓に覆われており、含鉄部は上手側の芯部。
1	48	407	炉壁（鍛冶炉）	SX1224	5.2	4.1	2.3	15.9	2	な　し	内面の8㎜程の厚み部分が発泡した鍛冶炉の炉壁破片。側部4面が破面で、外面は灰色に被熱した剝離面となる。胎土中にはわずかに籾殻を混入する。
1	49	414	鉄製品（鍛造品・鉄斧）	P1399	14.6	6.0	4.3	463.8	5	L（●）	黄褐色の厚い酸化土砂に覆われた大振りの袋状鉄斧。先端部に向かい厚みが薄くなっており、袋部の横断面形は楕円となる。身幅は透過X線像から見ると5.7㎝で、基部側の最大幅は6.7㎝を測る。袋部の長さはX線像からは不明で、外観上は7㎝を超える。刃部はV字状の縦断面形と判断されるが、平面的には錆化が進み不明となる。予想される平面形状は隅丸方形気味か。袋部の中央に2か所、大きな錆化部が確認される。含鉄部の残存は刃部先端側から5㎝程基部寄り主体。
1	50	419	椀形鍛冶滓（小）	SB1500-P1	6.0	4.4	2.0	90.9	3	な　し	側部3面が破面となった小型の椀形鍛冶滓破片。扁平な流動状で、上・下面と右側部は生きている。左側部から見ると中間層に隙間あり。
1	51	423	羽口（鍛冶・先端部）	SB1500-P9	5.5	3.5	1.8～2.1	34.4	5	な　し	分析資料No.12　詳細観察表参照。
1	52	427	鉄製品（鋳造品）	SB1500-P12	4.3	4.0	1.2	32.8	4	錆化（△）	平面形が不整楕円形をした板状の鋳造品破片。上手側の側部はやや肥厚して口縁部様となるが不明瞭。残る側部3面は破面となる。最大厚は5㎜程と推定されるが、酸化土砂によりはっきりしない。
1	53	481	椀形鍛冶滓（極小）	SB1500整地層	5.6	3.8	1.8	46.5	3	な　し	やや扁平で上・下面が生きている極小の椀形鍛冶滓。左側部が破面となる。上面には木炭痕が強く、下面は炉床土の剝離面となる。
1	54	480	鍛冶滓（含鉄）	SB1500整地層	2.3	1.7	1.1	3.8	2	錆化（△）	指頭大の小塊状の鍛冶滓。一見、再結合滓に似るが、芯部には鍛冶滓部分が確認される。上面全体が破面となる。酸化土砂中には鍛造剝片を含む。
2	55	478	鉄製品（鍛造品・釘）	SB1500整地層	2.1	1.0	0.7	2.0	3	錆化（△）	頭部が平坦化した釘の頭部から体部破片。体部途中で破面となる。頭部は打撃のためか右方向に傾く。
2	56	479	鉄製品（鍛造品・飾り金具）	SB1500整地層	（板）3.0（釘）2.4	（板）2.0（釘）0.7	（板）0.15（釘）0.5	5.4	4	錆化（△）	平面形が菱形をした、薄板状の金具2枚が釘止めされている飾り金具。上下の飾り板の隙間は最大6㎜を測る。釘部分は中央を貫通しており、足部が欠落する。頭部はわずかに外周部が周囲に張り出している。

別表4　鉄関連遺物観察表（5）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
2	57	482	砥石	SB1500整地層	13.1	12.3	8.8	1102.8	1	な　し	上面と下手側部の2面が砥面となった自然石砥石破片。加工痕はなく、もとの転石をそのまま用いている。上手側側部から下手面が破面となっており、左右の側部は転石の表面となる。表面が点々と吸炭しており、被熱痕も残されている。黒雲母トーナル岩。
2	58	874	椀形鍛冶滓（大）	SD1377	13.2	8.4	3.4	529.7	5	な　し	平面形が長楕円形をした、ほぼ完形の椀形鍛冶滓。全体にまとまりがよく肩部は厚みを持つ。下面は舟底状に突出して滓は緻密。
2	59	880	椀形鍛冶滓（大・二段）	SD1377	12.1	9.0	5.9	793.2	4	な　し	分析資料№6　詳細観察表参照。
2	60	879	椀形鍛冶滓（大・二段・炉床土付き）	SD1377	10.7	8.1	8.0	526.0	4	な　し	上面にやや乱れた椀形鍛冶滓が乗る二段椀形鍛冶滓。ほぼ完形で、下半の滓はまとまりがよい。上下とも短軸方向に長めで、表面には酸化土砂が厚い。下半の滓の側部から底面はV字状に突出して、灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が残る。
2	61	873	椀形鍛冶滓（中）	SD1377	11.1	9.4	5.5	419.4	4	な　し	酸化土砂に覆われたほぼ完形の椀形鍛冶滓。上面は凹凸が著しく、下面は浅い椀形となる。左側部は小破面で、上面には粘土質溶解物が乗る。
2	62	876	椀形鍛冶滓（中・二段）	SD1377	10.7	9.0	3.9	354.9	3	な　し	分析資料№7　詳細観察表参照。
2	63	878	椀形鍛冶滓（中・二段）	SD1377	9.0	8.8	4.0	271.6	3	な　し	滓質の似た鍛冶滓が重層した二段椀形鍛冶滓。左右の側部は小破面で、上面は平坦面となる。短時間で重層しているためか滓の隙間はごくわずか。下面は比較的きれいな椀形で、炉床土の剝離面となる。
2	64	877	椀形鍛冶滓（中・二段）	SD1377	8.9	7.6	4.5	284.4	3	な　し	上面に極小の椀形鍛冶滓が乗る二段椀形鍛冶滓。下半の滓が主体で、左右の側部2面が破面となっている。上面は中央部が盛り上がり、木炭痕がやや強い。下面は浅い椀形となる。
2	65	875	椀形鍛冶滓（小）	SD1377	8.0	5.4	2.9	134.1	3	な　し	左側部が破面となった小型の椀形鍛冶滓の半欠品。上面は浅くくぼみ、側面から下面は素直な椀形となる。表面には二次的な酸化土砂が厚い。
2	66	871	椀形鍛冶滓（小）	SD1377	5.9	5.2	2.9	135.8	2	な　し	側部2面が破面となった、小型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。滓はまとまりがよく、丸みを持った底面から急速に立ち上がっている。下面全体に炉床土が薄く貼り付く。滓は緻密で、炉床土はわずかに籾殻入り。
2	67	867	椀形鍛冶滓（極小）	SD1377	3.9	3.1	1.8	28.7	4	な　し	小塊状の完形となる椀形鍛冶滓。一見、鍛冶滓様でもある。上面は平坦気味で、側部から下面は比較的きれいな椀形鍛冶滓となっている。滓質は比較的緻密。
2	68	872	椀形鍛冶滓（極小）	SD1377	6.7	5.7	2.7	95.8	3	な　し	分析資料№8　詳細観察表参照。
2	69	870	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SD1377	6.2	4.8	2.0	83.4	4	錆化（△）	扁平で極小の椀形鍛冶滓。左右の側部には小破面を残すが、全体形は損なわれていない。上面は平坦気味で下面は皿状。滓質は緻密で黒味が強い。
2	70	868	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SD1377	4.5	4.0	2.7	49.0	4	錆化（△）	平面は不整楕円形で、ほぼ完形の極小の椀形鍛冶滓。平坦気味の上面は生きており、下手側の肩部に小破面あり。側面部は立ち上がりの急な「V」字状で、全体形はコマ形となっている。含鉄部は上面寄りの中核部。
2	71	869	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SD1377	5.9	4.0	2.8	64.4	4	H（○）	分析資料№9　詳細観察表参照。
2	72	865	鍛冶滓（含鉄）	SD1377	2.4	2.2	1.7	9.7	4	錆化（△）	酸化土砂に覆われて黒錆の吹いた、小塊状の含鉄の鍛冶滓。ほぼ完形品で、表面には点々と錆化による剝離が生じている。含鉄ではあるが錆化している。
2	73	866	鍛冶滓（含鉄）	SD1377	3.1	3.1	2.1	24.6	3	錆化（△）	表面が灰白色の風化色となる滓に覆われた鍛冶滓。完形品で小さな椀形の形状を示す。側部は立ち上がりが急となり、底部は丸みを持っている。含鉄部は芯部で表面の磁着は弱い。

別表4　鉄関連遺物観察表（6）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
2	74	864	炉壁 （鍛冶炉）	SD1377	7.2	5.4	2.8	46.6	2	な　し	内面が黒褐色のガラス質に滓化した炉壁破片。側部は破面となり、外面は外周部が脱落した剝離面となる。内面は炉壁胎土が滓化して、小さな瘤状や垂れが連続する。軽量で全体が発泡気味。内面左側が突出しており羽口寄りを示す。
2	75	863	ガラス質滓	SD1377	5.1	5.0	3.1	35.3	3	な　し	鍛冶炉の炉壁が滓化して垂れ下がったようなガラス質滓破片。内・外面に木炭痕を持ち、左側部を中心にもとの炉壁の雰囲気を残している。滓化部分は全体が発泡気味。
2	76	862	羽口 （鍛冶・先端部～基部）	SD1377	11.3	（外径） 7.6 （内径） 2.5	2.7	179.5	2	な　し	鍛冶羽口の側面破片。先端部は斜め上方に溶損して、平坦な基部で終束する。通風孔部は2.3cm強と推定される。身厚は2.5cm前後を測る。羽口正面から見て左側部片に当たる。
2	77	861	羽口 （鍛冶・先端部～基部）	SD1377	9.3	（外径） 5.5 （内径） 1.6	1.7 ～ 2.0	259.9	4	な　し	先端部と基部の半分ほどが破面となっている鍛冶羽口破片。通風孔部の径は2.8cm程を測り、基部寄りでラッパ状に開いている。身厚は1.5cm～2.3cmの幅を持つ。基部は平坦で、外面は先端部に向かい直線状に細くなる。胎土中には羽口の粉末を多量に混じえる。
2	78	855	砥石	SD1377	8.3	3.7	3.6	129.4	1	な　し	側部4面と下手側の端部が砥面となった専用砥石破片。横断面形は台形で、上手側が薄くなって破面となる。表面にはかすかに砥痕が残されており、方向は短軸方向が主体となる。上手側が欠けているのは、過度の使用により砥石の中間部分から折れているためか。流紋岩。
2	79	857	砥石	SD1377	16.4	5.5	1.9	274.0	1	な　し	厚さ1.7cm程の扁平棒状の転石を利用した砥石。石包丁様の外観を持ち、砥面は上・下面だけでなく薄くなった側部にも広がっている。ただし、主たる砥面は上面側。石質は緻密で仕上砥の可能性大。頁岩。
2	80	856	砥石	SD1377	19.2	6.7	3.4	612.7	1	な　し	構成No.79とよく似た石質の自然石砥石の破片。厚さ3.3cm程の板状で、下手側がシャープな破面となっている。砥面は平坦な上・下面が主体で、側部も部分的に砥面となる。砥痕はすべてが短軸方向となる。仕上砥であろう。堇青石ホルンフェルス。
2	81	858	砥石	SD1377	13.5	12.4	12.3	1600.0	1	な　し	13cm程の厚みを持った自然石砥石の肩部破片。上面と左右の側部の一部が生きており、残る側部は破面と節理面からの剝離面となっている。2か所の砥面はいずれも平坦で、風化のためか、ややざらつきを持つ。主たる破面は上面。石質的には中砥にあたる。P2164出土の構成No.158は同一の砥石破片と見られる。安山岩。
2	82	860	鉄床石	SD1377	12.0	5.9	3.9	2000.0	1	な　し	左寄りの側部3面がシャープな破面となった鉄床石破片。下面と右側部下半は波状の自然面で、上面から右側の肩部にかけてが鍛打によるハネと見られるゴツゴツした面となっている。また、このハネ部分はわずかに被熱しており、部分的に赤化する。構成No.34も同一個体の破片である。構成No.109はSB1500大型掘立柱建物内のSK1601に原位置で残された鉄床石で、これと同一個体と見られる。黒雲母花崗岩。
2	83	859	鉄床石	SD1377	18.0	16.5	11.3	4690.0	1	な　し	上・下面が打撃によるハネのため広く破落している鉄床石破片。左寄りの側部3面がシャープな破面で、右側部はもとの転石の表面を残している。表面のハネは上面主体で、下面下手寄りは使用程度があまい。灰黒色で結晶の細かい石質のためか被熱痕は確認できない。黒雲母角閃石花崗閃緑斑岩。
2	84	853	凹石	SD1377	9.2	7.5	4.8	422.7	1	な　し	平面形が不整六角形をした厚さ4.5cm程の扁平な凹石。下手側の側部3面が多面体様の面をなすもとの石材の表面で、上・下面は二次的な加工面となっている。その中央部に径2cm程のくぼみが確認される。深さはおよそ8mm程度となる。形状的には縄文時代の凹石とやや似ているが、構成No.85とともに同一遺構から2点が出土しているという意味で注目される。鍛冶炉を持つSB1500掘立柱建物からの出土品で、舞錐等の支点を支える上石の可能性があるかもしれない。石はやや軟質で風化も進む。変質安山岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（7）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
2	85	854	凹石	SD1377	15.5	11.1	6.5	920.4	1	なし	平面形が不整楕円形をした凹石。上面がほぼ平坦で、下面は粗く整形されたような椀形となっている。短軸左側の肩部が小さな破面となっており、下面の一部も小破面となる。上面の中央部が径3㎝、深さ7㎜程くぼんでる。自然石を用いたものではなく、軟質の母材から加工されたものと見られる。部分的な吸炭部があり、全体が被熱のため赤化する。本資料も鍛冶炉を持つSB1500掘立柱建物からの出土品で、縄文時代の凹石とは言い切れない要素を持つ。流紋岩質凝灰岩。
2	86	897	砥石	SW1343	8.5	11.1	3.5	394.9	1	なし	厚さ3.5㎝程の扁平な転石を利用した砥石。上手側の側部が破面で上面の中央部を中心に砥面が残されている。下面は外周部が砥面となっており、石材の風化のためか中央部の表皮が荒れてしまった。被熱石で、表面には赤化やひび割れが生じている。砂岩。
2	87	898	砥石	SW1343	19.4	11.5	8.0	2460.0	1	なし	粗粒の花崗岩の転石を用いた砥石破片。2片が接合したもので、左側部がシャープな破面となっている。砥面は上面の平坦面で、残る側部は自然面となる。石全体が被熱して肩部は部分的に吸炭している。砥石としては荒砥から中砥相当。花崗岩。
2	88	881	椀形鍛冶滓（極小）	SW1352	4.1	3.0	1.6	25.6	5	なし	1.2㎝程の厚みを持つ、極小の椀形鍛冶滓の側部破片。側部2方が破面で、上・下面は浅い皿状となっている。下面には粉炭痕が残る。
2	89	882～887	粒状滓（6点）	SW1352	-	-	-	-	-	なし	分析資料№10　詳細観察表参照。
2	90	888～893	鍛造剝片（6点）	SW1352	-	-	-	-	-	なし	分析資料№11　詳細観察表参照。
2	91	894	再結合滓	SW1352	8.7	7.8	5.5	225.6	6	なし	一見、椀形鍛冶滓を逆転させたような形態を示す再結合滓破片。下面は浅い皿状で全体が粉炭痕により覆われており、側部から上面の大半が破面となっている。再結合の主体は細かい滓片と木炭で鍛造剝片や粒状滓は確認されていない。上半部には土師器片が含まれている。形状から見て鍛冶炉の炉床上で生成された再結合滓であろう。
2	92	905	椀形鍛冶滓（極小）	SK1355	5.9	4.9	1.9	59.9	3	なし	扁平な極小の椀形鍛冶滓の破片。側部2面が破片で、椀形鍛冶滓としては7割方の形態を保っている。上面には2㎝大の木炭痕が、下面には木炭痕と光沢を持った鍛造剝片が確認される。鍛錬鍛冶相当の椀形鍛冶滓か。
2	93	906	再結合滓	SK1355	10.2	6.7	4.8	280.0	4	なし	分析資料№5　詳細観察表参照。
2	94	907	再結合滓	SK1355	11.6	7.5	6.3	453.2	4	なし	表面がゴツゴツした再結合滓破片。鍛冶系の再結合滓で、下面には鍛冶滓片や多量の鍛造剝片が顔を出している。粒状滓や粒状の鉄粒も確認される。側部は基本的に破面となっており、上半部は酸化土砂に覆われる。母体となる資料はほかにもあり。
2	95	908	再結合滓	SK1355	16.7	11.5	9.0	1868.7	4	なし	10㎝を超える厚さを持つ、比較的しっかりした再結合滓破片。平坦な上面は生きており、下面は表面が剝落した程度で基本的には生きている可能性大。左側部が大破面で右側部は生きている。生きている側部は全体形状が深い椀形となっている。何らかの土抗中で形成されたものか。再結合の主体は細かい鍛冶滓片で、鍛造剝片や粒状滓も含まれている。密度が高く土砂の比率の少ない再結合滓である。上面には土師器片も認められる。
2	96	904	羽口（鍛冶・先端部）	SK1355	5.8	（外径）5.5（内径）2.3	1.6	52.7	1	なし	鍛冶羽口の先端部破片。正面から見て右半分に当たる。通風孔部の径は2.3㎝、身厚は1.6㎝前後を測る。先端部の斜め上方への溶損が著しい。
2	97	1250	椀形鍛冶滓（極小）	SK1360	7.0	6.1	2.2	86.5	3	なし	肩部に小破面を持つ極小の椀形鍛冶滓。全体が1.4㎝程の厚みを持っており、上面中央部が緩やかにくぼむ。左上手寄りの肩部3面が小破面となる。

別表4　鉄関連遺物観察表（8）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
2	98	1249	鍛冶滓（含鉄）	SK1360	2.8	2.3	1.7	10.4	4	錆化（△）	厚い酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。表面には放射割れが生じており、含鉄部は上半部主体と見られる。完形品と予想される。
2	99	1248	鉄製品（鍛造品・釘？）	SK1360	1.6	0.3	0.3	0.3	3	錆化（△）	方形の断面形を持つ鉄製品破片。鉄釘の足部片様で全体が弧状に曲がっている。芯部は錆化して中空化する。
2	100	1247	砥石	SK1360	4.7	8.1	3.4	144.6	1	な　し	上面が緩やかな砥面となった自然石砥石の表面破片。側部3面が破面で、残る2面が節理面からの剝離面となる。右上手側の肩部はもとの転石の肩部と推定される。砥面は風化のためか部分的に荒れている。砂岩。
2	101	1278	椀形鍛冶滓（極小）	SK1384	5.5	5.3	2.3	59.2	3	な　し	上・下面に木炭痕の目立つ、極小の椀形鍛冶滓。肩部面が破面となっており、下面はややゆがんだ椀形を示す。上面の木炭痕は1㎝大を超える。滓量が少なく炉床の粉炭層上で形成か。
2	102	1229	鉄床石	SK1419	35.5	20.0	12.7	13400.0	1	な　し	厚さ12.5㎝程の厚い板状をした鉄床石の大型破片。左側部がシャープな破面となっており、上・下面の平坦面が打面として用いられている。上・下面ともに黒褐色の鍛造剝片が付着して、部分的に鍛打によるハネが生じている。表面が部分的に灰白色となるのは、被熱による可能性もあり。通常の鉄床石が割れ防止のために石材の側面を用いるのに対して、上・下面の平坦面を用いていることになる。SB1500大型掘立柱建物に関わる溝SD1377から出土した構成№83は、同一個体の可能性あり。輝石安山岩。
2	103	1305	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SK1479	4.3	4.3	2.6	44.9	5	錆化（△）	表面が薄皮状の酸化土砂で覆われた、極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。左側部が破面の可能性大。下面の左下方向に向かう傾斜面で、滓本来の中心を示す。上面は平坦気味で、肩部はまとまりがよい。含鉄部は左寄りにやや広範囲か。
2	104	1593	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SK1513	8.6	4.4	1.7	78.6	2	な　し	下面全体に灰白色から灰黒色の炉床土が貼り付いた、極めて薄い極小の椀形鍛冶滓。左右の側部が破面となっており、滓部の最大の厚みは1.2㎝を測る。荒れの少ない、きれいな椀形をした鍛冶炉の炉床部に滓は形成されている。
2	105	1310	鉄製品（鍛造品・釘または未製品）	SK1548	4.0	1.7	0.8	3.0	2	錆化（△）	長軸の両端部が細くなって収束する鉄製品。横断面形は方形と推定され、頭部がもとに戻るように開いてしまった鉄釘の未製品の可能性も残る。内部は中空化しており、もとの鉄製品の外形だけが透過Ｘ線像に残されている。
2	106	1311	椀形鍛冶滓（中・二段）	SK1560	9.0	7.9	3.2	267.4	6	な　し	左側部が二段に重層した二段椀形鍛冶滓。右側部に小破面を持つ以外は完形品。上面の滓が数㎝の範囲で右方向にずれた重層状態を示す。下面は左側に傾斜する椀形で、表皮は半分以上が剝落してしまっている。滓質はやや緻密。
2	107	1312	椀形鍛冶滓（小）	SK1560	5.7	5.3	2.9	92.6	3	な　し	側部4面すべてが破面となった小型の椀形鍛冶滓破片。上面は皿状で下面はやや凹凸を持っている。破面の中間層が横方向に連なった隙間となっており、操業途上で何らかの途切れがあったものか。重層とまでは言えない。
2	108	1231	椀形鍛冶滓（極小）	SK1601	4.4	3.6	3.1	64.8	3	な　し	左側部2面が破面となった椀形鍛冶滓破片。極小又は小型の滓と推定され、右側部の形状はやや乱れている。滓質は緻密。
2	109	1232	鉄床石	SK1601	17.5	21.1	12.5	6360.0	1	な　し	SB1500大型掘立柱建物内の鍛冶炉SW1353に接して検出された、土坑SK1601からの出土品。短軸の両端部がシャープな破面となった鉄床石破片。粗粒黒雲母花崗岩の転石を用いたもので、上面右寄りと右側部上半が打撃によるハネのためか表皮が広く剝落する。残る左右の側部と下面は転石の表面部分で、打痕は見られない。石全体が被熱して破面が赤化しているものの、使用以前の被熱の可能性も残されている。同一ポリ袋中には別の小破片が2点確認される。構成№34・82も同一個体の破片と推定される。鉄床石としては上面の平らな部分と右側の肩部が用いられる。花崗岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（9）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
3	110	1336	椀形鍛冶滓（小・二段・含鉄）	SB1683-P3	7.6	4.9	3.5	139.0	5	錆化（△）	下手側の側部に隙間を生じている小型の二段椀形鍛冶滓破片。側部2面が破面で、浅い椀形にくぼむ上面は生きている。上面は2か所が小塊状に突出しており、くすんだ紫紅色を示す。磁着は突出部を中心に強い。下面は浅い椀形で、滓質はやや密度が低め。
3	111	1342	砥石	SB1683-P9	14.5	14.5	6.6	1680.0	1	なし	厚さ7cm程の扁平な転石を用いた自然石砥石の破片。被熱のためか芯部まで赤化して、4片に割れたものを接合している。砥面は上面の2面で、上手側は破面となっている。置き砥として使用された可能性大。流紋岩。
3	112	1341	鉄床石	SB1683-P9	14.0	10.5	12.2	590.5	1	なし	上面に6cm程の範囲でハネと見られる部分を残す鉄床石破片。厚さ12.5cm程の転石を用いたもので、石材としては側部破片にあたる。2片が接合しており、側部2面がシャープな破面となる。構成No.83や構成No.102とは石質がやや異なり、別個体と見られる。ドレライト。
3	113	1354	羽口（鍛冶・先端部～体部）	SB2020-P16	7.6	（外径）6.5（内径）2.3	2.0	78.0	6	なし	鍛冶羽口の先端部から体部破片。羽口部位としては右半分で側部2面と基部側が破面となる。通風孔部の径は2.2cm以上と推定される。胎土はやや砂質で、5mm大以下の石粒も混じえられている。外面の成・整形は長軸方向へのケズリによる。
3	114	1360	椀形鍛冶滓（極小）	SD2150	5.0	3.2	2.0	40.9	3	なし	側部3面が破面となった、極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。最大厚みは1.7cm程で、全体的には扁平となる。下面は椀形に突出する。
3	115	1359	砥石	SD2150	4.6	2.1	1.9	15.6	1	なし	軟質の石材を用いた砥石破片。上・下面が砥面となっており、下手側が欠けている。残る側部3面にはもとの転石の表面を残している。石質から見て仕上砥であろう。頁岩（新第三紀）。
3	116	1358	砥石	SD2150	23.3	9.8	6.0	1699.8	1	なし	細長い転石を利用した自然石砥石。上･下面の中央部が短軸方向に向い幅2cm程の帯状に砥面として用いられており、残る表面は転石本来の表面状態を示す。右側部上手側にもわずかな砥面あり。2片が接合したもので、砥石としての使用後に下手側が被熱・吸炭している。輝石安山岩。
3	117	1362	椀形鍛冶滓（極小・含鉄製品？）	SK2119	5.3	3.8	3.4	67.6	6	M（◎）	分析資料No.15　詳細観察表参照。
3	118	1361	炉壁（鍛冶炉）	SK2119	3.2	2.5	1.5	8.9	3	なし	内面がわずかに滓化して、表層が発泡気味の炉壁破片。側部4面は破面となっており、外面には灰色に被熱した剝離面が露出する。鍛冶炉肩部に近い炉壁片か。
3	119	1372	炉壁（鍛冶炉）	SB2200-P2	6.0	4.0	2.8	37.7	1	なし	内面が褐色や濃褐色に被熱した薄板状の炉壁破片。側部は破面となっており、外面は剝離様。胎土中には細かい木炭を含んでおり、内面以外は全体が吸炭する。粉炭痕の混和は意図的なものか。右側部は樋状にくぼみ、羽口の装着痕の可能性を持つ。
3	120	1373	砥石	SB2200-P2	7.8	6.9	3.4	169.0	1	なし	厚さ3.5cm程の扁平な転石を用いた自然石砥石破片。表面が風化して分かりにくくなっているが、上・下面にかすかな砥痕が残されている。右寄りの側部2面が破面となる。石質は中砥相当か。流紋岩。
3	121	1378	砥石	SB2200-P11	23.9	13.5	16.0	7000.0	1	なし	上・下面と右側部が砥面となった完形の自然石砥石。置き砥として使用されたものと見られ、上下の砥面がたわむようによく用いられている。短軸側の両側部と下手側の側部は面の形状が悪いためか使用痕はなし。表皮が部分的に吸炭しており、二次的に転用されている可能性あり。砂岩。
3	122	1383	砥石	SB2200-P22	9.2	12.4	3.3	590.5	1	なし	厚さ3cm程の板状をした自然石砥石の破片。側部3面が破面で、右側部は転石の表面部分となっている。上・下面がほぼ平坦な砥面となっており、下面の砥面は表皮の7割方が剝落する。砥面はやや波状で被熱しており、上面には黒色のタール状の物質や赤褐色の酸化土砂が貼り付いている。仕上砥の可能性あり。流紋岩。
3	123	1743	砥石	SD1090	9.6	2.6	3.5	116.5	1	なし	薄板状の転石を用いた完形の砥石。砥面は上・下面で、残る側部は転石の表面となっている。やや硬質なためか砥面のたわみはほとんどない。中砥の可能性あり。砂岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（10）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
3	124	1751	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	SD1103	7.8	7.0	2.9	165.2	4	錆化（△）	上手側の肩部が欠落した、不整楕円形をした椀形鍛冶滓破片。上面は上手側が盛り上がり、残る6割方は木炭痕が残る平坦面となる。側面から下面は丸みを持った舟底状。滓質はやや緻密で、上面上手側が磁着する。
3	125	1769	椀形鍛冶滓（極小・含鉄・炉床土付き）	SD1314	6.1	5.0	1.2	102.2	5	錆化（△）	下面に多量の炉床土が貼り付いた緻密な椀形鍛冶滓。上面は左寄りが生きており、青黒い光沢を持っている。側部3面が破面。鍛冶炉の炉床土は混和物を含まないシルト質。
3	126	1770	羽口（鍛冶・先端部）	SD1314	3.0	-	1.5	11.9	2	な　し	鍛冶羽口の先端部小破片。通風孔部や外周部は一部のみの残留で、推定径を算出しにくい。肩部は丸みを持って溶損し、薄皮状の黒色ガラス質滓に覆われている。
3	127	1788	砥石	SD2008	19.0	9.2	5.4	911.7	1	な　し	軟質の石材を用いた厚さ5.5cm程の専用砥石破片。石材を長方形に切り出して用いている。左右の側部と上面全体が砥面となる。軟質材で、石そのものにひびが入って8片に割れているものを接合した。主破面は右側部上手側から上手側の端部。下面は底の平たい舟底状に粗い削り加工が施されている。同一の軟質材を用いた砥石破片はⅧ層包含層一括で数多く出土しており、いずれも不定形な小片になりながらも砥石として用い続けられている。仕上砥としては最も好まれた石質であった可能性が高い。流紋岩。
3	128	1806	砥石	SD2040	8.3	5.6	3.4	91.1	1	な　し	上面がわずかに反り返る砥面となった軟質の砥石。下手側の側部から下面にかけてが破面で、上手側半分の下面はゆがんだ舟底状に突出する。側面には石材加工時の無数の刃物痕が残されている。仕上砥と見られる。頁岩(新第三紀)。
3	129	1805	凹石	SD2040	9.1	8.3	4.2	328.3	1	な　し	上面の中央部が径3.5cmの範囲で浅くくぼんでいる凹石。左下手側の側部が破面となっている以外は、厚さ4cm程の転石を母材としている。石質は軟質で表面の風化が進む。流紋岩。
3	130	1844	砥石	SD2116	10.7	7.2	4.1	431.2	1	な　し	下手側の側部が欠落した扁平棒状の自然石砥石の破片。表面全体が磨石状のもとの転石の形状を保ちながら用いられている。そのため、砥面のほとんどが丸みを持って盛り上がる。石質は緻密。流紋岩。
3	131	1442	椀形鍛冶滓（極小）	SK1078	5.7	4.9	2.5	63.5	2	な　し	側面から下面が乱れた形態を持つ小型の椀形鍛冶滓。上面左半分はきれいな平坦面で、左側部上半が破面となっている。滓質は小さいながらも緻密。
3	132	1441	羽口（鍛冶・体部）	SK1078	4.5	-	2.0	18.4	1	な　し	鍛冶羽口の先端部寄りの体部破片。側面は全周が破面で、通風孔部壁面も剝落する。外面には灰色の被熱面が残されている。胎土中には砂粒が交える。
3	133	1447	鉄製品（鍛造品・釘？）	SK1107	2.5	0.3	0.2	1.1	3	M（◎）	分析資料№16　詳細観察表参照。
3	134	1454	鉄製品（鍛造品・刀子？）	SK1115	4.5	1.3	0.5	8.8	6	H（○）	分析資料№18　詳細観察表参照。
3	135	1490	鉄製品（鍛造品・棒状不明）	SK1121	3.6	6.0	6.0	1.6	3	錆化（△）	長軸の両端部が破面となった鍛造品破片。横断面形は方形で、外周部を酸化土砂がとりまいている。釘より丁寧な造りと判断される。
3	136	1496	椀形鍛冶滓（中）	SK1156	9.5	7.7	4.2	348.4	3	な　し	短軸方向に長手の中型の椀形鍛冶滓。ほぼ完形品で、上手右側の肩部が欠けている。上面は緩やかに盛り上がり、中央部付近は滓の一部が白色化している。下面は前後に長手の舟底形で、下手側が最も肥厚する。
3	137	1497	鍛冶滓（含鉄）	SK1156	3.7	3.3	1.8	22.9	3	錆化（△）	平・断面形が不整三角形をした含鉄の鍛冶滓。下手側に小破面が残るが、ほぼ完形品。肩部には凹凸を持つ。含鉄部は下面寄りの芯部。
3	138	1546	椀形鍛冶滓（小・二段・含鉄）	SK1357	7.9	6.3	4.2	177.0	3	錆化（△）	極小の椀形鍛冶滓が重層した二段椀形鍛冶滓。下面の滓はほぼ完形品で、上面の滓の方が小振りとなる。上面の滓は下手側が破面。上下で中心部位置がずれており、上面の滓は右上手側に中心部を移す。含鉄部は上半の滓の中心付近。
3	139	1556	椀形鍛冶滓（大・二段）	SK1361	13.6	8.9	6.8	798.9	5	な　し	長楕円形をした二段椀形鍛冶滓。左側部は重層のため段を生じており、上半の滓の左下手側の側部が破面となる。下面は皿状で、側部の立ち上がりがやや急。比重が高く滓質は緻密と推定される。

別表4　鉄関連遺物観察表（11）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
3	140	1555	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SK1361	6.6	4.9	1.9	62.0	5	錆化（△）	上面が段状にずれている極小の椀形鍛冶滓。下面は連続するものの、上面は上手側が一段低くなる。破面は左側の肩部のみ。
3	141	1564	羽口（鍛冶・先端部～体部）	SK1387	12.2	（外径）7.5（内径）3.0	2.2～2.5	521.9	2	な　し	細身の鍛冶羽口の先端部から体部破片。通風孔径が先端部で1.7㎝と極めて細く、後端でも2㎜程しか太くなっていない。身厚は1.7㎝で、本遺跡出土の羽口としては最も細い羽口となる。先端部は斜め上方に黒色ガラス化して溶損している。通風孔径のみから言えば、青銅などの処理に使われる場合に多い細さである。
3	142	1574	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SK1459	4.2	4.2	2.4	40.1	3	な　し	左側部と下面に鍛冶炉の炉床土を残す、極小の椀形鍛冶滓破片。部位としては中核部から側部にかけて、最大厚みは1.7㎝である。内部に大型の気孔を残す。側部3面が破面。
3	143	1575	炉壁（鍛冶炉）	SK1459	4.5	3.3	1.3	8.3	1	な　し	内面が発泡してわずかに垂れの残る炉壁破片。1㎝程の薄皮状で側部が破面となり、外面は灰色に被熱した剝離面となる。胎土はきめの細かいシルト質。
3	144	1602	砥石	SK1533	6.0	5.5	6.2	193.2	1	な　し	自然石砥石の表面破片。上面と右側部の一部が生きており、残る上面はシャープな破面で囲まれている。主たる砥面は上面で全体が被熱して色調がくすむ。安山岩。
3	145	1618	椀形鍛冶滓（極小）	SK1590	5.6	3.7	2.0	50.1	4	な　し	左右の側部3面が破面となった、極小の椀形鍛冶滓破片。下面はややゆがんだ椀形で、平坦気味の上面には1㎝大の木炭痕が残されている。滓中には気孔がやや多い。
3	146	1619	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SK1590	7.0	3.8	2.1	60.6	6	錆化（△）	極小の椀形鍛冶滓の半欠品。上・下面が生きており、左側部が破面となる。整った形態を持っているが風化が進み、上面には数多くの気孔が露出する。含鉄部は滓中に分散か。
3	147	1699	椀形鍛冶滓（大・炉床土付き）	SX1104	12.3	9.4	4.7	511.3	4	な　し	上面肩部が二段気味で、下面下手側半分が鍛冶炉の炉壁土に覆われている椀形鍛冶滓。肩部には小破面が巡るが、全体形状は生きている。二段気味となるのは、一旦椀形鍛冶滓が形成された後に、薄皮状の滓が乗るためである。炉床土はシルト質でひび割れが目立つ。
3	148	1701	椀形鍛冶滓（小）	SX1104	8.9	5.1	3.2	144.8	3	な　し	小型あるいは中型の椀形鍛冶滓の肩部破片。下手側の側部が破面となっている。上・下面や側部にも木炭痕が残り、滓中の気孔もやや多い。
3	149	1700	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SX1104	5.7	5.0	2.7	66.2	2	な　し	左側の側部2面が破面となった、極小の椀形鍛冶滓破片。下面には右側を中心に鍛冶炉の炉床土が貼り付いている。滓中には木炭痕や気孔が目立つ。
3	150	1702	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	SX1104	5.5	5.2	2.2	67.7	3	錆化（△）	左側部がシャープな破面となった、扁平な極小の椀形鍛冶滓。下面は浅い皿状で、炉床土の剝離面となっている。滓質はやや緻密ながら風化が進んでいる。
3	151	1694～1696	鉄製品（鍛造品・棒状不明）	SX1104	9.0	0.9	0.7	6.5	4	錆化（△）	3片に割れている鉄製品。うち1片の端部がやや膨らんでいるように見えるが、透過X線像では破面となる。横断面形は方形で、筋状に伸びる鍛造痕が「S」字状にうねり気味。精度の高い鉄製品とは言いがたい。現状では棒状不明品となる。
3	152	1698	砥石	SX1104	3.5	2.6	1.5	2.5	1	な　し	軽石を用いた小さな砥石。上面が平坦な砥面となっており、側部から下面は粗く加工された舟底状となる。砥痕は短軸方向に向く筋状で、軽石中にはほとんど鉱物粒子を含んでいない。手持ちで小型の刃物の刃部を砥ぐ目的か。石質は異なるが構成No.289などもやや類似する形態を持つ。
3	153	1697	砥石	SX1104	16.0	8.1	4.2	541.4	1	な　し	上面と右側部が砥面となった厚さ3.9㎝程で板状の砥石。箱形で砥面以外は生きており、上手側は砥石としての当初の加工時に斜めに欠けている。残る側部3面は当初の石材の表面の一部をなす。砥痕は短軸方向に向いきれいな筋状に残されている。使用痕は上面より右側部の方が強い。仕上砥に属する。流紋岩。
3	154	1427	砥石	SX2001-SE1	3.3	2.8	5.8	29.1	1	な　し	不整三角形の断面形を持つ軟質の砥石の小破片。砥面は上面のごく小範囲で、残る側部は不規則な破面となる。上面の砥面を基準にすると、厚さ6.2㎝以上の砥石が母体と見られる。流紋岩質凝灰岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（12）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
3	155	1432	炉壁（鍛冶炉）	SX2001-SE3	5.0	4.0	1.5	12.6	1	な　し	内面がわずかに滓化して、表皮直下が発泡した鍛冶炉の炉壁破片。側部から外面は全面破面となる。胎土はシルト質。上面端部がやや外傾する。
3	156	1735	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	SX2001	5.3	3.4	2.8（滓の厚さ）2.3	62.8	5	な　し	下面に薄皮状の炉床土を残す極小の椀形鍛冶滓。左側部と右側の肩部が破面となっている。径の小さな滓の割りには厚みがあり2.3㎝を測る。滓質はほぼ緻密。
3	157	1852	椀形鍛冶滓（極小）	P1149	3.8	3.5	1.4	23.2	2	な　し	側部3面が破面となった、極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。扁平で薄く、下面は浅い皿状となる。上面には木炭痕を残し、下面は破面と剝離面が共存する。
3	158	1860	砥石	P2164	14.6	13.3	6.2	1099.8	1	な　し	上面が平坦な砥面となった、きめの細かい転石を用いた自然石砥石破片。右側部は丸みを持った転石の表面で、残る側部から下面は破面となっている。わずかに被熱している可能性があり、加えて上面左側には黒褐色の有機質が貼り付いている。石質や石の目の類似性から、SB1500大型掘立柱建物に伴なうSD1377溝出土の構成No.81と同一個体の可能性大。安山岩。
4	159	2303	椀形鍛冶滓（大・二段）	Ⅷ層 9D14区	12.2	8.5	5.4	542.5	5	な　し	不整楕円形をした椀形鍛冶滓が重層した、典型的な二段椀形鍛冶滓。完形品で、それぞれの滓は中型から小型に属している。肩部も比較的整っており、炉床が荒れていない鍛冶炉での生成物である。表面には点々と酸化土砂が貼り付く。
4	160	2306	椀形鍛冶滓（中）	Ⅷ層 7D22区	7.4	8.5	4.3	325.6	4	な　し	鍛冶炉の炉床が荒れていたためか、滓の底面がやや乱れている中型の椀形鍛冶滓。上手側の肩部以外は生きている。部分的に突き崩されており、下面には左右方向に工具痕様のくぼみを残す。また、一部に炉床土が固着する。
4	161	2304	椀形鍛冶滓（中）	Ⅷ層 8D8区	7.8	8.6	2.8	251.7	4	な　し	短軸方向の両側部が破面となった中型の椀形鍛冶滓。上・下面は平滑で、きれいな外観を示す。滓中には気孔が残るが比較的少ない。下面は全体が炉床土の剝離面となる。
4	162	2307	椀形鍛冶滓（中）	Ⅷ層 9C17区	9.4	8.8	6.2	325.9	4	な　し	上面左側が盛り上がり、酸化土砂に覆われている椀形鍛冶滓。左側部が破面で、滓としては半欠品。含鉄ではないが酸化土砂には放射割れが発達する。
4	163	2305	椀形鍛冶滓（中）	Ⅷ層 9D14区	7.9	7.1	3.2	192.8	3	な　し	中型の椀形鍛冶滓の肩部破片。側部2面が破面で、上面には1㎝大の木炭痕が連続する。右側部はきれいな椀形の炉床土の剝離面となる。
4	164	2309	椀形鍛冶滓（中・半溶解石付き）	Ⅷ層 9D14区	8.5	6.7	4.3	241.4	4	な　し	上面中央部に2㎝大前後の半溶解石が3個顔を出している、椀形鍛冶滓の中核部破片。側部3面が破面で、滓の密度は高い。半溶解石は、椀形鍛冶滓を急速に固化するための官営工房由来の技法である。
4	165	2310	椀形鍛冶滓（中・二段・含鉄・半溶解石付き）	Ⅷ層 9D15区	9.2	7.5	3.7	247.4	6	錆化（△）	上面の上手側に半溶解石が乗る中型の椀形鍛冶滓。二段気味で、左右の側部が破面となっている。上・下面がやや波状で荒れ気味となる。含鉄部は下面中央寄り。
4	166	2308	椀形鍛冶滓（中・二段・含鉄）	Ⅷ層 10D7区	12.3	8.3	4.1	399.3	4	錆化（△）	上下に椀形鍛冶滓が重層して、全体が一体化したように見える中型の椀形鍛冶滓。上面は明らかに二段となっており、下面には小さな突出部が連続的に残されている。破面は下手側の側部。含鉄部は上面の滓の上手寄り。
4	167	2315	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 7C11区	7.9	4.9	2.9	153.0	5	な　し	左右の側部が破面となった小型の椀形鍛冶滓。肩部は帯状で発達がやや弱い。下面はほぼ椀形で、下手寄りが小さく突出する別単位の滓となっている。
4	168	2317	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 7D区	5.2	4.3	3.3	109.4	3	な　し	左側部2面が破面となった、小型又は中型の椀形鍛冶滓肩部破片。上・下面は比較的浅い皿状で、破面には中空部が生じている。
4	169	2314	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 7E1区	7.7	6.4	4.0	241.5	4	な　し	平面形が不整楕円形をした完形の椀形鍛冶滓。右側部は丸餅状の形態を持ち、左側部はやや二段気味となっている。滓質は比較的緻密で比重が高い。
4	170	2312	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 9D9区	5.4	6.5	3.2	146.8	3	な　し	肩部に小破面を残す完形に近い小型の椀形鍛冶滓。上面は木炭痕が連続し左側が肥厚する。下面は中央部が突出気味の椀形で、形態的には極小の椀形鍛冶滓とも似る。

別表4　鉄関連遺物観察表（13）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
4	171	2318	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 9D14区	6.5	6.4	3.5	149.7	4	な　し	側部2面が破面となった小型の椀形鍛冶滓。上面は中央部に向かって肥厚気味で、下面は左右方向に小さな舟底状に突出する。滓質は緻密ながら気孔も一定程度残っている。
4	172	2311	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 9D14区	7.3	6.7	3.5	167.3	4	な　し	左下手側が大きな破面となった極小の椀形鍛冶滓。上・下面は構成№171と比較的似ており、肩部の平面形が直線状となる特色を持つ。滓は緻密で粗い気孔が点在する。
4	173	2316	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 9D14区	7.8	5.9	3.2	133.2	3	な　し	上面左側に半溶解石由来と推定される滓を残す、小型の椀形鍛冶滓。全体に扁平で、左側部と右下手側に小破面を持つ。下面はややゆがんだ皿状。
4	174	2313	椀形鍛冶滓（小）	Ⅷ層 10D2区	8.1	6.8	2.7	117.1	2	な　し	左下手側の側部が直線状の破面となった、小型の椀形鍛冶滓破片。肩部が薄いひだ状となり、下面は椀形。滓は左半分が肥厚して右側で薄くなる。
4	175	2328	椀形鍛冶滓（小・炉床土付き）	Ⅷ層 6D2区	4.3	4.2	3.7	75.4	2	な　し	下面にシルト質の炉床土が薄く貼り付いた、小型又は中型の椀形鍛冶滓破片。残存部は中核部で、側部が連続的な破面となっている。滓は緻密で、上面は流動状。
4	176	2327	椀形鍛冶滓（小・炉床土付き）	Ⅷ層 9D15区	5.4	5.1	2.4	81.4	2	な　し	側部3面が破面となった、やや扁平な椀形鍛冶滓破片。下面には灰色に被熱したシルト質の炉床土が貼り付いている。滓質は緻密で、上面には木炭痕あり。
4	177	2320	椀形鍛冶滓（小・二段）	Ⅷ層 9D22区	8.1	6.4	3.8	203.9	4	な　し	3cm大の極小の椀形鍛冶滓の上面上手側に、小型の椀形鍛冶滓が重層した二段椀形鍛冶滓。破面は上面の滓の左下手側の側部。下面は炉床土の剝離面で、一部に暗灰色の炉床土が貼り付いている。
4	178	2321	椀形鍛冶滓（小・二段）	Ⅷ層 10D11区	5.1	6.7	4.7	161.0	4	な　し	短軸側の両端部が破面となった二段椀形鍛冶滓。上面の滓は小振りで不規則な形状を持つ。下面の滓は整った形状を持ち、下面がきれいに立ち上がる。
4	179	2323	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	Ⅷ層 8D17区	8.2	5.8	2.7	165.8	6	錆化（△）	平面形が不整台形気味の小型の椀形鍛冶滓。上手側の肩部が小破面となる以外は、ほぼ完形品。肩部が丸みを持ち、上手側の端部が薄くなっている。含鉄部は上面中央部にやや広い。
4	180	2324	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	Ⅷ層 9D11区	7.1	5.7	3.7	166.2	5	錆化（△）	左側部は破面様となる小型の椀形鍛冶滓。肩部や下面はやや乱れている。含鉄部は上半に広く部分的に重層気味。
4	181	2322	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	Ⅷ層 9D20区	8.0	8.9	2.9	197.2	4	錆化（△）	横方向に不規則に広がった、変った形態を持つ椀形鍛冶滓。上面は平坦気味で、左右の2方が肥厚する。右側の端部は径1.3cm程の丸棒状。含鉄部は比較的広めとなる。
4	182	2325	椀形鍛冶滓（小・含鉄）	Ⅷ層 10D12区	8.4	6.4	2.3	188.6	5	錆化（△）	平面形が楕円形をした、扁平な小型の椀形鍛冶滓。左側部下手側が破面となっており、上手側の中段は中層に隙間を持っている。上・下面は平坦気味で、滓質は全体に均一。
4	183	2319	椀形鍛冶滓（小・二段・含鉄）	Ⅷ層 10D2区	9.3	7.2	3.8	201.0	5	錆化（△）	上面の右上手側に径6cm程の極小の椀形鍛冶滓が乗っている二段椀形鍛冶滓。下段の滓は側部2面が破面で、上・下で滓の質量に差を持つ。工程差の可能性もあり。下半の滓は小型の椀形鍛冶滓に相当する。含鉄部は上半の滓部。
4	184	2339	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 5E5区	5.6	4.5	2.1	51.3	3	な　し	右側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は左方向に傾斜して、下面は木炭痕による凹凸が著しい。表面の酸化土砂が厚い。
4	185	2338	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 6C20区	6.0	4.1	1.4	52.5	3	な　し	左側部がシャープな破面となった極小の椀形鍛冶滓。全体に薄く整った形状で、肩部もしっかりしている。最大厚は1.3cmを測る。下面は炉床土に接した浅い椀形となる。
4	186	2351	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 6C20区	5.3	4.9	2.0	61.9	4	な　し	左下手側の側部に小さな破面を持つ極小の椀形鍛冶滓。平面形は不整半円状で、上・下面の質感が異なる。上面は平滑な平坦面で、下面は下手側の中央が突出するコマ状となる。上面には点々と浅い木炭痕が残る。
4	187	2340	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 6D11区	6.7	4.4	2.9	77.3	4	な　し	下面右側が二段気味に突出する極小の椀形鍛冶滓。平面形は不整楕円形で、上手側の肩部2か所が破面となる。上面は平坦で表皮の一部が剝落する。上面の右上手側がやや磁着気味。
4	188	2343	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 6E11区	5.2	3.7	2.4	32.7	3	な　し	平面形が不整糸巻状となった厚さ1.5cm程の極小の椀形鍛冶滓。左側部が破面の可能性あり。上面は平坦気味で、下面には低い段を持つ。

別表4　鉄関連遺物観察表（14）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
4	189	2332	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 6E16区	6.7	4.4	2.2	97.8	4	な　し	左右の側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓。上面は平坦気味で1cm大の木炭痕が連続し、下面はわずかに段をなす平坦気味の面となる。滓質は緻密で、中層の気孔の一部が肥大する。上下逆の可能性もあり。
4	190	2337	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 7E2区	5.0	5.1	2.0	54.2	3	な　し	側部2面がイガイガした破面となった、極小の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。上・下面と右下手側の側部が生きている。滓質は構成No.189に似る。
4	191	2335	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 7E16区	6.7	5.5	2.7	84.7	3	な　し	左側の側部3面がシャープな破面となった極小の椀形鍛冶滓。上面中央部が小高く、右側の肩部は薄くなって収束する。上面には1cm大の木炭痕が目立ち、気孔も大振りとなる。下面はほぼ椀形で、表面には粉炭痕が目立つ。
4	192	2333	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D5区	5.7	6.2	2.5	75.1	4	な　し	短軸側の両側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。右方向に向かい薄くなり収束する形状は、構成No.191・193と似る。滓質は緻密で部分的に気孔が肥大する。
4	193	2334	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9E10区	5.5	5.2	2.0	52.6	4	な　し	平面形が不整五角形をした完形の椀形鍛冶滓。上面の中央部がくぼみ、上手側が最も突出する。下面には木炭痕が目立つ。上面の左中央部が小さく盛り上がり、この部分のみが磁着する。
4	194	2336	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D14区	3.4	4.1	1.6	24.3	3	な　し	上手側の側部が連続的な小破面となった、極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上・下面とも木炭痕に覆われており、特に上面側が目立つ。本来の滓の外周部は上手側に伸びる。
4	195	2342	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D14区	6.2	4.7	2.1	64.2	4	な　し	右下手側の側部が破面となった極小の椀形鍛冶滓。最大の厚みは2.1cmを測り、表面は酸化土砂に覆われている。平坦気味の上面には木炭痕が残る。下面は面をなす浅い椀形で、粉炭痕と炉床土の圧痕からなる。
4	196	2353	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D14区	5.7	5.1	1.7	62.5	3	な　し	不整三角形の平面形を持つ完形の椀形鍛冶滓。滓の側部はやや直線状に途切れて、上手側は小さな凹凸となる。上面は平坦気味で左上手側がわずかに反り返り、下面は小さな波状の突出部となっている。滓質は緻密。
4	197	2350	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D14区	6.8	4.1	2.3	77.0	2	な　し	短軸方向に長手の紡錘形をした極小の椀形鍛冶滓。左下手側の側部が破面で、端部は比較的整っている。上面の中央部は表皮が剝落して、大型の気孔の側面が露出する。下面は短軸方向に向く舟底状。上面下手側の突出部は再結合した部分か。
4	198	2341	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D19区	4.7	4.4	2.1	44.0	3	な　し	平面形が細身の帆立貝状となった極小の椀形鍛冶滓。ほぼ完形品で、右半分は薄くなって広がっている。上下逆の可能性もあり。
4	199	2349	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9D19区	6.2	4.8	2.4	59.3	3	な　し	左下手側が大きく欠けている極小の椀形鍛冶滓破片。右方向に向かって薄くなっており、肩部は木炭痕により変形する。上・下面ともに木炭痕が連続する。破面には気孔が目立ち、中層では肥厚気味。
4	200	2346	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 9E5区	6.9	4.6	2.7	81.2	3	な　し	上・下面のみならず側面にも1cm大の木炭痕が目立つ、極小の椀形鍛冶滓の完形品。やや短軸方向に長手で、下面も舟底状に突出する。滓量が少ないために粉炭層の途中で生成か。上手側のくぼみも木炭痕となる。
4	201	2348	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 13B20区	6.5	4.6	3.5	118.4	4	な　し	下面の上手側が段をなす極小の椀形鍛冶滓。右側の肩部が小破面となるが、ほぼ完形品に近い。下面のずれに応じて上面も変形しており、滓の生成時に突き動かされたものと見られる。大きな波状の上面は木炭痕に覆われ、上手や下手側は炉床土に接している。上面の中央部がやや磁着する。
4	202	2352	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 14D21区	4.4	4.3	1.6	28.5	3	な　し	極小の椀形鍛冶滓の上皮側破片。側部から下面は連続する小破面となる。滓質は緻密で、内部に微細な気孔を残す。上面は平坦気味で左側には木炭痕が見られる。
4	203	2347	椀形鍛冶滓（極小）	Ⅷ層 14D21区	7.0	4.2	2.1	64.0	3	な　し	左側がシャープな破面となった極小の椀形鍛冶滓。上・下面には木炭痕がやや著しく、肩部は薄くなって収束する。下面の木炭痕は1cm程度の大きさで、例外的に大きめ。滓質は緻密で微細な気孔を数多く含む。
4	204	2329	椀形鍛冶滓（極小・炉床土付き）	Ⅷ層 9D22区	5.3	5.6	2.8	47.9	3	な　し	下面の8割方に灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が貼り付いている極小の椀形鍛冶滓。滓部は上手側から右側部にかけてが破面となっており、左下手側がかろうじて生きている。滓質はやや気孔の目立つスポンジ状。上面の中央部には1cm大の木炭痕を残す。横断面形から見ると鍛冶炉は中央部が平坦気味で、側部が急激に立ち上がる。
4	205	2331	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	Ⅷ層 5D25区	6.2	5.0	2.3	80.9	4	銹化（△）	表面の7割方が厚い酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓破片。左側部が破面となっており、側部や下面は木炭痕のため変形している。含鉄部は上手側端部の突出部で、径2cm程の範囲となる。滓はやや密度が低い。

別表4　鉄関連遺物観察表（15）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
4	206	2330	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	Ⅷ層 6B10区	7.4	6.4	2.3	84.3	5	錆化（△）	ほぼ完形の含鉄の椀形鍛冶滓。平面形は不定形で、肩部が薄くなって収束する。上面は平坦で左側が大きくくぼむ。下面は木炭痕と平滑な面が共存し、下手寄りの側部のみが炉床土に接している。上面左側がくぼんでいるのは羽口先の送風による影響か。含鉄部は上半部に全体的に広がる。
4	207	2345	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	Ⅷ層 6E8区	6.3	3.4	2.8	65.7	5	錆化（△）	左側部が大きな破面となった、極小又は小型の椀形鍛冶滓の側部破片。最大厚みは2.6cm程で、上・下面ともやや平坦気味となる。表面には木炭痕が連続し、右側部では大きく食い込んでいる。含鉄部は滓全体に広がる。
4	208	2344	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	Ⅷ層 9C16区	5.0	4.1	3.0	69.9	5	錆化（△）	左右の側部と上手側の側部が破面となった、極小又は小型の椀形鍛冶滓破片。最大の厚みは3.4cm程で、比較的厚い。下面は一部が突出した椀形で、炉床の粉炭層に接している。含鉄部は下面寄りに広がり、表皮の一部が錆化して暗紫紅色となる。
4	209	2326	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	Ⅷ層 9D9区	5.3	4.2	2.0	43.4	4	錆化（△）	下手側の側部が小破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は平坦気味となっているが側部から下面は木炭痕のため変形し、母体の滓量の少なさをうかがわせる。滓は軽量で右側の肩部に向かって薄くなる。含鉄部は上面左側2か所の瘤状の部分。
4	210	2355	鍛冶滓	Ⅷ層 5C10区	4.3	3.0	1.6	33.6	5	な　し	極小の椀形鍛冶滓の出来がかり様の形状をした鍛冶滓。完形品で側部や下面には凹凸を生じている。上面はほぼ平坦となる。酸化土砂が厚いが含鉄の滓ではない。
4	211	2356	鍛冶滓	Ⅷ層 5D14区	3.3	3.1	2.5	23.4	4	な　し	表面全体が酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。左側部は破面の可能性あり。わずかに磁着するが、内部の状況については不明。
4	212	2364	鍛冶滓	Ⅷ層 6C25区	2.6	2.6	1.4	10.8	3	な　し	下手側の肩部が小破面となった完形に近い鍛冶滓。上面は盛り上がった平滑な面で、側部から下面は木炭痕のために凹凸が目立つ。表皮沿いの気孔が表面に露出する。形態的には典型的な鍛冶滓となる。
4	213	2357	鍛冶滓	Ⅷ層 6D10区	3.0	3.0	1.5	8.2	3	な　し	厚さ1.5cm程の鍛冶滓又は極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上･下面と右側部のみが生きており､側部3面が破面となる。滓はほぼ緻密。
4	214	2358	鍛冶滓	Ⅷ層 8A19区	3.7	3.2	2.5	26.0	-	な　し	表面全体を薄皮状の酸化土砂に覆われた鍛冶滓。側面から下面は丸みを持っている。表層の酸化土砂は厚みが2mm程で、下面がわずかに磁着する。
4	215	2354	鍛冶滓	Ⅷ層 9D21区	4.4	2.7	1.2	15.0	2	な　し	厚さ1.2cm程の扁平な鍛冶滓。右側の肩部が小破面となっているものの完形品に近い。上面は平坦気味で、下面は炉床土の圧痕状。左側部の灰白色は二次的な付着物の色調と見られる。
4	216	2360	鍛冶滓（含鉄）	Ⅷ層 5A15区	3.0	2.7	1.8	12.4	5	錆化（△）	上手側の側部に錆膨れの欠けが露出する含鉄の鍛冶滓破片。表面には小さな突出部が生じている。全体観は上面が平坦気味で、側部から下面は丸みを持つ。本来の含鉄部は芯部か。
4	217	2359	鍛冶滓（含鉄）	Ⅷ層 5C10区	3.9	2.7	2.7	22.5	4	錆化（△）	上面に瘤状の酸化土砂が貼り付いている含鉄の鍛冶滓。側面から下面の凹凸は生きており、木炭痕による変形と推定される。磁着は右側部寄りが強い。
4	218	2361	鍛冶滓（含鉄）	Ⅷ層 5D15区	3.0	2.7	1.8	13.8	4	錆化（△）	厚さ1.7cm程の小塊状で含鉄の鍛冶滓。上面は平坦で側部から下面は全体に丸みを持つ。含鉄部は下面寄りの突出部と見られる。表面には点々と木炭痕が残る。
4	219	2363	鍛冶滓（含鉄）	Ⅷ層 6D2区	3.0	2.6	1.9	15.1	3	錆化（△）	表面全体に瘤状の酸化土砂と滓の突出部が点在する小塊状の鍛冶滓。含鉄部は磁着が強い。側部から下面は全体に丸みを持つ。
4	220	2362	鍛冶滓（含鉄）	Ⅷ層 6D12区	2.7	2.3	1.8	10.7	4	な　し	やや厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓又は鉄塊系遺物。右側部の小範囲に結晶の発達した含鉄部が露出する。それ以外は磁着が弱い。
4	221	2370	鍛冶滓（含鉄）	Ⅷ層 6D16区	2.8	2.5	2.2	11.9	4	錆化（△）	表面に瘤状の酸化土砂が著しい含鉄の鍛冶滓。酸化土砂のため内部情報ははっきりしない。見かけより磁着は強め。

別表4　鉄関連遺物観察表（16）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
4	222	2367	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 6E11区	3.2	4.4	1.9	21.6	5	錆化（△）	厚さ1.5㎝程の扁平な鍛冶滓又は極小の椀形鍛冶滓。平面形は長手の不整台形で、表面には酸化土砂が広がっている。破面はなく完形品と推定される。上・下面とも平坦気味で、側部は立ち上がりが急。左半分の磁着が強く、含鉄部は上半部か。
4	223	2369	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 6E11区	3.2	2.4	2.6	23.5	4	錆化（△）	厚さ2.1㎝程の小塊状の含鉄の鍛冶滓又は椀形鍛冶滓破片。厚みが2.5㎝程あるのに対して側部の立ち上がりは急角度となっており、少なくとも2面が破面と推定される。下手側を中心に酸化土砂が厚い。含鉄部は左上手寄りの芯部。
4	224	2373	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 7D11区	2.9	2.3	1.7	10.3	4	錆化（△）	表面全体が酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。左側部中段には濃緑色のガラス質滓が顔を出している。小さな固体の割りには磁着が強めで、下面の酸化土砂には放射割れが走る。
4	225	2372	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 7B7区	2.6	2.0	1.5	8.6	4	錆化（△）	表面が黄褐色の酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。全体に丸みを持っているが、芯部の性格はやや不明。磁着はあるものの弱い。
4	226	2371	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 7D23区	3.4	2.2	1.5	11.3	3	錆化（△）	平面形が不整三角形をした厚さ1.5㎝程の扁平な鍛冶滓。表面全体が細かい滓片を含む酸化土砂に覆われている。含鉄部の磁着は弱く、やや性格不明。極小の椀形鍛冶滓の肩部破片の可能性もあり。
4	227	2366	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 7E3区	3.5	2.7	3.3	32.1	5	M（◎）	分析資料№14　詳細観察表参照。
4	228	2368	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 7E3区	3.5	3.7	2.0	21.5	4	錆化（△）	表面全体が緩やかに盛り上がった平坦面となる含鉄の鍛冶滓破片。下手側の側部のみが破面となっている。側部から下面は強い椀形で、極小の椀形鍛冶滓のなりかかり様。芯部に含鉄部があるためか、上手側の側面から下面には放射割れあり。
4	229	2375	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 8E6区	2.4	2.2	1.4	5.5	3	錆化（△）	薄皮状の酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。下面左側には地の部分が露出しており、不整なソロバン玉状となる。磁着は弱いが表層が錆化する。
4	230	2374	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 9E1区	3.3	2.3	1.2	7.5	3	錆化（△）	厚さ1.1㎝程の含鉄の鍛冶滓破片。左側部のみが破面で、右側部寄りは磁着が強い。上面は平坦気味で、側部から下面は小さいながらも椀形となる。
4	231	2365	鍛冶滓（含鉄）	Ⅶ層 10D6区	3.4	2.8	2.7	22.3	6	錆化（△）	分析資料№13　詳細観察表参照。
4	232	2263	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅶ層 5C20区	3.3	1.1（0.5）	0.3	3.3	5	錆化（△）	刀子の刃部から茎部にかけての破片。背側には、はっきりとした関が認められ、茎部には木部を残している。茎部の表面は小範囲が滓に覆われており、故鉄の可能性もあり。縦断面形は刃部・茎部とも薄い三角形。透過X線像ではきれいな鍛造痕を残す。
4	233	2376	鍛冶滓（含鉄製品）	Ⅶ層 5D15区	2.5	3.3	1.4	7.5	4	錆化（△）	分析資料№17　詳細観察表参照。
4	234	2286	鉄製品（鍛造品・紡錘車円盤部）	Ⅶ層 6A19区	3.3	2.7	0.4	9.7	3	錆化（△）	右側部が円形に整えられた紡錘車の円盤部破片。最大厚は3㎜程で、外周部は1㎜強の厚みに成形されている。側部2面が破面で、左側部中央には心棒を差し込む小孔が穿たれている。円盤部は、軸側に向かいやや反り返った形に折り曲げられている。軸の痕跡から逆算して半径2.9㎝程の紡錘車と見られる。
4	235	2267	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅶ層 6B19区	1.8	0.8	0.3	1.7	3	錆化（△）	刀子の刃部破片。縦断面形は細い三角形で、切先は左寄りか。背側は平坦に整えられているが錆化が進み、芯部は中空化している。透過X線像には筋状の鍛造線が確認される。
4	236	2274	鉄製品（鍛造品・棒状不明）	Ⅶ層 6C13区	1.5	0.5	0.3	0.7	2	錆化（△）	縦断面形が細身の長方形をした鉄製品破片。短軸の両端部が破面となっている。透過X線像にはわずかにS字状にうねる鍛造痕が確認される。何らかの鉄製品の中核部破片であろうか。

別表4　鉄関連遺物観察表（17）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
4	237	2282	鉄製品 （鍛造品・丸鑿？）	Ⅷ層 6C19区	2.0	1.0	0.4	1.6	2	錆化（△）	上・下面が酸化土砂に覆われた、幅1.3㎝前後の樋状の鉄製品破片。下手側の側部は明らかな破面で、上手側については、はっきりしない。管状の鉄製品の破片で、完形品とすれば丸鑿の刃部様となる。錆化が進んでおり、透過X線像にはわずかに鍛造痕らしき筋目が残る。
4	238	2290	鉄製品 （鍛造品・釘？）	Ⅷ層 6D1区	3.9	0.6 ～ 1.0	0.1 （0.5）	10.9	3	錆化（△）	瘤状の酸化土砂に覆われた棒状の鉄製品破片。下手側の側部には径5㎜程の丸断面又は隅丸方形の端部が顔を出している。芯部は錆化して抜け気味。透過X線像では短軸側の両端部が破面で、比較的丁寧な造りの鍛造痕が確認できる。
4	239	2262	鉄製品 （鍛造品・刀子）	Ⅷ層 6D4区	5.5	1.4 （0.8）	0.3	12.7	4	錆化（△）	2片に割れている刀子の刃部から茎部にかけての破片。背側にのみ関が確認され、刃部側は錆化が進んでいるためか関は不明となる。刃部は途中で折れており、茎部も折れた後に錆化が進む。鍛造痕は比較的整っているが、背側はやや乱れており、関部分も角がとれている。
4	240	2271	鉄製品 （鍛造品・刀子）	Ⅷ層 6D11区	2.9	0.6	0.3	0.7	5	錆化（△）	刀子の茎部の先端部破片。表面には点々と木部の痕跡を残す。茎部の途中で欠けており、左端部が破面となる。縦断面形はわずかに下手側が薄くなる長方形。外観・透過X線像とも造りは丁寧。
4	241	2260	鉄製品 （鍛造品・刀子）	Ⅷ層 6D11区	10.7	1.1 （0.7）	0.3	12.0	4	錆化（△）	刃部側と茎部の先端部が欠けている刀子破片。3片に割れていたものを接合している。背側には関が確認される。縦断面形は細い三角形。茎部に比べて刃部が細身となっており、かなり使い減りしている刀子と見られる。造りとしてはやや粗い。
5	242	2268	鉄製品 （鍛造品・刀子）	Ⅷ層 6D13区	5.8	1.0	0.3	7.7	5	錆化（△）	切先と茎部を欠く刀子破片。縦断面形は細身の三角形で、刃部の最大幅は1.2㎝と広い。右側の破面は古い破面で、破片としてもたらされた故鉄の可能性あり。研ぎ減りは弱い。鍛造痕は通常の造りを示す。
5	243	2275	鉄製品 （鍛造品・釘？）	Ⅷ層 6D15区	1.3	0.3	0.4	0.6	3	錆化（△）	上手側の端部は片側に折り曲げられている棒状の鉄製品破片。両端部が破面となっており、。横断面径は最大5㎜を測る。折り曲げられた先端部の破面がやや潰れており、故鉄の可能性あり。
5	244	2276	鉄製品 （鍛造品・釘又は鎹）	Ⅷ層 7C2区	2.0	1.2	0.6	3.1	4	錆化（△）	上手側の端部が直角方向に折り曲げられている鉄製品破片。短軸の両端部に破面が露出しており、最大径は5㎜を測る。鍛造痕は丁寧で、折り曲げられた部分は強く曲がっている。
5	245	2289	鉄製品 （鍛造品・薄板状鉄製品）	Ⅷ層 7C4区	3.2	2.5	0.1	4.8	4	錆化（△）	側部の全周が破面で、下面の外周部と上面全体が錆由来の剝離面となっている薄板状の鉄製品破片。鎌の可能性を持っているが、はっきりしたものではない。透過X線像にはかすかに鍛造痕を残す。また細い放射割れも無数に生じている。
5	246	2284	鉄製品 （鍛造品・鎌？）	Ⅷ層 7C16区	7.1	2.6	0.3	22.3	5	錆化（△）	最大幅が2.5㎝程の薄い篦状の鉄製品破片。左側の2㎝程が上方に向い直角に折り曲げられて、端部は明瞭な破面となる。左方向に向かい身幅が狭くなり、端部では幅1.5㎝、厚さ2㎜強を測る。芯部は肌別れして全体に空洞化する。幅広い右寄りの表面には斜め方向の植物質の巻き付けが確認される。柄として機能している可能性大。右側の端部は折り曲げ加工された痕跡を残さず、収束している。鍛造痕は比較的素直で、形態的には篦状の道具として機能している可能性もあり。
5	247	2279	鉄製品 （鍛造品・釘）	Ⅷ層 7C20区	0.5	1.0	0.8	0.5	3	錆化（△）	釘の頭部と推定される極小で円盤状の鉄製品破片。上面は緩やかな丸みを持った面で、釘頭と見られる。肩部は1㎜程外側に張り出している。下側は径6㎜程の破面で釘の体部に続く。
5	248	2272	鉄製品 （鍛造品・刀子）	Ⅷ層 7C25区	-	0.8	0.2	21.3	5	錆化（△）	一見、椀形鍛冶滓のようなゴツゴツした酸化土砂に覆われた鉄製品破片。上手側から左側部にかけて鉄製品の端部が露出する。断面形は左側が幅9㎜程の細身の三角形で、右側は幅6㎜程の長方形となっている。右側が刀子の茎部で左側が刃部であろうか。茎部に比べて刃部側は幅が狭く、砥ぎ減りしている可能性が高い。芯部は錆化して中空化している。

別表4　鉄関連遺物観察表（18）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
5	249	2285	鉄製品（鍛造品・鋏具）	Ⅷ層 8B14区	4.3	4.3	0.4×0.6	14.2	4	錆化（△）	外周部径が4.3cm程の隅丸方形に成形された鋏具。軸と舌の部分は別に鍛造された上で、本体部に穴を開けてはめ込まれている。外周部の枠部分の断面形は部位によって異なっており、左側は径5.5mm程の円形、軸の差し込み部は径7mm強の長方形、右側の部分では厚さ4.5mm、幅5mm程の長方形となっている。軸部分は方形に近い断面形で、舌部分は軸を挟み込むように加工されている。鍛造痕は丁寧で、造りとしては良好。左下手側の一部が欠落する。
5	250	2266	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅷ層 8B1区	5.1	1.1（0.7）	0.4	3.9	4	錆化（△）	接合はしないものの2片に割れている刀子破片。一方は刃部で一方は茎部と見られる。外周部がやや厚みのある酸化土砂に覆われており、一見、鉄鏃様にも見える。刃部幅は最大1.2cm程。縦断面形は細身の三角形で、茎部は長方形の断面形に近い。鍛造痕は普通。
5	251	2280	鉄製品（鍛造品・棒状不明）	Ⅷ層 8C23区	4.0	0.2～0.5	0.2	1.8	5	M（◎）	分析資料No.19　詳細観察表参照。
5	252	2265	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅷ層 8D22区	2.9	1.6	0.5	6.5	3	錆化（△）	左右の側部が破面となった刀子破片。左側が刃部で右側が茎部となる。茎部が幅9mm程と狭いのに対して、刃部は酸化土砂のため幅1.8cm以上となる。背は平坦に整えられており、身厚は7mmを測る。芯部は錆化して抜けてしまっており、比較的大振りの刀子の可能性大。透過X線像では両関が確認できる。
5	253	2273	鉄製品（鍛造品・刀子？）	Ⅷ層 8E3区	1.5	0.4	0.3	0.2	4	錆化（△）	縦断面形が幅4.5mm程の長方形となる刀子茎部の先端破片。茎部本体は欠落して破面となっている。下手側に向かい端部が徐々に薄くなって収束する。鍛造痕は素直。
5	254	2278	鉄製品（鍛造品・含鉄・釘）	Ⅷ層 9D11区	0.8	1.4	0.7	1.2	3	錆化（△）	構成No.247より一回り大きな釘の頭部破片。最大径は1.4cmを測り、頭部はボタン状に体部から突出して、上面は緩やかな丸みを持っている。体部は径6.5mm程の方形気味に加工されているが、頭部の直下で欠落する。表面の色調は赤錆色になる。
5	255	2277	鉄製品（含鉄・未製品？）	Ⅷ層 10A12区	3.2	1.0	1.0	5.9	4	錆化（△）	下手側の端部が細くなって収束する、幅9.5mm程の楔状の外観を持つ鉄製品。表面の酸化土砂により横断面形はやや不明ながら、方形断面の可能性大。上手側の端部は斜めに断ち落とされており、鏨切りか。透過X線像では全体が逆「く」の字状に曲がっており、鍛造痕は乱れている。釘等を作製する途上の未製品か。
5	256	2269	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅷ層 10C16区	1.5	1.3	0.3	1.5	3	錆化（△）	左右の側部が破面となった刀子の刃部破片。最大幅は8.5mm程で、断面形は細身の三角形となる。刃部が左側に向かって急激に薄くなっており、研ぎ減りが著しい。鍛造痕はほぼ良好。
5	257	2270	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅷ層 12B23区	2.4	1.2	0.5	2.0	4	錆化（△）	刀子の刃部小破片。比較的表面の酸化土砂が少なく、表面や断面形状が分かりやすい。縦断面形は細身の三角形で、幅に比べて背側が5mmと厚い。長軸の両端部が破面で、芯部は錆化して中空化する。透過X線像では刃部左寄りの錆化が著しい。鍛造痕は丁寧。
5	258	2264	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅷ層 12B12区	4.3	1.6（1.1）	0.4	7.2	5	錆化（△）	刀子の刃部から茎部にかけての破片。透過X線像では背側には関が確認される。ただし、表面の酸化土砂の剝落部分では両関の可能性を持つ。左右の側部が破面で断面形は細身の三角形となる。背側は平坦で断面形は片刃様になっており、通常の刀子とは刃部の付け方が異なる。透過X線像ではやや雑な鍛造痕を示す。
5	259	2261	鉄製品（鍛造品・刀子）	Ⅷ層 13B24区	10.2	1.4（1.0）	0.4	9.9	3	錆化（△）	3片に分かれている刀子破片。片関で刃部は研ぎ減りして極端に狭くなっている。3片のうち、1片は別固体の可能性を持つ。身幅と研ぎ減りの差がややあり。鍛造痕はほぼ良好と言える。
5	260	2283	鉄製品（鍛造品・帯状鉄製品または飾り板）	Ⅷ層 13D18区	（板）3.1（釘）1.2	（板）2.6（釘）0.8×0.8	（板）0.2	4.7	4	錆化（△）	中央部に貫通する釘が打ち込まれている幅2.2cm程の薄い帯状の鉄製品。帯状の部分は厚さ2mm前後を測り、釘の部分を中心に左右が垂れ下がるような形態を示す。また、左側の端部が斜めに切り落とされたような形態を示し、右側の端部は小破片となる。釘の部分は隅丸方形気味の断面形で、径は約5mmを測る。馬具等の飾り板かもしれない。鍛造痕は極めてあまい。

別表4　鉄関連遺物観察表（19）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
5	261	2291	鉄製品（鍛造品・板状不明）	Ⅷ層 13D20区	2.1	3.9	0.4	4.2	-	錆化（△）	薄板状の鉄製品の表面破片。下面は大きな剝離面で、外周部は全体が破面となる。上面は紫紅色に酸化しており、加熱された鉄製品の破片かもしれない。側部には細い筋状の割れ目を生じており、鍛造品かもしれないが、鋳造された鍋の底部破片の可能性もやや残る。
5	262	2288	鉄製品（鍛造品・薄板状不明）	Ⅷ層 14D22区	2.7	1.7	0.2	2.9	6	錆化（△）	厚さ1.5㎜程の薄い鉄製品破片。下手側の側部が直線状に途切れており、刃物の刃部破片かもしれない。残る側部3面が破面となり、芯部は中空化する。刃物とすれば極端に薄くなる。
5	263	2281	鉄製品（鍛造品・鏃）	Ⅷ層 15E13区	4.5	0.7	0.3	5.3	2	錆化（△）	外周部が厚い酸化土砂に覆われた長茎鏃の体部から茎部破片。四方関で体部は径4㎜程の方形断面となる。茎部は更に細くなり、径3㎜の方形断面を持つ。体部・茎部とも途中で欠落する。鍛造痕は丁寧で上質な鏃と見られる。
5	264	2296	鉄製品（鉄製品または鉄塊系遺物）	Ⅷ層 6C15区	2.6	1.7	1.3	6.7	4	錆化（△）	平面形が長手の不整三角形をした鉄製品未製品又は鉄塊系遺物。表面は酸化土砂に覆われ、はっきりしない部分が多い。全体に扁平で側部から下面が小さな椀形になっているが、透過X線像では粗く鍛打されているようにもとれる。下手側の端部は細くなっており、残る各面が部分的に平坦化している。
5	265	2297	鉄製品（含鉄・未製品または鉄塊系遺物）	Ⅷ層 6C22区	3.0	1.2	0.4	5.3	3	錆化（△）	厚さ1.2㎝程の扁平な未製品又は鉄塊系遺物。外観的には含鉄の鍛冶滓様に見えるが、透過X線像では端部がシャープに途切れている。また外周部には細い放射割れも生じており、鉄製品未製品の可能性も残る。
5	266	2295	鉄製品（鋳造品）	Ⅷ層 5E20区	2.5	2.2	0.7	2.8	3	錆化（△）	側部が全周にわたり破面となった厚さ3.5㎜程の鋳造品破片。側部の破面には鋳造品を示す筋状の結晶が確認され、透過X線像では亀甲状の割れ目が確認される。上面がわずかにくぼんでいるように見えるのは底部破片のためか。
5	267	2287	鉄製品（鋳造品）	Ⅷ層 7B11区	5.0	2.1	0.4	36.9	4	錆化（△）	分析資料№20　詳細観察表参照。
5	268	2293	鉄製品（鋳造品）	Ⅷ層 7C23区	7.0	2.5	1.0	33.7	4	錆化（△）	分厚い酸化土砂に覆われた鉄製品鋳造品破片。構成№266と異なり身厚が7㎜と極めて厚い。上手側の側部が直線的に途切れた平坦面となっており、口縁部破片の可能性もあり。残る側部は全周が破面となる。透過X線像では下手側が直線的な破面となっていることが分かる。鉄製品としては鍋・釜とは考えにくい形状で、仏具である磬等の肩部に似た透過X線像を示す。
5	269	2292	鉄製品（鋳造品）	Ⅷ層 8A19区	4.4	1.0	0.5	10.7	5	錆化（△）	やや厚い酸化土砂に覆われた薄板状の鉄製品鋳造品破片。左側部に芯部が露出しており、扁平な鋳鉄塊のようにも見える。上面は平坦で下面は浅い舟底状に突出する。上手側の端部は直線状に途切れて、縦断面形は丸みを持っている。破面には内部の気孔が確認される。かなり性格のはっきりしない遺物である。
5	270	2294	鉄製品（鋳造品）	Ⅷ層 8C11区	5.0	3.4	0.7	39.6	4	錆化（△）	厚さ7㎜程の厚みを持った鉄製品鋳造品破片。上･下面は分厚い酸化土砂に覆われており、右側部に破面が露出する。鋳造品特有の結晶が確認され、透過X線像にも亀甲状の放射割れが全面に広がる。鉄鍋等の破片であればかなり大型品の可能性を持つ。上面がわずかに反りを持ち、鍋とすれば体部破片となろう。
5	271	2301	羽口（鍛冶・体部）	Ⅷ層 6D2区	6.5	（外径）7.4～7.6（内径）2.5	2.5	75.8	2	な　し	鍛冶羽口の先端部寄り破片。内・外面が風化して荒れており、残存状態は良くない。かろうじて、通風孔部と外周部右寄りの被熱が強いことが分かる。胎土中には粗い石英質の石粒とわずかに籾殻が交える。

別表4　鉄関連遺物観察表（20）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
5	272	2299	羽口 （鍛冶・先端部～体部）	Ⅷ層 7E12区	7.6	（外径） 6.8 （内径） 2.1	2.2	80.5	3	な　し	鍛冶羽口の先端部から体部破片。残存部位としては前方から見て右側部破片で、先端部は斜め上方に強く溶損する。外面は長軸方向の帯状のケズリにより整形されている。胎土は緻密で、微細な石英質の石粒を点々と含む。
5	273	2300	羽口 （鍛冶・先端部）	Ⅷ層 8D2区	3.8	（外径） 6.3 （内径） 1.8	2.3	28.4	3	な　し	鍛冶羽口の先端部小破片。通風孔部の径はやや細く、細身の羽口の可能性あり。先端部は丸みを持って溶損し、先端部が欠け落ちたまま使用が続けられている。胎土は構成№272と似た緻密なもの。
5	274	2302	羽口 （鍛冶・先端部）	Ⅷ層 8D7区	4.1	（外径） 8.2 （内径） 3.6	2.3 ～ 2.5	32.9	1	な　し	鍛冶羽口の先端部寄り破片。通風孔部の径はやや大振りで、しっかりとした造りとなっている。外面右寄りが黒色ガラス質に滓化する。体部外面は長軸方向への細いケズリによる整形。胎土は構成№272・273に近い。
5	275	2298	羽口 （鍛冶・先端部～体部）	Ⅷ層 12C12区	8.6	-	-	50.2	2	な　し	鍛冶羽口の体部、先端部寄り外面破片。外面の被熱は右寄りが強くなる。外面は長軸方向のケズリによる整形。胎土は構成№271と似るが、出土位置はかなり離れている。
5	276	2382	ガラス質滓	Ⅷ層 9D14区	6.0	4.2	1.9	25.6	3	な　し	表面が濃緑色から黒褐色となったガラス質滓破片。側部3面は小破片で、下面は木炭痕の残る剝離面となる。羽口先で生成したものと推定される。粘土質の滓は構成№280の鍛冶炉の炉壁と共通する。
5	277	2257	鉄床石？ （滓付き）	Ⅷ層 11E7区	5.6	3.8	2.7	36.5	2	な　し	分析資料№21　詳細観察表参照。
5	278	2379	炉壁 （鍛冶炉）	Ⅷ層 6A21区	4.4	4.3	2.7	14.7	1	な　し	内面が発泡した厚さ2.7cm程の鍛冶炉の炉壁破片。胎土中にはスサが交えられている。全体が灰色基調に被熱する。
5	279	2378	炉壁 （鍛冶炉）	Ⅷ層 9C18区	4.7	3.7	3.5	38.0	2	な　し	最大厚3.3cm程の鍛冶炉の炉壁破片。平面形は緩やかな弧状で、鍛冶炉の掘形に貼り込まれていた可能性大。被熱は内面側が強く、芯部寄りは吸炭する。胎土は籾殻を交えた、ざっくりしたもの。
5	280	2381	炉壁 （鍛冶炉）	Ⅷ層 9D9区	4.8	3.8	1.6	20.7	3	な　し	内面が薄く黒褐色のガラス質に滓化した鍛冶炉の炉壁破片。側部は全周が破面で、外面は剝離面となる。胎土は細かいシルト質。
5	281	2380	炉壁 （鍛冶炉）	Ⅷ層 10D2区	4.9	4.7	2.4	24.8	2	な　し	分析資料№22　詳細観察表参照。
5	282	2377	炉壁 （鍛冶炉）	Ⅷ層 13D15区	5.1	4.8	1.7	17.2	3	な　し	内面が薄く滓化・発泡した鍛冶炉の炉壁破片。表面の滓化状態は弱く、下端寄りには滓化していない地の部分が露出する。胎土はわずかに籾殻を含むシルト質。
5	283	2242	砥石	Ⅷ層 9A15区	6.3	3.3	2.0	55.9	1	な　し	側部4面が砥面となった小型の砥石。石材は軟質で、短軸側の両側部や左右の側部の砥面にも刃物傷が密に残されている。主な砥面は上・下面で、面はきれいに反り返っている。なお、下面の砥面は2つに分かれて、上手側が砥ぎ減りしている。右側部下手側の砥面は細かい溝状にくぼんでおり、表面には筋が残されている。刃物の刀部以外を研いだためか。軟質の砥石の中では代表的な個体の一つとなる。流紋岩。
5	284	2233	砥石	Ⅷ層 6B10区	4.5	3.6	3.5	55.3	1	な　し	側部4面が砥面となった長手の専用砥石、端部破片。下手部側は荒れた破面となっており、上手側は石材自体の表面と見られる。砥面のうち側部2面と上面が主に用いられており、下面は使用の程度があまい。仕上砥と見られる。流紋岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（21）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
5	285	2245	砥石	Ⅷ層 14A19区	8.2	7.3	2.2	148.0	1	なし	軟質の石材を用いた板状の砥石破片。側部4面が砥面となっており、下手右側が破面となる。上手側の側部には石材調整時の粗い調整痕が残る。上･下面と左側部の砥面が使い込まれており､下手側が薄くなり欠けたものと見られ､本来は短冊状の形態か。仕上砥であろう。流紋岩。
5	286	2247	砥石	Ⅷ層 7C24区	13.2	6.2	2.3	199.2	1	なし	厚さ1.8㎝程の薄板状の箱形をした砥石。上・下面と右側部の3面が砥面となっているが、いずれも使用の程度があまい。下面は本来の石の目からの剝離面で、母材から剝離した後に砥面に転用したものと見られる。砥痕は軸に対して斜め方向が主体で、かなり乱れた状態を示す。石質的には仕上砥と見られるが、中砥的な使用状態を示す。流紋岩。
5	287	2253	砥石	Ⅷ層 8D2区	17.4	6.6	6.2	910.9	1	なし	幅6㎝程の不整方形の横断面形を持った棒状の砥石破片。下手側が大きな破面となっている。左・右側部と上・下面の4面がいずれも砥面となっており、左側の肩部にも帯状の砥面を残す。軟質材を粗く成形した砥石で、使用の程度がややあまい。使用途上で割れてしまった可能性大。仕上砥であろう。流紋岩。
5	288	2237	砥石	Ⅷ層 7B19区	5.0	3.1	1.5	17.3	1	なし	上面と傾斜した下手側の側部に砥面を残す砥石表面破片。きめの細かいやや硬質な石材を用いており、表皮が被熱している。右側部から下面が破面となる。仕上砥と見られる。凝灰岩。
5	289	2235	砥石	Ⅷ層 13C15区	3.0	2.0	2.6	17.0	1	なし	短い楔状の形態を示す使い込まれた完形の砥石。ごくわずかに自然面を残し、下面を除いて側部3面と上面のいずれもが砥面となっている。指先に挟んで用いられる仕上砥か。左側部の砥面の一部に浅い傷あり。砥面により砥痕方向が異なる。凝灰岩。
5	290	2232	砥石	Ⅷ層 9D7区	4.4	2.7	1.7	14.8	1	なし	上面が短軸方向に向かい樋状にくぼんでいる小型の砥石破片。短軸の両側面は破面となっており、下面は石材加工時の破面で、樋状の砥面は丸みを持った刃先を仕上げるためか。工具が対象の可能性大。流紋岩質凝灰岩。
5	291	2243	砥石	Ⅷ層 8B1区	5.3	3.8	3.0	55.9	1	なし	側部4面が砥面となった軟質材を用いた砥石破片。下手側の側部は破面で､上手側側部には自然面と破面が共存する。砥面はよく使い込まれて浅くくぼみ、斜め方向の刃物傷が少なくとも3面に残されている。仕上砥と見られる。流紋岩。
5	292	2246	砥石	Ⅷ層 10E4区	8.9	5.7	7.1	210.0	1	なし	上面が主たる砥面となった軟質の砥石破片。短軸の両側部が破面となっており、もとの砥石の上手側端部破片か。左右の側部から破面にも砥痕は残るが、使用の程度はあまい。仕上砥と見られる。流紋岩。
5	293	2234	砥石	Ⅷ層 9D9区	5.2	2.6	2.1	19.9	1	なし	平面形が半円形をした砥石破片を用いた砥石。上面が浅くくぼんだ砥面で、右側の肩部も小範囲の砥面となっている。右側部下半には整形痕があり､下面は小さな破面となる。左側部は節理面からの剝離面で､わずかに砥痕が残る。仕上砥である。流紋岩。
5	294	2240	砥石	Ⅷ層 8D18区	7.0	5.5	2.2	45.4	1	なし	軟質の砥石の表面破片。2片が接合したもので、側部から下面は破面となっている。砥面は複数に分かれており、刃物傷も乱雑に残る。石の目に沿って割れやすい石材を用いており、破片化した後も手持ちの砥石として用い続けている。構成から除いた不定形な小破片の6点程にも類似品が多い。砥石としては仕上砥と見られる。凝灰岩。
5	295	2238	砥石	Ⅷ層 7C20区	4.5	4.6	3.9	53.3	1	なし	上面と左右の側面2面が部分的に砥面となった軟質の砥石破片。上手側の側部が新しい破面で、破面は不規則な石の目からの剝離面となる。右側の肩部には刃物傷あり。被熱しているためか、表皮が淡赤褐色や灰色となっている。凝灰岩。
5	296	2244	砥石	Ⅷ層 6B1区	10.5	5.6	4.6	178.1	1	なし	上面が不規則な平坦面となった厚さ5㎝程の砥石破片。右側部下半を除く側部が連続的な破面となっている。右側部の傾斜面は加工痕ではなく、石の目に由来する剝離面と見られる。砥面にはわずかに刃物傷があり、下手側の端部が薄く吸炭する。仕上砥ながら使用の程度はあまい。凝灰岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（22）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重　量（g）	磁着度	メタル度	備　考
					長　さ	幅	厚　さ				
5	297	2251	砥石？	Ⅷ層 7C14区	15.4	10.1	5.5	663.1	1	な　し	厚さ5cm程の厚板状をした砥石？。右側部から下面には加工痕あり、表層が被熱して吸炭している。残る側部は不規則な破面で、上面は表層が剝落する。生きている部分の平面形は不整楕円形。砥石又は凹石として成形されているが、使用されたであろうと推定される上面は完全欠落してしまっている。石質は構成No.85の凹石とよく似ており、平面形や被熱痕も共通する。凝灰岩。
5	298	2241	砥石	Ⅷ層 9D4区	5.6	4.2	2.4	74.7	1	な　し	砥石破片を用いた4面が砥面となった砥石破片。平面形は半円形で、横断面形は右側に立ち上がる半楕形となる。側部3面と下面が破面で、破片化した後に小さな砥面が各面に残されている。主要な砥面は上面。石質から見ると中砥に相当する。左側部が被熱のためかやや黒化する。砂岩。
5	299	2236	砥石	Ⅷ層 11B14区	4.7	5.0	3.8	107.3	1	な　し	上面に平坦な砥面を残す砥石破片。右側部下半と下面の一部が生きており、残る左寄りの側部が複数の破面となっている。表面にはひび割れが目立ち、ひび割れが原因となり破片化したものであろう。石質からみると中砥に相当する。砂岩。
5	300	2239	砥石	Ⅷ層 9D12区	6.6	5.5	3.1	156.7	1	な　し	上面が砥面となった厚さ3cm程の転石を用いた砥石破片。側部3面が破面で被熱痕があり、細かいひび割れも発達する。砥石としては中砥相当。石材は流紋岩。
5	301	2249	砥石	Ⅷ層 8D12区	8.8	11.4	4.7	537.0	1	な　し	2片が接合した転石を利用した自然石砥石の破片。上面左側が浅くくぼんだ砥面となっており、右側の肩部から側部には転石の表面を残す。残る側部から下面は破面とひび割れからの剝離面が混在する。中砥相当で、構成No.100や構成No.299が石質や割れ方からみて同一個体の可能性あり。石材は砂岩。
5	302	2254	砥石	Ⅷ層 13C17区	17.6	9.7	9.1	1588.9	1	な　し	上・下面と右側部に加えて肩部が砥面となった大型の砥石破片。厚さは7.5cm程で、砥面は各面とも平坦化が進む。残る側部は破面となっている。肩部の砥面には筋状の刃物傷が並ぶ。2片が接合し置き砥と推定される。荒砥から中砥として用いられたものか。ドレライト。
5	303	2230	砥石	Ⅷ層 5D14区	8.4	3.3	0.9	53.1	1	な　し	厚さ8mm程の扁平な転石を利用した自然石砥石。上・下面ともに砥面となっており、側部の稜の部分にも砥面が伸びている。やや硬質で構成No.304の砥石とも似る。上面の中央部に刃物傷が少々あり。頁岩。
5	304	2231	砥石	Ⅷ層 14D7区	9.6	3.8	1.4	82.1	1	な　し	構成No.303と似た厚さ1.4cm程の扁平な自然石砥石。稜の部分も砥面として使われているが、上・下面が主たる砥面となる。硬質ではあるが仕上砥に属する可能性大。頁岩。
5	305	2255	砥石	Ⅷ層 6C6区	15.8	6.0	3.3	350.5	1	な　し	2片が接合した扁平棒状の自然石砥石。上・下面の中央部が砥面となっており、側部には砥痕が認められない。砥痕はやや方向がまちまちで、使われ方がやや雑となっている。中砥から仕上砥の中間的な石質を持つ。流紋岩質凝灰岩。
5	306	2250	砥石	Ⅷ層 7D21区	12.6	13.0	6.0	1220.0	1	な　し	上面が砥面となった厚さ6cm程の扁平な自然石砥石。右下手側側部の3cm程の範囲が砥面と思われる。側部3面が破面で全体が被熱しており、下面は部分的に吸炭する。中砥相当か。花崗岩。
5	307	2248	砥石	Ⅷ層 9D15区	8.5	13.2	5.1	474.3	1	な　し	上面と右側部が砥面となった転石を利用した自然石砥石の表面破片。残る側部から下面はシャープな破面となっている。石質的には構成No.308と同じと見られるが別個体。やや大振りの自然石砥石の破片か。中砥から仕上砥であろう。砂岩。
5	308	2256	砥石	Ⅷ層 7C15区	22.6	13.2	8.3	3620.0	1	な　し	不整楕円形の平面形を持つ厚さ8.3mm程の自然石砥石。上・下面と右側部が砥面で、下手側の側部は破面となっている。また、下面の中央部が舟底状に突出して、細かい打痕が密に残されている。砥石としての使用後に何かを載せて敲いた痕か。石質は構成No.307と似ており、砥石としては仕上砥に近い。砂岩。
5	309	2252	砥石	Ⅷ層 7B21区	10.0	9.2	16.0	1340.0	1	な　し	上面と右側の肩部が砥面となった、16cm以上の厚さを持つ自然石砥石破片。側部は全周が破面となっており、被熱も強い。砥痕はあまく、砥石としては中砥程度か。砂岩。

別表4　鉄関連遺物観察表（23）

構成図No.	構成No.	遺物No.	遺物種類	出土位置	計測値（cm）			重量（g）	磁着度	メタル度	備考
					長さ	幅	厚さ				
5	310	2259	鉄床石又は台石	Ⅷ層 5B1区	18.9	17.2	7.4	3880.0	1	なし	平面形が不整円形をした厚さ7.4cm程の鉄床石又は台石破片。丸みを持った扁平な転石を用いたもので、上・下面の中央部に径5～6cm程の範囲で浅い打痕を残す。粗粒黒雲母角閃石斑状花崗岩製で、鉄床石やハンマーストーンとして用いられる場合がある。打痕は浅くはっきりした被熱痕も認めにくい。
5	311	2258	被熱石	Ⅷ層 7C8区	20.4	18.2	13.0	4280.0	1	なし	側部4面と下面が複雑な破面となった被熱石破片。やや大型の転石を利用したもので、上面と右側の肩部にはもとの転石の表面を残している。表層が赤化して肩部の一部が吸炭する。石質は緻密ながら鉄床石として用いられる場合もあり構成遺物中に含めた。なお、本遺跡では用途不明の被熱石が多量に出土しているが、鉄関連遺物としての証拠に欠けるため構成中には含めていない。斑岩。
5	312	2386	鍛冶滓 （含鉄）	SE040	3.5	2.4	1.5	11.4	4	錆化（△）	平面形が不整多角形をした小塊状の含鉄の鍛冶滓。表面は薄皮状の酸化土砂に覆われており、内部には不定形な滓部が広がっている。全体に弱いながらも磁着傾向を示す。本来より錆化が進んだ資料か。
5	313	2412	椀形鍛冶滓 （特大）	SE674	12.6	9.6	6.1	885.4	3	なし	2片が接合した特大の椀形鍛冶滓破片。左側部が主破面で、上手側の肩部にも小破面あり。上面は平坦気味で、左側の肩部が羽口先寄りのためかくぼんでいる。下面は椀形となる。滓質は緻密で気孔は少ない。

別表5　鉄関連遺物分析資料一覧表

（滓：メタル又は胎土）

資料番号	帰属層位	出土位置	遺構名	構成№	遺物種類	重量（g）	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	検鏡		硬度	EPMA	X線回折	化学分析		耐火度	カロリー	放射化分析	断面樹脂	分析位置指定	採取方法	観察	集合写真	モノクロ	カラー	実測図	前含浸	X線透過
1	XI層	11D6	SK3128	5	椀形鍛冶滓（極小）	51.8	3	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	長軸端部 1/2	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
2	VIII層	9C21	SD1077	21	椀形鍛冶滓（中・二段）	478.8	4	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	長軸端部 1/5	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
3	VIII層	10D7	SD1077	23	椀形鍛冶滓（小）	153.2	4	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	長軸端部 1/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
4	VIII層	10D7	SD1077	25	椀形鍛冶滓（極小）	67.7	3	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	短軸端部 1/2	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
5	VIII層	7D	SK1355	93	再結合滓	280.0	4	なし	再結合滓として	○	○	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	短軸端部 1/4	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
6	VIII層	7D22	SD1377	59	椀形鍛冶滓（大・二段）	793.2	4	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	短軸端部 1/6	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
7	VIII層	7D17	SD1377	62	椀形鍛冶滓（中・二段）	354.9	3	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	短軸端部 1/4	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
8	VIII層	7D22	SD1377	68	椀形鍛冶滓（極小）	95.8	3	なし	滓部を	−	○	−	○	−	−	○	−	−	−	−	−	短軸端部 1/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
9	VIII層	7D22	SD1377	71	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）	64.4	4	H（○）	滓部を中心に	−	◎	−	○	−	−	○	−	−	−	−	○	短軸端部 1/2	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
10	VIII層	7D	SW1352	89	粒状滓（6点）	−	−	なし	粒状滓として	○	○	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	必要品	選　択	○		○	○	−	−	−
11	VIII層	7D	SW1352	90	鍛造剝片（6点）	−	−	なし	鍛造剝片として	○	○	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	必要品	選　択	○		○	○	−	−	−
12	VIII層	7C	SB1500-P9	51	羽口（鍛冶・先端部）	34.4	5	なし	羽口として	−	◎	−	−	−	−	−	○	○	−	−	−	短軸端部 2/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	−
13	VIII層	10D6	包含層	231	鍛冶滓（含鉄）	22.3	6	錆化（△）	滓部を中心に	−	◎	−	○	−	−	○	−	−	−	−	○	短軸端部4/5	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
14	VIII層	7E3	包含層	227	鍛冶滓（含鉄）	32.1	5	M（◎）	メタル部を中心に	○	−	◎	○	−	−	○	−	−	−	−	○	短軸端部4/5	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
15	VIII層	13C	SK2119	117	椀形鍛冶滓（極小･含鉄製品？）	67.6	6	M（◎）	メタル部を中心に	○	−	◎	○	○	○	○	−	−	−	−	○	長軸端部 1/2	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
16	VIII層	8A11	SK1107	133	鉄製品（鍛造品）	1.1	3	M（◎）	メタル部を中心に	○	−	◎	○	○	○	−	−	−	−	−	○	短軸端部 2/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
17	VIII層	5D15	包含層	233	鍛冶滓（含鉄製品）	7.5	4	錆化（△）	メタル部を中心に	−	−	◎	○	−	−	−	−	−	−	−	○	長軸端部 2/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
18	VIII層	8B8	SK1115	134	鉄製品（鍛造品）	8.8	6	H（○）	メタル部を中心に	○	−	◎	−	−	−	−	−	−	−	−	○	長軸端部 1/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
19	VIII層	8C23	包含層	251	鉄製品（鍛造品）	1.8	5	M（◎）	メタル部を中心に	○	−	◎	○	○	○	−	−	−	−	−	○	短軸端部 1/2	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
20	VIII層	7B11	包含層	267	鉄製品（鋳造品）	36.9	4	錆化（△）	メタル部の錆化部分を中心に	−	−	◎	−	−	−	−	−	−	−	−	○	長軸端部 1/2	直線状の切断	○		○	○	○	−	○
21	VIII層	11E7	包含層	277	鉄床石？（滓付き）	36.5	2	なし	滓部を中心に	−	◎	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	長軸端部 1/3	直線状の切断	○		○	○	○	−	−
22	VIII層	10D2	包含層	281	炉壁（鍛冶炉）	24.8	2	なし	炉壁として	−	◎	−	−	−	−	−	−	○	−	−	−	長軸端部 3/4	直線状の切断	○		○	○	○	−	−

※資料番号は分析資料に付した通し番号、構成№は整理段階で鉄関連遺物に付した通し番号である。

（作表：穴澤義功）

別表6　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（1）

分析資料１

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（XI層）	構成№	5	分析	項　目	滓	メタル
	出土位置	11D6区 SK3128	時期：根拠	9世紀中葉：出土土器（XI層）		マクロ		
試料記号	検　鏡：SEI-1 化　学：SEI-1 放射化：　—	計測値 長径 4.6㎝ 短径 4.1㎝ 厚さ 2.8㎝ 重量 51.8ｇ	色　調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度：破片 地：黒褐色・灰色		検　鏡 硬　度 EPMA	○ ○	
				破面数：3		X線回折 化　学 耐火度	 ○	
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（極小）		磁着度：3	前含浸：—		カロリー 放射化		
			メタル度：なし	断面樹脂：—		X線透過		○

観察所見　平面形が不整楕円形をした極小の椀形鍛冶滓破片。左側面から上手側の底面の一部に加えて、左側部下半が小さな破面となっている。破面数は３を数える。上面は浅くくぼむ自然面で、下手側はやや盛り上がる。左側部は木炭痕の残る自然面となっており、形状は乱れている。最も肥厚する部分はこの左側部で、中央部は小さく突出する。右側部から下面は緩やかな傾斜面で、灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が薄皮状に貼り付いている。炉床土はわずかに砂粒を含む粒子の細かい砂質土となる。本来の椀形鍛冶滓の中核部から右側の肩部破片か。透過Ｘ線像には、やや濃淡のある中小の気孔が認められ、全体が滓部と判断される。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部が黒褐色となる。

分析部分　長軸端部 1/2 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。

備　考　極小の椀形鍛冶滓の８割方の破片と推定される。本遺跡から出土した鍛冶関連遺物は、Ⅷ層（10 世紀前半）からの出土品が主体で、分析資料№１は唯一、XI層からの出土（9 世紀中葉）品であるという違いを持っている。遺構面としては上下の関係にあり、より前段階の鍛冶遺構と判断されている。

分析資料２

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	21	分析	項　目	滓	メタル
	出土位置	9C21区 SD1077	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ		
試料記号	検　鏡：SEI-2 化　学：SEI-2 放射化：　—	計測値 長径 12.0㎝ 短径 7.4㎝ 厚さ 6.1㎝ 重量 478.8ｇ	色　調 表：黄褐色～黒褐色	遺存度：破片 地：黒褐色・灰褐色		検　鏡 硬　度 EPMA	○ ○	
				破面数：3		X線回折 化　学 耐火度	 ○	
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（中・二段）		磁着度：4	前含浸：—		カロリー 放射化		
			メタル度：なし	断面樹脂：—		X線透過		○

観察所見　平面形が不整菱形をしたかなり異形の椀形鍛冶滓。２つないし３つの椀形鍛冶滓が水平方向を違えて重層しており、それに破面が加わり異形の原因となっている。主破面は側部にある角度の異なる破面で、椀形鍛冶滓の重層と突き動かしにより生じたものと推定される。破面数は３としておく。左上手側の側部は先行する小型の椀形鍛冶滓で、中央部から右寄りの椀形鍛冶滓が重層する形となる。右側の椀形鍛冶滓は水平位置が途中で変えられており、上面が下手側と現在の上面に分かれている。滓質は当初の小型椀形鍛冶滓の方が緻密で、下面の一部に灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土を残す。一方、右側の滓部は上面や内部に 2cm 大以下の木炭痕を残し、より大型化している。また、鍛冶炉の炉床自体の形状も一部が変更されている可能性もある。色調は表面の酸化土砂が黄褐色で、滓部は表面・地とも黒褐色となる。

分析部分　長軸端部 1/5 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。

備　考　本遺跡のⅧ層（10 世紀前半）に属する椀形鍛冶滓には、大型から極小までが含まれており、大型から中型に関しては単純に重層するものや、ねじれた形で重層する資料の比率が高い。また、その重層の在り方はまちまちで、下層が大きく上層が小型や極小となる椀形鍛冶滓もあれば、逆に下方が小さく上方が大きくなる事例も確認される。その意味では専業鍛冶的ではなく、むしろ、鍛冶炉の清掃を疎かにしたまま次の作業を行っている印象を受ける。さらに、前段階の滓を定形的な形で突き動かしてはおらず、かなり偶然性の高い鍛冶作業の在り方をうかがわせる。官営の鍛冶工房の調査例などからすると異質な感じを持つ。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（2）

分析資料３

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	23	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	10D7 区 SD1077	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-3 化　学：SEI-3 放射化：　—	計測値 長径 7.2 ㎝ 短径 6.8 ㎝ 厚さ 3.2 ㎝ 重量 153.2ｇ	色　調 表：黄褐色～黒褐色	遺存度：完形		検　鏡	○	
						硬　度	○	
						ＥＰＭＡ		
			地：濃茶褐色～黒褐色	破面数：0		Ｘ線回折		
						化　学	○	
						耐 火 度		
遺物種類（名 称）	椀形鍛冶滓（小）		磁着度：4	前含浸：—		カロリー		
						放 射 化		
			メタル度：な し	断面樹脂：—		Ｘ線透過		○

観察所見　平面形が不整円形をした小型の椀形鍛冶滓。肩部がやや乱れている以外は典型的な椀形鍛冶滓の形態を持っている。上面は中央部に向かってわずかにくぼんでおり、1cm 大前後の木炭痕が連続的に残されている。左上手側は瘤状に盛り上がるものの含鉄部ではない。左右の肩部２か所は小さく突出する。側面から下面は中央部がやや尖り気味のきれいな椀形を示し、表面には粉炭痕が密集する。右側部を中心に径 1.9mm 大以下の粒状滓が３か所に貼り付いている。透過Ｘ線像では右寄りの肩部に、スポンジ状で気孔の目立つ滓部の広がりが確認される。表面全体に薄い酸化土砂が貼り付いており、その一部は再結合滓化している。色調は酸化土砂が茶褐色で、滓部は濃茶褐色から黒褐色となる。

分析部分　長軸端部 1/3 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。

備　考　平面的な大きさからすれば極小の椀形鍛冶滓に相当するが、比較的、滓の密度が高いためか、重量区分では小型の椀形鍛冶滓となる。含鉄部は持たないが、上面中央部やや左寄りの部分では磁着反応を示す。側面から下面はごく一部が鍛冶炉の炉床土に接しているものの、滓の大半は粉炭層に乗った状態となる。本遺跡のⅧ層に属する遺構面からは鍛冶炉と推定される遺構が 10 基検出されており、椀形鍛冶滓の主体は小型から極小のグループに偏っている。通常、こうした滓は鍛錬鍛冶の作業に伴う場合が多く、本遺跡でもその可能性を持っている。なお、分析資料に加えた鉄製品並びに構成された各種の鉄製品の中にははっきりした鉄器未製品は含まれていない。むしろ、折れ曲がった小釘や折り曲げられた鉄製品を内部に含む椀形鍛冶滓の存在から、一部、故鉄を原料にしたリサイクル鍛冶も、主体ではないにしろ一定の比率を占めていた可能性が高い。

分析資料４

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	25	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	10D7 区 SD1077	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-4 化　学：SEI-4 放射化：　—	計測値 長径 4.7㎝ 短径 4.0㎝ 厚さ 2.3㎝ 重量 67.7ｇ	色　調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度：破片		検　鏡	○	
						硬　度	○	
						ＥＰＭＡ		
			地：黒褐色・灰色	破面数：2		Ｘ線回折		
						化　学	○	
						耐 火 度		
遺物種類（名 称）	椀形鍛冶滓（極小）		磁着度：3	前含浸：—		カロリー		
						放 射 化		
			メタル度：な し	断面樹脂：—		Ｘ線透過		○

観察所見　平面形が不整楕円形をした極小の椀形鍛冶滓。下手側の側部が主破面で、左側の肩部にも小破面を持っている。破面数は２を数える。滓は緻密で、上面には羽口先由来と推定される発泡した粘土質溶解物が残されている。表皮の一部はくすんだ紫紅色を示す。肩部は右側が小さく突出するものの、全体的には整っている。側面から下面は短軸方向に長めの椀形で、下面の中央部から左側部下半には灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が薄く貼り付いている。炉床土は微細な粒子主体のシルト質。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は表面・地ともに黒褐色となる。

分析部分　短軸端部 1/2 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。

備　考　小さいながらも形の整った椀形鍛冶滓である。透過Ｘ線像から見ると内部に気孔を残すものの、滓の密度は比較的高い。気孔は側面から下面の表皮寄りに目立っている。大きさや質感から言えば鍛錬鍛冶滓の可能性が強い。なお、極小で下面に炉床土が貼り付いている状態は、分析資料№１としたⅪ層出土の小型椀形鍛冶滓と類似点を持っている。両者とも一部が欠けているが、重量的には比較的近い。但し、出土層位には前後の時期差があると推定されており、内部の気孔の在り方や炉床土の性質は微妙に異なっている。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（3）

分析資料５

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	93			分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7D 区 SK1355	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）				マ ク ロ	○	
試料記号	検　鏡：SEI-5 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径 10.2㎝ 短径 6.7㎝ 厚さ 4.8㎝ 重量 280.0ｇ	色　調	表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度	破片		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	○	
				地：濃茶褐色～黒褐色	破面数	6		Ｘ線回折 化　学 耐 火 度		
遺物種類（名 称）	再結合滓		磁着度	4	前含浸	—		カロリー 放 射 化		
			メタル度	な　し	断面樹脂	—		Ｘ線透過		○

観察所見　平面形が不整六角形をした 4cm 前後の厚みを持つ再結合滓破片。上・下面や側部の一部が生きているものの、表面は破面主体で、破面数は 6 を数える。イガイガした厚板状の再結合滓で、上手側が最も厚くなる。再結合滓の母体は 5mm 大以下の粉末状の鍛冶滓片で、加えて粘土質溶解物や金床石等の破片も含まれている。また、鍛造剥片や粒状滓も点々と確認される。鍛造剥片は、表・裏面が黒褐色のものから薄手で表・裏面とも青光りする資料が含まれている。下面の中央部は剝離面様となっており、浅い土坑状の遺構中で再結合したことをうかがわせる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓粉主体の滓部が濃褐色から茶褐色となる。鉄床石は灰色から灰白色。

分析部分　短軸端部 1/4 を直線状に切断し、再結合滓として分析に用いる。残材返却。

備　考　やや比重の高い粉末状の鍛冶滓片主体の再結合滓。母体となった最大の再結合滓の厚さは 10cm にも達するものがある。本資料はそれら端部に近いものと推定される。鉄床石の破片や羽口先由来の粘土溶解物も含まれており、鍛冶炉周辺の微細な廃棄物を溜め込んだ排滓坑などで形成されたものであろうか。鍛造剥片に表裏とも青光りする薄手の資料を含むことから、鍛錬鍛冶の後半段階にまで工程としては進んでいた可能性がある。透過Ｘ線像には内部の密度が不均一な、モヤモヤした状態が写し込まれている。

分析資料６

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	59			分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7D22 区 SD1377	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）				マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-6 化　学：SEI-6 放射化：　—	計測値 長径 12.1㎝ 短径 9.0㎝ 厚さ 5.9㎝ 重量 793.2ｇ	色　調	表：黄褐色～灰色～灰黒色	遺存度	ほぼ完形		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	○ ○	
				地：灰黒色～黒褐色	破面数	1		Ｘ線回折 化　学 耐 火 度	○	
遺物種類（名 称）	椀形鍛冶滓（大・二段）		磁着度	4	前含浸	—		カロリー 放 射 化		
			メタル度	な　し	断面樹脂	—		Ｘ線透過		○

観察所見　平面形が短軸方向に長手の長楕円形をした椀形鍛冶滓。ほぼ完形品で上手側の側部が二段となっており、重層した椀形鍛冶滓である。現在の重量は 793.2 ｇとなっていることから滓の区分を大型としているが、上下の滓を別物と考えれば、中型の椀形鍛冶滓が上下に重層しているものと見ることもできる。上・下面が平坦気味の扁平な椀形鍛冶滓で、この面には二次的に固着した灰色の土砂が広がっている。覆土となった溝中のシルトであろう。上面の滓は上手右側の肩部がわずかに欠けている。上下の滓の中心位置が短軸方向にずれており、上面の滓はやや小振りで中心位置が下手寄りとなっている。上面の滓の表面には浅い木炭痕が点々と確認される。滓の扁平さは両者とも似ており、破面に露出する気孔などから見て滓質も比較的類似してやや緻密。下面は浅い皿状で炉床土の圧痕に覆われている。左側部下半には灰色に被熱した炉床土が一部残される。色調は表面の酸化土砂が黄褐色で、付着するシルト質の土砂が灰色となる。滓部は表面が風化しているためか灰黒色で、地は黒褐色となる。

分析部分　短軸端部 1/6 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。

備　考　鍛冶作業の途中で上段の滓の中心位置が下手側にずれた可能性が高い重層した椀形鍛冶滓である。滓質的には両者が類似している可能性が高く、滓量は下段から上段にかけてわずかに減っている。西部遺跡は分析資料№２の備考欄でも述べているように、重層する椀形鍛冶滓が比較的目立っている遺跡である。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（4）

分析資料７

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	62	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7D17 区 SD1377	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）		マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-7 化　学：SEI-7 放射化：　—	計測値 長径 10.7㎝ 短径 9.0㎝ 厚さ 3.9㎝ 重量 354.9ｇ	色　調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度：ほぼ完形		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	○ ○	
			色　調 地：黒褐色	破面数：2		Ｘ線回折 化　学 耐 火 度	○	
遺物種類（名 称）	椀形鍛冶滓（中・二段）		磁着度：3	前含浸：—		カロリー 放 射 化		
			メタル度：な　し	断面樹脂：—		Ｘ線透過		○

観察所見	平面形が不整楕円形をした全体に平板な椀形鍛冶滓。下手側上段に極小の椀形鍛冶滓の半欠品と推定される滓が乗っており、二段椀形鍛冶滓となる。ほぼ完形品で明瞭な破面は上段の滓の上手右寄りのみとなる。上下とも滓の上面は木炭痕が連続する平坦な面で、わずかに中央部がくぼんでいる。木炭痕は 1cm 大前後が主体。滓の肩部は左寄りはやや出入りがあり、右寄りの方が健全となる。上段の滓は本来は下段の滓の上面の一部に拡がっていた可能性を持ち、そのためか、下段の滓の上面表皮が下手寄りを中心に薄く剝落している。下段の滓の側面から下面は浅い椀形で左寄りを中心に覆土となったシルトが固着している。また、下手側の端部寄りには鍛冶炉の炉床土と考えられる灰色の土が残されている。滓表面は木炭痕と炉床土の剝離痕が混在した状態で、どちらかというと木炭痕の方が目立つ。滓質は外観的にも透過Ｘ線像から見ても密度がやや低く、内部に点々と気孔等の隙間を生じている。色調は滓部を中心に黒褐色で、酸化土砂部分が茶褐色、付着するシルトは灰褐色となる。
分析部分	短軸端部 1/4 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。
備　考	上下の滓の大きさに差を持つ二段椀形鍛冶滓。上段の滓は厚みやその形状から見て極小の椀形鍛冶滓と考えられ、下段の滓は中型に属する。こうした上下の関係は鍛冶工程の差を示す可能性を持っている。まず、下段の中型の滓が形成された後、滓量の少ない工程が行われている証拠となる。また、上下ともに鍛錬鍛冶滓であったとしても、滓量は後段階ほど少なくなっていることが分かる。

分析資料８

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	68	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7D22 区 SD1377	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）		マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-8 化　学：SEI-8 放射化：　—	計測値 長径 6.7㎝ 短径 5.7㎝ 厚さ 2.7㎝ 重量 95.8ｇ	色　調 表：茶褐色～灰白色～黒褐色	遺存度：完形		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	○ ○	
			色　調 地：黒褐色	破面数：0		Ｘ線回折 化　学 耐 火 度	○	
遺物種類（名 称）	椀形鍛冶滓（極小）		磁着度：3	前含浸：—		カロリー 放 射 化		
			メタル度：な　し	断面樹脂：—		Ｘ線透過		○

観察所見	平面形が不整楕円形をした完形の椀形鍛冶滓。サイズは極小で、上・下面が細かい粉炭痕により覆われている。右方向がやや厚みを持ち、上手側の 1/4 程がやや上に持ち上げられたような形態を示す。上面は中央部がくぼみ側部に向かい緩やかに立ち上がる。肩部はやや不規則で滓内部も木炭を噛み込んでいるためか、表面や内部に木炭痕が目立つ。下面はきれいな椀形とならず、ややゆがんだ椀形となっている。表面には 1.2cm 大の木炭痕や木炭の残欠が密集するように残されている。なお、上・下面には部分的に覆土となったシルトが層状に貼り付いている。透過Ｘ線像では内部に多量の気孔を含む像が読み取れ、見かけより内部はスカスカとなっていることが分かる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部が黒褐色となる。
分析部分	短軸端部 1/3 を直線状に切断し、滓部を分析に用いる。残材返却。
備　考	分析資料№４と№７の椀形鍛冶滓の中間的な大きさで、密度の低い滓である。極小の椀形鍛冶滓といっても分析資料№４のような、やや密度の高い小塊状の資料から、本資料のような、一応、椀形の形態を持ちながらも外面が密集した粉炭痕に覆われ、内部がスカスカの滓というような資料差がある。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（5）

分析資料９

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	71	分析	項　目	滓	メタル
	出土位置	7D22 区 SD1377	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ		
試料記号	検　鏡：SEI-9 化　学：SEI-9 放射化：　—	計測値 長径 5.9㎝ 短径 4.0㎝ 厚さ 2.8㎝ 重量 64.4ｇ	色　調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度：破片		検　鏡	◎	
						硬　度	○	
						ＥＰＭＡ		
			地：黒褐色	破面数：1		Ｘ線回折		
						化　学	○	
						耐火度		
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（極小・含鉄）		磁着度：4	前含浸：—		カロリー		
						放射化		
			メタル度：H（○）	断面樹脂：○		Ｘ線透過		○

観察所見　右側部寄りの上・下面が破面となった極小の椀形鍛冶滓。平面形は不整楕円形で、横断面も楕円気味となっている。表面は茶褐色の酸化土砂に覆われ、もとの表皮の６割以上が薄皮状に剝離してしまっている。一見、完形品のように見えるが、この表皮の剝落により破面が形成されている。上・下面とも中央部が突出するような形態で肩部がすべて丸みを持っている。含鉄部は厚みを持った中核部と推定され、透過Ｘ線像でもやや上手寄りの中核部に少しまとまった鉄部が確認される。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、滓部は黒褐色となる。

分析部分　短軸端部 1/2 を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備　考　重量は 64.4 ｇを測り、分析資料№４の 67.7 ｇと近似する。しかし、当資料の方が含鉄のためか磁着度が高い。また、分析資料№ 15 も椀形鍛冶滓としては同類に属し、重量も 67.6 ｇを測る。ただし、内部に鉄製品が含まれている等の違いを持っている。こうしたほぼ重量が同じグループに属しながらも、内部に含まれる鉄部に相違点を持つことが、本遺跡での作業の内容を判別するための重要な手掛かりであろう。

分析資料10

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	89	分析	項　目	滓	メタル
	出土位置	7D 区 SW1352	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ	○	
試料記号	検　鏡：SEI-10 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径 — ㎝ 短径 — ㎝ 厚さ — ㎝ 重量 — ｇ	色　調 表：—	遺存度：—		検　鏡	○	
						硬　度		
						ＥＰＭＡ		
			地：—	破面数：—		Ｘ線回折		
						化　学		
						耐火度		
遺物種類（名称）	粒状滓（6 点）		磁着度：—	前含浸：—		カロリー		
						放射化		
			メタル度：な　し	断面樹脂：—		Ｘ線透過		

観察所見　SW1352（鍛冶炉）は、SB1500 の９間×４間とした柱間を持つ大型の掘立柱建物の南隅に位置する床面から検出された。鍛冶関連の微細遺物の採取方法は鍛冶炉の覆土上面を削り取るようにして行っている。分析資料の抽出に当たっては、鍛冶関連遺物混じりの土砂を洗浄・分離の後、標準磁石とフルイにより粒状滓と鍛造剝片を分離している。資料を磁着の強弱に二分した後、大きさ順に３点ずつの合計６点を選択した。以下、詳細は別表参照。

分析部分　必要品を選択し、粒状滓として分析に用いる。残材返却。

備　考　SW1352 鍛冶炉は、掘立柱建物の床面となるシルト層に掘り込みを設けて設置されたもので、出土状態から見て鍛冶炉の上面が既に飛んでいる状態と考えられる。壁の一部は強く焼けて縞状になっており、炉床中央部はかなり突き崩されているためか被熱層が薄い。辛うじて残る炉壁の外面には、やや広い範囲で被熱面が広がっている。なお、SB1500 と SD1377 は主体となる掘立柱建物とその周囲を巡る区画溝であり、分析資料№６～ 11 は一連の遺物群であるということもできる。また、SW1352 鍛冶炉からは単独の椀形鍛冶滓は出土しておらず、3cm 大の鍛冶滓５点と 574.7 ｇを測る再結合滓が出土している。

別表 6　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（6）

分析資料11

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	90	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7D 区 SW1352	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マ ク ロ	○	
試料記号	検　鏡：SEI-11 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径　—　cm 短径　—　cm 厚さ　—　cm 重量　—　g	色　調 表：　— / 地：　—	遺存度 — / 破面数 —		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	○	
遺物種類（名 称）	鍛造剥片（6 点）		磁着度 —	前含浸 —		X 線回折 化　学 耐 火 度		
			メタル度 な し	断面樹脂 —		カロリー 放 射 化		
						X 線透過		

観察所見　SW1352（鍛冶炉）は、SB1500 の 9 間×４間とした柱間を持つ大型の掘立柱建物の南隅に位置する床面から検出された。鍛冶関連の微細遺物の採取方法は鍛冶炉の覆土上面を削り取るようにして行っている。分析資料の抽出に当たっては、鍛冶関連遺物混じりの土砂を洗浄・分離の後、標準磁石とフルイにより粒状滓と鍛造剥片を分離している。資料を磁着の強弱に二分した後、厚さ順に 3 点ずつの合計 6 点を選択した。以下、詳細は別表参照。

分析部分　必要品を選択し、鍛造剥片として分析に用いる。残材返却。

備　考　SW1352 鍛冶炉は、掘立柱建物の床面となるシルト層に掘り込みを設けて設置されたもので、出土状態から見て鍛冶炉の上面が既に飛んでいる状態と考えられる。壁の一部は強く焼けて縞状になっており、炉床中央部はかなり突き崩されているためか被熱層が薄い。辛うじて残る炉壁の外面には、やや広い範囲で被熱面が広がっている。なお、SB1500 と SD1377 は主体となる掘立柱建物とその周囲を巡る区画溝であり、分析資料№ 6 ～ 11 は一連の遺物群であるということもできる。また、SW1352 鍛冶炉からは単独の椀形鍛冶滓は出土しておらず、3cm 大の鍛冶滓 5 点と 574.7 g を測る再結合滓が出土している。

分析資料12

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	51	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7C 区 SB1500-P9	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-12 化　学：SEI-12 放射化：　—	計測値 長径　5.5cm 短径　3.5cm 厚さ　1.8～2.1cm 重量　34.4 g	色　調 表：明褐色～黒色 / 地：黒色・赤褐色	遺存度 破片 / 破面数 4		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	◎	
遺物種類（名 称）	羽口（鍛冶・先端部）		磁着度 5	前含浸 —		X 線回折 化　学 耐 火 度		○ ○
			メタル度 な し	断面樹脂 —		カロリー 放 射 化		
						X 線透過		

観察所見　細身の羽口の先端部破片。残存部分は正面から見て左側の部分で、全周の 2/5 程度の範囲となる。通風孔部の径は推定で 2.0cm 前後で、身厚にはやや差があり、厚いところで 2.1cm、薄いところで 1.8cm を測る。羽口の先端部から肩部は黒色ガラス化しており、小範囲に残存する体部表面は風化した明褐色の滓に薄く覆われている。体部外面は灰色に被熱する。溶損角度はマイナス 20 度を超える。胎土は微細な砂粒を点々と含むのもで密度は緻密。色調は表面が明褐色から褐色で、ガラス質滓が黒色となり、胎土は淡い赤褐色に被熱する。

分析部分　短軸端部 2/3 を直線状に切断し、羽口として分析に用いる。残材返却。

備　考　本遺跡からは通風孔部の径が 1 ～ 2cm 前後のものと 3cm 前後の羽口が出土している。羽口の形態も通風孔部の径の大小により連動するように変化する。本例は通風孔径の比較的小さなグループの一つである。北陸圏は弥生時代後期から伝統的に細身の羽口が用いられている地域で、もう一方の太身の羽口は、近畿中枢部から関東を経て東北や北陸にまで広がる古代タイプである。従って、本遺跡からは両グループの羽口が出土していることになる。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（7）

分析資料13

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺跡名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	231	分析	項目	滓	メタル
	出土位置	10D6区 包含層	時期：根拠	10世紀前半：出土土器（Ⅶ層）		マクロ		
試料記号	検鏡：SEI-13 化学：— 放射化：—	計測値 長径 3.4㎝ 短径 2.8㎝ 厚さ 2.7㎝ 重量 22.3ｇ	色調 表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度：破片		検鏡	◎	
						硬度	○	
						EPMA		
			色調 地：濃茶褐色～黒褐色	破面数：２？		X線回折		
						化学	○	
						耐火度		
遺物種類（名称）	鍛冶滓（含鉄）		磁着度：6	前含浸：—		カロリー		
						放射化		
			メタル度：錆化（△）	断面樹脂：○		X線透過		○

観察所見　平面形が不整楕円形をした小塊状の含鉄の鍛冶滓。外観的には再結合滓様で、下面には分厚い酸化土砂が貼り付いている。上面は生きており、左右の側部は破面様のため破面数は２としておく。滓部は上半部主体で、含鉄部は左手寄りの芯部と考えられる。表面は細かい粉炭痕に覆われており、右側部から見ると、一見、極小の椀形鍛冶滓の肩部片に似ている。木炭痕の一部には木炭組織が点々と残されている。透過Ｘ線像は見かけの割にはしっかりとしており、内部が再結合滓ではないことが分かる。色調は表面酸化土砂が茶褐色で、滓部は濃茶褐色から黒褐色となる。

分析部分　短軸端部 4/5 を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。外周部の再結合滓にも留意のこと。残材返却。

備考　下面の酸化土砂は含鉄部に由来するものでなく、周辺の覆土由来であろう。包含層出土の含鉄の鍛冶滓として選択された分析資料２点の内の１点である。もう一方の分析資料№14はメタル部がＭ（◎）レベルで残存するが、本資料の方は既に錆化してしまっている。

分析資料14

出土状況	遺跡名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	227	分析	項目	滓	メタル
	出土位置	7E3区 包含層	時期：根拠	10世紀前半：出土土器（Ⅶ層）		マクロ		○
試料記号	検鏡：SEI-14 化学：SEI-14 放射化：—	計測値 長径 3.5㎝ 短径 2.7㎝ 厚さ 3.3㎝ 重量 32.1ｇ	色調 表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度：完形		検鏡		◎
						硬度		○
						EPMA		
			色調 地：濃茶褐色～黒褐色	破面数：0		X線回折		
						化学	○	
						耐火度		
遺物種類（名称）	鍛冶滓（含鉄）		磁着度：5	前含浸：—		カロリー		
						放射化		
			メタル度：Ｍ（◎）	断面樹脂：○		X線透過		○

観察所見　表面全体が薄皮状の酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。上手側の側部が酸化土砂の欠落部となっており、内部の丸みを持った小塊状の滓部が顔を出している。右側部下手側に突出する瘤状の部分は、磁着傾向から見て単なる土塊と見られる。含鉄部は中核にやや広く、透過Ｘ線像では内部に小塊状の含鉄部が含まれていることが確認される。外周部の酸化土砂の厚さは２～6mm と幅を持つ。含鉄部は弱いもので、主体は微細な気孔を含む滓部と考えられる。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、薄皮状の酸化土砂の芯部が濃茶褐色から茶褐色となり、むしろ、含鉄部の滓部の方が黒味が少ない。

分析部分　短軸端部 4/5 を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備考　破面に露出する芯部の形状から見ると左 90° 回転方向が正位となる可能性を持っている。この場合、外周部が丸みを持つ小さな椀形の形状を示し、上面がわずかながらも平坦となる。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（8）

分析資料15

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	117	分析	項　目	滓	メタル
	出土位置	13C 区　SK2119	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ		○
試料記号	検　鏡：SEI-15 化　学：SEI-15 放射化：　—	計測値 長径 5.3㎝ 短径 3.8㎝ 厚さ 3.4㎝ 重量 67.6ｇ	色調 表：黄褐色～茶褐色	遺存度：破片 地：濃茶褐色～黒色		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ Ｘ線回折 化　学 耐火度	○	◎ ○ ○ ○
遺物種類（名称）	椀形鍛冶滓（極小、含鉄製品？）		磁着度：6 メタル度：M（◎）	前含浸：— 断面樹脂：○		カロリー 放射化 Ｘ線透過		○

観察所見　表面が黄褐色の酸化土砂に覆われ、内部に鉄分または鉄製品を含む極小の椀形鍛冶滓。下手側側部の突出部は土砂部分で、上手側の側部を中心に丸みを持った滓部が顔を出している。下手側は破面のようにも見えるが、酸化土砂のためはっきりしない。左側部上手側には気孔を持つ滓表面が顔を出している。注目点は、外観的にも透過Ｘ線像からも、左上手寄りの芯部に長さ 3.3cm、幅 1.2cm 前後の含鉄部が確認される点にある。含鉄部の中央に長軸方向に向かう幅 2.5mm 程の隙間があり、一見、「U」字状に折り曲げられた鉄製品のようにも見える。しかし、像はぼんやりした状態で、鉄塊部分の芯部が錆化しているのかもしれない。上手側の側部左寄りの肩部には 7mm 程の範囲で左右方向へ伸びる鉄部の一部が顔を出している。色調は表面の酸化土砂が黄褐色から茶褐色で、地の滓部は黒褐色から黒色となる。

分析部分　長軸端部 1/2 を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備　考　見かけ上は分析資料№ 9 や№ 14 に近い、含鉄で丸みを持った外観を持つ滓である。酸化土砂に妨害されて内部の鉄部の性質がはっきりしないが、本遺跡では分析資料№ 17 のように、何らかの鉄製品を含む滓が確認されるのも事実である。

分析資料16

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	133	分析	項　目	滓	メタル
	出土位置	8A11 区　SK1107	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ		○
試料記号	検　鏡：SEI-16 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径 2.5㎝ 短径 0.3㎝ 厚さ 0.2㎝ 重量 1.1ｇ	色調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度：破片 地：黒褐色		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ Ｘ線回折 化　学 耐火度		◎ ○ ○ ○
遺物種類（名称）	鉄製品（鍛造品）		磁着度：3 メタル度：M（◎）	前含浸：— 断面樹脂：○		カロリー 放射化 Ｘ線透過		○

観察所見　下手側が弧状に折れ曲がっている小さな鍛造品破片。横断面形は径 3mm 弱の方形で両側端部は明らかに破面となっている。裏面には下手寄りを中心に酸化土砂が薄く貼り付いており、右側部を中心に直線状に伸びる鍛造痕が錆化した表面に露出している。一見、下手側が長方形断面のように見えるのは酸化土砂のためであろう。折れ曲がった下手側の端部は千切れられたような不自然な破面を示す。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、鉄製品自体の表面は黒褐色となる。

分析部分　短軸端部 2/3 を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備　考　外見的には細身の釘の体部から足部破片のように見える鉄製品。鍛造は進んでおり、上下方向に細かい層状の鍛造痕が認められる。鍛打痕は４方から鍛打された形態ではなく、主体は上下方向と見られる。釘以外の鉄製品なのかどうかは不明。透過Ｘ線像では上手側の錆化が進んで中空化しており、わずかに残るメタル部は中央部よりわずかに下手側から曲がりの手前部分までが中心となる。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（9）

分析資料17

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺跡名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	233	分析	項目	滓	メタル
	出土位置	5D15区　包含層	時期：根拠	10世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ		
試料記号	検鏡：SEI-17 化学：　— 放射化：　—	計測値 長径 2.5㎝ 短径 2.2㎝ 厚さ 1.4㎝ 重量 7.5ｇ	色調 表：茶褐色～濃茶褐色	遺存度：半完形 地：濃茶褐色 破面数：1？		検鏡 硬度 EPMA	○	◎
遺物種類（名称）	鍛冶滓（含鉄製品）		磁着度：4 メタル度：錆化（△）	前含浸：— 断面樹脂：○		X線回折 化学 耐火度 カロリー 放射化 X線透過		○

観察所見	小塊状の主体部から右側面中央に径 3mm 程の細い棒状の部分が突出する鍛冶滓または瘤状の酸化土砂に覆われた鉄製品破片。小塊状の部分は明瞭な滓部ではなく、それ自体が別の鉄酸化物の可能性も持っている。磁着は弱いながらも全面が反応する。なお、内部の鉄製品と見られる棒状の部分は長さ 1.8cm 前後で、最大幅は左側で約 2mm と細い。右側の端部は更に細くなっており、釘の足部様になる。塊状の部分と芯部に含まれている鉄製品のいずれもの錆化が進み、透過Ｘ線像では不明瞭な像となっている。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、地は濃茶褐色となる。
分析部分	長軸端部 2/3 を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。
備　考	性格のはっきりしない資料である。小塊状の部分を一応、鍛冶滓としているが、透過Ｘ線像ではかなり不明瞭な像となる。また、右回り 90 度回転方向が正位の可能性もある。その場合には、やや厚みを持った板状の物体に対して、直角方向に釘が打ち込まれている可能性もあり。メタル部は錆化してしまっているが、元組織の痕跡を期待する。

分析資料18

出土状況	遺跡名	西部遺跡（Ⅷ層）	構成№	134	分析	項目	滓	メタル
	出土位置	8B8区　SK1115	時期：根拠	10世紀前半：出土土器（Ⅷ層）		マクロ		○
試料記号	検鏡：SEI-18 化学：　— 放射化：　—	計測値 長径 4.5㎝ 短径 1.3㎝ 厚さ 0.5㎝ 重量 8.8ｇ	色調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度：破片 地：黒褐色 破面数：2		検鏡 硬度 EPMA		◎
遺物種類（名称）	鉄製品（鍛造品）		磁着度：6 メタル度：H（○）	前含浸：— 断面樹脂：○		X線回折 化学 耐火度 カロリー 放射化 X線透過		○

観察所見	刀子の柄部の可能性を持つ幅の狭い薄板状をした鉄製品破片。最大幅は 1.15cm 程度で、厚みは 4.5mm 前後と推定される。長軸の両端は破面となっている。左側の破面では芯部が錆化して抜けたためか中空となる。透過Ｘ線像には直線状の丁寧な鍛造痕が読み取れる。表面には薄皮状の酸化土砂が取り巻いており、左半分は酸化土砂が剝落してもとの表皮の一部が紫紅色となっている。色調は表面の酸化土砂が濃茶褐色で、地は濃茶褐色から黒褐色となる。
分析部分	長軸端部 1/3 を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。中間部分の２か所は小さくひび割れて接着剤で接合している。残材断面に樹脂塗布。残材返却。
備　考	短軸側の背部分は左半分が丸みを持っており、右側のほうが平坦度が高い。この点を重視するとすれば、刀子の刃部から切先側は右手方向に伸びる可能性を持つが、かなり不明瞭。

別表 6　鉄関連遺物分析資料詳細観察表 (10)

分析資料19

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	251	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	8C23 区　包含層	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）		マ ク ロ		○
試料記号	検　鏡：SEI-19 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径　4.0㎝ 短径　0.2～0.5㎝ 厚さ　0.2㎝ 重量　1.8ｇ	色　調 表：濃褐色～黒褐色	遺存度　破片		検　鏡		◎
						硬　度		○
						ＥＰＭＡ		○
			地：濃茶褐色～黒褐色	破面数　2		Ｘ線回折		○
						化　学		
						耐 火 度		
遺物種類（名 称）	鉄製品（鍛造品）		磁着度　5	前含浸　—		カロリー		
						放 射 化		
			メタル度　M（◎）	断面樹脂　○		Ｘ線透過		○

観察所見　細い棒状の鉄製品破片。横断面形はやや長方形で下手側へ向かい徐々に細くなっており、鉄鏃の茎部破片の可能性を持つ。端部は両側とも破面となっており、下手側は茎の端部と考えられる。鉄部の最大幅は約 5mm、最小幅は 2mm 強を測る。表面には薄皮状の酸化物が取り巻いており、風化が進んだためか微細な気孔様のくぼみも認められる。右側部の一部が赤褐色となっており、3 価の鉄酸化物と推定される。透過Ｘ線像では内部に切れ切れにメタル部が伸びており、外周部の酸化が進んでいることが分かる。

分析部分　短軸端部 1/2 を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備　考　本遺跡で出土した大型の鉄斧以外は鉄製品の残存状況は不良で、辛うじて含鉄部が確認された資料として分析資料№ 16・18・19 の 3 点が選択されている。いずれもメタル部は極微量の残存状況となる。ただし、鉄製品としては別種のものと推定され、同種の可能性のある資料については分析対象から除外している。釘状、刀子状、鏃状である。これらは鍛冶関連遺構からの出土品ではなく、包含層または包含層に接した SK1115 からの出土品である。分析意図は西部遺跡で使用されていた鉄製品の一般性状を調べる目的を持つ。なお、分析資料№ 20 は鍛造品ではなく鋳造品破片と推定されるが、これも同じ目的を持っている。

分析資料20

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	267	分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	7B11 区　包含層	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）		マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-20 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径　5.0㎝ 短径　2.1㎝ 厚さ　0.4㎝ 重量　36.9ｇ	色　調 表：茶褐色～黒褐色	遺存度　破片		検　鏡		◎
						硬　度		
						ＥＰＭＡ		
			地：濃茶褐色～黒褐色	破面数　3 ？		Ｘ線回折		
						化　学		
						耐 火 度		
遺物種類（名 称）	鉄製品（鋳造品）		磁着度　4	前含浸　—		カロリー		
						放 射 化		
			メタル度　錆化（△）	断面樹脂　○		Ｘ線透過		○

観察所見　厚さ 3mm 前後を測る薄板状の鋳造品破片。上下幅は 2.1cm を測り、左右の長さは 5cm を測る。表・裏面の右半分は厚い酸化土砂で覆われており、右側部には内部にある鉄製品の破面が露出している。外観上は、一見、鎌の刃部様で、短軸側の両端部は平坦化されている。特に上手側は外観的にも透過Ｘ線像から見ても直線的に途切れている。鉄鍋等の口唇部であろうか。透過Ｘ線像では下手側の端部も直線状に途切れているが完全に平坦化されているようには見えない。左側の端部はやや丸みを持って途切れており、錆化も進む。色調は表面の酸化土砂は茶褐色で、地の鉄部は濃茶褐色から黒褐色となる。

分析部分　長軸端部 1/2 を直線状に切断し、メタル部の錆化部分を中心に分析に用いる。残材断面に樹脂塗布。残材返却。

備　考　全体形状は鍛造品様ながら、右側部の破面から見ると鋳造品と考えられる。短軸側の両側部が平坦気味に途切れており刃部とは見えないことから、むしろ、漁労具の一種である貝の“おこしの篦”等の一種かもしれない。左側の端部は丸みを持って途切れて周囲が著しく錆化している点から見て、この部分が実際の使用面である可能性もある（一般的に鉄製品は使用部分に力が加わると錆化が進むことがある）。なお、左右方向の曲がりが全くなく直線状となることから、鉄鍋の口縁部とも現状では考えにくい。

別表６　鉄関連遺物分析資料詳細観察表（11）

分析資料21

（作表：穴澤義功）

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	277			分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	11E7 区　包含層	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）				マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-21 化　学：　— 放射化：　—	計測値 長径 5.6㎝ 短径 3.8㎝ 厚さ 2.7㎝ 重量 36.5 g	色　調	表：茶褐色～黒褐色～明褐色	遺存度	破片		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	◎	
				地：黒褐色～白色	破面数	6		Ｘ線回折 化　学 耐 火 度		
遺物種類（名 称）	鉄床石？（滓付き）		磁着度	2	前含浸	—		カロリー 放 射 化		
			メタル度	な　し	断面樹脂	—		Ｘ線透過		

観察所見　上面から上手側の側面に黒色のガラス質滓がこびりつくように残る鉄床石？表面の破片。側部５面が破面で下面は剝離面様になっている。滓表面はわずかに木炭痕を残し、内部に多量の気孔を持つ。また、下手側に向かいやや垂れ気味の外観を示す。滓質は鍛冶滓とは異なり、分析資料№ 22 の内面の滓化状態とかなり類似する。石の表面は強い熱を受けたためか透明なガラス質になりかかっており、一部が発泡気味。下面や右側面の破面は滓化が弱く、被熱時点では本体の石材の一部であった可能性が強い。材は石英質の粒子が目立ち、花崗岩の一種と見られる。上面には丸みを持ち自然石の転石が母岩と考えられる。色調は部位により極端に差を持っている。石の地肌は白色。

分析部分　長軸端部 1/3 を直線状に切断し、滓部を中心に分析に用いる。残材返却。

備　考　鉄床石、または、鍛冶炉の壁を取り囲む石材の表面破片と推定される。羽口の押えに石を使う事例も知られている。石表面の被熱が強く、鍛冶炉にかなり接していた可能性が高い。

分析資料22

出土状況	遺　跡　名	西部遺跡（Ⅶ層）	構成№	281			分析	項　目	滓	メタル
	出 土 位 置	10D2 区　包含層	時期：根拠	10 世紀前半：出土土器（Ⅶ層）				マ ク ロ		
試料記号	検　鏡：SEI-22 化　学：SEI-22 放射化：　—	計測値 長径 4.9㎝ 短径 4.7㎝ 厚さ 2.4㎝ 重量 24.8 g	色　調	表：黒色～灰色	遺存度	破片		検　鏡 硬　度 ＥＰＭＡ	◎	
				地：黒褐色～灰黒色～灰色	破面数	4		Ｘ線回折 化　学 耐 火 度		○
遺物種類（名 称）	炉壁（鍛冶炉）		磁着度	2	前含浸	—		カロリー 放 射 化		
			メタル度	な　し	断面樹脂	—		Ｘ線透過		

観察所見　内面全体が黒色ガラス質滓化して下手側に向かい垂れ気味の炉壁破片。下手側の側部は粘土単位の剝離面または接合面となっており、残る側部４面が破面となる。外面は緩やかな弧状の剝離面で、鍛冶炉の掘形に接していた可能性をうかがわせ、全体が薄く吸炭している。炉壁全体の厚みは 1.7cm を測る。小さな破片の割には外面の弧状が強く、鍛冶炉の掘形が比較的小さかった可能性もある。胎土はわずかに籾殻を交えるシルト質の土を用いている。色調は内面が黒色で、芯部の色調は灰色となる。

分析部分　長軸端部 3/4 を直線状に切断し、炉壁として分析に用いる。残材返却。

備　考　炉壁溶解物主体の内面状態を示す小さな炉壁片で鍛冶滓の部分を持たない。また、黒色ガラス質の滓化状態は、分析資料№ 21 の表面にこびりついている滓部と基本的には同類と考えられる。

別表７　鉄関連遺構・遺物の主要要素一覧表（1）

項目	主要素		新潟県村上市西部遺跡Ⅱ（せいぶいせきに）				
調査	調査概要		調査年：平成17･18年度（2005～2006年）　／　調査主体･機関：新潟県教育委員会･財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団				
			調査原因：日本海沿岸東北自動車道　／　整理：有限会社山武考古学研究所･株式会社ノガミ				
遺構情報	遺跡全体の情報		西部遺跡Ⅱは古代から中世にかけての複合遺跡である。文化層は5層あり、Ⅻa層･Ⅻ層･Ⅺ層･Ⅷ層は古代、Ⅳ層は中世である。Ⅻa層からは掘立柱建物1棟等を検出。鉄関連の遺構･遺物は検出されていない。8世紀前半。Ⅻ層からは東西･南北方向を軸とする畦畔等を検出。水田。8世紀後半～9世紀前半。Ⅺ層からは掘立柱建物5棟等を検出。このうち1棟は鍛冶工房である。漆器や烏帽子または圭冠、権状錘等が出土。9世紀中葉。Ⅷ層からは掘立柱建物7棟等を検出。このうち5棟は鍛冶や漆塗布作業等を行っていた工房である。白磁皿（Ⅰ類）、土師器香炉蓋、耳皿、台付鉢、石製丸鞆、権状錘、水晶製丸玉、漆紙文書等が出土。9世紀末～10世紀中葉。Ⅳ層からは掘立柱建物5棟等を検出。鍛冶滓等が少量出土。12世紀後半～13世紀前半、14世紀後半～15世紀後半の2時期。				
	主要鉄関連遺構		Ⅺ層：鍛冶工房である掘立柱建物1棟、Ⅷ層：鍛冶や漆塗布作業等を行っていた工房である掘立柱建物5棟				
	鍛冶関連遺構の情報	Ⅺ層	掘立柱建物（SB3030）	時期	9世紀中葉	立地･規模	沖積低地 長軸6.50m、短軸5.50m（区画溝の内法寸法）
						施設	鍛冶炉1基等
		Ⅷ層	掘立柱建物（SB1400）	時期	10世紀前半	立地･規模	沖積低地 桁行16.50m、梁行8.84m
						施設	鍛冶炉4基、地床炉5基等
			掘立柱建物（SB1500）	時期	10世紀前半	立地･規模	沖積低地 桁行23.20m、梁行10.80m
						施設	鍛冶炉3基、地床炉8基等
			掘立柱建物（SB2020）	時期	10世紀前半	立地･規模	沖積低地 桁行11.00m、梁行8.90m
						施設	鍛冶炉1基等
			土坑（SK1107）	時期	10世紀前半	立地･規模	沖積低地 長軸0.83m、短軸0.80m、深さ0.16m
						施設	
遺物情報	鉄関連遺物全体構成		**総重量174.8kg**／炉壁（鍛冶炉）389.5ｇ、羽口（鍛冶）2.6kg、椀形鍛冶滓22.1kg、椀形鍛冶滓（二段）6.1kg、鍛冶滓4.5kg、再結合滓4.3kg、ガラス質滓927.3ｇ、鉄製品（鍛造品）1.1kg、鉄製品（鋳造品）201.7ｇ、鉄床石32.7kg、砥石95.3kg、凹石4.3kg、被熱石328.3ｇ				
	主要層位別鉄関連遺物（時代別）		Ⅺ層：炉壁（鍛冶炉）1.0ｇ、椀形鍛冶滓258.9ｇ、鍛冶滓6.6ｇ、鉄製品（鍛造品）3.0ｇ、砥石4.3kg				
			Ⅷ層：炉壁（鍛冶炉）388.5ｇ、羽口（鍛冶）2.6kg、椀形鍛冶滓20.8kg、椀形鍛冶滓（二段）6.1kg、鍛冶滓4.5kg、再結合滓4.3kg、ガラス質滓917.8ｇ、鉄製品（鍛造品）1.1kg、鉄製品（鋳造品）201.7ｇ、鉄床石32.7kg、砥石84.5kg、凹石4.3kg、被熱石328.3ｇ				
			Ⅳ層：椀形鍛冶滓995.0ｇ、鍛冶滓11.4ｇ、ガラス質滓9.5ｇ、砥石6.5kg				
	地区別工程差		製錬関連遺物：Ⅷ層より分析資料№14･17の2点が出土している。 精錬～鍛錬鍛冶関連遺物：Ⅻ層とⅧ層出土の90％以上がこの段階に属する。 鋳造関連遺物：Ⅷ層より鋳造された鉄製品破片が少量出土しているが本遺跡で生産されたものではなく、流通製品と考えられる。 その他の金属関連遺物：なし				
	鉄系遺物種別動向（分析資料22点中）		Ⅷ層：SEI-2･4･9椀形鍛冶滓（フェライト単相）、SEI-5再結合滓中（過共析鋼組織痕跡） SEI-13･17鉄塊系遺物中（過共析鋼組織）、SEI-14鉄塊系遺物中（亜過共析鋼組織） SEI-15鉄製品（鍛造品）、（亜過共析鋼組織）、SEI-20鉄製品（鋳造品）、（共晶組成白鋳鉄組織）				
分析資料22点中	工程/遺物種類	層位	鉄製錬～鍛錬（TiO_2）				
			遺構名	製錬系	精錬鍛冶	鍛錬鍛冶（前半）	鍛錬鍛冶（後半）
	（　）内はTiO_2値。 （－）は分析せず。	Ⅺ層	土坑（SK3128）				(SEI-1)椀形鍛冶滓（極小） (0.16)
		Ⅷ層	掘立柱建物（SB1400）		(SEI-2)椀形鍛冶滓（中、二段）(3.19) (SEI-4)椀形鍛冶滓（極小）(1.24)		(SEI-3)椀形鍛冶滓（小） (0.21)
			掘立柱建物（SB1500）		(SEI-5)再結合滓(-) (SEI-12)羽口（鍛冶、先端部）(0.55)耐火度1062℃		
					(SEI-7)椀形鍛冶滓（中、二段）(5.64) (SEI-8)椀形鍛冶滓（極小）(8.85) (SEI-9)椀形鍛冶滓（極小、含鉄）(2.41)	(SEI-6)椀形鍛冶滓（大、二段）(3.65)	(SEI-10)粒状滓(-) (SEI-11)鍛造剝片(-)
			掘立柱建物（SB2020）			(SEI-15)椀形鍛冶滓（極小、含鉄製品？） (0.18)	
			土坑（SK1107）				(SEI-16)鉄製品（鍛造品） (0.1)
			遺構外	(SEI-14)鉄塊系遺物(1.62) (SEI-17)鉄塊系遺物(-) C：1.2％前後	(SEI-13)鉄塊系遺物(0.12)	(SEI-19)鉄製品（鍛造品）(-)C：0.1％程	(SEI-20)鉄製品（鋳造品） C：4.26％
					(SEI-21)鉄床石？（滓付き）(-) (SEI-22)炉壁（鍛冶炉）(-)耐火度1033℃		

（作表：穴澤義功）

別表７　鉄関連遺構・遺物の主要要素一覧表（2）

<table>
<tr><td>分析</td><td>分析点数</td><td colspan="3">・金属学的分析：22 点、炉壁（鍛冶炉）、羽口、椀形鍛冶滓、粒状滓、鍛造剥片、再結合滓、鉄塊系遺物、鉄製品（鍛造品）、鉄製品（鋳造品）
・分析項目：顕微鏡組織、ビッカース硬度、EPMA、化学分析、耐火度 / 解析：㈱九州テクノリサーチ TAC センター（大澤正巳、鈴木端穂）
・木材樹種同定：2 点、SW1145（SB1400 内鍛冶炉）出土炭化材：クリ、SW1352（SB1500 内鍛冶炉）出土炭化材：コナラ節 / 解析：パリノサーヴェイ㈱</td></tr>
<tr><td>年代</td><td>推定年代</td><td colspan="3">・考古資料：Ⅺ層出土土器（9 世紀中葉）、Ⅷ層出土土器（9 世紀末～ 10 世紀中葉）
・放射性炭素年代測定：2 点、SW1145（SB1400 内鍛冶炉）出土炭化材：σ cal AD883 ～ 975 年、SW1352（SB1500 内鍛冶炉）出土炭化材：σ cal AD780 ～ 942 年 / 解析：パリノサーヴェイ㈱
・その他の理科学年代測定：実施せず。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">保存</td><td rowspan="6">保存・活用区分</td><td>遺　構</td><td colspan="2">遺　物</td></tr>
<tr><td rowspan="5">遺構は記録保存を目的とした発掘調査のため保存せず。</td><td colspan="2">金属関連出土遺物（A ～ D 保存）合計：174.8kg</td></tr>
<tr><td>A 保存：金属学的分析資料</td><td>：22 点、2.6kg　（1.5%）</td></tr>
<tr><td>B 保存：報告書掲載資料</td><td>：291 点、99.0kg　（56.6%）</td></tr>
<tr><td>C 保存：屋内管理資料</td><td>：72.2kg　　（41.9%）</td></tr>
<tr><td>D 保存：野外管理資料</td><td>：　0kg</td></tr>
<tr><td rowspan="3">類似例</td><td colspan="2">地域名</td><td>遺跡名</td><td>検出遺構・遺物</td><td>時期</td></tr>
<tr><td>富山県</td><td>富山市</td><td>向野池遺跡</td><td>掘立柱建物の鍛冶工房 1 ～ 2 棟、鍛冶炉 1 基、椀形鍛冶滓、羽口等</td><td>9 世紀後半～ 10 世紀前半</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="7">概要と評価</td><td>遺構・遺物</td><td colspan="3">・発掘された鉄関連遺構は、Ⅺ層から鍛冶工房である SX3030（鍛冶炉 1 基）、Ⅷ層から鍛冶や漆塗布等の作業を行った複合的な工房と考えられる SB1400（鍛冶炉 4 基）、SB1500（鍛冶炉 3 基）、SB2020（鍛冶炉 1 基）、SB2200（隣接して鍛冶炉 1 基あり）、SB2258（鍛冶炉 1 基）である。各建物内やその区画溝、周辺の土坑等から鍛冶関連遺物が合わせて 79.5kg出土しており、その中にはごくわずかながら銅関連遺物が含まれている。</td></tr>
<tr><td>整理・解析</td><td colspan="3">・整理方法は、保存・活用までを視野に入れた A･B･C･D の 4 ランク個票付け方式で行い、全体量 174.8kgの中から、A 保存を 2.6kg、B 保存を 99.0kg、C 保存を 73.2kgとした。D 保存については全体の出土量の少なさから分離せず、C 保存扱いに含めている。各比率は 1：38.1：28.2 となる。
・報告書に掲載した鉄関連遺物の数は、全 313 点（A 保存＋ B 保存）で、その内の 22 点（A 保存）を金属学的な分析対象とした。比率は 1.5%にあたる。
・保存処理：実施せず。</td></tr>
<tr><td>製錬関連</td><td colspan="3">・西部遺跡Ⅱ出土資料のうち、分析資料№ 14 と 17 の鉄塊系遺物が製錬系の鉄塊であり、分析資料№ 5 の再結合滓中にも製錬滓組織が確認された。
・わずかではあるが、製錬系の鉄塊系遺物が鍛冶原料として西部遺跡Ⅱの鍛冶工房に持ち込まれている背景としては、周辺地区における鉄製錬遺跡の存在が予想できる。</td></tr>
<tr><td>鍛冶関連</td><td colspan="3">・掘立柱建物 SB1400･SB1500 内の鍛冶炉周辺や周辺の溝や土坑を中心に椀形鍛冶滓や鍛冶滓に加えて、鍛冶炉の炉壁片や羽口、さらには粒状滓や鍛造剥片が出土している。出土した全体量は 79.5kgを計り、金属関連遺物の大半を占めている。工程的には精錬鍛冶から鍛錬鍛冶作業に関わる遺物が含まれており、鍛冶工程の一貫した作業が建物内の空間で行われていたことが証明される。
・考古学的な整理・構成の結果や金属学的な分析によって、西部遺跡Ⅱでは製錬鉄塊や故鉄を素材に精錬鍛冶から鍛錬鍛冶をへて鉄製品の加工が行われていたことが判明したが、具体的な生産品目や量については考古学的にも、金属学的にも不明である。椀形鍛冶滓の全出土量の 28.5kgが生産量の一応の目安となる可能性を持っているが、決して量的には多いとはいえない。
・西部遺跡Ⅱから出土した椀形鍛冶滓は、大型から極小サイズまでの全種類出土している。大型から中型の椀形鍛冶滓は精錬鍛冶工程を示している可能性が高い。</td></tr>
<tr><td>鋳造関連</td><td colspan="3">・鋳造関連遺物としては、鋳造された鉄製品として、鍋・釜の破片が少量出土しているが、いずれも西部遺跡Ⅱで生産されたものではなく、他地区で生産されて煮炊具として持ち込まれた消費材と見られる。鍛冶素材として鋳造品の破片が用いられる場合もあるが、出土品から直接に証明することはできなかった。</td></tr>
<tr><td>時　期</td><td colspan="3">・掘立柱建物の鍛冶工房 1 棟を検出したⅪ層の時期は出土遺物から 9 世紀中葉と考えられる。また、鍛冶や漆塗布等の複合的な作業を行っていたと推測される掘立柱建物の工房 5 棟を検出したⅧ層の時期は 10 世紀前半を中心とするものと考えられる。</td></tr>
<tr><td>ま と め</td><td colspan="3">・西部遺跡Ⅱでは、鉄関連遺物から見ると決定的な資料の出土がなかったため、残念ながらどのような製品を作っていたのかは不明である。しかし、出土した椀形鍛冶滓から本遺跡の鍛冶作業の特徴を見てとれる。椀形鍛冶滓は、サイズが一定でなく、重層しているものが多い。また、工具の痕跡があるものもある。このことから、専門の鍛冶職人が作業を行っている可能性は低く、作業を行う人が頻繁に替わる村内の共同作業的な要素を持つものであると考えられる。Ⅷ層から検出された大型の掘立柱建物である SB1400･SB1500 内においても、大規模な鍛冶作業を専門的に行っていたのではなく、複合的な作業の一環として行われていたと考えられる。</td></tr>
</table>

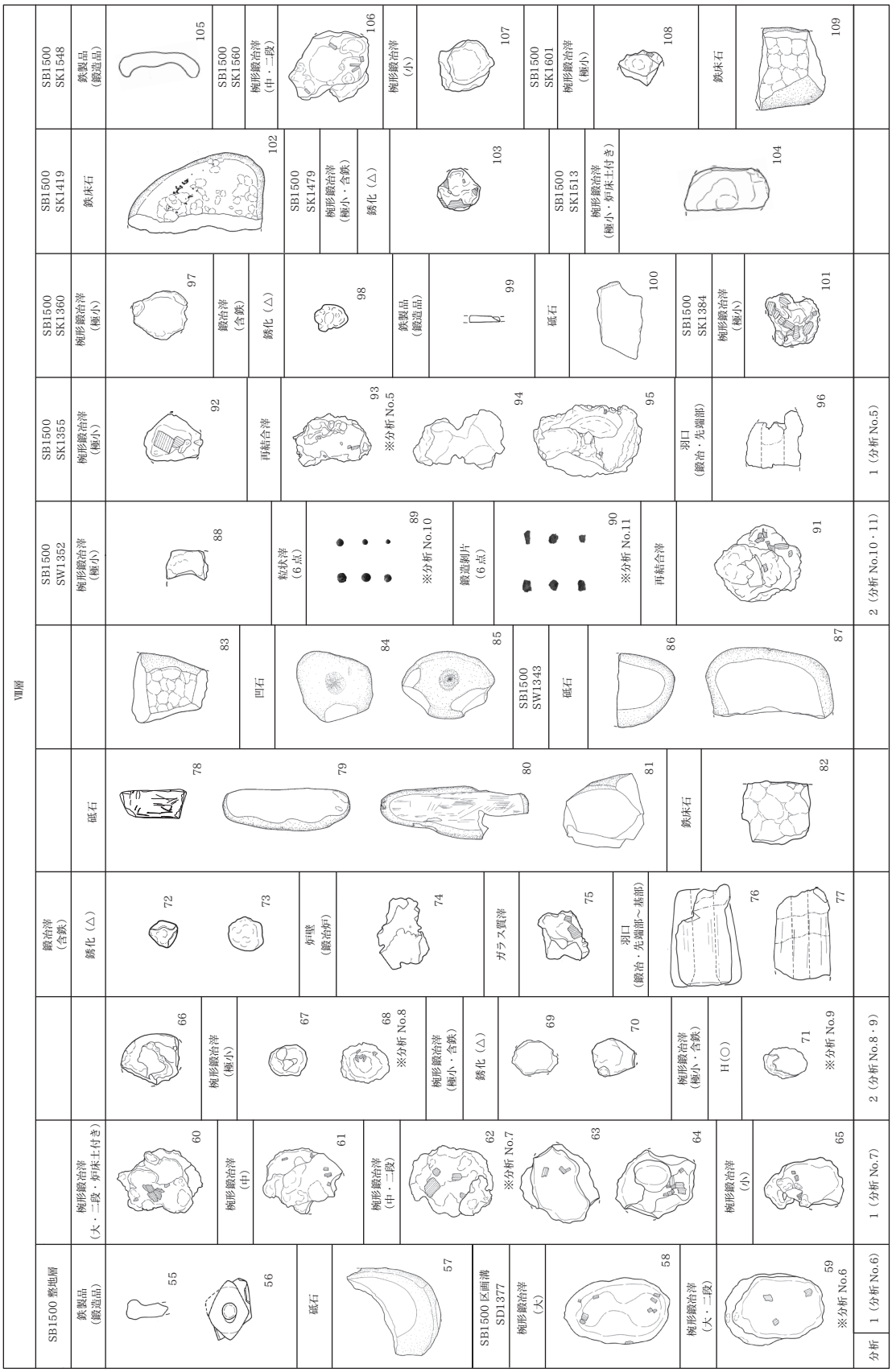
（作表：穴澤義功）

Ⅻa層		Ⅷ層								
Ⅻa層包含層一括	SB3030 SK3128	SB1400-P1	SB1400-P4	椀形鍛冶滓 （極小・含鉄）			SW1145	椀形鍛冶滓 （極小・含鉄）	椀形鍛冶滓 （極小・含鉄）	SB1500-P1
砥石又は磨石	椀形鍛冶滓 （極小）	椀形鍛冶滓 （中・二段・含鉄）	椀形鍛冶滓 （小）	錆化（△）	椀形鍛冶滓 （小）	半溶解石	椀形鍛冶滓 （極小）	錆化（△）	錆化（△）	椀形鍛冶滓 （小）
1	5 ※分析 No.1	錆化（△） 10	14	19	23 ※分析 No.3	29	35	40	45	50
Ⅺ層	Ⅺ層包含層一括	鍛冶滓 （含鉄）	鉄製品 （鍛造品）	SB1400 区画溝 SD1077	24	炉壁 （鍛冶炉）	鍛冶滓	炉壁 （鍛冶炉）	鍛冶滓 （含鉄）	SB1500-P9
SB3030 区画溝 SD3029	鉄製品 （鍛造品）	錆化（△）	15	椀形鍛冶滓 （中）	椀形鍛冶滓 （極小）	30	36	41	錆化（△）	羽口 （鍛冶・先端部）
砥石	6	11	SB1400-P12	20	25 ※分析 No.4	羽口 （鍛冶・先端部）	SB1400 SW1232	SB1400 SK1227	46	51 ※分析 No.12
2	7	SB1400-P2	鍛冶滓 （含鉄）	椀形鍛冶滓 （中・二段）	26	31	椀形鍛冶滓 （小）	羽口 （鍛冶・体部）	47	SB1500-P12
SB3030 SW3126		椀形鍛冶滓 （小・二段・含鉄）	錆化（△）	21 ※分析 No.2	椀形鍛冶滓 （極小・含鉄）	32	37	42	炉壁 （鍛冶炉）	鉄製品 （鋳造品）
椀形鍛冶滓 （極小・炉床土付き）	砥石	錆化（△）	16	22	錆化（△）	砥石	椀形鍛冶滓 （極小）	SB1400 SX1224	48	52
3	8	12	SB1400-P17		27	33	38	椀形鍛冶滓 （極小）	SB1400 P1399	SB1500 整地層
4	9	鍛冶滓 （含鉄）	砥石		鍛冶滓	鉄床石	椀形鍛冶滓 （極小・含鉄）	43	鉄製品 （鍛造品・鉄斧）	椀形鍛冶滓 （極小）
		錆化（△）	17		28	34	錆化（△）	44	49	53
		13	SB1400 整地層				39			鍛冶滓 （含鉄）
			椀形鍛冶滓 （極小）							錆化（△）
			18							54
分析	1（分析 No.1）			1（分析 No.2）	2（分析 No.3・4）					1（分析 No.12）

別図１　鉄関連遺物構成図１

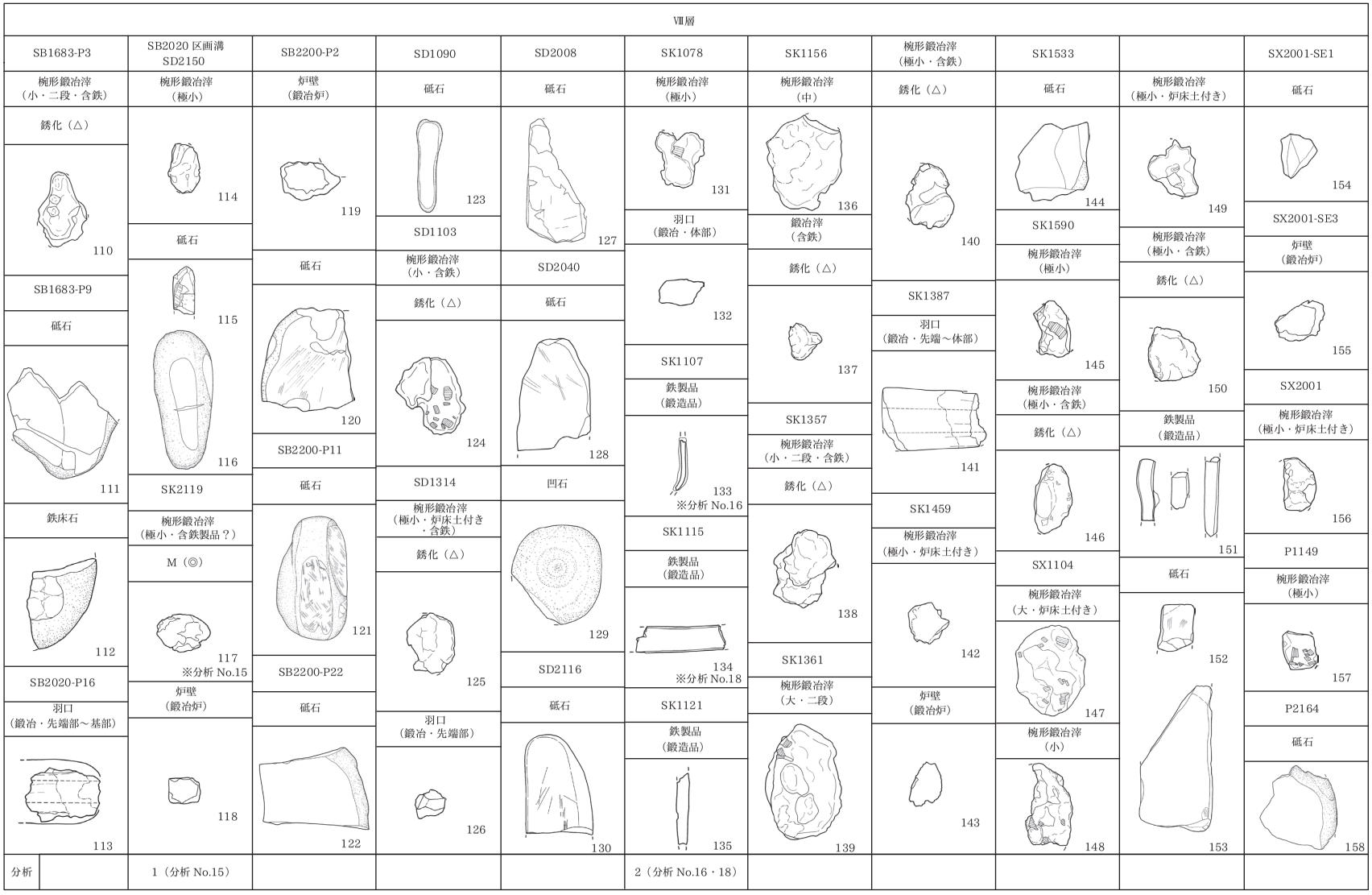
（作図：穴澤義功）

別図１　鉄関連遺物構成図



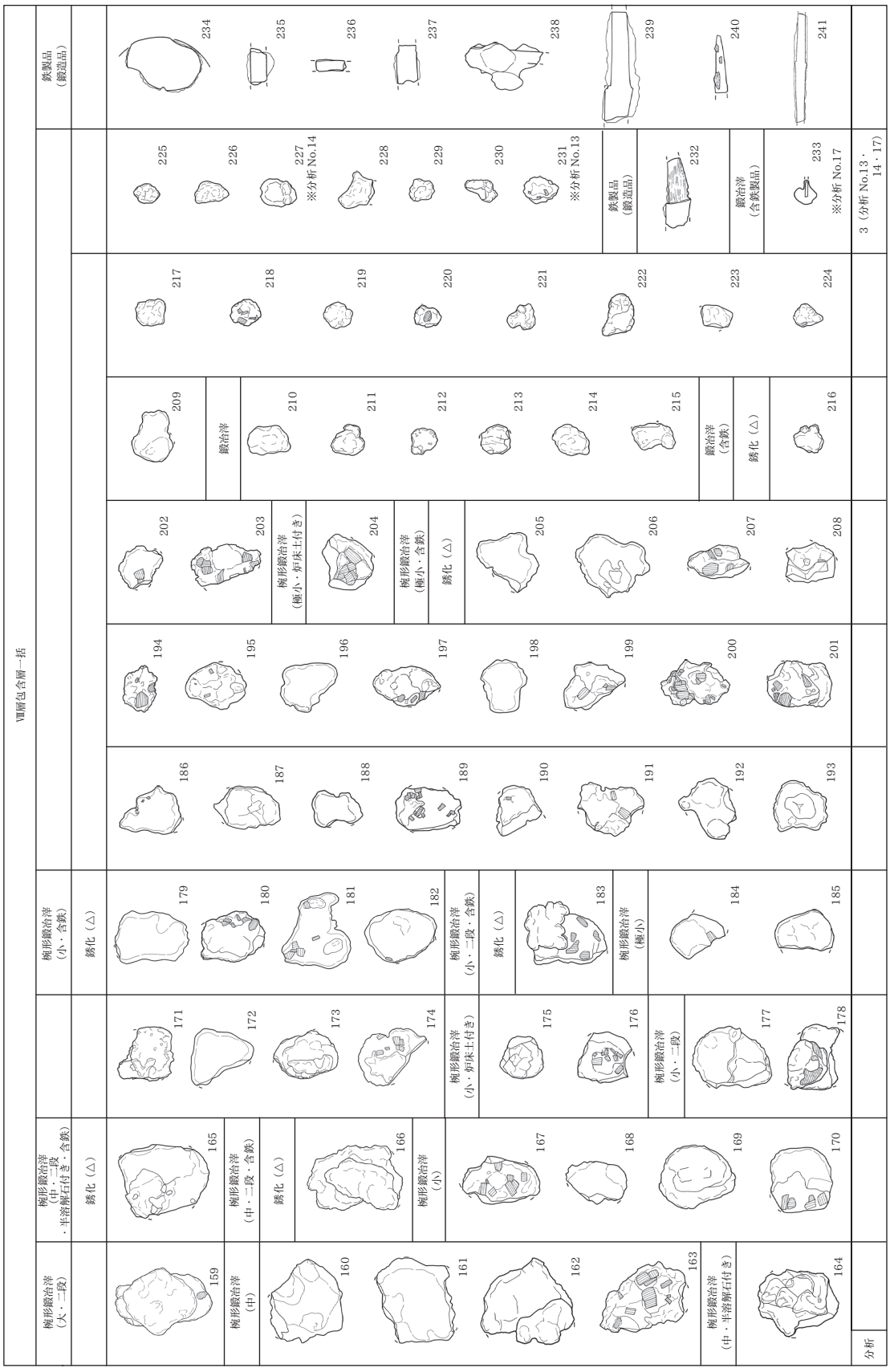
別図１　鉄関連遺物構成図２

（作図：穴澤義功）



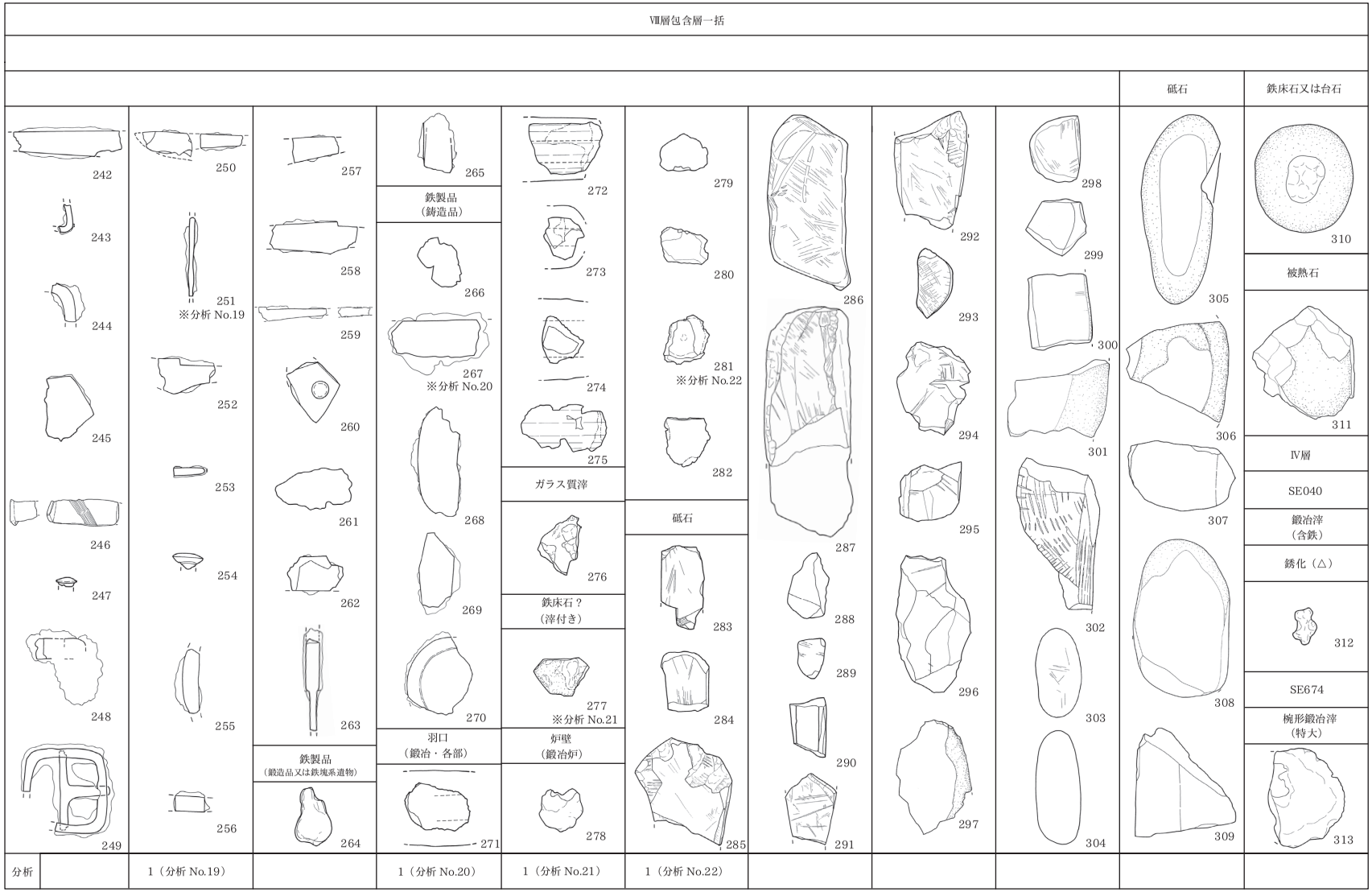
別図１　鉄関連遺物構成図３

（作図：穴澤義功）



別図１　鉄関連遺物構成図４

（作図：穴澤義功）



別図１　鉄関連遺物構成図５

（作図：穴澤義功）

遺構索引

1）検索項目は、説明・実測図・写真・観察表を設けた。
2）検索の順番は、層位ごとに遺構種別・遺構番号の順で記載した。
3）説明と観察表は本文編のページ、実測図と写真は図版編の図版番号とする。

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
古代Ⅻa層　掘立柱建物									
SB3230	10D･E	25	4	207･208	295	100	100	333	309
古代Ⅻa層　ピット									
P2069	10E	26	2	－	－	－	－	－	－
P3218	10E	26	5	208	－	100	100	333	309
P3219	12D	26	5	208	－	－	－	－	－
P3221	12C	26	3	－	－	－	－	－	－
P3227	12D	26	5	209	－	－	－	－	－
P3228	12C	26	5	209	－	－	－	－	－
P3229	12C	26	5	209	－	－	－	－	－
P3231	11D	26	5	209	－	100	100	333	309
P3232	10D	26	2	－	－	－	－	－	－
P3233	12C	26	5	209	－	－	－	－	－
P3234	12D	26	5	209	－	－	－	－	－
P3235	12D	26	5	209	－	－	－	－	－
P3236	11D	26	5	209	－	－	－	－	－
P3237	11D	26	5	210	－	－	－	－	－
P3239	11D	26	2	－	－	－	－	－	－
P3240	12E	26	3	－	－	－	－	－	－
P3241	12E	26	5	210	－	100	100	333	309
P3244	13C	26	5	210	－	－	－	－	－
P3245	13C	26	5	210	－	100	100	333	309
P3246	12B	26	5	210	－	100	100	333	309
P3247	12B	26	5	210	－	100	100	333	309
P3248	13B	26	5	－	－	－	－	－	－
P3249	13B	26	5	－	－	100	100	333	309
P3250	13C	26	5	210	－	100	100	333	309
古代Ⅻ層　畦畔									
畦畔3204	5C･D､6C	26	8	213	295	－	－	－	－
畦畔3205	5C､6B･C､7B	26	8	213	295	－	－	－	－
畦畔3206	5~7B	26	8	213･214	295	－	－	－	－
畦畔3208	6B･C	26	8	213･214	295	－	－	－	－
畦畔3209	5～7B	26	8	214	295	－	－	－	－
畦畔3210	5A･B､6･7A	26	8	214	295	－	－	－	－
畦畔3251	7A	26	7	－	295	－	－	－	－
畦畔3252	7C	26	7	－	295	－	－	－	－
古代Ⅻ層　溝									
SD3207	6･7A	27	8	213	295	－	－	－	－
古代Ⅺ層　掘立柱建物									
SB3030	11D	30	15	222	295	103	103	334	310
SB3050	8B･C	27	13	216	295	－	－	－	－
SB3100	7C	28	13	216～218	295	－	－	－	－
SB3200	6B･C	29	14	219	295	102	102	334	310･313
SB3201	5･6B	32	16	219	296	－	－	－	－
古代Ⅺ層　鍛冶炉									
SW3126	11D6	31	15	222	296	103	104	335	376
古代Ⅺ層　地床炉									
SW1633	6B	32	16	221	296	－	－	－	－
SW1634	5B	32	16	221	296	－	－	－	－
SW3070	6B	33	17	223	296	104	104	335	310
SW3094	6B	29	14	220	296	－	－	－	－
SW3113	11D	31	15	223	296	－	－	－	－
SW3196	6C	29	14	220	296	－	－	－	－
古代Ⅺ層　井戸									
SE3220	7C	33	17	223	296	－	－	－	－
古代Ⅺ層　土坑									
SK1638	5･6B	33	17	221	296	－	－	－	－
SK1639	6B	33	17	223･224	296	－	－	－	－
SK1664	6B	33	17	－	296	－	－	－	－
SK1665	6B	33	17	－	296	－	－	－	－
SK3040	14D	33	17	224	296	－	－	－	－
SK3044	7C	28	17	218	296	－	－	－	－
SK3046	7C	34	18	224	296	104	104	335	313
SK3049	6D	34	18	－	296	104	104	335	310･313
SK3065	7C･D	34	18	224	296	－	－	－	－
SK3085	8B	28	18	－	296	－	－	－	－
SK3086	6B	34	18	224	296	－	－	－	－
SK3091	6B･C	30	14	220	296	102	102	334	310
SK3104	6C	34	19	224･225	296	－	－	－	－
SK3124	6A	34	19	225	296	－	－	－	－
SK3127	11D	31	19	223	296	－	－	－	－
SK3128	11D	31	15	222	296	103	104	335	376
SK3129	11D	31	19	223	296	－	－	－	－
SK3134	11D	32	19	223	296	－	－	－	－
SK3153	7･8C	34	19	225	296	－	－	－	－
SK3154	7･8D	34	19	225	296	－	－	－	－
SK3163	6C	30	19	221	296	104	104	335	310
SK3177	6C	34	19	－	296	－	－	－	－
SK3180	8D	35	20	－	296	－	－	－	－
SK3193	6C	30	20	－	296	－	－	－	－
SK3195	6C	30	20	－	296	－	－	－	－
古代Ⅺ層　道路状遺構									
SF3202	5A･B､6A	37	21	228	296	－	－	－	－
古代Ⅺ層　性格不明遺構									
SX3199	8C	35	20	225	296	－	－	－	－
古代Ⅺ層　溝									
SD3029	11D･E	31	15	222	297	103	103	335	310･376
SD3042	10･11D	31	15	－	297	103	103･104	335	310･313
SD3045	7C	35	20	226	297	－	－	－	－
SD3051	5D､6C･D､7B･C､8･9A･B､10A	35	20	226	297	104	104	335	310･313
SD3052	8B･C	28	13	217	297	102	102	334	310
SD3053	8C･D	35	20	226	297	－	－	－	－
SD3071	5B･C	35	21	227	297	－	－	－	－
SD3072	6B･C	29	14	220･227	297	102	102	334	310
SD3088	7C	28	13	218	297	－	－	－	－
SD3090	6A･B	32	16	221･227	297	102	－	334	310･313
SD3092	6B･C	36	21	227	297	－	－	－	－
SD3093	6C	36	21	220･227	297	－	－	－	－

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
古代XI層　溝									
SD3102	6B・C	29	14	220	297	102	－	334	313
SD3103	6C	36	21	－	297	－	－	－	－
SD3115	5B・C	36	21	227	297	－	－	－	－
SD3116	5B・C	36	21	227	297	－	－	－	－
SD3120	5B・C	36	21	227・228	297	－	－	－	－
SD3121	5A・B	32	16	221・227	297	102	102	334	310
SD3123	6A	36	21	228	297	104	104	335	310
SD3181	9C	36	21	228	297	－	－	－	－
SD3182	7C	37	21	－	297	－	－	－	－
SD3185	6B	37	14	220	297	－	－	－	－
SD3192	5C	37	21	－	297	－	－	－	－
SD3203	5・6A	37	16	228	297	－	－	－	－
SD3212	6A・B	37	21	213・228	297	－	－	－	－
古代XI層　ピット									
P3132	11D	30	15	－	295	103	103	335	310
P3186	6B	29	10	220	－	－	－	－	－
P3216	10E	－	12	－	－	104	105	335	313
古代VIII層　掘立柱建物									
SB1400	9B～D、10C・D	38	31・32	203・204・230～234	298	106	110・111	339	314・361・376・377
SB1500	7C・D、8C・D	41	34・35	203・204・230・237～243	298	109	118～121	345～347	319・320・361・379・380
SB1683	6A・B	49	42	254～256	298	119	151	368・369	340・341・361・362・384
SB2020	13B・C	50	43	256～261	299	119	151・152	369	361・384
SB2100	12・13A	51	45	263～265	299	－	－	－	－
SB2200	9E、10D・E	52	46	266～269	299	120	153・154	370・371	341・361・384
SB2258	5D・E	53	47	269・270	299	－	－	－	－
古代VIII層　鍛冶炉									
SW1073	9C	39	33	235	299	－	－	－	－
SW1075	9C	39	33	235	299	－	－	－	－
SW1145	10D	39	33	235	299	108	116	343	378
SW1232	9D	39	33	235・236	299	108	116	343	378
SW1352	7D	42	37	204・244	299	114	136	357	382
SW1353	7D	43	37	245	299	－	－	－	－
SW2065	10D	52	46	269	299	－	－	－	－
SW2010	13C	50	44	262	299	－	－	－	－
SW2229	8D	43	37	245	299	114	136	357	362
SW2259	5E	53	47	270	299	－	－	－	－
古代VIII層　地床炉									
SW1076	9C・D	40	32	235・236	300	－	－	－	－
SW1109	7・8A	54	48	270	300	－	－	－	－
SW1119	8B	54	48	270	300	121	155	371	341
SW1219	6A	54	48	271	300	121	155	371	341
SW1221	6B	54	48	271	300	－	－	－	－
SW1228	9D	40	33	236	300	－	－	－	－
SW1230	9D	40	33	－	300	－	－	－	－
SW1231	9D	40	33	236	300	－	－	－	－
SW1233	9D	40	33	－	300	－	－	－	－
SW1250	5B	54	48	271	300	121	155	371	341
SW1268	6C	54	48	271・272	300	－	－	－	－
SW1302	7C	43	37	245	300	－	－	－	－
SW1343	8D	43	36	204・245	300	114	136	357	330・382
SW1462	6C	55	48	272	300	－	－	－	－
SW1610	7D	43	37	245	300	－	－	－	－
SW1611	7D	43	37	245・246	300	－	－	－	－
SW1612	7C	44	37	245	300	－	－	－	－
SW1617	7D	44	37	－	300	－	－	－	－
SW1618	7D	44	38	246	300	－	－	－	－
SW1619	8D	44	38	246	300	－	－	－	－
SW2025	11B	55	48	272	300	－	－	－	－
SW2058	14E	55	48	272	300	－	－	－	－
古代VIII層　井戸									
SE1193	5A	55	49	272	300	－	－	－	－
SE1194	5A	55	49	273	300	121	156	372	341
SE1226	7B	55	49	273	300	121	156	372	341・342
SE1338	6D	56	50	273	300	－	－	－	－
SE1451	6D・E	56	50	273	300	－	－	－	－
SE1502	6E	56	50	273	300	－	－	－	－
SX2001-SE1	12D、13E	56	51	274	300・304	122	156	372	342・386
SX2001-SE2	12D	56	51	274	300・304	－	－	－	－
SX2001-SE3	12・13D	56	51	274	300・304	122	156	372	342・361・387
SE2007	10A	57	51	274・275	300	122	157	372	342
SE2158	13B・C	51	44	262	300	－	－	－	－
古代VIII層　土坑									
SK1078	8・9D	57	52	275	300	122	157	372	342・385
SK1085	9B	57	52	275	300	－	－	－	－
SK1087	9B	57	52	275	300	－	－	－	－
SK1088	9B	57	53	275	300	－	－	－	－
SK1105	8A	57	52	276	300	－	－	－	－
SK1106	8A	58	52	276	300	－	－	－	－
SK1107	8A	58	53	276	300	122	157	373	342・385
SK1108	8A	58	53	276	300	－	－	－	－
SK1110	8A	58	53	276・277	300	122	157	373	342
SK1111	8A	58	53	277	301	－	－	－	－
SK1112	8A	58	53	277	301	－	－	－	－
SK1113	8A	58	54	277	301	－	－	－	－
SK1114	8B	58	54	277	301	－	－	－	－
SK1115	8B	59	54	278	301	122	157	373	385
SK1118	8B	59	54	278	301	122	157・158	373	342・343
SK1120	8B	59	55	278	301	123	158・159	373・374	343・361・362
SK1121	8B・C	59	54	278	301	123	159	374	343・385
SK1140	10C	40	33	－	301	109	118	345	319
SK1141	10C・D	40	32	204・236	301	108	116・117	344・345	318・319
SK1144	8B	59	54	279	301	－	－	－	－
SK1153	7B	59	55	279	301	123	159	374	343
SK1154	7B	59	55	279	301	123	159	374	343
SK1156	10C・D	60	56	279	301	123	159	374	343・385
SK1157	7A	60	55	279	301	－	－	－	－
SK1158	7B	60	56	279・280	301	123	159	374	343
SK1159	8・9D	60	52	275・280	301	123	159	374	343・344
SK1160	7A	60	56	280	301	－	－	－	－
SK1191	5A	60	56	280	301	－	－	－	－
SK1192	5A	60	56	280	301	124	159	374	344
SK1208	5B	60	56	281	301	－	－	－	－
SK1218	5B	61	57	281	301	－	－	－	－
SK1227	9D	40	33	236	301	108	116	344	378
SK1229	7A・B	61	57	281	301	124	159	374	344

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
古代Ⅷ層　土坑									
SK1240	5B	61	57	281	301	－	－	－	－
SK1244	5B	61	57	281･282	301	－	－	－	－
SK1246	7B	61	57	282	301	－	－	－	－
SK1251	6A	61	58	282	301	124	159･160	374	344
SK1252	6B	61	57	282	301	124	160	374	344
SK1255	6B	61	58	282	301	124	160	375	344
SK1286	9E	62	58	283	301	－	－	－	－
SK1301	5B	62	57	283	301	124	160	375	344
SK1345	9E	62	58	283	301	－	－	－	－
SK1351	7D	44	38	247	301	116	147	366	338
SK1354	6D･E	62	58	283	301	124	160	375	344･362
SK1355	7D	44	38	204･246	301	115	136･137	357	382
SK1356	8D･E	62	59	283	301	124	160	375	344
SK1357	8E	62	59	284	301	124	160･161	375	344･345･385
SK1358	8E	62	59	284	301	125	161	375	345
SK1360	8D	44	38	247･248	301	116	147	366	338･382･383
SK1361	5･6D	63	59	284	301	125	161	375	345･385･386
SK1363	8C	63	60	－	301	－	－	－	－
SK1364	8C	63	60	284	302	125	161	375	345
SK1365	8C	63	60	284	302	125	161	375･376	345
SK1369	8C	63	60	285	302	－	－	－	－
SK1384	8D	45	38	248	302	116	147･148	366･367	338･339･383
SK1387	6C	63	60	285	302	125	161	376	386
SK1406	6D	63	60	285	302	－	－	－	－
SK1407	6D	63	60	285	302	125	161	376	345
SK1408	7C	45	39	248	302	117	148	367	339
SK1419	8D	45	36	204･246･247	302	115	137～147	358～365	330～338･361･383
SK1421	6･7D	64	61	285･286	302	125	161	376	345
SK1436	10E	64	61	286	302	125	161	376	345･362
SK1444	7C	46	39	248	302	117	148･149	367	339
SK1447	6E	64	50	286	302	－	－	－	－
SK1449	6C	64	61	286	302	－	－	－	－
SK1450	6D	64	61	286	302	－	－	－	－
SK1452	6D	64	61	286	302	－	－	－	－
SK1453	6E	64	50	286	302	－	－	－	－
SK1459	5E	65	61	270･287	302	125	161	376	386
SK1460	5E	－	47	269	299	－	－	－	－
SK1461	6E	－	47	270	299	－	－	－	－
SK1466	6E	65	62	287	302	－	－	－	－
SK1469	7C	46	39	248･249	302	117	149	367	339
SK1472	7C	46	39	249	302	117	149	367	339･340
SK1473	7C	46	39	249	302	117	149	367	340
SK1474	8E	65	62	287	302	－	－	－	－
SK1479	7D	46	39	249	302	117	149	367	340･383
SK1488	7D	46	39	249	302	－	－	－	－
SK1489	7B	65	62	288	302	－	－	－	－
SK1499	7C･D	65	62	288	302	125	162	376	345
SK1505	7C	46	40	249･250	302	－	－	－	－
SK1510	6C	－	62	－	－	－	－	－	－
SK1511	7C	46	40	250	302	117	150	367	340
SK1512	8D	46	40	250	302	－	－	－	－
SK1513	8D	65	62	288	302	125	162	376	345･346･383

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
SK1515	7C	47	40	250	302	－	－	－	－
SK1526	7E	65	62	288	302	－	－	－	－
SK1527	5D	66	62	288	302	－	－	－	－
SK1529	7B	66	63	288･289	302	－	－	－	－
SK1531	6C･D、7C･D	66	64	289	302	126	162	376	346
SK1533	8C	66	63	289	302	126	162	376	346･386
SK1535	8C	66	63	289	302	126	163	376	346
SK1536	7C	47	40	250	302	117	150	367	340
SK1537	7C	47	40	－	302	118	150	367	340
SK1539	6D	66	63	289	302	126	163	377	346
SK1540	7E	66	64	289	302	－	－	－	－
SK1544	6･7D	66	64	290	303	－	－	－	－
SK1546	7C	47	40	250･251	303	－	－	－	－
SK1547	7C	47	40	251	303	－	－	－	－
SK1548	7C	47	40	251	303	118	150	368	383
SK1551	8A･B	66	64	290	303	－	－	－	－
SK1557	5･6A	67	64	290	303	－	－	－	－
SK1558	7D	47	37	251	303	－	－	－	－
SK1560	7D･E	47	40	251	303	118	150	368	383
SK1569	6A	67	64	290	303	－	－	－	－
SK1570	7D	47	38	247	303	－	－	－	－
SK1571	7D	47	41	247･252	303	－	－	－	－
SK1573	8C	67	65	291	303	－	－	－	－
SK1577	8D	48	41	252	303	－	－	－	－
SK1585	7B･C	48	41	252	303	－	－	－	－
SK1587	5E	53	47	270	303	－	－	－	－
SK1588	8D	48	41	－	303	118	150	368	340
SK1589	6B･C	67	65	291	303	－	－	－	－
SK1590	8C	67	65	291	303	126	163	377	346･386
SK1591	8A	67	65	291	303	－	－	－	－
SK1596	7D	48	37	251	303	－	－	－	－
SK1601	7D	44	37	247	303	116	147	366	383
SK1602	7･8C	48	41	－	303	118	150	368	340
SK1615	8D	67	65	－	303	－	－	－	－
SK1630	6D	67	65	291･292	303	－	－	－	－
SK1631	6C	68	65	292	303	－	－	－	－
SK1660	6D	68	65	292	303	－	－	－	－
SK1686	5C	68	66	292	303	－	－	－	－
SK2005	13C	68	66	292･293	303	－	－	－	－
SK2006	10A	68	66	293	303	－	－	－	－
SK2011	13C	68	66	293	303	－	－	－	－
SK2015	12B	68	66	293	303	－	－	－	－
SK2031	12C･D	68	66	293	303	126	163	377	362
SK2045	11B	69	67	294	303	－	－	－	－
SK2046	12D	69	67	294	303	126	163	377	346･362
SK2056	14D	69	67	294	303	127	163	377	346
SK2057	14E	69	67	294	303	－	－	－	－
SK2061	14C	69	67	294	303	－	－	－	－
SK2062	14B	69	68	295	303	127	163	377	346
SK2088	14C	69	68	295	303	－	－	－	－
SK2090	13･14C	70	68	295	303	127	163	377	346
SK2092	13D	70	68	295	303	－	－	－	－
SK2111	14C	70	68	296	303	－	－	－	－

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
古代Ⅷ層　土坑									
SK2112	10E	70	68	－	303	－	－	－	－
SK2119	13C	51	44	262	303	120	153	370	384
SK2120	13C	51	44	262	303	120	153	370	361
SK2122	14D	70	68	296	303	127	164	377・378	346・347
SK2129	13D	70	68	296	303	－	－	－	－
SK2172	8D	70	68	296	303	－	－	－	－
SK2175	14B	70	69	297	304	－	－	－	－
SK2179	13C・D	70	69	297	304	－	－	－	－
SK2180	14C	71	69	309	304	－	－	－	－
SK2191	14B	71	69	297	304	－	－	－	－
SK2192	7C・D	48	41	252	304	－	－	－	－
SK2196	12E	71	69	297	304	－	－	－	－
SK2202	14C	71	69	298	304	－	－	－	－
SK2203	7D	48	41	253	304	－	－	－	－
SK2205	13E	71	69	298	304	－	－	－	－
SK2210	13D	71	69	298	304	－	－	－	－
SK2226	7D	71	69	298	304	127	164	378	362
SK2227	8C・D	71	70	298	304	127	164	378	347
SK2235	7C	48	41	253	304	－	－	－	－
SK2249	9D	41	33	236	304	－	－	－	－
SK2255	7D	49	41	253	304	－	－	－	－
SK2256	6C	71	70	298・299	304	127	164	378	347
SK3022	13E	72	70	299	304	－	－	－	－
SK3023	12E	72	70	299	304	－	－	－	－
SK3027	11C	72	70	299	304	－	－	－	－
SK3037	12D	72	70	299	304	－	－	－	－
SK3039	15D	72	70	－	304	－	－	－	－
古代Ⅷ層　性格不明遺構									
SX1084	10B	72	72	299・300	304	－	－	－	－
SX1104	9・10D	72	71	300	304	127	164～166	378・379	347・348・386
SX1122	9D	73	72	300	304	－	－	－	－
SX1224	9D	41	33	－	304	109	117	345	379
SX1545	7D	49	34	253	304	－	－	－	－
SX1684	6B	49	42	256	304	－	－	－	－
SX2001	12D・E、13D	73	51	300	304	128	166・167	379・380	348・349・361・387
古代Ⅷ層　溝									
SD1077	8B・C、9C・D、10B～D	39	32	204・234・235	305	107	111～116	339～343	314～317・361・377・378
SD1090	9A	73	72	300	305	128	167	380	349・384
SD1103	8～10D	73	72	301	305	129	167・168	380	349・385
SD1146	7A	73	72	301	305	－	－	－	－
SD1147	5～7B	74	72	301	305	129	168	380・381	349・362
SD1152	7A	74	72	301・302	305	129	168	381	349
SD1161	7A	74	72	302	305	129	168	381	349
SD1164	7A・B	74	72	302	305	－	－	－	－
SD1165	7B	74	72	302	305	－	－	－	－
SD1189	8・9D	74	72・73	301	305	－	－	－	－
SD1222	6B、7B・C	74	73	302	305	129	168	381	349
SD1311	5C・D	75	73	302・303	305	－	－	－	－
SD1313	5B・C	75	73	303	305	－	－	－	－
SD1314	5B、6B～D	75	73	303	305	129	168	381	349・385
SD1315	6C	75	73	－	305	－	－	－	－
SD1318	6B	75	73	303	305	－	－	－	－

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
SD1359	8E	75	73	303	305	－	－	－	－
SD1377	6B・C、7B～E、8B～E	42	36	204・243・244	305	112	121～136	347～357	320～330・361・362・380～382
SD1448	6C	76	73	303	305	－	－	－	－
SD1455	5・6D	76	73	304	305	－	－	－	－
SD1463	6C・D	76	73	304	305	－	－	－	－
SD1490	6D、7D・E	76	73	304	305	－	－	－	－
SD1491	7E	76	73	304	305	129	168	381	349
SD1492	6・7E	76	73	304・305	305	－	－	－	－
SD1552	7E	76	73	305	305	－	－	－	－
SD1563	6D	77	73	305	305	129	168	381	362
SD1564	6C・D	77	73	305	305	－	－	－	－
SD1565	6C	77	73	305	305	－	－	－	－
SD2008	13C～E、14C・D	77	74	305・306	306	129	168・169	381	349・350・362・385
SD2029	12・13A	51	45	265	306	120	153	370	341
SD2030	14B～D	77	74	306・308	306	130	169	381	350
SD2039	15E	77	74	306	306	－	－	－	－
SD2040	13・14D・E	78	74	306・307	306	130	169・170	381・382	350・385
SD2041	15E	78	74	306	306	－	－	－	－
SD2047	11E	78	74	307	306	－	－	－	－
SD2054	13C、14C・D	78	74	307	306	130	170	382	350
SD2055	13C・D、14D	78	74	307	306	－	－	－	－
SD2060	14B・C	78	74	307・308	306	130	170	382	350・351
SD2064	13B、14B・C	79	74	308	306	130	170・171	382	351
SD2096	13C・D、14D・E	79	74	307・308・309	306	－	－	－	－
SD2098	13D・E	79	75	308	306	－	－	－	－
SD2099	13D・E	79	75	307・308	306	－	－	－	－
SD2108	13D・E	79	75	308	306	－	－	－	－
SD2116	13・14B	80	75	308	306	131	171	382・383	351・385
SD2117	13・14B	80	75	308	306	－	－	－	－
SD2118	13・14B	80	75	308・309	306	－	－	－	－
SD2121	14C・D	80	75	309	306	131	171	383	351
SD2127	9～12C、5～10・12～15D	80	75・76	310	306	131	171	383	351
SD2131	13C・D	81	75	309	306	131	171	383	351
SD2138	13C・D	81	76	309	306	－	－	－	－
SD2146	14C	81	76	309	306	－	－	－	－
SD2150	12B・C、13B	50	43	261・262	306	119	152・153	370	341・384
SD2173	14C	81	76	309・311	306	131	172	383	362
SD2178	14C	82	76	309・311	306	－	－	－	－
SD2198	15E	82	76	－	306	－	－	－	－
SD2213	13B	82	76	311	306	－	－	－	－
SD3006	12A	82	76	311	306	－	－	－	－
SD3007	12B	82	76	311	306	－	－	－	－
SD3009	12A	82	76	－	307	－	－	－	－
SD3024	12・13D	82	76	311	307	－	－	－	－
SD3110	10C	83	76	－	307	－	－	－	－
SD3142	8C	42	34・35	－	307	－	－	－	－
古代Ⅷ層　ピット									
P1149	6E	－	27	－	－	131	172	383	387
P1211	5B	54	48	271	－	131	172	383	351
P1238	9C	－	28	－	－	109	118	345	319
P1279	6A	－	23	－	－	131	172	383	351
P1347	9E	－	28	－	－	131	172	383	351
P1378	6B	－	23	－	－	131	172	383	351

遺構	位置	遺構				遺物			
		説明	実測図	写真	観察表	説明	実測図	写真	観察表
古代Ⅷ層　ピット									
P1399	9C	－	28	－	－	109	118	345	379
P1484	7C	－	27	－	－	118	150	368	340
P1503	8D	－	27	－	－	118	150	368	340
P1542	8C･D	71	27	－	－	118	150	368	340
P1562	7･8C	－	27	－	－	118	150	368	340
P1567	6D	－	73	305	－	－	－	－	－
P1586	7B･C	48	41	252	－	－	－	－	－
P1604	7･8C	－	27	－	－	118	150	368	340
P1620	7D	－	27	－	－	118	150	368	340
P2114	13E	－	30	－	－	131	172	383	362
P2123	14D	－	30	－	－	131	172	383	351
P2152	14B	－	25	－	－	131	172	383	351
P2160	8C	－	27	－	－	118	150	368	340･361
P2164	13B	－	25	－	－	132	172	383	387
P2171	13D	－	29	－	－	132	172	383	351
P2177	14C	－	30	－	－	132	172	383	351
P2193	8D	－	27	－	－	119	151	368	362
P2240	10C	－	28	－	－	109	118	345	319
P2242	9B	－	24	－	－	132	172	383	351
P2245	9C	－	28	－	－	109	118	345	319
P3089	5D	－	47	226	－	121	155	371	341
中世Ⅳ層　掘立柱建物									
SB532	6A･B､7B	－	78	－	－	137	194	397	363
SB670	5･6B･C	83	85	313･314	307	－	－	－	－
SB691	5･6C･D	83	86	313･315	307	－	－	－	－
SB789	5C､6C･D	84	87	313･315	307	－	－	－	－
SB790	5C･D	84	87	313･315	307	－	－	－	－
SB855	7C･D	84	88	316	307	－	－	－	－
SB919	9B･C	84	89	317･318	307	－	－	－	－
中世Ⅳ層　井戸									
SE040	12E	84	90	318･319	308	137	194	397	363･365･398
SE048	6A	85	90	319	308	138	194	397	363
SE059	7B	85	90	319	308	－	－	－	－
SE262	10E	85	91	319	308	138	194	397	363･365
SE565	5A	85	91	319	308	138	194	397	363
SE598	5A	85	91	319･320	308	138	194	397	363･365
SE600	5B	85	92	320	308	138	194	397	363
SE667	5B	86	92	320	308	138	194･195	397	363
SE674	5･6B	86	93	320	308	138	195･196	397･398	363･365･398
SE704	6C	86	92	320･321	308	138	196～198	398～400	363･365
SE753	6C	86	93	321	308	139	199	400	363
SE754	6D	86	93	321	308	139	199	400	363
SE765	5B	86	94	321	308	139	199･200	400･401	363･365
SE841	9D	87	94	321･322	308	139	200	401	363
SE843	5A	87	94	322	308	139	200	401	363～365
SE844	5A･B	87	95	322	308	139	200	401	364
SE860	6E	87	95	322	308	139	200･201	401	364･365
SE4001	12E	87	96	322･323	308	－	－	－	－
SE4002	13D	87	96	323	308	139	201	402	364･365
SE4003	14D	88	96	323	308	－	－	－	－
中世Ⅳ層　土坑									
SK005	14D	88	97	323	308	－	－	－	－
SK014	13C	88	97	324	308	－	－	－	－
SK539	7A	88	97	324	308	－	－	－	－
SK548	6A	88	97	－	308	－	－	－	－
SK559	5A	88	97	324	308	－	－	－	－
SK561	5A	88	97	324	308	－	－	－	－
SK562	5A	89	98	324	308	－	－	－	－
SK567	5A	89	98	324	308	－	－	－	－
SK570	5A	89	97	325	308	－	－	－	－
SK571	5A	89	98	325	308	－	－	－	－
SK575	5A	89	98	－	308	－	－	－	－
SK578	5A	89	98	325	308	－	－	－	－
SK579	5A	89	98	325	308	－	－	－	－
SK580	5A	89	98	325	308	140	201	402	364
SK581	5A	89	98	325	308	－	－	－	－
SK583	5A	90	98	325	308	－	－	－	－
SK610	7E	90	99	326	308	－	－	－	－
SK784	5A	90	99	－	308	－	－	－	－
SK788	5･6E	90	99	326	308	－	－	－	－
SK913	5B	90	99	－	308	－	－	－	－
SK1666	5･6A	90	99	326	308	－	－	－	－
中世Ⅳ層　溝									
SD025	11A	90	99	－	308	140	201	402	364･365
SD027	9･10A	90	99	326	308	－	－	－	－
SD041	9A	91	99	326	308	140	201	402	364･365
SD4020	11A	91	99	－	308	－	－	－	－
中世Ⅳ層　ピット									
P821	9C	－	82	－	－	140	201	402	364
P830	9C	－	82	－	－	140	201	402	364
P853	5A	－	78	－	－	140	201	402	365
P865	7B	－	79	－	－	140	201	402	364

附　　編

1　西部遺跡の歴史的背景
小林昌二 …… 1

2　西部遺跡出土の墨書土器考察
田中一穂 …… 20

3　新潟県村上市西部遺跡出土の漆紙文書
平川　南 …… 28

4　西部遺跡出土漆紙の調査・保存処理方法について
三ツ井朋子 …… 42

附　　編

1　西部遺跡の歴史的背景

帝京大学　　小林　昌二

はじめに

西部遺跡の歴史的な環境は、すでに『西部遺跡 V』［土本ほか 2008］において述べている。しかしなお西部遺跡の意義を導くためには、鍛冶炉を伴う大型建物からなる遺跡の営まれた同遺跡第Ⅷ層を中心とした時代と環境について相関連する歴史的な背景を掘り下げて考察しておく必要がある。

そのために発掘調査による遺構に関する認識を整理作業の成果などに基づき、以下のように理解しておく。

その第一は、遺跡第Ⅷ層の年代の歴史的背景である。出土土器類から遺跡の年代が 9 世紀末～ 10 世紀中葉に及ぶという所見にしたがい、この年代を中心に絞って検討したい。地方の遺跡では、このおよそ半世紀の後に郡家（ぐうけ）が廃絶し、その郡司大少領らが上位の国府・国衙の判官代などの定員外の官職名を帯びて国衙勤務へと吸収が進むと考えられる時期になると見られる。

第二に、鍛冶炉を内に含む梁間 1 間型の大型掘立柱建物が複数棟存在する、という特色を持つ本遺跡について、同様な類例として新潟県内遺跡に上越市江向遺跡や長岡市門新遺跡があり、また県外では山形県米沢市古志田東遺跡、富山県富山市向野池遺跡などをあげることができるとの指摘がある。これらをどのように理解すべきか、検討する。

第三に、遺跡が狭い県内的な地域に孤立してあるのではなく、その社会的、政治的、あるいは地域間交流など、北方地域との双方向的な関係に留意するとどのようなことが考えられるのか検討する。

以上のような特徴を持つ本遺跡に関する歴史的背景の検討は、小稿に課せられた課題であり、また具体的には 9 世紀半～ 10 世紀代の地方行政の質的意味を次のように明確にすることが求められているともいえよう。

第一の点では、律令制的な国郡の支配がどうのように変化しつつあったか。その変化の中で鍛冶生産がいかなる位置を占めていたか。またこれらの変化の中で位置づけるとその生産遺跡の特質をどのように理解ができるかにある。

第二は、官衙における「所」や「営所」の在り方について、これがいかなる可能性を持つものかを考えたい。

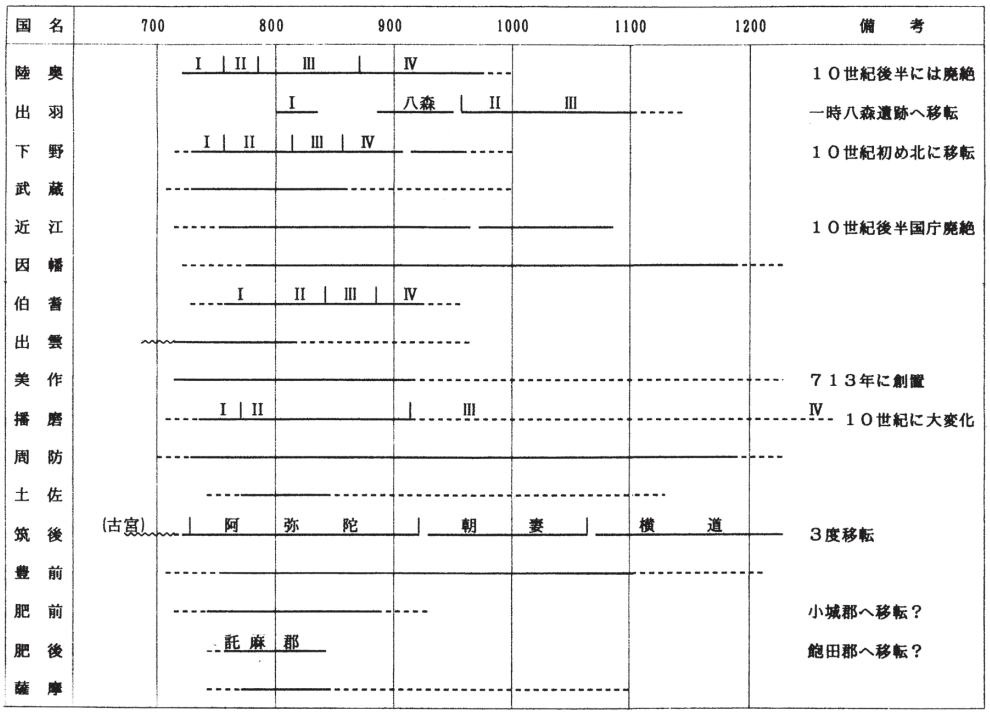
第三の点は、広い範囲の事例研究を必要とする課題となり、ここではその準備が十分にない。この検討は本書の別の章節でも行われるであろうが、ここでは限られた政治的な視点からのみ行っておく。

また本遺跡出土の「頸城宮」を墨書した画期的な漆紙文書に関する平川南氏らの興味深い報告について最後にいささか触れる。

	郡庁類型	AD．700年		800年		900年	
Ⅰ類	ロの字回廊型			名生館小館地区 神野向Ⅱ期	〔〃〕 〔〃〕	神野向Ⅲ期 御殿前Ⅴ期	
	ロの字長含連結型	（御殿前Ⅰb期） 岡Ⅲ－1期 （小郡Ⅱ期）					
	ロの字短含連結型	戸島			上鶴頭Ⅰ期		
Ⅳ類	ロの字省略変形型	（〔長者原a期〕） 今小路Ⅰ期 （正道Ⅱ期？） 上原A群？		今小路Ⅱ期		上鶴頭Ⅱ期	
Ⅱ類	コの字正殿隔絶型	神野向Ⅰ期 下本谷Ⅱ期		岡Ⅲ－2期 万代寺Ⅱ期 下本谷Ⅲ期	三十三間堂Ⅰ期 下本谷Ⅳ期	〔三十三間堂Ⅱ期〕	
	コの字正殿非隔絶型	（万代寺Ⅰ期） 宮尾Ⅰ期		（〔長者原b期〕） 宮尾Ⅱ期	御殿前Ⅳ期		
Ⅴ類	コの字省略変形型	名生館城内地区 〔上原・山宮阿弥陀森？〕					
Ⅲ	品字型			東山	東山	東山	東山
Ⅵ類	品字省略変形型			古郡？ 〔正道Ⅲ期〕 花園？ 上原B群 小郡Ⅲ期			
Ⅶ類	その他	（〔長者原a期〕） 御子ケ谷Ⅰa期？ （岡Ⅱ期） （正道Ⅱ期？）		梅曽？ 御子ケ谷Ⅰb期？	（〔長者原c期〕） 御子ケ谷Ⅱa期？ 宮尾Ⅲ	御子ケ谷Ⅱb期？	

注；（）内は，他の類型とも考えられるもの。〔〕内は，時期が不確かなもの。？は，郡庁であるか不確かなもの。

第１表　郡庁造営時期　（[山中 1994] 62 頁から引用）



注　破線は存在が不確定な期間。波線は国衙と性格が異なると考えられる期間。

第２表　国衙遺跡の存続期間　（[山中 1994] 384 頁から引用）

A　律令制国郡支配の変貌

1）国衙と郡家

地方官衙とは、中央政府が全国支配を実現するために地方に置いた公権力の行政・軍事・交通などの役所の総称である。これらには地方を支配する国衙、郡家、里（郷）家の各級行政機関や、また軍団、城、柵、塞、鎮所、営、塁、戍、烽などの各種の軍事施設、さらに駅家、伝馬（郡家に所属）、関、剗、津、泊などの交通関連機関、馬牛を供給する牧、銭貨を鋳造する鋳銭司、武器・武具製造などの国家・国衙の施設、あるいは須恵器製造や製鉄、製塩などの郡衙の産業組織などの多様な施設が置かれたことが知られている。

国衙はこのように多くの機関や施設を統括する中心的な役所であり、またその行政・財政の多くの部分は、下部組織の郡家（郡衙）の活動によって支えられていたことが知られている。

律令制による国家は、大宝元年（701）に全国を京と五八国三島（10 世紀前半の延喜式には 66 国 2 島となる）にいわゆる国を設け、中央から任期六年[1]の国司を派遣して支配に当たらせた。また国の下にはおよそ 600 の郡が建てられ、そこには郡の郡司には主として郡内の豪族［原 1976］を世襲的に任じ、その下に郡雑任や里長らを置いて支配した。そのため上級機関の国司の支配は、世襲職にある郡司を通じてこそ可能になることも明らかにされてきた［岸 1962、大町 1986］。また近年の国衙や郡家遺跡の発掘調査やこれらを総括する研究によって、内部の構造やその変遷が解明され、実に多くの事柄が明らかになってきている［山中 1984、山中・佐藤 1985、国立歴史民俗博物館編 1986、国立歴史民俗博物館編 1989、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター編 1998］。そのなかに上下の関係を有する国と郡の役所の成立が同時に形成されたのではない、ということや郡家は 7 世紀半ばからの初期評衙（家）を承け継いでいない、など新たな問題が指摘されるようになった。

このような地方官衙内部の建物構成やその変遷に関する問題は、官衙の機構や組織を解明するうえで大きな成果を挙げている［奈良文化財研究所編 2003、奈良文化財研究所編 2004、奈良文化財研究所編 2007］。しかし、その官衙の機構や組織が持つ公権力としての住民支配の歴史的性質の問題を理解するには、なお住民の居住域との関係などを視野に入れておくことも必要となる。

2）遺跡研究における国郡支配の外的様相

律令制国郡支配が軌道にのったのは、大宝令制定（701）からしばらくした霊亀・養老年間（715 ～ 724）頃とされる。この問題に地方官衙遺跡のありようを遺構存続の面から検討を加えたのは前掲した山中敏史氏『古代地方官衙遺跡の研究』［山中 1994］である。

これらの二つの表から指摘できることは、その成立過程においても国衙遺跡と郡衙遺跡とは、その盛衰において同じあゆみを示していない。その衰退期も同様であることを注目しておきたい。

また郡衙遺跡については、郡庁政庁や正倉の機能、伝馬と宿泊施設の厨の機能などとともに、さまざまな生産施設としての院の存在などがこれまでにも指摘されている。

文献上で 11、12 世紀において郡司の活躍が見られても、郡衙遺跡はおしなべて 10 世紀半ば以後に展開することがない。このことは郡司が、判官代など国府在庁の下役人の官職名を帯びるようになることと

1）　後に任期四年。陸奥・出羽両国と西海道諸国は五年。

関連するもののようである。

こうした変化は、まず郡司職がもはや独自の組織や郡施設によって業務を果たすのではなく、国府に勤務し、国府の職務の分掌者として個別に業務を遂行するものへと変化したことを示すものと理解できる。しかし、では郡衙が在地支配に機能したかつての徴税や勧農の実務は一体どのようになったのであろうか。このことは、実務が郡庁の組織外に下降し、民間有力者に委任されていったことと深い関連があるものとの推測を導く。こうした 10 世紀の変化に先立つ 9 世紀半ばの郡支配の内実はどうであったのか、確認するところから考察を進めよう。

3）郡務の実例と変貌の方向

2000 年度の発掘調査で石川県津幡町加茂遺跡から嘉祥二年（849）の年紀を持つ越前国加賀郡榜示札が出土して注目を浴びた。その内容は、国司の符による命令十ヶ条の内、勧農や村内秩序維持に関する次の八ヶ条について、これを承けた郡司の命令する符が、郷や駅の長、刀禰らに宛てて発せられた、時期や地域の明らかな郡務の事例である。

①田夫の朝は寅時（四時前）に田に入り、夕べは戌時（夜八時以後）に私（宅）に還ること
②田夫が意のままに魚酒を喫（くら）うことを禁制する
③溝や堰を労作しない百姓を禁制する
④五月三〇日より前に田植えを終了し、申上すること
⑤村邑（そんゆう）の内に隠れ潜む（逃亡人で一般の）諸人として疑わしい人を捜し捕らえよ
⑥桑を植え養蚕することのない百姓を禁制すべきこと
⑦里邑（りゆう）の内で酒を喫（くら）い酔い、遊戯し逸（みだ）れる百姓を禁制すべきこと
⑧正しく農業に勤めること、村里の長なる人は該当する百姓の名を申上せよ

なお木簡ではさらに続けて次のようにある。

越前国は、郡が宜しく承知するとともに、口達し、早く勤作させ、もし符の旨に遵（したが）わず、飽き懈怠（けたい）の由を称する者を調べて罰せよ、と命令した。

命令された加賀郡司は、郡家下役人の田領らに次のように仰せ下した。

宜しく村毎に届け廻りて愉（したが）えよ、懈怠ある者は身を移して進（たてまつ）れ。この郡符は国道の駅（すえ）の馬牛を繋ぐ所にも進め、路頭に榜示し厳かに禁を加えよ。田領や刀禰が怨みや憎しみや隠し容れによる違反があったら、その人を罪し、違背のないように郡符が届いたら実施せよ。

最後には郡符受取人が田領丈部浪麿とある。

この最後に見える田領の丈部浪麿が郡符受取人であり、郡符を村ごとに届けて周知徹底を図れと郡司により命じられていたことが注目される。国郡支配の末端における郡雑任の田領が、郡符を携えて村ごとに巡り、村の刀禰にまでその周知徹底を図るという行政行為をしていたことが、この木簡で初めて明らかになったことが重要である。

またこの榜示札の末尾には、郡組織の責任者である郡司大少領や擬任郡司、主政、主帳の四等官の職名と名前が記され、組織の意志を強く押し出した命令書となっていることも重要である。ところがこの郡符命令は、宛所の郷や駅の長、刀禰らに直接に伝えられたのではなく、まず郡雑任の田領に宛てられ、田領の手により村々に周知徹底を図れと命じていることも従来の行政命令に関する理解からすると注目されな

ければならない。

ここに見える９世紀半ばの北陸の国郡による村落支配は、きわめて組織だっており、その郡衙廃絶の兆しをここから直ちに見出すことはできない。

しかし中央政府による班田収授制はもはや畿外地域では実施を見ず、戸籍の実態も実状に反したものとなっていたことが明らかにされている。また弘仁十四年（823）の西海道大宰府管内の公営田制や元慶三年（879）～五年の畿内四千町歩の官田経営の実施は、その班田制の制度的・財政的な破綻と、新たな再生産組織による財政再建の試みを示すものであった。

前者の公営田制では、村里の幹了者を正長として田１町以上を預けて、１町ごとに５人の正丁を配置し、各 30 日の徭役労働を当て、この反対給付として民間に倣って食と功とを授け、飢餓を救い、調庸の納入に当てさせようとするもので、四年間の時限で実施された。

その後者の場合では、畿内の五カ国の田地四千町歩を割き取って、この田を地子田と佃との二種の扱いとして、土人浪人を問わず力田之輩を正長にして預けて営田をおこなわせるものであった。この営田では、その果実を確かなものにするために、郷毎に営田預かり人を惣監と呼んで配置し、その惣監には諸司の官人、近衛･兵衛や二宮の舎人及び雑任の官職身分のもので、郷里が推薦するものを宛てることにし、牧宰･国司の教喩の役割が大なることを強調していた。ここに前者で見た正丁を徭丁として動員するなどの規定はもはやない。この後者は、大和国の太田犬丸名につながる点などから成功した模様である。

この後者における営田と、営田の果実を確実に納入するべき新勧農政策には、国司の役割の強調はあるが、郡司の役割にふれるところがない。郷里推薦の官人、舎人、雑任を郷毎に配置するとは、郡司が郡雑任の田領を通じて勧農するという類ではないことを意味しており、またその人事が郷里の推薦にあるため郡司が容喙するものではないことを暗示していると考えられるのである。

中央政府の財源不足から始まったこの畿内元慶官田は、部分的限定的ながら、国司と郷里推薦の惣監とで進められる新しい営田請負方式を生み出したといえる。

かくして前に見た加賀郡榜示札における郡組織が、変貌するであろう一要因をその請負的な畿内の元慶官田を例としてみてきた。このことが 10 世紀半ばにおける西部遺跡の歴史的背景の理解にどのようにつながるか、官衙の所や経営などについて考察を進めよう。

Ｂ　官衙の所や経営、営所について

１）鍛冶生産遺構

西部遺跡には、第１図のように鍛冶炉を内に含む梁間１間型の大型建物が５棟検出されており、そうした類例に県内遺跡として上越市江向遺跡、長岡市門新遺跡が、県外遺跡では山形県米沢市古志田東遺跡や富山県富山市向野池遺跡などをあげることができるという。これをどのように考えるか。

従来の研究史をたどると、私営田が盛行した 10 世紀には台頭する私営田領主がその農業経営と武力紛争のための武装をする、いわゆる私営田領主の「営所」として理解する流れがある。しかしここでは、むしろ律令制地方国の国衙機構の官衙工房や郡衙機構の院などの工房として理解できないかという発掘担当者の湯原氏の新しい提言がある。

第１図　村上市西部遺跡

大型建物の梁間１間型等の遺跡について

上越市江向遺跡

この遺跡は、『上越市史』資料編２考古［上越市史編さん委員会編 2003］に「遺跡の全体像未発表のため不明である」（674 ～ 680 頁）とあるように、平成４年（1992）に行われた調査の報告書は未刊である。

また遺跡は上越市藤巻字江向にあり、古代（8 世紀後半～ 10 世紀）と中世（15 世紀～ 16 世紀）の二段階があり、約 8,000 平方メートルの発掘調査が行われたが、遺物の出土量が少なく、かつての耕地整理により遺跡の包含層がかなり削平されたようだという。前掲書では大型掘立柱建物と「高有私印」の青銅印が出土したことで注目を集めた旨を記す。なお、筆者は発見当初に拝見する機会を得ている。

さて問題の大型掘立柱建物 SB100 を前掲書は、桁行７間×梁間２間の東西棟で、四面廂建物であり、その７間は 17.4m であり、２間は 5.7 ～ 6m の規模であるとする。

その建物の四面廂の様態と柱間が各 2m を超える規格から官衙的建物であると見られるが、他方その出土の「高有私印」の青銅印からは有力豪族の高志公氏の私宅的な理解となる。

長岡市門新遺跡（第２図）

この遺跡は、延長六年十月の年次を記す漆紙塊ＡやＢを出土したことでも知られる。報告書『門新遺跡』［田中 1995］によると、「昭和 20 年代の圃場整備時に夥しい土器が出土したといわれるが、・・・」とあるように削平部分を含むとあり、掘立柱建物 11 棟・井戸１基、土坑 12 基、溝 14 条・畠の畝・人為的テラス・河道跡が確認され、また土器・陶器・鉄滓・フイゴの羽口・漆紙塊などの遺物が、コンテナで約 90 箱ほどが出土したという。

さて官衙風とされる大型掘立柱建物 SB01 は、第２図のように両側に廂を東西（2.5m）に持つ建物で、身舎が桁行５間（19m）×梁間２間（6m）である。東西両側に全体と南の一部に廂を伴い、また南側を除いて雨落ち溝が見られる。

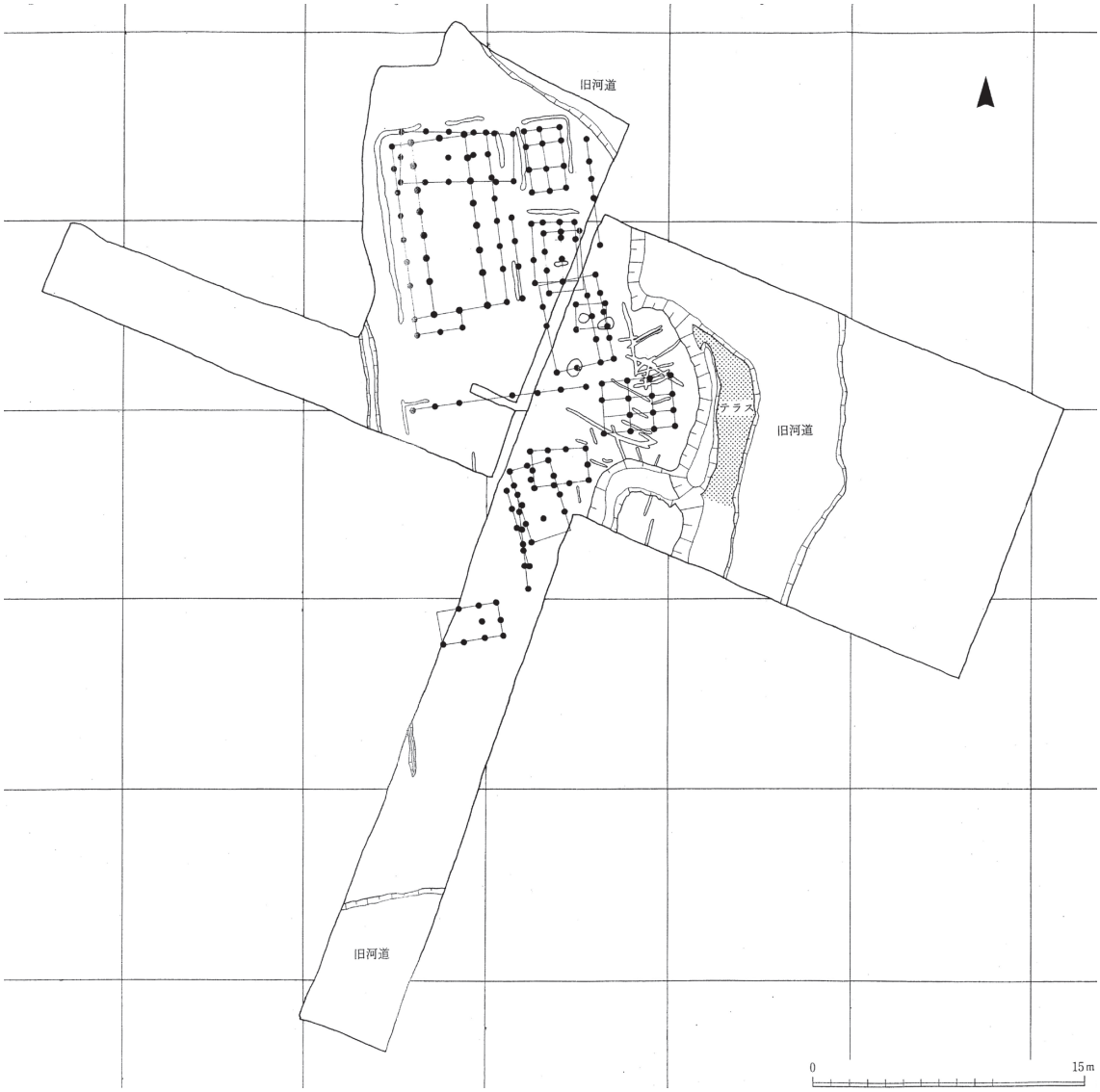
報告書では、また土坑 SK242 や雨落ち溝 SD157・160 から鉄滓・焼け土粒・フイゴの羽口がやや集中的に出土しており、過去の掘平のために鍛冶炉などの実際の作業面は確認できないが、建物内部における鉄生産に関わる作業が行われた可能性がある、としている。なお出土土器食膳具の変遷の分析により９世紀後半から 10 世紀半ばにあたる年代の第Ⅲ期ｂの時期が、漆紙文書の延長六年に該当するとしている。

大型掘立柱建物 SB01 の西側溝 SD152 からは漆紙塊Ａが、また東側北溝 SD159 からは漆紙塊Ｂが出土し、遺跡内部で漆塗りの作業が行われていたことを示しているとしている。

辛苦の多い克明な作業の結果、漆紙塊Ａには、折りたたまれた第一号から第三号文書があり、とされているが第一号に文書末尾の書き止め文言２文字分と「延長六年十月」が分かるにとどまっていることが述べられている。

また漆紙塊Ｂでは、第四号から第九号の文書が重ねられており、その第四号と五号が明らかとされている。これによると、第四号には大刀一腰を請給う文字が記され、また第五号には六月と請求米について三斗や二石との墨書があったことを指摘している。

なお人為的テラス・河道跡が遺跡東南部に接していることを確認しておこう。



第 2 図　長岡市門新遺跡（[田中 1995] から引用）

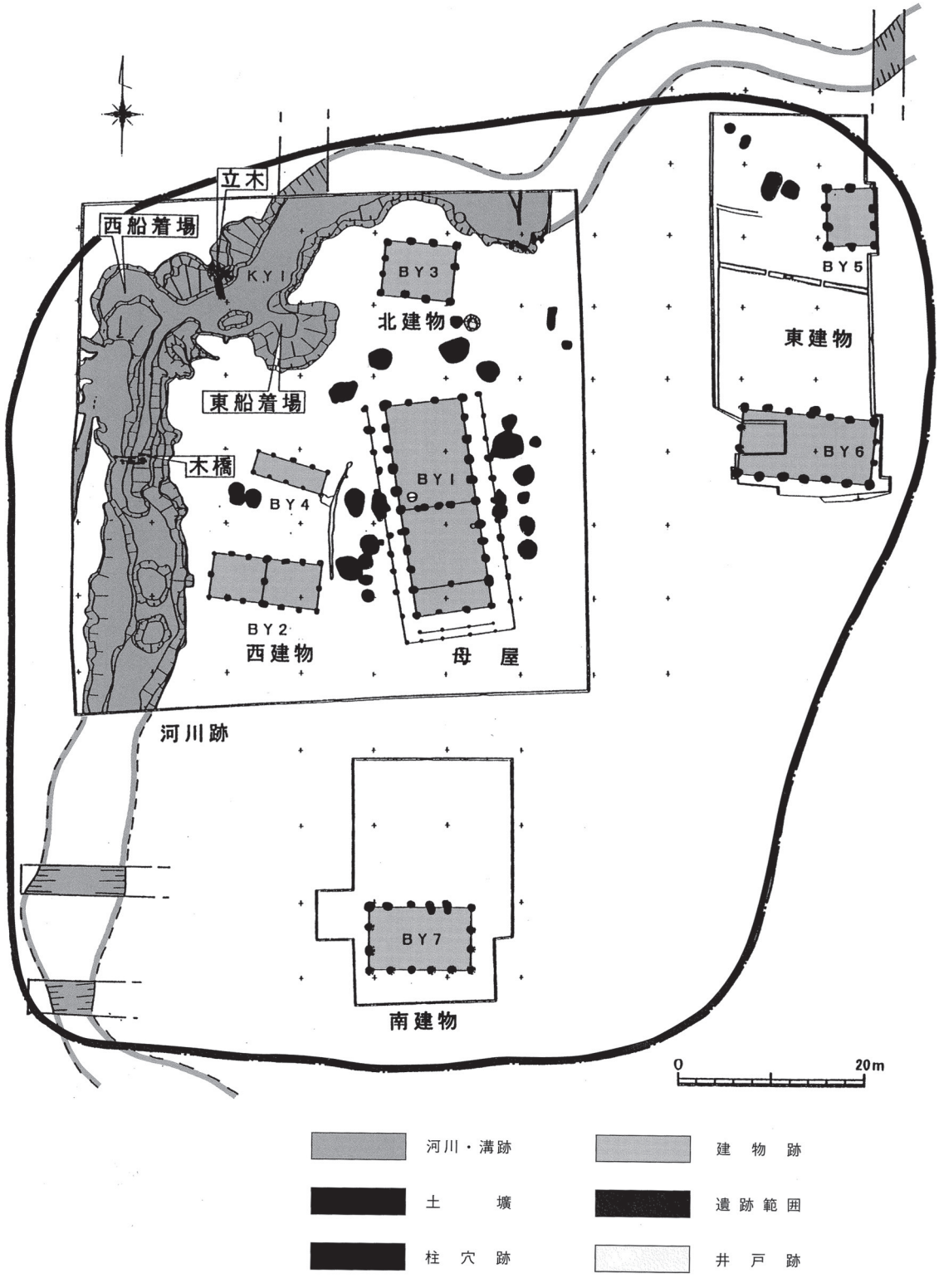
山形県米沢市古志田東遺跡（第 3 図）

報告書『古志田東遺跡』[手塚 2001] によると山形県米沢市の古志田東遺跡は、9 世紀半ば前後に成立し 10 世紀に入ると機能を失った在地豪族屋敷跡と想定され、ここから第 3 図のように河川跡の東側に沿って大型建物跡 1 棟を含む建物跡 7 棟、土坑 20 基、井戸跡 2 基、溝状遺構 3 基、河川跡と 2 基の船着場と木橋 1 基が出土したという。

その出土の遺物では、土器類（墨書土器 423 点、刻書土器 5 点を含む）、木製品類（木簡 61 点、呪術絵 1 点を含む）などが整理箱で約 200 箱に及ぶとされる。

さてその大型建物 BY1 は、桁行 10 間（23.8m）、梁間 3 間（8.6m）で北側を除く 3 面に廂を持つ。この建物の東西と北に土坑が多く、長径 0.7m ～ 3.8m、深さ 7 ～ 58cm と大きさが多様であるが概して浅いという。土坑内部には赤焼土器や須恵器の土器片などと共に多量の焼土と炭化物が混在しているとされ、不要品の焼却処分施設と推測するのが妥当という（前掲書 22 頁）。ここでは鍛冶遺構の可能性の指摘は見られない。

報告書は、出土木簡において「田人」や、稲の種子と解釈する「狄帯建一斛」、あるいは「□船津運十人」などの墨書が記されているところから、大胆な仮設だと断りながら、国司の旧支配体制に決別した豪族の大規模な屋敷と見たいとしている（前掲書 279 頁）。



第 3 図　山形県米沢市古志田東遺跡 （［手塚 2001］から引用）

第４図　富山県富山市向野池遺跡（[折原ほか 2006] から引用）

富山県富山市向野池遺跡（第４図）

報告書『向野池遺跡』[折原ほか 2006] によると、JR 富山駅南西９km の北陸自動車道富山西インターチェンジの南に接する向野池遺跡では、第４図のように北西部の調査区に１棟、南東部の調査区から７棟の掘立柱建物が出土し、そのうち２棟が大型建物で、その大きい方には三面に廂がつき、一般的な集落で検出される建物とは大きく異なることが指摘されている。またその時期は土師器焼成窯を中心とした時期の中でも９世紀後半から 10 世紀中頃までのものとなると推測されている（前掲書 120 頁）。

その東南部の建物は、計画的な配置が次のようにＡ・Ｂと二つの推測がなされるとする。Ａ：２棟が並行して同時に配置された２時期と、１棟だけであった１時期の三時期があったと推測する場合と、またＢ：１時期に１棟だけがあり、その場所を替えた５時期があったと推測する場合である。

Ａにより三面廂つきの大型建物 SB03 に注目すると SB06 が並んで存在したことになり、その三つに時期の第Ⅱ期に当たる。その対応する SB06 の内部には１号炉が検出されており、周辺遺構から鉄滓が

多量に出土し、また近くのSK19・22・23から廃棄された球状滓・椀状滓・鍛造剝片が多量に検出され、それが鍛冶炉であることが確実という。この1号炉が底面しか分かっていないのは圃場整備の際に掘平されてしまっていたためと指摘されている。したがって鍛冶炉などの存在が報告書では言及されていない三面廂つきの大型建物SB03は、桁行6間（14.50m）×梁間2間（5.10m）で、廂を含めるとそれぞれが15.16m × 9.00mに及ぶというが、その建物内の地面に言及すべきものがなく、これも掘平の可能性が考えられるのかもしれない。

報告書は、本遺跡の周辺が製鉄炉や須恵器窯が多く存在し、生産遺跡が集中する地域として著名なことを強調し、本遺跡の鍛冶炉と土師器焼成窯の検出から、そうした地域の生産活動の一環を形成しているという。また古代道路との密接なことも指摘している。

さらに報告書は、「新潟県西部遺跡との比較」の項目を設けてその遺跡の相違点に注目する記述を行っている。

第1には建物構造が違うこと、すなわち廂つきの範囲やその梁間の1間と2間の違いなど構造の違いが指摘されている。第2には、西部遺跡の鍛冶炉、製塩炉、性格不明の焼土跡、漆利用など多様であることに対して向野池遺跡では鍛冶炉と土師器焼成窯があるのみであるとする。さらに第3には、西部遺跡は白磁、則天文字の墨書土器、貫通孔のある水晶玉・漆紙文書など一般に出土しない遺物も多く、遺物総量も多い。対して、向野池遺跡では土師器・須恵器・転用硯・羽口・鉄滓類など一般的な出土遺物で、墨書土器も特異な文字は無く少量で、遺物総数も少ないなど、大いに違う点にふれて以下のように指摘する。

すなわち共に生産遺跡で共通しながらも規模と多様性で西部遺跡が向野池遺跡より秀でているとし、その違いを運営主体の違いか、地域差か時期差か、西部遺跡の調査分析の進展に期待する旨を述べている。大変に参考になり、併せて責任を覚える指摘である。

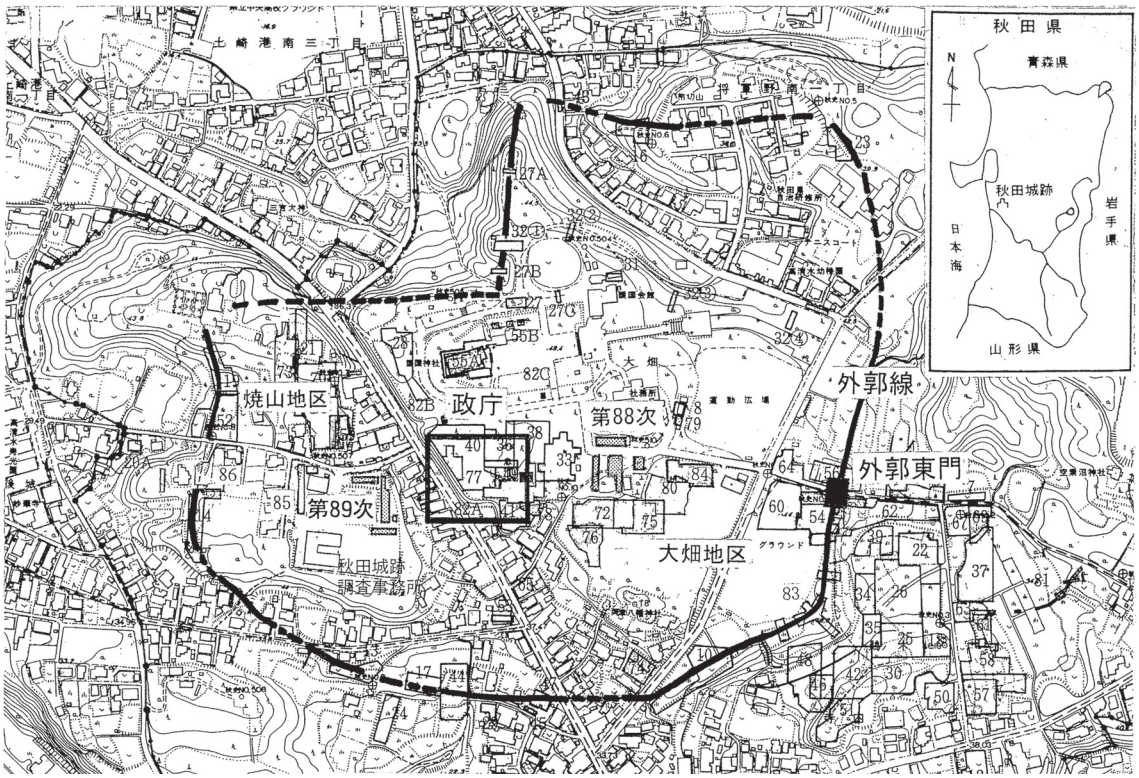
以上の4例を表にすると次のようになろう。

遺跡名	大型建物の形態と規模	鍛冶遺構や文字資料等	時期など
①西部遺跡 新潟県村上市	梁間1間型の大型建物を5棟検出、このうちもっとも大きいSB1500は四面廂が付くもので桁行9間（23.20m）×梁行3間（10.8m）で建物の周囲を溝で囲む	鍛冶炉を内に含む、「頸城宮」を墨書した画期的な漆紙文書	9世紀末～10世紀前半
②江向遺跡 新潟県上越市	桁行7間（17.4m）×梁間2間（5.7～6m）東西棟で四面廂	「高有私印」の青銅印からは有力豪族の私宅的掘平のため不明	8世紀後半～10世紀
③門新遺跡 新潟県長岡市	廂を東西（2.5m）に身舎が桁行5間（19m）×梁間2間（6m）、南に一部廂と以外に雨落ち溝	大型建物SB01の西側溝から漆紙塊A、東北溝から漆紙塊Bが出土、遺跡内部で漆塗りの作業	9世紀後半～10世紀半
④古志田東遺跡 山形県米沢市	桁行10間（23.8m）×梁間3間（8.6m）北側を除く3面に廂	建物東西北に長径0.7m～3.8m、深さ7～58cmの浅い土坑内部に多量の焼土と炭化物が混在、不要品焼却施設と推測	9世紀半～10世紀初頭、豪族屋敷説
⑤向野池遺跡 富山県富山市	桁行6間（14.50m）×梁間2間（5.10m）、3面廂を含むと15.16m × 9.00mに及ぶ、この大型建物SB03にSB06が並ぶ	SB06の内部の1号炉と周辺遺構から鉄滓が多量に出土、周辺から廃棄された球状滓・椀状滓・鍛造剝片を多量に検出、鍛冶炉が確実	9世紀後半～10世紀中頃

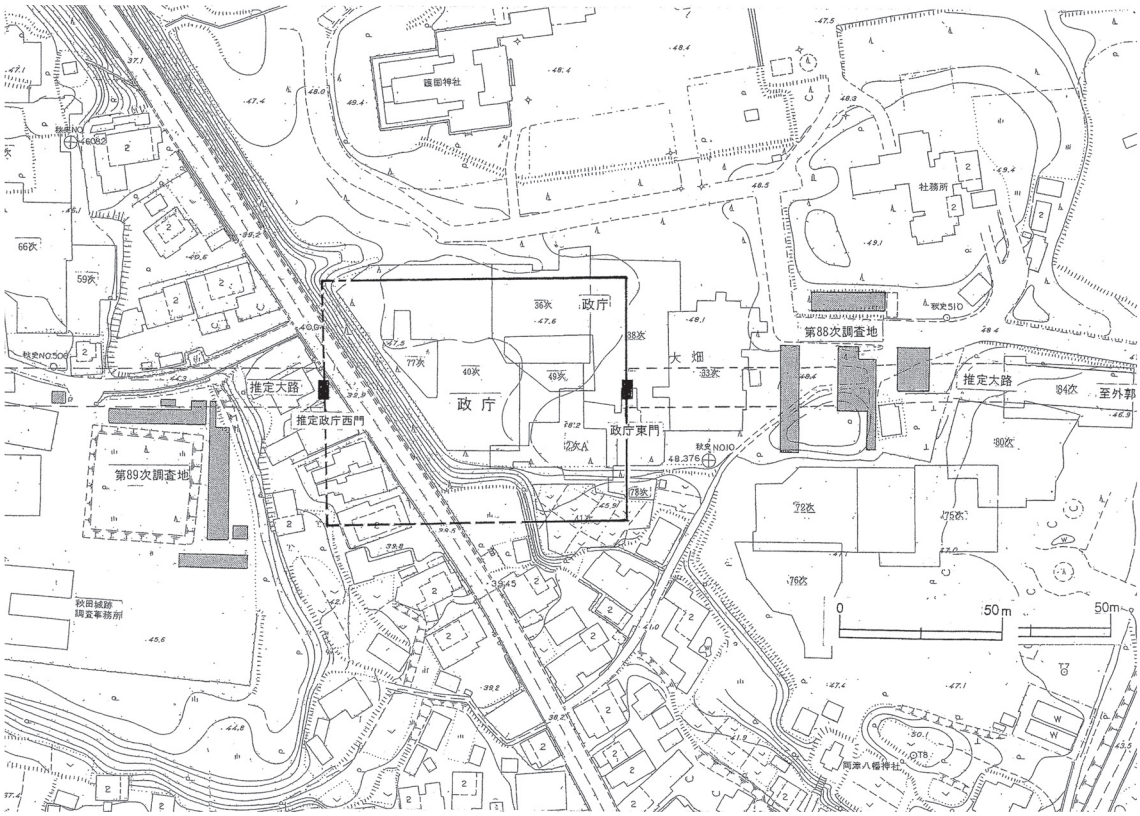
最近の城柵内鍛冶工房の調査例から

秋田城跡 - 第88次・89次発掘調査の概要 -（第5～7図）

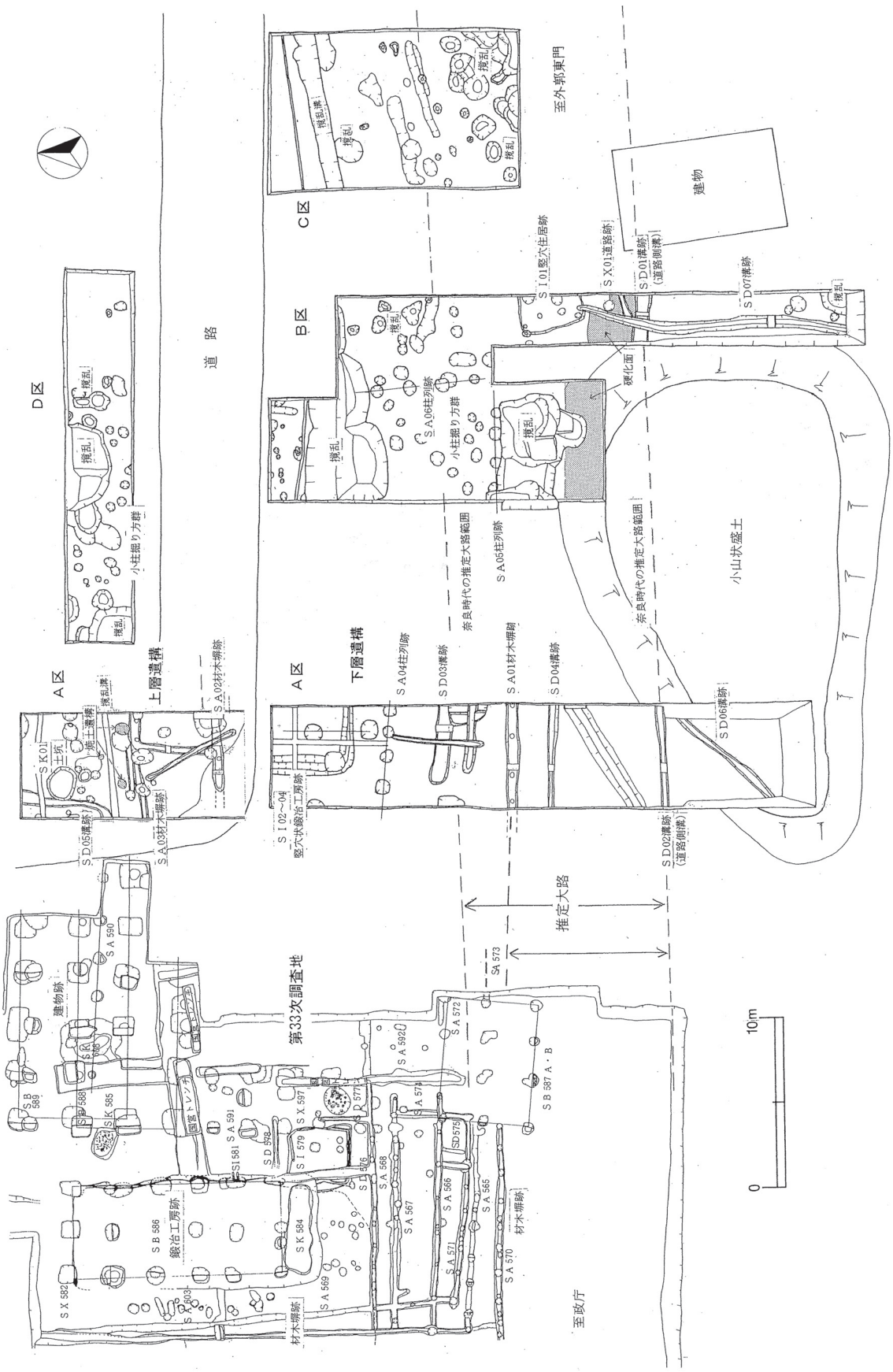
『第33回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』［古代城柵官衙遺跡検討会編2007］における秋田城跡第88次調査地は、第5～7図のように政庁東北付近の調査区である。その北西～中央部においてSI01～04竪



第 5 図　秋田城跡発掘調査位置図 （[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）



第 6 図　秋田城跡第 88 次・89 次調査地位置関係図 （[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）



第 7 図　秋田城跡第 88 次調査地全体図 （[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）

穴状鍛冶工房跡の発掘調査が報告されている。同位置で建て替えられ重複して検出され、床面に炉跡や焦土面がある。その形状についての記述を要約すると次のようになる。

SI01　9 世紀後半　南北6m以上×東西4.2m以上の方形、炭化物面、焦土面

SI02　9 世紀中頃　南北4.8m以上×東西3.8m以上の方形、壁際に隅柱

SI03　9 世紀前半～　南北4.6m以上×東西4m以上の方形、壁際に周溝

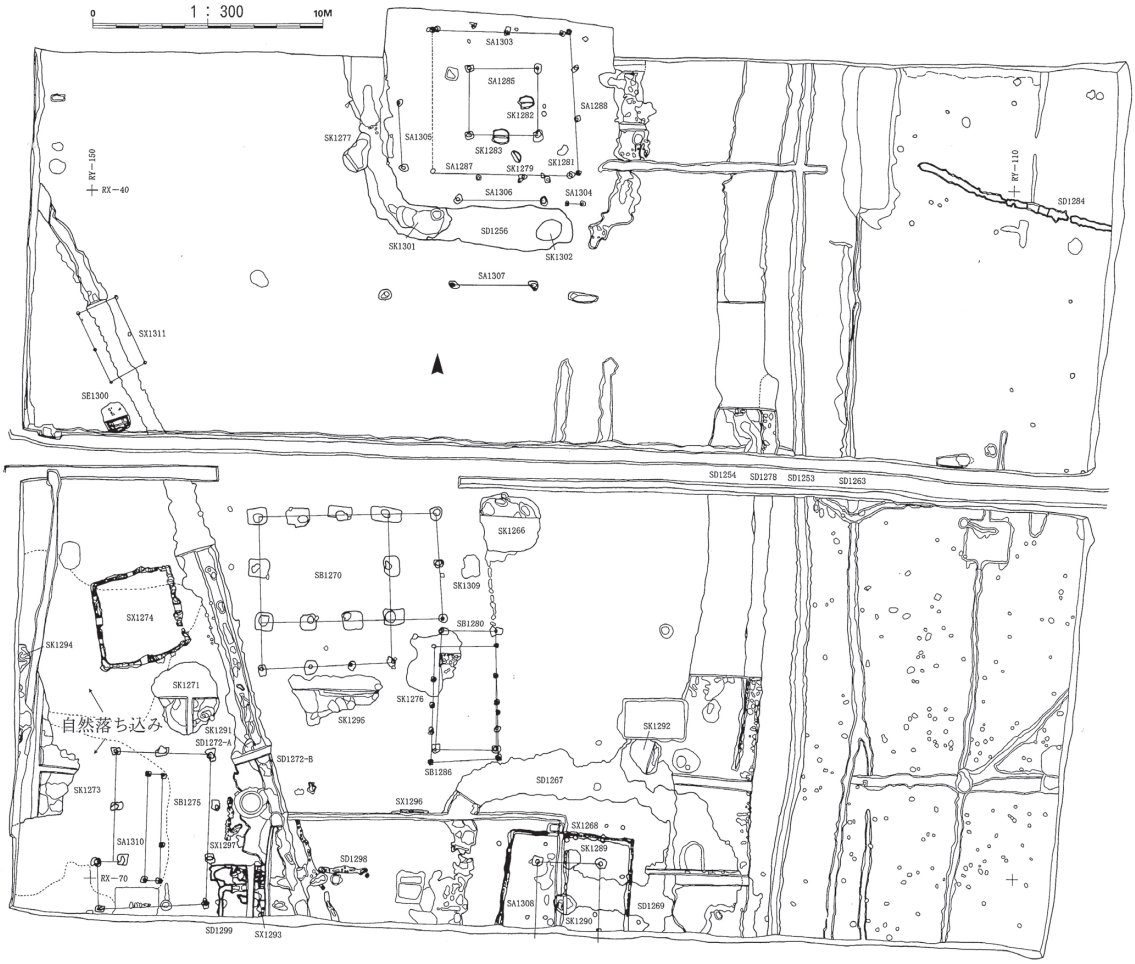
SI04　8 世紀末～ 9 世紀初め　南北4.8m以上×東西4m以上の方形、隅柱、周溝

ここでの鍛冶工房は、竪穴状であるが同じ位置に建て替えられて、8 世紀末から 9 世紀後半までのおよそ 100 年ほどが 4 時期におよぶ。したがってその継続年数は 25 年前後であり、その鍛冶炉の様子も少しずつ大きくなりながらも大きな変化を示していないことが窺われる。

徳丹城跡 - 第 65 次発掘調査の概要 -（第 8 ～ 11 図）

同様に『第 33 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』によると、徳丹城跡内部の外郭西門近くの調査（第

第 8 図　徳丹城跡－第 65 次発掘調査の概要－（[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）



第 9 図　徳丹城跡第 65 次発掘調査区遺構全体図（[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）

8 ～ 11 図）での次の記述も参考になる。

1 号施設は、四本の支柱と四周の小柱列、それらを囲む周溝。板壁で囲まれた内部に小土坑群が 4 個、各焦土を含む。深さ 10cm 前後で浅い。

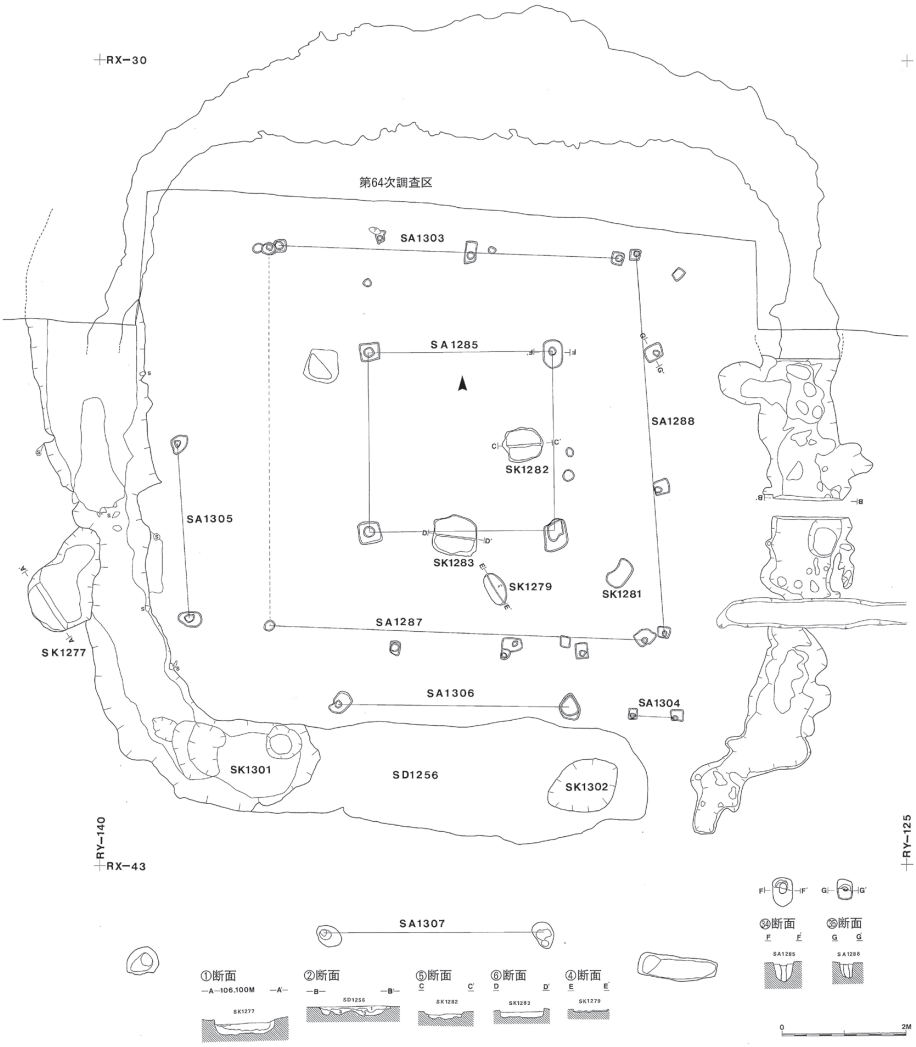
2 号施設は、1 号工房の真南 23m の位置に発見されている。推定 4 本の支柱と四周に板壁の布掘、それを囲む周溝からなる。周溝は内径 8.6m、外径 12.6 ～ 13.8m と推定されている。

報告資料は、周溝を伴う工房施設として、1 号工房施設と 2 棟の掘立柱建物とを組み合わせの一つの単位と捉えれば、同様の構成要素を持つもう一つの単位、2 号工房施設群が南側でも発見された。空間的に離れているが同時存在の可能性を指摘している。2 号工房施設の辺りから漆の被膜がついた土師器の杯が出土しているとされ、注目される。

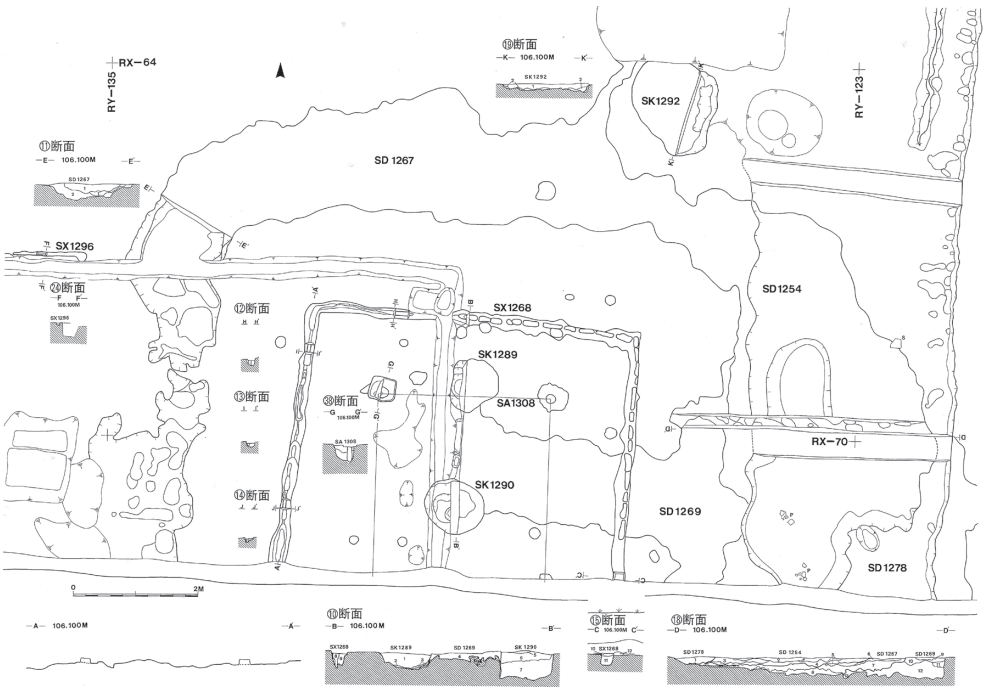
以上、近年における城柵内での鍛冶工房の検出や時期、その様態が報告されている。そこでは建物とその廻りの周溝の存在が注目される。推定時期にずれはあるが、徳丹城では二つの施設の同時存在や漆の付着した土師器の出土が指摘されている。西部遺跡の理解において参照すべき事例として紹介した。

以上見たように、徳丹城鍛冶炉第二号建物が梁間一間型建物遺跡例に該当する。第一号建物は一間×二間であり、また秋田城は二間×五間と不明の二棟である。

以上、大型掘立柱建物の梁間 1 間型建物遺跡例と見られるもの、あるいはそのように見るべきものなどを検討してきたが、そうした事例やそれに近い理解、あるいは梁間 2 間型建物遺跡例もあった。梁間 1



第 10 図　徳丹城跡 1 号工房施設実測図 （[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）



第 11 図　徳丹城跡 2 号工房施設実測図 （[古代城柵官衙遺跡検討会編 2007] から引用）

間型建物遺跡例を参考にしてみていく意義は明かであるが、しかしその枠内に定義できないことも推測できた。したがって今後、この鍛冶炉を内部に持つ大型掘立柱建物の意義を定義していく必要があることをここで確認しておきたい。

C　9世紀後半から１０世紀半ばまでの政治的動向

1）元慶の乱

元慶の乱は、元慶二年（878）三月廿九日、越後国の隣国出羽国から守藤原朝臣興世がその勃発を飛駅上奏したことで京で知られるところとなった。

乱は、前年の凶作と秋田城司・出羽介良岑近の苛政により、これに反発した俘囚集団が、出羽軍制の弱点をついて計画的に起こした乱であった（『能代市史』通史編Ⅰ［能代市史編さん委員会編 2009］、171 頁）とされる。

この乱では、大量の武器・武具が失われたとされ、したがって武器・武具の必要が急速に起こったことが考えられる。その乱の詳細は前掲書などにゆずるが、秋田城に納められていた多数の武器・武具が乱の勃発で城とともに消失したという。

その後、出羽国軍、陸奥国軍に加えて上野・下野の二国の援兵を得て、秋田営から再び秋田城に大量の甲冑、軍糧を城内に蓄えることに成功した。しかし 5 月下旬の俘囚軍の急襲をうけて、政府軍は大敗し、集積していた甲冑 300 領や軍馬 1500 頭など大量の軍需物資が奪われ、また出羽国兵は甲冑をすべて失ってしまったという。

かかる事態をうけて摂政藤原基経の強い要請を承けた良吏の誉れ高い藤原保則が出羽権守として現地に到着したのは 6 月中旬頃である。その後に巻き返し、俘囚の降伏を促して、翌元慶三年七、八月の合戦で秋田城下をようやく鎮定した。こうして上野、下野の兵士の甲冑を出羽国に留め置き、援兵を帰国させることとなった、という。このように武器・武具の補給が、なお不足し、ままならない様子が知られる。

このように元慶の乱では、大量の武器・武具を必要とする事態を招いていた。北方支援国の越後国の動向が注目されるところである。

2）承平天慶の乱

前述の元慶の乱以後にも、戦乱が起こるのではないかという緊張や、また実際に延喜三年（903）の俘囚の乱もあった。さらにまた天慶二年（939）には平将門の乱が起こり、この時には俘囚軍が秋田城軍と交戦したと指摘されている（前掲書 193 頁）。

さて平将門の弟将種は、陸奥国権介の婿になって陸奥国にいたところから、将門・将種の二人が 1 万 3 千人の兵を率いて奥羽両国を襲撃しようとしていると、陸奥国が出羽国に伝えたという。

だがその時期の天慶三年（940）二月に、将門は下総国の本拠地で藤原秀郷や平貞盛の軍勢に急襲されて敗死していたことにより、その戦火が及ぶことには至らなかったが、現実味のある情報であったととらえている。

承平天慶の乱は、坂東の平将門の乱と西の藤原純友の乱とを合わせて呼ばれる反乱である。それぞれの乱には多くの国司襲撃事件や国衙襲撃事件などが含まれているところに共通した特徴があり、地方支配の矛盾が激化したことによるものと見られる。

前掲の元慶の乱以来の俘囚軍の抵抗がくすぶる出羽国には、平将門の乱の影響が及びやすかったことも否定できない。すなわち当時の出羽国の国司たちも治安の危機を同様に察したであろうし、中央政府においてもその危険性を認識したことが想定できよう。

以上、出羽国に隣接する越後国磐船郡における 9 世紀第四四半期の元慶年間～ 10 世紀第二四半期の承平・天慶年間は、隣国における俘囚軍の反乱勃発やこれを予期した軍事的な緊張に満ちた時代であり、その支援国として武器の製造や貯蔵の需要に応えるべき明瞭な必要を有する歴史的背景を持つていたと考えられるところである。

3）本遺跡出土漆紙文書の年代観と「頸城宮」とについて

本遺跡から「頸城宮」を墨書した画期的な漆紙文書が出土している。この初見の「頸城宮」に関する平川南氏らによる興味深い報告もあり、その提起されている問題とその可能性は大きな検討課題として受けとめるべきことと考える。

報告では、第 1 に、漆紙が請暇解のような上申文書と推測される第 1 次文書（表）の裏面を再利用した 2 次の文書（裏）からなるものであり、「頸城宮」が第 1 次文書にあり、その年代は文字の特徴から 7 世紀～ 8 世紀初頭までのもの、また第 2 次文書は佐伯郷、坂井郷の記載から天平 12（740）年以後の間もない時期のものとの推理を見事に行っている。

また第 2 に、「頸城宮」は、宮を「頸城神社」とする可能性もあるが、延喜式内社など文献資料には見えていないことから、国府所在の頸城郡にある国府を地方社会において呼称した、という解釈を示し、多賀城の所在郡を宮城郡と称したことによりながらその可能性を指摘している。

ここでの問題は、第 1 に関して、その文書の年代比定と遺跡の遺構第Ⅷ層の年代 9 世紀末～ 10 世紀半ばとの想定がやはり大きくかけ離れていることにある。文書の再利用や保存・廃棄に至る期間や漆壷、漆桶の蓋としての使用期間を含めてもなお年代の乖離を考えざるをえないことがある。

第 2 は、地方的な呼称で国府のことを「宮」と呼んだと推測し、事例に宮城郡が上げられるとしている。すなわち藤原宮や平城宮を模したと見られる陸奥国府に関する近年の指摘により、国府所在郡を宮城郡と称したとしており、たしかに、地方において国府をどのように称していたかは興味深い問題である。

国府は、広くは「コウ」と訛り称されたことが地名などからも知られている。また国府に限らず地方組織の施設は一般に「ミヤケ」という美称の「ミ」と家や宅の「ヤケ」により称された。これに対して「ミヤ」も、美称の「ミ」と家・屋などの「ヤ」によるものと考えられ、大王・皇族の居所や神の座のある社という神社に用いられたことが一般的に知られている。

「ミヤ」が「コウ」の呼称を超え、所在の郡名と結びつくそのような用法は、同類が国内になお存在するという可能性を示唆し、氏の言う国司が城柵に分駐する国支配と不可分な城柵設置国の特色に結びつくことによるものかもしれない。このような国家機関などの地方呼称の検討の必要性を改めて痛感する。

D　ま　と　め

西部遺跡の意義を導くため、同遺跡第Ⅷ層を中心とした時代と環境について考察した。

第一に、本遺跡の機能した 9 世紀末～ 10 世紀中葉に及ぶ時代は、国郡制が郡庁の組織的・機構的な変貌をともない、その廃絶につづく直前の時代であったことを見てきた。

第二に、遺構には鍛冶炉を内に含む 7 間× 1 間と 5 間× 1 間との 2 棟の大型掘立柱建物が溝で囲まれ

てあるという特色について、ほかの事例からどう理解できるかという問題を検討した。こうした遺跡を従来は、私営田領主の「営所」としてみてきたが、むしろ国衙機構の官衙工房や郡衙機構の院などの工房としてなお理解できるという新しい理解が必要なことを確認した。

なお具体的には、地方支配の矛盾の激化という地域的、時代的な傾向から言えば、これは郡よりも国衙機構の官衙工房と理解すべきことが指摘できよう。

第三は、北方との交流などは広い範囲の事例研究を必要とするが、ここではその準備がないので限られた政治的な視点からの検討にとどまったが、出羽国の隣国隣郡のこの地では、軍事的な緊張から武具・武器が不足していた情勢を明らかにできたといえよう。

【引用・参考文献】

大町　健　　1986　「律令制的郡司制の特質と展開」『日本古代の国家と在地首長制』 校倉書房

折原洋一ほか 2006　『富山市埋蔵文化財調査報告 18 向野池遺跡』富山市教育委員会

岸　俊男　　1962　「律令制下の豪族と農民」『岩波講座日本歴史』3　岩波書店

国立歴史民俗博物館編　1986　共同研究「古代の国府の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 10 集　国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館編　　1989　　共同研究「古代の国府の研究」（続）『国立歴史民俗博物館研究報告』第 20 集　国立歴史民俗博物館

古代城柵官衙遺跡検討会編　　2007　『第 33 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 古代城柵官衙遺跡検討会

上越市史編さん委員会編　　2003　『上越市史』資料編２考古　新潟県上越市

田中　靖　　1995　『和島村埋蔵文化財調査報告書 第４集 門新遺跡』新潟県和島村教育委員会

土本　医ほか 2008　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 178 集 西部遺跡Ⅴ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

手塚　孝　　2001　『米沢市埋蔵文化財調査報告書 第 73 集 古志田東遺跡』米沢市教育委員会

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター編　1998　『律令国家の地方末端支配機構をめぐって－研究集会の記録－』奈良国立文化財研究所

奈良文化財研究所編　　2003　『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』 奈良文化財研究所

奈良文化財研究所編　　2004　『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』 奈良文化財研究所

奈良文化財研究所編　　2007　『古代豪族居宅の構造と機能』 奈良文化財研究所

能代市史編さん委員会編　　2009　『能代市史』通史編Ⅰ原始・古代・中世　能代市

原秀三郎　　1962　「郡司と地方豪族」『岩波講座日本歴史』3　岩波書店

山中敏史・佐藤興治　1985　『古代の役所』日本古代を発掘する 5　岩波書店

山中敏史　　1984　「Ⅱ　国衙・郡衙の構造と変遷」『講座日本歴史』2　東京大学出版会

山中敏史　　1994　『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房

2　西部遺跡出土の墨書土器考察

田中　一穂

第Ⅶ章「まとめ」で詳述されたように、墨書土器は９世紀末～ 10 世紀中葉の土層であるⅧ層遺構とその遺物包含層、そして９世紀中葉のⅪ層遺構とその遺物包含層から出土しており、それぞれから出土した墨書土器の様相は異っている。ここでは各層の墨書土器に関する詳細な事実関係を踏まえて、出土した墨書土器に関する問題点の一部について考察を行いたい。

A　Ⅷ層出土墨書土器の考察

1）Ⅷ層墨書土器の判読について

Ⅷ層から出土した墨書土器の字体は、これまで“則天文字「天」”と報告されてきたものと同じである。この字体による墨書土器の出土例は、山形県道伝遺跡・福島県御山千軒遺跡・山梨県宮之前第２遺跡の３つである[1)]。いうまでもなく、則天文字「天」と近似するため、これまでこうした報告がなされてきたものと思われる。

しかしながら、Ⅷ層の時期である９世紀末～ 10 世紀中葉はもちろん、前述３遺跡の時期である９世紀代でも則天文字「天」の使用例を文献史料上には見出しがたい。こうした則天文字「天」とされる墨書土器の問題点とそれに対する私見は別稿に示しておいたので、詳しくはそちらを参照して頂きたいが［田中 2009］、必要な部分だけを抜粋すると以下のとおりである。この字体が史料上で見出せるのは蔵中進氏が指摘するとおり、則天文字などの字体を解説した音義や字書などの中であり、則天文字の割注には「古文」と記されている［蔵中 1995］（第 94 図参照）。「古文」とは孔子以前の古い書体であることを示し、例えば印章などで使用される篆書体などが該当する。蔵中氏も指摘するように、そもそも則天文字「天」も篆書体にもとづいて作成したとされており、古文体も則天文字も字体が近似するのは当然といえる［蔵中 1995 ｂ］。このように字体としては則天文字も古文体の「天」も全く同じなので区別しがたいが、平安時代に則天文字「天」が使用された史料がなく、音義類が「古文」と認知しているので、むしろこの文字は「古文」という単に古い漢字体として考えられていたといえる。よって、墨書土器に見られるこの文字は則天文字ではなく、古文体の漢字として報告すべきと考えられる。

問題は本来の古文体「天」とは若干字体が異なることである。第 95 図に示したように、本来の古体漢字の「天」は第２画目として「ノ」のように１画分が見出されるだけである。それに対して、墨書土器では本遺跡を含めた３遺跡とも第２画目を縦画２画で書かれている。墨書土器の文字において字形が変化して大きく異なることはよく見出されるが、則天文字や字体の特殊な古文体の漢字の墨書土器において字形がどの程度変わるのかが問題となる。この点について拙稿［田中 2009］で考察したところ、古文体の「天」に見られるように１画分程度は変化する可能性があるが、それ以上に大きく変ることはないと考えられた。よって、本来の字形とは異なるものの判読としては「天」と認められ、その書体は従前に報告されている則天文字と異なり、古文の字体という意味も含めて「古体漢字」と考えられる[2)]。

1）群馬県神人村Ⅱ遺跡の墨書土器も同じ字体の可能性があるが、この墨書土器では第２画目に当たる部分が１画分か２画分か明らかでないため類例に含めなかった。

2）今後、古文体に含まれない古い字体（例えば、甲骨文字など）の墨書土器が出土する可能性も推測されるので、古文体以外にもこれらを含めた古い漢字として「古体漢字」とした。

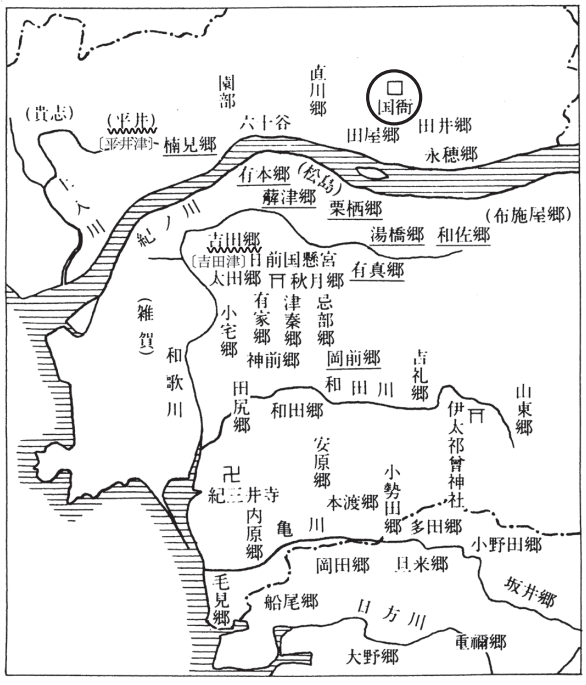
2）Ⅷ層墨書土器の文字の窓口

次に特異な文字といえる古体漢字が、工房と思われるSB1500にどのように入ってきたかが一つの問題である。拙稿［田中2009］でも言及したように、墨書土器の盛期である9～10世紀でもこの種の文字を使用し目にする環境は非常に限られている。そうした中で先学が指摘するルートの一つは官人から伝えられた可能性であり、もう一つは僧侶の可能性である［平川2000］。その理由の一つが上述したように、特異な漢字を記した当該期の史料は字書や経典類が多く、これを看取できる環境を勘案すると官人・僧尼か、それらと何らかの関係をもたなければここにある特異な文字を知見することは困難と考えられるためである。こうした先学の指摘を踏まえつつ、この文字が工房に伝授された経路について検討しておきたい。

伝入ルート考察の前提として、官人または僧侶のいずれがその窓口となったかを考慮するため、遺跡の性格を確認しておく必要がある。すなわち、この遺跡が官人に関わる公的官衙的な性格を有するのか、僧侶に関係深い寺院関係の性格があるのかを見ておきたい。西部遺跡の主な遺構は工房的性格を持つものであるが、これも官衙付属と寺院付属の両方の可能性が考えられ決め手とはなりがたいので、遺跡の立地や地理的環境に着目したい。第Ⅱ章でも記されているように、西部遺跡は荒川の自然堤防上に立地する。この自然堤防の南側が荒川の旧流路内に当たることは発掘調査の所見以外に現地形でも明らかであり、「瀬波郡絵図」でも確認される。しかも、それが河口から若干入った地点であることは、そこが港津として利用されていた可能性を想起させる。河口付近に港津がおかれることは時代を限らず一般的な通説的理解であり、あえて典型例をあげれば信濃・阿賀野川河口付近の沼垂津（中・近世）や蒲原津（古代）などがある。現在の荒川河口付近では左岸の大字海老江や桃崎浜と右岸の大字塩谷が、川渡しも含めて中近世には港津として機能していた［山田1986］。その名残として塩谷集落内には高泉寺に隣接する塩釜神社があり、航海神の存在がそれを示唆する。

また、SB1500などの建物が鍛冶に関わることを考慮すると、燃料となる薪木は山間部からの切り出しに依存していたと推察され、その運搬・積みおろしの利便性を考慮しても西部遺跡に港津的な性格があった可能性が想定される。

こうした本遺跡の港津的な性格を踏まえて着目したい史料が、「紀伊国名草郡郡許院文書」である。この史料は九条家本『延喜式』の裏文書として現存する文書で、永承三年（1048）ころの史料とされている。この史料について詳細に考察された薗田香融氏［薗田1981］や勝田清次氏［勝田1995］、中込律子氏［中込1989］によれば、三通からなるこの史料は永承三年度の所当官物の進未状況を確定し、未進を催促するために郡許院収納所によって作成された一連の文書である。郡許院とは、勝田氏に



第12図　名草郡郡許院関係略図（［勝田清次1995］に加筆）
〔下線は関係郷名、波線は港津関係地名〕

よれば、11 世紀前半以降、郡の地域的分割が進行した結果成立し、紀伊国名草郡内を分割支配した四院の一つである。この文書の所管地域は第 12 図の下線を付した郷であり、紀伊国衙からみて紀ノ川対岸地域である。その収納所については大石直正氏の考察から［大石 1973］、10 世紀末～ 11 世紀初頃に郡・郷に設けられた院倉（倉庫）を基盤に成立した在地の徴税機関とされている。その人的構成は国衙から派遣された収納使と書生、在地の郡・郷司（院司）の三者からなり、収納使が臨時的に派遣されるのに対して書生は常駐的に所在したと考えられている。その機能を端的にいえば､所管地域の「名」（名主）への税（官物）の割当・徴収とその事務処理と院倉の管理とされている。

この史料の中で本考察と関連するのが「津納」とされている部分である。特にそこだけを抜粋すると以下の通りである[1)]。

【史料５】　紀伊国名草郡郡許院文書

吉田津納

書生有遠納廿四束一巴二分

米二斗

七月廿八日納一斗　紀枝吉上　七月廿八日納一斗　秋時上

穎廿束一巴二分

麦一石六斗四升九合

五月十五日納二斗七升　石犬丸　　六月五日納二斗五升　安行上

五月十五日納二斗　近忠上　　五月廿五日納二斗九合　有常上

五月十五日納二斗九升　小松上　　五月廿六日収四斗三升　安武上

塩三斗六升三合　六月廿五日納　安光上

書生忠清納

米七斗三升二合

正月廿五日納三升三合　近重上　正月十日納二斗　用吉上

十二月十一日収四斗四升九合　是元上　正月廿九日納五升　友吉上

『可進返抄』麦百五十石四斗七升二合　　月　日納

『可進返抄』造宮作所納麦三十九石九斗七升八合　　月　日　納

政所納麦五斗

六月十四日納三斗　清常上　六月廿日納二斗　重武上

平井津納納穎四十六束

『直并四十束』

三月十日納材木七物　藤原是清上

『廿四束　各六束』

七八寸木二丈□尺四枝　直稲三十二束

1)　当該部分の文書には、合点や数値修正の追記などが見られるが、本稿とは特段関係しないため、省略した。

『十束　各五束』

七六寸木二丈二枝　直稲十四束

三寸半板一枚　直稲八束

正月廿日納二物　石男丸　［

三寸半板一枚　直八束

二寸半板一枚　直七束

三月廿日納二枚　尾張安光上

二丈二尺七八寸　直稲十六束

〈以下、略〉

「吉田津」「平井津」は、薗田香融氏によれば、「現在も地名として残っており、紀ノ川左右両岸に位置する水陸の要衝であった」とされ（第 12 図波線参照）、紀ノ川河口付近において上流地域との物資交流上でも重要な地点であった。勝田氏はこれらの津を国衙が管理する機関･施設と考えている（第 12 図参照）[1]。河口に近いという地理的要因もその理由の一つと考えられるが、【史料５】にこれらの津には「書生」が記載され、前述したように国衙から派遣された下級官吏・書生が常駐的に所在していたことも見て取れるためである。

この史料は 11 世紀前半のものであるが、この時期でも大河川の河口付近に所在する港津施設は、水陸両交通の要衝として国郡などの支配下にあったことが確認される。そのほか港津に下級官人が所在したことは、福島県荒田目条里遺跡出土の２号木簡でも確認される。木簡の冒頭に「郡符」と書かれ郡からの下達木簡であるが､その末尾には｢立屋津長｣と記載されている。｢津長｣は津を管理する郡司支配下の官職（雑任）と考えられており、津が郡の配下にあり、官人が所在していたことが確認される。

以上のような史料から、西部遺跡に港津施設が存在し、遺跡とその周辺は国郡の影響下にあった可能性が見出され、それを管理するための官人が所在していた可能性が考えられる。こうした考えに立脚して、出土した古体漢字「天」の文字は、港津に関係する官人によって墨書土器の筆記者に教授された可能性が推測される。おそらく、こうした推測は共伴する漆紙文書によっても補われるであろう。墨書土器は SB1500 とそれを巡る溝から出土したが、E 漆紙（851）文書もこの溝から出土している。「正丁」を中心とする歴名様の文書の入手にはやはり官人の介在なしには考えがたく、この観点からも官人の所在が補われる。また、篆隷体を含む古体漢字が能書家という書道家に書かれていたことは『新猿楽記』の太郎主の段に「古文正文」とあることなどで確認され、能書家が官人として出仕していたと考えられることでも僧侶の可能性を少なくする[2]。

3）Ⅷ層墨書土器の文字の筆記者

以上のように官人が古体漢字「天」墨書土器の窓口となった可能性に立脚して、次の問題点は墨書土器の筆記者である。換言すれば、官人から特異な文字を受容した人達に関する問題である。上述のように古体漢字「天」の墨書土器が SB1500 とその周辺の出土であることから推測すると、この建物に関わった

1）勝田氏は、平井津については文書の内容から材木の積出港と考えられている。

2）西部遺跡周辺の公的な性格を示すのが、既に報告された隣接地『西部遺跡Ⅳ』の条里型地割である。時期的には８世紀末～ 10 世紀中葉と考えられる。この地割はほぼ真北に方位を合わせており、公的な影響下の施行が報告されている［新潟県埋文事業団 2009］。こうした周辺の成果と状況からも西部遺跡周辺が公的な機関の管轄下にあった可能性がうかがえる。

人達が墨書した可能性が想定される。この建物は鍛冶工房の可能性が高いので、墨書した人達とは鍛冶技術を持った工人である可能性が推察される。そこで、具体的な工人像を検討するため当該期の工人人夫の徴発について考えてみたい。

8～11 世紀に及ぶ古代の労働力徴発について櫛木謙周氏は以下のように指摘する［櫛木 1989］。8 世紀以降に見られる郡司による人夫の徴発が、少なくとも摂関期に至るまで行われていた。その根拠となる史料が『今昔物語集』巻十七第十三話で、郡司の徴発した下人三名によって水銀が掘り出されていることが記されている。ほかに年紀不明（寛徳二年（1045）推定）「諸郡司等解案」（『平安遺文』3－641 号）で、「郡司等以二誰人一令レ採二進件材木一」とあることによっても郡司による徴発が明らかである。また、氏は『平安遺文』3－1109・1113・1171 号文書にみえる承保～承暦年間（1070 年ごろ）の秦為辰に関する一連の史料で、開発領主の主体的な人夫徴発に郡司の肩書きが利用されていることや、『宇治拾遺物語』巻四第十七話「慈恵僧正、戒壇築きたる事」などで様々な私的関係により郡司の人夫徴発権が利用される場合があることを指摘している。このように 10 世紀以降でも人夫の徴発は公私に関わらず郡司に依存している可能性が高いと考えられることを踏まえ、次に郡司によって徴発された人夫が製鉄や鍛冶に従事していたのか確認しておきたい。

福田豊彦氏は 9・10 世紀になると製鉄遺跡が一斉に多くなることを指摘されている［福田 1985］。これに従い、全国的に鉄に関わる遺跡が増えているとすれば、『日本霊異記』中巻第二十二話「佛の銅像、盗人に捕られて霊しき表を示し、盗人を顕す縁」で和泉国の盗人が盗んだ仏像（銅像）を改鋳している状況は先進的畿内地域に限定された状況でなく、金属加工に関する技術がほぼ各地の民間に普及していた状況を推測させる。ほかにも『今昔物語集』巻二十六第十五話「能登国堀鉄者、行佐渡国堀金語」では能登国の工人人夫が「其鉄取ル者六人有ケル」と記され、庶民でも鉄生産に関わる者がいたことを推測させる。一方、民間技術者の徴用に関しては『今昔物語集』巻十四第九話「美作国鉄堀、入穴、依法花力出穴」で国司が「民十人ヲ召テ、彼ノ山ニ入レテ鉄ヲ令堀ム」と記載され、国の徴発のもとで鉄原料の掘り出しに関わった史料がある。美作国は鉄が特産品なので国司が直接的に徴発した可能性も考えられるが、櫛木氏の考察等を参照すれば、庶民を直接的に支配している郡司が「民十人」を召し出した可能性が推測される。ほかに『今昔物語集』第十七巻第五話「依夢告従泥中堀出地蔵語」では陸奥の前司平朝臣孝義の郎党に仕える藤二が検田使として行った先で、泥の中から地蔵菩薩を掘り出すのに多くの人夫を徴発している。国司の使者である検田使という立場は現地の様子に精通し、現地をよく掌握した人物による徴発と考えられ、労働内容に適任の人夫が選出されたと推測される。郡が召し出した人物（工人・人夫）が製鉄・鍛冶に従事している直接的な史料を管見の限りでは見出せなかったが、人的徴発に国郡などが関わる可能性が高く、特に現地を詳細に把握している官人による徴発の可能性があるように思われる。

他方、10 世紀頃の地方における鉄生産工房に関する史料も見出される。それが平野邦雄氏の指摘した『宇津保物語』吹上の段に記された紀伊国牟婁郡の神南備種松という人物の屋敷地と手工業生産工房に関する記載である［平野 1964］。種松とはこの地域の在地土豪であり、紀伊掾として国衙の在庁官人も兼務する有力者である。彼は広大な屋敷を所有し、その大きさが都の上皇離宮に匹敵するほどであったため、偶然この地を訪れた近衛将監清原松方によって都に知らされる。この段では確認するために清原松方らが再訪した内容である。その中で屋敷内にある手工業工房として、鉄に関わる鋳物師所以外に「作物所」「縫物所」「糸所」など様々な工房の様子が記載されている。鋳物師所については 20 名ほどの人夫が従事し、そのほかの工房でも 10～30 名ほどが携わっていたことが記されている。種松の鍛冶工房の工人につい

てはこれ以上詳細に記載されていないので不明であるが、上述した『今昔物語集』の事例から推測して、工人達が近郷から徴発された専門的技術や知識を持った人物であったと考えられ、在地を掌握する有力者によって各手工業分野の専門的技術者が把握され従事していたと推測される。こうした徴発の様相を参考とすれば、Ⅷ層 SB1500 の鍛冶工房も同様にこうした人達が徴発され、工人として従事し土器に墨書したと推測される。

種松との関係でもう一つ勘案しておきたいのが、工房の経営主体である。すなわち西部遺跡Ⅷ層の遺構に関してその経営主体は種松のような在地土豪による可能性が考えられる。物語の中で種松の舞台は嵯峨上皇の 9 世紀代とされているが、それをそのまま信用できないとしても、『宇津保物語集』の成立が『源氏物語』の成立（11 世紀初頭）に先行することは確実である。それ故、10 世紀代の様子を反映しているとすれば、時期的にもⅧ層の墨書土器との関連性を考え得る。西部遺跡でも鍛冶以外に製塩や漆に関する生産が考えられることから、規模の相違はあるものの種松と同様、複合的な生産工房群が遺跡周辺に所在し、その一部を調査している可能性が推測される。よって本遺跡が種松の工房に近似した開発領主など在地土豪が経営主体であった可能性も勘案される。こうした推測は第Ⅶ章において調査所見として在地土豪レベルによる鍛冶運営が指摘されていることとも符合するように思われる。

4）Ⅷ層墨書土器の文字の伝授

以上のようにⅧ層墨書土器は廃棄状況等から考えて、在地土豪配下の鍛冶工房において徴発され従事した工人が墨書したと考えられ、その文字が古体漢字の「天」の墨書土器であったと推察される。遺跡の立地が水陸交通の要衝に位置し、そこに所在した港津施設付近に国郡に関連する施設がおかれ、その施設に出仕する官人から、工人たちが特異な字体の古体漢字「天」を学んだ可能性が考えられる。さらに種松の史料を参考とすれば、書生など国郡の官人として施設に常駐した下級官人と工人の間に SB1500 を経営した在地土豪が介在したかもしれない。最後にこの両者の接点、すなわち古体漢字を伝授された具体的な状況について言及しておきたい。

古体漢字の伝授状況を考える時に再度着目したいのが、この墨書土器の出土状況である。墨書土器は SB1500 の周辺から大量の土師器無台椀と一緒に出土しているが、この大量の土師器無台椀の使用に関しては第Ⅶ章に述べられているように、饗宴などで大量に使用され、廃棄された可能性が高い。Ⅷ層墨書土器も大半が土師器無台椀であることに注目すれば、墨書された文字や土器への墨書も饗宴における状況下で行われた可能性が首肯されるであろう。そこで『宇津保物語』の種松に関する記載内容を再見すると、少なからず種松のところで饗宴が行われていることが見て取れる。物語の内容上、都人の来訪を契機とする饗応が多いが、三月三日には節句の饗宴が行われており、年中行事等に応じても在地土豪による饗宴が行われていたようである。さらに藤の花の宴などの際は、紀伊守以下の国司が配下の者を率いて種松の所を訪れ饗宴に加わっている。このように在地土豪のもとで行われた饗宴に国司やその配下の官人が参加しているのをみると、西部遺跡や周辺で行われた饗宴において国衙官人等から、在地土豪を介するなどの手段を通じて古体漢字のような特異な漢字が伝えられた可能性が推測される。

若干の憶測を記すならば、Ⅷ層 SB1500 に関連する土師器の点数が 1500 点余りという量であるのに対して、そこで共伴する古体漢字「天」墨書土器が 70 点余りしかないのは、何回か行われた饗宴の中で、一度だけ古体漢字の伝授が行われ、その時のみ土器に墨書が行われたためとも推測される。それ以外の饗宴では特異な漢字の伝授やそれに伴う墨書が行われなかったために、墨書土器の割合が極めて少なくなっ

てしまい、継続性のない一時的な墨書とその使用であった可能性も推測される。その背景として工房や鍛冶の断続的な使用が関連するのかもしれない。

C　今後の課題

考察対象とした墨書土器は在地土豪による工房域と思われる地点からの出土であったが、それはⅧ層・Ⅺ層いずれの場合でも調査地点東側に位置する大字牛屋付近に在地土豪の居住域や、工房の管理域など遺跡の本体、すなわち、この付近の中心的施設が存在したとする推測を前提にしている。調査所見からもそちらの方向に遺構が拡大することは確実であり、今後、その様相が明らかになることが期待される。

墨書土器ではⅧ層の墨書土器が 10 世紀代に比定される。一般的に墨書土器の盛期は 9 世紀代であり 10 世紀には減少する傾向にある。こうした状況の中で生じたⅧ層墨書土器の出現理由や意義まで考察することはできなかった。10 世紀代の墨書土器の全般的な様相が明らかになることが前提条件かもしれないが、その中で西部遺跡出土の墨書の位置づけを考え直す必要があるかもしれない。

また、Ⅷ層の墨書土器はこれまでの判読では、前述の通り則天文字の「天」と報告されてきた字体である。別稿においてそれが適当でないことを考察し、その結果にもとづき古体漢字として言及してきたが、その是非は今後に依るところである。それによってこの墨書土器の意義も新たに付加されるものと思われる。

古体漢字の墨書土器とともに漆紙文書が共伴し、それらが鍛冶工房跡と思われる遺構で出土している点で、長野県松本市下神遺跡は西部遺跡に類似する可能性が見出される。時期的には下神遺跡の方が 9 世紀中葉頃で若干古いが、こうした類例遺跡との比較検討が十分には至らなかった。今後、検討の必要な視点として提示しておきたい。

ほかに、官人や有力者の介在が推測される点からは磐舟郡司の存在が注目される。墨書土器との関係では郡司を中心に人夫の徴発が行われた可能性もあるが、郡司そのものの実像や関係史料さえ全く見出せないのが現状では不明としかいい得ない。今後は、沼垂郡を含めた阿賀野川以北の郡司そのものの考察の言及が望まれ、その中で墨書土器の再考が必要になる可能性もあるかと思われる。

【引用・参考文献】

大石直正　1973　「平安時代の郡・郷の収納所・検田所について」『日本古代・中世史の地方史的展開』豊田武教授還暦記念会編 吉川弘文館

勝田清次　1995　「紀伊国名草郡郡許院収納米帳と進未勘文について」『中世年貢制成立史の研究』塙書房

櫛木謙周　1989　「国衙徴発力役の構造と変遷」『日本の前近代と北陸社会』楠瀬勝編 思文閣出版

蔵中　進　1995 a　「平安時代古辞書の則天文字」『則天文字の研究』第五章 翰林書房

蔵中　進　1995 b　「奈良・平安時代の則天文字」『則天文字の研究』第四章 翰林書房

山田英雄ほか　1986　『日本歴史地名大系第 15 巻　新潟県の地名』平凡社

薗田香融　1981　「古代末期のある徴税文書－永承三年紀伊国名草郡郡許院収納米帳の復元－」『日本古代財政史の研究』塙書房

田中一穂　2009　「則天文字「天」墨書土器の再検討－西部遺跡出土墨書土器の前提的考察－」『新潟考古』20 号 新潟県考古学会

中込律子　1989　「紀伊国郡許院収納所解・丹波国高津郷司解に関する一考察－十一世紀半ばの官物結解と公田官

物率法－」『中世日本の諸相』上巻 安田元久先生退官記念論集刊行委員会編 吉川弘文館
新潟県埋蔵文化財調査事業団　2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第 194 集 西部遺跡Ⅳ・桜林遺跡Ⅲ』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
平川　南　2000　「墨書土器とその字形」『墨書土器の研究』吉川弘文館
平野邦雄　1964　「第三章古代産業（二）第六節手工業」『体系日本史叢書 10 産業史Ⅰ』豊田武編 山川出版社
福田豊彦　1985　「日本古代の鉄生産の諸様相－中世製鉄の前提として－」『日本史研究』280 号 日本史研究会

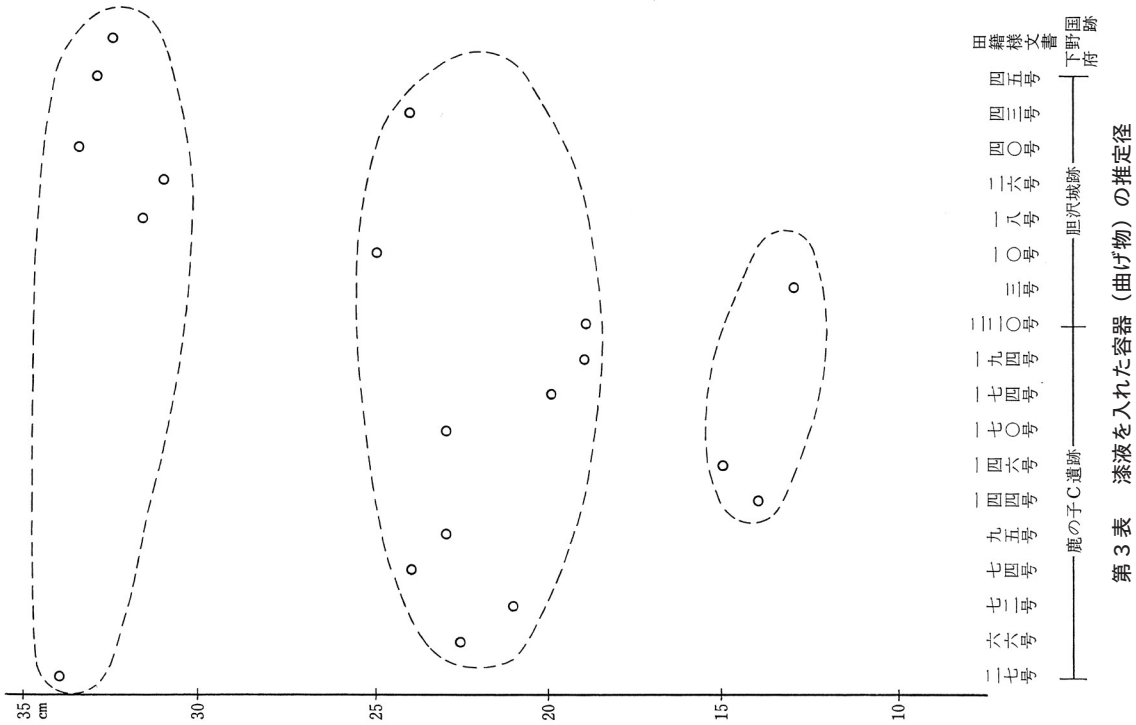
3　新潟県村上市西部遺跡出土の漆紙文書

国立歴史民俗博物館　　平川　南

一、形状

本漆紙は、漆紙のオモテ面と漆の付着面（ウラ）で紙の遺存状態が大きく異なる。すなわち、漆の付着面の墨文字は原状をそのまま維持し、きわめて鮮明であるが、オモテ面は風化が進み、字画の一部を失っている。漆紙本体は漆の付着が少ないため、かなり欠損しているが、円型の桶の形状をほとどとめている。

漆紙の周縁の一部に漆の付着の厚い部分が残存し、その部分を手がかりにすると、推定径は約一五センチメートルとなる。これまで全国各地で出土した漆紙の遺存状態から推定した桶の大きさは、大別すると大（約三三センチ）、中（約二二センチ）、小（約一四センチ）に三区分されるが、本資料はそのうちの小の部類に相当する。

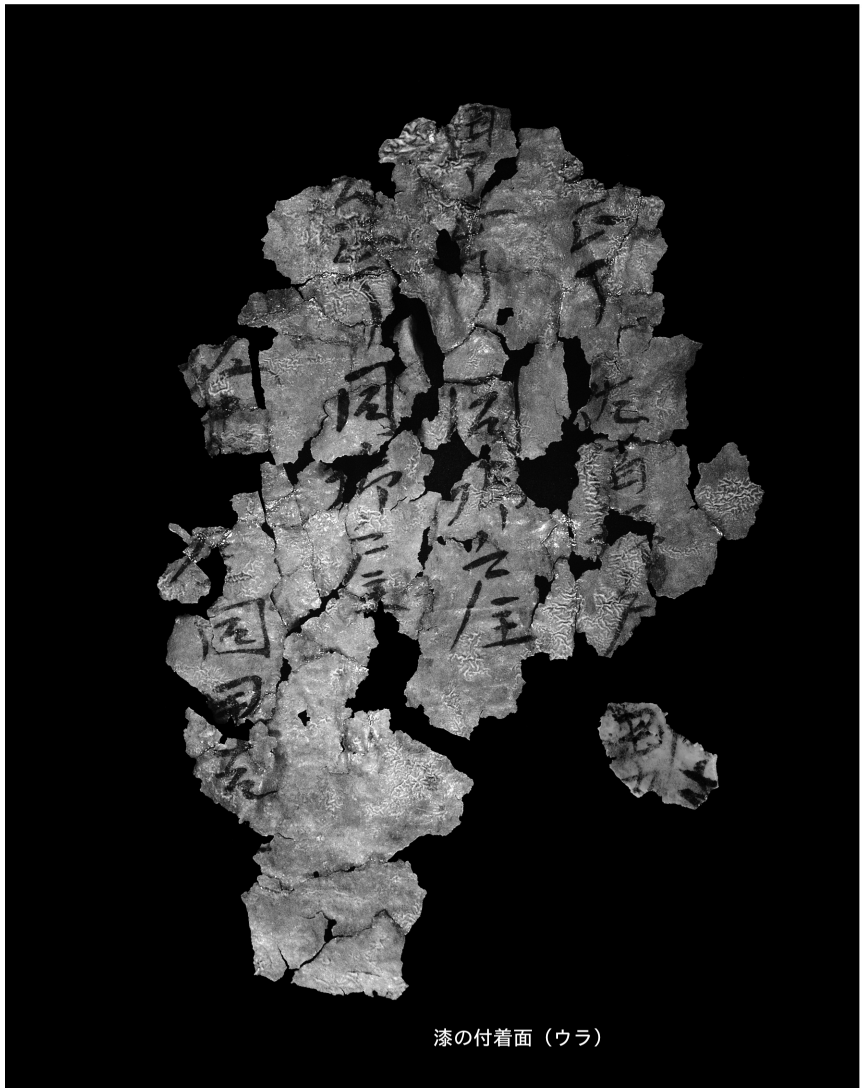


第３表　漆液を入れた容器（曲げ物）の推定径

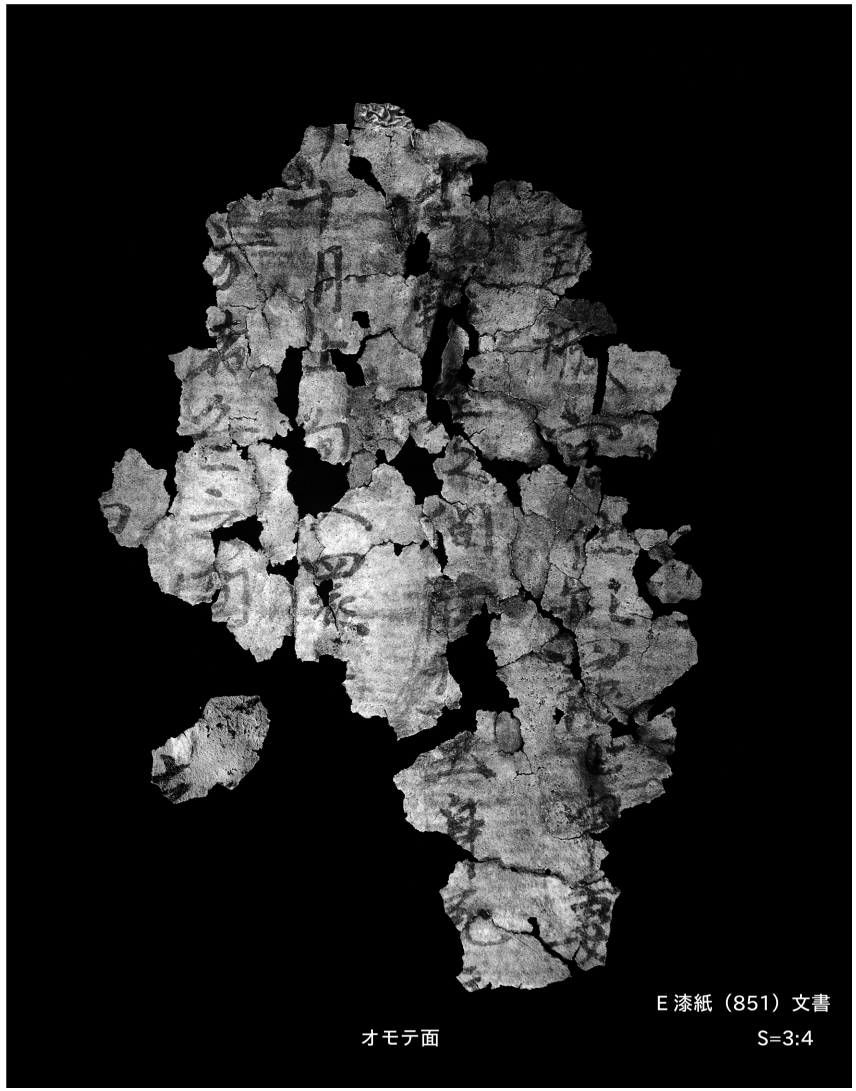
漆液を容れる曲物は、おおよその収納量を推算するするためにもある程度定型化していたのではないかと思われる。石麦は、これまで発見された漆紙文書について、その形状等から推測した曲物の各々の推定径をあらわしたものである。曲物本体が遺存したのではなく、あくまでもふた紙に付着した漆液の状態や漆紙の形状からの推測だけに厳密な径の法量の比較とはならない。

表から窺えるように、現在までの出土例からいえば、一四㌢前後、二二㌢前後、三三㌢前後の小・中・大の三グループに分けることが可能であろう。まだ少ない出土例による結果だけに、現段階では一つの目安程度にとどめておきたい。

〔拙著『漆紙文書の研究』一九八九年、吉川弘文館〕

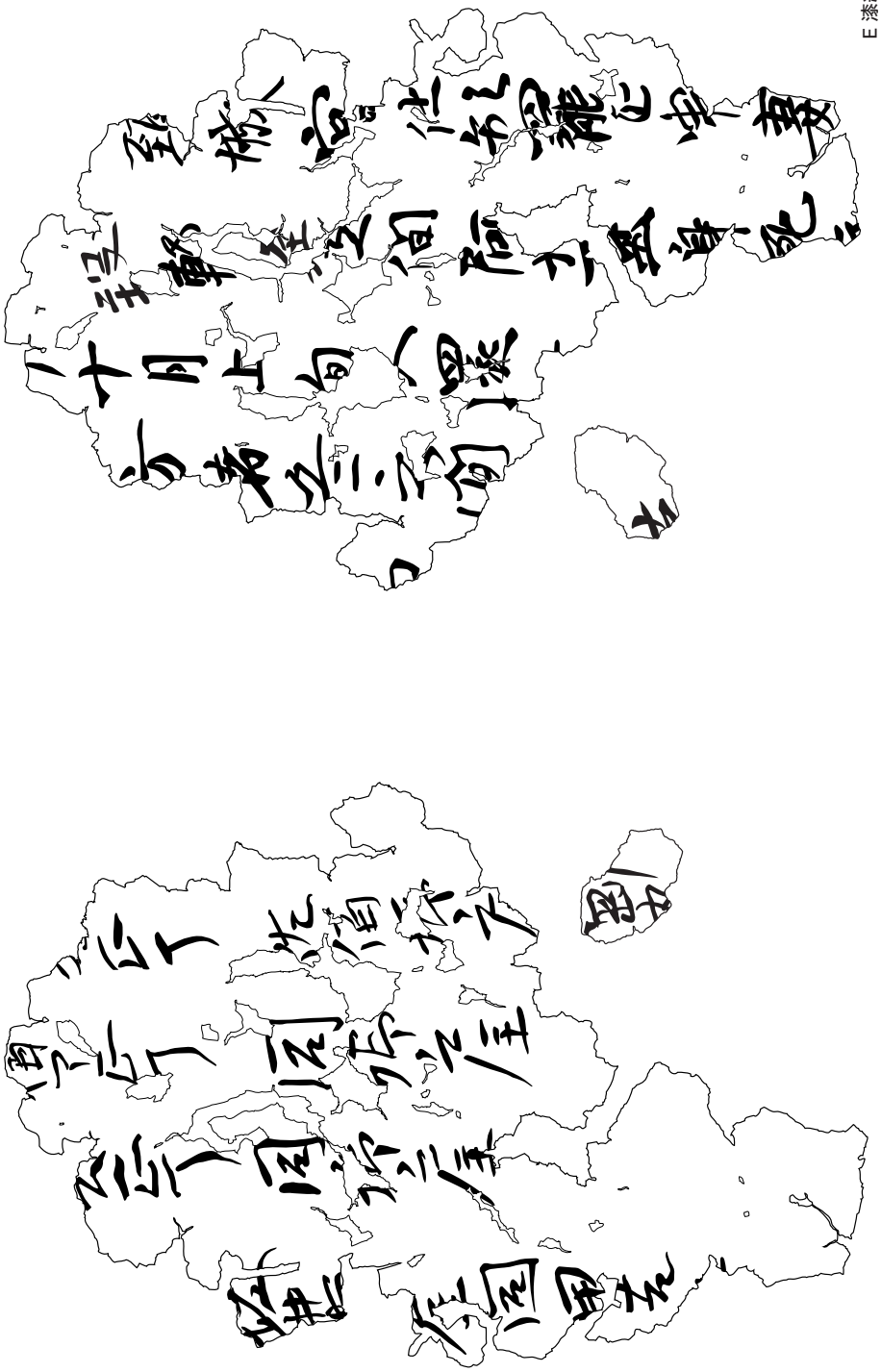


漆の付着面（ウラ）



E 漆紙（851）文書
オモテ面
S=3:4

第 13 図　漆紙文書の赤外線写真（表裏面）



E 漆紙（851）文書　S=3:4

オモテ面

漆の付着面（ウラ）

第 14 図　漆紙文書の略測図（表裏面）

二、釈文

【オモテ面】

□頸城宮仕欲罷止申妻
致軽□之間阿【　】虫身死□
□十月上旬□〔以カ〕還□　　□
方者冬之間　　□　　姉
□

【漆の付着面（ウラ）】

□　正丁　佐伯郷戸□　剛丸
伯ア　正丁　同郷戸主
公　正丁　同郷戸主
坂井郷戸主同甲吉□

三、記載内容

（1）記載概要

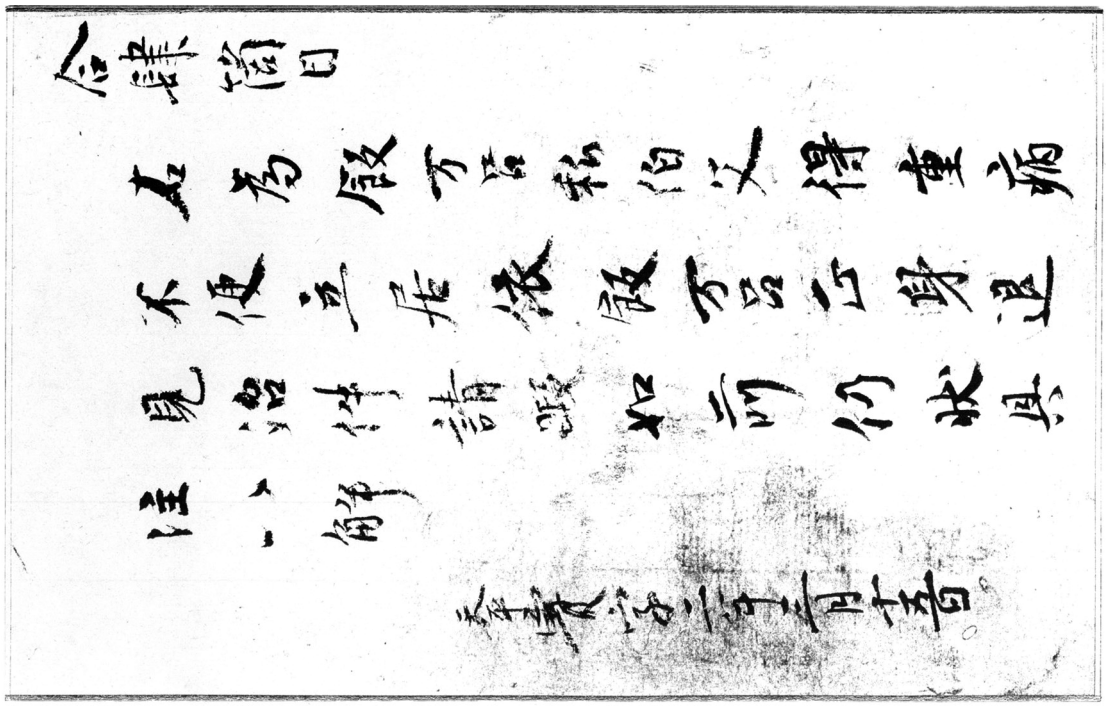
1，〔オモテ面〕

漆紙のオモテ面の文書は、一文字の大きさ約方一・三センチ、行間文字の心心で約二・五センチである。これは正倉院文書を参照すれば、通常の解文などの文書の文字の大きさに相当する。

漆紙の第一行目「頸城宮仕欲罷止申妻」は、「頸城宮に仕えんと欲して罷止（と）申す」と読み、「罷る」が身分の高い人・目上の人のもとから離れる「おいとまする」という意の謙譲語であり、「申す」も「言ふ」「願ふ」の謙譲語で「お願い申し上げる」の意である。このことから、本漆紙文書は、上申文書と判断できる。「頸城宮」の頸城は、越後国の最南端の頸城郡に相当する。頸城郡は国府所在郡である。「頸城宮」という表記は、地方社会において国府を宮と呼称したという解釈が想定される。また、宮を「頸城神社」のこととする解釈も可能であるが、延喜式内社をはじめ、文献史料には、その名は見えない。いずれにしてもこの「頸城宮」の理解のためには、文書の年代と越後国の地域的特性を考慮する必要があろう。したがって、この「頸城宮」の解釈については後述することとする。

西部遺跡は、磐船郡内に所在する役所と考えられる。すなわち、残存しているのは文書の一部のみであるため、全体の文意は計りかねるが、この文書の差出者は、通常、磐船郡内の役所に出仕していた人物と考えられる。その人物が「頸城宮」に仕えようと希望し、磐船郡内のその役所の用務をしばらくの間、退くことを申し出ている。さらに「阿【　】虫」（ウジ名を略し、名のみの表記）自身が用務遂行のため、身を死する覚悟で従事することを述べている。しかし、本文書に何故に「妻」が見えるのかは不明である。いずれにしても、十月上旬までに還ることを条件としている。この文書全体は次に掲げる二つの正倉院文書（いずれも正倉院庫外流出文書）に類似していることから、いわゆる請暇解のような上申書と推測できよう（以下、仮に本文書を「請暇解様文書」と称しておきたい）。

a 新羅飯麻呂請暇解



第１５図　新羅飯万呂請暇解（国立歴史民俗博物館所蔵）

合肆箇日
　右、為飯万呂私伯父、得重病
　不便立居、依飯万呂正身退
　見治、件請暇如前、仍状具
　注、以解、
　　天平宝字二年三月十五日

b 丸部足人解

丸部足人頓々々死罪々々謹解　申尊者御足下

　足人正身常御馬従仕奉思　然有不令(依)生江臣古万呂
　御産業所他人使(作)足人安人等　然者郡司取放
　雑役令駈使甚無假　加以阿支太城米綱丁罷入
　由此京米不持参上　仍具注愁状　附物部安人　頓々々
　死罪々々謹解
　　天平宝字四年三月十九日丸部足人謹愁状

更解申　下草原田三町　丸部足人二町
　　物部安人一町

　右　欲田地子請　仍具注事状　附物部安人申上　謹解

（『正倉院文書拾遺』より）

「軽口之間、阿［　］虫身死…」の表記は、二通の文書の中にみえる「飯万呂正身退見治」や「足人正身…」に近いものである。

2，〔漆の付着面（ウラ）〕

文書は一文字の大きさが方約一・三センチ、行間文字の心心で約二・三センチである。

本文書は、現状から判断すると上・下二段書きの歴名簿であろう。その記載様式は上段に「（佐）伯部」などの歴名が記載され、下段に〔年齢区分＋本貫地（郷名）＋戸主および戸主名〕である。上段の人物が戸主であれば「戸主」とのみ記載し、戸主でなく戸口の場合は戸主名を記載する。

注目すべきは、上段の人物をウジ名「（佐）伯ア」「○○公」のみで記している点である。

このウジ名のみが列記される事例は、近年の各地の出土文字資料によって数多く確認できる。特に七世紀段階の木簡、中でも記録簡に多い。

a 飛鳥京跡出土木簡（第一〇次二七号）

・□（ア）矢田ア　大田ア　長（小長）小谷ア
ア田財ア　□　田　丈ア　丈ア　田ア　月月月」
・
□ア　□□　占ア　ア　矢作ア　若若若」
□ア　□ア　□ア

二五〇×三八×三

本木簡は七世紀中葉頃のものと考えられ、現状で上部が折損し、六片に分かれている。表裏ともに部名を列記したもので、裏は重ね書きをしており、下にも薄く部の名が記されている。

b 長野県屋代遺跡群出土木簡（一一号木簡・オモテ面の釈文のみ掲載）

三家人ア　石田ア□
・□□　他田ア　人　□□□
□□　□□　□□石田ア　□□田□相

（二七三）×四三×二　〇八一型式

土器の年代観からも、層位は七世紀第3四半期から八世紀初頭にあてることができる。

また、年代的には八世紀段階であるが、平城宮跡出土の兵衛関係木簡の中にもウジ名のみを列記したものがある。

c 平城宮跡出土木簡―兵衛関係木簡

・東三門（額田　林　神各務　漆部　秦）　北門（日下部縣）　北府（服□（紺）大伴）
・合十人　五月九日食司日下部太万呂状

一八七×二二×二　〇一一型式

平城宮内の内裏外郭内のごみ捨て場様の土坑から、兵衛の出勤と食料の支給に関係する木簡が五一点出土した。その中に、兵衛が西宮と呼ばれた区画にある門へ出勤した当日の食料請求のための木簡が四三点ある。右にあげた木簡は、西宮の区画に造られた北門、東一・二・三門、南門などに出勤した兵衛のウジを記している。

このように、木簡ではウジ名のみが列記された例は多々見られるが、本遺跡出土の漆紙のような紙の歴名簿は初見であり、きわめて貴重な資料といえる。

（2）磐船郡内の郷名

歴名簿中の郷名「佐伯郷」および「坂井郷」記載が注目される。磐船郡の郷名については筆者は以前に言及しており、また最近出土した胎内市中条町屋敷遺跡出土木簡についても小稿を発表しているので参照してほしい。

拙稿「古代における東北の城柵について」（『日本史研究』二三六号、一九八二年）

拙稿「古代越後国の磐船郡と沼垂郡―新潟県中条町屋敷遺跡出土木簡から発して―」
（小林昌二編『古代の越後と佐渡』高志書院、二〇〇五年）

越後国の最北に位置する磐船郡は、その郷名の構成から次の様に理解できよう。

○『和名抄』
磐船郡―佐伯・山家・利波・坂井・余戸

佐伯郷は『常陸国風土記』茨城郡条に「古老のいへらく、昔、国巣〈俗の語に都知久母、又、夜都賀波岐といふ〉山の佐伯、野の佐伯ありき。」とある。

『常陸国風土記』には、その他にも、次のように「佐伯」に関する記載がみえる。

行方郡
郡より西北のかたに提賀の里あり。古、佐伯ありき。手鹿と名づく（略）。此より北に、普尼の村あり。古、佐伯ありき、名を疏禰毗古といふ。名を取りて村に着く。
郡の南七里に男高の里あり。古、佐伯・小高といふものありき。
郡より東北のかた十五里に当麻の郷あり。古老のいへらく、倭武の天皇、巡り行でまして、此の郷を過ぎたまふに、佐伯、名は鳥日子といふものあり。
此より南に芸都の里あり。古、国栖、名は寸津毗古、寸津毗売といふもの二人ありき。

国巣は国栖とも書き、土着の先住民をいう。都知久母も土蜘蛛、土神の意で土着神であり、夜都賀波岐は八握（掬）脛で、脚の長い人の意で異族人の身体的特徴を誇大に称したものである。佐伯は朝廷の命をサヘ（遮塞）抗する者の意とされ、国巣の別称で土着の先住民をさす。山・野の冠称は居住地によるもので、ここでは土着民の長となっている二人の人名の如くに扱っている。さらに興味深いのは、『越後国風土記逸文』にも先住民に関わる記載がみえることである。

『越後国風土記逸文』
八掬脛（今井似閑採択）
越後の国の風土記に曰はく、美麻紀の天皇（崇神天皇）の御世、越の国に人あり、八掬脛と名づく。〈其の脛の長さは八掬、力多く太だ強し。是は土雲の後なり。〉其の属類多し。（釈日本紀巻十）

東北の地と接した常陸国と同様に、八世紀前半には北辺の越後国においても土雲（土蜘蛛、夜都賀波岐〈八掬脛〉）とされた先住者が設定されていたと考えられる。

以上の解釈を参照すれば、北辺の越後国の佐伯郷は、『常陸国風土記』と同様に土着の先住民で構成さ

れる郷と解してよい。

一方、山家郷については、正倉院文書中の「造東寺司牒」（『大日本古文書』三―五八八頁、天平勝宝四年〈七五二〉十月二十五日）に越後国の封戸として「磐船郡山家郷五十戸」とみえ、八世紀半ばに山家郷が存在していたことが明らかである。また同文書の「丹斤量定文」（『大日本古文書』二十五―九二頁、天平勝宝五年〈七五三〉）には「越後国石船郡津波郷」とあり、津（利）波郷も同時期に置かれていたことがわかる。

山家郷については次のような木簡も出土している。

○胎内市屋敷遺跡出土木簡

「山家石マ真若女

一八四×一九×五　　〇一九型式

屋敷遺跡は、紫雲寺潟の北東端の港湾施設（蔵ノ坪遺跡と同じ）またはそれを管理する有力者層の居館などとみられている。

「山家」は「山家郷」にあたると解釈できよう。また、山家郷は信濃国小県郡山家郷および筑摩郡山家郷などの存在から、信濃国からの移住も想定できよう。

利波郷と坂井郷は越中国利波郡および越前国坂井郡からの移住に基づくことは疑う余地もない。このことは『日本書紀』大化四年（六四八）是歳条に「治二磐舟柵一以備二蝦夷一。遂選下越與二信濃一之民上。始置二柵戸一。」とあり、磐舟柵設置に伴い、信濃と越の柵戸が置かれたことからも証明される。

以上から磐舟柵および磐船郡設置に際して、最も南に土着の住民によって構成される佐伯郷、次に信濃国からと考えられる柵戸による山家郷、さらに磐舟柵が置かれた最北には越中国利波郡、越前国坂井郡からそれぞれ柵戸によって利波郷、坂井郷が設置されたと推測される。

（3）文書の表裏

文書は漆紙のオモテ面と漆の付着面（ウラ）として記述したが、ここで文書の表・裏すなわち一次文書と二次文書の判定を下しておきたい。

漆紙のオモテ面とされる上申文書は、磐船郡内に所在した役所に出仕していた人物が頸城宮への勤務を理由として、おそらく出仕していた役所に提出した請暇解に類する上申文書であったと推測される。書体は行書も混ざるが全体的には謹厳な楷書体で、行間も十分にとった一次文書と考えられる。

一方、漆の付着面（ウラ）は、磐船の地に所在した役所が徭役労働などに関して作成した歴名簿であり、書体は速筆で、「部」を「ア」などと略記している点などから判断して二次文書とみてよいであろう。

四、文書の年代

〔二次文書〕

a 本貫地の郷名記載から、郡―郷制下（七一七～七四〇）すなわち天平十二年（七四〇）以降である。

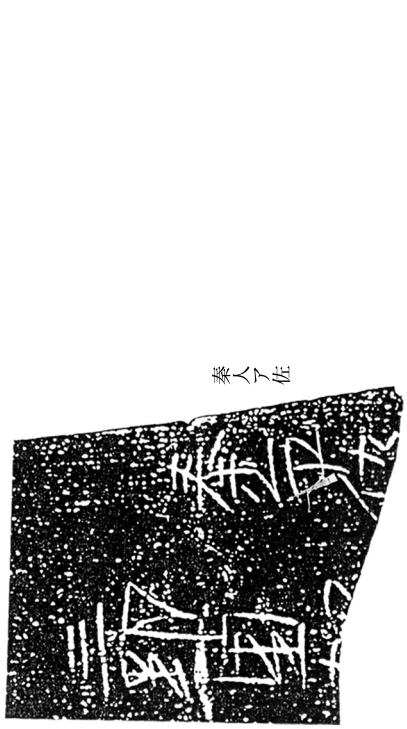
b 七世紀段階の木簡などには、人名を表記する場合、ウジ名のみを列記する記録簡が目立っている。本文書のウジ名のみの記載は、こうした七世紀段階の古い様式の影響を残している時期のものと考えられる。

c「部」の表記が「マ」ではなく「ア」である。

イ´ 七世紀後半の「ア」の字形　【第16図】

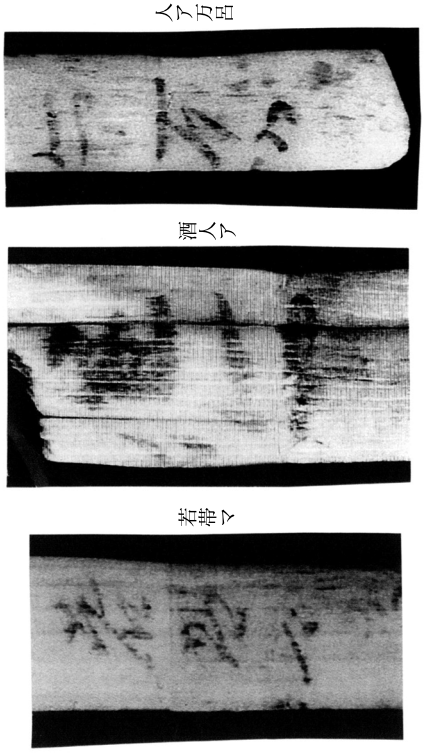
ロ´ 同一遺跡における「ア」から「マ」の変化　【第17図】

ハ´ 新潟県内出土木簡にみえる「マ」の用例（八世紀後半以降）

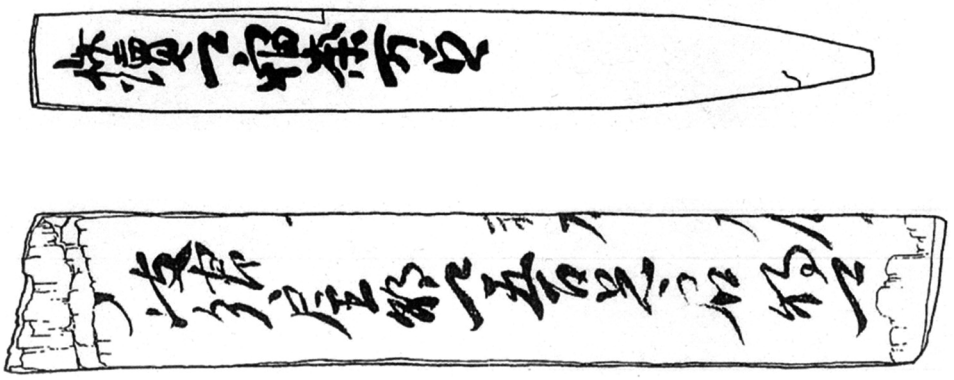


明日香村石神遺跡出土須恵器

第16図　7世紀後半の「ア」の字形（『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』(23)（奈良国立文化財研究所））



第17図　同一遺跡における「ア」から「マ」の変化（『長野県屋代遺跡群出土木簡』(長野県埋蔵文化財センター,1996)）

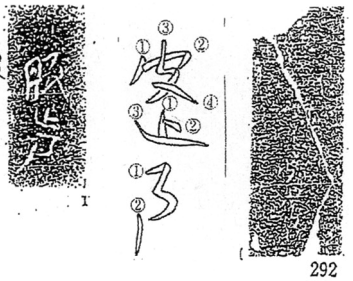


左：新潟県長岡市八幡林遺跡出土26号木簡
右：新潟県中条町船戸桜田遺跡出土3号木簡

第18図　新潟県内出土木簡にみえる「マ」の用例（八世紀後半以降）

以上の事例からみるかぎりでは´「部」の表記は七世紀代には「ア」´八世紀半ば以降には「マ」という字形である。本文書の「ア」の字形は´七世紀代の特徴をまだとどめていると判断できる。

d音かなとして使われている「止」は´時期的に特有な字形を呈する。東野治之氏がすでに指摘しているように´その字形は七世紀後半～八世紀初頭の藤原宮木簡に数多くみられ´隷書の「止」の形によく似ており´おそらくそれから来ているのであろうとされている（東野治之「漢字の伝来と受容」『日本古代木簡の研究』塙書房´一九八三年）。



千葉県五斗蒔瓦窯跡出土文字瓦

藤原宮木簡　　漢碑

第19図 -①　「止」の書体　7世紀

奈良県薬師寺仏足石歌碑（753年）

第19図 -②　「止」の書体　8世紀

（『書の日本史』第一巻　平凡社）

以上の事例からみるかぎりでは、本文書の「止」の字形は、七世紀後半から八世紀前半の事例に合致しているとみてよいであろう。

e『続日本紀』天平宝字三年（七五九）十月辛丑条「天下諸姓、君の字を著くる者は、換ふるに大宅の字を以てし、伊美吉には忌寸を以てす」とあることから、本文書では「公」とあるので、七五九年以降となろう。

なお、二次文書の小断片「剛丸」という人名は、おそらく「金剛丸」などが想定される。従来、人名「〇〇丸」という表記は九世紀以降と考えられてきたが、古くは、平城宮跡第一三九次調査（６ＡＡＡ・Ｂ区）の東西溝ＳＤ一〇五五〇出土木簡に「秦大丸」とみられる。

・備前國□〔上カ〕□
・秦大丸戸□□
・□□□□

〔『平城宮発掘調査出土木簡概報（十六）』奈良国立文化財研究所、一九八三年〕

この木簡の年代は共伴木簡に「天平□〔二カ〕年」「天平六年二月」などとあることから、天平年間（七二九～七四九）ごろと考えられる。

また、最近、新潟県上越市延命寺遺跡から「多理丸」と書かれた木簡が出土している。

延命寺出土二十一号木簡

・「　物部郷□□里戸主物マ多理丸□〔口カ〕物マ鳥丸野田村奈良田三段又中家田六□
□人伊神郷人酒君大嶋田直米二石一斗　」
〔有カ〕

・「　　田沽人多理丸戸人物マ比呂天平七年三月廿一日相知田領神田君万□〔呂カ〕」

四八六×四九×六　〇一一型式

〔『延命寺遺跡』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団、二〇〇八年〕

したがって、現段階では「剛丸」という表記を九世紀以降とみることはできない。

まとめ

これらｂ～ｄまでの条件は、いずれも七世紀後半～八世紀初頭までの特徴を有している。ただし、ａの条件（郷名記載）すなわち天平十二年（七四〇）以降、さらにｅの条件（君→公）すなわち天平宝字三年

（七五九）年以降からそれほど下らない時期、八世紀後半ごろとみておくのが妥当であろう。また、一次文書の一個人の請暇解様文書は、保管期間は当該年程度と考えられることから、一次文書と二次文書はほぼ同時期と判断できるであろう。

五、磐舟柵と頸城国府

八世紀における越後国は、出羽建国（和銅五年〈七一二〉）後も北の辺要国として位置づけられ、複数の城柵を拠点として、国司が分割支配する形態をとった陸奥・出羽両国と同様な支配方式であった可能性が想定される。

イ、胎内市蔵ノ坪遺跡出土木簡

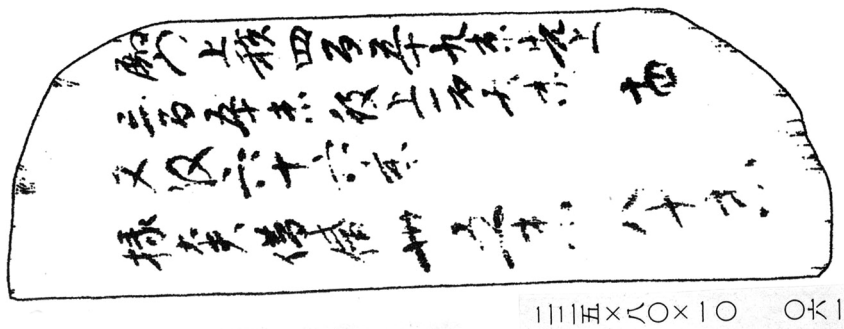
・「少目御舘米五斗」

・「　□□□□所進」

一一〇×一九×四　〇五一型式

この蔵ノ坪遺跡は、少目の公廨米を一時的に保管する施設（「蔵ノ坪」の地名もこの施設の遺称か）と考えられる。すなわち、荷札の付された米俵は、蔵ノ坪遺跡の地から積み出して他所へ漕送するものではなく、他所から紫雲寺潟を利用して船で運ばれてきたものと考えられ、この地に建てられていた「少目舘」用の収納施設に納めた際に荷札がはずされ、旧河道に廃棄されたのであろう。さらに、中条町屋敷遺跡出土木簡「山家（郷）」の記載から、この地が磐船郡内と判断するならば、運漕された「少目御舘米」は、一旦、この蔵に収納された後に、同郡内の少目館（磐舟柵付近か）へ陸路で搬送された可能性が一層高まったといえるのではないか。

ロ、長岡市下ノ西遺跡出土第一号木簡　【第20図】



二二五×八〇×一〇　〇六一

「殿門上税四百五十九束先上
三百五十束後上一百九束　十四
又後六十六束
掾大夫借貸卅五束　　八十束」

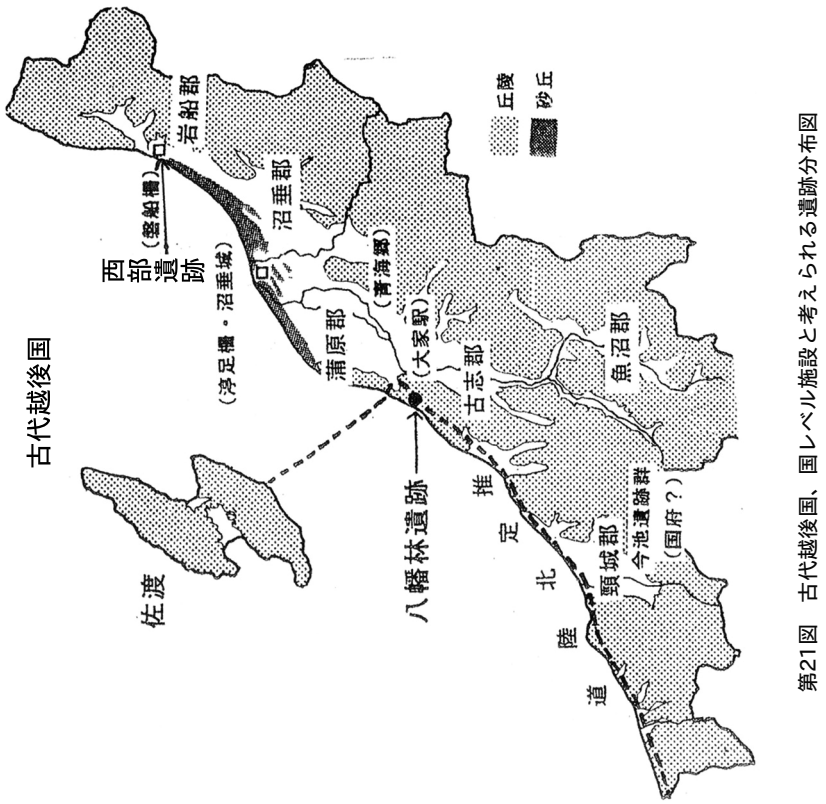
第20図　長岡市下ノ西遺跡出土1号木簡（8世紀前半）

この木簡は、国司のうち掾の借貸「掾大夫借貸」が、下ノ西遺跡すなわち古志郡家で実施されていたことを証するものと考えられる。

下ノ西遺跡において国司（掾）借貸が行われていた事実は、成立期の八幡林遺跡で、過所機能を併せ持つとみられる蒲原郡符（一号木簡）や沼垂城にかかわる二号木簡、発音の一致から石屋城（柵）を指す可能

性がある「石屋木」の墨書土器が共伴して出土し、関・城柵といった国レベルの機能がうかがえる点とも関連するのではないか。

もし、八幡林遺跡に掾の管轄する国レベルの施設があったとすると、複数の城柵を国司が分割支配する形態をとった陸奥・出羽両国と同じ状況下にあったことになる。具体的な一案としては、越後国府（頸城郡）に越後国司の守、沼垂城に介、両者の中間地点にあたる八幡林遺跡に掾、最も北方の磐舟柵に目が、それぞれ常駐していたというケースを想定できるのではないか。



第21図　古代越後国、国レベル施設と考えられる遺跡分布図

越後国は上国と規定されているが、九世紀以降の文献には、大掾・少目も見えていることから、少なくとも九世紀には、大国相当であったとみなすことができる。蔵ノ坪遺跡出土木簡の「少目」は、九世紀後半段階において、越後国が大国として、守／介／大掾・少掾／大目・少目の国司が置かれていたことを裏付けていると言えよう。

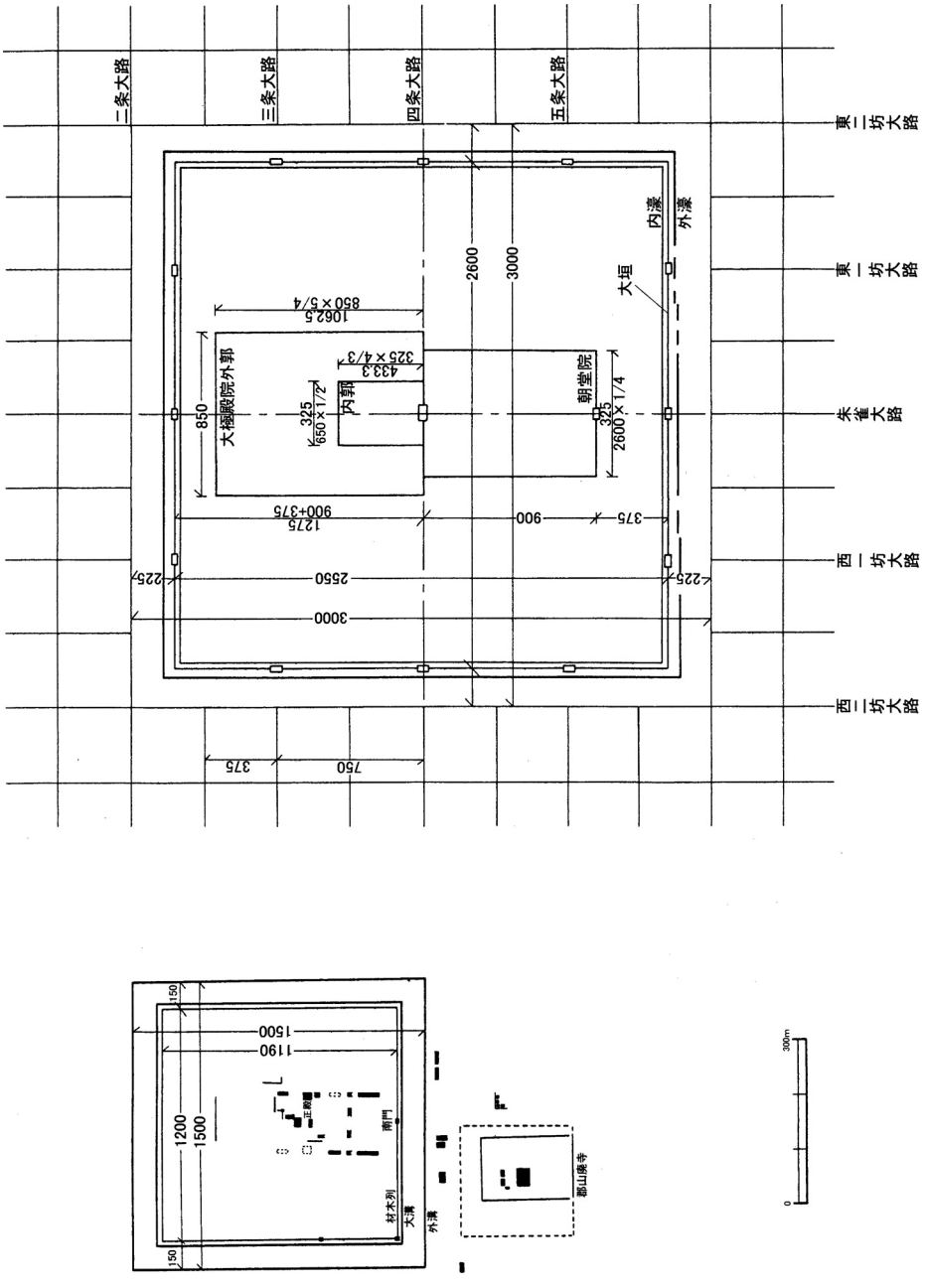
そして、本漆紙文書は、こうした複数の城柵を拠点として国司が越後国内を分割支配する方式の存在した可能性を補強するものであると考えられよう。

古志郡 ― 八幡林遺跡・下ノ西遺跡 ― 「沼垂城」関係木簡
　　「掾大夫借貸」
磐船郡 ― 蔵ノ坪遺跡 ――――― 「少目館」木簡
磐船郡 ― 西部遺跡 ――――― 「頸城宮」関連漆紙文書

このように考えれば、少なくとも八世紀においては、北辺と位置づけられた越後国の国司制は陸奥・出羽両国と同様に分割統治方式をとっていたと考えられる。

最後に「頴城宮」の解釈について触れておきたい。

近年、多賀城以前の陸奥国府とされている仙台市郡山遺跡について、Ⅱ期官衙は後の国府政庁というよりも、藤原宮や平城宮の大極殿朝堂や大宰府政庁（Ⅱ期）との共通点が多いとされている。いうまでもなく藤原宮は持統八年（六九四）に飛鳥浄御原宮から遷された王宮である。郡山遺跡Ⅱ期官衙の地割は藤原宮と密接な関連がある。すなわち外溝で区画された範囲は東西一五〇〇大尺×南北一五〇〇大尺であり、藤原宮の周囲の条坊計画線の間隔である東西三〇〇〇尺大尺×南北三〇〇〇大尺と比較すると長さは二分の一、面積では四分の一となる。そのⅡ期官衙の時期も、藤原宮完成直後の七世紀末とされている。その存続期間は多賀城創建（七四〇年）前後までという。（仙台市教育委員会『郡山遺跡発掘調査報告書 ― 総括編（1）―』二〇〇五年ほか）



第22図　藤原宮と郡山遺跡Ⅱ期官衙地割
平間亮輔・齋藤義彦「郡山遺跡の遺構変遷」（『第34回城柵官衙検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会・仙台市教育委員会より）

また、陸奥国府・多賀城も平城宮を模し、多賀城の所在郡を宮•城•郡と称したことも注目しなければならない。陸奥国府とされる郡山遺跡・多賀城の両遺跡の中心施設は、それぞれ藤原宮・平城宮を模して造られており、在地では「宮」と呼ばれていた可能性が高い。

ひるがえって越後国をみるならば、七世紀末の越後国は阿賀野川より北だけであり、大宝二年（七〇二）に越中国から四郡（頸城・魚沼・古志・蒲原）を編入した。その時点で国府が頸城郡に設置されたとみられている。北辺の地と位置づけられた越後国の国府も、その造営年代は陸奥国府とほぼ同時期であり、陸奥国府同様に藤原宮・平城宮を模し、当該地方では「頸城宮」と称した可能性は十分に想定されるであろう。このことからもわかるように、「頸城宮」という表記は、越後国が北辺として位置づけられた八世紀代までに限って強く意識されたものと考えられる。

八幡林遺跡の場合も、蒲原郡の人物が国府で行われた告朔の儀に参加し、帰途の際、その過所的な郡符木簡を古志郡内の八幡林遺跡の施設において廃棄している。「沼垂城」関連の木簡の出土とともに、郡を超えた国レベルの施設ならではの出土状況といえよう。

越後国北端の磐船の地の役所に勤務する「阿［　］虫」という人物は、この一通の請暇解様文書を役所に提出することで越後国の南端にある頸城宮へ出仕できる立場にあったと考えられる。このことは「阿［　］虫」が通常勤務する役所と「頸城宮」は同等の施設であることを示す。いいかえれば、西部遺跡は国府「頸城宮」と同様の国の施設であることになる。加えて請暇解様文書の紙背は佐伯郷、坂井郷という磐船郡内の人物に関する歴名簿である。

その点から西部遺跡は、もちろん磐船郡内に設置された施設であるが、磐船郡家ではなく、古代国家が大化四年（六四八）に設置した磐舟柵しか考えられない。もちろん磐舟柵の中心施設は、遺跡のさらに北部に想定されるが、この西部遺跡は、荒川河口に設けられた磐舟柵を支える関連施設とみることが妥当と考えられる。

いずれにしても、この一点の漆紙文書発見により、長い間〝まぼろし〟とされてきた磐舟柵の一部をようやくとらえたといえよう。

末筆ながら、本稿を草するにあたり、篠崎尚子氏・中大輔氏・武井紀子氏にご助力頂いた。

4　西部遺跡出土漆紙の調査・保存処理方法について

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　　三ツ井　朋子

1）調査・保存処理に至る経緯

西部遺跡では、平成 16・17 年度の本発掘調査により、漆紙が多数出土した。このうち、SD1377 から出土したＥ漆紙（851）文書は、細かく割れてはいるものの、約 20 × 10cm の範囲でまとまって出土したため（第 23 図）、土ごと取り上げ、密閉容器に入れ、エアキャップで動かないよう固定した状態で、新潟県埋蔵文化財センター（以下、「埋文事業団」とする）の保存処理室へ搬入した（第 24 図）。そのほかの漆紙は、折りたたまれた断片や数 cm 程度の細片で、密閉容器に水漬けの状態で搬入した。

第 23 図　Ｅ漆紙（851）文書の出土状況

漆紙は、薄くて黒い木の皮、または海苔のようであり、肉眼では全く文字が確認できない状況であったが、調査担当者が出土当初から漆紙文書の可能性を指摘していたことから、搬入後、直ぐに赤外線テレビカメラで文字の有無を確認した。その結果、Ｅ漆紙（851）文書には、数行の文字列が確認でき（第 25 図）、そのなかの断片の中にも文字が片面・両面に確認できるものがあったことから、これらが漆紙文書であることが判明した。

第 24 図　Ｅ漆紙（851）文書の取り上げ状況

これらの断片は出土地点が近接しているものが多く、また漆紙文書は、表・裏面とも文字が書かれている例が多いことから、赤外線撮影はもとより、土からの取り外し、断片の接合作業等が必要となることが想定された。このため、漆紙文書の調査･保存処理に当たっては、平川南氏（国立歴史民俗博物館館長）と小林昌二氏（前新潟大学人文学部教授、現帝京大学文学部教授）の指導の下、赤外線撮影及び文字の判読を田中一穂（埋文事業団　嘱託員（当時））が、保存処理を三ツ井朋子が担当し作業を進めることとなった。

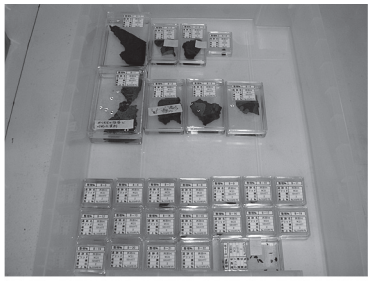
第 25 図　Ｅ漆紙（851）文書の赤外線撮影

以下、今回行った漆紙文書の調査・保存処理について、土ごと取り上げたＥ漆紙（851）文書の作業工程を中心に詳述する。

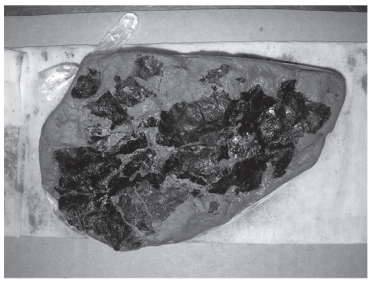
2）調査・保存処理の方法

漆紙の仕分け・台帳作成・仮収納　漆紙断片が多数出土したことから、赤外線撮影や保存処理に先立ち、1 点ずつ仮№を付し、今後の作業の進捗状況や調査結果を整理するため、台帳を作成した。後の工程で行う赤外線撮影は、水漬け、あるいは水で湿らせた状態で撮影するため、漆紙は 1 点ずつプラスティック製の蓋付き容器に入れて水漬け保管し、細かい資料の混同・紛失と破損を防止した（第 26 図）。

クリーニング　土ごと取り上げたE漆紙（851）文書は、漆紙を支持している土が割れ、漆紙表面に赤外線撮影の妨げとなる泥や植物の根などが付着していた（第24図）。このため、割れた土のブロックは全体を寄せて亀裂を塞ぎ、元の状態に復元するとともに、表面の泥などは水道水を含ませた筆や竹串、ピンセットで丁寧に取り除いた。また、原位置を移動して浮いている漆紙の断片は、その形状から原位置が分かったものは元へ戻し、分からないものは、この時点で土から取り外した（第27図）。E漆紙（851）文書以外の漆紙断片については、水道水を入れた密閉容器の中で、筆・竹串・ピンセットなどを用いて泥や植物の根などを慎重に取り除いた。



第26図　漆紙の仕分け・収納



第27図　クリーニング終了後のE漆紙（851）文書

EDTAによる脱鉄処理　水洗いで落ちない鉄分の沈着などは、エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム（EDTA）2％水溶液に1日浸漬、あるいは水溶液を含ませたキムワイプなどで湿布し、再度水洗いして除去した。その後、水を交換しながら漆紙を1週間水漬けし、EDTAを取り除いた。この際使用した水はすべて水道水である。

発泡硬質ウレタンによる梱包　漆紙を支持している土が割れやすいため、発泡硬質ウレタンを用いて漆紙の載った土を上下からしっかりパックする支持台と蓋を作製した（第28図）。作業に当たっては、漆紙にウレタンが付着しないよう、漆紙の付着している面は晒→ラップで養生し、裏側の土の面はサランラップのみで養生した。この梱包により、移動による資料の崩壊や、赤外線撮影までの乾燥を防いだ。

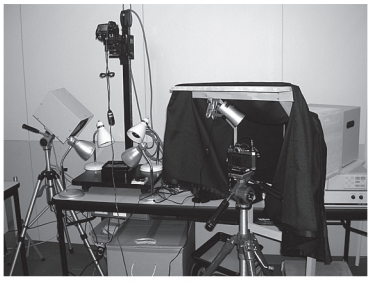
布を用いた漆紙表面の養生　　蓋が完成し、天地を反転した状態　　支持台と蓋の完成

第28図　発砲硬質ウレタンによる梱包

現状の写真撮影　漆紙断片は、破損しやすく、細片を混同する恐れがあるため、赤外線撮影と保存処理に先立ち、現状の写真撮影を行った。撮影にはNikon製デジタル一眼レフカメラを使用した。

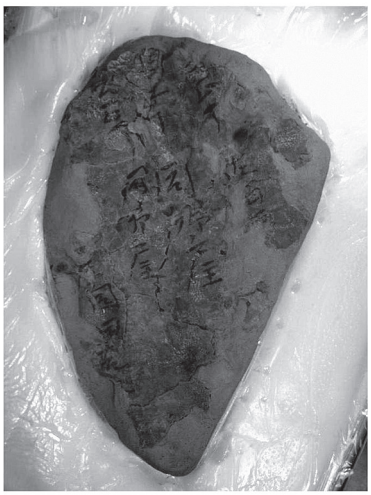
赤外線撮影［1回目］　表面のクリーニング終了後、1回目の赤外線撮影を行った（第29図）。今回の調査では、二通りの撮影方法で赤外線撮影を行った。一つは、赤外線を照射した漆紙を赤外線撮影が可能なデジタル一眼レフカメラで直接撮影する方法。もう一つは、赤外線撮影装置のテレビモニターを35mm一眼レフカメラ（モノクロフィルム使用）で撮影する方法である。前者の撮影では、赤外線撮影が可能なSONY製デジタル一眼レフカメラを使用し、後者の撮影では浜松ホトニクス株式会社製赤外線リフレクトグラフィ用カメラシステムIRRS-100のテレビモニターに暗箱を取り付け、Nikon製35mm一眼レフカメラでモニター画面を撮影した。フィルムは、富士写真フィルム製モノクロフィルムACROS（ISO100）を使用した。

E 漆紙（851）文書は、表面に霧吹きで水を噴霧しながら撮影した（第 30 図）。その他の断片は、プラスティック製の黒いバットや黒いゴムシートを底に敷いた密閉容器などに水道水を注ぎ、水漬けの状態で表裏とも撮影した。水の噴霧や水漬けでの観察は、漆紙の表面の凸凹が平滑化され、乱反射が軽減するため、文字が見やすくなる。また、漆紙の背景を黒くすることにより、漆紙本体に露出が合い、文字が判読しやすくなる。



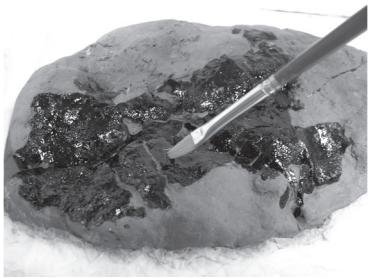
第 29 図　赤外線撮影使用機器

土からの取り外し・洗浄・反転　裏側の赤外線撮影を行うため、漆紙全体を 4 ブロックに分けて土から取り外し、水道水で洗浄した後、反転する作業を行った（第 33 図）。



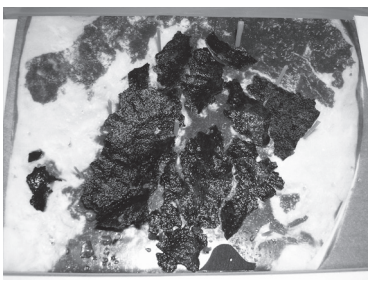
第 30 図　赤外線写真

取り外しを始める前に、漆紙の表面を仮補強するため、バインダー№ 17 を塗布した（第 31 図）。この時、漆紙はまだ湿っていたため、水溶性アクリル樹脂であるバインダー№ 17 を選択し、市販の濃度では粘性が高すぎるため、2 倍希釈水溶液を筆で塗布することとした。バインダーは、取り外し作業中は仮補強の役目を担ったが、その後湿った状態での保管・赤外線撮影が続いたため、水を含んでふやけてしまい、白い膜状になって剝がれてきた。このため、保存処理中盤の自然乾燥前に、バインダーをすべて除去した。



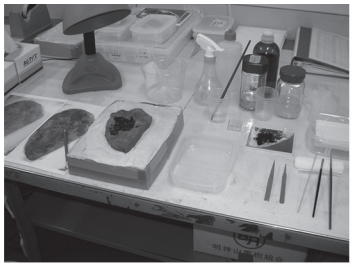
第 31 図　バインダーの塗布

また、裏側の赤外線撮影をする際、すべての漆紙断片を 1 枚のプレートに載せて撮影すると、不慮の事故が起こった時に元の位置関係が復元できないことが想定された。そこで、漆紙を 4 ブロックに分割し、ブロックごとに取り外して反転することとした。先ず、亀裂に沿って 4 分割のブロックを決定し、現状写真に分割線を記入した。その後、ブロックごとに赤外線撮影・保管する際の受け皿となるプレートを作製した（第 32 図）。このプレートは、取り外した漆紙を正確に反転した位置に置くためのもので、現状の写真データを Adobe 社製 Photoshop で反転し、漆紙と等倍にプリントアウトした後、ブロック別に分割したものを、粘着テープが付いた 5mm 厚のパネルに貼付し、上から防水用の透明フィルムを貼って作製した。



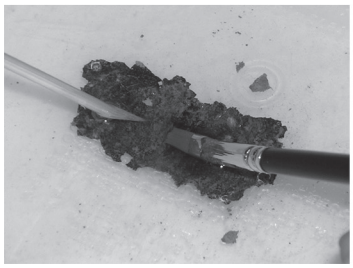
第 32 図　反転に使用したプレート

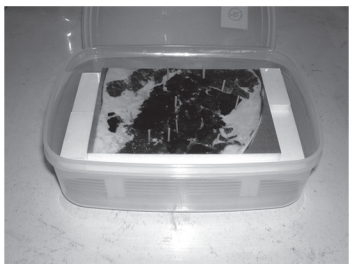
上記の準備作業終了後、漆紙断片の取り外しを開始した。この作業では、断片を正確に反転させるため、1 枚ずつ一連の作業（取り外し→洗浄→反転）を行った。取り外しには、竹串や先が薄くて平らなピンセットを使用し、これらを漆紙と土の隙間に少しずつ差し込みながら、1 枚ずつゆっくり取り外していった。取り外した漆紙断片の裏側は、土で汚れていたため、すぐに水道水を入れた密閉容器の中で、筆や竹串を使用して慎重に洗浄し、用意したプレートの反転写真と同じ位置に置いた。プレートに置いた漆紙断片は、少しの衝撃でも動きやすいので、竹串を細かく裂いたピンで断片の周囲を固定した。また、鉄分の沈着の著しいものは、この時点で前述の EDTA による脱鉄処理を行った。

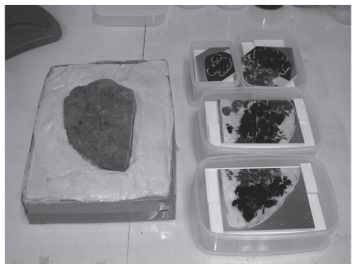

作業に使用した道具

漆紙の取り外し

取り外し・洗浄・反転の作業の様子


竹串・筆を使った漆紙裏面の洗浄


プレートにのせた漆紙断片

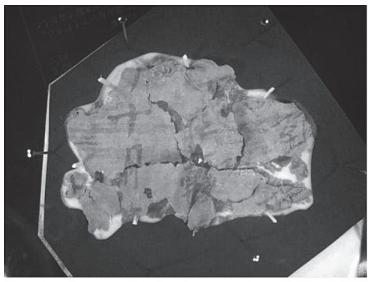

ブロックごとに反転した漆紙

第 33 図　土からの取り外し・洗浄・反転作業

取り外し・洗浄・反転作業が終了したら、これらのプレートにビニールを被せて 1 枚ずつ密閉容器に収納し、赤外線撮影が終了するまで乾燥しないよう、時々霧吹きで水を噴霧しながら保管した。

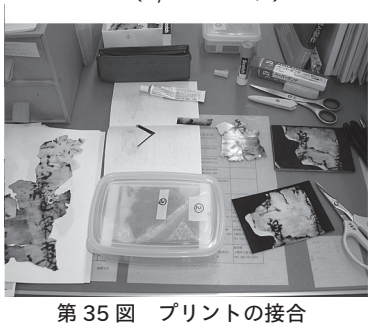
漆紙の切開・剝離　E 漆紙（851）文書以外の漆紙断片の中には、折りたたまれたものや重なったものが含まれていた。そこで、断片の内側に文字があるかどうかを確認するため、これらの切開・剝離を行った。内側に漆が厚く付着している断片は、しっかり固着していて開くことができなかったが、漆の付着が比較的薄い断片は、切開・剝離により展開することができた。漆紙の切開・剝離は、水道水を入れた密閉容器の中で、重なった断片の隙間に竹串などをゆっくり差し込み、水中で漆紙を揺らしながら、切開・剝離したい部分に水圧をかけて、ゆっくり開いていく。このように水中で作業することにより、漆紙の局部に無理な圧力をかけることはなくなり、破片が飛散する心配もなくなる。

赤外線撮影［2 回目］　反転作業終了後、ブロックごとに裏側の赤外線撮影を行った。また、切開・剝離した漆紙断片は、内側の文字の有無の確認と赤外線撮影を行った。撮影は、1 回目の赤外線撮影と同じ方法で行い、漆紙に霧吹きで水を噴霧しながら実施した。撮影に当たっては漆紙の周囲を黒い紙で覆った（第 34 図）。


第 34 図　裏面の赤外線写真（1/4 ブロック）

漆紙の自然乾燥　漆紙断片は、濡れたままでは接合できないため、2 回目の赤外線撮影終了後、自然乾燥させることにした。本遺跡出土の漆紙は、幸い自然乾燥による反りかえりなどの変形が見られなかったことから、E 漆紙（851）文書はプレートに載せたまま自然乾燥し、密閉容器に入れて保管した。また、その他の漆紙断片は、すべて水から引き上げて自然乾燥し、最初に収納していたプラスティック製の蓋付き容器で保管した。

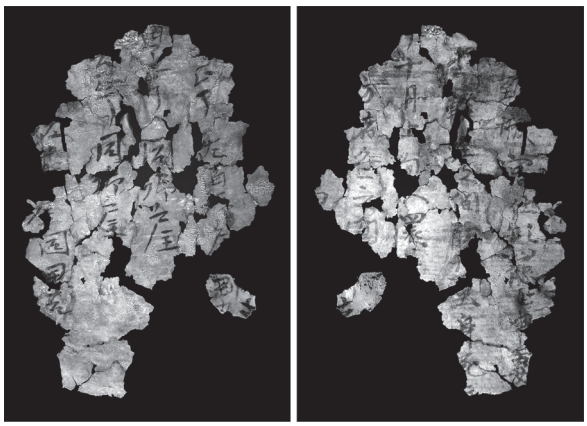
赤外線写真プリントを用いた接合　E 漆紙（851）文書とその他の漆紙断片が接合するかどうかを事前に確かめるため、赤外線写真プリントを用いた接合を行った（第 35 図）。プリントの倍率を合わせ、


第 35 図　プリントの接合

赤外線写真を破片ごとに切り取って、Ｅ漆紙（851）文書の中でどのように接合するのか、Ｅ漆紙（851）文書と接合する断片がないか、また断片同士で接合しないかどうかを確認した。プリントは肉眼で文字が鮮明に見えるため、大きな破片や文字の鮮明な断片は、この時点で接合位置をある程度特定することができた。

第 36 図　漆紙断片の接合

第 37 図　接合終了後



第 38 図　保存処理終了後の赤外線写真

漆紙の接合　漆紙断片の接合は、肉眼では文字が見えず、誤った位置に接合してしまう恐れがあったため、赤外線撮影可能なビデオで漆紙断片を撮影し、そのモニターを見ながら文字のズレがないよう慎重に接合した（第 36 図）。接合には、漆紙が乾燥していたことから、アクリル樹脂のパラロイド B72 を選択し、この 10 ～ 15％アセトン溶液を接着剤として使用した。接合の修正は､樹脂をアセトンで溶解した上で、再接合した。また、漆紙自体を強化するため、漆紙表面に溶液を１～２回塗布した。この接合では、全体像が明らかになるにつれ、赤外線写真プリントによる接合では付かなかった断片も、文字や形状から接合か所を特定でき、若干虫食い部分は残ったものの、多くの破片がＥ漆紙（851）文書と接合した（第 37 図）。

赤外線撮影［3 回目］　接合が終了したＥ漆紙（851）文書は、表・裏面とも赤外線撮影を行った。アクリル樹脂を漆紙に塗布したため、漆紙表面の凸凹が平滑化され、赤外線の乱反射が少なくなり、水に漬けて撮影するのと同じ効果が得られた（第 38 図）。

３）保存処理後の保管・活用方法

漆は、紫外線の照射により劣化が進行する。また、いずれの有機質遺物も、温湿度の高い場所では遺物表面にカビが発生する危険がある。遺物表面にカビが発生すると、除去してもシミが残る場合がある。また、カビの菌糸が遺物の奥まで入り込んでしまうと、完全に除去することが困難であるため、温湿度が上がると再びカビが発生する恐れがある。そのため、漆紙はできるだけ光が当たらない場所やケースを用意し、温湿度がコントロールされた収蔵庫に保管する必要がある。

現在、保存処理の終了したＥ漆紙（851）文書は、緩衝材（綿を薄葉紙でくるんだ、通称「おふとん」）を敷いた容器に入れ、中で漆紙が動かないよう、周囲を薄葉紙で押えて保管している。漆紙は、上から圧力をかけると簡単に割れてしまうので、Ｅ漆紙（851）文書の上には緩衝材を被せていない。収納した容器は、合成樹脂製のコンテナに入れ、温度約 20℃・相対湿度約 55 ～ 60％に調湿された暗い特別収蔵庫内で保管している。また、Ｅ漆紙（851）文書の活用であるが、数日程度の展示や講座などの場合は、会場の開館時間中だけ実物を展示台にのせ、赤外線写真を添えて展示しているが、長期の催し物の場合は、漆紙の劣化を考慮して実物の展示を控え、赤外線写真のみを展示するようにしている。

報 告 書 抄 録

ふりがな	せいぶいせき　に
書名	西部遺跡Ⅱ
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻次	XXXⅢ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 206 集
編著者名	湯原勝美　折原洋一　秋山真好　戸根与八郎（以上、株式会社ノガミ）　前川昭彦　武部喜充（以上、元有限会社山武考古学研究所）　鈴木俊成　三ツ井朋子（以上、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）　小林昌二（帝京大学）　平川　南（国立歴史民俗博物館）　田中一穂（元財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）　千葉博俊　斎藤崇人　伊藤良永　馬場健二　松元美由紀　斎藤紀行　高橋　敦　石岡智武（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）　大澤正巳　鈴木瑞穂（以上、株式会社九州テクノリサーチ）　四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）　吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）　穴澤義功（製鉄遺跡研究会）
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団　株式会社ノガミ
所在地	〒 956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　TEL 0250（25）3981　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒 950-1136　新潟県新潟市江南区曽川甲 527 番地 3　TEL 025（280）6620　株式会社ノガミ
発行年月日	西暦 2010（平成 22）年 12 月 28 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
せいぶいせき 西部遺跡	にいがたけんむらかみし 新潟県村上市 うしやあざせいぶ 牛屋字西部 1192 ほか	15212	312	38 度 09 分 03 秒	139 度 26 分 02 秒	20060401 ～ 20061227 20070403 ～ 20071215	延べ 23,511 ㎡	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
西部遺跡	集落跡	奈良時代 （8 世紀前半）	掘立柱建物 1 棟、ピット 25 基	土師器、須恵器、転用硯	【Ⅻａ層】
	生産遺跡	奈良・平安時代 （8 世紀後半～9 世紀前半）	水田、溝 1 条	なし	【Ⅻ層】 東西・南北方向を軸とする畦畔を検出した。
		平安時代 （9 世紀中葉）	掘立柱建物 5 棟、溝 25 条、井戸 1 基、道路状遺構 1 条、土坑 25 基、鍛冶炉 1 基、地床炉 6 基、性格不明遺構 1 基	土師器、須恵器、墨書土器（「上」「木」等）、転用硯、漆器、烏帽子または圭冠、鉄滓、権状錘	【Ⅺ層】 掘立柱建物のうち 1 棟は鍛冶工房である。
		平安時代 （9 世紀末～10 世紀中葉）	掘立柱建物 7 棟、溝 61 条、井戸 11 基、土坑 164 基、鍛冶炉 10 基、地床炉 22 基、性格不明遺構 7 基	土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、墨書土器（則天文字「天」）、香炉蓋、小型羽釜、耳皿、管状土錘、羽口、鉄製品、鉄滓、金床石、漆器、漆容器（円形曲物）、漆パレット、漆紙、水晶製丸玉、腰帯石銙丸鞆、権状錘	【Ⅷ層】 鍛冶や漆塗布など複合的な作業を行ったと見られる工房を 5 棟検出した。「頸城宮」や古代磐船郡の郷名「佐伯郷」「坂井郷」が記された漆紙文書が出土。
		鎌倉・室町時代 （12 世紀後半～13 世紀前半、14 世紀後半～15 世紀後半）	掘立柱建物 6 棟、溝 4 条、井戸 20 基、土坑 21 基	中世土師器、珠洲焼、常滑焼、青磁、白磁、北宋銭、円形曲物	【Ⅳ層】

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 206 集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XXXIII

西　部　遺　跡　II　（本文編）

平成 22 年 12 月 27 日印刷
平成 22 年 12 月 28 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒 950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒 956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社 ライフ
〒 286-0134　千葉県成田市東和田 595
電話　0476（24）1564
FAX　0476（24）2226

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第206集『西部遺跡Ⅱ（本文編）』正誤表

頁	行・遺物No.	誤	正
26	9行目	（図版2・3・6、207～210）	（図版2・3・5、207～210）
101	8行目	（図版101、335）	（図版101、333）
115	25行目	1167～1179	1164～1179
256	18行目	黒色土器有台椀A	黒色土器有台椀B類
310	遺物No.76	無台杯	無台椀
316	遺物No.281	無台椀	椀
320	遺物No.459	土師器	黒色土器
抄録	調査期間	20060401～20061227	20050401～20051227
		20070403～20071215	20060403～20061215